新井白石全集　第六

新井白石全集第六

新井白石全集第六

例　言

一本輯は鬼神論以下三十五種を收め、終に年譜及び著述目錄幷に逸事を添ゆ。

一鬼神論は著作の年月を考え得ずと雖、蓋し晩年に成りたる者なるべし。鬼神とは天神地祇人鬼を通じて云ひ、もと陰陽二氣の靈にして、是二氣また一氣の屈伸に外ならず、と云ふより論を起し、和漢の例を引きて之を證し、中頃孔子の怪力亂神を語らざる所以を叙し、怪異說を方便とするの異教は、遂に孝悌忠信の外を求めざる孔敎に如かざる旨に歸着す。此書本會所藏の一本を底本とし、他の一本及び川田氏本によりて校訂す。但し川田氏本は平假字交り文にて、且つ卷を分たず。

一孫武兵法擇は流布板本を底本とし、内閣寫本により校訂す。文中本文より一字下げにせる所は、元と註なれば、今便宜の爲め板本によりて、改めず。此書或は白石の著に非ざるやの疑なきにあらざれど、從來一般に其著として信ぜられ、是に對して確たる反證も得ざれば、今暫く玆に收むることゝせり。

同副言は內閣寫本を底本とす。所々通じ難き所あれど、是を對校す可き別本を得ざるを以て、正す能はず。

一那須國造碑釋文は下野那須郡なる古碑文を解釋したるものにして、內閣藏白石叢書本と萩野博士藏本を以て校訂す。

一正德年號辨は、奧書にも見えたる如く、正德二年冬將軍家宣薨し代換りの事ありし時、大學頭林信篤年號に正の字を用ふるは不祥なりとて、蜀都雜抄秘笈千百年眼等を引きて、改元の事を老中に申出でしにより、間部詮房白石の意見を徵せしに荅申せし書

なり。是によりてか改元の事遂に行はれず。折たく柴の記にも其顚末を詳しく記せり。本卷收むる所は、萩野博士より寄せられたるものにて、蓋し珍本に屬す。

一經邦典例は、著述書目に據るに、元と二十一卷ありしをいつの頃にか散佚し盡して、今存する所僅かに其序文と、こゝに載する殘缺冠服考の一部のみなるは、頗る惜むべき事なり。世或は完本を存すとの說あるを以て、本會は恰ねくこれを探求したりしも、遂に發見し得ず。頃者近聞偶筆を閱するに、德甫嘗誦其先人新川翁元成○語、語余云、源白石先生、平生著述三百部、余疑其夥甚、德甫云、先大夫爲白石親族門人、每一書成、任校訂或代手書、見在目睹不容疑、蓋白石家後年不戒火、其手澤遺書經邦典例類多焚亡、世既無副本、此書從是絕矣、の語あり。然らば完本を存すとの說は、偶、好事者の放言に出で信を置き難きに似たり。本書は白石叢書白石爛に收

むる所の者に據りて校訂す。

一白石建議八巻は、國家の庶政財政に關し、幕府の顧問に對えたる書類を集輯せしもの也。就中其初めの三巻は庶政に關する建議にして、正德三年三月の頃、白石間部詮房に當時の政道に關し舊弊改革の事を語りし時、詮房是を然りとして老中と議し、旗本の人々に議を奉らしむ。是時詮房また老中に白石の議を徵せんことを勸めしかば、老中其議に同し是を徵せしに對して差出したる者也。然れども時家宣將軍薨去の後にて當路亦能く彼の言を用ふる者なく、白石の折角の心盡しも遂に行はれずして止む。白石の無念知る可き也。折たく柴の記に曰く「其後それらの御沙汰も聞えずあはれ大坂番士交替の比に先だちて御沙汰あらんことと然るべしなど申せしかば詮房朝臣も申さるゝ事どもなきにしもあらねど其程も過て後に某が議にこゝかしこ付紙して其

事は今行はれがたし此事は世に行るべからずと記して返されたりけり我申せし程の事ども一事として御代々の仰にあらずと云事もなしそれらの事の今の代に行れざらんには我言の行はれぬにあらじ我又何とかすべき云々」とあり。今本編には右符箋を一々改めて本文の末に加え置けり。其四五八は、改貨議にて、正徳三年六月上つる所也。折たく柴の記に、是より先き金銀の製古に復する旨の幕命ありしより、世間種々の私議ありしを以て、改貨議三册を記して上つる由記せり。其初めには種々の世論に一々辯駁を加え、次に其行ふべしと思ふ所を記し、次に其法を記す。第六の內、本朝金銀銅外國へ入りし惣數の事は、将軍家宣嗣職の初年より長崎港にて海舶互市の料とすべき銅の數たらずして交易の事行れ難く、地下の人產業を失ふより、奉行所是が救治の事を歎申しければ将軍白石を召問はるゝ事ありて其時答申

せし者是也。他の本朝金銀銅出し事、本朝金銀の制の事は、其前後に上つりし者ならん。但し是等の箇條は既に第三集に收めたる五事略の中に、寳貨事略として擧げたれば、重複の嫌なきに非ざれど、暫く原書のまゝに存せり。他日再刊の際には吟味を加えて削るべきものなりとす。其七は改貨後議にて同年十一月に至り、先の改めたる金銀を以て從來の金銀に引換への事ありしより、物價一時に騰貴したるを以て、世上又々種々の物議ありければ、幕府人々の意見を徵したる時、白石亦上つりたる者也。是等詳しきことは、皆折たく柴の記に見えたれば、今は之を略す。本書原本は岩崎文庫本を採れり、而して白石自筆の者は今松方伯の家に在りと云ふ。然るに上來記する所の考にして誤らざれば、本書は其排列の次第を誤りたる者と云ふ可きなれども今暫く原本に因りて改めず。

一將軍宣下議は、寶永七年家宣將軍宣下の時、白石命により帳臺の後に侯して、其儀式を見、後議して是を上つりし者也。今內閣文庫に其自筆あり、奉書二つ折の横帳にて、所々抹殺せる所あり、蓋し下書なるべし。

一進呈之案は、寶永三年家宣のいまだ世子として西丸に在りし時、白石之が侍讀として通鑑綱目の後唐莊宗紀を講じ訖りて進めたる封事にして、異朝の唱歌雜劇等は卽ち我散樂にして莊宗の事は人主の鑑る可き事なる旨を云へり。其後また散樂の異朝の雜劇に等しき所を問はれしかば、是が答として上つりしが樂對なり。されば本輯樂對は進呈案の後に置く可かりしを誤りて上に列せり。兩書本會所藏本を底本として、內閣及帝國圖書館本によりて校訂す。

一決獄考は、正德元年疑獄の事ありし時、命によりて呈したる者に

て、折たく柴の記に其顛末を詳しく記せり。前と同じく兩本によりて校訂す。

一本朝軍器考は本朝軍器の制度沿革を考證したるものにして、流布板本に據る。同集古圖説は、右の書の附考として白石の子の男なる朝倉景衡の輯集したるものにして、同流布板本による、本邦刀劒考に是圖説を評して、眞の者と異なる圖多く見ゆるよし云へれど、本書を見るに便宜あるものなれば、さすがに捨てがたく、附錄の意にてこゝに收むることゝせり。

一人名考以下の諸考は、多くは白石叢書同續編白石爛白石子等に收むる所にして、底本には本會所藏のものを用ゐ。內閣及圖書館本に對校せり。其內武家官位裝束考は、右に列擧せる叢書中のものにあらず、向山誠齋幕府の右筆なりし時、官庫の秘書より抄寫せしものゝ由にて、武家官位の事及武家裝束の事を略述するを

以て、今假にかく命名せり。又祭祀考も叢書中になき所にして、萩野博士特に本會に寄贈せられし者也。

一新野問答は、正德年中白石が野々宮定基に就きて禁中の規式故實官職位階裝束の制等のことを問ひたるに答たる書にて、或は黃白問答の名あり。黃は黃門にて定基の權中納言たりしを以てなり。先輩或は位記門答と稱するを宜しとすとの說あれど、今一般に知らるゝ所によれり。本書は故小中村博士の所藏本に據り黑川本を以て校訂す。

一車服制度私記は、白石が車服の制度其他の故實等の問に對し定基の答を記したるものなり。黑川本に據りて收む。

一新近問答は、正德三年家綱將軍の宣下ありし時近衞基凞東下あり。白石その旅館に就きて有職故實を質し記したるもの也。大槻如電氏白石の自筆本を藏せられ特に本會の爲め謄寫して贈ら

れたるを以て、之を收むるを得たり。書名は本會の假に命名せるもの也。

右三書は、白石の著と見るべきものに非ざれば此に收むるは其處を得ざる觀あれど、便宜の爲め附載することゝなせり。

一文廟御遺命は、白石が代りて執筆したるものにして白石叢書に收めたり。

一學訓は、門人を教訓したる書簡にして、續白石叢書に收む。

一停雲集は、友人の詩を編輯したるものにて、流布板本による。

一室新詩評は、鳩巢の詩に批判を加えたるものにして、故内藤耻叟氏の碧海叢書に收めたるもの也。

一天爵堂壽言及壽詩は、白石賀壽の年其友人の贈りし詩文を輯錄したるものにて、壽言は、本會所藏の廣白石叢書本。壽詩は、内閣文庫本に據る。

一右の外、白石の著と稱する者世其類頗る少からざれども多くは一見して其白石に名を假託したるものなることを知るべき者のみなるが、中には眞僞甚だ辨別し難きものゝ亦是あり。其内律尺考驗、及畫工便覽の如きは、白石の著として名高く、多少世に知られたる學者も亦是を許るし、前者をは番外雜書解題及國書解題の中にも是を擧げたれど、本會は二者とも頗る疑はしきものとして、是を採用することを避けたり。其故は先づ律尺考驗の方より云はんか、同書の文中に、「爰ニ今御府ノ竹周尺ト云フハ余コレヲ小倉藤亞相實起卿ニ聞ケリ古來禁裏ノ御文庫ニ竹ノ周尺アリ弘法大師入唐ノ時彼方ヨリシテ帶ビテ歸リタル尺ト云傳タリ云々余ソノ摹尺ヲ亞相ニ請ヒウツシトリテ漢唐ノ錢ヲハカリ見ルニ云々」と云へる條あり、然るに小倉實起は天和元年六十にて佐渡に流され、當時白石二十五歳にて猶ほ頗る微賤の身な

るのみならず、かゝることを嗜む趣も見えざれば是より先實起に接せしことありとも思はれず。是より後白石のかゝる學に向ひまた世に榮えし頃には實起既に世に在りしことも頗る覺束なければ、かた〴〵此書は受取られぬもの也。また畫工便覽は各條の下に記して「至延寶元年何年」とあるを見れば、延寶元年に筆せる者と察せられ、白石の著とすれば、正に十七歳頃の作ならざる可からず、さりとては餘り拙劣にして、假令當時は未だ全く學に向はずとて、後に能文なりし彼の筆致に似ざること甚しきのみならず。又當時かゝる研究の趣味を有したりしことも、折たく柴の記に記せる其經歷に照して頗る怪しむべきを以てなり。猶ほ白石の著にて本全集に漏れたるものも亦頗る少からざれど本集上版の際までには入手せざりしを以て、止むなく他日の輯集に讓ることゝし、一先是を以て本全集の大尾とせり。

一本篇卷末に附載せる白石先生年譜は、三田葆光氏の編輯なるが、先に本會は白石傳を附するの筈なりしも、都合ありて本編刊行の間に合はず、由りて是を以て暫く責を塞くことゝす。又著述書目は堤朝風の編輯にて眞僞相半すれども是また參考の爲に姑く附載することゝせり。

一本全集編輯に就きて、最初より大槻如電翁萩野博士より秘藏の貸與を忝くし或は有益なる助言を得たり。玆に本集を了するに當り厚く感謝の意を表す。

明治四十年四月

新井白石全集第六總目錄

頁數

附錄

鬼神論 元集

筑後守源君美著

鬼神ノ事誠ニ言ガタシ只言事ノ難ノミニアラズ聞事又難シ唯聞事ノ難ノミニアラズ信ズル事又々難シ信ズル事ノ難事ハ是知事ノ難ニゾヨレルサレバヨク信ジテ後ニ能聞トスヨク知テ後ニヨク信ズルトスヨクシラン人ニ非ズシテハ爭カヨク云コトヲウベキ言事誠ニ難トコソ言ベケレ昔子夏ノ死セルコトノ物知ル事アリヤナシヤト言フコトヲ問ヒマイラセシニ吾死セルガモノ知コトアリトイハンニハ孝子順孫ノ生ルヲ妨テ死セルニイタランコトヲ恐レ吾死セルガ物シルコトナシトイハンニハ不孝ノ子ノ其親ヲ葬ラザランコトヲ恐ル死セルモノヽ物シルコトアランモナカランモ今ノ急ニハ非ズ後ニ自ラ是ヲ知リナントゾ夫子ハ答タマヒケル是聞テヨク信ズルガ難キユヘ成ベシ又子路ニ答給ヒシハ未ダヨク人ニツカフマツラズンハイヅクンゾヨク鬼ニツカフマツラン未ダ生ヲ知ラズンバイヅクンゾ能死ヲ知ントゾ宣ヒタル是知事ノ難ニヤヨルベキシカハアレドヨク人ニツカフルコトヲ得テン後鬼ニツカフルコトヲ能シリナン生ヲダニ知リナン後ハ死ヲモ知ベキモノニヤ此理ヲコソ夫子ハ敎ヘサセ給ヒケメ又樊遲ニハ民ノ義ヲ務ム鬼神ヲ敬テ遠ザク是ヲ物知ト云テ敎ヘ給ヒシ彼是ヲカヨハシテ見ルニ能ク人ニツカフルハ民ノ義ヲ務ル也鬼神ヲ敬シテ遠ザクルハ鬼ニヨクツカフルノ道ニヤ此二ツヲアハセテコソヨク知レルトハ云ベケレ禮ハ生ヲ養ヒ死ヲ送リ鬼神ニツカフル處也トゾ禮ニ記セリ又明ニシテハ禮樂アリ幽ニシテハ鬼神アリトモ侍リ幽ト明トハ二ツナルニ似タレド誠ハ其理リ一ツニコソハカヨフラメ是ニヨク通ゼバ彼ニモ又通ジヌベキサレバ鬼神ノ事ノ如キハ聖賢說得テ甚タ分明也唯禮ヲ以テ能ク熟シ讀ナバ則見テン紫陽ノ朱子ノイヽケンモサモアリナマシ今試ニ三禮ヨリ始テ古ノ聖賢ノ遺ル言世々ノ儒先ノ格キ言ナド幷見テイカニモシテ其名ヲダニモ辨ヘントスルニ夫レモ又タヤスカラズ其事ヲバ聞得ンコト猶難カリヌベシ知得コト爭カ及ベキ唯其名ニヨリテ其義ヲヤ求ベキ

先天ニシテハ神ト云地ニシテハ祇ト云人ニシテ鬼ト云フ由周禮ニハ見ヘタリ其名異レドモ誠ハ陰陽二ツノ氣靈ナレバ通ジテハ是ヲ鬼神トモ言也陰陽二ツノ氣ト言モ元是一氣ノ屈ト伸トニテ（一元ノ氣屈伸往來ヲ云也）其氣コリテ伸ルヲ陽ト云（春ト夏トノ如キ也）歸リテ屈スルヲ陰ト云（秋ト冬トノ如キナリ）陽ノ中ニ又屈伸有リ（陽ノ來ルハ伸也是陽中ノ陽也陽ノ歸ルハ屈スル也是陽中ノ陰也）陰ノ中ニ又屈伸有リ（陰ノ來ルハ伸也是陰中ノ陽也陰ノ歸ルハ屈ナリ陰中ノ陰也）カク屈伸往來ノ自ラナル能ヲ二氣ノ良能トモ云ナルベシ（張橫渠ノ說也）但陰陽ヲ鬼神トハ云ベカラズ其屈ル伸ルトノ自ラ妙ナルヲ鬼神トハ云也扨コソ鬼ハ陰ノ靈神ハ陽ノ靈トハ言タレ（禮注疏）然ヲ又文ニ對シテ言トキニ天神地祇人鬼ト云事ハ天ノ氣ハ常ニ伸ブ（天ノメグリ〳〵テヤマザル如キ也）又氣ノ清明ナルモノヲ神ト云日月星辰ノ類コレナリシカモ變化ノハカルベカラザレバ（易ニ不可測神ト云トモアリ）天ニ在テハ神ト名ヅク地ノ如キハ山ソバダチ川流レ草木生出テソレトアラハシシメスミキ跡アレバ地ニ在テハ祇ト名ヅク祇ノ字古ハ示ニ作レリ（周禮ニハ地示ト有）示見著見ノ義ナルベシ（朱子ノ說如レ此）人ニ在テ鬼ト云コトハ鬼ノコトタルハ歸也（鬼ト歸ト聲近）人死テハ其魂ハ必ズ天ニ歸リ其魄ハ必地ニ歸ルユヘニ鬼ト名ヅク古ノ先王

制シ給ヒシ禮ニハ天下ヲ知シメサレテハ必ズカノ天神地祇人鬼ヲ祭ラセタマフ御事アリ日月星辰寒暑水旱山林川谷丘陵ノヨク雲ヲ出シ風雨ヲナセルニ至ル迄悉ク祀典ニ在リ（祀典トハ祭禮也是天神地祇ヲ祭玉ノ也）又群姓ノ爲ニ大社ヲ建自ノ爲ニ王社ヲ建テ社稷ノ神ヲ祭リ（是土地ノ神ト五穀ノ神ヲ祭リ給フ也）又司命中霤國門國行泰厲戸竈ノ七祀ヲ立ラル（司命ノ神ハ人ノ命ヲツカサドリ中霤ハ堂室ノ神行ハ道ノ神泰厲ノ事ハ下ニ見ヘタリ戸ハ戸ノ神竈ハカマドノ神ナリ）又祖考ノ爲ニ七廟ヲ制シテ春ハ禘ノ祭アリ秋ハ嘗ノ祭アリ（是春秋ノ祭ノ名也）諸侯ハ天ヲ祭ルコトヲ得ズ只ニ封內ノ山川ヲ祭ラル（封內ハ境內也）又群姓ノ爲ニ國社ヲ建自ノタメニ侯社ヲ建又五廟五祀ヲ建ラル（五祀ハ七祀ノ內二ツヲ減ゼシ也下モ又是ニ效フ）大夫ハ三廟三祀適士ハ二廟二祀庶士庶人ハ廟ヲ建ル事ヲ得ズ只其先ヲ寢ニ祭テ一祀ヲ建ル事ヲ得タリ（カマドノ神ヲ祭ル也）抑先王ノ祀典ハ各其分ノ至ル所ニ隨テ制シ給ヒシ所トゾ見ヘタリ（天子ハ天地ノ主諸侯ハ一國ノ主大夫ハ一家ノ主ナレバ分限ニヨリテ其祭ル所大小異ルアル也）天子ハ天地ニ中シ給ヒテ天地ノ主ニテマシマセバ天地ノ氣ヲノヅカラ一人ノ御身ニアヅカリカヽリヌサレバ其誠敬ヲ極メ盡サセ給ヒナンニハ彼天地ノ氣モ爰ニアヅカリ集テ百神ヲノヅカカラ其職ヲ受給ヒヌベシ諸侯ハ國ノ主トシテ其封內ノ名山大川其氣アヅカ

リカヽル所ナレバ其神ヲノヅカラ感應シ給フベキ理リ也大夫ハ家ノ主ナレバ彼五祀ノ神ナドカ其祭ヲバ感ジ給ハザラン祭法ニハ大夫三祀トアレド王制ニハ五祀ヲ祀トアリ故ニ兩説ヲタガヒニトリテ記セリ五祀ハ竈中霤門行ノ神也又禮ニ三年ノ喪ハ父母ノ喪也天子ヨリ庶人ニ達スト見ヘタリ是其尊キ卑キガ位コソ異ナレドモ其親ニ孝ナルベキ心ハ同ジ心ナルベシイカナレバ其先ヲ奉ルニ至テハ七世ヨリ下ツカタタガヒニ其數代ヲ降シテ庶士庶人ハ纔ニ其親ヲ祭ルニハトドマリヌラン且ハ人死テ其魂魄オノ〳〵天ト地トニ歸ル事ヲ得テシ後子孫是ヲ祭ニ至テハイカニシテカ又來リ受給ヘル其理ナカランニハ古ノ聖王此禮ヲバ制シ給フベカラズマヅイカナルヲ人鬼トハイヒケンカシソレ鬼神ト云事ハ禮ニヨリテ見ル時ハ此名モト斯人ヨリゾ始ル祭儀ニ見ヘシ昔宰我鬼神ノ名ヲ問マイラセシニ夫子答給ヒシコト禮ノ祭儀家語等ノ文ニ見ヘ鄭ノ子産ノ詞ハ春秋傳ニ見ヘタリ是等ノ遺レル言ニゾ鬼神ノ義ヲモ求ベキ先子産ノ詞ハ人始テ化スルヲ魄ト云既ニ魄ヲ生ジテ陽トナルヲ魂ト云ト侍リ生レ出ル始纔ニ父母ノ氣ヲ受得テ則ムスンデ胎ヲナス是魄既ニナレルナリ是易ノ男女精ヲマジヘテ萬物化生スト云シ時成ベシサレバ朱子モ陽始テマジハリテ天一水ヲ生ズル也ト云ヘリ又關尹子ニ一ヲ父トスユヘニ氣ヲ父ニ受氣ハ水タリトモ侍リ既ニシテ其魄ヤヽ集リテ動クコトアリ動クハ是陽也則是ヲ魂ト云按ズルニ是地ニ火ヲ生ズルナルベシ火ハ陽也陽ハ動ク關尹子ニ二ヲ母トスユヘニ血ヲ母ニ受血ハ火タリト侍ルサレバ子産ノ云シ所ハ是父母ノ精血ヲ受テ胎ヲナス始ニツキテ云ナルベシ先儒其説ヲヒロメテ北溪陳氏ノ説ナリ爰ニ於テ形既ニ生ジテ神則知ヲ發ストハ云ケリ按ニアハセテ云ヘバ精ト云魄ト云ハ是陰ナリ神ト云魂ト云ハ是陽ナリワカチテイヘバ精ハ水也神ハ火ナリ魄ハ金ナリ魂ハ木也陰陽ハ只升降ノミ升ルモノハ火也降ルモノハ水也升ラントシテ升ルコトヲ得ザルモノハ木也降ントシテ降ルコトヲ得ザルモノハ金ナリ此四ツノモノ皆土ヲ得テナルコトヲ得タルユヘニ易ニ天數五地數五天一生ㇾ水地二生ㇾ火天三生ㇾ木地四生ㇾ金天五生ㇾ土土既ニ生テ後地六成ㇾ水天七成ㇾ火地八成ㇾ木天九成ㇾ金地十成ㇾ土ト見エタリ人十月ニシテ生レ出ルコトハ天地生ズルト成ストノ數皆備リテ形モ氣モ共ニナリテ後ニ生出ルニアラズヤ既ニ生出テ則飢寒ヲ知ルモ痛疾ヲ知ルモ是形既ニ生ジテ神スナハチ知ヲ發スルノ理ニ非ズヤサレバ人ノ知覺ハ魂ニ屬シ形體ハ魄ニ屬ス陽ヲ魂トシテ陰ヲ魄トス所謂魂ハ陽ノ神ニテ魄ハ陰ノ神ナリ淮南子注ニ出ヅ此ノ二ツノ神トイフハナヲ鬼ハ陰ノ靈神ハ陽ノ靈ノ靈ノ字ノゴトシ其アヤシキ所ヲサスナリ又氣ヲ魂トシ精ヲ魄トス氣トハ噓吸出入スルモノ也出ル息入ル息ノ事也耳目ノ聰明ヲバ魄トス耳ニ聞ト目ニ見トモ侍ル也以上祭儀ノ注也夫子宰我ニ答ヘサセ給ヒシハ氣ト云モノハ神ノ盛ナル也魄ト云モノハ鬼ノ盛ナルナリ氣ト神トヲ合スルハ敎ノ至也凡生ハ必ズ死ス死スレバ必ズ土ニ歸ル是ヲ鬼ト云骨肉ハ下ニタヲレテ陰レテ野土ト成其氣ハ上ニ發揚リテ昭明焄蒿悽愴ヲナス是百物

ノ精也神ノ著ル也トゾ侍ル是先ヅ人ノ生ル、時ヨリノタマヒケルナルベシイケル時ニ其嘘吸ノ出入スル氣ト云モノハ則死ジテ神ト云モノ、猶盛ナルモノ也盛ト云ハ未ダ死セザルハ是盛ナレバナリイケル時ニ彼耳聽目明カナル魄ト云モノハ則死テ鬼ト云モノ、猶盛ナル物也既ニ死シテ後ニ彼鬼ト云ヒ神ト云モノヲ合テ祭ルハ是聖人ノ敎ノ至リ也諸ノイキトシイケル物ハ皆死レバ必上ニ歸ル是ヲ名ヅケテ鬼ト云是精魄地ニ歸也鬼ハ歸ナリトハ此儀成ベシ其骨肉ノ如キハ下ニタフレテ野ノ土ト朽ハテヌ是土ト朽ル物ハ骨肉ノミ陰ノ靈ナル魄ノゴトキハ地ニ歸ル也朽ニハ非ズ其氣ハ魂氣ナリ上ニオコリアガリテ是魂氣天ニアガルナリ或照曜ケル其光アリ是昭明也今モ世ノ人死スルニ人玉ト云光有モノ飛行コト有或ハムシ登ル其氣アリ是焄蒿ナリ人死スル時ニ其香ノコウバシキ又香ノアシキナドアリ或ハ人ヲシテ物スサマシク心痛マシムル事有是悽愴ナリコレラ百物ノ精ナリ百物トハ人ト物ト合テ宣ヒシナルベシ精トハ是精魂ノ謂ニテ則鬼ナルカ神ノアラハル、處ト也神トハ神魂ノ云ナルベシ伸ルヲ神ト云コト此コトヲヤ云爰ニヲイテ古ノ聖人其名ヲ制テ明カニ鬼神トハ名附給ヒシト云コトニコソ侍ルメレ子産ノ云シ所ニ就テ求ナバ所謂精氣物トナレル易ニ此生ノ始ヲ知リ孔子ノ宣ヒシ所ニ就テ求ナバ所謂遊魂變ヲナセル易ニ此死ノ終ヲモ知リナマシサラバ鬼神ノ情狀モ知ラルベキモノニヤ鬼神ノ情狀ヲ知トイフハ易ニ云

情狀ハ有樣ナド云コト也トイヘドモ猶深キ心得有ルベシヤ彼是ヲ通ジテ考ルニ人ノ生ルト死ルトハ陰陽二ツノ氣ノ集ルト散ルトノ二ツニシテ集レバ人ト成散テハ又鬼神トナル其魄ノ地ニ歸ルユヘニ鬼ト名附ケ其魂ハ天ニ升リユクハ伸ノ謂ナレバ故ニ神ト名附ヌ是集レル氣モト天地ノ氣ナルガユヘニ散テハ又天地ニ歸ル歸ルガユヘニ合テ魂ナモ魄ナモアハセテカク云フ事ニテ是ヲ人鬼トモ名附事其義前ニ云フガ如シ是ヲタトフルニ彼河海ノ水ヲ此器ニ盛レルニ似タリ盛得タル時ハ彼河海ノ水此器ノ中ニ在ト云ヘドモ彼水此水共ニ是一水也器ノ破レヌルニ及テハ又々モトノ河海ノ水ト成テ此水彼水共ニ又一水也其子孫ノ祭ヲ奉ルニ及テ彼祖考ノ鬼神來リ格ルコトハ陽燧ヲ以テ火ヲトリ陰鑑ヲ以テ水ヲトルガゴトシ子孫ノ精神ハ是祖考ノ精神ニテ彼是モト一氣ナレバ一氣ノ相感ズル事モ其應又カクノ如シシカハアレド天地ノ間ニ生レ出ルモノ何者カ天地ノ氣ノ生シ出ス所ニアラザル彼人モ此人モ共ニ一氣ノ生ゼル所也一氣ヨク相感ズルコトヲ得テンニハ何レノ人物カ感ジイタサヾランソレニ唯其祖考ノ神ノミ必ズ其子孫ノ祭ヲ受ン事心得難キ也是ヲ譬フルニ一貼ノ藥

ヲ見ルガ如シ藥ノ性ノ如キハ或ハ寒有リ或ハ冷有リ或ハ温有リ或ハ熱アリ或ハ補フベシ或ハ瀉スベシ或ハ毒アリ或ハアラズ如レ斯ソレヒトシカラズ君トナシ臣トナシ佐使トナシテ（醫ノ藥ヲ合スルニ君臣佐使ノ方ト云事アリ）合テ是ヲ一貼トシテ煎ズルニ只一碗ノ湯トノミナレリ何レカ寒冷何レカ温熱ナル事ヲ辨フベカラネドモ是ヲ服スルニ及デ心ニ行ベキハ心ニ行肝ニ行ベキハ肝ニ行キ腎ニ行ベキハ腎ニユキ脾ニ行ベキハ脾ニユキ肺ニ行ベキハ肺ニ行テ各其類ヲ以テ相感ズル事アヤマタザルガ如シ然バ又人死テ其魂魄ノ如キハ常ニ天地ノ間ニミチ〳〵テ其氣共ニ運行シヤム事ナシ遂ニ盡ル事アラザルニヤ天地ダニ其氣ノ如キハ消長アリ人既ニ生ヨリシテ死ニ歸シヌ死セル氣爭カ盡ルコトナカルベキ彼七廟ヨリ下ツカタ寢ニ祭ルニ至迄尊キ卑キ（トハ其先ヲイ）皆其祭ルニ世數ノタガヒニ降ル事古ノ聖人タヾニ彼君臣ノ分ヲ明ニシテ上下ノ禮ヲ定メ給ヒシノミニハ有ベカラズ必深キ理リモコソアラメサレバ子産ノ云ケン物ノ精ヲ用ル事多キ時ハ魂魄ツヨシ爰ヲ以テ精爽アリテ神明ニ至ルトハカヽル理リニヤ通フベキ凡ソ魄ハ氣ニ付テ氣又形ニツク形强ケレバ氣强ク形弱ケレバ氣モ又弱シ故ニ魂ハ氣ヲ以テ强ク魄ハ形ヲ以强カルベシ人貴ケレバ其勢大ニシテ其魂强ク富ヌレバ其養厚クテ其魄强ク（子産ノ云シ物ト云ハ衣食ヨリヲヨソ其奉養ノ物ヲ云ナリ）魂魄既ニ强ケレバ自ラ精爽アリテ（精トハ神ノ未ダアラハレザル也爽トハ明ノ未ダアラハレザル也）其鬼神明ニ至ルトナリソレ貴キ事天子トシテ富四海ノ内ヲ保タセ給フ御事ハ彼物ノ精ヲ用サセ給フ事最モ多シトイイツベシ聖子神孫七世ノ後ニ至ラセ給ハンホドハ彼天ニマスノ神上帝ノ御傍ニ左右セサセ給ヒヌベシ（是天子ノ神靈天ニマシテ天帝トナラビ玉フベキトノコトナリ）諸侯ヨリ下ツカタハ各其品降ルニ隨ヒテ其富又同カラズ物ノ精ヲ用ルコトヲノヅカラ多キ少キ有テ其魂魄モ又强弱アリサレバ其神ノマスコトモ又遠キ近キノ異ルコト有ヌベシ故ニ其先ヲ祭ルノ禮七廟ヨリ下ツカタ各其數ヒトシカラズトコソ覺ユレサラバ又宗廟ノ禮ニ大祖ノ廟ハ百世迄ウツサズ其餘ハ親既ニ盡ヌレバタガヒニウツシテ祧トナシマヽ（假バ五世ニテ親ツク我ヨリ六世ノ主ヲバ昭穆ノニウツシテ祧トナス祧ハ遠祖ノ廟ヲ言也）禘嘗ノ祭アリト見ヘシ人死テ其氣終ニ盡ルニ歸シナバ爭テ所レ謂大祖ノミ百世マデモ其神ハマシマスラン又彼遠シテハ七世近クシテハ二世ニシテ其主既ニウツサレタラン後ニ又彼春秋ノ祭ヲ來リ受給ハン事

イカニゾヤ是ハアル人ノ禘ノ説ヲ夫子ニ問マイラセシニ禘ト云ハ王者ノ大祭也王者既ニ始祖ノ廟ヲ建テ又始祖ノヨリテ出給ヒシ所ノ帝ヲ始祖ノ廟ニ祭テ始祖ヲ配シ給フコト也是先王ノ民ニムクイ遠ヲ追セ給フ御事コレ遠シテナヲ遠キヲ祭ラル、御コトナリシラズ其説ヲシレランモノ、天下ニヲケルソレ是ヲ見ガゴトキカト宣テ其掌ヲ指サセ給ヒシト侍ルモ此理ノ尤知リ難キユヘニコソ侍ルラメサレド試ニ是ヲ論ゼンニ先大祖ノ廟百世ト云フトモウツルベカラザランコトハ凡ソ天下國家ノ君トナリテ百世ノ大祖トシテ業ヲ創メ統ヲ垂レ給フ御事ハジメ彼氣ヲ受得給フコト天ニシテハ高厚地ニシテハ名山大川ノ氣ヲ聚給ヒテコソ明ニシテハ天地山川百神ノ主ト成給ヒ幽ニシテハ上帝ニ左右シ給ヒテ其神長ク日星ト共ニ明カニヲハシマスベケレ一天ノ下一國ノ内悉ク其德ヲ思ヒ其威ニ恐レテイツキ祭ル心ノタヘザラン程ハ其神ノマスコト推テ測リ難シイカニ況ヤ其子孫ノ身ナルヲ百世ト云共ナド其祀ヲタ、セ給フベキ次ニ親悉ク移サレ給ヒシ主ヲ祭ルコトハ所レ謂祖考ノ精神ハヲノツカラ自ノ精神也謝上蔡ノ説我ニ在物既ニ集レバ則是祖考ノ來格也朱子ノ説ナド侍ルハモシ此説ニヤ通フベキ又爰ニ其事ハ少キナレトモ大ナル理ヲサトスベキ物語ノ侍リアル人深

ク好ミテ烏骨鷄ト云物ヲ飼シ者ノ中セシハ此鷄ノ毛白アリ黒アリ斑ナル有リ其中ニ肉ト骨トノ黒キノミ藥トスルニヨシ其舌ヲ見ルニ色黒ケレバ必肉モ骨モ共ニ黒シト云傳ヘ侍リ初メ唐土船ニ此鷄ヲ載テ來シヲ雌雄ヲ求得テ飼ニ程ナク子ヲウム其鷄毛モ形モ皆父母ニタガフ所アラズ其雛大キクナリテ又子ヲウムニ毛モ形モ似タレ共其舌ノ色ハ黒カラザリシ程ニアヤシミ見ルウチニ彼舌ノ色ノ變ルガウメル子ハ其毛ハ似レ共其形ハ常ノ鷄ノ如シ常ノ鷄ノ形ナルガ子ヲ生ルニ及テハ毛モ色モ形モ全ク常ノ鷄ニ成テケリ江南ノ橘江北ニ移テ枳ト成モ地氣ノシカラシムル也我國ノ地氣唐土ニ異ガ故ニ此鷄モ斯ク其性變テケリト思ヒヌ斯クテ彼常ノ鷄ト成レルガ子ヲ生テ其子又子ヲ生ニ其卵ノ中ヨリ出シヲ見レバ毛モ形モ似タルノミニ非ズ其舌ノ色黒キマデ初メ唐土ヨリ求シニ露違フ所非ズ大ニアヤシト思テ此後常ニ試ルニ大ヤウ此定違フコト非ト申キ魏ノ末ニ漢ノ長沙王ノ呉芮也冢ヲ發キシ盜ガ王ノ六世ノ孫呉綱ガ形ノ王ニ似タルヲ見テ驚キ漢ヨリ魏ノ末迄ハ四百餘年ニ及ベリ唐ノ時モ梁ノ鄱陽王ノ武帝第七ノ御子蕭恢ノ事墓ヲ發キシ盜蕭穎士ヲ見テ王ノ形ニ似タル事

ヲ語ル王ノ時ヲ去コト百餘年斗ニヤ人ノ子孫三五世ノ後必一人ノ其祖先ニ似タル者有ト云コトノ侍レバ彼鷄ノ事モ疑フベカヲズ其烏骨ナルガ子ヲ生テ其子又々子ヲ生コト二三傳ノ後始ノ烏骨ナルヲ相去コト既ニ遠クシテ漸ニ變ジテ常ノ鷄ト成テ烏骨ノ性既ニ盡ヌト見ヘヌルハ人ノ祖考ノ精神既ニ盡ヌルニ似タレドモ忽ニ又烏骨ナルモノ、常ノ鷄ヨリ生レ出タルハ又子孫ノ精神ヲノヅカラ祖考ノ精神ナレバ子孫其誠敬ヲ盡シテ吾ニ有所ノ精神アツマレバ祖考ノ精神來リ格ル理有ニ似タリ昔漢ノ武帝ノ御時未央前殿ノ鐘故ナクシテミヅカラ鳴コト三日夜マデ止事ナシ帝ヲドロカセ給ヒシニ東方朔奏シ對シテケル銅ハ山ノ子ニシテ山ハ銅ノ母ト承ハル陰陽ノ氣類ヲ以テ云時ハ子ト母トハ相感ズベシ山恐ラクハ崩ル、所有ナン易ニ鳴鶴陰ニ在其子爰ニ和スト云事モ精ノ至ニハ侍ル五日ノ內必其應有ヌベシト申ケルニ纔ニ三日ノ內ニ南郡ノ山崩ルコト三十餘里トゾ奏シケル（此後漢魏之代此事二度有リ何レモ蜀ノ銅山崩レシ時也今人家ノ釜ナル事ノ有ルハ此理ニゾ侍ル）是等ノ理ニ能通ジナバ其一氣ノ感ズル所ハ百世ヲ經ル共遠カラザル事ヲ知ヌベシサレバ禮ニ神ハ非類ニ受ズ民ハ非族ヲ祭ラズト云コトモ我族類ニ非ザルガ祭ランニハ神譬ヘ其德ヲイトハズトモ其饗ヲ受ルコトアタハズタトヘバ陰鑑ヲ以火ヲ取ントシ陽燧ヲ以水ヲ取ンニ水火共ニ得ベカラザルガ如シ我族類ニ非ザルハ其氣朦異ニシテ相感ベキノ理ヲノヅカラナケレバ也又後ナキヲ不孝ノ大ナルモノトスル事モ此理ニ侍リ夫子ノ春秋ヲアラハシ給ヒシニ莒人滅鄫ト侍ルハ寔ハ莒人鄫ノ國ヲ打亡セシニハ非ズ莒ノ公子ハ（君ノ子ヲ公子ト云）鄫ノ君ノ外孫ナレバ養フテ後トシタル也（穀梁ニハ異姓ヲ立テ、祭ニ臨ム是滅己ノ道也ト云公羊ニハ莒ノ女鄫ノ夫人ト成鄫ノ君夫人ノ甥ヲ立テ、子トスト侍リ范寧ガ説ニハ鄫ノ公女外甥ヲ養テ後トスト云リ外孫タルヨシハ晉書ニ見ヘタリ四説異レドモ異姓ヲ立テ後トセシハ一定ナリ）先儒此事ヲ論ジテ（北溪陳氏）異姓ヲ養フテ後トスルハ陽ニツク事有ルガ如クナレドモ陰ニハ既ニ絶ナリトハ云ケリ按ニ彼鄫ハ姒姓ノ國トシテ夏ノ禹王ノ御後也封ヲ受シ事既ニ千餘年ニヤ及ビヌラン國小ナリト云フトモ公子公孫ノ後君ノ後ト成ベキモノ爭カナカラザラン然ニ我愛スル所ニ私シテ我先王ノ神明ノ統ヲ自ラ絶チシ事不孝ノ罪輕カルベカラス何如ナレハ夫子ノ記シ給フ處ハ其罪唯莒人ニ似タリ（莒人滅スト有ヲ以テ也）是莒ノ君ノ自ラ異姓ノ國ニシテ我子ヲシテ人ノ後トナセシ事其罪コトニ重キ理ニコソ有ベケレ

古ノ聖人ノ罪ハ其身ニ止リテ其世ツギニ及ビ給ハザリシ事彼人ノ世ツギタチナンコトヲ深ク恐レ給ヒシ故成ベシ鄭ノ伯有カ厲ト成ケルヲ子產ノハカラヒニヨリテ彼子良止ヲ立テ大夫トシ（大夫宗廟ヲタツベケレバ也）其祭ヲ司ドラシメシニヨツテ其事則止ミヌ子大叔其故ヲ問ヒシニ鬼歸スル所アレバ則厲ヲナサズ我是ガ歸スル事ヲナスト云シモ又カヽル理リニヤ有ベキ（人ノ後ヲ絶ツ事ハ其罪自ヲタチショリ重キト云理也）又人死テ厲ヲ成ト云コトハ則チ後ニ子產ノ晋ニ行シ時趙景子ニ對ヘシ言ニゾ見ヘタル彼伯有ガ如キハ身既ニ鄭ノ君ノ後トシテ（穆公ノ後ナリ）彼國ノ卿ト成テ政ニ隨フコト既ニ三世其勢ヒ盛ニシテ其養厚ク其魂魄其ニ強ク族又大ナレバ魂魄ノヨル所又厚シ斯クテ其死ヲ得ザリシカバ（魯襄公三十年ニコロサレヌ）其鬼又厲ヲナシタル也子產ノ云シ其歸スルコトヲナシケルハ譬バ神禹ノ水ヲ治メサセ給ヒシニ是ヲ導テ海ニ歸セシメ給ヒシカバ其災止ムニ似リ偖コソ子產ハ鬼神ノ情狀ヲ能ク知レリト先儒ハ多ク譽テケレ凡ソ人命永クシテ天年ノ終レル又年猶壯ンナレド身久ク病ニ犯サレテ終ニ死セルガゴトキ其氣則散ズ或ハ勇壯ノ人戰陣ニ臨テ戰ヒ死シ或ハ暴惡ノ人刑戮ニ遭テ誅シ殺サレ或ハ自刎自縊或怨恨ヲ抱テマゲテ殺サレ（罪ナクシテ殺サレタル類也）或ハ暴疾ニアフテ忽ニ死セル或ハ婦女ノ深ク怨ミ妬ヲ含メル或ハ僧道士ノ務メテ精神ヲ養ヘル（僧道士ナドノタグヒ久シク精神ヲ養ヘバ氣凝アツマリテ忽ニ散ゼヌナリ）彼富貴權勢ノ人々ノ強死セル事伯有ガ如キ（強死ハ病ニアラデ死ルヲ云）皆悉ク死シテ後其氣散ズルコトヲ得ズシテ沈魂滯魄猶天地ノ間ニ有リテ或ハ妖ヲナシ怪ヲナシ或ハ厲ヲナシ疫ヲナス故先王ノ禮ニ天子ハ群姓ノ爲ニ泰厲ヲ祭リ給ヒ（是七祀ノ一ツ也）諸侯ハ公厲（五祀ノ一ツ也）大夫ハ族厲（三祀ノ一也）士庶人ハ旁親ノ後ナキモノヲ祭ル事皆其鬼ノ歸スル所アラシムル故成ベシ（昔本朝ニモ八所御靈三所御靈ヲ立サセ玉ヒ尊氏將軍ノ後ニ德宗權現ヲ祭ラレシカバ北條家亡魂ノタヽリヤミシコト此等ノ例也）

鬼神論 亨集

夫水ハ至テ清ケレ共氷ヲ結ブ時ハ明カナラズ神至テ明ナレドモ形ヲ結ブ時ハ明カナラズ氷解テ清キニ歸リ形散ジテハ明ニ歸ル是漢書ノ説也故ニ覺ルハ靈ナラズシテ夢ハ靈ニ、生ケルハ靈ナラズシテ死セルハ靈也、人死シテ厲ヲナス事ハサモ有ナンイケル人ノ或ハ妖ヲナスコト死セル人ノ厲ヲナスガゴトキハイカニゾヤ是世ニ云生靈ノ事也所謂生ルハ靈ナラズシテ死セルハ靈也トハ形ハ靈成ズシテ神ハ靈成ガ爲ナルベシ然ラバ彼生ルガ妖ヲナス事ハ猶死セルガ厲ヲナスガ如シ死セルガ厲ヲナスハ是其神形ヲ去レバナリ生ルガ妖ヲナスモ又神形ヲサレバ也唯死セルモノハ神永ク形ヲ去ル生ル物ハ神時アリテ其形ヲ出入スル事有也譬ニ形ハ是屋舍也神ハ是主人也神永ク形ヲ去ハ一度家ヲ去テ萬里ノ外ニ行留ル也神時ニ出入スルモノハ朝ニ家ヲ出デタニ家ニ歸ル也家ヲ去ル事ノ遠ト近トハ異リトイヘドモ其家ヲ出テ營ム業有事ハ彼是トモニ同キガゴトシサレバ生ルガ妖ヲナス事モ猶死セルガ厲ヲナスガゴトシトハ云也今モ世ニ愚夫愚婦ノ極テ愛執ノ深キ妬忌ノ深キ或ハ人ヲ慕ヒ或ハ人ヲ恨テ神佛ニ祈リノロフ事スルナド彼我思フ人恨ムル人ノ夢トウツヽトノ間ニ見ヘテ幻ノ如ク影ノ如クナル皆是ヲロカナル本性ノ物深ク思ヒ籠メシ故ニ其精内ニ凝テ其神外ニ馳スル也此等ノ事又巫蠱ノ事モ侍リ巫蠱ノ事トハ師巫ノ左道ヲ以人ヲマドハセル也師巫ハ女御子ノ師也左道ハ邪術也是今ノ山伏タラヌ男女ナドノ人チ呪咀スル事也昔漢ノ武帝晝寢サセ給ヒシ御夢ニ木ニテ作ル人ノ數千杖ヲモテルガ近ク來リテ玉體ヲウチナヤマシマヒラスルト見給ヒ驚キワヅラハセ給ヒシコトアリ帝江充ト云モノシテ巫蠱ノ事ヲ治サセ給ヒシニ江充太子ト隙アレバ木偶人ヲ太子ノ宮中ニ得ル事多キヨシヲ僞リ奏シケレバ太子モ皇后モ此事ニ依テ失給ヒシヨシ司馬遷ガ史記ニ見エタリ心呪咀ニ蔽ル、物ハ萬鬼是ニ攝ストモ亦心男女ニヲボル、モノハ淫鬼是ニ攝ストモ云ヘリ關尹子ノ説也或ハ男女ヲ恨シタリ或ハ神佛ニイノリノロフノ類ハ天地ノ間ニアラユル沈魂滯魄各其類ニ感ジテ其人ニカハリテ妖ヲナシ怪ヲナストモ侍ルメリ人ノイムル所ハ其氣焔ニシテ

是ヲトル焰トハ心ノ動ヲ云妖ハ人ニヨリテ起ル也人釁ナケレハ妖ミヅカラ起ラズト見エタリ左傳ニ見我心イム所有テ或ハ疑ヒ或ハ恐ル丶ガ故ニ彼妖ヲ感ジ招ケルモノ也サレバコレラノ事多クハ或ハ身ヤミ或ハ年老テ其氣衰フル時ハ與ル是其隙ニ乘スルガ故也唐ノ貞觀ノ比西域婆羅門ノ僧來リテ人ヲ呪咀シテ忽ニ殺シ忽ニイカス事アリシニ大史令傅奕ヲ呪咀スルニ及テ傅奕ハ覺ユル事ナクシテ彼僧忽ニ倒レ死ス是邪ハ正ニ勝事ヲ得ズ我正シカランニハ彼邪爭カ行ハルベキサレ共又イカナレバ彼夢ニ見ヘ幻ニ見エテ風ノツナグベカラザルガ如ク影ノトルベカラザルガ如クナル此等ハ我心ノマドヒトモ云ベキ或ハ死シテ人ニ憑テ物云カハスナドコソ猶アヤシケレ夫レ人ノ知ハ神ニ發ス神ハ覺レバ目ニ宿リイヌレバ心ニ宿ル彼神來テ我神ニ感ズ故ニ寢テ夢ニ見ル所アリ我心既ニマドヒヌ神モ又昏シ神昏ガ故ニ覺テマボロシニ見ユル所アリ譬ハ眼ヲ患ル物ノ空中ニ花ヲ見ガ如シ是ヲ玄花黑花ナド云夫子ノ人ノ信ズル所ノモノハ目也目モ又信ズルニタラザルコト有カト宣ヒシハカ丶ルコトニヤ有ベキツナグベクトルベキモノ皆形アル物也彼ノ神ノ如キハ既ニ形ヲサ

リヌ又鬼ハ人ノ影ナリトモ云リ邵康節ノ説也身ニフル丶事風ノ如ク目ニフル丶事影ノ如クナリトモ形ナカランモノヲ爭カ手ニハトラルベキカノ死セルガ人ニヨリテ物云ガ如キハ鬼ハ幽ニ靈ニシテ明ニ靈ナラズ幽トハ陰ナリ晦冥ノ時ノ如キヲ云明トハ陽明ナリ青天白日ノ如ヲ云故ニ鬼ノイタル事多クハ夜ヲ以ス人ニヨリテ後ニハ明ニモ又靈ナルコトヲ得ル鬼既ニ人ノ身ヲカリテヲノガ身トナシナンニハ只ニ物云コトノミニ限ルベシヤ或ハ詩ヲ賦シ字ヲ書シ凡ハ人ノナシナン程ノコトイヅレノコトカナスベカラザラン唐土ニテ箕仙ヲ降ス術有リ紙筆ヲソナヘテ其神ヲクダスニ其神クダリテ是ヲカク箕仙ノ詩トテ世ニ傳ル所スクナカラズ其書タルモノヲ又我朝ニモ來テ見シ人モアルナリ彼ノヨラル丶人多クハ奴婢ノ賤シキ兒童ノ幼昧ナルゾカシ然ラザレハ衰病ノ人久シカラデ死シヌベキノ類也此等ノ人ハ皆魂昏ク魄ヨハケレバ也鬼襲テ其舍ニ入レル也心ハ神明ノ舍ト云傳ヘタリ此等ノ鬼タヾニ人ノ身ヲカルノミニ非ズ或ハ又物ニカリテ妖ヲナス翟有リ齊ノ公子彭生ガ豕トナレル類是也左傳ニ彼ノ生ルガ人ニヨル事ハ此コラル丶人ノ想ニヨリテ感ジ得ルアリ又遊魂有テ彼人ニカハリテヨレルアリ昔人アリテ江ヲ渡ルニ其ツマ過テ舟ヨリ落テ水ニ沈ミヌ夫ナク／＼金山寺ニ行テ僧ヲ請ジナキ跡ノ

營ミシケル彼女忽ニ下部女ニヨリ來テミヅカラハ猶ソコノ所ニ有トゾ云ケル彼死セシ時ノ苦シサニヨリテ其魂モカク此世ノウチニ迷フラン事ノ淺マシキトテ聞人皆袖ヲ絞リケリカクテ三日ノ後釣スル翁彼ノ妻ヲグシテ來ﾚﾘ誠ハ始ヨリ死セシニ非ズ水ニウカミ出シガ流レ行テウヅマク所ニタヾヨフヲ海人ノ小舟ヲサシヨセタスケ得タル也是其下部女ノ主ノワカレヲナゲク心ノ切ナルニヨリテカクハルカニ相感ジ得タルモノ也トゾ（宋ノ時ノコト也程朱ノ語類ニ出ヅ）又アル人ノ遠キ國ニ行シガ昔我妻ノ心見ン迚金ノ簪ヲトリテ壁ニカクセシコトノ有シヲ事ニマギレテカク共イハデ出立他國ニテ病ニ犯レテ死ベキニ臨テ供ニ具シタル男ニ此事ヲ告ケリ古郷ニ止リタル妻夫ノ行衛ヲ思ヒツヾケテ只ヒトリ立シニ忽ニ大空ノ中ニシテ人ノ聲スルヲアヤシトキクニマサシキ我夫ノ聲ナリミヅカラ既ニ死シ侍リヌ日比ハ見エザリシ簪誠ハ我カクセシ也我死セシコト誠ト思ヒ給ハザランニハイヅコノ壁ノ中ヲ見ルベシ其ヲシルシト思ヒ給ヘト云ケリウツヽナキコトト思ヒシカド教ノ儘ニソコノ壁ノ中ヲ見ルニ誠ニカンザシ有ケリ妻ハ天ヲアフヒテナクヤガテナキ跡ノ事ナド營ミテケリイク程ナクテ夫ハ病愈テ歸リ來リケレド妻ハ死シタル人ノ魂ノ歸リ來リケルト大ニ驚キマドヒケリ此等ノ如キハ又遊魂ノ人ヲアザムキテカヽル振舞シタル也トゾ云傳侍ル（程子並東坡ノ書ニ見ユ宋ノコト也ケン遊魂ハウカレ行鬼ナリト也）サラバ又彼人死テ或ハ人ニヨリ或ハ物ニヨル事ヲ得テンニハ人ト生レ物ト生レント云モ疑フベカラズヤ（是佛氏輪廻ノ説ニシテ或ハ前身モ人ニシテ後身又人トナリ或ハ前身異類ニシテ人トナリ後身又異類ト生ルノ類ヲ云）シカハアラジ夫レ人ノ天地ノ間ニアル事ハ譬バ魚ノ水ニ住ルガヲノガ腹ニ充ル水ハ則其身ヲ浮メル水ナルガゴトシ此身ノ内外皆是天地ノ氣也天地ノ塞ハ我其體ト侍ルモ此理ニゾ侍ル（孟子ノ説ナリ）サレバ我父母ノ氣ハ則天地ノ氣ニシテ我氣モ又天地父母ニ受シ所ナリ然ルヲ若人死テ鬼トナリ鬼ハ又人トナリナンニハカシコニ死シ爰ニ生ル事只是人ノミヅカラ往來ルニテ天地父母ノ氣ヲ受得テ生ルニ非ズ且天地開ケ始リシ時ヨリゾ萬物ハナリ出タル人既ニ天地父母ノ氣ニヨリテ生ルヽコトヲ得ズ自鬼トナリ又人トナランニハ世ノ人悉ク皆盤古氏ノ代ノ人ノ死カハリ生レカハリテ今ノ世ニ至レルニヤ（盤古氏ハ人始テナリ出シ時ノ君也）天地生々ノ理リイカデシカハ有ベキ人物トナレルト云モ

其理ナカラン事又カクノゴトシサラバ羊祜ガ環ヲ記シ晋書ニ羊祜三歳ノ時メノトニ我モテ遊シ金環ヲアタヘヨト云シニメノトサル物ハ侍ラヌ物ヲト云羊祜隣ナル季氏ガ家ニ行テ東ノ垣ノ下ノ桑ノ木ノ中ヨリ取出シテ來レリ季氏大ニ驚キ此物ハ我死セシ子ノ失ヒシ物也トイヽキ時ノ人怪シトテ季氏ガ子羊祜ガ前身成シト云鮑靚カ井ヲ識シ是モ晋書ニ鮑靚五歳ノ時父母ニ語テ我ハモト由陽ト云所ノ李家ノ兒也九歳ノ時井ニ落テ死キト云此コトヲ尋問シニ皆符合セシト也嚴武ガ諸葛亮ノ後身ニテ唐ノ嚴武ガ母武ヲ孕ム始ニ蜀ノ諸葛孔明來テ子ト成ト夢見ケレバ兒ヲ生テ武ト名附孔明ヲ武侯ト謚セシ故也嚴武モ又後ニ蜀ノ國ヲ守ル大將ト成鄧禹ハ范祖禹ノ前身ナリシ宋ノ范祖禹ノ母夢ニ漢ノ將鄧禹我ネヤニ入ト見シ日兒ヲウメリ故ニ祖禹ト名附是家傳ニ出タリ此等ハ皆正史家傳ニ載シ所也劉三復カ前身ハ馬ニテ唐ノ時奚官トテ天子ノ御馬ヲ主ドル官人劉三復ト云シガ我前身ハ馬ナリシトテ馬タリシ時ノ事ドモ覺テヨク語リシト也李林甫ガ後身ハ鷄ト成シナド陸元誠ト云人鷄ヲサキテ煮ントシケルニ鷄ノ脊ニ李林甫ト云三字アリ客皆ヲドロキテステシト也世々ニ傳ル所少ナカラズ此等モ又信トスベカラズヤ是ラノ事多クハ人ノ只ナラヌヨシヲホメテ云モ傳ヘシルシモ傳フル事侍ルメリ周ノ申侯ハ嶽神ノ降リ生レシ殷ノ傳說ハ箕尾ニ騎テ星ト成レリナド箕尾モ星ノ名也星ノ名ニ傳說ト云モ有也云傳ヘシタグヒ也モシ其事誠ニアリナンニハ是モ又鬼ノ人ニヨレル也宋ノ時都下ノ一小兒年僅ニ三歳ニテ曲柏皆節ニアタレリ諺ニ拍子ノヨクキヽシナド云フコト也明ノ時大原ノ王德華幼カリシ時ヨク番經ヲ誦スルノ類也番經トハ西番ノ經也西番トハ即西域也或ハ曲ヲヨクセ

ル人或ハ西番ノ僧ノ死セシガ其魂魄未ダ散ゼズシテ此兒ノ身ニ附托セシ物トゾ云傳ヘ侍ル凡ソ物ノ性靈ナル物ハヨク物ニ感ズル諺ニヨク物ニアヤカルト云ヘルナリ蠶ハ性ノ靈ナル物ニテ是ヲ飼ニモノニ觸テハ其物ノ形ヲナス物也漢ノ時ヤモメナル女ノイネヤ、デ枕ニヨリテ壁ノ崩レヨリ隣ノ家ノ蠶ヲカフヲ何トナク詠メ居タルニアケノ日カノ蠶繭ヲ成シケルガ彼女ノ形ニゾ似タリケル目本眉ノカヽリナドサダカニハ見ヘワカネドモ是ヲ望ニ誠ニ物思フ女ノ形ナリシヲ蔡中郎是ヲ見テ蔡邕也琴ヲ彈ズル名譽アリ償アツク買得テ其絲ヲ練テ琴ノ弦トナシ彈ジケルニ其聲ゲニ哀也蔡邕ガ女則蔡琰也物ノ音ヲキヽワク無双ノ名譽有シ也一度此琴ノ音ヲ聞テ是寡女ノ絲ナリケリトハ云シトゾ買氏說林ニ見ヘ侍ル是彼女ノ蠶ト成ルニモ非ズ只蠶ノ性ノ靈ナル故ニ忽ニ彼女ニ感ジタル也マシテヤ人ハ萬物ノ靈ナルモノヲサレバ古ノ聖人ノ敎ニハ女ノハラメル時ニ目ニ邪色ヲ見ズ耳ニ邪聲ヲ聞ズ凡ソ飲食ヨリ起居ノコトニ至ル迄多クノ愼アリ是胎內ノ子ノ氣ヲ受ル始ナレバ一ツニ其正シキニノミ感ゼシメン爲ニゾ有ケル其愼ノ中ニ兎ノ肉ヲ喰ヒ生薑ヲ喰フ事ナドモ忌ム事有リ生薑ヲ喰ヘバ生ルヽ子指多ク

世ノ諺ニ手ノハシカムナド云コト此言葉ニ習ヒテナリ兎ノ肉ヲ喰ヘバ生ル、子脣カクル也ト云傳ヘタリ生レタル子ノ或ハ脣カケ或ハ指多キハ彼兎ノ肉ハシガミノ後身ニハ非ズ唯其氣ニ感ジヌル故也胸ニ猪ノ毛ハヘイビキノ聲ノ猪ニ似タルモノヲ朱子ノ猪氣ニ受シ也ト云ケンモコレラノ理ニヤアルベキ人始テ氣ヲ受ケ形ヲナサントスル時分ハ其生々ノ氣專ナルガ故ニ死シテ散ジナントスル氣是ニ感テハ忽ニ引カヘサル、コト潮ノ盛ニ滿チ來ル時海ニ流レタル河水ノセキトメラレテ逆ニ流レ升ルガ如シ人ノ死タル時ハラメル女ノ側近クヲレハ忽ニ尸ノ動キ働クモ世ニ多ク是其明ラケキシルシ也又世ニ幼時ニ敏ナルガオノ早キヲ敏ナリト云ヤ、年タケテ後ハ其才ヲトレルアリ思フニカレラ或ハ自氣ヲ受シ始ニ彼才鬼ノヨリシニ才有人ノ魂魄ナリ自カラウケ得シ氣ハ日々ニ長ジ忽ニ感ジ得タル氣ハ日々ニ散ジ盡ル故ニ才氣ツキテヲノガ不才ノ本性アラハレタルニヤアラム紅ナル蓮ノ實ヲ深キ靛アイ甕カメノ中ニウヘヌレバ始花ヲ披ク時ハ其色青シ年經テ藍ノ氣ツキヌレバ花ノ色モトノ如ク紅ナルガ如ク物死シテ人ト生レ人死シテ物ト生レルト云モ人物ノ氣ノタガヒニ相感ジヌルコト皆是等ノ理也サラバ又女子ノ丈夫ニ化シ丈夫ノ女子ニ化シ男子又子ヲ生メル類世々ノ史傳ニ多ク見ヘタリ又人生ナガラ虎ト成牛哀虎トナレルナリ狼ト成大原ノ王含ガ母黿トナリ江夏ノ黄氏ガ母蛇トナル李勢ガ宮人此等ハ死シタルガ變ジタルニモ非ズ生ナガラ化シタルコソ猶アヤシケレド各コレ等皆陰陽乖亂ノ氣ノ致ス所多クハ國家滅亡ノ兆ノアラハル、所トナルベキ則所謂怪ニシテ夫子ノ語リ給ハザリシ所也先男ノ女ニ化シ女ノ男ト成レル事ハ漢ノ京房ガ易傳ニ女子化シテ丈夫ト成是ヲ陰昌ト云賤人王トナル丈夫化シテ女子ト成是陰ノ陽ニ勝ル也厥咎ハ亡ブ又男化シテ女ト成宮刑ノ濫成也女化シテ男ト成ハ婦政ノ行ル、也ト見ヘタリ又春秋潛潭巴ニハ男ノ女ト化スルハ賢人位ヲ去リ女ノ男ト化スルハ賤人王ト成ナド侍レバ古ヨリ此事有シトゾ見ヘタル紂王ノ御時周ノ文王四十二年ハ武王位ニツカセ玉ヒシ元年也今年女子有テ化テ丈夫ト成レルトハ竹書紀年ニ見ヘタリ戰國ノ世魏ノ襄王十三年ニモ此事有ショシ史ノ世家ニノセヌ其後漢晋唐宗ノ世ニモ此事侍リキ漢ノ時一人晋ノ時二人唐ニ一人宋ニ一人有シト見ヘタリ昔シ蜀王武都ノ丈夫ノ女ト成レルヲ愛シ給ヒテ國ヲ亡シ給ヒショシ花陽國志ニ見ユ其後漢晋ノ時宋ノ南渡ノ後明ノ隆慶年中ニモ其コト侍リ漢ニ三人

（晉ニ三人宋ニ一人明ニ一人）男子ノ子ヲ産ルコト宋明ノ世共ニ其コト侍リ（宋ニ一人明ニ一人）婦蘇ノ男子子ヲ生コト有リシ時（是明朝ノ事也）此所ノ司周文襄ニカクトツグ文襄若キ者共ニ向テ汝ガ輩愼シムベキ事ニコソアレ今ノ人男色ニメヅル事女色ヨリモ猶甚シ勢必ズカク有ベキモノ也トゾ云ケル此等皆衰世ノ本亡國ノ兆シナレバ京房カ占ノ如キ或ハアヤマツベカラズ天人ノ應誠ニ遠カラズ陰陽ノ變誠ニ測ルベカラズ又至淫ノ者ハ化シテ婦人ト成至暴ノ者ハ化シテ猛虎ト成心ノ變ズル所變ゼズト云コトヲ得ズトモ云リ（譚子ノ説）夫暴惡ノ心有ル者ハ人ニシテ未ダ化セザル虎也貪殘ノ心有ル者ハ人ニシテ未ダ化セザルノ狼也其化セザル所ノ者ハ纔ニ形ノミ心一度變ジナバ形ヲモ變ズベシ人ノ大ニ怒ルトキ火ナラズシテ熱シ大ニ恐ル、時ハ水ナラズシテ寒シサレバ志ノ一ニシテ氣ヲ動ス時ハ大暑ニ當テモ寒ク大寒ニ當テモ熱カル成ベシ病ヲ患ル人蟲腹ノ中ニ生ル物有リ彼形ヲナス事病ニ依テヒトシカラズ是モ我血肉ノ氣忽ニ化テ蛇ノ如ク鼃ノ如シ彼虎狼ト化シ鼃蛇ト化セシ人ヲ相去ル事遠カラズ只其靈ナルモノハ體コゾリテ皆化セザルノミ彼雀蛤ト成リ田鼠鴽ト成ルガ如キ物化ノ變常ニ斯ノ如シ人モ又物ノミ變化ノ理必シモ無ト云ベカラズ只是常ノ理ニ非ズ彼物ノ變ノ如キハ常ニ在リ然ラバ又物ノ變ズルハ是其常ノ理也ト云ハンモ惡カラジ夫レモ猶雀蛤トナリ田鼠鴽ト成ノ類ハ禮經ノ載ル所ト云ヘドモ（禮記月令）人或ハ疑ヒ或ハ信ズ蟬ノ蠐螬ト成孑孑（ボウフリ）ノ蚊ト成ルノ如キハ人常ニ見ル所ナレバ疑フ人百ニ一モナシ只人ノ信ズル所ハ目ノミ目ノ及バザル所ハ疑ヲマヌカレズマシテヤ彼人化テ物ト成ノ類ハ元ヨリ常ノ理ニアラネバ人ノ疑フ所ムベナラズヤ是夫子ノ怪ヲ語給ハザル故ニヤハアル

鬼神論 利集

然ラバ又夫子ノ怪ヲ語リ給ハザルハ其常ノ理ニ非ザルガ爲カ變化ノ理元ヨリ計ルベカラズ聖人ノ知モ又寔ニ知給フコト能ハザル爲カ易ニハ知萬物ニ周クシテ道天下ヲ濟フト見ヘ侍リ知既ニ萬物ニ普シイカデ物化ノ變ヲ知給ハザラン其雅ニ宣フ所ハ詩書執禮罕ニ宣フ所ハ利ト命ト仁ト語リ給ハザル所ハ怪力亂神トゾ見ヘタル其雅ニ宣フ所ハ匹夫匹婦モ共ニ知リ共ニ能スベキ所ニシテ罕ニ宣ヒ語リ給ハザル所ハ所謂今ノ急ニ非ズ後ニミヅカラ知リナン物也是聖人ノヨク心ヲ導キ給フ所ニシテ則是道天下ヲスクヒ給フ所成ベシ昔神禹ノ御時九州ノ金ヲ九牧ニシテ（九牧ハ九州ノ君ヲイフ）九ノ鼎ヲ鑄給ヒシニ山川奇怪百物ヲ圖シ給ヒ人ヲシテ神威ヲシリテ其害ニ合ザラシメテ其祥ヲ定メ給ヒシ夫子モ又季氏カ井ヲ穿ツトテ土ノ缶（ミチクレ）ノ中ニ羊有ケルヲ掘出シテ問マイラセシニ木石ノ怪ハ夔蝄蜽水ノ怪ハ龍罔象土ノ怪ハ羵羊ト答ヘ給ヒ又商羊舞テ大水ノ至ルベキコトヲ齊ノ使ニ答ヘ給ヒシ類ノ如キ是聖人ノ知給ハヌニハ非ズ（齊ニ一足ノ鳥舞コト有シテ景公使シテ夫子ニ問給ヒシニ商羊ト云モノニテ大水ノマサニ至ルベキノシルシノ由答給フト家語ニ出タリ）詩書執禮ノ常ニ宣ヒシガ如キニハ非ズ時有テ又語リ給ヒシコトモ有トゾ見ヘタル（猶下ニ見ヘタリ）山海神靈等ノ經搜神述靈等ノ記ノ如キ彼怪ヲ語ノ書世々ニ多ク或ハ疑ベク或ハ信ズベキ多ハ是彼山川奇怪ノ百物木石水土ノ怪ニ過ベカラス山深ク水暗ク草木生茂ル所ハ日月ノ光及バザレハ陰陽ノ氣ヲノヅカラ欝シテ百怪ヲ生ルコトハ所謂蒸テ菌ヲ生ルガ如シ（此語莊子ニ出ツ今モ雨濕ノ時ニ菌多ク生ルナリ）神禹是等ノ者ヲ圖シ給ヒシハ人其害ニアフマジキ爲ノ御計ヒナルニ人或ハコレラノ類ニ苦メラル丶事ハ思フニコレラヲ避ルコトヲシラズ自トレル所成ベシ晋ノ溫嶠ガ牛渚ニ舟留テ此所水深シテ水族ノ集ル所ナリト聞テ犀ヲ燃シ照ラスニサマ〴〵ノ怪シキ族水ニ浮出デ迯去リヌ其夜ノ夢ニ人來テ幽明道別ナリナンゾ思ハン相及バレントハ云テ恨ミテケリ深山大澤ハ彼ガ居ベキ所ナルヲ人行テ是ヲシメナンニハナドカタヽリヲナサヾラント張南軒ノ云ケン理リニトゾ覺ユレ是等ノ外又人家時有テアヤシムベキコト有ハ鬼怪ニ非レバ（人鬼ノ怪ナリ）

是又物怪ナリ物ノ怪也昔夫子ノ陳蔡ノ間ニクルシマセ給ヒシ時夜ニ入テ身長九尺許ノ男黒キ衣ニ高キ冠キタルガツトイリ來リテ叱ト云聲ヲビタヾシク伏シテサブラフ人々ヲ動カス子貢進ミ寄テコハ何者ゾト云所ヲ中ニヒツサゲテ脇ニハサム子路續テ大庭ニ引出シテ戰フニ勝得ン事叶フベカラズ夫子サシノゾキ見給フニ彼男ガツラガマチノ間ニ當テ時々ヒヾキアフ所アリト見ヘシカバ其顏ガマチカイ探リテ取テ引ヨセ飛上ツテ上ニナレト教給ヒケレバ子路心得テ組テ押伏セ是ヲ見テ大ナル鰻魚ノ九尺餘リナルニゾアリケル夫子見給ヒテ此者ナドカ來リケン吾聞物老ヌレバ群ノ精是ニヨル夫レ六畜ノ物ヨリ龜蛇魚鼈草木ノ類ニ至マデ久キ物ハ神皆ヨルヨツテヨク妖怪ヲナスサレバ是ヲ五酉ト云五酉トハ五行ノカタミナ其モノアリ酉ト云ハ老ル事也物老ル時ハ怪ヲナス是ヲ殺セバ則止夫ナンゾウレヘントゾ語リ給ヒシ捜神記衡波傳等ニ見ユ彼魚ヲシタヽメテ人々ニスヽメシ程ニ此程ノ飢ヲスクフ天ヨリノ賜物ニヤト後世ノ人ハ云ケリ去バ凡五行ノ氣ヲ受シ類老テハ皆怪ヲナスベキ者也獨物ノ老タルノミニモ限ラズ人ノ老タルモ妖ヲナス者ニヤ大原ノ王仁裕カ遠祖母三百餘歲計形小クナリモテ行程ニ僅ニ長三四尺ニ過ズ眼白ク瞳碧ニシテ飲食ノ物至テ少シキニ夜多ク眠ラズ常ニ一月餘ヲ隔テ忽ニ見ヘズ又六七日程ヲ經テ歸リ來ルイヅチ行ラント云コトヲモシラズ一ツノ柳筥ノカタク封ジタルノミゾ常ニスム所ニ有ケル我出ナン後モアイカマヘテ此箱ナ開キゾモシ開キテンニハ我ハ歸ラジモノヲト常ニ孫ドモヲ禁シニケリ其孫ノ中ニ極メテ頼母子ゲナキガ酒ニ醉テ彼出行タル跡ニ箱ヲ打開キテ見ニフシギナル鐵ノ篦子只一ツノミゾ有ケル兼テ云シ如ク其後終ニ來ラズト談淵ニハ侍リ思ニ是等ハ其人既ニ死シタルニ狐魅ヤウノ者其形ニ入替リタルニヤ古ノ神仙ノ老ズ死ズト聞ヘシハ多ハ道行者ノ妄誕ノ説也ト云ヘドモモシ其事アランニハ是モ又人妖ニテゾ有ベケレ本朝ノ昔人變シテ天狗ト云モノニ成ヌト云ヒ傳フ是等ハ鬼仙ト云シモノニハ非ズヤト云人モアレドイカヾ有ルベキ世ノ傳フル事ノ如クバ彼天狗ト云物ハ多クハ修驗ノ高僧ノナリタル也經ニ佛教ハ上ハ鬼宿ニ屬スト見ヘタリ鬼星暗ケレハ佛教ヲトロフ佛ハ則一靈鬼也ト云事モ侍レバ尚書故實身既ニ鬼教ヲ行ハン人ノ鬼ノ爲ニ攝セラルヽ事モ有ベシヤサレド唐土ノ書夫レニ似タ

ル事モ多カラズ唯唐ノ時蜀ノ國ニテ佛寺ニ大會ヲマフケシ日色々ノ見物有シガ其中ニ十歳ニナル童兒ノ一（ニハ女童トモアリ）竿ノ上ニテ能舞フアリケリ人多ク集リテ是ヲ見ルウチニ忽ニ鵰ノ如キモノ飛來リテ取テユキケリ見ル人大ニ驚キ迯散リヌ數日ノ後高キ塔ノ上ニ有シヲ其父母見付テ上リハシゴシテ取得タリシガタヾホレ〳〵トナリテ居ケリ程經テ人心地ニナリシ後佛寺ノ壁ニ繪カケル飛天夜叉ノ如キモノヽ爲ニイザナハレテ此塔ノ内ニイラントス日々ニクダモノヽ類飲食ノモノヲタビテ食ヒタリシト云ショシ尚書故實ニ見ヘ侍ル飛天夜叉ニ似タランニハ鬼ノ形ニテ翼生タルモノニヤ（佛書ニ夜叉ハ二ツノ角アリ形ノ色ハ黄ナルモノ也飛天夜叉ハヨク幻術ヲナス由見ヘタリ）所謂天狗ノフルマヒニ能ク似タリ是等ハ多クハ山林蒸氣ノ生ズル所彼木石ノ妖ナルベシト述異記ニ見タリ山都幽明錄ニ見ヘシ木客ナド云物其形モ物云モ全ク人ノ如クニシテ手足ノ爪鳥ノ如ク常ニ山深ク巖ケハシキ所ニ住テヨク變化シテ其形ヲ見ル事希ナリト云コレラ世ニ云天狗ニ似タリ山姥ト云ハ嶺南ノ山姑ニ似テ（河銖雜事ニ出タリ）山姫ト云ハ日南南丹等ノ地ノ野女野婆ニ似タリ（野女ハ博物志ニ野婆ハ齊東野語ニ見ヘタリ）河太郎ト云物ハ宋ノ徐積ガ廬川ノ河ノ邊リニテ取得タル小兒（江鄰幾ガ雜志ニ）白澤ノ圖ニ所謂封ノ類ニテ波小僧ト云物ハ南海ノ海人形チ僧ノ如クニシテ頗ル小キナリト云ニ似タリ（草李ニ）猫股ト云モノ金華ノ人ノ家ニ飼フ猫三年ノ後ヨク人ヲマドハスト云フ類ニテ（五雜俎ニ）犬神ト云物ハ尸子ノ地狼夏鼎志ノ賈（二書共ニ地中ノ犬也ト云）白澤圖ニ所謂木ノ精ヲ彭侯ト云形黑キ狗ノ如シナド云物ノ類トハ見ヘズ是犬ヲ殺シテ祭リ妖術ヲ行フコト日南蠻方ノ蠱毒ノコトニ似タリ（毒蠱ヲ飼フテ殺シテ其毒ヲ人ニアトフル也其外蠱毒ノ法其名尤多シ悉記スニイトマアラズ）此事ハ古ヘヨリモ有シニヤ周禮ニ庶民ハ毒蠱ヲ除事ヲ司ドレル由見ヘタリ今モ世ニ外法ヲ修スル人ノ妖狐ヲ役使スルナドモ皆僧道ノ邪術ニシテ巫蠱ノ類ナルベシ世ノヲロカニクラキ多クハ狐魁ヲイツキ祭リテ神トナシ又イヅレノ御神ハ御形蟒蛇ニテマシマスナド云淺マシキヤ昔狐ヲイツキ祭レル社ノ邊ニテ狐ヲ射殺セシ者アリ彼社司是ヲ公ニ訴ヘシニ沙汰サマ〳〵也シ大納言經信ノ卿白龍ノ魚服セル豫苴ガ密網ニカヽレリトバカリ言テ座ヲ立玉ヒシヲイミジキ事ニ申スメリ是ハ昔白龍ノ淵ニクダリテ魚ノ姿ト變テ浮ミ遊ビシガ豫苴ト云モノヽ爲メニ射ラレテ此コトヲ天帝ニ訴ヘ

シニ魚ハモト射ラルベキ物也豫苴何ノ罪カ有ト云事伍子胥カ呉王ヲ諫メ進ラセシ言葉ニ出ヅ此事ヲ經信ノ卿ヒキ玉ヒシナルベシ説苑楚辭ノ注等ニ見ヘシ所豫苴ガ爲ニ射ラルヽトアリアミセラル、トハ見ヘズカノ卿ハ宏才ノ人也思フニヨリ所有ベシ譬ヘイカナル神明ニテマシマストモ狐蛇ノ形トナリ玉ヒナンニハ是則狐蛇ニコソ有ベケレ何ノ尊キコトノ有ベキマシテ元ヨリ妖狐毒蛇ノ人ヲマドハシ人ヲソコナハンヲイツキ祭ル理ヤ有ベキ是等ノ祭ヲ古ハ淫祀ト云テ尤國ノ禁ニテゾ有ケルスベテ先王ノ祀典ニ非ズシテ我祭ルベカラザルノ神ヲ祭ルモノハ淫祀也淫祀ハ福ナシトモ侍ルメリ曲禮ニ季氏ガ泰山ニ旅セシヲ夫子ノソシリ玉ヒケン此理ニコソ有ケレ江淮ヨリ南ハ古ヘヨリ淫祀多カリ唐ノ狄梁公其淫祀一千七百區ヲ毀タレテ只夏ノ禹伍子胥ノ二廟ヲノミ殘セリ此事唐書ノ本傳トハ少シキ異アレド程朱ノ説ニヨリテカクハシルシ侍リヌソレモ猶伍子胥カ廟ヲ止メラレシハ然ルベカラズ伍子胥ヲバ呉國ノ地ニコソ祭ルベケレ楚ノ國ノ地ニテ祭ルベカラズト伊川ノ程子ハ論ゼラレケリ然ハアレド是等ノ淫祀祈禱必ズ靈應有ルコトハイカニゾヤ其神ヨク靈ナルニハアラズ彼イツキ祭ル人ノ精靈集テ靈アル也鮑君草鞋大王ノ如キ是也昔汝南ノ人田ノ中ニ網ヲモフケテ麞ヲトラントスヤガテ麞カヽリケレド其網ノ主未ダ來ラズ道ユク人アルガ麞ヲバ盗テケリサリトモ人ノ取得タラン物ヲアヤナク取ナンモ罪深シト思テ其麞ノカハリニ携ヘ持シ鮑魚一ツヲ網ノ中ニ是ヲ入テ行サル去程ニ彼網ノ主來テ鮑魚ノアミニアルヲ見テ此モノ爰ニ有ベシトモ覺ヘズイカサマニモ現神ノアラハレサセ玉フニゾアメレト大キニアヤシム村ノ者ドモ皆集リテ頓テ小社ヲ建テイレ進ラセ鮑君ト名付進ラセ村ノ者ドモヤマフタマ〳〵愈ルコトアレバ此御神ノ惠ニヨリシ所也トテイツキ祭リシ程ニ御社大ニ作リ出シテ賽ノ神樂ゾ音タユルコトナク誠ニ目出度御神ニゾ有ケル七八年程經テ彼鮑魚ノ主此御神ノ邊リ過テイカナル御神ノカクハアラハレサセ玉フラント問ニヲノガ止メ置シ鮑魚也ケリアナ淺マシキソレハミヅカラガ止メ置シ物ヲト云ケレバ彼靈驗ノコトドモ忽ニ止ケリ抱朴子ニ又廬浦ト云所ヲ過シ人ノ何トナク嚢沓ヲトリテ樹ノ枝ニカケテ過ル跡ヨリ來ル人又嚢沓ヲ始メ過シ人ノ如クニカク爰ヲ過ル人皆々カクノ如クスル程ニ後ニハ嚢沓ノ數幾百千ト云コトヲシラズ何モノヽタハムレニ草鞋大王ト

名ヲ題シテ後ニハ終ニ御社ヲ建テイツキ祭ル程ニ靈驗ハナハダアラハル、彼ハジメ藁沓ヲカケタリシ人爰ヲ過ルニ其ヨシヲ聞テヲカシキコトニ思フ誠ハ此所フルツハモノ、死セシ其魂ノヨリシニゾ有ケル五雜俎ニ

鬼神論 貞集

老子ノ道ヲ以テ世ヲ治ル時ハ其鬼神ナラズトイヘルコト此等ノ事ヲヤ云ベキ南軒張氏ノ一ツノ淫祠ヲコボタレシニ其神ニ牒スル文ヲカキテヒトリノ司戸ヲ其使ニ差遣サル（司戸ハ下司ノ官ノ名ナリ）此司戸其牒ヲウクルニ兩脚忽ニ軟テケリサレドモ其輿ニタスケ乗セラレテユク彼祠ニ入テ其神ノ像ヲトリテ打ワルニ其腹ノ中ニ合アリ（世ニ香箱ノゴトキモノ也）合中ニ合アルコト數重ノ後ニ小キ合ノ中ヨリ大ナル白キ蟲ノハシリ出ルヲ取テ油ニ入テ煎殺シツ彼蟲ノ走リ出ルヲ見テ兩脚ノナヘシガタチドコロニ愈テケリ是類又世ニ多シ始神佛ノ像ヲ造リ出スニ僧道巫祝ノ類蟲蛇ノ類ノ其性究テ靈ナルヲトリテ像ノ中ニ籠置テ其靈ヲ資ルコト有モノ也思フニ彼司戸ガ兩脚ノ軟シハフカク彼神ヲヲソルヽ心ノ致ス所ナリ蟲ヲ見ルニ及テ寔ニ神明ニハイマサヾリシト思フ心付テゾ（シニヨリイ）立所ニハ愈タル（・也イ）・サレバ紫陽ノ朱子ノコレラノコトヲ論ジテスベカラク民ヲシテ是淫祀也ト云理ヲ能信ゼシメ疑ノ心ナカラン後ニコソ其祠ヲモ毀ツベケレサラズハ彼民水旱ニモ疾疫ニモ此神ニヨリテ祈リ求ル忽チニコボチ捨ラレタランニハ敬ヒト恨ムルトノ心猶深カルベキ昔郷里ノ人深ク尊シ土ヲ以作レル大佛ノ像有シヲアル人其首ヲ切落シケリ所ノ人ドモ集テ泣ク忽ニ彼像ノ首ヨリ舎利多ク出デケリ土ニ爭カ此物ヲ生ズベキ只是人ノ心ノ致所也トゾイヘリケル理リニコソ覺ユレ此等淫祀ノ鬼神ノ外ニ靈驗殊ニアラハルヽハ多クハ忠臣義士ノ死テ其靈魂未ダ亡ビ散セザル物ニテ禮ノ所レ謂法民ニ施シ死ヲ以テ事ヲ務メ勞ヲ以テ國ヲ定メ能ク大ナル災ヲフセギヨク大ナル患ヲフセギシ等ノ人ニテ其鄕國ニシテマサニ祭ベキ所ノ正祀ナルサラバ今佛ニツカフルモ又淫祀トヤ云ベキ彼佛ハ西域ノ化人也我國ニシテハヲノヅカラ天地開ケ始リ天照太神ノ御末ハ豐葦原ノ中津國シロシメシ玉ヒシヨリ此カタ世々ニイツキ祭ラシメ玉ヒシ御神悉ク祀典ニ侍リ（神名帳等ニ見ヘタリ）他ノ國ノ神祭ルベカラザルノ理リニヤ今モ伊勢ニハ僧尼ヲイムコトニゾ侍ルサレド古ヘヨリ大學寮ヲ始テ國々ニモ先聖先師ヲ祭ラルヽノ例ニヨラバ其法ヲ奉ズル

僧尼ノ佛ニ事ン事ハアシカラジヨノ常ノ人々ノツカフルコソ心得ラレネ思フニ是多クハ祈禱ノ事ニヨレル物ニヤ其鬼ニ非ズシテ祭ルハ諂也義ヲ見テセザルハ勇無トモ侍ル彼民ノ義ヲ求ム鬼神ヲ敬テ遠ザクルト侍ルト彼是通シテ見ンニ此マドヒトケヌベシヲノガ行ノヨカラヌ自ラモアシシト思ヘバコソイカニモシテ此罪免レント思フ心ヨリ佛ニハツカフレヲノガ行ヨカラヌハ民ノ義ヲ勤ル事無ガ故也其過ヲ悟リテモ速ニ改ルコトアタハヌハ勇無クシテ義ヲ見テモセザルモノ也カクシテモ又佛ノ悲願ニヨリ六趣ノ報應ヲモ免カレ六趣ハ六道也九品ノ快樂ヲ受ナント思ガ故ニ我マサニ祭ベキ祖考ノ神ヨリモ猶佛ニツカフル禮ヲ盡シヌルハ是我親ニ孝ナラズシテ權勢ノ人々ニ媚諂テ身ヲモ家ヲモ立ントスル人ニ似タルベシ忠臣ハ必ズ孝子ノ門ニ求ムトモ見ヘタリ彼心ヲ以テ君ニツカヘンニ君明カナランニハ不孝ノ人夙ニ夜ニ其勞ヲカサヌトモイカデ忠有ベシトハ見玉フベキ佛ハモト西方ノ化人也其神モシ靈アラバイカデ不善ノ人ニ其感應ハ有ベキ世ノ人常ノ言葉ニ積善ノ家ニハ餘慶有積惡ノ家ニハ餘殃アリトハ侍レドヨシト見シ人ノ福ニアフハ罕ニヨカラヌトキク人ノ禍ヲ受ルハ多カリサレバ佛ノ教ニ三世ノ事ヲ說玉ヘルコトニ勝レタレヨキ人ノ不幸ナルハ前世ノ惡報也此債ヲツグノヒテンニハ後世ハ必ズ善報ヲ受ベキ也惡キ人モ前世ノ修善ニヨリテコソ今ノ世ニハ幸ハ多ケレ彼善報ノ既ニ盡ナン後ハ後世必惡報ニ墮ヌベキモノナリトゾイフナル是小キナルヲ知テ大ナルヲ忘レタルノ說成ベキ福善禍淫ノ事ハ是天ノヲノヅカラナル理ナレバ是モイヒカレモ云是ハ聖人彼ハ佛也只其云所ノ異ナルニカレハ妄ニシテ是ハ眞ナルゾ異ナル其理ハ同キニ似タリサレバ易ニモ善不善共ニ積トハ見ヘタリ家トハ上ハ父祖ヨリ下ハ子孫ニ至テ中ハ己ガ身傍ハ伯叔兄弟共ニ通ジテ云ル名ナルベキ然レバ彼ガ云所ハ三世ト云トモ誠ハ只ヲノガ身一人也聖人ノ宣フ所ハ上中下ニ通ジテ千百世トイフトモ唯一ツ家ニテゾアル古ヨリ家ヲモ國ヲモ興セシ人其先多クハ忠信ノ人也又ヨキ人ノ子孫衰フル事未ダ聞ズ世ノ人ノ知小サキニ慮リ近クテ我百年ノ程見ル內ノ事ノミヲ以テ彼天命ヲ疑フコソ薄情ケレ積ト宣ルコト深キ心得有ベシヤ譬バヲノレ僅ニ一二ノ大善ヲナサンハ其善イカニ大ナリトモ

積ム事ナカランニハ福ヲ致スニ及ベカラズ善小ナルヲ以テセザルコトナカレト侍レバ唯善ヲモ積テコソ我徳ヲモナシツベク天福ヲモ致シヌベケレヲノガ身ヨリ上ツカタハ彼所謂前世ニテ下ツカタハ所謂後世也ヲノガ身イカニ善アリトモ祖先ノ世ニ惡ヲ積ナンニハ其ナゴリ猶思フベキサレバコソ餘レル殃トハ宣ヒタレヨカラヌ人ノ福有モ猶カクノ如シ只是祖先ノツミケン善ノナゴリナルベキ人多キ時ハ天ニカツ天定リテ人ニ勝トモ侍リ彼ヨカラヌ人ハ所謂小人也小人ハ必才アリ才有ガ故ニ能世ニコビ能人ニ諂フ人ヲシル事ハ堯ダニモカタンジ給フト云マシテ後ノ人ヲヤ人シレル人ハマレ也人シラザル人ハ多シ彼多クシラザル人ノカレガ爲ニアザムカレテナニガシハ賢也ナニガシハ能有ト云程ニ時ニアヒ世ニ用ラル丶コトヲ得タリ是人多クシテ天ニカツモヽノ也所謂百年ニシテ公議定リテハツイニ又人ヲ欺クベカラズ（人ノイケル時ハ善ニツケ惡ニツケホメソシル人ノ言葉信ジ難ク多ハ其禮ニヒカル丶所有ル故也死シテ百年ノ後ニコソ公議ハ定ル物也ト云）マシテヤソレラヨカラヌ人ノ子孫サカ行コトイツノ世ニカハ有リシ是天定リテ人ニカツモノ也サラバ彼積善ノ家ニ餘慶アリ積不善ノ家ニ餘殃有ト宣ヒシコトナニカアヤマツベキ彼佛ノ敎ハ家ヲ出ルノ法也父母ヲモハナレ妻子ヲモ捨テ求ベキ道也故ニ凡ノコト皆ヲノガ身一ツヲ利セントスル也シカハアレド善ヲナシテ殃ニアヒ惡ヲナシテ福ヲ受ルコト世ニ多キ故ニ彼前世後世ノ説ヲ立テ善ヲ修セシムル敎トハスル者也彼善惡ノ報ハ人ノ世ニアリ彼云所ノ如ク既ニ鬼ト成ニ及テ始テ閻羅十王等ノ獄ヲワカツ事ヲ待ツノミニハアラズ漢唐ヨリ此カタ世々ノ記セル史傳ヲ見ルニ西戎ノ人ハ其性最忍ベリ（世ノ諺ニムゴキト云類也）古人ノ所レ謂鬼方ノ地ナレバ其俗又鬼ヲ信ズ性忍ナルモノハ父母ノナサケヲモシラズヲノガ利ニ趣クニ至テハ爭カ父祖ヲモ辱シメ子孫ヲモ禍センコトヲアハレトハ思フベキ鬼ヲ信ズルモノハ目ニモ見ヘズ耳ニモ聞ヘザルモノヲヲソル彼佛ノ始テ敎ヲマフケラレシ只其俗ニ依テミチビキケル者ナルベシ（三世因果六道輪廻等ノ説ヲタテシヲイフ）サレバ其妄ノ如キハ仁也其説ノ如キハ妄ナリアル人ノ是ハ是方便ノ説ニシテ則衆生ヲ度センガ爲ナリト云シニ誠ヲ以テ人ヲ感ゼシメンコト猶難シマシテ爭カ妄ヲ用ユルコトヲ得ベキト程子ノ云ケン正シク大ナル辭ナルベキ譬バ醫ノ庸ナルガ病ヲ治ルニ其志ヒタ

スラニ彼イタミヲ醫セント思ニアリ良醫ノ如キハシカハアラズ藥ハ元毒物ナリト云コトヲ能シレル故ニ愈ナン後ニ此藥ノ毒殘リ止リテ舊疾既ニ愈ルコトヲ得ルトモ新病又發スル事モアリヌベキヲ思ヒハカリテ其方ヲ按事タヤスカラズ其驗ヲ得ルガ如キニハカノ拙キガアタヘシ藥ノタチ所ニ功有ニ及バヌニ似タレド其病愈ルニ及テハ必外ノ患アラズ醫ノ常ナルガイカニモシテ其病ヲ醫セント思フ心ハ仁ニ似タレド其術拙キガ故ニ病ヲバ立所ニ治シヌ此藥ノ毒久シクシテ發センコトヲシラズ其毒發スルニ及テハ猶是アラタニ受シ病トハ思フ醫ノツネナルダニシラズマシテ其病メル家ヲヤ彼藥ノ毒既ニ發シケリトハ死ニイタレドモサトラズ誠ニカナシキヤ彼佛ノ敎モイカニモシテ愚俗ヲミチビキテ善ヲ修セシメントノ志ニハアレド其敎モト夷ノ敎ニテ君臣モナク父子モナクマシテ夫婦兄弟ノ敎モナケレバ唯身一ヲ利セントノミ思フ心ヨリ善ヲ行ントスレバ惡イヨ〳〵ヤマズサレバ古ヨリ佛ニ佞スルノ人大惡アル人ニ非ザレバ必ズ陰惡アルノ人也シカラザレバ所レ謂賢知ノ過タルニテカクレタルヲ求メアヤシキヲ行フモノ也（中庸ニ見）是等ハ知ノ過ギ行ノスギテ常ノ道ヲイトヒシモノ也ソレヲ譬ルニ常ノ飲食ヲ節ニシテ常ノ起居ヲ時ニスル事ハ聖人ノ生ヲ養ヒ給フ常ノ道ナルヲ此等ハ常ノ養也ト思ヒステ、日々ニ藥品ヲノミ服スルガ如シ古ヘヨリ服藥ノ人忽其毒發シテ命ヲヲトセシ上ハ天子ヨリ下ハ士庶ニ及マデイクラト云數ヲ知ズ世ノ心疾アリテモノグルハシキ振廻ヲスル人多ク彼常ヲイトフノ人ナリ聖人ノ敎ハシカハアラズ菽粟布帛ノ日々ニ用ユベキガゴトク孝弟忠信ノ外ニ求ズ是詩書執禮ノゴトキハ雅ニ宣フ所ニシテ彼怪力亂神ノ如キハ語リ給ハザルユヘナランカモ

鬼神論 大尾

孫武兵法擇

白石公經世之學、博大淵奥、並臻其極、平生述作二三百種、朝章國故、治亂時變、以至器用之微細、夷蠻之遼邈、蓋莫不窮究焉、且其有韻之文、鏗鏗鏘鏘、奏金石、舞鳳凰、以鳴太平之盛矣、是天下所倶知也、至其有孫子兵法擇佳撰、則人或不知、豈爲他美所揜而然耶、余少嗜孫之書、欲親覩其人接其謦欬、一切疏解、靡斥不觀、唯取之白本、把玩不已、順其文勢、按其語脈、鑽研有年矣、迨作讀本、始搜索羣註、獲公之兵法擇三卷、其書採摘衆說、斷以己意、字句章法未及指出、雖眉目有所不甚淸、芟除葛藤、大義既了了、然其佗魏武以降諸注家、不無裨益、然率蕪雜拘攣、屋下架屋、使人厭倦欲掩卷矣、譬之君臣、諸家大抵錮塞主之聰明、公則開發壅蔽者耳、公在當時、奮其全力、以備顧問、而參大政、卓爲名臣、此書有無不足以輕重其人、則區區緒餘而已、公一出、其緒餘既駕千載諸家之上矣、莊叟稱姑射神人之德曰、其塵垢粃糠、猶能陶鑄堯舜、豈謂此類乎、頃有謂是托名之書非眞筆者、時几上偶有一書、記荆徐欲涸、洞庭以爲田、人皆有難色、劉貢父獨曰、傍近別開一洞庭、引水而可、余取以示客而答之曰、子之言然哉、天地間別有一白石而作、其人笑而去、

右嶺南保岡先生、嘗讀此書所作、今活字刷印、乞以當序文、

萬延紀元孟秋　門人有泉正之謹記

孫武兵法擇序

孫子兵法、魏武帝所註者、司馬遷稱孫武十三篇是已、而班固藝文志乃言、孫子兵法八十二篇、杜牧以爲武所著書數十萬言、魏武削其繁剩、筆其精切、凡十三篇成一篇、後人因謂、孫子亦有未盡之書、或謂其文辭完全而貫穿、非筆削者也、蓋秦滅先王典籍、焚詩書百家之編、至漢孝惠時、除挾書之律、孝武始置太史、司馬談父子世居厥職、時天下計書、皆先上太史、副上丞相、開獻書之路、置寫書之官、遺文古事、靡不畢臻〔集イ〕、史遷繼其父志、乃抽石室金匱、以成一家之書、而於孫武兵法而言其十三篇、此其所謂吳王闔廬嘗觀〔視イ〕之者也、孝成之世、祕府之書頗有散亡、乃使求遺書於天下、分命劉向等校焉、而任宏校兵書、每一篇就、向輒修其篇目、錄其指意、向卒後、哀帝復使向子歆卒父之業、歆遂總括羣書、著爲七略、王莽之末、又被焚燒、世祖中興、又集新書、班固傳毅典掌焉、幷依七略而爲書部、固又編之、以爲藝文志、繇是觀之、漢書所著孫子八十二篇、乃倂任宏所校遺書而稱焉耳、魏武獨取十三篇、乃自爲註曰、吾讀兵書、戰策多矣、孫武深矣、自晉氏亂中原板蕩、渠閣文藉靡有孑遺、而後世所傳孫子兵法、與漢志不合、牧意以謂、魏武所定、而非孫武之全書、予嘗觀其書、與管子越語相出入者頗多、蓋孫武齊人、而學管子兵法焉、又其爲吳王所稱十三篇者無疑也、自魏武後、世所傳孫子註亦爲不少、宋元豐中集次武經之書、以孫子爲首、天下之士、教習兵法、乃自孫子始、而世之議者以謂、武書所以舍正而鑿奇、背義依詐者、固無足取也、然武之所論令民與上同意、修道而保法、不戰而屈人之兵、以全爭於天下、若夫利害之權、奇世之變、攻守圍禦之術、一皆以爲末事也、考其辭、雖未盡粹、要其歸、與仁人之兵不合者鮮矣、昔者趙括言兵事、天下莫能當、藺相如曰、括徒能讀其父書傳、不知合其變也、兵書豈易讀哉、後之讀孫子者、率不求之於本、而索之於末、雖有得焉、而不勝其失也、故武之本旨、爲衆說之所蔽、闇而不明、欝而不發、遂使其書以爲一切變詐奇詭之說耳、世之論兵、不復知夫仁人之兵王者之志也、其流之弊以到于今、吾竊懼焉、乃敢會衆說、因校其可見者、以俟夫講武者考而擇焉、予豈好論兵者哉、蓋有不得已也、享保壬寅七月戊午、紫陽源堪序、

孫武兵法擇卷第一

計篇　近本作二始計一

張氏曰、管子曰、計先定二於內一、而後兵出レ境、故用レ兵之道、以レ計爲レ首也、

孫子曰、兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不レ可レ不レ察也、

杜氏牧曰、傳曰、國之大事在二祀與一レ戎、春秋左氏傳、成三年劉康公語、國之存亡、人之死生、皆由二於兵一、故須二審察一也、凡事有下可二憑藉一者上、謂二之地一、形篇云、不敗之地、義亦同、道言二其所一レ由也、

故經レ之以二五事一、校レ之以レ計、而索二其情一、校與レ較通、古弔切、索色窄切、

經常也、五事卽下所レ謂五者也、言三其事以爲二兵之大經一也、

王氏曰、兵之大經不レ出レ道、天地將法耳、

管子曰、五事五經也、意亦相同、校比校也、所レ謂知レ彼知レ己是也、

謀攻篇、知レ彼知レ己、百戰不レ殆、地勢篇、知レ彼知レ己、戰乃不レ殆、

計算也、索求也、情者兵之情也、言苟非レ有レ用レ計、則彼己之情不レ可二得而知一也、所レ謂先知者必取二於人一、知二敵之情一、亦此意也、

用閒篇、明君賢將所三以動而勝レ人成レ功出二於衆一者先知也、先知者、不レ可レ取二於鬼神一、不レ可レ象二於事一、不レ可レ驗二於度一、必取レ人知二敵之情一者也、

一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法、

杜氏曰、此之謂二五事一也、

道者令三民與レ上同二意也、故可二以與レ之死一、可二以與レ之生一、而不レ畏レ危、孟氏曰、一作二人不レ疑、一作二人不レ危、○近本意下無二也故及二以字一、而作二不レ畏レ危也一、

曹公操、卽魏武帝也、曰、危者危疑也、民與レ上同レ意、卽所レ謂上下同レ欲也、

謀攻篇、上下同レ欲者勝、

死生同致、無レ所二危懼一、以明二民與一レ上同レ意之意一也、

○秦誓曰、三千惟一心、言二君臣一レ德也、孟子曰、民親二其上一、死二其長一矣、言三君行二仁政一也、孫武所三以使二民與一レ上同レ意、未レ知二其術何如一也、蓋其所レ謂視レ卒如二嬰兒一、如二愛子一、乃是所三以得二其死力一

者、
地形篇、視レ卒如二嬰兒一、故可三與レ之赴二深谿一、視レ卒如二愛子一、故可二與レ之俱死一、
張氏預以謂士卒感レ恩、死生存亡、與レ上同レ之、決然無二疑懼一、卽得レ之矣、兵之爲レ道、亦其與レ仁同功、猶且如レ此、而況於二仁人之兵一乎、
荀子曰、仁人之兵、百將一レ心、三軍同レ力、臣之於レ君也、下之於レ上也、若二子之事レ父、弟之事一レ兄、若下手臂之扞二頭目一而覆中胸腹上也、

天者、陰陽寒暑時制也、
杜氏曰、陰陽者、五行刑德向背之類、寒暑時氣節制、其行止也、蓋陰陽所レ該者多、如二日月星辰風雲氣象一、因制二其勝一者、亦皆是也、
孫武言、天時者、唯有二天燥風起一、以レ火佐レ攻耳、吳子則有二疾風大寒盛暑炎熱陰雨風飈一、因制二其勝一者、皆所レ謂時制也、按、尉繚子有二天官篇一、李筌太白陰經有二天無陰陽篇一、後人因謂、陰陽者非二孤虛向背之謂一也、夫禨祥之事、君子不レ取レ之矣、然天官時日以助二軍勝一、蓋有レ之矣、顧二其制レ之之術何如一耳、故李靖以謂、兵者詭道也、託レ之以二陰陽術數一、則使レ貪使レ愚、茲不レ可レ廢也、

地者、遠近險易廣狹死生也、
說詳二見地形九地及行軍等篇一、

將者、智信仁勇嚴也、
智知也、信實也、仁愛也、勇敢也、嚴威也、何氏未レ詳二其名一、曰、全二此五才一、將之體也、〇孫武論レ將、以レ智爲レ始、信次レ之、仁次レ之、勇次レ之、嚴次レ之、讀者能得二其意一、則於二爲レ將之道一、思過レ半矣、
曹公曰、將宜二五德備一也、王氏張氏皆依二其義一、然孫武卽言、將孰有レ能、能才也、何氏以爲レ才是也、賈氏曰、五者兼備、各適二其用一、則可レ爲二將帥一、亦謂二才之用一也、杜氏曰、先王之道、以レ仁爲レ首、兵家者流以レ智爲レ先、未レ可也、周禮大司徒六德曰二知仁聖義忠和一、孔子曰、知者不レ惑、仁者不レ憂、勇者不レ懼、又曰、知仁勇三者、天下之達德也、古者聖賢之言、未三必不二用レ智爲レ先也、孫武之書、知レ彼知レ己知レ天知レ地、利害之權、奇正之變、所三以制二其勝一、莫二非レ用レ智者一也、而其所レ謂仁者、慈愛恩惠之謂、不二止用レ智爲レ先、亦所二以次レ信也、申包胥曰、夫戰智爲レ始、仁次レ之、勇次レ之、毋

穰苴曰、凡戰智也、蓋古者兵家之說、類皆如レ此、且如二舊說一、或謂信能賞罰、或謂信者號令一也、亦未レ可也、孫武之言、乃繼二五事一曰、將孰有レ能、又曰、法令孰行、賞罰孰明、蓋其所レ謂能者、智信仁勇嚴、五者兼備、各適二其用一也、若依二舊說一、則將之有レ能、卽是法令既行也、卽是賞罰既行也、孫武所レ謂信者、非二賞罰必信、號令必信之謂一也、信者誠也實也、其信孚二於民一、所三以民皆相信、而倚二伏之一也、夫將無レ信、則衆疑、衆疑則事不レ立、故司馬法曰、信見レ信、又曰、凡戰貴レ信惡レ疑、吳子曰、三軍之災、生二於狐疑一、此其論レ兵所三以尙二其信一也、

法者、曲制官道主用也、

曲古與レ局通、曲制謂二分部有一レ制、管子曰、曲制時擧、蓋是齊語、孫武齊人、其言亦然、

局卽與レ曲同、左氏傳離レ局姦也、註云、遠二其部曲一爲二離局一、是部曲之曲、亦作レ局、淮南子人間篇、陽局注云、鄙部曲是也、爾雅局分也、註云、謂二分部一、曲禮左右有レ局、各司二其局一、註云、局部分也、疏云、左右有レ局者、軍之在二左右一、各有二部分一、不二相濫一也、各司二其局一者、軍行須二監領一、故主帥部分、各所司部分也、韻會部曲、引二漢李廣傳註一曰、續漢書云、大將軍營五部、部有二校尉一人一、部下有レ曲、曲有二軍候一人一、或以二漢部曲之制一、釋二孫子書一者非也、凡解二古書一、當レ據二古義一耳、餘亦倣レ此、

官道、鶡冠子作二官備一、未レ知二孰是一、梅氏堯臣曰、曲制、部曲隊伍分畫、必有レ制也、官道、裨校首長統率、必有レ道也、主用、主二軍之資糧一、百物必有二用度一也、

曲制者、前後中軍各有二分部一、而行陣營壁旌旗金鼓之屬、皆有二其節制一也、官道者、自二將帥偏裨一以至二什伍厮養一、皆有二其職守一也、主用者、征戰之用、糧食爲レ本、甲兵凡百器械次レ之、陸用二車馬一、水用二舟楫一、及晝多二旌旗一、夜多二火鼓一之類、亦皆有二其爲レ主也、凡軍必有二部曲一、部曲各有二官司一、而械用亦有レ所レ主、是其言之序也、

凡此五者、將莫レ不レ聞、知レ之者勝、不レ知者不レ勝、

此結二上文一言、凡此五者、世將莫レ有レ不レ聞、然其實未三必有二能知レ之者一也、唯其知レ之與レ否、則兵之勝敗決矣、

故校レ之以レ計、而索二其情一、

此以下言二校計索情之事一也、
曰、主孰有レ道、
主君也、孰誰也、道卽上文所レ謂、令二民與一レ上同レ意者也、
李卓吾曰、此篇自爲レ君言、故曰、主孰有レ道、其實將道亦如レ是而已矣、
將孰有レ能、
將帥也、能才也、杜氏曰、有レ能者、上所レ謂智信仁勇嚴也、
天地孰得、
杜氏曰、天者、上所レ謂陰陽寒暑時制也、地者、上所レ謂遠近險易廣狹死生也、
法令孰行、
法令者法制禁令也、行者所レ謂令素行者、與レ衆相得也、行軍篇吳起曰、發レ號布レ令而人樂レ聞、亦謂レ之也、
曹公曰、設而不レ犯、犯而必誅、張氏亦因二其說一、皆非也、誅是罰之大者耳、法令賞罰、孫武已自分而言レ之、不レ可二相混一、王氏以謂孰能法明令便、人聽而從、卽得レ之矣、
兵衆孰强、
强壯也、吳起曰、師徒之衆、兵甲之精、是也、
孫武言レ强、有二以レ形而言者一、有二以レ氣而言者一、有二以レ國而言者一、兵衆之强、猶二所レ謂勝レ敵益レ强之强一也、
士卒孰練、
練精熟也、吳起曰、夫人常死二其所レ不レ能、敗二其所一レ不レ便、故用レ兵之法、敎戒爲レ先、又曰、圓而方レ之、坐而起レ之、行而止レ之、左而右レ之、前而後レ之、分而合レ之、結而解レ之、每變皆習、乃授二其兵一、此言二其敎練之法一也、
吳起前說、蓋是述下孔子以二不レ敎民一戰、是謂レ棄之義上也、司馬法曰、凡戰非二陣之難一、使二人可レ陣難、非下使二人可レ陣難上、使二人可レ用難、敎レ戰之法、豈易レ言哉、讀者不レ可レ不レ察也、
賞罰孰明、
賞二有功一、罰二有罪一也、管子曰、明賞不レ費、明刑不レ暴、賞罰明、則德之至(者イ)也、
孫武書、言レ賞者五、言レ罰者三、且其言曰、卒未二親附一而罰レ之、則不レ服、不レ服則難レ用也、卒已親附、而罰不レ行レ之、則不レ可レ用也、又曰、施二無レ法

之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人、其用賞意、亦可見矣、張氏曰、當賞者、雖仇怨必錄、當罰者、雖父子不舍、蓋非其本旨矣、

吾以此知勝負矣、

通結上文而言、知彼知己、則先知其勝負矣、

○夫五事者、兵之大經也、校之八者亦不出五事耳、而兵衆强、士卒練、賞罰明、合而言之則是法也、參之伍之、錯綜其數、以索其情、所以深察之也、舊有七計之說者、此其校之、以并天地二者而言故也、

曹公曰、五事七計、求彼此之情、諸家遂因其說也、

秦誓曰、同力度德、同德度義、蓋王者之兵、亦有所校、而其所校則與此不同矣、

度揆度也、力衆寡也、德善德也、義曲直也、先儒以謂、同力度德、同德度義意、古者兵志之詞、武王擧以明伐商之必克也、

將聽吾計、用之必勝留之、將不聽吾計、用之必敗去之、

聽從也、言計之利不利、兵之勝敗必矣、言之聽不聽、將之去留決矣、蓋夫國之安危存亡、士之去就進退、事之關係、雖小大之殊、而所以審其幾者一也、此承篇首不可不察之意而言凡爲將之道、以起下文也、

將卽指上文莫不聞之將而言耳、此節語意與孟子有官守者、不得其職則去、有言責者、不得其言則去同、蓋言爲將之道也、兵之勝敗、國之安危、皆關乎吾計之聽與不聽矣、豈翅不得其職與言而已哉、白起王翦之徒、不聽吾計、皆稱病而辭、況不爲白起王翦者乎、舊說以謂、孫武以書干吳王闔閭、故首篇以此辭動之、庶必見用、據史孫武齊人也、以兵法見吳王闔廬、廬曰、子之十三篇、吾盡觀之矣、卒以爲將、初闔廬立三年、乃興師、與伍子胥伯嚭伐楚拔舒、因欲至郢、將軍孫武曰、民勞未可、且待之、乃歸、于時武既爲將軍、武著是書、乃在闔廬未立之前耳、後六年、闔廬謂子胥孫武曰、始子言、郢未可入、今果何如、二子對曰、楚將囊瓦貪、而唐蔡皆怨之、王必欲大伐

之、必先得唐蔡乃可、闔廬聽之、悉興師與唐蔡伐楚、五戰遂至郢、既而闔廬久留楚不歸、明年三月、越聞吳王之在郢、乃伐吳、吳使別將擊越、七月、秦救楚擊吳、大敗之、九月、闔廬弟夫概王乃亡歸、自立爲王、秦凡五戰、皆敗吳師、闔廬遂大敗而還、而史稱吳破楚入郢、孫武與有力焉、然吳師之敗、乃是武之所謂雖有智者、不能善其後者、而史乃繼之曰、孫武既死、由是觀之、闔廬之所爲、武不能盡致其力、此其所謂王徒好其言、不能用其賢者也、蓋闔廬歸吳之後、武乃致其事、歸于齊而死、實踐其平昔之言耳、孫臏、武之孫、而生於阿鄄之間、亦可徵矣、然左氏穀梁氏詳伍胥之事、而不及孫武、司馬遷所載、其事亦略、非無所可疑也、舊說又謂、闔廬行軍用師、多自爲將、故不言主、而言將、亦非也、闔廬立三年、乃與師伐楚、先是未有行軍用師事也、但其爲公子與楚戰于長岸事、則見于春秋傳矣、或曰、將行也、或曰將辭也、並皆非其義也、

計利以聽、乃爲之勢、以佐其外、

計利、計之有利也、以聽聽其計也、乃繼事之辭、勢解見下文、佐輔也、其外所計之外也、言吾計有利、且聽之、則當復爲其勢、以助成其勝於所計之外也、

曹公曰、常法之外也、李氏杜氏皆從其說、義亦通、經之之事、校之之計、凡此二者、兵之大經大法、所謂常法也、因利而制權、應敵而取勝、此其在乎常法之外者也、賈氏曰、外者、或傍攻、或後躡、以佐正陣、梅氏曰、定計於內、爲勢於外、皆非其義也、

勢者因利而制權、

承上文、以釋勢之義也、利謂計之利者也、制裁斷也、權權謀也、

左傳中權註、中軍權謀、

言因計之利而制爲權謀也、

權之爲言、取義於枰錘、權輕重也、衡之星兩、可取其平者、乃有定位、所謂經也、錘之前卻、以就其平者、無有定準、所謂權也、計之得失、可知其勝者、乃有常法、所謂經也、勢

之利害、以制二其勝一者、無レ有二常形一、所レ謂權也、

兵者詭道也、

詭詐也、

軍爭篇兵以レ詐立、義亦同、

葉公子高曰、以レ謀蓋レ人詐也、是也、

楚語註、蓋掩也、

自レ此已下、以言二上文所レ謂爲レ勢佐レ外之事一也、卽詭道也、

凡兵有二本統一焉、有二末事一焉、經計本也、權詭末也、故曰、乃爲二之勢一以佐二其外一、

故能而示二之不能一、用而示二之不用一、近而示二之遠一、遠而示二之近一、

示視古字通用、言已實能用レ外示レ之、以二不能一不レ用レ師、形レ人而我無レ形也、(虛實篇)

杜氏曰、此乃詭詐藏レ形、夫形也者、不レ可レ使レ見二於敵一、敵人見レ形、必有レ應、傳曰、鷙鳥將レ擊、必藏二其形一、美謂此說可レ疑、已示二之不能不用一者、形レ人也、彼不レ可レ見二其能與一レ用者、我無レ形也、凡此二者、所レ該極多、王氏曰、强示レ弱、勇示レ怯、治示レ亂、實示レ虛、智示レ愚、衆示レ寡、進示レ退、速示レ遲、取示レ捨、彼示レ此、亦唯言二其槩一耳、李氏以爲已實用レ師外示レ之、怯也、能之與レ用、豈止言二勇與レ怯二者一而已哉、

遠近以レ地而言、

利而誘レ之、

利以レ利動レ之也、(兵勢篇)導也、卽所レ謂能使二敵人自至一者、利レ之也、(虛實篇)

孫武曰、兵以レ利動、故其書十三篇、無下不レ言二就レ利避レ害者上、利誘之術亦多矣、梅氏以謂彼貪レ利、助以レ貨誘レ之、止言二其一端一耳

亂而取レ之、

亂詐爲二紛亂一也、卽所レ謂予二之敵一、必取レ之也、(兵勢篇)

實而備レ之、

虛實、孫武自有二其篇一、而其說備矣、此其所レ謂使二人備レ己者也、(虛實篇)

强而避レ之、

示二之强盛一、使二彼避一レ己也、

鄭友賢曰、自能而示二之不能一以下十四句、倶是詭道也、但以レ實而備レ之句、解以二彼軍旣實一、我當二預備一、强而避レ之句、解以二彼勢若强一、我當二引避一

レ之、若然則是正道非二詭道一矣、當レ解下作我軍本虛、反詭以レ實、而使二之備一、我勢本弱、反詭以レ强、而使中之避上、鄭說實得レ之矣、然其所レ解止二於此二者一、未レ可也、示二不能一、示二不用一、示二遠近一、示レ利、示レ亂、示レ怒、示レ卑、示レ佚、示レ親、無レ所レ不レ用レ詭者、要在二因レ利而制一レ權焉耳、

怒而撓レ之、撓道上聲、

撓屈也、又摧折也、亦暴怒而屈二撓之一也、吳起曰、可二震而走一、亦此義也、

吳子論將篇云、進退多レ疑、其衆無レ依、可二震而走一、

○舊說以謂、將之多レ怒者、激レ之令レ怒、以撓レ之、若然則下篇云、忿三一可レ侮之義耳、東坡蘇氏曰、得二其一說一、而不レ知三其又有二一說一也、蓋其如レ此之謂、與二讀者一宜レ擇焉、

卑而驕レ之、

示以二卑屈一、而使二之驕怠一也、

張氏曰、或卑レ辭厚賂、或羸師佯北、皆所三以令二其驕怠一也、

佚而勞レ之、

示以二安佚一、而勞二弊之一也、

示二之安佚一、如二楚人伐一レ鄭、縣門不レ發二楚言一而出、是也、舊解敵佚、我宜三多方以勞二弊之一、若其然則、下篇云、敵佚能勞レ之也、與二此篇所一レ謂義、自不レ同耳、

親而離レ之、

示以二親昵一、而離二間之一、此其伐レ交之事也、謀攻篇

親而離レ之、蘇張縱横之說、多用二此術一、如下曹公與二韓遂一交レ馬語以疑中馬超上、亦自用レ之也、而注二孫子一云、以二間離一、蓋此英雄欺レ人耳、李氏曰、破二其行約一、間二其君臣一、可也、諸家只以爲レ離二間其君臣一、未レ盡二其義一也、

攻二其無レ備、出二其不意一、

攻二其無レ備、攻二其所レ不レ守也、虛實篇 出二其不意一者、趨二其所レ不レ意也、同上 此言如三上文所レ云、豈是皆攻二其無レ備、而出二其不意一也、

曹公李氏、以レ無レ備爲二懈怠一、以二不意一爲二空虛一、杜氏孟氏、以レ無備爲二空虛一、以二不意一爲二懈怠一、皆非也、惟其不意、是以無レ備、未三必可二分而言一耳、

此兵家之勝、不レ可二先傳一也、

此結二上文一而言也、夫兵家經常之法、將莫レ不レ聞、

勝負之大計、吾能言之、至若臨敵決勝、則因利制權、其變無窮、所以不可先傳也、杜氏曰、傳言也、

李氏曰、無備不意攻之、必勝、此兵之要祕、而不傳也、後人遂因有兵家取勝之訣、不可先泄其謀之說、皆失其義也、孫武曰、措勝於衆、衆不能知、又曰、戰勝而不復、而應形於無窮、夫兵家之勝、實非言之可盡者、安在乎其祕而不泄哉、

夫未戰、而廟算勝者、得算多也、未戰而廟算不勝者、得算少也、多算勝、少算不勝、而況于無算乎、吾於此觀之、勝負見矣、

算計數也、古者國事、必先謀於廊廟之所、愼之也、吳起曰、必告於祖廟、啓於元龜、是也、此申明校之以計之義、以終一篇之意也、

孫武一書、論兵大意、悉備于此、而篇首所言、乃是一篇要旨、次言兵之大經大法、終言所以用兵之術、其下十二篇、亦皆不出於推明此篇之義耳、

先自孫武善用兵者管仲已、乃其言曰、凡攻伐之爲道也、計必先定于內、然後兵出乎境、計未定於內、而兵出乎境、是則戰之自勝、攻之自毀也、是故張軍而不能戰、圍邑而不能攻、得邑而不能實、三者是一焉、則可破毀也、故不明于敵人之政、不能加也、不明于敵人之情、不可約也、不明于敵人之將、不先軍也、不明于敵人之士、不先陣也、是故以衆擊寡、以治擊亂、以富擊貧、以能擊不能、以教卒練士、擊敺衆白徒、故十戰十勝、百戰百勝、後自孫武善用兵者吳起也、乃其言曰、昔之圖國家者、必先教百姓、而親萬民、有四不和、不和於國、不可以出軍、不和於軍、不可以出陣、不和於陣、不可以進戰、不和於戰、不可以決勝、是以有道之主、將用其民、先和而造大事、不敢信其私謀、必告於祖廟、啓於元龜、參之天時、吉乃後擧、民知君之愛其命、惜其死、若此之至、而與之臨難、則士以進死爲榮、退生爲辱矣、孫武論兵、乃自計始、兵

家之要、實不レ過二于レ此、利害之相權、奇正之相生、戰守攻圍之法、其變不レ可二勝窮一、亦皆餘事而已、蓋武誠齊人、嘗學二管子兵法一、而有下所二自得一者上、其書又有二五事九變及形勢虛實等說一、而其論レ用レ兵、往往有下與二管子言一相出入者上、亦可三以觀（視イ）二其學之所レ由也矣、

孫武兵法擇卷第一終

孫武兵法擇卷第二

作戰篇

作興也起也、舊說定計於內、而興戰於外、故次計篇云、

孫子曰、凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、

曹公曰、馳車輕車也、革車重車也、古者每兵車一乘、甲士三人、步卒七十二人、將重車者二十五人、故二車兼一百人、凡兵車千乘、則帶甲者十萬人也、

一說、馳騁之車、謂之革車、卽兵車也、凡車一乘駕以四馬、故曰駟、兵車千乘、則其馬千駟也、蓋是據孟子革車三百兩之文也、若依此說、則馳車千駟、以言馬數、革車千乘、以言車數、乃是一車兩名、而輜重猶在于外也、斷非此篇本旨耳、且孟子所謂革車、書序又作戎車、孫子所謂革車、或是誤字、或是時制、亦未可知也、晦庵朱氏、嘗論車乘之說曰、此等處、只要識得古制大意、細微處、亦不必大段費力考究、由此論之、魏武及李杜梅張諸家之說、蓋得之矣、

此言擧師之大法也、

千里饋糧、則內外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師擧矣、（近本無則字）

此言擧師十萬、饋糧千里、凡其費用、蓋如此也、內謂國中、外謂軍所也、賓客若諸侯之使及軍饗吏士也、言膠漆車甲者、擧細與大、

膠漆之材、修飾器械、車甲之奉、膏轄金革之屬、千金者言所費多也、曹公曰、賻賞猶在外、

其用戰也、勝久則鈍兵剉銳、攻城則力屈、久暴師、則國用不足、

勝久謂勝於久也、

勝久猶言剛勝弱、謂勝于戰之久也、

鈍不利也、兵刀劍矛戟之屬、剉一作挫、

老子挫其銳、又通作銼、史楚世家、兵銼藍田、

銳銳士也、

管子曰、強還則銳士摧、言士之銳氣也、

屈竭也盡也、暴露也、言及其用戰久而後勝、則鈍弊兵及、摧折士氣矣、至若攻城、則物力必屈矣、此言兵罷於外之害也、

舊解以レ攻レ城、爲二攻而久一者、非也、言下戰勝二于久一、則鈍レ兵挫レ銳矣、至二其攻レ城、則物力必屈上矣、

凡暴二師於外一、曠日持久、則國用亦自不レ給矣、此言下兵弊二於內一之害上也、

夫鈍レ兵挫レ銳、屈レ力殫レ貨、則諸侯乘二其弊一而起、雖レ有二智者一、不レ能レ善二其後一矣、

擧レ師千里、戰久而勝、兵挫力屈、而國財旣竭、至二於諸侯之兵一、乘レ弊而競起、則雖レ有二智者一、不レ能三善謀二其後一矣、言三必有二危亡之憂一也、此承二上文一、極言二戰久之弊一、以起二下文一也、

故兵聞二拙速一、未レ睹二巧之久一也、

拙不レ巧也、速疾也、此承二上文一、推二明戰不レ可レ久之義一也、言四唯(雖イ)其拙速、所三以爲二善巧一也、

舊說或謂、雖レ拙有二以レ速勝一、或謂拙尙以レ速勝、或謂但能取レ勝、寧拙速而無二巧久一也、皆解レ速以爲二速勝一也、此節專言二兵久之弊一、而不レ及レ論二其勝敗一也、且諸家所レ說、亦皆以爲二拙不レ如レ巧、最失二其義一也、孫武本旨、直以二拙速一爲レ巧、故曰未レ睹二巧之久一也、由レ此觀(視イ)レ之、孫武以爲二用レ兵之巧一者、亦可二以知一矣、

夫兵久而國利者、未二之有一也、故不三盡知二用レ兵之害一者、則不レ能三盡知二用レ兵之利一也、

通結二上文之意一、以起二下文一也、自レ此以下、細論二用レ兵之利害一、卽所レ謂智者之慮、必推二於利害一也、九變篇

善用レ兵者、役不二再籍一、糧不二三載一、取二用於國一、因二糧於敵一、故軍食可レ足也、

役徭役也、籍猶レ賦也、

左氏襄二十五年傳、賦車籍馬疏云、賦與レ籍俱是稅也、稅二民之財一、使レ備二車馬一、因二車馬之異一、故別爲二其文一、曹公註云、籍猶レ賦也、卽得レ之矣、

役不二再籍一、言レ不二再發レ兵也、陳氏皞曰、往則載焉、歸而迎レ之、是不二三載一也、夫五方成レ器、制度異レ巧、取二之於國一者、所三以適二其用一、

考工記云、鄭之刀、宋之斤、魯之削、吳越之劍、燕無レ函、秦無レ廬、胡無二弓車一、春秋傳云、吳用レ木、楚用レ革、荀子曰、齊之技擊、魏氏之武卒、秦之銳士、凡其器械技巧、各有レ所レ長、而亦皆適二其用一、猶二鶴脛不レ可レ斷、鳧頭不レ可レ續、故取二用於國一、欲レ便二利于用一也、舊說云、器用取二於國一者、物

輕而易レ致者、非二其義一也、千里運レ糧、財力俱困、因二之於敵一者、所三以足二其食一也、此一節言二用レ兵之利一也、

國之貧二於師一者遠輸、遠輸則百姓貧、

貧財少也、輸送也、遠輸則謂二千里饋レ糧也、此以下四節、承二上文内外之費一、而言二用レ兵之害一也、夫擧レ師千里、丁壯從レ軍、老弱轉餉、居者無レ食、行者無レ糧、民苦二兵事一、則國財不レ得レ不レ匱也、

近二於師一者貴レ賣、貴レ賣則百姓財竭、財竭則急二於丘役一、近二於師一一無二於字一、

近二於師一、謂レ近二於師期一也、貴レ賣謂二物價騰貴一也、竭盡也、言二師期將レ近、車甲弓弩之財、取レ物既多、而其價暴貴、則民之供給、其財不レ得レ不レ盡也、急窘也、王制曰、國無二六年之蓄一、曰レ急、丘十六井、役行役也、

周禮、稍人掌二丘乘之政令一、若二會同師田行役之事一、治二其政令一、以聽二于司馬一、班固漢志曰、畿方千里、有レ稅有レ賦、稅以足レ食、賦以足レ兵、故四井爲レ邑、四邑爲レ丘、丘十六井也、有二戎馬一匹、牛三頭一、四丘爲レ甸、甸六十四井也、有二戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、卒七十二人一、干戈備具、是謂二乘馬之法一、凡軍旅之役、謂二之丘役一、如レ魯作二丘甲一、鄭作二丘賦一、其義亦然、蓋以二丘乘之法者軍制之始一也、

丘氏曰、丘乘卽四丘、爲二甸之所一レ出、總名レ之曰二丘乘一、軍制之始也、

丘牛亦倣レ此、急二於丘役一者、下文云、中原内虛二於家一、是也、

力屈財殫、中原内虛二於家一、百姓之費、十去二其七一、

此結二上文二節之意一、而言二百姓之費一也、民力已竭、民財已盡、國中之民、破レ家散レ產、凡度二其費一、十而失レ七也、

公家之費、破レ車罷レ馬、甲冑矢弩戟楯蔽櫓丘牛大車、十去二其六一、矢一作レ弓、蔽一作レ矛、亦作二十去二其七一、

此承二上文一、而言二公家之費一也、楯干、櫓大盾也、謂二之蔽一者、蓋言下車上可二以爲一レ蔽者上耳、

周禮、司兵掌二五兵五盾一、鄭氏注云、盾干、櫓之屬、其名未レ聞、又司戈盾職云、及レ舍設二藩盾一、行則斂レ之、此云二蔽櫓一者、藩盾之屬、亦未レ可レ知也、

丘牛謂二丘車之牛一也、

兵車所レ駕者、總名レ之曰ニ丘牛一、漢志所レ謂、丘有ニ牛三頭一、甸有ニ牛十六頭一、是也、

大車卽牛車、謂ニ輜重之車一也、凡其所レ費、度レ之失ニ十之六一也、

故智將務食ニ於敵食一、敵一鍾當ニ吾二十鍾一、萁秆一石當ニ吾二十石一、

務食ニ於敵一、卽因ニ糧於敵一也、曹公曰、六斛四斗爲レ鍾、萁豆稭也、秆禾藁也、石者一百二十斤也、轉輸之法、費ニ二十石一、得ニ一石一、一云、萁音忌、豆也、七十斤爲ニ一石一、當ニ吾二十一、言ニ遠費一也、此申ニ述上文軍食可レ足之義一、而言ニ用兵之利一也、

故殺レ敵者怒也、取ニ敵之利一者、貨也、

此承ニ上文智將所レ務之意一、以起ニ下文勝レ敵益レ強之端一也、夫善戰者不レ怒、（老子）故曰、殺レ敵者怒也、此其所ニ以卒善而養一レ之也、阜財則因レ敵、（司馬法）故曰、取ニ敵之利一者貨也、此其所ニ以車雜而乘一レ之也、

舊說皆謂、激ニ怒吏士一、則敵可レ殺也、最失ニ其義一矣、孫武一書、未ニ嘗言一レ殺、且如ニ是篇一、以レ久ニ於兵一爲レ戒、故曰、知レ兵之將、民之司命、安在下其殺レ敵以激ニ吾人一者上哉、武且有レ言曰、主不レ可ニ以レ怒而興一レ師、將不レ可ニ以レ慍而致一レ戰、亡國不レ可ニ以復存一、死者不レ可ニ以復生一、故曰、明主愼レ之、良將警レ之、其警戒之意、亦復如レ此、讀者不レ可レ不レ察也、

故車戰得ニ車十乘已上一、賞ニ其先得者一、而更ニ其旌旗一、車雜而乘レ之、卒善而養レ之、是謂ニ勝レ敵而益一レ強、

凡用ニ車戰一、若得ニ敵車十乘已上一、則賞ニ其先得者一、蓋此古之賞格、乃因引レ此以結ニ上文兩節之意一、車十乘、凡七百五十人、甲兵器械皆稱ニ于此一、用レ兵之法、全レ旅爲レ上、而況得ニ車十乘已上一者乎、賞ニ其先得一者、上ニ其功一也、更ニ其旌旗一、與レ吾同也、雜而乘レ之、不ニ獨任一也、卒善而養レ之、所レ獲之卒、養レ之以レ恩也、勝レ敵而益レ強、言レ增ニ益我兵衆之強一也、

兵謂ニ兵車一也、衆謂ニ卒徒一也、

故兵貴レ勝、不レ貴レ久、

此反下覆上文兵聞ニ拙速一、未レ睹ニ巧之久一之意上而言也、孟氏（未レ詳ニ其名一）曰、貴ニ速勝疾還一也、

故知レ兵之將、生民之司命、國家安危之主也、（近本無ニ生字一）

知レ兵者、盡知ニ用レ兵之利害一也、杜氏曰、民之性命、

國之安危、皆由二於將一也、

兵者、國之大事、死生之地、存亡之道、故民之性命、國之安危、皆由二於將一也、

是篇、具言二擧レ師之法一、次言二兵久之弊一、次言二用レ兵之利害一、而終言下民之死生、國之治亂皆主二於將一、其任之重、蓋亦如上レ此、以結二通篇之意一、

易曰、高宗伐二鬼方一、三年克レ之、小人勿レ用、象曰、三年克レ之憊也、夫殷王中興、撻然用レ武、遠伐二暴亂一、以致二其衆一、事之至難、猶且如レ此、而況貪忿肆欲、窮レ兵黷レ武、以殘二其民一乎、故曰、小人勿レ用、管子曰、大度之書曰、擧レ兵之日、而境內不レ貧、戰而必勝、勝而不レ死、得レ地而國不レ敗、爲二此四者一若何、擧レ兵之日、而境內不レ貧者、計數得也、戰而必勝者、法度審也、勝而不レ死者、教與レ器備レ利而敵不二敢校一也、得レ地而國不レ敗者、因二其民一也、孫武是篇意出二乎此一、

孫武兵法擇卷第二終

孫武兵法擇卷第三

謀攻篇

舊說、合レ陣爲レ戰、圍レ城曰レ攻、以二此篇一次二戰之下一云、

孫子曰、凡用レ兵之法、全レ國爲レ上、破レ國次レ之、全レ軍爲レ上、破レ軍次レ之、全レ旅爲レ上、破レ旅次レ之、全レ卒爲レ上、破レ卒次レ之、全レ伍爲レ上、破レ伍次レ之、

全レ國者、全得二其國一、管子曰、得レ地而國不レ敗也、破レ國者、擊二破其國一、下文云、毀二人之國一非レ久也、一萬二千五百人爲レ軍、五百人爲レ旅、自レ校以上至二百人一爲レ卒、百人以下至二五人一爲レ伍、曹公說、何氏曰、自レ軍至レ伍、皆次二第上下一言レ之、此意以二策略一取レ之爲レ妙、不二惟一軍一、至二於一伍一、不レ可レ不レ全也、

是故百戰百勝、非二善之善者一也、不レ戰而屈二人之兵一、善之善者也、

此依二上文一而言、每レ戰必勝、不レ爲レ非レ善也、然未レ如三不レ戰而勝之善之善者一也、舜舞二干羽一、有苗來格、文王伐レ崇、因レ壘而降、皆是聖人之軍也、夫五伯桓公爲レ盛、而管仲相二桓公一、霸二諸侯一、匡二合天下一、凡衣裳之會十有二、未三嘗有二歃レ血之盟一也、兵車之會四、未三嘗有二大戰一也、孫武齊人、蓋其所レ謂善之善者、亦可レ知耳矣、

故上兵伐レ謀、

言伐二其謀一也、

李卓吾曰、蓋唯以レ全二人之國一、爲レ攻二人之謀一、

淮南子曰、修二政廟堂之上一、而折二衝千里之外一、此用レ兵之上也、

管子曰、凡有二天下一者、以レ情伐者帝、以レ事伐者王、以レ政伐者霸、淮南子亦以二修レ政而折衝一爲二用レ兵之上一也、蓋孫武嘗學二管子一者、而淮南之說、必其有二所レ受者一也、而曹公註二孫子一云、敵始有レ謀、伐レ之易也、漢息夫躬傳註又云、知二敵有レ謀、則沮二其所レ爲、不レ用二兵革一也、皆未レ可也、孫武所レ謂伐レ謀、卽是修レ政而折衝者、其伐乃在二彼謀未レ發之前一、而其始有レ謀伐レ之、乃在二彼謀已發之後一者耳、若夫王孫滿對二楚子問レ鼎、楚屈完對二

晉侯觀師、宋公子目夷對楚子所告、晉陰飴甥對秦伯所問、鄭子產對晉人之問、獻捷、讓壞垣登埤、及爭承又辭、楚公子圍衛、祝鮀爭先蔡、亦皆可謂善伐其謀者也、

其次伐交、

交言兵交也、

春秋成元年傳、兵交使在其間可也、

淮南子曰、未至兵交及接、而敵人奔亡、此用兵之次也、

兵及未接、而敵人奔亡、牧野之事此已、春秋之世、有兵未入境乃還者、如齊人伐魯北鄙是也、有兵未至戰而兩退者、如秦晉戰于河曲是也、有兵不戰而兩還者、如晉侯及諸侯師伐鄭、楚人救鄭是也、或知難而退、或志未能堅戰、皆非如倒戈攻于後以北也、

一說伐人之交也、即下文威加於敵、則其交不得合之意、（劉寅之說）未知孰是、以上二者、言不戰而屈人兵也、

張氏曰、兵將交、戰將合、則伐之、傳曰、先人有奪人之心、苟如其說、即下文伐兵之事耳、豈是不戰而屈人兵之謂哉、

其次伐兵、

此言戰而決勝也、淮南子曰、白刃合、流矢接、乃以決勝、此用兵之下也、

其下攻城、

杜公（岐國公佐）曰、言攻城屠邑、攻之下者也、

攻城之法、爲不得已（爲平聲）、

此承上文而言、凡用兵之法、以攻城爲謀、不得已者耳、以起下文之意也、

修櫓轒轀、具器械、三月而後成、距堙又三月而後已、

此言不得已之事也、曹公曰、修治也、櫓大楯也、轒轀者轒牀也、其下四輪、從中推之、至城下也、器械機關、攻守之總名、杜公曰、積土爲山曰堙、以拒敵城、（堙距字通、）觀其虛實、春秋傳曰、楚子反、乘堙而闚宋城也、張氏曰、三月者約、經時而成也、不必三月也、言已者、以其經時而畢工也、

將不勝其忿、而蟻附之、殺士卒三分之一、而城不拔者、此攻之災也、

此言攻城之害、以明其出于下策之義也、張氏

曰、攻逾二時、敵猶不服、將心忿躁、不能持久、使戰士蟻緣而登城、則其士卒爲敵人所殺三分之一、而堅城終不可拔、茲攻城之害也已、舊說以爲將忿不待攻城器具、而使士卒緣城而上非也、夫攻器已成而攻之、果其城可拔乎、然則攻城亦何啻害己、器械備矣、距闉成矣、猶且殺三分之一、而況於肉薄登城而攻之乎、我恐、如舊說則三軍之士、悉盡於堅城之下矣、杜佑張預以爲過二時、敵猶不服、將不勝心之忿者、是也、

故善用兵者、屈人之兵、而非戰也、拔人之城、而非攻也、毀人之國、而非久也、

拔者攻而擧之也、

史注師古曰、拔者破城邑而取之、言若拔樹可幷得其根本、

毀破也、毀人之國、即上文破國也、 久言用兵之久也、

必以全爭於天下、故兵不頓、而利可全、 此謀攻之法也、

全者、自軍至伍、皆全之也、 爭者爭勝也、 頓與鈍通、漢書芒刄不頓、利全者、全得其國也、 謀攻者、以謀而攻之也、此通結上文、以釋謀攻之義、言凡善用兵者、屈人之兵而不是戰也、拔人之城而不是攻也、毀人之國而不是久也、必也以全而爭勝於天下、故無鈍兵之弊而有全國之利、此以謀而攻之法也、

故用兵之法、十則圍之、

杜氏曰、圍者謂四面壘合、使敵不得逃逸、凡圍四合、必須去敵城稍遠、占地既廣、守備須嚴、若非兵多、則有闕漏、故用兵有十倍也、 張氏曰、尉繚子曰、守法一而當十、十而當百、百而當千、千而當萬、言守者十人而當圍者百人、與此法同、

五則攻之、

杜公曰、若敵幷兵自守、不與我戰、彼一我五、乃可攻之也、陳氏曰、此獨說攻城也、

倍則分之、

杜氏曰、此言以二敵一、則當取己之一、或趣敵之要害、或攻敵之必救、使敵一分之中、復分減相救、因以一分而擊之也、

敵則能戰之、

何氏曰、敵言等敵也、唯能者可以戰勝耳、自此下三句、皆言能者、苟非能、則事之成敗、未可必也、

少則能逃之、

逃亡也、梅氏堯臣曰、彼衆我寡、去而勿戰、逃一作守、非也、

曹註云、高壁堅壘、勿與戰也、李筌杜佑王晳何氏皆因其說以爲守之也、杜牧陳皥並以逃爲避、賈林則曰、彼衆我寡、逃匿兵形、不令敵知、當設奇伏以待之設詐以疑之、亦取勝之道、又一云、逃匿兵形、敵不知所備、懼其變詐、全軍亦逃、二說皆謂逃之也、舊說蓋據尉繚子守法而言之也、然又其法云、其有必救之軍者、則有必守之城、無必救之軍者、則無必守之城、苟非有外援而堅守之、則是徒守其死也、故下文云、小敵之堅、大敵之擒也、賈氏及梅氏張氏以爲逃去者、實得其旨矣、

不若則能避之、

避迴也、或作辟、說文迴也、廣雅違也、逃避二字、義相近而有別、春秋傳、城濮之戰、子犯曰、微楚之惠不及此、退三舍避之、所以報也、通鑑、項羽破彭城、還拔滎陽、圍成皐、漢王逃去、北渡河、註索隱曰、逃徒凋反、輕身忽出也、史記逃作跳、徐廣曰、跳音逃、如淳曰、走也、由此觀之、逃者走而逃之也、避者退而避之也、輕重緩急、其事不同、

杜公曰、强弱不敵、勢不相如、則引軍避之、

故小敵之堅、大敵之擒也、

杜氏曰、言堅者、將性堅忍、不能逃、不能避、故爲大者之所擒也、○此一節擧用兵衆寡强弱之大法、亦皆謂其智勇利鈍均耳、若我治彼亂、我奮彼怠、則寡可以勝衆、弱可以制强、下文云、識衆寡之用者、是也、

夫將者、國之輔也、輔周則國必强、輔隙則國必弱、

輔佐也、周密也、隙釁也、言將者國之輔、與君親密、則其國必强、若其有釁隙、則其國必弱、

舊解、周爲將才周備、隙爲其才不備、非也、

自此已下、言軍之患害、以起下文知勝敗之端、

也、

故君之所以患於軍三、近本或作軍之所以患於君、

杜氏曰、君國君也、患於軍者、爲軍之患害也、張氏曰、三者下三事也、

不知軍之不可以進、而謂之進、不知軍之不可以退、而謂之退、是謂縻軍、

縻繫也、杜氏曰、猶駕御縻絆、使不自由也、賈氏林曰、軍之進退、將可臨時制變、君命內御患莫大焉、故太公曰、國不可以從外治、軍不可以從中御、

不知三軍之事、而同三軍之政者、則軍士惑矣、

周制、諸侯大國三軍、三軍之事、猶言軍旅之事也、政謂軍之政令也、言君若不知軍無二令、而與將同其政、則號令不一、而其衆惑亂矣、

舊解皆謂、軍國異容、若使軍國一政、軍士生惑矣、非也、孫武本旨只說君之不知軍事、同軍政耳、

不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣、

三軍之權、言將帥之權也、三軍之任、言將帥之任也、古者命將、君自授鉞曰、左右中軍、皆有分職、若踰分而上請者誅、

尉繚子曰、將軍受命、君必先謀於廟、行令於廷、君身以斧鉞授將曰、左右中軍、皆有分職、若踰分而上請者誅、軍無二令、二令者誅、留令者誅、失令者誅、

蓋其所任既專、而賞罰之權、固在將矣、君若不知其權之所在、而偏裨同其任、則賞罰無信、而其衆疑貳矣、易曰、長子帥師、弟子輿尸、貞凶、卽是義也、

三軍之權、舊解或爲權智、或爲權謀、皆非其義也、陳子曰、將在軍、權不專制、任不自由、三軍之士、自然疑也、其說得之矣、

三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣、是謂亂軍引勝、

引導也、亂軍引勝、言亂我之軍、而誘敵使勝之也、何氏曰、士疑惑而無畏、則亂、故敵國得以乘我隙釁而至矣、

梅氏曰、君徒知制其將、不能用其人、而乃同其政任裨、衆疑惑、故諸侯之難作、是自亂三軍、自去其勝、王氏曰、引諸侯勝己也、按梅氏說得盡矣、但其以引爲引去之義、未也、王氏

一改レ之者是、

愚謂、虞書皐陶賡歌曰、元首叢脞哉、股肱惰哉、萬事墮哉、自レ古國之輔臣、信任不レ專、情意不レ孚、其心懈惰、其事廢墜、而其有二成功一、未三之有一也、不三獨軍事之患一、知レ此其大一也矣、

故知レ勝有レ五、

承二上文一、而言三知レ勝之道凡有二五者一也、

知下可二以與戰一、不上レ可二以與戰一者勝、

杜氏曰、下文所レ謂知レ彼知レ己是也、

上文云、十則圍レ之、五則攻レ之、倍則分レ之、敵則能戰レ之、乃是可二以與戰一者也、然又有下不レ可二以與戰一者上焉、少則能逃レ之、不レ若則能避レ之、乃是不レ可二以與戰一者也、然又有下可二以與戰一者上、故下文亦云、知レ彼知レ己者、百戰不レ殆、

識二衆寡之用一者勝、

王氏晳曰、謂我對二敵兵之衆寡一、圍攻分戰、是也、

此言二上文圍攻分戰之用一也、

○孟子曰、小固不レ可二以敵一レ大、弱固不レ可二以敵一レ强、寡固不レ可二以敵一レ衆、寡之不レ可レ敵レ衆、勢固然也、然亦有下用レ寡而勝レ衆者上、是用レ兵之權、要在レ知二其用一耳、春秋傳曰、師克在レ和、不レ在レ衆、是其道也、管子曰、衆若二時雨一、寡若二飄風一、

司馬法曰、凡戰之道、用レ寡固、用レ衆治、寡利レ煩、衆利レ正、用レ衆進止、用レ寡進退、衆以合レ寡、則遠裹而闕レ之、若分而迭擊、寡以待レ衆、敵若衆則相衆而受レ裹、敵若寡、若レ畏則避レ之開レ之、

吳子曰、用レ衆者務レ易、用レ少者務レ隘、是其法也、不レ可レ不レ知也、

吳子曰、以レ一擊レ十、莫レ善二於阨一、以レ十擊レ百、莫レ善二於險一、以レ千擊レ萬、莫レ善二於阻一、今有二少卒一、卒起擊二金鳴三鼓於阨路一、雖レ有二大衆一、莫レ不二驚動一、故曰、用レ衆者務レ易、用レ少者務レ隘、

上下同レ欲者勝、

上下同レ欲、此其所レ謂令二民與レ上同一レ意也、計篇、

以レ虞待二不虞一者勝、

虞度也、慮也、此其所レ謂無レ恃二其不一レ來、恃三吾有二以待一レ之也、九變篇、李氏筌曰、有二備預一也、

將能而君不レ御者勝、

此言下將有二其能一而君善御上レ之也、

韓信謂二漢祖一曰、陛下不レ善レ將レ兵、而善レ將レ將、將

將者善御之謂也、茅元儀曰、君不御、更爲要著、然欲使君不御、無徒責乎君也、

此五者、知勝之道也、

曹公曰、此上五事也、

五者、最重於將能而君不御之事、故繼上文君患於軍三者而言之也、

故曰、知彼知己者、百戰不殆、

孫武十三篇、始自經之以事、校之以計、至乎必取於人、知敵之情、莫非用智之事焉、而知彼知己、最爲其要、利害之權、奇正之變、戰守攻圍之法、無一不由乎此者、故曰、百戰不殆、殆危也、

舊說或謂、彼此五者、蓋知之或謂知己知彼者、攻守之謂也、皆非其義也、

不知彼而知己、一勝一負、

此言知我之可勝、而不知敵之可勝與不可勝者、勝負半也、下篇云、知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也、地形篇 其義亦同、

不知彼不知己、每戰必殆、

李氏曰、是謂狂寇不敗、何待也、

此篇主意、以非戰非攻爲全策、以知彼知己爲要旨、且其論軍之患害、後世人君尚知所鑒戒哉、

孫武兵法擇卷第三終

孫武兵法擇卷第四

形篇 近本作軍形

李靖曰、攻者守之機、守者攻之策、是篇乃明守而攻之之義、蓋其所以次謀攻也、因取篇末形字為名、舊說每句貼帶形字以為之解、疑非本旨也、

孫子曰、昔之善戰者、先為不可勝、以待敵之可勝、

此言我先自守、以待敵之可攻者也、乃是一篇之體要也、淮南子曰、善用兵者、必先修諸己、而後求諸人、先為不可勝、而後求勝、修己於人、求勝於敵、亦此意也、

前篇以虞待不虞、陳皥註曰、謂先為不可勝之師、待敵之可勝也、是篇可勝者攻也、曹公曰、敵攻己乃可勝、杜佑曰、敵攻己乃可勝也、三家者說、皆解敵之可勝、以為敵人可勝我也、若然則下文不能使敵之可必勝、亦似不可甚解、又李靖之言曰、敵未可勝、則我且自守、待敵可勝、則攻之耳、是解不可勝、以為我未可勝敵也、近時茅元儀曰、先為敵人不可勝我之形、以待敵人可勝之形而乘之、是解不可勝、以為敵不可勝我、亦皆非正解、孫武乃曰、不可勝在己、又曰、不可勝者守也、其自註得甚明白矣、善讀者擇焉、

不可勝在己、可勝在敵、故善戰者、能為不可勝、不能使敵之可必勝、故曰、勝可知、而不可為、

此明上文之義也、蓋不可勝者、所以勝之也、先為者在己、可以能之也、在己故可以知之也、以待者在敵、不可以能之也、在敵故不可以為之也、言善用兵者、能為我可以勝敵、而非能為敵之使我可必勝於彼也、

不可勝者守也、可勝者攻也、守則不足、攻則有餘、

此亦承上文、以明守攻之義也、守者不止完其壁堅其陣而已、立不敗之地是也、攻者不止攻其城攻其陣而已、不失敵之敗是也、不足言其勝未必也、有餘言其勝已全也、

善守者、藏於九地之下、善攻者、動於九天之上、故能自保而全勝也、

藏於九地之下、言其潛藏不可測、所謂守則不可攻也、動於九天之上、言其變動不可窮、所謂攻則不可守也、能自保者善守也、全勝者善攻也、此通結上文之意、以言守攻二者各造其極也、

善守善攻、其猶龍乎、此言以形容其妙耳、舊解、天時之變、山川丘陵之阻、及引太乙遁甲九天九地之法者、皆非也、何氏張氏引尉繚子若秘於地、若邃於天之語、是也、

見勝不過衆人之所知、非善之善者也、戰勝而天下曰善、非善之善者也、

見勝於衆人無所知焉、所以無智名也、戰勝於天下無得稱焉、所以無勇功也、杜氏曰、天下猶上文言衆也、

故舉秋毫不爲多力、見日月不爲明目、聞雷霆不爲聰耳、古之所謂善戰者、勝於易勝者也、

力舉秋毫、目見日月、耳聞雷霆、人皆能也、以喩天下衆人之所見且稱者也、所謂善之善者、勝於易勝、是也、曹公曰、攻其可勝、不攻其不可勝也、

故善戰者、無智名、無勇功、

言戰勝於其不可勝者、故無名無功也

故其戰勝不忒、不忒者、其所措必勝、勝已敗者也、近本無必字、

忒差也、戰勝不忒、言必勝也、措置也、擧兵而措之於已敗者耳、

言若摧枯拉朽然、

言其甚易也、

故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也、

立於不敗之地者、善守也、不失敵之敗者、善攻也、王氏曰、常爲不可勝、待敵可勝、不失其機、

李氏曰、兵得地者昌、失地者亡、地者要害之地、非也、不敗之地猶管子云不頋之地也、凡事之可憑藉者皆得稱地、義與首篇死生之地同、

是故勝兵先勝、而後求戰、敗兵先戰、而後求勝、

管子曰、計必先定、而兵出於竟、

先勝而後求戰者也、

計未定而兵出竟、戰之自勝、攻之自毀者也、

先戰而後求レ勝者也、

乃謂レ之也、

善用レ兵者、修レ道而保レ法、故能爲二勝敗之政一、

修理也、保守也、曰レ道曰レ法、卽五事之二也、修レ之以與レ民同レ意、保レ之以與レ下畏レ法、

司馬法曰、與レ下畏レ法曰レ法、

此二者、善守之事也、爲レ政謂二勝敗在一レ我、猶レ言二敵之司命一也、

成敗二字、不三必拘二泥舊說或云一、勝二敵之敗政一、或云制レ勝敗レ敵、或云勝レ敵敗レ敵、若依二其說一、則知レ兵之將、國家安危之主也、安危二字亦此何說、

兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝、

度度二長短一也、量量二多少一也、數數二十百一也、稱稱二輕重一也、勝卽勝算也、

地生レ度、度生レ量、量生レ數、數生レ稱、稱生レ勝、

古者兵制、因二井田一而制二軍賦一、凡畫レ野分レ州、經レ土設レ井、地方一里爲レ井、則是地生レ度也、

斬レ長綴レ短而度レ之也、

一井爲二田九百畝一、其中爲二公田一、八家皆私二百畝一、同養二公田一、稅以足レ食、賦以足レ兵、則是度生レ量也、

禮明堂位註、量所二容受一也、

四井爲レ邑、四邑爲レ丘、丘十六井也、有二戎馬一匹、牛三頭一、四丘爲レ甸、甸六十四井也、有二戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、卒七十二人一、干戈俱具、則是量生レ數也、諸侯地大者、方百里、小者五十里、大國三軍、次國二軍、小國一軍、凡一萬二千五百人、則是數生レ稱也、

大小各有二其制一、猶三物有二輕重一也、

大者兵衆而强、小者兵寡而弱、弱不レ可二以敵一レ强、寡不レ可二以敵一レ衆、則是稱生レ勝也、蓋此其大略也、

衆寡强弱、不レ可二以敵一、勢固然也、唯其善用レ兵者爲下能寡可二以勝一レ衆、弱可中以制上レ强也、只此借二引古者兵法一、以記下兵之勝敗可二得而稱一之意上耳、○管子書有二參圖伍部之法一、尉繚子亦有二稱地稱人稱粟之說一、蘇秦合二從六國一、始見二其君一、必先說二地之廣狹險易、帶甲車騎之多少、穀粟之蓄、器械之利一、以及二兵之强弱、國之利害一、其量已料レ敵、一如二孫武所レ引之法一、蓋古者兵家有二此說一耳、張預引二尉繚子度數之言一曰、度以量レ地、數以量レ兵、地與レ兵相稱、則勝、三者皆因二地形一而得、

故自レ地而生レ之也、李靖五陣隨レ地而變、是也、孫武此言豈止下爲二陣法一而發レ之者上哉、張氏之說、非二其本旨一也、

故勝兵若二以レ鎰稱一レ銖、敗兵若二以レ銖稱一レ鎰、

此喩下善戰者勝二於易レ勝者上也、二十四銖爲レ兩、二十兩爲レ鎰、李氏曰銖之於レ鎰、輕重異レ位、勝敗之數、亦復如レ之、

勝兵卽先勝、而後求レ戰者也、敗兵卽先戰、而後求レ勝者也、舊說以爲二有レ制之兵、無レ制之兵一、非也、

勝者之戰、若レ決二積水於千仞之谿一者、形也、

八尺曰レ仞、形者所レ謂兵形象レ水是也、(虛實篇) 積水以喩レ立二於不敗之地一、決二之於千仞之谿一、以喩レ不レ失二敵之敗一、而言二此兵之形一也、卽承二上文一、以結二一篇之意一、其文亦若レ決二積水於千仞之谿一也矣、

杜氏謂、積水在二千仞之谿一、不レ可二測量一、及二決水下一、湍悍奔注、不レ可レ禦也、夫千仞之谿、水之積也、其深不レ可レ測、亦非レ決二之於無底之谷一、則何見二其湍悍奔注之勢一也、天下豈有二如レ是之深險一哉、王氏曰、千仞之谿、至高絕也、水之性、避レ高而趨レ下、決レ之赴二深谿一、固湍悍而莫二之禦一也、乃得レ之矣、

曰レ守曰レ攻、一篇大旨、不レ出二乎此一、其大意條暢、脈絡相貫、而反覆義盡矣、

藏也、立也、自保也、積也、皆先爲二不レ可レ勝之策一、總而言レ之、則守也、動也、措也、不レ失也、決也、皆是待二敵之可レ勝之機一、總而言レ之、則攻也、兵形象レ水、以取二其喩一而已、

孫武兵法擇卷第四終

孫武兵法擇卷第五

勢　篇　近本作二兵勢一、又作二軍勢一、

舊說云、兵形已成、然後任レ勢以取レ勝、故次レ形、
按管子書有二勢篇一、篇末言二偃レ武以取レ力、又有二形勢篇一、形勢解二凡物之形勢相依而生一、故是篇次二之形一耳、

孫子曰、凡治レ衆如レ治レ寡、分數是也、

管子曰、治レ衆有レ數、卽此義也、曹公曰、部曲爲レ分、行伍爲レ數、

曹公所レ註、約而盡矣、韓信多多益辨、亦用二此法一耳、不二獨兵家治レ衆而已一、周官六卿分職、其官各六十、其屬合二三百六十一、而天下庶政和矣、六卿分職所レ謂分也、其官則大夫士、各帥二其屬一、而府史胥徒、亦各有二其數一、所レ謂數也、舊說或謂三分二別人數一、讀レ分如レ字、非也、

鬪レ衆如レ鬪レ寡、形名是也、

曹公曰、旌旗曰レ形、金鼓曰レ名、

軍爭篇云、夫金鼓旌旗者、所二以一二人之耳目一也、人既專一、則勇者不レ得二獨進一、怯者不レ得二獨退一、此用レ衆之法也、曹註、卽據二于此一、杜氏曰、旌旗鐘鼓、敵亦有、我安得下獨爲二形名一、鬪レ衆如レ鬪レ寡也、夫形者陣形也、名者旌旗也、其說與二孫武一不レ合、陳氏以二曹註一爲レ是、誠然也、按梅氏曰、形以二旌旗一、名以二采章一、是說亦唯有二旌旗一、而無二金鼓一也、王氏曰、形者旌旗金鼓之制度、名者各有二其名號一也、蓋據二周禮大司馬茇舍號名之用一而言耳、皆非二本旨一也、

三軍之衆、可レ使三必受レ敵而無二敗者、奇正是也、

奇詭也、卽所レ謂詭道也、管子曰、桓公曰、野戰必勝若何、管仲對曰、以レ奇、孫武奇正之說、蓋本二于此一、孔子曰、晉文公譎而不レ正、齊桓公正而不レ譎、譎亦詭也、孫武亦以レ奇對レ正而言、則奇之爲レ義、可二得而知一也、

王氏曰二必當レ作レ畢一者非、

兵之所レ加、如三以レ碬投二卵者、虛實是也、

碬石也、碬以喩レ實、卵以喩レ虛、言二其不レ可レ當也、

虛實詳見二下篇一、

凡戰者以正合、爲奇勝、

此言奇正之分也、爲奇者、正變爲奇、所謂奇正之變也、爲一作以、疑非、

舊說皆謂用正合戰用奇取勝、是以爲作以也、恐誤、

故善出奇者、無窮如天地、不竭如江河、終而復始、日月是、死而復生、四時是也、（一本如江河作若江海、上是字下有也字、）

此文特言出奇者、凡戰以奇勝之故耳、天地江河日月四時、皆喩善出奇者、無窮竭終始也、

本文只說善出奇者、無窮竭終始、而未說奇正之變也、杜佑張預、以爲奇正二者相變之喩、非也、

聲不過五、五聲之變、不可勝聽也、色不過五、五色之變、不可勝觀也、味不過五、五味之變、不可勝嘗也、

五聲、宮商角徵羽也、五色、青黃赤白黑也、五味、酸辛鹹甘苦也、此三者之變、以起下文奇正之變、不可勝窮之意也、

上文譬喩也、此文如詩之有興、以起下文之意也、舊說皆以爲引喩、非也、

戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也、奇正相生、如循環之無端、孰能窮之、

此言戰勢不過奇正、而其變無窮、奇爲正、正爲奇、二者相生、循環之無端、不可得而窮也、結上文之意、

孫武奇正之說、前無古人、是其所以卓越于諸家也、蓋爲其說、譬如天地定位、而陰陽二氣行于其中矣、夫天地之化、非有陰陽之變、則不可成矣、兵家之勝、非有奇正之變、則不可爲矣、一陰一陽、互爲其根、生生無息、奇正相生、亦猶如此、而諸家所解、其說不同、尉繚子則曰、正兵貴先、奇兵貴後、又曰、善御敵者正、兵先合而扼之、曹公則曰、先出合戰爲正、後出爲奇、又曰、正者當敵、奇兵從旁擊不備也、李靖則曰、大衆所合爲正、將所自出爲奇、又曰、凡兵以前向爲正、後却爲奇、又曰、兵散則以合爲奇、合則以散爲奇、又其六花陣說曰、方生於正、圓生於奇、前正後奇、覘敵何如、鼓之則前奇後正、復邀敵來、伺隙擣虛、又論車騎法曰、車徒當教以正、騎隊當教爲奇、唐

太宗則曰、吾之正、使ニ敵視以爲一レ奇、吾之奇、使ニ敵視以爲一レ正、斯所レ謂形レ人者歟、以レ奇爲レ正、以レ正爲レ奇、變化莫レ測、斯所レ謂無レ形者歟、又曰、以レ奇爲レ正者、敵意ニ其奇一、則吾正擊レ之、以レ正爲レ奇者、敵意ニ其正一、則吾奇擊レ之矣、嘗試論レ之曰、尉繚子只因ニ孫武以レ正合、爲レ奇勝之說一而言耳、曹公衞公、以レ正爲レ正、以レ奇爲レ奇、則奇ニ其奇一、正ニ其正一、皆非ニ奇正相生相變之義一也、太宗本因ニ孫武形レ之之說一、然敵視以爲レ正、非ニ我正一也、敵視以爲レ奇、非ニ我奇一也、是非ニ奇正之正解一也、李筌則從ニ曹公前說一、杜佑則從ニ曹公後說一、然ニ二家未レ知ニ曹公二說一、其言雖レ異、其實則同也、先出當レ敵、而其後者自レ非ニ從レ旁出一、亦安得レ擊ニ其敵一哉、梅堯臣則曰、動爲レ奇、靜爲レ正、靜以待レ之、動以勝レ之、若其以ニ動爲一レ奇、靜爲レ正、則可也、然奇正之變、靜亦有レ奇、動亦有レ奇、必也以ニ靜爲一レ正、以レ動爲レ奇、則未レ可也、曰然則、孫武云、以レ正合、爲レ奇勝者、何如、曰、凡天下之理、有レ常有レ變、所レ謂正者其常也、所レ謂奇者其變也、未レ有下天下之變、不レ生ニ於其常一者上也、未レ有下天下之變、不レ復ニ於其常一者上也、夫惟有レ常、是以有レ變、故曰、以レ正合、爲レ奇勝、夫惟有レ變、是以有レ常、故曰奇正相生、如ニ循環之無一レ端、自ニ其變者一而觀レ之、則正爲レ奇、奇爲レ正、莫下非ニ相變一者上、故曰、奇正之變、不レ可レ勝窮也、奇正之說、孫武所ニ自釋一、亦無ニ餘蘊一矣、孫武曰、兵詭道也、詭者奇也、故其書十三篇、皆莫レ非レ用レ奇、而又有ニ奇正之說一者、蓋其所レ謂正有ニ奇之所一レ生、皆非レ有レ正、則其奇無レ所ニ由而出一焉、而況於ニ其無レ窮不レ竭者一乎、故凡論ニ其奇一、先自レ正始、諸家只得ニ其一說一、而不レ知ニ其又有ニ一說一、以致ニ紛紛之說一耳、

激水之疾、至ニ於漂一レ石者、勢也、鷙鳥之疾、至ニ於毀折一者、節也、

鷙鳥、鷹鸇之屬、毀折者、其搏ニ擊禽獸一、而羽翮之利、毀ニ其肉一、折ニ其翼一也、節者限制也、言激水之流、漂ニ蕩磐石一、其力至ニ於若一レ此者勢也、鷙鳥之翻、毀ニ折禽獸一、其利至ニ於若一レ此者節也、此因ニ上文戰勢不一レ過ニ奇正一之意上、即分ニ勢與一レ節而言レ之、以起ニ下文一也、

是故善戰者、其勢險、其節短、勢如レ彍レ弩、節如レ發

機、（一無是字）

此取上文、而言戰有勢有節也、險危也、短促也、彍張也、機弩牙戾也、彍者欲為之勢、以喩其險也、發者欲中其節、以喩其短也、

勢險節短、戰勢之訣、折徹入妙、至矣盡矣、無以加焉、險危也、下文云、木石之性、危則動、是也、短促也、促者不近不遠之謂、詩云、舍矢如破、亦其義也、譬如試及、揮而擊之、太近則鈍、太遠則鋭、鋭之與鈍、皆非所以能斷也、其利在乎不近不遠之間、所謂節也、夫弩之為制、數寸之牙、任千鈞之力、其勢不甚險乎、機動矢至、應弦而斃、其節不甚短乎、長勺之戰、魯公將鼓之、曹劌曰、未可、齊人三鼓、劌曰、可矣、齊師敗績、公問其故、對曰、夫戰勇氣也、一鼓作氣、再而衰、三而竭、彼竭我盈、故克之、蓋是其勢險而其節短也、舊說險猶疾也、短近也、勢如弩之張、節如機之發、皆未盡其義也、

紛紛紜紜、鬭亂而不可亂也、渾渾沌沌、形圓而不可敗也、

紛紛紜紜亂貌、渾渾沌沌圓貌、鬭亂而不可亂者、所謂鬭衆如鬭寡是也、形圓而不可敗者、所謂奇正相生如循環是也、

曹公曰、旌旗亂也、示敵若亂、非其義也、據相如傳註、紛紛又盛貌、方事之殷也、善戰之兵、亦不得不亂、亂言離合聚散無其常也、杜氏曰、此言陣法也、張氏曰、此八陣法、武侯之方陣、李靖之六花、唐太宗之破陣樂舞、皆其遺制也、古者陣法、亦皆如此、然孫武此言、止言善戰之兵、而非言陣法也、

亂生於治、怯生於勇、弱生於強、治亂數也、勇怯勢也、強弱形也、

此承上文不可亂、不可敗之意、以明治亂勇怯強弱、各相因而生之義也、王氏曰、治亂者數之變、勇怯者勢之變、強弱者形之變也、

天下國家之治亂、皆有數也、兵之為數、治亂亦然、古之善用兵者、治衆而不可亂、唯因其有分數焉耳、故曰、治亂數也、勇怯強弱、亦何常之有、勇者勢失、未必不怯、強者形疲、未必不弱、夫勇怯者氣也、勢可以治氣、強弱者力也、形可以治力、故曰、勇怯勢也、強弱形也、然其氣則

可以作之、其力則有不可強之者、故曰、求之於勢、不責於人、是篇之作、所以專論其勢也、曹公曰、亂生於治、怯生於勇、弱生於強、皆毀形匿情也、諸家皆因其說、以謂僞爲其形、以誘敵人、是則下文動敵之事、而非此節之義也、此節承上起下數者、接上文不可亂、不可敗而言、以應篇首所謂四事者也、勢者起下文求之之端、形者起下文形之之端、文字錯綜、意自接續、重在勢字、

故善動敵者、形之敵必從之、予之敵必取之、以利動之、以卒待之、

此因上文、而言形之之事也、形之示之形也、形者凡有可視者、皆是也、予之者、誘而利之也、以利動之者、動敵以其利也、卒忽遽也、以卒待之者、所以出其不意也、

卒與吳子卒遇敵人、司馬法見物應卒之卒同、孫武曰、兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也、蓋古者用兵貴疾速也、夫激水之勢、鷙鳥之節、自非其疾、則不至於漂石、不至於毀折、故其勢險、其節短、亦皆所以其以卒待之也、

李衞公靖、以卒爲本、疑非、

張氏曰、李靖以卒爲本、以本待之者、謂正兵節制之師、○卒梅氏以爲精卒、張氏以爲勁卒、何氏亦以兵卒爲解、亦是可以備一說焉、蓋

按孫武十三篇、未嘗用陰伏也、若依舊說、則是其言設伏而待之耳、司馬法曰、擅利則釋旗迎而擊之、言若敵擅其利、則釋去旌旗、迎而反擊之也、古者車建旌旗、釋旗言用少卒、漢韓安國傳曰、因單于之欲、誘而利之、邊伏輕卒銳士、以待之、乃用是策也、杜氏王氏、皆謂嚴兵以待之、似從衞之說者、要皆非孫武本旨耳、

故善戰者、求之於勢、不責於人、故能擇人而任勢、

此因上文、而言戰人之勢也、戰者勢耳、把三軍之衆、若使一人、要求之於勢而不責於人、惟能擇人而任勢、所以求之於勢也、擇人言選其精銳、所謂選鋒也、選鋒見地形篇、

既曰、不責於人、又曰、擇人而任勢、何也、夫

水性至弱、至於漂石者勢也、而非其激與疾、則不至於此、若其謂之水能漂石、則可乎、故不責於人者、不論其性也、擇人而任勢者、激而疾之也、

夫擇之之法、則在教練矣、任之之道、則在愛與威矣、

管子曰、爲兵之數、存乎選士、而士無敵、存乎政教、而政教無敵、存乎服習、又曰五教、一曰、教其目、以形色之旗、二曰、教其身、以號令之數、三曰、教其足、以進退之度、四曰、教其手、以長短之利、五曰、教其心、以賞罰之威、五教各習、而士負以勇矣、呉子曰、夫人常死所其不能、敗其所不便、故用兵之法、教戒爲先、一人學戰、教成十人、十人學戰、教成百人、百人學戰、教成千人、千人學戰、教成萬人、萬人學戰、教成三軍、又曰、一軍之中、必有虎賁之士、力輕扛鼎、足輕戎馬、搴旗斬將、必有能者、若此之等、選而別之、愛而貴之、是謂軍命、其有工用五兵材力健疾、志在呑敵者、必加其爵、利可以決勝、厚其父母妻子、勸賞畏罰、此堅陣之士、可與持久能審料、此可以擊倍、蓋是所以擇之之法也、孫子曰、視卒如嬰兒、故可與之赴深谿、視卒如愛子、故可與之俱死、愛而不能令、厚而不能使、亂而不能治、譬如驕子不可用也、尉繚子曰、夫不愛悅其心者、不我用也、不嚴其心者、不我擧也、愛在下順、威在上立、愛故不二、威故不犯、故善將者愛與威而已、蓋是所以任之之道也、

任勢者、其戰人也如轉木石、木石之性、安則靜、危則動、方則止、圓則行、

任勢戰人、以喩轉木石也、木石之性、不危不動、不圓不行、擇人而任勢、亦獨如此、梅氏曰、木石重物也、易以勢動、難以力移、三軍至衆也、可以勢戰、不可以力使、自然之道也、

故善戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者、勢也、

此喩善戰人者、其兵精鋭、其勢危險也、夫任勢者、未若有無任之勢也、若轉木石、木之與石猶自有辨、善戰人之勢、其勢在我焉耳、若轉圓石者、三軍之衆、齊勇若一、其勢弩張、其節機發、

行無レ不レ行、而不レ止不レ可レ止也、管子所レ謂獨出獨入、而莫ニ之能止一、亦是義也、

管子曰、敎器備利、進退若ニ雷電一、而無レ所ニ疑匱一、一氣專定、則傍通而不レ疑、厲レ士利レ械、則涉レ難而不レ匱、進無レ所レ疑、退無レ所レ匱、敵乃爲レ用、凌ニ山阬一、不レ待ニ鉤梯一、歷ニ水谷一不レ須ニ舟檝一、徑ニ於絕地一、攻ニ於恃固一、獨出獨入、莫ニ之能止一、

孫武曰、戰勢不レ過ニ奇正一、奇正者戰勢也、故其爲レ說也、亦以レ正爲レ奇、而其言ニ善出一レ奇也、愈出而不レ可レ竭、其言ニ奇正相生一也、愈變而不レ可レ窮、中分而爲レ勢、爲レ節愈分、而爲レ數爲レ形、未ニ復合一、而言ニ善戰レ人之勢一、蓋奇正所ニ以爲ニ戰勢一、而其勢所ニ以名一レ篇也、凡其取レ喩、大レ之爲ニ天地一、明レ之爲ニ日月一、流レ之爲ニ江河一、變レ之爲ニ四時一、水而激レ之、鳥而鷙レ之、弩而張レ之、機而發レ之、止而爲レ木、轉而爲レ石、危且險、而爲ニ山之千仞一者、其文宛轉變幻、如下循環之不上レ可ニ端倪一、蘇子瞻所レ謂雖レ欲レ加レ之、不レ知レ所ニ以加一者也矣、

孫武兵法擇卷第五終

孫武兵法擇卷第六

虛實篇

舊說、形篇言攻守、勢篇說奇正、蓋奇正自攻守而用、虛實由奇正而見、故次勢云、

孫子曰、凡先處戰地而待敵者佚、後處戰地而趨戰者勞、

戰者、會戰之地也、勞佚者、指士馬之力而言、戰地、會氏以爲形勝之地、張氏以爲形勢之地、美謂、只汎言交戰之地耳、未必說到形勝形勢等上、

故善戰者、致人而不致於人、

此因上文而言用兵之法、一篇要旨、實在于此耳、致人者、先處戰地而待敵、是也、致於人者、後處戰地而趨戰、是也、然致人而不致于人、不止善治其力者已、實是用兵要訣、能爲敵之司命、亦由于此、李靖嘗論奇正虛實謂、千章萬句、不出乎致人而不致于人而已、即謂之也、

能使敵人自至者、利之也、能使敵人不得至者、害之也、

此推明上文之義也、

故敵佚能勞之、飽能饑之、安能動之、出其所必趨、趨其所不意、

此承上文反覆以言致人而不致于人之事也、夫善治力者、以近待遠、以佚待勞、以飽待饑、軍爭篇在敵則反之也、勞之饑之動之、要在因利而制權耳、

勞之饑之動之、諸家所註、各自不同、若其能勞之、則曹公曰、以事煩之、李氏曰、攻其不意、使敵疲於奔命、張氏曰、爲多方以詭之之術、使其不得休息、能饑之、則曹公曰、絕糧道以饑之、李氏曰、焚其積聚、芟其禾苗、絕其糧道、能動之、則曹公曰、攻其所必愛、出其所必趨、則使敵不得不相救也、其他衆說、亦皆如之、而陳氏以謂、飢敵之術、在臨事應機、美謂臨事應機、不止饑敵之術耳、

出其所必趨者、乃攻其所必救也、

即見下文、

趨其所不意者、乃出其不意也、

計篇云、攻其無備、出其不意、

近本以必趨為不趨者非、

舊說、皆以出其所必趨為解、蓋謂其能勞之動之者、出其所必趨也、近本皆作其所不趨、即與下句一意、最失其義也、

行千里而不勞者、行於無人之地也、攻而必取者、攻其所不守也、　而必固者、守其所不攻也、

行無人之地者、衝其虛也、

杜氏曰、言不勞者、空虛之地、無敵人之虞、行止在我、故不勞也、陳子曰、夫言空虛者、非止為敵人不備也、但備之不嚴、守之不固、將弱兵亂、糧少勢孤、我整軍臨之、彼必望風自潰、是我不勞者、如行無人之地、陳注乃是推廣其說而言耳、

攻其所不守者、攻其無備也、取者言其易也、

杜氏曰、警其東擊其西、誘其前襲其後、王氏曰、攻其虛也、謂將不能、兵不精、壘不堅、備不嚴、救不及、食不足、心不一耳、張氏曰、善攻者、動於九天之上、使敵人莫之能備、則吾之所攻者、乃敵之所不守也、諸說皆是推廣其說而言之耳、

守其所不攻者、即無恃其不攻、恃吾有所不可攻也、九變篇

不攻尚守、何況其所攻乎、王氏曰、守以實也、謂將能兵精、壘堅備嚴、救及食足、心一齊、張氏曰、善守者、藏於九地之下、使敵人莫之能測、則吾之所守者、乃敵之所不攻也、諸說亦推廣其說而言耳、

已上三者、總而言之、則皆出其不意之事也、

故善攻者、敵不知其所守、善守者、敵不知其所攻、

善攻者、如雷之擊、不可為備、動於九天之上是也、善守者、如龍之蟄、莫之能測、藏於九地之下是也、

曹公曰情不泄也、杜氏張氏皆因其說、梅氏曰、善攻者、機密不泄、守者周備不隙、皆非也、孫武

曰、措勝於衆、衆不能知、夫惟無形、是以衆不能知、非不泄之謂也、

微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至於無聲、故能爲敵之司命、

管子曰、善者之爲兵也、使敵若據虛、若搏景、無設無形焉、無不可以成也、無形無爲焉、無不可以化也、此之謂道矣、孫武之言、蓋本于此、夫有形者、生於無形、猶泥之在鈞、惟甄者之所爲、善用兵者、夫惟無形、是以能制有形、故曰、能爲敵之司命、

形形者、未始有形之可睹也、聲聲者、未始有聲之可聞也、形之所形而至於無形、如形其形者、微之微也、聲之所聲而至於無聲、如聲其聲者、神之神也、然非未始有其形聲者、亦能使人不能窺且聽之也、夫物之有形、翼飛者不能游于淵、鱗潛者不能翔于天、足行者不能飛且潛、皆其有形而爲之累也、惟其無形者、莫有所不能也、故入小而不偪、處大而不窕、無所不在、而無所不至、善用兵者、運於無形、出于不意、若鬼之無迹、若神之不測、若從地出、若從天下、所向非所之也、所見非所謀也、未見其發、固已至矣、擧措動靜、莫之能識也、其斯之謂無形與聲哉、但敵人不能窺聽耳、

進而不可禦者、衝其虛也、退而不可追者、速而不可及也、

已上結上文之意、

進而衝其虛者、如飄風、故不可禦也、速而不可及者、卒如收電、故不可追也、此又言出其不意也、

此汎言其進而不可禦、其退而不可追也、舊解或云、乘虛而進、逐利而退、或云、進乘其虛、退因其利、皆非也、李氏以速爲遠、云遠者、必輕重在先、行遠而大軍始退、是以不可追、亦非也、凡兵退則利速、若夫大軍將退、輜重在先、羸弱次之、世將之所遍知也耳、

故我欲戰、敵雖高壘深溝、不得不與我戰者、攻其所必救也、

此承上文、而言出其所必趨也、高壘深溝、

言守之固也、攻其所必救者、先奪其所愛是已、九地篇

曹公曰、絕其糧道、守其歸路、攻其君主也、蓋其所必救者不止於此、要在先奪其所愛耳、如晉楚戰于鄢陵、秦晉戰于河曲、楚子重子反疲於奔命、亦皆是也、魏討遼東、司馬懿不攻長圍、直趨襄平、乃用此策者、攻其君主也、

我不欲戰、雖畫地而守之、敵不得與我戰者、乖其所之也、

此言趨其不意也、畫地而守、言守之不固也、乖戾也、

增韻戾違也、

淮南子云、所向非所之也、所視非所謀也、郎謂之也、

曹公註云、示以利害、使敵疑也、蓋亦不止于此耳、如楚人伐鄭、鄭縣門不發、楚言而出、楚人夜遁、楚人欲襲晉軍、晉以藩爲軍候、遮扞、衛不行、楚人不敢謀、亦是義也、

故形人而我無形、則我專而敵分、我專爲一、敵分爲十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡、能以衆擊寡、則吾之所與戰者約矣、

形人而我無形、謂示人以形而、我實無形也、

梅氏曰、他人有形、我形不見、故敵分兵以備我、是謂使人有形而我無形也、亦可以備一說耳、

約少也、夫志定則專、心疑則分、形見者、其動靜皆可以知、形滅者、其景迹以莫可測、故我專而爲一、敵分而爲十、以十攻其一、則我兵之十、當敵之一、所以我衆而敵寡也、我能以衆者一擊寡者一、則吾之所與戰者、我十分之一、故曰約矣、

自此以下、皆謂無形之事也、

吾所與戰之地、不可知、不可知則敵所備者多、敵所備者多、則吾所與戰者寡矣、

我之形勢、彼且不測、會戰之地、何亦可知、其不可知、則分軍陳兵所在多備、所備既多、所戰既寡、則吾舉大衆臨孤軍矣、

故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備則無所不寡、寡者備人者也、衆者使人備已者也、

戰備愈多、戰兵愈寡、寡者備人之故也、衆者使人備已之故也、使人備已者、所以能致人也、

故知戰之地、知戰之日、則可千里而會戰、

善爲將者、先料敵制勝、計險阨遠近、（地形篇）故知當戰之地、而知當戰之日、則千里之遠、可刻期而會戰矣、

蹇叔知晉人禦師必於殽、是知戰地也、孫臏度龐涓暮當至馬陵、不止知戰地戰日、又知其時也、魏主使司馬懿將兵四萬、討遼東、因謂懿曰、公孫淵將何作以待君、對曰、棄城豫走、上計也、據遼東、拒大軍、其次也、座守襄平、此成禽耳、曰、三者何出、對曰、唯明智能審量彼我、乃豫有所割棄、此非淵所及、必先拒遼東、後守襄平也、曰、還往幾日、對曰、往百日、攻百日、還百日、以六十日爲休息、如此一年足矣、及克遼東、皆如所謀、古之善用兵者、亦有如此、孫武此言不誣矣、

不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者數十里、近者數里乎、

戰地戰日、皆無所知、則卒遇敵軍、呼不給吸、兵雖衆多、勢不可格、左右前後、猶不能應援、而況相去既遠者乎、極言其不利也、

以吾度之、越人之兵雖多、亦奚益於勝敗哉、故曰、勝可爲也、敵雖衆可使無鬭、

吾指諸夏也、越蠻夷國名、

越人與孟子越人關弓同、指蠻夷人而言也、李氏解越爲過、而陳子曰、孫子爲吳王闔閭論兵、吳與越讎、故言、越謂過人之兵、非義也、美謂、陳子以李說爲非者可也、而謂孫武爲闔閭所論者、未可也、武豈爲吳王而著其書者也哉、

言蠻夷之人、不能知戰、其兵雖多、可使無與我鬭也、極言其不知戰地戰日者之非也、

吾一作吳者訛、

張氏曰、吳字作吾、字之誤也、此說尤非也、近本吾或作吳、承襲其謬耳、

故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有餘不足之處、

策籌也、知得失之計、言校之以計也、作起也、發

也、知二動靜之理一、卽言レ索二其情一也、
　梅氏曰、彼動靜之理、因二我所一レ發而見、是也、賈氏曰、善覘候者、必知二其動靜之理一、卽是解レ作爲二覘候一也、杜預左傳註、諜者伺也、郭璞爾雅註間、左傳謂二之諜一、今之細作也、細作或出二於古之遺語一、則作猶レ言二伺候一也、亦可三以備二一說一耳、張賁改レ作爲レ詐者、疑非也、
形謂レ度二地形一也、知二死生之地一、卽言レ知二戰之地一也、杜氏以謂二戰地一是也、
　孫武曰、地形者、兵之形也、先察下可二與戰一之地上、則可三以知二其勝敗一矣、死生猶レ言二勝敗一也、舊解有二死地生地等說一者泥、
角校量也、
　曹公曰、角量也、按管子曰、斗解也、角量也、謂二之法一、角量器名、古通作レ觳、考工記註、觳受二斗二升一是也、亦因借用爲二量レ之之義一、月令仲春仲秋角甬、漢志量始二于龠一、合二於合一、登二於升一、聚二於斗一、角二於斛一是也、月令鄭氏注、角謂レ平レ之也、陳氏注、角者較二其同異一、蓋校二其同異一、所二以平一レ之也、劉氏直解引二左氏傳左右角一レ之、以謂舊說角爲二角量一、與二儒家一不レ同、未レ知二何所一レ出也、蓋劉氏不三自知二其有一レ所レ出耳、
知二有餘不足之處一、謂レ知二敵軍强弱之所一レ在地一、
　左氏傳曰、王以二諸侯一伐レ鄭、鄭伯禦レ之、王爲二中軍一、虢公林父將二右軍一、蔡人衛人屬焉、周公黑肩將二左軍一、陳人屬焉、鄭子元請爲二左拒一、以當二蔡人一、衛人爲二右拒一、以當二陳人一、曰、陳亂民莫レ有二鬪心一、若先犯レ之必奔、王卒顧レ之必亂、蔡衛不レ枝、固將二先奔一、旣而萃二於王一、卒可二以集一レ事、又鄢陵之戰郤至、曰、楚有二六間一、不レ可レ失也、其二卿相惡、王卒以二舊鄭一陣、而不レ整、蠻軍而不レ陣、陣不二違晦一、在レ陣而囂、各顧二其後一、莫レ有二鬪心一、舊不二必良一、以犯二天忌一、我必克レ之、苗賁皇在二晉侯之側一、亦以二王卒一告曰、楚之良在二其中軍一而已、請分レ良以擊二其左右一、而三軍萃二于王一、卒必大敗レ之、若二此二事一、則角レ之、而知二有餘不足之處一也、此言下籌二其軍計一、發二其兵情一、度二其戰地一、校中其衆力上、知二此四者一、則勝可レ爲也矣、
故形レ兵之極、至二於無形一、無レ形則深間不レ能レ窺、智者不レ能レ謀、

此承二上文一、申二明無形之義一也、形レ兵謂二兵之所一レ形也、蓋上文四者、可二得而知一、以レ有二其形一也、故兵之所レ形、至二於無形一、則深間不レ能レ窺二其隙一、智者無レ所レ用二其計一、是其極致也、

因レ形而措二勝於衆一、衆不レ能レ知、人皆知下我所二以勝一之形上、而莫レ知下吾所二以制一レ勝之形上、

因レ形而措レ勝、謂二敵已有一レ形、我乃因レ之、擧レ勝而措レ之耳、言二其易一也、我所二以勝一之形、即是敵所二以敗一之形也、吾所二以制一レ勝之形、即是我所三以使二敵自敗一之形也、此言乙我因二敵形一、而置二勝於衆人之中一、衆人不レ能レ知レ之、衆人惟知下我因二敵形一而勝上之、而莫レ知四我能使三敵有二其形一也、夫能爲二敵之司命一者、其斯之謂也、蓋我所二以勝一之形、則在レ敵也、吾所二以制一レ勝之形、則在レ我也、在レ我者、本自無レ形、故衆不レ能レ知也、

杜氏曰、言下已勝之後、但知四我制レ敵又使三有二敗形一、本自二於我一、然後我能勝上レ之也、上文云、近而示二之遠一、遠而示二之近一、利而誘レ之、亂而取レ之、實而備レ之、强而避レ之、怒而撓レ之、卑而驕レ之、佚而勞レ之、親而離レ之、斯皆制レ勝之道、人莫レ知レ之也、杜氏此解說得甚好、諸家所レ註皆不レ若レ此耳、

故其戰勝不レ復、而應二形於無窮一、

此結二上文一、而言下我戰已勝不三復用二前謀一、唯應中其形於無窮上、蓋因レ形而措レ勝、其形則在二乎彼一、而因レ之則在二乎我一矣、兵無二常形一、唯我因レ之已、故其應二無窮一、唯我無レ形、所三以應二其形於無窮一也、

夫兵形象レ水、水之形、避レ高而趨レ下、兵之形、避レ實而擊レ虛、水因レ地而制レ流、兵因レ敵而制レ勝、

兵之形勢、取二喩於水一、言二其無一レ常也、管子曰、釋レ實而攻レ虛、孫武之言、蓋本二於此一、水因レ地而制レ流、無レ分二於東西一是也、兵因レ敵而制レ勝、因レ利而制レ權是也、

故兵無二常勢一、水無二常形一、能因レ敵變化、而取レ勝者、謂二之神一、

兵無二常勢一者、因レ敵而制レ勝也、水無二常形一者、因レ地而制レ流也、神者不レ可レ知レ之之謂、尉繚子曰、兵之所レ及、羊腸亦勝、鋸齒亦勝、緣レ山亦勝、入レ谷亦勝、方亦勝、圓亦勝、蓋其無二常勢一、變化取レ勝者、乃是如レ此、

故五行無二常勝一、四時無二常位一、日有二長短一、月有二死

生一、

兵之無レ形、豈無二其形一、唯言三其無二常形一爾、故上文取二象於水一、以形二其妙一、而又猶レ恐二人之未レ達、至レ此乃引二五行四時日月之變一、而喩二其無レ常、以結二一篇之意一、

兵無二常形一、未レ戰則據レ實而待レ虛、兵無二常勢一、將レ戰則避レ實而擊レ虛、善用レ兵者、不下止待二其虛一擊中其虛上而已、敵人之實、能變而虛レ之、敵人之勝、我能制而敗レ之、唯我擧レ兵、而加二之於彼已敗者一、故曰、如二以レ碫投レ卵者、虛實是也、夫致レ人而不レ致レ於レ人者、形レ人而我無レ形之大旨、而兵之所レ形、至二於無形一者、我所二以制一レ勝之極致也、虛實之說、要歸二于此一矣、故篇以二虛實一名、而其言及レ此、僅有二避レ實而擊レ虛一言一耳、若二彼無形一、則一篇之中、三致二其意一反覆丁寧示レ人也至矣、

孫武兵法擇卷第六終

孫武兵法擇卷第七

軍爭篇

舊說曰、先知二彼我之虛實一、然後能擧レ兵爭レ勝、故次二虛實一云、

孫子曰、凡用レ兵之法、將受二命於君一、合レ軍聚レ衆、交レ和而舍、莫レ難二於軍爭一、

將將帥也、和軍門也、

周禮、以レ旌爲二左右和之門一、鄭氏註二軍門一曰、和今謂二之壘門一、立二兩旗一以爲レ之、敘レ和出入、次第出二和門一也、

曹公曰、兩軍相對、爲二交和一、軍爭者、我得亦利、彼得亦利、爲二爭地一、九地篇兩軍爭レ之也、言下將受二君命一、率二三軍之衆一、而出與二敵軍一相對、而爭二地之利一、最其難上矣、

交和而舍、李氏曰、交間和雜也、合レ軍之後、强弱勇怯長短向背、間雜而忤レ之、力相兼、後合二諸營壘一、與レ敵爭レ之、張氏一說、與二上下一交、相和睦、然後可三以出レ兵爲二營舍一、皆非也、戰國齊策、秦假二道韓魏一、以攻レ齊、齊使二章子將而應一レ之、與レ秦交和而舍一、是謂二兩軍相對者一也、曹註乃謂レ之矣、

軍爭之難者、以レ迂爲レ直、以レ患爲レ利、

此明二軍爭最難之義一也、梅氏曰、能變レ迂爲レ近、轉レ患爲レ利、難也、

故迂二其途一、而誘レ之以レ利、後レ人發、先レ人至、此知二迂直之計一者也、

此言三以レ迂爲レ直、以レ患爲二利之計一、卽軍爭之利也、迂二其途一者、示二之遠一也、誘レ之以レ利者、利而誘レ之也、

賈氏曰、敵途本近、我能迂レ之者、或以二羸兵一、或以二小利一、於二佗道一誘レ之、使レ不レ得三以レ軍爭赴一也、

後レ人發、先レ人至者、我先分二精銳一、自二間道一出、以據二爭地一、而大衆繼發、自二敵後一與二我精銳一合、下文兵以レ詐立、以レ利動、以二分合一爲レ變、卽謂レ之也、

王氏曰、曹公曰、示以レ遠、速二其道里一、先レ敵至、哲謂、示以レ遠者、使二其不一レ虞而行、或奇兵從二間道一

出也、何氏曰、所ㇾ征之國、路由ニ山險一、迂曲而遠行、欲ㇾ爭ㇾ利、則當下分ㇾ兵出ㇾ奇、隨逐鄕導、由ニ直路一乘ニ其不備一、急擊上之、雖ㇾ有ニ陷ㇾ險之患一、得ㇾ利亦速也、如ニ鍾會伐ㇾ蜀、鄧艾出ㇾ奇先至ㇾ蜀、蜀無ㇾ備而降、故下云、不ㇾ得ニ鄕導一、不ㇾ能ㇾ得ニ地之利一也、又曰、當ㇾ行之途、示以ㇾ迂、變設ㇾ勢以誘ㇾ敵、令下得ニ小利一縻上之、則出ㇾ奇之兵、雖ニ後發一、亦先至也、故下云、分合爲ㇾ變、其疾如ㇾ風是也、○杜氏註引下趙奢救ニ閼與一事上、頗與ㇾ此合、因附ニ于此一、秦伐ニ韓軍於閼與一、趙王令ニ趙奢將救一ㇾ之、去ニ邯鄲ニ三十里、而令ニ軍中一曰、有下以ニ軍事一諫者上死、秦軍ニ武安西一、秦軍鼓譟勒ㇾ兵、武安屋瓦皆震、軍中候有ニ一人一、言ニ急救ニ武安一、奢立斬ㇾ之、堅ㇾ壁留一十八日不ㇾ行、復益增ㇾ壘、秦間來、奢善食而遣ㇾ之、間以報ㇾ秦、秦將大喜曰、夫去ㇾ國三十里、而軍不ㇾ行、乃增ㇾ壘、閼與非ニ趙地一也、奢旣遣ニ秦間一、乃卷ㇾ甲而趨、二日一夜至、令下善射者去ニ閼與一五十里而軍上、秦人聞ㇾ之、悉ㇾ甲而至、有ニ一卒一曰、先據ニ北山一者勝、奢使ニ萬人據一ㇾ之、秦人來爭、不ㇾ得、奢因縱擊大破ㇾ之、閼與遂得ㇾ解、

故軍爭爲ㇾ利、軍爭爲ㇾ危、

此承ニ上文一、以起ニ下文一、言ニ軍爭爲ㇾ利亦以爲ㇾ危、故曰、以ㇾ利動、一本作ニ衆爭爲ㇾ危皆誤、

舊註皆如ニ一本一、蓋後人未ㇾ達、遂改ニ其字一、亦爲ニ之說一曰、按ニ部伍一而行、則爲ㇾ軍、不ㇾ按ニ部伍一而行、則爲ㇾ衆、訛謬特甚、

擧ㇾ軍而爭ㇾ利則不ㇾ及、委ㇾ軍而爭ㇾ利則輜重捐、

此言ニ軍爭爲ㇾ危也、擧ㇾ軍而爭者、重兵行緩、故不ㇾ及ニ其利一也、委ㇾ軍而爭者、輕兵進急、故不ㇾ給ニ其資一也、司馬法曰、以ㇾ重行、重則無ㇾ功、以ㇾ輕行、重則敗、卽謂ㇾ之也、

賈氏曰、委ㇾ軍而爭、則恐ニ敵知而絕ニ我後糧一也、

美謂、賈說是其餘意耳、非ニ正解一也、

是故卷ㇾ甲而趨、日夜不ㇾ處、倍ㇾ道兼行、百里而爭ㇾ利、則擒ニ三將軍一、勁者先、疲者後、其法十一而至、

此言ニ擧ㇾ軍而爭之難一也、卷ㇾ甲謂ニ輕兵一也、

司馬法曰、甲以ニ重固一、而今欲ニ輕進一、故卷ㇾ之也、卷者卽謂ニ囊甲一也、張氏曰、卷ㇾ甲猶ニ悉甲一也、悉甲而進、謂ニ輕重俱行一、非也、據ㇾ史趙奢卷ㇾ甲而趨ニ閼與之下一、二日一夜而至、秦人聞ㇾ之悉ㇾ甲而

至、卷甲悉甲義自不同、韓安國傳云、卷甲而輕擧、謂輕兵也

倍道兼行者、凡軍日行三十里、爲一舍、晝夜不息、乃倍其道兼行也、三將軍者、三軍之帥也、言三軍之衆、輕擧疾趨、幷日倍道、爭利百里、則其帥皆爲擒矣、勁者爭先、疲者落後、其法凡十之一而至也、蓋我勞彼佚、彼飽我餓、以寡敵衆、不能不敗也、

曹公曰、百里而爭、則非也、杜氏曰、此說未盡也、其法什一而至者、不得已、必須爭利、凡十人中擇一人、最勁者先往、其餘者則令繼後而往、萬人中先擇千人、平旦先至、其餘繼至、有巳午時至者、有申未時至者、各得不竭其力、相續而至與先往者足得聲響相接、凡爭利、必是爭奪要害、雖千人守之、亦足拒抗敵人以待繼至者、太宗以三千五百騎、先據武牢賓、建德十八萬衆、而不能前、此可知也、陳氏曰、杜說是用兵一途、非什一而至之義也、按陳說誠然、兵無常勢、要在因利而制權耳、且孫武曰、爭地吾將趨其後、杜說頗合、又是一說可備互

考、

五十里而爭利、則蹶上將軍、其法半至、

曹公曰、蹶猶挫也、賈氏曰、上猶先也、周制、大國三軍、次國二軍、小國一軍、晉獻公作二軍、公將上軍、太子申生將下軍、文公蒐于被廬、作三軍、郤縠將中軍、郤溱佐之、狐毛將上軍、狐偃佐之、欒枝將下軍、先軫佐之、鄱陽馬氏曰、二軍則上軍爲尊、三軍則中軍爲尊、賈氏云上猶先、謂前軍久至爲敵所蹶敗也、王氏曰、罷勞之患、滅大半、止挫敗已、

三十里而爭利、則三分之二至、

杜公曰、道近則至者多、故不言死敗勝負未可知也、

杜氏曰、不言其法者、擧上文可知也、

是故軍無輜重則亡、無糧食則亡、無委積則亡、

此言委軍爭利之難也、輕重者、器械及軍士衣裝、

漢書師古注、輜謂衆車、重謂載重物、故行者之資、曰輜重、

委積者、薪芻蔬材及守衛陳兵之器也、

周官、委人掌二軍裝一、共二其委積薪芻凡蔬材木材兵器財用一、註兵器謂二守衛陳兵之器一也、

曹公曰、無二此三者一、亡之道也、

故不レ知二諸侯之謀一者、不レ能二豫交一、

此已下承二上文一、以論二軍爭之法一也、凡諸侯之地、犬牙相錯、有二交地者一、有二衢地者一、故曰、交地則無レ絕、衢地則合レ交、又曰、交地吾將レ謹二其守一、衢地吾將レ固二其結一、竝見二九地篇一、 我今欲二與レ敵爭一レ地合レ交、隣國可三以假二其道一、可三以請二其援一、苟非三先知二其謀一、恐有二後患一、故曰、不レ知二諸侯之謀一者、不レ能二豫交一、

楚莫敖屈瑕伐レ絞、楚師分涉二於彭一、羅人欲レ伐レ之、使二課三巡數一レ之、楚遂伐レ羅、羅與二盧戎一、兩二軍之一大敗レ之、莫敖縊死、秦人襲レ鄭、聞二鄭有一レ備、滅レ滑而還、晉遽興、姜戎敗二秦師於殽一、獲二其三帥一、是則不レ知二諸侯之謀一、而遭二無望之禍一矣、

不レ知二山林險阻沮澤之形一者、不レ能レ行レ軍、

管子曰、必先審知二地圖一是也、

管子曰、凡兵主者、必先審知二地圖一、轘轅之險、濫車之水、名山通谷、經川陵陸丘阜之所レ在、苴草林木蒲葦之所レ茂、道里之遠近、城郭之大小、名邑廢邑、困殖之地、必盡知レ之、地形之出入相錯者、盡藏レ之、然後可二以行レ軍襲一レ邑、擧措知二先後一、不レ失二地利一、此地圖之常也、

曹公曰、高而崇者爲レ山、衆樹所レ聚者爲レ林、坑塹者爲レ險、一高一下者爲レ阻、水草漸洳者爲レ沮、衆水所レ歸而不レ流者爲レ澤、不三先知二軍之所レ據、及山川之形一者、不レ能レ行レ師也、

不レ用二鄕導一者、不レ能レ得二地利一、

梅氏曰、凡丘陵原衍之向背、城邑道路之迂直、非二人引導一、不レ能レ得也、

鄕許亮切、音向、向嚮字通、 言指向導引也、 杜佑曰、不下任二彼鄕人一而導上レ軍者、則不レ能レ得二道路之便利一也、 陳氏何氏張氏皆與レ之同、 讀レ鄕如レ字、以爲二鄕邑之鄕一者誤、然用二其士人一、爲二之嚮導一、亦可レ能レ得二地利一也、

故兵以レ詐立、以レ利動、以二分合一爲レ變者也、

以レ詐立者、謂二以レ迂爲レ直、以レ患爲一レ利也、以レ利動者、軍爭爲レ利、軍爭爲レ危、故不レ利不レ動也、以二分合一爲レ變者、先分二精銳一、以據二爭地一、疾趨二敵後一、與二我精銳一合也、

陳子曰、乍合乍分、隨而更變也、又曰、若地利在レ前、先分二精鋭一、以據レ之、彼若恃レ衆來爭、我以二大衆一趨二其後一、無レ不レ尅者、趙奢所三以破二秦軍一也、

故其疾如レ風、其徐如レ林、侵掠如レ火、不レ動如レ山、難レ知如レ陰、動如二雷震一、

此承二上文一而言、如レ林、卽所レ謂正正堂堂者也、（見二下文一）

秦誓、受率二其旅一若レ林、孔氏傳云、若レ林言二盛多一也、大雅、殷商之旅、其會如レ林、孔氏疏云、如レ林言二衆多一也、此云二其徐如一レ林、王氏以爲二齊肅一是也、

如下火不上レ可二嚮邇一也、

尉繚子曰、重者如レ林如レ山、輕者如レ炮如レ燔、此如レ風如レ林、疾徐相對而言、則如レ火如レ山、輕重相對、亦未レ可レ知也、

如レ陰言レ如二雲霧冥晦一也、如二雷震一、淮南子曰、若二雷之撃一、不レ可レ爲レ備是也、震一作レ霆、其義亦通、

掠レ郷分レ衆、廓レ地分レ利、懸レ權而動、

掠取也、廓開也、言下取二掠郷邑一分二其民衆一、廓二開疆界一、分中其他利上、是軍爭之利、所レ謂勝レ敵而益レ强也、

掠レ郷一作二指囘一、疑誤、

分レ衆分レ利、諸家所レ解、其說紛紛、要皆未レ達耳、

賈氏王氏並從二指向之義一、亦非也、

軍爭之難、以レ患爲レ利、先爲二之計一、猶下懸二權衡一量中物輕重上、合レ利而後動、所レ謂以レ利動也、故曰、智者之慮、必雜二於利害一、雜二於利一而務可レ信也、雜二於害一而患可レ解也、（九變篇）

先知二迂直之計一者勝、此軍爭之法也、

通結二上文一、

管子曰、軍爭者、不レ行三於完二城池一、孫武亦唯言二掠レ郷廓一レ地而已、司馬法曰、利二地守一、險二險阻一、旣曰二廓レ地分一レ利、則獲固守レ之、獲泥塞レ之、獲艱屯レ之、亦不レ言而可レ知矣、

軍政曰、言不二相聞一、故爲二金鼓一、視不二相見一、故爲二旌旗一、

軍政、古之軍志也、周禮、鼓人掌二金鼓一、以和二軍旅一、以正二田役一、凡軍旅夜鼓鼜、軍動則鼓二其衆一、管子曰、鼓所二以任一也、所二以起一也、所二以進一也、金所二以坐一也、所二以退一也、所二以免一也、旗所二以立一レ兵也、

所二以利レ兵也、所二以假レ兵也、此之謂下三官有二三令一、而兵法治上也、

夫金鼓旌旗者、所三以一二人之耳目一也、人既專一、則勇者不レ得二獨進一、怯者不レ得二獨退一、此用レ衆之法也、故夜戰多二火鼓一、晝戰多二旌旗一、所三以變二人之耳目一也、

旌旗金鼓、所二以用一レ衆也、故曰、鬭レ衆如レ鬭レ寡、形名是也、

吳子曰、夫鼙鼓金鐸、所二以威一レ耳、旌旗麾幟、所二以威一レ目、禁令刑罰、所二以威一レ心、耳威二於聲一、不レ可レ不レ清、目威二於色一、不レ可レ不レ明、心威二於刑一、レ不レ可レ不レ嚴、三者不レ立、雖レ有二其國一、必敗二於敵一、故曰、將之所レ麾、莫レ不二從移一、將之所レ指、莫レ不二前死一、又曰、凡戰之法、晝以二旌旗旛麾一爲レ節、夜以二金鼓笳笛一爲レ節、麾レ左而左、麾レ右而右、鼓レ之則進、金レ之則止、一吹而行、再吹而聚、不レ從レ令者誅、三軍服レ威、士卒用レ命、則戰無二强敵一、攻無二堅陣一矣、美謂、周禮曰、金鼓以和二軍旅一、孫武則曰、所三以一二人之耳目一也、吳起則曰、所二以威一レ耳也、所二以威一レ目也、蓋謂レ一レ之、所二以和一レ之也、非下所二以威一レ之之謂上也、大抵孫吳論レ兵、武也、主二智計一、起也主二嚴法一、不下止其材有二高下一而已上、若其爲レ人亦可二以覩一レ之矣、又按樂書曰、胡笳似二觱栗一而無レ孔、後世鹵簿用レ之、世言伯陽避入二西戎一所レ作、吳子言二笳笛一、則蓋是之時、旣有二此物一矣、

自レ此已下、因レ論二軍爭之法一、又論二用レ衆用レ兵之法一也、

故三軍可レ奪レ氣、將軍可レ奪レ心、

三軍可レ奪レ氣者、如三曹劌曰二彼竭我盈一是也、

事見二左氏傳莊十年一、詳二于下註一、

將軍可レ奪レ心者、如三趙孟曰二先人有レ奪二人之心一、是也、

趙宣子曰、先レ人有レ奪二人之心一、軍之善謀、事見二左傳文七年一、

此承二上文一、以起二下文一、

前之所レ論、是用レ衆之法、此言二善用レ兵者、不二止如レ此、亦可三因奪二彼三軍之氣、將軍之心一也、

是故朝氣銳、晝氣惰、暮氣歸、

李衞公曰、所レ謂朝氣銳者、非下限二時刻一而言上也、擧二一日始末一爲レ喩也、愚謂、如三曹劌曰二一鼓作レ氣

者朝氣也、再而衰者晝氣也、三而竭者暮氣也一、

故善用レ兵者、避二其銳氣一、擊二其惰歸一、此治レ氣者也、

此承二上文一、而言下治二吾氣一者、所丙以奪乙人之氣甲也、

以レ治待レ亂、以レ靜待レ譁、此治レ心者也、

此言下善治二吾心一者、所丙以奪乙人之心甲也、夫長勺之戰、魯公將レ鼓レ之、非三以レ靜待レ譁者一也、魯公將レ馳レ之、非三以レ治待レ亂者一也、若二曹劌一、則庶三其治レ氣而治レ心者一矣、

長勺之戰、魯公將レ鼓レ之、曹劌曰、未レ可、齊人三鼓、劌曰可矣、齊師敗績、公將レ馳レ之、劌曰、未レ可、下視二其轍一、登レ軾望レ之曰、可矣、遂逐二齊師一、既克、公問二其故一、對曰、夫戰勇氣也、一鼓作レ氣、再而衰、三而竭、彼竭而我盈、故克レ之矣、大國難レ測、懼有レ伏焉、吾視二其轍亂一、望二其旗靡一、故逐レ之、

以レ近待レ遠、以レ佚待レ勞、以レ飽待レ饑、此治レ力者也、

三者說見二于前一、

無レ邀二正正之旗一、勿レ擊二堂堂之陣一、此治レ變者也、

曹公曰、正正齊也、堂堂大也、夫善戰者、勝二于易レ勝者一也、措二勝於已敗一、而不レ失二敵之敗一者也、正正之旗、堂堂之陣、豈易レ勝者哉、且以レ正合、爲レ奇勝、奇正之變、不レ可レ勝レ窮也、故曰、治レ變者也、

治力治變二者、因レ論二治氣治心一以及レ之也、

故用兵之法、高陵勿レ向、背丘勿レ逆、

向者仰也、背者倚也、逆者迎也、言敵據二丘陵一、不レ可二仰攻一、不レ可二迎戰一、人馬之馳逐、弧矢之施發、勢皆不レ便、及有二隕石之衝一也、

佯北勿レ從、銳卒勿レ攻、

勿レ從者從レ有レ伏也、勿レ攻者避二其銳一也、

餌兵勿レ食、歸師勿レ遏、

餌者取二喩於魚一也、誘レ之以レ利、必有二奇伏一、

李氏曰、秦人毒注二上流一、杜氏曰、後魏文帝時、庫莫奚侵擾、詔二濟陰王新成一、率レ衆討レ之、王乃多爲二毒酒一、賊既漸逼、便棄レ營而去、賊至、喜競飲、酒酣毒作、王簡二輕騎一縱擊、俘獲萬計、陳氏曰、此之獲レ賊、蓋非二偶然一、固非下爲レ將之道垂二後世一法上也、孫子豈以二他人一不レ能レ致二毒於人腹中一哉、此言喩レ魚若レ餌不レ可レ食也、敵若懸レ利不レ可レ貪也、曹公與二袁紹將文醜等一戰、諸將以爲敵騎多不レ如レ還レ營、荀攸曰、此所三以餌レ敵也、安可

レ去レ之、則知餌兵非三止謂二寘毒一也、食字疑或爲二貪字一也、美謂陳氏不レ取二李杜二家之説一可也、但其以レ食爲レ貪者泥、且如三二家所レ説、亦不レ可レ不レ知也、

衆皆有二歸心一、甚二於水之流趨一レ下、若欲二壅遏一、必致二氾濫之禍一也、

圍師必闕、窮寇勿レ迫、

司馬法曰、圍二其三面一、闕二其一面一、所三以示二生路一也、夫鳥窮則搏、獸窮則噬、若知レ不レ免、棄二死於我一也、

此用レ兵之法也、

已上論二用レ兵之法一也、

前篇云、先處二戰地一而待レ敵者佚、後處二戰地一而趨レ戰者勞、此篇所三以論二軍爭之法一也、亦因論二用レ兵之利害一、蓋其垂戒深矣、

劉氏直解據二張賁校正本一、以二高陵勿レ向以下八句一、通二下篇絕地無レ留一句一、共爲二九變一、又以二下篇圮地無レ舍、衢地合レ交、圍地則謀、死地則戰四句一、爲二九地篇文一、因論レ之曰、舊說曰、九變而止陳二五事一者、擧二其大略一也、九地篇中說二九地之變一、唯言二六事一者、亦陳二其大略一也、又云、九變卽九地之變、此言誠誤二後學一、九變者、用レ兵之變法有レ九也、九地之變者、遇二九地一而處レ之、有二變法一也、兩篇主意不レ同、美謂劉氏所レ論、其言則可也、一從二張氏校正本一、則未レ可也、詳見二下篇一、

孫武兵法擇卷第七終

孫武兵法擇卷第八

九變篇

孫武此篇、以二九變一爲レ名、蓋用レ兵之變、其目有レ九耳、而篇中所レ述、則若下論二其篇一者上凡十矣、古今注家、各爲二之說一、頗多二異同一、或曰、九變者、九地之變也、或曰、九者數之極、用レ兵之法多、極二其變一耳、或曰、簡編錯亂、九變之中、誤在二前篇之末一、而九地篇文亦誤在二此篇一耳、其餘衆說紛紛、不レ可二盡擧一焉、美因論レ之曰、六經之籍、一經二秦火一、於レ今所レ存、僅其遺編、孫武著書、蓋在下乎孔門弟子論二撰夫子微言一之前上、而其書猶少二殘缺一、幸以三其爲二兵書一故耳、今讀二此篇一、文甚錯綜、比二之他篇一、最爲レ難レ曉、蓋先秦之書、其文必古、而後改レ之、今文安得レ不レ訛二損一字一耶、强爲二之說一、亦恐未二必孫武本旨一也、且夫孫武齊人也、蓋嘗學二管子兵法一者、而管子之書、有二九變篇一、而論二其變一者、有二九事一焉、孫武之書、有二九地篇一、而論二其地一者、有二九事一焉、亦如二是篇一、名曰二九變一、是論二其變一、必有二九事一焉、而論レ之曰、略擧二其數一耳、則可乎、況於レ謂下之簡編錯亂、是在二乎彼一、彼在中乎此上乎、予聞二之先儒一、凡讀書之法、其間多有二不レ可レ解者一、亦且觀（視イ）二其大意一而已、卽如二此篇大意一、要在三將之智慮、必雜二於利害一焉耳、且如二何氏之說一、則謂君命有レ所レ不レ受、與二地之利害一、其事昭然不レ類矣、卽據下下文將不レ通二九變之利一者、雖レ知二地形一、不レ能レ得二地之利一矣上、而斷レ之曰、厥旨盡在レ此矣、其言頗如レ有レ據者、近世諸家、亦主二此說一不レ爲レ不レ多、故今姑從レ之、以俟二後之君子質一焉、

孫子曰、凡用レ兵之法、將受二命於君一、合レ軍聚レ衆、圮地無レ舍、衢地交合、絕地無レ留、圍地則謀、死地則戰、近本交合作二合交一、

已上地名、義見二下篇一、

九地篇云、山林險阻沮澤、凡難レ行之道者、爲二圮地一、諸侯之地三屬、先至而得二天下之衆一者、爲二衢地一、去レ國越レ境而師者、爲二絕地一、所二由入一者隘、

所從歸者迂、彼寡可以擊吾之衆者爲圍地、疾戰則存、不疾戰亡者、爲死地、已上地名、孫武已自註得分明矣、諸家所解、頗不相合者、未知其所據也、故今皆不採焉、

無舍、卽所謂圮地則行也、

九地篇文、下亦倣此、曹公曰無依也、

交合、卽所謂衢地則合交也、

曹公曰、結諸侯也、

無留、猶言輕地則無止也、

曹公曰、無久止也、

謀、卽所謂圍地則謀也、

曹公曰、發奇謀也、

戰、卽所謂死地則戰也、

曹公曰、殊死戰也、

塗有所不由、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不受、

有所不由者、如圮地絕澗等類是也、

九地篇、圮地則行、行軍篇、凡地有絕澗天井天牢天羅天陷天隙、必亟去之、勿近之、

有所不擊者、如地形險隘、敵先居之、敵若有備、及正正之旗、堂堂之陣、餌兵說卒歸師窮寇之類是也、有所不攻者、所謂攻城之法、爲不得已、拔人之城、而非攻也、（並見謀攻篇）曹公曰、城小而固、糧饒不可攻也、有所不爭者、管子曰、軍爭者、不行於完城池、又如伍胥所謂、獲其地猶石田也、（事見左氏傳哀十一年）亦此意也、

杜氏曰、言得之難守、失之無害、

有所不受者、所謂唯民是保、而利合於主是也、

地形篇云、戰道必勝、主曰無戰、必戰可也、戰道不勝、主曰必戰、無戰可也、故進不求名、退不避罪、唯民是保、而利合於主、國之寶也、

舊說自圮地無舍、至地有所不爭、以爲九變、賈氏曰、九變上九事、將帥之任機權、遇勢則變、因利則制、不拘常道、然後得其通變之利、變之則九、數之則十、故君命不在常例制也、何氏曰、孫子以九變名篇、解者十有餘家、皆不條其九變之目者何也、蓋自圮地無舍而下、至君命有所不受、其數十矣、使人不得不惑、遇熟觀文意、上下止述其地之利害耳、且十事之中、君命有所不受、且非地事、昭然不

レ類矣、蓋孫子之意言、凡受レ命之將、合二聚軍衆一、如レ經二此九地一、有レ害而無レ利、則當レ變レ之、雖三君命使二之舍留攻爭一、亦不レ受也、況下文言下將不レ通二於九變之利一者、雖レ知二地形一、不レ能レ得二地之利一矣、其君命豈得下與二地形一而同算上也、況下之地形篇云、戰道必勝、主曰レ無レ戰、必戰可也、戰道不レ勝、主曰二必戰一、無レ戰可也、厥旨盡在レ此矣、張氏曰、自二圮地無一レ舍、至二地有レ所レ不レ爭、爲二九變一、謂此九事、皆不二從レ中覆一、但臨レ時制レ宜、故統レ之以二君命一、有レ所レ不レ受、

蓋孫武前論下君之所レ患二於軍一者上矣、然欲レ使三君不二內御一、而不レ可三徒責二難乎君一也、欲レ使二爲レ將者亦能見レ義而行一矣、夫君命之不レ受、人臣之變、且非二其利一、而利二於社稷一、故因論二用レ兵之變一、以發二其義一也、惟其言所レ由、雖レ在二乎彼一、而其意所レ主、實在二乎此一、故下文亦皆因二乎此一、而述二其義一耳、

故將通二於九變之地利一者、知二用兵一矣、

此承二君命有レ所レ不レ受之意一、而言下凡地利有二九變者一、將能通レ之則知二用兵一矣上、一本無二地字一、未レ知二孰是一、

將不レ通二於九變之利一者、雖レ知二地形一、不レ能レ得二地之利一、治レ兵不レ知二九變之術一、雖レ知二五利一、不レ能レ得二人之用一矣、

夫地形者、兵之助也、（地形篇）故爲レ將者、不レ可レ不レ知レ之也、雖レ知二其形一、不レ能レ通二其變一、亦不レ能レ得二其利一、不下止知二地形一而已上、苟不レ知二臨レ時制レ變之術一者、雖レ知レ有二五利一、不レ能レ得レ用レ兵矣、此申二明上文之意一、以起二下文一也、一本地之利下有二矣字一者誤、

五利、曹公曰、謂二下五事一也、九變一云二五變一、賈氏因レ有二五利五變之說一、王氏以爲二五地之利一、張氏以爲二九變之下五事一、皆非二其義一也、詳見二于後一、

是故智者之慮、必雜二於利害一、雜二於利一、而務可レ信也、雜二於害一、而患可レ解也、

自レ此已下、皆論二五利一也、雜參也、信申也、孫武論レ兵、期二於避レ害而就レ利、夫利害之相因、猶二奇正之相生一也、故見二其利一、而見二其害一、見二其害一、而見二其利一、利害之權、常在レ我矣、衆人則不レ然、唯利是務、不レ知レ有レ害、唯害是患、不レ見レ利、故曰、雜二於利一、

而我之所レ務可レ不レ屈也、雜二於害一、而我之所レ患可二以解一也、

是故屈二諸侯一者以レ害、役二諸侯一者以レ業、趨二諸侯一者以レ利、

此言二諸侯之利害一、凡此其務可レ信、患可レ解之事也、業事也、

事如二朝聘會盟之類一、舊說、此三者、以爲二害レ彼利レ己之術一非也、此承二上文一、以言二智者所レ慮之事一也、

故用レ兵之法、無レ恃二其不レ來、恃三吾有二以待一也、無レ恃二其不レ攻、恃二吾有レ所レ不レ可レ攻也、

此言二智者所レ慮之意一也、蓋其所レ恃者、能自守也、

杜公曰、安則思レ危、存則思レ亡、常有レ備、

故將有二五危一、

危殆也、猶レ言レ害也、

必死可レ殺也、

老子曰、勇於レ敢則殺、卽謂レ此也、

必生可レ虜也、

司馬法曰、上生二多疑一、吳子曰、上疑而下懼、其將可レ虜、亦此意也、

忿速可レ侮也、

杜氏曰、忿剛怒也、速者褊急也、性不二厚重一也、若敵人如レ此、可二以凌侮一、使二之輕進而敗一レ之也、

廉潔可レ辱也、

曹公曰、廉潔之人、可二汚辱致一レ之也、

愛レ民可レ煩也、

曹公曰、出三其所二必趨一、愛レ民者、則必倍レ道兼行、以救レ之、救レ之則煩勞也、

凡此五者、將之過也、用レ兵之災也、

過失也誤也、災猶レ害也、此五者、皆是將之質性、失二於一偏一者也、蓋必死、言二無智一也、

三略云、愚者不レ顧二其死一、

必生言レ無レ勇也、忿速言レ不レ嚴也、廉潔言二小信一也、愛レ民言二小惠一也、故曰、將者智信仁勇嚴也、蓋其全材之所二以爲一レ難レ得也矣、

覆レ軍殺レ將者、必以二五危一、不レ可二之不一レ察也、近本無二之字一、

利害之變、靡レ有二厥常一、利而爲レ害、害而爲レ利、故智者之慮、必雜二於利害一、而其數凡有二五者一焉、自二其利者一而言レ之、則以爲二五利一、自二其害者一言レ之、則以爲二五危一、五危之外、而非レ有二五利者一也、故曰、覆

レ軍殺レ將、必以二五危一、以結二上文一、必雜二於利害一之意也、

孫武言二五利一、古今注家、未レ達二其旨一、而曲爲二之說一、遂使二一篇之意、欝而未レ暢、至二於近世一、卓吾李氏曰、何謂二五利一、蓋利害常相雜、唯智者能知レ之耳、利中有レ害、在レ害思レ利、則爲二五利一、害中有レ利、在レ利而不レ患レ害、則爲二五危一、不レ可レ雜二思之一乎、是說一出、則其義始明矣、

孫武兵法擇卷第八終

孫武兵法擇卷第九

行軍篇

舊說知九地之變、然後可以擇利而行軍、故次九變云、

孫子曰、凡處軍相敵、

處止也、相視也、

處軍之法、凡有四、相敵之法、凡有三十二、自絕山依谷、至伏奸之所處、皆處軍之法也、自近而靜者、至必謹察之、皆相敵之法也、

絕山依谷、視生處高、戰隆無登、此處山之軍也、

絕逕也度也、

絕山或超或度、兼二義而言、

絕山者、倚險也、依近也、依谷者、近水草也、

杜氏曰、吳子曰、無當天竈、天竈者大谷之口、言不可當谷、但近谷而處、可也、

視相也、生謂面陽、及便水草、利糧路之地也、杜氏曰、處高而面南也、陳子曰、若地有東西、則面東也、○孫氏虛實篇云、形之而知死生之地、然九變九地等篇、止言死地、而無言生地者、古今注家皆謂、視生爲向陽、恐未盡其義矣、蓋面陽亦是視生之一事已、此篇所云處山之軍、絕山依谷、及處水上之軍、絕水而近水草之利、則不待言矣、如斥澤之軍、則曰、必依水草、如平陸之軍、則曰、前死後生、夫高燥之地、少有水泉、峽阨之山、亦無草木、莫有水泉、則人馬皆渴矣、莫有草木、則芻薪皆缺矣、水泉既絕、草木不殖、地雖高陽、安得養其生哉、孫武此篇、不言必居高陽、而言視生處高者、蓋必有其義焉耳、且地形篇云、居高陽、利糧道、美以爲生謂面陽及便水草利糧道地、爲是故也、

處高卽據山也、隆、地之中高也、戰隆者、自高趨下、勢利於馳擊也、無登者、自下趨高、勢不便於仰攻也、下文云、我先居高陽、以待敵、敵

居レ之、引而去レ之勿レ從、地形篇亦此義也、杜牧張預曰、一作二戰降一、降下也、言二戰乘レ高而下一也、其義亦通、

舊說皆謂、敵人先據二隆高之處一、不レ可二登而迎戰一者非也、本文唯言下戰二于隆處一、無中登而戰上耳、

已上三者、居二軍於山一之法也、

張氏曰、凡高而崇者、皆謂二之山一、美云孫武先言二處レ山之軍一者、凡處二軍高陽一、不二止據レ險負レ固、四望瞭然、敵之動靜、蓋在二目中一矣、

絕レ水必遠レ水、

絕レ水而軍、必遠二於水一者、不二背レ水而陣一也、

尉繚子曰、背レ水陣爲二絕地一、○曹公曰、引レ敵使レ渡、諸家所レ注皆從二其說一、梅氏曰、前爲二水所レ隔、遠レ水以引レ敵、王氏曰、我絕レ水也、曹說是也、美云舊說皆可レ疑也、梅氏以レ絕爲レ隔、王氏非レ之可也、然曹說亦是、言三敵躡二其後一耳、孫武所レ言、則是行レ軍度レ水而舍、其敵在レ前者也、武豈以二退舍一爲下處二水上一之法上哉、

客絕レ水而來、勿レ迎二之於水內一、令二半濟一而擊レ之利、

水內者汭也、謂二水厓一也、

杜氏曰、水內乃汭也、誤爲レ內耳、按大雅、芮鞫之卽、毛氏傳、芮水厓也、鄭氏箋、水內曰レ芮、水外曰レ鞫、芮汭古通、據二鄭氏說一、水內當レ如レ字、未二必改制一而可也、

勿レ迎二之於水內一者、敵亂レ流而濟、勢不レ可レ支、恐我自潰敗也、半濟而擊レ之者、未レ既レ濟也、

宋公及楚人戰二于泓一、宋人既成レ列、楚未レ既レ濟、司馬子魚曰、彼衆我寡、請及二其未レ既レ濟擊レ之、公曰、不可、既濟而未レ成レ列、又以告、公曰、未可、既陣而後擊レ之、宋師敗績、子魚曰、君未レ知レ戰、勍敵之人、隘而不レ列、天贊レ我也、阻而鼓レ之、不二亦可一乎、是也、何氏引三夫槩王敗二楚子於淸發一、李氏亦同二其說一、皆非也、左氏傳云、吳伐レ楚、楚師敗及二淸發一、將レ擊レ之、夫槩王曰、困獸猶鬭、況人乎、若知レ不レ免而致レ死必敗、我若使二先濟一者、知レ免、後者慕レ之、蔑レ有二鬭心一矣、半濟而後可レ擊也、從レ之又敗レ之、是謂三其追二擊之一也、孫子所レ言者、迎而擊レ之也、其言雖レ同、其義自異耳、

欲レ戰者、無下附二於水一而迎上レ客、

附近也、此言引レ敵使レ渡、而與レ之戰也、

舊說、我欲戰、而近水迎敵、恐其不得渡者、非也、凡近水而迎者、濟而擊之、則必有利矣、

視生處高、無迎水流、

視生處高、義與上同、此言避其下濕、兼恐溉我也、吳起曰、登高四望、必得水情、知其廣狹、盡其淺深、乃可為奇以勝之、又曰、居軍下濕、水無所通、霖雨數至、可灌而沈、亦此義也、王氏曰、曹公曰、水上亦當處高晳、謂近水之地下、曹注曰、恐溉我也、疑當在此下、王氏此說可也、

無迎水流者、蓋言防暴漲及流毒之患也、凡軍居上流、善莫大焉、楚司馬子魚曰、我得上流、何故不吉、乃謂之也、

左傳昭十七年、吳伐楚、陽匄為令尹、卜戰不吉、司馬子魚曰、我得上流、河故不吉、杜預注、順江而下、易用勝敵、○曹公曰、無迎水流、恐溉我也、諸家多從其說、王氏以為疑者是也、凡可灌而沈者、其地卑汚、而下流壅塞也、孫武止言水之通流者耳、

此處水上之軍也、

已上五者、居軍水上之法也、

絕斥澤、惟亟去無留、無、一作勿、

斥澤、萑葦叢生、水泉沮洳之地、猶言荒澤也、吳起曰、居軍荒澤、草楚幽穢、風飇數至、可焚而滅、此言亟去無留、蓋以火攻及伏奸之所處也、

下文曰、軍行有險阻潢井葭葦山林翳薈者、必謹覆索之、此伏奸之所處也、○舊說亟去無留、注云、斥鹹之地、水草薄惡、故不可久留、下文必依水草、註云、就水草之利、何其無定說也、據管子、斥者產萑葦之地、廖文英亦謂、據管子、斥者薪芻所生之地、鹵乃鹹地、與斥無涉、今嘉興府瀕海、又呼產蘆之地為斥塹、蓋古萑者蒹葭蘆葦之屬、厥土謂之斥、東南方語耳、

若交軍於斥澤之中、必依水草、而背眾樹、

此言若不得已交軍於其中、則必依水草、以便樵汲、背眾樹、以為險阻矣、

此處斥澤之軍也、

已上二者、處軍斥澤之法也、

平陸處易、而右背高、前死後生、易音異、一本無而字者非、

易平也、右背者、凡人利用、皆便ニ於右一也、死者就ニ接レ戰之地一而言也、生者就ニ處レ軍之地一而言也、李氏曰、前レ死、致レ敵之地、後レ生我自處、是也、王氏曰、凡兵皆宜レ向レ陽、既後背レ山、卽前レ死後レ生、疑文誤也、美謂王氏之說、亦是以レ生爲レ陽之義耳、其餘諸家皆謂、死者下也、生者高也、孫武曰、視レ生處レ高、生之與レ高本自有レ別、

此處ニ平陸一之軍也、

已上二者、處ニ軍平陸一之法、蓋言ニ車騎馳擊之利一也、

凡此四、軍之利、黃帝之所三以勝ニ四帝一也、（近本無ニ下之字一、）

此結ニ上文一、四帝未レ詳、

四帝、諸家所レ註、其說紛紛、皆非也、楊朱曰、五帝之事、若レ覺若レ夢、億不レ識レ一、孫武必據ニ古者兵家稱說之言一耳、其傳之久、而必既失レ之也、

凡軍好レ高而惡レ下、貴レ陽而賤レ陰、養レ生而處レ實、軍無ニ百疾一、是謂ニ必勝一、

此因ニ上文一、復擧ニ處レ軍之凡一、而言ニ東南爲レ陽、西北爲レ陰、視レ生處レ高、卽是養レ生處レ實之事、所三以軍無ニ百疾一也、下篇云、先居ニ高陽一、利ニ糧道一、以戰則利、亦此義也、此一節言下處ニ高陽一之義上也、

舊說或云、養レ生便ニ水草一、處レ實利ニ糧道一、或云、養レ生謂ニ水草糧糒之屬一、處レ實有ニ倚レ固之謂一、美謂視レ生處レ高、卽養レ生處レ實之謂、未ニ必分解一可也、

丘陵隄防、必處ニ其陽一、而右ニ背之一、此兵之利、地之助也、

丘陵隄防、皆土之高、凡此四者、雖レ非ニ至高一、亦必居レ陽而右ニ背之一、是則用レ兵之利、所三以爲ニ地之助一也、

孫武申下言居ニ高陽一之利上、乃繼レ之曰、丘陵隄防、必處ニ其陽一、而右ニ背之一、蓋是四者、本非ニ至高一、唯恐ニ視而小レ之、故曰、此兵之利、地之助也、梅氏曰、雖レ非ニ至高一、亦當レ前向レ明而右、依レ實是也、劉氏直解云、丘陵岡阜也、以ニ處レ山之軍一言、隄防堋岸也、以ニ處レ水之軍一言、最失ニ其義一也、

此一節、亦言下處ニ高陽一之利上也、

上雨水沫至、欲レ涉者待ニ其定一、

此一節、言ニ絕レ水之軍一也、水沫至者、上流有レ雨之候也、待ニ其定一者、恐ニ其水暴漲一也、

杜佑曰、上雨、水當清、而反濁沫至、此敵人權遏水之占也、欲以中絕軍、凡地有水欲漲、沫先至、皆爲絕軍、當待其定也、美謂雨水不必清、權遏其水、亦久之而清、然如是之說、亦不可不知也、

凡地有絕澗天井天牢天羅天陷天隙、必亟去之、勿近也、吾遠之敵近之、吾迎之敵背之、

爾雅曰、山夾水澗、井坎也、牢圈也、羅網也、陷坑也、隙罅也、凡天險如此者、必亟去之勿止也、吾遠敵近、吾迎敵背、言其能致人也、

軍行有險阻潢井葭葦山林翳薈者、必謹覆察之、此伏姦之所處也、（近本軍行作軍旁、葭葦作蒹葭、山林作林木、而無處字、）

險阻者、道之狹隘也、潢井者、水之積深也、葭葦謂水草所聚也、山林謂山木所茂也、翳薈草木盛貌、言軍行遇此必當反覆搜索之、此則伏兵奸細之所處也、○此已上皆謂行軍之法也、

敵近而靜者、恃其險也、（近本無敵字、）

近而不動、必有恃其險也、

舊說或云、倚險不動、或云、恃險不恐、皆非也、恃者恃其設險而待之也、非謂其倚險也、亦非謂其不恐也、

自此已下、乃言相敵之事也、

遠而挑戰者、欲人之進也、

挑誘也、曹公曰、挑戰延敵也、言遠而挑戰者、欲致人也、

其所居易者、利也、

言彼居易地者、利而誘之也、一本云、士爭其所居者易利也、疑誤、

舊註或云、不居險阻、而居平易、必有所便利於事也、或云、彼所居易利、故求挑戰也、皆非也、若依前說、與平陸居易者、亦何以別、若依後說、併上文挑戰爲一事也、李氏以謂居易之地、致人之利、乃得之矣、

衆樹動者、來也、

衆樹動者、彼將來戰、故衆伐樹木、益兵除道也、城濮之戰、晉人伐木益其兵、曹公曰、伐木除道進來、故動、

衆草多障者、疑也、

草莽之間、多爲障蔽者、使我疑之、或欲掩襲、或欲潛逃也、

鳥起者、伏也、
鳥驚而起者、伏二兵於其下一也、
獸駭者、覆也、
獸駭而奔者、覆二兵於其下一也、
塵高而銳者、軍來也、卑而廣者、徒來也、散而條達者、樵採也、少而往來者、營軍也、
兵車之來、塵必高銳者、其行重也、卒徒之來、塵必卑廣者、其步輕也、采薪芻牧、各隨レ所レ向、故塵散而條達也、
杜氏曰、條達、縱橫斷續之貌、
欲レ立二營壘一者、先使三候騎巡二視其地一、故塵少而往來也、
辭卑而益備者、進也、
使來辭卑、而增二益其備一、如レ畏レ我者、必欲二進戰一也、
辭强而進驅者、退也、
其辭方强而進驅、其衆如レ侮レ我者、必欲二潛退一也、
輕車先出、居二其側一者、陣也、
輕車兵車也、兵車先出、步卒居二其旁一者、欲二結レ陣而來一也、先偏後伍、乃言二魚麗之法一也、

左氏傳、鄭子元爲二魚麗之陣一、先偏後伍、伍承彌縫、注司馬法、車戰二十五乘爲レ偏、以レ車居レ前、以レ伍次レ之、承二偏之隙一、而彌二縫闕漏一也、五人爲レ伍、此蓋魚麗陣法、
無レ約而請レ和者、謀也、
無二信約一、而來請レ和者、必有二其謀一也、
曹公以謂レ無二質盟之約一、是也、
奔走而陳二兵車一者、期也、
吏卒奔走、而陳二兵車一者、必有レ所レ期也、
賈氏曰、尋常之期、不レ合二奔走一、必有二遠兵相應一、有二晷刻之期一、必欲二合レ勢同來攻レ我、宜二速備レ之、是也、
近本無二車字一疑誤、
半進半退者誘也、
其軍不レ整、示二之不能一者、誘レ我使レ進也、
杖而立者飢也、杖一作二仗字一、
杖レ兵而立者、窮飢也、張氏曰、三軍飲食、上下同レ時、故一人饑、則三軍皆然、
汲而先飲者渴也、
杜氏曰、命レ之汲レ水、未レ汲而先飲者渴也、覩二一人ヲ

三軍可レ知也、
見レ利而不レ進者勞也、
彼見二其利一而不レ能レ進者、士卒力疲也、
鳥集者虛也、
鳥集二其上一者、城壘無レ人也、
夜呼者恐也、
杜氏曰、恐懼不レ安、故夜呼以自壯也、
軍擾者、將不レ重也、旌旗動者亂也、吏怒者倦也、
軍士擾亂者、將不二威重一也、旌旗動搖者、軍無二紀律一也、將吏忿怒者、士卒疲倦、不レ能レ應也、
粟馬肉食、軍無レ懸レ缻不レ返二其舍一者、窮寇也、
秣レ馬以二糧粟一、食レ士以二牛畜一、懸レ缻不二復炊爨一、暴レ甲不二敢反一レ舍、是則窮寇以レ死決耳、一作二殺馬肉食者軍無一レ糧也、
此言三殺レ馬而食二其肉一也、
諄諄翕翕、徐與レ人言者、失レ衆也、數賞者窘也、數罰者困也、先暴而後畏二其衆一者、不レ精之至也、至近本作レ主、
諄諄誠懇貌、翕翕和合貌、言下其貌諄諄、其言翕翕、其色徐徐、與レ人告語者、失二其衆心一、以收上レ之也、
舊說以謂三士卒相聚、竊語以非二其上一者非也、此四者、皆是相レ將之事也、
數賞者、衆力窮窘、以施二其惠一也、數罰者、衆心怠倦、以立二其威一也、先行二乎嚴暴一、而後畏二其離叛一者、馭レ衆之術、不レ精之極也、
來委謝者、欲二休息一也、
其戰未二相伏一、而來委謝者、欲レ休二息民一也、
李氏曰、徐レ前而疾レ後、曰二委謝一、杜氏以爲二委レ質來謝一、賈氏以爲二氣委而言謝一、按說文、委隨也、又委曲也、唐張九齡詩、滄海所レ爲レ大、江漢自來委、李說似レ是、
兵怒而相迎、久而不レ合、又不二相去一、必謹察レ之、
忿兵來迎、久不レ交、又復不二解去一、必當三謹而伺二察之一也、
曹公曰、備二奇伏一也、諸家從二其說一、美謂不三止其有二奇伏一、或有二遠兵合レ勢來戰者一、不レ可レ不レ察也、
此已上、皆言二相レ敵之事一也、
兵非レ益レ多也、惟無二武進一、足三以併レ力料レ敵取二人而已、夫惟無レ慮而易レ敵者、必擒二於人一、
通二結上文行軍相敵之事一也、兵非レ益レ多、謂レ非二以

レ多爲レ益也、
虛實篇云、兵雖レ多亦奚益二于勝一哉、亦此意也、一作レ非レ貴二益多一也、其義亦通、武進者、吳起曰、勇者必輕合、是也、
吳子曰、凡人論レ將、常觀二於勇一、勇之於レ將乃數分之一耳、夫勇者必輕合、而未レ知レ利、未レ可也、

取レ人猶レ得レ人也、
李氏解以爲レ得レ人者是也、

言兵非レ有レ益二於多一也、惟無二勇銳輕進一、足下以併二其力一料二其敵一取中其人上而已、夫惟無レ有二謀慮一、而輕二易其敵一者、必爲三人所二擒獲一也、蓋夫老馬之智、可三以辨二其道一、烏鳥之聲、可三以候二其師一、況於レ人乎、故此篇要旨、唯在二併レ力料レ敵取一レ人而已、曹公曰、厮養足也、言下併二厮養之力一取而用上レ之、則亦足三以制二其敵一矣、若夫庸將則不レ然也、獨任二其智一、自恃二其力一、不下惟不上レ取二其人一、妬レ賢忌レ能、剛愎不仁、雖レ有二智者一、不レ爲二之用一、志自滿假、輕二易其敵一、惟武是進、則爲二天下戮一矣、不レ可レ不レ戒也、

卒未二親附一而罰レ之、則不レ服、不レ服則難レ用也、卒已親附、而罰不レ行、則不レ可レ用也、

此承二上文一、而言二取レ人之法一也、言士卒未二親附一、而刑罰加レ之、則其心不レ服、其心不レ服、則難レ得二之用一也、士卒已親附、而刑罰不レ行、則其心無レ畏、其心無レ畏則又不レ可レ用也、

故令レ之以レ文、齊レ之以レ武、是謂二必取一、

令者號令、謂レ告二戒之一也、齊者所二以一一レ之也、言下令レ之以レ文、而不レ從者、武以一レ之、則衆皆無レ有二不レ從者一、而可上レ得二之用一也、是謂二必取一、必取謂二其必得一レ人也、

令素行、以敎二其民一、則民服、令不二素行一、以敎二其民一、則民不レ服、令素行者、與レ衆相得也、

此申二明必取之義一也、令素行、以敎二其民一者、民皆莫レ有二不レ從者一、而後其敎以有レ所レ施レ之也、民服謂二其心誠服一也、與レ衆相得、其所二以必得一レ人也、蓋是令二民與一レ上同レ意、可二與レ之死一、可二與レ之生一、而不レ畏レ危、其斯謂二之道一也、
孫武所レ謂、文武及所二以敎一レ民之法、曰レ知二其說何如一也、管子曰、四時之行、有レ寒有レ暑、聖人法レ之、故有レ文有レ武、天地之位、有二前後一、有二左右一、聖人法レ之、以建二經紀一、春生二於左一、秋殺二於右一、夏

長ニ於前一、冬藏ニ於後一、生長之事文也、收藏之事武也、是故文事在レ左、武事在レ右、聖人法レ之、以行ニ法令一、以治ニ事理一、又曰、夫爲レ國之本、得ニ天之時一而爲レ輕、得ニ人之心一爲レ紀、法令爲ニ維綱一、吏爲ニ網罟一、什伍以爲ニ行列一、賞誅爲ニ文武一、諸農具當ニ器械一、耕農當ニ攻戰一、推ニ引銚耨一以當ニ劍戟一、被簑以當ニ鎧鑐一、菴笠以當ニ盾櫓一、故耕器具則戰具備、農事習則攻戰巧矣、又曰、諸侯之會、以レ權致レ之、近而不レ服者、以レ地患レ之、遠而不レ聽者、以レ刑危レ之、一而伐レ之武也、服而舍レ之文也、文武具ニ備德一也、司馬法曰、古者國容不レ入レ軍、軍容不レ入レ國、軍容入レ國則民德廢、國容入レ軍則民德弱、故在レ國言文而語温、在レ朝恭以遜、修レ己以待レ人、不レ召不レ至、不レ問不レ言、難レ進易レ退、在レ軍抗而立、在レ行遂而果、介者不レ拜、兵車不レ式、城上不レ趨、危事不レ齒、故禮與レ法表裏也、文與レ武左右也、皆是古者齊人學ニ管子兵法一者之說耳、據レ此觀レ之、蓋其所レ謂令レ之以レ文者、禮也賞也、齊レ之以レ武者、法也刑也、所レ爲ニ之教一者、文事也、武事也、所ニ以行一レ之者、其所レ謂道者也、舊注、文仁也、武法也、文仁恩、武威罰、恐未レ盡ニ其說一也、

孫武此篇、言ニ行軍相敵之法一、雖レ欲レ加レ之、而不レ知下所ニ以加一レ之者上耳、且其論下所ニ以取レ人之法上、亦可レ謂ニ約而盡一矣、

孫武相レ敵之法、元人許洞有下述ニ用古法一之說上、以謂兵家之利、利在ニ變通之機一、觀ニ其逆順一、孫武有レ言曰、兵無ニ常勢一、因ニ敵變化一而取レ勝者、彼觀ニ其逆順一、亦可レ謂下善學ニ孫武兵法一者上也矣、

孫武兵法擇卷第九終

孫武兵法擇卷第十

地勢篇 近本作二地形一

舊說、行レ師越レ境、審二地形一而立レ勝、故次二行軍一、

孫子曰、地形有二通者一、有二挂者一、有二支者一、有二隘者一、有二險者一、有二遠者一、

此六者、地之形勢也、

我可二以往一、彼可二以來一、曰レ通、通形者、先居二高陽一、利二糧道一、以戰則利、

通者、四戰之地、 言下先據二此地一、居二軍高陽一、通二利糧運一、以待レ敵而戰上也、 曹公曰、 寧致レ人無レ致二於人一、

可二以往一、難二以返一、曰レ挂、 挂形者、 敵無レ備、 出而勝レ之、敵若有レ備、出而不レ勝、難二以返一不レ利、

挂者、其勢深阻、如二物之挂一也、

說文、挂者罣而不レ用也、

言下此地所レ利在上出二其不意一也、若彼有レ備、則必受レ制矣、

我出而不レ利、彼出而不レ利、曰レ支、 支形者、 敵雖レ利レ我、我無レ出也、引而去レ之、令二敵半出一而擊レ之利、

支者、彼我居レ險、其勢支吾、亦作二枝梧一、言二此地彼我出、而不レ利、彼誘以レ利、 我不レ可レ出、 乃引而去、若彼躡レ我、候二其半出一、反而擊レ之則利、

杜佑曰、利利レ我也、佯背レ我去、我無二出逐一、待二其引一而擊レ之、美謂是以二引去一屬二于敵一也、支形險形、並言二引而去一レ之、皆謂レ我耳、且其說與二諸家一異、不レ可レ從也、

隘形者、我先居レ之、必盈レ之、以待レ敵、若敵先居レ之、盈而勿レ從、不レ盈而從レ之、

隘者、兩山峭絶、其間通レ谷也、 言下我先居レ軍以守二隘口一、如二水之在レ器而盈滿可中以待上レ之、吳子曰、遨二之阨一是也、彼先レ我而居者、不レ可レ從レ之、 吳子曰、無レ當二大谷之口一是也、若彼結レ陣、猶未二盈滿一、我則從レ之、此所レ謂兩鼠鬭二於穴中一者、其勝在レ戰、而不レ在レ險也、

險形者、 我先居レ之、 必居二高陽一、以待レ敵、 若敵先居レ之、引而去レ之、勿レ從也、

險者、山高谷深、其勢危險也、言我先居軍高陽、可以待敵、敵先據之、則引而去之、不可從也、

杜氏曰、高陽二者、止可捨陽而就高、不可捨高而就陽、孫子乃統而言之也、

遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利、

遠者、兩軍相去遠也、勢均者、其強弱相均也、言彼我相遠、勢力相均、先挑之戰、則勞佚易地、戰而不利、若彼挑我、則其勢有利、不待言矣、

凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也、

結上文、

故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者也、此六者、非天(地イ)之災、將之過也、北音背、

凡此六者、其失在人也、

夫勢均、以一擊十、曰走、

衆寡強弱、盡可以敵、猶且不可輕戰、而奮一擊十、必走之勢也、

卒強吏弱曰弛、

士卒剛強、將吏柔弱、軍無統率也、弛猶廢也、

弛說文弓解也、

吏強卒弱曰陷、

將吏剛強、士卒柔弱、兵乏訓練也、陷陊也、陊山崩也、與隤同、○管子曰、五教各習、而士負以勇矣、士卒不強者、無其教矣、

大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、將不知其能、曰崩、

大吏裨佐也、懟怨也、將元帥也、崩自上墜下也、此言元帥失屬、亡師之過也、晉楚邲之役、晉師及河、三師皆欲還、先縠不從、以中軍佐濟、師遂濟、與楚師戰于邲、晉師敗績、春秋獨罪其元帥、亦是義也、

宣十三年經曰、晉荀林父帥師、及楚子戰于邲、晉師敗績、是役也、荀林父將中軍、先縠佐之、士會將上軍、郤克佐之、趙朔將下軍、欒書佐之、趙括嬰齊爲中軍大夫、韓厥爲司馬、詳于左氏傳、

將弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱橫、曰亂、

此言將無勇威、而不能用戰、若有一於此、亂之道也、管子曰、將帥不嚴威、民心不專一、陳士不

死制、卒士不輕敵、而求兵之必勝、不可得也、亦是義也、

將不能料敵、以少合衆、以弱擊强、兵無選鋒、曰北、

此言將不知彼不知己也、選鋒、前所謂能擇人而任勢者、(兵勢篇)司馬法曰、選良次兵、益人之强、尉繚子曰、武士不選、則衆不强、皆謂之也、

何氏曰、夫士卒疲勇、不可混同爲一、一則勇士不勸、疲兵因有所容出、而不戰自敗也、故兵法曰、兵無選鋒、昔齊以伎擊强、魏以卒奮、秦以銳士勝、漢有三河俠士劍客奇材、吳謂之解煩、齊謂之決命、唐謂之跳盪、是皆選鋒之別名也、兵之勝術、無先於此、

北敗也、

凡此六者、敗之道也、將之至任、不可不察也、

此結上文、

夫地形者、兵之助也、料敵制勝、計險阨遠近、上將之道也、知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗、

凡用兵之道、地之形勝、以爲之助也、是故料敵制勝、計其險阨遠近者、上將之道也、必勝必敗、亦係乎知此而戰與否而已矣、此總結上文兩節之意、

故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也、戰道不勝、主曰必戰、無戰可也、

此承上文、而言爲將之道也、主君也、

故進不求名、退不避罪、唯民是保、而利合於主、國之寶也、(民一作人、)

陳氏曰、合猶歸也、王氏曰、戰與不戰、皆在保民利主而已矣、近本一無合字、

視卒如嬰兒、故可與之赴深谿、視卒如愛子、故可與之俱死、

道者令民與上同意、可與之死、可與之生、而不畏危、郎謂之也、王氏曰、以仁恩結人心也、張氏曰、將視卒如子、則卒視將如父、未有父在厄難而子不致死也、

厚而不能使、愛而不能令、亂而不能治、譬若驕子不可用也、

尉繚子曰、不愛悅其心者、不我用也、不嚴畏其心者、不我擧也、故善將者愛與威而已、張氏

曰、書曰、威克二厥愛一允濟、愛克二厥威一允罔、功言レ先レ威也、孫武先レ愛何也、曰、書之所レ稱仁人之兵也、王者之於レ民、恩德素厚、人心已附、及二其用一レ之、惟患二乎寡一レ威也、武之所レ陳、戰國之兵也、覇者之於レ民、法令素酷、人心易レ離、及二其用一レ之、唯患二乎少一レ恩也、

知三吾卒之可二以擊一、而不レ知二敵之不一レ可レ擊、勝之半也、

此其所レ謂不レ知レ彼而知レ己、一勝一負也、(謀攻篇)

知二敵之可一レ擊、而不レ知下吾卒之不上レ可二以擊一、勝之半也、知二敵之可一レ擊、知三吾卒之可二以擊一、而不レ知下地形之不上レ可二以戰一、勝之半也、

此知レ彼知レ己、而不レ知二地形一也、

故知レ兵者、動而不レ迷、擧而不レ窮、

動而不レ迷者、其戰勝不レ忒也、(軍形篇)擧而不レ窮者、應二形於無一レ窮也、(虛實篇)蓋擧動無二迷錯一、而能應二形於無一レ窮者、是其勝負已定故也、

故曰、知レ彼知レ己、勝乃不レ殆、知レ天知レ地、勝乃不レ窮、

以結二一篇之意一、

謀攻篇故曰、知レ彼知レ己、百戰不レ殆、此云、故曰、知レ彼知レ己、乃不レ殆、蓋引二古軍志一也、

不レ窮近本作レ可レ全、疑非、

梅張二氏、皆解二不窮一、以爲二無極一、近本作レ可レ全、乃從二林岐公勝爲レ可レ全之說一耳、

此篇要欲三爲レ將者、必知二地形一、因論二爲レ將之道一曰、進不レ求レ名、退不レ避レ罪、惟民是保、而利合二於主一、又以謂將視レ卒如レ子、而不レ敎レ之、則又如二驕子一、皆是確論矣、

孫武兵法擇卷第十終

孫武兵法擇卷第十一

九地篇

舊說、此論地勢、故次地形、

孫子曰、用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圮地、有圍地、有死地、

此九地之名也、

諸侯自戰其地、爲散地、

言戰其境內、士卒顧家而志不專、是易潰散之地也、楚鬬廉曰、鄖人軍其郊、必不誡、而恃其城、莫有鬬志、遂敗鄖師是也、

入人之地、而不深者、爲輕地、

師出越境、入敵未遠、其勢猶輕、而士未有鬬志也、

我得則利、彼得亦利者、爲爭地、

解見于前、

我可以往、彼可以來者、爲交地、

交地者、前之所謂通地是也、（地形篇）曹公曰、道正相交也、杜氏曰、可來可往、足以交戰對壘、兩說義亦通、

諸侯之地三屬、先至而得天下之衆者、爲衢地、

此言四達之地、杜氏曰、天下猶言諸侯也、

入人之地深、背城邑多者、爲重地、（重上聲）

此言涉地已深、過城已多也、

行山林險阻沮澤凡難行之道者、爲圮地、（近本無上行字）

圮毀也、又傾也、

廣韻、圮岸毀也、又傾也、

所由入者隘、所從歸者迂、彼寡可以擊吾之衆者、爲圍地、

隘險也塞也、迂遠也、

疾戰則存、不疾戰則亡者、爲死地、

此言山川險阻、進退維谷、救援已絕、糧食將竭也、

是故散地則無戰、輕地則無止、爭地則無攻、交地則無絕、衢地則合交、重地則掠、圮地則行、圍地則謀、死地則戰、

自此已下、言用兵之法也、無戰者、士卒無鬬志也、故曰、散地吾將一其心、

即見下文、後皆倣此、

無止者、士或散還、故曰、輕地吾將使之屬、無攻者、先至爲利、

曹注不當攻、當先至爲利也、

故曰、爭地吾將趨其後、交地亦謂之通地也、無絕者、謂利糧道也、故曰、吾將謹其守、

通地見于地形篇、王氏曰、交相往來之地、亦謂通地、居高陽、以待敵、宜無絕糧道、

合交者、結交諸侯也、故曰、衢地吾將固其結也、掠者務食於敵也、故曰、重地吾將繼其食也、

李氏曰、深入敵境、不可非義失人心也、漢高祖入秦、無犯婦女、無取寶貨、得人心如此、筌以掠爲無掠字、美謂李說其意則善矣、然非孫武之旨也、武嘗論兵之利曰、因糧於敵、又曰、務食於敵、況今以在重地糧食將絕乎、故乃繼之曰、掠於饒野、三軍足食、蓋其本旨亦與管子水旱之功同耳、要非若仁人之兵也、

行者卽謂無舍、

九變篇云、合地無舍、

故曰、圮地吾將進其塗、謀者我專爲一也、故曰、圍地吾將塞其闕、戰者殊死決戰也、故曰、死地吾將示之以不活、

所謂古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊、合於利而動、不合於利而止、近本作古之所謂善用兵者、

此又言古者善用兵之事也、前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊者、前之所謂左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前是也、虛實篇隨武子曰、見可而進、知難而退、軍之善政也、合利而動、不合於利而止者、是之謂也、

善用兵者、能使敵人如此出其不意、攻其無備也、下文所謂兵情主速、卽言此義也、

敢問、敵衆整而將來、待之若何、

此自設其問也、

曰、先奪其所愛則聽矣、

所愛、凡其所欲者皆是也、先奪其所愛、亦是先人有奪人之心也、

所レ愛、舊說或便地糧食、或謂子女玉帛、陳氏曰、愛者不二止恃一レ利、但敵人所レ顧之事、皆可レ奪也、

其說約而盡矣、

兵之情主レ速、乘二人之不一レ及、由二不虞之道一、攻二其所一レ不レ戒也、

三者皆經二乎不一レ知、發二乎不意一、而要在二其速一耳、

管子曰、徑二乎不一レ知、莫二之能禦一也、發二乎不意一、故莫二之能應一也、

陳氏曰、蓋孫子之旨、用レ兵貴二疾速一也、〇已上二節、應レ難覆レ陳其意也、

曹公曰、孫子應レ難以覆レ陳、兵情也、

凡爲レ客之道、深入則專、主人不レ克、

此下皆論二爲レ客之道一也、專言二衆心專一一也、克勝也、客在二重地一、主在二輕地一、其勢固然也、

掠二於饒野一、三軍足レ食、謹養而勿レ勞、併レ氣積レ力、運レ兵計謀、爲レ不レ可レ測、投二之無一レ所レ往、死且不レ北、死焉不レ得、士人盡レ力、

此言二凡爲レ客之法一、亦先爲レ不レ可レ勝、以待二敵之可一レ勝耳、謹養而勿レ勞、陳氏以謂王翦伐レ楚、用爲二此計一是也、

秦使下王翦將二六十萬一伐上レ楚、翦取二陳以南一、至二平輿一、楚人悉二國中兵一、以禦レ之、翦堅レ壁不レ戰、日休二士卒一、洗沐而善二飮食一、撫二循之一、親與二士卒一同食、久レ之問、軍中戲乎、對曰、方投レ石超レ距、翦曰、可矣、楚既不レ得レ戰、引而東、翦追擊大破レ之、至二蘄南一、殺二其將軍項燕一、楚師遂敗走、翦乘レ勝略二定城邑一、遂滅レ楚、虜二王負芻一、

軍レ兵計謀、如下下文云易二其事一、革中其謀上、皆是之謂也、投レ之無レ所レ往者、陷二之死地一也、

下文云、無レ所レ往者死也、

北死謂二奔背而死一也、言兵已深陷、死且不レ避二其死一、又安不レ得二其盡一レ力乎哉、此釋二深入則專之義一也、

舊注不レ北句、不レ得句、皆非也、

兵士甚陷、則不レ懼、無レ所レ往則固、深入則拘、不レ得レ已則鬭、是故其兵不レ修而戒、不レ求而得、不レ約而親、不レ令而信、禁レ祥去レ疑、至レ死無レ所レ之、

固堅也、拘止也、

舊注、拘縛也、或云、如二拘係一也、皆非、說文、拘止也、郎謂二其無一レ所レ徂也、

戒戒備也、

司馬法云、因懼而戒、

得得力也、

舊注、或以爲得其用、或以爲得其心、或以爲得其情、皆非也、得者卽上文焉不得盡力之得也、曹公以爲自得力也、是已、

禁祥去疑者、凡吉凶之兆曰祥、三軍之災、疑莫大焉、妖祥之事、恐生疑惑、故禁祥所以去疑也、司馬法曰、滅厲、此之謂也、

舊注、禁妖祥之言、疑惑之計、以爲二事者非、張氏曰、士卒未有必戰之心、則亦有假妖祥以使衆者、田單守卽墨、命一卒爲神、無出入約束、必稱神、遂破燕、美謂此又爲不可測之事耳、

無所之者、至死無他意也、此承上文、以釋無所之之義也、

吾士無餘財、非惡貨也、無餘命、非惡壽也、令發之日、士卒坐者涕霑襟、偃臥者涕交頤、投之無所往者、諸劌之勇也、

此反覆以言無所往之事也、言兵士非惡財與壽也、令發之日、聽者皆感勵涕泣、矢死靡他、用此衆戰、盡是諸劌之勇也、諸劌、舊說以爲專諸曹劌也、

專諸、左氏傳作鱄設諸、相如賦作剸諸、史記作專諸、吳人、爲闔閭刺吳王僚、以事著于世、據史闔閭篡立三年、乃興師伐楚、于時孫武旣爲將軍、初武始見闔閭、闔閭曰、子之十三篇、吾盡觀之矣、武著此書、蓋在乎闔閭未立之初、而武旣稱專諸之勇、且在乎曹劌之上、皆可疑也、蓋武之所稱、別是一人、豈非古先有勇士名諸、而專諸慕之以爲名耶、水心葉氏以謂、孫武十三篇、戰國初山林處士所爲、其言得用於吳者、其徒夸大之說也、今皆不可考、曹劌、左氏穀梁並作曹劌、劌或作翽者非、史作曹沫、索隱曰、沫宜音劌、沫劌聲相近、而字異耳、張預以謂、劌當擊沫者非、

故善用兵者、譬如率然、率然者、常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至、

率然蛇名、常山恒山也、此喩上下一心、捍禦同力也、

率當讀如率爾之率字、梅氏曰、相應之容易也、是讀爲率易之率也、張氏曰、率猶速也、是讀如急率之率也、未知皆何據也、蓋其所以得名、不必深求可也、張氏曰、是喩陣法也、八陣圖曰、以後爲前、以前爲後、四頭八尾、觸處爲首、敵衝其中、首尾俱救、美謂孫武本非喩陣法也、後人因有其說耳、

敢問、兵可使如率然乎、（近本無兵字、非、）曰可、夫吳人與越人相惡也、當其同舟而濟遇風、其相救也、如左右手、

吳越世讎、同舟遇風、猶且相救、勢使之然也、況上下一心乎、

是故方馬埋輪未足恃也、齊勇若一、政之道也、剛柔皆得、地之理也、故善用兵者、携手若使一人、不得已也、

方馬如方舟絆馬、足不使行也、埋輪、車輪不使動也、齊所以一之也、剛柔猶强弱也、皆得無强無弱、盡得其用也、攜手若一人、猶言若攜手使一人也、

左氏傳、鱄設諸曰、母老子弱、是無若我何、注猶言我若是何、孔氏疏云、古人言有顚倒、故杜以爲是無若我何、猶言我無若是何、此云攜手若使一人、梅氏注、用三軍如攜手使一人、蓋是得解古言之法耳、

言方馬埋輪、猶未足恃、其無所之也、齊勇若一者、軍之政、所以得其道也、剛柔皆得者、地之勢、所以得其理也、故善用兵者、若携手使一人、其勢不得已也、前之所謂不得已則鬪、卽謂之也、此反覆論難、以釋投之無所往之義也、

將軍之事、靜以幽、正以治、能愚士卒之耳目、使之無知、

此承上文、而言將軍之事也、蓋靜則不可動、幽則不可測、正則不可犯、治則不可亂、凡此四者、所以能使我士卒可與之死、而使之無知、有所以使之不畏危也、愚其耳目者、卽使之無知之謂、卽如下文所云、皆是其事也、

易其事、革其謀、使人無識、易其居、迂其路、使人不得慮、帥與之期、如登高而去其梯、

此言愚之之事也、帥率之也、言易言革謀、易居迂途、乃帥其衆、與之相期、深入敵地、所以

使其慮自絕也、司馬法曰、若疑則變之、若人不信上則行、其不復、亦是義也、

帥與之深入諸侯之地、而發其機、焚舟破釜、若驅羣羊、驅而往、驅而來、莫知所之、聚三軍之衆、投之於險、此謂將軍之事也、

此承上文、而言投之無所往之事也、言能使吾衆無識無慮、乃帥之深入敵地、始發軍機、司馬法曰、棄任節食、是謂開人之意、乃謂之也、焚舟破釜、猶秦穆伐晉濟河焚舟、是也、近本一無焚舟破釜四字、若驅羣羊、梅氏曰、但馴然從驅、莫知其他也、險難也、投之於險、猶言投之無所往也、此謂將軍之事者、蓋自靜以幽、正以治、能愚士卒之耳目、以至聚三軍之衆、投之於險、此謂將軍之能事也、一本無謂字、疑非、

九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察、

杜氏曰、今欲下文重擧九地、故於此重言發端張本也、愚謂察此三者、所以爲能通九變之利、而得人之用也、

九變篇云、將不通於九變之利、雖知地形、不能得地之利、治兵不知九變之術、雖知五利、不能得人之用矣、

一本察下有也字、

凡爲客之道、深則專、淺則散、

人情之理固然也、

去國越境而師者絕地也、四達者衢地也、入深者重地也、入淺者輕地也、背固前隘者圍地也、無所往者死地也、

絕地者、前之所謂絕地無留是已、梅氏曰、進不及輕、退不及散、在二地之間也、

王氏曰、此越鄰國之境、是謂孤絕之地、若吳王伐齊、近之如此者鮮、故不同九地之例、張氏曰、去己國、越人境、而用師者、危絕之地也、若秦師過周而襲鄭是也、此在九地之外、而言之者、戰國時所有之也、鄭友賢曰、去吾之國中、越吾之境上、而初入敵人之地、疆場之限、所過關梁津要、使吾踵軍在後、告畢書絕、所以禁人內顧之情、而止其還遁之心也、司馬法曰、書親絕、是謂絕顧壹慮、尉繚子踵軍令曰、遇有還者誅之、此絕地之謂也、然而不預九地者何、九地之法皆有變、而絕地無變、故論於九地

之中二、而不レ得レ列二其數一也、或以レ越レ境、爲レ越二
人之國一、如二秦越一レ晉伐レ鄭者鑿也、美謂絕超越也、
孫武所レ釋義自明矣、是非二孤危之謂一也、九變篇
又曰、絕地無レ留、義亦與二輕地無レ止者一相近耳、
梅氏以爲二輕散二地之間一、卽得レ之矣、且孫武論二
地之利一、多爲レ之名二九變一、而惟言二其五一者、九地、
而又言二其六一者何、必擧二其數一者九而已、尉繚
子曰、背レ水陣曰二絕地一、蓋是危絕之義也、鄭氏莫
レ取二於此一、而據二踵軍令一、以實二其說一、亦可レ謂二頗近
レ鑿矣、

是故散地吾將レ一二其志一、志一作レ心、

此以下論二九地之變一也、散地則無レ戰、是其常也、或
利在レ可二以戰一、或勢不レ得レ不レ戰、而衆心不レ專、恐易二
潰散一、故曰、吾將レ一二其志一、是其變也、餘皆倣レ此、

輕地吾將レ使二之屬一、

杜氏曰、部伍營壘、密近聯屬、蓋以二輕散之地一、一者
備二其逃逸一、一者恐二其敵至一、使レ易二相救一、

爭地吾將レ趨二其後一、

陳氏曰、爭地必趨二其後一者、若地利在レ前、先分二精
銳一、以據レ之、彼若將レ衆來爭、我以二大衆一趨二其後一
也、

交地吾將レ謹二其守一、

杜氏曰、嚴二壁壘一也、

衢地吾將レ固二其結一、

杜氏曰、結二交諸侯一、使二之牢固一也、

重地吾將レ繼二其食一、

賈氏曰、使二糧相繼而不一レ絕也、繼一作レ掠者誤、
重地則掠、是其常也、若彼堅レ壁淸レ野、攻不レ得
レ拔、掠無レ所レ得、曠日持久、糧餉並絕、故曰、吾將
レ繼二其食一、是其變也、賈林杜佑並謂、當レ繼二糧餉一、
卽得レ之矣、其他皆謂當二掠レ彼以繼一レ食者、非二此
文之旨一也、

圮地吾將レ進二其塗一、

曹公曰、疾過去也、

圍地吾將レ塞二其闕一、

杜氏曰、敵開二生路一、以誘二我卒一、我返自塞、令三士卒
有二必死之心一、

死地吾將二示レ之以一レ不レ活、

杜氏曰、示二之必死一、令二其自奮以求一レ生也、

故兵之情、圍則禦、不レ得レ已則鬪、過則從、

從追也、謂躡其後也、此承上文人情之理而言
也、凡此三者、乃是兵之常情、而屈伸之理、亦在其
中矣、
上文云、九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不
察、只此汎言兵之常情、不必分論彼己也、過
則從、舊注以謂、陷之甚過則從計也、最失其義
也、犬將扑則吠、逼之則噬、過之則從、瘈狗猶
然、況人乎、李氏曰、過則審躡是也、
是故不知諸侯之謀者、不能預交、不知山林險
阻沮澤之形者、不能行軍、不用鄉導者不能
得地利、四五者、一不知、非霸王之兵也、（四五者茅元儀武備志作此三者、）
通結上文、四五者、曹注以謂上四五事是也、
曹注四五者、謂九地之利害、或曰上四五事也、上
四五事者、即謂知諸侯之謀、山林險阻沮澤之形、
而用其鄉導者也、後說近是、不知諸侯之謀
以下三者、既見軍爭篇、
夫霸王之兵、伐大國、則其衆不得聚、威加於敵、則
其交不得合、是故不爭天下之交、不養天下之
權、信己之私、威加於敵、故其城可拔、其國可墮、

其衆不得聚者、權力有餘也、其交不得合者、能
分散敵也、不養一作不事、信伸也、加陵也、蓋
言夫霸王之兵、所以獨行無敵者、其能知彼四五
者也、是故不結隣援、不養權力、徒逞兵威
加於敵國、城不保矣、此結上文不知諸侯之謀
者、不能預交之意也、
曹公李氏並解、爲信己之私威、其他以私爲
句、疑非、○曹公曰、霸者不結天下諸侯之權
也、絕天下之交、奪天下之權、故己威得伸、而
自私、舊注多從其說、蓋非其義也、五霸齊桓爲
盛、管仲相其君、而親四隣、反其侵地、正其
封境、兵一出、而大切十三、東夷西戎南蠻北狄、莫
不賓服、乃令諸侯、一匡天下、安在其不結
結隣援、不養權力、但欲伸其私威於敵國、
成天下諸侯之權也哉、杜牧及王張二氏以謂、不
則終取敗亡也、其說得之矣、
施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一
人、
曹公曰、軍法令不預施懸之、司馬法曰、見敵作
誓、瞻功行賞、此之謂也、犯用也、言明賞罰、雖

レ用レ衆、若上使二一人一也、賈氏曰、不レ守二常法常政一、
故曰二無法無政一、
犯レ之以レ事、勿二告以一レ言、犯レ之以レ利、勿二告以一レ害、
李氏曰、卒知二言與一レ害、則生二疑難一、
投二之亡地一、然後存、陷二之死地一、然後生、
曹公曰、必殊死戰、在二亡地一無レ敗者、孫臏曰、吾恐
不レ投二之死地一也、
夫衆陷二於害一、然後皆爲二勝敗一、
此承二上文一、而言二凡用レ兵之術一也、雖二於害一、而患可
レ解、蓋亦如レ此、
故爲レ兵之事、在三於順二詳敵之意一、拼敵一向、千里殺
レ將、此謂二巧能成レ事者一也、
詳一作レ佯、曹公曰、佯愚也、言爲レ兵之事、順二敵之
意一、使レ無レ所レ戒、始如二處女一是也、拼敵使二一向一、則
殺二其將于千里一、後如二脫兎一是也、此謂下成二事巧一
者上也、吳犯閒上國於越入レ吳、蓋亦如レ之耳、
事詳二于左氏傳及國語越絕書一、○陳氏曰、順レ敵之
旨、不レ假二多說一、但强示二之弱一、進示二之退一、使二敵
心不一レ戒、然後攻而破レ之必矣、賈氏曰、能以レ和
誘二敵人一、使二一向趨一レ之、則我雖レ遠、千里亦可
レ擒二殺其將一、
此謂二巧能成レ事者一也、一作二是謂巧能成一レ事、近本
拼敵作レ拼、拼力疑誤、
是故政擧之日、夷レ關折レ符、無レ通二其使一、厲二於廊廟之
上一、以誅二其事一、
夷猶レ閉也、厲磨也、誅責也、一本作三以謀二其事一、言下
謀定令發之日、閉レ關折レ符、勿レ通二其使一、磨二厲廟勝
之策一、以責上レ成二其事一也、
敵人開闔、必亟入レ之、先二其所一レ愛、微與レ之期、踐レ墨
隨レ敵、以決二戰事一、
開闔猶レ言二閒隙一、下云、敵人開レ戶是也、言下敵有二閒
隙一當中急乘上之也、
孟氏曰、開闔、閒者也、有レ閒來、則疾內レ之、梅氏
張氏並從二其說一、皆非也、曹公以爲二閒隙一、卽得レ之
矣、
先二其所一レ愛、微與レ之期、未レ詳、蓋如三吳將伐レ楚、先
得二唐蔡一是也、
先二其所一レ愛、微與レ之期、諸家所レ注、其說紛紛、未
レ知二孰是一、美謂、上文曰、先奪二其所一レ愛、陳氏以謂、
愛者不二止所レ恃利一也、蓋其所レ愛不三止子女玉

帛、土地人民一、若其同盟附庸等國、亦皆是也、初吳王闔廬立三年、伐レ楚拔レ舒、因欲レ至レ郢、孫武曰、民勞未レ可、且待レ之、乃歸、後九年、吳王曰、始子言郢未レ可レ入、今果何如、對曰、楚將囊瓦貪而唐蔡皆怨レ之、王必欲二大伐一レ之、必先得二唐蔡一乃可、闔廬聽レ之、悉興レ師、與二唐蔡一伐レ楚、遂入レ郢、囊瓦貪、而唐蔡皆怨レ之者、敵人有レ隙也、先得二唐蔡一者、先二其所一レ愛、微與レ之期也、孫武此策、蓋自用レ之矣、

墨度也、五尺爲レ墨、

國語、不レ過二墨丈尋常之間一、註五尺爲レ墨、倍レ墨爲レ丈、

踐レ墨謂下其所二踐履一不上レ出二墨丈之間一也、隨レ敵卽上文順二詳敵之意一也、亦此言下厲二於廊廟之上一以誅中其事上也、舊說、墨規矩也、踐二履規矩一也、亦通、

是故始如二處女一、敵人開レ戶、後如二脫兔一、敵不レ及レ拒、

始如二處女一、卽喩二踐レ墨隨一レ敵也、後如二脫兔一、卽喩二乘レ隙決一レ戰也、

其所二踐履一、不レ過二墨丈之間一者、猶二處女在一レ室、亦自柔順也、其乘二間隙一以決二戰事一者猶下狡兔脫走不レ可二追及一也、

此結二巧能成一レ事之意一、

孫武嘗謂、百戰百勝、非二善之善者一也、不レ戰而屈二人之兵一、善之善者也、又曰、善戰者立二于不レ敗之地一、而不レ失二敵之敗一也、至三其論二九地變一、則聚二三軍之衆一、投二之於險一、詭謀詐力、僥倖取レ勝、此爲二將軍之事一也、何其自相戾耶、或曰、此論二爲レ客深入之道一也、管子曰、遠用レ兵則可二以必勝一、出入異レ塗、則傷二其敵一、深入危レ之、則士自脩、士自脩、則同レ心、是古之善用レ兵者、爲レ客深入之道、而孫武亦不レ過三於述二其意一耳、管子之言、比二之孫武一、其辭簡、而其義盡矣、善乎蘇子瞻有レ言曰、夫兵無二常形一、而逆爲二之形一、勝無二常處一、而多爲二之地一、是以其說屢變、而不レ同、雖然擧二用之一、而聽用者自擇也、是故不レ難二於用一、而難二於擇一、觀者宜レ擇焉、

孫武兵法擇卷第十一終

孫武兵法擇卷第十二

火攻篇

孫子曰、凡火攻有五、一曰、火人、

火人者、縱火敵營、燒其士卒也、何氏曰、魯桓公焚邾婁之咸丘、始以火攻也、後世兵家者流、設五火之攻、以佐取勝之道也、

二曰、火積、

積者、委積也、焚之則芻糧皆困矣、軍無糧食則亡、無委積則亡、（軍爭篇）是也、

三曰、火輜、四曰火庫、

杜氏曰、器械財貨及軍士衣裝在軍中、上道未止曰輜、在城營壘、已有止舍曰庫、其所藏二者、皆同焚之、則器財皆窮矣、軍無輜重則亡、（軍爭篇）是也、

五曰、火隊、

隊一作隧、古字相通、

隧徐醉切、集韻隧或省隊、正韻隊亦作隧、

賈氏曰、隧道也、燒絕糧道及轉運也、李氏曰、焚其隊仗兵器、杜氏曰、焚其行伍、因亂而擊之、劉寅曰、臨戰之時、用火炮火車火燕之類、焚其隊伍、而因擊之也、張預曰、焚其隊仗、使兵無戰具、然上文既曰火輜、則器械亦在其中、若曰隊仗、人各執在手、豈得焚之、美謂、劉氏因杜說、而不從張說、可也、然隊伍亦人也、要皆未曉隊隧古字相通之義耳、賈氏之說、實得之矣、

愚謂如漢燒絕棧道、亦此義也、

項羽立沛公、爲漢王、王巴蜀漢中、王乃就國、張良送至褒中、因說王燒絕所過棧道、以備盜兵、且示羽無東意、

行火必有因、煙火必素具、

因者、即下文所言如天時月次及地利、皆是也、曹公曰因姦人、陳氏曰、須得其使、不獨姦人、賈氏曰、因風燥而焚之、諸說亦皆擧其一端耳、

煙火燒具也、

發火有時、起火有日、時者天之燥也、日者月在箕壁翼軫也、凡此四宿者、風起之日也、

燥者早也、梅氏曰、箕龍尾也、壁東壁也、翼軫鶉尾也、宿者謂月之所次也、四宿好風、月離必起、

凡火攻、必因五火之變而應之、

五火、卽人積輜庫隊也、此下論因變應之之事也、

火發於內、則早應之於外、火發兵靜者、待而勿攻、極其火力、可從而從之、不可從而止、火發兵靜、近本一作火發而其兵靜、

火初發於內、兵速應於外、內外齊攻、則火不及敉、兵不及接、故可克也、火作不動、彼素有備、不可遽攻、極其火勢、待其擾亂而攻之、彼猶不動、則收兵而退也、曹公曰、見可而進、知難而退、是也、

火可發於外、無待內、以時發之、

敵營於荒澤草穢可焚之地、卽須及時發火、不必待內發作、吳起曰、凡軍居荒澤草木幽穢、可焚而滅、是也、陳氏曰、以時發之、所謂天之燥、月之宿、在四星也、

火發上風、無攻下風、

無攻下風、逆火勢也、且恐彼乘上風、棄死於我、則反受其害也、

杜氏曰、焚敵之東、我亦隨以攻其東、若舉東可知其他也、王氏曰、或擊其左右可也、吳起曰、將戰之時、審候風所從來、風順致呼而從之、風逆堅陣以待之、凡戰背風、而況火攻乎、

凡戰背風、司馬法文、

晝風久、夜風止、

此因上文而言占風之候也、凡風晝發則難止、夜起則易止、

張賁曰、久字、古从字之誤、卽今之從字也、謂白晝遇風而發火、則當以兵從之、遇夜有風、而發火、則止而不從、恐彼有伏兵乘我也、卽上文可從而從、不可從而止之義、美謂、張說劉氏直解以爲一說、茅元儀武備志亦既從之、蓋其說本據魏滿寵掩吳人、夜來燒營而破之之事也、若依其說、五火之變、只應於白晝耳、火攻之用、豈不少乎、然亦可以備一說、故附于此、

凡軍必知有五火之變、以數守之、

凡軍有五火之變、我必當知此五者、嚴爲之備、

言不可止知爲攻人之用、亦當防人攻已也、

舊解或云、算星躔之數、或云數星之躔次、皆非也、五火之備、何必論星宿之在否哉、以數守之、言凡五火之變、我爲之備、當以其數不可闕一也、

故以火佐攻者明、以水佐强者强、水可以絶、不可以奪、

此因火攻、幷論水攻也、明言可畏也、

尙書天明畏、孔安國傳云、天明可畏、此言明、亦謂其可畏也、舊解、火佐者、取勝明也、或曰、明白易勝、或云其威甚著、皆非、

强言不可禦也、水可以絶、不可以奪、未詳、

舊說、水止能隔敵軍、使前後不相及、然不若火能焚奪敵之積裝、一說不字爲火字之誤、言敵以水灌、我亦當決而絶之、敵以火焚我、我亦當焚而奪之、後說是、未知然否也、

劉氏直解張賁曰、不字爲火字之誤耳、敵以水灌我、我可以絶之、如智伯灌趙襄子於晉陽、襄子夜殺守堤吏決水、反灌伯智、敵以火焚我、我可以奪之、如單于縱火焚李陵於大澤、陵先放於火、燒其葭葦、奪其火力、兵法千變萬化、不可執一也、

夫戰勝攻取、而不修其巧者凶、命曰費留、故曰、明主慮之、良將修之、非利不動、非得不用、非危不戰、動一作起、

夫善用兵者、必以全爭於天下、故曰、拔人之城而非攻也、毀人之國、而非久也、戰勝攻取、非善之善者也、況以火佐其攻乎、而孫武言、此亦惟示人、不可不知也、故自此已下極論安國全軍之道而已矣、修其巧者、所以全其勝也、費留者、久暴師、則國用不足之謂、故明主慮其事、良將修其巧也、

舊說以謂、夫戰勝攻取、若不藉有功、擧而賞之、則三軍之士、必不用命也、則有凶咎、徒留滯費耗、終不成事也、或曰、費留惜費也、皆非也、戰勝行賞、亦此修功之一事耳、

勝算不用兵也、非危不戰、非救危難、不與戰也、

主不可以怒而興師、將不可以慍而致戰、合

於利二而動、不レ合二於利一而止、
尉繚子曰、兵起非レ可レ以レ忿也、見レ勝則興、不レ見レ勝則止、亦此義也、

怒可二以復喜一、慍可二以復悦一、亡國不レ可二以復存一、死者不レ可二以復生一、故明君愼レ之、良將警レ之、此安レ國全レ軍之道也、
張氏曰、見二於色一者、謂二之喜一、得二於心一者、謂二之悦一、梅氏曰、一時之怒、可二返而喜一也、一時之慍、可二返而悦一也、國亡軍死、不レ可二復止一已、主當二愼重一、將當二警懼一、

古之論者、謂二火攻一爲二孫子之下策一、誠然也、雖レ然是篇之作、亦惟示レ人以レ不レ可レ不レ知也、故曰、以レ數守レ之、如レ此恃レ吾有二以待一レ之之意一耳、武亦論レ戰以謂、殺レ敵者怒也、又其論レ攻以二全レ國全一レ軍爲レ上、是篇復論二此二者一、語益加レ切、蓋其反覆告戒、示レ人之意也深矣、

孫武兵法擇卷第十二終

孫武兵法擇卷第十三

用間篇

孫子曰、凡興レ師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費二千金一、內外騷動、怠二於道路一、不レ得レ操レ事者、七十萬家、

曹公曰、古者八家爲レ隣、一家從レ軍、七家奉レ之、言下十萬之師擧、不レ事二耕稼一者七十萬家上、

相守數年、以爭二一日之勝一、而愛二爵祿百金一、不レ知二敵之情一者、不仁之至也、非二人之將一也、非二主之佐一也、非二勝之主一也、

王氏曰、悋二財賞一、不レ用レ間也、張氏曰、不レ可二以將一レ人、不レ可二以佐一レ主、不レ可二以主一レ勝、懃懃而言者、嘆二惜之一也、

故明君賢將、所下以動而勝レ人、成レ功出中於衆上者、先知也、

先知二敵之情一也、

先知者、不レ可レ取二於鬼神一、不レ可レ象二於事一、不レ可レ驗二於度一、必取二於人一、知二敵之情一者也、

梅氏曰、鬼神之情、可下以二卜筮一知上、形氣之物、可下以二象類一求上、天地之理、可下以二度數一驗上、唯敵之情、必由二間者一而後知也、

故用レ間有レ五、有二因間一、有二內間一、有二反間一、有二死間一、有二生間一、五間俱起、莫レ知二其道一、是謂二神紀人君之寶一也、紀一作レ絕、

梅氏曰、五間俱起、以間レ敵、而莫レ知二我用レ之之道一、是神明之綱紀、人君之所レ貴也、賈氏曰、紀理也、言下敵人俱莫レ知レ我、以二何道一爲中通二神理一也、

因間者、因二其鄕人一而用レ之、

杜氏曰、因二敵鄕國之人一、而厚撫レ之、使レ爲レ間也、賈氏曰、讀二因間一爲二鄕間一、

下文鄕間不二得而使一是也、

內間者、因二其官人一而用レ之、

梅氏曰、因二其官屬一、結而用レ之、

反間者、因二其敵間一而用レ之、

李氏曰、敵有三間來闚二我得失一、我厚賂レ之、而令三反爲二我間一也、

死間者、爲二誑事於外一、令二吾間知一レ之、而傳二於敵間一

也、

死間未詳、王氏曰、詐而間、使敵得之、間以吾詐告敵、事決必殺之也、

諸家所注、皆未分曉、王氏之說、據文爲解、故采錄云、

生間者、反報也、

杜氏曰、往來相通報也、生間者、必取內明外愚、形劣心壯、趫捷勁勇、閑於鄙事、能忍飢寒垢恥者、爲之、

故三軍之事、莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間、非聖知不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實、微哉微哉、無所不用間也、

此論用間之事也、蓋言先知敵情者、莫如必取於人之親切也、故功賞之厚、幾事之密、亦莫如之者也、

舊說或言、受辭措蹤、在於臥內、或云、以腹心親結之、疑非其義也、

密一作審、其義亦通、聖知蓋謂其能知人者也、仁義蓋謂其能得衆者也、言苟能知人、則其材可得而用之也、苟能得衆、則其力可得而任也、非微妙不能得間之實、間之情僞、必當深察也、微哉微哉、無所不用、間言敵之動靜、必當索知也、

間事未發、而先聞者、聞者與所告者皆死、

杜氏曰、告者非誘間者、則不得知間者之情、殺之可也、

凡軍之所欲擊、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將左右謁者門者舍人之姓名、令吾間必索知之、吾一作五、

杜公曰、守謂官守職任者、謁告也、主告事者也、門者守門者也、舍人守舍之人也、梅氏曰、凡敵之左右前後之姓名、皆須審省、而令吾間先知、則吾間可行矣、王氏曰、不可臨事求也、

必索敵人之間來間我者、因而利之、導而舍之、故反間可得而用也、

此下言五間、以反間爲其最也、杜氏曰、敵間之來、必誘以厚利、而止舍之、使爲我反間也、因是而知之、故鄉間內間可得而使也、因是而知之、故死間爲誑事、可使告敵、因是而知之、故

生間可レ使レ如レ期、
因レ是而知レ之者、因二敵間一而知二彼之情一也、此言二四間一者、皆當下因二敵間一而行上也、如レ期、杜氏曰、可レ使二往來如一レ期、

五間之事、主必知レ之、知レ之必在二於反間一、故反間不レ可レ不レ厚也、
此言二五間之事一、其所レ主者必先知レ之也、而五者、皆因二反間一、知二彼之情一、以爲二之用一、則是其待レ之、所三以特厚二於反間一者也、
舊說以謂、五間之事、固皆人主所レ當レ知者、非也、
此言レ五者、皆以二先知一爲レ上也、

昔殷之興也、伊摯在レ夏、周之興也、呂牙在レ殷、故惟明君賢將、能以二上智一爲二間者一、必成二大功一、此兵之要、三軍之所二恃而動一也、
伊摯伊尹也、呂牙太公也、張氏曰、用レ師之本、在レ知二敵情一、故曰、此兵之要、未レ知二敵情一、則軍不レ可レ擧、故曰、軍所二恃而動一也、
經レ之以二五事一、校レ之以二八計一、而索二其情一、孫武一書之體要、蓋不レ出二乎此一矣、故於二其篇末一、申二論之一曰、明君賢將、必取二於人一、知二敵之情一者也、且其論レ之曰、與レ師十萬、出征千里、相守數年、以爭二一日之勝一、而愛二爵祿百金一、不レ知二敵之情一者、不仁之至也、其意則勤矣、然其論二五間一、以爲二聖智仁義之用一、實非三所二以爲レ訓也、安復有下上智而爲二間諜一者上哉、蓋惟其意亦欲四其陰謀奇計、勿三取下鄙詐細人上、以爲二之用一耳、且其論レ之及二於伊呂一、蓋引二古者賢聖之事一、貴レ之神レ之、以重二其說一、而非レ謂三成湯武王以爲二其反間一也、戰國諸子之說、類皆如レ是、不レ足二深怪一矣、

孫武兵法擇卷第十三終

孫武兵法擇副言

紫陽　源　堪　著

計篇

凡計先ヅ內ニ定リテ、後ニ兵境ヲ出ヅ、故ニ兵ヲ論ズルコトハ計ヨリ始ルト云フ也、（古本ニハ計篇トアルヲ、近本ニハ始計篇ト題セシモ、此等ノ義ニヨレルナルベシ、凡ソ古本近本篇名ノ同ジカラヌコトドモハ、本注ニ見ヘタリ、）サレドカクノミ心得ンハ然ルベカラズ、後十二篇悉皆此篇ノ義ニ推本ヅカズト云フ者ナシ、サラバ孫武一書ノ大義此篇ニ係レリト云フベシ、讀者マヅ能ク講ジ明ラムベキモノ也、

第一段、（兵者ト云フヨリ、不レ可レ不レ察也、ト云フニ至ル、）開卷第一義ナリ、凡兵ノ禍タル其係ル所最大ヒナルヲ論ジテ、輕ク用フベキコトニアラザルヲ云フ、サレバ第十二篇ニモ、（火攻）亡國不レ可ニ以復存一、死者不レ可ニ以復生一、故曰、明主愼レ之、良將警レ之、トモ見ヘタリ、（コレ泛ク兵ノ禍タルコトヲ云テ、審ニ察スベキノ義ヲ論ズ、世ノ說者我民ノ死生、我國ノ存亡、コヽニ係ルトスルアル歟、尤然ルベカラズ、）

第二段、（故經レ之ヨリ其情ニ至ル、）故トハ承レ上起レ下之語ト云ヒ、マタ猶レ言ニ是以如レ此也トモ云フ也、孫武ノ書、故ノ字ヲモチヒシ特ニ多カリ、此ノ心得ヲ以テ見ルベシ、經者當也、凡事ニハ經アリ、權アリ、常アリ、變アリ、天下古今ノ間、變ジ易フベカラザル、コレヲ經トシ、常ト云、サレバ兵ノ大經タルコト凡ソ五ツ、其詳ナルコトハ孫子自ラ注シ釋セシ所下ニ見ユ、校者比較也、事ヲ比べ校スルヲ云フ也、計者算也、又謀也、其數ヲ擧テカゾヘハカルヲ云フ也、索者深求也、情者實也、賈林注ニ情實ト云フモノコレヲ得タリ、後ニ兵之情ト云フ卽是也、凡事ニハ打見打聞ク所ト、其情實ハ同ジカラズアルハヨノツネ也、其情實ヲ知ラザルトキハ、深ク求ルニアラザレバ得べカラズ、其詳ナルコトハマタ下ニ見エタリ、カク云フ意ハ、兵ノ大經トスルコト五ツ、此五事ヲ以テ彼ト此トヲ比べ校ブルニ、計算ヲ以テシテ、其情實ヲ深ク求ムル也、（舊說ニ經ハ中广（庸カ）九經之經ノ如シト云フアリ、似タルコトハ似タレドモ、義少ク異ナリ、九經ノ經ハ實字トナシテ言フ也、經レ之ノ經ハ用ヒテ虛字トス、コレ用字ノ法也、凡ソ孫武字ヲ用ユル、此兵ヲ用ユル法ノ如ク、其變マタ究ラズ、コレラノ所ヲ能ク算フルニアラザレバ、此本旨明カナルベカラズ、）

第三段、（一曰道ヨリ不レ知者不レ勝ニ至ル、）道天地將法ノ義、孫武自ラ注釋シ得テ明カナリ、多說ヲ費スベカラズ、ソレガ中

道者五事之本ニシテ、令ニ民與レ上同レ意者、王者之兵、同心同力ト言フ如キモ、マタコレニ外ナラズ、モシヨク其衆心ヲ得ルカクノ如キハ、コレト其死生ヲ與ニシテ、危ク畏ザラシメツベシ、孫武用レ衆ノ術、其要マタ不レ畏レ危ニアリ、求ニ之於勢ニト言ヒ、齊レ勇若レ一ト言フガゴトキ、此道ニヨレル也、近本ニハ（令ニ民與レ上同レ意也ノ也ノ字、及ビ故ノ字、二ツノ以ノ字無クシテ、而不レ畏レ危ノ下ニ、也ノ字アル也、シカルベシトモ見ヘズ、古本ニ從フヲ正ト云ベシ、此等ノ如キ、後人其意ヲ以テ解スルノ訛リナル也、令ニ民與レ上同レ意也ト言フハ、是其正解ナリ、第三篇ニ上下同レ欲者勝ト言フ、即此義也、故ト言フヨリ下ノ三句、上文ヲ承テ其故ヲ推シ言フ也、而不レ畏レ危ト言フニ至リテハ、孫武用レ衆之術、其要マタ此ニアリ、勢篇九地篇ノ如キ、皆此義ヲ明カニセシ所ナリ、三軍之衆皆勇ナルコトヲ得ズ、凡ソ人ノ天質膽薄キハ、其固ヨリ死ヲ決セザルニハ非レドモ、事ニ臨ミ畏縮シテ用ユルニ堪ザルアリ、ソレヲシテ其危キヲ畏レザラシメンハ、主將ノ道ニアリ、カヽルコトノ如キ、マタマヅ心得ベキコトナリ、）舊注ニ、陰陽トハ孤虚面背之謂ニ非ズト言フアリ、シカルベカラズ、古ヨリ兵家ノ說其因來ル處スデニ久シ、然ルヲ是ヲ廢セントス、兵メ情ヲ知ラザル也、此節重キコト時刻ノ字ニアリ、時ニ隨テ室（宜カ）ヲ制セシ主將ノ意ニアリ、曲道官制主用ノ如キモ、舊注六ツニ分テ言ヒシアリ、ソレモシカルベカラズ、曲制ハ管子ノ書ニ見ユ、官道ハ鶡冠子ニ官備ニ作レリ、コレ部曲之制、分曹之道、生軍之用ヲ言フ也、部曲分ルヽトキハ、金鼓旌旗ノ制ノ如キハ其中ニアリ、將校ヨリ以下厮養ノ卒ニ至ルマデ、各其職守アル官道也、軍資ノ用糧餉器械ヨリ始テ、陸ニハ車馬ヲ用ヒ、水ニハ舟楫ヲ用ヒ、晝ハ旌旗ヲ多クシ、夜ハ火鼓ヲ多クスルガ如キ、亦皆其主トナシテ用ユル所アリ、（孫武土事ヲ說ク、タヾ其地ト時（將歟）トヲ言フ、其句法相同ジ、余ハ皆其文變ジテ同ジカラズ、即是文法也、シカルヲ天地將法ノ四事ヲ解スル、皆其法ヲ同ジクセント云、コレ其文法アルコトヲ知ラザルニヨレル也、）

第四段、（凡此五者ヨリ知ニ勝負ニ矣ニ至ル、）是上文ヲ承テ校レ之ノ計ヲ言フ、凡上ニ言フ處ノ五者、兵ノ大經大法ニシテ、世ノ將タルモノ聞ザルナシ、タヾ其實ニ知レル者ハ勝ツ、シカラザルハ勝タズ、故ニコレヲ比ベ校ブルニ、計算ヲ以テシテ、其情實ヲ深ク求ル也、（コレ校レ之以レ計而索ニ其情ニノ義ヲ明ニス也、）主孰有レ道トハ、我ト彼トノ主イヅレカ彼道アルヤト比ベ校ブル也、有道ハ無道ニ勝ツベク、無道ハ有道ニ勝ツベカラズ、コレヲ以テ見ルトキハ、其勝負ノ如キ自ラ明也、其條皆コレニ倣フ、○舊注校レ之ノ計リ以テ七計トスルモノハ、曹公ノ注ニ依レル也、其實ハ五事ノ外ニ出ルニアラズ、タヾ此ニハ五事ノ中、天ト地トノ二者ヲ合

セ言ヒ、法ヲ分ケ言ヒテ三ツトス、其天ト地トヲ合セシ、コレヲ畧シテ言フニアラズ、孫武之書其他ヲ論ズル地形九地及ビ行軍等ノ篇ニオイテ特ニ詳也、タヾ其天ヲ言、地形火攻ノ二篇アルノミ、文夫カ五事ノ法アルモノハ、其要兵家ノ強クシテ、士卒ノ練レシニアリ、故ニ校レ之ニ此二者擧テカゾヘ言フハ、即是計之法、其情ヲ深ク求ルノ義ナルナリ、

第五段、將聽ヨリ制レ權也ニ至ル、此段將タルノ道ヲ言フ也、國ノ存亡、將ノ去留、其事ノ輕重齊シカラズト雖其機ヲ審ニスベキハ一ツ也、況ヤ兵ノ勝敗、吾計ノ聽ル、ト聽レザルトニ係リテ、國ノ存亡、民ノ死生、スナハチコレニ從フヲヤ、故ニ將タルノ道、必勝ニアラザレバ計ラズ、計聽レタレバ留リ、聽レザレバ去ル、計利ニシテ聽カル、乃コレガ勢ヲナシテ其外ヲ佐ク、其外トハ前ニ言フ處ノ經之事校之計ノ如キハ、皆コレ兵ノ常法ナリ、勢ヲナシテ佐クベキモノハ、皆常法ノ外ナルヲ言フ也、勢トハ、孫武自ラ解シテ因レ利而制レ權也ト言ヒケリ、利トハ所レ謂計ノ利アル也、權トハ前ニ見ヘシ經ト言フモノニ對シテ見ツベシ、經ハ常也、權ハ變也、タトヘバ兵ハ常形ナシ、敵ニ因リテ變化シテ、其勝ヲ制スルガ如キハ權ナリ、

第六段、兵者詭道也ヨリ不レ可ニ先傳一也ニ至ル、詭ハ詐也、第七篇ニ兵以レ詐立ト云フモ亦此義也、下ニ云フ十四者即詭道ノコト也、四ツノ示之ノ之字ハ皆敵ヲ指シテ言フ也、利亂實強怒卑佚親ノ八ツハ、皆敵ヲ動スノ事、誘取備避撓驕勞離ノ八ツハ、皆敵ヲシテ從レ之シムルノコト、其要ハ攻ニ其無レ備、出ニ其不意一ニ在ル也、總テ言ヘバ即皆詭道也、楚ノ葉公子高ノ以レ謀蓋レ人詐也ト云ヒシモ是已、鄭友賢ノ説ニ、此十四事皆詭道也、舊解ニ敵實ナラバ我コレニ備ヘ、敵強ナラバ我コレヲ避クベシト云フハ正道ナリ、詭道ニハアラズ、我本虚也、詭ニ實ヲ以テシテコレヲシテ備ヘシメ、我本弱也、詭ルニ強ヲ以テシテコレヲ避シムベシト云フ、タヾニ此二ツノモノノミニ限ルベカラズ、其餘皆シカリト心得ベシ、五事ノ其一ツニ道ト云ヒシハ、兵ノ經常ヲ指シ言ヒ、此ニ云フ所ノ道ハ、兵ノ權變ヲ以テ云フ語、各當ル攸アリ、二ツノ道字由レ是而之爲也謂レ道ノ義ノ如クニシテ、孫武ガ道トスル處ノ道ニシテ、先王ノ所レ謂道ニハアラズ、世ノ説者、孫武謂フ所ノ五事ノ道ノ字ヲ説クコト重クシテ、詭道ノ道ノ字ヲ説クニ至テ甚ダ分曉ナラズ、凡ソ孫武道ト謂ヒ仁ト謂フモノ、如キ、其道トシ仁トスルモノヲ謂フノミ、先王ノ謂フ處ノモノニハ異也、

第七段、夫未レ戰ヨリ篇末ニ至ル、古者廟算ノコトヲ援テ、校レ之以レ計之義ノ終ル也、廟算トハ古ニハ國事必先謀ニ於廟廊之所一也、愼之至也、算ハ卽計ナリ、

作戰篇

計先ヅ內ニ定リテ兵境ヲ出、作戰ノ計ニ次グ故ナルカ、

第一段、凡用レ兵之法ヨリ十萬之師擧矣ニ至ル、首ニ軍ノ費務ヲ云フ、五事ノ法ニヨリテ主用之事ナリ、但シ古ノ法今ニ異也、況ヤ彼制此ニ同ジカラズ、其要日費ニ千金一、然後十萬之師擧矣、ト言フニ在リ、

第二段、其用レ戰也ヨリ巧久也ニ至ル、此段ノ要、兵久シキノ害ヲ知ルニ在リ、故ニ兵ハ巧ノ久シキガ巧ナルニハ非ズ、拙速ヲ以テ眞ノ巧トス、第十二篇ニ夫戰勝攻取、而不レ修ニ其功一者凶、命曰ニ費留一、故曰、明主慮レ之、良將修レ之ト云フ、卽チ此義ナリ、勝國ノ主朝鮮ノ役、兵連リ禍結ブモノ七年、身死シテ其肉イマダ冷カナラザルニ、天下大ニ亂レキ、兵久シキノ禍、其慘コレカクノ如シ、

第三段、夫兵久ヨリ吾二十石ニ至ル、上文ヲ承テ兵久シカルベカザルノ意ヲ起シテ、其害ヲ知リテ、此利ヲ知ランコトヲ要ス、役不ニ再藉一モノハ、兵久シカラザレバ也、再タビ兵ヲ發セザルヲ云フナリ、糧不ニ三載一コトハ始出ル時ニ載セ、國ニ歸ル時ニ迓ス、既ニ境ヲ越ヘタレバ、糧ヲ敵ニ因ルノミ、用ヲ國ニ取ルモノハ、凡ソ兵甲器械ノ如キハ、國各其制異アリ、我ニ取ラザルコトヲ得ズ、已上三者ハ、マヅ其利ヲ言フ也、國ノ貧ニ於師一者遠輸トハ、管子ノ書ニ東(軍カ)行三百里、則國無ニ一年之積粟一、行四百里、則國無ニ三年之積粟一、行五百里、則衆有ニ飢色一ト見エタリ、大約平地千里ニ轉輸スルニ、二十石ヲ費シテ一石ヲ得ベシ、是其法ナリ、近ニ於師一者貴ニ其賣一トハ、師期近カラントス、必ズ器資ノ用アリ、百物ノ價貴カラザルナク、百姓ノコレヲ供スルモノ、其財竭ザルコトヲ得ズ、百姓ノ財スデニ竭ヌレバ、其供億ニ究迫ナリ、所レ謂急ニ於兵役一是也、兵役トハ兵役ヲ云フ、百姓ノ費ヲ云ヒ、公家ノ費ヲ云フヨリ以上ハ、皆兵ヲ用ユル害ヲ云フ也、智將務食ニ敵食一ノ一節ハ、再ビ糧ヲ敵ニ因ルノ利ヲ云フ也、

第四段、故殺レ敵者ヨリ益强ニ至ル、殺レ敵者怒也トハ、怒ヲ以テ敵ヲ殺スベカラザルヲ云フ、此義第十二篇ニ不レ可ニ以レ怒而興レ師、不レ可ニ以レ慍而致レ戰ト云フニ同ジ、此節下文ニ獲ル所ノ卒ハ善シテ養フノ義ヲ起ス也、取ニ敵之利一者貨也トハ、平費ノ

害上文ニ云フ所ノ如シ、故ニ貨財ヲ敵ニ取ルヲ利トスル也、此節下文ニ獲ル處ノ車ハ雜ヘテ乘ル義ヲ起ス、ヨリテ古者車戰之法ニ、車徒ヲ得ル者ヲ賞セシ法ヲ引、結ブニ敵ニ勝チ強ヲ益スヲ以テス、已上マタ用兵ノ利ヲ云フ也、

第五段、故兵貴レ勝ヨリ篇末ニ至ル、兵ハ勝ヲ貴ビ、久キヲ貴バザルハ、久シキニ勝ツノ害タル前ニ言フ處ノ如クナレバ也、知レ兵ノ將トハ、害ヲ知リ利ヲ知ルノ將ヲ云フ、兵者國之大事、死生之地、存亡之道タル、首篇ニ謂フ處ノ如シ、故ニ民之司命、國之安危、皆將ニ由ルナリ、此篇ノ大意兵ヲ用ルノ害ヲ知リ利ヲ知ルニ在リ、第八篇ニ智者之慮、必雜ニ於利害一ト云フモ亦此義也、

謀攻篇

謀ヲ以テ攻ルヲ云フ也、

第一段、凡用レ兵ノ法ヨリ善之善者也ト云ニ至ル、全レ國トハ全得ニ其國一也、破レ國トハ擊破ニ其國一也、軍旅卒伍コレヲ全クスルト破ルト其義皆同ジ、國ヨリ已下伍ニ至ルマデ、全ク得ルヲ以テ上トスルトキハ、百戰百勝ト云フトモ、既ニ戰ヲ用ヒテ勝ツモノハ善之善ナルニハアラズ、故ニ不レ戰而屈ニ人之兵一ヲ以テ、善之善ナル者トハスルナリ、

第二段、故上兵伐レ謀ヨリ謀攻之法也ト云フニ至ル、伐レ謀トハ其謀ヲ伐ツ也、伐レ交トハ兵スデニ交ルヲ伐ツ也、伐レ兵トハ兵スデニ陣スルヲ伐ツ也、城ヲ攻ルハ止コトヲ得ザルモノトス、故ニ最下トスル也、伐レ謀モノハイマダ交ルニ及バズ、伐レ交モノハイマダ兵ニ及バズ、伐レ兵モノハスデニ兵ヲ用ユル也、コレ此上下之序也、シカルニ舊說多クハ交ヲ解シテ交援ノ義トス、然ルベカラズ、交トハ左傳ニ兵交使在ニ其間一ト云ヒ、此各ヲ交和而舍スト云フガゴトク、兩軍相對スルヲ云フ也、此ノ俗ニ對陣ト云フモノ是ナリ、モシ其交援ヲ離間スルガ如キハ、攻ヲ伐ツノコトノミ、ヒトリ張預一說アリテ、此一說ニ兩軍相交ノ義トスレドモ、又一說ニ交援ノ義トス、コレモマタ此義ヲ明カニセザルニ似タリ、櫓轒轀ハ攻城之具也、櫓ハ大盾也、其用此ノ俗ニ矢楯竹束ナド云フ物ノ類ナリ、轒轀ハ車也、其用此ノ俗ニ龜甲ナド云フ物ノ類也、距闉トハ積レ土爲レ山シテ窺ニ敵城一者也、コレ其用此ノ俗ニ築山ト云フ類ノ類ナリ、攻具ヲ修スルコト三月、距闉マタ三月ニシテ其功終ル、其攻ルコト已ニ二者ニ逾テ其志ヲ得ズ、四時オノヅカラ三月ヲ以テ一時トス、再ビ三月ノ過ギタレバ二時ヲ逾ルト云也、將忿リニ勝ズシテ戰士ヲシテ城ニ登ラシメ、其三分ガ一ヲ殺シテ

モ城ナヲ抜ズ、コレ攻城最モ下策ニ出ル義ヲ明シ言フ也、故ニ必ズ全勝ヲ以テ天下ニ爭ヒ、兵鈍ラズシテ利モ又全キ、コレヲ謀攻之法トス、卽是此篇ノ大義也、ソレガ中、戰ハズシテ人ノ兵ヲ屈シ、攻メズシテ人ノ城ヲ抜ク、此ノ二ツヲ以テ全勝トスルハ、義自ラ明カナリ、篇首ニハ其破レ國ヲ以テ其次ナルモノトシ、此ニハ毀レ國者ヲ併セ言ヒテ、必以レ全爭トズルハ、其要非レ久也ト言フニ在リ、前篇ニ兵久シカラザルヲ以テ國ノ利トスル者卽此義也、

第三段、故用レ兵之法ヨリ大敵之擒也ニ至ル、此段用レ兵衆寡、强弱之大法ヲ擧テ言フ、皆其智勇利鈍利均キヲ言フノミ、若シ我治リ彼亂レ、我奮ヒ彼怠ルハ、寡モ衆ニ勝テ、弱モ强ヲ制スベシト、文ニ識ニ衆寡之用ート云フ卽此ナリ、

第四段、夫將者ヨリ亂レ軍引レ勝ニ至ル、君其將ヲ命ズル法ヲ言フナリ、凡ソ將タルモノハ國ノ輔也、周トハ密也、君ノ將ニオケル其情親密ナルハ、國必ズ强ク、間隙アルハ國必ズ弱シ、謂フ處ノ患ニ於軍ー者三ツ、皆其間隙アルノコトニシテ、三軍之衆惑ヒ疑フニ至テハ、隣國ノ難必ズ至ル、是我自ラ吾軍ヲ亂シテ敵ノ勝ヲ引致ス也、下文知レ勝之道五ツヲ擧テ、重キヲ將能而君不レ御ニ歸スルモノ卽此義ナリ、

第五段、故ニ知勝ヨリ篇末ニ至ル、上文知下可ニ以與戰一、不上可ニ以與戰一ト云フヲ承テ、知レ彼知レ己ヲ以テ、勝敗ノ道ヲ云フ、又孫武十三篇經レ之以レ事、校レ之以レ計ヨリ第一篇ニ見ユ、取ニ於人一知ニ敵之情一ニ至リテ第十三篇ニ見エ、知レ彼知レ己ヲ以テ兵ノ要トス、凡ソ戰守攻圍之術、一ツモコレニ由ラザルモノハアラズ、故ニ其二ツヲ知ルモノハ、百戰不レ殆、其一ツヲ知ツテ其一ツヲ知ラザルモノハ、勝負相半シ、二ツナガラ知ラザルモノハ、每戰必敗ル、兵ノ勝敗コレニ決セリ、

形篇

近本ニ軍形篇ニ作ル、此篇ノ要ハ守リテ敗ルノ義ヲ明カニシ、篇末ノ形守ヲ取テ名トセシ也、舊法每句形字ヲ貼帶シテ義ヲ解クモノハ、其本旨ニハアラズ、

第一段、昔之善戰者ヨリ攻則有レ餘ニ至ル、先爲レ不レ可レ勝、以待ニ敵之可レ勝トハ、我先ヅ自守リテ敵ノ攻ムベキヲ待ツヲ云フ也、此二句舊注多クハ解シテ、敵ノ我ニ勝ベカラザルコトヲサシテ、敵ノ勝ツベキヲ待ツト云フ、最モ然ルベカラズ、本文ノ如キハ、先爲レ不レ可レ勝ノ句ニ敵ヲ言ハズ、以待ニ敵之可レ勝ニ至テ、敵ヲ言フ、先爲レ不レ可レ勝トハ敵ノ我ニ勝ベカラザ

ルコトヲ言フニハアラズ、我自ラ視テ以テ足ラズトス、故ニ先ヅ自守ル也、下文云、不レ可レ勝者守也、又云、守則不レ足、孫武自釋セシ其文甚明カナリ、王翦項燕ト對シ、司馬懿孔明ト對セシ如キ、爲レ不レ可レ勝者ニ似タリ、餘ハ本注ニ詳ニ見エタリ、不レ可レ勝在レ己、可レ勝在レ敵トハ、守ルベキコトハ我ニ在リ、攻ムベキモノハ敵ニ在ル也、故ニ善戰者ハ爲レ不レ可レ勝コトハ能クス、敵ノ必勝ベカラシムルコトハ能クセズ、故ニ勝可レ知而不レ可レ爲ト云フ也、凡ソ故曰ト云フモノ、多クハ古軍志ヲ引キシト見エタリ、餘亦倣レ此、是ヲシテ我ニ在ルト彼ニ在ルトノ辨ニシテ我ニ在ルモノハ能クスベシ、彼ニ在ルモノハ强ベカラザレバナリ、不レ可レ勝者守也、以下四句、上文ヲ承テ守攻ノ義ヲ明ス也、前ニ所レ謂不レ可レ勝者ハ守リ也、可レ勝者ハ攻ル也、此ニ至テ孫武自ラ篇首ニ句ノ義ヲ釋シ得タリ、守ルハ其勝イマダ必トセズ、所レ謂不レ足也、攻ルハ其勝スデニ全シ、所レ謂有レ餘也、善守者ヨリ以下三句ハ、守ルト攻ルト二者其極ニ造レルヲ云フ也、第六篇ニ虛實善攻者、敵不レ知ニ其所レ守、善守者、敵不レ知ニ其所レ攻ト云フモ此義也、此ニハ守リテ攻ルヲ出ス、故ニ守ルヲ先ニシテ攻ルヲ後ニス、彼ハ攻守ヲ相對シテ云フ、故ニ攻ルヲ先ニシテ守ルヲ後ニス、其語ノ序同ジカラザルノミ、能自保トハ善守ルヲ云フ也、全勝トハ善攻ルヲ云フ也、此節是爲レ不レ可レ勝、以待ニ敵之可レ勝ノ效ヲ云ヒテ、上文ノ意ヲ通シ結ベリ、

第二段、見レ勝ヨリ爲ニ勝敗之政一ニ至ル、其勝ヲ見ルコト衆人ノ知ル處ニ過ザルモノハ、知ルベキモノヲ知ル也、善之善者ニハアラズ、已ニ勝テ天下ノ善ト稱スルモノハ、勝ベカラザルニ勝モノ也、コレモマタ善之善者ニハアラズ、善戰フモノ、勝ヲ見テ戰勝ツハ、秋毫ヲ擧ゲ日月ヲ見、雷霆ヲ聞クガ如ク、其易レ勝ニ勝也、天下衆人同ク稱スベキモノナシ、故ニ智名モ無ク、勇功モ無シ、智ハ見レ勝ニ就テ云ヒ、勇ハ戰勝ニ就テ云フナリ、孫武イフ處ノ善之善者ハコレヲ云フ也、戰勝不レ忒ハ孫武自ラ解セシ處明カ也、其勝ヲ已敗シタルニ措ク也、其甚易キヲ云フ也、立ニ不敗之地一ハ善守ヲ云フ也、不レ失ニ敵之敗一ハ善攻ヲ云フ也、爲レ不レ可レ勝故ニ敗レズ、待ニ其可レ勝故ニ失ハズ、按ズルニ不レ失ニ敵之敗一モノ誠ニ言ヒ易カラズ、兵無ニ常勢一、戰無ニ常勝一、古ヨリ敗ヲ轉ジテ勝トナセシモノ少カラズ、勝敗之機、間ニ髮ヲ容レズ、善勝者ハ不レ失ニ其機一、ナホ日月ノ光隙アレバスナハチ入ルガ如シ、此等ノ所ヨク心エベキコト也、勝兵ハ其勝ヲ措コト未レ戰ノ先ニ在リ、コレヲ先勝チ後ニ戰ヲ求ムトイフ也、敗兵ハ其

勝ヲ爭フコト已戰フ後ニ在リ、是ヲ先戰フ後ニ勝ヲ求ムト云フ也、道ト云ヒ法ト云フ者ハ、首篇ニイフ處ノ五事ノ二ツ也、其道ヲ修メ法ヲ保ツ、スナハチ善守ノ事也、爲ニ勝敗之政一トハ兵ノ勝敗皆我ニ在ルヲ云フ、第六篇ノ爲ニ敵之司命一ト云フガ如キ是也、勝敗二字必ズ拘泥ムベカラズ、説ハ本注ニ詳ナリ、

第三段、兵法ヨリ篇末ニ至ル、古ノ兵法ヲ引テ度量數稱ヲ云フモノハ、勝兵ト敗兵ト其數ノ相侔シカラザルヲ云フ也、度量數稱ノ解本注ニ詳ナリ、二十四銖ヲ兩トシ、二十兩ヲ鎰トス、重キヲ以テ輕キヲ稱ルハ甚易ク、輕キヲ以テ重キヲ稱ルハ甚難シ、コレハ勝兵ノ敗兵ニ勝ツ甚易キニ喩ル也、積水ハ善守ルモノニ喩ヘ、決ニ之千仭之谿一ハ善攻ルモノニ喩フ、第六篇ニ兵形象レ水、水之形避レ高而趨レ下トモ見エタリ、爲レ不レ可レ勝シテ立ニ於不敗之地一モノハ、水必積ガ如シ、敵ノ勝ベキヲ待テ其敗ヲ失ハザルハ、彼積水ヲ千仭之谿ニ決スルガ如シ、カクノ如キヲ兵ノ形トハスル也、

先爲レ不レ可レ勝以待ニ敵之可一レ勝者、本邦ニアリテハ、源頼朝ノ兵ヲ用ヒラレシ、是ニ近シト云ベシ、初其兵ヲ起シテ、ミヅカラ鎌倉ニ在テ、士ヲ養フコト凡五年、平氏木曾ノ爲ニ敗ラレ、木曾マタ自敗ル、ニ及ビテ、其兵ヲ發シテ勝チヲ得シ、竹ヲ破ル勢ノ如シ、奥ノ泰衡ニ勝シモ亦然リ、承久ノ亂、公家積弱ノ勢ヲ奮ヒテ、東國積強ノ勢ニ加ントシタマヒシ、其勝敗之數銖ヲ以テ鎰ヲ稱ル如シ、サレバ公家ノ人々ノ中諫メ止メ申サレシアリシトモ見ヘタリ、シカルヲ況ヤ東國ノ兵疾雷ノ耳ヲ掩フニ及バザルガ如シ、枯レタルヲ挫キ朽タルヲ拉ク如クナリケン、其幸ニハアラズ、其餘多クハ勝コトヲ戰ニ求ル者ノミ、

勢篇

近本兵勢篇ニ作ル、此篇勢ヲ以テ名トスル、其義前篇ニ同ジ、勢トハ奇正ヲ云ナリ、

第一段、凡治レ衆ヨリ虛實是也ニ至ル、部曲ヲ分トシ、什伍ヲ數トス、部曲ノ分、什伍ノ數、オノ〳〵統屬アリテ相亂レザラシム、部曲ノ將上ニ統べ、什伍ノ卒下ニ屬ス、故ニ衆ヲ治ル寡ト同ジ、旌旗ヲ形ト云ヒ、金鼓ヲ名ト云フ、視テ相見ヘズ、旌旗ヲツクル、是ヲ視テ左右セシム、言テ相聞ヘズ、金鼓ヲツクル、コレヲ聽テ進止セシム、其兵既ニ衆キハ、陣ヲ布クコト必ズ廣シ、其視聽相及バザル處アル也、故ニ衆ヲ鬪ハシムル寡ク鬪ハシムルニ同ジ、奇正ハ是篇ノ要旨、下文謂フ所皆其義ナリ、三軍衆シトイヘドモ、必ズ其敵ヲ受テ敗レザラシムルモノ是也、碬ハ石也、虛實ハ兵形ノ要、次篇ニ謂フ處卽チ其義也、石ハ實ニ比シ、卵ハ虛ニ比ス、實ヲ以虛ヲ擊ツノ易キニ喩フル也、此篇首メニ四ツノ者ヲアゲテ言フ、分數形名ハ用兵ノ法、五事ノ法ニ云フ曲制コレナリ、奇正ハ用兵ノ勢、此篇卽チ其義ヲ明カス、虛實ハ制レ勝之形、次篇マタ其義ヲ說ク、此四ノ者ヲ善クスルトキハ、將タルモノ、能事畢レリ、

第二段、凡戰者ヨリ窮レ之哉ニ至ル、以レ正合、爲レ奇勝、コレ用レ戰ノ訣ニシテ是篇ノ要也、但其奇正ノ說、諸家同ジカラズ、讀者善抉ブベキコト也、諸家ノ說ハ本注ニ見ヘタリ、奇正實ニ言ヒ易カラズ、篇中云フ處ニ就テコレヲ譬フルニ、水ノ下レルニ趨クモノハ正也、激而疾キモノハ奇也、石ヲ漂スニ至ル、其勝ツナリ、近本以レ奇勝ニ作ルハ非也、舊本ニ從ヒテ爲レ奇勝ニ作ルベキ也、我年十七八、東海ニ遊ビシトキニ、一士人ノ家ニ往ク、忽ニ屋上窣々ノ聲アリテ、塵ノ散リ下ルニ遇フ、主ノ人コレ蛇ノ鼠ヲ捕ルナリト云フ、仰ギ見ルニ梁上ニ青蛇アリテ鼠ヲ逐フ、其長丈計、鼠奔ルコト急ニシテ逃ルノ處ナク、身ヲ轉ジテ蛇ニ嚮フ、其勢待レ戰ントスルモノヽゴトシ、蛇頭ヲ擡ゲ舌ヲ翻シ、徐ロニ進ミ行ク、相去ルコト三五尺ホド、其尾ヲ反シ擊チ掩テコレヲ取リヌ、我其事ヲ見ルニ及テ、以レ正合、爲レ奇勝ノ義ヲ得タリト、コレヨリ後、古ノ善ク戰ヲ用ヒテ勝ツモノヲ見ルニ、其變究リナシトイヘドモ、其要多ク此ノ如シ、天地江河日月四時ノ說ノ如キ、善出レ奇者ノ愈出愈奇ナルニ喩フル也、但イマダ奇生相生ノ變ニハ說到ラズ、コレラノ處ヨロシク讀得テ分明ナルベシ、五色五聲五味ノ變ヲ說クモノハ、奇正ノ變不レ可二勝究一事ヲ說起スガタメ也、コレ詩ノ興ノ如シ、其變モ喩フルニハアラズ、コレラノ所、マタヨロシク讀得テ分明ナルベシ、奇正相生如二循環一無レ端トハ、此ニ至テ奇正相生ノ變ヲ喩ヘ言也、奇ノ正トナリ、正ノ奇トナリ、其相變ズルノ窮リ無キカクノ如シ、戰勢ハ不レ過二奇正一、故ニ此篇細カニ奇正ヲ論ジ、篇命クルニ勢ヲ以テスルモマタ此義ニ同ジキ也、

第三段、激水之疾ヨリ節如レ發レ機ニ至ル、激水ハ水ノ礙也、水ノ礙ル處アリテ逆ニ起ルヲ云フ也、鷙鳥ハ鵰鶚之屬也、毀折トハ鷙鳥ノ禽獸ヲ搏擊ツニ、羽翮ノ利キ、其肉ヲ毀リ骨ヲ折ルヲ云フ也、此方ノ俗ニ鷙落ナド云テ、鳥獸ノ骨肉ノ力ヲ以テ截ツガゴトクナシ往々ニアル、スナハチコレナリ、節トハ限制也、此方ノ俗ニ間拍子トモ、拍子間(アヒ)トモ云フ、即是節也、是節ノ義ハ竹ノ節ト節トノ限リ其間有ル如キニ取ル也、上文ヲ承テ戰勢ヲ象リ云フナリ、勢ニハ必ズ其節アリ、故ニ此ヨリ已下ニ勢ト節トヲ分チ言フ也、激水ノ流、盤石ヲ漂蕩スルニ至ルハ勢也、鷙鳥ノ翮、禽獸ヲ毀折スルニ至ルハ節也、流水ノ力モト强キニアラズ、勢ニ藉ルニアラザレバ盤石ヲ漂蕩スベカラズ、羽毛ノ質モト利キニアラズ、節ヲ中(打カ)ニ非ザレバ、禽獸ヲ毀折スベカラズ、水力ノ强キ、羽毛ノ利キ、如レ此ナルニ至ルモノ、讀者思ヲ致スベキコト也、險トハ危也、短キハ促也、舊說ニ險ハ疾也、短ハ近也ト云フ、皆非也、險トハ危險ノ謂、短トハ短從ノ謂ナリ、孫武說ク所ニ就テコレヲ見ルニ、其義自ラ明ケシ、弩ハ大弓也、古ハ此方ニモ有シモノアリ、今ハ其制絕エタリ、機ハ弩ノ戾也、機ハ弩、弦ヲ釣ゲテコレヲ發シヌレバスナハチ箭去ル、其用今ノ鳥銃ノ搬取ト云フ物ノ如ク也、數寸ノ牙、千鈞ノ力ニ任ス、危險也ト云フベシ、機發シ矢至ル、短促也ト云フベシ、戰勢ノ譯、此數句ニシテ盡キタリ、ヒトリ戰勢ノミニアラズ、凡ソノ武藝ノ要、皆其勢險ニ其節短カランコトヲ欲セザルナシ、モシシカラザルモノハ、鄙語ニ云フ、ハヅミ無フシテ闒スゲスルモノヲ云、敗ナ

取ルノ道ナリ、昔シ古老ノ宮ヲ聞シテアリ、尾張ノ平信秀八千兵ヲ率ヒ、來リテ三河ノ岡崎ヲ取ラントス、三河ノ兵僅ニ八百、伊田ト云フ處ニ出テコレヲ迎フ、信秀其兵ヲ二ツニ分ケテ、野ト田トノ兩路ヨリス、三河ノ兵モ二ツニ分チテ待ツ、野路ノ戰スデニ合フト見テ、田ノ方ニムカフ、三河ノ兵ス、ミ戰ントスルニ、老兵制シテハリテ槍ヲ合スレバ、物際ニ勢スケテ槍弱リケルナリ、大軍ナル方ヨリ槍ヲ入レサセテ待受ケ、根強ク受トメテ槍ヲ入レヨト云ヒシカバ、先キニ進ミシ百四三十人冑ヲ傾テ待受ケ、根強クツキカケルニ、ソレニ從フ郎等オノ〳〵力ヲ抽テ、主ヨリ先ニ進ム、既ニ其一二ノ軍ヲ撃破リ、餘軍敗走ルヲ追撃ツコト三千餘、野路ノ戰ミカタ悉ク敗レシヲ見テ、北ルヲ追棄テ、マタ野路ニ敵ト戰ントテ、見張ノ兵忽ニ亂レテ遂ニ大ニ敗ル、是四百ノ兵ヲ以テ八千ノ軍ヲ敗リシナリ、其大軍ノ入ル、ヲ待受テ、根強ク受トメ槍ヲ交ヘヨト云ヒシ、魯ノ曹劌ガ齊ノ軍ヲ敗リシコトニ似テ、此節ノ義ニ合ヘル歟、○或人云ヒシハ、古今異制、其變究リナキ、ナヲ古ノ車戰ノ後ニ用無キコトノ如シ、孫氏謂フ處ノ勢險ニ節短キ、今ニ在リテハ又其義ヲ取ルコト古ニ同ジカルベカラズ、古ニアリテハ、ヒトリ弓弩ノ利遠キニ及ブノミ、今ノ如キハ火砲鳥銃ノ如キ其遠キニ利ナル、古トスデニ異ナリ、若シ今其勢險ニ其節短カ、ランヲ要セバ、其粉虀トナラザルモノ幾バクモ有ルベカラズ、曰シカハアラズ、後スデニ銃砲アリ、我モマタ銃砲アリ、我ニ害アランニハ彼モマタ利ナカルベシ、凡五兵ノ利、オノ〳〵其用トスル處アリ、五事ノ法ニ謂フ所ノ主用是也、カノ砲銃ノ如キ其利ノアル處、攻守圍禦及ビ戰艦ノ用ニアリ、天ニアリテ疾風甚雨昏時ノ如キ、地ニアリテ山林阻澤翳薈ノ如キ、必ズシモ其用ニ便ナラズ、然ルヲ世人其器ノ利ヲ恃ミ害ヲ懼ルルモノハ、譬バ雷ノ震フ人ヲ撃殺セシアトヲ見テ其戒ヲ畏ル、コトノ如シ、雷ノ起ル必ズ震スルニモアラズ、其震スル必人ヲ撃ツニシモアラズ、近世ノ人機戰ノコトニオケル、其見モシ聞モシツル處ハ、大坂島原ノ役ノミ、其餘ハ長篠ノ戰アリ、サレド長篠ノ戰ノ如キハ、其名ハ野戰也トイヘドモ、我山ニ據リ柵ヲ結ヒ彼ヲ待ツ、彼來リ戰フ、其實ハ堅城ヲ仰ギ攻ルコトノ如ク、ツヒニ砲銃ノタメニ其鋭ヲ摧カレキ、關原ノ戰ノ如キモ、西兵地利ニ因リ、柵ヲ結ヒ砲ヲ架シテ我ヲ待ツ、サレド我兵ノタメニ敗レテ、其器ノ利アリシト云フコトハ語リ傳ヘズ、モシ善ク戰ヲ用ユルモノアランニハ、地銃ノ利電飛雷擊ツガ如シトイフトモ、其用ヲ施スニ及ブベカラズ、

第四段、紛々紜々ヨリ篇末ニ至ル、紛々紜々ハ亂貌也、渾々沌々ハ圓貌也、鬪亂而不レ可レ亂モノハ、前ニ謂フ處ノ鬪レ衆如レ鬪レ寡是也、形圓而不レ可レ敗モノハ、前ニ謂フ處ノ必受レ敵而無レ敗是也、コレハ兵ノ善ク節制アリテ、奇生相生ズル其變無レ究ヲ言フ也、前ニ如ニ循環之無レ端ト云々、此ニ圓而不レ可レ敗ト云フ、皆奇正相生之變、不レ可ニ勝究ニノ意ヲ云フ也、舊說ニ示ニ敵其亂ニト云フハシカラズ、善用フルノ兵モ戰ノ酣ナルニアタリテハ亂ル、サレド敗ルベカラザルヲ言フ、亂トハ離合衆散ノ常ナキヲ言フ也、○項羽ノ兵城下ニ敗シテ走リテ東城ニ至リ、僅カニ二十八騎アリ、漢ノ追者數千人、羽其騎ヲ引キ山ニ依テ陣ヲスナハチ分テ四隊トナリ四鄕ヲ 漢軍コレヲ圍ムコト數重ナリ、羽四面シテ騎ヲ馳下シ、山東ニテ三處トナランコトヲ期シ、大キニ呼テ馳下リ、漢ノ一將ヲ斬リ、其騎ト會シテ三處トナリ、漢軍羽ノ在ル處ヲ知ラズ、スナハチ軍ヲ分ツコト三ツ、マタコレヲ圍ム、羽マタ馳テ漢ノ一都尉ヲ斬リ、數千百人ヲ殺シ、マタ其騎ヲ聚ムルニ、タヾ其兩騎ヲ亡ヒシノミ、古ノ善ク兵ヲ用ルモノ、離合聚散スナハチカクノ如シ、羽ノ兵寡シトイヘドモ、大ニ喩スベシ、(○今按是文有脫誤)

亂生レ治ノ六句ハ、天下ノコト其亂ル、治ニ生ゼザルハアラズ、兵ノ數タル郎然リ、勇者モ勢失セタレバ、怯ナラザルコトヲ得ズ、强者モ形疲レヌレバ、弱ナラザルコトヲ得ズ、是等ノ文不レ可レ亂不レ可レ敗ノ意ヲ承テ、治亂勇怯

強弱相因リテ生ズル義ヲ明カスナリ、形レ之トハ凡視ツベキアルモノ皆形也、善ク敵ヲ動スモノハ、コレニ形ヲ示ストキハ敵必ズ從ヒ、コレニ予レバ敵必ズ取ル、第一篇ニ云フ處ノ能而示ニ之不レ能ヨリ以下十四事ノ如キ是レ也、故ニ善ク敵ヲ動スモノハ、利ヲ以テ動シ、卒ヲ以テコレヲ待ツ、卒トハ急遽也、第一篇ニ敵ヲ動スナリ四事ヲ速不レ言、其要ハ攻ニ其無レ備、出ニ其不意ニニ歸ス、此義マタコレニ同ジ、求ニ之於勢ニノ三句ハ戰レ人之勢ヲ云フ也、人勇怯其常ナシ、勇者モ勢ヲ失ヒヌレバ怯トナリ、怯者モ勢ニ乘ジヌレバ勇トナル、故ニ善戰フモノハ勢ニ求メテ其人ノ勇怯ヲバ問ハズ、シカハアレド、勇ナルモノヲシテ其勢ニ任ジヌルハ、水ノ益盛リニ火ノ益熾リナルガ如シ、故ニ能ク人ヲ擇ビテ其勢ニ任ズル也、韓信大ヒニ趙ノ軍ヲ破リシニ、諸將問ヒテ、兵法右倍ニ山陵、前左ニ水澤、今背レ水テ勝ツ何ニヤト云フニ、韓信對テ、我モトヨリ士大夫ヲ拊循スルコトヲ得シニアラズ所レ謂市人ヲ驅リテコレヲ戰ハシムルナリ、死地ニ於テ人々ヲシテ自ラ戰ハシムルニアラズバ、彼皆走リナントス、コレヲ用ユルコトヲ得ベケンヤト云ヒケリ、古人求ニ之於勢ニ、不レ責ニ之於人ニモノ亦カクノ如シ、三軍之衆皆勇ナルニアラズ、能ク此勇ナル者ヲ擇ビテ、此勢ニ任ズルハ、衆皆其勇ヲ唱シテ怯ナル者アラズ、古者選鋒之士アリシコレガタメノ故ナリ、勢ニ任ズルモノ、人ヲ戰ハシムルハ、木石ヲ轉スコトノ如シ、凡木石之性其勢安ケレバ靜カニ、危ケレバ動ク、コレ勢ニ任ズル故ナ云フ也、其形方ナレバ止リ、圓ナルハ行ク、コレ人ヲ擇ブ故ナ云フ、故ニ善戰レ人之勢ハ、圓ナル石ヲ千仞ノ山ニ轉スガ如ク、行クト云コト無キニ行キ、止ルベカラザルニ止マラズ、コレ其兵精銳、其勢危險ナルニ喩フルナリ、石ナレドモ圓ナラザルハ止ル、圓ナレドモ危カラザレバ行カズ、石ニシテ圓ナルヲ極メテ危キニ行カシムレバ、其轉ズルコト愈急ナリ、コレ精銳ノ士ヲ以テ、危險ノ勢ニ任ズルニ比ス、コレ能擇レ人而任レ勢ノ義ナリ、○孫武形勢二篇、戰レ人之訣、微ヲ折チ妙ニ入ル、加フベカラズ、コレニヨリテ、古ノ戰ヲ用ユルモノヲ見ルニ、形ヲ以テ勝ツアリ、勢ヲ以テ勝アリ、牛瘠タリトイヘドモ、コレヲ孤豚ノ上ニ加フルニ、孤豚必ズ僵ル、ゴトキハ、其形ノ勝ツナリ、三獅子四大象ヲ搏チ殪ス如キハ、其勢ノ勝ツナリ、大ノ小ニ勝ツモノ、多クハ其形也、寡ノ衆ニ勝ツモノ多クハ其勢也、是又知ズンバアルベカラズ、

虚實篇

虚實ハ前篇ニ兵之所レ加如ニ以レ碬投レ卵ト云フ者、卽此也、

第一段、凡先處ニ戰地ニヨリ敵之司命ニ至ル、戰地トハ會戰ノ地也、佚ト云ヒ勞ト云フハ、士馬ノ力ヲ指テ云フ也、致レ人而不レ致ニ於人ニト云フハ、此篇ノ大旨也、是ヨリ以下說ク處其要皆是ニ歸ス、凡ソ利ニ就キ害ヲ避クルハ兵之情也、故ニ敵ヲシテ至ラシメ、至ラザラシム

ル、是ヲ利スルト害スルトニ在ル也、故敵佚能勞レ之ヨリ下ノ五句、上文ヲ承テ致レ人而不レ致ニ於人ニノ事ヲ云也、勞レ之饑レ之動レ之三ツノ者ハ、害レ之ノ事ニシテ、此要マタ出ニ其所ニ必趨ニ、趨ニ其所ニレ不レ意ニ在リ、待レ敵者佚スルハ實ナリ、趨レ戰者ノ勞スルハ虛ナリ、故ニ善戰フモノハ致レ人而不レ致ニ于人ニ也、ソノ能ク人ヲ致スモノハ、利害ノ權ミナ我ニアルノミ、其佚ヲ勞シ、其飽ヲ饑シ、其安ヲ動カスハ、害レ之ノコトニシテ、其實ヲシテ虛ナラシムル也、出ニ其所ニ必趨ニヌレバ、彼レ至ラザルコトヲ得ズ、趨ニ其所ニレ不レ意ヌレバ、彼レマタ至ルコトヲ能クセズ、コレ皆致レ人而不レ致ニ于人ニノコトナリ、行ニ於無人之地ニ、攻ニ其所ニレ不レ守、守ニ其所ニレ不レ攻、コレ皆上文趨ニ其所ニレ不レ意ノ意ヲ承テ言フ也、行ニ於無人之地ニハ衝ニ其虛ニ也、下文ニ見ユ、攻ニ其所ニレ不レ守ハ攻ニ其無レ備也、計篇守ニ其所ニレ不レ守ハ無レ恃ニ其不レ攻也、九變篇敵不レ知ニ其所ニレ守ハ雷ノ擊ツ備ヲナスベカラザルガ如シ、敵不レ知ニ其所ニレ攻ハ龍ノ蟄スル測ルベカラザルガ如シ、前ニ動ニ于九天之上ニ、藏ニ于九地之上ニト云フ是也、微トハ視レ之而不レ可レ見ヲ云ヒ、神トハ聽レ之而不レ可レ聞ヲ云、爲ニ敵之司命ニトハ、彼死生ノ命皆我ニ在ルヲ云、無レ形無レ聲ハ善守善攻之極致ニシテ、爲ニ敵之司命ニハ能致レ人之極切也、此三句通ジテ上文ノ意ヲ結ブ也、

第二段、進而不レ可レ禦者ヨリ乖ニ其所ニレ之也ニ至ル、衝ニ其虛ニト速而不レ及トハ、上文ノ意ヲ反戾シテ言フ、卽是兵ヲ用ユル進退之要ナリ、神祖小牧ノ戰併セ考フベシ、攻ニ其所ニ必救ニハ、前ニ云フ出ニ其所ニ必趨ニナリ、彼戰ハザルコトヲ得ズ、司馬懿遼東ヲ討ツ、長圍ヲ攻ズシテ直ニ襄平ニ趨ク如キ是也、乖ニ其所ニレ之ハ亦是趨ニ其所ニレ不レ意ナリ、彼戰フコトヲ得ズ、諸葛亮陽平ニ屯ス、大ニ四門ヲ開キ、地ヲ掃ヒ却洒スル如キ是也、司馬懿ノコトハ本注ニ見ユ、諸葛亮屯陽平使ニ魏延等東下ニ、惟留ニ萬人ニ守レ城、司馬懿來攻レ之、將士皆失レ色、亮意氣自若、勅ニ軍中ニ臥レ旗息レ鼓、大開ニ四門ニ、掃レ地却洒、懿疑レ有レ伏、引去、○關原ノ役、初メ西將伏見ヲ襲ハントセシカド、ツヒニ攻ルコトアタハズ、後ニ西將大阪ノ城ニ據ル、東兵西シテ直ニ京師ヲ指ス、西將出戰テ敗レ亡ビキ、コレヲノコトマタヨク心得ベキモノナリ、

第三段、故形レ人ヨリ數里乎ニ至ル、上文無レ形ノ義ヲ推シ明カス也、形レ人而我無レ形モノハ、譬バ月ノ水ニ影ズル、水トシテ影アラズト云フモノナシ、サレドモ影モト月ニハアラザルガ如シ、彼影ノ認テ月トスルガ如キモノハ、必ズ分レザルコトヲ得ベカラズ、コレ我專ニシテ敵分ル、ノ謂ナリ、彼レ分レテ十トナリテ、元ノ十ガ一ヲ以テ我專ラナル一ツヲ攻ンニハ、我衆クシテ彼寡ナシ、衆ヲ以テ寡ヲ擊ツ、

我與トモニ戰フモノハ少シ、約トハ少也、前ニ云フ項羽ノ二十八騎、漢ノ追フ者數千ト戰テ、ヨク其將ヲ斬リ都尉ヲ斬リ、數十百人ヲ殺セシハ、其離合聚散常ノ形トナレバナリ、況ヤ我ト彼ト其衆寡相敵スルモノヲヤ、タトヘバ我兵ノ千ナランカ、專ラニシテ一ツナルヲ、彼モマタ千ナランカ、十ニ分レテ攻ンニハ、我千兵ヲ以テ彼百人ト戰フ、是我與戰モノ約ナルナリ、我スデニ形無ケレバ、彼我戰フベキ地ヲ知ラズ、故ニ其備フル所多カラザルコトヲ得ズ、其備フル所スデニ多ケレバ、我ト戰フ者スデニ寡ナシ、其戰フ者ノ寡キハ人ニ備フレバ也、其戰フ者ノ衆キハ、人ヲシテ己ニ備ヘシムレバ也、人ヲシテ己レニ備ヘシムルハ、能ク致レ人者也、故ニ戰地ヲ知リ、戰日ヲ知ルトキハ、千里ノ遠キトイヘドモ、會戰シツベシ、戰地戰日ヲ知ラザレバ、左右前後トイヘドモ相救ベカラズ、シカルヲ況ヤ其備フル處ノ近遠アルモノヲヤ、關原ノ役ニ、神祖小山ニ至リタマヒシトキ、西兵ノ變聞エシニ、古ヨリ東西ノ戰ハ、近江美濃ノ間ニアリトノタマヒシ、是能ク戰地ヲシロシメサレタルナリ、昔天武ト大友ノ爭ヒヨリ、承久ノ亂ニ至テ、皆然ラズト云フコトナクシテ、其時ノ戰モ果シテ亦然リ、西軍ノ如キハ東方ノ本兵スデニ赤阪ニ至ルニ及ビテ、ナホコレヲ知ルコトナク、其戰ツヒニ左右前後相救フベカラズシテ亡ビウセタリキ、

第四段、以レ吾度レ之ヨリ不レ足ノ處ニ至ル、吾トハ孫武自ラ中國ヲ指シ言ヒ、越人之兵トハ蠻夷ノ兵ヲ指シ言フ也、蠻夷ノ兵ハ戰ヲ知ルコト能ハズ、故ニ其勝ナシツベシ、彼衆シトイヘドモ闘フコトナカラシムベシ、策レ之作レ之形レ之角レ之四事ハ、勝可レ爲ノ義ヲ明カス也、其軍計ヲ籌リ、其兵情ヲ發シ、其戰地ヲ度リ、其衆ヲ校ル、此四者知ルトキハ勝可レ爲也、

第五段、故形レ兵之極ヨリ應ニ形於無レ究ニ至ル、上文ヲ承ケ申テ無形之義ヲ明ス也、凡兵其形ナキニアラズ、シカルヲ我形ナキニ至ルハ、形レ人之極致也、形ナケレバ深間トイヘドモ窺フコトアタハズ、智者トイヘドモ謀ルコトアタハズ、我スデニ形ナクシテ、彼ヲシテ形アラシメ、其形ニヨリテ勝ヲ措ク、衆タヾ我勝ツトコロノ形ノミヲ知リテ、吾勝ヲ制スル形ヲ知ルコトナシ、吾勝ツ處ノ形ハ彼ニアリ、我レヨリ彼ヲシテ其形アラシム、制レ勝ノ形ハ我レニアリ、我ニアルモノモト形ナシ、コヽヲ以衆知ルコトナキナリ、戰勝不レ復、而應ニ形於無レ究トハ、上文ヲ結ビテ、我ヨク彼形ニ應ズルノ究リナキ故ニ、其勝ツコト常形ナキヲ云フ也、戰勝不レ復トハ後ノ勝ナ前ノ攻ルニ同ジカラザルヲ云フナリ、

第六段、夫兵形象レ水ヨリ篇末ニ至ル、此ニ至テ兵無レ形ノ義ヲ說出セシ也、凡ソ兵ノ形ハ、實ヲ避ケテ虛ヲ打ツモノナリ、水ハ地ニ因リテ形ヲナシ、兵ハ敵ニ因リテ勝ヲ制ス、兵形象レ水、水無ニ常形一ヲ其形トス、兵モ亦然

リ、五行四時日月ロ言フモノハ、物トシテ其常無キヲ云テ、兵ノ形其常無キヲカタドリイフ也、三軍ノ衆十萬ノ師、正々ノ旗、堂々ノ陣イカンゾ其形無カルベキ、シカルヲ其形無シト云フハ、タヾ其常形無キヲ云フ也、此節名ヅクルニ虚實ヲ以テストイヘドモ、節末タヾ避レ實而撃レ虚ト云ヒ、其餘衝ニ其虚ニ也ト云フノミ、シカハアレド通篇ノ義、皆彼實ヲシテ虚ナラシメ、我實ヲ以テ其虚ヲ撃ツニ名ク、其要ハ致レ人而不レ致ニ于人一ニ在リテ、形レ人而我無レ形ヲ致レ人而不レ至ニ于人一ヲ訣トス、兵其形無キニ至ル、實ニ能クシ易カルベカラズ、吾邦ノ善ク兵ヲ用ヒシモノ、如キ、獨リ輝虎川中島ノ戰、コレニ似タルヿアリ、而輝虎八千兵ヲ率ヒテ、川中島ノ城ヲ過ギテ、西條山ニ入ル、武田國中ノ兵ヲ發シテ來リ至ル、コレマヅ其必趨ク所ニ出ヌレバ也、カクテ晴信彼ノ兵ノ形在ル處ヲ知ラバ、ツヒニ其兵ヲ分チツカハシテ、戰ヲ求メシメ、我身ハ軍ヲトヾメテ、彼歸ラン師ヲ迎撃ントス、コレ輝虎ガ兵ハ專ラニシテ一ツ、武田ガ兵ハ分レテ二ツニナレル也、輝虎カクト知リテケレバ、其夜ヒソカニ水ヲ渉リ來リ、武田ガ軍ヲ壓シテ近ク軍ダチス、天スデニ明ケ霧開クルニ及ビ、其兵ノ進ミ戰フ成ノ半角シテ上ル如ク、其勢當ルベカラズ、武田ガ軍驚キ擾レテ、左右前後相救フコトアタハズ、其親弟其軍師ヲ始メテ戰死スルモノ數ヲシラズ、晴信モ疵蒙ルト、初メ分ケシ處ノ軍馳テ還ルニ至リ、輝虎退去ルノ速ナル、亦追フベカラズ、世ノ好ミテ兵ヲ談ズル、此戰ヲ論ジテ、其聚訟モ止ムコトヲ得ズ、其說ノ如キハ、輝虎ガ兵ハ散ジ去リテ、武田ガ軍止テ聚レリト云フナリ、コレ兵ヲ知レル言トモ聞エズ、初武田ガ兵ヲ分チシ本謀ノ如キモ、輝虎戰勝ツコトアランニモ、亦敗ル、コトアランニモ、必ズ水ヲ渉リテコソ歸ルベケレト云ヒケリ、ソレハ彼ノ客ニシテ我主タルガ故ニヨリテ也、其客イカニゾ歸ラザルコトヲ得ベキ、サレドコレラノコトヲ論ジナンモマタ其末ノミ、孫武ガ書ノ善戰フ者、致レ人而不レ致ニ于人一ト云コトニ據リテ、イヅレカ致シ、イヅレカ致サレシコトヲ論ジタラマシカバ、其勝敗ノ如キモ決シツベシ、

軍爭篇

第一段、凡用レ兵之法ヨリ迂直之計者也ニ至ル、凡ソ將タルモノ、君命ヲ受テ其軍ヲ合セ、其兵ヲ聚メテ、其敵ト相對シテ軍ダチス、交和而舍スト云フハ、彼ト我ト相對シテ陣スルヲ云フ、此間ノ俗ニ對陣ト云フ是也、詳ナルコトハ本注ニ見タリ、彼得テモ利ニ、我得テモ利ナラン地ヲ爭フヨリ難キハナシ、後篇ニ爭地ト云フ是也、凡ソ軍爭ノ法、其途ヲ迂ニシテ誘クニ其利ヲ以テシ、發スルコトハ彼ニ後レテ彼ヨリ先ダチ至ル、コレヲ迂直之計ヲ知ルトスル也、迂トハ遠キヲ云ヒ、直トハ近キヲ云フ、其途モト迂ナルニアラズ、我ヨクコレヲ迂ニスルモノハ、示ニ之於遠一テ誘ニ之於利一、我先ヅ精鋭ヲ分ケ間道ヨリ出デ、爭地ニ據シメ、火兵繼デ敵ノ後ヨリ發シテ、我精鋭ト合フ、下文ニ兵以レ詐立、以レ利動、以ニ分合一爲レ變ト云フ、卽此義也、

第二段、故軍爭爲レ利ヨリ無ニ委積一則亡ニ至ル、軍爭爲レ利、軍爭爲レ危トハ、凡ソ軍爭ニ利危ノ二ツアルヲ云ヒテ、下文二ツノモノヲ說ク張本トスル也、近本ニ衆爭爲レ危ニ作ルハ非ナリ、擧レ軍而爭フトキハ、行クコト緩クシテ、其利ニ及バズ、委レ軍而爭フトキハ、進ムコト急カニシテ、軍資不レ給、是故ニ百里ニシテ爭フトキハ、三軍ノ將皆擒ラル、

道遠ク行クコト速ナレバ、三軍ノ衆コト〴〵ク至ルコトアタハズ、其將ノミ先ヅシル、故ニ彼ガタメニ獲ラル、ヲ云ナリ、里ニシテ爭フトキハ、上將軍ヲ蹷カル、蹷猶レ挫也、挫敗セラル、ヲ云フ、上將軍ハ先軍ノ將ヲ云フ、其義上ニ云フガ如シ、三十里ニシテ爭フトキハ、其勝敗マタイマダ知ルベカラズ、道ヤ、遠ケレバ、衆或ハ至リ或ハ至ラズ、故ニ其勝敗イマダ知ルベカラズ、是故ニ軍ニ輜重無キト糧食ナキト委積無キト皆亡ブルノ道也、軍爭ノ危キカクノ如シ、擧レ軍而爭レ利ヨリ無二委積一則亡ニ至テ、軍爭ノ危ヲ說ク也、凡軍爭ノ危、道ノ遠近ニヨリテ衆至ルノ多少アリ是一ツ、輜重捐ツ是二ツ、糧食絕ス是三ツ、委積亡ブ是四ツ、況ヤ彼佚シテ我勞ト越ヘ打ツトキハ、敗セザルコトヲ得ベカラズ、

第三段、故不レ知二諸侯之謀一者ヨリ軍爭之法也ニ至ル、凡ソ諸侯之地、土壤相接ル、我今敵ト地ヲ爭フ、交ヲ隣國ニ合セテ、其道ヲモ假リ、其援ケモ請フコトアランニ、先ヅ彼謀ヲ知ラザレバ後患アランコト亦ハカルベカラズ、其地形險易ヲ知ラザレバ軍ヲ行ルベカラズ、其嚮導ヲ用ザレバ、地利ヲ得ルコトアルベカラズ、兵以レ詐立、以レ利動、以二分合一爲レ變トハ、申ネテ迂二其途一、而誘レ之以レ利、後人發、先人至ノ義ヲ明カス也、以レ利動ノ利ト誘レ之以レ利ノ利ト同ジカラズ、以レ利動ノ利ハ我利ナルモノヲ云ヒ、誘レ之以レ利ノ利ハ、彼利ナルモノヲ云フ也、如レ風如レ林如レ火如レ山如レ陰如レ雷トハ、上文ヲ承テ其兵勢ヲ象リ云フナリ、掠レ鄉分レ衆トハ、鄉邑ヲ取掠テ、其民衆ヲ分ツ也、廓レ地分レ利トハ、疆界ヲ廓開シ、其地利ヲ分ツ也、是軍爭ノ利ニシテ、前ニ謂フ處ノ勝レ敵而益レ強コレ也、作戰篇ニ見ユ、軍爭ノ難キハ、或ハ利或ハ危、先ヅコレヲ計ルコト、權ヲ衡ニ懸ケテ、物ノ輕重ヲ量ル如クニシ、利ニ合テ後ニ動ク、懸レ權而動ト云フ是也、已上軍爭ノ利ヲ說ク也、先知二迂直之計一者勝、二句、上文ヲ通ジ結ブ也、源氏一谷城ヲ攻シニ、範賴五萬騎ニ將トシテ東ヨリシ、義經一萬騎ヲ率ヒテ西ヨリス、範賴京ヲ發セシ日ニ昆陽ニ至ル、義經同キ日ニ京ヲ發シ丹波路ヨリシテ二日路ヲ一日ニ過ギテ、三草山ノ東ニ至ル、コヽヲ去ルコト三里ニシテ、平氏ノ兵三草山ノ西ニ陣ス、其夜義經平氏ノ陣ヲ襲破リテ、兵七千ヲ分ケテ明石ニ迎ヒ、一ノ谷ノ城ノ西ヨリ趨キ攻メシメ、其身ハ精銳三十騎ヲ擇ビ、三千兵ヲ率ヒ、嚮導ヲ求得テ、鵯越ノ險阻ヲ絕リテ、直チニ城ノ後嶺ニ至リ、東西既ニ戰ヲ交ルヲ見テ、嶺上ヨリ魚貫シ下リ、城中ニ入テ攻陷ル、迂直ノ計ヲ知ルト云フハ、コレラノコトノ如ナル也、

第四段、軍政ヨリ耳目也ニイタル、軍政ハ古ノ軍志也、金鼓旌旗ノ制アルモノハ、前ニ謂フ處ノ衆ヲ鬪ハシムルコト法ナリ、此段用レ衆用レ兵ノ法ヲ云フ也、

第五段、三軍可レ奪レ氣ヨリ篇末ニ至ル、上文我衆ヲ用ユルコトニ因テ、彼三軍ノ氣、將軍ノ心ヲ奪フベキノ義ヲ論ズ、朝氣晝氣暮氣ト云フモノハ、必ズシモ其時ヲ限リテイフニハアラズ、曹劌云ヒシ、一鼓作レ氣モノハ朝氣也、再而衰モノハ晝氣也、三而竭モノハ暮氣也、

本注ニ詳ナリ、其鋭ヲ避ケ惰歸ヲ打ツモノハ、前ニ謂フ處ノ避レ實而擊レ虛ナリ、吾氣ヲ治メ、吾心ヲ治ムル、即是彼氣ヲ奪ヒ、彼心ヲ奪フ所ナリ、亦治レ氣治レ心ニ因テ、推シテ治レ力治レ變コトヲ論ズ、進遠佚勞飽饑ハ前ノ虛實篇ニ詳也、正々ハソノ齊フヲ云ヒ、堂々ハ其文ナルヲ云フ、善ク戰フモノハ、易レ勝ニ勝ツノミ、正々ノ旗、堂々ノ陣、易レ勝モノニハアラズ、況ヤ以レ正合、爲レ奇勝ハ兵ノ變也、故ニ其變ヲ治ムトハ云フ也、用レ兵之法ヨリ以下、マタ上文ヲ承テ、用レ兵ヲ法ヲ擧テ言ヒ、一篇ノ意ヲ結ベリ、

九變篇

第一段、凡用レ兵之法ヨリ人之用矣ニ至ル、圮地無レ舍ヨリ地有レ所レ不レ爭ニ至テ九變トス、死地ヨリ以上五ツノ者ハ、其義九地篇ニ見ユ、塗有レ所レ不レ由ハ、圮地絕地ノ類是也、軍有レ所レ不レ擊ハ、地形險隘敵先ヅ居リ、モシクハ備アリ、及ビ正々ノ旗、堂々ノ陣、餌兵銳卒歸師究寇ノ類是也、城有レ所レ不レ攻、地有レ所レ不レ爭ハ、舊說謂フ處ノ得レ之難レ守、失レ之無レ害モノ、並ニ皆是也、君命有レ所レ不レ受ハ、後篇ノ地形戰道必勝、主曰レ無レ戰、必戰可也、戰道不レ勝、主曰ニ必戰一無レ戰可也ト、云フ如キ此義也、孫武前ニ君之所レ患ニ於軍ニ者ヲ論ズ、謀攻篇サレド君ヲシテ內御セザラシメンコト、徒ニ難ヲ君ニノミ責ムベカラズ、將タラン者ヲシテ、亦能ク義ヲ見テ行ハシメントスルノミ、君命ノ不レ受ハ人臣ノ變ナルモノニシテ、臣タルモノ、利ニアラズシテ、社稷ノ利也、故ニ用兵ノ變ヲ論ズルニ因テ、此義ヲ發ス、此篇ノ主意ノ如キハ此事ニアリ、故ニコレヨリ以下皆其義ヲ述ル也、通ニ於九變之利ニ、不レ通ニ於九變之利ニ、皆將ヲ言ヒ、不レ知ニ九變之術ニ至テ治兵ト言ヒ、得ニ人之用ニト言フ、並皆重キヲ將ニ歸ス、其義ヲ見ツベシ、餘ハ本注ニ詳也、五利下ニ詳ナリ、

第二段、是故智者ヨリ不レ可レ攻也ニ至ル、智者之慮、必雜ニ於利害ニトハ、智者ハ其利ヲ見テハ必ズ其害ヲ思ヒ、其害ヲ見テハ必ズ其利ヲ思フ、衆人ノ如キハシカラズ、徒ニ其利ヲ務テ其害アルコトヲ知ラズ、徒ニ其害ヲ患テ其利アルコトヲ知ラズ、故ニ利ニ雜ヘテ務可レ信、害ニ雜ヘテ患可レ解也、此事ヒトリ兵事ノミニアラザルヲバ、人ノ世ニ處セルコレヲノ心得アルベキコトニヤ、屈ニ諸侯一、役ニ諸侯一、趨ニ諸侯一ノ三ツハ、諸侯ノ利害タルモノヲ言テ、上文利害ヲ云フノ意ヲ結ブ也、業トハ事也、會盟約誓ノコトノ如キ是也、此等ノコトノ如キ甚ダ害スルノコトニ至ラズト雖モ、其勞ナキニアラズ、無レ恃ニ其不レ來、無

レ恃ニ其不レ攻モノハ、智者所レ慮ノ意ヲ云フ、恃ム所ノ二ツノ者、皆コレ善ヲ守ルノコトナリ、

第三段、故將有二三危一ヨリ篇末ニ至ル、凡將ニ五危アリ、此五ツノ者ハ、將ノ質性各一偏ニ失スルモノ也、必死ノモノハ智無ケレバ也、必生ノモノハ勇無ケレバナリ、忿速ノモノハ嚴ナラザレバナリ、廉潔ノモノハ小信アルヲ云フ也、愛レ民モノハ小惠アルヲ云フ也、廉潔愛民モト不善ナルニハアラズ、サレド匹夫ノ諒、婦人ノ私ノ如キハ君子モ取ラザル所ナルナリ、第一篇ニ將ヲ論ジテ、智信仁勇嚴五ツモノ全ク備レルヲ貴シトセシハ此義也、軍ヲ覆シ將ヲ殺スモノハ、必ズ此五危ヲ以テス、此五者ハ其害ヨリシテ言フトキハ五危トシ、其利ヨリシテ云フトキハ五利トス、軍ヲ覆シ將ヲ殺セシモノヨリ云ヘバ五利ナリ、軍ヲ覆サレ將ヲ殺サレシモノヨリイヘバ五危ナリ、五危ノ外ニ五利ノ者アルニハアラズ、智者ノ慮利害ヲ雜ユルモノハ、コレガタメ也、屈二諸侯一、役二諸侯一、趨二諸侯一ノ三ツ、舊記皆隣ヲ敝シ困ヲ強クスルノ制也トス、上下ノ文ニ據ルニシカルベシトモ見エズ、是上文雜二於利一而務可レ信、雜二於害一而患可レ解ノ意ヲ結ビ、利害ノ係ル所ノ大ナル者ヲ言フ也、利害ノ大ナル者ト云フコトハ、萬乘ノ國ノ利害ニ係レルガ故也、

行軍篇

凡ソ軍ヲ行ル法ヲ說クナリ、

第一段、凡處レ軍相レ敵ヨリ勝二四帝一也ニ至ル、處ハ止也、軍ヲ止ル法四ツアリ、相ハ視也、敵ヲ視ル法三十二アリ、已下其法ヲ分チ說ク也、軍ヲ止ル法、其一ニハ處レ山之軍也、絕トハ超ルト度ルトノ二ツノ義ヲ兼ヌ、絕山ト云ヒ絕水ト云フ、其義少シク異ナリ、水ヲワタルハ横ザマニ越ルコトニ、山ヲフメルニハ横ザマニモ越エズ縱ザマニ度リ行クコトナリ、凡ソ軍山ヲ絕リテ谷ニ依ル(ハ水草ニ)便ズル也、視生トハ陽ニ向ヒテ水草ニ(便ジ)糧路ヲ利スル皆是也、舊說ニ陽ニ向フノミ生地トス、シカルベカラズ、其義詳ニ下注ニ見エタリ、處レ高ハ高處ニ據ルナリ、凡ソ軍高キニ處ルヲ利トスルハ、險ニ據リ固ヲ負ムノミニアラズ、四望瞭然ニシテ、敵ノ動靜目中ニアレバ也、隆トハ地ノ中高キヲ云フ、戰隆トハ高キヨリ下ニ趨キ戰フヲ云フ也、無レ登トハ下ヨリ高キニ趨キ戰フベカラズトナリ、下文ニ我先居二高陽一以待レ敵ト敵先居レ之、引而去レ之、勿レ從ト云フ、亦此義ナリ、其二ツニハ處二水上一之軍也、絕レ水必遠レ水ハ、水ヲ背ニシテ陣スベカラザレバ也、蔚繚子云、背水陣爲二絕地一、コレ兵家所レ忌也、敵水ヲ絕テ來ラバ、水內ニ迎戰フベカラズ、ソレヲシテ半濟ラシメテ打ツニ利アリ、我戰ントオモフニモ、水ニ附テ敵ヲ迎フベカラズ、舊說ニ絕レ水必遠レ水ハ、其敵ヲ引テ渡ラシメテ戰フベキ也ト云フハ非也、其說ノ如キハ、敵ノ我後ニアルモノヲ云フ也、孫武ノ本旨ニハアラズ、コレハ凡水上ノ軍ヲ

云フ、敵前ニアリテ、我今水ヲ絶ルヲ云フ也、又舊說ニ令ニ半濟而打レ之ト云フヲ、吳夫差王、楚ヲ清發ニ破リシコトヲ引テ釋セリ、凡迎フルモ追フモ、令ニ半濟而打レ之、利アルコト其義ハ同ジケレド、夫槩王ノコトハ楚軍敗シテ退クヲ追打チシ也、コ、ニハ來ルヲ迎フトコソ云ヒツベシ、追打ツノ謂ニハアラズ、又無下附ニ於水一而迎上ト云フモ、舊說ニ水ニ附テ迎フルトキハ、恐ラクハ敵渡ルコトヲ得ジト云、尤非ナリ、凡ソ水ニ附テ迎フルハ、濟而打レ之、必ズ利アリ、サレバ我邦ノイニシヘヨリ、川渡シノ軍ト云ヒテ、コレヲ迎フルモノ、彼軍ノ衆寡ニヨリテ、水ヲ去ルノ近遠アリ、濟ルモノマタ其法アルコト也、視レ生處レ高、義前ニ見エシニ同ジ、無レ迎ニ水流一ハ、上流雨フル時ハ、暴漲ノ患アリ、或ハ水ヲモ湮ガレ、毒ヲモ流サル、凡事吉ナラザルノ故アリ、其三ニハ處ニ斥澤一ノ軍也、斥澤トハ萑葦叢生、水泉沮洳ノ地、吳子云、荒澤コレ也、火攻伏奸ノ便アル地ナリ、故ニ亟ニ去リテ留ルベカラズ、若止ムコトヲエズ、敵ト軍ヲ其中ニ交ルトキハ、必ズ水草ニ依テ衆樹ヲ背ニス、是又樵汲ニ便ジ、險阻ニ據ルノ義也、其四ニハ平陸ニ處ル軍也、易トハ平也、右背ニスルモノハ、凡ソ人ノ用ヲ利スル右ニ便ナル故也、高トハ丘陵ノ如キニモアレ、隄防ノ如キニモアレ、ワヅカニ地高カランヲ右ニシ背ニスベキヲ云フ也、死トハ戰ヲ接スベキ地ヲ云フ、生トハ前ニ云ヒシ所ノ如キ是ナリ、凡此四軍ハ、昔黃帝ノ四帝ニ勝チタマヒシ所也、四帝未レ詳、コレ上文ヲ結ビテ云フナリ、

第二段、凡軍好レ高ヨリ伏奸之所レ處也ニ至ル、上文ニ因リテ處レ軍行レ軍ノ法ヲ云フ也、好レ高而惡レ下、此義前ニ云フコトノ如シ、陽トハ東南ヲ云ヒ、陰トハ西北ヲ云フ、養レ生而處レ實、スナハチ視レ生處レ高ノ事也、凡ソ軍コレラノ處ニ處ルトキハ、百疾生ズルコトナク、コレヲ必勝ト云フ也、丘陵堤防ノ如キハ、其高キコト山ニ處ルニシカズトイヘドモ、必ズ其陽ニ處リコレヲ右背ニスベキナリ、此一句ハ兵ノ利ニシテ地ノ助ナリ、其至高ニアラザルガ故ニ、視テ小シキ也トシテ、其利ヲ失フベカラズ、水上ニ雨フレバ水沫先ヅ至ルモノナリ、渉ラントスルモノハ、其勢ノ定マルヲ待ツベシ、コレハ水ノ暴ニ漲ルコトアランガタメ也、劉寅直解ニ張賁ガ說ヲ引テ、此篇當レ在乙無下附ニ於水一迎レ客之下甲ト云コトハシカルベカラズ、凡軍好レ高而惡レ下ヨリ地之助也ト云フニ至テハ、上文ノ意ニ因リテ、カサネテ處レ軍ノ法ヲ云ヘルナリ、上雨水沫至ルト云フコトヨリ、伏奸之所レ處也ト云フニ至テハ、又行軍ノ法ヲ云シ也、前ニ無下附ニ於水一迎レ客ト云フハ、處レ軍ノコトニシテ、此ニ欲レ涉者待ニ其定一也ト云フハ、行軍ノコトナリ、其義モト同ジカラズ、或ハ合而言レ之、或ハ分而言レ之、是マタ文ノ法ナルナリ、絕澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、凡此六者ハ天陰也、諸家釋シ、所オノ〱異同アリ、孫武云處ノモ

ノイカニヤアルラン、ヲボツカナシ、强テ説ツタフベカラズ、タヾ王晳説ノ如ク、其字ニヨリテ其義ヲ求メン大ヤウタガフベカラズ、爾雅ニ山夾水澗ト見ヘタリ、其地坑井ノ如ク、牢獄ノ如ク、網羅ノ如ク、陷牢ノ如ク、罅隙ノ如キ、コレヲ出入皆難クシテ、進退トモニ艱メリ、モシ不虞アランニハ、智力施ス所ナカルベシ、吾ハコレニ遠ザカリ、敵ヲバ之ニ近カシメ、吾ハコレヲ迎ヘ、敵ヲバコレニ背カシム、平氏ノ大兵、木曾ノタメニ倶利加羅谷ニ陷ラレシガ如キ、其地形ヲ知ラザルニヨレルノミ、潢井トハ水ノ積ムコト深キ也、葭葦トハ水草ノアル所ヲ云フ也、山林ハ山木ノアル處ヲ云フ也、翳薈ハ艸木盛ナル貌也、凡ソ軍コレラノ所ヲ行クニハ、必ズ謹ミテ反覆捜索スベシ、此伏兵奸細ノ處ル所ナレバ也、已上處ㇾ軍ノ法ニ因リテ、行軍ノ法ヲ言ヒシナリ、

第三段、敵近而靜者ヨリ必謹察ㇾ之ニ至ル、敵近而靜ヨリ下凡三十四事、皆是相ㇾ敵之法ヲ云也、ソレガ中、恃二其險一也トハ敵近ケレドモ不ㇾ動モノハ、彼必ズ設クル所ノ險アリテ、ソレヲ恃ム也、易者利也トハ、不ㇾ居ㇾ阻シテ居二易地一モノハ利而誘ㇾ我也、餘ハ文自ラ明カ也、

兵怒而相迎、久而不ㇾ合、又不二相去一、必謹察ㇾ之ト云フヲ、舊注ニ備二奇伏一也ト云フ、必謹察ㇾ之ノコト奇伏ヲノミ云ヒシニモアラジ、其事猶多カルベシ、兵ヲ進メ勢ヲ合スルアリテ來リ戰フコト期ヲ待ツガ如キモ、マタシカルベカラズ、關原ノ役ニ初メ東兵急ニ岐阜ヲ攻メ破リ、直ニ赤坂ニ至リテ、大垣ノ城ニ對シ、營ヲ結ビテ動カズ、西將大坂ニ報ゼシ書ヲ見シニ、東兵ナスコトナクシテ日ヲ送リ、待ツコトアルモノ、如シト云ヒケリ、コレ我形ヲ見ザルニハアラズ、サレド大兵繼デ至リテ、其勢ヲ合セントスルコトヲ知ラザリシハ、詳ニ察スルニ及バザレバナリ、

第四段、兵非二益多一ヨリ篇末ニ至ル、兵非二益多一也ヨリ必擒二於人一ニ至テ、上文行軍相敵ノコトヲ通ジ結ビテ下文ヲ起ス也、兵ハ多キヲ益トスルニハアラズ、タヾ武ヲ進ムコト無クシテ、衆力ヲ併セ敵勢ヲ料リ、人材ヲ取ルノ三ツニ在ルノミ、ソレガ中、料ㇾ敵ノコトハ前ニ見ヘシ三十四ノモノ既ニ盡セリ、故ニコレヨリ以下ハ併ㇾ衆取ㇾ人ノコトヲ云ヒテ、一篇ノ義ヲ終ル也、重キコト令行ハル、ト令行ハレザルトニ在リ、士卒イマダ親附セズシテ罰スレバ、服セズ、服セザレバ用ヒガタシ、既ニ親附シヌレド、罰行ハレザルモマタ用ユベカラズ、故ニ令スルニ文ヲ以テシテ、イマダ從ハザルハ武ヲ以テコレヲ一ツニス、文トハ禮ト賞トヲ云、武トハ法ト刑トヲ云フナルベシ、令素行ハレテ其民ヲ敎レバ民服シ、

令素行ハレズシテ、其民ヲ教レバ、民服セズ、民服シ民服セザル、スナハチ親附スルトシカラザルトノ謂ナリ、故ニ令素行ハル、モノハ、衆ト相得テ其力ヲ併スベシ、第一篇ニ見エシ法令孰行ハルベキト云フモノ、スナハチコレヲ按ルヲ云フナリ、

地勢篇 近本地形ニ作レリ、

第一段、地形有ニ通者一ヨリ不レ可レ不レ察也ニ至ル、凡地ノ形勢六ツアリ、其形勢ニ因リテ勝ヲ制スベキ法、孫武自ラ解釋セシ所、其文明カナリ、ソレガ中、隘トハ狹隘ノ義、兩山峭絶、其間ニ谷ヲ通ズルガ如キ是也、險トハ危險ノ義、山高ク谷深キガ如キ是也、謂フ處ノ六ツノ者ハ地ノ道ナリ、地ヲ知ルハ將ノ至任也、察セザルコトヲ得ベカラズ、

第二段、故兵有ニ走者一ヨリ不レ可レ不レ察也ニ至ル、上文地ニ因リテ勝ヲ制スベキコトヲ云フニヨリテ、又戰必敗ヲ致スノ六ツヲ論ズ、其六ツノ者、マタ孫武自ラ解釋シ得テ明カナリ、其六ツノ者ノ如キハ、天災ニハアラズ、將ノ過ニヨレル也、是又察セザルコトヲ得ベカラズ、選レ鋒トハ精鋭ノ士ヲ選ミ用ヒテ、先鋒タラシム、前ニ擇レ人而任レ勢ト云フ一義ナリ、

第三段、天地形者ヨリ篇末ニ至ル、上文兩段ノ意ヲ總結ビテ云フ也、地ノ形勢ハ兵ノ形ナリ、サレバ料レ敵制レ勝、必ズ其險阨遠近ヲ計ルハ、上將ノ道ナル也、コレヲ知テ戰ヲ用ユレバ必勝ツ、シカラザレバ必敗ル、故ニ戰道必勝ツ、主無レ戰ト云フトモ必戰フ可也、不レ勝ハ、主必戰ト云フトモ不レ戰可也、第八篇ニ君命有レ所レ不レ受ト云フ是也、凡ソ將タルモノハ、進ンデハ名ヲ求メズ、退テハ罪ヲ避ケズ、タヾ民ヲ保チテ利其主ニ合フ、コレ國ノ寶也、卒ヲ視ルコト嬰兒愛子ノ如ク、コレト共ニ生キ、共ニ死スベクシテ、其危キヲ畏レザラシメツベシ、第一篇ニ道ト云ヒシモノ即此義ナリ、シカハアレドモ、恩愛スデニ厚クシテ、使フコトアタハズ、令スルコトアタハズ、亂レヌレドモ治ムルコトアタハザルハ、譬ヘバ驕養ノ子ノ恩ニ狎レ愛ヲ恃ムコトノ如ク用ユベカラズ、上文ニ云フ將嚴ナラズ、敎明カナラザルモノニシテ、第九篇謂フ處ノ卒已親附、而罰不レ行、則不レ可レ用レ之モノナリ、故ニ蔚繚子モ善將者愛與レ威而已ト云ヒシナリ、コレヨリ以下ハ知レ彼知レ己コトヲ云フ、第三篇ニ知レ彼知レ己、百戰不レ殆ト云フ、卽此義ナリ、知レ天知レ地、勝乃不レ究トハ、

カサネテ上ニ云フ動而不レ速、擧而不レ究ノ義ヲ述ベテ、一篇ノ意ヲ結ブ也、此篇兵經ノ五事ニヲイテ、地ノ形勢ヲ論ジテ、道天將法ノ如キモ皆其中ニ在リ、讀者心ヲ潜ムベキモノナリ、

九地篇

第一段、用レ兵之法ヨリ死地則戰ニ至ル、九地ノ名、孫武自解セシ處其義明カ也、散地則無レ戰トハ自戰二其地一ナリ、士卒家ヲ顧ミ鬪志專ラナラズシテ散走リ易シ、故ニ散地吾將一二其心一トハ云フ也、此篇ニ兵ヲ九地ニ用ユルコトヲ云フモノ再ビ見ユ、今コヽニ故ニト云フヨリ下ハ下ノ文ニ見ユル所ナリ、上下ノ文ヲ合セテ其大要ヲ云フコトハ、初學ノ士見ルニ易カランコトヲ思ヘバナリ、後皆コレニ倣フベシ、○古ノ時ニ京方ノ兵宇治勢田ニ戰ヒ、鎌倉ノ兵武藏野ニ戰ヒシガ如キ、其利アリシハナカリキ、皆是シカタノ地ニ戰ヒテ、士卒ノ志專ラナラザルニヨレリ、所謂散地コレナリ、輕地則無レ止トハ、師出越レ境敵ニ入ルコト淺クシテ未レ遠ハ輕地也、無レ止ハ士卒或ハ散還ンコトヲ思ヘバナリ、故ニ輕地吾將使二之屬一トハ云フ也、屬トハ部伍ヲ分チ營壘ヲ結ブコト相聯屬スルナリ、一ツニハ士卒ノ逃遁ニ備ヘ、二ツニハ其敵至ルニ相救フニ易カラシメンタメ也、爭地則無レ攻トハ、我得テモ利ニ、彼得テモ利ナルハ爭地ナリ、爭地ノ如キハ、其利我先ヅ精鋭ヲワカチ、間道ヨリ出テ、其地ニ據ラシメ、大兵ハ敵後ヨリ發シテ、我精鋭ト合フベシ、故ニ爭地吾將趨二其後一トハ云フ、軍爭篇ニ云ヒシ處スナハチ是也、交地則無レ絕トハ、交地トハ我モ往クベク、彼モ來ルベキモノ、我糧道ヲ絕ツコトナカルベシ、交地吾將謹二其守一トハ云フ也、凡ソ糧道ヲ利スル法、陸ニモアレ水ニモアレ、其守備ヲ設テ其轉漕ヲ通ズルナリ、衢地則合レ交トハ、諸侯ノ地四通二屬シ、我ト彼トノ側ニ又國アリテ、其地ノ三ツニ屬セシヲ云フ、先至而得二天下之衆一モノハ衢地也、衢地ニハ交リヲ諸侯ニ結ブベシ、故ニ衢地吾將固二其結一トハ云フ也、木曾叡山ノ大衆ヲカタラヒテ、其軍ヲ山ニ進メシカバ、平氏都ヲ落チタリ、古ヨリ京師ニ據ルヲ以テ、天下ヲ知レリナド世ニ云ヒモ傳フルハ、コレラノコトニ似タルナリ、重地則掠トハ、敵ノ地ニ入ルコト深ク、城邑ヲ背ニスルコト多キハ重地也、重地ノ如キハ、我糧路スデニ絕ス、其食ヲ敵ニ務ルノミ、故ニ重地吾將繼二其食一トハ云フ也、圮地則行トハ、山林險阻沮澤、凡ソ難レ行之道ヲ行クモノハ圮地也、前ニ見エシ絕澗天井天牢天羅天陷天隙必亟去レ之ト云フ、即此義也、故ニ圮地吾將進二其途一トハ云フ也、圍地則謀トハ、由リテ入ル所ハ隘ニ、從テ歸ル所ハ迂ニ、彼寡ヲ以テ吾衆ヲ打ツベキハ圍地ナリ、我衆ヲシテ專ラニシテ一ツトナスヲ謀ト云フ、故ニ圍地吾將塞二其闕一トハ云フ也、兵法ニ圍地必闕ク、圍地ノ如キハ、生路ヲ開ク、吾衆ヲシ

テ死志無ラシメテ打ントス、故ニ我自ラ云闕テ塞グナリ、死地則戰トハ、我無レ所レ往シテ、疾戰則存、不ニ疾戰一則亡ヲ死地トス、死地ノ如キハ殊死決戰スベシ、故ニ死地吾將示レ之以レ不レ活ト云フ、下文爲レ客之道ヲ說ク、卽此義也、示レ之以レ不レ活トハ、吾衆ニ示スニ必死ヲ以テシテ、人々ヲシテ自ラ奮ヒ戰ハシムルナリ、

第二段、古之善用レ兵ヨリ不レ戒也ニ至ル、上文九地用レ兵ノ法ヲ云フニ因テ、古ノ善用レ兵者ヲ云フ也、謂フ所ノ古ノ善ク兵ヲ用ユルモノハ、能ク敵人ヲシテ前後相及バズ、衆寡相恃マズ、貴賤相救ハズ、上下相救ハズ、卒スデニ離レテ集マラズ、兵合ヘドモ齊ラズ、第六篇ニ左不レ能レ救レ右、右不レ能レ救レ左、前不レ能レ救レ後、後不レ能レ救レ前ト云フコトノ如クナラシム、舊說ニ多設ニ變詐一、以亂ニ敵人一ト云也、此篇ノ義ニ合ヘリトハ見エズ、此篇云フ所、能ク敵ヲシテ如レ此ナラシムルコトハ、下文云フ處ノ兵之情主レ速ノコトスナハチ其義ヲ發セシ也、凡ソ戰、利ニ合テ動キ、利ニ合ハズシテ止ム、敢問一句、孫武ミヅカラ難ヲ設ケ、敵衆整テ來ラントスルヲ待ツコトヲ問フ也、上ニ云フ處ノ如キハ、敵整ラザルガ故ナリ、先ヅ其所レ愛ヲ奪フハ、左氏傳ニ先レ人有レ奪ニ人心一也ト云フ、亦コレ此義ナリ、舊說奪ニ其所レ愛ト云フヲ解スル所、異同アリ、ソレガ中、利地糧食ヲ以テ敵ヲ愛情所恃スルモノトスルハ、此篇九地ノ變ヲ說キ、且ツ其問フ所、敵人整テ來ラントスルヲ待タリケルガ故ナリ、サレド、下文マタ先ニ其所レ愛ト云コトアリ、モシ必ズ利地粮食トセンニハ、下文云フ所ノ如キ甚解スベカラズ、孫武云フ處ハ兵之情ニ在リ、諸家說ク所ハ必ズ其事ヲ指シ云ントス、コレラノ說ヲ通ゼシムル故ナリ、シカシタヾ陳皡注ノ但敵人所レ顧之事、皆可レ奪也ト云フ、約ニシテ盡セリ、劉寅又云フ、精緊所レ居、救レ後、恃ニ心腹一、巢ニ穴所一、本皆是其所レ愛也ト、此說ノ如キマタ知ラズンバアルベカラズ、兵之情主レ速以下三者ハ、前ニイヘル古ノ善用レ兵ノ事、後ニ云フ所ノ先奪ニ其所レ愛ノコトニ通ジテ、其要法ヲ示ス也、凡ソ兵ハ神速ヲ尙ブ、用レ兵神速ニシテ、其及バザルニ乘ジ、其虞ラザルノ道ニ由リ、其戒メザル所ヲ攻ルトキハ、前後相救フニ及バズ、衆寡相恃ムベカラズ、其所レ愛ノ如キ、マタ先ヅ奪ヒツベシ、其疾如レ風、動如ニ雷震一ト云フ如キ、皆其神速ヲ云フ、

第三段、凡爲レ客之道ヨリ此將軍之事也ニ至ル、コレヨリ下二段ハ、客トナルノ兵ヲ云也、凡客トナル道、人ノ地ニ入ルコト旣ニ深ケレバ、歸望オノヅカラ絕テ、衆ノ心專一ナル也、ミヅカラ其地ニ戰フモノハ、前ニ云フ所ノ散地ニシテ、衆鬪志無クシテ戰克ツコトヲ得難シ、其入ルコト深キハ粮道マタ絕ツ、故ニ其饒野ヲ掠メテ、三軍食ヲ足シ、謹ミ養テ勞スルコトナク其氣ヲ倂セ、其力ヲ積ミ、兵之計謀ヲ運ラシテ、測

ルベカラザルヲ爲ス、孫武兵ヲ說テ計ヲ云ヒ謀ヲ云ヒシモノ多シ、シカルニ此ニ於テ運兵計謀ト云フモノハ、其敵ヲ詐ルヲノミ云フニアラズ、我衆ヲ詐リテ、測知ラシムベカラザルヲナセバ也、是常ノ計謀ニアラネバ、兵之計謀ト云フ、其義前ニ兵者詭道也ト云ヒシニ同ジ、マタ我衆ノミヲ測ベカラザラシメテ、ソレヲシテ死地ニ陷シヌレバ、死スレドモ皆死セズ、イヅクンゾ其力ヲ盡ザルコトヲ得ン、無レ所レ往トハ死地也、下文ニ無レ所レ往者死地也ト云フ是也、舊說ニ死且不レ北ヲ句トシ、死焉不レ得ヲ句トシ、士人盡レ力ヲ句トス、シカルベカラズ、前ニ云ヒシ三河國伊田ノ戰ニ、野路ニ戰ヒ死セシ三河ノ兵四百、其屍皆敵ノ方ニ向ヒ伏シテ、背キ死セシモノハ一人モ無カリキト、古ノ人ヲ云ヒ傳ヘシコトアリ、カレラヲシテ死且不レ北死ト云ハザル、彼ノ國ノ如キハ後世ノ戰ニ、カヽルコトナクテヤアルラン、諸家ノ注セシ所、皆其義ヲ得ズシテ、其意モ亦圓活ナラズ、凡兵甚陷レバ懼レズ、故ニ往ク所ナケレバ固ク、入ルコト深ケレバ拘ニ、已ムコトヲ得ザレバ闘フ、是故ニ兵備ザレドモ相戒メ、求メザレドモ相得、約セザレドモ相親ミ、合セザレドモ相信ズ、卽是兵ノ情ナリ、其祥ヲ禁ジ疑ヲ去ツトキハ、死ニ至テ他志アルコトナシ、祥トハ凡ソ吉凶ノ兆ヲ云也、三軍ノ災ハ疑

ヲ大也トス、妖祥ノコト其疑意ヲ生ズベキヲ恐ル、故ニコレヲ禁ズ、司馬法ニ滅厲ト云フ是也、妖祥ノコト、古ヨリコレニヨリテ、兵ノ勝敗ヲ致セシ類スクナカラズ、コレヲ禁ズルノ要ハ、衆ノ疑ヲ去キテ、其志ヲ專一ニスルニ至ルナリ、古人マタコレヲ候リテ、衆ノ疑ヲ決シテ其志ヲ專一ニセシアリ、又知ラズンバアルベカラズ、其要マタ、兵ノ情ヲ知ルニアルノミ、善士財ト壽ヲ惡ムニアラズ、號令發スルノミ、聽ク者皆感動涕泣シ、死ヲ矢ヒテ他ナキヲ率ヒ、戰ハンニハ、其兵ミナ諸劌ノ勇ナリ、諸劌ハ人名、傳說ニ專諸曹劌トス、古ノ勇者也、率然ハ常山ノ蛇名ナリ、首ヲ打テバ尾至リ、尾ヲ打テバ首至リ、其中ヲ打テバ首尾至ル、能ク用レ兵者ハ此蛇ノ如シ、上下一レ心、捍禦同レ力ヲタトヘ云フ也、孫武又問ヲ設ケ、兵率然ノ如クナラシムベキノ義ヲ發シ云フ、吳越ノ人ノ世仇ナルモ、凡同舟シテ風ニ遇フトキハ、相救フコト左右ノ手ノ如シ、況ヤ上下一心ノモノ、率然ノ如キ、其理勢ノ然ル也、馬ノ足ヲ絆ヒテ行カザラシメ、車ノ輪ヲ埋ミテ動カザラシムルモ、猶其行クコトナカランヲ恃ミ難シ、齊レ勇若レ一ハ政ノ道也、剛勇相得ルハ地ノ理也、故ニ善ク兵ヲ用ユルモノ、手ヲ相携テ一人ヲ使フ如キ、其已ムコトヲ得ザレバ也、不レ得レ已也ト云ヒ

シハ、スナハチ上文不レ得レ已則闘ノ義ヲ申ネ明ス也、將軍ノ事ト云フヨリ此將軍之事也ト云フニ至テハ、上文ヲ承テ將ノコトヲ云フ也、靜ナレバ動カスベカラズ、幽ナレバ測ルベカラズ、正ナレバ犯スベカラズ、治レバ亂ルベカラズ、此四ツノモノハ、我士卒ヲシテ與ニ死シ與ニ生ベカラシメテ、危キヲ畏レザラシムル所ナリ、愚二其耳目一トハ、コレヲシテ測知ラシメザルノ謂ニシテ、其事ヲ易ヘ其謀ヲ革メテ、人ヲシテ識ルコト無カラシメ、其居ヲ易ヘ其途ヲ迂ニシテ、人ヲシテ慮ザラシム、即是其耳目ヲ愚ニスルノコトヲ云フ也、總テコレヲ言ヘバ、兵ノ計謀ニシテ、其要ハ衆ヲシテ危キヲ畏レザラシムルニ在リ、如三登レ高去二其梯一トハ、其反慮ヲシテ自ラ絕シムルヲ云フ、深入二諸侯之地一、而發二其機一トハ、敵地ニ入ルノ深クシテ、其舟ヲ焚キ、其釜ヲ破ルコトノ如ク、敵ヲ敗ルニアラザレバ、生テ還ルベカラザルノ機ヲ發ス、下文ニ死地吾將示レ之以レ不レ活ト云フ此也、若レ驅二羣羊一トハ、衆ハ、將ノ令ニ從フコトヲノミ知ルコト、馴羊ノ鞭ニ從フゴトクニシテ、他志無キ也、コレヲ聚二三軍之衆一、投二之於險一ト云フ、スナハチ將軍ノ能事也、九地之變、屈伸之利、人情之理、不レ可レ不レ察也トハ、上文ノ意ヲ結ビテ、下文カサネテ九地ヲ擧テ言フノ端ヲ起スナリ、屈伸ノ利、人情ノ理、並ニマタ下文ニ詳ナリ、

第四段、凡爲レ客之道ヨリ非二覇王之兵一也ニ至ル、コレ又客トナルノ道ナリ、深則專、淺則散ト云フヨリ、死地吾將示レ之以レ不レ活ト云フニ至テハ、前ニスデニ釋シタリ、併セ見ツベシ、上文ニ云フ處ノ九地ノ變スナハチコレ也、凡敵ニ圍レヌレバ禦ギ、不レ得レ已バ闘ヒ、敵過ギヌレバ從フモノハ兵ノ常情、上文ニ云フ人情ノ理ニシテ、屈伸ノ利モマタ其中ニ在リ、敵圍ミヌレバ禦ギ、已ムコトヲ得ズシテ闘フハ屈セリ、過ギヌレバ從フハ伸ナリ、舊說ニ過則從フヲ解シテ、陷レ之甚過レバ計ニ從フト云フ、是ノ義ニハ非ズ、此ニ云フ三不知スデニ軍爭篇ニ見エタリ、コレ通ジテ上文地利ヲ論ズル意ヲ結ブ也、四五者トハ諸侯ノ謀ト山林險阻沮澤ノ形ト用二鄕道一トヲ云ヒテ、重キコト諸侯ノ謀ヲ知ルニ在リ、覇ハ表也、諸侯ニ長タルモノヲ云フ也、齊桓晉文ノ如キ是ナリ、四五者武備志ニ此三者ニ作レリ、

第五段、夫覇王之兵ヨリ能爲二勝敗一ニ至ル、夫覇王之兵ト云ヨリ其國可レ隳ニ至テ、上文不レ知二諸侯之謀一者、不レ能二預交一

ノ意ヲ明ス也、覇王ノ如キハ、其威加ル所モトヨリ大ナリ、兵ヲ擧ゲ大國ヲ伐ツニ、其衆聚ルコトヲ得ズ、其交合フコトヲ得ズ、コレ彼ノ四五者ヲ知リテ、能クスレバナリ、是故ニ天下ノ交ヲ爭ハズ、天下ノ權ヲ養ハズ、己ガ私威ヲ信ベテ、敵ニ加フルモノハ、其國城ヲ保ツベカラズ、コレハ彼四五者ヲ知ラズシテ、援ヲ失ヒ威ヲ損ズルノ害ヲ云フ也、施二無レ法之賞一ヨリ勿二告以一レ言ニ至テ、マタ愚二士卒之耳目一、使二之無一レ知ノコトヲ云ヒ、投二之亡地一、然後存、已下三句ハ、上文聚二三軍之衆一、投二之於險一ノ義ヲ明カス也、無レ法無レ政トハ常法常政ヲ守ラザルヲ云フ、能爲二勝敗一トハ第四篇ニ能爲二勝敗之政一ト云義ニ同ジ、

第六段、故爲レ兵之事ヨリ篇末ニ至ル、詳一ツニ佯ニ作ル、舊說佯惡也ト云フ、コレ又兵以レ詐立ノ義ニ同ジ、順二敵之意一モノハ、下文ニ云フ如二處女一也、千里殺レ將モノハ、下文ニ云フ如二脫兔一也、カクノ如キヲ或事ノ巧也ト云フ也、越王勾踐吳ヲ滅セシ、其事コレニ似タリ、初勾踐會稽ニ敗シテ後、吳ニ事フルコト臣妾ノ如シ、吳ノ諫臣諫ムルコトアリ、吳王夫差聽クコトナク、タヾ一面ニ中國ノ伯ヲ爭ヒ、諸侯ヲ黃池ニ會スルニ及ビ、越王兵ヲ發シ吳ヲ打、其太子ヲ虜ニシ、ツヒニ其國ヲ亡ボシタリ、其始末ハ左氏傳國語越絕書等ニ詳ナリ、政擧トハ、謀定リ令發スルヲ云フナリ、夷レ關折レ符トハ、其危關ヲ閉テ、使者ノ待（傳カ）ヲ折テ、彼國ノ人ヲ通ゼズ、コレ我謀ノ洩ザランタメ也、開闔トハ間隙ヲ云フナリ、下文ニ敵人開レ戶ト云フ是也、敵隙アレバ、急ニコレニ乘ズルヲ云フ也、先二其所一レ愛、微與レ之期、其義未レ詳、諸家ノ臣皆此義ヲ得シトモ見エズ、孫武吳王ヲ佐ケテ楚ヲ伐チシコトニ據ルニ、所レ愛トハ或ハ彼同盟附庸ノ國ノ如キ亦是也、本注ニ詳ニ云、是レヒソカニ敵ノ所レ愛ト相期スルナリ、踐墨トハ五尺ヲ墨トス、其踐履ム所墨丈ノ間ヲ出デザル也、隨レ敵ハスナハチ上文云フ順ニ詳敵之意一也、始メ踐レ墨隨レ敵ノコトハ、處女ノ室ニ在ルガ柔順ナルガ如ク、後チ敵ノ間隙ニ乘ジ、其戰事ヲ決スルニ至テハ、脫兔ノ如クニシテ、敵拒グニ及バズ、コレ巧能成事ノ意ヲ結ブ、孫武用兵ヲ論ジテ、不レ戰而屈二人之兵一ヲ以テ、善之善ナル者トシ、勝チ易勝者ヲ以テ善戰フ者トシテ、先爲レ不レ可レ勝、以待二敵之可一レ勝ヲ、昔之善戰フ者トス、累數百千言、其論ヲ上下シテ、亦餘蘊ナキニ似タリ、シカルニ此篇ニ至テハ、愚二士卒之耳目一、使二之無一レ知、聚二三軍之衆一、投二之於險一ヲ以テ、將軍之事トナリトス、其言フ處ヲ以テ前ノ十篇ニ比スルニ、特ニ同ジカラズ、タトヒ此篇言フ所、タヾコレ客トナリテ、深ク入ルコトヲ說クトイヘドモ、其大意三軍ノ衆ト與ニ先ズベク、與ニ生クベクシテ、危キ

ナ畏レザラシムルニ出デズ、且ツ齊ノ勇若レ一、政之道也ト言フニ據ルニ、五事ノ一ニ謂ソ處ノ道ノ如キ、令ニ民與レ上同レ意者、其術マタ何如トイフトモ知ルベカラズ、古人論ジテ、孫武之書往々舍レ正而繫レ奇、背レ義而依レ詐ト云フモノ其謂レナキニアラズ、讀者宜ク擇ブベキコトナリ、

火攻（篇）

火ヲ用ヒテ攻ヲ佐クルヲ云フ也、

第一段、凡火攻ヨリ風起之日也ニ至ル、火攻之法五ツアリ、其一火人トハ火ヲ城營ニ縦チテ、其人衆ヲ焼ク也、其二火積トハ積ハ粮食薪芻ノ類ヲ云フ也、是ヲ焼ク時ハ、人馬皆食ニ困シム、軍爭篇ノ軍無ニ糧食一則亡、無ニ委積一則亡ト云是也、其三火輜、其四火庫トハ器械財貨及ビ軍士ノ衣裳ノ類載セテ車ニアルモノ、道ニアリテ未ダ止マル處ナキヲ輜ト云ヒ、既ニ城營ニアリテ止舍アルヲ庫ト云、是ヲ焼ク時ハ、其器財皆究ス、軍爭篇ニ軍無ニ輜重一則亡ト云是也、其五火隊トハ隊ハ古隧字ト通用、賈株曰、隧即道也、糧道及轉運也ト云フ是也、タヾニ粮道轉運ニノミニ限ルベカラズ、敵來ラン道ヲモ焼絶テ、其軍相去ル中間ヲ焼テ、其救援ヲモ絶ツベシ、コレラノ如キ火隊ノコトナリ、已上是ヲ五火ト云又也、行火必有レ因トハ、凡ソ火ヲ行フニハ必ズ其因ル所アリ、下ニ云フ天時月次地利、又內應アルガ如キ皆是也、烟火必素具トハ、烟火ハ焼具ヲ云フ、火箭火砲及ビ貯火之器、可レ發レ火之物ノ類皆是也、發火ノ時ハ天ノ旱リシ燥ケル時ヲ云、起火ノ事ハ月ノ箕壁翼軫ニ在ルノ日也、凡此四宿ハ風起ノ日ナレバ也、

第二段、凡火攻必因ヨリ不レ可ニ以奪一ニ至ル、凡火攻必因ニ五火之變一而應レ之トハ、凡火攻ト云フハ、徒ニ火ヲ用ヒテ其人積輜庫隊ヲ焼クノミニハアラズ、必ズ敵人ノ變ニ因リテ、兵ヲ以テコレニ應ズル故ニ、火攻トハ云フ也、已下其變ニ應ズルコトヲ云フ也、凡火內ニ發スルト外ニ發スルトアリ、モシ其內ニ發スルハ早ク外ニ應ズベシ、但シ火スデニ發シヌレド、其兵動カザランハ、敵モトヨリ備アレバナリ、遽テ攻ルコトナカルベシ、其火力ヲ極メ、敵變ヲ見テ、從フベキハ從ヒテ攻ベシ、シカラザレバ、兵ヲ收メテ止ム、モシ荒澤草穢ノ地ノ如キ、火外ニ發スベキモノハ、內ニ待ツコト無クシテ、時ニ及ビテ發ス、時トハ上ニ云フ天燥キ風起ルノ時日ヲ云フナリ、火發ニ上風、無レ攻ニ下風一トハ、コレスデニ火勢ニ逆ス、モシ彼上風ニ乗ジ殊死シテ戰ハンニハ、我反テ其害ヲ受クベケレバ也、王晳云、或擊ニ其左右一可也、晝風

久、夜風止トハ、晝發スル風ハ止ミ難ク、夜發スル風ハ止ミ易シ、コレ又知ラズンバアルベカラズ、凡軍必知ニ五火之變一、以レ數守レ之トハ、前ニ云ヒシ所ノ我攻レ人之事也、此ニハ人ノ我ヲ攻ムベキヲ防グコトヲ云フ也、凡軍ニハ必ズ五火ノ變アリ、我火ヲ用テ敵ヲ攻ムベケレバ、敵モマタ火ヲ用テ我ヲ攻ムベシ、故ニ我コレガ備ヲナス嚴ナラザルコトヲ得ベカラズ、以レ數守レ之トハ、彼ノ五ツノ者其一ヲ缺ベカラザルヲ云フ也、舊注ニ數トハ、星ノ躔次ノ數ヲ算ヘテ、カレヲ守ルト云フ、モシシカラバ、月ノ四宿ニ在ラザラン、日ハコレヲ守ルニ及ブマジキ、尤シカルベカラズ、故以レ火佐レ攻者明、以レ水佐レ攻者強トハ、火攻ニ因テ併セテ水攻ヲ云フ也、明トハ可レ畏之謂也、強トハ不レ可レ禦ヲ云フナリ、水可ニ以絕一、不レ可ニ以奪一、イマダ詳ナラズ、一說不字爲ニ火字之誤一ト云フ、此說ノ如キハ敵水ヲ以テ我ニ灌バ、我コレヲ決シテ絕ツベシ、敵火ヲ以テ我ヲ焚バ、我モマタ焚テ奪フベシ、コレ上文ノ意ヲ承テ、守レ之ノコトヲ云フナリ、曹公注ニ、水佐者、但可下以絕ニ敵道一分中敵軍上、不レ可レ奪ニ敵積蓄一、諸家ミナコレニ從ヒテ說ヲツクル、此論レ水以贊ニ火之功一ナリト云フナリ、サレド智伯韓魏トトモニ晉陽ヲ圍テ、コレニ灌グ、城不レ浸者三板、沈竈產レ鼃、智伯水ヲ行リテ、吾乃今知ニ水可ニ以亡一人國一也、ト云ヒシ如キニ據ラバ、徒ニ其道ヲ絕テ其軍ヲ合フノミニハアラズ、五火ノ中、火積火輜火庫ノ三ツハ、其積蓄ヲ奪フナリ、餘皆ソノ積蓄ヲ奪ノミヤニアラズ、此節ノ如キハ、上文ノ意ヲ承テ守レ之ノコトヲ云フナリ、因リテマタ水ヲ以テ攻ルモノヲ從ヒ言ヒテ、水ナバコレヲ絕ツベク、火ナバコレヲ奪フベシト云ノ、スナハチコレ守レ之ノコトナリ、趙襄子夜殺ニ守レ堤吏一、決レ水反灌ニ智伯一ガ如キハ、水可ニ以絕一レ之義ナリ、單于縱レ火焚ニ李陵於大澤一、陵先放レ火燒ニ其葭葦一、奪ニ其火勢一ガ如キハ、火可ニ以奪一之義ナリ、不火二字其形相似タリ、後人ノ誤寫モマタ知ルベカラズ、此說ハ劉氏直解ニ出タリ、

第三段、　凡戰勝攻取、當レ修ニ其功一コトヲ論ジ、結ブニ安レ國全レ軍ノ道ヲ以テセリ、其意火攻ノ法ノ如キハ、マタコレ人ノ知ラズンバアルベカラザルモノヲ示スト云フニ似タリ、修功トハ其勝ヲ全クスルノ義也、費留トハ久暴レ師、則國用不レ足之謂ナリ、兵久而國利者未ニ之有一也、作戰篇語故ニ明主ハ其事ヲ慮リ、良將ハ其功ヲ修ムルナリ、非レ利不レ動トハ、スナハチ合レ利而動ナリ、非レ得不レ用トハ、勝算ヲ得ルニアラザレバ、兵ヲ用ザル也、非レ危不レ戰トハ、危難ヲ救フニアラザレバ、與ニ戰ハザルヲ云ノ也、其主師ヲ興シ、其將戰ヲ致ス、皆慍怒ヲ以テスベカラズ、怒ハ喜ニ復スベク、慍ハ悅ニ復スベシ、亡國ハ復存スベカラズ、死者ハ復生クベカラズ、故ニ明主コレヲ愼ミ、良將コレヲ警ム、カクノゴトキハ、

安レ國全レ軍之道ナルナリ、第三篇ニ殺レ敵者怒也ト云ヒ、第二篇ニ全レ國全レ軍ヲ上兵トシ、此篇ニ至テ兵ハ慍怒ヲ以テ用ユベカラザルノ義ヲ極メ論ズ、コレラノコトノ如キ、讀者ヨク心ヲ潛ムベキモノナリ、舊注ニ喜ハ色ニアラハル、ヲ云ヒ、慍ハ心ニ得ルヲ云フト見エタリ、

用間篇

凡用レ兵ノ要、先ヅ敵情ヲ知ルニ在リ、十三篇ノ首ニ經レ之以レ事、挍レ之以レ計、而索ニ其情一ト云フ、スナハチ此ノ義ナリ、故ニ篇ノ尾ニ至テ、先知ノ道ヲ云テ、其義ヲ終ルト見エタリ、

第一段、凡興レ師ヨリ知ニ敵之情一者也ニ至ル、首ニ云フ處ハ、興レ師十萬、相守ルコト數年ニシテ、一日ノ勝ヲ爭ヒ、ワヅカニ爵祿百金ヲ愛惜シテ、敵情ヲ知ラザル者ハ、人ニ將トシテ主ヲ佐クルノ道ニアラザルノ義ヲ極メ論ズルナリ、故ニ明君賢將動テ人ニ勝チ、成功ノ衆ニ出ルモノハ、先知ナリ、先知トハ鬼神ニ取ルニアラズ、事類ニ象ルニアラズ、度數ニ驗ルニアラズ、必ズ人ニ取テ敵ノ情ヲ知ル者ナリ、鬼神ノ情、ナホ卜筮ヲ以テモ知ルベシ、形氣ノ物、ナホ象類ヲ以テモ求ムベシ、天地ノ理、ナホ度數ヲ以テモ驗スベシ、敵情ノ如キハ、人ニ取ルニアラザレバ知ルベカラズ、人ニ取ルトハ、間ヲ用テ知ルヲ云フナリ、以上用レ兵ノ要ハ間ヲ用ルニ在ルノ義ヲ發スルナリ、

第二段、故用レ間有レ五ヨリ告者皆死ニ至ル、用レ間五ツノ者アリ、此五者俱ニ起リテ敵其由ル處ヲ知ルコト無キ、コレヲ神紀ト云フ、神ハ不レ可レ測ヲ云ヒ、紀ハ理ナリ、コレ極メテ其事ヲ貴シトスルノ謂ナリ、因間ハ元敵ノ鄕國ノ人ニ因テ用ユル也、下文ニ鄕間ト云フモノ即此也、內間ハ敵ノ官屬ニ因テ用ユル也、反間ハ敵間ノ來テ我ヲ伺フ者ニ因テ用ルナリ、死間未レ詳、文ニ據ルニ吾間詐リ以テ敵間ニ告グ、其事スデニ乖ヒテ敵ノ爲メニ殺サル、也、誑ハ詐ナリ、酈生齊ニ煮ラレ、唐儉突厥ニ死スルノ如キ、コレニ似タリ、生間ハ往來相通報スル也、三軍之事莫レ親ニ於間一トハ、先知ニ敵情一モノハ、必ズ人ニ取ルノ親切ナルニシクハナク、前ニ云フ先知者、不レ可レ取ニ於鬼神一、不レ可レ象ニ於事一、不レ可レ驗ニ於度一、必取ニ於人一ノ意ニ應ジテ出ヅ、コレヲ以テ、其賞ハ間ヨリモ厚キハ無ク、前ニ云フ愛ニ爵祿百金一ノ意ニ應ジテ云フ、其事ハ間ヨリモ密ナルハ無シ、先ニ云フ莫レ知ニ其道一ノ意ニ應ジテ云フ、聖智ハ其能ク知レ人ニ就テ言フ也、仁義ハ其能ク得レ衆ニ就テ言フ也、能ク人ヲ知レバ、其材得テ用ユベシ、能ク衆ヲ得レバ、其力得テ注スベケレバ也、非ニ微妙一不レ能レ得ニ間之實一トハ、吾間ノ情僞、必ズ深ク察スベキヲ云フ也、モシシカラザレバ、吾間ノタメニ事ヲ誤ルコトアランガ故ナリト云フ也、微ハ密

ナリ、コレヲ密ニシ、コレヲ密ニシテ、間ヲ用ヒズトエフ處ナカルベシ、已上間ヲ用ユルノ要ヲ論ズル也、間事未レ發、而先聞者、聞與ニ所レ告者一皆死トハ、間ノコトイマダ發セザルニ、先ヅ其コトヲ聞テ告ルアラバ、間ヲモ告ル者ヲモ死ス、舊說云、告ル者間者ヲ誘クニアラザレバ、間者ノ情ヲ知ルベカラザル故ナリ、コレ其機事ノ泄ルヲ要ム故ナリ、上文事莫レ密ニ於間ニノ義ナリ、

第三段、凡軍之所レ欲レ擊ヨリ不レ可レ不レ厚也ニ至ル、守將ハ、守レ軍守レ城ノ將ナリ、左右ハ其任使ノ人ナリ、謁者ハ告事ヲ掌ル者ナリ、門者ハ守レ門守ナリ、舍人ハ守レ舍ノ人也、吾間ヲシテ必ズ先ヅコレラノ姓名ヲ索メ知ラシムルコトハ、其事ニ臨ミテ求得ベカラザレバ也、必索ニ敵間之來間レ我者一以下ハ、反間ヲ以テ五間ノ最トスルコトヲ云フナリ、敵間ノ來テ我ガ動靜ヲ伺フアランヲ、必ズ深ク求メテ誘クニ厚利ヲ以テシ、コレヲ止舍シテ我反間トナスベシ、敵間ニ因テ敵情ヲ知ルトキハ、即鄉間內間得テ使フベク、死間其詐ヲ以テ敵ニ告ゲシムベシ、生間其往來期ノ如クナラシムベシ、凡ソ五間ノコトハ必ズコレヲ知ルヲ主トス、先ヅ敵情ヲ知コトハ、必ズ敵間ヲ得テ反間トナスニアリ、故ニ反間ヲ待ツコト厚カラズバアルベカラズ、

第四段、昔殷ヨリ篇末ニ至ル、伊摯ハ伊尹ナリ、呂牙ハ太公ナリ、殷ノ興ルニ伊尹夏ニ在リ、周ノ興ルニ太公殷ニ在リト云フハ、反間ヲ以テ五間ノ最トスルノ說ヲ重クスル也、故ニ明君賢將ハ、能ク上智ノ人ヲ用テ間トナシ、必ズ大功ヲ成ス、コレ兵ノ要ニシテ、三軍ノ待テ動ク所ナリ、通ジテ一篇ノ意ヲ結ビ言フ也、兵ノ要トハ、用レ兵ノ要先ヅ敵情ヲ知ルニ在レバ敵、三軍之所ニ恃而動一トハ、敵情ヲ知ラザレバ、軍擧グベカラザレバ也、伊尹太公ヲ引クコト何氏以爲ニ重レ之之辭一是也、戰國諸子ノ說類皆如レ此、後ノ說者云フコトアリ、古人立ニ大事一就ニ大業、有レ正有レ權、所レ謂以成ニ大功一者、伊呂之權也、在ニ聖人一謂ニ之權一、在ニ兵家一名曰レ間、惟兵家之間、流而不レ返、不レ能ニ合レ道、乃入ニ于詭詐之事一、コレヲシテ說ノ如キシカルベシトモ聞エス、昔ハ柳下惠見ニ飴曰、可ニ以養レ老、盜跖見ニ飴曰、可ニ以粘レ牡、コレラノ物ノ見ル同ジクシテ、コレヲ用ユルモノ異ナルナリ、伊呂ヲ以テ反間トスルガ如キハ、盜跖ガ飴ヲ見ルナリ、深ク辨ズベキニモアラズ、

孫武兵法擇副言終

那須國造碑釋文

源君美　釋

永昌元年

朱鳥四年也、朱四二字、上頭一點、皆碑面剝落之跡耳、據ㇾ史、持統三年、歲次己丑、實朱鳥四年也、明年庚子正月朔、持統卽位、先ㇾ是無ㇾ改二前朝之號一、蓋以二其攝一也、

飛鳥淨御原大宮

據ㇾ史、持統尊號稱曰二藤原大宮一、而稱二飛鳥淨御原大宮一、亦無ㇾ改二前朝之號一也、

那須國造

那須國造也、按二國造本紀一、景行之世、始置二那須國造一焉、

追大壹

據ㇾ史、天武十四年正月、更改二爵位之號一、其諸臣之位、正位直位勤位務位追位進位、每位有二大廣各四階一、凡二十四階、

那須宣

那須直也、姓氏錄云、直者謂ㇾ君也、古有二直姓者一、皆是也、天武十三年十月、更改二諸氏族姓一、以爲二八等一、曰直人、曰朝臣、曰宿禰、曰忌寸、曰道師、曰臣、曰連、曰稻置、而國造直姓者、無ㇾ改二本姓一也、

韋提

韋提人名也、韋猶二天武紀韋那公須高見之韋一也、提猶二欽明紀膳臣巴提使之提一也、

評督

評督未詳、按ㇾ史、崇神十八年、以二皇子豐城命一令ㇾ治二東國一、景行五十九年二月、拜二豐城之子彥狹島王一、爲二東山道十五國都督一、蓋襲封也、王將ㇾ就ㇾ國、中路病薨、百姓悲二王不ㇾ來、竊盜二其屍一、葬二之上毛野一、明年八月、乃命二王世子御諸別王尊一、領二東國一、世子克繼二前業一、以二善政一聞、蝦夷率服、盡獻二其地一、邊疆又（父カ）安、於ㇾ今子孫猶在二東國一云、考二姓氏錄一、豐城之後、凡二十八姓、皆出ㇾ自二上毛野下毛野等國一焉、那須直、蓋是豐城之後、復襲二舊封一、拜二都督之命一乎、然則評督之評、當二是都字一、都督舊讀與二大宰一同、又按二欽明紀一、地名皆評讀云二邊郡一、蓋古訓也、評督猶

言二郡宰(コホリノミコト)一也、郡評字似、史碑皆訛、又未レ可レ知也、

歲次庚子年

文武四年也、

辰節稱故

辰節、猶レ言二辰時一也、稱故物故也、蓋言二某年某月某日某時卒一也、

意斯麻呂

意斯人名、古者以二意斯一名頗多、麻呂古男子通稱、蓋是其僚屬也、

銘偲

銘德也、

殞公

殞亡也、猶レ言二亡君一也、

廣氏尊胤

廣氏、蓋謂二廣來津公一也、姓氏錄曰、豐城命三世孫赤麻呂、依二居地一稱二廣來津公一、

世之中重被二貳照一、一命之期連見二再甦一、

蓋謂下其於二國人一有中再造之功上也、

嫡子

嫡子也、安按前輩解爲二嫡子一、此釋爲レ嫡、恐傳寫字誤、墨刻亦缺歟、佗日按定、再按二字非レ闕、蘚蝕之間失去也、搜撿搨之、

不改其語

不レ改二其道一也、所謂三年無レ改二於父之道一也、

銘夏堯心

維務堯心也、銘或雖字、安按夏復之訛、因二摸本一而訛也、維字可レ疑、

澄神照軋

凝神照乾也、安按亦依二摸本一而謬也、而解則得レ焉、刻本作レ乾、

六月童子

云兒童子也、六或亦字、

意育助坤

意育助坤也、意憶古字、

作徒之大

作徒之夫也、

合言喩字

合言兪焉也、猶レ言二僉曰一レ兪也、

无根更固

無レ根更固也、

跋那須國造碑

右那須國造碑、貞享中、故常山源公得之封內、摸而傳之、乃建碑亭以置守戶、碑已湮沒、九百九十餘年、而復見于世矣、嗟夫物之顯晦、固各有時耶、美今所得一本、所謂傳摸補足、非其眞者、恨未見石本也、其跋曰、元年上二字、不甚分明、乃摸印見之永昌二字也、然本朝無永昌號焉、飛鳥淨見原天武朝也、天武有朱鳥號、永昌字形、稍似朱鳥、想是歲月之久、字體訛缺也、因推爲朱鳥、復考之、朱鳥元年歲在丙戌、而此曰己丑、則非朱鳥也明矣、今按唐武后、永昌元年歲在己丑、而當持統三年、此時本邦年號闕、故假用異域年號乎、美竊疑以謂、維我東方建國已來、未始有稱藩異邦、奉其正朔者也、僞周之號、亦何以假爲、若其果然、則文武四年、只用甲子何也、以余考之、或以爲永昌元年者、即是朱鳥四年也、持統稱制、無改前朝之號、蓋以其攝也、據史持統四年庚子正月朔、始即天位、亦足以徵矣、歷代縣遠、文多刓缺、不可盡解、但其四字僅存三畫、而右旁轉折處、隱若挑勾勢、上頭一點、乃是剝落之跡、遂使觀者、以爲元字耳、越人以爲鳧、楚人以爲鵰、孰知鴻飛冥々哉、美嘗聞之、孔子曰、惟器與名、不可以假人、魯仲連齊國一男子、欲蹈海而死義、不帝秦之故也、堂々天朝、豈復有假以僞周之號哉、我學淺陋、性且不好臧否人物、然事之關係、則重矣大矣、敢不可不辨、

享保辛丑秋七月二十一日　　源君美書

右那須國造碑釋幷跋、白石翁手書、用半幅橫紙書、蓋草本也、藏于土肥德甫家、其先人元成所遺也、友人滕之愿愛而錄之、其親筆今有無不可知、而此本經一再轉寫、誤訛時有、先是立伯時翻刻此碑、寄致一本、久存篋笥、稍供蠹䑕、因分割粘綴以代摸文、幷收其碑、以係於左、秋晚天淸霽日入窓、剝啄適稀據梧整理、眞閑屋之一樂也、天明癸卯九月識於篁墩草舍吉林安資坦

樂對

謹對 第一條

謹接ずるに本朝の樂曲もとこれ兩部有るに似たり所謂我國の樂あり異邦の樂あり此等の樂廟社朝廷聘覲燕饗等に用ひられし事猶周代の禮に相同じかりきそれが中神樂といふものをもて我國の樂の始とやいふべき

伊弉冊尊かみさりませしを紀伊國熊野の有馬村に隱しまつる國のならはし此神を祭るに花の時は花をもて祭る又鼓吹幡旗をもて歌舞ふて祭るよし日本書紀に見えたり此神は我國開闢の神にてましますそれを祭りまいらするにすでに歌舞と云ふ事あらんには天照太神の御時よりは猶さきの代に始れる歟されど伊弉冊尊を祭りまいらするに歌舞を用ひしことも後代の俗に出來しも又知べからずされぱまづ神樂をもて本朝の樂の始とは申す也よく知れる人に問べき事にや

庭火より朝倉其駒に至るまでの二十四曲は（庭火朝倉其駒皆樂曲の名なり）皆是神代の遺風にして則神を祭らるゝ時に用ひられし樂にてある也其餘の樂曲かれこれと國史に見えし處ありといへども其聲容の如きは後世に傳れりとも聞へず（殊舞八佾の舞田の舞楯節などいふ事國史に見えたり）所謂催馬樂風俗の類に至ては皆是我朝國風の樂にて侍り（神樂は周代の頌のごとく催馬樂風俗は周代の十五國の風の如くにや）

三十四代のみかど推古天皇の天下しろしめす二十年百濟の人味摩之我朝に來れり彼昔吳國にゆきて其國の伎樂舞を學び得る由奏しければ少年を集て是を習しめらる是を異邦の樂の我國に傳れる事の始とぞ申すべき（此年隋煬帝大業八年にあたれり○是より先きの代に新羅より樂獻ぜしなどいふ事あれども我國の人それを傳へしとは見えず）其後四十二代文武天皇の御代に勅して撰れし命を見るに雅樂寮の掌る處に文武雅曲正儛雜樂等あり（干戈なきを文といひ干戈有るを武といふ雅曲正儛の外を雜樂といふ由義解には見えたり）其屬にいはゆる歌師歌人儛師儛生笛生笛工等の如きは皆本朝の樂部を掌り唐樂高麗百濟新羅樂等伎樂等も各其師と其生とあり（伎樂とは吳樂をいふ由義解に見えたり）是等は異邦の樂部を掌る也これら本朝異邦の樂或は燕饗に用ひ或は房中に用ひらるゝ事猶周代の大樂正の掌る事の如くにぞあるべき

所謂唐樂の如きもたゞに唐代の樂のみには非ず北齊陳隋等の樂及び唐代にいはゆる法部胡部等の曲又それらの曲調に傚て我朝にして作れる處も侍るめりさればいはゆる唐樂も皆是後世の俗樂にてまじゆるに胡部夷部等の樂をもてすれば彼の三代の古樂には非ず本朝伶官の説に振鉾三節といふは周武王牧野の事に始まれりと申す歟さらばいはゆる大武の樂にやされど今其聲容を觀るにかの武の六成の遺訓とも見えず（是の事には某が愚見なきにしもあらずといへども其業をつたへし者の説もたがふ處あればしゐて辨ぜむ事不用の事なり）さらば古の時樂をもて神人を和げ給ひし義は猶かの三代の禮に相同じといへどもかの三代の古樂の如きはいまだ本朝には傳らずとや申すべき

又按ずるにある説に孔子東夷之子大連少連が善居し喪たりし事を稱し給ひしはすなはち我國の連の人の子を指給ひきされば其代には我人かの人互にゆきかふ事も有りしなり九夷に居らまく欲し給ひしも桴に乘て海に浮ばむとのたまひしも皆是我國をおもひしたひ給ひしなり孔子の樂を學びたまひし周の少師陽擊磬襄などいひし樂工海に入りしと見えしも我國に來れる也さらば我國の樂もとこれ周代の遺風ならんも知べからずと云ものあり大連少連が事及び孔子の居らまく欲し桴に乘て浮まむとのたまひし處の如き我國を指したまひしといふことはさも有なんやと思ひ合する事も侍り少師陽擊磬襄が我國に來れりと云はいかゞあるべき擊磬といふことは樂工の磬を擊ことを掌るにて襄といひしは其樂工の名也さらば此人は磬をうつ事を掌る也それらの人我國に來りたらんには我國の樂器に其物なをありぬべし磬といふものは我國の古より用ひ來りはべらぬ歟其餘我國の樂器はすべて三代の物は侍らずある説のごときも又信ずべからず

謹對　第二條

異朝に所謂先王の樂も周代東遷の後に及び王道と共に衰へしやうに見えたりかの春秋の代に至りても魯は周公の國なりしかば彼國にのみ先王の禮樂は傳はりきされば吳の季札が賢なるも魯に來聘してこそ始て先王の樂を觀ることをば得たりけれ幾く程なくて孔子其國に生れ給ひ其時に及ては魯國にだにも虞舜

の韶樂は絕けるにや齊に於て其樂をば聞ことを得たまひし是は舜の御後陳の國既に亡び其國の公子陳氏の人齊に在しが其先世の樂を傳へける也又孔子衞より魯に歸て樂正く雅頌各其所を得たりと宣ひしは周公の國だに樂すでに正しからず雅頌すでに其所を得ざりしにやましてその餘の國々には殊に鄭衞の音を貴とぶ俗にてありしかば其聲の雅樂を亂る事を惡みたまひ國を治むるにはその聲を放てども顏淵には教させ給ひき孔子失給ひし後いくほどなく魏の文侯の古樂新樂の事を子夏に問給ひし又其後齊宣王の先王の樂と世俗の樂との事を孟子に問たまひし事抔も侍りさらば其代に先王の樂すでに崩れし事推はかりしられぬかくて秦の世に至て先王の法をやぶり給ひしかば此時に及て其禮樂の如き悉にすたれぬ其後漢の高祖世をしろしめされし初め叔孫通といひし博士が漢家の禮樂を制せし時にも秦の樂人によりてぞ宗廟の樂を作りける孝文帝の御時に至て賈誼と云しが奏しけるは漢興て今に二十四年よろしく制度を定め禮樂を興させたまふべしとされど其代の大臣に彼を謗り申せし人ありしかば其議つゐにやみぬ其後又此事を董仲舒といひしが孝武帝に奏し申たりけれど此君其比はひたすらに匈奴を伐せたまふとて禮文の事に御意を留給ふに暇ましまさずされはたゞかの叔孫通の作りし所漢家一代の禮樂とはなりし也漢志を見るに高祖巴渝の舞を見たまひ是武王紂を伐たまひし時の歌也とのたまひ又高祖孝文孝武等の廟に奏する所の文始の舞はもと舜の韶舞也五行の舞はもと周舞也又漢興りし時に樂家に制氏といふものあり雅樂聲律をもて世々太樂官にありしなど云ことありされば秦すでに先王の禮樂をやぶり廢られしといへども漢代の初は尙先王の代を去る事遠からざりし程に其禮樂の如きも尙世に殘り傳はれる所ありし也漢すでにほろび後漢の中興に及ても尙周雅鹿鳴の四詩などいふものは世に殘り傳はれるを晉の荀勗と云が樂改め作れるに至て悉くに盡はてぬ此等の事續文獻通考に見ゆ其後唐の世に至ても鄕飮酒禮に用ひられし鹿鳴四牡などいふ十二篇尙殘り傳はれる樣にいひ傳へたれど實は古樂には非ざる由先儒の論に見え侍り宋の興るに及て先王の樂に御志ある君も代々におわしけれども先王の世を去る事既に千五百年其聲その議つゐに行はれずして今日には及びけりされば始漢の代のはじめ、

先王の禮樂尙傳はれる時にのぞみて其人を得て是を議せしめられんには其禮樂の如き三代に耻る處もあらざるべしそれに叔孫通が如き陋儒して一代の禮樂を制せしめ給ひしこと誠に不學の御あやまりにてはある也又孝文の篤恭にて學廣め給ひし孝武の英明にて儒を崇め給ひし賈誼が才ある仲舒が賢なる其君も其臣も後代には有りがたき御事なる由を申し傳へし然るにかの先王の禮樂尙世に傳はれる代に彼等才賢の人々其君を得まいらせ其事を議し申たりけん事は誠に所謂千載の一會也けるに其議つゐに行はれず萬世の後をして先王の遺風餘響を聞くことを得ざらしめられし事永世に遺れる憾也けりされば異朝の先王の樂は春秋の比ほひに既に崩れ秦天下を併せしに及びて悉くに廢れぬされど猶兩漢の比ほひまでは其餘音遺響は有しかど晋に至てそれも又ことごとくに盡ぬとこそ申すべけれ

謹對　第三條

古しへ三代の時郊廟朝廷に用ひ給ひし處の樂は今もある三百篇の雅頌のごとき卽其樂歌にてある也二南のごときは卽房中の樂歌と申す也秦の代に至て先王の禮樂を悉くにやぶりすてられしかば其代の事をば論ずるに及ばず其後漢の世に及びて制せられし宗廟の樂の如き先王の雅頌にはあらざれども其代にいはゆる雅樂にてあるなり房中の樂に至ては漢家に又其聲ありき（高祖楚の聲を用ひ給ひし由漢書に見ゆ）是より以來魏晋南北朝唐宋元明に及びて一代の禮樂を制して郊廟朝廷に用ひられし處皆漢家の例のごとし皆是其代に所謂雅樂なり俗樂を用ひられしと云事いまだ聞かず

謹對　第四條

古しへ明王の世には一ッに皆禮樂をもて世を治め給ひしかば後世の如くに禮樂刑政相わかれて二ッになれるがごとくにはあらずされば樂といひ樂といふは皆是其代の帝王の制し給ふにあらざるはなし所謂黄帝の咸池顓頊の六莖帝嚳の五英堯の大章舜の九韶禹の大夏湯の大濩武王の大武周公の勺皆是みづから製し給ひし所の樂なりきされば又其代には其事を掌れる人悉くに賢聖輔佐の臣にあらざるはなし舜夔に命じて樂を掌らしめ冑子を敎へしめられしと見えしも

郎十六相の其一人にてありしなり其後周の代に至て禮官の屬に大司樂の官あり中大夫二人をもて樂官の長とし成均の法を掌り 成均は五帝の樂の名也郎黃帝等の五帝の樂も是の官に管す 國の學政をたて國の子弟を合す 樂師とて下大夫の官四人あり是は國學の政を掌りて國子を敎ゆ其餘大胥小胥大師小師幷に樂工等多くの官ありて皆大司樂に隷せり

周の代に至て樂官の長其任すでに輕くなれりといふ說あり其故は虞舜の時には伯夷禮を掌どり夔樂を掌り禮樂の官相竝て敎を掌れり周に至ては樂官の長禮官に屬して其敎を掌りしが故なり是より後代の官制皆周の如く禮官の屬に樂官を置る但し樂官國子の敎を掌るなど云事なかりしかば彌其任は輕くなりたるなり

秦漢より以來奉常の屬官に 奉常は郎古の禮官なり後の代に太常といふこれなり 太樂令丞の官あり又少府の屬官に樂府令丞あり孝武帝の御時又協律都尉の官を置る此等皆樂官たり夫より後の代々或は因り或は革て唐の代に及び隋の官制によりて太常の屬官に太常令一人 從七品下 丞一人 從八品下 樂正一人 從九品下 等の官を置る凡文武の二の舞郎一百四十八人ありき玄宗開元の比ほひ左右敎坊を置て俳優雜劇を掌しめらる是より俳優雜劇の類太常の官には隷せず中官を以て敎坊使となさる 中官は宦者也使は其官長也其後宋朝には敎坊を太常に隷す元朝に至て又敎坊を置き使幷に副使判官一人を置て其事をつかさどらしめらる 本朝の令を按ずるに雅樂寮の屬官に雅曲正儛雜樂等の師と生とありされば本朝の制は雅曲正儛の外雜樂をも雅樂寮に隷せられたる也

又按ずるに本朝の制雅樂寮は治部省に屬す治部省の唐名を禮部とも太常とも云郎禮官也雅樂寮の唐名を太樂署といへば郎唐の官制に同じ但し雅樂頭は從五位下の官たれば唐の太樂令よりは其品秩は高しとみへたり

又樂工を伶官とも伶人とも又は伶倫なども云事は說文を按ずるに伶は弄也伶人は弄臣なり 人君もてあそびとし給ふ所の官(臣イ)なり 又樂官を伶官と云事は古黃帝の樂師に伶倫と云ものあり世々樂師たりしが故に後世多くは樂官を號して伶官と云也 是又一說なり此說のごとくなれば昔の樂師の姓を後代樂官の號とせる也 又俳優侏儒の類をも伶官と云ことは是等の類樂官の屬にも殊に賤き役人たれども 賈誼が策に倡優下賤といひしはすなはち是等の類也 それらも又樂官の屬なればすべては是れを伶官とも申せし也 五代史に伶官傳などいふこれ也 凡樂を掌る官有虞の代には賢相に命ぜられき周代は其官禮官に屬すといへども猶中大夫をしてこれを掌らしめらる後代の制またかくの如しそれにかく其屬官

の樂師樂生のごときはさらに士流に齒する事をゆるされざりし事世の疑ひもあるべけれども古の明王禮樂を以て世を治め給ひし代には樂官の長は皆是天子の治化をたすけまいらせ冑子國子を敎る事を掌れる處なれば其任最重し後王又先王の制によりてその官を設られしかば皆々禮官の屬大夫にてありし也それに隷せし樂師樂生の如きは皆是其伎藝をもて其食をはみ其君の弄び給ふ所の臣にて士君子賢能をもて擧用ひらるゝが如くにあらざればかくは賤み來れる也本朝の古又此のごとし伶官の類衞府史生等の官になさるゝ事は藤氏外戚の權勢日々に重く門族をのみ貴ぶ世となり武人をもて奴隷の如くに思ひ且は時君の專に聲樂を好ませ給ひし代より始れり是則衰世の弊政にて古の制にはあらず

謹對　第五條

東遊と云事とは和儛(ヤマトマヒ)の中にして風俗の部の一ッ也其事の始は駿河國有度郡有度濱に神女降て舞遊ぶ事ありしに起れる由を申傳るなり（安閑帝の御時の事なり道守氏の人其曲を傳しなど申す）さればヌ是を駿河舞とも申き能因法師が

うと濱に天の羽衣むかしきて
ふりそむ袖やけふのはふりこ

と讀しも其事をよめるなり此舞をば駒牽(コマヒキ)又は大原の祭祇園臨時の祭等の時奏らるゝ歟

神か代の八坂の里とけふよりそ
君か千年はかそへはしむる

と云歌は天延三年祇園臨時の祭の時に召れし東遊の歌とぞ見へたるさらば此舞曲は多くは神を祭るに用ひられ其樂歌の如きは時に臨みこれを作らしめらるる事も有ける也是れら江家次第公事根源等の書に見へし處也さらば世に傳はる諸說のごときは悉信ずるに足らずとやいふべき

右謹對

樂對終

正德年號辨

近世大明の人年號の事を論じて正の字を用ひし代々不祥の事也凡其文につきて忌べき字也など申輩有り
　蜀都雜抄正秘笈千百年眼五雜俎等の雜書に見へたり

君子の論にはあらず天下の治亂人壽の長短の事は或は天運にかゝり或は人事によれりいかでか年號の字によりて祥と不祥とある事を得べきや大明の人の申せし所の魏の齊王芳高貴卿公梁の茂陵王金の煬王哀帝元の順帝の如きは皆々其不德により給ひし所也たとひ年號に正の字用ひらるゝ事なしとも是等の人主其國を失ひ其身を滅し給ふ事なかるべしや大明の世に至りても正統正德の代々の事皆々其德の至り給はぬと其政の治亂人壽の長短等年號の字によらざる事共を論じ辨ぜむには其說ことに長くそれらの事申つづけんには誠に無用の辨にして言の費なるべし只條條も聞し召して心得わかち給ふにたやすき證一つを擧て申べき也凡人の幼といひ弱といひ壯といひ强といひ艾といひ耆といひ老といひ耄といふ其稱同じからずといへども只其年の積れるにて異なる人にはあらず又生れて三月にして其名つき二十にして冠して字つく名といひ字といふ方稱する所同じからずといへども其命ずる所は異なるには非ずかの年月日時といふもの其稱同じからずとは申せども時を積て日となり日を積て月となり月を積て年となる事譬へば幼弱壯强艾耆老耄などいふ事の同じからざるがごとくなれども異なる人にはあらずしからば年の號ある事は猶月の名あるが如くにして又これ人の三月の名二十の字ある事のごとくもし年の號に正の字を用ん事の不祥なるべくば月の名に正の字を用ひんも同じく不祥たるべし然るに古聖人の世よりして今の世に至る迄年每の一月を正月と名づけて孔子春秋の法には四始など申て正月を以て歳の始とも申す也正の字誠に不祥ならんにはかの古の代より此かた年每に不祥の月を以て始とする事なれば夫より此かた一年として不祥ならぬ歳といふ事あるまじき也此らはあまりに近き事にしていはゆる睫（マツゲ）を見ざるの論とも申べし

哉もし年號に正の字不祥にして月の名には正の字祥たるべき理もあらんには尋ねきかまほしき事ならずや君子動而世爲二天下道一行而世爲二天下法一言而世爲二天下則一とも承り又不レ知レ命無三以爲二君子一也とも承ればかゝる不通の論など君子の人の申べき所也とは存せず　我朝の年號に正の字を用ひられし事一條院正暦を以て始とす五年にして改元あり猶其後在位十七年　土御門院正治を第二度とす二年にして改元あり猶其後在位十年　後深草院正嘉を第三度とす二年にして正元と改元あり是を第四度とす一年にして讓位有院中にまします事四十餘年　伏見院正應を第五度とす五年にして改元有猶其後六年にして讓位院中に在事十八年　後伏見院正安を第六度とす三年にして讓位也院中にまします事三十餘年　花園院正和を第七度とす五年にして改元二年の後に讓位有院中にまします事二十九年　後醍醐院正中を第八度とす二年にして改元其後在位六年又其後重祚の事有りき　光嚴院正慶を第九度とす二年にして位を避給ひ其後三十年迄おはしましき　稱光院正長を第十度とす其年に崩給ひき後花園院康正を第十一度とす二年にして改元又寛正を第十二度とす六年にして讓位院中に在す事六年　後土御門院文正を第十三度とす一年にして改元有り其後在位三十五年　後柏原院永正を第十四度とす十七年にして改元　正親町院天正を第十五度とす十四年にして御位を　後陽成院に讓られ猶天正の號を用ひられ十九年にして改元其後後陽成院在位二十年院中にまします事六年　後光明院正保を第十六度とす四年にして改元有其後在位七年　本朝にして正の字を用られし例凡十六度不祥の事のみなりとも見へずもしも代々の事を細に論じて其事彼事不祥也など申さば何れの字にか不祥の事のなからざらん其故は改元といふ事和漢ともに或は大喪により或は革命により或は天變地妖水旱疾疫によりて改元の事有れば古より年號に用ひらるゝ程の字として不祥の事に逢ことなかりしといふものは有べからずもし必不祥の事年號の字の致す所ならむ事をうれへば古の代の時のごとくに年號といふものゝなからんにはしかまじきや茉意多禮亞（イタリヤ）喎蘭地（アウランダ）等の人に逢事を得て外國の事どもつぶさに承りしに萬國の內年號を用る國々二三には過ず其餘は皆是年號などい

ふものはなくて天地開闢より幾千幾百幾十年など申す事也されど二十餘年のさきより西洋歐邏巴の國々多くは其君死してそれら世繼の事によりてみだれし國すくなからず去年の冬今年の春も多くの人戰ひ死せしなど申す也これらは又いかなる事のたゝりぬるによりてかくはあるにやさらむ年號なきの國々とても天運のおとろへん事の失ふ所あれば亡び亂れざる事を得難しとは見へたり異朝の代々に同じ年號を用ひし事彼は興り是は亡びし類のいくらも有たとへば永樂の號は初五代の時に張遇賢といひし蠻賊中天大國王など稱して其元を永樂と申せしが程なく亡びぬ其後宋の代に及て方臘と云ひしが帝と稱して永樂の號を用ひしにわづかに八月にして亡びぬ　其後又大明の大宗卽位の後永樂の號を用ひられしに廿六年の實祚をめでたくし給ひき是本朝闕字等の類のごとくかぞふるにいとまあらず又本朝の號の異朝と同じきいくらも又あり譬へば建武の號は後漢の光武漢室を中興し玉ひて三十一年までおはしき　後醍醐院此號を用給ひしかも僅に二年にも及ばずして天下又みだれぬ天暦は村上天皇の年號にして本朝のめでたき代のためしには申傳へし所なれども元の文宗の時此號を用ひられしに僅に五年にして崩ぜられき是等の類も又かぞふるにいとまあらず凡和漢古今の事を併考るに天下の治亂人壽の長短年號の字にかゝらざる事かくのごとし但年號のよきあしきなど申事は其文字に祥と不祥とあるにはあらず其文字を用るによきとあしきとの心得有事也去々年の冬某在洛の日前攝政殿下まで本朝年號の事を論じ申ける事の候しに某申す我朝の今天子の號令天下に行はれ候事は獨り年號の一事のみにて異朝迄も末代迄も傳へ聞ゆべき所に近き比おひの年號大きに古に及ばざるやうに覺候是は取用らるゝ字の餘りに其數すくなく候によりて僅六十字餘歟しかるべき號の得難きが致す所と存じ候へばいかにも用ひらるべき御事の候ものをと申候ひしにされば今も新字勘進の事勿論也とはいへども新字に於ては不祥の例有よしを難じ申すにつきて陳ずる其詞なきが故也と答給られき某罷下し後野々宮故中納言定基卿の文給りしに正德の號某擧申せしに議定の事尤以て身の面目たるよしをしるされき此卿當世の博學強識の人にて彼の大明の人の說などしらざる人に

あらずその陳じ申されし所の理長じぬる上は諸卿も難ずるに其詞無りし事と見へたり

壬辰十一月　　筑後守源君美

右一卷は正德二年冬文昭廟薨御の後正德之年號不吉の儀林家より申出卽大學頭信篤御老中迄書付を以改元有ㇾ之可ㇾ然と申立候處間部詮房其由を筑州に被二申聞一候筑後守此一篇を記して明辨有ㇾ之御老中御聞屆改元の事相止候然共此一篇は林家へ對し候て事端も起候品に候得ば林家への相手は筑後守にて候事理明白引證的當尤至極之義に候得共世間へ流布仕候事は堅く無用可ㇾ仕旨其歲十一月廿九日室直清新介へ賜り候

經邦典例序

大凡學也、始乎致知格物、而終乎治國平天下、平天下之道、雖在自誠意正心而充擴之、然徒善不足以爲政、徒法不能以自行、苟處之無術、則仁心仁聞、徒爲虛器而已、故欲平天下者、在知理亂興衰之幾、典章經制之文、而參伍稽考、詳洽融會、酌之宜而時措之焉、夫知理亂興衰者、有國史、知典章經制者、有律令格式、史者六國而後有日本史、式者貞觀弘仁而後闕其書、如彼唐朝、史有通鑑、式有通考、上下數十百年、可一閱而盡矣、不亦善哉、此我

天朝傳學自漢唐、其如朝□(庭カ)之典章經制、大抵原神代之禮、因季唐之制、而損益之、貞觀延喜之盛也、郁々乎其文者也、惜哉其方策典籍、泯滅而不傳、不無遺憾焉、典章無成書、稽古者病之、是以某常欲倣杜氏通典、馬氏通考、門分彙列、爲一代之大典焉、屬囊匱書刀薄末米間獲見新井白石先生所著經邦典例、序歷世沿革、粲然可見、深契素志、善□（○南按踊躍歟）再三、其爲序也、曰田制、曰貨幣、曰車輿、曰冠服、曰樂舞、曰職官、曰方策合編凡七篇、（節山按有方策合編十卷今行于世恐非經邦典例中）有序而逸考、往時、賞（○南按嘗歟）得冠服考樂舞考二篇、其他無間有殘篇、想未及脫藁而其傳書不全乎、深可痛惜矣、卽繕寫而藏于篋笥、他日欲繼先生之志矣、或曰、三代之典章、善美勿論而已、漢唐亦有大可法者、如言

天朝之典章、今欲議其建置、則非倣三代漢唐之軌轍、一一改之制度則不可也、應之曰、理亂興衰、不相因者也、典章經制、寔相因者也、不泥古以非今、不安今以廢古、學者不可不知也、夫子曰、殷因夏禮、周因於殷禮、所損益可知也、三代之際、聖王之德、莫是爲盛焉、然其典章經制、莫不因之前朝矣、夫子謂顏淵曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、又曰、拜下禮也、今拜乎上、泰也、雖違衆、吾從下、由是觀此、雖盛周之典章、郁郁乎其文也、然未可謂之盡善美也、亦似有可議者矣、蓋人情事變不得已也、今欲槩倣三代漢唐之軌轍者誤矣、是不通之論也、竊嘗以爲爲學之方、讀經講道者上也、其次盡知當今之制度、察祖宗設制之「通大經識大本」（○南溪按六字當在上文讀經講道之下）、所從來、推而上之、詳辨國史律令格式之文、而後取通鑑通考會典等書參考之、知和漢之制異而道同、

萃古今之時異而義同、用天之時、因地之理、察人之情、通事之變、探其源觀其流、其可改與不可改、其有弊與無弊、稽之聖經、詢之衆賢、參稽互察、研究致精、所謂建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、其自信如此、而後用可以施之事業也、其斯謂之始乎致知格物、而終乎治國平天下也、先生名璵而君美其字也、任筑後守、事文廟而遭遇殊異、入侍經幄、出參大政、博聞強記、高才令德、據案弄筆、而文章驚韃靖之眠、垂紳正笏、而談鋒挫三韓之銳、至殿庭稱爲帝座後一小星焉、惜哉其不能終所學也、又近世之人傑也、某有慕先生之爲人、及讀經邦典例竊有感焉、因併平生之持論、聯書于卷端云、

寛政二年庚戌五月十五日　藤原近藤守重書

經邦典例卷之六

冠服考上

推古十一年十二月始制冠位、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智、幷十二階、幷以當色絁縫之、項撮總如囊、而著縁焉、唯元日著髻華、注云、髻華讀云于孺、

太古冠制莫聞其詳、蓋古者被服皆飾用玉、太古伊弉諾神之冠、見舊事古事等書、其制莫聞、蓋古者被服皆飾以玉、玉髻者首飾也、頸玉者頸飾也、手玉者手飾也、足玉者足飾也、日本紀釋引本朝式、以爲皆古遺制、即是、冕服有久矣、應神王冠、歷代天子大嘗祭服則用之、事見古事談、據史、雄略十四年一月、吳使來聘、根使主儈焉、其玉鬘美不可言、即是故皇子大草香所寶、名曰押木玉鬘者也、皇子應神之孫、履中之子、其以爲寶蓋亦冕也、覆板謂之押木垂旒、謂之玉鬘、乃古今異言耳、冕制、以板覆其上者、俗呼爲押木形、乃古遺言也、日本紀注云、又名立鬘、又名盤木鬘、猶後有立玉居玉押盤等制也、史亦載、雄略臨崩、以朝野衣冠未得鮮麗、深爲其恨、蓋謂、尊卑之服其文未備耳、非謂無其制也、及推古世始有品制、若其冠制、則南史以爲幘是也、髻華首飾也、其衣制、史無明文、亦未之聞、

十三年閏七月、命諸王諸臣俾著褶、

令義解曰、褶者所以加袴上、故俗云袴褶也、源順引本朝令讀云宇波美、蓋謂其覆袴上也、據令、皇太子禮服、深紫紗褶、親王諸王深緑紗褶、諸臣五位已上皆深縹紗褶、即今諸臣禮服所加袴上者、字通以爲禮衣、有襞拍曰褶、是也、俗呼爲裳、非也、禮服之制、唯有紗褶耳、○按褶、日本紀釋讀志比良、清家本讀比良美、又讀比良於比、未知孰是、源順博識且引令、讀云宇波美、蓋必有據矣、

十九年五月五日、藥獵於菟田野、是日諸臣服色皆隨冠色、各著髻華、大德小德並用金、大仁小仁用豹尾、大禮以下用鳥尾、

藥獵謂採藥草也、古俗凡取物皆謂之獵、蓋方言也、髻華首飾、凡花鈿及羽毛之飾皆謂之也、豹尾疑誤、當作貂尾、後之冠緌即其遺象也、古言凡飾謂之于孺、髻華首飾也、金鈿寶飾也、雲珠鞍飾也、舊讀皆同、日本紀釋曰髻華者鈿也、非、按韻書曰、鈿金華飾、又曰以寶飾器、羽毛之屬豈謂之鈿乎、蓋其訓相同故訛耳、

孝德大化三年、是歲制七色一十三階之冠、一曰織冠、有大小二階、以織爲之、以繡裁冠之緣、服色並用深紫、二曰繡冠、有大小二階、以繡爲之、其冠之縁服色並同織冠、三曰紫冠、有大小二階、以紫爲

之、以織裁冠之緣、服色用淺紫、四曰錦冠、有大小二階、其大錦冠以大伯仙錦為之、以織裁冠之緣、其小錦冠以小伯仙錦為之、以大伯仙錦裁冠之緣、服色並用直緋、五曰青冠、以青絹為之、有大小二階、其大青冠以大伯仙錦裁冠之緣、其小青冠以小伯仙錦裁冠之緣、服色並用紺、六曰黑冠、有大小二階、其大黑冠以車形錦裁冠之緣、其小黑冠以葵形錦裁冠之緣、服色並用綠、七曰建武初位又名立身、黑絹為之、以紺裁冠之緣、別有鐙鈿、以黑絹為之、其冠之背張漆羅以緣、與鈿異其高下、形似蟬、小錦冠以上之鈿雜金銀為之、大小青冠之鈿以銀為之、大小黑冠之鈿以銅為之、建武之冠無鈿也、此冠者、大會饗客四月七月齋時所著焉、

織莫聞厥詳、書禹貢織文、孔氏曰、錦綺屬六、書故織采為文曰錦、織素為文曰綺、即今據文有錦而無綺、所謂織者是非織素為文之謂乎、古者尚白、蓋太素之冠所以為貴也、後俗此間所出文綾謂之織、唐國所出謂之唐綾、非古也、繡刺綵為文也、綠冠卷所謂武也、古俗名謂之押髻、今俗謂之幾此、即錦織綵為文也、伯仙當作博山、陸翽鄴中記有大小博山錦、即此後又有大山冠小山冠、謂錦有山紋也、直緋猶言正赤也、紺深青揚赤色綠青黃間色車形團花菱形菱花皆謂錦紋也、冠背張漆羅、猶幘有纚、後之玉冠有其遺制也、鈿寶飾也、蟬首飾也、鈿讀云于璠、古言飾也、韻會云、鈿用寶飾器即此、蟬讀如飾、擦字古者男女皆笄揷搔為飾、冠有櫛形、其遺象也、虞書曰、日月星辰山龍華蟲作會、宗彝、京山郝氏以謂、華即花字、蟲二、宣和博古圖、三代彝器有垂花蟬紋等飾是也、漢官儀曰、侍中周官也、加金蟬冠、亦猶古彝器蟬紋也、此方云蟬、唯借其字以為冠飾耳、實非有附蟬制也、

大織已下以至建武、凡十三、皆禮冠也、鐙冠乃古辨制、黑絹為之、猶周之委貌、謂之鐙冠、言形似耳、其遺象即今烏帽子也、鐙古讀為壺、即後之壺鐙也、南京法隆寺寶有一古鐙、渉鐵作之、形如烏帽子狀、言是上宮太子之物也、毛氏詩傳辨所以會髮、釋名云、辨如兩手相合抃時也、後漢輿服志委貌冠皮辨冠同制、長七寸、高四寸、制如覆杯、前高廣、後卑銳、委貌以皂絹為之、皮辨以鹿皮為之、古時烏帽子制僅可覆髻、後稍廣大、而兩手相擊之狀宛然尚存、抃本作弁、通作辨、釋名以謂辨名出于抃、而其取象於此、未聞其義、蓋辨之為象昭其敬也、周禮大祝辨九拜以享、古祭祀其四曰振動、疏曰、邦大夫云動、讀為董、振董以兩手相擊也、享獻也、古讀為俯、俯勸尸食而拜、釋文曰今倭人拜以兩手相擊如邦大夫之說、蓋古之遺法、夫齊明盛服以承祭祀敬之至也、古人因取其象以制之矣、東方之俗凡食飲膳羞與擊手而拜、古言同辭、又太古之世冠神名曰飽咋、蓋亦謂祭而神饗之、故取其辭飽之義也、江師以為鐙冠即今之冠、非也、若今之冠乃古之漆沙冠也、

天武十三年閏四月詔曰、男女並衣服者、有襴無襴及結紐長紐任意服之、其會集之日著襴衣而著長

紐一、唯男子者有二圭冠一、冠而著二括緒褌一、女年四十以上髮之結不レ結及乘レ馬縱横並任レ意也、別巫覡之類不レ在二結髮之例一、

襴下有二襴緣一也、紐絲也、一曰結而可レ解者也、襴衣卽襴衫也、圭冠、私記曰、今之烏帽子也、褌袴也、括緒褌蓋後之絹袴也、襴衫、源順曰、楊氏抄讀爲レ裳、襴衣、漢語抄讀爲二直衣一、著二襴衣一卽襴衣也、直衣猶レ言三改爲二之衣一也、凡大嘗新嘗小齋人等、青摺布衫皆有二緋紐一、乃古之盛服也、襴衣而長紐、蓋其改爲之始乎、或云、小齋親王及五位以上垂二紅紐一、已下結レ紐、卽長紐結紐之制已、又式有二白橡襴衫藍薄色襴衫一、卽今所レ謂夏冬之直衣也、圭舊讀二波斯波一、未レ詳、古之冠制凡二、鐙冠也、圭冠也、猶三周之有二皮辨韋辨一也、鐙冠前高廣後卑銳、圭冠上圓下方、其形如レ圭、周禮曰、凡兵事韋辨、服二圭冠一、又然也、但其常服則折疊以爲二銳頭一而用レ之、後俗因呼二鐙冠一爲二立烏帽子一、圭冠爲二折烏帽子一、褌舊讀與レ袴同、卽袴也、本朝式絹袴裁レ絹爲レ之也、裁レ布爲レ之謂二之奴袴一、呼レ布爲レ奴、卽古言也、獵時所レ用人謂二之狩袴一、皆是古絬緒褌之制耳、源順引二漢語抄一、奴袴爲二絬狩袴一、恐非、又讀爲二刺貫袴一、古者括緒制刺二其袴口一、以レ緒貫レ之、猶二衣袖之緒一、故有二此名一、後來屈二其下邊一、自レ外向レ内夾縫如レ囊、貫以二其緒一、呼爲二籠絬一者、非二古制一也、

按袴與レ褶非二是一物一也、袴脛衣也、褶襲袴上之衣、所三以乘レ馬縛レ袴不二舒散一也、釋名褶襲也、襲二袴上一之衣也、隋禮儀志、袴褶縛レ袴不二舒散一也、中華古今注云、袴蓋古之裳也、周武王以レ布爲レ之、名曰レ褶、敬王以レ繒爲レ之、名曰レ袴、但不レ縫レ口而已、至二漢章帝以後一、爲レ之加二下緣一、名曰二羞褶一、卽袴之不レ縫レ口也、晉輿服志袴褶之制、綴二紫標一、標者褐𧜟所レ謂飄帶、蓋所二以縛一レ袴也、褶謂二之袴褶一、卽所三以加二袴上一、故名レ之也、隋禮儀志、唐輿服志、及唐令開元禮、曰レ褶、曰レ袴、曰二袴褶一、文有二異同一者、謂二緋衫一大口袴則不レ用レ褶也、若レ謂二絳褠衣緋褶大口袴一、則用二袴褶一也、謂二黃布袴褶青布袴褶之類一、則總二言之一也、

（此間缺文　○南按此處蓋引用衣服令武官朝服之條文次缺文亦同）

金銀裝腰帶、古之鞶帶、卽後之金銅鞢𩋾革帶也、隋制、唯天子之帶有二十三環一、至二唐高祖一、一品二品銙以レ金、六品以上以レ犀、九品以上以レ銀、庶人以レ鐵、太宗時又命二三品金玉帶、銙十三一、四品金帶銙十一、五品金帶銙十、六品七品皆銀帶銙九、八品九品皆鍮石帶銙八、流外及庶人銅鐵帶銙七、天朝之制五位以上金銀裝帶、以下皆烏油腰帶而已、後因以二犀玉一爲レ飾、而更レ有二金銀裝帶者一、未レ知三是制復起二何時一也、詳見二于後一、

（此間缺文）

桃染退紅也、衫布衫也、桃染猶レ言二桃紅色一、或亦作二退紅一、退紅唐世染色、退與レ褪同、化謝也、卽是染二殘紅花滓一爲レ之者、淺紅色也、朱抹額以二紅絹一䄊二其首額一也、古今注曰、昔禹塗山之會、忽大風雷震、雲中有レ服二金甲及鐵甲一、不レ被レ甲者以二紅絹一䄊二其首額一、禹問レ之、對曰、此抹額蓋武士之首服、乃是海神來朝也、一云後至二秦始皇一巡狩至二海濱一、亦有二海神一來朝、皆戴二抹額一、徘衫大口袴以爲二軍容禮一、至レ今不レ易二其制一、

按、冠者冕辨總名也、歷代異レ制名亦不レ同、上古之冠其制莫レ聞、逮二乎推古始一制二位冠一、其製則北史所レ謂以二錦綵一爲レ帽也、然金華貂尾鳥尾等飾、猶二金貂鶡冠之制一也、鐙冠皮辨類也、圭冠韋辨類也、

若二此二冠一則其制最古也、至三天武始一廢二位冠一用二漆紗冠一、文武更始制レ冠、若二其形製一史皆無レ文、不レ可二得而考一、唐書曰、朝臣眞人冠進德冠、其頂爲レ花、分而四散、蓋謂二禮冠一也、朝臣眞人粟田朝臣眞人也、文武大寶中爲二聘唐持節大使一、事詳二于史一、社陽雜編、貞觀八年太宗賜二貴臣進德冠一、開元禮曰、進德冠五品以上附二山雲一、琪數準レ辨、以レ金飾二梁花趺一、三品以上加二金絡一也、又曰辨制玉琪、一品、九琪、二品八琪、三品四品六琪、五品五琪、六品以下去レ琪、美嘗觀二古禮冠圖一、蓋永治中所レ圖者也、其爲レ圖者凡十七、其二則其制頗異、餘皆與二今制一略同、未レ知二古制又如何一也、禮冠復有二進賢三梁冠者一、史亦不レ載、蓋古之遺制也、凡卽位及釋奠日、典議典贊博士等官所レ戴三梁冠、前卑後高、俗呼爲二烏帽一者、隋志所レ載進賢冠、古緇布冠遺象耳、漢平帝元始五年、令二公卿列侯冠二三梁一、二千石兩梁、千石以下一梁一、董巴釋曰、進賢冠如二緇冠一、文儒之服也、前高七寸而卻、後高三寸而立、卽謂レ之也、

皁羅頭巾、乃古之頭巾也、皁羅冠蓋亦武冠也、頭巾武冠並見二于前一、古者頭巾謂二之四脚巾子一、挿髻皁羅襆頭兩帶繫レ後而垂レ之、折レ帶反繫二頂上一、卽今童子初冠、猶存二其制一焉、美嘗觀二巨勢公持所レ畫節令圖、及僧賴壽所レ寫小野道風像一、皆其假脚垂下耳、冠禮始加之冠、俗呼爲二放巾子一、卽此、

（此間缺文）

一富及一部二部未レ詳、綺、源順引二蔣魴切韻一云、似二錦薄一者也、釋名云、綺棊也、謂二方丈如レ棊也、富當レ作レ窠、窠富二字相似、故訛、窠音科、亦通作レ窠、唐始制親王及三品服、大科綾羅、色用レ紫、五品以上服小科綾羅、色用レ朱、科後作レ窠、卽袍文也、天朝之制蓋亦如レ此、式有二一窠二窠等綾一、又有二不レ聽レ用獨窠錦之制一、凡織文大者相去自遠、小者相去自近、錦抄云、當時攝關袍紋、或有レ窠、或無レ窠、凡任二大臣一已後著二遠文袍一、卽是古之遺制耳、一部二部猶レ言二一重二重一、卽謂二袍文一也、部亦作レ倍、二字音近、古俗通用、

（今按引衣服令）

諸臣禮服、一位禮服冠、深紫衣、牙笏、白袴、條帶、深縹紗褶、錦襪、烏皮舃、三位以上、淺紫衣、四位深緋衣、五位淺緋衣、以外並同二一位服一、美嘗觀二永治中所レ圖諸臣禮服制一、其服黑紫窠紋朱裏、制如二朝服一、而方領廣袖俗謂二之大袖一、中衣亦黑紫花紋朱裏圓領、而袖狹形直、其制如レ襦、俗謂二之小袖一、褶深縹也、長三尺許、博五尺强、襞積細折下齊一尺餘、橫縫一線路、腰有二絡帶一、俗謂二之裳一、雙綬澗綠匾條兩末有レ綾、其一長一丈三尺、其一長四尺三寸、按二錦抄一、諸臣禮服、有二橡、麴塵、紫、三色一、中衣亦各同色、多用二唐綾一也、袴皆如二常褶一、淺縹爲紗綾疊綾爲レ之、施以二綵畫一、乃是當時之制也、今制亦略同レ之、唯其紗褶以二魚畫於下齊一、蓋年魚也、古未二之聞一、其義亦未レ詳、

衣服令云、皇太子禮服、禮服冠、黃丹衣、牙笏、白袴、白帶、深紫紗褶、義解云、褶者所三以加二袴上一、故俗云二袴褶一也、錦襪、烏皮舃、義解云、烏皮者、皂皮也、舃者高鼻履、禮服者、大禮大甞則服レ之、猶二唐之冕服一也、皇太

子禮冠、其制未レ聞、黃丹服色、用二紅花支子煮水一染、凡服色質料詳二見于式一、後皆倣レ之、牙笏以レ象爲レ之也、南京法隆寺藏二上宮太子象笏一、長一尺一寸五分、厚三分半、其上兩角各去二五分一上圓下方、如二唐初制一、所レ謂故笏差狹不レ類二今笏一、蓋此古制也、源順引二四聲字苑一曰、笏俗謂二之尺一、長一尺六寸、濶三寸、厚五分、未レ知大寶之制亦如レ此乎、

白石建議一（愚案第一）

庶政建議

世人近年以來の事體を論じ候所を承候に天下の上下大小財用とぼしく成來り候事は或は金銀の品あしくなり或は運上の事出來り此等の事につきて諸物の價高くなり或は地震砂降候等の變により或は風俗結構の事多く或は男女召仕の人少く又此等の事につきて武家の面々困窮に及び候等の說候歟此等の說皆々無﹅其謂﹅事にはなく候へども細に其理を論じ候はゞ天下の上下大に財用とぼしく成來り候とは申すべからず武家の財用とぼしく成候とは申すべく候其故は金銀の品善惡を論じ候事など武家におゐて一向に其沙汰なき事にて此事申出し候ものは兩替仕る者共金銀の品に次第をたて兩替の事につきて其利をもとめ候はんための姦計にて候を商人共も其說にまどひ候て終に天下の難儀とは罷成候き運上の事出來候ひし事誠に可﹅然事にはなく候へどもこれも運上を出し候ほどの者共はその賣出し候物にそれほどの價を增し候へば其利をうしなひ候と申す事にもあらず況やそのゝち運上の事を停止せられ候ても其價を減じ賣出し候事もなく候へば此等の事によりて諸物の價高くなり候事は商賣人のためには皆々其便よろしき事共とは罷成り候歟地震砂降候事誠に奇代の大變には候へども關東の國々のみ其災にかゝり候てその國數もさのみ多き事にもなく候き但し諸大名の御手傳又は砂を除候役金など國々にかけられ候へば其災遠き國々にも及び候はぬとは申すべからず候へども此役年々にかゝり候と申すにもあらずすでに年久しき事にもなり候へば今に其難儀あるほどの事にもあるべからずたゞ其時御手傳仕られ候衆中又は地震砂降候ために所領の地荒廢候人々は其害いまだ相止には及ぶべからず候此等の事につきても職人賣人又はいやしき人夫類の類は其活計を得候もの共すくなかるべからず風俗結構の事多く成來候事尤以て不﹅可﹅然事に候へども其物どもつくり出し賣出し候に就ては職人賣人其利潤は多く可﹅有﹅之事に候男女召仕の人

少く候事に至ては近年以來風水旱等の大災もなく國國の百姓共の手に入來り候金銀の數も多くなり候て妻子從類相集り飢渴のうれへなき故に候へば此事におゐては太平の日久しく候しるしにて難レ有御事とも申すべく候諸物の價は年々に增加り候へども乞食非人等のものゝ見え來らず事は申すに及ばず奉公に出し男女も數すくなく候て金銀の善惡にはかゝはらずたゞ其數の多くなり候事世のためにその利益なきにもあらず候事其證すでに分明に候歟しからば近世の事體を論じ候はんには天下四民のうち百姓職人賣人こと〴〵く皆其利を利とし其樂を樂み候て武家方ばかり此難にかゝり候とは申すべく候但し又武家の面々貧窮に及び候事も又その〳〵其品同じかるべからず候天人地の三才始り候より此かた人の命數には貧富同じからず候事すなはち貴賤同じからず候事のごとくに候へば人の貴賤の品相たちて有レ之候はんうちはその貧富の品も相わかれざる事を得べからず候しからば又武家の財用とぼしく成來り候とばかり申候はんもいまだ至當の論とは申すべからず候今の武家の面々の中にも財用とぼしからぬ人も財用とぼしき人も相半し候べき歟但し世中に貴き人の數さのみ多からず候を以て推し量り候へば財用とぼしき人の數は猶多かるべき事には候況や財用とぼしき人の中にも其心も正しく其行もとゝのほり候へども天生命運つたなく候て貧窮に苦しむ人も可レ有レ之候多くは其心正しからず其行ひ修らずして財用つきはて候人も可レ有レ之候又其人の心にはよからぬ事と存じ候も世の風俗になり來り候事はをのづから其分限に過候事をもなし行ひ候故に財用とぼしく成候も可レ有レ之候此等の事を存じめぐらし候に世人の申す說或は其一を知りて其二を知らず或は似たる所を見て其眞を見ず一人其說を申出し候へば萬人これに同じ候ごとくにて多くは其事情にあたらぬ事も有レ之候と申すべく候歟然れば今日の御沙汰におゐてはただ武家の難儀を弛られ候御事尤これ其御急務とは申すべく候但しそれも天生貧窮の人におゐてはいかなる御善政候とも其人の天命をまぬかれ候事はかなふべからず候世の風俗にひかれて貧窮に及び候人と其行修まらずして貧窮に至り候人とは其難義を弛られ候御事御政道によるべき御事に候歟これによりてそ

の事ども某愚存の及び候所共其大體をしるし候て差上候しかれども今度御書付を以て御旗本衆中各其存寄を申上らるべき由被仰出候へども其申上られ候事どもたとへば病者の醫師に對し候て其病をも語らず其脈をも見せ候はずしてたゞ此病を療し候へと申す事のごとくにて其御役につき其格式につき候て無用の費等有之候事などはつまびらかに申す人なく候へば某が愚存の事ども其病に相當り候はん事とは存せず候但し又某が愚存の事ども某私の才學によりて申上候事共には候はず皆是御當家御代々の御法制の事共近世に至て其御法制やぶれ候所々を擧論じ候事にて候へば當時の宜しかるべき所をば御議定の上其一二の事をも御採用に及び候はんには尤以て大幸の事に存ずべく候又　御代々の間これらの御法制相備り候ひしも今に至ては其形もなくやぶれうせ候事につき候てはいかさま其故可有之御事に候へば今より後もたとひ其御法制の事ども擧行はれ候とも又々やぶれうせ候事もとのごとくにも可有之候歟いかにもして其御法の久しくたちおほせ候はん御事は上に御入候御方々の御心に有之べき所に候へば此事におゐては某敢て論ずべき所には無之候

一在番衆幷遠國御使相勤候衆中召つれ候人數持せ候道具の事附在番中番頭組頭衆振廻等の事

御旗本衆中御奉公之儀に付分限不相應の物入有之候事は在番幷遠國御使等の事を以て第一の事と可仕候但し在番の中にも二條大坂駿府とは道程の遠近御合力米の多少も有之候へば其差別可有之事に候遠國御使の中にも高家衆京への御使番頭衆三家等の御國々の御使御使番衆大坂御目付諸國巡檢所替の引渡し其外遠所の御使等御徒頭宇治への御使御番衆大坂御目付諸國巡檢或は御普請場の奉行此外大目付衆御勘定奉行衆御目付衆等不時の御用にて遠國へ被差遣候事皆是其御用の筋も其御役の格も同じからず又相定り候御役不時の御使等の差別可有之事に候此外又京大坂駿府奈良堺伊勢等の奉行或は御役替の節或は參勤之時道中往來の儀も有之長崎奉行日光奉行等年々の交替これら皆々遠近懸隔の差別も可有之事に候

然れば在番幷遠國御使と申候ても其差別有レ之事に候へば一例を以て論じ難く候へ共大御番御書院番幷高家衆御使番御徒頭衆の事は其御役に就て相定りたる事に候へば尤以て他の例に准ずべからず候まづ二條大坂在番の事番頭衆各其身上同じからず組頭衆も又其身上同じからず候然るに世に申ふらし候所は大番衆の事は或は十萬石の大名の格式に候或は城主の格式に候など申す事にて其身上の大小によらず召具し候人數ももたせ候兵具も皆々萬石以上の格式に准じ在番の間の諸式も其身上の大小を論ぜず皆々古來の例に任せられ組頭衆の事も組頭の格式と申す事有レ之候てこれも其身上の大小に係はらず其例に准じ候事も相聞候此事たとひ古來の例年久しき事に候とも尤以て不レ可レ然事に候歟其故は當時につきて論じ候はんにも大番頭の中萬石以上の人有レ之候三四千石の人も有レ之候たとへば三千石と一萬石との人を引くらべ候に其身上すでに七千石のちがひ有レ之候三千石の人在番の時御合力米三千石を被レ下候とも彼是合せて六千石には過ず候一萬石に引くらべ候へば猶四千石のちがひ有レ之候ましてや此萬石の人も在番の時には御合力米一萬石を被レ下候事に候へばたがひに本知と御合力米を合せて引くらべ候はんにも六千石と二萬石猶又一萬四千石のちがひめ有レ之候然らば三千石の人萬石の人と對揚し候て諸事に就て相同じきやうにせられ候はんにはたとひ一倍の御合力米を被レ下候ともその費の半をも償ひ候には及ばず候いかでか難儀に及ばれぬ事の候べきや組頭衆も又此例に比すべき事に候駿府在番の事は其道程も近く候故に御合力米も二條大坂の半に候に寛永十五六年の頃迄大番衆の相勤められ候あとを御書院番にてうけつがれ候事に候へば諸事の式は二條大坂の例にさのみかはり候事もなく候へば御合力米を以て其費を償ひ候事は猶々難儀の事と相聞え候これたゞ其大要を擧て論ずる所にて此外細なる事どもの物入等に至てはこと〴〵く書しるし候には其事長く候へばまづ此一事を以て其餘をば推し知るべき事に候むかし大坂の御陣事終り候後元和二年二月　當家の御軍役を定められそののち又寛永十年二月に御軍役の事を改め定められ

候より此かた御上洛日光御社參等の供奉の次第皆皆御軍役の御定を以て斟酌せられ候き在番の人數の事においては別に其御定法有レ之候上は番頭組頭皆々在番の御定によりて斟酌可レ有レ之事は正當の理と申すべく候歟もし番頭組頭は御番衆の例に准ず可らず候はんにはたとひ其人數兵具等多く相具し候とも各其身上に應じ候御軍役の外に增加ふべき事にはあらず候然るに其分限にかゝはらず大身小身皆々一例に可レ有レ之事は尤以て不法の事と申すべく候歟但し只今に至ては其御役の格式のごとくになり來りたる事に候へばたとひ其志有レ之候人々も私には改めがたきことにも可レ有レ之候へば上の御沙汰無レ之候ては此舊弊改る事あるべからず候高家衆御使の事他の例と同じからず道中の御扶持方等不レ被レ下候御事と承及候此人々少身には候へども高家の人々に候へば御暇の時被レ下候物など他の御使の例に同じからぬ御事も候故に道中御扶持は不レ被レ下候歟たとひいかなるいはれ候とも少身の人々往來の路費多かるべき事に候へば其分限に應じ道中の御扶持方は可レ被レ下候はん歟

（頭書）御上洛の時誰々にも御扶持被レ下候故にて候

御使番御番衆大坂御目付の事御徒頭宇治御使の事等御暇の時に被レ下候物も有レ之或は大坂滯留の中の御合力米或は道中往來の御扶持方人馬等被レ下候事皆々その被レ下候物共にて御役相勤るべき古來よりの御定と見え候へばたとひ近年以來諸物の價增し加り候とも召具し候ものどもを始て被レ下候御扶持方の人數つもりに任せ諸事の式大身少身其分限に相應じ候やうに心得られ候はゞ只今迄のごとくの物入は有レ之まじき事にも候歟これも大體其分限にかゝはらず私に其御役の格式等の定まりたる例も有レ之事と相聞え候これ又其謂なき事と申すべく候歟但し大名の所替等の時に差つかはされ候御使の事に至ては御軍役の本役にしたがはれ候はん事時宜においては可レ然事に候上は自今以後此事に限り候ては御暇の時被レ下候物などよのつねの御使より增し被レ下候て可レ然御事にも可レ有レ之候歟其餘諸國巡檢等の御使の事は皆々上より被レ下候御扶持方に准じ各其分限に踰過候事無

レ之様に　上の御沙汰もなく候はんにはこれ又私に相改られ候事かなふべからず候番頭衆御使の事これ又御扶持方被レ下候御例無レ之由承及候これも自今以後は御扶持方人馬等其分限に應じ被レ下候はん事可レ然御事に候歟其餘不時の御使を承り候衆中誰々も其分限に隨ひ上より被二下置一候道中御扶持方定めの人つもりの法を以て人數兵具等召具し可レ然事に候遠國の諸奉行交替參勤の事道中御扶持方人馬等は不レ被レ下候とも人數兵具等引具し候事は其分限につきて被二下置一べき道中御扶持の法に准じ候はん事これ又可レ然事に候但し長崎奉行の事は他の奉行所に准じ難く御役料も過分の事に候へども與力同心のごとくなる者共召つれ罷越候上は自分の馬廻りの人數におゐてはこれもをの／＼其分限にしたがひ御軍役のごとくに召つれ候はんには人すくなきには至るべからず候すべて此等の事共某恐存のおよぶ所別本にしるし差上候事

一御旗本衆中江戸廻召つれ候供人の數の事其人の心により候て分限よりは多くもつれすくなくもつれ候事とり／＼には候へども古來よりして分限に過ぎ人多く召つれ候方は其衆中多く有レ之候事と相見え大猷院樣御政務始寛永九年七月に御定有レ之其後また嚴有院御代寛文六年七月にも御定有レ之候き此御定兩度に及び候うち寛文の御定は寛永の御定に引くらべ候に猶々輕く相見え候歟然るに近年に及び候ては寛永の比には承も及び候はぬ對の挾箱かつは箱おさへ足輕など申すものも出來候へば又々人數多く罷成り諸家中の者もさき供おさへ對の挾箱たてがさなど申す事多く見え來り候これらは倭漢のいにしへより禮制にそむきたる事に申傳候事勿論に候へどもせめては世もゆたかに人も富み候はんにはそれ口の事とも申すべき事に候へども近年以來男女の奉公仕るものも年々にすくなくなり候て町々の事は申すに及ばず辻々の番所迄に若黨足輕以下の日傭の者共多く集り居候事共少身の面々つねに下人かゝへ置候事なりがたき故にやとひ人仕候と申すばかりには無レ之しかるべき身上の人々も下人等年々の出替し又は時々

のはやり病など有レ之時に人少く候時は大半はやとひのものを召つれ候故と相聞候古來も如レ此之事に似たる事も有レ之故にや寬永の御定の奥書に此定之儀人をも吟味し相拘ゆべきために被ニ仰出ニ候由を載られ候き打見之所人多きやうに仕候はんとやとひの人等召つれ候はん事は武士の家を出候時に供人引つれ候はなに事の備に候と申す事の本意をも失ひ候て寬永の御旨にも相たがひ不レ可レ然事共に候又寬文の御定もすでに寬永の御定よりは其數を減ぜられ候上は此後は寬文の御定よりは猶少しも其數を減ぜらるべき事時勢におゐて相應の御事と可レ申候歟但し寬永の奥書には諸役人は制限にあらずと有レ之寬文の奥書にも番頭奉行役人は制外たるべしと有レ之候乍レ恐此事におゐては某愚存には難ニ心得ニ事に候すべて天下の法と申すものは上にたち人々よりして其法を守られ下に有レ之ものどもの手本となられ候てこそは其法はいつ迄も相改らざるものと承及候しかるに寬永の時も如レ此の御定に候故にわづかに三十四年の間に其御定もやぶれ候によりて重て寬文の御定も出候へどもこれ又わづかに四十年にも及ばずしてその御定もやぶれ來り候き元和寬永兩度の御軍役の御定にも御上洛日光御社參等供奉の人數御定にも御役人と御役無レ之人とによりて其差別有レ之候御事は無レ之候上はすべて此等の事も御軍役の例に准じ各其人の分限によるべき事にて御役のありなしによりて其差別あるべからざる事に候もしさもあるべく候はゞをのづから人々の心も信服し候て此法永くたちおほすべき御事に候寬永寬文以來如レ此の御定も有レ之候故により候事にも候歟近年以來世に申ふらし候所は芙蓉ノ間御役人衆中はさき供引馬對の挾箱おさへ足輕引ぐし候格式に候など申す事にて千石にもたり候はぬ衆も其例に准じ候故に此度なども其身少身の事を歎き申され候御役人も有レ之候歟芙蓉ノ間御役人供人の御定有レ之由の御事某いまだ承も及ばず候へどもすでに當時の格式のごとくに成來り候上は少身の御役人難義の事其謂なしとは申すべからず候その中町奉行の御役は往來の路次の間或は猥籍の者強訴の輩に行逢候事も可レ有レ之候へば供人すくなく候事不レ可レ然

候へども古來よりの例有レ之候て其組の同心五六人づゝ馬乘物の前に引ぐし候事と覺候きこれもむかしは袴をもきせず候て召ぐし候ひしかば町奉行の其組の者共引具し候と打見え候てたとへば本朝のむかし巡察彈正檢非違使などの往來し候にそのかくれなきごとくにて世の鎭にもなり候ひしに今はいつとなくよのつねの歩行侍を召つれ候儀のごとくにてふる□□すがたもうせはて候歟此外の御役人供人あまためしつれずしてかなふまじきいはれ某更に心得がたく御軍役人つもりの御定を見候に七百石以上馬二疋（一疋は乘替の料今の引馬に准ずべき歟）千三百石以上挾箱二つと見え候へども 日光供奉の 御定を見候へば千石以上馬二疋千七百石以上挾箱二つと見え候きこれ御陣の時とよのつねの時とにより候て其差別あるべき御定と相見え候此御例に准じ候はゞ御役により候て事急なる御用も可レ有レ之面々は千石よりは引馬をもひかせ又御役により帳書付など常に身を隨へずしてかなふまじきは千七百石以上は挾箱二つもたせ候はんなどは其本據も正しく有レ之候はん歟又おさへ足輕と申すものは一向に古來はなきものに候へば御役により候て走使など差つかはし候事も有べきは其分限にしたがひ一人二人召つれ候事これ又當時の宜しき所とも申すべく候又御用の事など申送り候使等のために侍をも一人ばかり增し候はん事も其御役によりて苦しかるまじく候歟すべて御役は人々御定の外に人多く召つれ候はんには御役無レ之人の中にいかでか御役候人々に劣るべきなど存じ候も又はうら山しき事に存じ候なども候て供人を增し候ては終には御定もたちがたく程なく人多くなり候はん事寛永の御定も寛文の比にやぶれ寛文の御定も近世に至てやぶれ候ごとくにはあるべく候然れば御役人は定の外たるべきなど被ニ仰出一候はんは御定なきに相同じかるべき御事にも候歟（此等の御定をそむき候人有レ之とも其科にも行はれ難き御事に候しかればまづ人々の心の信服し候はんやうによくはかられ候てさて御定は出さるべき御事歟）但し又此度寛永寛文等の例によられ供の人數を減せられ候はんにも寛文の御定書のごとくに人數減ぜられ候事ばかりを載られ候はん事只今におゐては不レ可レ然候其故は御軍役の御定は御當家萬代迄の御常法に候へばたとひ江戸廻引ぐして供人の數はすくなく

候とも御軍役の人數兵具等においては常々其備怠りなく候事御旗本の衆中其心懸あるべきは職分の事に候然るに近世に至ては其軍役ほどの人馬等の事は沙汰に及ばず歌うたひ舞まひ候女などの數多く集めをき花木魚鳥その餘翫器等の類は多くたくはへをき候て兵具等の數は備らず候人々も有レ之など風聞し候へばたとひそれ迄の事はなく候とも江戸廻引つれ候ばかりの人も候へば事濟候事のごとくに心得られ候人も出來候はんには尤以て不レ可レ然御事に候へば寛永の御定書のごとくに江戸廻の供の人數減じ候やうに被二仰出一候事は御軍役の人馬諸道具等の心がけの事いかやうにもとりつゞかれ候ために候由をしるし載られ候はではかなふまじき御事と奉レ存候事

一貴賤の衣服の事世人の申す所は近年以來皆人結構に過候とも申し又は華麗に候とも申候歟結構と申すも華麗と申すも其ことばはちがひ候へども事は同じ事にて又結構と申すと綺麗と申す事は其差別あるべき事に候（鮮潔とてあたらしくよごれ候はぬを世上にては綺麗と申候某申候綺麗はすなはちあたらしくよごれ候はぬ事に候）某愚存の所は衣服等の結構に候ばかりはせめてもの事に候綺麗に候は以の外に不レ可レ然事と奉レ存候近世以來御奉公の面々の衣服は綺麗に過候と申す物にて結構に過候と申すものにては無レ之候結構に過候と申すものは輕き者共の衣類にて又結構にて綺麗に候と申すものは女中の衣類の事にて候其故は大猷院樣御代の比迄は御近習の御奉公の人々は申すに及ばずしかるべき御役人中も大かたは緞子繻子等の裏付候上下を用られ候と承及候某存じ候人の親父は御側にてしかるべき御役を承り世のもてなしも大かたならず候人にて年齡も其比五十ばかりにも可レ有レ之候處に唐織の緞子の上下たゞ一具候て日夜の昵近し候て御他界の御あと迄存生にて候ひしが其上下のきれにて候とて其子息の時に茶入の袋にせられ候を某も見候に花色の小紋なる緞子にて候き只今の事に引くらべ見候へば其上下は結構に過たる物に候へどもたゞ此一具のみ年久しく常に用ひられ候事に候へば綺麗なる物とは存せられず候只今の衣服いかほど結構に候とも綸子より上品の物を著用の事はなく候

て裏付の上下も沙綾龍文を染たる物の外はちやうのほそき筋などの類に候へばむかしに引くらべ候に結構に過候と申すほどの事には無レ之候たゞ同じ物を三四度とは著用もなり難きやうにて出仕の　に新調の物を用ひられ候へばこれは綺麗に過たると申すものにて候只今迄のごとくに常に新調の物を用ひ候はんにはたとひ絹紬の小袖に奥島の類唐木綿の染たるなどの裏付の上下を用ひ候とも其費は猶同じかるべく候其故は上品の物どもを禁じ絹紬ばかりを用ひ候て常に新調の物を用ひ候はんには絹紬も必らず其價を増し候て却て輕き輩の便をうしなひ申すべき事に候たとひ又綸子縮緬等の上品の物を用ひ候とも昔のごとくにやぶれ損じ候はぬうちは日々に用ひ候とも苦しからぬ御事になり候はんには上品の物は必らずいのち長き物に候へば小袖一つ二つにても事足り候て絹紬等の價も相增し候事もなく輕き輩の便も宜しかるべき事に候しからば近世の事よろしからざる事の第一は綺麗に過候事と申すべく候次に輕き輩の衣類結構に過候と存候事は少給の歩行若侍の類迄上品の物共を用ひ候事更に貴賤の差別も見えわかず候其上又騎馬役にも無レ之若侍等の出あるき候を見及び候に夏は上品の戻子の肩衣單の袴冬は上品の裏付候上下を著し候者共多くなり來り候諸家におゐて上下を常に著用し候ものは家老番頭物頭奏者番など申すもの丶類にて其限ある事に候にこれらの風俗これ又貴賤の差別なき事共に候寛永八年十一月寛文三年八月同五年二月天和三年十二月の度々諸家中の侍又は歩行若黨足輕等衣類の制を出され殊には寛永の御定には歩行侍等をも絹羽二重より上の物をば剝取らるべき由をも載られ候所に程なく其法やぶれ候事は必らず其謂あるべき御事に候歟次に小者中間ざうり取六尺等の衣類の事寛永十一年三月天和三年十二月委細にその禁をたてられ候へども近年に至ては冬は木綿の物を用ひ候にも紋所を繡にし候て襟袖べりには羽二重紬等を裁入れ上下の帶皆々絹より以上の物ならぬはなく夏は上品のさらしの染たる又は上品の島の帷子を用ひ夏冬共にあたらしき足袋をふみ候ては紙入印籠巾著等に至るまで皆々寛永天和の御制禁の物な

らずといふ物なく候事これらは皆々結構に過たる事と申すべく候元和寛永の間も如レ此の事候て大下馬におゐてからめとりさらされ候事など承及び候へども其時の事は下帶に緞子繻子綸子縮緬等を用ひ候迄の事と聞え候へば只今にくらべ候へば猶猶事輕き事とも申すべく候歟近年以來小者中間の類の給金年々に相增し候事も其謂なき事とも存ぜられず候此事も又むかしも有レ之候事と見え候て寛永十六年二月の御定に中間小奴ざうり取等の給金の法を定められ其後の御條目等にも御定のごとくなるべき由をしるし載られ候き但し只今に至て其給金などを減じ定められ候はん事はいまだ其時至らずと存ぜられ候女中の衣服結構にして綺麗に候事は今度其御定を出され候上は今更論ずるにおよばず候すべて此等の愚存も別本にしるし差上候事

一振舞の料理の事これ又近年以來結構に過ぎ候但し結構に過候と申す事これも古來に申す所と近來申す所とは其差別有レ之候歟古來は七五三五々三等の類は申すに及ばず木具盃臺等を用ひ候を結構し候樣に申候き近來の結構と申す事はそれらの式を申すにてはなく候たゞよのつねの料理の式にて汁菜を始め吸物肴等の數多くなり來り凡は晝の會合に其膳を出し候より後段夜食等に至るまで座の前に食味の絕候事はなきほどの事にて其上又椀盤皿鉢等の物迄近來は年々に新らしく珍らしき物共をつくり出し候に其物ども用ひ候事をもてはやし候故に終日の膳部に同じ器を用ひ難きのみにあらず他日の振舞有レ之にも前日の器を二三度とは用ひ難き事のやうにも候へばすべてこれらの費は七五三五々三等の饗應にも猶まさり候べき歟七五三五五三等の式は古來より其分限によりて御法制も有レ之又此等の式を用ひ候ほどの饗應は大名にても限りある祝儀の外はよのつねに用ひられざる事に候てたとひ其費有レ之候とも大名の分限におゐてはさほどの事とも申すべからず候よのつねの式に至ては大身少身其分限によらず候によのつねの振舞如レ此に候てはなにを以てか其費には堪ふべく候はんや況やこれらの振舞の時しまひはやし等張

行の事はたとひ其分限に應じ候はずとも古來より有來候事とも申すべく候へども或は歌舞妓子舞女など申すものゝ類を召集め風俗をみだり候事共ことごとくにかぞふるに暇あらず候此等の事も愚存の趣別本にしるし差上候事

一信物の事これ又近世以來賄賂の事さかりに行はれ候より其物も結搆に其數も多く候て音信の度數も繁く成來り又在番御使湯治等の歸府遠國の奉行參勤の時等土産の物など其事多く有ㇾ之候惣じて大身少身によらず私の信物の例數は上に獻じ候所を以て其限としそれより以下はをの〳〵其次第あるべき事禮におゐても理におゐてもしかるべき事に候たとへば上等の物を以て上に獻じ候はゞ私の信物には中等下等の物の中を以て其數の多少にて其次第をも相わかち相贈らるべき事に候又土產物等の事も寛永十七年正月の御條目に親類緣者たりといふとも一切に禁ぜられ候由は見え候へども上にも獻じ候ほどの事に候はんには老中以下の御役人へ其例に任せ候て贈進じ候事禮におゐてしかるべき事に候歟其餘は親族の外僕從の物をも贈り來り候人に返禮の事可ㇾ有候へばこれ又人情のやむべからざる事に候上は制外の事にあるべき歟しかるにしかるべき大名の事に（はカ）申すに及ばず少身の面々迄其分限に過たる物ども度々に及びて相贈候事のごときは賄賂の路を開き諂諛の風を長じ尤以て不ㇾ可ㇾ然事に候へばよろしく嚴禁ありたる御事に候これ又愚存の趣別本にしるし差上候事

右五條（此五箇條の事は別本に愚存を注し差上候これより以下の事共は別本にはしるさず候）

此外

一屋作の事寛永八年十一月同十七年正月御旗本衆中への御條目に分限に隨ひ結搆すべからざる由を禁ぜられ其後明曆三年正月大火の後屋作等輕々すべき由を被二仰出一寛文八年三月の火後に屋作の制委細に被二仰出一候き其後又度々の火災に就て大名といへども屋作等の制むかしのごとくにもなく候へば

貼付
屋作の事分限に相應の作事可ㇾ然候

まして萬石以下の面々は猶々事輕き體にも候ひし

に近世以來は御城近き屋敷〱望み申す人も有レ之候へば其屋敷召上られ望申す人に被レ下候事どもも多くなり來候故に

貼付
御城近き屋敷〱望申人も有レ之候へば被ニ召上一候由御城近き所の屋敷たとへば望み候とも不レ被レ下候へば書付出候にも及間敷候

むかしのごとく門の楣棟の瓦等に家の紋有レ之候家など其數を減じ家かたぶき軒やぶれ候をも修理し事だに無レ之も其數多く見え來り候歟尤以て不レ可レ然事共に候き但し昔は小書院など申すものは萬石以下の面々大かたは作り出さず候處に近年以來は表むきの座敷等は事輕く候へども小座敷の數も多くなり來り其外かゝへ屋敷野屋敷など申すものゝ事等むかしよりは次第に其數も多く其費も增し來り候へばもし此等の事もよろしく御制法も可レ有レ之候はん歟

一寛永十七年正月御旗本の衆中へ被ニ仰出一候御條目の中浪人づきあひ料理道具數寄道具等このみたくはへ候事を禁ぜられ候此等の禁制只今御政事の要務と申すべく候歟

貼付
書面之通箇樣成浪人つきあひの儀は尤以不レ可レ然事に候去ながら觸候ても相背出會□□□相知がたく可レ有レ之

但し今日の事勢は寛永の比とは大きに變じ候事共に候へば其風俗はかはり候へども其事理は相同じかるべく候其比迄は猶戰功なども候ひてしかるべき浪人共も多く候て其時をも待居候輩もすくなからず候へば御旗本の衆中これらの輩としたしく候はんは不レ可レ然事勿論に候き（天草の城中にこもり候輩多くは關原大坂の時にほろび候西方の浪人共にて其後又正雪忠彌等が事のごとくなるも候へばこれらの御制禁御聰明の至と申すべく候歟）又其比迄は豐臣太閤のうまれ候餘風有レ之候て茶の湯の事世にもてはやし候故に料理の道具すきの道具等このみたくはへ候人も多く候きこれ又無用の費たる事勿論に候へば御制禁有レ之御事とは相見え候近世以來は昔に聞えししかるべき浪人など申すものも無レ之或は借し金仕送りのきもいり或は淫佚の事みち引し候類の浪人のみ多く出來り又牡丹の花鉢の木金魚唐鳥の類椀盤皿鉢印籠巾着鼻紙いれ烟草いれ等の類年々月々に珍しき物共を賞し翫び候て多くの財用を費やし候事に成來り候

貼付
花鳥器物の類箇樣のもてあそび無レ之方は可レ然候へども觸候ても中々相やみ申間敷候

寛永の比人々浪人につきあひ候事はふるき軍物語をも聞候て後學にも仕るべきためも候き猶それらの事をだに御制禁も其謂ある御事に候處に今の世の浪人につきあひ候人々は或は利用のため或は淫欲のために候へば皆々可レ然事とは申すべからず候又寛永の比人々もとめたくはへ候道具は或は其名も高く或は其價も定りたる物も候て家とぼしき時はうりしろがへ候ても其急をば救ふべき事に候き今の世の花鳥翫器等事の急をも救ふべき物にも無レ之候へば誠に無用の費とは此事を申すべく候歟凡は人の習ひにてこのみ候事なき人はなきものには候へどもその分に過ぎ候事は尤以て不レ可レ然事に候しからばこれらも寛永の御旨によられ候てよろしく御制禁の事も可レ有レ之候歟

一老中若老中對面のため伺候の人々の事此事の始は外樣の面々其面をも御存じ知らるべきための事に候ひしに其後又伺候し候人によりて懸合の料理などをも出され候事も出來候歟

貼付
客對の事今程は朝參候衆も段々減登城前に參候衆多く罷成候故御用の差つかへに相成候朝對客相止□は外樣の面々其面をも見知候事も有レ之間敷候殊近年は前々とは違ひものごと略儀の樣に成來り候うへは書面の通りに候はゞ猶更ゆるみ候て御□法には如何可レ有レ之候哉

これらの儀しかるべき御事勿論には候へども多くの人々月々に老中廻り朝出など申す事にて夜半より支度し候て曉天に門前に相集りかなたこなた參り後れ候はゞと馬乘物奔走し候事其家々上下の疲勞は申すに及ばず老中にも御退屈の御事あるまじきとも存せられず其上又世に媚び人に諂ひ候風を長じ候事いにしへの誡も有レ之事に候へば不レ可レ然事もあるべく候へば同じくは此後は御役人衆中御城におゐてはつぶさに申入がたき事も候はゞたとひ日々に伺候せられ候とも御用の事に候上は御對面候はん事申すに及ばず候其餘の人々は寒中に一度暑中に一度御對面有レ之候て此外は上の御事御自分の御事慶弔の事候時に伺候せられ候迄にて只今のごとく老中廻り朝出など申す事をとゞめら

れ候はゞをのづから御役儀もおも〳〵しく世の風俗もすなほに成かへり候はん歟又寛永の比にはたとひ大名と申し候も或は參謁或は音信等の事候時其日又は其明る日に御使差つかはされ候御事とは承及ばず候これ全く御役儀によりて世の人にほこりたかぶられ候事とは聞えず御いとまなき御奉公に候上はかくあるべき事勢にて候故と相聞え候これらの事此度御議定候てかねてより被ニ仰達一候御事も候はゞ御家人等のいとまも出來候て世のため人のためよろしき事共多く可レ有レ之候御事歟

右三條これらの事はよろしく御議定の上にあるべき事に候へば別にしるし差上候此外御番衆三分一休の事しかるべからざる事にて候へば論ずるに及ばず借金買懸年賦の事は其御沙汰なくしてはかなふまじき御事に候へどもこれらは今度の御定に書しるさるべき事にもあらず別して御沙汰あるべき御事に候へば別に愚存をしるし差上べき御事に候歟

白石建議二（愚案第二）

一京大坂駿府在番其外遠國御使の衆中召具し候人數持たせ候道具等の事只今迄の樣子は不レ可レ然候子細は別本に相見え候ごとくに候

貼付 京大坂駿府在番之儀は承屆不レ申候而者難ニ相極一可レ有レ之候

乍レ恐某愚存の所はすべて如レ此の法制を出され候御事は御當家御軍役を以て根本とせられ其次第をたてられ候事これすなはち御代々の御法式に候歟如レ此に候へば御法制も皆々其本據たしかに候て在番御使等相勤められ候人々も各其分限に隨ひ候て相勤りやすき道理にて候（古來御法式は皆々相勤るべき御つもりにて定めをかれ候故にて有レ之候） 御當家御軍役と申す始は元和三年二月始て五百石より一萬石までの法をさだめられ候これすなはち東照宮の神慮にて台德院樣その御旨をうけられ候て仰出られ候所にて候（其年四月東照宮は御他界に候） 其後寛永十年二月二百石より十萬石までの御軍役をあらため定められ候て御陣の時にわかちくださるべき御扶持方の法をもさだめられ候これすなはち大猷院樣御政務の始に東照宮台德院樣の御旨に依られ（台德院樣御他界のその明る年の事に候） 當家萬代までの永式を御議定なされ候御事と相見え候元和寛永前後の御定をあはせかんがへ候に寛永の御定は元和の御定よりは其御役を輕くかけられ候これは太平の日ひさしくなり候に隨ひよのつねの物入等も相增し候はんには其御役重く候ては此事ひさしきにおこなはれ難くも可レ有レ之ことをかねてよりおぼし召はかられ候御事と相見え候て誠にありがたき御事に候（寛永の御軍役幷御陣扶持の御定とは萬代迄の間天下の大名少身共に公役の事におゐて諸事の根本たるいはれを能々相心得べきもの歟） 次に元和九年寛永三年台德院樣大猷院樣御父子ともに御上洛の御時供奉の面々人數御定幷御扶持方御定の事御軍役の本役にひきくらべ見候に二千石以上は皆々半役にて千石已下は或は四分が三或は五分が四ばかりの御役に相當り候ひき（此故を察し候に二千石以上は御軍役の人數も多く候へば半役の人引ぐし候ても猶人すくなからず候千石以上の面々もとより御軍役の人數も少く候に半役に候てはあまりに人すくなくなり候故に御役重くかゝり候事は少身の難儀とも申すべく候へども事勢におゐてしからざる事な

得べからず候歟○五分が四と申すはたとへば千石の御陣扶持は三十人分に候處に御上洛の時は廿四人分を被レ下候き三十人を五つにわかち候へば五六三十人に候を四六二十四人分被レ下候へば五分が四の御役と申候四分が三と申す事も此例を以てはかりしるべく候又一萬石は三百人分十萬石は三千人分の御陣扶持の法に候處に御上洛の時は一萬石に百五十人分十萬石に千五百人分被レ下候これすなはち半役に候

次に慶安元年大猷院樣日光御社參寛文三年嚴有院樣日光御社參等の時供奉の面々人數定幷御扶持方定の事二千石以下或は御軍役の本役或は三分二役二千石以上は四萬石迄は半役五萬石以上は事の外に御役輕く候て或は三分が一二或は四五分が一の御役にて十萬石以上は皆々馬上四十騎に過ず諸道具等馬上の數に應ずべき由を載られ候き此外又遠國の面々は二萬石以上四分が一役を始として十萬石以上もわづかに馬上十五騎を限られ候き此等の御例をかんがへ候に御代々の間御陣の外に御軍役の本役を用ひられ候御事はいまだ其例無レ之御上洛日光御社參等の御時に候とも供奉の面々千石以下少身の輩の外二千石以上の面々は人數多く候も半役を限とし少くしては御軍役の三四五分が一を以て其分限に隨ひて其御定有レ之候歟しかればよのつれの御使等に本役よりも過ぎ候て多くの人數引具し候事は尤以て不法の事と申すべく候次に在番の御番衆人數御定の事二三百石は侍二人小者四人ざうりとり共に以下これに同じ合せて六人四五百石は侍三人小者四人合せて七人六七石は侍五人小者七人合せて十二人八九百石は侍六人小者八人合せて十四人たるべき由の御定に候へば皆々御軍役の本役よりは事の外に輕き御役共に候歟但し組頭役人は格別の由を載られ候へども本役たるべしとも見えず候へばたとひ人多く引具し候とも本役よりは猶數すくなき事に可レ有レ之候歟しかるに番頭組頭その分限の御軍役をすぎ候て人多く候事は申すに及ばず少身の面々も皆々萬石の例に准じ候など申す事尤以て不法の事と申すべく候

貼付
御番衆人數の儀是は只今迄も惣人數は相極候而有レ之儀に候

次に御用に就て遠國に差遣され候面々に被レ下候御扶持方御定の事寛永三年丙寅御上洛の時定められ候所を以て御代々の定法となされ候御事にて千石以下は或は四分が三或は五分が四の御役の人づもりにて二千石以上は皆々御軍役の半役の人引具すべき御法と相見え候しかるに御使番御徒頭等此御定よりは人多くつれ候事これ又不法の事と申すべく候 某此等の御定により自今以後の事共を竊に議

り候に元和二年の御軍役の事も寛永十二年に至てなを人馬兵具の數を減ぜられ候き元和寛永相去り候事わづかに十八年の間にだにむかしの御定は當時には行はれ難き由の御事と見え候へばまして寛永を相去り候事七十餘年の今においては行はるべからざる事は其時勢のしかるべき事に候しかれども御軍役の一事においては寛永の御定御當家萬代の御常法の御事にて太平の日久しく候ほど御武備すこしも弛び候はん事尤以て不レ可レ然御事に候へば此事においてはいづれの代迄も相改めらるべき所にはあるべからざる事勿論に候よのつね在番遠國御使等の事は其時の宜しきに隨ひてよろしく御斟酌もしかるべき御事に候へどもこれ又今日と申すとも御上洛日光御社參の御時の御定はいづれの代にも行はれがたき所とは存ぜられず候しかれば

大番組二條大坂在番の法

一在番の間はいふに及ばず往來の道中共に番頭組頭中人數兵具等各其身上の分限に隨ひ御軍役の本役と三分二役との間を以て宜しく斟酌して引具すべし一人一事といふ共御軍役の御定に過べからざる事

貼付
在番之間往來之道中供人數兵具等の儀在番先道中の様子承屆不レ申候ては難二相極一可レ有レ之候

一御番衆人數は古來よりの御定を相守らるべき事

一在番の間番頭組頭中振舞の儀有レ之とも料理一汁五菜吸物一種肴三種菓子二種に過べからず御番衆に至ては振舞幷夜中の會合一切に禁止せしめ候もし用事に就て會合の事有レ之とも酒菓食物の類一切に禁制せしむる事

番頭組頭中在番の間或は順振廻或は組振廻など申す事有レ之由承及候此事一切に禁ぜらるべき御事にも有べからず候上は寛文八年三月の御條目に准じて組中振廻相役寄合の時の法を斟酌し本文のごとくにも可レ有レ之歟寛文の御定は二汁三菜二の膳なし吸物肴一種菓子一種と相見え候き但し又在番中の振廻の度數を定められ候ても可レ然候はん歟又御番衆會合の事は明暦二年四月番頭中の定に寄合振廻一切に禁止せられ用レ之儀候て一人二人寄合候とも振廻之儀は不レ及レ申菓子にても出すべからず茶ばかりは不レ苦候由相見え候き

貼付
振廻寄合候數の儀も相違不レ申候ては難二相知一可レ有レ之候

一相定り候飛脚の外私の飛脚往來停止候事附もし相組の中凶變等の事に就て飛脚往來等は制外の事

此事子細ある事に候殘番の面々當地公私の沙汰を聞出し候て早速に申つかはさず候へば不才覺人のごとくに申なされ候故に殿

中日々の沙汰又は世間の風說等承り出し候にも種々の物入等有レ之事にて候上の御事は申すに及ばず老中以下御役人中の慶弔の事に就ては急飛脚を以て告知らせ候事等諸事の物入はからざる外の事共に候某存じ候人駿府在番の殘番勤候間に金千両餘の物入有レ之候き月々に相定り候飛脚も有レ之上の御事に至ては奉書を以て被二仰下一候は私の飛脚を以て告知らせ候事など誠に無用の物入共と申すべく候

貼付
飛脚の儀書面のごとく書付出し候ても障申間敷候

一歸府の節土產の物相贈り候儀親族の外は餞送等有レ之候面々に徵物を以てわづかに其返禮を備候外は一切に停止の事寛永十七年正月の御條目には親類緣者にも停止之由相見え候しかるに某如レ此所存は番頭衆參勤の時獻上の物も有レ之候歟と覺候もしさも候はゞ其外の衆中も親族又は餞送も人の方へわづかのものども相贈り候事はくるしかるべからずと存ずる故に候但し寛永の御法のごとく一切に禁絕せらるべく候歟

貼付
土產ものゝ事書付出候ても難二相止一可レ有レ之候

右五條此外明曆二年四月番頭の定書に在番中諸事不レ入買物いたすべからず但武具は格別に候これも所持の衆重々こしらへ候儀は無用なるべし此外こしらへ候はで不レ叶物は組頭衆へ相談あるべき由相見え候これらの事もよろしく御斟酌の上に可レ被二仰出一候はん歟

駿府在番の番頭組頭中の事は半役三分二役の間を以てよろしく斟酌あるべき由可レ被二仰出一候はん歟其故は當地を相去り候道程も遠からずこれによりて御合力米被レ下候事も二條大坂の半に候もし非常の事候とも御人衆を增し加られ候御事も難からず候彼是以て二條大坂には差別もあるべく候歟但し二條大坂のごとくにも可レ有レ之候はん歟

貼付
二條大坂とは差別可レ有レ之事に候へば只今之通可レ然候

此外は皆々二條大坂在番の法はあひかはる事も有べからず候

次に高家衆御使の事別本に見え候ごとく其分限に應じ道中御扶持方被レ下候はゞ召つれ候人數等は其御扶持方のつもりを以てよろしく斟酌あるべき事に候

貼付
高家衆御使の事今程は古來と違ひ拜領物も多御役料も被二下置一候間御扶持方被レ下候には及申まじく候

次に御使番衆御使の法幷御番衆の事これも別本に見え候ごとくに候へば大名所替引渡しの時には本役の人馬兵具にて此時は御暇の時被レ下候物

只今よりは御心づけ有ㇾ之其餘は被二下置一候御扶持方のつもりを以て人數等召つれ候樣に可ㇾ被二仰出一候歟御扶持方積りの事少身ほど御役重きつもりにて候自今以後は少も大身の衆を被二仰付一候事正當の御道理にて候二三千石以上の人は被ㇾ下候御扶持方づもりの半役の人めしつれ候はんには大かたは事たるべく候歟

貼付
所替引渡に罷越候召連候人數等の儀伺出申事候本役とは相見不ㇾ申候被ㇾ下物の增には及間敷候

次御徒頭宇治へ御使の事これも御扶持方づもりの人數召つれ候はん事しかるべき事に候此衆中は組の御徒衆つれ候處に此輩少給によりて當地引はなれ候時も道中往來の時も頭の合力にあらずしてはかなひがたき事も候歟これも少しにても大身はともかくも事濟むべく候少身の衆難儀の事勿論に候此等の事猶々よろしく御沙汰も可ㇾ有ㇾ之歟次に又御徒衆も分にすぎ候てその下人四五人もつれ候も有ㇾ之由にて候此等はきと御禁制ありたき御事とは奉ㇾ存候

次に番頭衆御使の事これも別本に見え候ごとくにその分限に隨ひ御扶持方被ㇾ下候はゞ其御扶持方のつもりに就て其人數も召つれ候事其法相たつべき事に候もし御扶持方被ㇾ下まじき御事に候はゞ御上洛日光供奉等の人數づもりを以て召つれ候べしそれより上は禁せられ候由可ㇾ被二仰出一候歟

次に誰々にても御用に就て遠國へ差つかはされ候事は皆々一切に被ㇾ下候御扶持方のつもりの人數たるべきよし

一江戶廻召連候人數御定の事寬永寬文の御定をあはせかんがへ候に寬文の時すでに寬永の御定よりは事輕く相見え候しかれば此度御定を出され候はんには又寬文の比よりは事輕く有ㇾ之べき事時勢御相應の御事には候へ共むかしよりの御定すでによろしく其數を定められ候上にて候へば其上を減じ候はんはあまりに人少く可ㇾ有ㇾ之候故にすこしく寬文の御定を斟酌してまづ某恐存の所をしるし候寬永寬文の御定は又別本にしるし候て差上候

二百石　侍一人

二百石より四百石迄　侍二人

五百石より九百石迄　侍三人

千石より二千石迄　侍四人

三千石より四千石迄　侍五人

挾箱二つおさへ足輕一人此外乘物に乘候衆は馬を引せ候事等其心に任すべし

五千石より六千石迄　侍七人

挾箱二つおさへ足輕二人これより以上は乘

物に乘候乘馬を引せらるべし

被㆓仰出㆒候事しかるべき御事に候

貼付 江戸廻り召連候人數御定の事書面の通にても可㆓罷成㆒候

次に遠國の諸奉行道中往來の法各其分限に隨ひ半役の人數に過べからずその中長崎奉行の事は與力同心格の者共は此數の外たるべしと被㆓仰出㆒候事可ㇾ然御事に候歟

貼付 遠國諸奉行道中往來之法半役に不ㇾ可ㇾ過と有ㇾ之儀其内大身の面々は半役にも可㆓罷成㆒歟小身の面々は必半役に仕候ては公用私用共に差支可ㇾ申儀はかりがたく候

右別本に見え候ごとくに古來より御使の面々に被ㇾ下候物ども□□その物共にて御役相勤り候御定と相見え候近年諸物の價高くなり候とも道中御扶持方の積りを以て人をも道具をも支度し候て其餘被ㇾ下候物共にて諸事の事たり候心得に候はゞたとひ不足の事有ㇾ之候とも只今迄のごとくには有べからざる事に候

貼付 紙面之通御扶持方人馬等其積り召連候儀も難ㇾ成可ㇾ有ㇾ之哉

然るに近來の風俗にてその御役の格式のごとくに成來り候事も有ㇾ之候て難儀の事は出來候歟自今以後も人々に事足り候ほどの事上よりの御手あても被ㇾ遊がたき御事勿論に候上はせめては古來の御定を相守られ私にてたて來り候格式を禁ぜられ候より外はあるまじく候歟

七千石より九千石迄　侍九人

右寛永寛文の御定によりて相定め訖自今以後召つれ候供の人數各其分限に隨ひ減少あるべしたとひ多く召つれ候とも此定の限の外は召つるべからず但し御役儀によりて公用のために召加ふべき子細あるにおゐては此限の外に或は侍一人を增し或は挿箱二つを用ひらるべしもし侍二人をも增すべきに至ては其子細を以て申達せらるべし町奉行衆其組の同心を召つれ候儀は此定數の外たるべき者也

右のごとくにも候べき歟少身の面々は皆々御軍役の本役と同じく候へどももとより人數すくなく候は減ずべきやうもなく候これ一つそれより以上の

中には御軍役に引くらべ見候に或は半役或は三分二役に懸り候も有レ之候五千石以上に至ては本役には大きに減じ候といへども御軍役定のごとく一一にはよろしきやうにわり合せ候事かなふべからずこれ二つ寛永寛文の御定には三百石より九百石迄同じくまた五千石より九千石迄同じき事に候へどもあまりにまたぎ過候故にいづれも二段づゝにわかち候これ三つ數のちがひを五人以上は一つづつへだて候事は御役人衆一人を増され候時大かた寛文の御定のごとくにも罷成るべく候事と存候故に候これ四つ其外の心得は別本に相見え候心得に御座候次に諸家中の輩の事は御三家幷加賀守家老等の諸大夫にもなされ候輩は其分限に應じ人數つれ候事御旗本衆中に准ずべく候これは官位を重んずる所也

（頭書）三家幷諸大名家來召つれ候人數の定は萬治二年九月五日の例有レ之歟

諸家中供廻りの儀は御直參に准じ可レ然候

此外はたとひ家々の□老又は大身の者共に候ともさき供引馬たてがさ對の挾箱おさへ足輕等一切に嚴禁せらるべき御事に候しからば御旗本と家中との差別も相わかれ家中の輩と申すとも官位をもゆるされ候ものゝ差別も有レ之候て彼是共に禮制にも時宜にも相かなひ候べき事歟但しこれは大目付中より書付にて申渡さるべき事勿論に候歟

一衣服の制御旗本萬石以下の面々　上より拜領し候て御紋有レ之候小袖上下羽織等はたとひ上品の物といふともやぶれ損じ候はぬ間は著用の儀制外たるべき事に候紗綾龍文羽二重より上品の物を嚴禁せられ只今まで有來候物は制外のよしにもあるべく候へども古來もそのごとくの御定にてやがて此禁やぶれ候き少身の人々ありきたり候ものをとゞめ候て新調し候はん事は大儀の事に似て候へども表に著候物だに候はんには襷袖などに用ゆべきものをたちいれ下に着用候はん事さして難儀の事にも有べからず候裏付の上下などには紗綾龍文等より上品の物はあるまじく候へば嚴に禁ぜらるべく候御事歟但しは又只今迄有來候ふるき物共は制外にて此のち新調のものをば禁ぜられ候べきにや

貼付

衣服の□拜領不レ仕面々も御紋付著用の者も數多相見候故拜領とばかりも書付がたく且又書面之通に委細の儀被二仰出一には及間敷候

裏付の上下唐木綿奥島等の類を兼ね用ひ此等の類やぶれ損じ候はぬうちはふるきをいとはず帷子戻子肩衣單袴等の類これに准じ御目見以下の輩熨斗目著用すべきは熨斗目の事は制外たるべし常の小

袖は絹紬より以上の物においては新古を撰ばず一切に嚴禁せらるべき歟此等の類有來候物を用ひず候はゞけく難儀の事共可レ有レ之歟など申す人も有レ之べく候へども服は美ならむことを欲すと申す事も候へば有來る物をばゆるされ候はゞ必らず此禁やぶれ候べし表著に用ひ候はずとも下にかされ着候事もあるべく候はん歟いはんや夏の比に此禁出され候はゞ秋迄の間にその支度はいかにもなるべき事に候一たび勞して永くやすしと申す事も候へばすべて有來るをば用ひよと申す事はしかるべらかず候但しこれらの所はよろしく御議定にすぐべからず候歟諸家中の輩の事これも其主人より賜り主人の紋付たる物は制外と定められ家老番頭物頭奏者番等も私に新調の物は紗綾龍文羽二重以上の物を禁ぜられそれより以下騎馬役の侍は私に新調の物は羽二重絹紬より以上の物を禁じ幷に其家にて主人にゆるされ候はぬ者共私の出行にみだりに裏付の上下用ゆべからざる由を禁ぜられ候此法の事諸大名へ被ニ仰出一候迄もあるべからず御老□□々仰合候て御家中へ被ニ仰出一候はゞ諸家にても遵行せらるべく候はん歟是又御議定にすぐべからず候

（頭書）此例別本に見えたり

小者中間の類は上下の衣類布木綿の外を一切に嚴禁せられ候てこれは仰出ならではかなふまじく候歟御歩行目付御小人目付等に仰付られ路次におゐて御法度の衣類を著し候ものに見あひ候はゞ誰人の下人といふ事をばたづね問はず主人の名をとふべからざる事某存ずる子細あるによりて也たゞ其違犯の衣類ばかりを剝取りて其ものをば追はなし候べき歟あながちに罪科に行ふにも及べからずもし如レ此にも候はずして被ニ仰出一候ばかりにては此禁必らず久しからずしてやぶれ候はん歟百姓町人等の衣服の制も古來より被ニ仰出一候法によりて町奉行御勘定奉行中議定の上其法を出さるべき事に候歟

一振舞の料理の事七五三五五三木具盃臺等の饗應の事は古來より被ニ仰出一候御條目候上は今更論ずるに及ばず自今以後萬石以下御旗本の面々元服婚禮家督等の祝儀の振舞には二汁七菜吸物一種肴三種菓子二種後段には吸物一種肴二種に過べからずよのつねの振廻には晝の會合は夜に及ばず夜の會合は夜半に過ず一汁三菜吸物一種肴三種菓子二種たとひ後段有レ之候とても吸物一種肴一種もし貴客珍客等有レ之候とても二汁五菜吸物一種肴三種菓子二種後段の吸物一種肴二種七菜五菜の中一種は香物肴三種の中一種は□肴菓子二種は餅乾菓の類一種水菓子の類一種たるべき歟

貼付
料理の員數書面の通にて障申間敷候世上振廻晝の會合は夜に及ばず夜の會合は夜半に不レ過と有レ之儀は觸有レ之候ても定りかね可レ申哉暮前にも客參候事有レ之候時は自然と夜に入可レ申候夜會合も短夜の時節は謡囃等有レ之候節は必ならず夜半過にも可レ及候間如何可レ有レ之哉

又椀盆皿鉢等の類たとひ世にはやり出候物有レ之候共珍しき樣子の物一切に用ゆべからず近來種々料理の道具こしらへ出し候有レ之不レ可レ然事にて候これらの事は江戸京大坂町奉行に仰せて禁制あるべき御事歟 或は其客により候て遊興を催し候事有レ之とも舞平家仕舞囃あやつり等に過べからず小うた三線歌舞妓狂言舞女等の類一切に嚴禁せられ此外狂言芝居傾城町茶屋等の事はいふに及ばず百姓町人浪人道心者等の居所に御直參の面々往來の事一切に嚴禁古來の御定のごとくに可レ有レ之候歟當地におゐて船遊の事暑き日又は月の比など興ある事にて古來よりしかるべき人々も其興を催され候しかるに近來は歷々の衆中傾城町に誘引せられ候事此遊より事はじまる事の由風聞候しからば今に至てはしかるべからざる事の第一とも申すべき歟むかしより時にしたがひ候て法禁もたつ事にて候上は自今は御直參の船遊を禁ぜらるべく候はん歟但しは又船遊をば禁ぜられずして其所を限られたとへば御馬屋河岸より川上に遊山船などのぼすべからずなども有レ之川廻り仕り候輩も禁制の場ばかりを見廻り候て其外の所をばさのみ吟味もなきやうにて可レ然

候はん歟此等の事はよろしく御議定にあるべく候

一音信贈答の事各其分限格式にしたがひ上に獻上せられ候所に踰過べからず候此事たとひ少身の面々よのつれ獻上の例無レ之候とも始て御目見の時或は御太刀馬代或は靑銅等の制限有レ之候上はその數量に准じ候はんにはなの〳〵分限のよろしき所は分明に可レ有レ之候 たとひ其禮を厚くすべき事有レ之候とも各其分限格式にしたがひ物輕く數少く可レ有レ之候此外遠所より罷歸候衆中其土產を贈られ候事上へ獻上の例有レ之面々は御役人中へ相贈り來り候例に准じ候てわづかに其例を備ふべき事に候親族又は餞送有レ之候人のために返禮あるべき事は制限にあらず其餘は古來の御條目の旨に仕せ此禁寬永十七年正月の御條目にあり土產物等一切に嚴禁せらるべく候

貼付
音信贈答の事 上え獻上候品に踰過べからず候方尤の事に候乍レ併當時獻上より踰過候儀曾て無レ之候へば此儀觸に及申間敷候

右五條

右五條の事別本に愚存の大體をしるし又こゝに其條數をわかちしるし差上候一本にしるし候ては事まぎれ候故の事にて候 此五

條の外一二條の事別本に相見え候すべて此等の事共一々御議定の上に可レ被二仰出一候條々の事相濟候はゞまづ御旗本衆中へ可レ被二仰出一候御書付一通（これは惣じて皆々の心得の事たるべく候）外に御番方一通遠國御使の法一通江戸廻供人定一通下々衣服の定一通合せて五通にわかちしるされ出され可レ然候はん歟これらの事たゞ一通にしるされ候ては必らず心得たがひ事のまぎれ等候て心得ぬ人々可レ有レ之候へば幾重にも人々得心あられ候やうにその事をわけ候て念比に有レ之たき御事には奉レ存候又某申上候事の中に古來の御法の事共申上候事多く候御覽合せの御ため御用に入り申すべく候古來の御法制も別にうつし差上候以上

白石建議三（愚案第三）

一大猷院樣御代御旗本衆中貧窮に及び候由御聽に達し番頭組頭幷諸役人中へその樣子御穿鑿の上に御條目を出され候き今度事のごときは其事相同じく候へば據（ヨリドコロ）となされ候てさて當時の事に相宜しき事共を可二仰出一御事と奉レ存候につき彼御條目をうつし差上候事

條々

一御軍役御上洛之御供御奉公之道具常々致二心懸一相嗜隨二分限一身上罷成候樣可レ被二心得一事

一御番衆自然振舞被レ仕候者一汁三菜外香物酒三返たるべき事

一供に被レ連候侍小者等此以前御定之外被二召具一間敷候附かいらぎざや大刀大わきざしたてもの手ぶり作りひげとかく人の目に懸り候如レ此の者御制禁之上は拘被レ申間敷事

一自今以後小袖幷肩衣袴定紋之用意無レ之有合に可レ被レ致二着用一事

一小者中間給分之儀此以前御定のごとく才覺次第相拘申さるべき事

一屋作幷諸道具以下妻子衣類等に至迄分に隨ひ被レ致二結搆一間敷事

一浪人づきあひ仕幷料理道具數寄道具このみたくはへ被レ致間敷事

一二條幷大坂在番勤江戶罷下候節雖レ爲二親類縁者一爲二土產一音信物つかはれ間敷事

一遊山見物者不レ及レ申用なくして寄合事惣而むざと町ありき被レ致間敷事

右九箇條之趣能々可レ被二相嗜一候各進退不辨之由今度達二高聞一候此以前御旗本衆中身上不レ成旨達二御耳一應二其分限一以來進退相續候樣にと致二思召一御知行御加增被レ下其以後も被レ爲レ加二御介抱一候處に今度諸番衆中幷諸役人等に到迄不勝手之由再三に及聞召御不審被二思召一候依レ之番頭幷諸役人等迄樣子御穿鑿之上如レ此被二仰出一候然上者向後別而萬事相嗜身上相續候樣に可レ被レ得二其意一候若右之通違背之仁於レ有レ之者急度言上可レ仕候條

當ニ其時刻ニ違論無レ之様かねて其覺悟可レ有レ之候

以上

寛永十七年辰正月十三日

此條目の中供之侍小者の御定幷給金の事は此下に相しるし候

一御軍役御定の法元和二年六月寛永十年正月（一説に二月）致ニ仰出ニ候は世上流布仕候歟又御番方へ被レ出候軍役人積と題せられ二百石より千九百石迄召具し候人わけを委細にしるされ候物一通有レ之候これら定る公儀御とめ可レ有レ之候間書しるし候には及ばず候事

一御陣之時御扶持方積り元和九年御上洛（これを亥年御上洛と申す）寛永三年御上洛（これを寅年御上洛と申す）兩度の時出候御扶持方御定（これら大かた牛役のつもり歟別本に愚存相見え候但し只今道中御扶持の法すなはち寅年御上洛の御定にて候）此外慶安元年四月日光御社參供奉の人數定四通有レ之候寛文三年四月の御定もこれに相同じく候歟此等も公儀に御とめ可レ有レ之候間書しるし差上候に及ばず候事

一御番衆二條大坂在番に召連候人數御定これは別本にしるし候間別にしるし差上候に及ばず候事

一江戸廻召連候人數御定の事

定

二百石	侍一人
三百石より四百石迄	侍二人
五百石より七百石迄	侍三人
但八百石より上は千石へ付べし	
千石より千七百石迄	侍四人
二千石より二千七百石迄	侍六人
三千石より三千七百石迄	侍七人
四千石より四千七百石迄	侍八人
五千石	侍十人

右之通出仕幷江戸中往還之時若黨召連べし是よりすくなき事は不レ苦多召連候儀可レ爲ニ無用ニ此定之儀は人をも吟味いたし可ニ相抱ニため被ニ仰出ニ候間得ニ其意ニ無足又は堪忍被レ下候といふとも親の分限に隨ひ若黨可ニ召連ニ候諸役人は非ニ制限ニ御陣御普請之時は格別也

寛永五年辰九月二日（一本に二月十一日也大猷院様御時也）

覺

二百石　召連候徒侍一人歟二人
三百石より九百石迄　二人歟三人
千石より二千石迄　四人歟五人
三千石より四千石迄　六人歟七人
五千石より九千石迄　八九人歟十人
以二此數量之內一可レ應二知行切米高一也
右之通出仕幷江戸中往還候節可二召具一候これより不足は不レ苦多召連候儀無用たるべし無足之面々は隨二父之分限一輕可二召連一但番頭奉行役人者可レ爲二制外一者也
寛文六年七月十三日　嚴有院樣御時也乍レ恐此御定定りて定まらぬやうに相見え候歟

附覺
一七夕八朔供に召連候家來白帷子着用之儀不レ入事之由老中致二申合一自分家來にも白帷子停止之由候然者面々其心得仕諸番組中へ急度無レ之樣相達可レ然旨若年寄衆より御目付中迄演達之事
一鑓持挾箱持手代り召連候衆有レ之候御番衆にはあるまじく候得共此段何も爲二心得一可レ致二物語一之旨是又御目付中被二申聞一候事
延寶二年七月廿九日　嚴有院樣御時也
此書付供候者の數幷衣服又は老中御自分の等仕置を以て外のためになり候やうに被レ成候御例に候故附しるし差上候

一衣服の制の事御代々御條目に見え候白綾白小袖紫袷紫裏練無紋之小袖等の御法制はしするに及ばず候其外每度相見え候所をしるし候事
寛永十七年正月十三日に御旗本衆中へ出候九箇條の中に見え候處は此本の前に見え候其後明曆三年大火の後衣類之儀以來御定可レ有レ之候間分限に應じ跡々より成程かろき物を相求むべし但所持せしむる衣類當分不レ苦候事とのせられ候そのゝち寛文八年三月大火の後出され候所は

覺
御目付衆致申聞候は今度火事に付儉約之儀堅被二仰出一御旗本中へも衣服等絹紬にても不レ苦之旨御詮候因レ玆御老中方にも御遠慮を以て家來中向後紗綾縮緬毛織類着用之儀停止はぶたへひらしま着ふるし次第　重而は絹紬之外無用之由御申付之由御座候面々召仕之ものをも其通に申付候萬事無二遠慮一輕く仕可レ然由御申候間何も下々其心得いたし右之衣類所持之者は當分目に不レ立やうに着仕以後こしらへ候儀無用尤候事

已上（と相見え候此中御旗本の衣服の事候へどもたしがに次第をわかたれ候事はいまだ見えず候乍レ恐心得がたく奉レ存候此度はたしかに其次第たてられずしてかなふまじく候歟）

一下々の衣類御定の例

覺

一歩行侍衣類之事 絹羽二重より上の着物不レ可ニ着用ニ若有ニ猥之輩ニ者來申四月朔日より可ニ剝取ニ事

一小者自分として侍になり候者有レ之は本主人へ相斷改レ之急度曲事に可ニ申付ニ事

一家造作幷振廻以下何事によらず其分限に應ぜず過分之儀停止也常々振廻者此以前より定のごとくたるべき事

寛永八年十一月五日（台徳院樣御隱居にて西丸に御座の時の事也）

絹布着用御法度

ゑり　袖へり

帶　下帶

木綿の着類に縫の紋所

右之通小者中間ざうり取六尺

寛永十一年三月廿六日（大猷院樣御時也）

一徒若黨衣類紗綾ちりめん平島はぶたへ絹紬布□（もカ）めんの外停止の事

附弓鐵炮之者絹紬布木綿之外不レ可ニ着用レ之

小者中間衣類萬に布木綿可レ用事

寛永十二年十二月（これは大猷院樣御時御旗本への御條目廿三條の中に見えたり但し徒若黨に紗綾ちりめん御免の事其節は結構なる事歟）

定

一歩行若黨弓鐵炮の者着物類の事絹紬之分者可レ許レ之其上の衣裝可レ爲ニ無用ニ但其主人よりあたへ候着物は不レ苦事

一百姓着物之事百姓分之者は布木綿たるべし但名主其外百姓の女房は紬の着物迄は不レ苦其上の衣裳を着候もの可レ爲ニ曲事ニ者也

寛文五年二月九日（嚴有院樣御時也但し歩行若黨には主人くれ候事もあるべし足輕の事以上は此事いかゞ可レ有レ之歟又百姓の制こゝに見えたり町人の事無レ之事も心得がたく奉レ存候）

覺

小者中間布木綿の外絹布類不レ可レ着レ之頭巾帶ゑり袖へり等にも用申まじく候其外印籠巾着其身不

相應之物身に付申まじく候若違背之族者見合次第可ニ召捕一之由被ニ仰出一候面々下々急度可レ被ニ申付一事

天和三年十二月廿三日

常憲院様御時也乍レ恐見合次第召からむべしと候へどもさやうにとらへも仕らぬ故に此法やぶれ候歟仰出候と其後の事そろひ候はれば法はやぶれ候事と相見え候

諸家中之侍淺黄むく可レ爲ニ遠慮一事

天和三年十二月廿六日

これ又同時の御書出しの中に候家中侍の衣服あさぎむくばかり禁ぜられ候御事いかゞ仕たる御事に候か此外にも品々も可レ有レ之と奉レ存候

一下々給金御定の事これは唯今下々不自由に候上は給金減ぜられ候ては彌以て奉公人不自由に可レ有レ之候しかれ共古法に候間書しるし差上候以後に奉公人も出來候はゞ只今迄の給金あまりに高直に候間御法制あるべき歟

覺

中間小者ざうり取給分之事金高貳兩貳分また貳兩それより下は相對次第たるべし但舊功をなすにおゐては可レ任ニ主人之心一事

寛永十六年二月廿三日　大猷院様御時の事に候

一振舞の料理の事御覽合せのため書しるし候事

覺

一御鷹之鳥拜領披之時老中招請におゐては桁之木具盃臺三迄は不レ苦三汁十菜向詰香物共に吸物幷肴五種押物共但内々にて披之時又者老中招請たりといふとも常々振舞には塗膳たるべし向詰無用事

一雖レ爲ニ國持大名一不時之振舞可レ爲ニ二汁七菜一少身之面々はたとひ兼日より約諾たりといふとも此數量を用べし惣而後段吸物肴等も輕可レ被レ仕事

附振舞之刻又は常にも杉重の菓子無用たるべし

櫃物は不レ苦事

一組中振廻又は相役人寄合之節は二汁五菜に過候べからざる事

寛文三年九月日　嚴有院様御代也

覺

一組中振廻又は相役等寄合之節は二汁五菜と御定には有レ之候へ共向後組中振舞之節は二汁三菜二之

膳なし吸物肴一色菓子一色可レ然事

一寄合之節一汁二菜之外香物肴一色菓子一色可レ然事

一御番衆辨當一汁二菜可レ然事

一自分之辨當一汁一菜菓子一色之事

寛文八年六月

嚴有院樣御時中の年火後に出候所にて候乍レ恐法をたてられ候はゞたしかに無レ之候てはやぶれやすく候可レ然事又は無用たるべし又は不レ苦など某は心得がたく候

右此度某申上候證にも例にも罷成べき事共にて候惣じて古來より出候御法制ひたとあとよりはやぶれ候事共に候これはこなたより出され候も半切紙などに年號も無レ之體にて覺書とて出され候事多く候故にまづ被二仰出一候御樣子輕く候間誰々もかろき事と覺悟候歟これ一つ其上台德院樣大猷院樣迄は嚴重の御文言にて候其後は御文言先以てゆるかせに候天下の御大法にくるしからぬ又は無用に候又は可レ然候など申す事は倭漢共に其例承及ばぬ事にて候きと被二仰出一候てだに年を經候てわすれも候へば法をそむく事も有レ之候は人の習ひにて候然るをこなたよりかろ〴〵と出され出され候御文言もたしかに無レ之候てはたとひ違犯候人有レ之候とも其科とは申しがたく候これ二つむかしより御法式のやぶれは歷々の御役人よりやぶれ候事と相見え候上にたゝれ候衆中より其身の事は申すに及ばず家中迄も相守られ候ても猶〳〵たちかね申すものに候處に御役をも勤候衆中よりやぶれ候やうにては たちおほせ申すべきやう無レ之候これ三つ乍レ恐某愚存の所はとてもたつまじき事と思召候はゞ法はたてられぬほどの事は有レ之まじく候たてられずして難レ叶御事においてはいかにもつゝしみて法を出されそのことばをもたしかに被二仰出一もし違犯候人をば誰にも相當之御沙汰有レ之候て誰か御非道と申すべく候歟恐多き御事に候へ共御代々御成人の御時にてさへ御法たちかね候まして只今御幼主の御時に候上は此度など御定をも出され候はゞせめて 御成長の比までたしかにたちおほせ候樣に仕度候むかし嚴有院樣御代始に水戶殿の家人御步行衆やゝむをきり候事にて老中御相談の上水戶殿出仕を追返され候御儀は今に諸人申す事にて候如レ此ほどに無レ之候て

は御法はたちおほせ難く奉ㇾ存候に付段々憚多く候へ共愚存を申上候以上

白石建議四（上卷）

近世以來天下の財用通じ行はれ難く萬物の價年々に高くなり來り公私の難儀に及び候事世の人論じ申す所皆〳〵金銀の品下り候故により候由申沙汰し候近世に及び金銀の法頻に變じ候事におゐては古今の間いまだ承及び候はぬ大變に候へば世の人申沙汰候所異論有べからざる事には候 天地の間に金銀銅を生じ出し候より此かたその生じ出候所の地方によりて三つの物の中各其品の美惡候事は其自然の性にて候古の聖人此三つの物をとり用ひられ候て金をいては上幣とし銀をいて中幣とし銅をいては下幣とせられ候て其品を三つに相わかたれ候より此かた當時のごとくに金には銀を雜へ候て其品の上下をわかち銀には銅を雜へ候て其多少によりて其品を種々にわかたれ候て寶貨となされ候事は本朝異朝つゐに其例を承及ばず候某先年仰を奉り候て大西洋邏馬國の人にあひ候時萬國の中にて通じ行はれ候金銀の事をも承り其持來り候物共を見候にも皆〳〵むまれながらの物にて其出候地方によりて其品は同じからず候へども銀銅などを以て金銀に雜造り候て寶とし候事はなく候由相聞候しからば當時のごとくに天地より生じ出され候人間の大寶を人のしゝわざによりて其品を亂り候事は天下人民の怨み憤り候のみにあらず天地神明のにくみきらひ給べき事に候へば不レ可レ然御事に候まづ此事の理をよく〳〵聞召明らめらるべき事此事を論じ候第一義と申すべく候其事の子細をつまびらかに論じ候はんには事長く候へばたゞ其大略を注し候 もし某が愚存を以て其理を細かに論じ候はんには世の人申沙汰し候所はたゞ其一つを知りて其二つを知らずとも申すべく候歟其故は當時天下の財用通じ行はれ難く候て萬物の價高くなり來り候事天下の商賈其言を金銀の品下り候に假り候て其利を競爭ひ候により候へども眞實は世に通じ行はれ候金銀の數そのむかしよりは倍々し候て多くなり來り候故にて候然れども凡そ天地の間に生じ出候ほどの物其品貴きものは必らず其數少く其數少く候故に其價も高く其品賤きものは必らず其數多く其數多く候故に其價もやすく候事相定りたる事に候へば當時の金銀其品下り其價輕くなり候故にこれを以て換候所の萬物の價は重くなり候と申候はんも又當時の金銀其數多く其價輕くなり候故にこれを以て換候所の萬物の價も重くなり候と申候はんもその申す所はかはり候へども其理におゐてはかはるべからずとも申すべく候へども異朝歷代の間論じ候事共を併せ考候に古の善く國を治め候人は物の貴賤と貨の輕重を觀候事候て其政を施し行はれ候き凡そ物の價重く候事は貨の價輕きにより候て貨の價輕くなり候事は其數多きが故に候へば法を以て

其貨を收めて其數を減じ又物の價輕く候事は貨の價重きにより候て貨の價重くなり候事は其數少きが故に候へば法を以て其貨を出して其數を增し貨と物とに輕重なきごとくに其價を平かにし候時は天下の財用ゆたかに通じ行はれ候由相見え候古の善く國を治めし人といふよりこゝに至て皆〳〵古人のことば也　もし此說に據り候はゞ當時萬物の價の重くなり候事金銀の數多く候て其價輕くなり候故により候事疑ふべからざる事にて候此一段は自今以後元祿以來公私上下の害を除かれ候事の要旨に候へばよく〳〵御心得わきまへらるべき御事に候　凡天下の物には其數なき物もなく天下の事には其法なき事はあらず候然れども其小數をのみ測識候て其大數ある事を知らず候へば必らずその數の差出來り其死法をのみ執守候て其活法ある事を知らず候へば必らず其法の弊出來る事よのつねの事にて候小數大數死法活法と申す事をよく〳〵聞召わかたるべき御事に候近世以來金銀の法をあやまり候は此義の明らかならざる故にて候小數とは見數にて算盤の上にあらはれ候てかぞへしるべき數に候て大數とはいまだ算盤の上には見え來らず候へども天地の間にその大算數のある事にて候此故に小數におゐては算術に精しきものはかぞへつくすべく候へども大數に至ては理に明らかなる人にあらずしてはわきまへ知る事も難く又其說を承候人もよく信じ用ゆる事も難かるべき事に候たとへば曆數の學の事近世に及び其學精しくなり候は毫釐もたがへ候はぬほどになり候へども必らず久しからずして其たがひ出來る事にて候其故は算術には限りある事にて天地の大數におゐては算術を以てはかりしられぬ所候故の由申傳候算術にてしられ候べきは小數にて候算術にてはかりしられぬはすなはち大數にて候又死法と申す事は死したるものゝごとくにそのはたらきなき法にて候活法と申す事はいきたるものゝごとくにその機に應じ候てはたらきある法を申候たとへば前の本文に見え候ごとくに貨の數多くして其價輕くなり物の價重くなり候へば其貨を減じ貨の數すくなくして其價重くなり物の價輕くなり候へば其貨の數を增し候ごとくなるはすなはち活法と申すものに候これらの子細つまびらかに論じ候には事長く候へばたゞその大略をこゝに注し候元祿以來金銀の法を變じ候事を申行ひ候事當時上の御財用其入り候所を以て其出候所をはかり候に其入り候所其出候所の半には及ばず候故に一年の間入來り候御物成を以て一年の御拂に出し候所に引くらべ候に御物成の數は御物入の半にも及ばず候ひし歟　慶長以來の金銀の法を改め金をば銀を雜造り銀をば銅を增加候て天下通行の金銀の數を增され候由を申沙汰し候得ども眞實は慶長以來造出され候ほどの金銀の數其半を奪ふべきための術にて候き此時天下より出來り候所の古金八百八十貳萬四千三百五十兩を新金千三百貳拾三萬六千五百三拾四兩となされ候てその增す所四百四十一萬二千百八拾四兩○古銀出來り候數貳拾八萬七千六百拾七貫百五拾五匁を新銀三拾五萬七千五百三拾五貫三百八拾匁となされ候て其增す所六萬九千九百拾八貫貳百貳拾五匁○算數を以て測り候へば天下通行の金銀の數をばもとのごとくに引かへられ候て上へ收められ候所の金銀の數は相增し候へば公私共に財用ゆたかに事たるべき事と相見え候はすなはち申す所の小數にてはかりたるものに候その小數をたのみ候て此法を申行ひ候はすなはち申す所の死法と申すものにて候　しかれども其時天下より出來り候慶長以來の金銀其金の數わづかに八百八拾貳萬四千三百五拾六兩

其銀の數わづかに貳拾八萬七千六百拾七貫百五拾五匁には過候はず元祿以來僅に十八年の間に造出候所の金銀の數を以て推測候に慶長六年以來元祿八年に亙て凡九十五年の間に年々に造出し候所の金銀の數いかでかこればかりには候べきや皆是天下の人各其寶を失ふべき事を惜み候て當時に通用すべきほどの數をはかり候て出し替候ひしかば藏め貯候て出來り候はぬ所の數は出し替候所の數よりは萬々倍し候べし然らば當世に通行し候所の金銀其數を增し候ごとくには候へども却て其數を減じ候ごとくにはなり候と申候はんも其謂なきにはあらず候 元祿以來造出し候新金の惣數前後二度に通じて貳千貳百八拾壹萬八千貳百貳拾七兩壹分新銀の惣數前後五度に通じて百四拾三萬八千三百九拾三貫目これらわづかに十八年の間に造出し候所の數にて候ましてや九十五年の間年々に造出し候所の數なしはかり知るべき事に候たとひ其金銀外國より流れ入火災のために燒け失せ候とも今も天下の人の藏めたくはへ置候所の數は元祿以來に出來り候よりも猶其數多くあるべく候今に至ても古金銀など申て出來り候事これ其一つの證と申すべく候然らば最初此事を申行ひ候時天下の金銀其數を增し候はんと謀り候ひしはたゞ小數をのみはかりたるにて候天下の人藏め貯置候て出し替候まじき事をはかりしらざるは天地の間大數ある事をしらずとも申すべく候歟○又天下の人をの〳〵其寶を惜しみ候て出し替候はぬ所の金銀世に通じ行はれず候へば天下に通じ行はるべき金銀の數減じ候とも申すべき事に候しかれども當時世に通行し候所の金銀の數を以て見候には元祿以前よりは金六百五拾七萬五千八百四拾三兩貳分銀五拾萬六千百八拾五貫八百五拾匁を增し候きこれ又其小數を增す事を得候へども眞實は其大數においては增す事もなく減じ候事もなく候とは申すべく候今に至り候ては元祿以來天下の人をの〳〵其寶を藏め貯置候ひし事は天下の御ために尤以て幸甚の御事とは申すべく候すべて此等の所よく〳〵其理をきはめつくさるべき御事には候 これより後天下の人新金新銀を見候所銀は猶金よりも其品まさり候と心得候ひしかば金銀の價はじめて平かならず 元祿九年新金新銀を造出され候時の御定も慶長の御定のごとくに金壹兩を以て銀六十匁に替べしと候ひしかども其時の新金半は銀を雜入られ候て新銀は猶六十匁の內灰吹三拾八匁四分を雜入られ候へば銀の品はまさり候と世の人相心得候て金と銀との相場始てくるひ出候て元祿十二年の比には凡金壹兩を以て銀四拾七匁に替候ほどの事に至り候きこれすなはち金銀の相場くるひ出候事の始に候て諸物の價も高くなり來り候始にて候 下にしては人民の怨み候て物價も漸くに增し上にしては天地の心も怒り候て災變もしきりに降り候ひしかば初收め奪はれ候所の金銀悉皆傾け竭され候き はたしてこれ天地の間に大數と申すものゝいはれ分明に候歟 然れども其過を悔ひ改るに及ばずしきりに銀法を改め候事五度迄に至り候て今の新銀造出し候に及び萬物の價一物として增加候はぬものもなく天下の人其苦みに堪ず候のみにあらず國家の御財用もすでにつまづく事には至り候ひぬ最初元祿年中始て銀法を改造られ候時に出來り候古銀の數と元祿以來の新銀共當時天下に通行し候所の數とを引くらべ候に新銀の數は凡

五拾萬六千百八拾五貫八百五十匁を増し候へども其新銀共のはたらき候所を見候に古銀の數少く候ひしには大きに及ばず候はこれ又其小數は增し候へども其大數は減じ候とも申すべく候歟（度々に新銀を造られ候時にいまだ出來らざる所の新銀共の數の事元祿銀は拾八萬六千四百拾七貫目餘寶永銀は五萬貳千五百五貫目餘中銀は千九百五拾七貫目餘三寶字銀は拾五萬八千貳百拾七貫目餘にて候今の新銀三拾九萬四千七百七貫目を合せて凡七拾九萬三千八百三貫目は今も世に現在して通行すべき所にて候此惣數を以て古銀出來り候所の數廿八萬七千六百拾七貫百五拾匁に引くらべ候に新銀共の數は凡五拾萬六千百八拾五貫八百五拾匁古銀よりは多く候歟○其數多き新銀のはたらき其數少き古銀通行の時にかけあはざるを以ても大數と申すものゝ候事をばわきまへ知るべき事に候もし此所の義をよく心得わかたず候はばたとひ今より後新金新銀の數百億萬を增し出され候ともいよいよ萬物の價は高くなり候て天下公私の難儀は當時よりは猶甚しかるべき事に候）しかるを況や金銀の數をだに增し候はゞ天下の財用ゆたかなるべき事とたゞ一筋にのみ心得候ての過を五たび迄かさね候ひしは其死法をのみ守り候て活法ある事を知らざる事とは申すべく候幸に去年の秋此等の事ども前御代の御聽に達しすみやかに新銀造出し候事を停められ其害を除かるべき由の御沙汰候ひしにすでに御他界の期に臨み候ひしかばつゐに御遺令のごとくにはなり候事これ又天下の不幸たるべく候其後天下の人　仰をかれ候御旨を承り候ものども悉皆哀感悲泣仕らぬものもなく候ひしかども獸を獵り候時には其傷の小しく候てたふれまじき事を憂候てすでに獸を獲候に及びては其傷の大きくしてくらふ所のすくなく候はん事を憂候はよのつねの習ひに候へば十八年が間金銀の品下り候事を怨み候ひしものどもいつしか又金銀の品もとのごとくになり候はんには其數を減じ候べき事を惜み候て其心一つに定まらずしかるべき人人も又それが説に心まどひせられ候て其議も又一つに決せず今に至り候までいまだ前御代の御德意をうけ候て御餘澤を世に蒙りしむべき策を建申され候人も出來らず候歟某不肖には候へどもその　御旨を承り置候所も候へばその御旨の世に行はれざるべき事を以て深き恨とは存じ候ひぬこれによりて元祿以來の事共をもしれる人に尋問ひ當時の人の申沙汰候御事共をもしれる人に尋問ひ候てまづ世の人の申沙汰し候事共をしるし候て某が愚存の所を其下に注し次に某が存寄候事共をしるし候て次に又別記を作り候て進呈し候某が愚存の所世に行はるべき事に候歟又行はるべからざる事に候歟たとひ又世に行はるべき事に候とも某年すでに老に至り候て身又病多き事に

候へば此事の功成り候て天下の人前御代の御餘澤に沾ひ候はん事をまのあたりに見奉り候べき事にもあらず候へどもたゞ某が愚存を申あらはし候て前御代の御德意に答奉る所も候はんはほどなく死し候はん後に至てものこる恨もあるまじき事と存じ候のみに候

世の人申沙汰し候條々

一或說に諸國銀山より出候灰吹銀を以て今の新銀に（正德元年より造出し候所世に四寳銀と申すもの也）吹加へられ候て上銀の位に（慶長六年より元祿八年迄造出し候所世に古銀と申すもの也）なされ世に通行せらるべきには今の新銀三拾九萬四千七百貫目餘に用ゆべき料の灰吹銀凡百拾八萬貫目のつもりにて候然るに近年以來一箇年に出來り候灰吹銀わづかに四千貫目に過ず候へば此灰吹銀を以て今の新銀に吹加へ候はんには三百餘年を經ず候ては新銀ことゞゝく改造られ候事かなふべからず候由の事

此說は銀座の輩申出候所と相聞候此輩の申す所は其奧義あるべき事に候へば論ずるにたらず候へども此輩の申す所は世の人の信じ用ゆべき所にも候を以てまづ其大略を辨ずべき事に候某五穀の地に生じ出候事を見候に凡百畝の田には年ごとに其穀いかほど出來るべきと申す事は定たる事に候だに其年の豐凶其地の肥瘠により候て多くも出來り少くも出來り候はよのつねの事にて候金銀の地中に生じ出候事五穀の例には准ずべからず候たとひ當時諸國の山々より生じ出候所其數多く出來り候はんも其數少く出來り候はんもことゞゝく皆採盡し候て出來るまじく候はんも又猶いまだ採盡さず候へども或は水湧き或は土崩れ候て採得し所の金銀の數を以ては其費を償ふにたらず候へば採出し候に及ばず候はんも又只今迄は出來らざる山々よりこれより後に生じ出べく候はんも皆々はかりしり難き事に候へば當時出來り候數を以て三百餘年の間の事をかねてよりはかり候事心得がたく候これ一つ當時一年に出來り候灰吹銀四千貫目の內その二千貫目は新金を造られ候によりて元祿金の中より出來り候所の鹽銀と申すもの〻由にて候元祿金いまだ改造さる所七百三拾貳萬百三拾五兩

は天下に散在して有べく候へども寶永七年以來改造候數を以て推測候に（寅卯辰三年の間造出し候所新金の數凡八百八拾八萬六百三拾三兩貳分也）元祿金皆々改盡し候はん事も三年を出ずして其功終り候べき歟然らば當時一年の間に出來り候四千貫目の灰吹銀三年を出ずして貳千貫目をば減じ候べし然るを三百餘年が間年々に灰吹四千貫目出來るべき事と相はかり候事心得難く候これ二つたとひ此法のごとくにして三百餘年を經候て今の新銀ことごとく改造り候とも猶今天下に散在し候所の元祿銀寶永銀中銀三寶字銀等凡三拾九萬九千九拾六貫目餘の新銀どもことごとく皆改造り盡さず候はんには天下の大難ゆるび候事も有べからず然らば又此等の新銀共改造られ候はんには重ねて又三百餘年を經ずしてかなふべからずしかるを今の新銀の事のみをかぞへ申す事心得がたく候これ三つたとひ又元祿以來五度迄變じ候新銀どもことごとく皆改造られ候事前後に通じて六百餘年を經候て其功を成就すべく候ともこれらの年月を經候うち天下の事勢今日のごとくにして相變ずる事もなく候はんには其功も成就し候べし凡天地の運三十年にして一變し候事古今の常數に候へば六百餘年の間當時一年の事をはかり候ごとくに候はん事萬々に其理有べからず候これ四つ天下の事理一端を以て論じ盡し難き事よのつねの事に候然るに今の新銀改めらるべき事年ごとに出來り候灰吹銀のみをたのまれ候はん御事と心得候はんは其一ッを知りて其二ッを知らずとは申すべき事に候これ五つ此等五つを初て心得難き事共に候へばこれまた大數ある事をも活法ある事をも存じわきまへざる小人ども其謀の行はれ候はん事を相はかりてまづ此等の説を申出せし所に候歟

一或説に諸國銀山より出候鉛を以て今の新銀に雜候灰吹の銀と銅とを吹わけ候て其灰吹を以て上銀の位になされ候には今の新銀三拾九萬四千七百貫目餘に入り候銅を吹わくべき料の鉛凡貳百七拾六萬貳千貫目餘を用ゆべく候然るに近年以來越後國上田銀山より出來り候鉛一箇年の數凡三千七百三拾六貫七百目餘に過ず候へば（此外諸國銀山より出る所は其數もしれず又實出し候歟否もいまだしるべからずといふ）此鉛を以て今の新銀に雜候灰吹銀を吹

わけ候はんには凡六百四五十年を經ずしては新銀ことごとく改め造らるゝ事かなふべからず又鉛の毒氣にあたり候て死し候ものども其數を知るべからず候由の事

此說又銀座の輩申出し候所と相聞候これ又論ずるにたらず候得共尤以て其謂なき事共を辯じ候べし某此大法を承候に銀座におゐて銀を試候法にて推はかり候に今の新銀百匁の內に雜り候灰吹銀と銅とを吹わけ候料の鉛七百目を用ゆべき事に候由にて候某又年比承及び候に大坂に住し候銅吹屋の者共諸國山々より出來り候銅の內より銀を採候て其活計と仕る事に候（此事を世には銀しぼりと申し候歟）其法をつぶさにたづね問ひ候に山々より出來り候銅を見候て其中に雜り候所の銀の多少により鉛をも增減し候事凡銅百斤に鉛を用ひ候所三拾五斤よりして四拾五斤に至候由にて候今の新銀其名は銀にて候へども其中にある所の灰吹銀わづかに十分が二にて候へば眞實は銅の銀多く雜り候物よりは大きに劣り候へば吹屋の法を用ひ候て今の新銀の灰吹銀採出し候はんには今の新銀百貫目には鉛わづかに三拾五貫目を用ゆべく候歟たとひ越後國より出來候鉛のみを用ひ候とも年ごとに今の新銀壹萬貫目の內に候灰吹の銀二千貫目をば採出候べし（銀座の法のごとくに候はば越後國より出候鉛の數にてはわづかに今の新銀五百貫目を吹わけ候て灰吹の銀百貫目餘ならではとり出し候事かなふべからず候）殊には又鉛の毒氣にあたり候もの必らず死しうせ候はんには此事を業とし候大坂の吹屋共は何事を苦しみ候てかゝる事をば業とし候やらむ又いかなる命づよき者共にて世の中にいきながらへ候て此事をば業とし候やらむ尤あやしむべき事に候これ一つ天下の銀山その數多候へば其山々より出來り候鉛も猶其數多あるべき事に候處に越後國の鉛の事のみにて此事を決し申す事心得がたき事に候これ二つたとひ又此說のごとくに六百餘年を經候て今の新銀ことごとく皆改造られ候とも元祿銀寶永銀中銀三寶字銀等をも改らるべき御事に候へば重ねて又六百餘年を經べく候へば前後に通じて千二百餘年を經ずしては天下の新銀共ことごとく皆改らるゝ事かなふまじき御事に候歟これ三つ

一或說に今の新銀を以て上銀に改造らるべき事のかなふべからざる事前二條に見えし所のごとくに候たとひ又上銀を以て天下に通行せられ候事其功成り候とも今の 新銀をも改〆造られず候ては金銀の價相當らず候て必らず萬物の價減じ候事も有べからずしからばまづ元祿以來の新銀共の中に今の新金につりあひ候はん物を撰ばれそのごとくに新銀を造出さるべき事金銀ふたつながらのため尤以て可ㇾ然候事に候歟の由の事

此說又銀座の輩の申す所にてすなはち前にしるし候此輩の奧義は此事に候へばまづ前の二條の說を申出候事とは相闘候 某此大法を承候にまづ今の新金壹兩を以て慶長以來の銀共に兩替すべき所をかんがへ候に今の新金壹兩を以て兩替し候はんには古銀は三拾壹匁餘元祿銀は三拾九匁餘寶永銀は五拾匁中銀は六拾貳匁餘三寶字銀は七拾八匁今の新銀は百廿五匁に相當る事に候

(頭書)按ずるに此說の數をつぶさに考るにすこしくたがふ所あるかまづその說のまゝにしるす所也

しからば中銀のごとくに改造られ候はゞ新金と其價平かに候べし次に當時一年の間に出來り候所の灰吹の銀四千貫目餘を四分し其三分を以て今の新銀に吹入候はゞ中銀凡壹萬三千三百四拾八貫五百五拾四匁を造出すべく候又殘る所の一分の灰吹銀を以て銅を雜候て造出し候所の中銀千八百九拾四貫九百三拾四匁の內四百九拾八貫五百貳拾五匁は上の御德用と(すなはち世に御書目錄と申す事也)なり候べしとの事に候もし此法を取用ひられ候とも一年に出來り候處の中銀凡壹萬五千貳百四拾三貫四百八拾八匁に過ず候へば元祿以來の新銀どもことごとく皆改造られ候はんには百年を經ず候はでは功終るべからず候これ一つ此輩が申す所の一年の間に出來り候灰吹銀四千貫目と申すも其內貳千貫目は元祿金より出候𨫼銀をかぞへ入たる事に候へば三年を出ずして灰吹貳千貫目をば減じ候べし(此事第一條の下につまびらかに見えたり)然らばそれより後いづれの所より出來り候所を以て此數には充候べきやもし出來る所もなく候はんには一年の間に造出し候所の中銀の數七千六百貳拾壹貫九百四拾目には過ぐべからず 上御德用の所と

申すもわづかに貳百四拾九貫貳百六拾貳匁五分にて候べき歟（これ皆灰吹銀貳千貫目にて造出す所の中銀の數也）然らば又三百年に及ばず候ては今の新銀共こと〴〵く皆改め造り出し候事かなふべからず候これ二つたとひ中銀を造出され候て新金の價と相當り候とも元祿寶永三寶字等の新銀こと〴〵く皆改造られず候間は金銀の惣場くるひ候はん事猶又もとのごとくに候べき歟これ三つこれより後たとひ上銀を造出され候ともしかるべき法なく候はんには萬物の價は只今より增し候事は候とも減じ候事はあるべからず候（上銀を造出され候はんには天下通行の銀必らず其數を減ずべき事に候へばしかるべき法なく候ては其數の減じ候ほどの所を取返し候はんと競爭ふべき事に候へば物の價は減ずべからざる事に候）ましてや中銀造出され候はんには萬物の價は減じ候期はあるべからず候歟これ四つ元祿以來造出され候所の新銀共いまだ改らるゝに及ばず候はんには天下の人猶望む所も有べき事に候へどもわづかに中銀に改め造られ候はんには前御代仰出され候御旨にたがひ候のみにあらず天下の人ふたゝび其望を失ひ候て怨み憤り候事猶甚しく候はんには世の事變はかりしらるべき事にあらず候前車の覆り候所其鑑遠きにあらず候歟これ五つましてや又當時天下の大難をすくはるべき御時にあたり候て或は四百九拾八貫五百廿五匁或は貳百四拾九貫貳百六拾貳匁五分の銀を以て　上の御德用になされ候て可ㇾ然御事に候など申す事とかくを論じ候はんも口惜しき事に候

以上の三說は皆々銀座の輩申す所にてしかるべき人々の中にも其說にまどはれ候も有ㇾ之候歟

一或說に新銀改造られ候て上銀となされ候はんには世に通行し候事滯る所も有べからず萬物の價も減ずべき事に候しかれども元祿以來度々に新銀を改造られ候時皆々慶長の例に准じ金壹兩を以て銀六拾匁に替べき由の御定にて今も　公儀におゐて用ひられ候所は其御定のごとくに候へども世の通行は其御定のごとくならず今の新銀造出し候より此かた銀座におゐて正德以前の銀どもを買收候に增歩銀と申す事候て古銀壹貫目を買收め候には今の新銀壹貫五百目を用ひ元祿銀壹貫目には今の新銀

壹貫三百目寶永銀壹貫目には今の新銀壹貫百五十匁三寶字銀壹貫目には今の新銀壹貫拾七匁を以て買收候き兩替屋共の通用もこれに准じ候へば銀を以て銀に替候にもすでに其相場同じからず候況や今の新金の制其重さ古金にくらべ候には其半に及び候へば彼是を相通じて金銀の惣場平なるべき事ははかり難く候由の事

此說はしかるべき人々の申沙汰せられ候所に候歟此後上銀を造出され候て世に通行し候新銀共と引かへられ候はん事元祿以來の法のごとくに候はんには元祿以來の新銀共ことごとく改られず候はんうちは元祿銀寶永銀中銀三寶字銀等の新銀と造出され候所の上銀と彼是六品の銀ども其相場わかれたち候て通行たやすかるまじき事智者を待ずして其理明らかに候へば世の通行滯る所もなく萬物の價も減じ候べきとの存寄まづ心得がたき事に候これ一つ元祿以來金銀を改造り出され候事は皆々世に通行し候所の金銀に或は銀或は銅を雜入られ其數を增され候て引かへ引かへせられ候ひしかば是を造出され候事もたやすく引かへられ候事もたやすく事濟候き此後上銀を造出さるべき御事においては灰吹の銀を以て新銀共に增し入られ候はずしてはかなふまじき事に候へば當時一年の間にわづかに出來り候灰吹を以て多くの新銀共に增し入られ候はんはたやすからざる事第一條に見え候ごとくに候たとひ又一年の間に出來り候鉛を以て新銀共に雜り候灰吹を吹わけられ上銀の料にせられ候とも其事又たやすからず候事第二條に見え候ごとくに候いづれのかたに候とも一年の間にわづかに出來候上銀を以て多くの新銀共に引かへ〲せられ候はんには九牛が一毛にも及べからず候へば天下公私のためになにのたすけか有べく候はんやこれ二つしからば元祿以來の法のごとくに上銀多く造出され候て引かへ〲せられ候はんには其料とすべき所の灰吹當時においては出來るべき所もなく候上はもし上銀を造出され候はんには必らず一つの良法なく候ては此事行はれ難き御事に候と存寄られず候事尤以て心得がたき事に候これ三つ

一或說に今の新銀改られ候事もかなふべからず金銀の惣場貴からず賤からざるやうに御沙汰あるべき事もかなふべからず然上は　公儀の御金拾萬兩ばかりを年々に出され候て新銀を買收られ候はんには新銀の惣場も上り候て諸物の價も又下り候べき歟の由の事

此說は兩替の者共申す所にてしかるべき人々もとり用ひられ候所に候歟此說は當時天下に通行し候所の銀の數多く候て其價輕くなり候故に諸物の價は重くなり候事をよくわきまへ知り候故に銀の數をとり收められ候て其數を減ぜられ候はゞ銀の價は重くなり諸物の價も輕くなり候はんと申す事にて候へば誠に其謂ある事勿論に候序文に見え候異朝歷代の論に似たる事に候へばそのいはれなきにはあらず候へども似たる事は似て候へども大きに似ざる所候へば取用ゆるにはたらざる說にて候歟しかれども公儀に買收められ候所の新銀共こと／＼く皆上銀にも改造られ候て長く御藏にも藏貯られ候はゞ年々に世に通行し候新銀共の數も減じつゐには銀の價も今よりは重くなり候て物の價も輕くなるべき事にて候たとひ年ごとに多くの御金を出され候て新銀共買收られ候ともいく程なくして又其新銀共御拂ひに出し用ひられ候はんには世に通行し候所の新銀どもつゐに其數を減ずるに及まじく候へば渴し候ものゝために一椀の水をあたへ候に程なく又渴し候事もとのごとくに候事のごとくに今日は銀の價重くなり候とも明日は又もとのごとくに輕くなり候べし然らば天下公私のため何のたすけか候べきしかれども此說により候て兩替のものどもも物の價重くなり候は新銀共の數多候て其價の輕くなり候故に候と存じ知り候事相聞え候へば某が論じ申す所におゐて一つの明證出來り候事尤以て幸甚と申すべく候歟

一或說に今の新銀古の銀に引くらべ候にその位は古に及ばず候へども其數は古に倍々し候によりて近年以來米穀の價年々に高くなり候て古の飢饉など申せし時の價よりも猶增加り候へども飢餓のもの一人も見え來らず候事は金銀の數の多なり候て天下の人をの／＼其財とぼしからざるにより候歟しからば今の新銀天下のために其利益なしとは申すべからずもし金銀の惣場も平かに諸物の價も平か

に候はゞ金銀の數多く候はんはしかるべき事とも申すべく候歟金銀の惣場平かならず候て諸物の價年々に高くなり候事は皆是兩替之者共をの〳〵姦利を貪り候故に私に金銀の位を論じ候て其惣場を高下し候に事起り候きたとひ此のち古のごとくなる上銀を造出され候て今の新銀に引かへられ候はんにも又々兩替のものどもいかなる事をかたくみ出し候て世の害を引出候はんもはかりしるべからず候たゞねがはくは　公儀の定め出され候所にそむき私に多くの惣場をたて定め候て物の價をも相增し天下の人の怨み苦みを致し候罪を糺し明らめられ兩替の者共三五人を其罪に行はれ候はゞ天下の人の心を慰められ候のみにあらず金銀の惣場はたち所に平かになり候て物の價もをのづから平かになり候べし然らば金銀を改造られ候にも及ばずして天下の人をの〳〵其寶を寶とし其利を利とし候べし姦商のために誤られ給ひ候て只今迄造出され候金銀を改〆造られ重ねて天下の難儀を引出され候事も候はんは尤以て不ㇾ可ㇾ然御事に候由の事

此說專ら銀を以て通行し西國の人の說を承及候所にて候某此說を承候て其國々の難儀東國方よりは猶甚しく候事を推量り歎き入存候き天下の人かく迄いとひはて御新銀ども上銀になし下され候はん事誰かは悅び存ぜざるものゝ候べきしかるに此後銀法を改らるゝ御事も候はゞ又いかなる難儀にか及び候べきと存候は弓に傷つき候鳥の月の影に驚き候たとへのごとくに候てたゞ此まゝにもさし置れ候はん事可ㇾ然御事と存じ候は痛極り候ては其痛をしらずと申すものにも候歟凡天下の物貴きものは必らず其數少くして其價も重く賤しきものは其數多くして其價も輕く候事は古今の間定りたる理に候へば銀の數多く候て其價も重かるべき事はたとひ聖人世に出候とも其政を施し行はれ候事はかなふべからず候又天下の商賈各其利を競爭ひ候て終に公私の難儀に及ばせ候事其罪にあらずとは申すべからず候へども其利を謀り候は小人の恒の心に候上はふかくとがむべき事にもあらず候むかし天文の比よりして東國の方にては永樂通寶の錢をの

み用ひ候て京錢をば用ゆるに及候はず此事天文十九年より始り候由を申候永樂錢の外をばびたと稱し候て文字をも鐚としろし候きその鐚錢共は東國の方には撰びすて候故に皆〳〵西方の國々に流れ行はれ候ひしかば西方の國々にては又京錢と稱し候き京錢は唐の開元通寶錢より此かた明の洪武通寶錢に至候迄の異朝歷代の錢共の事にて候其永樂錢を用ひ候法壹貫文を以て金壹兩に直候ひしに當家世をしろしめされ天下すでに一統し候ひしかば四方の商旅相通じ候に及び永樂錢と京錢とを通じ行ひ候に永樂錢壹貫文を以て京錢四貫文に直(アタヒ)候ひしかば錢の價ふたつにわかれたち候て其訟やむ事なく候故に慶長十一年九月十一日永樂錢通行の事を停られ京錢を用ひられ候ひて天下の錢價一定し候き此時に當りて東國の人民をのをの其財の四分が三を減じ候へども今迄は永樂錢一貫文を以て金壹兩に用ひ候を此時より錢法改りて金壹分となり候ひしかばたちどころに金三分づゝをうしなひたる事にて候き此法を定められ候事下の財を奪はるべき御ためにあらず候ひしかば東國六十餘年の錢法一旦に改り候へども一民も怨み憤り候ものもなく事定り候き元祿以來の銀法も慶長の錢法を改められ候ごとくに候はゞ天下の商賈いかでか上と其利を競ひ爭ふ事は候べき然らばみづから其過を悔改るに及ばずして尤に倣ひ候ものどもを罪せらるべき御事尤以て不レ可レ然事に候歟尤に倣ふと申すは人のわろき事をとがめながら我もまたわろき事をなし候を申候

一或說に今の新銀の惣場甚やすき事眞實は其位のあしき故にはあらず其數多き故に候へば其數の半を召上られ候はゞ其惣場平になり候べし然れども故なく其半を召上らるべき事もかなふべからず然らば好銅を以て大錢を鑄出され候て今の新銀に替られ候所の新銀をばこと〴〵く皆吹つぶされ銀と銅とを引わけられ銀をば御藏に納められ銅をば大錢鑄出され候たすけともなされ可レ然御事に候由の事

此說京都にてすこしく學材も候ものども申沙汰し候所と承及び候大錢を鑄造らるべき料の銅の出來るべき法なども異朝におゐて行はれ候事共引あはせ候て其說殊に長く候へどもまづ其大略を本文にしるし候某恐存の所を詳にしるし候はんも又事長く候へば其大略をしるすべく候

當家天下をしろしめされ候より此かた天下貨財の法金銀錢の三品を兼用ひられ候事すなはち古

の聖人金銀銅を以て上中下の三幣となされ候遺法なるべく候我朝のむかしは金銀をば寶として交易の事に用ひられず稲と布と錢との三つを以て賣買の利を通じ候き異朝にても中古以來は金を以ては交易の事には用ひず銀と錢との二つを用ひ其後は銀と鈔と錢との三つを以て通行し候事すでに六百年に及び候歟其法は金を以て父とし銀を以て母とし錢を以て子とせられ凡金壹兩の價銀にしては六拾匁錢にしては四貫文に直られ財を用ゆる事の數すくなき時は錢を用ひ錢の數多く重くして通行たやすからざるに至ては銀を用ひ又銀の數多く重くして通行たやすからざるに至ては金を用ひ金銀銅の三つをのづから上中下の品相分れ候所にしたがひ其多少輕重を平準し彼通ぜざる所は是を以て通じ是通ぜざる所は彼を以て通じたがひに其通行の壅滯る事なからんやうに定め置れ候き商賈の類錢四貫文腰にしがたく候へば銀百匁も懷にし銀一貫目懷にしがたく候へば金廿兩も三十兩も懷にしつべきは多少輕重を以て平準の法をたてられ候故に其通行の滯りなきいはれにて候又五畿七道の中東國にては金を用ひ西國にては銀を用ひ候東國の中にても奥州にては一分判をのみ用ひ候て壹兩判をば見知らぬものも候へばまして銀などの事は沙汰にも及ばず候錢は天下に通行し候へども之も奥州にては九十六文を以て百錢に用ひ候事をばしらず候百文を以て百錢とし候て通じ行ひ候只今一統の天下に候だに其地方によりてをの〳〵用ひ候所同じからず候しからば金銀錢の三品を兼用ひられ候御事誠に古今以來萬國の間にことすぐれたる御家法とは申すべき御事に候然るに元祿以來金の品は古金元祿金今の新金三つにわかれ銀の品は古銀元祿銀寶永銀中銀三寶字銀今の新銀六つにわかれ錢の品も古錢寬永錢文字錢大錢今の新錢五つにわかれ候但しこれはいやしき貨に候故にさして世の人異論もなく用むかしは金銀錢たゞ三品に定め置れ候御事當時は金銀ばかりも九品に相わかれたち候へば其惣場定かれ候て天下の財用通じがたく候事は其いはれなき事にはあらず候これらの所よく〳〵聞召わかたるべき御事に候元祿以來金銀の法改り天下財用通行し難く候事共前に注し所すでに詳に候へば重ねて論ずるに及ばずその中今の新銀造出し候に至て銀の通行殊に壅滯候事共謂ある事にて候其故は正德元年八月今の新銀造出し候時いかなる謂候ひし歟當地におゐて造出し候しばかりにては其數猶少く候由にて京都におゐても造出させ候て日夜の催促しきりに候によりてわづかに十三箇月の間に四十一萬貫目の銀造出し候ほどの事に候ひしかば銀座の輩も其功を費やし候に及ばず多くは丁銀をのみ造出したま〳〵豆板の銀造出し候はんとし候へ共新銀の料灰吹少く銅多候へば銅ようやく鑠候時には灰吹すでに流れうせ候てふたつの物融じ和せず候へば傾出し候てちいさき銀に造るべきやうも

なく候き此事某銀座のものにたづね問ひ候て其說を承り候き之によりて當時世に通行し候所丁銀のみ多く候て豆板の銀すくなく候につきて豆板の價高く候ひしかば世の人買求候にも及ばず錢をのみ用ひ候事になり候故に錢の價も又高からざる事を得ず候彼丁銀は價輕き物ども買求候べき物にはあらず候へば終に無用の物となり候て賣出し候人のみ多く候て買求候人は少く候によりて其通行壅滯候てつゐに其價も下り候き然れば新銀に銅多く雜り候て其品下り候のみにあらず豆板すくなくならざる事を得ず候事これ又其法を講究し事の精く詳かならざるにより候歟最初金と銀と錢との三つを兼行ふべしと定置れ候御事は銀の用は金と錢との間をあひ通じ候へば其利は形ちいさくして輕きにある事にて候たとへば父は外を治め母は内を治め子は又父母の命をうけつかへ候ごとくに候處に父も母も外の事を治め候て其子たるもの專ら母にかはりて内をも治め候はんには其家の事相亂れずしてかなふべからず候これらの神慮をよく〳〵相かんがへ候にも及ばずわづかなるその才をたのみ候て事を行ひ候はすなはち前に申す小錢をはかり死法を守りたるあやまりと申すべく候か然るに此說のごとくに大錢を鑄出され今の新銀の數を減ぜられ候とも無用の新銀其數少々減じ候ばかりにてさして世のたすけともなるべからざる御事に多くの御費用あるべき事心得難く候歟これ一つ或は銀五分に直り或は銀壹匁に直り候大錢を造出され候とも其質もとより銅にては上は專ら銀を通行し國々の人これを見候事今の新銀を見候ごとくにもあるべからず候これ二つもし又或は錢十文或は錢廿文に直り候大錢を造出され候て其數すくなく候て多くの錢に直り候とも其質もとより銅にて候上は其重き事は銀よりは重かるべき事に候へば其通行滯る所あるべく候歟これ三つたとひ又其法寶永の大錢に同じからず候とも寶永の時天下の人怨み苦み候事は前車の戒遠からず候へば今又其覆轍に隨(シタガハ)るべき御事にあらず候これ四つ異朝におゐて大錢を造られ候事も度々に及び候ひしかども其代の人々皆々不ㇾ可ㇾ然事の由申沙汰し候き況や當時におゐては尤以て不ㇾ可ㇾ然事に候上は信用にたるべからざる說に候

これ五つ

一或說に今の新銀の害を除かるべき事はまづ寶鈔を造られ今の新銀こと〴〵く皆引替られ金と鈔と錢とを以て雜用ゆべき由を仰出され次に新錢を鑄出

され候て錢の數をも足され候はゞ天下の財用とぼしかるべからず諸物の價もをのづから平なるべし次に天下の山〳〵をたづね求められば今とても金銅を生じ出す所なき事もあるべからず其山々より出來る所を以て金銀を改造られ候はんには十年のうちには元祿以前天下に通行し候ほどの金銀の數は出來るべし其時に及びて改造られし金銀を以て寶鈔の半に引かへられ殘る所の寶鈔をばこと〳〵く皆焚棄られ候はんには誰かは異議を申すものゝ候べき歟然らば金銀の位も古のごとくになり返り諸物の價も平かに天下の財用滯る所有べからず候由の事

此說はしかるべき人の中より某に申送られ候所にて候此說その大要を得たる事と存じ候故に其說の詳なる事を二たび三たび尋問候へどももとより外人は元祿以來の金銀の數又一年の間に出來り候所の金銀の數等を明らかに知り得べき事にあらず候へばその精しく密かなる論はいまだ到らざる所も候き況や又人の才性その大なる所をよく得候てその小なる所を得ず候もその小なる所をよく得候てその大なる所を得ず候もその小なる所をよく得候てその大なる所を得ず候も候事よのつねの事に候てよく大によく小きなるは聖人の能事と承候へばその大要を得候事も末代にはありがたかるべく候大工の家を造り候を見候に其棟梁と申すものは木づくりなど仕り得たるものはまれにて番匠と申すものは多くはかねあひを存じ候はなく候然れども其家を造出候事においては棟梁ならでは其功を成し候事かなひ難く候へばたとひその精しく密かなる論はいまだ至らぬ所候ともこれらの說を得候事は尤以て大幸の至に候もの歟

右八條をしるし候事は凡大事を議し候事は難き事に候へども大事を決し候に到ては猶難くして又難き事に候へば古の人の申し候にも舍を道傍に作る時は三年迄に成らずと申事も候き（これは道のほとりに家を作り候時は往來の人のとかくと評論し候につきて家たつる人心まどひし候て其疑を決しがたく候とのたとへにて候我國のたとへに船頭多く候と船をば山にのりのぼせ候と申すも其義同じく候歟）たとひ某議し申す所世に行はるべき御事に候とももし多くの人々にたづね問れ候はんには必らず諸說まち〳〵にしてつゐに一定仕

るべからず候其上又狐裘を作るべき事を狐と議り候ひしかば三年迄に一裘を得ずと申す事も候へば これは狐の皮にて裘を作るべき事を狐と相議り候ひしに其狐多くの狐を引つれて他國ににげゆき候故に作り出す事ならざる由の義に候 此等の御沙汰候など銀座兩替の輩を始 候て商賈の類傳承候はんには必ず又申妨候事も出來るべく候歟 先年長崎の法の事を議申候ひし時の事かくのごとくに候き しかれども羹に懲りて膾を吹くと申す事も 候へば これはあつき汁にて舌をやき候人はひやゝかなる膾をも吹さまし候事ある事也との義に候 元祿以來金銀の事たゞ一人に任せ置れ候てわづかに十八年の間に六十州の大害を引起し千餘年を經ずしては其害を除かれ難きなど申事も出來候へば某一人の議を御採用ひあるべき御事とも存ぜられず候こゝを以て去年の冬 前御代仰の旨を披露候より此かた天下の人の申沙汰し候ほどの事どもを此書の始にあつめしるし候てその申沙汰し候所の理に當り候歟否の事共某が愚存の及び候ほどの所をば明らかに辨じ候て次に某が愚存の事共をあらはし候彼是を御覽合され候はゞ多くの人々に詢問れ候迄もなく執政の御方〳〵御議定の上にて其事は決すべき御事と奉レ存候故にて候

白石建議五（下卷）

金銀の法を改らるべき御事其法を論じ候は末にて候まづ其道を論ずべき事は本にて候其本立候はずしては其末行はれ候事はあるべからず候条愚存の及び候所其本たるべき事五つ有レ之候歟一には金銀共に慶長の法のごとくにあるべく候二には上の御費を惜まるべからず候三には下の利を奪はるべからず候四には此事にあづかり候役人を撰ばるべく候五には誠信を失はるべからず候其一に金銀共に慶長の法のごとくに有べく候事はすでに前御代仰出され候御旨候上は今更論ずるに及ばず候其二に上の御費を惜まるべからず候事は今の新金古法よりは其形も重さも半にて今の新銀古法よりは灰吹銀少く銅多く候へばいづれも古法のごとくに改造られ候しは増シ加ヘらるべき料の焼金灰吹銀等おびたゞしき御費たる事勿論に候しかれども國は義を以て利とすると申す事候へば前御代の御徳意を奉（ウケ）られ當時公私の大害を除かれ天下のために其寶を寶とせられ候べき大義を行はれ候はんには必らず天下の大利は上に歸し奉るべき御事に候然らば此等の御費等論ずるにたるべからず候

改造らるべき料の金銀をかぞへ候はすなはち小數をはかるにては終には天下の大利上に歸し候はんは天地の間に大算數と申すものゝ候いはれにて候たとひ其小數を以てさしあたる所の一二を論じ候とも上に歸し候利あるまじきにてもなく候歟たとへば只今

上の御要用の事につきて召上られ候物の價の事金を以て被レ下候はゞ壹兩銀を以て被レ下候はゞ七拾五匁被レ下べく候由を申す由にて候天下の御定法金壹兩は銀六拾匁に替候べき御事に候上は金壹兩を七拾五匁の惣場に被レ成被レ下べく候とは申得ず候へども金と銀とにつきて其價を二つに申上候は銀の惣場やすく候へばもし銀にて被レ下候時はたち所に其利を失ひ候故にやむ事を得ざる所にて候これより後銀法を改められ金銀の惣場むかしのごとくに相定り候はんには金壹兩の物の價すなはち銀六拾匁を被レ下候とも其利をうしなふ事も有べからず候然らば金壹兩につきて銀十五匁の御費をば省かるべき御事に候此積りを以てなしはかり候に十兩の物には二兩二分の御費を減じ百兩の物には廿五兩の御費を減じ千兩にしては二百五十兩萬兩にしては二千五百兩十萬兩にしては二萬五千兩百萬兩にして廿五萬兩の御費を減じ候べき歟ましてや諸物の價も漸々に減じ候においては彼是合せて上の御費の減じ候事かぞふるに暇あるべからず候又近年以來米ノ價高くなり來り候につきて年年の御切米の時被レ下候御金の數も増し來り候由承及候金銀の惣場相定り諸物の價も減じ候はんには米ノ價もおのづから減ずべき事に候ましてや人民の心も相親び饑歳の憂もなく候て五穀もゆたかなるべく候へば米ノ價も年々に減じ候べき歟然らば又御切米の御金の數も又年々に減ずべき事に候これら其利を利とせられ候御事にはなく候ともおのづから天下の大利は上に歸すべき御事共に候まづこれらの所を能々聞召わかたるべく候歟

其三に下の利を奪はるまじき事は第一卷の第六條の下に

注し候慶長十一年九月永樂錢を停められ候御事のごとくに上よりして其利を奪はれ候御心なく候はんにはたとひ多くの財を失ひ候とも下の心も又怨み憤り候事はあるべからず候いかなる善政に候とも上の御ため其利あるべき事をと謀り候心候はんには必らず其政行はれ難かるべき事に候もし金銀の法を改られ候につきて元祿以來の事のごとくに上の御ために其利を御出目など申す類相謀候はゞ必らず思はざる外の難事出來り候べき歟上よりして其利を奪はれず候はんには下も又其利を爭ひ候事もなく候て其法行はれ候所必らず壅滯る所もあるべからず候其四に此事はあづかり候役人を撰ばるべき事は金銀の法を改られ候はんには金座銀座の輩を始て多くの町人共をして其事にしたがはせず候てかなひ難く候此等の類はもとより小人の利を謀り候者共に候へばもし其上にたち候人々の中清廉の操なきもの一人も候はんには必らず其下に至り候ては姦計を以て貪利を競爭ひ候て其禍天下の人民に及び候て上の御德意行はれざる所出來候べき歟然らばたとひ其才略はなく候とも其操清廉にしてよく其法を謹守るべき人々を撰ばれ候にはしくべからず候其五に誠信を失はるべからず候事は元祿以來の事共を見候に金銀銅共を雜造り候分劑等を始て每事に就て其事明かならず候ひしかば下も又每事に就て其事を疑ひ候て其心の信じ服し候事なく候故に其事終に行はれ難く候きもとより其本謀天下の利を奪ふべきために候へば上をも欺き奉り下をも罔ひ候にあらざれば其術行はれ難き事に候へばかゝる事も有之候へども小人は利に喩ると申す事候へばこれら財利の事につきて士大夫の人々工商の類と其智術をあらそふべき事かなふべからざる事にて候ましてや天下の事其誠なく其信なく候て行はるべき事萬々に其理なき事に候しからば此法を行はるべき御事は其詐を行ふ事もなく其約にたがふ事もなく其賞其罰わづかもその私をいれずして天下の人民上を信じ服し奉る事天地神明のごとくにあらずしてはたやすく行はれ難く候べき歟此故まづ此五つを以て此法を行はるべき大本とは申す御事にて候

第一銀凡六拾六萬貫目に引替候べきほどの銀鈔を造られ銀鈔六十匁を以て金には壹兩錢には四貫文に替候て通行すべき由の法をたてられ江戸大坂兩所

におゐて元祿以來の新銀共と引替らるべき事

此事の法意は

今の新銀に限らず元祿以來造出され候新銀どもいづれにても上銀に（すなはち慶長の銀法）改造られ候には灰吹の銀多く増加られずしてかなふべからず候然るに近年以來諸國山々より出來候灰吹の數漸々にすくなく候て其事なり難く候由の事は第一卷の第一條に見え候ごとくに候しからば新銀共の中に雜り候灰吹を採用ひ候て上銀造られ候料に仕候にも諸國山々より出來候鉛も近來以來漸々にすくなく候て是又其事なり難く候由の事第一卷の第二條に見え候ごとくにて候たとひ大坂吹屋の者共銅より銀を採り候法を用ひ候ともまづ新銀どもことごとく皆とり收候て其灰吹をば採べき事に候しかれども上銀造出され候迄は天下におゐて銀通行の事一切に停めらるべき御事もかなひ難く候事は勿論に候しかればまづ銀鈔を造出され候て天下の新銀ども皆皆とり收められ候て灰吹少も多く入候銀共をば殘しをき銅多き新銀共に雜り候灰吹共をば採出し候て灰吹多き銀共に吹入々々し候はゞ二十年の間には世に通行し候ほどの上銀は造出さるべき事に候これ一つ

たとひこれより後諸國山々より生じ候灰吹銀の數多く出來り候て上銀たやすく造出され候とも元祿以來の法のごとくに上銀を出し候ては新銀共に引かへかへし候はんには新銀共皆々引かへ盡し候はぬほどは上銀と世に通行し候所の新銀共と一々に惣場ちがひ出來それのみならず上銀と今の新金とのつりあひ大きにちがひ候て天下の大難ふたゝび出來り諸物の價增し候事は候とも減じ候事は有べからず候然ればまづ銀鈔を造出され銀鈔六十匁に金は壹匁錢は四貫文に直られ候て通行し候やうに其法をたてられ新銀ども天下に通行し候事を嚴制せられ候はゞ只今迄のごとくに金銀の惣場くるひ候事ひしと相やみ諸物の價もをのづから減ずべき事に候これ二つ

もし幸に天下公私の福いまだ盡ず候はんには十年の間には新銀共皆々引かへられ候ほどの上銀は出來るべき事に候しかれども天下の事變はかねてはかりがたき事に候へばたとひ十年にして世に通行

し候ほどの上銀は造出され候とも新銀どもに引かへられ候銀鈔皆々上銀と引かへ候事は猶又十年も經べき事と心得候べき事にて候然れば上銀出來そろひ候はぬ間は銀鈔を以て其數の不足を補ふべき事に候これ三つ

たとひ又つもりのごとくに上銀出來そろひ候事手數すくなく功終り候とも世に通行し候所の銀の數元祿以前の數よりは增し候とも只今迄の數よりは減ずべき事勿論に候然らば上銀新銀共品大きに同じからず候とも銀と銀とを以て引かへられ候に其數減じ候はゞいやしきもの丶心には猶あきたらぬ所も有べき事に候まづ新銀共を以て銀鈔にうつしかへ次に銀鈔を以て上銀にうつしかへ候はゞ其美惡多少ふたつながら相忘るゝ事も有べく候歟これ四つ天地の物も漸を以て成る事に候大寒より大暑にうつり大暑より大寒にうつり候はゞ人物の生じ候事はあるべからず候世の人寒暑のうつりかはり候事を覺候はぬは春暖かに秋涼しき事の其間に候て漸々を以て變じ候故に候歟

今の新銀ども皆々とり收られ候て銀鈔を行はれ金と錢と三つながら其惣場くるひ候事なく相定り候て諸物の價も漸々に相減じ候はん比には世に通行し候ほどの上銀は造出し候べし其時に至り候て法を以て上銀を出し行はれ銀鈔と引かへられ候はゞたとひ上銀の數すくなく候とも其はたらきは近年以來新銀共の數多く候時よりは十倍し候て公私のため可レ然事に候はん歟これ五つ

元祿以來新銀共を造出され候度々慶長以來の古銀は申すに及ばず元祿以來の新銀もことごとくに出し替るに及ばず候き元祿銀寶永銀中銀三寶字銀等いまだ出し替ざる所凡三拾九萬九千九拾六貫目也　此後上銀改造られ候て元祿以來の新銀共の事は末代に限りて通行有まじき由の事を世の人たしかに信じ服し候はゞ今度におゐては元祿以來の度々のごとくによからぬ新銀共惜み候事は有べからず候然れども元祿銀の事は其後の新銀共よりは其品よく候ひしかば十數年の間外國にも流入候て其半をも失ひ候べき歟これらの事を存候故にまづ新銀凡六十六萬貫目に引替らるべきほどの銀鈔を造るべきとは申候此内三拾九萬四千七百七貫目は今の新銀に引かへ候料其餘は元祿以來の新銀共に替候べき料に候　元祿寶永等の新銀共數多く出來候におゐては重ねて又それに引替候べき銀鈔をば造らるべき御事に候これ六つ

此法を行はれ候次第

金銀をだに僞造候事に候へばまして鈔をば僞造候事候につきて鈔を造候には其法も候て僞造候事もなり難きやうに造出し又僞造を禁じ候法を嚴にたてられ候事に候これ一つ

今の新銀丁銀多く候て豆板すくなく候によりて世の通行壅滯候由に候銀鈔を造出され候にもその心得し候て六拾六萬貫目の内大半は豆板の料を造出さるべき事に候これ二つ 拾匁より以下の銀鈔の數多かるべき事に候○上銀を造られ候時に此心得有べき事勿論に候

最初銀と鈔とを引替候時にわづかにても下の利を失ひ候事候ては此法行はれ難くあるべき事にて候分厘と申すとも其損失なきやうによく／＼御沙汰あるべき御事にてこれ三つ

鈔は必らず破れ損じ候事も燒こがれ候事もぬれけがれ候事もあるものゝ由にて候其文字だにたしかに候は引替候て大きに損失なきやうに其御沙汰有べき御事に候これ四つ 異朝の法或はやぶれ損じ或は燒こがれ或は油にぬれ候鈔などはこなたにて兩替の法の切賃など申す事のごとくなる事候てたとへば十匁の銀鈔やぶれ損じ候時にその十匁としるされ候所もやぶれ候て其文字うせ候はその主の損失たる事勿論にて候十匁としるされ候所の文字だに見え候をば或は九匁五分或は九匁ばかりの鈔と引かへとらせ候事にて候此法下の利を奪ふのいはれにてはなく候如レ此になく候へば金銀とちがひ候て人いかゞ／＼しく思ひなし候て其財を失ひ候事に候へば其事を戒むべきために候

江戸大坂に引替候場を立られ候てしかるべき町人をして其事を承らせ 町年寄等の類たるべく候歟 銀座の者共を立合せ御役人をも撰ばれ候て其場の奉行として差遣さるべき御事に候その中東國よりは西方の國々におゐて多くは銀を以て通行し候事に候へば大坂にて引かへ候數は江戸よりは多かるべき事に候 大坂は北國中國四國西國のものども來り集り候所故にて候 これらの所をよく／＼相はからひ銀鈔の數をよろしく配當し候て少も事の滯候事なきやうに御沙汰有べき御事に候これ五つ 上銀造出銀鈔と引かへられ候時も此心得あるべきは勿論に候

銀鈔を行はれ候はんには必らずまづ此事の由を分明に天下に告知らせらるべき御事に候へば其御觸書を出さるべき御事に候當地を始め所々の奉行より下知し候事は申すに及ばず諸國の御料は御代官より下知し私領は領主より下知し候て古銀所持し候ものはそのまゝ藏貯候て上銀を造出され候時に雜つかひ候べし元祿以後の新銀共通行の事は永く

禁絶せられ候へばことく\く皆出し候て銀鈔に引かへ候べし遠國のかろきものどもわづかに所持候ものを以て銀鈔引かへのために出來り難き事に候へばこれらの類は御代官領主等よろしく相はからひ候て少も損失の事なく引かへられ候やうに其沙汰有べき由を載らるべき御事に候如レ此に候へば今度におゐては只今迄のごとくに私のもの引かへ候やうに歩銀など申す事にてみちびき候にも及ばずして出來るべき事に候次に其御觸書の諸國にゆき屆きそれよりして引かへのために出來るべきほどの日數をよく\く\かんがへられいづれの月より引かへらるべく候次に又いづれの月より新銀共通行し候事を嚴禁せられ候此禁ゆるがせに候はんには新銀ども出來る事遲遲に及び候べき歟　但し鈔と引かへ候事は制の限にあらざる由をも載らるべき御事に候銀と鈔と引かへ候事は制の限りにあらずとあるべく候子細はもし遠方の人など引かへをくれ候てもはや引かへられ候はぬ事と心得候はゞ其財をもうしなひ又新銀ども出來り候ためにも旁以て不レ可レ然故にて候　すべて此等の御觸書の次第事の子細を詳にしるされ候て天下の人の心の疑惑なく候て信服し候やうにあるべき御事に候これ六つ

上銀造出され候迄の間は天下におゐて銀通行し事を禁絶せられ候はゞ必らず對州より訴申す事有べく候然らば年々に人參を調候料をよく\く\糺し明められ其料ばかりは其數を減省せられ候て御ゆるし可レ然候其故はすでに上銀の事をゆるされ候き此後又上銀を改造らるべき御事に候へば彼是以て上銀を渡さるべき御事に候上銀一貫目と申すとも今の時は尤以て大切の事に候みだりに御ゆるし有べく候事は我國後代迄のためしかるべからざる事勿論に候ましてや近年上銀を以て渡さるべく候由の事は新銀共造り出し候ものゝ由行ひたる事に候へば新銀禁絶せられ候上はその中行ひ候事御とり用ひにあらざるべき事も勿論にて候もし朝鮮の人參にて數少く候はんには長崎表にて人參を買とり候はん事何事かあるべく候はん歟薩州よりも申す旨あるべく候歟これ又よく\く\其事を糺し明められ其數を減省せられ御ゆるしもあるべく候はん歟これ七つ朝鮮も琉球も大清國への貢物に仕來り候事故貢物の數減じ候ては其國の難儀たる由を申候歟此事萬々に其事なき事に候すべて諸國より中國へ貢物の品は古より定りたる事共に候其國よりも出ざる物を以て貢物とし候事はなき事に候朝鮮琉球我國の銀をもとめ候事は中國と交易の利をもとめ候ためにて候しかるを對州薩州のものども如レ此に申候事は彼國のものども欺かれ候歟又は對州薩州のものども上を欺き申す歟の間たるべく候たとひ朝鮮琉球の難儀の事候へばとて我國當時の急難にかへらるべき事に候はんや此理をよく\く\仰渡され候におゐては對州薩州の領主もいかでか其理を承屆ざる事の候べきや

(頭書)これらの事は某年來異國の書どもをもかんがへ置只今渡り來り候異國人の說をもよく\く\承屆たる事に候

長崎におゐて年々唐人共取ゆき候所の銀の數凡百

廿貫目づゝ

(頭書)近年以來は寶永銀にて百六十貫目づゝの定に候歟まづ大法を以て本文にしるし候此事につきて心得がたく候は長崎は異國との交易の根本にてわづかにこれほどの銀の數に候處に對州薩州は長崎よりは多く銀を渡され候御事尤以て不審と申すべく候歟

廿箇年の料貳千四百貫目の所は今の新銀を引わけ候て大坂の御藏に納置年々に長崎へ差遣し我國の商人共の銀鈔に引かへ候て唐人へは新銀を渡しその銀鈔をば焚棄られ可レ然事に候これ八つに外國流入候所の銀の數慶長の初より正保四年に至て凡四十六年の間の事は詳ならず候正保五年より寶永五年に至て凡六十一年の間に銀四拾萬九千貳百五拾八貫百三拾四匁四分八厘七毛餘の由に候これは長崎奉行所においてしられたる所の數にて候此外年年に私の商賣のために流失候數ははかり知るべからず候當時我國に通行し候今の新銀の數と引くらべ候に流失し候數は萬々倍し候べき歟これより後も今迄の法のごとくに候はんには百年を出ずして我國の財用はこれらがためにとぼしくなり候べき歟此事を存じ候故に先年長崎表の御政法の事共議申す事候ひしかどもその事行はれずして前御代は御事終り候き此外阿蘭陀に流失候金の數も正保以來寶永に至て六十一年の間金凡百七拾九萬七千三百九拾壹兩三分餘と相聞え候これ又よろしく御沙汰有べき御事に候歟〇對州薩州長崎表の事は其御沙汰の次第いまだはかり知られず候へば只今いかにとも定申がたく候これらの事につきては愚存の次第すこしく相違し候事も出來るべき事勿論に候へどもまづその大略をこゝにしるし候てさしおき候

銀鈔の事は造出され候事たやすきものに候へばもし又事により候て上御要用のためにまづ鈔を造出され候て其事を辨じ候べきなど申す人あるまじきとも申がたく候たとひいかやうの御事に候とも鈔の數を増し造られ候事は尤以て不レ可レ然候其故は世に行はれ候鈔の數多くなり候へばそれに引替られ候ほどの上銀の數をも増し造られずしてかなはず候さほどの上銀造出され難き御事に候へば必らず後々に至候て事の難儀出來るべき事に候これ九つ

第二當地と上方において新錢を鑄出され候て銀鈔と引替候て其引替候銀鈔ことごとく焚棄らるべき事

附其新錢をわかち候て新金にも引替られ其金をば御藏に納め置るべき事

此事の法意は

天下において銀鈔を通行し候て銀を以て通行し候事は嚴禁せられず候ては多くの新銀ども出來る事たやすかるべからず候然れども銀鈔を行はれ候事の初には下賤のもの〻類は銀鈔を通行し候事其便よろしからず存じ候ものもあるべく候歟又火災等の時の事をもうれへ候て或は金にもかへをき或は

錢にもかへ置候はんと仕るものも有べく候はん歟然らば必らず錢の價高くなり候て諸物の價減じかね候事あるべく候銀鈔を行はれ候はんには必らず錢を以て其通行をたすけられずしてはかなふべからず候これ一つ

前にもしるし候ごとくに元祿以後改造られ候新銀共の數凡七拾九萬三千八百三貫目は今も天下に散在し候てある所にて候これらの新銀ことごとく皆出來り候はんには上銀に改造られ候事もたやすかるべき事に候然れども此等の新銀共を以て上銀に改造られ候には必らず世に通行し候所の銀の數減ずべき事勿論に候然れ共又これらの新銀共を以て上銀に改造られ候御事は上の御費多く候子細におゐては天下の人はかりしるべき事に候上はたとひ上銀の數少く出され候て多くの銀鈔と引かへられ候とも異論有まじき事には候へども同じくは其損失のすくなきやうに御沙汰あるべき事は可レ然御事に候へばまづ新錢を鑄出され候て銀鈔拾萬貫目に引かへられ其銀鈔を焚棄られ候はんには上銀造出され候て銀鈔に引替られ候時のため尤以て可レ然御事に候これ二つ 此事のしるしは上銀引かへの條下におゐて詳なるべく候

錢を以て銀鈔をとり收られ候事世の財拾萬貫目の銀を減せられ候ごとくにも候へども錢を以て銀鈔と引かへられ候事に候へば其錢を以ては當時は金にもかへ又此後に上銀造出され候時は其上銀にもかへ候べき事に候へばたとひ拾萬貫目の銀を減じ候ともそれほどの錢はいつ迄も世に通行すべき事に候しからばたゞ錢を以て銀にかへ候迄の事にて世の財用におゐては其數を減ずべからず候これ三つ

錢を鑄出され候事只今迄の法のごとくに候てわづかに上納候御運上の錢を以て引かへ候はんには多の銀鈔をとり收め候事かなふべからず候此度におゐては上の御物入として鑄出さるべき御事に候へば年々に二三萬兩づゝばかりも其御費あるべく候はん歟此事御費たる事勿論に候へども銀鈔行はれ候て金と鈔と錢との三つ其惣場相ならびたち候はば萬物の價近年以來增來り候て每事につきて御費の數も增來候事ども皆々相やみ候て天下の大利終には　上に歸すべき御事前にもしるし候ごとくに候

へばさほどの御費候はん事は物の數にも有べからざる御事に候これ四つ

錢を鑄出され候御事もたやすからざる事勿論にて候然れ共天下の御力を以て銀拾萬貫目に引かへ候ほどの錢十年の間に鑄出され候はん事かなふまじきにもあらず候へども銅鉛錫等も年々に其數多く用ひ候はん事天下通用のために不ㇾ可ㇾ然事共に候此故に廿年の間に銀鈔拾萬貫目に引かへ候ほどの錢を鑄出され然るべき御事とは存じ候殊には又十年を經候て上銀を出し行はれ候はんにも其後又十年の間は銀鈔をば金銀とならび行はるべき事に候へば其比にも錢多く候はん事は天下のために可ㇾ然故にて候これ五つ

附上銀造られ候時に及びて今の新金をも古の法のごとくに改造らるべき御事に候然ば其時のため可ㇾ然事に候へば年々に鑄出され候新錢四萬貫文を以ては新金壹萬兩づゝ引かへられ十年を經候て新金凡拾萬兩をば御藏に納め置るべき御事に候歟（此事の子細は金法を改らるべき條下に詳にしるし候へばこゝには大略をしるし候）

此法を行はれ候次第

錢を鑄出し候所當地と上方と兩所にて鑄出し候て可ㇾ然候事にて銀鈔拾萬貫目に引替候べき錢は凡六百六拾六萬六千六百六拾六貫文餘の數にて候一年の間に三拾三萬三千三百三拾三貫文餘を鑄出さず候ては廿年の間には六百六拾餘萬貫文の錢鑄出し候事かなふべからず候（此比迄當地にて錢を鑄候事其錢輕く薄く候だに一年の間に拾七萬貫文ならでは鑄出さず候き）其上又當地ばかりにおゐて多くの錢鑄出し候はんとし候はゞ米鹽炭薪油漆等の價をも增し候てそれにつれ候ては諸物の價も減じかね候はん歟然らば寛永の例に准じ當地と上方と兩所におゐて鑄出され候事可ㇾ然御事に候（寛永の時は當地と江州坂本と兩所にて鑄出し候き）これ一つ

錢を鑄出し候ものは町人共の中にて或數代御用をも承り或數代御目見をも仕候ものゝ中を撰ばるべき御事に候これらの類もとより利を謀り候事よのつねの事に候へども數代御用をも承り御目見をも仕候など申すもの共は各其子孫のためをも存じ候事に候へばさのみうしろぐらき事はあるべからず候殊には又たとひ町人共に候とも數代御用をも承り御目見をも仕候故によりて如ㇾ此の事をも被ニ

仰付ニ候と申す御事は國體におゐても可ㇾ然御事にてこれまた天下の人の心の信じ服し奉り候一端たるべく候歟〔寛文の時文字錢をば呉服師六人の者共に御すくひのためとて被ニ仰付一候き其鑄出し候錢の事其品すぐれたるものに候歟然らば其人を撰ばるべき御事勿論にて候むかし以來錢は久しく世に傳り候物にて候處に近き比などのごとくにてはいかゞしき御事に候當地にては町年寄などの類歟又は寛文の時の例のごとく呉服師どもにても候べき歟上方にては伏見の町年寄共など可ㇾ然御事候伏見の事は東照宮御座城の下にて其比は繁昌ならびなく候處に今は事の外におとろへ候て京大坂に及ばず候事は申すに及ばず奈良堺にも及びがたく候せめてこれらの事も候はゞ其所のにぎはひ候事も出來るべく候歟〕

前にもしるし候ごとく此度錢を鑄られ候事はむかし本朝鑄錢司にて錢を鑄られ候事のごとくに銅錫鉛等は上より下し置れず候はでは不ㇾ可ㇾ然候〔新銀十萬貫目に引かへ候べき料と其外に新金十萬兩にかへ候べき料と彼是を合せ候はゞ錢凡七百六萬六千餘貫文たるべく候其料の銅五百八十餘萬貫目錫三拾五萬餘貫目鉛八拾四萬餘貫目ばかりを用ゆべき事に候歟これ二十年の間に用ひ候惣數にて候〕しからば錢を鑄候事を承候町人共させる利得もあるまじき（くヵ）候へば金座銀座の雜用の例に准じたとへば百錢につきて四錢づゝの積りを以て私の物入にて錢鑄出し候事をゆるされ候とも又壹貫文につきて百文づゝの積りを以て私の物入にて錢鑄出し候事をゆるされ候ともいづれの道にも此者共少しく其利得候やうの事はよろしく御僉議の上に御沙汰有べき御事に候これ三つ

たとひ世に通行し候錢の惣場には高下候とも銀鈔に引かへられ候所は六拾匁に四貫文の御定にたがふ事有べからず候もし此等の事に就てわづかも上の御ために其利をもとめ候はゞ金壹兩に銀六拾匁錢は四貫文の御定上よりやぶられ候やうに候て必らず後々又金銀の惣場を定る事あるべからず候これ四つ〔もし錢の惣場やすくなり候て金壹兩に四貫文にかへがたき事も候時は其時に應じ錢高くなり候を待候て引かへ候樣にあるべき事勿論に候〕

錢にてかへられ候てとり收られ候所の銀鈔をばこと〴〵く皆焚棄らるべき御事に候もし其鈔をも重ねて通行し候やうにては錢を以て銀鈔の數を減じ候本意もむなしくなり候て上銀を以て銀鈔に引かへられ候時の難儀出來るべき事に候これ五つ

錢を以て新金に引かへられ候事凡一年に新金壹萬兩づゝ〔此錢四萬貫文〕十年の間新金拾萬兩に引替らるべき事に候十年の後に新金に引替られ候料の錢をば鑄出すに及ぶべからず候これ七つ（六ヵ）〔此の事上金を造らるべき條の下に詳なり〕

〔初め十年の間は一年に鑄出し候所の錢二拾七萬三千三百三拾三貫三百三拾貳文づゝ此の内四萬貫文は新金に引かへ候所

にて其餘は皆々銀鈔五千貫に引かへ候所にて候當地上方兩所にて鑄出し候へば一品にて凡一年に拾八萬六千六百六拾六貫六百六拾六文づゝ鑄候積りにて候後十年の間は一年に鑄出し候所の錢の數三拾三萬三千三百三拾三貫三百三拾貳文これ皆銀鈔五千貫目に引かへ候所にて候當地上方兩所にて鑄出し候へば一所にて鑄出し候數凡一年には拾六萬六千六百六拾六貫六百六拾貳文づゝにて候歟○寛文の時錢を鑄候時凡一年に拾貳萬三千百貳拾五貫文づゝ十六年の間に錢凡百九拾七萬貫文を鑄出し候初十五年の間は吳服師共の德分金貳萬三千九百五拾兩餘候ひしに後一年の間には貳百貳拾四兩餘の損金候故に錢鑄出し候事を辭退し候きこれは世に錢多くなり候て錢の價やすくなり候て其利をうしなひ候故にて候百九拾七萬貫文の數にてすでに世に通行し候數多くなり價やすくなり候上は今度錢を鑄られ候とも初十年の間にも其數多くなり候て其價を減じ金壹兩に四貫文の惣場たちがたくもあるべく候歟但し寛文の時は金銀の法むかしのごとくにて天下の通行なにの滯候事もなく吳服師ども御すくひのためとて錢鑄出され候ひしかば錢貳百萬貫文に及び候て其價をも減じ候き今度においては今の新銀造出し候より世の人專ら錢を用ひ候て錢の價も高くなり來り殊には錢を以て銀鈔をとり收められ候事にて候へば世の人錢を通行し候事をこのみ候事あるべく候歟しからば寛文の時の事に比しがたき所あるべき事に候しかれども又錢を鑄出し候事十年の後錢の數多きに過ぎ候て通行しがたき事も出來候はんには其時又よろしく御沙汰あるべき事にて候まづ此法はその大略を論ずる所にて候あながちにこれらの小數にかゝはるべき事にてはなく候事勿論にて候もし又金銀等出來り候山々も開らけ候歟又年々に出來り候燒金灰吹等の數も多くなり候には此等の事論ずるにもたるべからず候

第三金銀銅を生じ出し候山々の事を尋究られ幷諸國私領の銀山より出來り候灰吹銀共の事古法のごとくに私に商賣し候事を嚴に禁絕あるべき事

此事の法意は

慶長の初天下一統に歸し候後大久保石見守此時には十兵衛と申し候議申す旨に依られ金山の事を仰蒙り金堀共を召集め諸國山々の事をたづねきはめ候て同七年佐渡國の銀山石見國の金山をひらき同十一年伊豆國の金銀山を開き同十四年相模國の金山を開きすなはち土肥の山也此所は大久保相模守領地のうちなり此等の所々皆々石見守奉行して年々にみづから巡檢し候ひしかば多くの金銀を採得候きこれより後は如ㇾ此の事を承り候御役もなくたゞ山々より出來り候まゝにて候へば漸々に山深くなり候て採候事たやすからず候由にて年年に出來候數を減じ候へども其事の實否も明かならずまして私領の山々は其領主の沙汰に打任せられ候御事に候へばむかしは私領といへども御役人をして沙汰せられ候歟前に注し土肥の金山の事其證とすべき事にて候或は金銀銅出づべきなど申す山も新たに開き候に及ばず候惣じて金銀銅の生じ候山を開き候事はこのみ候はぬ事の由申傳候へども天下の大難をすくはるべき御ために候へば今の時においては尤以て可ㇾ然御事に候慶長の初天下の山を開かれ候御事此證とすべき事に候しかれば慶長の例のごとくに此事を承り候人を定置

れ諸國山々の金堀共の中其事に鍛錬し候ものどもを召集めまづ御料の山々より出來り候所近年以來其數減じ候いはれをたづね問ひ或は巡檢の御使をも差遣され候て其事の實否をも紏し明められ次に御料の事は申すに及ばず私領の山々にても出來るべき由申す所候におゐては御料の地は巡檢の御使を差遣され事の實否を紏し明められ私領の地は其領主よりほり試み候やうに申達しもし金堀の力にて及がたき事も候はんにはよろしく其沙汰も有べき事に候只今迄のごとくに山かせぎし候もの共に打任せ置き候はんにはこれより後金銀銅の出來り候はん事心得がたき事に候これ一つ佐渡の國にも銅をほり出し候へどもこなし候事かなひがたく候由にてそのまゝに打すて置候物ども候歟また下野國の銅山も水出土崩れ候由にて度々に御金を借され候へども其御金共をば當地の人に借し置その利をむさぼり候て山の事をばはか〴〵しく修補なども仕らず候由申ふらし候かくのごとくに山かせぎし候など申すものどもの申す旨にばかり打任せ置かれ候てしどけなき事どもにて金銀銅年々にその數を減じ候と申す事は尤以て心得がたき事共に候歟又金銀銅の出候事一旦は其地のにぎはひにもなり候へ共多くの雜人入込候て其風俗をやぶり候事ども候へばすべて領主のこのみ候はぬ事に候故金堀共望申し候へどもとり候事をゆるし候はぬ所も候又眞實は生じ出づべからず候へども世の人を欺き物をとり候はんとて金銀多く候など金堀共の申しふらし候所々も候由相聞え候これらの聞は此事を承り候奉行人なく候ては事の實否紏し明めがたき事共に候世に申ふらし候事共餘所ながらに聞過し候はんよりはたしかに金堀共を召集めたづねきはめ候はゞ其事の實否は明かならざる事も有まじく候大和國には或は金山とも申し或は銅山とも申候て事のさまたげなくほり入るべき所も候など申す事も候歟まづこれらの所々よく〴〵たづねきはめらるべき御事にて候たとひ金銀は出來らず候とも銅出來り候山ひらけ候とも當時の御ためには尤以て可レ然御事に候へばよろしく御沙汰有べく候歟

上銀を作られ候には灰吹銀なくしてはかなふべからざる事勿論に候然るに近年以來佐渡但馬石見攝津等の國々御料の銀山より出來り候灰吹銀漸々に其數を減じ攝州多田の銀山よりは出來る事もなく候歟此外私領の國々陸奥出羽加賀越前信濃對馬等より出來候灰吹銀も漸々に其數減じ彼是合て一年の間に出來り候所三千貫目ばかりの由相聞候此事の子細を承候に山々より出來り候所の數減じ候と申すばかりにもなく賣出し候銀の數減じ候事は謂ある事も候歟古來より私領の山々より出候所は地灰吹と稱し候て皆々銀座のものに賣渡し銀座の者共其灰吹を以て銀を造出し其運上として年々に壹萬枚づゝの銀を上納し來りたる事にて候き元祿以來新銀共造出され候にしたがひ次第に地灰吹の數

減じ候て寶永三年銀座に買取候灰吹の銀千三拾九貫八百五拾壹匁に過ず候故に同四年七月の始銀座のもの一人大坂に行むかひ長崎表に載送り候灰吹銀共をしとゞめ候ひしかばわづかに三箇月の間に買取候所千貳百七拾四貫七百六匁に至り候き同五年又大坂に行向ひ正月より六月迄の間に銀座に買取候所千六百四拾六貫三百五拾九匁に及び候ひしにいかなる故に候か新銀の事奉行し候人より銀座のもの召返し候ひしかば毎年七月より九月迄の間を以て諸國商人の長崎におもむき候時の最中とし候へども打すてゝ罷歸候に其後灰吹銀出來るに及ばず同六年一年の間に銀座に買取候所又わづかに千拾六貫四百七拾壹匁に過ず候きそれより後は年々に出來り候灰吹銀の數次第に減じ候由相聞候當年の春唐船共歸候時に我國の船三艘其跡を慕ゆき候を長崎奉行所遠見の船追かけ候ひしかば陸にのりよせにげうせ候て其人は捕得ず候ひしかども一艘に銀共拾五六貫目づゝ候ひしをば奉行所にとり收候由も相聞候然らば年々に長崎表ぬけ荷商賣の料皆々此等の物と見え候處に此事の禁を嚴にせられず候事尤以て不レ可レ然御事に候（此事は寶永の時のごとくに銀座に仰付られずしてはかなふべからず候公儀よりの御沙汰一筋にては必らず事行はるべからず候さて其上に事やぶれ公儀に相聞え候においては罪科に行はるべきは勿論に候）これ二つ

我國の灰吹銀慶長の古銀元祿銀等外國に流入候事長崎表私の商賣の事により候と申すばかりにてもなく候歟對州薩州より年々に朝鮮琉球等の國々に流入候事も其數はかりがたく候南國の領主によろしく事の利害を仰聞され候て其御沙汰あるべき御事に候これ三つ

此事を行ひ候次第は

古來灰吹銀銀座において買取候法凡灰吹の銀壹貫目は銀壹貫百目づゝの定に候所に元祿以來銀の品下り候に隨ひ次第に其價を增し候て今の新銀造出し候に及び新銀壹貫七八百匁を以て灰吹壹貫目を買求候にも出來り難く相聞候新銀の品甚だ下り候事は勿論に候へども銀座より外に灰吹賣渡すべき所なく候はんにはかほど迄に其價を增し候べき事にあらず候これを以ても私に商賣し候事の利潤ある事の證は分明に候歟これより後は慶長の法のご

とくに上銀を造らるべき御事に候はゞ毎事古來の定法のごとくに御沙汰あるべき御事に候然らば灰吹銀の法も古來のごとく壹貫目を以て銀鈔壹貫百目に賣渡し候樣に嚴に其禁をたてらるべき御事に候もし古來とちがひ候て山かたの物入等も有ㇾ之事分明に候はんには古法よりは少しく其價を增し候て定められ候御事も有べく候はん歟これ一つ

諸國私領の山々より出來り候灰吹銀共上に召上られ候はんには田舍より買出し候ものども御役所へことはり候差上候など申す事共に段々に日を經候ては其物入も多くなり來り其上又私に賣渡し候には其價もよく買とるべき事に候へば必らず此法たちがたくあるべき事に候たゞ古來よりの御定のごとく銀座に賣渡し候て後證のために其證文を取かはし置候べき由を御沙汰可ㇾ然御事に候これ二つ

銀座にて買取候灰吹銀ども一年限に上納し候て其價をば銀鈔を以て被ㇾ下候とも又は御金にて被ㇾ下候とも御金と銀鈔とを雜へ下され候とももこれらの間は上の御費も多からず銀座の蠧其利をうしなひ候はぬやうによろしく御沙汰有べき御事にてもし銀座の蠧損失出來候はんには必らず又灰吹銀出來り候事滯る所あるべく候歟これ三つ

第四銀鈔に引かへ候所の銀共を撰びわづかも灰吹多入候銀共をばまづ其まゝにさしをき其外の新銀共は其灰吹と銅とを吹わけらるべき事

此事の法意は

灰吹の銀料多き新銀には增加御灰吹もわづかにして上銀の數も多く出來るべく候たとへば古銀拾貫目には灰吹銀八貫目と銅貳貫目を雜造られ候元祿銀には灰吹銀六貫四百目と銅三貫六百目を雜造られ候然れば元祿銀を以て古銀のごとくに改造られ候には元祿銀拾貫目に灰吹八貫目を增加候へば上銀拾八貫目出來るべく候（增加候灰吹銀八貫目の內一貫六百目はもとより有來り候所の灰吹六貫四百目と銅貳貫目とに配合し候て上銀拾貫目となし候て其外六貫四百目の灰吹をばもとより有來り候所の銅一貫六百目に配合し候て上銀八貫目となし候故に上銀の數すべて拾八貫目は出來るべく候）又今の新銀には灰吹銀貳貫目と銅八貫目を雜造り候へば此銀を以て上銀に改造られ候には

新銀拾貫目に灰吹の銀三拾八貫目を增加銅貳貫目を足し候て上銀五拾貫目出來る事に候此增加候灰吹三十八貫目の內六貫目はもとより有來候所の灰吹貳貫目と配合し銅貳貫目をくはへ候て上銀拾貫目となし候て其外三拾貳貫目の灰吹はもとより有來候所の銅八貫目に配合し候て上銀四拾貫目となし候故に上銀の數すべて五拾貫目は出來るべく候然れば今の新銀拾貫目に用ゆべきほどの灰吹を以て元祿銀四拾七貫五百目に用ひ候へば上銀凡八拾五貫五百目出來るべき事に候へばわづかも灰吹銀多く入候新銀共をば撰出し候て上銀に改造らるべき料とし今の新銀を始て三寶字銀等の灰吹銀と銅とを吹わけ候て其灰吹銀をば上銀を造候時に增加べき料とし其銅を以ては新錢鑄出し候たすけともなすべく候これ一つこれらの事の撰びなく候ては大きにその差ひ出來るべき事に候よく〳〵其心得有べく候歟新銀共吹わけ候べき料の鉛の數だに多候はゞ其功すみやかに事成るべく候大坂吹屋の法を用ひ候はば新銀を吹わけ候料の鉛は新銀百貫目に鉛凡四拾貫目を用ゆべき事に候歟又其鉛一度用ひ候てすたり候事にもなき由にて候たとひ一度づゝ用ひ候て二度用ひがたく候とも凡鉛の數廿萬八千貳百九貫目餘ほどにては新銀三寶字等の銀の灰吹を吹わけ候料は事たるべき事に候此外新錢の料の鉛八十四萬七千餘貫目彼是合せて鉛某數の事百五萬六千百九貫目ばかりをも用ゆべく候歟　忠

存の所は鉛の事においては諸大名へ仰下され候て軍用のために貯置候所の鉛を或は其三分一或は其五分一多少にかゝはらず大坂へ廻し候て便よろしきは大坂へ廻し當地へ廻し候て便よろしきは當地へ廻し候て上銀造出され候料をたすけ候やうに仰出され候はゞたち所に新銀吹わけ新錢鑄出し候ほどの鉛は出來候べき事に候此事は金銀を役にかけられ候など申すには事ちがひ候て日用の物にあらざる所を以て天下のために財用の事を相たすけ候事に候へば當時においても後代においても非議し申す所は有べからず候これ二つ此事仰出され候とも貯もとめ候て出し候事ならばよく〳〵御制止あるべく候御事に候貯もとめ候事にては其價を增し候て尤以て不可然事に候世に申沙汰し候にも或は井に通じ候水道の樋に作りふせたる候も或は庭なゆき候踏石に作りをきしもあるよしにて候へば百餘年の間うごきなく其地を領し候家々にはその貯すくなかるべからざる事共にて候もし又大名より鉛の事めされず候はゞ此事に就ても御費の事どもは有べく候へども其御費をいとはるべからず候いはれは既に前にしるし候へば申すに及ばず候これ三つ

此事を行はるべき次第は

當地大坂にて銀鈔に引替候新銀共銀座の者共に仰付られ元祿銀寳永銀中銀三寳字銀今の新銀等をこと〴〵くに撰びわかち今の新銀幷三寳字銀の内をわかち候て當地と大坂と兩所にて其灰吹と銅とを吹わけらるべく候これ一つ

灰吹と銅とを吹わけ候事大坂吹屋の者共に可レ被ニ仰付ー候銀座の者共の申す所は以の外に鉛多く入候事に候へば吹屋におゐて銅の中より銀を採り候法のごとくに可レ被ニ仰付ニ可レ然御事に候これ二つ

灰吹と銅とを吹わけ候事にはしかるべき奉行人被ニ仰付ー候はずしてはかなふべからず候事の體により銀座吹屋のものどもの間にて必らず異論出來るべき事に候其故は今の新銀拾貫目に灰吹貳貫目入候由申候へども吹わけ候時に至ては灰吹銀貳貫目迄は出來らざる事もはかり難く候然らば又吹屋のものども吹わけ候事を辭退し候事も出來るべき事に候然れば御勘定方御歩行目付等の類たちあひ候てたとへば銀座のものども此新銀拾貫目の内には灰吹銀貳貫目候と申候上に吹屋のものども一々にあらため請取候て灰吹銅吹わけに及びていかほどづゝ出來り候と申す時に引合せ〳〵帳面にしるし置き候て新銀或は百貫目にて引ならし候歟或は千貫目にて引ならし候て過不足も候歟又は過不足もなく候歟委細に糺し明らめ候やうに有べき事に候これ二つ

前にもしろし候ごとく今の新銀は火急に造出し候故に灰吹と銅とよく融和し候はぬ事に候へば銀により候て或は灰吹多きも或は銅ばかりなるも候由申沙汰し候しからば五貫目十貫目の内を以て試候はゞ必らず灰吹の料に過不足あるべき事に候これにより候て百貫目か千貫目を限り候てならし候て灰吹と銅との分量をたゞし可レ然事とは存候

灰吹出來り候事法のごとくに候はんには勿論の事にて候新銀拾貫目に灰吹銀は貳貫目づゝの定法のごとくの事に候もし不足も出來候におゐては不足し候ほどの灰吹は銀座の輩上納仕るべき事は又勿論の事に候もし又銀座の輩吹べりたつべき事の由を訴申すに於ては吹屋共の申す旨をもたづねきはめられ候て吹べりたつべきいはれも候て其理分明に候はんには其吹べりの法をもたてられ候て其法よりも猶又吹べり候はんにはこれ又銀座の輩より其不足の所をば上納すべき事に候これ三つ荒銅の中よりだに灰吹を吹とり候ほどの事に候上

は新銀の中に候灰吹を吹わけ候に吹べりあるべきいはれはなき事勿論に候しかれども今の新銀の事心得がたく候へば必らず拾貫目に貳貫目づゝの灰吹候はんとは申難く候故は此條をばしるし置候事に候

鉛炭等は上より出され吹手間の事は可レ被レ下御事に候これらの御費の事共前にもしるし候ごとくに候へば論ずるに及ばず候これ四つ 吹手間の事は或は吹ぬき候銅を以てよろしく其價を定められ吹屋共に被レ下候法もあるべく候歟或は長崎表の商賣の事につきて御ゆるし候分量などを以ても事濟むべく候はん歟これらの間はよろしく御僉義の上御費をはぶかれ候なされかたもあるべく候歟いづれの道にも吹屋の者共は御目見をも被ニ仰付一その志をはげまし候やうの御沙汰は有べき御事に候

吹わけ候灰吹の事當地にて吹わけ候は當地の御藏に納め大坂にて吹わけ候は大坂の御藏に納め置かれ後々當地にて上銀造候時は御藏より出され京にて上銀造候時には大坂御藏より出さるべき御事に候大坂にて吹わけ候を當地へ運送し候事は路次の御費等尤以て不レ可レ然御事に候これ五つ

第五當地京都におゐて上銀を造らせ年々に出來候所を以て當地大坂の御藏に納め置かるべき事

此事の法意は寛文の比迄も銀法の事必らず老中よりの證文を以て御下知候き國家の至寶の一つに候上は如レ此なるべき御事に候然るに元祿以來は御勘定奉行連署の證文を出され候事になり候て其後度度に改造られ候時は其事を承り候奉行一人の證文を以て下知し候歟尤以て不レ可レ然御事に候此後もし上銀を改造らるべく候はんにはまづこれらの法より始て古來のごとくに改られ候はではかなふべからざる御事に候これ一つ

上銀を造らるべきには今の新金を造られ候ごとくにしかるべき御役人多く撰定られ其事を奉行せしめ世の人疑惑候心なく信服し候やうの御はからひも尤以て可レ然御事に候これ二つ

國家の至寶は天下と同じく寶とせらるべき御事に候へば如レ此の法を行はれ候御事は下の心も悅び服し候やうに有べき事勿論に候然るに元祿以來度々の新銀を造出され候時下の心疑惑候て信服し候事なく候故に新銀出候度々に其法を非議し申す事のみにて其通行もたやすからず終に天下の大難をば招き致され候き其中世の人銀座

の輩を怨み憎み候事仇敵のごとくに候事にも彼輩私のはからひとして新銀ども造出し候やうに申なし候は其謂なき事に候當時其事を奉行し候人候て其下知に任せ候て造出し候事に候へば此事においては其罪にはあらず候慶長の始は銀座四人に定置れ候所に近年に及びこれも奉行のはからひとして其人數を增し候て七八迄になされ銀を造候雜用銀など申すものおびたゞしくわかちとらせ候へば此事にあづかり候ほどのものども多くなり候て其家も富み榮え過分の事をなし行ひ候ひし事共につきては世の人申沙汰し候所其謂なきにはあらず候しかれば此後上銀改造らるべきにおいてはまづ銀座の輩の中其人を精しく撰ばれよからぬもの共をば除かれ候て其人數をも古法のごとくに改定られ銀造り候雜用銀の法をも古來のごとくに改められ候はんには彼等がためにもよろしく世の人の心も悦び服し候べき事に候これ三つむかしは銀座雜用銀の法三分の御定にて銀百貫目を造出し候へば銀三貫目をわかち被下候き元祿の時四分に改り寶永の時七分に改り中銀の時より一割に改り今の新銀に至て壹割三分に改り候て銀百貫目造出し候へば銀拾三貫目をわかち下され候事になり來り候皆これ奉行人私の恩を以て相はからひ候事と相聞候いかなる故により候てか此レ如に多くの銀どもわかちとらせ候事に候ひしか尤以て心得がたき事どもに候き

某此法を議し候に上中下三つの法をわかち候てさて其時勢に隨ひ候てよろしかるべき法を以て相應じ候やうに存寄候其三つと申すは第一には元祿銀いまだ出來り候はぬ數こと〴〵く皆出來り候はんには上銀に改造り候灰吹の銀外よりもとめ候にも及ばず其餘の新銀共の中にて灰吹にて事足り候て十年の內には其功を終るべき事に候歟第二には元祿銀大半も出來り候はゞ寶永銀中銀等を以て上銀に改造り候料とし三寶字銀との新銀等に入候灰吹又十年の間に山々より出來り候灰吹等を以て增加候料とし候はゞこれも十年の內外には元祿以前世に通行し候ほどの銀の數は出來るべく候然れども此事も又必らずとは恃がたき事に候歟第三には元祿銀出來り候數も減じ候はんには寶永銀中銀は申すに及ばず三寶字銀の內をも三つにわかち其三つが一をば上銀に改造るべき料とし其三つが二と今の新銀との

灰吹ども又二十年の間に山々よりしるし候はずしては其事明らかならず候故に上中下の三つの內その下の法を別記にしるしをき候此法を以てよろしく斟酌あるべき事は此事を行はれ候人の心得にあるべき事に候又別記にしるしをき候事は此册にしるし候ては其事まぎらはしく候て見やすからざるが故にて候

第六世に通行し候べきほどの上銀造出し候時又銀鈔をも改造られ候て（第二度めの銀鈔也）まづ其上銀を以て最初新銀に引かへられ候銀鈔に（第一度めの銀鈔也）引かへられ次に上銀いまだ造出來ず候て引かへ殘り候所へは此度改造られ候新銀鈔を以て最初新銀に引かへられ候古銀鈔に引かへられ其古銀鈔共をばことごとく皆焚棄られ重ねて上銀を造出し引かへられ候間は金銀錢と新銀鈔との四つを以て天下の財用を通ぜらるべき事

　此事の法意は

出來り候灰吹を以て增加候料とし候はゞ二十年の間には世に通用し候ほどの銀は出來るべき事に候上銀の數多く造出し候はぬ間は銀鈔を以て其數を補ひ候はんには世に通行し候所其累も有まじき事に候すべて如此の事をはかり候には何事も事足り候はぬほどにつもり候へば事の相違出來候時にも大やうはたがふ所なきが故にて候もし天下の人其福いまだ盡ず候てはからざる外の幸なる事も出來候はんはこれ又望外の事たるべく候もし又不幸に候て元祿銀等出來り候所も其數すくなく候とも三十年の間には此法をだに行はれ候はんには必らず其功成らずといふ事あるべからず候歟これ四つ

　此事を行はれ候法の次第は

前にしるし候ごとくに新銀共の出來り候樣子により候て其法も改るべき事はすなはち活法の謂に候へばかねてより其法を定め難く候然れども其法の大略をたとひ元祿銀の數多く出來らず候とも十年の間には世に通行すべきほどの上銀は出來るべき事に候歟然れども十年に滿ず候ては新錢を以てとり收められ候銀鈔の數も半を減ずべからず候（二十年の間に新錢にて拾萬貫目の銀鈔を減じ候法に候へば初十年にみたず候はゞ五萬貫目の銀鈔には引かへられ候はぬつもりに候）又上金に改造らるべきほどの燒

金も出來るべからず候然れば彼是三つの大數を見合候て上銀の數も世に通行すべきほどの數を造出し候たとへば最初銀鈔を以て引かへられ候新銀共の出來り候惣數を見合せ候て拾貫目につきて上銀四貫目づゝは引渡され候つもりほど上銀造出來し候を以て其時節とすべく候新錢にて引かへ候所の銀 鈔も半を減じ新錢にて銀鈔五萬貫目に引かへ候を以て其時節とすべき事にて候その大數燒金出來り候數も千二十貫目に滿ち候時を一年の間に百三貫目餘づゝ出來るつもりに候見合せ候てはじめて上銀を出し行はるべき事に候これ一つ此見合せちがひ候はゞ必らず世の通行たやすかるまじく候歟

慶長の銀法は凡銀拾貫目に灰吹銀八貫目銅貳貫目の法にて候異朝にて我國の銀を八程銀と申し候は灰吹八分銅二分なる故にて候然るに元祿銀には灰吹銀六貫四百目寶永銀には灰吹五貫目中銀には灰吹四貫目三寶字銀には灰吹三貫二百目新銀には灰吹貳貫目の法にて候へば新銀共の內にて灰吹の多少大きに同じからざる事にて候五度改造られ候新銀共の灰吹をならし候て見候に拾貫目の內に灰吹四貫百貳拾目づゝのならしに候歟慶長の法に引くらべ候へば灰吹三貫八百八拾目づゝの不足たるべく候これより後造出さるべき上銀はすなはち慶長の法に候へば其不足の所三貫八百八拾目づゝの灰吹を足され候べき大法にて候然れども新銀共の灰吹をならし候て四貫百貳拾目と申すは元祿銀の灰吹其分量多きが故にて候元祿銀を除き候て寶永銀以後四度の新銀をならし候へば拾貫目の內灰吹三貫五百五拾目づゝのならしに候へば足され候所の灰吹は四貫四百五拾目づゝのつもりにて候然れば上銀改造られ候につきて世に散在し候元祿銀出來り候數すくなく候ほど足され候所の灰吹の數は多かるべき事に候へば大かたは新銀共拾貫目につきて灰吹四貫百六拾目餘づゝを足され候大法にも候べき歟拾貫目に足され候所の數すでに如ㇾ此に候へば六拾餘萬貫目の新銀共に足され候所の數は灰吹二十四萬九千六百貫目には及ぶべき事に候たとひ此後諸國の山々より灰吹多く出來り六拾餘萬貫目の新銀共皆々改造られ候事たやすき御事に候ともこと〴〵く皆灰吹を足し造られ候て世に行はるべき御事は萬々におゐて不ㇾ可

レ然御事に候上銀にて候とも其數多く候はんには必らず其價輕くなり候て萬物の價は重くなり候事今日のごとくなるべく候しかれば古のよく國を治め候政のごとくに法を以て世に通行し候銀の數を減ぜらるべき御事は（此事の子細は第一卷の初にしるし置候）此御時に候へば某愚存の所はいかにもして元祿以前世に通行し候ほどの銀の數を造出され候を以て上銀改造られ候大數とし候はん事天下公私のため尤以て可レ然御事に候（元祿八年より十一年迄の間本郷におゐて新銀改造られ候時引かへられ候所の古銀の數凡二十三萬六千八百八貫五百目にて候これすなはち元祿八年より以前天下に通行し候所の銀の數にて候其後元祿十二年より寶永二年迄の間銀座にて買出し候古銀の數凡五萬八百八貫六百五拾五匁にて候これは本郷にて引かへられ候時に出來り候はぬ所を銀座にて年々に買出し候所にて候）これよりのち元祿銀の數だに多く出來り候におゐては二十六七萬貫目の上銀はたやすく改造らるべき事に候たとひ元祿銀の數少く出來り候とも二十三四萬貫目の上銀は二十年のうちには改造り候はん事も又たやすかるべく候歟然れども六拾餘萬貫目の鈔に引かへられ候には其數ことの外に不足し候へば法を以て引かへられ候はずしては叶ひ難き事共に候其法又三つに過べからず候歟第一には二十年の間に新錢を以て銀鈔拾萬貫目に引かへ候て其鈔を焚棄候へば上銀を以てかへらるべき所の銀は五拾餘萬貫目に過べからず候第二には上銀を以て銀鈔を引かへられ候法或は六分四分の法を用ひ上銀六貫目を以て銀鈔拾貫目に引かへらるべく候はん歟或は五分五四分五の法を用ひ上銀五貫五百目を以て銀鈔拾貫目に引替らるべく候はん歟これらの所は銀鈔の數と上銀造出され候所の數とを見合せ候てよろしきやうに斟酌あるべき御事に候（本文に見え候ごとくにたとひ元祿銀多く出來り候とも五度の新銀共の灰吹をならし候へば足され候所の灰吹の數拾貫目には三貫八百八拾匁づゝにて候まして元祿銀出來り候數すくなく候はんには足され候灰吹の數拾貫目には四貫四百五拾匁づゝの事に候然らば銀鈔拾貫目に上銀三貫五六百目づゝ引わたされ候とも上銀に改造られ候所の御物入ども上の御費多き御事に候上は天下の人のためには猶ありがたき御事たるべく候然るに五分五の法を以て引かへられ候はんには尤以て望外の大幸たるべく候もし元祿銀も多く出來り候はんには六分の法を以て引かへられ候事も候はんには猶又望外の大幸たるべく候これらの所はよく〳〵その見合せ候てよろしきやうに斟酌あるべき御事に候へばかねてより其法を定申がたく候とにもかくにも天下の人の心悅び服し候やうの御沙汰にはしくべからざる御事勿論の事に候）しからば上銀或六萬貫目にては銀鈔拾萬貫目に引かへられ或五萬五千貫目にては銀

鈔拾萬貫目に引かへらるべく候へば二十三四萬貫目の上銀にては銀鈔或四拾萬貫目或四拾三萬餘貫目には引かへらるべき事に候（六分の法にては上銀二十四萬貫目にては銀鈔四十萬貫目に引かへられ候五分五の法にては上銀二十四萬貫目にては銀鈔四十三萬餘貫目に引かへらるべく候歟）猶引かへ殘り候拾萬貫目の銀鈔をば又新銀鈔を以て（第三度めの銀鈔也）引かへ置れ候て其後年々に造出され候上銀を以て引かへらるべき御事に候第三には上銀を出され候て銀鈔に引かへられ候法たとひ上銀多く出來候とも一時に出しかへられ候事不レ可レ然候法を以て前後二十年の間に四五度ばかりに引かへらるべき御事に候しかれば拾貫目につき候て或は四貫目づゝを減じ或は四貫五百目づゝを減じ候とも一時に減じ候事にあらず候て漸々に其數を減じ候へば世の人其數の減じ候をも相忘るべき事に候（此引かへの法の次第も別記につまびらかに候）殊には上銀の數すくなく出され候とも上銀共天下にゆき渡り候て或は引かへ或はいまだ引かへ候はぬものも候ごとくなる事もあるべからず候事に候これ二つ

此事を行はるべき次第は

此事又かねてより定申難き事勿論に候へども其法をしるさずしては其事明らかならず候故に五分五の法を以て引かへらるべき次第を別記にしるし置き候此法に准ぜられ候はゞたとひ何分に引かへられ候とも其義は同じかるべき事に候

第七上銀を造出され候においては同時に金鈔をも造出し元祿金今の新金に引かへ候法最初新銀共をとり收められ候ごとくにして慶長の法のごとくの上金に改造候て出し行はるべき事

此事の法意は

今の新銀すでに上銀に改り候上は上銀六拾匁には新金貳兩を以て兩替すべき事勿論に候（新金と新銀共兩替のつりあひの事は第一巻の第三條に詳にしるし置候き）然らば天下の金の數たち所に其半を減じ候へば尤以て不レ可レ然事にて候法を以て金の數大きに減じ候はぬやうに御沙汰なくしてはかなふべからざる御事に候これ一つ

慶長の金法は金の重さ四匁七分六厘を以て壹兩と定められ候所に元祿の法は灰吹の銀を雜入られ候て慶長の法の古金に五割を增候法に候ひし

かば凡古金拾兩を以て新金拾五兩に改造られ候きこれより後元祿の新金を以て慶長の古金のごとくに上金に改造られ候はんには元祿金拾五兩に雜入られ候所の灰吹銀を吹去候へば上金拾兩は出來るべき事に候今の新金は彼灰吹を吹去られ候ども其重さ古金の半に候へば貳匁五分に候歟今の新金を以て上金に改造られ候には或は二十兩の内を以て上金拾兩となされ候歟或は今の新金拾兩に燒金貳拾貳匁六分を増加られ候て上金拾兩となるべき事に候彼是を引くらべ見候に上金を造られ候には元祿金を以て其料とし候事は可ﾚ然事共多く候歟改造り候時のためよろしきばかりにてはなく候上金造出し引かへ候にもたとへば元祿金拾五兩へ上金拾兩わたし候はゞその損失わづかなる事にて候べし新金廿兩へ上金拾匁わたし候はゞ其半を失ひ候やうに人々存すべき事に候しかれば金銀の法むかしのごとくに改らるべく候はんにはまづ元祿金を以て今の新金に改造られ候事も一日も早く停めらるべき御事に候殊には又上銀を改造らるべき由の御沙汰も候はん上に只今迄のごとくに新金を造出され候におゐては天下の人其心疑ひ起り候はぬ事はあるべからず候然らば上金造られ候御ためのみにあらず上銀造られ候御ためにも不ﾚ可ﾚ然御事に候へば上銀吹出さるべきの御沙汰候時に同時に新金の事をも停められ此後上金造出され候御沙汰候迄は元祿金と新金と雜用ひ候て通行すべきよしを可ﾚ被ﾆ仰出ﾆ御事これ二つ

長崎におゐて阿蘭陀人年々に取ゆき候壹萬貳千八百四拾貳兩餘づゝの金凡二十年の料二十五萬六千八百四拾兩の事は今の新金を大坂御藏に納置れ候て年々に長崎へ差つかはされ阿蘭陀人へ相渡し候法唐人共へ今の新銀を渡され候法のごとくなるべく候これ三つ阿蘭陀へは今の新金を以て渡され候事しかるべき事に候このゝち上金造出され候に及びては其子細を申きかせ候て一年に上金六千四百貳拾壹兩づゝを渡さるべき事に候歟もし長崎表商賣の御沙汰も候てさほどまでの金を渡され候に及ばずして事濟候はんには我國の大幸たるべく候すべて對州薩州長崎表の□□□て定申べき事共に候歟

新金造出し候事を停められ候におゐてはそれよりのち年々に出來り候燒金ども皆々御藏に納め置れ候て上金改造られ候料となさるべき御事に候これ四つ只今迄のつもり凡一年の間に出來り候燒金百三貫九百目餘の事にて候十年の間には千三拾九貫目餘に至るべく候歟然らば此燒金を以て新金百兩につきて燒金貳匁貳分六厘づゝを增加候て上金とし候はゞ凡四拾五萬九

千両餘の上金は造ロロるべき事に候元祿年中逐られ候所の金の數千三百九拾三萬七千五百九拾三両□分の内今の新金造られ候につきて出し引替候處寶永七年より去年まで三年の間に凡六百六拾壹萬七千四百五拾八両三分にて候へば猶今世に通行し候所の元祿金凡七百三拾貳萬百三拾五両は候べき歟其内當年新金に改造□□□（り候 數はカ）凡貳百貳拾萬両に候歟去年一年の間に出來り候所の元祿金貳百拾貳萬三千百拾六両三分□□□（に候 へカ）ば當年一年の間に出來り候大數今貳百貳拾萬両とつもり候てさのみ大たがひは有まじく候歟但し此うち元祿以來十八年の間阿蘭陀へ流入候數ほどは減ずべき事勿論たるべく候歟猶世に通行し候所の元祿金凡五百拾貳萬両餘はあるべきつもりに候此外今の新金造出され候大數千百九拾萬両のつもりにし候てこれらの金を以て上金に改造り候はゞ凡上金九百六拾五萬九千六百両とはなるべき大法にて候これまづ大法を以て論ずる所にて候元祿以前天下通行の金の數八百八拾貳萬四千三百五拾両にて候へば上金の數はそれよりも猶八拾三萬五千□百五拾両は多くなるべき事に候此上金を以て元祿金新金等に引かへ置候所の金鈔に引かへ候時五分五の法を以て渡され候はゞ百両の鈔に上金五拾五両を渡す積りに候上金四拾九萬四千四百両餘は殘り候べき歟五分六の法にて引かへ候へば上金三拾貳萬七千七百八拾両餘殘るべし五分六の法は百両に上金五拾六両づゝのつもり也しかれば上金引かへ候事五分歟五分五歟五分六歟此三段の間たろべく候

（頭書）これらの事くはしくは別記に見え候

しからば此殘り候所を以て金銀改造られ候御費のうちを償ひ□□の事は候べき御事に候ましてや又元祿金のうちより出來り候灰吹の銀壹萬千六百三拾九貫目餘は有べく候へば後十年の間に上銀改造られ候所の料にもしかるべき御事に候これ五つ此事は別記につまびらかに見え候ここにはまづ大略をしろし候迄にて候上銀を造られ候事は其料とすべき灰吹の銀の數も多く又新銀共に雜入られ候灰吹銅吹わけ候料の鉛の數も多く種々上の御費多く候て其法も又事むつかしき事共に候上金を造られ候事はたやすき事共にて其御費も多からずして其功も又すみやかに成就すべき事□に候凡一年の□□三四百萬□の上金をば造出すべく候へば金鈔を用ひ候事僅に一年の後にはそのまゝ世に通行し候ほどの上金□□出し行はれそれより後も年々に三四百萬両づゝ出來候はんには凡一年を隔て

隔てし候ては出行はるべく候へば十年の內には其功終るべしと存候（七八年には其功終るべき事に候へどもまづ□□□□十年とは存ぜられ）これ六つ

上銀造出され候時同時□又新金共をも金鈔に引かへられ候て上銀と銀鈔と錢と金鈔との四つを以て世に通行せられ候事凡二年の後には上金造出され其後は上金金鈔上銀銀鈔錢の五品を以て世に通行あるべく候へば事の端多く候ていかゞしくも存ぜられ候へども只今迄は銀ばかりにも元祿銀寶永銀中銀三寶字銀新銀の五品わかれ候て其上惣場も五段にわかれたち金にも元祿金今の新金二品わか□□ち彼是七品□□も通行し候きしかれば上金□（金カ）鈔上銀銀鈔錢の五品を以て通行し候とも其惣場くるひ候はず候はんには世の通行のためさのみ事煩しき事も有べからず候歟殊には又銀鈔は前後に通じて二十年ばかりも通行すべき事に候へども金鈔は十年を出ずして通行とゞまるべき事に候上はたとひ事煩しく候とも萬代迄の御ためにわづかに十年の內外の事はとにもかくにも有べき御事に候歟これ七つ

上金を造られ候事も今の新金造られ候ごとくに大判の事はまづそのまゝにさしをかれ候て（銀は献上の時など臺にはのせ候はぬ物にて候黄金はそのまゝ臺になさき候物にて候へば鈔をな□□候はんもいかゞにて候故にて候）まづ小判壹分判を改造られ候はん御事歟小判壹分判皆々引かへ事濟候上には大判をも改造られ候とも又大判はそのまゝさしをかれ候とも其時の樣子によるべき事に候大判は元祿金のまゝにて候へばその□に候ともくるしかるまじき事にも候歟同じくはこれ□後々には改造られたき御事に候歟これ八つ（大判改造られ候はゞそのうちに候灰吹銀出來り候事はしかるべき事にて候但し事の體により候て大判はことごとくに出し引かへ候はぬ事有べき事に候）

前にもしるし候ごとくに最初銀鈔をとり收めべきために新錢を鑄出され候時よりして一年に新錢四萬貫文づゝを引わけ候て新金壹萬兩づゝとり收め候事十年にして新金拾萬兩をとり收め候へば上金を出し引かへられ候時に拾萬兩の數を減じ候て然るべき事に候故にて候もし阿蘭陀人の商賣の法只今迄のごとく□□□□金壹萬貳千八百四拾貳兩づゝを渡され候はんにはをのづから世に通行し候新金の數は減じ候事に候へば

別に新錢を以てとり收め其數を減じ候にも及ぶまじく候はん歟しからば年々に新錢四萬貫文づつ鑄出し候御費をも減じ候て可レ然事勿論に候もし又はからざる外の事變も出來候はんためにまづ新錢を以て□□通行し候新金の數拾萬兩をば減じ置るべく候はん歟前に見え候ごとくに上金を以て金鈔に引かへられ候事五分五の法にて百兩につきて五十五兩づゝ引わたし候へば殘る所の上金四拾九萬四千四百兩餘ある事に候もし五分六の法にて百兩につきて五十六兩づゝ引わたし候へば殘る所の上金三拾貳萬七千七百八拾兩餘ある事に候百兩につきてはわづかに壹兩の事に候てだに貳千萬兩に近き數にて候へばおびたゞしきたがひも出來候事にて候よく〳〵その見合のあるべき事には存じ候此等の間は金鈔を出され候てとり收められ候新金共の樣子により候て其沙汰あるべき事にてかねて定申難き事共に候これ九つ

此事を行はれ候次第は

金鈔を造られ候法銀鈔にまぎれ候はぬやうに有べき事にて候其餘は銀鈔を造られ候法にかはる所もあるべからず候これ一つ

金鈔を以て元祿金今の新金等に引かへられ候法皆々銀鈔にて新銀ども引かへられ候法に同じかるべく候但し引かへ候場の事は銀鈔を引かへ候所と同じく候はんには必らず事のまぎれ出來るべく候これらの義は御僉議の上よろしく御沙汰有べき事勿論に候これ二つ

上金造出され候て金鈔に引替られ候次第これ又皆々上銀を出され候法のごとくなるべく候歟これ三つ

此外上金を造られ候法幷に引かへられ候次第等これも別記に其大略をしるし候へばこゝには詳にせず候すべて金銀の事その樣子により候て法はいかほどにもよろしきやうに沙汰あるべき事すなはち活法にて候小數にかゝはり候べき事にあらず候へどもまづ大略の所を論じ候はねば手がゝりもなく候故に其小數共をもしるし候てそれに應じ候法をも大略をしるし候事共に候たゞこの心得を以ていかやうにも沙汰はあるべく候必らず此數此法のごとくと心得候はん事はゆめゆめあるべからざる事勿論に候

第八借金借銀の法を定めらるべき事

此事の法意は

銀鈔を以て借り候所を上銀出候後に上銀を以て返濟し候法たとへば銀鈔拾貫目を借り候所へ上銀を以て返濟し候はんには上より六分の法を以て上銀を引渡され候はゞ上銀六貫目にて返濟すべき事に候□□より五分五の法を以て上銀を

引渡され候はゞ上銀五貫五百匁には返濟すべき事に候前にもしるし候ごとくに此事の法を定出されず候はゞ必らず異論出來るべき事に候然れば上銀を造出され銀鈔に引かへられ候初にさきだちて上銀を以て銀鈔に引かへらるべき法の次第等詳に下々の信じ服し候やうにしるし出され其條目の末に銀鈔を以て借り候所を銀にて返濟すべき事此例に准ずべき由をしるし出さるべき御事に候上金を造出され候時も此心得のごとくなるべく候

第九最初上金を造出され候て金鈔に引かへられ候後に第二度め第三度めに（金の引かへは大かた三度にて事終るべく候）上金を造出され候て金鈔に引かへられ候法の次第皆々最初の法のごとくなるべき事

此事の法意は

前にもしるし候ごとくに上金を造出し候事は上銀を造出され候よりはたやすかるべき事に候大かたは一年を隔（ヘダテ）〳〵出し候て金鈔に引かへられ候事凡第三度にしては其功終るべき事に候歟たとひ二年づゝを隔候とも十年の間には事終るべき事に候上金造出され候度々に金鈔をも改造られ候て古き鈔と引かへ〳〵すべき事銀鈔の法に同じかるべく候其餘は別記にしるしをき候（異朝の法には一界と申す事候て銀鈔を十年ほどづゝにては引かへ〳〵し候事有レ之候これはその引かへ候につきて上に利の歸し候事も候歟このたび金銀の鈔を用ひられ候べき事は金銀改造られ候ためにに金銀をとり收められ候あとに世の通行しかるべきために金銀の鈔を出され候迄の御事たるべく候ふるき鈔と新らしき鈔とを引かへ〳〵し候はればもはや引かへの濟たる鈔に候歟いまだ濟み候はぬ鈔に候歟との見あはせのためによろしからず候事候まゝ金銀を出し引かへられ候度々に幾度も鈔をば前の鈔とまぎれなきやうに樣子を引かへ〳〵出さるべき御事に候）

第十最初上銀を造出され候て銀鈔に引かへられ候後に第二度め第三度め第四度めに上銀を出し銀鈔に引かへられ候法最初の時の法に同じかるべき事に候事（事の體により候て五度は引かへられ候事もあるべく候歟いづれにても其法は同じかるべく候）

此事の法意は

上銀造られ候事は上金造られ候よりは其事たやすからず候へば其年限のほどかねて定申難く候二十年の内外には其功終るべき事とは存じ候へども天下の事變必らずと申す事は恃（タノミ）がたき事勿論に候最初に上銀出され銀鈔と引かへられ候後に重ねて又引かへらるべきほどの上銀の數造出

し候はゞ前法のごとくに銀鈔をも改造られ候て上銀と新銀鈔とを出され古銀鈔に引かへられ候次第毎事前法に同じかるべく候其餘は別記に見え候へばこゝにはたゞその大略をしるし候

右十條第一卷の初にも論申候ごとくに如レ此事數と法とに拘り候ては終には其差謬出來候事にて候然れども其法を議し候には其數を立て候はでもかなひ難き事に候を以て只今の間に見え來り候所の數どもを擧候て其法を議し候事に候もし此法意をだによく心得られ候て其事の變により候てよく其法をも變せられ候て其機に應ぜられ候はゞつゐに大きに差謬る事も有まじき御事に候某もとより數術をしらず候て國家の故事においては精練し候べき事にもあらず候上は議申す所其理に當り候べき歟否の事を知らず候事は勿論に候へば其憚尤すくなからず存候

正德三年六月　日

白石建議六

本朝金銀銅出し事
本朝金銀銅の制ノ事の考
本朝金銀外國へ流入事

本朝金銀銅出し事

一天武白鳳三年三月對馬より銀を貢す
人皇より四十代曆數千三百三十四年を經て我國の銀は始て出たり延喜式に太宰府より毎年銀八百九十兩づゝ貢すとみえしは對馬より出せる所□此のち鳥羽堀河の比迄對馬より銀を出せしよしみえたり

一元明和銅元年春武藏國より銅を貢す
人皇より四十三代曆數千三百六十八年を經て我國の銅は始て出たりこれよりさきにも本朝にて銅を用ひられし事共見えたりそれらは皆々外國より來れる所なるべし倭國の銅これを始とすれば年號をも和銅とは改らる倭和相通じて用ゆ

一聖武天平廿一年三月陸奥國より黃金を貢す
人皇より四十五代曆數千四百九年を經て我國の黃金は始て出たりこれよりさきにも本朝にて黃金を用ひられし事共見えたれども皆〱外國より來れる所也此時大佛の像を造られしにこれを製るべき料の黃金なければ異朝に求られんとせしに陸奥國より始て黃金を九百兩貢せしかば悅ばせ給ふ事かぎりもなくやがて年號を天平勝寶とは改められたり延喜式にも陸奥國より毎年砂金三百五十兩づゝ貢せしとあるは世に奥州の貢金といひしもの也其後後白河の比迄此貢金はまいらせし也

一延喜式に下野國より毎年砂金百五十兩練金八十四兩づゝ貢せしよしみゆ此國より金出し始はいまだ詳にせず

謹按本朝國ひらけし初より千餘年を經て我國の金銀銅始て出づ天地の大寶を秘さる事と又其代の財用とぼしかりし事とをおもひはかるべき事歟それよりのち我國の金銀銅出るといへども年ごとに出す所の數すくなきを以て國用のゆたかならざる事又おもひはかるべし

一佐渡國には黃金あるよし宇治大納言物語にみえたりされば此國よりは昔よりありしかど世にこれを

採るすべをしらざる也近き比ほひ上杉謙信入道彼國を攻取しよりのちその金を採りて國用を足す太閤秀吉かねてより此事を傳聞て代をしられしのちに謙信の義子中納言景勝を欺て奥州に移し佐渡の國をとりて金を採らむとせられしかど金出ずして程なく薨ぜられたり慶長五年關が原の事終りし明る年より此國の銀出る事おびたゞしともいふばかりなくかゝる事は我國のいにしへより傳へ聞ざる所也き同き十三年の比より銀出る事はじめのごとくにはあらずこれより年々にすくなくなりて或はまた黄金をもまじえ出せり

一石見國より黄金を出せる事其始をばしらずこれもはじめは出る事多からず慶長六七年の間より出る事多くなれりほどなく此國の金をとる事をば止められき

一伊豆國より黄金白銀を出す古は此國より出候事もきこえずこれも慶長十一年の比より出て其數大かたは佐渡國より出る事のごとしほどなく出る事多からず候て採る事をとゞめらる

一陸奥の南部より黄金出づこれも慶長十三年の比出し事殊に多くしてほどなく出ず

謹按佐渡石見伊豆奥州の南部より金銀を出せし事古にきかず當家代をしろしめされ候初めより出候事本朝の古よりつゐにきかざる所也これより此かた百年の今に至て我國の金銀萬國のすぐれ多くして財用のゆたかなる事ひとり我國の古にためしなきのみにあらず外國にも類なき事共也今の代の人かゝる事をもしらずして神祖の恩德我國萬代の後迄に至るべき御事をもしらず口惜しき事也又これによりて我國天地の運慶長五年より新たに開らけ初りし事をもしりぬさらば聖子神孫よく祖業を守らせ給ひ天下のたかきいやしきをのく其所を得せしめ給はゞ神祖の御後は天地と共に久しかるべき事うらなはずしてしりぬべき御事也

又按ずるに神祖かくれ給ひし後にもこゝかしこより金銀出し事代々に聞へしかど其數多からずわづかに佐渡薩摩等の地より出す事あるよしを申す歟

本朝金銀の制の事

一天武白鳳十二年用二銅錢一廢二銀錢一

これよりさきの代々には物を交易する事米穀絹布を用ひき白鳳三年我國の銀出候より銀錢を用ひられしとみえしその十二年に及で銅錢を用ひて銀錢をとゞめられし也但し此比の銅は外國より來れる所なるべし

謹按これ我朝にて銀銅を寶貨とせし始歟

一元明和銅元年始行二銀錢銅錢一（世にいはゆる和銅錢なり）

此時より我國の銅にて錢を鑄出し又銀錢をも兼用ひられし也

一孝謙天平寶字四年鑄二新錢一

此時銅錢を改鑄らる（萬年通寶）又銀錢を改鑄らる（太平元寶）銀錢一を以て銅錢十に當つ又金錢を新たに造らる

（開基勝寶）金錢一つを以て銀錢十に當つ

謹按本朝黄金を以て寶貨として通用する事の始歟

一稱德（すなはち孝謙重祚の尊號）天平神護元年更鑄レ錢（神功開寶）

一桓武延暦十五年更鑄レ錢（隆平永寶）

一仁明承和二年更鑄レ錢（承和昌寶）

一　嘉祥元年更鑄レ錢（長平永寶）

一清和貞觀三年更鑄レ錢（饒益神寶）

一　貞觀十二年更鑄レ錢（貞觀永寶）

一宇多寛平二年更鑄レ錢（寛平大寶）

一醍醐延喜七年更鑄レ錢（延喜通寶）

一村上天德二年更鑄レ錢（乾元大寶）

謹按此のち本朝にて錢を鑄られし事いまだきかず皆々異朝歴代の錢を用ひしとみえたりかくて大明永樂の天子太宗の代に及で鹿苑院公方義滿彼國の封壽をうけられきその比異朝にして永樂新錢を鑄られしかば我國へも頒賜へり（これ永樂錢我國に來りしはじめ也）其後東山公方義政の世に奢侈を好みて國用甚だ促りしかば寛正五年文明七年同十五年三度まで大明の天子に錢を賜るべきよしを望請ひ申たる中にも文明十五年には十萬貫をだに給りなば我國の用足りなむとなげき申されきその比にはかほど迄に我國の財用はとぼしかりき

謹按一說に永祿天文の比より我國にて永樂錢を通用せしといふ事ありこれは永樂一貫文を以て古錢四貫文に當て永樂錢法にて古錢をも用ひしといふ事也

一天正十六年造二黃金大判小判一

織田殿は財を生ずるの才略おはせしかば國富たり秀吉又其才おはしたれば天下をしり給ひしより天下の財を聚斂して國用を足されき天正十六年に新たに大判小判等を造らるこれ世に天正十六年判といふもの也

(頭書)又大佛判ともいふ歟

但しこれより三年の前天正十三年の秋に金賦(カネクバリ)とて大名小名に金銀を給ひし事あり金五千枚銀三萬枚さらば其比すでに大判小判はありし也これは古よりありしものにて十六年の制とは同じからざる歟

一慶長四年始造二一分判一

此年は秀吉薨じ給ひし明ル年にて關が原の前の年也おもふに秀吉の末年より此事をたくみ出だされてかくれたまひし後に功訖りて世に行はれしなるべし

謹按以上は皆〳〵當家より前代の事共也

一慶長六年の後に大判小判一分判丁銀豆板等の制改る駿河判江戸判などいふは皆〳〵造られし所を以て稱す此外に甲州判といふありこれよりのち元祿八年迄年々に造り出せし所の金銀の惣數まづは金七千萬兩銀八拾萬貫目ほどのつもりと申す歟

(頭書)銀八十萬貫目といふはいかゞあるべきそれよりは多きつもりなるべし

一慶長十三年十二月止二永樂錢一用二京錢一

京錢といふは異朝代々の古錢の事也これより永樂錢法はやみし也

一寬永十三年六月新鑄レ錢寬永通寶

江戸と近江國坂本と兩所にて鑄らるこれよりして本朝の銅錢ゆたかになりたり 猷廟の 御恩德もまたありがたき御事也これより後に寬文年中又新錢を鑄られうらに文の字をしるさる 元祿中金銀を改造られ其後又銀をふたゝび改造られし事大錢を鑄られし事共は人々しれる所なればしるすに及ばず

謹按以上の事どもを以てまづしるべし國家の財用古には艱難にして今の賑富し事共を

本朝金銀銅外國へ入りし惣數の事

一慶長五年より前上古よりの事はしばらく論ぜず室町殿の代より信長秀吉兩代に至るまで西國中國の地より外國へ入りて金銀の數いかほどといふ事をしるべからず（これ一つ）

一慶長六年の夏交趾の舶來れり（その舶にのりしもの千二百人ありき）これ當家に及で海舶の來れる始也これより正保四年迄四十六年が間我國の金銀外國へ入りし事いかほどといふ事はしれず（これ二つ）

一慶長六年の夏外國の舶我國へ來り始めて寛永元年迄廿四年の間は九州の內いづれの浦々へも心まゝに舶をよせて商賣したり東國へも舶つきて商賣せし事もあり（慶長十四年に上總大瀧浦へ黑船つきし事もありき）長崎より外にての商賣を禁ぜられし事は寛永二年に始れりされば廿四年が間諸國の浦々にて外舶商賣せし時とりゆきし所の金銀の數はしるべからず（これ三つ）

一慶長六年より寛永十一年迄三十三年の間は御朱印船とて我國の商人ども（今の吳服所共の先祖又は富める商人共ゆるされてゆきし也）アマカワノビスパン　シャム安南呂宋等の國々へ年ごとにゆきて商賣し此外にも私にゆきてあきなふ事年々に絕ず其時に我國の金銀をもちゆきし事其數いくらといふ事をしらず（これ四つ）

一寛永の初迄は今來れる國々の外に交趾パンチャア安南呂宋ノビスパン　イギレス　カレウタ　イタリヤ　アマカワなどいふ國々より年ごとに來りあきなひしたり其後耶蘇の法をいたく禁ぜられしよりこれらの國々來る事をゆるされずこれらの國々へ持ゆきし金銀の數またしるべからず（これ五つ）

一寛永の初耶蘇の法をいたく禁ぜられしより前かた三四十年が間我國にて其法を信受せしものども年ごとに其國々の師の許へ贈遣し禮物の金銀（これは商賈の外也）いくらといふ事をしらず（これ六つ）

一近年に至りて長崎にて商賣の外私の商賣に（ぬけ商といふ事也）外國へ入りし金銀の數しるべからず（これ七つ）

一慶長の初より今年に至て對馬國より朝鮮へ入りし金銀の數いくらといふ事を詳にすべからず（これ八つ）

一いにしへより今に至て薩摩國より球琉へ入りし金銀の數いくらといふ事を詳にすべからず（これ九つ）

右五條の事はいづれも詳にすべからず（これら某が愚なるが心

づきし所也此外にもあるべしや

此九條の外に長崎一所より外國へ入りし金銀銅の大數まづしれし所左のごとし

一金貳百三拾九萬七千六百五拾兩餘（正保五年より寶永五年迄凡六十一年の間外國に入りし大數なり）

一銀三拾七萬四千貳百貳拾九貫目餘（正保五年より寶永五年迄凡そ六十一年の間外國に入りし大數也）

一銅壹億壹萬一千四百四拾九萬八千七百斤餘（寛文三年より寶永五年迄凡三十六年が間外國に入りし分也但し銅は慶長六年より寛文二年迄六十一年が間の事分明ならずといふなり）

謹按長崎一所より外國に入り候所六十一年が間の大數も右のごとしましてや前にしるせし所のはかりしるべからざる九箇條の大數おもひやるべし今しばらく法をたてゝ長崎一所にて六十一年が間外國へ入りし大數を以てかのはかりしるべからぬ九箇條の大數を推しはかるに

一金七百拾九萬貳千八百兩餘（慶長六年より正保四年迄四十六年が間に外國へ入りし大つもり幷に正保五年より此かたの惣數也）

一銀百拾貳萬貳千六百八拾七貫目餘（慶長六年より正保四年迄四十六年が間に外國へ入りし大づもり幷に正保五年より此かたの惣數也）

右金銀の事は正保五年より寶永五年迄長崎一所にて外國へ入りし大數を二倍にして兩口を都合せしつもり也

一銅貳億貳萬貳千八百九拾九萬七千五百斤餘（慶長六年より寛文三年迄六十一年が間外國へ入りし大づもり幷に寛永三年より此かたの惣數也これは寛永三年より此かたの數を一倍せしつもり也）

右は慶長六年より寶永五年迄百七年の間我國の金銀銅外國に入りし所の大數也この大數を以て推す時は外國に入りし金は只今我國にある所の金の數三分一が一に當れり（我國只今の新金は古金貳千萬兩を以て造り出せし所也といふ六百十九萬兩を三つ合すれば大數二千萬兩に近し）銀は只今我國にある所の數よりは貳倍ほど多く外國に入りし也（我國の□銀の數四十萬貫目ならではなしといふしかるに外國へ入りし數百廿萬貫目ちかくなれば我國の銀は事の外に減ぜし事なり）但し此大數はよほど引入れたるつもりなるべし凡ッ外國に入りし所の金銀銅の總數これよりは猶おびたゞしき事にや

異朝ノ寶貨古今の事を按ずるに漢の代ほど黄金多かりし代はあらずと申傳へたり其後代々を經て次第に金銀すくなくなりしほどに宋の代の中比より交鈔といひて我國の紙錢の如くなる物を用ひて國用を通ずる事になりて元朝に至てはもつぱら此交鈔ばかりを通じ用ひ明朝に及ッで銅錢を以て交鈔に雜へ用ひて今に至れりこれ漢代より後に金銀銅共に世に出る事

多からぬが故也さればかの國代々の人の論ぜし所は凡そ金銀の天地の間に生ずる事これを人にたとふれば骨のごとし其餘の寳貨は皆々血肉皮毛のごとくなり血肉皮毛は傷れきずつけども又々生ずるもの也（米穀布帛をはじめてもろもろの器物等皆しか也）骨のごときは一たび折れ損じてぬけ出ぬれば二たび生ずるといふ事なし金銀は天地の骨也（五行のうち木火土水は血肉皮毛也金は骨なり）これを採りし後には二たび生ずるの理なしこゝを以て上古より漢代に至る迄これを採得し後中國の金銀ふたゝび生ずる理なしといへり又漢代にさばかり多かりし金銀の後代に及でうせはて候事は五胡五代遼金元の代々の亂に夷狄の地へとりゆき又海外諸國の商賣のためにうせたり（我國のむかしより寛永の比迄六十餘州の中にて用ひし銅錢は皆々異朝の錢也日本一州へとり來りしばかりもおびたゞしき事也まして萬國へとりゆきし事をしはかるべし）次には又佛事興れるによれりと申傳へたり（これは異朝にてもよのつねの事に金銀の薄など多く用ゆる事もなく又殿閣等をかざるとても金銀をちりばむる事はまれ也佛像をつくり佛殿佛閣をつくるにはおびたゞしく金銀を費すが故也）これらの論によりて我國の事を考るに此國ひらけ始りしよりのち千餘年が間は金銀銅出る事もなくそれらの代にも世はゆたかにおさまれりきそのゝちこれらの寳貨我國に出しかど其數は殊にすくなかりし事又千年に及べり我 神祖の起り給ふに至りて天地も其功をたすけさせ給ひしと見えて我國の金銀銅の出し事我國の事はさてをきぬ萬國の中にかゝるためしをきかずしかりとはいへども我國土の骨一たび出てぬればふたゝび生ずべからざる理也此のち千萬年を經るとも神祖の御時のごとくに金銀銅の多く出る事あるべからず（漢の代より後の事を以てなしはかるべきもの也）しかるにそれよりのち百餘年が間外國に流れ入りし所の數かの五胡五代遼金元の代々にとぼしき中國の金銀を夷狄の地へとりゆきし數にくらぶれば猶萬々多かるべししかくて此後も今迄の事のごとくに毎年に拾四五萬兩をうしなひなば十年にして百四五拾萬兩をうしなひ百年にして千四五百萬兩をうしなふべし 神祖より 當代に及ばせ給ひてすでに百年に及びぬればこれよりのち又百年をすぐるといふも四五世の御ほどには過ぐべからずさらば聖子神孫十世二十世の御後には我國にて用ひ給ふべき金銀銅とぼしき事かの異朝の事のごとくなるべし我國のむかし金銀銅なかりし事千餘年がほど世もゆたかにおさまりしといへどもその代々は時代ことの外に上りて人の心も俗もすなほなりしが故也今より百年千

年の後次第に時代も下りて人の心も俗もうすくなりゆかむには世はいかなるべき事にやすべて異國の物の中藥物は人の命すくふべき物なれば一日もなくてはかなふべからずこれより外無用の衣服翫器の類の物に我國開け始りしより此かた神祖の御代に始て多く出たりし國の寶をうしなはむ事返す〳〵も惜むべきの事也我國萬代の後の代迄の事を思しめされ　神祖の御心をもて御心となされんには今の時に及びてその御心得あるべき事ありがたき御めぐみなるべしさらばをのづから　神祖の御後は天地と共に長く久しくおはしましてその世々も民ゆたかに國おさまりぬべき事掌を見るがごとくなるべし

白石建議七

金銀錢通用の事

金銀錢等の事を論じ候には金銀錢の三品を通じ用ひ候子細を覺悟すべき事に候もし此覺悟もなくして或は金の一品につきて論じ或は銀の一品につきて論じ或は錢の一品につきて論じ候は其一品を用ひ候所を論じ候と申すものにて通じ候と申す義を闕候によりて其論じ候所皆々其理にあたらざる事に候これによりてまづ金銀錢通用の大意をここにしるし候

第一金を以て上幣とし銀を以て中幣とし錢を以て下幣とし候事は古よりの事にて倭漢共に其代々の法制相同じからざる事どもは事長く候てしかも今日の用ひにもなり難き事に候を以て此事は論ずるに及ばず候我國の寶貨の法は東照宮御治世の初に一變し候てより此かた唯今に至るまで皆々其法によられ候御事に候（其年月の事は金銀座のものに相たづね候へども其申す事どもたしかならず候大やうは慶長六年より後の事と相きこえ候）慶長の初に小判を造出され其重さ四匁八分を以て壹兩と定められ（大判はこれよりさきに出來しと申す小判は慶長四年に始るとも申し同五年に始るとも申す按ずるに慶長六年の事なるべし又金壹兩の重さの事も四匁七分三釐とも申し四匁七分六厘とも申すその大數を以てまづは四匁八分と申す事にて一定しがたき事はすなはち東照宮の神慮なりと申し傳ふる所に候詳なる事は下に見ゆ）壹兩の金は銀にしては六拾匁に當り錢にしては四貫文に當てられ候へば凡そ金の價銀にまさり候事拾二割餘（これ金の重さ一匁は銀拾貳匁餘に當るを以てなり）錢にまさり候事八百四拾割（これ金の重さ一匁は錢八百四拾文に當る故也一錢の重さすなはち一匁也）銀の價は錢にまさり候事六拾四割（これ銀一匁に錢六拾四文に當るが故なり）これすなはち金銀錢をのづから其品の高下あるによりてをの〳〵其價を定められ候所歟まづ此等割增の數を以て金の品の銀にまさり銀の品の錢にまさり候所をよく〳〵心得べき事に候（永樂錢を停止せられ京錢を用ひられそのゝち寬永通寶錢を用ひられ候次第等はしるすに及ばず）

第二金銀錢を用ひ候法は金はもとより其品たつとく候によりて其形の大小を以て用ひ候物に候（たとへば小粒四つにて小判一兩につりあひ小判七兩餘にて大判一枚につりあひ候類）錢はもとより其品賤

しく候によりてたゞ其數の多少を以て用ひ候物に候（古錢新錢等をもえらばず大小輕重にもかゝはらずして只其數を以て通用候）銀は金と錢との間にはさまり候て其品もとより賤しからずまた甚だたつとからず其形の大小にも其數の多少にも相拘はらずたゞ其重さの輕重を以て用ひ候物に候（金と錢とは度度に秤にかけ候て用ひ候物にはあらず候銀に限りては必らず秤にかけ候て用ひ候事は其輕重を以て用ひ候物に候故にて候）これすなはち金銀錢其品おのづから相わかれたち候て其用ひ候所もそのゝゝ同じからざる所に候

第三金銀錢を通じ用ひ候法は金は其形の大小を以て用ひ候物に候へば壹兩の金は銀六拾匁には通じ用ひ候へども六拾壹匁の用にも通じ用ゆべからず五拾九匁の用にも通じ用ゆべからず壹分の小粒も銀拾五匁の外に通じ用ひ難き事又これに同じく候（たとへば高貴の人のいやしき事には通じ用ひがたく候事のごとし）錢はたゞ其數の多少を以て用ひ候物に候へば金にかへ銀にかへ候て通じ用ひ候所におゐては相妨る所なきやうには候へどもゝとより其品下りたる物にして其數多きに至ては其質の重きに堪す候へば通じ用ひ難き所ある物に候（たとへば下賤のものゝ上ざまの事には通じ用ひ難き事のごとし）銀におゐては其品たつときと賤しきとの間にたちて其重さの輕重を以て用ひ候物に候へば其大數萬貫目と申すよりして一分一厘の小數に至る迄通じ用ひられずといふ所なく候を以て金といひ錢といひ其通じ用ひられがたき所は皆々銀によりて其及ばざる所を相たすけ候物に候を以て凡そ天下の財寶通用の事におゐては銀を以て其大本とは仕る事に候これによりて萬物の價も皆々銀を以て相定め候事に候

第四金銀錢の三つ其品上中下候と申す事も相通じ用ひ候上につきて相見え候事に候たとへば金壹兩の重さ四匁八分候ものゝ銀の重さ六拾匁に當り候を以て金の品の銀よりはたつとき事を知るべき事に候又銀の重さ六拾匁候ものゝ錢四貫文の重さ三貫八百四拾匁に當り候を以て（これ一錢を以て一匁とし九十六錢を百文とし候故にて候）銀の品の錢よりたつとき事をも知るべき事に候もし此等の三つの寶相通じ用ひ候事もなくたゞ其一品につきて見候はんにはいづれの所におゐて其品の高き所をも其品の下り候所をもわきまへしらるべく候歟此故に天下の財を論じ候にはまづ通用と申す義を覺悟すべき事とは存候

第五金銀錢三つの中金と銀とは其地方の風俗によりて通じ行はれざる所ある事に候これによりて專ら金を用ひ候所にては銀をたつとび候事を知らず專ら銀を用ひ候所にては金をたつとび候事を知らず候これすなはち其用の相通せざるによりて其品のたつとき事をわきまへざるが故に候西方の國々にては專ら銀を用ひ中國四國九州又は南海北陸の國々にても半は銀を用ひ物の價をも一分二分など定めて錢を以て商賣し召つかひ候男女をも給銀とて銀を以て給分とし候事に候東方の國々にては專ら金を用ひ候陸奥出羽の地にては專ら一分判を用ひ候て小判をも用ゆる事をしらざるもの候まして銀などの事は目に見候事もなきもの共候錢においては五畿七道皆々相通じ用ひ候といへども陸奥出羽の地方にては丁錢をのみ用ひ候事に候京都の事は申すに及ばず畿內の國國は上古より此かた七道の國々の人來り集り候都會にて其地の人工商の利を以て天下に相通じ候事に候へば金を用ひ候國々には金を通じ用ひ銀を用ひ候國々には銀を通じ用ひ候て三つの寶相通じ用ひずといふ事なく候關東の國々も當家世をしろしめされ候に至て上方の工商共の移り來り候に隨ひて金銀共に相通じ用ひ候事に習ひ候へども銀の事においては其利用ある事をよくわきまへ知り候事は西方の國々の人には及ばず候歟第三條に見え候ごとく天下の財寶通用の大本と申すものは銀の事に候を東國の人はその大本におゐて明らかならぬ所候によりて財用の事を論じ候は其理にあたらざる事共多く相見え候いにしへより京都幷に伊勢の國の人は財利の事にさとく候由を申傳候き猶今もそのごとくに候て京都伊勢の商人の六十餘州の間にいたらぬ國々もなく候又むかしより東國の人は武勇の事を以ては天下にすぐれ候よし申傳候得ども財利の事におゐては天性の得ぬ所ありと見え候これすなはち物はふたつながら全き事を得がたき謂と申すべく候ましてや君子は義にさとく小人は利にさとしと申候へばしかるべき人々のこれらの事につきて下ざまのものにあざむかれ候事はもとよりの事と申すべく候歟

金銀の法弊れ幷物價高くなり候事

元祿年中金銀の法を改められ候事其品を引下され候上は可レ然事あるまじきは論ずるに及ばず候しかれども金銀をの〳〵其品を引下され候次第慶長の初に割合せられ候法意をうしなはれず候はんには其害甚しき事には至るべからず候歟然れば金銀の事を論じ候にはをのづから其品の高下ある所を覺悟すべき事に候況や又萬物の價は金と銀とを以て易候所につきて相定る事に候上は金銀の品相みだれ候に就ては萬物の價も平か

なるべからざる事これ又あやしむにたらず候こゝを以て金銀の品にをのづから其高下ありて萬物の價これによりて高下する事の由をこゝにしるし候

第一元祿年中金銀の法を改められ候へども其通用の法をばもとのごとくに金壹兩を以て銀六拾匁に當べき由を定められ候き然るに世の人ひそかに金銀の品を論じ定め候て金はむかしにくらべ候に其品大きに下り候銀はむかしには及ばず候へども金にくらべ候時は其品まさり候由にて銀をたつとみ金を賤しみ候事によりて（金壹兩の重さ四匁八分の内にて金は三匁壹分七厘ありて其餘壹匁六分三厘は銀をまじえ入れ銀は六拾匁の内にて銀三拾八匁四分ありて其餘二十壹匁六分は銅をまじえ入れられ候をもつて也）其品高かるべき物は下り其品下るべき物は高くなり候事たとへば天地の位をかへ候ごとくになり候ひきこれ金銀の法やぶれ候て萬物の價增しくはゝり候事の始にて候（これ慶長の法の金の價は銀よりは十二割餘高かるべきつりあひを覺悟せずしてみだりに古法を改め候あやまちに候歟）

第二寶永より後に及びて銀の品を引下され候といへども猶又金の品と其高下相わかれ候ほどの事に至らず況又其後金の品はむかしのごとくになされ候といへども其形の大にむかしの金に同じからず候へば其通用はむかしのごとくならず銀の品は次第に下り候にきつて世の人又ひそかに其品を論じ定めて銀を賤しみ候事の甚しきに過ぎ候を以て金銀の品ふたゝびあひやぶれ萬物の價もふたゝび相增しくはゝり候き（これ又金銀の品に高下あるべきつりあひを覺悟せずしてみだりに法を改め候故に候歟）

第三元祿年中金銀の品改り候て萬物の價增し加り候事は金銀通用の法はむかしのごとくに金壹兩を以て銀六拾匁に當られ候へども世の人金を賤しみ銀を貴とび候事によりて其通じ用ひ候所は壹兩の金わづかに銀五拾四匁に當り候を以て（銀五拾貳匁迄になり候事も候ひしかども五拾四五匁はよのつれの價に候き）たとへば其價の銀六拾匁の物の代として金壹兩を請取候てはたち所に五六匁の損失に及び候を以て其價を增して六拾五六匁に賣出さゞる事を得ず候き況又其比物によりては運上を召され候といふ事出來り候ひしかば運上に奉るべき程の價を增しくはふる事も出來りてかしこに增しこゝに加り日々に價貴からざる物もなく候き其後運上の事は停止せられ候といへども此時に至ては運上召れず候物も皆々其價增し加り候ひし上は

運上停止せられ候物も其價を減じ候にも及ばず時勢又一變し候て銀の價甚だ賤しくなり來り九拾四五匁の銀も金壹兩に相當り難く候ひしによりてつゐに諸物の價相減ずべきやうもなく候き

第四異朝にしては中世より此かた寶鈔と錢とを通じ用ひ來り候由に候我國にても近世に及びこゝかしこの國郡にて紙札といふものを以て其國郡に通じ用ひ候はすなはち彼寶鈔の法に相同じき事に候しかればたとひ其品下り候金銀に候とも當時におゐて其法を改定られ天下に通行すべき由御沙汰候上は六十六州の人誰かは其法に違ひ背く事の候べきやしかるに金銀の法相改り候度ごとに世に通行し候所の金銀の價相高下し候事は兩替の事を以て家業とし候もの共をの〳〵其利を相謀り候てひそかに金銀の品を論じ定めその定め候價の外には賣る事をも買ふ事をも得ず候によりて金ある人は銀と錢とにかふべき所なく銀ある人は金と錢とにかふべき所なくして金銀錢三つの寶相通じ用ひ難く候ひしかば農工商の類は申すに及ばず武士といへども兩替の者共の申す旨に任せざる事を得ず候によりてつゐに天下の利權は兩替の者共の掌の中に落候て天下の大法といへどもわづかに一國一郡を領し候人の紙札を以て其領内に通じ行ひ候事にも似ず候事其是非を論ずるに及ばず候歟凡武士たるほどのものども金銀の品の高下など申す事はもとよりわきまへ知る所にあらず候前條に見え候ごとくに專ら金を用ひ候國々にては銀のたつとき事をもしらず專ら銀を用ひ候國々にては金のたつとき事をもしらず候へば農工商の類と申せども金銀の品に高下ある事を論ずるに及ばず候は勿論にて候然るに金銀の品を高下しその價を論じ定め候事は皆是兩替のものゝ其利を求むべきがために申行ひ候事に候その餘の商人は申すに及ばず農工の類もまたをの〳〵その利をうしなひ候まじき事をあひ謀り候上は諸物の價相増し候事そのいはれなきにあらず候すべてこれらの事よく〳〵其源を尋れきはめられ其源を塞ぎて其流を通ぜられ候御沙汰など申す事もなくしてたゞひたすらに金銀の品下り候事のあやまちのみと議定あるべきは其一つをしりて其二つをしらざる論とも申すべき歟

金銀の法むかしに復され候に就て浮說多き事

今度金銀の法慶長の法のごとくになし返され候御事は金銀の品を始めて其通じ用ゆべき法に至る迄こと〴〵く皆其正しき所を得候て元祿以來の金銀も又をの〳〵其品に隨ひ相通じ用ひられつゐには天下の寶その寶

とする所を得べき事共に候しかるに今度の御沙汰次第不レ可レ然御事候由非議し申す人人候事はもとより國家財用の道など申す事をもわきまへ知られざる人の一時の利を貪り候もの共のために欺き誤まられ候てそれらが申す所の浮說の事を信とし用ひられ候故と相見え候を以て其一二をこゝに辨じ明らめ候

第一只今迄の金貳兩を以て新金壹兩に當られ候事は世の人其財の半を減ぜられ候由此說を信用し候事は金を通じ用ひ候法をも金銀を通じ用ひ候法をもわきまへぬ人のあやまちと申すべく候歟（此通用の法は前條に見ゆ）金の事は其形の大小を以て通じ用ゆる物に候へば其數の多少を論じ候事錢を用ひ候ごとくなる物にはあらず候まづ金を通じ用ひ候法につきて論じ候はゞ小粒四つと小判壹兩とは其數を以て論じ候時は四つと一つとの多少同じからず候へども其用ひ候所は金壹兩にて候事は相同じく候又小判七兩餘と大判壹枚とは其數を以て論じ候時は七つと一つとの多少同じからず候へども其用ひ候所は金七兩餘にて候事は相同じく候事のごとくに只今迄の金貳兩と新金壹兩とは其數は貳兩といひ壹兩といふ事の多少は候どもむかしより定め置れ候所の金壹兩に候事は相同じき事に候いづれの所におゐてその半を減じ候所はあるべく候歟次に金銀通じ用ひ候法につきて論じ候はゞ只今迄の金貳兩を以て只今迄の銀百四拾匁餘にかふべき事に候新金壹兩を以て只今迄の銀にかへ候はゞこれも又百四拾匁餘にかふべく候へばこれ又いづれの所におゐてその半を減じ候所は有べく候歟

第二新金壹兩と只今迄の金貳兩とを秤に懸くらべ候に新金の輕き事貳分に及び候由此說を信用し候事は慶長の初に小判造られ候法意を心得ざる人のあやまちと申すべく候歟凡金壹兩の重さ世の申傳ふる所或は四匁七分三厘とも申し或は四匁七分六厘とも申し或は四匁八分とも申し一定の說を存じ知り候事なく候は多くの小判を造出し候に其輕重はあるべき事に候をわづかの輕重をも論じ候におゐては世に通じ行はれざる小判ども出來るべき事甚以て不レ可レ然事の由議定ありて明らかなる法を定

められざる由に候此等の事神慮深く遠き御事たる由こゝふるき人は申つたへたる事に候を以てわづかの輕重を論じ候に及ばずして相通じ用ひ來り候事すでに百餘年に及びたる事に候況又今度の新金慶長の法のごとくに改定められ候由に候上はこれらの事もとより論ずるに及ばざる事に候歟ある人の說に元祿の金を造出され候時慶長の法三分が一を減ぜられ候へば元祿金百兩にては慶長の金三十餘兩をうしなひ候つもりに候へばわづかの增金を被下候を以て事たり候事にあらず候しかれども其時に輕重多少を論じ候說もなく候き今度に至てこれらの說を申ふらし候は兩替のものどもわづかにても步金を被下候はん事を謀りて申しふらし候事に候と云々これ又其謂ある說歟

第三新金の壹兩只今迄の金貳兩よりは輕き事貳分に及び候上は步金をくはへられ候て引替らるべき事の由此說を信用し候事は新金の事においては元祿以來の例を以て准ずべからざる義を心得ざる人のあやまちと申すべく候歟元祿の金は其形は慶長の金に相同じく候へども其品大きに及ばず候を以て步金をくはへて引替られ候き只今迄の金は其品は慶長の金に相同じく候へども其形小しく候を以て步金をくはへて引替られ候き新金においては其品といひ其形といひ元祿以後の金の及ぶ所にあらず候へばなにを以てか步金をくはへらるべく候はん歟元祿以後の步金といへども其減じ候所をつぐなひ候に及ばざる事の子細は前條の注に見え候ごとくに候況や又元祿年中金造出され候時に步金をくはへられ候ひしかども又此事によりて世の通行においてはなを私の步金をも增し加へ候て金の價は賤しくなり候き今度のごときも步金等の御沙汰に及ばれず候をだになを內々においては步金の事など申す事候由聞え候へばもし步金をもくはへられ候事の候はんには必らず又私の步金をも增し加へ候て金をも賤しみ候事出來るべき事に候かれといひこれといひ步金くはへらるべき義にあらざる事論ずるにも及ばず候さなく候だに新金の品は慶長の金に及ばず候など申す由に候もし步金等の事候はんにはいよ／＼其品を賤しみ申すべき事は智者を待すして明らかなる事に候歟

第四召つかひ候男女等給金の事に就て難儀の事出來るべき由此說を信用し候事は天下の事の情をも通じ曉らぬ人のあやまちとも申すべく候歟前條に見え候事のごとくに專らに銀を用ひ候國々にては給銀と名づけ候て銀を以て召つかふ男女の給分とし專らに金を用ひ候國々にては給金と名づけ候て金を以てその給分とし候へ共或は又切米と名づけ候

て米を以てその給分となし候事も候へば（切米とは給米といふ事をあやまりいふ事にや）六十六州の内給金を用ひ候國の數は半よりも猶すくなかるべき事に候然れども御旗本の面面を始め御城下の寺社町々におゐて召つかふ下人其數多かるべき事に候へば凡そは三十三州は給金を用ひ候つもりに候とも今より後十年の間に用ゆべき給金の料ほどは只今迄の金は世に通行すべき事に候（これ只今迄の金の數五三年の間にことごとくに吹改むべき事にあらざるを以て也）たとひ今よりして十年の後に至て只今迄の金世にとぼしく候はん時に及びては萬物の價も相定り候て新金を以て給金とし候とも召つかふ男女難儀の事も有べからざる事に候たとひ又侍以上の輩其給金の半になり候と申す名をきらひ候事も候はんには給金を改めて切米となし候事の類其望にかなひ候程の事は主人たるもの丶はからひに有べき事に候然らば又なにの煩しき事の候はん歟

第五六十六州の知行の額によりて役金をあてられ新金壹兩を以て只今迄の金壹兩に引替らるべき由此説におゐては取用ゆるにたらざる事前日既に申つくし候きたとひ又役金をあてられ其不足を補はるべきなど申す事其謂候とも終には只今迄の金貳兩を出し候て新金壹兩に替候事は相同じき事に候其故は新金壹兩を造出し候には只今迄の金貳兩を用ひ候はずしては出來らざる事に候天下の人を合せ候てこれを見候はんにはたとへば引替候時に當ては金百兩を以て百兩の金に替候ともこれよりさきに其不足を補はれ候料として百兩の役金を出し置候へば時の前後は候とも終には只今迄の金貳百兩を出し候て新金百兩に替候事はなにのかはりの有べく候はんや此等の説はあまりに愚なる事とも申すべく候歟

第六新銀の事は世の人申す所もなく候へば今度の法のごとくに行はるべき御事に候新金の事におゐてはまづ停止せらるべく候由此説を信用し候事は金銀通用の法ある事をもわきまへず前車の覆り候事をもしる事なく候あやまちと申すべく候歟元祿年中金銀の法改められ候初に世の人銀をたつとび金を賤しみ候事により候てこそ萬物の價はくるひ出候ひしはいまだ遠からぬほどの事に候へば誰かは見及び聞及び候はぬ人の候べきや新銀すでに世の

人たつとび思ひ候事に候はゞ世の人また只今迄の金の其形小しく候事をばいかゞは存じ候べきたとへば只今迄の金壹兩を以て新銀にかへ候はんにはわづかに其銀三拾匁を得べき事に候元祿の初壹兩の金を以て銀五拾四五匁にかへ候時だに萬物の價は增し加り候き況や壹兩の金銀三拾匁にかへ候はんには萬物の價はいかゞなりはて候べきにや殊には又此事を議せられ候事三年を經て事定り候御事をわづかに百日をも經ず候て又改めて御沙汰候はん事國體におきてしかるべき御事に候はん歟これらは無下に淺ましき說と申すべく候歟

第七新金新銀其數いまだ多からず候間はその通用相滯り候事はあるべき事に候然れば新錢多く鑄出され候て金壹兩に四貫文づゝの定を以て賣出され候はゞ新金の通用をば相たすくべき事の由此說におゐては一向に其いはれなしとは申すべからず候へどもいまだ其事理をもきはめつくさずして殊には國家の大體と申す事の候をば心得ざる人のあやまちに候歟慶長の初より金壹兩を以ては銀にしては六拾匁錢にしては四貫文に相當つべき由の御定は天下の通法に候事勿論の事にて候しかるに今度御沙汰の次第新金壹兩は新銀六拾匁に當られ只今迄の金壹兩は只今迄の銀六拾匁に當られ候割增の法に詳に相定められ候へども錢においてはとかくの御沙汰に及ばず候御事はもし只今迄の金壹兩に錢四貫文をかゆべき由を定められ候はゞ新金壹兩を以ては八貫文の錢にかふべく候歟又新金壹兩に錢四貫文をかゆべき由を定められ候はゞ只今迄の金壹兩には貳貫文の錢をかふべく候歟金と銀とは慶長の法によられ候所に錢においては慶長の法にたがふ所も候はん事不レ可レ然御事に候況又錢の價或は甚だ高きに過ぎ（これ壹兩に貳貫文の事也）或は甚だ賤きに過ぎ候はゞ（これ壹兩に八貫文の事也）下賤のもの共のために尤以て不レ可レ然事に候錢はもとより賤しき寶に候上は其法を定めらるゝに及ばずして新錢を鑄出され候て世に行はれ下々にての通行に打任せられ候におゐては只今迄の金にては壹兩につきて三貫貳三百文にも通行すべき事に候此後十餘年をも過候に及びて新金の世に行はれ候事も年久しく萬物の價も相定り候時に至てはをのづから新金壹兩につきて四貫

四五百錢にも相當り二十年を過ぎ候はゞ金銀錢の三つ其價平かにして慶長の法のごとくにたちかへるべき事に候歟

右愚存の趣こと〴〵く皆世の人の申す所を難じ申す所に候へば其憚すくなからず候但し某とてももとよりこれらの事におゐては一向に其心得なき事共に候へども異朝の書には天下財用の事ども詳に論じ候物ども其數多く候をわかき時に其かたはしばかりはうかゞひ見候事も候て今日の事に存じ合はせ候所々候を以て心のおよび候事共を書しるし候申す所の理に當り候歟否におゐては覺束なき事勿論に候

白石建議八（別記）

上銀に改造候料の新銀事

一元祿銀八萬貫目　寶永以來新銀共出候時に出し替ず候元祿銀拾八萬六千四百拾七貫目候十八年の間に外國へ流入候とも八萬貫目は出來るべく候歟

一寶永銀貳萬貫目　中銀以來出し替ず候寶永銀五萬貳千五百五貫目候是又まづ貳萬貫目程は出來るべく候歟

一中銀千九百五拾七貫目　これは皆々出來るべく候歟

一三寶銀三萬貫目　三寶銀いまだ吹直し候はぬ所拾五萬八千貳百拾七貫目候これ又皆々出來るべく候其内三萬貫目を上銀の料とし候

四口合拾三萬千九百五拾七貫目

上銀造候時增加候料の灰吹銀事

一灰吹壹萬千六百三拾九貫拾四匁餘は
元錄金七百三拾貳萬百三拾五兩より出來るべき所に候

一灰吹五萬貫目は
諸國山々より二十年の間に出來るべき大數に候（一年につきて貳千五百貫目づゝ）

一灰吹四萬千貳拾九貫四百四拾匁は
三寶銀拾貳萬八千貳百拾七貫目より出來るべき所に候〇但し外に三萬貫目は上銀に造候料に除き候

一灰吹七萬八千四百六拾壹貫四百匁は
新銀三拾九萬貳千三百七貫目より出來るべき所に候〇但し外に新銀貳千四百貫目は二十年の間長崎表にて唐人方商賣の料に除き候

四口合拾八萬千百貳拾九貫八百五拾四匁餘

上銀造出し候大數事

一上銀拾四萬四千貫目は
元祿銀八萬貫目を以て造る〇此增灰吹六萬四千貫目（拾貫目につきて增灰吹八貫目づゝ）

一上銀五萬貫目は
寶永銀貳萬貫目を以て造る〇此增灰吹三萬貫目（拾貫目につきて增灰吹拾五貫目づゝ）

一上銀五千八百七拾壹貫目は
中銀千九百五拾七貫目を以て造る〇此增灰吹三千九百拾四貫目（拾貫目につきて增灰吹貳拾貫目づゝ）

一上銀拾萬貳千貫目は
三寶銀三萬貫目を以て造る〇此增灰吹七萬貳千貫目（拾貫目につきて增灰吹貳拾四貫目づゝ）

一上銀壹萬四千拾九貫八百目餘は
右四色の新銀共に增加候殘り灰吹壹萬千貳百拾五貫八百五拾四匁を以て造る

五口合三拾壹萬五千八百九拾貫八百目

此内銀座雑用銀の料に引渡す所九千四百七拾六貫七百貳拾四匁（拾貫目につきて三百匁づゝの法）

殘る

三拾萬六千四百拾四貫七拾六匁

右は銀鈔に引替候料の上銀の數也

右造出し候上銀三拾壹萬五千八百九拾貫八百匁を元祿年中本郷におゐて引替候古銀貳拾三萬六千八百八貫五百目の數に引くらべ候へば七萬九千八百八拾貳貫三百目多く相見え候

上銀を以て引替候べき銀鈔の數事

一元祿銀八萬貫目の鈔

一寶永銀貳萬貫目の鈔

一中銀千九百五拾七貫目の鈔

一三寶銀拾五萬八千貳百拾七貫目の鈔

一新銀貳拾九萬貳千三百七貫目の鈔

新銀惣數三拾九萬四千七百七貫目の内二十年の間に新錢にて引替候所拾萬貫目幷長崎表唐人商賣の料貳千四百貫目新銀にて渡し其新銀の鈔共をとり收め其數を減じ候て相殘る所の數如此に候

五口合五拾五萬貳千四百八拾壹貫目

上銀を以て銀鈔に引替候法ノ事

一銀鈔五拾五萬貳千四百八拾壹貫目

此五分五の法（銀鈔百貫目につきて上銀五拾五貫目づゝ）

上銀三拾萬三千八百六拾四貫五百五拾匁

造出し候上銀三拾萬六千四百拾四貫七拾六匁（銀座雑用銀を引渡し候外なり）を以て右五分五の法に引替候へば殘る所

貳千五百四拾九貫五百貳拾六匁

金にして四萬貳千四百九拾貳兩餘

右殘り候所の上銀を以て銀座買出し候地灰吹の代等の御物入のうちは償はるべき御事に候歟

上銀を以て四度に銀鈔に引替候次第事

一第一度

銀鈔壹貫目につきて

上銀四百目と銀鈔三百目と相渡し

銀鈔三百目は引とる

一第二度

銀鈔三百目に

上銀百目と銀鈔百目と相渡し

銀鈔百目は引とる

一第三度

銀鈔百匁に
上銀三拾匁と
銀鈔三拾匁と相渡し
銀鈔四拾匁は引とる

一第四度
銀鈔三拾匁に
上銀貳拾匁相渡し
銀鈔拾匁は引とる

右
渡し候所　上銀五百五拾目
引とり候所　銀鈔四百五拾目
如此に漸々に其數を減じ引替候時は一旦に財寶の數を減じ候やうに無レ之可レ然候歟たとひ五分四の法又は六七分の法も此例に准ずべく候

上金に改造候料の新金事

一元祿金五百拾貳萬兩餘
元祿金千三百九拾三萬七千五百九拾三兩三分之內寶永七年より當年迄四年之間に新金となし候所凡八百八拾壹萬七千三百五拾八兩三分の大數にして殘る所の大數如レ此にて候但し此內十八年の間阿蘭陀に流入り候所の數計難く候歟

一新金千百五拾四萬三千九百六拾兩
寶永七年より當年迄四年の間に造出し候所の數千百九拾萬兩の內二十年の間長崎表におゐて阿蘭陀人商賣の料貳拾五萬六千四拾兩と十年の間新錢にて買收め候所拾萬兩とを除き候數にて候

兩口合千六百六拾六萬三千九百六拾兩

上金造候時增加候料の燒金事

一燒金千三拾九貫目
前十年之間に諸國御料私領の山々より出來り候べき數にて候但し一年に百三貫九百目づゝの積りに候
後十年の間出來るべき所はこゝにはかぞへ入れず候

上金造出し候大數事

一上金三百四拾萬九千六百兩餘は
元祿金五百拾貳萬兩の內に候灰吹銀を吹去り候て造る
元祿金壹兩の重さ三匁壹分七厘づゝの積りを以て如レ此

一上金六百貳拾八萬千貳百六拾五兩餘は
新金千百五拾四萬三千九百六拾兩を以て造る

此內
四拾五萬九千七百兩餘は前十年の間山々より出來る燒金を增加候て新金壹兩を上金壹兩に造る(新金壹兩に燒金貳匁貳分六厘づゝ)五百八拾貳萬千五百六拾五兩は新金千百八萬四千貳百六拾兩を以て造る(新金壹兩の重さ貳匁五分づゝの積りを以て如レ此

兩口合九百六拾九萬八百六拾五兩

此内金座細工料の金を引渡す所貳拾三萬四千百三拾壹兩壹分銀貳匁九分（金百兩につきて貳兩壹分拾匁づつ）

殘る

九百四拾五萬六千七百三拾三兩貳分銀拾貳匁壹分

右は金鈔に引替候料の上金の數也

右造出し候上金九百六拾九萬八百六拾五兩元祿年中本郷にて引替候古金七百六拾九萬八千五百兩の數に引くらべ候へば百九拾九萬貳千三百六拾五兩多く相見え候

上金を以て引替候べき金鈔の數事

一元祿金五百拾貳萬兩の鈔

一新金千百五拾四萬三千九百六拾兩の鈔

兩口合千六百六拾六萬三千九百六拾兩

上金を以て金鈔に引替候法の事

一金鈔千六百六拾六萬三千九百六拾兩

此五分五の法（金鈔百兩につきて上金五拾五兩づつ）

上金九百拾六萬五千百七拾八兩

造出し候上金九百四拾五萬六千七百三拾三兩貳分餘（金座細工料を引渡し候外也）を以て右五分五の法にて引替候へば殘り候所

貳拾九萬千五百五拾五兩貳分餘

此殘り金を以て銀座買出し候地灰吹之代幷二十年之間新錢を鑄られ候御物入の内は償はるべき御事歟

上金を以て三度に金鈔に引替候次第事

一第一度

金鈔百兩につきて

上金四拾兩と金鈔三拾兩と相渡し

金鈔三拾兩は引とる

一第二度

金鈔三拾兩に

上金拾兩と金鈔拾兩と相渡し

金鈔拾兩は引とる

一第三度

金鈔拾兩に

上金五兩　渡し

金鈔五兩は引とる

右

渡し候所　　上金五拾五兩
引とり候所　金鈔四拾五兩

本書にしるし候ごとくにこゝにしるし候所は上中下三法のうちの下の法にて候もし元祿の金銀をはじめ新金新銀共の數も多出來り燒金灰吹銀等の數も增し候て出來り候においては此法を斟酌せられよろしく御沙汰候はゞ上金上銀造出し候手數も久しからず引替られ候所も六七分の法を用ひられ多くの御費共の御事もつぐなはれ候ほどの御事もあるべき事に候歟こゝにはまづ某愚存の大法をあらはし候迄に御座候

正德三年六月　日

將軍宣下三拾一度儀不同次第

一賴朝卿の時の事

是武家の初例也平家物語に見えし所(候にイ)は壽永二年十月四日に院使左史生中原康定鎌倉に下向すこれを鶴岡の神殿にむかへられ(居ながらに院宣の御使をむかへむ事を憚られし故也と云)・なイ東國の勇士を撰て三浦介義澄・(なイ)して院宣を請取らる(義澄甲冑して召具する所の家子郎等皆々物具せしと云々)院宣を蘭營に入れられたり其營に砂金百兩いれて返され拜殿にして康定に獻盃あり次の日康定鎌倉殿に參る賴朝布衣に立烏帽子着て對面あり次の日又見參す引出物多くひかれて其日歸洛すと云々東鑑には建久三年七月廿五日賴朝(束帶)勅使廳官肥後守中原景良同康定等を(兩人束帶)鶴岡にむかへられ義澄・(なイ)して宣旨を請取らる(義澄が裝飾家子郎等の事平家物語に同じ)廿七日勅使を招請して獻盃あり引出物あり廿九日勅使歸洛すまた引出物多く引かると云々

按ずるに平家物語東鑑のしるす所年月日大きに異也(東鑑に見えし所は物語に見えし年より十年後の事也)世には東鑑を正說とするにや又東鑑建長四年の記には賴朝の時の例分明ならずとしるせり不審也右兩條をあはせ見れば其大略は見つべきもの歟

一賴家實朝兩將軍の時の事

宣使下向に及ばず宣旨をば六波羅の留守に下され六波羅より使して關東にまいらせしと見えたり

右を三代將軍といふ也

一賴經賴嗣兩代の事

賴家實朝の時の例のごとし

右を攝家將軍といふ也

一宗尊親王の時の事

東鑑に見えし所まづ將軍宣旨案文を六波羅の留守に下され正文をば官使權少允・(なイ)して關東へ下さるべきにて留守より使を下してその案文をまいらす鎌倉の執權等舊例を尋ねられしに賴朝の例分明ならずと云々

按ずるに東鑑此條の下に官使下向の事見えず

鎌倉の執權等申しとゞめしにや

一惟康親王の時の事

官使下向に及ばず

一久明親王の時の事

仙洞にて將軍宣下ありて後に鎌倉へ下向あり

按ずるに京にて將軍宣下の初例也

一守邦親王の時の事

官使下向に及ばず

右を親王將軍といふ也

以上すべて鎌倉九代將軍といふ

一護良（大塔宮の御事）成良兩親王の時の事

兩親王共に京にて將軍宣下あり大塔宮は鎌倉へ御下りに及ばずとらはれ給ひ成良親王はしばしが程鎌倉に御座ありし也事は太平記等に見ゆ

太平記を按するに建武二年の冬相模守時行を征伐のため尊氏關東に下向しては□□たゞし公卿補任には後醍醐院建武二年鎭守府將軍になされ北朝光明院暦應元年八月十一日征夷大將軍に遷補せらるゝのよしのせられたり（○今按圖書館本無此註）

一室町殿十五代の間の事

みづから將軍と稱せられしかば宣下の事に及ばずと見えたり

義詮延文三年十二月十八（入カ）日將軍宣下を得られ候時日野左中辨時光勅使たり佐々木太郎判官秀詮して宣旨を請取らるこれ賴朝卿の時三浦義澄して請取られし例を用ひられしよし太平記には見えたり義滿の代の事詳ならず此ほどは（下脱、○今按圖書館本無此註）

尊氏義詮義滿の三代は南北兵亂の中なればたゞ宣下ありし由にて其儀は備らずと見えし義持應永の始に將軍に補し給ひし時其儀初て備るこれ室町家宣下の儀を行はれし初例也義量義教二代の事又詳ならず其儀を備へらるゝに及ばすと見えたり義勝の時に義持の例を用ひられ義政又義持義勝の例を用ひられしと見ゆ是より後義尚義植義澄義晴義輝義榮義昭七代の間天下大きに亂れしかば其儀を行はるゝに及ばず

謹按賴朝卿の時の儀後代の例に同じからざる歟官使わづかに廳の官人たり是一ツ居ながら關東にて宣旨を承らるこれ二ツ拜賀の儀に及ばずこれ三ツ鶴岡の神殿にして官使をむかへらるこれ四ツ宣旨を請取る所の人甲冑を帶すこれ五ツ但しみづから束帶し宣旨の筥に砂金いれて返されし事は永く武家の佳例となりたる也又室町殿十五代の中に大儀を備へて宣旨を請給ひしはわづかに三代也いづれも京都に

御座ありしかば官使其第（亭イ）にゆきむかいて位記宣旨等を參らせ堂上の人々皆々參賀の事ありしなどこれまた鎌倉の例に同からず

一當家神祖より御三代の間の時の事

神祖の御時は伏見の御城にして將軍宣下の事承らせ給ひやがて御參內ありて御拜賀あり其後將軍の御事を德廟へ讓らせ給ふべきにて御父子共に御上洛ありて宣旨かうぶらせ給ひ御參內ありて御拜賀あり其後德廟より猷廟へ御讓職の時も前の例のごとく御父子御入洛宣旨（イナシ）をかうぶらせ給ひて御參內ありて御拜賀あり

謹按京都にて宣旨を承らせ給ひし事は室町殿の例に似たれども室町殿はもとより京に御座有し也又御拜賀の事ありしとも見えず當家御三代ははる〳〵關東より御上洛ありて宣旨をかうぶらせ給ひ御參內ありて御拜賀あり御父子御讓職の事ありしに至りては室町殿の代々其例を聞かずまして鎌倉の例に比すればもつとも大きにかはれる也

一嚴廟幷前御代の時の事

嚴廟御幼稚たるが故に御上洛の事に及ばず官使はじめて關東に下向あり堂上の人々をの〳〵又參賀せらる其儀すこぶる室町殿の時の例に似たり（室町殿の時の例を御覽の爲に別に舊記を寫して呈す）前御代御幼稚の事にあらずといへども嚴廟の御時の例を用ひらる

謹按ずるに此御兩代關東にて宣旨かうぶらせ給ひし事は賴朝卿の例に似たりといへども其儀の次第は彼例に同じからぬ事共あり（官使として公卿兩局等下向あれば其儀も重く諸大名等皆束帶の儀なれば鎌倉の例にあらず）又其儀の次第室町殿の例に似たれども官使下向ありて宣旨をうけ給ひぬれば其例ども同じからず（又室町殿の（時イ）御家人等束帶拜の儀には及ばず）且は又神祖より此かた三代當家の御例ども同じからず（御上洛ありて宣旨承らせ給ひ參內拜賀等の御事なければなり）さらば嚴廟より此かたの御例古來將軍家の例にもあらず又當家の初例にもあらず細かにこれを論じなば嚴廟の御時は御幼稚のうちなれば一時權宜の變例とも申すべし前御代の事をもて今日の御例の始とぞ申すべき然るに世の人此儀は武家の舊儀當家の御佳例也と申さば大きにあやまれる事なるべしむかし周の代の

禮に天子諸侯に命を賜りて侯伯となされし時（諸侯の長の事なり）天子の公卿其國に就て王命を傳ふるよし見えたり又將軍を幕府と申しまいらする事は漢の衞青大幕を渡りて（幕と漢と通ず則沙漠の地をいふ也）匈奴をうちて功ありしかば武帝御使を下されかの幕中の府に就て大將軍に拜せられしより事始るとも申すなりさらば朝家より官使を關東へ下されて將軍の宣旨をなさるゝも居ながらこれを承らせ給ふも古の禮にあらずとは申すべからずたゞこれを神祖より此かた三代當家の御例に比すれば同じからずと覺ゆるのみ也又按ずるに鎌倉九代將軍のうち官使下向のたゞ一度其餘は皆々六波羅の留守にて宣旨を下さる其儀もつとも略せり室町殿の代々京都に御座ありしかども大儀を行はれしはわづかに三度にして拜賀の事などは聞えずこれ又其禮備れりといふべからずしかるに當家御代々或は御上洛あり或はしからずといへども其儀備り其禮盛なりし事ども世々に絶ずさらば武家の代となりしより此かた當家のごとく其儀の備り其禮の盛なる事あらずとこそ申すべけれ

進呈之案

通鑑綱目後唐莊宗の伶人の禍によりて亡びたまひしこと先儒の論すでに進講し畢ぬ今別に問答の事をもふけ按を作りて進呈する事は先儒の說いまだ盡ざるに似て世の疑をなすべき所を注して竊に先儒の說を弘む抑孔子春秋を作り給ひしより後代の儒者其筆をつぎて史鑑の書を作れることは前世の事を以て後代の戒となすべきがためにあらずといふ事なしさればいにしへを知るといへども今をしらざれば所謂春秋の學にあらず凡史鑑を進講せんものはすべからくいにしへを採て今を論ずべししかりといへども後世にいたりて古を是とし今を非とすといふを以て其罪を得るもの多きがゆへに世の講官多くはいにしへをのみ論じて其詞今に及ばずついに仲尼の春秋を作るの志を失しぬ臣忝く講讀の職を叨りにすること十四年進講の日に及んでいまだかつて身のゆへを以てあへてその言をかくさず其志ひとへに我きみをして堯舜のきみとなして此民をして堯舜の民たらしめんとおもひのぞむにあり爰を以て今呈する所あへて忌諱の言を避ず只願くは天地の量を以て狂直の罪を宥れ日月の明を以て疎愚のまことを照し給はん事をひとり臣が幸のみにあらず天下の幸甚たるべし莊宗の御事先儒の論せし所すでに詳なりといへども世のうたがふ所またなきにあらず

其詞にいはく歐陽脩の五代史司馬光の資治通鑑朱熹の綱目等を考るに莊宗の人とならせ給ふ所を見るに身を亡し家を損じ給ふべきこと尤多しされば身を亡し家を損じ給ふ事ひとり俳優をこのみ伶官を寵任し給ひしによれりとのみいふべからず

是疑の一ッ也

此言しかるにあらず是をたとふる身常に病多き人の好て毒物を喰ひてついにその毒にあたりて死せしを論じて此人常に多病にてたとへ毒物を好まずとも長生すべき人にあらずされば毒物にあたりて命を損せしものといふべからずといふが如したとへ病多き人ならんにも常に藥餌を怠らずしていたく毒物を禁せんにはおのづから長生すべき理なきにしもあらずも

し此論のごとくならん時は夏桀は瓊宮瑤臺を作り給はずとも殷紂は北里の舞靡々の樂を作らず比干がこころをさき給はず箕子を囚へ給はずともついに國ほろび給ひなんものなりといふがごとし

以上上の疑の解也

世の人誰か戯のことなかるべきされぱいにしへより戯劇のこともまた多しそれが中俳優のことを以て身をほろぼす毒物になぞらふることはいかにぞや

是疑の二ッ也

俳優のこともつとも其害の大なるもの三ッあるに似たり一ッにはいはく民の風俗を破る二ッはいはく國の貨財を竭す三ッにはいはく下不レ敬レ上是なりまづ民の俗をやぶるといふ事は國家閑暇あるときはかならず放遊怠傲のこゝろある事よの常のならひ也かの時にあたりて其上たらん人稼穡の艱難をおもひ給ひて佚豫し給ふ事なからんにも猶恐らくは下たらん者怠傲の心を生じなん夫に上たらん人の放遊をこのみ給はんにはいかでその下は怠り荒まざるべき放遊のこと一ッにあらねどもその中最人の心を感じ動かす事聲色の二ッにしくものはなし我朝のいにしへを見るに猿樂田樂などいふ事をいたくこのみ給ひし代々には位高く祿厚き限りは猶其戯をもてあそびしかど上好むものあれば下かならず甚しきならひなれば孟子に品下り身卑しきは傾城白拍子などいふものにうた唄はせ舞まはせ酒のみ亂れて士は弓馬の道をもわすれ農商はおの〳〵その業に怠りしほどに治れる日には田野ひらけず貨財通ぜずみだれたるに及では將驕り兵弱しされば士民の志をうしなひ氣を惰らしむるもの職として是によれりこれを民の俗を破るとは申なり二ッに國の財を竭すとはおよそこれらの戯の舞衣こと〴〵に綾羅錦繡をたちぬふにあらざれば觀るにたらず凡一衣の費中人十家の一年の産にあたるべしむかし隋の煬帝の散樂をめされてこれが衣を製せられしに錦繡これがために盡きぬといふ是なりそれのみならず是をあつまり見る人を饗するには粱肉酒醬山のごとくにつみ海のごとくに湛ふ一曲の妙舞の前にはこれに纏頭するに金帛をなげあたふる事塊のごとく礫のごとし彼あつまり見し大名高家などいはるゝが又我方にて此事をなさしむるにはかの前に見しよりも猶風情あらんと浮奢を競ひあらそふほどに

彼是同じく府庫の財竭てついに横歛厚征の政その國國に行はれて民こと〴〵く窮り苦しみ愁冤の聲天下にみつ是を國の財をつくすとは申也三ッに下不レ敬レ上といふ事は尤心得ありぬべき事にて侍るなりむかし先王の代名と器とをつゝしませ給ひき名といふは天子諸侯卿大夫士などいへる類の高き卑しき位あることをいふなるべし器とは其高き卑しきによりて各用ゆべき限りありと見えたり天子の冕は十二旒その服は十二章諸侯より下はおの〳〵其數を減じ天子の堂の高さは九尺其舞の數は八佾諸侯より下は各其數を減ずるの類なりむかし大禹の儉德におはしませしも美を黻冕にいたすと聞え孔子の禮は其奢らんよりはむしろ儉なれとのたまひしも周の冕を服せよとのたまひきかゝる服御の物に美をいたし給はん事聖人の御こゝろにいかでこのませ給ふ事なるべきされどかくみづから尊大にせさせ給ひてその位の高き卑きによりて各其かぎりを定めたまひしこと只僭禮の漸を防ぎ給ふべき履霜の戒とこそ見えたれ又禮に路馬の齒を問ふ時は刑あり芻を踰るときは刑ありと見えたりもし今の世にはしたなく君の召さるゝ御馬の年を問あやまりて其芻を踰えたりとて忽ちに刑せられんには世の人豈虐政とおもはざらんやこれたゞ潛にも上を犯すのこゝろあらせじとの御事なるべしされば季氏が庭に八佾を舞せしに是をも容忍ぶべくんばいづれをか容忍せんとのたまひし我國の申ならはせる諺に天子の御冠のかたぶきし方の國はたちまちにみだるゝ事也と云へり位なきものみだりに御階のうへにうちのぼりぬればまもりの御神の爲に蹴落され侍り又何某の攝政殿のいづれの社にまいりたまひて土器して御酒をのみ給わんとせしに土器われたり是その御神の位ひきくましますゆへなり又何がしの關白殿の御沓をあやまつていやしきが足にいれしにぬがんとするに叶わず此事聞し召れてゆるし給ふよし仰ければ忽に脱げたりなど申なりされば世の人上をおそれ敬ひ參らすること神よりも猶ふかし爰を以てはじめ天孫諸神をしたがへ降り給ひしよりこのかた百王のいまに至るまで天祚たへさせたまわぬ御事はいふにおよばずおよそ朝家の人々みなこと〴〵くかの諸神の後にあらずといふ事なしよて我國は人の心正しくして王道の盛なる國とこそみえたれ此事

世にためしなき御事なりと異朝の人も申候ひき武家の世をしろしめされんこともかの先王の道の如くにおはしまさんには其御末の天地とゝもに長く久しかるべき其ためし遠きに求むべからず然るに傳歌雑劇の事と申は古にありし人事をなして歌ひ舞ふ事なれば高き人ともなりいやしき人ともなりよき人となり惡き人となり或は樂しく或は哀しく或は榮え或は辱しめられ或は戰ひ或は囚はるゝたぐひ事としてあらずといふ事なしもし上たらん人の其戯をなしたまわんときいやしき人ともなりあしき人ともなりかなしきことをもはづかしめらるゝことをもなし給んに其御事に從はんものこれを賤しめ是を惡みこれをうち是を捕ふることもあらんに忽にかの土器碎け沓ぬげざるやうに眼くらみ血をはくなどいふことなからんには自ら上を畏れ敬ふ心も怠りぬべき心有る人は是を見參らせて穴かなしことは思ふべけれど其餘の人はあら面白や堪がたやなどとゞめき渡りていさゝかも敬畏の氣色も見えず是其上の敬ふべく畏るべきことを知らざるにはあらねど常にかゝる事にならひぬれば果は上を侮り參らするこゝろなどか生せざるべき是を自ら侮りて人あなどるともいへるなるべしかの後唐の伶官敬新磨が莊宗の御頬を批し奉りしなどいふ事も常にかゝる事にならひしによれるが故なるべしされば易にも履レ霜堅氷至といふ事も父と君とを弑することは一朝一夕の故にあらずとは聖人戒め置せ給へり

以上第二の解なり

むかし先王禮樂を以て其民を化し給ひき上は黄帝雲門の樂を作り給ひしより周の武王太民の樂を作らせ給ひしに至りて列聖こと／＼くみな其樂を作りこれを用ひ給はずといふ事なしされば今我朝にしてかの禮樂を議せんに先王の樂の如きは今既に傳はる所なく今の雅樂又用ゆべき所にあらずんば本朝の昔に用ひられし舞樂をや擧て行はるべき

是疑の三ツなり

此事も亦然るべからず昔本朝に用ひられし所の神樂はこれ神代の餘風なり其餘唐樂新羅の樂あり後世に及で我國の人の作れる所といへども是皆唐宋高麗新羅の樂等によりて作れる所なりいはゆる唐樂を異朝の書に校るにみな是彼國の所謂散樂にして高麗新羅

の樂にいたりては皆是夷部の樂也いはゆる先王の樂にあらず我朝の舞樂の今の雜劇に於ける是を譬るに今の雜劇を假婦戲娼舞にたくらぶるに稍雅なるがごとし只其傳來のひさしきを以皆人いにしへの樂とおもへるなり我朝のいはゆる舞樂にていかで此民を化することあるべき

以上第三の疑の解なり

されば今の代に至りて古に志まします君興り給ふとも禮をのみ議し給ふべし其樂を議せらるゝ事は叶ふまじきや

是疑の四ッなり

然るにあらずもし古に志給ふ君起り給はんには今の散樂を用ひ給はんも猶先王の樂を用ひ給ひしに稍近かるべし昔齊人莊暴といひしもの其君の樂を好むといふ事を語り給ひしを孟子に告しに孟子宣王に見えて王莊子に語るに樂を好む事を以てし給ふことありやと申されしに王色を變じ給ひ寡人先王の樂を好むに非ずたゞ世俗の樂を好むのみなりとのたまひけり（世俗の樂は今の雜劇の類なるべし）孟子王の樂好み給ふこと甚しくば齊の國は治に近からんか今の樂は猶いにしへの樂のごとしと申されしに其ゆへを問給ひしかば獨樂してたのしみ給ふと人と樂してたのしみ給ふと何れやたのしく覺えさせ給ふと問ひ參らせしに人と共にするにはしかじと云はれしかば又少きと樂して樂み給ふと衆と樂してたのしみ給ふといづれやたのしく覺えさせ給ふと申されしかば衆きとたのしむにはしかじとのたまひけり（仰けりイ）其時孟子臣願くは王のために樂を申しなん今王爰に鼓樂し給はんに百姓王の鐘鼓の聲管籥の音を聞て皆首を疾しめ額を蹙めて相告て吾王の鼓樂を好み給ふ何ぞ我をして此極に至らしむる父子相見ず兄弟妻子離散すといはんに是他なし民と樂を同じくせさせ給はねば也今王爰に鼓樂し給はんに百姓王の鐘鼓の聲管籥の音をきゝて皆よろこべる色ありて相告て吾王願わくは疾病せさせ給ふことなからんか何を以てよく鼓樂し給ふといはんはこれ他なし民と樂を同じくせさせ給へば也今王百姓と樂を同じくし給はんには則ち天下に王たらせ給ふべしとぞ申されける（民といひ百姓といふは卿大夫士庶人をもかれていふなるべし）この言によりて見る時は後の世の君民をして首を疾しめ額を蹙しめ給ふ事なからんには天下の人皆その君鼓樂し給はざらん

ことをこそおそるべけれされぱたとひ韶舞の樂をなし給ふとも百姓の苦しみ極らんにはいかで先王の化を語るに及ぶべき是等を樂といひ鐘鼓をしもいはんやとも其人にあらざれば禮樂虚く行はれずとも申す也

　以上第四の疑の解なり

抑當代の神祖と申すは神武を以て亂を撥ひ聖文を以て治を興させ給ひしかば天下の民其樂をたのしみ參らすること今もたへず然るに神祖世にまし／＼し時雜劇をこのませ給ひ自もこの事をなさせ給ひまた伶官を寵任し給ひしなど申す事を世の人創業の君御あやまちのよし申もの侍るなりかの孟子の詞によりて見る時は神祖の樂して樂ませ給ひし所は卽ち先王の樂とこそ申べけれいかでこれらの御事を世人潛かに御あやまちとは申すらん

　是疑の五ッなり

是等の說悉くその代の御事知らざる人の議し申所なり本朝にして此戯出來しよりこのかた將相の御身としてみづから此伎をなし給ひしは豐臣の太閤たゞ壹人にてましますなり我神祖の御事を記せしもの家忠が日記政事錄御年譜成功記創業記等の事記の中につひに神祖の此伎なさせ給ひしといふことを見ずたゞ政事錄の中に尾張紀伊の公達の幼くましませし時此事をなさせ給ひしといふ事は見えたりちかき頃世にかゝる事を申出せしは佞奸の人の上の旨を希ひまいらせんとの詞にあらずんば必伶官等が其中に恩倖を冀ふ者の作り出せし詞なるべし又伶官を寵任し給ひしといふ事は大久保石見守長安が事を申すなり神祖長安を伶官の中より撰給ひし事俳優の事の爲にはあらず神祖天下の事を知しめされし初本朝二百餘年爭亂の後公私悉く苦しみ窮りしかばこの事を深く憂へさせ給ひしに長安其頃は優人にて候ひしが謀を獻りて郡國の中にあらん金銀の鑛を開かんことを請申ければ頓て其事を掌どらしめらる旣に其言を取らせ給ひて其人を用ゐさせ給ふ事尤其義に叶へりとや申さましかくて長安が謀り申せし如く山陰東海北陸の國國より金銀を採り得し事幾億萬といふ數を知らすただに我國のことのみにあらず異朝の古漢の代の外かく天が下に金銀のみち／＼たる事つひにその例承はらず（中夏はいふに及ばず外夷の國々年毎に我國に來り貿ものするにてもわが國に金銀の多き事知べし又百餘年が間中國外夷の

國々に我金銀を取去りし事幾億萬といふ事をしらずされど我國の金銀盡ぬとも見えずよく夥しくとり得し所ぞと覺ゆる是等のことにも議し申べきことあれど長ければ爰に記さず。此頃に及びて金銀の製をあらため造られしによりて世の貨財交通しがたき樣に覺ゆるだに世には心うき事に思ふ也まして百餘年が昔の如くに金銀乏くして人しげく物盛りなる今の時に至りなんには天下の人いかに困しみ窮るべき是を以て彼を思ふに長安が天下に功ある事今當代の管仲と申すとも耻る事なかるべしかゝる者を優人の下に撰〔擢イ〕用ひさせ給ひて六十州の中を百餘年が後まで君子小人をじて各その業を樂ましめ給ふ事誠に有がたき御事なり長安が其終をよくせざりし事尤惜むべきことにこそされどまた孔子も管仲が器を小きなりと譏り給ひしかど管仲なかりせば吾髮を被り袵を左にせんとのたまひしと其夷狄を攘ひ中國を尊びし功をば稱し給ひきされば長安が如きは功罪相掩ずとも申べし昔伊尹は有莘の野に耕し傅說は傅巖の野に築き呂望は渭水の濱に漁す成湯高宗周文の君の如きそれらの人を求め得給ひそれらの人を用ひ給ひ終に天下に王たらせ給ひき其餘齊の桓公管仲を縲紲の中に擧給ひ秦の穆公の甯戚を飯牛の下に用ゐ給ひしも又覇業のよりて起る所にて侍る神祖長安を撰〔擢イ〕用し給ひて天下の富庶を致させ給ひしことたとへば成湯高宗周文には及び給はずとも齊桓秦穆には劣らせ給ふべからずもし神祖の長安壹人撰用させ給ふ事を口に籍て其藝に堪能なる優人等を一々に撰用ゐたらんには是成湯高宗周文を口に籍て野に耕す民巖に築く人水に漁る翁を悉くに擧用るにこそあるべけれまた今の世にあたりて天下の人をして首を疾しめ額を蹙めしむること最甚しきは優人の輩を撰〔擢イ〕用られて士人と齒するにしくはなし此事尤心得あるべき事どもなり其故は我神祖岡崎の一城の衆を以て父祖の業を起させ給ひ三河の國悉く從へ遠江國を併せ夫より駿河甲斐信濃をつらね給ひし後豐臣の太閤のさしも天下の兵威を耀かし給ひしもあへて神祖と鋒を爭ふこと叶ひ給はず天下つひに神祖に服せしこと天命の歸する所神武の致し給ふ所なりといへども又譜代相傳の家人等が功に寄れりといっつべしされば神祖世を知し召れし初天下の武士神祖の御家人を見る事たとへば我國の天孫の降らせ給ひし時御供に侍らひし諸神だちを見るごとし當時の大名小名などいはるゝ人もその子弟を以て

御家人に召加へられん事を望むもの少なからずはじめ關ヶ原の事終りし後上方に屬せし國々六十州が半に及べりかの國々の武士みな／＼浪人となりしものはいくらといふ數を知らずそれが中に感賞を蒙りて大名となりし人の家に出て仕へしもあり或は身老或は死せし者もありといへども大坂の事起りし時に城中に馳集る浪人十萬人に及べり城陷るの日討るゝ者わづかに三萬人其餘こゝかしこに身を隱して常に天下の亂れんことを思ひ望む其後天草の事起りし時これらの輩生き殘しものども城にこもりしを以ても推知るべし此時にあたりて天下の士御家人に召加へらるべきの科三ッを定めらる所謂右筆の職勘定の衆走の衆是也是等の外に又醫師の一科を擧用ひらる是神祖德廟相はかり給ひて永く天下の泰平をいたされんとの御事なるべし此事は古き人の申せしにも非ず當代此三科を以て天下の士をとらせ給ふこと臣心に年頃心得ぬことに思ひしに唐の太宗の隋の亂を平げ給ひし後科擧を以て天下英雄の心をして悉く朝廷におもむかせ給ひし程にやがて太平の業をおこさせ給ひしといふ事をおもひ合せし所なり右筆の職勘定の衆の二科は則六藝の中の書數のことなり臣等が幼き時に見し武士に書數のことなど知りしものはわづか十人の中一人もあるかなしかやうに侍りき今はさらぬ下部迄ものかき算勘知らぬはなし是神祖の人の心を鼓舞せさせたまひし神謀によれるがゆへなるべし又むかし走の衆といひしは今の步行衆のことなり是はたゞ町人の保を以てめし出せること也これは遠國よりきたりてすゝめ擧べき人なきものゝためと見えたり神慮のほどふかく遠き御事と申すべし是より後世の英雄豪傑ともいはれしものども皆悉く御家人に召加へられん事を願ひ思ふ是を譬るに曠野に一の兎起るとき衆人是を追ふに似たりこの兎とり得んものはたゞ壹人なることは治定なりされど人未だ是をとり得ざるにあたりては人皆是に走り赴くがごとく天下の人心つひに一ッに歸しぬかく神慮をめぐらされしかど正雪忠彌などいへるものゝ逆謀を以て世を亂さんとせし事あり故に世を知しめされん事は浪人の窮せざらん樣を能々はかり給ふべき御事也秦の世の亡びしも始皇の滅せし六國の浪人に事おこりしとも申なりこれらの事にも議し申べきことあれど事長ければ爰にしるさず然るに近き頃ほひに及びて前代のごとく御家人等が子弟を召し出さるゝにも及ばず彼右筆の職勘定の衆走の衆の類もみな御家人等の中を撰て其闕に補せられけるほどに御家人等も天下の士も大に其望を失ふただ御家人に召出さるゝものは優人の輩にあらざれば當時大名等家にして罪かふぶりて或は逃去し又は禁錮せられし輩數人をめし出さる逃去とは俗に缺落といふ事禁錮とは奉公構の者の事也是亦神祖より此かた代々に禁じ置れし令なるを上よりはじめ其令をやぶり給ひければ獨それらは主人の天下に於て面目を失ふのみにあらずかたへの大名小名あへて其心に服せず又譜代相傳の御家人等もかの俳優の輩と肩をならべ膝をくむ事を惱りにくめど

もあへて氣をも出す事なしたとへ當時はその罪をおそれて敢て口より出す人なからんにも千載の後これをきゝ傳へたらんには後世の人豈議し申さゞらんや是のみならず士大夫の風俗昔に似ず天下の財奢侈のために盡ぬ此時に當りてたとへ虞舜の九韶の樂を奏したりともいかで鳳凰も來議し神人も和すべき先いかにもして譜代相傳の御家人等を始て天下の大名小名が首を疾しめ額を蹙むる事をやすんぜられ民の俗を正しくし國の財を富し下上を敬ふ心あらん事を謀り給ひて下と共に其樂を同じくせさせ給はんには今世の雅樂を好み給ふとも則先王の樂に同じかるべし天下の人たゞ其鼓樂し給はん事をのみ冀ふべし然らば則孟子の云し如くに世俗の樂も先王の樂の如くにぞあるべき

決獄考

武州川越領駒林村百姓
聟伊兵衛を殺候者　甚五兵衛　六十五才
父と申合伊兵衛を殺候者　四郎兵衛　四十二才
當春より竹本彌左衛門長屋に罷在七月四日より本所勘左衛門と申者方に當分罷在候
伊兵衛　三十九才
伊兵衛妻　甚五兵衛娘　むめ（すイ）　三十一才

右伊兵衛妻むめ（すイ）於川越訴出候者夫伊兵衛儀七月十六日四郎兵衛同道仕駒林村江罷越同廿日又四郎兵衛計江戸へ罷越むめ（すイ）へ申聞候は伊兵衛儀者生國信濃へ罷越候其方儀も亡母の墓參仕候ため川越へ參り候樣にと申候に付廿一日駒林村へ參候處伊兵衛儀信濃より不罷歸候樣子親甚五兵衛に相尋候得者廿八日頃には可歸由申候に付八月朔日迄相待候得共伊兵衛儀不罷歸候うち川流の者有之由承之其外甚五兵衛家内之樣子（躰にイ）も不審存候儀有之同二日所の名主役人江相斷り右流死之者川より引揚五人組幷自分にも參見申候處夫伊兵衛無紛之由申候付見分の者遣し見せ候得共數日川中に有之死骸故樣子難相知候依之甚五兵衛四郎兵衛其外家内之者駒林村之名主五人組川越へ召寄遂僉義候所甚五兵衛四郎兵衛申口不分明伊兵衛衣類雜具等家內有之上は申譯難立嚴敷相尋候處甚五兵衛申候は伊兵衛と七月十八日夜口論仕候を悴四郎兵衛見兼打倒し兩人にてしめ殺し川へ捨候由致白狀候四郎兵衛儀も父と一所に伊兵衛と口論仕しめ殺候由是又致白狀候尤殺候節外に手傳候者無之旨申候伊兵衛事生國信濃松城の者と計妻承傳親類等覺不申候由

卯八月　秋元但馬守

女あり其父と兄と我夫を殺せり女その事を知らず既

にして水中人の屍あるを見るに我夫に似たり里長に告て其屍を檢視するに我夫なり官是を糺問したる（せしイ）に父と兄との殺せるなり官此獄をもて公に申す此女父を告るの罪有べしや否や

右謹按に人倫の大變也常理を以て決すべからず此獄を決せんには第一に人倫の綱常（道イ）を明にすべし所謂君は臣の綱也父は子の綱也夫は女の綱也是人倫の綱常たり先此三綱に就て君父夫の三ッ相共に尊くして其差等なき事をよく〳〵わきまふべし第二には古の聖人喪制（服イ）を制したまひし所によりて凡そ女子たる者は父と夫を視る事いづれか親しくいづれにか從ふべきと云ふ事を能く辨ふべし周公の喪制を按ずるに女子既に許嫁すといへ共尙其室にある時に父死しぬれば其父の爲に斬衰三年す

是既に緣組して夫と定ぬれども未だ夫の家に行ざる時は其親（父イ）を天として未だ其夫を天とするに逮ばず此時に當りては其夫を見る事其父に及ばざる事明らかなり

既に嫁しぬる後には其父死ぬれども齊衰不杖期を服す

既に夫の家に嫁しぬれば其天とする處夫にあり是を以て其父といへども只齊衰を服して杖をもつかず一周年にして喪を除く此時にあたりては其父を見る事其夫に及ばざる事又明らかなり

但し既に嫁しぬる女子の其父の爲に服する所の輕き事を後代の人の疑ひ思ふ處有べきが故に其傳に此事を明らかにして女子家に在ては父を天とし嫁しては夫を天とす夫を天として父を天とせざるは天の二ッなきが如しと見えたりさらば人の妻たる者は其父といへども是を見る事其夫に及ばざる事は是聖人の義制なる事を知りぬべし第三には人倫には人倫の常と變とに附て是を論ずべし君君たり臣臣たり父父たり子子たり夫夫たると婦婦たるは人倫の常なる也君君たらず臣臣たらず父父たらず子子たらず夫夫たらず婦婦たらざるは人倫の變なる也君君たらずといへども臣臣たらずと云事なく父父たらずといへ共子子たらずと云事なく夫夫たらずといへども婦婦たらずと云事なきは人倫の變に處して其常を失はずと申べし凡そ人の臣たる者其父我君を殺し人の妻たるもの其

父我夫を殺すの如きは人倫の變にして其變の最大なるものなれば其臣たる者我君に忠ならんとする時は其父に孝ならず其婦たる者我夫に義ならんとする時は其父に孝ならず是等の事其臣となり其婦たるものの不幸にして其不幸の最大なるものと申べし左あらばいかでか人倫の常を以ては論じ決め申べき古の人其臣たる者賊臣を以て父として我君に忠なりし者旣に其人あり

唐の李璀石濱芬が事別に見えたり

人の婦たりし者其父の爲に我夫ほろぼされて我夫の爲に義なりし者又其人なきにあらず

漢の孝平皇后北齊の天元皇后吳の太子妃我國にて木曾の淸水冠者の妻の如き是等の事も別に見えたり

されど其父の爲に我夫を殺されて其事を告し者の事未だ其例を見ず但し我夫の其君の命を受て我父を殺んとせしを知りて我父に告て夫を殺せし事を不義也とせし事は見えたり

左傳に見ゆ是も別に記して呈する所に見ゆ

夫の事我父に告しが不義ならんには凡そ人の婦たらん者は假令父には背くとも我夫には背く間敷理明らかなりと申べしましてや周公の服制に旣に嫁せし女は其夫を天として其父の爲に天を二ッにせずと見えたればたとひ其父の我夫を殺せし事を明に知て其事を公に告申すともよのつね其父母を告るの律を以て決すべからずましてや此女の告し時其屍の正しく我夫なりと云事をも知らず其里長に乞て水より出して見て後に我夫とは明らかに知りたれば其父と兄とが我夫殺せし由を明かに告しとは大に異也此女罪すべき事萬々に其理なし但し此女其屍の正しく我夫なる事を告て後我父と兄との殺せし事顯〔露イ〕れぬるに逮んで立所に自殺したらんには我夫の爲に義にして其父と兄との爲にも孝悌の道ありて其事憐むべしとも申べきか

楚の石奢唐の李璀父の爲に死せし例を以て申す也

此二人の事も別に見えたり

但し又此の如くに論ぜんは古の聖人の戒め給ひし備らん事を人に責るなどヽ云ものにて恕あらざる論なれば君子の取べき論にあらず古より婦人の身其父の爲に我夫失れて我身死せるに逮ばず其身終るまで其

父を父とせず我夫の爲に其義を守れる者其數あり漢の孝平皇后孝獻皇后北齊の天元皇后吳太子妃我國の賴朝の大姬君の類是なり是等の事別に見ゆ古人其死せざる故を以て其節を薄しとはせずさらば此女の死せざる故を以て議るべからず大禹謨に五刑明らかにして五敎を敷と見えたれば凡そ獄を決むる事必其條理を論ずべき事なるが君と父と夫との三ッを以て人倫の三綱とする時は何れをか尊しとし何れをか尊からずとは撰び申べきさらば女子の未だ嫁せざる者は其父を天となし既に嫁しては其夫を天とすべき事則男子のいまだ仕へずしては其父に孝なるべく既に出て仕るに及では其君に忠なるべき事に相同じもしこゝに人の臣たる者不幸にして或は其父我君を弑せんとし或は其父我君を既に弑せしを告申事候はんに其君には忠なり其父には不孝なりとて父を告る事の律に任せて誅せらるべき政あらんには此女も父の事を告しに似たり逆罪にも決し給ふべしもし君を弑せんとし君既に弑せられ父の事を告る事唐の李璀石濟芬が如くなる者忠臣義士たらんには此女を罪せらるべき理桊は存ずる所には候はず

決獄考終

本朝軍器考敍

章句專門不必爲不朽之業、詞賦高世未足稱有用之學、是以善學焉者、六經以培其根、百家以達其枝、精國家之典章、審古今之沿革、然後可謂備也矣、伏惟、吾邦自神聖開基、皇統連綿、代有制作、文武官職之隆、禮樂文物之偉、冠冕衮裳輿服儀仗、及節鉞金鼓甲胄旌旗弓弩之具、擧皆稽殷周之典、則漢唐之制、而斟之以國俗之宜、協之以文質之中、無有闕漏、爰自中古兵燹屢起、文獻半爲烏有、降及源平代持兵柄、干戈相尋禮樂大崩、凡事日趨簡便、漸失其古制、至足利氏季世、則列國戰爭、遺老凋謝、益以索然矣、君子憾焉、方今昇平百年、明良布右文之化、而聲敎大行、學士大夫往往操觚染翰、評駁古今商羊萍實、迭鬪其奇、龍肉鳧毛爭誇其博、吁亦盛哉、然至千古之墜典先王之遺制、則附之度外、而視猶芻狗、況逐其流而泝其源、繹其統以抽其緒者、我未之聞也、天其或者有待我白石先生也歟、今夫先生之於學、博聞强識、根據六經貫穿百家、膺選舊學勸講儲輊、獨所憾者、鞅掌賢勞未遑大典之擧也耳、近者揭古今軍器著之於編、以授其子弟、蓋先生奕世武人、始以文學著、卽今汲汲于茲者、無乃不忘其箕裘之業歟、其爲編證書二百、載事一百五十一、附之以圖、具橫其形、總計十二卷、名曰本朝軍器考、源委悉分、顚末咸擧、該而不雜、確而有據、可謂審矣、世固有禮家之所述、軍師之所談、雖如詳悉、或守一家之株、或亡多岐之羊、未足以信用、至若夫異端妖妄之說、背乎古先聖王之制、逞己肆贋魚目混玉、吾不知其何說也、今此編出、則螢爝失光於太陽、鬼魅逃形乎氷鏡、時俗之誤不責而自破也、其賜後昆豈不大乎、夫子曰、雖有文事必有武備、先生其庶乎哉、所謂不朽之業、而有用之學也者、非歟、先生以其舊誼徵序於余、槃蹠分外、曷其可辭焉、然我之所冀不止此矣、待夫他日先生之修大典、而儻使吾以置喙於卷端、以賤名無沒于身後、光輝不朽于永世、是吾之素望於先生、而敢以爲言如斯、

旹

寶永己丑春二月越中甫長衞艸壽撰于東都旅館

新刻本朝軍器考序

文武之用相須而成、其不可偏廢昭昭也、然而文也者豈惟組章繪句云乎哉、武也者豈惟拳勇技擊云乎哉、夫契之敬敷五敎、皐陶惟明克、允是則古先聖王文武之道並行而不相悖、皆先建其大者、所以能成廣運之德也、降迨後世、徒棄其本而從其末、愛於名而遺於實、敎化一廢詐僞百出、無復先王代天成務之意焉、伏以、
東方開闢以來、
神聖相承百世不易、文武之道不墜於地、盡探其本而得其實者、粲然可觀矣、但俗有質、文治有寬猛、故若其儀物制度則不能時無損益、蓋欲勤其本者不得不揆其末、欲務其實者不得不據其名、學者至此、又豈可不知而闕如耶、然後之人、其於文事猶未能有所發明、而況於武事乎、惟我白石先生學通天人、材兼文武、而其忠誠義氣出于天性、入侍
講幄二十餘年、未嘗一日以身故而不盡其言也、當時之人第見詩賦傑出一時、文風亦靡然從之、以為
先生之功、而不知實有窮性命之原負經綸之業焉、嗟乎使其道不行于天下、澤不被于生民、蘊志以歿、可勝嘆哉、晩歳居閒、專事纂述平生所撰次無慮數十百卷、自
國史家乘、以至
本朝之故事、殊方之異言、咸有論著、率未脫稿、惟軍器考一編再所更定、以見其不忘奕世之業、且欲使學者由是據名而務實揆末而勤本之一端也已、其餘成書有東雅孫子兵法擇等、亦唯遺之子孫、不肯傳於人、歿後數年、會
朝命取其書、嗣子明卿乃以軍器考具本進呈、方今
殿下宵旰之暇、注
意武備、凡彼儀物制度固加講究、忝
賜留覽、
稱以為善、於是乎明卿深幸此書之遇于
明時、遂謀付諸剞劂以廣其傳、成侍函丈殆將二紀、材識鄙鈍、於
先生之德業事功未有窺見萬分之一、又何敢望贊其一辭哉、聊記刻板之由而繫于卷端云、

元文改元六月朔　　門人　新川平元成謹書

本朝軍器考凡例

一凡ソ此書、ツトメテ本朝軍器ノ制ヲ、考ルコトヲ要トスレバ、異朝ノ制ヲ議スルニ及バズ、サテヤムベカラザルヲバ、併セ論ゼシ所モアリ、

一凡ソ此書、上ハ神代ノ始ヨリ、下ハ近キ代ニ至ルマデ、代代ニ改リヌル軍器ノ制ヲ考テ、其文獻ノ徵トスルニ足レルノミヲ取レリ、兵ノ家ニ傳フル所アリトイヘドモ、其說ノ疑フベキ事アルヲバ、敢テ載ズ、

一凡ソ此書ノ要、軍器ノ制ヲ考ルニアレバ、武事ニアヅカリヌベキ器ヲバ、附ケ考フル所アリ、サレド威儀ニ備ヘ、禮容ニ設ベキ類ヲバ、敢テ其說ヲ盡サズ、コレラ軍務ノ要ニアラザルガタメ也、

一凡ソ軍器ノ制、兵ノ家ニ傳フル所ノ故實、各ヒトシカラズ、悉ク擧ムトスルニ事煩ハシケレバ、多ハ略シヌ、其說ノ詳ナル所ヲ知ラン事ハ、ヨク知レラン人ニ受ケ傳フベキニアル故也、

一凡ッ軍器ノ制、悉クカタドリ得ルニ堪ズ、別ニ其圖ツクリテ、書ノ終ニ附シヌ、

本朝軍器考凡例終

本朝軍器考總目

凡十二卷百五十一條

本朝軍器考撰用書目

舊事本紀	古事記	日本書紀
續日本後紀	三代實錄	類聚國史
古語拾遺	日本紀私記	釋日本紀
日本紀纂疏	管鍵抄	神代卷抄
元元集	神祇靈應集	諏訪御緣記
八幡愚童訓	出雲國風土記	筑後國風土記
常陸國風土記	駿河國風土記	扶桑略記
日本紀略	百錬抄	今鏡
增鏡	愚管抄	神皇正統記
令	令義解	類聚三代格
延喜式	儀式	江家次第
雲圖抄	禁秘抄	弘安禮節
職原抄	公事根源	飾抄
桃花蘂葉	裝束圖式	束帶色目
台記	人車記	玉葉
玉英	吉部祕訓	明月記
園太曆	康富記	大成錄
體源抄	本朝文粹	朝野群載
萬葉倭歌集	萬葉集注釋	詞林采葉
源氏物語河海抄	藻鹽草	倭名類聚鈔
拾芥抄	節用集	下學集
庭訓往來	塵添壒囊抄	宇治大納言物語
寢覺記	古事談	著聞集
聖德太子傳抄	田村草子	秀鄉草子
陸奧話記	保元物語	異本保元物語
保元日記	平治物語	異本平治物語
源平盛衰記	高館草子	東鑑北條家藏本
東鑑印本	承久記	太平記
異本太平記	梅松論	難太平記
太平記理盡抄	明德記	應仁記
南朝記傳	編纂尊卑分脈圖	伊勢家系圖
親元日記	三議一統	大草子
大諸禮	鎌倉年中行事	東山殿御飾記
宗五一冊	中原高忠聞書	騎射秘抄
圓物書	南浦文集	安土日記
信長記	甲陽軍鑑	小田原記

北條五代記　大友記　九州軍記
管窺武鑑　伊達成實記　王代一覽
豐臣家譜　御卽位御裝束圖
伊勢太神宮御神寶圖　年中行事繪卷物光長畫
加茂祭繪卷物爲信卿畫　後三年合戰繪卷物惟久畫
保元平治物語繪卷物畫者不詳　平治物語卷物光信畫
一谷合戰繪卷物元信畫　蒙古襲來繪卷物畫者不詳
西行記繪卷物相保畫　志貴山緣起卷物覺猷畫
法然上人傳繪卷物知恩院藏　一遍上人傳繪卷物七條道場藏
一遍上人傳繪卷物藤澤道場藏　繪師草子畫者不詳
職人歌合繪卷物光信畫　東大寺正倉院御寶物圖
羽形圖雪村畫　羽揃圖　大江眞忠傳幕圖多門院藏
諸家紋盡立雪齋藏　鞍作判鑑　諸劔目利書
蝦夷人物圖　旗馬印圖　爾雅註疏
毛詩註疏　周禮註疏　禮記正義
春秋左氏傳　孟子　漢書
三國志　宋書　魏書
北齊書　宋史　姓苑
大唐六典　通鑑綱目集覽　三禮圖
六經圖　毛詩圖　泮宮禮樂疏

三才圖會　莊子　山海經
淮南子高誘註　楚辭註　吳越春秋
司馬法　登壇必究　武備志
全浙兵制　武備集要　蠡角篇
少林棍法闡宗　酉陽雜俎　桂海虞衡志
筆談　文獻通考　續博物志
中華古今註　丹鉛總錄　瑯琊代醉編
器物叢談　天工開物　皇明世法錄
圖書編　懲毖錄　許氏說文
玉篇　唐韻　古今韻會
字彙　通雅　正字通
品字箋　類書纂要　梁庾信集
梁庾肩吾集　歐陽外集　王百穀集
徐文長集　翻譯名義集

通計二百部

本朝軍器考卷一

筑後守從五位下　源　君美彙輯

旗幟類

旌旗ノ制、本朝ニシテハ何レノ代ニ始マルトイフ事詳ナラズ、伊弉冊尊神避マセシヲ紀伊國熊野ノ有馬村ニ葬ル、土俗コノ神ノ魂ヲ祭ルニ、花ノ時ニハ花ヲモテ祭リ、又鼓吹幡旗ヲ用ヒテ歌ヒ舞ヒテ祭ルトイヒシ事アリ、舊事紀日本紀等　此事神ノ代ノ遺レル俗トコソ見エタレ、タトヒ人ノ代ニ至リ、此等ノ物出來シ後ニ、此ノ事始レリトモ、其ノ因リテ來レル事ハ猶ゾ久シカルベキ、神功皇后新羅ヲ伐セ給ヒシ時ニ、此物始メテ見エタリトイフ人アレド、猶ソレヨリサキ景行天皇ノ御時、筑紫ノ熊襲ガ叛シヲ伐ルベシトテ、周芳ノ娑麼ニ至リタマヒシホドニ、此ノ國ノ魁帥神夏磯媛トイフ女ノ、素幡ヲ建テ參向シトイフ事モ見エケリ、日本紀ニ　サレバ此物神代ニヤ始ル、又人代ノ始ニヤ起レル、其始ハイマダ詳ナラヌ歟、凡本朝ノ俗、旌旗讀ミテ波太ト云フコト、波トハ長キ義ナリ、太トハ手也、手ノ長クカヽリタレバ波太ト云ヘリト、萬葉集註ニハ見エタリ、

古ノ旌旗ノ制、イマダ詳ナラズ、サレド令ノ宮衞ノ條ニ、儀仗軍器トイフ事ノアルヲ、禮容ニ用フルヲ儀仗トイヒ、征伐ニ用フルヲ軍器トイフ、スナハチ實ヲ同ジクシテ、號ヲ殊ニスル者ナリト、義解ニハ見エシ、サラバ仗旗トイヒ、軍旗トイフ、其ノ號ハ同ジカラズトモ、其ノ實ハ殊ナルベカラズ、仗旗ノ制ハ延喜式ニモ詳ニ見エテ、古代ノ圖ヲモ見タリキ、カツハ近キ比行ハレシ儀ヲバ、世ノ人モ又見ルニ及ベリ、此等仗旗ノ制ニヨリテ、古ノ軍旗ノ制ヲモ想ヒ見ツベキモノニヤ、タヾ其ノ詳ナル說ノゴトキハイマダ見所アラズ、

古ノ時、凡元日又ハ御位ニ卽セタマフ時建ラレシ仗旗、マヅ殿前ニ鳥像幢ヲ建ツ、左ニハ日像幢、次ニ朱雀旗、次ニ青龍旗、右ニハ月像幢、次ニ白虎旗、次ニ玄武旗ヲ建テ、又左右近衞府陣ニハ、龍像纛幡一旒、鷹像隊幡四旒、小幡四十二旒、左右衞門府陣ニハ、鷲像纛幡一旒、鷹像隊幡二旒、小幡四十九旒、左右兵衞府陣ニハ、虎像纛幡一旒、熊像隊幡

四旒、小幡九十六旒ヲ建ラル、又大射ノ時、羅幡阿禮幡ナド建ラル、事アリ、（延喜式ニ）今モ猶天子御位ニ卽セ給フ時ハ、古ノ儀ヲ用ラル、但シ近比ハ、鷲像ヲバ改メテ兕像纛幡ヲ用ヒラル、歟、カ、ル儀ヲ用ヒラル、事モ、文武ノ朝廷、大寶元年正月元日ヨリ事始マレルヤウニイフ人アレド、ソレヨリサキ推古天皇ノ十一年十一月、上宮太子朝廷ニ請テ、旗幟ニ繪カキ、大楯靫ナド作ラレシ事ハ、儀衞ノタメニ備ラレシトゾ見エタル、其餘舒明天皇ノ四年十月、唐國ノ使人難波津ニ至リシ時、船三十二艘ニ鼓吹旗幟、皆具ニ整飾リテ江口ニ迎シメラレシトアルモ、又孝德天皇白雉元年二月、穴戸國ヨリ白キ雉獻リシヲウケタマフ日、朝廷ノ隊仗元會ノ儀ノゴトシト見エタルモ、（共ニ日本紀ニ）皆此事トゾ覺ユル、オモフニ文武天皇ノ御代ニ、唐國ノ禮ヲウツシテ、宮室ノ制文武官ノ衣服ノ色マデモ定給ヒシトイヒ傳フレバ、コレラノ儀制モ、皆此ノ御時ニ至リテ大ニ備レルナルベシ、

軍防令ノ義解ニ、幡トハ旌旗ノ總名也、將軍ノ載ル所ヲ纛幡トイヒ、隊長ノ載ル所ヲ隊幡トイヒ、兵士ノ載ル所ヲ軍幡トイフヨシ見エタリ、古ニハ凡ソ兵士五人ヲ伍トシ、五十人ヲ隊トス、將帥ノ出征ス時ニ、兵一萬人以上ニミツルニハ、將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人、五千人以上ニハ副將軍、軍監一人ト、錄事二人ヲ減ズ、カク兵ノ多少ニヨリテ、副將軍ヨリ下、軍監軍曹錄事等ノ員ハヒトシカラネド、必ズ將軍一人アリテ、其軍ノ政ヲ司ドル、其將軍ノ上ニ又大將軍アリテ、彼三軍ノ命ヲ司ドレリ、二軍ノ將ノ載ル所ヲ纛幡トイヒ、兵士五十人ノ長ガ載ル所ヲ隊幡トイヒ、兵士ノ旗ヲバ軍幡トイヘルナリ、儀仗軍器其實ハ同ジト見エタレバ、將軍隊長載ル所ノ纛幡隊幡ノゴトキ、其制ハ式ニ見エシ所ニゾ同ジカルベキ、サレド龍虎熊兕ノ類、イカナルモノヲヤ繪ガキヌラン、其ノ詳ナル事ハ見ル所ナシ、（按ズルニ後花園院ノ御時、上杉中務少輔持房ニ賜リシ御旗ノ中ニ、龍ヲ繪ガキ虎ヲ繪ガケル物アリ、此物モシ古ノ龍像虎像等ノ纛幡ノ遺制ナランニハ、將帥隊長等載ル所ノ幡ニ繪ガク所モ、儀衞ノ物ニ同ジカリシヤ、猶尋ヌベシ）又鮹旗トイフモノアリ、此物ハマサシク軍旗トゾ見エタル、齊明天皇ノ御代ニ、蝦夷ノ酋長渟代郡ノ大領沙尼具那、津輕郡ノ大領馬武二人ニ、鮹旗各二十頭ヲ賜リシ事、日本書紀ニ見エタリ、其制ノ如キハ、卜部宿禰懷賢ノ釋ニ私記ヲ引テ、師說イマダ其體ヲ詳ニセズ、師ノ後說

ニイハク、今現在此旗ノ頭、鮹ノ如クナル故ニナヅクト侍リ、サレド或ハ其體ヲ詳ニセズトイヒ、或ハ今現在トイフ、一定ノ説ニアラズ、今ハ猶其制ヲ詳ニシ難シ、

錦ノ御旗トイフ物ハ、古ニハ聞エ侍ラヌ歟、元弘ノ初、帝笠置ノ山ニ幸（ミユキ）マシマセシ時、此御旗建テラレシトイフ事、太平記ニハ見エタリ、ソレヨリ後、此ノ旗給ハリシナドイフ事世ニ傳フル所多ク侍リ、其制ハ、日月ノ像ヲ金銀ニテ打テツケラレシトゾ見エタル、又梅松論ニハ、尊氏將軍、持明院殿ノ院宣申請ヒテ軍起シ、筑紫ヨリ上ラレシ時、用ヒラレシ所ハ、錦ノ御旗ニ日ヲ出シテ、天照大神、八幡大菩薩ノ字ヲ金ニテ打チテ附ケラレシ由シルセリ、又旗ノ銘シルシテ賜ル事モ、古ヨリアリシ事ニヤ、イマダ所見アラズ、元弘ノ末、參議右近衛中將源顯家卿ヲ陸奥守ニナサレシ時、御ミヅカラ旗ノ銘ヲカ、シメ給ヒシヨシ、神皇正統記ニハ見エタリ、又山内上杉ノ家ニ傳ヘシ天子ノ御旗トイフ物三面アリキ、其一ハ、錦ノ旗ニ、

　䍐振海中雲之幡之手仁東之塵於拂秋風（チハヤフルヤヘタツクモノハタノテニアツマノチリヲハラフアキカゼ）

トイフ歌ヲシルサレ、（御製ノヨシチ中傳フル歟）其餘ニハ龍ト虎トヲ畫カ、レタルナリ、世ニ（傳フルトコロハ、龍ト虎トノ御旗ニモオノ〳〵銘アリ、龍ニハ天子旌旗勢、如ニ飛作ニ活龍ニ、高擡ニ頭角ニ處、雲自ニ八垠ニ從、虎ニハ六韜舐レ爪傳、三略弄レ牙全、獨猛西山白、清風未レ嘯先、トシルサレタリトイフ也、シカルニハアラズ、是ハ文明ノ比ホヒ、山内ノ上杉安房守顯定ノ求ニヨリテ、萬里ガ龍虎チ畫カ、レシコトナ用ヒシ由、梅花無盡藏ニ見エタリ、シカルチカク誤リ傳ヘタリシトコソ見エタレ、）是ハ義教將軍ノ代ニ、鎌倉ノ持氏朝臣討ルベシトテ、上杉中務少輔持房ヲ大將トシテ兵ヲ差下サレシ時、後花園ノ朝廷ヨリ下シ賜リシヨシ、其家ノ記ニハ見エタリ、

軍防令ニ、凡私家ニハ鼓、鉦、弩、矛、矟、具裝、大角、小角、及ビ軍幡アル事ヲ得ザレト見エタリ、サレバ古ノ時ハ、旌旗ノ類私ノ家ニアル事ヲ得ズ、王政ヤ、衰テ兵革シバ〳〵動ショリ、私ノ家ノ旗モ出來シト見エシ、保元平治ノ比ホヒニ至テハ、源平兩家ノ白旗赤幟ナドイフ事ノミ見エテ、古ノ制ハ其名ヲダニ聞ズ、幾程ナクテ、壽永元暦ノ後、鎌倉殿天下兵馬ノ權ヲ掌ラレテ、兵制一タビ變ゼショリ後ハ、朝廷ノ令武臣ニ及バズ、マシテ元弘建武ノ後打チツヾキタル世ノ亂ニ、軍器樣ノ式モ日々ニ改マリテ、古ノ制ハカタバカリモノコラズ、ソレガ中、源氏ノ白旗（シルシ）トイフモノ、始、世ニ傳フル所其説多クシテ、其ノ徵トス

ベキ事ハ少シ、或ハ其家ノ祖中務卿貞純親王ニ、大將軍ノ宣旨ヲナサレテ、月華門混白(ヒタジロ)ノ幡ヲ賜リシヨリ事起レリトモイヒ、新編纂圖ニ或ハ昔將軍ニ命ジテ出征サシメラル、時、御旗ヲ賜フ事アリ、其中ニ手長白旗トイフアルヲ、源氏ノ祖ニ賜ヒシヨリ、子孫其色ヲ用ヒラレシトモイフ也、貞純親王大將軍ニ任ジ給ヒシトイフ事、其徽(シルシ)トスベキ事所見アラズ、又將軍ノ出征ス時ニ、御旗賜ル事アリトイフ事、イカナル據アルニヤ、正シキ史ニ見エシ所ハ、齊明天皇ノ御時、蝦夷ノ酋長等ニ鮹旗各二十頭ヲ賜ヒシトイフ事ハアレド、此ノ外ニ御旗賜リシトイフ事モ所見アラズ、カツハ又令ニ見エシ所モ、凡大將出征ス時、皆節刀ヲ授クトコソアレ、治承四年ノ秋、前右兵衞佐源賴朝追討ノタメ、小松權亮少將維盛ヲ大將軍トシ、薩摩守忠度ヲ副將軍トシテ、東國ヘ下サレシ時、承平天慶ノ蹤跡モ年久シウナリテ准ヘガタシトテ、今度ハ節刀ヲバ給ラズ、讚岐守平正盛ガ、前對馬守源義親追討ノタメニ、出雲國ニ下向セシ例トテ、鈴バカリ給リシ由、平家物語ニハ見エタリ、又建武二年ノ冬、左兵衞督源義貞シテ尊氏將軍ヲ追討セラレシ時ハ、治承ノ例ハ不吉ナレバトテ、今度ハ天慶承平ノ例ヲ追ハレテ節度ヲ下サレシ由、太平記ニハシルセリ、コレラノ記ニ見エシ所ニヨレバ、將門純友ガ亂ニ、藤原忠文小野好古等ノ將軍ヲ東西ニサシムケラレシニモ、嘉承ニ平正盛ノ出雲國ニムカヒシニモ、御旗給リシトハ見エズ、源氏ノ祖ヲ將軍トナサレテ出征サシメラレシトイフ事ハ、彼將門純友ガ亂ニ、經基王ヲ副將軍トナサレシゾ始ナルベキ、サレド御旗給リシヨシハ聞エズ、按ズルニ、モロコシノ禮ニ、或ハ軍破レ或ハ國亡ビテ降リ服ヒヌル時ハ、必ラズ素キ幡ヲ建ツ、我ガ朝ノ昔モカクゾアリケル、景行天皇ノ紀ニ、周芳國ノ魁帥ガ素幡建シトアルモ、神功皇后ノ紀ニ、新羅國王素旆擧ゲシトアルモ、欽明天皇ノ紀ニ、新羅ノ大將白旗アゲシトアルモ、皆コレ其事ニテアリキ、サレバ昔ハ旗幟ノ類ニ素色ヲバ用ヒラレザリシト見エシ、シカルニ將軍ノ出征ス時ニ、白旗賜ル事アリナドイフ事心得ヌ事也、又源平盛衰記ニハ、平氏赤色ヲ捧グ、八幡殿ノ家ニハ白色ヲ捧グ、刑部殿ノ家ハ黑色ヲ捧グナドイフ落書ノ事見エタリ、刑部殿トイヒシハ、義家朝臣ノ舍弟刑部丞源義光ノ事ナルベシ、又源氏ノ旌旗其色皆白カリシニモアラズ、カクサダカナラヌ事ナレド、源氏白旗ヲ用ヒラレシ事ノ由ハ、猶世ニ傳フル所モアリキ、平家ノ赤旗イカナルイハレアリトモ、其事ノ由シルセルモノイマダ所見アラズ、平氏ノ祖

ニ、日華門ノ赤旗ヲ賜ヒシナドイフ說モアル歟、但シ其由ヲシルセル物ヲバイマダ見ズ、常陸國風土記ニ、黑坂命(クロサカノミコト)ノ葬具ノ儀ヲシルシテ、赤旗青幡、交雜(タガヒニマジハリ)飄颺(ヒルカヘリアガリ)雲飛(クモノ如トビ)虹張(ニジノ如クハル)ト云フ事アリ、又古人ヨメル歌共ニ青旗ト云物見エシヲ、青旗トハ葬具ニ侍ルニヤト注セシモノアリ、萬葉集ニ白馬ノ字ヲ讀ミテ、阿於牟麻ト云フ例ニヨラバ、古ノ俗ニ青旗ト云ヒシモ、白旗ニヤアリシ、然ルヲ後代ニ及ビテ源平兩家ノ旗色トナレル事、イカサマ其故アルベケレドモ、イマダ詳ナル事ヲ知ラズ、能知ラン人ニ尋ヌベキ事也、

鎌倉殿奧ノ泰衡ヲ討レシ時、千葉介常胤新調ノ旗ヲ進(マイ)ラス、其制、鎌倉殿ノ曩祖入道將軍義賴ノ旗ノ法ヲ用ヒタリ、其長(タケ)一丈二尺、素帛(シロキヌ)二幅ヲ以テ造ル、上ノ方ニハ素絲ニテ伊勢大神宮八幡大菩薩ノ字ヲ繡シ、下ニハ鳩二ツ相對ヒテ繡ストイフ事、東鑑ニシルセリ、按ズルニ、源平盛衰記ニ、畠山ガ吉例トイヒシ旗ハ、八幡殿武衡家衡ヲウタレシ時、重忠ガ四代ノ祖、秩父十郎武綱初參セシニ賜リテ先陣ス、ソノノチ惡源太殿ノ多胡ノ先生ヲ攻メラレシ時、父ノ庄司重能ガサセシ所ナルヨシ見エタリ、サラバ千葉ガ調進セシ所モ、其祖ノ入道將軍奧ノ合戰ニシタガヒシ時ニ、賜シ物ヲ家ニ傳ヘテ、其法ヲウツシテ進ラセシナルベシ、又石淸水八幡宮ノ寶藏ニアル所ノ源義家朝臣ノ旗ト云フ物、其制素キ帛三幅ヲ用ヒ、二引輛ヲ繪ガキテ、上ノ方ニ八幡大菩薩ノ五字ヲ書ス、其長サ九尺許、廣サ三尺二寸許、下ノ方ノ當中ヲ裂ク事二尺八寸ニシテ、藍革ノ紋アルヲ以テ菊トヂシタリ、其帛腐敗レシカバ、橫上等ノ制ハサダカナラズ、又上野國新田ノ後閑ガ家、累代相傳セシ義家朝臣ノ旗ト云フモ、其制白布二幅ヲ用ヒ、二引輛ヲ繪ガキテ、上ノ方ニ八幡大菩薩ノ五字ヲ書ス、其長サ九尺、廣サ一尺七寸五分、コレハ布ノ全幅九寸五分アルヲ打合セテ、左ノ方ヲ上ニナシテ縫タリ、下ノ方縫ハヅシ三尺八寸五分、縫ヒドメノ所ニ無紋藍革ノ菊トヂアリ、是モ橫上ノ制サダカナラズ、又鎌倉ノ補陀落寺ニ、平家ノ赤旗ト云傳ヘシ帛アリ、其長サ三尺五分許、赤帛二幅ヲモテ造レリ、其中ニ九萬八千軍神ノ六字ヲ書ルス、又大和國吉野郡和田村ニアル所ノ古旗ハ、白キ帛一幅、帛ノ幅廣サ一尺三寸五分、其長サ五尺九寸五分、上ノ方ニ天照皇大神宮、八幡大菩薩、春日大明神等ノ字ヲ三行ニ書ルシ、其下ニ鷹ノ羽ヲ打チガヘシ紋ヲ繪ガケリ、橫上ノ所ヲバフスベ革ヲ以テ裹ミ、同ジ革ノ緒ヲツケタリ、是ハ誰家ノ旗也ト云フ事サダカナラズ、コレラハ古キ物共ヲ見ルニ及ビシ所ナリ、詳ナル事ヲバ別ニ圖シヌ、猶モ世ニ相傳ハシ物共、我イマダシラザル所ハ、コヽニモレシ事多カルベシ、體源抄ニ、義貞朝臣ノ記ヲ引キテ、旗ハ絹布人ノ

好ミ、家ノ先規ニ依ルベキカ、長ハ八尺或ハ一丈、又ハ一丈餘、神ノ御名思ヒ思ヒ、又家ノ紋バカリモ、旗ノ竿ハ長一丈二尺、或ハ二尋片脇(フタヒロカタワキ)トモ云ヘリトシルセリ、又同抄ニ、旗ニハ五丈ノ練貫ヲ一尺三寸切テ笠注トナシ、其餘ヲ旗ニ裁(タ)ツベシ、縫タテ一丈二尺也ト見エタリ、スベテコレラハ世ノ末ザマニ出來シ、私家ノ旗幟ト見エシカバ、其ノ制同ジカラヌ歟、

旗ニ繪ガク事、推古天皇十一年十一月、上宮太子朝廷ニ請ヒテ、旗幟ニ繪ガ、レシヲヤ始トスベキ、日本書紀ニ私ノ旗ニ家紋繪ガク事ハ、其始ヲ知ラズ、鎌倉鶴岡ノ神殿ニ、二引輛ノ旗幷ニ八幡殿ノ願書アリシ事、太平記抄ニ見エヌ、石清水ノ寶藏ニアル所等ノ物、前條ニ見エシ如クナリ、サラバ義家朝臣ノ比ホヒ、既ニ旗ニ紋ツクル事ハアリケリ、平家物語源平盛衰記ナドニモ、其事ヤ、見エタレド、其比ニハ大ヤウハ旗幟ノ色ヲ以テ軍ヲワカツ、コトヾヽク皆紋ツケシトモオモハレズ、畠山佐竹久下ノ人々、始ハ皆混白ノ旗ヲ差シキ、其後畠山ハ小文ノ藍革ヲ貼(ヲ)シ、佐竹ハ月出ダセシ扇ツケ、久下ハ一番ノ字(モジ)カク事、皆コレ鎌倉殿ノ仰ニヨリシヨシ見エタリ、其餘武士ノ家々ニイヒ傳フル所多ケレド、シカルベキ物ニ見エザル事ハ徵トスルニ足ザルニ似侍ベリ、元弘建武ノ比ニ及デハ、家々ノ紋擧ゲテ計ベカラズ、

東鑑ニシルセシ所ヲ按ズルニ、常胤ガ調進セシ所モ、當時ノ旗制ニハ異ナル所モアリシトゾ見エタル、義家朝臣ノ旗、平家ノ旗ナドイフモノヲ併考フルニ、ソノ制モ同ジカラズ、今世ニ傳フル古ノ制ナリトイフモノ、東鑑ニ見エシ所ニ大ヤウハカハラズ、其長ノ長短ハ定レリトモ聞エズ、或ハ二幅、或ハ三幅ノ帛ヲ用ヒテ作ル、二幅ノ旗、賴義ノ旗制コレ也、三幅ノ旗ハ、石清水ノ寶藏ノ物幷ニ太平記ニ見エタリ、横上(ヨコガミ)トテ横紙トモシルセリ、其幅ヲ張ルベキ板横タヘテ、下ノ方ヲバ其幅ヲ縫合セズ燕尾トナシ、横上ノ所ヲ竿ノ蟬口ニ結ヒツケテ、蟬本トモイフナリ、下シ垂タル也、又一幅ノ帛ヲ半ヨリサキテ、横上ノ左右ニツクルヲ旗ノ手トハイフ、鳩居(ハトヰ)革トイフモノアリト云フ、コレハ彼賴義將軍ノ旗鳩二ツ繡セシナドイフ事ノ遺制ナルニヤ、文永ノ比ホヒ、大元ノ軍入寇シテ、我國ノ戰利ナカリシ事アリシニ、少貳三郎左衞門尉景資ガ旗ノ蟬口ノ鳩、忽チニ飛ビ翔リシカバ、景資八幡大菩薩ノ影向ナラセタマフト、タノモシクオモヒ、馬ハセカヘシテ發(ハナ)ツ矢、アヤ

マタズ彼國ノ大將軍ヲ射コロシツ、彼大將軍ヲバ鳩翔(カケリ)來リテ擊殺シテケリト、其國ノ生虜共ハイヒシ由、八幡愚童訓ニハ見エタリ、其比迄モ旗ニ鳩繡セシ事モアリシナルベシ、凡我朝ノ軍器ニ鳩ノカタチ作ル事ハ、オモフニ昔神功皇后新羅伐給ヒシ時、ミイクサ戰ヨワク、彼國ノ軍强クシテ、既ニカウヨト見エシカバ、皇后天ニ御禱アリシニ、雲ノ中ヨリ靈鳩三ツ飛ビ來リテ、ミカタノ楯ノ面ニアラハレ、彼國ノ軍忽チ敗レキナド、イヘル事ハ此事ノ起リニゾアルベキ、此事平家物語ニ見エタリ、山鳩ハ八幡ノ御使也ナド世ニイヒ傳フルモ、コレラノ事ニヨリテイヘルナルベシ、

古ノ旗袋式、シルセシ物ハイマダ見ル事ヲ得ズ、上野國新田後閑家ニ傳ヘシ、義家朝臣ノ旗ノ袋ヲ見シニ、誠ニ古代ノ物ト見エタリ、倭錦ノ赤地ナル龜甲ノ紋アルニ、白キ生絹(スヽシ)ノ裏ヲ打ツ、長サ二尺九寸、其幅一尺二寸四分ナルヲ、半ヨリ折テ中ヲ縫合セテ袋トナス、左右ノ縫ハヅシノ所四寸五分ヅ、アリ、其縫ハヅシノ際ニ、紅ノ二ツ打ナル緒ノ二尺餘ヅ、ナルヲ、折シ所ト中ト二所ニテ、表ノ方ニ見ユルヤウニ横サマニ刺縫ヒテ、縫ヒハヅシノ方ニテ緒ノ餘レルサキヲバ結ビシナリ、其式ハ別ニ圖ツクレリ、

義政將軍ノ代ノホド、畠山左衞門督政長、同右衞門佐義就ト、故管領左衞門督持國入道德本ガ家督ヲアラソフ事アリ、康正二年ノ夏、河內國營振(カヤフリ)トイフ所ニテ、終ニ合戰ニ及ブ、彼等モト一族ノ中也シカバ、其旗同ジクシテ敵味方ワカチガタカリトテ、政長ヤガテオノガ旗ニ乳ツケテ竿ニサシケリ、其代ノ人皆コレニ倣テ旗ノ制一變シキ、後世ニイハユル乃保利コレ也、南朝記傳ニ出デタリ、○按ズルニ、此ノ制ヲ乃保利トイフ事イカナルイハレニヤ、イマダ所見ナシ、但シ大諸禮ニ、ノボリニ乳付クル事、竹ノ本ヨリ順ニツケテノボル也トイフ事ノアレバ、乳ツクル式ニヨリテヤカクナヅケシニヤ、大和國吉野郡和田村ニアル所ノ古旗ノ中ニ、素帛一幅ナル帛ノ幅廣サ一尺三寸五分、長二丈一尺一寸五分、鷹羽打チガヘシ紋繪カキ、横上ノ所ハフスベ革ヲ以テ裹ミ、同ジ革ノ緒付ケシ事等、古旗ノ如クナルニ、又乃保利ノ制ノ如クニフスベ革ノ乳付クル事、其數卄五ナル物アリ、コレ正シク古旗ニ乳付ケシ物ト見エタリ、其制別ニ圖シヌ、古周ノ代ノ旗ノ制ニ、素錦ヲ以テ竿ヲ韜ミ、縹キ帛ヲソノ素錦ニ付ルト見エタルハ、爾雅疏今世ニ縫クルミナドイフ制ナレバ、縫クルミトイフ物ハ、甲斐ノ武田ノ家ヨリ出來シナド世ニハ申歟、其諏訪法性ノ旗トイフ物ヲ見シニ、イカニモ縫

クルミニテハアリシ、但シ孫子ノ旗ナドイフ物ハ、韋ヲ以テ乳ツクレルナリ、サレバ武田ノ旗、コトゞゝク皆縫クルミ也ト心得ン事ハヨカラジ、異朝ノ制ハ昔ヨリ我朝ノ近キ制ニ似テケリ、又近キ世ニ大旗小旗ナドイフ物ハ、其幅ノ多キト少キト、其タケノ長キト短キトニヨリテ、カクハ名ヅケシナルベシ、小幡トイフ物古ノ式ニ見エタレバ、延喜式ニ特ニ久シキ物也、大旗トイフ物ハ、始メテ平治物語ニ見エテ、元弘建武ノ後ハ所レ見多シ、タヾ其制昔今ノ樣カハレルノミニゾアルベキ、馬ジルシトイフ物ハ、永祿ノ比ホヒ迄ハナカリシニ、元龜ノ比ホヒヨリ始マレリトモ、信長記又ハ天文ノ比ホヒ、スデニ始マレリトモイフ、相摸ノ北條ノ家人大道寺トイフモノ、河越ノ夜軍ニ本間トイフモノヲウチテ、ソレガ差物ヲ取テヲノガシルシトス、是ヨリ小マトヰトイフ物ハ始マレリト、甲陽軍鑑ニハ見エタリ、今ノ兵家ノ説ニ大馬ジルシ小馬ジルシ、又大マトヰ小マトヰナドイフ物アル歟、馬ジルシトイヒ、マトヰトイフ、是レ一物ニシテ名ヲ異ニス、或人ノイヒシハ、マトヰトイフコトハ、甲斐ノ武田ノ家ノコトバナリトゾ、何レノ比ナランニモ、近キ世ニ出來シ物ナリ、サレド古ノ時將軍ノ纛幡、隊長ノ隊幡ナドイヒシ類ニテ、異朝ニシテハ中軍ノ坐纛、又ハ主將及ビ各營大將等ノ認旗ナドイフ物ノ類也、是モ始ハ其制旌旗ニ同ジヨリシニ、日々ニ新ナル制出來テ、今ハ異樣ノ物多クナリタリ、甲陽軍鑑信長記北條五代記等ヲ併セ見ルベシ、

又凡シルシトイフ文字、標トモカキ、注トモカキ、符トモ驗トモカク事、古ノ俗也、近代ニハ印トモカクニヤ、徽幟ノ二ツノ字ハ本朝ノ文書等ニモ見エタレバ、共ニコレ兵式等ニ見ユ、シカジタヾコレラノ字ヲ用ヒタランガ、其義ヲ得タルニハ、平治ノ戰ニ源氏ノ大旗、腰小旗皆ヲシナベテ白カリシ由見エタリ、ソノ腰小旗トイヒシ物、近代ノ腰差、差物ナドイフ物ニヤ、ソレヨリ後ノ事シルセル物ニ、此物ノ名ハ見エザル歟、元龜ノ比ホヒ迄ハ、旗モ多カラズ、小差物モ極メテ小シキ也シガ、次第ニ大キクナリタル由、信長記ニシルシタレバ、此物近代ニ又出來テ、今ハ異樣ノ物ドモ多クナリシ也、按ズルニ信長記ニ見エシ小差物トイフモノ、其比ニハ戰ノ急ナルニ臨ミテハ、ミヅカラ鎧ノ後ニサス、戰終リヌレバ從者ニモヽタセシ、ソノ後ソノ制次第ニ大キクナリテ、隊長ヨリ上ツカタハ馬ニソヘテ建テショリ、馬幟ト差物トノ制、大小異ナル物ニハナリタルナリ、笠標トイフ物ハ、大將軍ヨリ下兵士ニ至ル迄各甲冑ニツク、異朝ノ昔ニハ徽幟トイヒ、近世ニハ盔旗ナドイヒシ物ノ類ナルベシ、我國ニテハ、淨見原天皇不破宮ニマシゝゝテ、紀臣阿閉麻呂、村國連男依等ヲ大將トシ、兵ヲ分チテ近江ノ朝廷ニムケラレシ時、男依連ガ軍ハ不破ヨリ出デ、直チニ近江ニムカフ、其

衆近江ノ師トワカチ難カラン事ヲ恐レテ、赤色ヲ以テ衣ノ上ニ着ケシトアルハ、日本紀ニ此物ノヨリテ起レル所ニゾアルベキ、源平盛衰記ニ衛府ノ弦袋ヲモ笠注トイヒ、今川ガ難太平記ニハ、馬ニ著ケシ幟ヲモ笠験トイヒシカバ、甲冑ニツクル物ノミカクイフニモアラズ、サレバ冑ニアルヲ笠標トイヒ、袖ニアルヲ袖標トイフナドイヒ傳フル事ハ、殊ニ近世ノ俗ナルベシ、但シ此物名ヅケテ笠標トイフ事、イカナルイハレアリトイフ事ハ、イマダ所レ見アラズ、

鎌倉殿奥ノ泰衡ヲ討タレシ時、下河邊庄司行平仰ニヨリテ御冑ヲ調進セシニ、冑ノ後ニ笠標ヲ付ケタリ、コノ簡袖ニ付クル事尋常ノ儀ナル歟トノタマヒシニ、行平承リテ、是レ曩祖秀郷朝臣ノ佳例タリ、其上兵ノ本意ハ先登ニアリ、先登ニスヽマン時、敵ハ名ノルヲ聞キテ其人ヲ知ル、御方ハ後ヨリ此簡ヲ見テ、其先登ノ由ヲ知ルベキ者也、但シ袖ニヤ付ケタマフベキ、凡カヽル物ヲ調ヘ進ラスル時、家ノ様ヲ用ユルハ故實ナリト申シケレバ、御感アリシナドイフ事アリ、東鑑サラバ笠標ハモト冑ニ付ケン物ナルヲ、鎌倉殿ノ比ホヒ、世スデニ袖ニ付ケシトゾ見エタル、袖ニ付クル事モ大ヤウ射向ノ袖ニツクル事ニヤ、一谷ノ落足ニ、重衡卿ノ侍後藤兵衛尉守長、射向ノ袖ノ赤符カナグリステ、ニゲ行キシナドイフ、即是也、盛衰記ニ此物必ズ一ツヲノミ付クルニモアラズ、木曾殿平家追討ノ院宣ヲ承ラレシ時、鎧ノ左右ノ袖ニ笠符ツケラレシ事モ見エタリ、同記ニ凡鎧ノ袖ニ笠標ツクル所ハ、射向ニモアレ左右ニモアレ、冠板ノ下ノ中ホドニツクベシ、古畫ニ見エシ所コトゴトク皆然リ、體源抄ニハ袖ノ耳緒ヨリ十一メニ付クル由シルセリ、

笠標ノ制、定マレル式アリトモ見エズ、體源抄ニハ、五丈ノ練貫ヲ一尺三寸切リテ、三ツニワリテ笠ジルシニシテ、其餘ヲ旗ニ裁ツ、笠ジルシハ刀ヲ逆手ニ持チテ裁ツ、其縫様ハヲモテヘマクリテ、針ヲ下ヨリ上ヘサシ出ダシ、縫留ムル所ヲモ針ヲ上ニテ留ムルナリト見エタリ、サラバ其長サ一尺三寸ニシテ、濶キコト三寸餘ナルベシ、サレド下河邊庄司ガ鎌倉殿ニ進ラセシ所ハ、簡付シ由見エタレバ、其形小シキナルベシ、後醍醐院ノ山門ニ幸アリシ時、紅ノ御袴ヲ脱セ給ヒ、三寸ヅヽ切リテ賜ヒシヲ、官軍ノ笠符トセシ事、太平記ニ見エシハ、殊ニ小シキナル物ナルベ

シ、同記ニ、千種頭中將忠顯ノ京軍ニ、白絹一尺ヅヽ切リテ、風トイフ字カキテ、笠符トナシテ鎧ノ袖ニ付ケサセラレシト見エシハ、稍大キナル物ト見エタリ、又同記ニ見エシ、島津四郎ガ濃紅ノ大笠符、禰津小次郎ガ薄紅ノ大笠符、畑六郎左衛門尉ガ一引輛ニ三粼ノ笠符、馬ノ草頭(サウヅ)ニ吹キ懸ケサセシ、明德記ニ一色左京大夫ガ金襴ノ大笠注ナドシルセル類ハ、モツトモ大キナル物トゾ見エタル、古畫ノ源義家朝臣ノ像見シ事ノアリキ、其馬副ノ兵ガ、冑ノ上ニ一幅ノ赤絹ノ長三尺許モヤアルラント覺ユルヲ、左右ノ吹返シニ絲ニテ付ケシガ、風ニ靡キシ體ヲウツセルアリ、コレラカノ大笠標ナドイフ物ノ類ニヤアルラン、又笠標ニハ其人ノ名ヲモカキ、又其家ノ紋ヲモツク、下河邊庄司ガイヒシ所ニヨレバ、古ハ名ヲシルセル也、太平記ニ見エシ河野七郎通遠ガ側折敷三文字(ソバヲシキニサンモンジ)、久下ノ者共ノ一番ノ字、畑ガ一ツ引輛ニ三粼ナドノ類ハ、其家ノ紋ナルベシ、又此物必ズ帛ヲ以テツクルニモ限ラズ、法住寺殿ノ合戰ニ、官兵青松葉ヲ冑ノ鉢ニモ鎧ノ袖ニモ付ケラレ、(平家物語盛衰記等ニ)青野原ノ合戰ニ、桃井ガ鷹鈴(タカノスズ)ツケ、今川ガ赤鳥ヲ馬ニツケテ笠注トセシナド、

イフ事モアレバ、(雖太平記ニ)何ニモアレ、ヲノガ手ノ幟ニツクルモノヲ笠標トハイヒシ也、彼レ是レヲ通ジ考フルニ、スベテハ定マレル式アラズトコソ見エタレ、冑ノ立物トイフモノモ、笠符ヨリ事起リヌトゾ見エタル、鍬形鷹角ウチシナドイフコトハ、古代ヨリモ聞エキ、此等ノ外ニハ、法住寺殿ノ戰ニ、官兵ノ笠符ニ青松葉冑ニサシタルナド見エシハ、此物ノ濫觴トヤイハマシ、元弘建武ノ後ニハ、ヤウヤク見ル所多シ、源義貞朝臣節刀ヲ賜ハリテ、尊氏將軍ヲ伐タレシ時、箱根山ノ戰ニ、道場坊助注記祐覺ガ兒、紅梅ノ作花ヲ冑ノ眞向ニ插シタル、又尊氏將軍舍弟左兵衛督入道慧源ト、京ニテ合戰アリシ時、桃井ガ扇一揆ノ中秋山新藏人光政ガ、冑ノ鍬形ノ間ヨリ紅ノ扇ノ月日出ダシタルヲ開キシ、又武藏野ノ合戰ニ、饗庭命鶴丸ガ花一揆、梅花一枝ヲ折リテ冑ノ眞甲ニ插シタル、ソノ餘土岐悪五郎康貞大鍬形打テ、徑三尺許ニ金ニテ桔梗ヲ打テ附ケタル甲、長山遠江守賴基ガ徑三尺許ナル、大日ノ丸打チタル鍬形ノ冑ナド見エシ、(共ニ太平記并異本太平記ニ)コレラ皆今ノ立物ノ類トゾ覺ユル、猶詳ナル事ハ甲冑ノ類ノ下ト通ジ見ルベシ、コレモ又天文元龜

ノ初ヨリ、異樣ノ物ドモ殊ニ多クナリヌルヨシ、信長記ニハ見エタリ、

本朝軍器考卷一終

本朝軍器考卷二

筑後守從五位下　源　君美彙輯

金鼓類

古ノ制大ニ戰フ時ハ、鼓ヲウチテ進ミ、金ヲウチテ退ク、（司馬法ニ）凡旌旗金鼓ハ、大將ノ司ル所ニシテ、其要ハ耳目ヲ一ツニスルニアリト見エタレ、我國ノ昔モ又カクゾアルベキ、神功皇后ノ新羅ヲ伐タセ給ヒシ時、金鼓節（ワイタメ）ナク旌旗錯（マガ）ヒ亂レナバ、士卒整フラジト令シ給ヒシナド、日本書紀ニハ見エケリ、軍防令ヲ見ルニ、凡軍闉ニハ（闉トハ聚也、相聚ル所チイフ）、軍士各鼓二面、大角二口、少角四口ヲ置キ、兵士ヲ通ジ用ヒテ、（鼓ト角トヲ通ジ用ユル也、角ノ事ハ下ニ見エタリ、）番ヲ分チテ敎ヘ習ハシメラレキ、又鼓鉦トイフ事ノアルヲ、義解ニハ、鼓ハ皮鼓也、鉦ハ金鼓也、以テ喧ヲ靜ムル所也トハ注セリ、但シ我國ニシテ此等ノ物ヲ戰陣ニ用ヒラレシ事ノ始ハ、イマダ見ル所アラズ、神功皇后ノ紀ニ此物スデニ見エシカバ、其因リ來ル所猶ゾ久シカルベキ、其後齊明天皇ノ紀ニ、蝦夷ノ會長沙尼具那馬武等ニ、旗各二十頭鼓各二面ヲ賜ヒシ

事モ見エケリ、又凡朝廷ニ大禮行ハレテ階下ニ陣ヲ張ラル、時モ、必ズ鼓鉦ヲ設ケラル、事トゾ見エシ、シカルニ戰陣ニ大鼓用ユル事ハ、源判官義經ヨリ始マレル也、其事ハ源平盛衰記ニ詳也ナド世ニハイフ事アル歟、大ニアヤマレル事ニヤ、彼記ニ見エシ所ハ、壽永三年正月、鎌倉殿木曾義仲ヲウタレシ時、九郎御曹司ハ宇治ノ手ニムカハル、ミカタノ大勢思ヒ思ヒニトヾメキテ、下知シ給フヤウノ聞エザリケレバ、平等院ノ御堂ヨリ大鼓取リ寄セテ、ヤグラノ下ニテウツ、何事ナラント鳴ヲシヅメシ由シルセリ、同記ノ中ニ、木曾殿北國ノ合戰ノ時、大鼓法螺貝千バカリ籠メラレシナドイフ事モ見エタリ、此事宇治ノ合戰ヨリ猶サキノ事ニテアル也、凡ソ戰陣ニ用フベキ鼓ノ制、山重レルト海濶キト、地ノ形勢ニヨリテ其用意アル事也トイフ、心得ベキ事也、

令義解ニ、鉦ハ金鼓也ト見エタリ、源順倭名鈔ニモ、鉦鼓ハ俗ニ常古トイフ、兼名苑ニ、鉦一ツニ鐃ト名ヅク、金鼓也トイフ由見エタリ、是等金鼓トイフ物ハ、金ニテ作レル鼓也、神功皇后紀ニ見エシ、金ト鼓トノ二ツヲイヒシゴトクニハアラズ、司馬法ヲ按ズルニ、卒長執レ鐃、兩司馬長執レ鐸、進レ軍鳴レ鐸、退レ軍鳴レ鐃トイフ事アリ、カノ鐃トイフ物ハ、我國ノ鉦鼓ニテ、鐸トイフ物ハスナハチ鈴ナルベシ、アハセテ此ヲ金トハイフ、タヾ軍ヲツカサドル人ニヨリテ其制ヲ異ニスルノミ也キ、天目一箇命（アマノマヒトツノ）鐸ツクラレシ由、舊事紀ニハ見エ、古語拾遺ニハ、天鈿女命（アメノウズメノミコト）手ニ著鐸之（サナキノ）矛（ホコ）持シ事見エタレバ、此物ハ神代ヨリアリシ物也、前ニシルセシ嘉承治承ノ追討使ニ、鈴バカリ賜ヒシナドイフ事ハ、カノ執レ鐸ノ義ニヤ取ラレタリケン、サラバ本朝ノイニシヘ、鐃鐸二ツナガラ用ヒラレシ物也、近世ニハ此事聞エザルニヤ、治承ニ、熊野ノ那智新宮ノ大衆等、源氏ニ心合セテ軍起シ戰ヒテ、貝鐘ヲ鳴ラシヨロコビノ時ツクレリナド盛衰記ニ見エシハ、古ニ聞エシ鉦鼓ニハアラズ、タヾ寺院ニ用フル所ノ物、同記ニ見エシ三井寺ノ合戰ニ、三院ノ大衆ノ會合ストテ、鳴ラシケン貝鐘モ同ジ義ニゾアルベキ、近世ニ至リテハ、銅鑼ヲ用ヒテ鉦鼓ニカフ、鉦鐃今ノ銅鑼也ト異朝ノ書ニモ見エタレバ、楊升菴説 彼國ニテモ近キ比ハ、銅鑼ヲ以テ古ノ鉦鐃ノ制ト思ヘル也、サレド本朝ノ儀仗ニ設ケラレシ鉦鼓トイフ物ハ、銅鑼

ノ制トハ同ジカラヌ物也、

本朝ノムカシ、鼓鉦ヲ用フルノミニアラズ、大角小角トイフ吹モノヲモ用ユ、スベテ此事ヲ鼓吹司ニツカサドリ、軍團ゴトニモ兵士ヲ通ジ用ヒ、番ヲ分チテ教ヘ習ハシメラル、倭名鈔征戰具ヲ按ズルニ、楊氏漢語抄ヲ引テ、大角ヲ波羅乃布江、小角ヲ久太能布江トヨミタリ、此角トイフ物ハ、黄帝蚩尤ト涿鹿ニテ戰ハセ給ヒシ時ニ、蚩尤ガ造リ出ダシテ吹キシ由ヲイヒ傳ヘ侍リ、倭名鈔ニモ兼名苑ノ注ヲ引キテ、此物モト胡中ヨリ出ヅ、或ハ呉越ヨリ出ヅトモイフ由ヲ載セヌ、其制モト異朝ヨリ出デタル也、彼ノ國ニハ今モ用フル軍器ナレド、我朝ニハ寶螺ヲ用ヒ來タリシヨリ、此物ハスタリシニヤ、其制モツタハラズ、今モ邊地ニテ、竹ヲ截リテ管トシ、筒貝ト名ヅケテ吹クハ、彼角ノ遺レル制ニゾアルベキ、

寶螺ヲ鳴ラス事ハ、モト西域ノ俗ニテアル也、千手經ニ、モシ一切ノ諸天善神ヲマネキヨバンニハ、寶螺ヲ手ニスベシトハ見エタリ、又法螺トモカク、梵貝トモイフニヤ、モロコシノ書ニハ、海中ニ出ヅル梭尾螺トイフ物トゾ見エタル、我朝ノ近キ代ニハ、貝太鼓二ツノ物ヲ以テ軍中ノ要器トス、軍陣ニ用ヒシ事ハ、新宮ノ大衆等ニ起リ、貝ト太鼓トナラベ用ヒシ事ハ、礪浪山ノ合戰ヲヤ始トシナン、是ヨリサキノ事ハイマダ所レ見アラズ、韻書ヲ考フルニ、螺ノ字ハモト倮字ニテ、正字ハ蠃トカク、蠃ノ字又通ジテ蠡トモカク、按ズルニ宋ノ東南夷傳ニ、林邑國ノ人吹ニ海蠡ニ爲レ角トイフ事アレバ、蠡角トイフ事ハ、寶螺ト角トノ二ツニテアルベキヲ、蠡角篇トイフ書ニハ、蚩尤角ヲ制出セシヨリ後、其長六尺ナルヲ角トイヒ、五尺ナルヲ蠡トイフ由見エタリ、コレハタヾ角ノ制ノ長短ニヨリテ、其名ヲ殊ニセル物也、アヤマレルニ似タリ、異國ニテ寶螺ヲ以テ角ニ代フル事久シキ事ニテアレバ、我朝ニテモ其來タル事、治承ノ比ヨリ猶遠キ事ナランモシルベカラズ、近キ比朝鮮國ノ使來タリシニ、其軍官ノ中螺角手トイフ者アリ、此事ヲ司レルモノ也、カレコレヲ通ジ考フルニ、異國ニモ此物ヲ用ヒテ軍器トスル事ハ、本朝ノ制ニ同ジキトコソ見エタレ、

本朝軍器考卷二終

本朝軍器考巻三

筑後守従五位下　源　君美彙輯

節鉞類

令ニ凡大將出征皆授二節刀一ト見ユ、義解ニハ、凡節トイフ物ハ髦牛ノ尾ヲ以テツクル、使者ノ執ル所也、今ハ刀劔ヲ以テコレニ代ル、故ニ節刀トイフ、名實相異ナレド、其辭ト用フル所トハ一ツ也ト註セリ、此事ノ因リテ起レル始ハ、神代ニ高皇産靈尊、皇孫ヲ葦原中國ノ主ニシ給ハントテ、マヅ國中ノ邪鬼ヲ撥平シメントテ、天稚彦ニ天鹿兒弓ト天羽々矢トヲ給ヒテ下シ遣サレシ、是レ後世ノ將軍節旄ヲ賜フノ事也ト、後成恩寺殿ノ御説ニハ見エタリ、神代纂疏又清三位宣賢ノ説ニハ、日本武尊ノ東夷ヲ征シタマフ時、マヅ伊勢ノ太神ニ參リ給ヒシニ、倭姫命天叢雲劍ヲ授ケ給ヒシハ、後世ニ節度ヲ賜フ事ノ始也ト見エタリ、神代巻抄サレド古事記ニハ、東方十二道ノ荒神ト不伏人等トヲシヅメラルベシトテ、命ヲツカハサレシ時、比比羅木ノ八尋矛ヲ給フ、命罷リ給フ時、伊勢太神宮ニ參リ給ヒシニ、其御姨倭比賣命、草薙劔ニ火打袋ソヘテ參ラレシ由見エタリ、サラバ命ノ朝廷ヨリ賜ハラセ給ヒシハ、實ハ比々羅木ノ八尋矛也シカド、此事大將出征ス時ニ節鉞ヲ賜フ義ナレバ、日本書紀ニハ斧鉞ヲ賜ルナドシルサレシナルベシ、劔ハ御姨ノ命ノ私ニ賜ヒシ所ナレバ、朝廷ノ賜ニハナゾラヘ難シ、サレバ命ノ叢雲劍ヲ賜ラセ給ヒシ事ハ、後世節刀ヲ給ハル事ノヨリテ出ル所也ナドハイフベシ、始トハイフベカラズ、其後來目部小楯、清寧天皇ノ紀ニ億計、弘計兩皇子ヲ迎ヘ奉リ、大伴大連金村大連等ガ臣連等シテ、男大迹王繼體天皇ノ紀ニ迎ヘ奉リシ時ニ持チシ節ハ、髦牛ノ尾ニテヤ作リヌラン、延暦ノ比ホヒ、大伴宿禰家持ノ持節征東將軍ニナサレシ時ハ、既ニ刀劔ヲ以テ代ヘラレシ後ナレド、モトノマヽニ持節ナドイヒシナルベシ、節旄ノ制ハ異朝ニモ後代ニハサダカナラヌニヤ、唐ノ代ノ人ノイヒシハ、晉ノ顧愷之ガ繪ガキシ蘇武ガ像ニ、手ニ執リシ物上ハ圓ニシテ憧ノゴトク、下ハ數層ノ紅羽ノミダレタルガ、夜合花ノヤウニナンアル、今鹵簿ノ中ニアル節モコレニ似タリ、其首マタ圓ニシテ、相去ルコト一尺計、數重ノ圓ナル板アリテ、髦牛尾ヲ

以テコレニ綴ルトイヒケリ、續博物志韻書ニハコレ古ニ用ヒテ指麾スル所ノモノ、周武王ノ白旄ヲ秉リテ麾カセ給フトイフモ是也ト見エタリ、本朝ノ古ニイハユル節旄ノ制モサコソハアリケメ、令作ラレン比ダニ、既ニ刀劒ニ代ヘラルトアレバ、猶後世ニイフナル節刀ハ名ノミニテ、刀劒又ハ鈴ナド下サレシトコソ見エタレ、順德院ノ御抄ニ、禁秘抄大刀契ノ條ニ匡房記ヲ引カセ給ヒテ、顯實ガイハク、鋒劒三尺、或ハ二尺、總テ十、其中一劒背ニ銘アリ、北斗左青龍、右白虎、其外ハ見エズ、是百濟ヘ渡サル、所二劒ノ一ツ歟、但シ節刀ハ此外ニアルベシ、青龍ト注スノ條、六典ニ稱スル所ノ傳符ニ似タリ、モシ大將軍ヲ遣スノ時用ユベキ歟、大唐六典ヲ按ズルニ、傳符トイフモノハ郵驛ニ給シ、制命ヲ通ズル物也、ソノ中青龍之符トイフアリ、我朝ノ節刀モ青龍ト注シタレバ、刀ノ傳符ノ如クナル物ニヤトシルサレシナルベシ、又節刀ノ鑰ハ、天暦ノ帝、寶劒ノ帶取ニ付ケテ御身ヲ離サレズト云々、誠ニ我國ノ至極ノ重寶ナル者也トシルサセ給ヒキ、又後成恩寺殿ノ御記ニハ、桃花蘂葉節刀ハ雜劒也、ソノ中靈劒二柄アリ、コレスナハチ百濟國貢進スル所、日月護身劒、破敵將軍劒等也、按ズルニ匡房記ニハ日月護身ノ劒、三公闘戰ノ劒ニ作レリ、靈劒雜劒合セテ卅四柄ノヨシ天德記ニ見エタリ、按ズルニ匡房記ニハ十柄ノ由見エタリ、建武ノ度紛失セシカバ、新ニ造ラレシ由シルサル、弘安禮節ニハ、節トハ大將驛路ノ手印、丹漆ノ筐ニ盛テ、錦襴ノ袋ヲ以テコレヲツヽムト見エタリ、此說ハ禁秘抄ニ見エシ所ニ同ジキヤウニアレド、令並ニ後成恩寺殿ノ御說ニハ異ナルニヤ、是ハ周ノ禮ニ見エシ龍節、虎節、玉節ナドイフ物ニテ、後世ノ虎符、竹使符ナドノ類、各其半ヲワカチテ左ヲバ京ニトヾメ、右ヲバ郡國ニアタヘテ、凡兵ヲ發ス時、其國ニツカハシテ符ヲ合ハス、符合フ時ハスナハチ發スナドイフ物ノ如クナルベシ、按ズルニ、令ニ見エシ所ハ、大唐六典ニ見エシ旌節トイフモノニテ、後世コレニカフルニ刀劒ヲモテセラレシナリ、後成恩寺殿ノ御說ハ、スナハチ後世ノ制ニヨリテシルサレシ也、弘安禮節ニ見エシ所ハ、スナハチ六典ニ見エシ傳符ノ制ニテ、旌節ナドイフ物ニハカハレル物ナリ、禁秘抄ニ見エシ所モ、傳符ノゴトクナルニヤトアレバ、ナヲ疑ハシキ所アルニ似タリ、禮節ノゴトクタシカニ傳符ノヨシニハ聞エザルカ、周代ノ禮ニ、大麾ヲ建テ、田ストイフ事アリ、周禮此物モ武王白旄ヲ秉ラセ給ヒシ事ヨリ起リテ、後代ニモ乘輿ニハ黃ヲ以テシ、諸公ハ朱ヲ以テシ、刺史二千石ハ纁ヲ以テス、コレヲ麾旄トイフヨシ、シルセル物モアリ、中華古今註ニ北帛淮后ノ說ニ、將帥ヲ稱シテ麾下又戲下トイフ、漢書師古注ニ、戲トハ軍ノ旌旄ヲイフ也ト見エタリ、職原抄サレド古ヨリ乘輿ノ物

ニモ用ヒラレシカバ、將帥ノ事ニモ限ラジ、我朝ノ國史ニモ、崇神天皇熊襲梟帥ガ二人ノ女ヲ、麾下ニメシ納レラレシナドシルサレシハ、乘輿ノ物ヲモ斥言(サシイヒ)シ也、推古天皇ノ御時、新羅王白旗ヲ擧ゲテ、將軍ノ麾下ニ至リテ降リヌナドアルハ、將帥ノ事ヲサシタル也、又楚辭ノ注ニハ手ヲ以テ敎フルヲ麾トイフトモ見エ、韻書ニハ旌旗ヲ以テコレヲシメスヲ麾トイフトモ見エタリ、彼是ヲ通ジ考ルニ、節旄トイフモ麾旌トイフモ、モトコレ大將軍ノ執ル所ニシテ、將士ヲ指麾スベキ物也、近代主將ノ執リテ軍ヲ指麾スル物ニ、或ハ左(サイ)以或ハ左以波以ナドイフモノ出來ヌ、隊長ナドノ類ハ、主將ヨリユルシ給ハラネバ執ル事ヲ得ベカラズ、其制、紙ヲ細クタチテモ又犛牛ノ尾ニテモ作ル、是古ノ節旄、麾旄ナドイフ物ノ遺制トヤイハマシ、此物亂レタル世ノ俗ニ始マリタレバ、シカルベキ文字モアラズ、按ズルニマヅ左以トイフ事ハ、山鷹トテ角鷹(クマタカ)ナドツカフ時ニ、紙ヲ細クタチタルヲ、竿頭ニ團結(マロメユヒ)テ手ニスル事アリ、鷹ノ善ク習ヒ得タルハ、其左以ノ指麾スルマヽニ諸鳥ヲ下リ撃ツ、將帥ノ軍ニ令スル事コレニ似テ、其物ノ制モ相似タレバ、其名ヲ取リテカク名ヅケシナルベシ、鷹ツカフ左以ハ麾トカク、田獵ヲ建ツルトイフ、周禮ニヲノヅカラ合ヒタルニヤ、又其義ニヨリテ此字ヲ用ヒ來タレルニヤ、クハシキ事ハ知ラズ、俗ニハ又不計利ナドモイフ物ニヤ、サラバ左以トイハンニハ、麾ノ字ヲ用ユベキ事也、次ニ左以波以トイフ物ハ、神ニ奉ル幣帛ヨリ出デシ名ナルベシ、軍陣ニ幣捧ル事ハ、我國ノフルキ俗也、コレスナハチ九萬八千ノ軍神ヲ祭ルノ義也トゾ、神功皇后ノ新羅ヲ伐タセ給ハン時ニ、底筒男、中筒男、上筒男、三柱ノ大神神託シ給テ、今マコトニ其國ヲモトメント思ヒ給ハヾ、天神地祇マタ山神ト河海ノ諸神悉クニ幣帛ヲ奉リ、我御魂ヲ船ノ上ニ坐テ、眞木(オキ)ノ灰ヲ瓠(ウケ)ニ納レテ、又箸ト比良傳トヲ多(サハ)ニ作リテ、皆々大海ニ散シ浮テ渡リ給フベシトアリシカバ、神敎ノマニマニ軍ヲ整ヘ船ヲ雙ベテ、渡リ幸キマシマセシトイフ事、古事記ニ見エシナド其事トゾ覺ユル、鎌倉殿ハジメ伊豆國ヨリ兵起シテ、相模國石橋山ニ陣ドリ給ヒシ時、永江藏人賴隆白幣ヲ上箭ニ付ケテ御後ニサブラヒシモ、此義ニゾアルベキ、東鑑過ギニシ比上洛セシ時ニ、吉田ノ二位兼敬卿ニ、軍神勸請ノ幣ト云フ

物ノ事ヲ問ヒシニ、家ニ傳フル事侍リト答ヘラレタリキ、サラバ其戰ノ急ナルニ臨ミテ、此幣執リテ軍ヲ指麾セシ事ナドノ有シヨリ、事起リタランモシルベカラズ、犬追物ノ時ニ、神ニ進ラセシ幣ヲ執リテ指麾スル事ハ侍リ、巫祝ノ輩ガ神ヲ祭ルニ、幣トリテ祝詞マイラスル始ニ、再拜々々トイフ事ノアルヲ聞キテ、今モ幣ヲバ再拜トモイヒ、御幣ナドモイフニヨリテ、祓串（ハラヘグシ）ヲバ三幣ナドイフモ、スベテコレカタクナヽル俗ヨリ出デタル名ナレバ、正シキ文字モアラズ、今ハ世ニ采幣ナドカク人アリ、シカジタヾアリシマヽニ再拜トカキタランガマザレルニハ、其文字ノ雅ナラン事ヲモトメバ、麾ノ字用ヒナンニハシクベカラズ、但シ我見タリシ所ハ、左以トイフ物ハ、左以波以トイフ物ノ制ニハ少ク異ナルニ似タリ、此物ヲ執リテ軍ヲ指麾セン事モ、ソノコトバモ故實アリナドイフニヤ、異朝ニハ將帥節旄賜ハリテハ、節堂トイヒテ其幕府ニ堂建テコレヲオサメ、歲時ニハコレヲ祭ル、師出タサンズル時ハ、旌旗金鼓ニ至ル迄悉ク皆祭ラルヽ事也、マコトニ此等ノ物ハ、三軍ノ司命ナレバサモアリヌベキ事也、本朝ニハカヽル事モ聞エズ、近代ノ俗ニ、タヾ正月ノ初鎧ヲ祭ルノ儀ノミアリ、是ハ將帥ヨリ下ツカタ兵士ニ及ブマデ、纔ニ身ヲ防グベキタメノ物ナレバ、其祭ル所小シキナルニ似タリ、凡將帥タラン人ハ、異朝ノゴトク旗節ナドヲバ常ニ祭ラルベキ事ニコソアレ、

古ハ團扇ヲ執リテ軍ニ令セシ事モアリキ、上宮太子ノ執リ給ヒシ物也トテ、太秦ノ廣隆寺ノ寶藏ニ今モアルヲ見タリシニ、其形翳ノゴトクニテ、葦ノ長サ九寸、廣サ八寸許ナル二枚ヲモテウラオモテトシ、鐵ノ柄ノ二尺許ナルヲ中ニシテ、葦ヲ細ク截テ、メグリヲモ柄ヲモ夾ミ縫ヒタルニ、一面ニハ雲日、一面ニハ輪鉾ヲ漆ニテ彩リ畫ケリ、矢ニ中リテ破レシトイフ痕アルガ、實ハ火ノタメニ燒カレタルト見エシ、ソノ物フリタルサマ、ガフベカラズ、遠キ世ノモノニテ、其制マタヨノツネニ用ユベキ物トモ見エズ、征戰ノ具タル事疑フベカラズ、今モ世ニ軍配團扇トテ、戰ニ臨ミテ時日占フベキ法ナド圖シタル物アリ、此制何レノ代ヨリヤ起リヌラン、是モ軍師ヲ除クノ外ハミダリニ執ル事ヲ得ズ、主將賜ハリテ後ニ執ルベシ、近代マデ何某ハイヅレノ國ニテ團扇ユルサレシナドイヒ

テ、眉目(ミメ)アル事ニゾシタル、此外摺扇ヲ執テ、軍ニ令シタル事ナドフルキ世ノ事ニ見エタレド、コレヲ執ル事將帥ノミニ限ルベカラズ、義家朝臣執ラレシ所也トテ、見タリシ物ハ、表ノ方ハ雲母(キラ)地ノ薄紅ナルニ日形ヲ金ニシ、裏ノ方ハ白キ雲母地ニ銀ノ月形アリ、日月ノ徑各四寸、竹骨ノ長サ一尺一寸二分ナル十二本ニ、鍮石(シトヾメ)ノ鵐目アリテ、紅ノ打緒ヲ貫キ其末ヲ結ベリ、是モ上野國新田後閑ノ家ニ相傳ヘシ所ナリキ、其詳ナル事ハ圖ニ見エタリ、

古ノ時將帥節鉞ヲ賜フノ制アリ、節度ハ其信ヲ示ス所也、斧鉞ハ以テ刑戮ヲ專ラニスル所也ト、北畠准后ノ說ニモ見エキ、(職原抄)節旄ノ事ハ上ニシルシヌ、斧トイフ物ハ天目一箇神ノ作ラレシ物ト見エタレバ、(舊事紀)此物神代ヨリモアリキ、人代トナリテ、景行天皇ノ御時東國ヤスカラズ、アラブル神サハニ起リ、又蝦夷叛キシカバ、日本武尊ニミコトノリシテコレヲ平ケシメ給ヒシニ、帝斧鉞ヲ持テ授ケ給ヒシヨシ、日本書紀ニ見エタリ、コレラ斧鉞賜ヒシ事ノ始トヤイハマシ、サレド此時尊ノ賜ハラセ給ヒシハ、比々羅木ノ八尋矛ノヨシ古事記ニハシルセリ、其後又神功皇后ノ新羅ウタセ給ヒシ時モ、ミヅカラ斧鉞ヲ執リテ三軍ニ令シ給ヒシ御事、日本書紀ニ見エタリ、夏ノ時ハ玄戉ヲトリ、殷ノ時ハ白戚ヲトリ、周ニハ左ニ黃鉞ヲツキ、右ニ白旄ヲ把ルトイフ事司馬法ニ見エキ、周武王ノ牧野ニテ、衆ニ誓ハセ給ヒシ時カクコソアリケレ、皇后ノ三軍ニ令シ給ヒシ事、ヲノヅカラ彼三代ノ禮ニ合ヒシモノニヤ、但シ新羅王服(シタガ)ヒマイラセテ後、ツカセ給ヒシ矛ヲ王門ニ樹テ、後葉ノ印トセサセタマフ、其矛今モナヲ新羅王ノ門ニ樹ツルヨシ、同紀ニ見エタレバ、始ノ三軍ニ令シ給ヒシ時執ラセ給フモ、實ハ新羅王ノ門ニ樹テ給ヒシ矛ナレド、カクシルサレシ事、日本武尊ノ賜ヒシ矛ヲ、斧鉞トシルサレシ例ナルモシラズ、末代ニ至リテ斧鉞賜ハリシ事、イマダ所レ見アラズ、弘安禮節ニハ其制ヲ載ス、鉞ノ刄一尺二寸、柯ノ長サ六尺、其柯黑漆ヲ以テ塗ル、刄握ノ下一尺許アリテ、紫紅ノ組ノ絲ヲムスブトゾシルセル、元弘建武ノ後、兵士ノコレヲ執テ戰ヒシ事ナドハ見エタレド、將帥ミヅカラ執テ軍ニ令セシコトハ聞エズ、

本朝軍器考卷三終

本朝軍器考卷四

筑後守從五位下　源　君美彙輯

弓矢類

我國ノ弓矢ハ、伊弉諾尊ノ御時ニ始マレルヨシシルセル物アレド、（源氏河海抄）其事正史ニ見エヌバイカヾアルベキ、日本紀ニ見エシハ、素盞烏尊父母ノ神ニ逐ハレ、高天原ニ上リ向ヒ給ヒシ時ニ、日神背ニ千箭靫ト五百箭靫トヲ負ヒ、臂ニ稜威高鞆ヲハキ、弓彇ヲ振起給ヒシトアルゾ、此物ノ見エシ始ナルベキ、其後高皇産靈尊、天鹿兒弓天羽々矢ヲ天稚彦ニ賜ヒシ、皇孫天降マス時ニ及デ、天忍日命、天槵津大來目ヲヒキキテ、背ニ天磐靫ヲ負ヒ、臂ニ稜威高鞆ヲ着、手ニ天梔弓天羽々矢ヲ捉リ、八目鳴鏑ヲ副持テ、頭槌劔ヲ帶テ、御前ニ立テ行降リシ、又彦火火出見尊山ノ幸マシ〳〵テ、弓ト箭モタセ給ヘリシナドイフ事ハ同紀ニ見エタリ、サレバ是等ヲ神代四弓ナドイフ事ノアルニヤ、（日神ノ執リ給フヲ座陣弓、天稚彦ニ賜ヒシヲ發向弓、皇孫降リ給フ時、諸部ノ神ノ執リ給ヘルヲ護持弓、彦火火出見尊ノモタセ給フヲ治世弓トイフヨシ、神代抄ニ見エタリ、）シカハアレド、饒速日命ノ天羽々矢ト歩靫トヲ天表トシ給ヒシトイフ事モ、同紀ニ見エタリ、此事ハ皇孫ノ降リ給ヒシヨリ、猶サキノ事ニテアルナリ、又古事記ヲ併セ見ルニ、火々出見尊弓箭モタセ給ヒシトイフ事ハ見エズ、地神大己貴命、大野ノ中ニ射入レシ鳴鏑ヲトリ得給ヒ、又生大刀生弓矢ヲ得テ、其大弓持テ八十神ヲ追避ヒ、始メテ國作ラレシナドイフ事ハ見エタリ、サラバ天地ノ神代ニ此物ノ事聞エシ所、タヾニ四ツノミニモ限ラズ、イカデカクハイヒ傳ヘラレケン、オボツカナシ、天鹿兒弓トイフ事ハ、弓ノ曲レル形ノ、鹿背ノ屈ルニ似タレバ、カクハ名ヅケシナドイフ説アレド、（神代抄）日本紀私記ニハ或説ヲ引キテ、天香山ノ梔木ヲ採リテ作レル故ニ、カクハ名ヅケシト見エタリ、後成恩寺殿御説モ私記ニ見エシ所ニヨラレテ、鹿兒ト香ト其訓同ジ、又射レ鹿ノ弓ナルヲ、アヤマリワカチテ鹿兒トカキシトモイフ也ト見エタリ、古事記ニ據ルニ、高皇産靈尊ノ天稚彦ニ賜ヒシ天之麻迦古弓、天之波波矢ヲ、又天之波士弓、天之迦久矢トモシルセリ、サレバ其鹿ヲ射ルニヨリテハ天鹿兒弓ト云ヒ、其材ヲ採リシニヨリテハ天梔弓ト云フ、其名異ナレド其

實ハ一物ナリシト見エタリ、私記ニ引キシ或說、並ニ纂疏ニ見エシ土師氏ノ遠祖ノ作レル所ナレバ、波志ト云ヘル由ノ說ハ、共ニ心得ラレズ、又天羽々矢トイフハ、二羽ニテハゲルモノ也トイフ說モアレド、神代抄ニ一雙ノ箭ヲイフヨシ、後成恩寺殿ノ御說ニハ見ユ、纂疏私記ニハ鳥ノ羽ヲモテハゲル矢也、シカルヲカクカサネイフ事ハ、其羽ノ矢多キ也ト見エタリ、サレド舊事紀ニ據ルニ、饒速日尊神避タマヒテ、其天羽々弓天羽々矢ト、神衣帶ト手貫ト三物ヲ葬斂メテ、御墓作ラレシト云フコト見エタレバ、弓ニモ亦羽々ト名ヅケシアルナリ、サラバ天ノ羽々矢ト云フ事、鳥ノ羽ニヨリテ此名アリト云フ諸說モイカヾアルベキ、上古ノ神ノ代ニ羽々ヲ以テ名ヅケシモノ、劔矢ノミニモ限ラズ、素盞嗚尊ノ八岐大蛇ヲ斬リ給ヒシ劔ノ名ヲモ、天羽々斬ト名ヅク、古語ニ大蛇ヲ羽々ト云ヒシガ故也シ由ハ、古語拾遺ニ見エタリ、古事記ニ見エシ天迦久矢ト云フ物ハ、迦久ト鹿兒ト其語相通ジヌレバ、日本紀ニ見エシ眞麛鏃ト云フ物ト同ジク、是モ鹿兒ヲ射ルニヨリテ、其名ヲ得タルナルベシ、人代ニ至リ第二代ノ朝廷ノ初、綏靖弓部稚彥ヲシテ弓作ラセ、倭鍛冶天津眞浦ニ眞鹿鏃作ラセ、矢部ニ箭作ラセ給フ事、我國ノ弓箭作レル始也トイフ人アレド、第一代ノ朝廷神武ノ始、此國ヲ平ゲ給ヒシトキ、御兄五瀨命流矢ノタメニウセ給ヒシト見エタレバ、此國ニテモ既ニ弓作リ矢ハギシ事ノアリシ也、タヾシ弓作リ矢ハギシ工ノ名、コヽニ始メテ見エタリトイハムハアシカラジ、漢ノ許愼ガ說文ニ、夷トイフ字ヲ釋シテ、夷ハ東方ノ人也、大ニ从ヒ弓ニ从フト見エシハ、我國ノ事ヲサシイヘルナルベシ、大己貴ノ神此國ヲ作ラレシ始、大弓ヲモテ八十ノ神ヲ追避ヒ給ヒシ事ハ、我國ノ史ニモ見エタリ、舊事紀ニ人代トナリテモ、我國ノ弓ハ其制大ニシテ萬國ノ中ニコエスグレタリ、昔國々ノ人民ヲ挍ラレテ、其調役ヲ科セラレシ始ニ、男ニハ弭調トイヒ、女ニハ手末調トイヒテ奉リケリ、崇神天皇十二年紀ニカク其調役ノ物ニモ名ヅケラレタリケム事ハ、其俗ノ尙ミシ所ニコソアリケメ、サラバ又善ク射ル俗モ他國ヨリスグレタリトゾ覺ユル、後代ニ至リテ、天子ミヅカラ殿門ニ出デマシテ、王卿ヨリ下ツカタ大夫士ニ及ブ迄、詔ウケ給リテ射ル事ハ、廿三代ノ朝廷清寧四年九

月、射殿ニ出デマシテ百寮ニ射サシメラレシヨリ始マレルナルベシ、此時ヨリ藩國ノ使人等モ射ルコトニアヅカリシトゾ見エタル、孝徳天皇ノ三年ニ至リテ、正月朔日朝廷ニ射サシメラレシヨリ、大射ハ正月ニ行ハレ、日次ハ十七日ヲ用ヒラル、事ニハナリタリ、十五日ニマヅ兵部省ノ手番(テツカヒ)トイフ事アリ、コレ射手ヲト、ノヘ定メラル、儀ナルベシ、モシ正月ニ行ハレザル時ハ、三月十三日ニモ行ハルベシト見エタリ、此事異朝ニモ聞エシニヤ、我國ニハ正月一日ニ至ルゴトニ、必射戯シテ酒ノムトイフ事、彼國ノ史ニ載セタリ、シカルニ平城天皇ノ大同二年ニ、正月ハ三節豐樂(トヨノアカリ)キコシメシ、クサ〴〵ノ事モシゲク、イトマナキ月也トテ、コトシヨリ九月ヲ以テ此禮ヲ行ハレシカド、イク程ナクテ、嵯峨天皇ノ御時弘仁二年ヨリ又正月ニ行ハル、此ホド迄モナヲ藩國ノ使人等、角弓賜ヒテ其事ニアヅカレリ、後成恩寺殿ノ御説ニヨレバ、(公事根源)射禮ノ明クル日、射遺(キノコシ)トテ、昨日參ラザル四府ニ射サシメラル、事モ、此年ヨリゾ始マレル、又賭射トテ、天子弓場殿ニ臨ミ給ヒテ、四府ノ舍人等シテ射サシメラル、勝ノ方ハ負ノ方ニ罰酒ヲ行フ、又勝ノ方舞樂ヲ奏ス、此事天武天皇五年正月、祿ヲ置キテ西門ノ庭ニ射サシメ、的ニ中レルモノニハ祿賜ハリシヨリ始マルナドイヘド、賭射トイフ事ノ國史ニ見エシ所ハ、淳和天皇天長元年正月ニ行ハレシヲヤ始トスベキ、又殿上ノ賭射トイフ事、臨時ニ殿上ノ侍臣ニ射サシメラル、事トゾ、此事ハ仁明天皇ノ御時、承和元年二月ニヤ始マリヌラン、又射場始トテ十月ノ三日ニ、左右ノ衞門弓場ノ垛(アヅチ)ヲ築ク、此日天子射場殿ニ出デマシテ射サセテ觀給フ事アリ、公卿ヨリ下ツカタコレヲ射ル、此日天子モ御射席ヲ設ケラレ、御弓矢ヲモ御座ノ左右ニタテラル、コレ群臣ト共ニ弓ヲ射給フヨシ也、射場始ナクバ賭射アルベカラズ、賭射ナクバ相撲ノ節アルベカラザル由、後成恩寺殿ノ御説ニ見エタルハ、(公事根源)マコトニ深キ義アリヌトゾ覺ユル、サレバ天長二年正月ノ勅ニモ、射禮ハ國家ノ大事ニテ闕クベカラザル由見エタリ、此御代ニ紀朝臣眞道トイフ人アリキ、(眞一本ニハ興ニモ作ル)、中納言從三位勝長卿ノ男ニテ、弘仁天長承和三代ノ朝廷ニツカヘテ、位累リニ從四位下ニ至リ、職ハ兵部大輔左中辨右兵衞督歷テケリ、此人門風相承テコク射禮ノ

容儀ヲ傳フ、又大同ノ比從五位上作宿禰和武多麻呂トイフ人アリ、コレモ亦此法ヲツタヘキ、コレヨリ後世ノ武士、ナガク彼兩家ノ法ニナラフ、其法頗ル異同アレド、大體ハコレ一ツ也ト見エタレバ、（續日本紀）後世ノ武士射ル事、此兩家ノ法ニヤナラヒヌラム、寛平ノ比右大臣源能有ト申セシハ、文德天皇ノ皇子ニテ、代々ノ朝廷ニツカヘテ、終ニ執政ノ臣トナリ給ヒシガ、此人弓馬ノ藝ニ達シ給ヒタリケリ、源氏ノ祖貞純親王ト申セシハ、此人ノムコ君ニテオハシケレバ、其藝ヲ傳ヘラレシヨリ此カタ、源氏ノ人々ノ箕裘ノ業トハナリテケリ、カクテ後白河ノ法皇、賴朝ノ大將、朝家ニ勳勞オハシケル事ヲ賞ジサセ給ヒシカバ、ツキニ幕府ヲ東國ニ開キテ、專ラ天下兵馬ノ權ヲ司ドラレシヨリ、コトニ其禮ヲ講ジ、其藝ヲ試ミラル丶事モ多カリキ、モロコシノイニシヘ周ノ武王ノ御時、牧野ノ事終リテ武ヲ偃セ文ヲ修メ給ヒシ後、貫革ノ射ハ廢レテ、天下一ツニ禮射ヲノミ事トス、後王德衰ヘ給ヒ天下僭亂ノ世トナリ、齊桓晉文ノ業起ルニ及ビテ、禮射又廢レテ貫革ノ射ヲ事トスル世トナリシカバ、射ルコトハ革ヲシモ主トセズ、力ノ科同ジカラザルガ爲也トゾ、孔子モコレヲ嘆キ給ヒケル、サレバ彼幕府ニ講ジ行ハレ試ミ用ヒラレシ射儀モ、ヲノヅカラ古ノ道ニハカハレル事ドモスクナカラズ、此後又鹿苑院ノ大相國其禮ヲ修メラレシカド、（今川左京大夫氏賴、伊勢武藏守滿忠、小笠原兵庫助長秀等三人ニ仰セテ、三議一統ノ書ヲ撰バレシト云フ、）幾程ナクテ、天下ノ亂ウチツヾキテ、文武ノ道共ニ地ニ墜チテ、古ノ朝廷ニ行ハレシ禮ハイフニヤオヨブ、幕府ニ用ヒラレシ儀モ、今ハヨク知レル人ナキ世ニナリヌルゾカナシキ、

古代弓馬ニ便ナルトイフ事ハ、弓トハ步射也、馬トハ騎射也トゾ令義解ニハ見エタル、後世ノゴトクタダニ弓射馬騎ル事ヲノミイヒシニハアラズ、兵部省ニテ諸衞人士ヲ選バレシニモ、必步射騎射ヲ試ミラレシヨシ式ニモ見エタリ、（延喜式）今モ武士ノ行フ步射ノ中ニハ、其儀尤モ正シクシテ、古ノ禮射ノ遺レル風ニヤト見エヌル事モ多シ、小的ナドイフ事ハ、古ノ賭射ノ事ニ起リ、八的小串ナドハ其藝ノ精シキヲ試ミントノタメナルベシ、流鏑馬、笠懸、追物ナドハ戯射ノ事ナレド、是等ハ騎射習フベキタメニコソアルベケレ、楊弓、雀小弓ナドハ、武士ノ事トスベキ

戯トモ見エズ、凡騎射トイフ事、天武天皇ノ九年ニ、朝嬬ニ幸マシマセシ時、長柄ノ杜ニテ大山位以下ノ馬觀サセ給ヒテ、スナハチ馬的ヲ射サシメ給フトイフ事ゾ始ナルベキ、日本紀彼流鏑馬ト云フ事ハ、古ヨリ神事ニ用ヒラレシ所也、イカナルイハレアル事ニヤ、ソノ故ヲバシラズ、ソノ由リ來タル事モ久シキ事也、信濃國ノ住人諏方大夫盛澄トイフモノ、流鏑馬ノ藝ヲキハメテ、秀郷朝臣ノ秘訣ヲ慣ヒ傳ヘシヨシ、東鑑ニ見エタレバ、秀郷朝臣ノ時、既ニ此事ハアリキ、ソレヨリサキ田村麻呂將軍ノ、安倍高麻呂ヲ伐タレンズル始、信濃國ニ至リ諏訪ノ御神ニイノリ申サル、事ノ有リシニ、梶ノ葉ノ文ツケシ直垂着タル人、湖ノ波ノ上ニ馬ヲ趨セテ笠懸ヲ射タリシ、是レ彼御神ノ現レ給フ所也トゾ、サレバ此後趨波トモシルシテ諏訪トヨメリ、此事諏訪ノ御縁起ニモ侍ルメリ、後世ニ至リテ、諏訪ノ神事ニハ、必ズ遠笠懸射テ進ラスル事ハ、其例ニゾアルベキ、オモフニ此事彼國ノ風俗ニヤ、木曾殿ノ御曹司志水冠者義高ノ十一歳ニ成リ給フヲ、鎌倉殿ヘ參ラセラレシニ、歸リ參ルホドノカタミトテ、笠懸七番射テ母上ニ見セ進ラセラレシナドモイフ事アリ、盛衰記ニ小笠懸トイフ事ハ、壽永三年五月、鎌倉殿池大納言頼盛等ノ客ヲ伴ヒ、由比浦ヨリ船ヲウカメ、杜戸ノ岸ニ至リ、此所ノ松陰ニテ小笠懸アリケル時ニ、コノ士風也、此儀ニアラズバ他ノ見物アルベカラザルヨシノタマヒシ事、東鑑ニ載セタレバ、此事ハ東國ノ風俗ヨリヤ始マリヌラン、遠笠懸トイフ事ハ、此後ヨリ始マレルナルベシ、右大臣實朝公ノ代ニ至リテ、建仁四年二月、由比濱ニ出デ給ヒ、笠懸、遠笠懸等ノ的ヲ射サシメラレシ由同記ニ見エタリ、追物ノ始サダカナラズ、倭名鈔ニハ後漢書ノ馳射ノ事ヲ引キテ、今按ズルニ俗ニ云フ於牟毛乃以流ト注シタレバ、頃ノ比スデニ此事アリ、鬼童丸ト聞エシ盗源頼光ヲ恨ムル事アリシニ、彼朝臣鞍馬詣デスト聞キテ、市原野ノ邊ニ出デ向ヒテウカヾフ、カクルベキ便リナケレバ、野飼ノ牛ノアマタアルガ中ニモ、大キナル牛ヲコロシ、腹カキヤブリテソノウチニゾカクレキケル、案ノゴトク頼光出デ來リテ馬ヲヒカヘ、野ノ氣色興アリ牛其數アリ、各牛追物アラバヤトイハレシカバ、綱、公時、定通、季武ナド聞エシ四天王ノ輩我モ／＼ト射ル、綱イカニ思フ

所ヤアリケム、トガリ矢ヌキ出ダシテ、彼死シタル牛ヲ射タルニ、大ノ童、矢ニアタリナガラ打刀拔モチ走リ出デヽ、賴光ニムカフヲ、賴光大刀ヲヌキテ其首打オトシケリナドイフ事アレバ、古今著聞集ソノ比スデニ牛追物ハアリキ、鎌倉ノ比モ牛追物アリシゾ、追物ノ始ニテハアリケル、壽永元年四月、前右兵衞佐殿金洗澤ノ邊ニテ、牛追物射サシメラレ、同年六月、由比浦ニテ又コノ事アリキ、ソノ後モコノ事アリシニヤ、東鑑ニハ見エズ、犬追物ノ事ハ、三代將軍ノ記ニハ見エズ、入道將軍賴經ノ代ニ至リテ、貞應元年二月、南庭ニ於テコノ事アリ、ソノ後ハ此事ヲシルス事絕エズ、足利殿ノ代ニハ、コトニ盛ニ行ハレキ、中原高忠ガ聞書ニ、多賀豐後守ガ事ナリ、笠懸ハ賴朝ノ御代ニ射始メラル也、犬追物ハ前代ノ時ヨリ射始メラル、ソノ後アマリニ蟇目モコボレ、篦モ折ル、ノ間、大儀タル由皆々申シ合セ、篦モ白篦ニナリ、蟇目モ黑ク草ニナサレタリ、蟇目、赤漆本也、笠懸蟇目ニテ射始メラレシニヨリテ、赤漆本也トゾシルシケル、此ノ說モツトモ據アル事ニヤ、タヾシ笠懸ハ賴朝ノ御代ニ射始メラレシト云ヒシハ、小笠懸ノ事ヲイヒシナルベ

シ、前代ノ時トイヒシハ、北條ガ家鎌倉ノ執權タリシ時ヲサシケル也、按ズルニ、高時入道滅ビ、其子相模二郎時行ガ兵起セシ時、中前代トイヒシ事、太平記ニモ見エタリ、コレハ足利殿ノ代ヨリサシイヘル稱ニテアル也、サラバ東鑑ニ見エシ、賴經將軍ノ代ニコノ事アリシゾ、其始ナルベキ、カツハ笠懸蟇目ニテ射始メラレシニヨリテ、犬射蟇目モ赤漆タルベシトアルモ、コノ事ノ笠懸ヨリ後ニ起レル證トヤイハマシ、又彼ノ聞書ニ、昔ハ犬追物已前ニハ、小牛ヲ射ル也トモシルセリ、東鑑ヲ見ルニ、賴朝ノ代ニハ牛追物ノミアリキ、是レモ高忠ガ說ニ合ヒケルニヤ、又犬追物ハ、入道將軍ノ御時ニ始マレリ、嘉禎年中平泰時經時等、矢所矢落等ノ批判ヲ議定セラレシヨリ、永クコノ事ノ儀式トナリシ由記セル物モアリ、騎射秘抄コレモ又、東鑑幷ニ高忠ガ說ニハ合ヒタリ、然ルニ世ノ傳フル所ハ、牛追物ハ神功皇后新羅ヲ伐チ給フ時、吉備國ノ海ニテ、牛鬼射ラレシ事ニ起リ、犬追物モ同ジキ時、新羅王ハ吾ガ國ノ犬也ト、詔アリシヨリ始マルトモ、又近衞院御在位ノ時、那須野ノ狐カラレシヨリ起ルトモイフ也、順德院ノ御製ノ禁秘抄ニ、犬狩ノ事ヲシルサセ給ヘリ、コノ事藏人仰ヲ承リテ下知ス、所ノ衆瀧口參ル、瀧口弓箭ヲ帯シテ所々ニ

儲ケテ犬ヲ射ル、所ノ衆縁ノ下ニ入リテ、狩出ダスノヨシ見エタリ、其事ノ體、大ヤウ犬追物ノ儀ニ似タル所モアレバ、犬追物トイフ事ハ、此事ヨリ起レルニヤ、タヾシ犬狩ハ、騎射ノ事トモ見エズ、犬追物ハ必ズ騎射ヲ用ユ、カノ高忠ガ、鎌倉ノ代ニ此事始マレリトイヒシハ、其比ニ及ビテ、犬追物ノ儀全ク備ハレリシ事ノ始ヲサセルナルベシ、犬狩ノ始、又イヅレノ時ニヤ起リヌラン、彼御抄ニ匡房記ヲ引カセ給ヒテ、堀河院ノ時犬狩ニ諸陣ヲ閉ヂラル、シカレドモ前例ハ、御物忌ニアタル時犬狩便リアリトイフ事見エタレバ、寛治嘉保ノ比ヨリ、猶サキノ代ノ例アリシ事ハ分明也、聖武天皇ノ御時、神龜元年五月ミカド重閣中門ニ出デマシテ、獵騎ヲ觀給ヒシトイフ事アリ、續日本紀禁内ニシテ御覽ゼラレムニハ、野ニアル獸ヲ獵ラセ給ヒシ事トモオモハレズ、コレラ又後世ノ犬狩ナドイフ事ニ、似タル所モ侍ルニヤ、ツラ〳〵思フニ、凡追物トイフ事ハ、騎射習フベキワザニ事起リテ、其事ノ始ヲ尋ネントスレド、サダカナラネバ、好事人ノ牛鬼狐妖ナドノ事、附ケ合セテイヒ出シタリケンモ知ルベカラズ、草鹿トイフ事モ其始詳ナラズ、是レモ始ハ、夏野ノ草ワクル鹿ナド射ナラフベキタメニヤ起リヌラン、唐代ノ人鹿射ントテハ、マヅ堋ノ上ニ鹿繪カキテ射ル事アリ、梁武帝ノ御時ヨリ、此事アリシニヤノ由、記セル物モアリキ、酉陽雜俎建久三年八月、鎌倉右大臣殿生レ給ヒシ時、將軍家御産所ニ渡リ給ヒ、父母兼備ノ射手等ヲ召サレ、草鹿ノ勝負アリシ事、東鑑ニ見ユ、サラバ其比ハ此事又習藝ノ事ノミニモアラザリキ、圓物ハ、正治年中、海野小太郎幸氏、工藤小次郎行光等、藤源二郎親綱ガ家ニ會合シテツクリ出ダセリ、左金吾頼家將軍コノ由聞召サレテ、御壺ノ内ニ的カケテ射サセ給ヒシホドニ、人々コレヲ學ビ射タリシ由、圓物ノ書トイフ物ニハ見エタリ、此事東鑑ニハ見エザレド、ウケ傳フル所ゾアルラメ、八的、三々九ノ手挾ナドイフ事ハ、右大將家ノ時ヨリ既ニ見エタレバ、其來タル事、久シキ事トコソ見エタレ、サシ矢、遠矢ナドイフ事モ古ヨリ聞エシ、倭名鈔ニ、淮南子ニ見エシ、越人遠射ヲ學ブトイフ事ヲ引キテ、遠射トカキテ止保奈介トヨム、今按ズルニ遠射ハ、スナハチ射ル事ノ遠キ也ト注シタリ、又保元物語ニ、興福寺ノ衆徒等、吉野十津河ノ差矢三町、

遠矢八町トイフ者共ヲ具シテ、千餘騎ニテ新院ノ御方ニ參ルトモ見エタリ、又源平盛衰記ニモ、或ハ遠矢ニ射、或ハ差矢ニ射ルナドイフ事モアレバ、コレラノワザ久シク聞エシ事ナレド、得長壽院ノ堂ニテ、差矢射テ其藝ヲ試ミル事ノ盛リニナリシハ、近世ニ起レル事ニテアル也、世ニ傳フル所ハ、後白河院御在位ノ時、吉野ノ奥ニ蕪坂源太トイフ者アリ、生國ハ紀伊國熊野山蕪坂トイフ所ノ者ナレバ、其字ヲカク云ヒケリ、此男常ニ狩スル事ヲ業トス、精兵ノ手キヽニテ、二町ガ程ヲ隔テ走ル鹿ヲ、ハヅサデコソ射タリケレ、アル時里人集マリテソレガ弓勢ノホドヲ試ムルニ、差矢ハ三町、遠矢ハ八町ヲタヤスウ射渡シケレバ、サテコソ差矢三町、遠矢八町トハ名ヅケヽレ、カクテ保元ノ亂出來シ時、興福寺ノ衆徒等ニ催サレテ、新院ノ御方ニ馳セ參ルニ、新院ノ御軍ヤブレヌト聞エシカバ、衆徒等ハ南都ニ引キ返ス、源太ハ同隷共六七人伴ヒテ、都ノ中コヽカシコメグリ見テ、得長壽院ニ至ル、此御堂ト申スハ、凡ハヨノツ子ノ二間ヲ一間トナシテ、三十三間ニ建テラレタリ、源太アッパレカヽル所ニテ、ヲノガ弓勢ヲモタメサメト思ヒテ、ヤガテ御堂ノ後ニ廻リテ、芝ノ上ニヒザマヅキキテ、マヅ例ノ差矢ニ射タリシニ、御堂二タケニ餘リテ射ワタシツ、次ニ御堂ノ緣ノ上ニ上リ居テ、小キナル根スゲタル矢取リ出シテ、軒端ノ下ヲ射ワタスニ、七筋マデアヤマタズ、御堂ノ内ヲ射トホシテ、餘ル矢ハナヲ御堂ノタケニハアマリキ、此事ハ保元ノ日記ニ見エタル也、ハルカニ代ヲヘダテ、後、文祿ノ比、東山今熊野ナル觀音ノ別當ノ坊アリケリ、此坊モト弓矢トル家ヨリ出デタレバ、僧トナリテモナヲ此事ヲ好ミテ、常ニハ八坂ノ青塚ニ向ヒテ遠矢射ル、此堂ノ邊打チ過グルトテ、彼源太ガヤウニ差矢射ル事モアリケリ、サレド其比ニハ矢ノ數多ク射ルニモ及バズ、慶長十一年正月十九日ニ、淺岡五兵衛尉トイフモノ、始メテ五十一筋ノ矢射トホシテヨリ、此事ヲモテ其藝ヲ試ムル事ニハナリタリ、カノ淺岡ハ石堂竹林トイフガ弟子ニテゾアリケル、

清三位宣賢ノ說ニ、我國ノ弓ハ、月ヲ見テ作レル也、弓ノイマダ張ラザルハ、月ノ初メニ生ズル象ニテ、張レルハ上弦下弦ノ象也、箭ハゲテ引ク時ハ、月スデニ盈テル象也、弓ノ長ハ七尺ナレド、今長七尺五寸也、神代ノ弓ハ一丈五尺、是レ一尺ヲ十五合セタルモノニシテ、スナハチ十五日ノ數也、今ハ人ノタケ短キニヨリテ七尺五寸トナス事、神代ノ弓ノ半ナル也、但ハ七尺五寸ナランヲ、圓ニ引キ滿ムニハ、圍一丈五尺ナルベシ、矢ノ長ハ弓ヲ三ツニスルガ一ツナレバ、今ノ矢ハ二尺五寸也、按ズルニ今ハ二尺七寸ヲ以テ定トス、神代ノ矢、其長五尺ニゾアルベキ、劒ニハ十握九握八握ナドイヒテ、其長定マレリトモ見エネド、弓ノ長ハ定マレルモノ也トゾ見エケル、神代抄大己貴ノ神、大弓持チテ此國ヲ平ムケラレシトイフ事モアレバ、神代ノ弓、人代ノ制ニ異ナリシモシラネド、人代ノ弓ダニ萬國ニスグレテ、其制大ヒ也トゾイフナル、マシテ神代ノ弓甚長カランハ、誠ニアヤシキ事也、彼卿ノ說ナレバ、ウケ傳ヘラレシ所コソ有ルベケレ、サレドタヾ張レル弓ノ形ハ、上弦下弦ノ月ニ象リ、ソレヲ引キ滿ツル形ハ、月ノ望ニ象レリ、サレバ十五望ノ數ヲ半ニシテ、七尺

五寸トセリトイフ説コソ、ヤスラカナルヤウニ侍レ、又弓ノウラハズノ下一尺バカリヲ鳥打トイフ事ハ、大友皇子淨見原天皇ノ御位奪ハントテ、白キ雉ト化シテ來リ給ヒシヲ、弓ヲモテウチコロサセ給ヒシヨリ、カクハイフ也トイフモ彼卿ノ説也、コレラノ説ハ、コトニ信ジガタシトヤイフベキ、（大友ウセ給ヒシ事ハ、日本書紀ニ詳也、又白雉ノ事ハ、天武即位二年三月、備後國司白雉ヲ龜石郡ニ獲テ獻ル、スナハチ當郡ノ課役コトゴトク免シ給ヒ、天下ニ大赦アリシ由、同紀ニ見ユ、）又弓ヲ御多羅枝トイフ事モ、天竺ノ貝多羅葉ハソノ長サ七尺五寸也、弓ノ長モ同ジ事ナル故ニ、コレヲ多羅枝トハ申スニヤト、後成恩寺殿ノ御説ニ見エタリ、（公事根元）サレド多羅樹ノ高サ八九十尺トモ、又一多羅樹トハ高サ七仭ヲイフ、七尺ヲ仭トイヘバ、其ノ高サ四十九尺也ナドイフ事ハアレド、（翻譯名義集）ソレモ一定ノ説トモ聞エズ、萬葉集ノ歌ニハ、御執ノ梓ノ弓ト讀ミケリ、男子ノ執レル物ナレバ、（後代ニモ武士ヲバ、弓矢取リナドイヒシ、）弓イニシヘニハ御執トイヒシヲ、後代ニ至リテ御多羅枝トイフ事ハ、ソノコトバノ轉ゼシナリ、タトヘバ刀劔ハ佩トコロノ物ナレバ、彌波迦志トイヘル例ナルベシ、（日本書紀崇神ノ紀ニ、彌波迦志比賣ノ事ヲ、御刀媛トシルセリ、）

上古ノ弓ノ制、詳ナル事ヲ知ルベカラズ、今モ世ニ遺レル物ハ、大和ノ大安寺八幡宮ノ神寶ニ、神功皇后ノ御弓矢靭也ト云フアリ、同國法隆寺ノ寶藏ニ、上宮太子ノ弓矢靭等アリ、山城國愛宕郡靜原二ノ宮山王社ノ神寶ニ、天武天皇ノ御弓墓目等アリ、是等親シク見シ所ノ物ナリ、大安寺ニアル所ノ物ト、法隆寺ニアル所ノ物ハ、其制同ジクシテ、神功皇后ノ御弓ト云フ物ハ、其長七尺許、上宮太子ノ弓ハ其長六尺餘、共ニオノヅカラナル木ノ皮ヲ去キテ、弭ツケシ如クニ見ユ、大安寺ニアルハ特ニ古キ物ニテ、朽損セシ所アリ、靜原ニアル物ハ其長六尺八寸餘、木ヲ削リ成シテ丹ヲ塗リタル弣ト見エシ所ノ上下ニ、鍮石ノ濶サ一分許ナルヲ絆、彊ヲバ鍮石ヲ以テ包ミタリ、是等古ニ聞エシ梔弓、梓弓ナド云ヒシ物ニヤ、延喜式ニ見エシ梓弓ノ制ハ下ニ見エタリ、檀弓、槻弓、柘弓ナドシルセル物、未レ知二其詳一、大安寺ニ有ル物ハ貝多羅樹ノ枝也ト云フニヤ、心得ラレズ、法隆寺ニアル物ハ梓弓也ト云フ、サレド是等ハ神世ニ聞エシ波士弓ノ遺制ト覺ユル也、過ギニシ比、琉球ノ使人ニ遇ヒシ時ニ、其國ノ弓ノ制ヲ問ヒシニ、山桑ヲ以テ作ル、其材極メテ得ガタシ、アラ木ノ時多クハ

引キ折ルモノ也ト云ヒキ、其說大安寺法隆寺ニオイテ見シ物ノ制ノ如シ、亦按ズルニ、舊事紀ニハ梔ノ字ヲ借リ用ヒテ波士トヨム、コレハ倭名鈔ニ梔子訓ジテ久知奈之ト云フ物ニモアラズ、黃櫨訓ジテ波邇之ト云フ物ニモアラズ、爾雅ニ桑ノ一半ハ椹(クハノミ)アリ、一半椹ナキヲ梔ト云フニ據リテ、梔ノ字ヲバ用ヒラレシナルベシ、其實ハ桑ヲ以テ弓作レルナリ、禮ノ內則ノ注ニ、桑弧本大古也ト見エタレバ、異朝ノ事モ又相同ジカリキ、)又南都東大寺正倉院ニアル聖武天皇ノ御弓ノ圖ヲ見ルニ、ソノ制スナハチ彈弓ニシテ、我國ノ物トモ見エズ、(是等ノ物ドモ別ニ圖ニ見ユ、)天子ノ御弓ノ制、古兵庫寮ニテ作レル御梓弓ノ制ハ式ニ見エタリ、(延喜式)御弓ハ白木ノマヽニヤ、コレヲ錯(コス)ルベキ料ノ木賊ノ事ナドハ見ユレド、塗レシ料ノ漆ノ事ハ見エズ、御弣ハ鹿ノ角ヲ以テ作リ、緣ノ組ヲ以テ纏フ、御矢ハ角ノ大伊多都伎、角ノ細伊多都伎、木ノ大伊多都伎、麻麻伎、各一具、一具トハ五十隻ヲイフ、羽ハ雉ノ羽ヲ用ヒテ、生絲ヲ以テハグ、之ヲ塗ルニ金漆ヲ用フ、御鞆ハ熊ノ皮ニテ作リ、牛革ノ手ツケテ紫ノ組ヲ緒トス、御弓袋モ御鞆ノ袋モ、皆帛ヲ以テ作リ、紫表ニ緋裏セリ、金漆ノ櫃一合ニ御弓矢ヲ納レテ、其櫃ヲバ漆ニテ塗レル案上ニオクトゾ見エタル、其中ニ麻々伎矢トイフモノ、式ニ其鏃トナスベキ鐵、熟銅ノ料ヲシルサレタリ、倭名鈔ニ細射トカキテ、唐ノ鹵簿令ノ細射弓箭トイフ事ヲヒキテ、今按ズルニ、此間ニ萬々岐由美トナヅクト注シタリ、江家次第ニハ、眞卷弓矢トカキタリ、或人眞卷弓トイフハ、イカナル物ゾ、或ハ小弓トモイヒ、或ハ大弓トイヒ侍ルト、中園入道相國ニ尋ネ進ラセシニ、予ガ所存ハ、眞弓ニ籐及ビ樺ヲ卷クナレバ、カクイヘル也、近代ニハ紙ヲモテ籐樺ニカフルト答ヘ給ヒキ、(園太曆ニ)サラバ延文文安ノ比、既ニサダカナラヌ事也シニゾ、同式ニ、凡武官ノ人等ハ皆漆弓ヲ用フ、其正月十七日ノ大射ノ節ハ、文官ノ人モ亦同ジトアレバ、文官ノ人ハ常ニ漆弓ヲバ用ヒヌ也、後世ニ至リテハ、コトニ華飾ヲ加ヘラレシニヤ、弓ハ籐ニ隨ヒテ蒔繪シ、或ハ貝ヲ摺リ、彇ニハ銀ヲ彫メ、取柄ヲバ錦モシハ綾ナドヲ用ヒ、其上下ヲバ或ハ赤キ或紫ナル組ヲ卷ク、樺ヲバ白キ檀紙、紅ノ檀紙、モシハ色アル薄樣ナドヲモテ卷ク、矢ハ水精ヲ筈トシ、白キモシクハ紅梅ナル紙

ヲモテ、コレヲ巻コトニハナレリ、萬葉ノ歌ニ、梓弓末ニ玉纏クナド見エシモカヽル物ニヤ、革ヲシモ主トセザラムハサル事ナレド、コレモマタ文ノ過ギテ質滅シタル物ニテ、古ノ道ニハアラザルベシ、

武士ノ弓、式ニ見エシ所ニ據レバ、漆弓ヲ用ヒシ也、萬葉ノ歌ニ、麻周羅遠ノ佐都由美ト讀ミシモノ、武弓也トモ、又ハ薩雄ノ弓也トモ注セシモノ、其制詳ナラズ、（麻周羅遠ハ武夫也、薩雄ハ薩人也、此等ノ注、藻鹽草、萬葉集抄ニ見エタリ、）白木、黒塗、絲裹、籐巻、節巻、滋籐、笛籐、漆籠籐、二所籐、三所籐、矢ハ鏑矢、蟇目、的矢、野箭、征箭ナド云フ事ハ、中世ヨリ聞エシ所也、近代ニ至リテゾ、昔ニハ聞キモ傳ヘヌ物ドモ多ナリケルニヤ、其實ハ皆古ノ物ナレド、其家ゴトニ傳フル所ノ故實、異ナル事アレバ、自ラ其制モ多ク、其名モ異ナルヤウニハナレルナルベシ、鎌倉ノ右大將家、當時弓馬堪能ノ輩ヲ召シ集メ、舊記ヲ披キ先蹤ヲトブラハレシニ、其故實各相傳フル所ノ家説、面面ノ意見同ジカラザリシヨシ見エタレバ、（東鑑）其代猶シカ也、マシテ古ヲ去ルコト、遠キ世ニオイテヲヤ、今世ニ傳フル射ル法モ、其具足モ、鹿苑院殿ノ時ニ定メラレシ所ニヨル事ナレバ、シカジタヾ今ニ從ヒテ古ヲ稽ヘムニハ、

近世ニ傳フル所、一張弓、八張弓ナドイヘルモノアリ、（太平、蛇形、羅形、相位、四足、陰陽、福藏、世平、等ノ名アリ、）古ニ聞キ傳ヘシ所ニアラズ、オモフニ神代ノ四弓ナドイフ事ニヨリテ、後代ノ人意見ヲモテ、ツクリ出セル所ナルベシ、ソノ中ニ、怪シキ物射ルベキ弓也、又常ニ枕ノ上ニタツベキ弓也ナドイヘル二張アリ、（蛇形弓、羅形弓ナドイフナリ）、昔白河院ノ御時、御トノゴモリテ後物ニオソハレサセ給ヒシニ、然ルベキ武具ヲ御枕ノ上ニ置カルベキ由沙汰アリテ、義家朝臣ニメサレケレバ、眞弓ノ黒塗ナルヲ一張進ラセタリケルヲ、御枕ニタテラレテ後、オソハレサセオハシマサヾリシ由、宇治大納言物語ニモ、古事談ニモ見エタリ、又仁平ノ比、近衛院御在位ノ時、兵庫頭頼政怪シキ物ヲ射ラレシ所モ、滋籐ノ弓トコソ、平家物語ニハ見エタレ、（世ニ鵺滋籐トイフハ、頼政ノ怪鳥射ラレシ弓ノ制ナリト申スカ、）今八張弓ノ中ニアル、怪物射ルベシ、枕ノ上ニタツベシナドイフ物ハ、黒塗ニモアラズ、又滋籐ニモアラザルニヤ、但シ源平盛衰記ニハ、頼政朝臣ノ弓滋籐タルヨシハ見エズ、其弓ノ名ヲバ雷上動トイヒシ由ハ見エタリ、昔周公ノツクラセ

給ヒシ周禮トイフ書ニハ、其世ノツカサ〳〵ノ掌ドレル事ドモヲシルサセ給ヒタリケリ、其中ニ庭氏トイフハ、秋官大司寇ノ屬官ニテ、國中ノ妖鳥ヲ射ル事ヲ掌レリキ、アヤシキ鳥獸ノ夜ナ〳〵聲バカリシテソノ形見エヌヲバ、救日ノ弓ニ救月ノ矢ヲモテ射ル、アラブル神ノ怪シキ事ヲナスヲバ、大陰弓ト枉矢トヲモテ射ル事アリ、コレラノ事、周公ノ制リ始メ給ヒシ所ニモアラジ、古ノ神聖ノ時ヨリ設給ヒシ敎ニコソアルラメ、我國ノ神代ニ螢火ノカヾヤク神、五月繩ナス惡神多ニアリテ、磐根木株草葉モ猶ヨク言語コトアリシヲ、撥平ヨトテ天稚彦ヲ下サレシ時、天ニマス御神ノ賜ヒシ弓ト矢ハ、カノ庭氏ノツカサドレル物ニ似タル義モアリヌベシ、周ノ代既ニ滅ビ給ヒ、秦漢ヨリ後ノ代ニハ、カヽル事掌レル官モ、カカル弓矢ノ制モ聞エズ、姓ヲカフル事十餘リ六ツ、年ハ二千バカリモヤ經タリケム、宋徽宗皇帝ト申セシミカドオハシマシキ、我朝ニテハ堀河院ノ御代ノ末ツカタ、鳥羽院御在位ノホドニヤアタリヌベキ、ソノ御代ニ黑眚トテ、タトヘバ我ガ朝ニテ賴政ノ射ラレシ物ノゴトクナル物ノ、夜ナ〳〵宮中ニアラハレテ、怪シキ事ドモ多カリシカド、コレヲシヅメムスベナクシテ、ヤガテ世ハ亂レケリ、彼黑眚ノ見エシ事、仁平ノ比ヨリハ三十年バカリモヤ隔リヌラム、本朝ニモ異朝ニモ遠カラヌホドニ、似モ似タル物ノ怪アリシコソアヤシケレ、此賴政朝臣ハ、仁平ノ度ノミニモアラズ、應保ノ比、二條院御在位ノ時モ、鵺トイフ怪鳥射ラレシ由、平家物語ニハ見ユ、但シ源平盛衰記ニハ、平治二年ノ夏、鵺トイフ怪物射タリトモ、又仁安元年ノ夏ノ事トモイフトシルシテ、二度射ラレシトハ見エズ、其後後醍醐院重祚ノ後、建武元年ニモ、隱岐二郎左衞門尉廣有トイフ者、紫宸殿ノ上ニテ夜ナ〳〵鳴キシ怪鳥ヲ射ル、カク我朝ニテハ怪物射ラレシ事、度々ニ及ビシカド、彼周ノ代ノ後ニハ異朝ニハ其例聞エズ、サレバ我國ノ人射ル事ハ、他國ヨリコエスグレタリトハ覺ユル也、又彼八張ノ中ニ、產屋ノ蟇目射ツベキ弓アリ、（相位弓トイフ歟、）周代ノ禮ニ、子生レヌルニ、男子ニハ弧ヲ門ノ左ニマウケ、女子ニハ帨ヲ門ノ右ニマウク、三日ニシテ始メテ保コレヲ負フ、男子ナレバ射人ノ官、桑弧蓬矢六ツヲモテ、天地四方ヲ射ル、女子ニハシカセズトイ

フ事アリ、内則我ガ國ニテ、子生ル、時、蟇目射ル事ノ始ハ、天孫此國ニ降リ給ヒシ始、諸部ノ神、手ニ天梔弓ト天羽々矢ヲトリ、八目ノ鳴鏑ヲトリソヘ、御前ニ立チテユキクダリシトイフ事ニ起レル也、凡ハ天孫ノ降臨マシマセシモ、人ノ降誕ル、モ、其義同ジキガ故也、サレバ人ノ子ウム時、十二段アル祓ノ中、天孫降臨ノ段ヲヨム時ハ、其子必ズ平ニ生ル、事也トゾ、宣賢卿ノ説ニハ見エタル、神代抄コレラノ事ヲオモフニ、産屋ノ蟇目射ンズル弓、我國ノ神代ノ遺風ナラムニハ、梔ノ木ニテヤ作ラマシ、サラバオノヅカラ他國ノ聖主ノ代ノ禮ニ相合フ所モアリヌベキ、サレド彼産屋ノ蟇目射ル弓トイフモノハ、コレラノ制トモ見エズ、平家物語御産ノ巻ニハ、小松大臣桑弧蓬矢ヲモテ、天地四方ヲ射サセラルトハ見エタリ、又産屋ニテ弓ヲ拜(ツルウチ)スル事アリ、此事古キ風俗ニヤ、壽永三年鎌倉ノ頼家生レ給ヒシ時ニ此儀アリケリ、東鑑凡鳴弦トイフ事、何事ニヨリテ何レノ代ニヤ起リヌラム、天照太神天ノ岩窟ニコモリ給ヒシ時、諸神神樂ヲ奏シ給フニ、弓六張ヲ並ベテコレヲ彈ゼラレシナド聞エシハ、弓弦ナラセシ事ノ始ニヤアル

ベケレド、此事ハ和琴ノ始トコソイヒモ傳フレ、後代ニ鳴弦ナドイフ事ノ始トモオモハレズ、雷鳴ノ時、古ハ上卿兵衛佐ヲメシテ御前ニ候センメ、諸衛警固ス、後代ニ及デハ、藏人瀧口ノ弓ヲ持チテ御縁ニ候シ、アルハ瀧口少々御壺ニメシテ、鳴弦セシメヲル、儀侍ルナド、禁秘抄ニシルサセ給ヒタレバ、此事又古ヨリアリシ事ニゾ、堀河院御在位ノ時、オビエ魂ギラセ給フ事アリシニ、義家朝臣南殿ノ大牀ニサフラヒテ、御惱ノ刻限、鳴弦スル事三度ノ後、高聲ニ前陸奥守源義家トナノリタリケレバ、聞ク人身ノ毛ヨダツテ御惱必ズオコタラセ給ヒシナド、平家物語ニモ見エタリ、又八張ノ中ニツクウチタル弓モアルニヤ、凡ハ弓ニツクウツ事、矢コボレセザラム料ニテ、戦ノ急ナラン時ニ便リアル事ナレバ、古ヨリ此制ハアリキ、太平記等ノ中、ココカシコニ見ユ、サレド世ニイフ事ノゴトク、定マレル式アリトモ聞エズ、彼是ヲ併セ考フルニ、スベテハカノ八張弓トイヘル物ハ、古ノ制ニハアラズ、又村刮側黒(ムラコキリバクロ)ナドイフ物モ、近代ノ制也、其中村刮ノ弓、尋常ノ人タヤスク持ツマジキ物也トゾ、世ニハ申シ傳フル、

世ニ半弓トイフ物ハ、異國ノ制ニテアル也、サレドカノ國々ノ弓モ、古ヨリ今ニ至リテ其制コトニ多カリ、本朝ノ制ニ準ソレバ、タヾ其長ノ短ケレバ我國ノ弓ノ半也トイヘル義ニゾアルベキ、今ハ世ニ彼制ニ倣ヒ造レルモアレド、彼國々ヨリ來タレルニハ及ビガタシ、異國ノ弓我朝ニ來タレル事ハ、神功皇后攝政ノ四十六年、我朝ノ使人ニ百濟ノ肖古王ノアタヘシ物ノ中ニ、角ノ弓箭見エタルヲヤ始トスベキ、其後ハ蕃國ノ使人等來タレル時、角弓賜テ射サシメラレシナドイフ事世々ニ見エタリ、又唐書杜氏通典等ニ、我國ノ使者蝦夷人ト偕ニ朝ス、其鬚長サ四尺許、箭ヲ首ニ珥ム、人ヲシテ瓠ヲ戴キ立ツコト數十歩、射ルニ中ラズト云フコトナシトシルセリ、齊明天皇五年七月、唐國ニ使ヲ遣サレシ時、陸奥ノ蝦夷ヲ以テ、其天子ニ示サレシト見エシ事ニヤ、今蝦夷弓矢ノ制ヲ見ルニ、是レ又半弓ト云フ物也、弓長サ三尺七寸餘、其地ニ産スルヲツコト云フ木ヲ削リ成シテ作リ、樺皮ヲ纏ヒテ、弦ニハ草皮三條ヲ組ミタルヲ用ユ、矢ノ長サ一尺二寸許、松枝ヲ削リ成シ、鵜鷹等ノ羽四ツダテニシテ、鏃ニハ鹿ノ足骨ヲ用ユ、チツコ、此方ノ俗ニ伽羅木ト云フ歟、

弦ハ古ハ皆塗弦也シヲ、中比ヨリ白木ノ弓ニハ、白弦ヲ用ユル也トイフ事アレド、古モ白木ノ弓ニハ白弦カケシニヤト見ユル事モアリ、其比武官ノ人ハ皆塗弓ナレバ、塗弦タル事ハイフニ及バズ、又今ノ塗弦ハ必ズ筈ダマリアルニヤ、昔ハ塗弦アリ、セキ弦アリ、滋籐ノ弓ニセキ弦カケシナド、源平盛衰記ニ見エシモ、ヨノツネノ塗弦ニ同ジカラネバコソカクハシルシタレ、又俗ニ關弦トカクハアシカラジ、禦弦トカク由ハイカヾアルベキ、異朝ニテハ弓ニ矢ハグル事ヲ關ストイヘバ、孟子左傳等ニ見ユ、關ノ字ヲ借リ用ユル、ソノ緣アルニハシカジ、異朝ノ弩ノ弦ノ羽管纏ナドイフ物此類也、又フセ弦ト云フアリ、フセ弦、セキ弦、其制少ク異ナリト見エタリ、又ムカシハ弦ヲ一條二條ナドシルス、今ノ俗ニハ一筋二筋トカク也、雅俗ノ字ハ同ジカラネド、トナフル所ノ異ナルニハアラズ、又一張トハ七筋ヲイヒ、一桶トハ廿一筋也、又替弦トイフ事モ、昔ハ副弦令ニ又ハ儲弦トモ、日本書紀又設弦トモシルセリ、一ツニハ宇佐由豆留トモイヒシ由、舊事紀ニハ見エタリ、

鳴鏑トイフ物ハ、天孫此國ニ降リマセシ時、諸部ノ

神、天梔弓天羽々矢ヲトリ、八目ノ鳴鏑ヲ副持（トリソヘ）ラレシトイフ事、此物ノ見エシ始ナルヨシ申セド、此國ニシテ大己貴神須世理媛ヲヨバヒ給ヒシ時、大野ノ中ニ射入レシ鳴鏑ヲ取リ得給ヒシトイフ事、舊事紀ニ見エタルハ、天孫ノイマダ降ラセ給ハヌサキノコトニゾ有リケル、後成恩寺殿ノ御説ニハ、八目トハ鏑ニ八竅アリ、漢書ニイハユル冒頓ガ作レル鳴鏑是也トシルサレタリ、纂疏是ハモロコシニテ漢ノ比、北ノ狄冒頓單于トイヒシガ、父コロサムトテタクミ出ダセシヨリ始マレリト、イフ説ヲ引カレシカド、莊子ノ中ニ嚆矢トイフ物見エシ其ノ注ニ、矢ノ鳴ルモノ俗ニ響箭トイフヨシ見エタリ、サラバ彼國ニテモ、此物既ニ周ノ代ニ見エタリ、我國ニテコレヲ加布良トナヅケシ事ハ、イカナルイハレニヤ、イマダ所見アラズ、但シ矢頭トイフ物ハ、神代ヨリ始マレル物ナレバ、凡ハ矢ノ始ニテ神頭ナドモカク也、其矢頭ヲバ、米加布良トテ海ニ生フル藻ノ根ニテ作レルガ、本式ニテハアル也、ムカシ神代ノ時、櫛八玉ノ神海藻ノ柄ヲ鎌ニシテ燧臼トシ、海蓴ノ柄ヲ燧杵トシテ、火ヲ鑽出セリトイフ事モアレバ、舊事本紀此物モ、モトハ米加布良ニテ作リ出ダセル物也シニヨリテ、カクハナヅケシニヤ、又平家物語ニハ蕪トモシルシタレバ、其形ノ蕪菁根ニ似タレバトテ、カクナヅケタルラムモシラズ、是ヲ八目トイフ事ハ、或人ノ説ニ、八ハ木ノ成數ニテ、卦ニオキテ震也、雷也、雷ハ動キテ音ヲ發ス、カブラハ木ニテ音ヲ發スル物ナレバ、其穴ヲ開ク事モ、又八ノ數用ユルト見エタリ、神代抄ニ又其説ニ、音トハ其文字立ノ字ニ从ヒ、日ノ字ニ从フ、立ノ字ハ六一ニ从フ、一六ハ水ノ數也、陰也、日ハ太陽ノ精也、陽也ナドイヘリ、此等ノ説ウケ傳フル所コソアラメ、信ジガタキ事ナリ、天神地神カヽル深キ義ヲモテ、各此物ヲツクリ出ダシ給ヘルモイブカシ、但シ天神ノ副持ラレシハ、八目ノ鳴鏑ト見エタリ、地神ノ取リ得給ヒシハ、タヾ鳴鏑トノミアレバ、其目ノ數ハシラレズ、オモフニ此物作リ出サレシ始、タヾ其鳴ルコトアランガタメニ、其竅ヲバ開カレタリケメ、八ツトイフ事ハ、凡ハ神代ニ用ヒ給ヘル數ナレバ、カクハイヒケルナルベシ、今モ鳴鏑ニ目ヲサス事、一ツモ三ツモ四ツモ五ツモサス、定マレル數アルニモアラズ、鎮西八郎爲朝ノ鳴鏑ニハ目九ツ

サヽレシ事モ、保元物語ニハ見エタリキ、殊ニハ又音トイフ事ハ、陰陽ヲ合セシ義也ナドイフ説ハアヤマレル事ニヤ、於登トイフ詞ハ、我ガ國ノ語也、音トイフ字ハ、秦漢ノ隷書也、今ノ楷字ハ、應神天皇ノ御代ニ、百濟ヨリ經典ナド獻ラレシ時ニコソ、此國ニハ傳ヘタレ、人皇十六代ノ朝廷ニ、始メテ傳ヘタラン文字ヲ、八十萬歳ノサキニ、天地ノ神ノシロシメサレテ、其字ノ義ニヨリテ此物作リ出ダサセ給ヒシトイフ事ヤアルベキ、又説文ヲ考フルニ、音ノ字立ノ字ニ从ヘルニモアラズ、又日ノ字ニ从ヘルニモアラズ、凡我國ノ俗、古ヨリ言傳ヘシ所カヽル事ドモ多シ、能々心得べキ事ナリ、古ノ鳴鏑ノ今モ世ニ遺レル物ドモ見ルニ及ビシ所ハ、天王寺ノ寶藏ニアル所ノ上宮太子ノ鳴鏑矢一筋、法隆寺寶藏ニアル所ノ上宮太子ノ鳴鏑矢一筋、東大寺正倉院ニアル所ノ聖武天皇ノ御鳴鏑矢二筋アリ、其形オノ〳〵近世ノ制ニハ同ジカラズ、上宮太子ノ矢ニハ、目六ツト七ツトサヽレタリ、聖武天皇ノ御矢ニハ其目八ツト六ツトサヽレタルナリ、大安寺ノ神寶、神功皇后ノ御矢ト云フ物ニ、其形ハ鳴鏑ノ如クニシテ、目サヽヌヲ角ニテ作ラレシ一筋アリキ、是等ノ制別ニ圖シヌ世ニ相傳フル所、此物ノ制、羽ハグニモ篦コシラヘムニモ、各故實アリト云フナリ、此矢ヲ以テ上サシニスル事ハ、彼諸部ノ神ノ天羽々矢ヲ副持ラレシ遺ル俗トコソ見エタレ、又神通ノ鳴鏑矢トイフ物アリ、ヨノツネノ物トハ少ク異ナル也、此物ノ名、フルキ草紙ナドニハ見エタレド、田村草紙ナドイフ物ノ類シカルべキ物ニ見エザルニヤ、イカニウケ傳フル所モアル事ニヤ、マタ流鏑馬ノ時ニ用フル物ハ、ヨノツネノ木ニハ異ナルべシ、奴多米鳴鏑トイフハ、鹿ノ角ニテ作リ、三方ニヌタヲ殘ス、目ハ二ツヲ本トストイフ、讃岐國屋島ニテ、那須余一宗高ガ扇射タリシ矢此物ナリ、平家物語ニ見エシ所ナリ、盛衰記ニハ、ヌタメノ由ハ見エズ、今モ其子孫ノ家ニハ傳ヘラレケメ、文字ハ滑田目ナドカクニヤ、正シキ文字ハアラザルニコソ、コレヲ作ラムヤウハ故實アルべシ、後ニ順ノ倭名鈔ヲ考フルニ、唐韻ヲ引キテ、觚ハ、角上浪皮也、和名沼太(ヌタ)ト見エタリ、サラバ觚目鏑(ヌタメカブラ)トカクべキニヤ、

蟇目トイフ事ハ、其形ノ蝦蟆ノ目ニ似タレバ、カクハナヅケシ、タトヘバ、ツクリ皮ノ皺メルガ蝦蟆ノ背ニ似タレバ、比木波太トイフガゴトシ、此矢ノ鳴ル

音蝦蟆ノナク聲ニ似タレバカクナヅク、此事深キ義アリナドイフ事ハ心得ラレズ、昔八ノ物ノ名ヅケシ事、ヤスラカニシテムヅカシカラズ、此物ノ異名ヲ志禰久利トイフ事ハ、志禰トイフ鼠ハ、蘆根食フ物ナリ、其聲此矢ノ鳴ル音ニ似タル故ニ、カクモイフ也ナドイフ說ノアレバ、三議一統蟇目トイフモ其聲ニ取レルナドイヒシニヤ、古ノ物今モ世ニ遺リシハ、靜原二宮ノ神寶ニアル天武天皇ノ内庫ノ物也ト云フモノ、其ノ長サ一尺二寸、桐ノ木ヲ以テ作リテ、胴ニハ竹ヲフセテ胴卷セリ、其餘ハ今ノ制ニカハレリトモ見エズ、別ニ圖アリ、此物竹ノ根ヲモテモ作レル事、其出アルニヤ、廷尉義經屋島内府キテ鎌倉ニ下向アリシニ、路次ニテ藤原能保朝臣ノ侍、後藤新兵衛尉基清ガ所從ト、伊勢三郎能盛ガ下部ト鬪諍ニ及ブ、能盛ガ引キ馬ノ鞦ヲキリテハシリユクヲ、能盛ハセ出デテ竹ノ根ノ引目ヲモテ射タリシ事、東鑑ニモ見エタリ、オヨソ蟇目ノ制、犬射笠懸誕生ノ時ニ用ユル式コトニ多カリ、

四目トイフ物、壒囊抄ニハ立標トカキタリ、是ハシメ式ニ延喜式五月五日ノ競馬ニ、シメタツル事ヲ立標トシルセシヲ心得アヤマリテ、此物ノ名ニ取リ用ヒシニゾアルベキ、中原高忠ガ聞書ニ、此物目ハ四ツアルベキ事本也、四ツアルニヨリテ志米トイフ、但シ三ツニモスル也、クルシカラズ、サレド略儀也ト見エタレバ、四目トカクニハシカジ、竹ノ根ニテモ木ニテモ作ル、大小マタ定マラズ、赤クモ黑クモ漆ニテ塗ル、草鹿圓物ナド射ンズルモノ也、オモフニ是ハ、モロコシニイハユル骲箭ノ類ナル也、今モ彼國ニテ教閲ニ施ス木樸頭箭トイフハ、骲箭ノ遺制ニテ、我國ノ四目ノゴトクナル物ニテアル也、其圖武備志等ニ見エタリ、

矢頭ハ米加布良ヲホシカラシ作リテ、黑漆ニテ塗レルヲ本トス、又ハ木ニテモ作ル、又鐵ニテモ作リシ事モ見エタリ、太平記ニ見エシ金鏑頭コレナリ、此物ハ古ニ聞エシ大伊多都伎ノ制トゾ覺ユル、倭名鈔ノ平題箭ノ下ニ、楊雄方言ノ鏃不レ銳者、コレヲ平題トイフ、郭璞ガイハク、題ハ頭ノゴトシ、今ノ戲射箭也トイフヲ引キテ、和名ハ以太都伎トシルセリ、此矢草鹿圓物ナドヲ射ツベキ物ニテ、鏃ノ銳カラザル物ナレバ、順ノ引キシ所、方言ノ說ニハ合ヒヌ、サレド今ノ伊多都伎

トイフ物ハ鐵ニテツクレバ、矢頭トハ異ナルヤウニハアレド、カヽル物、イニシヘト名ハ同ジケレドモ實ハ異ナルモ、名ハ異ナレド實ハ同ジキモアル事、其例コレ多シ、延喜式ニ見エシ所、角細伊多都伎(ツノホソイタツキ)、角大伊多都伎(ツノオホイタツキ)ナドノ制多カリ、今ノゴトク薄鐵ニテ作レルノミヲ伊多都伎トイヒシニハアラズ、又矢頭トカクヨシハ下學集ニ見ユ、壒嚢抄ニハ磁頭ニ作リ、太平記ニハ鏃頭ニ作ル、オモフニタヾ矢頭トカキシガ據アルニハシカジ、神頭トカキテ、此矢神代ヨリアル物也ナドイフ説アレド、シカルベキ物ニシルセル事ヲ見ネバイカヾアルベキ、

的矢トイフ名、久シク聞エ侍リ、古ハイカニヤイヒケム、近代ニハ伊太都伎トテ、薄鐵ヲモテ箆ノ先ヲツツム、古ニ聞エシ伊太都伎ノ制ニハカヽル物ハ見エズ、又角木、木鉾ナドイフ物アリ、是ハ古ノ角細伊太都伎、木伊太都伎ナドイフモノ、遺制ナルベシ、或人ノイヒシハ、角木トイフ物ハ、モロコシノ骲箭トイフ物也トゾ、コノ説ハ誤レルニ似タリ、宋ノ蒼梧王ト申セシ天子ハ、御フルマヒヨカラヌ事ドモ多カリケリ、蕭道成トイヒシ大臣ノ腹ニ繪ガキテ的トナシ、骲箭ヲモテコレヲ射給フニ、其臍ニ中リシカバ、大ニヨロコバセ給ヒシトイフ事アリ、此蕭道成ト聞エシハ、後ニ齊ノ高祖皇帝ト申セシ御事也、其注ニ骲箭ハ骨鏃ノ人ヲ傷ル事アタハザル物トコソアレ、今ノ角木ナランニハ、イカデソノ御命オハシマスベキ、骨ニテ作レルヲ骲箭ト云フゾト心得、其制ヲ詳ニセザルニヨリテ、カクハ誤レルナルベシ、

野箭トイフ物、古ニ聞エシ獵箭ノ遺制トゾ覺ユル、タヾシ日本書紀ニハ、獵箭トシルシテ志々夜トハヨミタリ、此物野矢トナヅケイフ事ハ、イヅレノ比ニヤ始マリヌラム、壒嚢抄ノ中ニ、箆矢ナドシルシタルハシカルベカラズ、又アル人ノ野箭トハスナハチ征矢ヲイフ也トイヒシハ、モツトモ誤レル事ニゾアルベキ、保元物語ノ異本ニ、(牛井通仙院家藏ノ本也、)鎭西八郎ノ大矢ノ事シルシタリケルコトバニ、征矢ヲモ能キ羽ニテハハガザリケリ、マシテ野矢ハ晴ノアラバコソ能キ羽ニテモハガメ、夜晝朝夕ノ狩ナレバ、昨日ハイタルハ今日ノ狩ニ射損ズ、今日ハグ矢ハ明日ノ狩ノ料、常ノ狩ナレバ箆モ羽モコラヘザリケレバ、鷄ノ羽モ鳥ノ羽モハギ附ケ〳〵ハギシ出シルセシハ、野箭郎

チ獵箭ニテ、征矢ニハアラヌ證ナルベシ、コレノミニモアラズ、東鑑ノ中ニモ、建久三年十一月、鎌倉殿入洛ノ日、先陣後陣ノ隨兵等ハ、各冑ニ腹卷シタル張替持一騎、上髮(アゲカミ)ニ征矢負ヒタル小舍人童一人ヅヽヲグシ、水干着ノ人々ハ皆々野箭ヲ負フ、又元久元年二月、實朝將軍由比濱ニ出デ給ヒテ、遠笠懸ノアリシ日、供奉ノ輩水干ヲ着テ、或ハ野箭或ハ征箭負ヒシナド見エタリ、野箭征箭同ジカラマシカバ、カクハワカチシルスベシヤハ、又同記ニ、カノ建久三年上洛ノ料ニ、佐々木三郎盛綱、野箭一腰ハギテ進ラス、鷲ノ白尾ヲ以テ無文ノ染羽トセシヲ、樺ハギニシテ籐ノ口卷ス、又青鷺ノ羽ヲ以テ表箭トシキ、コレ鎌倉殿ノ曩祖將軍、天治年中奥州ノ凶賊ヲ征伐セラレシ後、歸洛ノ日、用ヒラレタル式也トゾシルセル、古ノ野箭ノ式ソノ大略ヲ想ヒ見ツベシ、凡ハ其時ニヨリテ、野矢負フ事故實アル事也、此事武家ノ故實ノミニモアラズ、明月記建仁二年十一月九日ノ條ニモ、其夜ノ失火ニ弓箭ヲ帶スル事、頗ル古儀ニ似タリ、帶レ之輩野矢タルベケレド、忽チニ其物ナキニヨリテ、狩胡籙ヲ帶ブナドイフ事見エタリ、

征箭ノ事、征戰ノ時用ユル所ナレバ、カクハナヅケタル也、倭名鈔ニハ唐式ヲ引キテ、諸府衞士人別ニ弓一張、征箭卅隻トシルシタレド、本朝ノ令ニハ、(軍防令)征箭五十隻、胡籙一具、自ラ備フベシト見エタリ、サラバ本朝ノイニシヘハ、五十筋ヲ以テ一腰トシタル也、後代ノ制ニハ異ナルニヤ、後代ニ及ビテ、箙羽壺等ニサシヌル數ハ、詳ニ下ニ見エタリ、

石打征箭(イシウチノツヤ)、古ノ時ハ大將軍ノ具足タリキ、サレバ齋藤別當實盛ガ北國ニ向ヒシ時、此物ト錦ノ直垂トヲ内府宗盛ニ望ミ申セシナド、源平盛衰記ニモ見エタリ、又切符中黑ナドモ、ヨノツネノ人ハ用ユベカラザル由、古ノ人ハ申シキ、箆ノコトモ節陰塗リタルヲ本トスル也ト、中原高忠ガ聞書ニハ見エタリ、サレド塗箆白箆ナドモ古キ物語共ニハ見エタリ、タヾシソレラハ略儀タリケンモシラズ、鏃ノ事神代ニハ聞エズ、人皇ノ始第二代ノ朝廷ノ御時、(綏靖)倭鍛部天津眞浦シテ眞麑鏃ツクラレシトイフ事アリ、(日本書紀)鍛部シテ作ラシメラレシトアレバ、鐵ヲ鍛シ作レルモノナリ、天麑弓トイフハ、射麑ノ弓也ナドイフ說ニヨレバ、此物ハ後代ノ獵箭ノ鏃ノ類トゾ覺ユル、其後允恭天

皇崩ジ給ヒシノチ、太子木梨輕皇子御弟穴穗皇子ヲウシナハントシ給ヒシカバ、各兵興シ給フ時、穴穗括箭、輕括箭トイフコト始マレル由、日本書紀ニ見エタリ、古事記ニハ其時作レル矢ハ銅也、故ニ輕箭トイフ、穴穗皇子ノ作リ給ヘ所ハスナハチ今ノ矢也、コレヲ穴穗箭トイフヨシヲ注シキ、（穴穗皇子トイフハ、安康天皇ノ御事也、）モシ此等ノ説ニヨリテ鐵鏃モ、此時ニ始マレル物也ト心得ン事ハシカルベカラズ、古ノ鐵鏃今モ世ニ遺レル、大安寺法隆寺東大寺ノ藏ニアル物ドモ見ル事ヲ得タリ、（コレラノ制ハ別ニ圖シヌ、）後代ノ制ニ、雁股、烏舌、蠅尾、鉾矢（トガリヤ）、丸根、楯ワリ、鑿根ナドイフモノハ、古キ物ドモニ見エタリ、今ハソノ制特ニ多クナリタレド、凡ハ彼雁股、鉾矢、丸根ナドノ制ニヨリテ作リ出ダセル物ナレバ、其名多キニ似タレド、其實ハ大ニ異ナルニモアラズ、其中雁股トイフ物ハ、雁ノ足指ノ間ニ幕アリテ、相連リ着ク物ヲ蹼（ミヅカキ）トイフ、鏃ノ形ソレニ似タルガ故ニ、カクハ名ヅケシ、タトヘバ鳥ノ舌、蠅ノ尾ナドイフ事ノ如ク也、サラバ刈鉆（カリマタ）ナドカクハシカルベカラズ、（壒囊抄ニ）此鏃必ズ鳴鏑ニ用フ、常ノ矢ニスゲタルヲバ、スガリマタナドイフ事也、サレド大安寺法隆寺東大寺等ノ藏ニアリシ者ドモノ鏃、皆々雁股ノ制ニハアラズ、鉾矢ノウチニ腸クリト云フ物ノアル矢ハ、父ノ仇射ムズルモノ也ナド世ニイフニヤ、逆鬚アリテ拔ムトスルニ、タヤスカラヌガ故ナルベシ、大安寺法隆寺等ノ藏ニ逆鬚アリテ、其制異ナル物ドモ猶多カリ、倭名鈔ヲ見ルニ、鏃ノ字ヲバ夜佐岐トヨム、俗ニハ夜之利トイフヨシ、ルセリ、其比既ニ雅俗ノワカレアリキ、矢ノ根ナドイフ事ハ、猶其後代ノ俗ニ出デシ名ナルベシ、打根トイフ物ハ、射ツベキ料ニハアラズ、世ニ手裏劍ナド云フ類ナル也、建武二年正月神樂岡ノ戰ニ、妙観院ノ因幡竪者全村ガ、長船打ノ鏃ノ五分鑿ホドナルヲ、筈本マデ中子ヲ打チトヲシニシテネヂスゲ、沓巻ノ上ヲ琴ノ絲ヲモテ、ネタ巻ニ巻キタルヲ手衞ニシテ、敵ノ鎧ノ表裏二重ヲツキトヲセシナドイフ物コレナリ、今モ世ニ此制ニ倣ヒ作レル物見ユ、其因リ來ル事久シキモノニヤ、タヾシ其始ヲバシラズ

漢ノ代ノ比ヨリ、箭ニハグニ鵰羽ヲモテ最トス、我朝ニテモカクゾ有リケル、サレバ鵰羽ニ限リテ眞鳥羽トハイフ也、萬葉集註釋ニ、眞鳥ハ鷲也、エビスハ

鷲羽ヲ眞鳥ノ羽ト云フト見エタリ、サラバ此名ハ東夷ノ方言ニ出デシナルベシ、コレニ又大鳥小鳥ナドイフアリ、唐韻ニ鶚ハ大鵰也ト見エシハ、大鳥ノ事ニテ、山海經ニ鷲ハ小鵰也トアレバ、小鳥ノ事也、又鷹羽トイフモ、モトハ角鷹ノ羽ヲイヒシ也、鷹ノ羽マタ肅愼ノ羽トモ稱シタリキ、過ニシ比在洛之間、攝政大相國肅愼ノ羽ノ事ヲ尋ネ仰セラル、東北ノ夷地ニ出ヅル、箭ノ羽トコソ心得侍レ、我國ノ俗、凡物ノ産スル地名ヲ以テ、其物ヲ稱スルコト、譬ヘバ果ヲ上林ト云ヒ、酒ヲ下若ト云フ類、卽チ此ナリ、昔時肅愼國ヲ征セラレシ事、肅愼人ノ來リシ事等、日本書紀ニ見エシ所モ多ク、渡島津輕ノ津ノ司等シテ、靺鞨國ニ遣サレシ事モ、續日本紀ニ見エ侍リシガ、靺鞨ハ古ノ肅愼之地ナリトハ、異朝ノ書ニ見エタリ、陸奧國多賀城壺ノ碑ニハ、靺鞨國ヲ相去ル里數ヲシルシ侍レバ、其代ニハ彼ノ地方ニ出デシ箭ノ羽、ツネニ我國ニ來タリヌレバ、其箭ノ羽ヲ肅愼トハ稱セシニヤ、今モ蝦夷地方ヨリ出ヅル物ハ、其品スグレテ侍リト答ヘ申シキ、後ニ保安元暦ノ記ニ、執柄供奉行幸ノ時、府生、番長、平籙左鷲羽、右肅愼羽、コレヲ新調ス、烏鷺ノ羽ヲ以テ、三府ニ切リ續キタリト云フ所ヲ抄出シテ賜ヒタリ、烏鷺ノ羽ヲ以テ、三府ニ切續キタランハ、鷹ノ羽ノ妻黑ニ倣ヒシモノナリ、其外山鳥尾、雉尾、鶴、鵠、鴾ナドノ羽ヲ用フ、其中ニ鵠トイフハ、モト異朝ニテ黃鵠トモ天鵝トモイヒ、本朝ニテ今ハ白鳥トイヘル物也、サレド古ニ鵠トイヒシハ此物ニハアラズ、倭名鈔ニハ於保止利ト讀ミシ、今ハ古布トイヒ、異朝ニテハ鸛トイフ物也、鴾トイフ物モ日本書紀ニ見エタル桃花鳥(ツキ)ニテ、倭名鈔ノ紅鶴ハ、豆木(ツキ)トヨムト見エシ物也、紅鶴ハ漢ノ時ニイハユル朱鷺タルヨシ、異朝ノ書ニモ見エタリ、タヾシ鴾ノ字ハ韻書等ニ見エズ、凡ハ箭ニヨリテハグベキ羽モ、各定マレル式アル也、藤原秀郷朝臣ノ家寶、シキリ羽ト云フ矢ハ、白羽黑羽ニテハギマゼテ侍リシ由見エタリ、秀郷ノ草紙、詞書ニ見ユ、今世ニシキリハギナド云フ物ノ制ニハアラズ、又矢入ノ矢ハグニ山鳥、鳶、鳥、鷺、蜂鵰(ハチクマ)此ノ五ツノ羽ヲ用フ、今蜂鵰ヲ多ク用エ、蜂鵰トハ好ミテ蜂クラフ角鷹ヲイフヨシ、卜部家說也、神代抄世傳フル所モ又同ジ、但シ蜂鵰ト云フ物ハ、其羽ノ文八文字ヲナセバ、カクナヅケシ也、

凡羽ノ文(フ)ヲ、我朝ニハ符トシルシ、又生ノ字ヲモ用ユ、オモフニ、モトハ文ノ字ヲ用ヒテ、聲ノマヽニヨビシヲ、後ノ俗カクハ誤レルナルベシ、石打、中黑、大小切符、本白、護田鳥尾(ウスベヲ)ナドハ、古代ヨリ聞エシ物也、是等ヲ始メテ其名特ニ多ケレド、本白、中白、妻白、本黑、中黑、妻黑、切符、護田鳥尾等ノ外ニ出ヅル事ナシ、世ニ羽形羽揃ナドイヒテ、昔ヨリ圖ニエガキシ物アリ、僧雪村ガ繪ガキシ物ハ、某ガ家ニモ傳ヘタリ、其中石打トイフハ、モト鷹ノ尾ノ名所ニテ、中黑、切符、本白ナドイフ類ハ、羽ノ文ヲモテ名ヅ

ケシ也、宇須倍乎又宇須倍布ナドイフヲ、世ニハ鷹ノ字ヲ用ユルニヤ、源平盛衰記ニハコト〴〵ク護田鳥尾トカキタリ、倭名鈔ニ爾雅集注ヲ引キテ、鳺一名ハ澤虞、卽護田鳥也、倭名ハ於須賣止里トイフヨシ見エタレバ、モトハ於須賣乎、於須賣布ナドイヒシヲ、後ニカク轉訛セシナリ、コレハ小鳥ノ尾ノ、彼護田鳥ノ文ニ似タレバカクイヒケル也、

染羽ノ事、周禮ニ鍾氏ノ官ハ羽ヲ染ムル事ヲ掌リキ、我朝ニシテイヅレノ比ニカ始マリケム、凡箭ニハグニハ、眞鳥羽ノ白尾ヲ染ムル事定マレル式也、サレド鵠ノ羽、鷺ノ羽ヲモ、又鵠ノ白尾ヲモ染ム、

倭名鈔箭ノ條下ニ釋名ヲ引キテ、簳ノ字ヲ夜加良トヨメリ、韻書等ニハ笴ノ字ヲモ簳ノ字ト同ジク用ユ、同鈔竹ノ條下ニ唐韻ヲ引キテ篦ノ字ヲ乃トヨミタリ、篦ハモト箭竹ノ名ニテ、箭簳ノ事ニハアラズ、然ルニ我國ノ俗箭簳ノ事ニ篦ノ字ヲ用ヒテ乃ト謂フナリ、箭ニヨリテ加良トイヒ、能トイフベキ故實アレバ、其文字ヲ分チ用ヒシニヤ、凡篦モ白篦、塗篦、節陰塗タルナドイフ事ハ、古キ物ニ見エタリ、中比ヨリヌグヒ篦、コカシ篦、サハシ篦ナドイフ事聞エ侍リ、筈モ節筈、續筈ナド、各箭ニヨリテ用ユベキモノ定マレル式アルナリ、

倭名鈔ニ毛詩ノ注韘ハ抉也トイフヲ引キテ、由美加介トヨミタリ、近代ノ俗ニ弓懸トカクハアシカラズ、指懸トカクハ然ルベカラズ、古ノ射禮ニ用ヒラレシ決拾ノ制ハ、吉部秘訓ニ圖セシ所ニヨリテ想ヒ見ツベシ、（コレハ建久二年閏十二月十日弓場始ニ、民部卿藤原經房卿ノ用ヒシ本樣ヲ圖セラレシ也、其圖ハ別ニシルシヌ、）武士ノ射儀ニ用ヒシ制ハ、歩射ニハ右弓懸バカリヲサシ、騎射ニハ一具弓懸ヲサス、但シ片弓懸、諸弓懸ナドハイハヌ事ナリシ、異朝ノ決拾ノ制ハ、本朝ノ俗ニ謂フ所ニハ同ジカラズ、周ノ禮ニ朱極三トイフ事アリ、朱ノ革ヲモテ食指將指無名指ノ三ツニカケテ、大指ニハ象ノ骨ニテ作レル弦ヲカケテ、弓引クベキ物ヲカク、スベテコレヲ決トハイフ也、今モ朝鮮ノ人ノ韘ナドハ、此遺レル制ト見エケリ、拾トイフ物ノ事ハ、下ノ鞆弓小手等ノ條ヲ通ジ見ルベシ、古ノ武士ハ馬ニ乘ル程ナラムニハ必ユガケヲサス、其代ニハ馬ノ上ニテ弓モタヌ人ヲバオカシキ事ニイヒシホドニ、モシミヅカラモタザラムニハ、必ズ人ニモタセテ具シケリトゾ、フルキ物ニハシルセル、

武士ノユガケニ縫フ革モ、錦革又ハ何色ニモアレ無文ノ革ヲバ用ヒズ、指ヲ續クトイフ事モナカリシニ、鎌倉殿富士野ニ狩リシ給ヒシ時、大指トクスシユビノ革ニ、弦ツヨクアタリテヤブレシヲツギ給ヒシカバ、時ノ人コレニ倣ヒテクスシユビト、タケタカユビヲ二ツ續キタリシヨリ、始マレルトゾイヒ傳ヘタル、（高忠聞書）ソレモ始ハトモ革ニテコソツギケレ、異革ニテ續グ事ハ後代ノ事ニテアル也、サレバ晴ノ時指續ギタルヲ用ユベカラズト古人ハ申シキ、緒トムル様モ、歩射ト騎射ト甲冑ヲ帶スル時ト各サダマレル式アリ、又流鏑馬ノ時ニハ手袋トイフベシ、弓懸トハイフベカラザルヨシ、コレモ古人ハ申シ傳ヘ侍リ、日神臂ニ稜威高鞆ヲハキ給ヒシ事、日本書紀ニ見エタリ、清原宣賢ノ抄ニハ、今ノ弓小手ナル由見エタリ、サレド古事記ニハ竹鞆トシルサレタレバ、始ハ竹ニテ作ラレシ物ニヤ、釋日本紀ニハ、延喜式ニ見エタル神寶ノ注ヲ引キテ注セラレタリ、式ニ見エシ所ハ、鹿ノ皮ヲモテ縫ヒ、胡粉ヲ塗リテ墨ヲモテ畫ガクヨシ見エタリ、須佐能乎命ノ御子磐坂日子命國巡行マス時ニ、出雲國惠曇里ニ至リマシテ、國ノ形畫鞆ノゴトクアルカナトノタマヒシヨリ、カクハ名ヅケシヨシ、彼國ノ風土記ニハ見エタリ、サラバ神代ノ昔ヨリ、鞆ニハカナラズ畫カクモノニヤ、マサシキ物ヲバイマダ見ネド、近キ比太神宮ニ進ラセラレシ御鞆ノ圖ヲバ見ル事ヲ得タリキ、ソノ形モソノ畫カキシモノモ、共ニ世ニイフ鞆繪トイフ物ニハ似テケリ、（世ニトモヱトイフモノハ、水ノウヅマク形ナレバ、巴ノ字ヲ用ユトイフナリ、サレドモフルキ物ニ皆鞆繪トシルセリ、但シ吉部秘訓ニ圖セシ所ハ鞆繪カキシ物ニハアラズ、）式ニ見エシ兵庫寮ニテ作リ進ラセシ御鞆モ、熊ノ皮ニテ作レル物也、サレバ此物ハ熊鹿等ノ革ヲモテ作ルベシ、其中ヲ虛ニスルナレバ、弓弦觸ル、毎ニソノ音アリ、萬葉集ノ歌ニ丈夫乃鞆乃音爲奈利物部乃大臣楯立良思母（マスラヲノトモノオトスナリモノヽフノオホマヘツギミタテタツラシモ）ナドヨミシモ、此事トゾ見エタル、應神天皇ノ御事ヲ譽田別尊ト申セシ御事、御腕ノ上ニ宍生ヒテ其形御母ノ皇后ノ新羅伐給フ時、雄裝シテハキ給ヘル鞆ニ似給ヒタリケリ、古ノ俗ニ鞆ヲ褒武多トイヒシカバ、カクハ名ヅケ申セシトイフ也、（日本書紀）古キ賭弓ノ圖ニ、鞆ハキシ人畫キシヲ見シニ、マコトニ腕ノ上ニ宍ノ生フル形ノ如クニハアリケリ、鞆ノ字ハ韻書等ニモ見エズ、源順モ鞆ノ字楊氏漢語抄日本紀等ニハ見エタ

レド、本文イマダ詳ナラズトイヒケリ、又蔣魴ガ切韻ノ韘ハ臂ニ在リテ弦ヲ避クル具也トイヘルヲ引キテ、止毛ト訓ジ又捍ニモ作ル也、毛詩ノ註ニイハユル拾ハ遂也、禮ノ弓矢圖ニイハユル遂ハ臂韝、朱ノ韋ヲモテコレヲツクルトイフ說ナド引キケリ、サレバ御臂ニハキ給フトイヒ、御腕ノ上ニ生フル宍ノ鞆ハキ給ヘルニ似タルナドイフ事、順ノ說トハ合ヒタリ、シカルニ鞆ハ韛ノ事也トシルセル物アリ、(王代一覽)心得ヌ事ナレド、シカルベキ人ノ說ナレバ、イカナル據カアリケン、又順ノ倭名鈔ニ、韘ノ外ニ又射韝ノ字ヲ出ダシテ、說文ノ射臂沓也トイフ說ヲ引キテ、和名多末岐、一ニイハク小手也ト注シケレバ、韘ト韝トハ其用ハ同ジケレドモ、其制ハ異ナル物也、サラバ又鞆スナハチ弓小手也トイフ說モイカヾアルベキ、說文ヲ按ズルニ、韝ハ古人以レ韋縚レ袖、取ニ其便レ執レ事也トアレバ、倭名鈔ニ見エシ射韝一云小手也ト云フ物ハ、スナハチ俗ニ云フ弓小手トイフ物ナルベシ、韝ノ字讀ミテ太沼岐トモ云フ、舊事紀ニ饒速日命ノ弓矢手貫ナド見エシ、其手貫ト云フ物、卽チ此物ナルベシ、サラバ今ノ弓小手ト云フ物、神ノ世ヨリノ遺制トゾ見エタル、世ニイハユル弓小手ハ騎射ノ時ニサス事也、其制ハ精好ニ裏打タルヲ本トス、或ハ絹スヾシナドヲ用ヒシ事モアリ、緒ハ菖蒲革二條ヲ用ユ、指懸ノ緒アリ、又指ヌキト(モイフナリ)、又籠小手(コミコテ)トテ綿入レタルヲ、宿老ノ人ナドハ冬ノ比小袖ノ上ニサス事モアル也、又籠手トハカクベカラザル事ニヤ、フルキモノニハ皆小手トコソ見エタレ、

令ノ武官ノ禮服ニ、錦ノ行騰(ムカバキ)アリ、股脛ヲオホヒ衣ヲシテ飛揚セザラシム物也ト註セリ、順ノ倭名鈔ニハ、行旅ノ具ニ載セタリ、釋名ヲ引キテ、行滕ハ行騰也、脚ヲ裹ミテ跳騰スルコト輕便ナラシムベキ物ナリト注シヌ、古ハ錦ヲモテ作リテ武官ノ禮服トセシニ、順ノ比既ニ行旅ノ具トノミナリシナリ、進士志定茂ガ有馬ノ湯ヘ行クトテ、行騰ヲ人ニカリテ、ハカムスベ知ラザリシ事著聞集ニ載セタレバ、承元ノ比迄猶シカゾアリケル、サレド武士ノ騎射スル時ハ必ハキシ物也、豐後守中原高忠ガ聞書ニ、昔ハ今ノ人ノ上下着ルヤウニ衣裳ニモハキケリ、サレバ何事ヲモセヨ、行騰ハキテセシホドニ、今ニ笠懸、小笠懸、流鏑馬又ハ獵スル時モ、式々ノ時ハ皆ハク也ト見エタ

リ、鎌倉殿ノ時御家人等ガ御弓矢ナド進ラスル時ニハ、御行縢ヲモ副ヘテ進ラス、賜ハル時ニモカクゾアリケル、オモフニ古ノ禮服ト後代ノ物トハ、其名ト其用トハ同ジケレド、其制ハ異ナリシニヤ、武士ノ行縢ハ皆鹿ノ皮ヲ用ヒシ也、夏毛ヲ用ユル事定マレル式也、秋フタ毛トワリアハセニスル事モアリシ、塗行縢トテ漆ニテ塗リタルモアリ、又ソレヨリ後代ニハ或ハ熊皮或ハ豹虎ノ皮ナドヲ以テワリ合セニシタルモアリ、緒ノ革ハ菖蒲革ヲ本トス、黑皮フスベ皮ナドヲバ晴ノ時ハ用ヒズ、綦目トヾメ、沓ゴミノ緒ナドイフアリ、足利殿ノ時御所ノ御行縢ノ緒ニハ紫革ヲ用ヒラレテ、裏ニハ色々ニ染メタル綾、唐ノ織物ナドヲウタレシ、又裏ウタレヌヲモメサレシトナム、又神事ニ用ユル行縢ハ、其制スコシク異也、又沓モ歩射騎射トモニ鼻高ヲ用ヒシトイフ、高忠ガ說ニ、昔ハ晴ノ時ニハトモ皮ノ沓ヲパハカザリシ由見エタリ、

弓袋ノ事、スデニ延喜式ニ見エタリ、倭名鈔ニモ說文並ニ唐式ヲ引キテ此物ヲ載セタリ、サレド異朝ニテ韔トイフ物ハ、我朝ノ制ニ同ジカラズ、三禮圖六經圖毛詩圖等ニ見エタリ、我朝ニシテ古ハ武士ノ事アル時ニ必ズ弓袋指ヲ具シケリ、年中行事圖ニ檢非違使ノ下部等、各其主ノ冑着テ袋ニセシ弓ドモ捧ゲシト見エテ、其餘後三年合戰圖西行法師卷物ナド云フ物ドモニ此儀見エタリ、又畠山二郎重忠白旗白弓袋ヲサヽゲテ、前右兵衞佐殿ノ御陣ニ參リシナドイフ事モ見エタリ、源平盛衰記ニ シカルニ世ニハ此物鎌倉殿上洛ノ時ヨリ始マレリ、又袋ニスベキ弓殊ニ大事ノ物ナリナド申シ傳フル歟、入張弓ノ中世平弓トイフヲ袋ニスベシトイフ歟、誤レルニ似タリ、建久六年ノ夏入洛ノ日、御弓ノ袋指一騎具セラレシ由東鑑ニシルセルナドヲ見テ、カクハ傳ヘ誤レルナルベシ、弓袋ノ式モ家々ニツタフル故實同ジカラヌ歟、今ハ大ヤウ水色ニ紋ヲ繪ガクニヤ、古ニハ其色定マレルニモアラズ、源氏催促シテ平家ヲ亡シ奉ラムトテ、白旗白弓袋ニナリ返レルト云フ事、源平盛衰記ニハ見エシ、ソノカミ源平兩家ニ屬セシ武士ノ旗弓袋ノ如キモ、各兩家用ユル所ノ色ニシタガヒシニ、源氏スデニ滅ビ平氏榮ユルニ及ビテハ、國國ノ武士等コト〴〵ク赤キ色ヲ用ヒシニ、源氏又兵ヲ起スニ及ビテハ、皆白キ色ニナリ返レルニゾ、サレ

バ弓袋ノ色定マレルニハアラズ、

弦袋ノ事、兵士毎レ人弓一張、弓弦袋、副弦二條ヲ自ラ備フベシト軍防令ニ見エタリ、倭名鈔ニハ唐式ノ諸府衞士弦袋トイフコトヲ引ケリ、源平盛衰記ニ見エシ長兵衞尉信連ガイヒシ所ハ、弦袋トイフハ後ノ内侍所ノミカタチヲカタドレル也、衞府ノ官ハ淺官ナレバ、地下ニシテ奉公ヲ效ス、サレバタヾ人ニマギルベケレバトテ、内侍所ノ御カタチヲ學ビテ弦袋ヲ賜フ、左右兵衞尉赤皮、左右衞門尉藍皮、コレヲモテ侍ノ品ヲシルトゾ見エタル、源義光ノ兵衞尉ヲ辭シ申シテ陣ニカケタリケンモ此物ナルベシ、信連ガイヒシトコロタシカナル據アリトハ見エネド、今其形ヲ見ルニ、マコト神鏡ヲウツサレシナドモイフベキ物也、コレ儲弦ヲ卷カナン料ナレバ、世ニハ又弦卷トモイフニヤ、壒嚢抄ニ、弦袋弦卷別ニワカチ出ダセルハアヤマレルニ似タリ、コレヲ帶ムズルヤウヲモ、今ハヨク知レル人多カラヌ歟、

日神背ニ負ヒ給ヒシ千箭靫、五百箭靫、饒速日命ノ天表トセシ歩靫、天孫ノ降リ給フ時諸部ノ神ノ負ハレシ磐靫ナド、皆神ノ代ニ聞エシ物ドモナリ、延喜式ニ見エシ神寶ノ中ニ、姫靫、蒲靫、革靫等ノ制詳ニ見エタリ、神代ノ遺レル制ニゾアルベキ、姫靫ノ長サ二尺四寸、上ノ廣サ六寸、下ノ廣サ四寸五分、矢刺(ヤハサミ)ノ口方二寸九分、檜木ヲモテ作リ、錦ヲモテ表ニ黏ジ、緋ノ帛ヲ裏ニツク、緒ヲ着クル事四所、紫革ノ長サ二尺、廣サ一寸三分ナルヲ緒トス、蒲靫ノ長サ二尺、上ノ廣サ四寸五分、下ノ廣サ四寸、コレモ檜ニテ作リ、蒲ヲ編ミテ表ニツケ、鹿ノ皮ヲモテ頂ニツケ、丹ヲモテウラニ繪ガク、緒ハ長サ二尺、廣サ一寸ノ紫革ヲ用ユ、革靫ノ長サ一尺八寸、上ノ廣サ四寸五分、下ノ廣サ一寸八分、調布(ツキノヌノ)ヲ黏ジテ黑キ漆ヲモテ塗リ、緒ツクル事上ニ同ジ、其マサシキ物ハ見子ド、過ギシ頃太神宮ニ進ラセラレシ物ノ圖ヲバ見ツ、其ノ繪ガキシ所誤レル[illegible]、式ニ見エシ所ニ併セ考フルニ疑ハシキ事ドモアリ、後ニ南都ニ赴キシ時、法隆寺ニアル所ノ上宮太子ノ靫、大安寺ニアル所ノ神功皇后ノ御靫ト云フ物ヲ見シニ、是等ハ皆々式ニ見エシ所ノ制・相合(トカ)ヘリ、大安寺ノ物ハ蒲柳ヲ編ミテ作レル也、コレハ式ニ見エシ蒲靫ナド云フ物ニヤ、左氏傳ニ、董澤之蒲トアルモ、水草ニハアラズ、蒲柳也、蒲柳ハ倭名鈔ニ夜奈木ト云フ物ナリ、法隆寺ノ物ハ桐

ノ木ヲ以テ作レリ、織物ノ類ヲ黏ゼシガ剝落セシトモ見エズ、緒ヲ着クル所々ニ、綠青ヲ以テ葉ノ形ノゴトクナル物ヲ彩畫(イロドリヱガキ)シガノコリトヾマレリ、(コレラノ圖別ニ見エタリ)、世ニハ今モアル胡祿スナハチ此ノ物ノ遺制也ト云フニヤ、サレド倭名鈔ニハ靫ヲバ由岐ト注シ、釋名ノ步人帶ブル所ノ靫ト云フ、箭ヲモテ其中ニ叉スル也トイフ說ヲ引キ、又箙ヲバ夜奈久比ト注シテ、周禮ノ注ニ箙ハ矢ヲ盛ル器也、唐令ニ胡祿二字ヲ用ユ、廣韻ニ葫簏ハ箭室也トイフ說ヲ引キテ、靫ト箙トノフタツヲ分チ出ダセリ、古ノ靫ヲ見ルニ其制自ラ同ジカラズ、

古ハ箙ノ字ヲ用ヒテ夜奈久比トヨム、コレスナハチ胡祿也、(源順ノ說上ニ見ユ)、今ハ胡祿ノ字ヲ夜奈久比トヨミテ、箙ノ字ヲバ衣比良トヨム、胡祿ニハ平胡祿、壺胡祿ナドイヒテ、木地螺鈿、蒔繪螺鈿等ノ制アリ、又狩胡祿トイフ物モアリ、コレラハ衞府具足ナレバ征戰ノ具ニハアラザル歟、鎌倉殿ノ比スデニ平胡祿ニ矢サヽムヤウ丸緒ツケシヤウナド、東國ノ武士ハシラザリシニ、平家ノ侍監物太郎賴方ガ弟武藤小次郎資賴トイフモノ、其事ヲシレルヨシニテ、罪ユルサレテ調ヘ進ラセシ事東鑑ニハ見エタリ、

箙ノ字、古ハ夜奈久比トヨム、中比ヨリシテ衣比良トハヨミシ也、源平盛衰記ニ蠶簿トモ、箶トモカキテ、衣比良トハヨミタリ、此物モトハコガヒシテ繭作ラスル器ヲ見テ制出セルニヤ、倭名鈔ヲ見ルニ、蠶絲ノ具ニアル蠶簿ヲ衣比良トヨミテ、一名ノ箶トモイフヨシ注シタリ、矢ヲ盛ル器ハ其制夜奈久比ニハ異ナル物也、衣比良ニハ逆頰(サカツラ)トイフ物特ニ古キ制也、韻書ニ箙ハ獸ノ皮ニテ作ルナドイフ說ニハアヒシニヤ、柳箙竹箙等又古キ制也、其外ニ異ナル制多ケレド、皆後ノ世ニ作リ出ダセル物也、凡箙ニ矢ササムヤウモ、矢タバネセンヤウモ、帶バムヤウモ、コト〴〵ク其故實アリ、其中ニモ箙ニサス矢ノ數ノ事、十六モ廿五モサスベシ、大箙ニハ廿八、三十六、六十四モサスナドイヘド、九ツモ十八モサシタル事フルキ物ニハ見エタリ、(異本保元物語)大ヤウハサシタル形ノ方ナラムヤウニアルベケレバ、十六、廿五、三十六ナドヲ本トスル歟、フルキ物共ニモ此三ツノ數コソ多ク見エタレ、但シ廿五サシタルニ限リテ、廿四トイフ事イカナル故ニヤ、イマダ詳ナラズ、一箶ヲバ

必ズトヾメテ射マジキ物也、ソレ故ニ實ハ廿五ナレド廿四トハイフ事也、又其一筋ノ矢ヲ體ノ矢ナドイフ事ナリト世ニハイヒ傳フレド、十六ニモアレ三十六ニモアレ、一筋ノ矢ヲトヾメテ射ザル事ハ、武士ノ家ニ傳フル故實也、サラバ十六ヲモ十五トイヒ、三十六ヲモ三十五トコソイフベケレ、コレラハアリノマヽニカゾヘイヒテ、廿五ニノミ限リテ廿四トイヒテ、其一筋ハ射ツベカラヌガ故ナリトイハムハ心得ラレズ、必ズソノイハレアリナマシ、尋ヌベキ事也、

羽壺トイフモノ、空穂トカク事ヨノツネノ事歟、此外世ニ用ユル字モ多カリ、東鑑ニハ羽壺トシルセリ、異朝ノ書ニモ羽トノミイヒテ箭ノ事ニ用ヒシ事多シ、又箭壺盧トイフ物ハ、矢ヲ盛ル器ナレバ、字ヲ用ユルコトモ心アリテゾ見ユル、又其制モ壺胡祿ニ遠カラズシテ、羽ナガラニ盛ルベキ物ナレバ、彼是ニツキテ羽壺ノ字ヲ正シトスベシ、此物ハモト源義家朝臣笙ノ窟ヲ見テ制リ出ダサレシヨシ、卜部兼倶卿ノ説ニ見エタルガ、管鍵抄ニサモアリヌベシヤ、陸奥前九年ノ戰ニ、貞任ハウタレ宗任ハ降人ニ成リテ來リケレバ、赦ルサレテ常ニ八幡殿ノ許ニ祗候ス、或日物詣ストテ宗任ヲ具シテユク、二人共ニ狩裝束ニウツボ負ヒテ馬ニ乘レリ、廣キ野ヲ走ル狐射ラレシニ、宗任馬ヨリ下リテ其矢取リテ進ラセタルヲ、ソレヲシテウツボニサヽセラレシカバ、他ノ郎等コレヲ見テ、アブナクモオハスルモノ哉、降人ニ參リタリトモ、モトノ意趣ハノコリタルラムモノヲ、腋ヲソラシテ矢サヽスル事ヤアルベキト、カタブキ申シケリ、又後三年ノ戰ノ始、義家朝臣陸奥ニテ武衡家衡攻メラルヽト聞エテ、舍弟義光力合セムトテ兵衛尉ヲ辭シ申シテ、陣ニ弦袋カケテ馳セ下リシ時、相摸國足柄ノ山ニテウツボノ中ヨリ笙ノ譜取リ出シテ、大食調入調ノ曲ヲ豐原時秋ニ傳ヘラレシナド云事モ侍リ、共ニ古今著聞集サレバ此物其頃ハ既ニ出デ來タルナリ、狩裝束シテウツボオヘリトイフナレバ、此物モトハ狩ノ時、山ニモアレ野ニモアレ、シゲミナドニワケ入ラン時、羽ノ觸レテソコネザラン料ニ作リ出ダサレシニヤ、或説ニ、モトハカマド、イフ所バカリアリシヲ、我矢ノ數ヲ人ニシラセジトテ、穗トイフ物ツクリツクハヘシカバ、穗ツヽマム皮ニ定マレル式ナシトモイフ也、高忠聞書狩獵ノ具ナラムニハ、モトヨリ異體ノ物、定

マレル式モアラジ、但シ古畫ドモニ見エシ形ハ、穗ト云フトコロ細クシテ、今樣ノ物ノ如クニハアラズ、或ハ黑ク色ドレルモ、竹ニテ組ミシ形モ、鹿皮ニテ包ミシナドモ見エタリ、世ノ人ノイヒ傳フルニモ、八幡殿笙ヲイレラレン爲メニ、此物二ツ作ラレテ、箙ノ矢十六筋ヲ二ツニ引キ分ケテ、七筋ト九筋トヲサシテ、ノドノ中ヘ笙ヲバ納レラレタリ、サレバ空穗ノ實トハ七筋九筋ヲイフナリトイフ事アリ、此說兼俱卿ノ說ニ少シク異ナレド、始ヨリ穗トイフ物ノアリシ一ノ證ニハアル也、但シウツボニ矢サス事、九筋十一筋タル事ヨノツネノ事也、サ、ムヤウ又故實アルニヤ、又此物ハ矢母衣トイフ物ヨリ出デシナドイフ事ハ、尤信ジガタキ事也、古キ平治物語ノ圖ノ中ニ、矢母衣ナド云フベキ物一ツ二ツ見エタレド、矢母衣トイフ物、古キ物ニシルセル事イマダ見エズ、世ニ東山殿矢母衣作リ出ダサレシナドイフ歟、羽壺ノ制ニシテ特ニ大キク作リテ矢多ク盛ルベキモノ、、ドヒヤウ、ツボトイフアリ、近代ニ出デ來シ物ニヤ、フルキ物ニハ此物ノ事見エズ、世ニハ蜷川ノ家ニテ作リ出ダセル物也トモ、豐臣關白秀次公ノ作リ出ダセシトモ申ス歟、又大ウツボトイフ物ハ見エタレド、ソレハ腰ニツクベキ物也、此物ハシカハアラズ、人シテモタスベキ物ナレバ大ウツボトイヒシ物ニモアラズ、又其文字モサダカナラズ、其穗ノ形土俵トイフ物ニ似タレバ、カクハナヅケシナドイフ、今ハ弩瓢ナドカクニヤ、弩トハ其形ノ大キケレバ、弩矢盛ルベキトノ義ニテ、瓢トハ其形ノ似タルガ故也トイフ、又行旅ノ具ナレバ道裱トカクナドモイフ歟、此物近代ニ出デ來シ物ナレバ、然ルベキ文字モアラザルニコソ、矢籠ハ胡祿ノ異制ナルニヤ、足利殿ノ頃獵場ノ供奉ニ、シラヤナグヒノ尻籠負フベキ由シルセル物アリ、三議一統日神ノ負ハセ給ヒシ千箭五百箭ノ靱ヲ、矢籠也今ノ平胡祿也ト注シタルアリ、神代抄靱ト云フ物、今ノ平胡祿也ト云フ事ハイカヾアルベキ、筑紫人ノ古代ノ物也トテ矢ヲ盛ル器ノ、譬ヘバ羽壺ノ籠ト云フ所ノ如クナルヲ、竹ニテ編ミ成シタルヲ贈リキ、其物ノ名ハサダカナラネド、其制ハ竹籠也、平家物語ニ、ヤブレ腹卷ツヾリキ、山ウツボ竹箙ニ矢少々サシテナドカキタレバ、竹箙トイフ物モ、射獵ノ具ニヤアリシ、其比ニ矢籠ナドイフ物ハ聞エズ、玄惠ノカキシトイフ庭訓ニ見エタレバ、鎌倉ノ代ノ末ニハスデニ此物アリキ、但シソレハ尻籠トカキタリ、下學集壒嚢抄等モ又同ジ、イカナルイハレアルニヤ、矢筒トイフモノハ、モロコシニテ箭箙トイヒシ物ノ類ナルベシ、足利殿ノ代ノ物ニハ其名見

エタリ、弓立被革（ユミタテカツキカハ）ナドイヒテ、矢籠ニ具シテ人ニモタスベキ物ノ出デ來シハ近代ノ事也、矢箱又同ジ、但シ矢ヲ箱ニ納レヲキシ事延喜式ニ見エタレバ、昔モ箱ハアリケレド、今ノ制ニハ同ジカルベカラズ、東鑑ノ中ニ、調度懸トイフ事多ク見エタルハ、弓箭ノ具ノ名ニハアラズ、將軍家ノ御弓箭ヲ帶スル役ニ候スル事ヲイヒシナリ、或ハ懸ニ御調度トモ、或ハ御調度トモ、或御調度懸トモシルシタリ、凡二十ノ箭ヲモテ廿人ノ敵ヲ射トラムズル者ニアラズハ、調度懸ンコトカナフベカラズト、右大將家常ニノタマヒシカバ、此役ニ候ゼン事當時ニオキテ、最勇士ノ面目ニ備ヘシトモ見エケリ、（スナハチ東鑑ニ）サレバコノ役ニ候ゼン人、公家ノ隨身ニヤ準フベキトイフ人アリ、サモアリヌベシヤ、建久元年十一月九日鎌倉殿院參ノ日ハ、中村右馬允時經御調度懸ノ役ニ候ス、明クル十二月一日右大將拜賀ノ時ニ、隨身ヲ給ハリテ右府生秦兼平ヲ具セラレシ日ハ、調度ヲ懸クル人ヲバ具セラレズ、大將ヲ辭シ申シ隨身ヲ還サレシ後、同三日院參ノ日ハ、又初ノ如ク右馬允時經其役ニ候シタリキ、又此役ハ將軍ノ御弓箭ヲ帶スル事也トシル事ハ、カノ建久元年十一月七日入洛ノ日、鎌倉殿ミヅカラ弓箭ヲ帶シ給ヒシカバ、此ノ役ニ候ズル人ヲ具セラルルニ及バズ、同九日院參ノ日ハ直衣ニテ參ラレシカバ、右馬允時經ニ入洛ノ日メサレシ水干ヲ給ハリテ、カノミヅカラ帶シ給ヒシ所ノ弓箭ヲ帶シテケリ、又弓箭ヲ調度トイフベキ事、凡ハ戎具弓箭ヲモテ第一トスルコトナレバ、將軍ノ御調度トサシイハムハ此物トコソシリテケレ、此外ニ又調度懸トイフ事アリ、彼十二月九日院參ノ日御調度ヲ懸ケシハ、時經、其次ニ布衣ノ侍六人、宇都宮左衞門尉朝綱、八田右衞門尉知家、工藤左衞門尉祐經、畠山二郎重忠、梶原平三景時、三浦十郎義連、各調度懸ヲ具スト侍ルコレ也、是レハ烏帽子懸ノ事ヲイヘル也、タヾシ杜ニアル烏帽子懸ノ事ニハアラズ、コレハ一寸マダラニ白ク黑クウチマジエタル組ノ、刀ノ緒ヨリホソキヲ烏帽子懸ニスルヲイフ、之ヲウチカケシヲ世ニハ小結ナドモイフ事ニヤ、調度懸ノ役ナラムニハ、度ノ字呉音ニヨブ、烏帽子懸ノ事ナラムニハ、度ノ字ノ音ヲ豆（ヅ）トヨブ事ニテ侍リ、近世ヨリ弓矢ノ具ニ調度懸ト云フ物出デ來タリ、コレハ足利殿ノ代ヨリ出デ來シ物ノ出イ

フ人モアレド、弘安禮節ノ武器ノ中ニ、調度懸小調度懸ノ二ツ見エタリ、調度懸ニハ弓六張、矢六手、山鳥ノ尾ニテハイダル矢頭也ト注セリ、其制ヲ注セル所サダカナラズ、其圖ハ雲圖抄ニ見エタリトアレド、今ノ世ニアル雲圖抄ノ中ニハ見エズ、又小調度懸ハ出陣入駕ノ時將帥コレヲ備フ、弓一張、征矢一手ノ由注セリ、コレモ其制サダカナラズ、各中杜ノ長八尺ナドイフ事アレバ、今世ニアル物ニハアラズ、眞相ガ繪ガキシ東山殿御飾記トイフ物ニ、御調度懸ノ圖見エタリ、其中ニ今世ニ用ユル式モアリキ、カヽル事ニテ足利殿御時ニ出デ來シナドモイフ事ニヤ、オモフニ今ノ式ハ、足利殿ノ比弘安ノ比ノ制ニヨリテ、改メ作ラレシ物ニゾアルベキ、又弓矢臺(ユミヤダイ)トイフ物モ、古ニ御弓臺御矢臺ナドイヒシ物ノ制トモ見エズ、江家次第ニ見ユ、今ノ調度懸ノ式ヨリ出デシ物トゾ見エタル、コレモ又近代ノ物ナルベシ、又百矢臺(モヽヤタイ)トモナヅク、但シ矢ヲサヽム事百筋ニカギレルニハアラズ、多クサシツベキ物ナレバカクイフニゾ、矢屏風又近代ノ物ナリ、定マレル制モアルベカラズ、

的ハ、仁德天皇ノ十二年高麗國ヨリ鐵ノ盾的ナド獻ラセシニ、的臣(イクハ)ノ祖盾人宿禰カケズ射トヲシケレバ、的戸田ノ宿禰ノ名ヲ賜ハリシト見エシゾ、日本書紀コレ我朝ニ的アル始ナルトイフ人モアレド、コレハタヾ國史ニ見エシ始ニコソアルベケレ、凡ハ昔ヨリ射ルエ射(マト)候ナカランニハイカデ其藝ヲ習フベキ、古ノ制騎射ノ時ハ其徑一尺五寸ノ的ヲ射ル、歩射ノ的ハ徑リ二尺五寸ニシテ、的ヲ去ル事四十六歩ニシテコレヲ射ル、梁(タ)桁廣サ六尺、高サ七尺、山形ハ方二丈、管子ヲモテコレヲ作ル、凡大射ニ五位已上ノ箭的皮ニ激シ觸レナムヲモ、猶中レル例トストイフ事式ニ見エタレバ、延喜式古ハ異朝ノ制ノゴトクニ革ヲモテ的ツクリ鵠(メアテ)作レルニヤ、年中行事ノ繪ニ畫キシ所ヲ見ルニ、スベテ近世ノ制ニハ同ジカラズ、後代ニ至リテ的革ト又布革トモイフ、イフモノハ、古ノ山形ノ事ヲイフ、ソレモ管子ヲモテハ作ラズ、クハシキ事ハ下ニシルス、的モ後代ノ制ハ檜木ノ薄板ヲ、タトヘバ檜垣クムヤウニ組ミテ圓ニシテ、表ヲバ紙ニテ張リヲ胡粉ヲ塗リテ、墨ヲモテ圓ナルマヽニ繪ガク、中ニ當レル所ノ白カラムニモ黑カラムニモ、コレヲ鵠ト云フ也、古ヨリカクハアレド、式ニハ異朝ノ文字ヲ用ヒ的皮トハ

シルサレシニヤ、但シ異朝ノ制ハ的ノカタチモ鵠ノカタチモ方ニシテ、五色ヲ以テ繪ガク事也、我朝ノ制ハシカハアラズ、丈夫之得物矢手挿立向射流圓方波見爾清潔之ト萬葉集ノ歌ニモ見エタレバ、射的ヲ萬斗トイフ事モ、ソノ形ノ萬斗加ニ見ユル故ナルベシ、其比ヨリナヲ古ハ射的ヲバ以久波トコソイヒツレ、サレバ盾人宿禰ニ的戸田宿禰トイフ名ヲバ賜ヒシ也、

後世ニ至リテ武士ノ射ル歩射ノ的大的トイフハ、徑五尺二寸ニモ又三尺五寸ニモスル、弓場ハ三十三杖ニハグナレバ、物ノ間ハ三十一杖也、式ニ見エシ所ニ大ヤウタガハズ、又二十三杖ニモハグ也、半的トイフハ五尺二寸ノ半ナレバ、二尺六寸コレ又式ニ見エシ歩射ノ的ニ相似タリ、凡的ニ繪ガクヤウ、曲尺ノ定ニシテ三分一ノツモリ也、コレラノ的ヲバ鵠ヲ白ク繪ガクベシ、的ノ表ノ方上ト左右ト三所ニ蟬トイフ物ヲツケテ、白キト水色トノ布ヲ繩ニシタルヲ二筋、的ノ裏ノ方ニテ結ヘバ、繩ノ端ノ三ツニナルヤウニシテ、彼蟬ノ緒ニ結ビツケテ、其繩ヲ的串ニ結ヒツクル事モ、又上ト左右ト三所也、的串ハ竪ニスル料二本、横ニスル料一本、檜木ノ徑リ二寸バカリナルヲ丸クモ稜八ツアルヤウニモケヅリ、シロキマヽニテ用ユ、竪ハ地ヨリ上六尺六寸、土ニ入ル事一尺五寸許、相去ル事七尺許ニシテ雙植ツ、横ハ長サ七尺八寸、竪ノ二本ノ上ニ横タフル也、是レ古ノ梁桁トイフ物ナリ、的皮ハ水色ノ布長サ的串ノ高サヨリ長カランホドナルヲ、六幅ヲ用ヒテ幔ノヤウニ縫フ、是レ古ニイハユル山形也、延喜式ニハ簀子ヲモテ作ルトアレド、倭名鈔ニハ山形ハ侯後四丈許ニシテ、紺ノ布ヲ張リテ矢ヲフセグ物也ト見エタリ、サレド近代ノ定ハ的ヲ去ル事一杖ニシテ張ル事也、又コレヲ布皮トモイフ、コレヲ皮トナヅクル事ハ倭名鈔ニモ見エタリ、凡神ニ百手射テマイラスル時ノ的ヲバ鵠ヲ黑クス、又其時ノ弓場ハ廿三杖、物間ハ廿一杖ノ定ナルベシ、

笠懸ノ的ハ、檜木ノ厚サ五六分ナルヲ裏板トナシテ、表ヲバ牛ノ革ヲ張リテ革ト板トノ間ニ綿ヲ入ル、大サハ徑リ一尺八寸、繪カヽムヤウハ中ニ當ル所ヲ黑クス、但シ是ヲバ鵠トハイハズ、連錢トイフ事也、上ト左右ノ下ト三所ニ黑革ノ乳ツケテ、青キ白キ黑

キ三色ノ布ヲ縄ニシテ的串ニツクル事、大的半的ナドノ式ノゴトシ、串ハ大的ノ串ニ准フレバ、横モ竪モ短ク、的皮モ大的半的ノ式ニカハラズ、只其長ノ短キ也、

小笠懸ノ的ハ、其形方也、方ナル徑リ四寸、厚サ一分許ノ檜木ノ板ヲ以テ作レルヲ側(ソバタ)テ串ニ挿ム、串ノ地ヨリ上ニ出ヅルコト一尺二寸、串ノ制ハ藤ニテモ檜木ニテモケヅレルヲ黒ク塗ル、的挿ム所ヲバ口金トイフ物ニテセムル也、裏ノ方ニテ板ヲ刻メル所二ツ有ルベシ、

流鏑馬ノ的モ方也、其徑リ一尺八寸、串ハ三尺五寸、又ハ五尺二寸ニモスル、上三寸六分許ガ間ニ的ヲ挿ミテ、カウヨリニテ二所ヲトヅル也、大ヤウハ小笠懸ノ的ノ式ノゴトシ、

草鹿(クサシヽ)ノ的ハ、鹿ノクビモタゲタラン形ノヤウニ、檜木ノ板ヲモテ作レルヲ裏板トナシ、牛ノ革ヲ表ニナシテ、革ト板トノ間ニ綿イレテ縫ヒ合ハス、徑リ四寸ノ矢アテノ星アリ、其外ニ大小ノ星廿三アルベシ、是等ノ星ヲバ皆白ク彩ドリノコシテ、スベテ栗色ニ塗ル、白キ黒キ青キ三色ノ布ヲ縄トナシタルヲ一筋、裏ノカタニ斜ニウチ、ガヘ、四ツノ乳ニトヲシテ串ニ結ヒツクル事モ四所也、串ノフトサハ大的ノ串ノ半ナルヲ、横ハ五尺竪ハ地ヲ出ヅル事三尺七寸許、ケヅルモ塗ルモ笠懸ノ串ノゴトクニアルベシ、的皮ハ布二幅ヲ用ユ、弓場ハ十三杖ニハグ也、或說ニ鎌倉右大將家富士野ノ狩ニテ、スガフ弓手ノ物ヲ射ハヅシ給ヒテ、小笠原二郎ニ尋ネラレシカバ、馬ト鹿トノサクリヲ打チテ見ルニ、何レモ十一杖ゾアリケル、コレハイケル鹿也、今ノ稽古ハ死セル物ナレバトテ、九杖半ニナサレシ也、本說ハ十一杖也トイフ事アリ、

三議一統 此說ノゴトクナランニハ、草鹿トイフ事ハ富士野ノ狩ニ始マレルヤウニモ聞ユレド、サキノ年建久三年八月廿日幕府ニテ草鹿ノ勝負アリシ事東鑑ニ見エタレバ、此狩ノ時ニ始マレルニハアラズ、又此狩ノ時ニ鹿射損ジ給ヒシコト東鑑ニハ見エズ、工藤庄司景光無雙ノ大鹿ヲ射損ジテ、景光十一歳ノ時ヨリ此カタ狩獵ヲモテ業トシ、身既ニ七旬ニ餘レリ、イマダ弓手物獲ザル事アラズ、シカルニ今心神惘然トシテ甚迷惑ス、コレ山神ノ駕シ給フ者ニヤ、運命縮リ訖ンヌト存ズ、後日ニ人々思ヒ合セラルベシト申セ

シニ、其夕ヨリ景光忽ニ病ヲウケシカバ、御狩トゞメラルベシヤ否ノ事僉議アリシ由ハ見エタリ、

圓物ハ徑リ五寸ヨリ八寸ニ至ルベシ、其制ハ笠懸ノ的ニ大ヤウタガハズ、綿イル、事イカニモフクラカナラムヤウニアルベシ、連錢ハ八寸ノ徑リナランニハ、四寸ヲ準トシテ、串ニツケンヤウモ皆笠懸ノ的ノ式ニ同ジ、物間ハ九杖ナリ、但シ的綱ハ紅ナル絲ノ四ツ組ナルヲ用ユル事モアリ、又布利々々ブリトイフ物モ同ジ制ニシテ猶少シキナル也、徑リ三四寸ノ間ナルベシ、綱ハ一筋ヲ鞆ノ乳ヨリ引キトヲシテ串ニツク、

小的ハ、定マレル事ナシ、徑リ一尺二寸ヨリ下ツカタイカホドモアルベシ、一箱ヲアミイレンニハ、一尺二寸、一尺、八寸、六寸、五寸、スベテ五ツ也トイフ、繪カ、ムヤウハ、大的半的ナドノ式ノ如クニテ、メグリニハ檜垣ヲ繪ガク、是古ノ制ヲ存センガタメナルベシ、上ト左右ノ下ト三所ヲ串ニ挾ミテタツ、其徑リノ少シキナルニシタガヒテ、或ハ二所モ或ハ一所モ挾ムベシ、裏ニ文字ナドカク事ハ古ニハナカリシ也、又神ニ射テマイラスベキ時ニ繪カ、ム樣モ、大的ナドノゴトシ、但シ檜垣アラン所ニ七五三ノ筋ヲ引ク也、又射ツケノ小的トイヒシハ、稻ノ藁ヲ猫ガキトイフ物ノゴトクニクミタル、ソレヲ卷キテ三所ニテ束ネ結ヒ、長サ三尺許、口ノ徑リ二尺、其前ノ方ニ小的ヲカケテ、後ノカタニハ的皮ヲ張ル、ツグラナドモイフニヤ、ドウユビナドイフ物モ、其臺モ、ナベテ世ニ用ユル物ナレバ、コ、ニシルサズ、卷ワラナドモイフニヤ、

三ツ的ハ、徑リ一尺五寸ナルト一尺ナルト五寸ナルトヲ、串ニテ三所ヲ挾ミ合セテタツ、昔五月五日ニ左右ノ近衞ノ射タリシ六的トイフ物ハ、此式ニハ異也、又中比ヨリ八的ナドイフ物モ此式ニハアラズ、其傳フル所ノ說一定ナラズ、又シカルベキ物ニ見ル所ナケレバコ、ニハシルサズ、

小的ノ再拜トイフモノ、檀紙ヲ三枚カサネテ廣サ一寸ヅ、ニタチテ、三ツニ折リテソノ中ヲ串ニ挾ム、串ハ檜木ニテ作ル、長サ一尺二寸、徑リ七分許ニマロクモ八稜ニモケヅリテ塗ル事ヲ得ズ、又ハ藤ニテモ作ル、大ノ時ニ用ユルモ大ヤウ異ナラズ、

本朝軍器考卷四終

本朝軍器考巻五

筑後守従五位下　源　君美彙輯

弩砲類

本朝ノ弩(オホユミ)ハムカシ神功皇后ノ制出(ツクリ)サセ給ヒシ所ナリ、大唐ニモ弩ノ名アレド、我國ノ器ノ勁利ナルニシカザルヨシ、善相公ノ封事ニハ見エタリ、（本朝文粹）サレバ令ニモ、軍團ゴトニ强壯ナラン者二人ヲ定メテ、弩手ニ分チ充テ、衞士モ事故ナカラン日ハ、當府ニテ發弩抛石ヲ敎ヘ習ハシメヨト見ユ、其制ハ弩ト云ヒ手弩ト云フ二式アリ、（三代實錄）又世々ノ格式ヲ見ルニ、陸奥出羽太宰府ハイフニ及バズ、壹岐對馬長門因幡伯耆出雲石見等ノ邊要ノ地ニハ、弩師ヲ置レテ、コレヲ敎ヘ習ハシメラル、其後肥前肥後伊豫等ノ國々ニモ望ミ請フニヨリテ弩師ヲ置カル、シカルニ延暦ノ十六年永ク太宰府ノ弩師ヲ停廢セラレシヨリ、其器ノミ有リテコレヲ善クスルモノナカリシカバ、弘仁ノ比ホヒフタヽビ弩師ヲ置カル、コレ彼府ノ請ニヨル所也ト見エタレバ、（弘仁格ニ）モロ〳〵邊要ノ地ノ弩師停廢セラレシ事、延暦ノ詔旨ニヤアルラン、承和ニモ鎭守府ノ請ニヨリテフタヽビ弩師置カレシトゾ見エタル、（貞觀格）貞觀元慶寛平ノ比ホヒ、隱岐越後越中能登佐渡等ノ國ニモ、ソノ望ミ請フニヨリテ新タニ弩師ヲ置カル、イクホドナクテ延喜ノ比ニオヨビテ、彼ノ相公ノ封事ニハ其ノ才伎ノミジカク機弦ヲ用ユル所ヲ知ラザルヨシナゲキ申サレケリ、サレド陸奥前後十二年ノ戰ノ中ニ弩ヲ發シフセギ戰ヒシナド見エタレバ、此比迄ハ猶此物アリキ、其後ノ代ニ至リテハ、サバカリ他ノ國ヨリスグレタル戎ノ器アル事ヲダニシル人マレナレバ、其制ハナヲ傳ハラズ、近キ比ハ異朝ノ制ニ倣ヒシモノ世ニ見エ侍レド、（諸葛弩ノ類也）其制クハシカラヌニヤ、未ダ其勁利ナル事ヲ見ズ、

我朝ノ石弓ノ制、イヅレノ比ニヤハジマリヌラン、推古天皇ノ二十六年ニアタリテ、隋ノ煬帝ト申セシミカド、三十萬ノ軍ヲ興シテ高麗ノ國ヲ征シ給ヒシニ、高麗ノ軍ヨクフセギ戰ヒシホドニ、隋ノ軍ツヰニヤブレヌ、今年秋高麗ノ王彼ノ捷ヲ我朝ニ獻ラス、俘虜二人、鼓吹弩抛石等ノ物ニ土物駱駝一匹ソヘテマイラセタルゾ、此物ノ國史ニ見エシ始ナルベキ、

ソノ、チ天武天皇ノ白雉十四年、四方ノ國ニ詔シ給ヒシニ、大角、小角、鼓吹、幡旗、及ビ弩、抛石ノ類ハ私ノ家ニ存ベカラズト見エタリ、軍防令ニモ衛士事故ナカラン日ハ弩ヲ發チ石ヲ抛ツ事ヲ習フベシト見エシニ、義解ニハ抛トハ擲トイフガゴトシ、機械作リテ石ヲ擲チテ敵ヲ撃ツモノ也ト注シキ、コレスナハチ異朝ノ砲車ナドイフ物ノ類ナルベシ、陸奥前後十二年ノ戰ニモ石弓ヲ發チテフセギ戰ヒシ事、アマタ所ニ見エテ、八幡殿ノ薄金トイフ冑モ、ソノタメニクダカレテウセケリ、後ノ世ニオヨビテハ、其機械ノ制モ詳ナラヌ事ニナリユキシニヤ、此物ノ名モ聞エズ、ワヅカニ承久ノ時ニ越後國市降淨土、マタ觀應ノ比駿河ノ薩埵山等ノ合戰ニ、此物ノ事見エタリ、其後ハタヾ城ノウチニ石棚ナドイフモノ構ヘヲキ、石ツミタクハヘテ、カタキノ攻メ近ヅク時ニ、其石ヲマロバシヲトス事ノミニゾナリケル、

本朝軍器考卷五終

本朝軍器考卷六

筑後守從五位下　源　君美彙輯

火器類

火箭(ヒヤ)ハ、イニシヘヨリアリケンモシラズ、國史ニ見エタル事ハ、欽明天皇ノ十五年、内臣等ヲシテ百濟ヲ助ケテ、新羅ヲ伐タセ給ヒシ時、ソノ函山ノ城ヲ攻メシニ、筑紫ノ物部莫奇委沙奇(マキサイ)トイフモノヨク火箭ヲ射タリケレバ、ツヰニ其城ヲ燒キオトシツトイフ事、百濟ノ王明ガ獻リシ表ノウチニ見エタリ、彼物部ノ姓名ヲ其國ノ文字ノ音ヲモテウツシタレバ、我朝ニシテハイカニイヒケン人ナルヲモ、又其箭ノ制モシラレズ、ハルカニ世ヲヘダテ、源義仲ノ法住寺殿ヲ攻メマイラセシ時、今井四郎兼平鳴鏑ノ中ニ火ヲ入レテ射タリシニ、其矢御所ノ棟ニタチタリケルガ、折フシ風ハゲシク火モエ上リテ、官兵忽ニヤブレキ、コレハタヾ鳴鏑ニ火入レテ射タルナレバ、異朝ノ火栝榴箭ノ類ニ似タレド、其比ハイマダ火藥ナド用ユル事ハシレルニハアラズ、今ハ銃砲ノ制ニ傚

ヒ、藥ヲモチヒテ或ハ箭飛ビテ火モヱ出ヅルヤウニモ、或ハ多クノ箭一度ニ飛ビ去ランヤウニモシタルモノドモ出來ヌ、異朝ニハソレラノ制コトニオホカリ、

世ニ鐵砲ト云ヘル物ハ、龜山院御在位ノ時文永ノ比ホヒ、蒙古襲來ノ日、ソノ名始メテ聞エテケリ、(八幡愚童訓)、(太平記等ニツマビラカナリ)、サレド此物今ノ代ノ制ニハアラズ、宋ノ代ニアリツル旋風、單梢(タンサウ)、虎蹲ナド云フ火砲トコソ見エタレ、ナベテ世ニ今アル物ノ、西洋ノ國ヨリ來タレル始、人々ノ傳フル所オナジカラネバ、イヅレガマコトナランモワキガタシ、マヅ種子島トイフ物ハ、大隅國ヨリゾ始マリタル、タトヘバ大隅國ヲサル事十八里ガホドニ、一ノ島アリ、其名ヲ種子島トイヒケリ、後奈良院ノ御在位ノ時天文十二年八月廿五日、彼島ノ西村トイフ浦ニ、異國ノ人百餘人バカリ乘リタル大船一艘來リヌ、其人皆鼻タカク目フカクシテ、物イフコトキ、ワキマフベクモアラズ、ソノ中ニ大明ノ人五峯トイフモノ一人ゾアリケル、コレハ我朝ノ人ニコトバモ文字モカヨフマジキ事ヲシリテ、大明ノ人ヲキテ來タレルナリケリ、此村ノ長ニ織部丞トイフモノ、ツキタル杖ニテ沙ノ上ニ物カキテ、イヅコノ人ノナニユヘニカ來リヌラント云フニ、彼五峯出デムカヒテ、コレモ物カキテ、コレハ西南ノ蕃夷ノアキモノ、タメニ來タレル也トゾコタヘケル、サラバコヽヨリ十三里ガホドヲヘダテ、赤尾木トイフ津アル也、カシコニコソ此島ノ主ハオハスレ、船ヲバカシコニヨセヨトヲシヘテ、島ノ主ノモトヘ此ヨシヲツグ、此島ヲバ種子島ノ時堯トイフモノ領シテケリ、ソレガ父ヲバ惠時ト云ヒ、子ヲバ久時トイフ、同ジキ廿七日、カノ船ヲ赤尾木ノ津ニムカフ、彼船ノ長二人アリ、ヒトリヲバ牟良叔舍トイヒ、ヒトリヲバ喜利志多侘孟多トゾイヒケル、カレラ船コリ上リテ遊ブトテ、岸ノ額ニ方ナル小キ的タテ、鐵ニテ作レル火器ノ二三尺バカリナルヲ手ニシテ、藥ヲ以テ鉛ノ彈丸ヲ飛スルニ、百タビ發チテ百タビマデニアテケルヲ、島ノ主アヤシト見ルマヽニ、ヤガテソノ伎ヲマナビ試ムルニ、ソノ的ニアタラネド又遠カラズ、悅ブ事カギリナク、價ヲ惜マデソノ器二ツマデ買得テ、ソノ火藥ノ方劑ヲバ郎等篠川小四郎トイフ者シテマナバセタリ、イクホドナクテ紀伊國根

來法師杉坊ト云ヒシガ、コノ器モトムトテ、ハルバルカノ島ニタヅネ下リシカバ、時堯ソノコヽロザシノ切ナルヲ感ジテ、ソノ一ツヲバ分チ與ヘツ、カクテ時堯鍛冶ノ工ドモ集メテ、カノ制ニ倣ヒ作ラントシケレド、ソノ筒ノ底フサガンスベヲ知ラネバサテヤミヌ、アケノ年カノ番夷ノ船、又同ジキ島熊野浦ニツク、ソノ中ニ此器作ル工一人アリシカバ、清定ト（字金兵衛ト云ヒシトゾ、）云フ工シテマナバセケルニコソ、ソノ底ノ右ニ轉ラセバ出デ、左ニ轉ラセバ入ル事ヲバシリテケレ、ソノ後コノ器アマタ作リ出ダシテ、家子郎等等ニ學バセケルホドニ、ソノ藝ニ堪能ノ輩モスクナカラズ、和泉國界ノ浦ノ商人又三郎ト云フモノ、（橘屋ト稱スト云フ、今ソノ子孫長崎ニ住ス、藥師寺又三郎ト云フ此ナリ、）彼島ニ來リトドマル事一二年、此技ヲマナビ得テ歸リケルヲ、人皆ソノ名ヲバヨンデ鐵炮又トノミ云ヒケリ、コレヨリシテ畿內畿外ノ國々、此技マナブ事ヲシリヌ、又ソノ比ホヒ大明ニ行ク進貢船ノウチ、第三ノ船風ニハナサレテ、彼島ニツキ便ヲマツ、明クレバ天文十三年、纜ヲトキテ彼國ニ至リ、我朝ニ歸ラントスルニ、又浪風アラク、カラウジテ伊豆ノ國ニ漂ヒツク、此船ノ中ニ、久時ガ郎等松下五郎三郎ト云フモノアリテ、此器携ヘタリシニゾ、坂東ノ國々ニモ、又コノ技ヲ傳ヘ習ヒテケル、（北條五代記ニハ、北條ガ家ヘハ、根來法師杉坊ガツタヘシ由見エタリ、此法師ハ、ハジメ時堯ガモトヨリ此ノ器ウケ傳ヘシ人ナリ、）コノ器鐵砲トナヅクル事、彼五峯ガ、ク傳ヘシニヤ、又カノ島ノ人ナヅケシ所ニヤ、サダカナラズトコソ、南浦ガ文集ニハ見エタレ、又異朝ニモコノ器アル事ハ、ハジメ我朝ヨリ傳ヘテケレバ、ソノ名ヲ倭銃トナヅク、又鳥銃トモナヅクル事ハ、林ヲウガチ飛ブ鳥ヲモ射落シツベキ物也トテ、ソノ名ヲカクモイヒシ也、又鳥嘴銃トモナヅケヌ、其制ハモト西番ノ波羅多伽兒（ハラタカシ）國ヨリ出デタリ、佛來釋古者トイヒシモノ、豐後ノ國ニ傳ヘテ鳥銃一門ヲツクル、ソノ價二十餘兩也キト、大明ノ茅元儀ガ書ニハシルシヌ、カノ南浦ガシルセル所ニハ、大隅ノ國ニ來レル人、イヅコノ國ノ人トイフ事サダカナラズ、タダ西南番夷ノアキモノスル人トノミ見エシガ、異朝ノ書ニヨリテ見レバ、スナハチ波爾杜瓦爾（ホルトガル）ノ人也、波羅多伽兒トイフ文字ヲ、カノ國ノ音ニヨメバ、波爾杜瓦爾ト相同ジ、又佛來釋古者トシルセルハ、則チ南浦ガシルセシ牟良叔舍ガ事也、ソノ文字ハ異ナ

レド、此國彼國ノ音ヲ相通ジテヨム時ハ、ソノ名ハ同ジ、番夷ノ文字ハ、本朝ニモ異朝ニモ通ハネバ、ソレガイフコトバニツキテ、ヲノ〳〵ソノ國ノ音ヲモテ文字ニウツセルガ故ニ、カク文字ハ異ナル樣ニナリタル也、サラバ彼波爾杜瓦爾ノ人、再ビ大隅ノ國ニ來レルノミニアラズ、又豐後ノ國ニモ來リテ此器ヲバ傳ヘシナリ、我朝ニシテ九州ノ事シルセシ記ニモ、享祿三年ノ夏、南番ノ商船九艘豐後ノ府内ニ來リシニ、コレモ大明ノ人三官トイヒシヲ具シタリ、國ノ主大友左衞門督入道宗麟、保首座トイフ僧シテ文字ヲ通ズ、彼商人等數ノタカラヲ進ラセシウチニ、二三尺バカリナル火器ヲ進ラス、ソノ名ヲバ鐵砲トナヅケタリ、ソノ後天文廿年、同ジキ國ノ人來リテ石火矢ヲ進ラストイフ事見エタリ、九州記サレド大友ガ家ニ
ニ、大友記彼シルセル所ニハ異也、宗麟入道ノ世ニアタリテ、天文十年七月廿七日、大明ノ人豐後ノ國神宮寺ニ來ル、其船ニ乘レルモノ凡二百八十人、十二年八月七日、同ジキ國ヨリ來レル船五艘、十五年又佐伯ノ浦ニツク、永祿年中ニ來レル事絕エズ、其後又天正三年ノ夏、臼杵ノ浦ニツク、此船ニノセ來ル所大象一ツ、猛虎四ツ、ソノ餘孔雀鸚鵡香貓等アリ、又伽羅ノホダ、猩々緋ノ二十間マデツヾキタルナドアリケリ、明クル四年ノ夏、南番國ヨリ石火矢來レリ、同ジキ十二年、宗麟ガモトヨリ大明ノ皇帝ニ使ヲタテマツル、植田入道玄佐トイフモノヲ其使ニ充ツ、此入道ハモト美濃ノ國ノ住人齋藤ノ何某トイヒシフル兵也ケリ、此使朝聘ノ禮畢リテ、タチマチニ重病ヲウケテ、彼國ニシテ死シタリ、ノコルモノドモ我國ニ歸ラントテ、スデニ薩摩ノ沖ニ至リシニ、風アラクナリテ、梶ヲレ船クダケ、タスカルモノワヅカニ廿餘人、サレド彼國ノ皇帝ノ詔書並ニ賜物等ハ、事故ナク達シヌトシルシタリ、カク迄ニシルセル所ノ詳ナルニ、享祿ノ比ホヒ南番ノ船來レル事モ、イハユル鐵砲ノ傳ヘ得タル事モ見エズ、タヾ天正四年ニ、彼國ヨリ石火矢ノ來レル事ノミヲノセヌ、天正三年ニ來リシ船、其國ノ名ヲバシルサネド、ノセ來ル所ノ事ドモ、悉ク西南夷ノ國ニ出ヅルモノナレバ、思フニ此度ノ船ハ、必ズ波爾杜瓦爾等ノ國ヨリヤ來リヌラン、モシハ又大友ガ家ノ記ニハ、天文十年ヨリ下ツカタノ事ノミヲシル

シテ、享祿ノ比ホヒ、西南夷ノ國ヨリ通ゼシ事ヲバ漏セルモ知ラズ、彼波爾杜瓦爾ナドイフ國ハ、西洋甌邏巴ノ地方ニテ、專ラ天主ノ敎ヲ奉ゼル所也、我國ノ俗ニテ、コレラノ國々ヨリ來ルヲバ、ミナ南番ノ人トゾイフナル、然ルニ天文廿年ノ秋、大内ノ義隆卿ホロビシ時、彼許ニアリシ大明ノ勘合モウセテケレバ、カシコニ往來セン便リスデニタエヌ、此比ホヒヨリ南番ノ船、我國ニ通ジケルニ、宗麟入道ハジメニ、ソノ天主ノ法ヲウケシナドイフ事アレバ、王代一覽彼大友ガ家ニテシルセル、天文ノ比ホヒ、シキリニ來レル大明ノ船トイフハ、ミナ甌邏巴地方ノ諸國ノ人ナランモ知ルベカラズ、過ギニシ比仰ヲ奉リテ、意多禮亞ノ地羅馬人ニ遇ヒシ時、カノ地方ノ事ドモ尋ネ問ヒシニ、西洋ノ火砲造リ出ダセシ事ハ、既ニ二千餘年ニ及ベリ、始メ此器造リ出セル地ハ、番名ヅツバルカイン、佛來釋古者ト云ヒシハ、其ノ番名フランシスクスサベイリウスト云フ、東南洋ノ諸國ニ天主敎傳ヘシ人也、ソノ塔ハ今モ應帝亞ノ臥亞ト云フ所ニアリ、又昔時豐後ノ國ノ使人羅馬ニ來リテ死シタルヲ葬リシ塔ハ、今モ其國ニアリトテ、其事シルセシ番字ノ書取リ出テ見セ侍リキ、大友ガ家人植田入道使シテ其國ニ死セシト云フハ、羅馬泥亞ノ事ニテ、大明ニ赴キシニハアラズ、彼國ノ史籍ニモ、其事見ル所侍ラズ、其比ニ浙閩ノ商船私ニ交易ノ利ヲ通ゼンガタメニ、豐後ノ國ニ來リシガ、此器ヲモツタヘシヲ、茅元儀ガ書ニハ、カク其因來ル事ヲ詳ニハシルセルナルベシ、又此器朝鮮國ニ傳ハリシ事モ、天正十八年ノ春、對馬守平義智、其王ニマイラセシヨリ始マレル由、彼國ノ書ニハ見エタリ、懲毖錄ニカレコレヲ通ジ考フルニ、大明ニモ朝鮮ニモ、我朝ヨリゾ此器ヲバ傳ヘケル、アルヒハ此物文龜ノ初メツカタ、南番ヨリ來レドモ、用フベキ法ハ傳ハラズトモイヒ、或ハ永正七年ニ來レルナドモ云ヒ、又弘治元年、南番ノ人氏宇志倶智トイフ者、琉球ヲ經テ種子島ニ來リテ、此物造クル事ヲモ、其伎ヲモ傳ヘシナドイヘド、皆信ガタシ、又甲斐ノ武田ノ家ニハ、大永六年ニ傳ハリ、甲陽軍鑑相模ノ北條ノ家ニハ、享祿元年ニ傳フルナドモ北條五代記イヘド、南浦ノ集ニハ、天文十二年ニ始メテ傳フト見エ、九州ノ事シルセル記ニモ、享祿三年ニ來レリト見エタレバ、九國ノ地ニダニイマダ傳ハラヌニ、ハルカ東ノ國國ニ、マヅ來リケン事コソ心得ラレネ、文獻ノ徵トス

ルニ足リナンハ、南浦ノシルセルトコロノ異朝ノ書ニ見エシ所ニモ、西洋ノ人ノ云フ所ニモ、皆々符ヲ合セタルガ如クナルニハシカズ、又長筒トテ、ソノタケノ四尺五尺ニ及ベルハ、異朝ニハ嚕密鳥銃トナヅケヌ、或ハ大キクモ或ハ小コシキニモ作リナシテ、遠カランニモ近カランニモ、其利アルヤウニ巧ミナセル類、今ハ其品モツトモ多クナリタリ、ソノ銃藥線藥(クチクスリ)ナドノ分劑、ヲノ〳〵ソノ方アリ、コレヲ盛ルベキ器モ其制多シ、鉛彈、彈子模、火繩ナドノ制、ナベテ世ニシレル所ナレバ、コヽニシルサズ、

大友ガ家ノ事シルセル記ニ、天正四年ノ夏、宗麟入道ガ領セル肥後國ニ、南番ヨリ大ノ石火矢來レルヲ、入道ヤガテ彼國ヨリ修羅ヲモチ、豐後ノ國臼杵ノ庄丹生ノ島迄引キヨセテ、悅ブコトカギリナク、其名ヲバ國崩トナン名ヅケタリ、國ノモノドモコレヲ聞キテ、アハレヨカラヌ名カナト、サヽヤキサヽヤキイヒケレド、入道更ニ改メズト見エタリ、又天文廿年、南番ノ商舶來リテ、石火矢トイヘル鐵砲ノ大ナル物二ツ宗麟ニ進ラス、ソノ後大友島津ガ戰起リテ、敵丹生ノ島ニヲシヨセタリケルニ、上野ノ何某トイフモノ、ソノ石火矢ヲモテ薩摩ノ軍勢アマタウチ殺シテケレバ、城ヲバツヰニオトサレズトシルシタル物モアリ、九州記ニコレモ南番ヨリ傳ヘシトイフナレバ、異朝ニイハユル佛郎機ノ制トコソ覺ユレ、ソノ器異朝ニ傳ハリシハ、大明ノ武宗皇帝正德十二年、忽チニ海舶ノ大ナルガ二雙、廣東ノ懷遠驛ニ至リテ、佛郎機國ヨリ進貢ノ人ナリトゾイヒケル、サレドモカシコヨリ貢マイラセシ例アラザレバ、此所ノツカサ、マヅソノ人ヲバ留メヲキテ、此由ヲ奏シケルニ、參ラセヨトアリシカバ、ヤガテ都ニ趣カシム、折ノシミカド南方ノ國々巡リ幸シ給フホドナレバ、會同館トテ外國ノ使ヲ按置セラルヽ所ニ、トヾマル事一年バカリ、ミカド崩御マシ〳〵テ、世宗皇帝御位ニツカセ給ヒケルハジメ、此使等不恭ノ事アレバトテ、廣東ニヲシカヘシテ、ソノ境ヲカリ出サレヌ、ソノ乘リ來リシ船ゴトニ、此銃四ツ五ツヲフナバタニナラベヲキテ、小シキナル銃五ツヲモテ、ソノ一ツガ中ニ火藥鉛彈ナドメグラシ入レテ、火ヲモテ放ツニ、ソノ彈ノノタルトコロクダケズトイフ物ナシ、カノ通事ノ人、其銃一ツニ火藥ノ方ソヘテ、廣東ノツカサニマイラ

セケリ、此器佛郎機國ヨリ出デタレバトテ、カクコソハナヅケヽレ、顧應祥ガ説也、彼世宗皇帝ノ嘉靖年中ニ、又西洋ノ番國ヨリ傳ヘシ所ヲバ、西洋砲トナヅク、半里ガ外ノ人馬ハミナ驚キ死シヌベシ、其後又紅夷ヨリ得タリシヲバ、スナハチ紅夷砲トナヅケヌ、ソノタケハ一丈バカリ、火藥ヲ用フルコト數斗ニシテ、鐵ノ彈二十里ガ外ニ及ブ、最モ神器トイヒツベシトゾ、彼國ノ書ドモニ見エケル、天工開物、武備志、通雅等ニ、カノ正德ノ十二年ハ、我朝ニシテハ、後柏原院御在位ノ時、永祿ノ十五年、嘉靖ノ比ホヒハ後奈良院ノ御在位ノホドニヤアタリヌラン、天文ノ末ニ傳ハリタル鐵砲ノ大ナルモノ二ツトイヘルハ、彼佛郎機ノ制ニシテ、天正ノ初ニ來レルハ、西洋ノ大砲ナレバ國崩トモナヅケタリケン、紅夷砲トキコエシハ、今我國ニ年ゴトニ來レル阿蘭陀ノ國ヨリ出デシナリ、コノ國ノ大砲ハ、其制特ニスグレタリト、羅馬人モ申シキ、阿蘭陀人ニ遇ヒシ毎ニ、コノ物ノ始メヲ尋ネ問フニ、コノ國ノ人ハソノ始ヲ詳ニセズト云フ也、コノ國ハ異朝ニテハ、和蘭又ハ喎蘭地トモイフ國也、和蘭喎蘭阿蘭ソノ音相同ジ、シカルニ紅夷ハ和蘭ノ類ニシテ、同ジ國ニハアラズトイフ人アレド、朱舜水ガ説和蘭又紅夷トモ紅毛鬼トモイフヨシ、正シク大明ノ書ニハ見エタリ、皇明世法錄等此國ノ火器ハ今世ニオホク傳ヘ侍リ、

本朝軍器考卷六終

本朝軍器考卷七

筑後守從五位下　源　君美彙輯

矛 槍 類

周ノ禮ニ戈、殳、戟、酋矛、夷矛、五ツノ兵ヲ兵車ニタツ、其制モ又各異也、我朝ニハ矛戟二ツノ制ノミゾアリケル、倭名鈔ニハ、矛又鉾ニモ作リテ天保古トヨミ、戟アルヒハ干トイヒ、アルヒハ戈トイフ、スベテコレヲ保古トヨムヨシ見エタリ、此國ノ始伊弉諾伊弉冊二柱ノ神、天ノ浮橋ノ上ニ立シテ、天ノ瓊矛ヲ指シ下シテ滄溟ヲ探リ給ヒシニ、ソノ滴リ凝リテ島トナレルヨリゾ、此大八洲ヲバ産生セ給ヒタル、サレバ我國ノ戎ノ器、矛トイフヨリフルキ物ハアラジ、ソレヨリノチ大己貴神、此國ヲ細戈千足ノ國トナヅケ給ヒ、天孫ノ降ラセ給ヒシ時、昔國平シ時、杖給ヘル廣戈ヲマイラセラレシコトモアリケリ、彼細戈千足トイフコトハ、軍ノ器備ハリタリヌルガ故也ト聞エタレバ、戈トダニイハンニハ、モロ〳〵ノ軍ノウツハモノハ、其中ニコソコモリタルラメ、神功皇后ノ新羅ヲ征シ給ヒテ、其王ノ門ニ杖給ヘル矛ヲ樹テ、、ナガキ代ノシルシトナサレケンモ、イカサマユヘアル御事ニゾアルベキ、日ノ神天ノ窟ニ入リ給ヒシトキ、天ノ金山ノ銅ヲトリテ日矛鑄造リシト聞エシハ、其制又異ナル物也、舊事紀ニ日本武尊ノ東夷ヲ征シ給ハン時ニ、賜ハラセ給ヒシ比々良木乃八尋矛トイフ物ハ、其制イカニヤアリケン、四十二代ノ朝廷文武天皇大寶二年ノ夏四月、秦忌寸廣庭獻ニ杠谷樹八尋桙根ヲ、伊勢太神宮ニ奉ラシメ給フヨシ、續日本紀ニノセテ、杠谷樹ハ俗ニ比々良木トイフヨシ注シタレバ、彼尊ノ賜ハラセ給ヒシ矛モ、其桙根ノ木ニヨリテカクハナヅケラレケメ、又平鉾三股鉾ナドイフ物モ見エタリ、令ノ載スル所ヲ見ルニ、諸臣ニモ儀戈ト云フモノアリケリ、太政大臣ハ四竿、左右ノ大臣二竿、大納言一竿、義解ニハ、儀戈トイフハ平頭ノ戟ヲイフ、コレヲ威儀ニ用フルガ故ニ儀戈トハイヘリ、コレ必ズ蓋ヲ用フル時並ビ用フルノミ、ヒトリ用フベカラズト注セリ、又令ニ矛稍ハ私ノ家ニアル事ヲ得ザレトモ見エタリ、コレ常ニハ郡國ノ兵庫ニ藏メラレテ、征戰ノ時ニノゾミテ、兵士ニ分チアタフベキ物ナルガ故ト

ゾ見エタル、今モ山城國靜原ニノ宮ノ社ニアル天武天皇ノ御鉾、南都正倉院ニアル聖武天皇御鉾ドモ、今ハキ、モ及バヌ物ドモ特ニ多カリ、倭名鈔ニ見エタル天保古ナドイフモノハ、近代マデモアリケルニヤ、玄惠ノツクリシトイフ庭訓、又壒囊鈔ノ中ニモ見エタリ、イヅレモ手鉾トシルシタリ、ソノ外ノ制ハ後代ノ物ニ見ル所ナシ、

槍トイフモノ、本朝ニシテハ何レノ比ニヤ始マリヌラン、第十代ノ朝廷ノ御時、崇神天皇豐城命ノ御夢ニ、ミヅカラ三諸ノ山ニノボリ、東ニムカヒテ八タビ弄槍シ、八タビ擊刀スト、見給ヒシトイフ事、舊事紀ニ見エタルゾ、此物ノ見エシ始ナルベキ、日本紀ニ見エシ、新羅ノ王子天日槍マウキテ出石槍マイラセシハ、第十一代ノ朝廷ノ御時也、垂仁天皇令ノ軍防ノ條ニ、凡衞士ハ中分シテ一日ハ上リ一日ハ下レ、事故ナカラン日ハ、下ルゴトニスナハチ當府ニオイテ弓馬ヲ敎ヘ習ヒ、刀ヲ用ヒ槍ヲ弄バシメヨト見エタリシヲ、槍ハ木ノ兩頭銳キモノスナハチ戈ノ屬也ト、義解ニハ注シヌ、倭名鈔ニハ、雜藝ノ類ニ、弄槍ノ二字出ダシテ保古斗利トヨミタリ、又令ノ武官朝服ノ下ニ、兵衞ハ會集ノ日挂甲(ウチカケヨロヒ)ヲ加ヘテ槍ヲ帶ブ、衞士ハ横刀弓箭モシクハ槍ヲ帶ブ、ヨノツネニハ槍ヲ去クト見ユ、皇極天皇ノ天下ヲシロシメス三年、天智天皇ノイマダ中大兄乃皇子ト申シマイラセシ時、蘇我ノ入鹿ノ臣ヲウチ給フニ、ミヅカラ長槍ヲ執ラセ給ヒシトイフ事モ見ユ、ソノ、チニ見エタル花槍、延喜式ニ鎌槍、鯰尾槍ナド三代實錄云ヒシモノ、制ハ、イカニヤアルラム、義解ノ注セシ所ヲ見ルニ、戈ノ屬也トハアレド、木ノ兩頭銳キモノトシルサレタレバ、刄ヲ施セシモノトモ見エズ、其後ノ物ハ皆刄アル物トコソ見エタレ、異朝ノ書ヲ併セ考フルニ、槍ト云フモノハ、近キ代ニアル也利(ヤリ)ト云フモノニテアルナリ、オモフニコノ也利ト云フモノハ、古ノ槍ノ制ニヨリ作リ出ダサレシニヤ、俗ニハ鑓ノ字ヲ作リ出ダシテ、此物ノ名ニ用ヒ來リタレド、正シキ文書等ニハ用ヒ難クモヤアルベキ、スベカラクハ古ノ槍ノ字ヲヤ取リ用フベキ、又異朝ニシテモ、近キ比ホヒ鎗ト云フモノハ、我ガ朝ノ也利ノ類ニテ侍レバ、又鎗ノ字ヲヤ用フベキ、今ノ鑓ト云フモノハ、貞和四年十二月住吉ノ合戰ニ、橘正行朝臣ガツハモノ阿間了願ト云ヒシガ、

柄ノ長サ一丈バカリノ鑓ヲモテ、多クノカタキヲツキヲトシケリト、太平記ニ見エタルゾ、ソノ物ノ見エシ始ナルト、世ニハ云フナレド、建武二年正月三井寺ノ合戰ニ、義貞朝臣ノ兵土矢間ヨリ鑓長刀出シテ散々ニツキケルヲ、義貞朝臣ノ兵、H理新左衞門尉ガ、十六マデ奪テステタリト云フ事モ同記ニ見エタリ、此事住吉ノ合戰ヨリハ猶サキノ事ニテアルナリ、建武ヨリサキニハ、此物ノ事見ル所ナケレバ、元弘建武ノ間ヨリハジマレル事ハ一定ナルベシ、ソノ、チ織田殿ノ年ツカクマシマセシ時、小侍ドモニ鑓習ハセ試ミ給ヒテ、柄ノミジカキハヨカラジトテ、或ハ一丈八尺、二丈一尺ニツクリ出ダサル、世ニ三間柄、三間半柄ナド云フハ、コレヨリゾハジマレル、コレ又古ノ長槍ノ類ナルベキ、異朝ニモ近キ代ヨリ長槍ト云フモノ見エ侍リ、今ノ鎌鑓ト云フモノハ、周ノ代ノ戈ト云フ物ノ制ニスコシモカハラズ、但シ我朝ノ古ニ戈ト云ヒシ物ニハコト也、オモフニ此物ハ、カノ鎌鈴ト云ヒケンモノ、遺レル制ニヤアラン、此物古ヨリアル物也トシルセル物モ侍リ、鎌鑓ノ事、北條五代記ニ見エタリ、此鎌ト云フモノニモ矢アレド、ソノ四寸ノ距ヲモテ、身ノフセギトス、利アルガ故ニ、後ノ世ノ人又十文字ヲモ作リ出ダセルトシルセリ、十文字ト云フ物ハ、古ノ三股ノ鉾ニ似テケリ、コノ物ハ殊ニ近キ比ホヒ、南都ノ僧家ヨリ出デタル也、異朝ノ鈴ト云フ物モ、モトハ少林寺ノ棍法ヨリ出デシトゾ聞ユル、世ノ末ザマニナリヌレバ、サラヌ僧法師モカヽル伎習フ俗ニナリヌル事、我國モ他ノ國モ同ジ例トゾ見エタル、南部寶藏院ノ住僧ハ、穴澤ガ長刀ノ弟子也、ソノヽチニ柳生但馬守宗巖ト相議リテ、此モノ制リ出セシト云フナリ、此物異朝ノ鋭鈀馬叉ナド云フ物ニ同ジト云フ人アレド、鋭鈀ノ横股ハ四ツノ稜アリテ敵遠ケレバ、此股ニ火箭カケテ、火ヲモテ箭ヲ發ツ、カタキ近ヅケバ、箭ヲステ、コレヲサスナド見エタレバ、武備志我國ニシテ近キ世ニ出來シ加伎也利ト云フモノニコソ似タレ、此外日々ニ新シキ制ドモ出來ツ、今ハ悉クニシルスニ暇アラズ、足利殿ノ代ノ末ニ及ビテ、我國ノ軍制ヤ、又改マリテ、東國ニコソ騎戰モアリケレ、ナベテ世ハ歩戰ヲ用フルホドニ、凡ソ軍功ヲ論ズルニ、鑓マジフル事ノ一番二番ナドイフ事ニテ、ソノ賞格ヲ定ムル事ニナリシカバ、弓矢打物トリテノ高名ハ、アレドモナキニ似タリキ、異朝ニモ槍ハ藝中ノ王也トイヒタレバ、少林棍法[illegible]、彼國ニモ近キホドハ、我國ニ同ジキ俗トコソ見エタレ、カ、リ

シノチハ、此物軍國ノ要器トナリテ、古ノ儀戈ナドイヒシ物ノ如ク、ソノ人々ノ品位ニヨリテ、此物ヲ執ラシメテ、ソノ威儀トセラルヽ事ニハナリタリ、サレバ此國作ラレシハジメ、大已貴ノ神ノ細戈千足乃國トナヅケ給ヒタリケン、ソノ八十萬歳ノノチ、又カヽル世ノ俗トナリケル事、マコトニアヤシキ事也トコソ覺ユレ、

長刀ト云フ文字、フルキ物ニシルセル所皆カクノ如シ、節用集ニハ薙刀トモカクヨシヽルセリ、コレ其比ニハ世ニ長キ打刀ノ出デ來タレバ、薙ト云フ字用ヒテ其物ヲワカテル也、倭名鈔ヲ見ルニ、長刀ノ下ニ唐令ノ銀裝長刀又細刀ト云フ說ヲ引キテ、之路加禰都久利乃奈伽太遲トヨミタリ、太政入道淨海ノ銀ノ蛭卷シタル長刀ナド云フモノソノ物ニヤ、イヅレノ比ヨリ奈伎奈多トハナヅケタリケン、陸奥後三年ノ戰ニ、將軍金澤ノ柵ヲ攻メラレシニ、武衡ガコハウチトキコエシ龜次ト、次任ガ舍人鬼武ト戰フニ、龜次ガ頭冑キナガラ鬼武ガ長刀ノサキニカヽリテオチヌト、云フ事ヲ繪ガキシ物ヲ見ルニ、卽今ノ長刀ノ制ナレバ、後三年合戰ノ繪 此比ハスデニ奈伎奈太ト云ヒシナリ、ソノ後ニ又大長刀トイフモノ出デ來ヌ、元弘建武ノ比ホヒハ、三尺餘リナルヲモ猶小長刀トイヒテ、大長刀トイフハ五尺六尺ニ餘レリ、又身モ柄モ五尺餘ヅヽノモノアリケリ、コレ今ノ世ニアル制トハ同ジカラヌ歟、又フルキ草紙ニ、長刀小反刄(コソリバ)ナドヲシナラベテイヒシモアリ、高館ノ草紙等 カレコレヲ通ジ考フルニ、近キ代迄アリシ中卷トイヒシモノ、刄モ柄モヒトシクツクレル物ナレバ、カノ大長刀トキコエシ物ノ類ニヤアラン、今ノ世ニアル物ハ、古ヨリノ長刀ノ制ニテ、小反刄ナドイフモ此類ニゾアルミキ、異朝ノ書ニ見エシ我朝ノ制ニ、刀ノ大ニシテ長キ柄アルモノハ、スナハチ擺導(ハイダウ)ノ用フルトコロ、人ヲ殺シツベキ物ニテ、コレヲ先導トイフトシルセルハ、長刀ノ事ニテ、皮條ヲ刀ノ鞘ニツヾリテコレヲ肩ニハキ、或ハ手ニトルモノハ、則チ隨後ノ用ツルトコロ、コレヲ大制トイフトシレセルハ、中卷ノ事ヲイヘルナルミシ、武備志ニ見ユ、スベテカヽル物、古ト名ハ同ジケレド、其實ハ今ニ異ナルモ、又今ハ其名異ナレド、古トソノ實ハ同ジキモアル事ナレバ、昔ノ物見ネバオボツカナシ、筑紫長刀トイフ物ハ、其制スコシク異ナル也、

コレモ古ヨリアル物ニヤ、詳ナル事ヲバ知ラズ、

本朝軍器考巻七 終

本朝軍器考巻八

筑後守従五位下 源 君美彙輯

劍刀類

倭名鈔ニ四聲字苑ヲ引キテ、刀ニ似テ兩刃ナルヲ劍トイフ、劍ニ似テ一刃ナルヲ刀トイフ、大刀ハ太知トヨミ、小刀ハ加奈太トヨミ、長刀ハ奈加太遲トヨム、短刀ハ、兼名苑ニ刺刀ハ短刀也トイフ、能太知トヨムヨシヲ注セリ、此等ノ外、國史令式及ビ古今ノ書ニ見エシ所ドモ、刀劍ノ類其制コトニ多シ、古ニ聞エテ今ハ見エヌモノ、今見エテ古ニ聞エヌモノ、或ハソノ名同ジクシテソノ實ハ異ニ、或ハソノ名異ニシテ其實ハ同ジキモアルニヤ、マヅ劍トイフ物ハ、伊弉諾尊佩セル十握劍ヲ拔キテ、軻遇突智ヲキリ給ヒシトアレバ、コノ物既ニ神代ヨリ聞エキ、其後素戔烏尊八岐ノ大蛇ヲキリ給ヒシモ十握劍ニテ、其劍ノ名ハ蛇之麁正トモ、蛇韓鋤之劍トモ、天蠅斫之劍トモ、天羽々斬トモ云フ、石上神宮ニアリトモ、吉備神部ノ許ニアリトモイフ也、又其大蛇ノ尾ヨリ出デニシ劍ハ、後ニ日神ニマイラセラレシ天叢雲劍是也、此劍ハ皇孫此國ニ降ラセ給ヒシ

時、八坂瓊曲玉八咫鏡ト共ニ、サヅカラセ給ヒシ三種神寶ノ中ナルベシ、第十代ノ朝廷崇神天皇ノ御時、其神劔ヲウツサレントテ、天目一箇神ノ裔孫シテ、大和國宇陀郡ニテツクラシメラル神劔ヲバ、神鏡ト共ニ倭姫命ニツケテ、伊勢ノ太神宮ニイツキマツラレシヲ、日本武尊東夷ヲシヅメ給ヒシ時ニ及ビテ、御姨ノ命ヨリ賜ハラセ給ヒテ、後ニ草薙劔ト名ヅケラレ、尾張ノ熱田社ニ納メマツラレシヲ、天智天皇ノ七年、沙門道行トイフ者ヌスミマイラセテ、新羅ニ逃向(ニゲユカ)ントセシカド、中路ニシテ雨風ニ茫迷(マドヒ〳〵)テツキニ歸シ入レマイラセキ、初神劔ヲウツシツクラレテ、世々ノ朝廷傳ハラセ給ヒシ寶劔ハ、八十一代ノ朝廷ノ御時ニ、安德西海ニ沈ミヌレド、日神ノ皇孫ニ授ケサセ給ヒシ所ハ、今モ熱田ノ社ニオハシマスベケレバ、彼三種ノ神寶ハ、自ラ天地ト共ニ永ク此國ヲ鎮メ給フベキ御事也、駿河國風土記ニ據ルニ、草薙トハ天叢雲劔ノ別名也、其義燒鎌ノ利鎌ニ取ル、其刄ノ利キヲ以テナリ、日本武尊野火ヲ免カレ給ヒシニヨリテ、此名アリト云フハ大ナル誤ナリト見エタリ、コノ外諸部ノ天神ノ佩キ給ヒシ劔ドモ、又代々ノ朝廷ノ寶トナサレシ靈劔雜劔ナド、猶少カラズ、ソノ中、日月護身劔、三公闘戰ノ劔ナド聞エシ靈劔ハ、百濟國ヨリ獻リシ所ナルベシ、靈劔雜劔ノ事、日本紀略、天德記、禁祕抄、玉英等ニ見エタリ、節刀ノ下ニ併セ見ルベシ、又壺切トイフ劔ハ、代々ノ儲君ノ授カラセ給フ御寶ニヤ、コレハ漢ノ張良ガ劔ノヨシ、江談抄ニ見エタリ、イカナル證ヤアルラム、續古事談ニハ、此劔ハ昭宣公ノ物也、延喜儲君ノ時奉ラレシトコソ見エタレ、スベテコレラノ御事ハ、凡人ノ身トシテ言ニイヒ出デンモ猶畏アレバ、筆ニハイカデシルシ參ラスベキ、近キ代ノ俗ニハ、劔トイフ字シルシテ太知トヨミ、大刀ノ事ニ用ヒ來レルニヤ、倭名鈔ニ注セシ所ニヨレバ、カヽルベクナムアラズ、彼鈔ニ注セシ所、刀劔ノ制同ジカラザルガ故也、サレド古事記ヲ見ルニ、彼伊弉諾尊ノ軻遇突智ヲキラセ給ヒシ十握劔ヲ、又御刀トモシルシ、又キル所ノ刀ノ名ヲ天ノ尾羽張トイフトモシルセリ、味耜高彥根命ノ天稚彥ノ喪屋ヲ切伏シ斗摑劔ヲ、又其持チテ切ル所ノ大刀ノ名ヲ大量(ヲホハカリ)トイヒ、亦ノ名ハ神度劔(カムバカリノツルギ)トイフトモシルセリ、皇孫ノ降リ給フ時、諸部ノ神ノ佩キタル頭槌劔ヲ、頭椎ノ大刀トモシルセリ、又須佐之男命ノ八俣遠呂智ノ中尾ヲ刺割テ、都牟刈之大刀ヲ得給フトモ見エ、又日本武尊ノ薨(ミウ)セ給ハン時ノ御歌ニモ、都流岐能多智ト讀ミ給ヒシ、是等皆草薙劔ノ事ヲゾイフナル、

サラバ上古ノ時都流岐トイヒ、大刀トイフ、異ナル物トモ見エズ、後代ニタチ劍トイフ物ハ、兩刄アリテ劍ニ似タル大刀也トイヘバ、都流岐能多智ト云フ物モ、カヽル物ニヤアリシ、天國ガ作リシ大刀ノ、半ヨリ上鋒ニ至リテ、兩刄ナル物今モアルメリ、之ヲ古ニツルギノ大刀トイヒ、後代ニ大刀劍トモイヒシ制ナルベシ、又古キ小刀ニモ此制ナルモノ猶アリ、○按ズルニ、越ノ都流我ノ郡ヲ、古ニハ角鹿トシルシタリキ、サラバ都流岐トイヘル名ハ、モトハ其ノ鋒鋩ノ尖ニシテ、獸角ノゴトクナル故ニコソ、大刀ニモアレ小刀ニモアレ、其鋒鋩ノ角ノ尖ナルニ似タランモノヲバ、劍トモ又大刀トモイフベキモノニヤ、倭名鈔ニモ、亦今按ズルニ、僧家所レ持是也ナド注シタレバ、順ノ比既ニ劍ハ世ニ希ナル物トゾ見エタル、異朝ニモカクアリケルニヤ、古ノ劍ハ戰闘ニ施スベシ、故ニ唐ノ太宗ノ御時、劍士千人アリキ、今ハ其法傳ハラズナド近代ノ人ハシルセリ、大明茅元儀ガ武備志ニ、聖德太子劍銘ノ事ハ、江談抄ニモ見エタリ、過ギニシ比、天王寺ニテ其丙毛槐林劍ト、七星劍ナド云フ物ヲ見侍リ、其形ハ卽チカタナノ制ニテ、兩刄ナルニハアラズ、丙毛槐林ト云フモノ、刄ノ長サ二尺一寸五分、潤サ八分許、莖(ナカゴ)ノ長サ四寸五分、其志乃岐ノ所ニ金鑲ニテ銘四字アリ、七星劍ハ刄長サ二尺三分、潤サ九分餘、血漕二條アリ、金ヲ以テ七星幷ニ龍ト雲トヲ嵌(イレ)タリ、其莖ハ四寸、但シ丙毛槐林ト云フ事ハ、其銘セシ字ニヨリテ此名アルナリ、匡房卿ノ說ニハ、守屋大臣ノ頸ヲ斬ルノ義也ト見ユ、又法隆寺藏太子傳ノ抄ニハ、聖譽抄トイフ、丙毛槐林トハ馬子大臣ト云フ義也、又ハ蝦夷大臣ト云フ義也トモ見エタリ、ハ[illegible]テ此等ノ說イカヾアルベキ、我見シ所ハ、ソノ銘ハ漢篆ナド云フモノ、體ニシテ、正シク丙子椒林ノ四字也、丙子トハ此刀造レル年ヲ誌シ、椒林ハ刀ヲ造レル工ノ姓名ナルモ知ルベカラズ、椒姓ハ姓苑ニモ見エテ侍ルメリ、是レ又古ノ時ニ劍ト云ヒ、太刀ト云フ、異ナル物ニモアラザル證也共云ツベキニヤ、大己貴神、御父素戔烏尊ノ生大刀ヲ取リ持チ、逃ゲ出デ給ヒシトイフ事ノ舊事紀ニ見エタルハ、此物ノ事見エシ始ナルベキ、後代ニ至リテハ、其制日々ニアラタナル多クナリテ、其名モ又同ジカラズ、ソレガ中、延喜式ニシルサレシ所、神寶ノ中ニ見エシ物ドモハ、神代ノ遺制ヲヤ用ヒラレケム、後代ニ聞エシ物ドモニモアラズ、マヅ玉纏横刀トイフハ、其柄ニ仆環(ヤクワン)アリテ五色ノ玉ヲ纏ヒ、勾金ニハ鈴八口ト玉二ツ、ケテ、鮒形(フナカタ)須惠組(スエクミ)ナドイフ物アリ、次ニ須我流横刀ト

イフ物ハ、大ヤウ後代ノ大刀ノ制ニ似タリト見エタレド、柄ヲバ鴾羽(ツキノハ)ヲモテ纏ヒ、四角ニ乳形着テ、五色ノ組ノ長サ一丈ナルヲツクルナドイフ事アリ、又次ニ新作横刀トイフモ、柄ヲバ鳥ノ羽ヲモテ纏フナド見エケリ、今モ進ラセラル、御神寶共ハ、其圖ヲ見シ事ノアリキ、式ニ見エシ所ヲ併セ考フレバ、大ニ同ジクシテ少シク異ナル所モアルニヤ、山崎ノ神寶ノ中ナル大刀ニモ、式ニ見エシ所ニ似タル物アリト云フ、狛劔大刀劔ナドイヒシ物、カヽル制ニヤアルラン、藻鹽草ニ、狛劔ハ柄長クテ輪ノアル也、大刀劔ハ兩方ニ刄ノアル也、劔ニ似タリ、ツバニハアラデ、サノヘトンタル輪ノアル也ト注セリ、筑紫ノ彦山ニテ地中ヨリ堀リ得シ大刀アリ、武内大臣ノ物ニヤ、大刀頭ノ飾、槌ノヤウニナムアルトイヒシ人アリ、モシ其言ノコトクナラムニハ、ソレラ頭槌ノ大刀ナドイフ物ノ制ニヤ、武内ノ物ノ事猶尋ヌベシ、天王寺聖德太子ノ像ハ、太子自ラ畫キ給フ所ノ由ヲ云ヒ傳ヘ侍リ、其佩キ給ヘル大刀ノ飾、今ノ制ニハ異ナリ、凡古ノ制其物ヲ見ザレバ、今ノ制ヲモテ推シ測リ難キコト多カリ、サレバ古ノ大刀小刀ナドノ制、イカニヤアリケムイブカシ、令ニ見エシハ、凡武官禮服、衞府督佐兵衞督金銀裝横刀、又朝服、衞府督佐金銀裝横刀、其志以上烏裝(クロツクリ)横刀、横刀ハ興古波伎トヨムヨシ、壒嚢抄ニ見エタレド、日本書紀律事紀及ビ令式等ニハ太知トヨミタリ、式ニハ、畫飾大刀、又刻鏤大刀ノ新作ニアラザルハ、五位已上コレヲユルスト見エ、又烏裝横刀作ルベキ功程ヲシルサレシ所モ見エタレド、其制ハ詳ナラズ、又凡衞府舎人刀緒、左近衞緋絁、右近衞緋纈、左兵衞深緑、右兵衞深緑纈、左門部淺緑、右門部淺緑纈、囚獄司物部胡桃、帶刀資人黄也ナドイフ事モ、式ニ見エタレバ、古ニハ刀ノ緒ヤウノ物、悉ク定マレル式アリケリ、鎌倉ノ荏柄社ニマストイフ菅神ノ像ヲウツセル物、我家ニアリ、其佩キ給ヘル大刀ノ頭ノ飾、鳥ニ似テ鳥ニモアラヌ物ニテアル也、イカナル物トイフ事ヲシラズ、ムカシ大夏ノ赫連勃々ガ帶ビシ龍雀刀ナドイフ物モ、カヽル物ニヤアリケム、鳥頸ナドイフ物ニヤトオモヘド、鳥頸ノ大刀ハヨキ人ノ用ヒラレシ事イマダ所レ見アラズ、江次第鷹飼裝束ノ下ニハ、鳥頸ノ大刀ノ事見エタリ、カノ式ニ見エシ畫飾ノ大刀トイフモノハ、後代ニ飾大刀ナドイフ事ニヤ、飾大刀ハ節會及御禊行幸供奉ノ公卿、臨時ノ祭ノ使等コレヲハキ給フ物ニヤ、古ノ物大略ハ木ニテ作レル物トゾ見エタル、飾抄如法飾大刀ナドイフハ、異様ノ物ニハアラ

ネド、常ノ劒ノ裝束所彫透シ、飾ノ玉ナドスベシナドモ見エタリ、(圓太暦ニ)飾大刀代、代ガ代ナドイフモアリケリ、葦手劒、琉璃柄劒、其外木地螺鈿、蒔繪螺鈿、樋螺鈿等ノ大刀、蒔繪細大刀、螺鈿野大刀、蒔繪野大刀、(コレハ或ハ平鞘、或ハ毛拔形、或ハ革緒大刀ナドモイフ也、)沃懸地大刀、黑漆大刀、コレラ或ハヨノツネノ行幸、或ハ遠所行幸、或ハ節會ノ時、其官位ノ高キ卑キニヨリテ用ヒラル、物ドモニテ、武ノ大刀ニハアラザルカ、古ニ聞エシ武ノ大刀ト云フ物、(東鑑ニ見ユ、)イカニヤアリケム、野劒ハ、近衞次將、外衞佐等常ニ令レ持レ之ト飾抄ニ見エタレバ、野劒ノ事ヲヤ云ヒケン、後三年平治等ノ事ヲ繪ガキシ古キ繪ニ見エシ所、武士ノ佩キシ、皆々野劒也、又ハ卷大刀(源平盛衰記ニ見ユ、)トモイヒ、近代ニ至リテ、絲卷大刀、又左右卷大刀、又鞘卷大(刀ニモ作ル、)ナド、イヘル物ヲヤイフラム、(大諸禮ニ、大刀ニ、モ、ヨセノアルハ、武家ノ大刀也トイフ事アリ、コレハ東鑑ニ見エシ長覆輪ノ野劒ノ事ヲ云ヒシニヤ、保元物語ノ異本ニ、鎮西八郎爲朝ノ大刀ノ、モ、ヨセニ敵ノ矢ヲ射留メシトイフ事アレバ、昔ヨリ武士ノ佩シ太刀ニハ、モ、ヨセト云フ物ハアリシナリ、)又足利殿ノ比、晴ノ時ハ白大刀ヲ佩ク、從者ニモタセシ大刀ハ、黑作ナルヨシ、ルセル物アリ、其白大刀ト云フハ、銀作ノ野大刀ニテ、黑作ナルハ、黑漆ノ大刀、即チ是也、鎌倉ノ代マデハ、カ、ル儀アリトモ聞エズ、(野大刀銀作ナルハ、五位以上用ユベシ、黑漆ノ大刀ハ、六位以下用ユベシ、太平記ニ其代ノ武士ノ奢侈ナル事ドモシルシテ、鮫懸ケタル白大刀佩キシナド見エタレバ、晴ノ時ト云フトモ叙爵セヌ人ノ用ヒン事ハ、然ルベカラザル儀ナリ、伊勢下總入道宗五ガシルセシ物ニ、白大刀ハ柄鞘トモニ白シ、黑大刀ハ鞘ヌリトチシ、柄鮫チカケテ黑クヌリ、カトゲ赤銅ニテ、ウケボリ、ケボリ、ナノコタルベシ、目貫ハ、我家ノ紋ノ、ヤキツケニスベシ、オビトリ、菖蒲革、足間モ柄モマカズト注セリ、拔ズルニ、此黑大刀、又持大刀トモ云フ也、又ナノコトイフハ、魚子ニ似タルガ故也、古ノ時、魚チバ奈ト云フ、サレバ奈乃古ト云ヒタリ、今ノ人奈々古ナド云フハ訛レルナリ、)練鍔、黑漆ノ大刀、ムク鞘、丸鞘、足白、金覆輪、長覆輪、兵庫鏁、鳥頭、イカ物作、鷲作ナドイフ物、フルキ物語共ニ見エタレド、ソレラノ制、今ハサダカナラヌ多シ、又後代ニ至リテ、大大刀トイフ物見エタリ、畠山庄司二郎忠重ガ備前作ノカウヒラト云フ大刀ハ、平四寸、長サ三尺九寸ナルヲダニ、(源平盛衰記ニ見ユ、)其比ハ殊ニスグレタル物トイヒシニ、元弘建武ノ後ハ、五尺六尺ニ及ブ大刀、イクラモ出デ來ケレバ、古ノ制ヲバ、小大刀トナヅケテ、大小二振ヲゾ佩キケル、元弘ノ初、山徒都ヘヨセタリシ時、丹波國ノ住人佐治孫三郎ガ五尺三寸ノ大刀ヲバ、其比曾テナカリシヨシ、太平記ニシルシタレバ、大大刀トイフ物モ、其比ヨ

リ始マレル也、豐臣大閤ノ朝鮮ヲ侵サレシ事ヲ、彼國ノ人ノシルセル物ニ、大同江トイフ大ナル江ヲ隔テ見ルニ、我朝ノ兵、皆大キナル大刀ヲ肩ニカケタルガ、日ノ光ニカヾヤキテ、電ノゴトクニ見エケリ、或ハマコトノ大刀ニハアラズ、木ヲモテ作レルニ、白鐵トイフ物ヲソヽギテ、人目ヲ眩サセムタメ也トイフト見エタリ、懲毖録ニハジメハ心得ヌ事ニ思ヒシニ、後ニ我朝ノ人ノ其時ノ事シルセル物ヲ見ルニ、マコトニ彼國ノ人ノイヒシゴトク、此比ハ、木ニテ五尺六尺バカリノ大刀コシラヘテ、佩キソヘタリ、其大刀ヲバ、ムカシ箙ナド負ヒシヤウニ、オビトリヲ肩ニカケテ負ヒケリ、伊達成實記ニムカシモ大大刀ヲバ、カク負ヒシ事モアリキ、ハジメ大大刀トイフ物出デ來シダニ、心アル人ハ、世ノ末ニナリヌルトコソイヒケレ、塵塚抄ニマシテ木ニテ作レル物ヲヤ、他ノ國ニ譏ヲノコセシ事、口惜シキ事也、

足利殿ノ代ノ初ニハ、上ヨリ賜フモ、下ヨリ奉ルニモ、必ズ大刀ニ馬ソヘテ引カル、ソノ餘種々ノ物ヲバ、コノ二ツノ物ニソヘケリ、始ハ白大刀、黑大刀、絲卷大刀、皮裴大刀ナドヲ用ヒラレシニ、世ノ季ニナリユクマヽニ、事繁ク禮煩シクナリテ、國モ又貧シク窮リシホドニ、一尺許ノ鐵ヲノベテ、絲卷ノ大刀ノヤウニツクリナシテ、大刀ト名ヅケ、馬ノ代ニハ青錢、白銀、黃金ナドヲ賜ハリモ奉リモスルコトニナリケリ、此比ヨリゾ卷大刀ヲ、眞ノ大刀ナドモイフ事ニナリケル、此物ノ事ヲモ異朝ノ書ニシルシテ、贄禮賀禮トナスモノ、其名ハ刀ナレド、其實ハ用ナキモノ也トイヒケリ、武備志ニ

近代ニ及ビテ、野大刀トイフ物、又出來タリケリ、其實ハ、古ニ聞エシ物ドモニアラズ、凡野大刀トイフ物、其制三ツアリ、倭名鈔ニ、短刀ハ刺刀也、能大知トヨム由見エタルハ、古ニ紐小刀古事記ニ匕首日本書紀ナドイヒシ類、後代ニ打刀腰刀ナドイヘル物ノ類ナルベシ、又螺鈿蒔繪等ノ野大刀トイフ物ハ、或ハ平鞘、或ハ毛拔形、或ハ革緒大刀ナドイヘル物也、又近代ニ及デ、野大刀トイフ物ハ、或ハ長大刀、或ハ中卷ナドイフ物ニテ、倭名鈔ニ長刀トシルセル物ノヤウニゾ覺ユル、大雙紙ノ中ニ、長具足トイフモノニ、野大刀小鑓ナドイフ事見エテ、又大大刀トシルセリ、天文永祿ノ比シルセル物ニ、長大刀ハ長サ二尺七寸、柄ハ其人ノ耳ノ下ヨリ、寸尺ヲ定ムベシトイフ事アリ、サラバ、野大刀、長大刀ナド云ヒシ物ハ、其刄長クシ

テ、其柄モ長キ物ニテアル也、武備志ニ皮條ヲモテ、刀鞘ニ綴リ、
コレヲ肩ニ偏ビ、或ハ手ニ提ル、スナハチ隨後ノ用ユルトコロ、是
レヲ大制トイフヨシ、シルセルハ、
此物ノ事ヲシルセルナルベシ、
尻鞘トイフ物、萬葉集ニハ劔後鞘トカキテ、大知乃
志利左也トヨミタリケレバ、此物昔ヨリアル物也、
モノヽフノ大刀尻鞘ノ虎ノ尾トモヨミタレバ、昔ハ
虎豹ノ尾ヲソノマヽニコソ用ヒタルラメ、又サキオ
リカケテトモヨミケレバ、其タケモ長カリシニコ
ソ、布衣騎馬、味ニ刷(カヒツクロ)ハル、時ハ、虎皮ノ細尻鞘ヲ
用ヒ、又諒闇ノ時ハ、水豹ノ尻鞘、無文青革裝束ナド
イフ事モ見ユ、飾抄マタ舞人ノ時ハ、虎皮、竹豹皮、同上又
魚形、斑猪、鹿皮ノ尻鞘ナド用ヒシ事モ見エタリ、
江家次第又魚形、鰐形、丸尻鞘ナドイヒシハ、其制イカ
ニヤアリケム、江家次第園太暦等ニ見エタリ、蒙古襲來ノ事ヲ繪ガキシ
古畫ニ、我國ノ兵佩キシ大刀尻鞘ニ、魚形ノ如クニ
鬣尾アルヲ、黑ク繪ケルアリキ、此等魚形尻鞘ナド
云フ物ニヤ、オモフニ此ノ物、始ハ行旅モシクハ征
戰ノ時ノタメニツクリ出デシ物ナレド、ツキニハ大
刀ノ飾トモナレルニヤ、武士ノ甲冑帶セシ時ニ、虎
皮尻鞘カクル事、大將軍ナラデハカナフマジキヤ、
其餘ハ、大ヤウ熊ノ皮ナド用ヒシトコソ見エタレ、

平家物語源平盛衰記等ヲ併セ見ルベシ、倭名鈔ニ見エシ鞱ハ劔衣也、太知不
久路トヨメル物也トイフ人アレド、シカハアラズ、
彼鈔ニモ說文ノ鞱ハ劔衣也トイフ說ヲ引キテコソ、
カクハ注シタレ、禮ノ少儀ニ、襓ノ字ヲモ、劔衣ト
ハ注シタリ、凡劔衣トイフハ、劔ヲ函ニスル時ニ、マ
ヅ布久呂ニ入レテ納ム、其布久呂ヲ劔衣トハイフ也、
鞘ニノミカクル物ヲ云フニハアラズ、又今ハ行旅ノ
時ニ、刀ノ鞘ニ革ノ袋カケテ、比佉波駄トイフ也、
比佉波駄トハ、袋ノ名ヲイフニハアラズ、革ノ名ニ
テアルナリ、革ノ文ノ皺メルガ、蟆(ヒキガヘル)ノ背ニ似タレバ、
カクハイヒケリ、延喜式ニモ皺文トカキテ、比佉波
駄トヨミタリ、
刀子ノ類、其長短ニヨリテ、其飾モ少シク異ニシテ、
其名モ亦同ジカラザル物、古今ニコレ多シ、其中小
刀トシルセル物、凡四ツアルニヤ、倭名鈔ニ小刀ト
シルシテ、加太奈トヨミシ物、古事記ニ紐小刀トシ
ルシテ、比毛加太奈トヨミシモノ、又同記ニ小刀ト
シルシテ、佐比トヨミシ物、又近代ニ及デ、小刀ト
シルシテ、知以左加太奈トイフ物是也、コレノ其文
字ハ同ジケレド、ソノ稱スル所モ、ソノ制モ同ジカ

ラヌ歟、

古ノ小刀ノ制詳ナラズ、垂仁天皇ノ御時、ムカシ新羅王子日槍奉リシ七物（ナヽクサ）ノ中ニ、出石小刀トイフ物アリケリ、其七物ハ、但馬國ニ納メラレ神寶トナリシヲ、日槍ガ曾孫清彦トイフニ勅シテ、其物ドモヲ召サレシニ、清彦彼小刀ヲバ惜ミテ袍中ニカクシテ自佩ク、刀子袍中ヨリ出デ現レシトイフ事アリ、日本書紀ニ此物ハ、倭名鈔ニ小刀加太奈トイヒシ物ニテ、式ニ見エシ衞府舍人等ノ帶ル所ノ刀、後代ニ及ビテ鞘卷ナドイフ物、其遺制ナルニヤ、常ニハコレヲハキヌベキ物ナレバ、美波加之ナドモイヒツラメ、日本書紀ニ御刀トシルシテ、美波加之トヨメリ、鞘卷ノ事ハ下ニ猶詳也、

古事記ノ垂仁天皇紀ニ、沙本比古王、帝ウシナヒマイラセムトテ、八鹽折之紐小刀ヲ作リ、其伊呂妹ノ皇后沙本比賣命ニ授ケテ、此小刀ヲモテ天皇ヲ刺シ殺シ給ヘトハカラレシヨシ見エシヲ、日本書紀ニハ、コノ匕首ヲ裀中（コロモノ）ニ佩テ刺シ殺シ給ヘトハカラレシヨシ、ルサレテ、匕首スナハチ比毛加太奈トハヨミタリ、按ズルニ、八鹽折之紐刀トハ、今ノ刀ノヤウニ、色々ノ絲モテ組ミシ緒ツケタルニゾアルベキ、サレバ其時天皇ノ御夢ニ、錦色ノ小蛇御頸ニマトヒメグルトハ見給ヒケメ、此物ハ倭名鈔ニ、刺刀ハ短刀也、能太知トヨムトミエシ物ニテ、今ハワレマロバニトゲルコシガタナ、世ニツカワレヌ身トゾナリヌルト讀ミシ、後代ニ腰刀ナドイフ物トコソ覺ユレ、腰刀ノ事モ亦下ニ詳也、

天孫此國ニ降リマス時、天宇受賣命、海ノ鰭廣物鰭狹物ヲトリアツメテ、大神ノ御子ニツカヘナムヤト問ヒシニ、諸ノ魚ハ、皆ツカヘムトイフニ、海鼠ハマウサヾリシカバ、細小刀ヲモテ其口ヲ拆ク、故（カレ）今ニ海鼠ノ口拆タリ、又火火出見尊、綿津見神ノ宮ヨリ歸リ給フヲ、一尋ノ鰐ノ送リ奉リシニ、ハカセル劍ノ小刀ヲ解キテ、其頸ニサシテ返シ給フ、故其一尋ノ鰐ハ、今ニ佐比持神トイフ也ト古事記ニ見エシハ、今モ刀ノ鞘ニ挿ム小刀ニテ、カヂトギノマダハモアハヌコガタナノ、世ニタエテコソ思ヒワビヌレトヨミシ物ニテアル也、但シ古ハ佐比トイヒシヲ、後ニハ文字ノマヽニソイフナル、按ズルニ此物ノ事ヲモ、武備志ニシルシテ、刀上又一小刀ヲ挿ムテ、雜用ニ便リスルモノ也ト見エタリ、

鞘卷トイフ物ハ、古ニハ刀ノ事ニテアリシヲ、今ハ卷大刀ヲモテ、鞘卷トハイフナリ、サラバ古ト今ト其名ハ同ジキモノアレド、其實ハ異ナルナリ、ア

ル人ノシルセシモノニ、鞘巻トイフモノハ、アメザヤ巻ナル故ニ、鞘巻トイフ、大刀ノ作リツネノ大刀ト同ジ、又鞘ヲ絲ニテ巻ク故ニ、鞘巻トイフ、柄ヲ絲ニテマク故ニ、絲巻ノ大刀トイフ歟、古今兵具也ト見エタレド、（東帯色目）イカヾアルベキ、ソノシルセシヤウモ、一定ノ説トモ見エズ、平家物語ニ、白拍子ノハジマレル事ヲシルシテ、ムカシ鳥羽院御宇ニ、島ノ千歳ワカノ前舞ヒ出ダシタリケル也、始ハ水干ニ立烏帽子白鞘巻ヲサイテ舞ヒケレバ、男舞トゾ申シケル、シカルヲ中比烏帽子刀ヲノケラレテ、水干バカリ用ヒタリト見エ侍リ、今ノ大刀ナランニハ、ハクトコソイフベケレ、マシテ、マサシク刀ヲノケラレテト侍ルヲヤ、コレノミナラズ、石橋山ノ合戰ニ佐那田余一義忠俣野トクムデ、其クビヲカケドモカケドモキレズ、サセドモサセドモトヲラズ、余一刀ヲモチ上ゲテ雲スキニ見レバ、鞘巻ノ栗形カケテ、鞘ナガラ拔ケタリケリト、源平盛衰記ニモ見エ、又東鑑ニ御刀、鞘巻有ニ下緒一、トモ注シタレバ、鞘巻トイフ物、刀タル事疑フベカラズ、又三議一統ニモ、騎馬ノ御供ノ時、裏打ト云フ事、大口、直垂、鞘巻ノ刀ヲサスベシトシルシタレバ、今ノ知以左加太奈トイフ物、即チ其物ナリ、（鞘巻トイフ事ハ、刀ノ鞘ヲ絲ニテ巻キテ塗レル也、笛鞘巻ナドイフモ、タトヘバ笛ヲ巻キタランヤウニ巻キヌルガ故也、白鞘巻ト聞エシハ、白大刀ナドイヘル物ノゴトクニ白作ナル也トアル人ハイヒケリ、義家朝臣ノ像ニ、大刀ニソヘテサヽレシ刀ノ鞘ノ、今ノ千段巻ナドイフ物ノゴトクニ、繪カキシモアレバ、其説ノ如クニモヤアルベケレド、鞘巻トイフ事、其鞘ヲ絲ニテ巻キシガ故ニハアラズ、此物ヲサスニハ鞘ナガラヌケザランタメニ、其緒ヲ帶ノ上引コシテ鞘ニマキ、其餘リヲバ腰ニ挿ムベシ、サレバ鞘巻トハイフ也、佐奈田余一ガ鞘巻ノ栗形カケテ鞘ナガラヌケシナドイフ事、併セ見ルベシ、）職人盡トテ、百工ノ事ヲ繪カキシ古畫ニ、鞘巻切ト云フ者アル也、其造リ成セル物ノ形ヲ見ルニ、即今ノ知以左加太奈ト云フ物ノ鞘也、其詞書ニ當時ハヤラヌ物也ト見エタレバ、後花園院御治世ノ比、スデニ世ニ用ヒラレヌ物ト見エタリ、

打刀トイフ物ハ、鎧ノ上ニサスチイサキ刀ナルヨシ、三議一統ニハシルシタレド、鎧ノ上ニサスチイサキ刀打刀ノミニモ限ラレジ、又腰刀トイフ物サセシ事モ見エタリ、但シ打刀トイフ物、腰刀ニ比ブレバ、其寸ノヤヽノビタル物ニヤ、上總五郎兵衞尉ガ懐ニシタル打刀ハ、一尺餘ニテ、（東鑑ニ見ユ、）出羽守源齊頼ノ腰刀ハ、九寸許リノヨシ見エテ、（古事談ニ）巴ガ内田三郎家吉ガ頸カキシ腰刀ハ、七寸五分トゾ見エタル、（源平盛衰記ニ）コレ

ラ打刀腰刀ナドイフ物ノ長ノ、古ノ物ニ見エシ所也、彼是ヲ通ジ考フルニ、打刀トイフ物ハ、古ノ小刀ニシテ、腰刀トイフ物ハ、刺刀短刀ナドイヒシ物ナルベシ、大明ノ茅元儀ガ武備志ヲ見ルニ、我國ノ刀制ヲシルシテ、刀ノ大小長短同ジカラズ、名ヲ立ツル事モ亦異ナリ、人毎ニ一長刀アリ、之ヲ佩刀トイフ、又一刺刀、長サ尺ナルモノヲ解手刀トイヒ、長サ尺餘ナルヲ急拔トイフ、又刺刀ノ類也、此三ツノ物ハ、卽チ隨身必用ノモノナルヨシ見エタリ、異朝ノ書ニ見エシ所ナレド、我國ノ刀制ヲシルセシトコロ詳ナリトゾイフベキ、ソノ佩刀トシルセル物ハ、スナハチ近代ニ出來シ刀トイフ物、急拔トシルセシハ打刀ノ事ニシテ、解手刀ト見エシハ、此ニテモムカシ刺刀トモイヒ、腰刀トモイヒシ物ニテアルナリ、吉野ノ郡和田村ニアル所ノ後醍醐院ノ御刀ナリト云フ物、吉久ガ打造レル所ニテ、其飾ハ今ノ脇差ト云フ物ノ制ノ如クニシテ、柄ノ長四寸餘、鞘ノ長サ一尺五寸餘、柄モ鞘モ盡ク金ヲ以テ作ラレテ、柄ヲバ革ヲ以テ卷キ、緒ハ紫ノ組ヲツク、小キナル鐔アリテ、今ノ世ニ小刀ヲ挿ム所ニ、金ノ笄ヲ挿ム、是古ノ打刀ノ制ナルニヤ、三議一統ニ、刀ノ柄ヲ絲ニテモ革ニテモ卷キシハ、鐺ノ上ニサスベキ物也、ヨノ常ノ時ニ用ヒシ事然ルベカラズトイフ事アリ、按ズルニ、此說ニヨル時ハ、ソノ代ニハ打刀ヲバ柄卷テ、鞘卷ノ柄ヲバ卷カザリシナルベシ、コレモ定マレル事トモ覺エズ、カノ源齊賴ノ腰刀、クスネイトニテ柄マキシヨシ見エテ、古事談ニ文覺坊ガ院中ニ推參セシ時ニサシタルハ、管（ツカ）ニ馬尾ヲ組ミテ卷キタル一尺餘ノ刀トコソシルシタレ、源平盛衰記ニコレラ鐺ノ上ニサヽネド、柄卷キシ也、忠度朝臣ノ最後ニサヽレシハ、赤木ノ柄ニ、白銀ノ筒金卷キシ刀ニテ、九郎義經ノ鷲尾ニ賜ヒシモ、花櫚（クハリ）木（ホク）ノ管（ツカ）ニ筒金入レタル刀トゾ見エタル、共ニ源平盛衰記ニコレラ戰場ナレド、柄マキシ物ニハアラズ、又今ノ刀ヲモテ打刀トイヘル人アリ、モツトモアヤマレル事ニヤ、上總五郎兵衞尉ガ打刀ノタケ、又三議一統ニ見エシ所ナド併セ見ルベシ、但シ今代ニ刀トナヅクルモノモ、其制二ツアル也、知以左加太奈トイフ物ハ、古ノ鞘卷ニテ、ヨノツネニ腰刀ニサシソフル加太奈トイフ物ハ、古ノ大刀ノ身ヲ、鞘卷ノヤウニカザレル物也、此刀トイフモノ、出來シヨリ、鞘卷ノ刀ヲ知以左加太奈トナヅケイフ事、タトヘバ大刀ノ長キガ出來タレバ、ソレヲ大々刀トイヒテ、昔ノ大刀ヲバ小大刀トイフガ如シ、サレバ古ニ小刀トカキテ加太奈トイヒシモノ、中比ハ鞘卷トイヒシヲ、今ハ又小刀トカキテ知以左加太奈トイフ事、其文字ハ昔ニカハラネド、ナヅケイフ事ノカハレル也、今ノ刀ノ出來シ始サダカナラズ、大雙紙ノ中ニ、ヨノツネニハ白大刀ハキテ、從者シテ黑大刀持タセシヨシ見エタレバ、其比マデハ今ノ刀トイフ物ハアラザルナリ、凡刀ニ其工ノ名ヲ銘ズルニ、大刀

銘、刀銘ナドイフ事アリ、大刀銘ノ物、多クハ古ノ工ノ造レルナリ、刀銘ナルハ多クハ近代ノ工ノ造レル物ニテアルナリ、其工ノ世ヲ論ジテ、刀トイフモノ、出來シ始ヲ推シ知ルベシナドイフ人アリ、ソノ、チ又陣刀トイフモノ出來タリ、其飾、大ヤウハ大刀ニ似タレド、帶トリモナク、鞘モマカデ、鎧ノ上ニ腰當シテハクベキ物也、又古ノ打刀腰刀ナドヲ異樣ニ飾リナシテサシソフルヲ、陣脇差ナド、モイフ也、コレラコトニ近代ニ出來シモノトゾイフナル、

脇差トイフ物モ、マタ二ツアリケリ、貞治六年八月十八日、最勝講行ハレシ時ニ、南都北嶺ノ大衆等闘諍ニ及ビシ事ヲ、太平記ニシルシタルニ、南都ノ衆徒ハ、面々ニ脇差ノ大刀ナド用意セシヨシ見エタリ、其後山名陸奥守氏清ガ叛キシ時、御所ハ御腹巻ノ上ニ、篠作トイフ御大刀ニ、二ツ銘トイフ御大刀二振ソヘテ佩キ給ヒ、薬研徹(ヤゲンドホシ)トイフ御脇差ヲサシ給ヒシヨシ明徳記ニハシルセリ、薬研徹トイフ刀ハ、其長サ八寸三分ニテアルナレバ、其比ニ脇差トイヒシモノハ、古ニ聞エシ腰刀ニテ、源齊頼ノ腰刀ハ九寸許ト見エテ、巴ガ腰刀ハ七寸五分ノヨシ見エタレバ、藥研徹ノタケヲモテ、ソノ腰刀タル事ヲバ知リヌ、太平記ニ見エシ所トハ同ジカラズ、太平記ニハ、脇差ノ太刀トアルガ故也、腰刀トイフ物ハ、其タケ最モ短クシテ、モシクハ敵トクマム時ニ、鎧ノ透間サシ透スニ便リアレバ、世ニ鎧ドオシトモイヒ、馬手ノ脇ニモサセバ、馬手差トモ又脇指トモ脇刀トモイヒ、懷ニモスベケレバ、懷刀ナドモイフメリ、今ハ又コレヲ小脇差ナドイフナリ、カクナヅケイフ事ハ、近代ヨリ又打刀ノ身ヲ、腰刀脇差ナドイフ物ノ如クニ飾リナシテ、サシケルホドニ、ソレヲ脇差トイヒテ、昔ノ脇差ヲバ小脇差トイフ事、カノ大々刀、小大刀、刀、小刀ナドイフ事ノゴトシ、其後又ツネノ脇差ヨリ猶寸ノ、ビタル物ヲコシラヘテ、大脇差ト名ヅケタレバ、ツネノ脇差ヲバ、又中脇差トモナヅケシ也、カノ小脇差トイフ物ノ柄ニ鮫皮カケテ、絲ニテマカヌヲバ、ハナシ目貫ナドイヒ、スコシキナル鍔ウチタルヲバ、ハミ出シトイヒテ、鍔ウタヌヲバ合口ナドモイフ、スベテ今ハカク種々ノ物ドモ多クナリケリ、

倭名鈔ニ、欛ハ太知乃豆加、劔柄也、拔スルニ、古ノ物ニ管ノ字ヲモ用ヒシナリ、鞘ハ佐夜、刀室也、鮫皮、佐女乃加波、刀欛ノ裝フモノ也、鐔ハ都美波、劔鼻也、今ハ鐔ノ字ヲ用ヒテ、都波トヨム、鐔ノ字ニハ劔鼻ノ義ナシ、イカニアヤマリ來レルニヤ、鞸韄トハ、於比度利ナド注シタリ、倭名鈔ニハ、韄ノ字注ヲ闕キタリ、拔スルニ、說文ニ佩レ刀絲ノヨシ注セリ、又延喜式ニ、柄頭、仆鐶、勾金、勾皮、押鏡形、乳形、鮒形、阿志須恵組ナド見エシ物、今ハサダカナラヌモアルニヤ、鉸具トシルサレシ物ハ、今俗ニ金具ナドイヘル物ナルベシ、コレ

ラノ外、俗ニイフナル毛拔形目貫、ソラ目貫、露ノ緒、玉ブリ〳〵、幷ニカブトガネ、大セッパ、小ゼッパ、覆輪、シバ引、モ、ヨセ、イシヅキ、セメ、足、足間カハサキ、カハノモン、ナドイヘル類ノ飾、イニシヘニハイカニ名ヅケイヒケム、其文字モ又詳ナラズ、能クシル人ニ尋ヌベキ事也、

周代ノ禮ニ、男子ノ常ニ佩ブル物アリケリ、イハユル紛、帨、刀、礪、觿、燧、玦、捍、管、遰、ナドノ類コレ也、（内則）我國ノ習俗ニハ、此等ノ物、大ヤウハ腰刀ニツケテ佩ブル事ニゾアリケル、マヅ刀ニ小刀サス事ハ、神代ヨリノ俗ナリ、其事ヲバ前ニシルシヌ、次ニ髪掻（カウガイ）トイフモノハ、（世ニハ笄ノ字ヲ用ユルニヤ、）カノ大小ノ觿（クジリ）ナドイヒケル物ノ類ニシテ、此物刀ニサス事モ、又フルキ俗ニテアル也、大納言行成卿イマダ殿上人ニテオハシケル時、實方中將ニ冠ウチ落サレテ、イトサハガズシテ冠トリテカウフリテ、マモリ刀ヨリカウガイヌキイデ、鬢ツクロヒシトイフ事、寢覺記ニハ見エタリ、武人ハ特ニ尋常ニ身ヲハナスマジキ故實アル事ナルベシ、又次ニ火打袋ツクル事ハ、昔日本武尊東夷ヲ平ゲ給ヒシ始、御姨倭姫命、天叢雲劍マイラセラレシニ、其劍ニ錦ノ袋ヲゾツケラレケル、尊相摸國ニ至リ給フホドニ、其國ノ夷等、野ニ火放チテ、燒ウシナヒマイラセント、謀リシニ及ビテ、叢雲劍自ラ拔出デ、モエタル草ヲ薙ギハラフ、尊彼錦ノ袋ヲヒラキ見給フニ、其ノ中ニ燧ヲイレヲカレタリケレバ、ヤガテ石ノ稜ヲトリテ火ヲ打チ出シ給ヒテ、コナタヨリモマタ火ヲ放チ給ヒシカバ、風忽ニ起リテ、猛火夷ノ方ニ吹キオホヒテ、コト〴〵クニヤケホロビヌ、コレヨリシテ劍ヲバ草薙劍ト名ヅケラレ、其野ヲ燒（ヤイ）ツメノ野トハイヒケル、（古事記ニハ燒遺ニ作リ、日本書紀ニハ燒津ニ作レリ、）此燧ト申スハ、日神ノミヅカラ御像ヲウツサセ給ヒケルニ、初鑄損ゼラレシ鏡ハ、紀伊國日前宮ニオハシマス、第二度ノタビニ鑄出ダサレシ鏡ヲ取リアゲテ見ソナハシ給フ時、取リハヅシテ打チ落サセ給ヒテ、三ツニワレタリケルヲ、火打トナサレテ、錦ノ袋ニイレテ、彼劍ニツケラレシニゾアリケル、今ノ世マデ人ノ腰刀ニ錦ノ赤皮ヲサゲテ、燧袋トイフ事ハ、此故也ケリト源平盛衰記ニハ見エタリ、寛正ノ比ノ記ニ、足利殿ノ御腰物ニモ、此物ツケラレシ事見エケリ、（親元日記）其比モ四十ヨリ後ノ人ハツクベシ、ソレモハレノ時ニハツ

クベカラズ、宿老入道ナドノ人ハクルシカラズトイヒタル人モアリキ、（大雙紙ニ）織田殿ノ比マデモ猶此物ノ事見エケレド、（安土日記）今ハカヽル物ツクル事ハ見エズ、（近代ニ及テ巾着ナドイフ物帯ニツクル事、火打袋ノ遺俗ナルニヤ、）ミジカキ刀、袋ニイレタルニ、又護身符ナド袋ニイレテ、其刀ニツケテ、幼キ人ノ身ヲハナサデ、護刀ト云フナルモノハ、彼神劍ニ袋ツケラレシ事ニ倣タルヤウニモ侍リ、古ニ聞エシ護刀トイフ物ノ式ハ、イカニヤアリケム、（マモリ刀トイフ物、東鑑愚管抄寢覺記等ニ見ユ、）江談抄ニ見エシ寶劍（タイトケイ）ノ鞘ニ卷キ付ケラレシ物、又源義朝ノ守刀ニ、大刀契ノ唐櫃ノ小鈎（コカギ）ツケシナドイフ事ハ、（愚管抄ニ）ヨノツネノ例ニハアラズ、

目貫トイフ物ハ、目貫穴ヲ貫キテ、其柄ノヌケザラン料ニテアル也、（我國ノ習俗ニテ、オヨソハ孔竅ヲモテ目トイフナリ、蟇目、猪目ナドイフ類コレナリ、）昔ハ麻布多岐トモイヒケリ、古事談ニ肥前守景家トイフモノ、常ニ鳥括ノ水干、無文袴、紅衣着テ、赤ヅカノ刀ノ、麻布多岐ニ貝摺リタル差シテ、家中ニハ居タリケリト見エシハ、此物ニテアル也、又前右兵衛佐殿山木判官ヲウタレシ時、夜討ニハ大刀ヨリ柄ノ長キ物ヨカンヌトテ、加藤次景廉ニ長刀ヲ給フ、コレハ故左馬頭殿ノ身ヲハナサデモタレタル物ニテ、銀ノ小蛭卷シテ、目貫ニ寶蝶ヲスカシタル也トイナレバ、（源平盛衰記ニ）昔ヨリ此物ニハ物ノ形ヲ作リケル也、今ハ目釘トイフ物ヲモテ、コレニカフルホドニ、此物不用ノ物ニナリタレバ、目貫穴ヲモ又目釘穴トイヒカヘタリ、筒井淨妙々春ガ敵ノ冑ヲ打チ破リテ、大刀モコラエズ、目貫穴ノモトヨリ折レニケリトコソ、源平盛衰記ニモ見エタレ、柄頭（ツカガシラ）トイフ事ハ、延喜式ニ見エシカバ、フルキ代ヨリノ名也、ムカシ柄口トイヒシヲ、（三議一統）今ハ布知トイフ、鍔モ粢鍔トイフ物ハ、フルキ歌ニモヨミタリ、練鍔（ネリツバ）（保元物語盛衰記等）粢鍔（庭訓往來）ナドイフ物、イカニアリケン、栗形トイフ事モフルキ名也、（盛衰記ニ）折金トイフ物ヲバ、負金トイフベシ、刀ノ鞘ナガラヌケタラムニハ、ウシロザマニ負フテ、我等ニ此物ヲ懸ケテヌクベキ料也ナドイフ人アレド、普廣院殿富士御覽ノ時ノ御腰物ノ飾ヲシルセルニ、柄頭、コジリ栗形、折金イヅレモ獅子ヲスヘラレシヨシ見エタリ、（大諸禮ニ）サレバ古ニハ折金トコソイヒタレ、今ハ逆角ナドモイフニヤ、鞘ノ梢ヲバ近代ヨリ古之里トイヒケリ、昔ノ物ニハ鞘尻トゾシルセリ、（盛衰記ニ）波々幾ヲモ昔ハ脛巾金トイヒキ、（コレモ盛衰記ニ）金トイフ字ソヘテ

イフベキ事ニヤ、切羽トイフ字、フルキ物ニ見エタレド、節用集其義詳ナラズ、鵐目(シトヽメ)トイフハ、其形ノ彼鳥ノ眼ニ似タケレバ、カクハナヅケシナルベシ、

刀ノ形制モ亦多シ、鎬作、菖蒲作、鵜頸、冠落、切刃、平作ナド云フアリ、菖蒲作ヲバ又鯰尾トモ云フニヤ、又樋カキ、彫物、キリ物ナドイフアル也、サレド皆昔ヨリ云ヒ習ハセル語ノミニテ、シカルベキ文字モアラズ、異朝ノ書ニ、備前刀ニ血漕アルヲ巧トスト見エタルハ、樋カキシ物ニテ、或ハ龍ヲ鏨リ、或ハ劔ヲ鏨リ、八幡大菩薩、春日大明神、天照大神宮ノ字ヲ鏨ルナドモ見エシハ、武備志ニホリ物、キリ物ナド云フ物ニテ侍リ、昔ハ峯トイヒシ所ヲ棟トイフ也、異朝ニハ脊ノ字ヲモ背ノ字ヲモ用ヒシ、山脊ヲ峯トイヒ、屋脊ヲ棟トイヘバ、各其義ハ同ジカルベシ、コレニモ丸棟、三ツ棟、菴棟ナドイフモノアルニヤ、鋒ノ字ヲ用ヒテ、幾都左伎トヨミ、中心トカキテ奈可古トヨム、異朝ニハ莖ノ字ヲモ周禮鐔ノ字ヲモ通雅ニ、鐔者劔刀之本、入レ把者也ト注セリ、用ヒ、又柄ノ字ヲ用ヒシ事モアリキ、其形又其ヤスリメナドノ式ニヨリテ、各其名アルナルベシ、古ノ大刀ノ中心ニハ、近世ノ物ト異ナル多シ、其中ニ中心ニ細ク長キ孔ヲ鏨開キシアリ、コレハ毛拔形ノ大刀ノ身ニテアル也、志乃岐トイフモノハ、昔ヨリ鎬ノ字ヲ用ヒ來リタレド、太平記ニモ貝鎬ナド記セリ、コノ字ハ異國ノ地ノ名ニテ、志乃伎トイフベキ義ハ見エズ、オモフニ金ニ高キニ从ヒシ字ナリケレバ、我國ニシテ此字ヲ借リテ、志乃伎トハヨミシナルベシ、異朝ノ書ニハ、峯ノカタヲ脊トイヒ、刃ノカタヲ脾トイフ事ハ見エタレド、脊ト脾ノサカヒナル、志乃伎ト云フ所ノ事ヲシルセル文字ハ見エザルニヤ、按ズルニ、刀稜、劔稜ナドイフ事アレバ、志乃伎トイフニハ刀稜ノ字ヲヤ借リ用ヒナマシ、但シ稜ノ字ハモト四方木也ト注シタル也、タトヘバ方ニケヅレル木ノ、四ノ角ヲ稜トハイフ、コノ義ヲカリテ、五稜八稜ナドイフ事モアリ、カノ志乃伎トイフ所ハ、脊ト脾トノサカヒニシテ、スコシク稜アル所ナレバ、此字カリモチヒンコトアシカラジ、横手際トイフ所ヲバ、異朝ニハ肩トイフ、凡ソ刀劔ノ鍔刃ヲ、我國ニテ也以波トイフ事ハ、其火ノタメニヤカレテ、刃ノ利キ事、人ノ歯ノヨク物ヲ斷ツコトアルニ似タレバ、カクハ名ヅケシ也、俗ニハ刃ノ字ヲ波トヨム、刃、歯ソノ訓ズル所同ジ、世ニハ又刀劔ノ文理ヲモ、也幾トイヒテ、ソノ文字ニモ亦刃ノ字ヲ用ユルナリ、心得ヌ事ニヤ、昔呉國ノ干將鏌耶トイフ夫婦ノモノ、作レル劔、陽ヲバ干將トイヒテ龜文ヲナシ、陰ヲバ莫耶トイヒテ縵理アリト呉越春秋イフ事ヲ、龜文トハスグヤキ、縵理トハミダレヤキトイフモノ也トイヒモ傳フレバ、也幾

トイフニハ、文理二ツノ字ヲ用ヒンゾヨカルベキ、但シ龜文ヲスグヤキ、縵理ヲミダレヤキトイヒ傳ヘシ事ハ、イカヾアルベキ、陽ニハ文章アリ、陰ハ卽チコレヲ平縵ニストイフ注コソハアレ、シカラバ陽ノ干將ニハ文章アリ、陰ノ莫耶ハ平カニ文ナクヤキタル也、縵ノ字ハ韻書ニモ無文也ト注シタリ、文ナキ理ナランニハ、縵理ハスグヤキニテ、龜文ハミダレヤキニゾアルベキ、龜甲ノオノヅカラ文アルヲモ、又ハヤカレテ坼(サケ)タルヲモ、共ニ龜文トイフナレバ、龜文トイハンニハ、必ズ文章ハアリヌベシ、淮南子ニ見エシ魚腸トイフハ、正シクミダレヤキトゾ見エタル、高誘ガ注ニ、文繞リ屈リテ、魚ノ腸ノ如シト侍リ、歐陽子ガ寶劍ニ七星ノ文アリ、又ソノ紋星ノ行(ツラ)ナルゴトシナドイフハ、玉ヤキトイフ物ニテ、彩ノ虹ノ蔚スルガゴトクナルトイヒシハ、仁保比トイフ物、光ノ流ル、星ニ似タリナドイヒシハ、仁衣トイフ物ニヤアラン、宋ノ沈存中ガ魚腸トイフハ、魚ヲ燔テ其ノ腸ヲミルガゴトシ、今ハ松文トイフモノ也トイヒシハ、地肌トイフモノニ似タルヤウニ聞エ侍リ、ソレヲモ文理トハイフベケレド、アザヤカニ文アルモノハ、也幾トイフ物ニシクハナケレバ、古ニ龜文、縵理、龍藻、魚腸、星文ナドイヒシハ、ミナ也幾トイフモノ、事ニゾアルベキ、

昔ハ刀ナドハ、私ノ家ニモアリテ、ツネニ身ニ隨フベキ物ナレド、孝德天皇ノ大化元年ニ、オホヤケニメサレシヨリ後ハ、京師宮衞ノ士、邊要軍團ノ兵ニアラザレバ、ミダリニ帶ブル事ヲ得ズ、持統天皇ノ世ヲシロシメサレシ七年ニ至リテゾ、親王ヨリ進位已上ハ、大刀一口ヲアラカジメ備フル事ヲユルサセ給ヒタリケリ、令ニモ兵士ハ大刀一口、刀子一枚、自ラ備ヘヨト見エ、式ニハ(延喜式)刀子ノ刃長サ五寸以上ハタヤスク帶ブル事ヲ得ズ、タヾ衞府ノ者ハコレヲ許ストモ見エタリ、天慶承平ノ間、甲斐信濃ノ國司等ガ望ミ請フニヨリテ、帶劍ヲユルサル、コレ平將門ガ叛キマイラセテ、彼國々モサハガシカリシ故トコソ見エタレ、其後天曆ノ比、駿河國ハ三關ヲ帶ブレバトテ、彼天慶承平ノ例ニマカセテ、望ミ請ヒシニヨリテ、國司郡司等帶劍ヲユルサレシナドイフ事アレバ、(朝野群載)此ホド迄ハ、宮衞ノ外、邊要軍團ノ兵ニアラザレバ、尺寸ノ刃ヲモタヤスクハ帶ブル事カナハ

ザリケラシ、コレラノ事ヲオモフニ、古ノ令ノ嚴ナリシモ、亦世ノ治レルサマモ、推シゾシラル、、其後イツトナク其禁ユルミテ、南都北嶺ノ僧徒等モ、兵仗ヲ帶スル事ニナリケリ、マシテ鎌倉殿天下兵馬ノ權ヲ專ラニシ給ヒ、國ニハ守護、庄園ニハ地頭ヲ置カレシヨリ後ハ、弓箭兵仗ヲ帶スルモノ五畿七道ノ中ニ充滿ヌ、今ノ世ニ至リテハ、サラヌ農工商賈ノ類マデ、刀子帶ビザルモノハアラズ、武人ニアラズシテ、ミダリニ戎器ヲ帶ブベキ事ハ、本朝ニモ異朝ニモ、先王ノ法ニアラザレバ、ヨカラヌ事ニコソアルベケレ、又古ノ令ニ、凡ソ撃レ刀コトハ、衞士暇アラム日ニ敎ヘ習フベキヨシ見エヌレバ、此伎ヲ習フベキ法ハ、古ヨリゾアリケル、崇神天皇ノ御子豐城命ノ御夢ニ、八タビ刀ウチ給フヨシ見給ヒシ事ゾ、古事記ニ見エタルハ、特ニフルキ代ノ事也ケリ、サレド此伎ハ一人ニ敵スベキ事ナレバ、ヨキ人ハミヅカラ得ル所アレド、其藝ニ名アラン事ヲ耻ケルニヤ、世ニ顯レテ聞エシモ多カラズ、筑紫ニ聞ユル肥後國ノ住人オイテノ次郎大夫敎高、九國一番ノモノ切リ也、八郎御曹司爲朝、ソレニ打物遣フ事習ヒテ、師ニハ遙カニ超過シテオハセシ、（此事保元物語ノ異本ニ出ヅ、）又九郎御曹司義經、鬼一法眼ト云モノニ兵法傳ヘラレシナドイヒ傳フレド、ソレモ爲朝ノ事ハ、弓矢ノ名コソ高ケレ、打物ツカハレシ事ハ、シレル人モマレニテ、義經ノ兵法傳ヘラレシナドイフ事ハ、今ノ世ノヤウニ、刀ウツ事ヲイヒシニハアラズ、彼御曹司ノ手ヅカラウツサレシ、黃石公素書ヲ見シ事ノ侍リキ、カカル兵家ノ法ナド傳ヘラレシトイフ事ニコソアリツレ、近キ比此伎ニ名ヲ得シ誰カレ、異朝ノムカシ劔客ナド聞エシモノ、如クナル人ハ、多クゾアリケル、大明ノ世宗皇帝ノ嘉靖四十年、少保戚繼光トイヒシ將軍、我國ノ人ニ傳ヘ得ラレシ、影ノ流ノ目錄ハ、茅元儀ガ武備志ノ中ニ見エタリ、カノ嘉靖四十年ハ、我朝ニシテハ正親町院御在位ノ時、永祿ノ四年ニヤアタリヌベキ、誰ヤノ人ノ彼國ニユキテ、此事傳ヘタリケム、彼國ニモ我國ノ刀撃ツ法、ヨシト思ヘバコソ、カクハ敎ヘ習ヒツラメ、コレノミニモアラズ、我朝ノ刀制ハ、世ニスグレタルモノ也トテ、或ハ日本刀トモイヒ、或ハ倭刀トモ名ヅケテ、古ヨリ歌ニモ作リ、書ニモシルセシモノ世々ニ絕エズ、

宋ノ歐陽永叔日本刀ノ歌作レル後、元明ノ人ノ賦シタル事ドモ多カリ、我國ノハジメ、天目一箇ノ神作金トナサレタリシヨリ後、人皇第十代ノ朝廷ノ御時、崇神其神ノ初子シテ、天叢雲劍ウツサレテ、後ノ寶劍ヲバ作ラレタリケリ、神皇正統記ニ此後ノ寶劍ツクレル工ハ、大和國宇多郡ノ人天國トイヒシナド、世ニハ傳ヘタレド、平家重代ノ寶小烏ト云フ大刀ニハ、大寶三年天國トイフ銘アルメリ、此大刀今モ伊勢ノ家ニ傳ヘラル、歟、大寶トイフハ、第四十二代ノ朝廷ノ、文武年號ニテアルナレバ、天國トイヒシハ、後ノ寶劍作リシ人ニハアラジ、但シ後ノ寶劍ヲバ大和國宇多郡ニテ作ラレシヨシ見エタレバ、彼天國トイヒシモ、天目一箇神ノスヘニテ、後ノ寶劍作リシ人ノ子孫ニコソアルベケレ、カク我國ニシテハ、コレラノ工モ多クハ天地ノ神ノスヘニテ、世ヲ累ネテ其業ヲ墜サヾリケレバ、ヲノヅカラソレガ中ニハ、スグレテ妙ナル工モスクナカラズ、世ノ寶トナレル大刀小刀ノ類、古今ニ其名聞エシモ多カリ、名劍、名刀ナドイフモノ、名ドモシルセシモノハ世ニ多ケレバ、併セ見ルベシ、コト〳〵クシルサムニハ事煩シケレバコヽニ注サズ、萬國ノ中ニ、我國ノ制ニシクモノナシト、他國ニテイヒケン事、理ニモアリケリ、彼四十二代ノ朝廷ノ御代ニ撰バレシ令ニハ、凡軍器ヲ營ミ造ラムニ、皆スベテ樣ニヨリテ、年月及ビ工匠ノ姓名ヲ鐫題サシメヨト見エタリ、サレバ天國ヨリ後ノ代ノ工ノ造レル大刀小刀ニハ、年月姓名ヲ鐫リシ事、令ニ見エシガゴトクナレバ、其工ノ巧ナルモ、拙キモ、其代ノ遠キモ近キモ、ツマビラカナレド、天國ヨリサキノ代ノ物ハサダカナラズ、カクテ八十二代ノミカド後鳥羽院ノ御時ニ至リテ、鎌倉ノ故將軍ノ曹ハ絶エヌレド、平義時ガ陪臣ノ身ナガラ、猶天下ノ政ヲ出ダシケルコトヲ憤ラセ給ヒ、御讓位ノ後ニハ、ヒタスラカレヲ誅シ給フベキ叡慮オハシマシテ、モノヽフノ道ニ御心ヲ寄セラレタリケルホドニ、カネヨキ刀ヲモ求メサセ給ハムトノ御事ニヤアリケム、則宗備前貞次備中延房備前國安粟田口恒次備中國友粟田口宗吉備前次家備中助宗備前行國備前助成備前助延ナドイフ、當時ニ名高キ鍛冶ノ工十二人ヲ撰バレテ、十二月ニワカチテ、院内ニ番上セシメ、多クノ刀ヲ作ラセラレ、上皇又御手ヅカラニ作ラセ給フ物モアリシナドイヒ傳ヘ侍リ、此事サモオハシケルニヤ、永久ノ記ニ見エシモ、東國ノ軍勢馳セ上ルト聞エテ、大炊ノ渡ヘムケラレシ、筑後六郎左衞門尉ガ佩キタル大刀ハ、御所燒

トイフ、聞ユル大刀ニゾアリケル、此御所焼トイフハ、次家ニ作ラセテ、君御手ヅカラ焼カセ給ヒケリトゾシルセル、此君ノ國々ノ工召シ集メラレテ、多クノ刀作ラセ給ヒシ事、異朝ニモ傳ヘ聞エシニコソ、其事シルセシ物モアルナレ、（武備志ニ）サレバ又大刀小刀ヲ相スル事モ、昔ヨリ聞エヌレド、ソノカミハタヾソノ吉凶禍福ナドヲ相スル事ニテ、イヅレノ代、イヅレノ國、何某ガ作レル、眞ナル僞レルナドイフ事ヲ鑒ミ定ムル事ニハアラズ、中比相摸國ノ住人五郎正宗入道ト聞エシハ、古今ニ雙ナキ工ニテアリケリ、此者花園院御在位ノ比ノ人也トゾイヒ傳フル、正宗國國ヲ巡リアリキテ、其工ドモノ家々ニ傳フル所ヲウケテ、始メテ筆ニシルシヌ、正宗ニ男子ナケレバ、近江國高木トイフ所ノ人貞宗トイフモノ養ヒテ家ツガス、貞宗ガ弟子九郎三郎秋廣トイフハ、後光嚴院ノ御時文和ノ比ノ人也ケリ、ソレガ時ニ至テ、二十五箇國ノ押形トイフ物作リシヨリ、始テ代ヲモ、國ヲモ、工ヲモ眞ナル、僞レルモシルル事、掌ヲ指スヨリモ猶明ラカニナリテケリ、秋廣此事ヲ齋藤彈正忠ニ傳フ、字都宮三河入道トイフモノ、齋藤ニ受ケ傳ヘテ、又國々ヲ巡リアリキテ、ソノ傳ヘシ所ヲタヾシアキラメテケリ、此三河入道ガ時、初メテ大刀小刀ノ價ヲバ定メタル也、コレハ其時ノ公方東山殿ノ仰ニヨレリトゾイフナル、木下美作入道トイフモノ、三河入道ニ傳リテ、齋藤左京進ニ傳ヘ、齋藤又三好下野守ニ傳ヘシヲ、細川二位法印玄旨ウケ傳ヘテ、建部内匠頭ニハ授ケラレケリ、又足利殿ノ代ニ、妙本阿彌陀佛トイフモノ、世々刀磨ク事ヲ業トスルアリケリ、コレガ先祖ハモト相摸國ノ住人松田ガ一族ニテアリケルガ、足利殿ノ都ニ移リ給ヒシ後、是モ都ニ移ル、妙本阿彌ガ時ニ至リテ、ヲノガ業ノ巧ナルノミニモアラズ、刀相スル事モ堪能ノモノニテ、其名ヲ世ニ施コシテ、其家ヲ起シタリケレバ、嫡流ノ子孫、ソレガ名ヲ家ニナヅケテ、本阿彌トハナノリケリ、妙本阿彌ガ四代ノ孫清信トイヒシガ、ヨク父祖ノ業ヲ起シテ、入道ノ後、本光トナヅキシヨリ、子孫又光ノ字ヲモテ名トス、凡ハ古ノ刀ノヨシアシ、眞僞ヲモ、價ノ貴カラム、賤カラムヲモ、鑒ミ定ムル事、今ハ此流ノミゾ世ノ鏡トハナリケル、タヾシソノ家ニハ、妙本阿彌ハ龜山院御在位ノ比ノ人ナリ、

又本光ハ普廣院殿ノ時ノ人也ナドモ申スニヤ、サラバ妙本阿彌ハ、五郎入道正宗ヨリハナヲサキノ代ノ人ニテアル也、ソレガ子孫家ヲウケ傳フル事、此比迄ハ十一代也トモイフナレバ、凡ハ四百三十餘年ガ程ニ、ワヅカ十一代ヲ歷タラム事ハ、其家ノ傳フル所ナレド、イブカシクコソ覺ユレ、東山殿ノ代ニ、刀ノ價定メサセラレシ事ハ、其比六十餘州ガウチ、皆々大名等ニサキアタヘラレシ上ハ、タトヘ奉公ノ勞アラヌ人ニモ、所領ニ給ハラン闕所ナドモ多カラズ、此事チトカク按ジ煩ヒ給ヒテ、彼ノ三河入道ニ仰セテ、刀ノ上中下アマタノ品ヲワカチテ、其品ニヨリテ、又ソノ價ヲ定メシメ、彼奉公ノ勞ノ深淺ニシタガヒテ、コレヲ給ハリシヨリ始マレル也、凡一貫トイフ事ハ、五百錢ヲモテ一貫トスル錢法トゾイフナル、コレ衰フル世ニ一時ノ權宜ヲ行ハレシニ事起リシカド、遂ニ永キ世ノ例トナリケリ、異國ニモ百金ノ劍、萬金ノ刀ナドイフ事、先王ノ御時ニハ聞エザリキ、

本朝軍器考卷八終

本朝軍器考卷九

筑後守從五位下　源　君美輯

甲冑類

素戔烏尊父母ノ神ニ逐レテ、高天原ニ昇リ給フ時、溟渤鼓ニ盪ヒ、山岳鳴リ响シカバ、日神スナハチ丈夫ノ武備ヲ設ケ給ヒシト聞エシハ、我國ニシテ軍容ヲ壯ニスル事ノ始ナルベキ、日本書紀ニハ、神武天皇ノ御代ノ始ニ、兵甲介冑ノ字已ニ見エタレド、古事記舊事紀等ニハソノ事見エズ、又日本書紀ニモ或ハツハモノトヨミ、兵甲ノ字ヲ或ハイクサノ人ナドヨミタレバ、介冑ノ士ヲタヾソノ言ヲ文ニスルノミニテ、マコトハ戎衣ヲサスニハアラズ、第十代ノ朝廷崇神天下シロシメス十年、武埴安彥ガ叛キマイラセテ、山背ヨリ都ヲ襲ハントセシニ、大彥命彥國葺命等那羅山ニ軍シ、輪韓河ニ進テ、河ニ挾テ各相挑ム、安彥忽ニ彥國葺ノタメニ射殺サレシカバ、彼兵脅退ルヲ追ヒテ、河北ニシテ首ヲ斬ルコト半ニスグ、ウチモラサレシ者共、皆甲ヲ脫ギテコ、ヲノガル、其甲脫ギシ處ヲナ

ヅケテ伽和羅トイヒシヨシ、日本書紀ニ見エタレバ、其時ニハ此物スデニアリケル也、但シ其代ニハ甲ヲバ伽和羅トコソイヒケレ、古事記ニモ大山守命、其弟ノ皇子、宇遲能和紀郎子ヲ殺シマイラセントテ、菟道ニムカヒ給ヒシニ、御弟大雀命ノタメニハカラレテ、宇治ノ川中ニ陷リテウセ給ヒシヲ、鈎ヲモテ其沈ミ給ヒシ處ヲサグレバ、其衣ノ中ノ甲ニカヽリテ、シカモ其所ノ名訶和羅島ナレバ、其地ヲナヅケテ訶和羅前トイフヨシハ見エケリ、韻書ニモ甲ハ物ノ鱗甲アリテ、自ラ禦グニ似タリ、甲、介、函、鎧、皆堅重ノ名也ト注セリ、今モ俗ニ龜甲ヲ加米乃伽宇羅ナドイフハ、訶和羅ナドイフ詞ニ相通ヘリ、屋フク瓦ヲ伽和羅トイフモ、鱗ニ似タレバカクハイヒケン、昔ハ革ニテツクリタリケルヲ、神功皇后ノ新羅ウタセ給フ時、武內宿禰ノハカラヒニテ、始メテ鐵ヲモテ造ラレシナド、世ニハイヒ傳フルニヤ、此事國史ニハ見エズ、タヾ國々ニ詔シテ船ヲ集メ、兵甲ヲ練リ給フナドイフ事ハ見エタリ、サレド彼大臣ヲ高良明神トイヒシ事ハ、カヽルイハレモアリケルニヤ、高良又伽和羅ト相通ヒヌ、桓武天皇御時、陸奧ノ夷賊大ニ起リケレバ、延曆九年三月、大宰府ニ仰セテ、鐵冑二千餘枚ヲ造ラレシハ、鐵ニテ造レル事ノ正シク見エシ所ナルベシ、是ヨリサキ廢帝ノ御時、新羅ヲ征シ給フベキニテ、天平寶字六年正月大宰府ニ仰セテ、綿襖冑六萬餘具、唐國ノ新樣ノ如ク造シメラレ、又綿甲冑一千領ヲ造リテ、鎭國衞府ニ貯ヘラル、此制ノ如キハ、唐ニ所謂綿甲ノ制トゾ見エヌル、又桓武ノ御時、延曆九年閏三月諸國ニ仰セテ、革甲二千領ヲ造ラレキ、其制ハ本朝ノ古制ニヨラレシ如クニゾ見エタル、コレヨリサキ孝德天皇大化元年七月詔アリテ、閑曠ナル所ニ兵庫ヲツクリテ、國郡ノ刀甲弓矢ヲ收メ聚メ、邊ノ國ノ近ク蝦夷ト境ヲ接ヘシ處ニハ、盡クニ其兵ヲ數ヘ集メテ、ナヲ本ノ主ニ假（アヅケ）給フ、天武天皇十二年ノ詔ニハ、馬兵幷ニ當身裝束ノ物、務メテ具ニ儲足セト見エ、持統天皇七年ノ詔ニハ、淨冠ヨリ直冠ニ至ルマデ、人ゴトニ甲一領、大刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、鞍ヲケル馬ヲ預メ備ヘヨト見エタリ、其後ノ令ニハ、軍器戎仗ヲバ、公庫ニオサメラレテ、京師ノ宮衞ニモ、國郡ノ軍團ニモ、又將帥ノ出征スル時モ、官ヨリ出ダシ給ハル事ニテ、損失アランニハ、官ニ申シテ推徵コトニゾアリケル、タヾ兵士ノ自ラ備フベキ物ハ、弓、箭、大刀、刀子、其外ハ私家ニアルコトヲ得ズトコソ見エタレ、シカルニ後代ニ至リテ、私家ニモ此物ヲ自ラ備フル事ヲ得タルハ、何

レノ比ニヤ始マリヌラン、中比ヨリ衞士ノ諸國ヨリ參ル時、兵仗戎具ヲ給リテ、身ニ隨フテコレヲ役ス、交代ノ日ニ及ンデモ、兵仗戎具ヲ收ラレズ、各持チテ歸ル事ヲ得シナドイフ事ノアレバ、カヽル事ヨリ古ノ禁モヤブレシニヤ、弓箭ノ業ニタヅサハラン人ハ、サモコソアラメ、サラヌ山法師寺法師ナドイフモノモ、ミダリニ甲冑兵仗ヲ藏シテ、動スレバコレヲ帶シテ非法ヲ行ヒケム、世ノクダレルサマコソウタテケレ、

古ノ甲冑ノ制、サダカナラズ、式ニ見エシ延喜式朝ニ大儀ヲ行ハルヽ時、近衞ヨリ四府ニ至テ、帶セシ甲冑トイフモ、皆金銀ヲ以テ畫キシ絹ノ甲形、布ノ冑形ナドイフ物ナレバ、其觀ヲ壯ニセシノミニテ、實用ノ物ニハアラズ、ソレヨリ後ニ至リテハ、鎧、腹卷、腹當、筒丸ナドイフ物共聞エテ、ツハモノヽ家々ニ傳ヘシ鎧ノ名ナドモ、世ニ聞エシアリ、小野朝臣右雄ノ家ノ羊革甲、牛革甲、各一領、弘仁中、右雄東夷ヲ征セシ時着シモノ、陸奥ニ有リシヲ、貞觀中其子陸奥權守春枝、對馬守春風ニ分ケ賜ヒシ事、三代實錄ニ見エタリ、藤原秀鄕ノ室丸、平石、源義家朝臣ノ月數、日數、源太ガ產衣、八龍、澤瀉、薄鐵、楯無、膝丸、源太ガ產衣、一本ニハ七龍トシルセリ、平貞盛ノ唐皮、源三位賴政ノ產衣、木曾殿ノ薄鐵、源義貞朝臣ノ薄鐵、足利殿ノ小袖ナド、皆々フルキ物語ドモニ見エシ所也、秀鄕ノ草紙、陸奥後三年ノ鬪ノ事書、保元物語、平治物語、源平盛衰記、太平記、明德記等ニ見エシトコロナリ、秀鄕ノ家ニ傳ヘシ鎧、ハジメ龍宮ヨリトリテ歸リシ所也ナド申ス歟、室丸ハイカニヤナリケン、平石ハ其子孫佐野ノ家ニ傳ヘシヲ、今モイヅルトイフ所ナル觀音ノ御堂ニ納メシアリ、イヅルトイフ所ハ、下野國佐野ノ庄ニアリ、彼堂ハ千手院ノウチニアルナリ、其靈寶ノオヒライシト云フハ、彼鎧也、秀鄕ノ草紙ニハ平石トシルセリ、佐野庄ノ者ノ申シシハ、遮來矢トシルシ侍ルニヤト申シキ、義家朝臣ノ鎧ハ、嫡孫ナレバ、六條判官爲義ノ家ニ八領ナガラ受ケ傳フ、保元ニ爲義子息義朝ト引キワカレテ、新院ノ御方ニ參ラレタリケルニ、產衣、膝丸ニ領ノ鎧ハ、嫡流ニ傳フベキ物也トテ、下野守ノ許ニ遣ハシテ、其身ハ薄鐵ヲ着シ、月數ヲバ四郎左衞門尉賴賢ニキセ、日數、澤瀉、楯無ヲバ殘ル子息等ニ着セラル、八郎爲朝ハ器量人ニスグレテ、ヨノツネノ鎧身ニアハズ、八龍ヲ似セテ黑キ綾ヲフトクタヽミテ威シタリケル、大荒目ノ鎧ノ獅子丸ノ裾金物、白覆輪ナルヲ着ラレケリ、世ニ行ハルヽ保元物語ニ、白キ綾トシルシタレド、諸異本ニハ黑キ綾トシルス、此鎧八龍ヲ似セタランニハ、黑キ綾トシルシタルヲヨシトヤセム、ウスガネトイフ鎧ハ、八幡殿奥ノ戰ニ身ヲハナサズ、着給ヒシ鎧ナルヲ、後三

年ノ戰ニ、伴次郎傔仗資兼ガ常ニ軍ノ先ニタツヲ感ジテ着セラレシニ、金澤ノ柵攻メラレシ時ニ、石弓ノタメニ冑ハクダカレテウセニケリ、鎧ヲバトリ傳ヘテ、爲義ミヅカラ着ラレシ也、下野守義朝此時ノ戰ニハ、八龍ヲ着ラレタリケルガ、平治ノ亂ニハソレヲバ惡源太義平ニユヅリテ、我身ハ楯無ヲ着、澤瀉ヲバ中宮進朝長、源太ガ產衣ヲバ右兵衛佐賴朝ニゾ着セラレケル、義家朝臣ノ鎧八領ノ中、日數ノ事詳ナラズ、月數ハ朽葉色ノ唐綾ニテ威シタリ、源太ガ產衣トイフハ、八幡殿ノ幼名ヲ源太ト申シタリケルニ、二歲ノ時、院ヨリ參ラセヨ、御覽ゼント仰セ下サレシカバ、親父賴義朝臣ワザト鎧ヲ威サセテ、其袖ニ居エテゾ參ラセラレケル、サテコソ源太ガ產衣トハ付ラレタレ、胸板ニ天照大神八幡大菩薩トツケマヒラセ、左右ノ袖ニ藤ノ花ノ咲キカヽリタルサマヲ威セル也、又賴政ノ鎧ニモ產衣トイフ物アリ、義家ノ後ニツタヘラレシ所ハ、源太ガ產衣トイヒシカバ、オノヅカラ異ナル物ニゾアルベキ、膝丸ハ牛千頭ガ膝ノ皮ヲトリテ威シタレバ、牛ノ精ヤ入リケム、常ニ現ジテ主ヲ嫌ヒケリ、サレバ塵ナドヲ拂ハントテモ、精進潔齋シテ取リ出ダシケル由見エタリ、八龍ハ黑絲ニテ威セシ鎧ノヨシ見エタレド、諸說同ジカラヌ事共アリ、保元物語ノ一本ニハ、八龍トハ、龍ヲ八ヅヽ打テ、一ノ板ニ附ル故也ト見エ、平治物語ニモ八龍トテ、胸板ニ龍ヲ八ツ打テツケヌルヨシ見エタリ、又保元ノ一本ニ、八龍トハ義家後三年ノ戰ノ時、八幡大菩薩ノ神、八神守護ノタメ、八大龍王ノ形ヲ金ヲモテ內兜ノ眞向、鎧ノ胸板ヲシツヽ所々ニ附ケケル間、八龍トゾ名付ケタル、八領ノ鎧ノ中ニ殊ニ祕藏ノ重寶也、然ル間嫡々タルニヨリテ、義朝是ヲ相傳シテ着ラレシヨシヽルセリ、又源平盛衰記ニハ、八龍トイフ冑ハ、源氏ノ重寶、銀ニテ龍ヲ前ニ三ツ後ニ三ツ左右ニ一ヅヽ打タレバ、八龍トナヅク、保元ノ軍ニ八郎爲朝ノ着タリシ所也ト見エタリ、或ハ八龍ヲ胸板ニツケシトモ、或ハカブトヨロヒ所々ニツケシトモ、或ハ冑ノ前後左右ニツケシトモイヒ、又龍ヲ金ニテ作レリトモ、銀ニテ作レリトモイヒ、保元ノ軍ニ義朝ノ着ラレシ所也トモ、又八郎爲朝ノ着ラレシ所也トモイフ、ソノシルセル所同ジカラズ、タヾシ保元ニ爲朝ノ着ラレシヨシハ、アヤマレルニヤ、元弘ノ比、長崎惡四郎左衛門尉ガ着タリシ白星ノ五枚冑ニ、八龍ヲ金ニテ打テツケシト見エシハ、彼カブトニ倣ヒシ所ナルベシ、澤瀉ハ澤瀉威ニシタル也、薄鐵ハ火威ノ鎧也キ、源平盛衰記ニ木曾殿ノ最後ノ時、ウスガネトイフ鎧着ラレシ由見エタルハ、爲義ノウセラレシ後、其二男帶刀先生義賢此鎧ヲ傳ヘテ、子息義仲ニユヅラレシニヤ、タヾシ平家物語ニハ、木曾殿ノ最後ニ着ラレシ鎧ノ名ハ見エズ、タヾ唐綾威ノヨシ見エタレバ、保元物語ニ見エシ所ニハ異ナル歟、ハルカニ代隔タリテ後、源義貞朝臣重代鎧ヲモ薄鐵トイフヨシ見エタリ、此鎧ハ赤威ナリシ事、梅松論ニ見エタレバ、彼義家ノ物ヲヤ傳ヘラレケム、楯無ハ黑絲威ノ鎧ニ、獅子ノ丸ノ裾金物打タル也、近キ代マデ甲斐源氏武田ノ家ニ傳ハリシ重代ノ鎧ニ楯無トイフアリ、此源氏ハ八幡殿ノ流ニハアラズ、其舍弟刑部丞義光ノ末ナルニ、イカニシテカハ其家ニ楯無ハ傳ハリタリケン、タヾシ爲義ノ家ニツタヘラレシ物ニハアラネド、其制ヲ同ジクシタレバ、其名ヲモ同ジクセシニヤ、今モ世ニ產衣樣、楯無樣ナドイフ鎧ノ制アレド、古ノ制ニハ同ジカラヌモノニゾアルベキ、又平家重代ノ鎧トイヒシハ、桓武天皇ノ御時、帝ノ御叔父慶圓ト聞エシ上人、祈リ得ラレシ所ニテ、六代ノ朝廷ニ傳ハリテ、大內ノ御寶也シヲ、高望王ノ御孫平將軍貞盛ノ時ニ、下シアヅケラレシヨリ此カタ、小烏トイフ大刀ニソヘテ、其家ノ嫡流ニ傳フル事、凡九代ニシテ、維盛朝臣ニ至ル、維盛都ヲ落チラレシ時、子息六代ガ成人ノ後ニ傳ヘヨトテ、都ニトヾメ置カレシト見エシガ、其後ハイカニヤナリケン、コ

レハ黄櫨ノ匂ヒニ、白ク黄ナルフタツ蝶ヲ裙金物ニウツ、絲威ニハアラズ、皮威也ケリ、裏ヲ返シテ見ルニ、札ノアヒ〳〵ニ虎ノ毛アルニゾ、虎ノ皮ニテ威シタリトハシラレタル、サレバ其名ヲ唐皮トハツケラレシヨシ、源平盛衰記ニハシルセリ、古キ鎧ノ猶今モ世ニ遺リ傳ハレル物ドモ、法隆寺ニ聖德太子ノ幼キ時ニ翫ビ給ヒシ物也トテ、小キナル甲冑ノ形アリ、是ハ眞ノ物ナラネド、其代ノ制モ後世ノ物ニ異ナラザリシトハ知リヌ、藤森ノ社ニ崇神天皇ノ御鎧トテ、紫絲威ノ鎧ノ弦走ノ破レシアリ、鎧ハ古キ物ナルコト疑フベカラズ、冑、頰當、小手、臑當等ノ類ハ、其代ノ物トモ見エズ、石清水ノ社ニ義家朝臣納メラレシト云フ紺絲威ノ鎧、同ジ毛大星ノ冑ニ、二引輛ノ旗副ヘテ、唐櫃一合ニイレタルアリ、其唐櫃ノ制ニ至ルマデ、誠ニ古代ノ物也、鞍馬寺ニ義經ノ物也ト云フ物、障子板、弦走、脇楯等ハ失セタルガ、昔ノ威毛ハイカニヤアリケン、紅絲威ナルアリ、コレハ此比或人ノ毛引ナヲシテ納メシト云フ也、其冑特ニ奇代ノ物也、大星ノ五枚冑ニ、鍬形ノ長サ一尺六寸三分餘ナルニ、テヘンニモ、左右ノ吹返ニモ、黄金物ノ獅子ヲ打テツク、其冑ノ重キコト大十斤、ヨノツネノ人ノ堪フベキ物ニモアラズ、八郎御曹司爲朝ノ八龍ヲ似セテ、大荒目ノ鎧ノ獅子丸ノ裙金物白覆輪ナルヲ着ラレシト見エタレバ、此冑ハ彼ノ御曹司ノ物也シヲ、九郎御曹司ノ物也ト傳ヘ謬レルモ知ルベカラズ、猶モ此等ノ物ヤアルト尋ネシホドニ、鞍馬法師原ガ預リノ物トテ、フルキ星冑ノ鉢三ツ、龍ノ金物八ツ、吹返目庇ナドノ破レ殘リタル金物ドモ八ツヲ出ダセリ、其八ツノ龍ハ、義家朝臣ヨリ代代相傳ヘテ、惡源太義平ニ至レリト云フ、八龍ノ金物ナルニヤ、其制皆々奇代ノ物也、又白絲ヲ色々ノ絲ニテ妻取リシ、同ジ毛ノ鎧ノ破レタルヲ五領マデ出ダシタリキ、春日社本談議屋ニ、義經ノ赤絲威ノ鎧、同ジ毛ノ四方白ノ五枚冑ニ鍬形打タルアリ、又興福寺勸修坊ニ義經ノ左右ノ小手アリ、何レモ正シキ證ハナケレド、古ノ物ナル事ハマガフベクモアラズ、南都周防得業聖佛ハ、師檀ノ契アリシ故ニ、豫州都ヲ落チ去リテ、彼ノ坊ニ來リシヲ、下法師等相副テ伊賀國マデ送リシナド云フコト東鑑ニ見エタレバ、コレラノ時、後ノ形見トモナレトテ、甲冑脫ギオカレタリケンモ知ルベカラズ、又本談議屋ニ紫

絲威ノ鎧ノ同ジ毛ノ冑副ヒタル二領アリ、（南都具足師ハ五音威ト申スナリ、フルキ物ニカヽル威毛ハ聞キモ及バズ、但シ五色ノ絲チ以テ逆チモダカノ形ニ毛引シ所アリ、如レ此ナル鎧ノ毛ハ、古畫ニモ多ク見タレド、イカニ云フランモ不レ詳、）又センダンノ板、獅子頭ノ前立物等アリキ、是等ハ皆見ルニ及ビシ物ドモ也、（別ニ圖ニ詳也、）是等ノ外ニハ、彼秀郷朝臣ノ平石、又嚴島社ニ義家朝臣ノ鎧アリ、（爲春九國紀行ニ見ユ、）備前兒島ノ上寺ニ、佐々木三郎盛綱ノ鎧アリ、武藏秩父ノ御嶽社ニハ、畠山庄司二郎重忠ノ鎧アリ、下野ノ那須ニハ、余一宗高ノ鎧アリト云フ、是等又聞キ及ビニシ所ナリ、此餘古キ宮寺ノ寶トモ成リ、又舊キ家々ニ取リ傳ヘラレシ物モ多カメレド、ソレヲ見ン緣ナケレバ、其制ヲモ知ラズ、

應仁ノ後、ウチ續キタル世ノ亂ニ、古ノ鎧、腹卷、腹當、筒丸ナドイフ物ハ皆廢レテ筒丸ノ制ニヨリテアラタメ作レル具足トイフ物ノミゾ世ニ聞エヌル、ムカシヨリ鎧ニツキシ物ドモヲ、小具足ナドイフコトハアリシ、今ハ昔ノ制ヲ鎧トイヒ、今ノ制ヲバ具足トイフ俗ニナリタルニヤ、凡具足トイフコトバ、何ニテモアレ、其具ノコト〴〵ク備ハレルヲイフコトバ也、衞府具足、射手具足、弓具足、鞍具足ナドイヒシ是也、タトヘ其制ハカハリヌトモ、今ノ制ヲモ鎧トコソイフベケレ、又古ニ鎧ヲ着背トモイヒシ事ハ、腹卷腹當ナドイフ物ハ、皆其背ノ合ハザルニ、鎧ハソレラニ異ナレバ、カクハ名付ケイヒタル也、（又着背長ナドモシルスニヤ、ソレモソノタケノ腹卷腹當ナドイフ物ヨリ長クシテ、ソノ背合ヒヌルガ故ナルベシ、）又物ノ具トイヒシ事ハ、戎具トイヘル義ナルベシ、又古ニ三ツ物四ツ物七ツ物ナドイフ事モ聞エタリ、胴冑袖ヲソロヘテ、三ツ物トイフヨシハシルセシ物アレド、（大諸禮ニ）四ツ物七ツ物ナドイフ事ハ詳ナラズ、鎌倉ノ滅ビシ時、島津四郎トイヒシモノ、高時入道ヨリ賜ヒシ馬ニノリ、濃紅ノ大笠驗浦風ニ吹キソラサセ、三ツ物四ツ物取リツケテ、アタリヲ拂ヒハセ向ヒシトイフ事太平記ニ見エシニ、又異本ノ太平記ニ、笛吹峠ノ戰、官軍スデニカケマケシニ、上杉ガ兵長尾彈正、禰津小次郎、將軍ノ陣ヘマギレ入リ、尊氏ヲ討チマヒラセムトセシ事ヲシルセシニ、禰津小次郎フスベ革ノ鎧ニ、同キ毛ノ甲着テ、七ツ物山ノ如クニ取リ附ケテ、薄紅ノ大笠驗ツケシヨシ見エタリ、サレバワカチテイフ時ハ、三ツ物四ツ物トイフ物ヲアハセテ、ソレヲ七ツ物トモイヒケルニヤ、梅松論ノ

中ニ、多々良濱ノ戰ノ事シルセシニ、凡御當家（足利殿ノ家チサスナリ、）戰場ノ御出立、條々祕說アリ、ムカシ賴義朝臣安倍貞任ヲウタレシトキ、ミヅカラ手ヲ碎キテ、十二年ガ間暗夜雪ノ中ニモ戰ハレシホドニ、亂レ合ハン時必ズ誤アルベシト淸原武則ガハカラヒトシテ、將軍ニ七印トイフ七ノシルシヲ附ケ奉ル、皆武具ノ內ニアル也、タヤスク知ル人有ルベカラズ、今日ハ七ツ迄ハナカリシカドモ、佳例ニ任セテ少々御心カケラレケルトゾ承ルト見エタリ、又體源抄ニモ、義貞朝臣ノ記ヲ引キテ、八幡殿奥州合戰ノ時、大將軍ノ驗三ツヲ定メラレシト云フ事アリ、七ツノシルシ、三ツノシルシナドイフ物ハ、彼ノ三ツ物四ツ物ナドイヒシモノニ同ジキニヤ、但シ將軍ノシルシト見エタレバ、ヨノツネノ兵ノ用ユル所ニハアルベカラズ、又ヨク知ル人アルベカラズナドモシルシタレバ、其代ニモ此事ヨクシレル人ハマレニヤアリケン、又世ニ兵ノ六具ナドイフ事ハ、（甲、冑、頰當、小手、脛楯、腰當ノ六ツチイフ歟、其外異說多シ、）僧家ノ六物ナドイフ事ニ倣ヒシニゾアルベキ、凡戎ノ具其六ツニノミカギルベカラズ、片小手ニ諸具足シタルナドイフ事、コレモ太平記ニ見エシカド、其事サダカナラズ、但シ片小手トシルセシヲ、一本ニ弓小手トハシルシタリ、古ノ制一タビアラタマリテ今ノ具足トイフ物出來シヨリ、年月ヲ歷ル事モ多ク、今ノ代弓ヲフクロニシ戈ヲツヽメル事モ、スデニ百トセニ及ビヌレバ、其工ヲ業トスルモノダニ、古制ヲヨクシレルハ希也、サレバ其比ニシルセル物共ヲ見ルニ、疑ハシキ事ノミゾ多カル、

弘安禮節ニ見エシ甲冑ノ名所、古ノ物共ニシルセルニ、合ヒシ所スクナシ、又今ノ世ニイヒナラハセル所ノ古ノ物ドモニ見エヌモ多シ、昔ノ鎧ハ脇楯アレバ、馬手ノ脇ハ合ハズ、乳ノ下ヨリ下札四段ナレバ、古キ物ニモ四枚胴ナドイヒケリ、此四枚ハ前ヨリ射向後マデツヽラナル、禮節ニ衡胴トカキテ、加布幾銅トヨミ、左右ノ乳下也ト注シタル是也、衡胴ヨリ上ヲバ、前モ後モ立擧トイフ、射向ノ方ハ脇板トイフ也、立擧ハ前後共ニ三段ヅヽアルベシ、鎧ノ前ノ第一ノ板ヲ一ノ板トモ（源平盛衰記ニ）胸板トモイフ、禮節ニ鬼會トカキテ、於爾他麻里トイフ、領ノ下也ト注セシ是也、胸板ノ次ヲバ弦走ノ板トイフ、（源平盛衰記ニ）世ニハ假粧板ナドイフ也、コレヨリ下ノ板ドモ皆弦走ヲモテ覆

フベシ、弦走ノ三ノ板トイヒシハ、承久記第三ノ板ヲイヘルナリ、此板弦走ノ下ニアリテ、上ヨリハ第三ニアタルガ故ナルベシ、高紐トイフハ、禮節ニ神道札ノ下二寸ノ穴也ト注シタリ、此注必ズ脱字アルベシ、善本チモテカンガフベキ事ナリ、又神道ノ札ヲバ、慈伞動乃佐禰トイフ、兩肩ノアタル所也ト注シタレバ、此札ハ卽チ今ノ綿嚙トイフ物也、其下二寸ノ穴ヲ穿チナンニハ、今イフ綿嚙ノ相引ノ緒、スナハヌ高紐トイフモノ也、高紐ニ弦セカレシトモ、又弓ツヨク引カントテ甲ヌギ、高紐ハヅセシナドフルキ物共ニ見エシハ、保元物語ノ異本太平記等ニ見ユ、此物ノ事ヲイヒシ也、今ハ馬手ノ引合ニアル緒ヲ高紐トイフ事ニヤ誤レルナルベシ、栴檀板トイフモノハ、此高紐ノ上ニ覆ヘル也、古ハオシツケノ板トイヒ、今ハ綿嚙ノ横板ナドイフ物、禮節ニハ月被トカキテ、都幾加都幾トイフ、背ノ領也ト注シタリ、此板ヨリ左右ニ別レテ、兩肩ヲオホヒテ、前ノ方ニ至リテ高紐ヲ懸クベキ板ハ、禮節ニ見エシ神道ノ札ニシテ、今ハ綿嚙トイフモノ也、此板ノ上ニ障子ノ板トイフ物アリ、コレモ古ヨリ聞エシ物ナリ、障子ノ板ト云フ物ハ、其形下弦ノ月ノ如シ、サレバ綿嚙ノ横板ヲ月被ト云フナルベシ、綿嚙ノ横板ノ下ニアタレル板ハ、逆板也、此逆板ニ總角ヲ付ケヌレバ、フルキ物ニハ總角付板トシルシタリ、太平記ニ草摺ヲバ禮節ニ草靡トカキテ、久左津里トヨミ、左右ノ膝ノ上也ト注シタリ、靡ノ字モシハ又摩ノ字ヲヤ誤リウツシヌラム、凡草摺ハ前ト後ト射向トニ合セテ三枚アルベシ、前ヲバ前板トイヒ、後ヲバ引敷ノ板トイフ、射向ノ方ヲバフルキ物ニハ、弓手ノ草摺トゾシルセル、源平盛衰記ニ此板ニ大刀懸トイフ物アリ、脇楯ニツキタルヲバ壺板ト名付ケタリ、太平記ニ見ユ、今ハユルギノ絲トイフモノ、昔ハ草摺ノ横縫ノ絲トイフ、太平記ニ大刀懸草摺ノ横縫ト見エシハ是也、前モ後モ射向モ、其終ノ板ヲ菱縫ノ板トイフハ、此板ニ菱縫ノ絲アレバ也、袖ト冑ノシコロトノ終ヲモ菱縫ノ板トイフ事又コレニ同ジ、異本保元物語ニ、八郎爲朝鎧ノ名所チカゾヘラレシコトバニ、クツケイ、弦走、障子板、脇立ノ上ト云フコトアリ、其クツケイト云フハ、イヅクナルニヤ未レ詳、左ノ袖ヲバ、古ヨリ射向ノ袖トイヒシカド、右ノ袖ノ名ハ聞エズ、袖ノ上ノ板ヲ冠ノ板トイフ事モ古ヨリ聞エシ、其板ノ前ノカタヲ、世ニハ櫛形トイフ、其次ヨリ一ノ板二ノ板ナドカゾフル也、オヨソ袖ニ緒付クル事四所也、綿嚙ニ結ブベキヲシツカノ緒トイヒ、

袖付ノ管ニ懸クベキヲ、後ヲバ懸緒トイヒ、前ヲバウケ緒トイヒ、合セテコレヲ四ツ緒トモイフ、總角ニ懸クベキヲバ水呑ノ緒トイフニヤ、此等ノ名ハフルキ物ニハ見エズ、タヾ世ニイヒナラハセル所也、脇楯ノ事ハ下ニ詳ナレバ、コヽニシルサズ、冑ノ制ハ、大ヤウ昔モ今モカハラズ、鉢トイフ事、古ヨリイヒ傳ヘタルコトバ也、近キ比異朝ヨリキタレル書ニ、盔ハ盂ノ屬、スナハチ鉢也、今首鎧ヲイヒテ盔トイフナリト見エタリ、（品字箋）彼國ニモ今ハ鉢トイフ字ヲ加布登ノ事ニ用ヒケリ、自ラ其コトバノアヒヌルコソメヅラシケレ、禮節ニ神宿トカキテ加牟也登利トイフ、頭上ヲイフ也ト注シタルハ、今ハ世ニ八幡座ナドイフ所也、（猶下ニ詳ナリ）古ニハ此ホトリヲ皆手反（テヘン）トイヒケリ、宇治ノ軍ニ、足利又太郎忠綱ガ、アマリアフノキテ、内甲射サスナ、アマリニウツムキテ、テヘン射サスナトイヒ、義經モマタアヒ引キシテ、シコロ射ラルナ、イタクウヅブキテ、手反射ラルナトノタマヒシハ、皆今イフ息出シノ穴ナドイフ所ヲサシタルニヤ、又手反ノ直中トモシルセシアリ、（太平記ニ）前ノ方ヲバ昔ハ眞向トイヒシ、禮節ニ筋宿（スヂトマリ）トハ、雙顏ノ盡ル所也ト注セシモ眞向ノ左右ヲ云フナルニシ、目庇ノ板トイフ物、フルキ物ニハ其名聞エズ、義貞朝臣ノ最後ニ、流矢來テ眞向ノハヅレ眉間ノ眞中ニタチシヨシ太平記ニ見エタレバ、其比ハタヾ眞向ノハヅレナドイヒケルニヤ、此板ヲバ必ズ丸キ頭ノ釘ヲ以テ冑ノ鉢ニ三所ニテウツナレバ、ヲノヅカラ三ツノ星ノヤウニゾ見ユル、禮節ニ三台ノ座ト注セシ所、コノ所ニヤトオモヘド、其注ニ左右ノ耳邊ナリト見エタレバ、イカヾアルベキ、吹返シ、又フルキ名ナリ、禮節ニ左右ノ襲座也ト注シタリ、異朝ノ制ニ鳳翅盔トイフモノアリ、今モ我國ニテ秦王奏スル舞人ノカウブル冑形ソレ也、其鳳翅ニ倣ヒテ吹返シヲバ作レル物トコソ見エタレ、後ロニハ笠幟ノ鐶トイフアリ、此名モフルキ物ニハ見エネド、笠幟ハ冑ノ後ニ付クル物也トイヘバ、此物ヲバ昔ヨリカクコソ名付ケイヒタルラメ、鉢付ノ板、ムカシヨリ聞エシ名也、此板ヨリシコロヲ綴ル絲ヲ、古ニハ鉢付ノ横縫トイヒケリ、

昔ノ制ノ今ニカハレルハ、障子板、栴檀板、弦走、逆板、大刀懸ナドアルト、特ニハ脇楯ノアルコソ、大ニ

異ナル物ナレ、障子板トイフハ、薄鐵ノ形ハ、弓張月ノ如クニ半圓ナルヲ染皮ニテツヽミテ、左右ノ綿噛ノ上ノ前ニヨリテ、ソノ圓ナルカタヲ上ニナシテ側立タツ、又同形ニテソノ中ヲ虚シクセルモアル也、コレハ頸ノ骨射ラレザラムタメノフセギ也、タトヘバ屋ノ内外ヲ障子モテ隔テタランヤウナレバ、カクハ名付ケタリケリ、又栴檀ノ板トイフハ、胸板ノ左右ニアリ、又小手輪ナドモイフニヤ、此名ハフルキ物ニハ見エズ、又右ヲ栴檀、左ヲ鳩尾トイフヨシイヒ傳ヘ侍リ、イハユル栴檀板ハ、其形左右ノ袖ノゴトクニテ、特ニ少シク、板ノ數モ三枚ニテ、タケモ纔ニ七寸五分許アルベシ、鳩尾トイフ板ハ、薄鐵ノ上濶ク下狹キガ、タケ七寸許ナルヲ染皮ニテツヽメルニ、金ノ覆輪アル物也、此二ツノ板ヲ左右ノ綿噛ノ相引ノ緒ノ上ニ掩フヤウニカケテ、又二ツノ板ノ中ニアル紐ヲ前ニ結ビテ、ヒラケザラムヤウニシタル也、コレ相引ノ緒キラレザランタメノ料ナルベシ、昔ハ二ツナガラ合セテ栴檀ノ板トヤイヒヌラム、栴檀ノ板トイフ名ハフルキ物共ニ見エシ多ケレド、鳩尾ナドイフ名ハ見エズ、コレヲ栴檀ノ板トイフ事、オモフニ、モトハ杏葉ノ形ヲ用ヒタリケム、春日社ニアル楠正成ノ筒丸ナリトイフモノニハ、杏葉ノ形ヲ用ヒラレタリ、杏葉トイフ物ハ、特ニフルキ物ニテアル也、古ノ馬ノ飾ニモ此物用ヒシ事アリ、栴檀ハ二葉ヨリカウバシキナドイフ諺モアレバ、此物葉ノ形二ツヲ用ユルガ故ニ、カクハナヅケタルナルベシ、ソノヽチニ其制アラタマリヌレド、其名ハモトノマヽニヨビシニヤ、此板ニハカナラズ匂ノ絲トイフモノヲツカヘバ、カクナヅケシナドイフ説アレド、匂ノ絲トイフモノハ、袖ニモ草摺ニモツカフベシ、此物ニノミカギリテ、其義ヲ取ルベシトモオモハレズ、又鳩トイフ鳥ハ、八幡ノ御使ナリナドイフ事アリテ、シカモ此板ノ形モイハヾ鳥ノ尾ニ似タルモノナレバ、鳩尾トハ名付ケタリケン、但シ此板ノ形、我ガ見シ所モ少シキ異ナル物ドモアリキ、

弦走トイフ物ハ、染皮ノ形凸ノ字ノ如クナルヲ、上ハ假粧ノ板ノ下ヨリ下ハユルギノ絲ノ下ニ至リ、射向ノ半、馬手ノハヅレ迄ニカヽルヤウニシテ、鎧ノ前ヲ掩ヒタル也、其染皮ノ上ト左右ノトノメグリヲバ、或ハ錦皮、或ハ織物ノ類ヲモテ緣トナシ、皮ト緣トノ縫ヒメギハニハ、組ヲモテフセヌヒニシタルヲ、上ノ方ヲバ小櫻トイフ釘ニテウチ、下ハ其皮ヲ穿チテ、ユルギノ絲ヲ引キ出ダシケル也、藤森社ニアル崇道天皇ノ御鎧ト云フ物、弦走ノ破レテ上ノ方バカリ殘リタルガ、獅子頭ヲ染メシ皮也、ツク〲トコレヲ見ルニ、其皮ノ上ニ小シキナル紋アル赤地ノ織物ヲ覆ヒシガ、所々ニ破レ殘リシアリ、緣トナセシ物トモ見エズ、メヅラシキ物ニ覺エ侍リ、假粧ノ板トイフ物ハ、胸板ノ下ニモ、オシ付ノ板ノ下ニモ、又ハ袖ノ冠ノ板ノ下ニモアルベシ、廣サ五六分ノ板ヲ横タヘテ、紋アル皮ニテツヽミテ、間ノ金

物トイフ物ヲ打チ、其板ノ下ニ白キ赤キ二色ノ綾ヲモテ、水引トイフ物ヲツクル、此水引ヲマタリウモントモイフニヤ、逆板トハヲシツケノ板ノ下ニアル板ヲイフ、凡鎧札ヲバ下ノカタノ上ニカサナレルヤウニスルニ、此板バカリ上ト下トノ上ニナルヤウニシタル物ナレバ、サテコソ逆板トハ名付ケタレ、其制上ハ札頭トイフ物シテ下ハ一文字ニシタルヲ、上ノカタニハ啄木ノ組ヲモテ、ウナメトイフ物ニシテ、ヲシツケノ板ニ綴リ下ノカタニハ菱縫二通リシテ、其下ノ板ニ綴ル、此板ノ眞中ニ總角付ノ金物アリテ、總角ヲ付クレバ、總角付ノ板トモイフ、又總角トイフ物、鎧ノ後ニツクル事モ、昔素戔烏尊ノ天ニ昇リ給ヒシ時、日神ミクシヲアゲテ髻トナシ給ヘルヨリ事起リ、其後又神功皇后新羅ヲ征シ給フ時、西ノ海ヤ橿日ノ浦ニ至リマシテ、ミグシヲ解キテ海ニ臨ミ給ヒ、吾神祇ノ敎ヲウケ、皇祖ノミタマノフユヲカウフリ、滄海ヲ渉リテ自ラ西ヲ征サント思フ、モシ驗アランニハ、髮自ラ分レテ兩ニナレトノ給ヒテ、海ニ入レテ洗ギ給ヒシニ、髮ヲノヅカラ分レヌ、皇后スナハチミヅラニアゲ給ヒ、男ノ形ヲ假リテ、遂ニ彼國ヲシタガヘ給ヒテケリ、コレヨリシテ彼髮ノ形ニ倣ヒテ、モノヽフノ鎧ノ飾トハナシタル也、ト部家ノ説ニハ、冠トイフ物ハ、三十四代ノ朝廷ノ御時ヨリ始マル、推古ソレヨリサキノ代ハ、男ハ髮ヲフタツニワケ、ビンヅラニユフ、女ハサカ髮ニワケテ、額ニヒトツニユヒテ、櫛ヲサシ、ソノ餘ヲ後ニサゲシ也、ビンヅラトハ、總角トカク、髮ヲ二ツニワカチ結ビシ形ハ角ニ似タリ、其餘ノ垂レタルハ總ニ似タレバ也、コレヲ又アゲマキトイフ也、鎧ノ總角ハ神代ヲマナビ、總角ヲ表スル也ト見エケリ、按スルニ、冠トイフ物、伊弉諸尊ノ御時ヨリ始マレルニヤ、其事舊事記ニ見エタリ、又大己貴命ノ冠ノ事、出雲風土記ノ中ニモ見エタリ、三十四代ノミカドノ代ニ始マレルトイフ事ハ、イカガアルベキ、コレラノ説ニヨリテ、總角トイフ物ハ、冑ニツケタルヲイフ、鎧ニツクル事ハ後代ノ事也ナドイフ人モアレド、昔ヨリ鎧ノ總角トコソハイヒタレ、冑ニアルチバ、世ニハ母衣付ノ緒ナドイフ也、大刀懸トイフモノハ、射向ノ方ノ草摺ヲ綴レル物ニテアルナリ、前板引敷ノ板ヲバ、ユルギノ絲ニテ綴レド、弓手ノ草摺ハシカハアラズ、其タケハ、ユルギノ絲ノナガサノ如ク、ソノハヾハ草摺ノ板ノ廣サノ如クナル染皮ノ左右ニ異皮ヲ緣トナシテ、緣ト皮トノ縫メギハニ、組ノフセヌヒシテ、織物ノ裏打タルヲ用ユル也、草摺ノ一ノ板ニ金物ヲ

打ツコト三所、コレハ彼皮ヲトヅベキ料也、此板ニ絲ヲ用ヒザル事ハ、大刀ノ鉸具ニ觸レテ其絲ノ絕エナン事ヲオモフガ故ナルベシ、サレバ大刀懸トモ名付ケタリケム、草摺ノ制モ、今樣ニハ異ナル多シ、其形牝瓦ヲフセタルヲ見ンヤウニ、中タカク左右ハクダレリ、俗ニカスガイダメナドモイフ事ニヤ、前板モ引敷モ弓手ノ草摺モ、又脇楯ノ壺板モ、皆五枚ヅヽニシテ、菱縫ノ板ヲバ、中ヨリワリテ、二ツニナルヤウニシタル也、脇楯トイフ物ハ、神功皇后ノ新羅ウタセ給フ時、應神天皇イマダ胎中ニマシマセシカバ、御腹ノ大キクナリ給ヒテ、御鎧ノ脇アハザリケルニ、武內ノ大臣御鎧ノ草摺切リテ、御脇ニアテマヰラセシ、コレ此物ノ始也トモ、又此物ヲ作リ出ダシテ進ラセラレシトモイヒ傳ヘヌ、神祇靈應記太平記等ニ此事フルキ物ドモニ見エシ所ナレド、正史ニハ見エズ、日本書紀ニハ、皇后新羅ヲウチ給ハントテ、スデニ吉日ヲウラヘテタチ給フベキ時ニ、適開胎ニ當リ給ヒシカバ、自ラ石ヲ取リテ御腰ニ挿テ、事竟リテ還ラン日、玆ニ產レ給ヘト祈給ヒシニ、新羅ヨリ還ラセ給フ時、胎中ノ天皇筑紫ニテ生レサセ給ヒタリケリ、ソノ產處ヲ宇瀰ト名ヅク、其石今モ伊都縣ノ道ノ邊ニアリトハ見エタリ、又萬葉集ノ中ニ、山上臣憶良ガ鎭懷石ヲ詠ゼシ歌ノ序ニハ、筑前ノ國怡土郡深江村子負原ノ海ニノゾメル丘ノ上ニ二ツノ石アリ、大ナル物ハ長サ一尺二寸六分、圍一尺八寸六分、重キコト十八斤五兩、小ナル物ハ、長サ一尺一寸、圍一尺八寸、重キコト十六斤十兩、並ニ楕圓ニシテ狀鷄子ノゴトク、其ウルハシキコトイフベカラズ、サキニ息長足日女命新羅國ヲ征シ伐チ給ヒシ時、此兩ノ石ヲ御袖ノ中ニ挿着テ、鎭懷給フトイフ、マコトハ御裳ノ中ニ着給ヒシ也、或ハ此二ツノ石ハ、肥前國彼杵郡平敷ノ石ナルヲ、ウラヘノマヽニ取リ給ヒシトモイフトゾ見エタル、萬葉集ニ見エシ所ハ、國史ニ合ヒヌ、モシ此石ノ事ヲアヤマリ傳ヘタリケンモシラズ、又此石ニ象リテ脇楯トイフ物作レルナドイフ事ニヤ、但シ古ノ鎧ノ制ヲヨク〳〵見ルニ、始メヨリ馬手ノ脇ヲバ合ハセズシテ、脇楯ヲ用ヒテフサガンヤウニ造レル物ナリ、カクツクレル事、便リアル事ドモ多カリヌベシトコソ見エタレ、其制ハ一枚ノ板ノ長ハ、鎧ノ射向ノ方ニヒトシキガ、上ノ

カタハ脇板ノ形ノ如クナルヲ、盡ク染皮ニテツヽミ、織物ノ類ニテ裏打タルニ、壺板ヲツケタル也、壺板ヲツクル革ノ制、又大刀懸ニ同ジ、脇楯ノ板ノ中ニアタリテ、喙木ノ組ノ緒引キ出ダスベキ穴一ツモ二ツモ三ツモアリ、前後ノ下ノカタノハヅレニ、今ノ世ニクリジメトイフナル物アリ、オヨソ鎧着ンズル時、マヅ脇楯シテ後ニ鎧ヲバ着ルベシ、脇楯ノ緒結バムヤウ、其故實アル事ニヤ、又主君ノ鎧着タラム時ニハ、脇楯ヲ鎧ノ上ニ着ル故實タル由、佐々木四郎高綱ノ云ヒシ事東鑑ニハ見エケリ、

オヨソ鎧ヲ造ル事ヲ我國ニシテ威ストイフ事ハ、日神丈夫ノ武キ備ヲナシ給フ時、綾威ノ高鞆ヲ負ヒ給フトイフ事ヨリ始マレリ、稜威トハ餘所ニ畏ルベキ故也トゾ、ト部家ノ説ニハ見エケル、鎧ノ威毛ナドイフ事イヅレノ比ヨリヤ其色目ハ聞エタリケン、白絲、黒絲、黄絲、紺絲、紫絲、淺黄絲、萌黄絲、赤威、火威、マタ緋威トモ絲火威、紫威、紅末濃、紫末濃、又ハ下濃トモ、源平盛衰記ニハ坐滋ト見ユ、小櫻、東鑑ニハ小櫻革威ニ作レリ、卯花、澤瀉、サカオモダカ、萌黄ニ澤瀉威シタル、黄返シ、藍白地ヲ黄ニ返シタル、小櫻ヲ黄ニ返シタル、櫨匂、萌黄匂、白絲ノ妻ドリタル、赤威肩白、白キ唐綾、黒キ唐綾、朽葉色ノ唐綾、萌黄ノ唐綾ノ坐紅、赤革、黒革、紫革、品革、洗革、熏革、赤革、黄絲、節繩目、又捐繩目、伏繩目トモ大荒目、敷目ノ鎧ナドイヒシ物、フルキ物語共ニ見エタレド、近代ノモノニ、多門ノ鎧トイフモノ見エタレド、其制モサダカナラズ、マタフルキ物ニカヽルモノハ見エズ、今ハ詳ナラヌ多カリ、古ノ今アルモ多クハ威毛ノ色カハリヌレバ、サダカニハ見エワカヌモアリ、世ニイヒ傳フル所詳ナルニ似タル説モアレド、衣ノ色目ナドモ、古ノ物今サダカナラヌモアルニヤ、且古ノ鎧ハ、今ノ樣ニ絲威ノミニモアラズ、或ハ綾ヲ疊ミ、或ハ革ヲ染メテ威セシアリ、スベテ古ノ物イマダ其物ヲ見ズシテ思ヒハカリシ事ハ、其物ヲ見ルニ及デハ、カネテノアラマシニタガフ事ヨノツネ也、正シキ徵ナキ事ハ信ジガタシ、疑ハシカラム事ヲバ、タヾ其疑ノマヽニ傳ヘムニハシクベカラズ、タトヘバ、紅末濃、紫末濃ナドイフ物ハ、鎧ノ前後ヲバ紅ニモ紫ニモ威シタルガ、草摺ヲ紺絲ニテ威セシ也ナドイフ説アレド、腹卷筒丸ナドハサモアル事モアリナマシ、古ノ鎧ハ前ハ弦走ノ革ニテ掩ヒタレバ、其毛色ハ見エズ、後ニハ總角アリ、或ハ旗ヲモ

負ヒ、母衣ヲモカク、イカデ毛色ハ見エワカツベキ、タヾ打見ルヨリイチジルキ所ハ、左右ノ袖草摺ノミゾアル、サレバ古ノ威毛ハ此二所ニテコソワカリタルナレ、古キ鎧ドモ又ハ古ノ畫師ノ繪カキシ草紙ノ繪ナドヲ記セシ所ニ併セ見テ、年比ノ疑解ケヌル事モアリキ、ソレモ繪カキタルモノハ、鎧ノ威毛ノ色ナドハワカレヌレド、或ハ絲或ハ綾或ハ革ナドイフ事サダカナルベキニモアラズ、白絲、黑絲、黄絲、紺絲、紫絲、淺黄絲、萠黄絲威ナドイフ物ハ、疑フ所ナシ、（コレヲ皆絲威ナリ）火威トイフハ、アケノ革ニテ威セル也、今鏡ニ見エシ大内記保胤江ノ匡衡ノ文評ジタリケル詞ニ其由ハ見エタリ、（又保元物語ノ一本ニ、義朝幼少ノ弟ドモノコロサレシ時、兵ドモ皆袖ヲヌラス、中ニモ波多野二郎ガ緋威鎧ノ袖洗革ニナリヌナド見エタリ、此物革威ナル事ヲシルベシ、）絲火威トイフハ、革威ニハアラデ、アケノ絲ニテ威ス、赤革威ト云ヘルハ、火威ニハ異ニシテ、赤威ト云フハ又絲火威ニハ異也、（赤革ト云フハ、赤滑ノ事也、南都本談議屋ノ黑皮威ノ筒丸ノ菱縫、其革ナリキ、）（赤絲威ト云ヒシハ、其絲ヲ茜ニテ染メシナリ、南都ニアル義經ノ鎧ノ毛シカゾアリケル、）赤威肩白トイフハ、左右ノ袖ノ一二ノ板白絲ニテ威セシ也、（古畫ニ見エシ所也、）紅末濃、紫末濃ナドイフ物ハ、古畫ニ左右ノ袖、草摺ノ或ハ薄紅或ハ薄紫ナルガ、ソノスソヲバ、薄紅薄紫ナドヲモテ彩成セル物ソレナルベシ、（アル説ニ、スソゴトハ、裙紺トカクベシ、鎧ノ前後紅ナランニモ紫ナランニモ、草摺ヲ紺絲ニテ威シタル也トイヘド、フルキ物ドモニ裙緋ナドシルシタルモノモ見エズ、又末濃村濃ナドイフ物ハ、古ノ物ニ猶アリ、紫末濃ノ鍬、紫村濃ノ鍬、櫨末濃ノ鍬、櫨村濃ノ鍬、又蘇芳末濃、青末濃ナドノ下簾トイヒシ類コレナリ）小櫻威トイフ物ヲ東鑑ニハ小櫻革威トシルシタリ、藍革ニ小キナル櫻花ノ形ヲ染メシヲ以テ威セシ也、又小櫻ヲ黄ニ返シタルト云フハ、彼小櫻ノ革ヲ黄ニ返シヌレバ、藍ノ色ハ萠黄ノ如クニナリ、花ノ形ハ黄色ニナレルヲ以テ威セシ也、是等ノ鎧ハ、飛騨守惟久ガ後三年ノ戰ノ繪ニモコヽカシコ見エタリ、卯ノ花威ト云フハ、上ハ白絲ナル下ハ次第ニ薄藍、萠黄、濃藍等ノ絲ニテ威セル也、タトヘバ衣ノ色ノ卯ノ花ハ表白ク裏青キヲイフガ如シ、（又古キ繪ニ、袖草摺ノ半ハ白ク、半ハ萠黄ナルモ見エキ、）澤瀉威サダカナラズ、古畫ノ袖草摺ニ、色々ノ絲ヲモテ鷹ノ羽ノオモダカ切生（羽形ノ圖ニ見ユ、）ナドイフ形ノゴトクニ、毛引キシヤウニ繪カキシハ、其物ナルニヤ、サカオモダカトイヒシハ、其形ヲ逆ニ威セルニテ、萠黄ニテ其形ヲ威セシヲバ、澤瀉ヲ萠黄ニテ威セシナドモイヒシニヤ、黄返シノ鎧トイフハ、藍白地ヲ黄ニ返シタルトイフ物モアレ

バ、綾ヲモ革ヲモ返セシナルベシ、凡黃ニ返セシトイフ事ハ、或ハ革或ハ綾ヲノミイフニモアラジ、紫末濃ノ菊ノ丸ヲ黃ニ返シタル裙金物打タル鎧ハ、平家物語ノ異本ニ見エタレバ、鍍金ナドイフ物ヲモ黃返シトイヒシ也、凡黃覆輪ナドイフモ、鍍金ナルベシ、金覆輪トイフハ、眞ノ黃金ニゾアルベキ、爐匂、萠黃匂ナドイフ類ハ、今モツカフ匂ノ絲ナドイフモノ也ト云フ人アレド心得ラレズ、白絲ノ妻トリタルト云フハ、鞍馬法師ノ預レル物ソレナルベシ、妻トレル鎧ハ、古畫ニ多ク見エタリ、匂ノ絲ヲバ、又ハ耳絲ナドモイフナリ、唐綾威トイフ物ハ、唐綾ヲ疊ミテ威セル也、保元物語ニ、見エシ鎭西八郎ノ鎧ハ、唐綾ヲフトク疊ミテ威シ、源平盛衰記ニ見エシ義經ノ鎧ハ、萠黃ノ唐綾ヲ疊ミテ坐紅ニ威セシナドコレ也、革威ノ類マタ疑フベクモアラズ、ソノ中ニ品革威トイフハ、藍皮ニ紋オシタル也トイフ事、源平盛衰記ニ見エタリ、節縄目ノ鎧ト云フハ、縄目ノ色革ヲ以テ威シタル也、此物マタ後三年ノ繪ニコヽカシコニ見エタリ、縄目ノ色革ハ、昔坂東ヨリ出デシニヤ、其事源平盛衰記ニ見エタリ、タトヘバ幕手縄ト云フ物ヲ、白キ青キ黒キ布ヲ縄合セシガ如クニ、白キト薄藍ト紺トノ筋アル染革ナリ、赤革黃絲ト云フハ、革ト絲トヲ以テ威セル也、大荒目ノ鎧ト云フハ、タトヘバ今ノスガケナド云フ物ノ如クニ威セル也、保元物語ニ黒キ唐綾ヲフトク疊ミテ威シタル大荒目鎧ト云フ即此ナリ、三枚皮ノ大荒目ノ鎧ト云フハ、保元ノ異本ニカナマゼノ鎧ナド見エシ類ニヤ、黒革威ノ大荒目ノコガネマゼタル鎧、又火威ノ鎧ノ敷目ニコシラヘシナド云フ物、イマダ詳ナラズ、オヨソ鎧ヲ威スニ、今モ啄木ノ組ニテ耳絲ナドトル事ハ、古ノ人ハ父祖ノ鎧ヲウケ傳ヘテ、永ク子孫ノ寶トセシ、其鎧ノ毛ヲモテ五行ノ色ニ配スルニ、人々ノ性ニヨリテ、鎧ノ毛或ハ又相尅ノ禁忌アリ、サレバ雜レル色ノ組ヲ用ヒテ、其正色ヲ亂リテ、ソノ主ヲ嫌フマジキタメノ用意也トモイヒ、又タトヘバ二色ノ毛ニテ威タラムニハ、二毛ナドイヒテモノヽフノ嫌フ詞也、サレバカナラズ此ノ組ヲ用ヒテソノ嫌ヲサクルトモイフナリ、

鎧ノ金物、古代ノ物ヲ見ルニ、鍍金、白銀、又ハ鍮石、白鑞ヲ沃ギシナリ、胸金物、裙金物ナドイフモノフルキ物ニ見エタリ、菊菊ノ丸トモイフ、蝶、鴛鴦獅子獅ノ丸トモイフ、ナドノ金物打タルト見エシハ、皆其形ヲ鏤メテ、鍍金ヲモテ飾レルナリ、銀ノ蝶ノ丸キビシク打チシナドイフハ、白銀ヲ彫リタルニテ、又白金物ナド見エシハ、白鑞ヲ沃ギシナルベシ、白ク黃ナル兩蝶ヲ裙金物ニ打チタルト見エシモ、又上ニ同ジカルベキ、スベテ裙金物トイフハ、菱縫ノ板ニ打チシヲイフ、八龍ヲ胸板ニ打チタルナドイフハ、胸金物トイヒシ也、古ノ金物トイフモノ、多クハカクゾアリケル、家ノ紋ナド打ツ事ハ、元弘建武ノ後ニ出デ來タル也、

凡金物打所、胸板、脇板、總角付ノ板、左右ノ袖ノ冠板、菱縫板ト草摺ノ菱縫ノ板ゴトニウツ、草摺ニハ一枚ニ二ツ三ツモウツ、鎧ノ前後左右ノ袖ノ假粧ノ板ノ金物ヲバ、今ハ八相ノ金物、間金物ナドイフ也、又總角付ノ鐶アリ、胸板ヲシツケノ板、脇板、脇楯等ニ覆輪アリ、綿嚙ニ袖付ノ管アリ、又胡頽トモイフ、其形ノ似タルガ故ナリ、高紐、引合ノ緒、脇楯ノ緒ナド引キ出ダス所所ニ、或ハ鵐目、或ハ座ノ金物ト云フアリ、

古ノ甲冑ハ、染皮ヲモテ飾ル、弦走ノ外ニ、胸板、障子板、オシツケノ板、脇板、脇楯、冑ノ吹返、マビサシノ板ナドヲバ、小紋ノ染皮ヲモテツヽメリ、又或ハ異皮、或ハ織物ヲモテ、其染皮ノ縁トナシ、縁ト皮トノ縫ヒメキハニ組ヲフセテ、縁ノ上ヲ小櫻トイフスコシキナル花形ノ頭アル釘ニテウツ、胸板、吹返ナドノ金物ヲバ、此染皮ニテツヽメル上ニ打ツ事也、古代ノ物ドモヲ見ルニ、今世ニ染メ出ダスベキ物トハ見エズ、凡飾レル所ニヨリテ、其革ノ文モ同ジカラズ、マヅ弦走ノ革ハ、我見タリシ所モ、其紋ノ大キナル小シキナルハ同ジカラネド、多クハ世ニ格子ナド云フ物ノ如クナルヲ、筋違ニ染メ成シテ、其中ニ獅子形、鬼形、鷲形ナド、古ニ聞エシ物ドモヲ様々ニ彩成セシ也、又此制ニハアラデ、大キラカナル獅子ヲ一ツ二ツ染メ出ダシテ、其地ヲバ花ト葉トヲ以テ彩成セシモアリ、其餘冑ノ吹返、鎧ノ胸板、脇楯ナド包メル革ハ、多クハ小シキ獅子ニ花ト葉トヲ彩成シ物ナリ、昔ハ各其名コソ有リツラメド聞キモ傳ヘズ、正平革トイフ物モ、其紋ハ似タル所アレド、其樣ハカハレリ、此革ハ異朝ヨリ來レル物也トモ、又南朝ノ朝廷ニテ染メサセラレシヲ嘉慶ノ比、鹿苑院公方ヘ紀伊國矢田庄ヨリ其數アマタ進ラセシトモイフ、今其革ヲ見ルニ、正平六年六月一日トイフ字ヲ縦ザマ横ザマコヽカシコニ染メ入レタリ、サレバ異朝ノ物ナリトイフ事ハ心得ズ、異朝ニテ正平ノ號ヲ用ヒシ事ハ、元魏ノ代大武帝辛卯ノ年、太平眞君ノ號ヲ改メテ正平ト號ス、ソノ年ハ我朝ニシテハ二十代ノ朝廷允恭天下ヲシロシメス四十年ニヤアタリヌラン、其後幾ホドナク、大武帝崩ジ給ヒ、御孫文成帝位ニツカセ給ヒシカバ、正平ハ二年ニシテ興元ト改元アリキ、其外此號ヲ用ヒラレシコトイマダ見ズ、カヽレバ、彼元魏ノ正平ニ六年トイフ

ハ有ルベカラズ、我朝ニシテ正平トイヘルハ、南朝ノ朝廷ノ號ニシテ、其六年ニハ南北一統シテ、北朝觀應ノ號ヲトヾメラレテ、天下コト〴〵ク正平六年ト號シタリキ、サレド明クル正平七年南北又ワカレテ、北朝ハ文安ト改元アリ、コレヨリ又正平ノ號天下ニ通ジ行ハル、事ヲ得ズ、南朝ハ終ニ亡ビサセ給ヒシカド、其號ハムナシク此革ニトヾマリテ、後ノ代マデニ用ヒ行ハル、ゾ、セメテモ彼朝廷ノ御名殘ナル、紀伊國ハモトヨリ南朝ノ領シサセ給ヒシ所ナレバ、後ニ此物彼國ヨリ出デシナドイフ事、サモアリナマシ、シカルニ世ノ人八幡殿ノ鎧判官殿ノ着背ナドイフ物ニモ、其紋ノ似タル物ヲ見テ、正平革ナドサシイフハ、僻事ニゾアルベキ、此物正平ノ比ニ出デ來タル物ナレバ、ソレヨリサキノ代ノ物、カヽル名ハアルベカラズ、菖蒲革トイフ物、フルキ物ニ其名ハ見エネド、或ハ小紋ノ藍皮、或ハ藍皮ニ紋ヲシタルナドイヒシハ、コレラノ類ナルベシ、或ハ假裝ノ板ヲツツミ、或ハ染皮ノ緣トセシ革、多クハ此物也、古ノ物ハ今ノ世染メ出ダスガ如クニハアラデ、藍皮ニ菖蒲ノ花ト葉ノ形ヲナラベテ染メタルナリ、杉立トイフ革モ、菖蒲革ノヤウニ杉ノ村立チシ形ヲナラベテ染ム、今ハ鱗形ナドイフ物ノ如クナル文アル藍革ヲ菖蒲革トイヘルハ、最略ナル物ニテアル也、古ニ錦ノ赤皮ナドイヒシモノ、今ハ御免革ナドモイフ也、古ハ此革ヲモテ弦走、脇楯ナドノ緣ヲモ飾リ、又高紐ナドヲモ此革ヲマロクヌヒテ、其縫メギハニ組ヲフセヌヒテ用ヒシナリ、

古ノ冑ノ制、三枚冑、五枚冑、四方白、八方白、片白、星白、龍頭、獅子頭、鍬形、鷹角、鳶甲、帽子冑ナドイフ物、フルキ物共ニ見エケリ、今ノ制モ大ヤウ古ノ制ニカハラズ、タヾ今ハ異樣ノ物ドモ多ク出テ來タル也、古ニハシコロ三枚ナルヲバ、三枚冑トイヒ、五枚ナルヲバ五枚冑トイフ、シコロノ形モ特ニ大キニシテ、今ハ世ニ大饅頭、小饅頭ナドイフモノ、古ノ制ニテアル也、四方白、八方白ナドイフハ鍍メタル銀マタハ白鐵ヲ沃ギシ板ヲ、前後左右ニ四所ニウテバ、四方白トイヒ、八所ニウテバ八方白トイヒ、一方ニウツヲ片白トイフ、星白又白星ナドイフハ、其星ノ白キ也、龍頭ノ冑トイフ物、後三年ノ戰ノ日、八幡殿ノツクラレシ八龍ノ冑ニヤ始マリヌ

ラン、（保元ノ時、義朝ノ着ラレシ龍頭ノ冑、スナハチ此物也、詳ナル事ハ鎧ノ下ニ注シタリ、）昔齊ノ蘭陵王ト申セシガ、鐵ノ面具ヲカウフリテ、金墉城下ニ敵ヲウチヤブリ給ヒシ事、甲冑ニ鐵面具ヲ用ユル始也キ、時人此王ノ敵ヤブリ給ヒシアリサマヲ樂ニ作リテ舞フ、本朝ニモ其樂ノ傳ハレリケリ、今モ奏スル陵王ノ樂コレ也、其面ノ額ノ上ニ金龍ヲ作ラレタリ、我朝ノムカシコレラノ物ニ倣ヒテ、此冑作リ出ダシタランモ又知ルベカラズ、鞍馬ニアル所ノ龍ノ金物ノ中、陵王ノ面ノ物ニ似タルアリキ、獅子頭ノ冑トイフ事、元弘建武ノ後ヨリ聞エシ、春日ノ本議談屋ニアル前立物、則其代ノ物ト見エタリ、コレモ異朝ノ盔ニカヽル物アルニヤ倣ヒヌラン、異朝ノ制ハ、盔ノミニモ限ラズ、胸甲（コヽニイフ胸板ナリ、）披膊（コヽニイフ袖ナリ、）ナドニモ、此物ノ形ヲモテ飾ル、四天王ノ像ノ鎧ノ前ニ、河伯面ナドイフ物ツクルハ其制也、オモフニコレハ近代ニ志加美ノ冑ナドイフ物、又其遺制ト見エシ、志加美トイフ物ハ、泉津醜女（ヨモツシコメ）トイフ鬼ノ面也、志許賣トイフベキヲカク謌レル也トイフ說アリ、昔伊弉册尊神避マセシ時、伊弉諾尊黃泉國ニ追ヒ往キ給ヒシガ、此國ハシコメキ、キタナキ國ナリトテ、

ニゲ歸リ給フヲ恨ミ給ヒテ、伊弉册尊泉津醜女シテ追ヒ留メマイラセラル、伊弉諾尊カラウジテ泉津平坂ニ至リ、千引ノ岩ヲモテ其坂路ヲフセギ給ヒシトイフ事アリ、（日本書紀）醜女トイフハ、人ヲトリハムベキ鬼ナリケレバ、兵ノ冑ノ飾ニセン事ハ、ソノイハレナシトモイフベカラズ、睚眦トイフ物ハ、殺ス事ヲ好ム獸也、刀上ヲ飾レル龍吻是也トイフ事モアレバ、（類書纂要）異朝ニモカヽル俗ハアリケル也、サレドフルキ物ドモニ志加美ナドイフ事聞エザレバ、其說モマタ信（ウケ）ガタシ、（此カブトモ古ヨリアリシ物ニヤ、八幡殿ノ象ニ、馬副ノ兵ノ着タリシモノ此冑ナリキ、サレドフルキ物ドモニ見エザル事ハ心得ラレズ、タヾシ獅子頭ノ冑トシルシテ、昔ハ志々加之頁トハヨマズ、志加美トヤヨミタラン、能ク知ル人ニタヅヌベシ、）鍬形トイフ物ハ、澤瀉ノ葉ノイマダヒラカヌ形ヲカタドレル也、オモタカトイフ物ハ、勝軍草トモイフナレバ、鎧ニモ澤瀉威ナドイフアリトイヘル說アリ、マコトニ其形ハヨク似タリケレド、カヽル名モアリケリトイフ事、イマダ見ル所ナケレバイブカシ、（コレラノ外カレコレトイフ說アレド、皆信ガタシ、）蝦夷人ノ寶トスル鍬サキト云フアリ、國人病スル時、其枕上ニ立テ災ヲ攘フ物也ト云フ、其形我國ノ鍬形ノ制ナル物也、サラバ我國ノ昔ヨリ此物ヲ冑ノ前ニ立テシ事モ、必ズ其故

アルベケレド、今ハ其義ヲ失ヒシニコソ、古ノ物ハ其形モ大キク、其樣モ今世ノ物ニハ少ク異ナリ、五尺二寸ノ鍬形、又ハ三ツ鍬形ナドイフ物モ聞エタリキ、鷹角トイフ冑ハ、角鷹(クマタカ)ノ頭ノ毛ノ角ノ如クナルニヤカタドリヌラン、鳶冑トイフモノ源平盛衰記ニ見エタレド、其制ハサダカナラズ、帽子冑トイフモノハ、古繪ニ飾モナキ冑ノ鉢ニ鏁ノシコロナル物、多クハ下部ノ着タル見エタリ、此等ヤ其物ナルラン、畑六郎左衞門尉時能ガ帽子冑ニ鏁着テ、足輕ニ出デ立チシナドイフ事、太平記ニハ見エタリ、應仁ノ記ニ見エシ小泉冑トイフモノ、古ニモ聞エズ今モ又世ニ見エズ、イカナルモノニヤ、凡古冑ノ制、今イフ椎形(シイナリ)又ハアコダ形(ナリ)ナドノ類多カリ、イヅレモ鉢ハスコシキニシテ、今ノヤウニハ厚カラズ、按ズルニ、應仁ノ亂ヨリ後世ノ人、ツネニ甲冑チ帶シタリケレバ、冑小シキナレバ、氣ツマリテ頭イタム也トテ、其制稍大キクナレリ、武士ノ月代ナドノ大キクナレルモ、此比ヨリノ事ニテアル也、カクテ鐵炮トイフ物出來テ、其彈丸ノワヅカモ冑ニフレヌレバ、忽ニ頭サケ腦クダケヽレバ、帽子鉢卷ナドシテ頭ツヽミ、冑チモ着ケルホドニ、次第ニ大キクモ厚クモナリタリ、手反(テヘン)ノ直中ニアル穴、今ハ息出シナドイフ所ヲ飾レルヤウモ、今樣ニハカハレリ、今ハ寶瓶ノ形ニテ、中ヲムナシクセシ物ヲ置テ、其下ニ幾重モ菊ノ花形ヱリスカシタル座

金物ヲウツ、コレヲアゲ玉ナドイフ也、古ノ物シカハアラズ、鞍馬法師預リノ物ト、後三年ノ繪トノ内ニ、コレニ似タル物タヾ二ツアレド、其制大キニ異ナリ、此餘ハ皆其穴ノホトリニハ、今世ニ玉緣ナドイフ物ノ如クナル金覆輪アリ、菊ノ座三重四重アリテ、其下ニハ葵ノ花形ノ座金物アリ、吹返シ特ニ大キクシテ、方五寸六寸七寸五分餘ナルアリ、大ヤウシコロ一枚モ二枚モ同ジヤウニ吹返ス、三枚ニモアレ五枚ニモアレ、皆吹返シタルモアリ、ウケ張ナドイフ物モ、今ノ樣ニ布ヲカサネ縫シニハアラデ、洗革ヲモテ作ル、多クハウケ張セシトモ見エズ、但シウケ張セヌ冑着ンニハ、其故實アルベシ、冑ノ緒モ織物ノ類ヲ、絮(ワタ)ヲ中ニシテ丸ク縫タル物也、冑ノ緒チ世ニハ忍緒ナド云フニヤ、サレド古ノ物ニカヽル名ハ聞キモ及バズ、腹卷トイフ物、何レノ代ニヤ始マリケム、允恭天皇ノ御時、玉田宿禰ガ甲ヲ襖ノ中ニ服タリシ事ノ見エシコソ、日本書紀後代ニ下腹卷ナドイフ事ノヤウニ覺エレ、此物ハ古ノ物猶今モアルスクナカラズ、其制大ヤウハ鎧ニカハラネド、前ヨリ左右ニ繞リテ、後ニテ引キ合ス、又背板トイフモノヲモテ、後ノ透間ヲ

フサグ事、タトヘバ鎧ノ脇立ノ如シ、此板ヲ又臆病ノ板トイフニヤ、サレド此板ノ事昔ノ物ニハ見エズ、吉野ノ吉水院ニ古キ腹卷アリ、義經ノ物ナルニヤ、藍革ニ紅ト白ト紫トノ絲ヲ以テ威セシナリ、背板ナド云フ物ハアラズ、某ガ家ニアル所モ古代ノ物也、其背板ハ腹卷ト代ヲ同ジクセシ物トハ見エズ、此制モトハ衣ノ下ニ着ンズル物ナルヲ、上腹卷ナド云フ事出デ來タレバ、背板ナド云フ物モ出來シナルベシ、源平盛衰記ニハ、佐藤四郎兵衞尉忠信ガ射タル矢、菊王丸ガ腹卷ノ引アハセヲツト射ヌキシト見エケリ、引合トアラムカラニ、必ズ背ノアハヌ物トモ見エズ、此物ハ弦走ノ革モナク、草摺モ今樣ノ物ノ如クニシテ、前後左右ニ七枚アリ、此物ヲ衣ノ下ニ着タルヲバ、下腹卷ナドイフ、又弓ヲツヨクヒカンタメニ上ニ着ル事モアリ、上ニ着ル時ハ袖ヲモツク、上腹卷ニ袖ツケシナドイフ事是也、サレドコレラハ異體ノ事ニヤ、マタ胴丸、腹卷、金胴、鐷ナド鎧ノ下ニカサネシ事モアリケリ、（今世ニ着籠トテ鐷ニテ作レル物ハ、古ニ鐷ナドイヒケル物ニヤ、）腹當トイフ物ハ、前ニノミアタリテ、左右ノ脇ハワヅカニカヽリテ、ソレヨリ綿嚙ヲ出ダセリ、其綿嚙ニセメヒボアリテ、後ニテカク、草摺モ前ニ一枚アレド、ユルギノ絲トイフモナクテ、一下リアル也、此物特ニ下部ノ着ベキモノ也、筒丸トイフ物、又胴丸トモカク、胴ヲカコミシ形ノマロク、竹ノ筒ニ似タレバ、カクイフヨシ下學集ニハ注セリ、春日社本談議屋ニアル楠正成ノ鎧ト云フ物ヲ見シニ、卽チ胴丸ノ制也、黑革威ナルガ、縫ノベナド云フ物ノ如クニシテ、馬手ノ方ニテアヒヌレバ、脇立ヲ用ユルニ及バズ、草摺ハ八枚ナリ、障子ノ板弦走ノ革ナドモナク、栴檀板ヲバ杏葉ヲ以テ代ヘタリ、袖ハ今イフ大袖ノ制也、同ジ毛ノ三枚冑ニ鍬形ヲ打ツ、（正成ノ物也ト云フ正シキ證モアラズ、冑ノ吹返ニウチシ金物ニ菊ノ立枝アリ、コレニヨリテカク云ヒシトキコユレド、楠和田等ノ家ノ紋ハ世ニ菊水ト云ヒ傳ヘテ、古キ紋盡ト云フ物ニアルヲ見ルニ、後ノ金物トハ大ニ異也、）金胴トイフハ、今ノ桶皮ナドイフモノ、類ナルニヤ、其制イマダ詳ナラズ、明德ニ一色左京大夫ガ鎧ノ下ニ着タリシ金胴ハ、赤地ノ曇子ニテツヽメルヨシ見エタリ、

今ノ鎧ハ、古ノ筒丸、金胴ナドイフ物ノ制ニヨリテ作レルナルベシ、（今ノ制出來シ始、イマダ詳ナラズ、織田殿ノ比ニ、尾張國ニハ桶皮トイフ制ヲ用ヒシヨシシルセルモノアリ、サラバ此制其比ニ出來シニヤ、サレド高館ノ草紙トイフモノニ、桶皮胴トイフ物ヲ鎧ノ下ニ着タリシナドイフ事アリ、此草紙イヅレノ比ニ出來シトイフ事ヲバシラネド、此制織田殿ノ比ニ始マレルニモアラジ、）今ノ具足トイ

フ物出來シヨリ、古ノ制ハ既ニ廢レテ、其制ノ同ジカラヌニ、世ノ人今ノ物具ニ、古ノ鎧ノ名所ヲ附會セテ名付ケイフ程ニ、ヲノヅカラ誤レル事モ多ク、又近代ノ俗ニ出テ、古ノ物共ニ見エヌ名モアリ、タトヘバ胸金物トイフ物ヲ、今ハ矢トマリノ金物トイヒ、胸板ノハタ覆輪トイヒシヲ、今ハ矢トマリノヒネリカヘシトイフ、一ノ板ヲ弦走トイヒ、二ノ板ヲ栴檀ノ板トイヒ、高紐ヲ相引ノ緒トイヒテ、引合ノ緒ヲ高紐ナドイフ類ハ、アヤマレル事ニゾアルベキ、又ヲシツケノ板トハ、スベテウシロヲモイフ、又ハ綿嚙ノ横板ノツギノ板ヲモイフナリナドイフ人アリ、篠原ノ戰ニ齋藤別當實盛ガ手塚ガ郎等ノ鎧ノヲシツケノ板ヲツカマヘ、左ノ手ニテ手綱カヒクリ、左右ノ鐙ヲツヨクフンデ引キオトシ、馬ノ腹ニ引キツケテヒツサゲモテユク、足ハ地ヨリ一尺許揚リタリト見エシモ、マタ水島ノ合戰ニ、越中ノ次郎兵衛盛繼ガ、矢田判官代義淸ニ冑ノ鉢ヲツヨクウタレテ、冑ヲ打チオトサレ、目クレテ大刀ノ打チ所ハ覺エザリケレト、打チガヘタリケルニ、義淸ガ右ノ顏ヲ筋カヘニヲシツケノ板ニキリツケシナド見エシモ、共ニ源平盛衰記ニ皆綿嚙ノ横板ナドイフ物ノ事ニテアル也、其下ノ板ナラムニハ、イカニツカマフル事モ、又顏ヲスヂカヘニハキリツクル事モアルベシヤ、又其次ノ板ヲ逆板トイフモ誤レリ、逆板トイフ物ハ其制ノヨノツネノ板ニカハレバコソ、カクハ名付タルナレ、今制ノ如クナラムニハ、イカニカクハ名付クベキ、胴ノ終リノ板ヲバ、古ニハイカニヤイヒケム、イマダ見ル所アラズ、臆病金ナドイヒシハ、ウシロノ終リトゾ聞ユル、今ハ前ノカタヲ保天左幾トイヒ、ウシロノカタヲ胴尻トイフニヤ、草摺モ古ノ制ニカハリテ、腹卷ナドノヤウニ、其數ヲ多クナシテ、計佐牟ナド名付イフ也、此名近代ニ出デタレバ、シカルベキ文字モ見エズ、其前板ヲ幾牟加久之ナドイフコソ、ムゲニアサマシキ事ナレ、今ヤウハ左右ノ袖ツケタルハ希也、タトヘ袖ツケタルモ、中袖ナドイヒテ、其形小シキナレバ、昔樣ヲバ大袖ナドイフ也、應仁ノ記ニ、ヒロ袖トイフ事見エタレバ、昔ヨリ袖狹キモアリケルニゾ、足利殿ノ重代ノ御着背ヲ小袖ト名付ケラレシカバ、其比ヨリ袖ノ小シキナルモノアリケリ、但シ今イフ小袖ハ籠手ニツクリ、ツケタルヲイ

ヒテ、ソレヲ又ヨノツネノ袖ツクルヤウニシタルヲバ、置袖トモイフ也、凡ソ鎧ノ札ニ、今ハ異樣ノ物ドモ多ク、又威毛ノシゲキトアラキトノ異ナルモアレバ、其名各カハレリト見エレド、古ノ物ニ聞エシ所ニモアラズ、又世ニタメシ札トイフ物アリ、菊池肥後守武光ガ、延文ノ比、軍起サムトセシ初、ヲノガ着背ノ料ニ三八張ノ精兵ニ、草摺ヲ一枚ヅヽ射サセテ、透ラヌ札ヲ一枚マゼニコシラヘテ威セシ事見エタレバ、太平記ニ其比ヨリ此事アリケリ、サレド今弓ヲモテ試ミルニ、裏カヽヌハ必ズ鳥銃ニハタマラズ、鳥銃ニヨクタヘヌレバ、鏃必ズ透ル、コレ剛柔相制スルトコロ異ナルガ故ニ、各宜シキ所アレド、フタツナガラ全キ事ヲ得ガタケレバ也、サラバ其益ナキニコソ似タレ、ツハモノヽ戰場ニノゾミテ、矢石ノ中ニ立タムニ、弓ト銃トイヅレヲカエラバン、タトヘ鐵ヲ十重廿重カサネタリトモ、其透間ナカラザランニハ、イカニ身ヲバハタラカスベキ、スデニ透間アリナムニハ、敵モソコヲコソウカヾフベケレ、鎧ヲ穿タムモノ、ヒトリ此二ツノ物ニカギルベシヤ、大刀、刀子、槍、長刀猶アリ、アマリニ高名アラムトテ、我命ノ限アルヲモシラデ、身ニアハヌオモキ鎧着テ、思ヒカケヌ死ヲ招ガン事ハ口惜シキ事也、但シ大將軍ノカヽル甲冑多ク作ラセテ、戰士ノ膽ヲ壯ニセンガタメニ、軍ニ從フベキ事ハ必ズコレヲ用ユベキ時アルガ故也、自ラ備フル例トハ同ジカルベカラズ、又今ノ制ニ後ノ領ノ上ヨリ、左右ノ肩ノ上ニ至ルマデ、織物ノ類ヲ用ヒテ、襟廻、肩當、小鰭ナドイフ物ヲ作リ、前ノカタニ再拜付ノ鐶トイフアリテ、腰ザシ、サシ物ナドサヽム料ニ、後ノカタニ、ガツタリ、ウケヅヽ、ナドイフ物アル事、コレラ古ニハアラヌ物ナリ、

冑ノ制モ、今ハ異樣ノ物ドモ多ク出來テ、盡クカゾフルニイトマアラズ、其名所モ又古ニカハレルアリ、今世ニ八幡座トイフ所ハ、弘安禮節ニ見エシ神宿（カンヤドリ）トイフ物ニゾアル、此所神宿トイヒシ事、イカナルイハレカアリケン、オモフニ、昔蘇我馬子宿禰物部弓削守屋大連ト戰ヒシ時、厩戸皇子束髮於額（ヒサゴハナ）シテ、馬子宿禰ガ軍ノ後ニ隨ヒ給ヒシガ、白膠木（ヌリテノキ）ヲキリトリテ、俄ニ四天王ノ像ヲ作リテ、頂ノ髮ニ置キテ、我ヲシテ敵ニ勝ツコトヲ得セシメ給ハヾ、必ズ護世

四天王ノタメニ、寺塔ヲ建テマイラセムト誓ヒ給ヒシニ、馬子ガ軍ツキニ勝コトヲ得タリケレバ、ヤガテ其御願ヲハタサル、今ノ攝津國ニアル四天王寺コレ也、サレバ冑ノ頭上ハ、彼四天王ノ像ヲ置カレシ所ナレバ、其所ヲカクハ名付ケタルラメ、又冑ニ四天ノ星トイフ物アルモ、又白膠木ヲ勝軍木ト名付テ、凡ノ軍器ニ用ユル事モ、皆コレラノ事ニヤ始マリヌラン、八幡座トイフ事モ、彼神宿トイフ事ニヨリテ、附會セテヤ名付ケタルラム、コレラノ名出來シヨリ、鉢付ノ板ノ上ニメグレル金物ヲ、玉垣ナドイフ事モ出來ヌ、カヽル名ドモ古ノ物ニハ見エズ、彼四天ノ星ノ下ニ、小シキナル穴ヲウガツ、世ニハ赤熊付ノ緒引キ出スベキ料也トイフ、白熊、黒熊、赤熊ナドイフモノハ、犛牛トテ、西番(番カ)ノ地ニアル畜ノ尾ニテ、異朝ニテモ紅纓白纓ナドイヒテ、盔ノ上飾スル物ナリ、我朝ノイニシヘ、此物ニテ冑飾レル事ハ聞カズ、近代唐ノ頭トイヒテ、冑上ニハカケシ、星ニモ大星小星打出シナドイフアリ、筋ニモ密(キビシ)キアリ疎ナルアリ、今ハシノダレトイフ物ノ數ニヨリテ、二方白四方白、八方白ナドイフ也、古ノ制トハ少シクカハレリ、

前ニ角本、祓立ナドイフ物アルハ、前立物タツベキタメ也、昔ノ物ニモ鍬形、應角ナド打チシカバ、此物モ見エタレド、其名ハ聞エズ、吹返、シコロノ制、昔ニクラブレバ、今樣ハ其形コトノ外ニ小シキニナリタリ、冑緒近代ヨリ忍ノ緒ト云フ、古ニハカヽル名モ聞エズ、

近代ヨリ銅鐵ノ類ニテ作レル笠ノ漆ニテヌレルヲ冑ニカヘテ足輕ノツハモノニ著スル事アリ、此事何レノ比ニ始マレルニヤ、フルキ繪共ノ中ニ、笠キタル者コヽカシコ見エタレド、戰ノ場ニテ笠キタリシ事ナドシルセシモノハイマダ見ル所アラズ、サレド昔瓊瓊杵尊此國ニ降ラセタマフ時、高皇産靈尊、紀伊國忌部遠祖手置帆負神ヲ作笠(カサヌヒ)トサダメ、彦狹知神ヲ作盾(タテヌヒ)トナシ、天目一箇神ヲ作金(カナダクミ)トナサレシナドイフ事(舊事記ニ)ソノ事ガラ、ミイクサノ備ノヤウニナム見ユ、又古ノ冑ニツケシ幟ヲ、笠注トイヒシ事モ、イカサマニモイハレアル事ニゾアルベキ、異國ニモ氈笠トイフ物ヲモテ冑ニ代フルコト今モ猶アル俗ニテ侍リ、

鐵面具トイフ物、異朝ニテハ齊ノ蘭陵王ニ始レリケリ、(前ニ詳也)我國ニテ始レル事、イヅレノ比ニカアリケン、

保元ノ異本ニ、義朝ノ半頬ガケ、爲朝半頭(ハツブリ)キラレシナドイフ事ハ見エタリ、ソレヨリ後、半首(ハツブリ)、頬當、目ノ下ノ頬當、半頬ナドイフ物、フルキ物ドモニ見エシ所スクナカラズ、コレラノ物近代ニ及デ、古ノ物見エズナリ、又古ニアラズシテ出來シモアリ、古ノ物ナレド其名カハレルモアリケリ、マヅ今イフ半首トイフ物ハ、異朝ニテイヒシ鐵面具、我國ノ昔頬當トイヒシ物ニテアリ、今頬當トイフ物ハ、古ノ目ノ下ノ頬當ニテ、古ノ半頬ヲバ今ハ猿頬ナドイフ事ニヤ、熊野頬當トイヒシモノ太平記ニハ見エシカド、其制ハ詳ナラズ、古ノ半首トイフモノ見エズナリショリ、古ニ頬當トイヒシ物ヲ、今ハ半首ト名付テ、古ニ聞ニヌ喉輪ナドイフモノハ出來ニケリ、古キ畫ニ冑ノ下ニ半首着タリシ兵ドモ繪カキシヲ見シニ、賀茂祭ノ圖、後三年繪、保元平治物語ノ圖ナドニ、其制モ各同ジカラズト見エシ、大ヤウハ甲ノ鉢ノ如クナルヲ、頭ノ半ニテ合セ造リタリケレバ、半首トハイヒケル也、多クハ黒ク色ドレリ、黒ク塗リシ形ヲウツセシニヤ、又白ク色ドリテ縁ニ赤キ縫メアルアリ、又染革ニテ包ミシニ、コレモ縁ニ赤キ縫メアルアリ、サラバ黒塗ノミニモアラズ、白革染革ナドヲモテ包ミシモアリシナリ、或ハ眉ノ上ヨリ左右ノマナジリニ至レルアリ、此制ハ目ノ下頬當キム料ナルベシ、或ハ眉ノ上ヨリ左右ノ眼ノ下ニ至レルアリ、此制ハ半頬カケム料ナルベシ、コレラ内冑射ラレザラムタメニシテ、又半頬目ノ下ノ頬當ナド着タラムニハ、其面ヲ全ク掩フベキ料トコソ見エタレ、保元ノ戰ニ、鎌田兵衛尉正清ガ射タル矢、八郎爲朝ノ左ノ頬サキ半頭ノ間ヲ射削リテ、冑ノ手サキニ射ツケシト見エタルモ、保元物語ノ異本ニ今ノ物ノゴトクナラムニハ、何レノ所ノ隙ヨリカ其間ヲ射削リテ、面ニハ傷クベキ、又今川五郎範國ガ八々王(ハツハワウ)トイフ大刀ハ、敵ノ着タル冑ノ鉢ト半首トヲ打破リテ、鉢卷キレテ、其頭ニ創オハセタリケレバ、カク名付ケタリ、八ヲ二ツ重タル故也ト難太平記ニシルセルモ、今ノ物ノ如クニ面バカリヲ掩ハムニハ、冑ト共ニ鉢二ツ打チワリシトハイフベカラズ、サラバ古ニ鐵鉢、革鉢ナド聞エシ、此物トコソ見エタレ、三代實錄ニ、元慶ノ初、出羽國ニテ蝦夷ノ爲ニ奪ハレシ戎具ノ事シルサレシニ、甲冑ノ外、マタ鐵鉢、革鉢、木鉢ナド云フ物見エタリ、ソレガ中、木鉢ハ今モ蝦夷ニハ其遺制アル也、又涎懸トイフ物、今ハ頬當ニ綴レル物ナレド、古ノ物ハ其制異ナリシニヤ、欽明天皇御時ニ、頸鎧(アカヘノヨロヒ)トイフモノ見エシヲ、與多利

加氣トイフ物也ト釋日本書紀ニハ注セリ、手蓋（テカヒ）、小手（コテ）（マタ籠手ニモ作ル）、小手ノ袋ナドイフ物フルキ物ドモニモ見エタリ、（小手ノ袋ト云フモノ、太平記ノ中ニ）判官殿ノ物也トテ南都ニアルハ、今ノ制ニ少シク異也、腕ト臂トノアタラム所モ、タオホヒモ、黄ニ返シタル板ヲ或ハ雲形或ハ花形ナドホリスカシタルニ、其下ニ黒ク塗レル革ヲ黏タル也、手蓋ノ形ハ、今鯰形（ナマツナリ）ナドイフゴトクニ指ニ近キ所マドカニシテ錦ノ赤革ヲモテ指カケ手クビノ緒ナド作リタリ、肱ニアタル所モマドカナル金物ニ菊花ノ形ヲキザミチリバメシヲ黄ニ返シテスベテ鏁ニテツラネシ也、冠ノ板ハ、廣サ六分、長サ三寸許ニテ中ニ當ル所ニ鵐目ウチシ穴アリ、コレヨリ組ヲ引出セルナルベシ、左右ノハヅレニ、廣サ五分許ノ革緒アリ、コレラ皆鎧ニツクベキ料ナルベシ、淺黄ノ布ノ三藤ノ紋染メタルヲ、家（表カ）トナシテ、裏ノ方ヲ組ニテカヽレル事今ノ制ニ異ナラズ、筋ノ織物ニテ小手ノ袋縫ツケタリ、（コレハ鎧直垂ノ袖ヲシ入ルベキ料也、）今ハ篠小手、筒小手ナドイフ類、或ハ桴或ハ瓢ナドイフ物ヲ鏁ニテツヾレルナド其制猶多シ、又小シキナル袖ツケシナドモアルニヤ、（コレチ毘沙門小手トイフ歟、）

脛楯（ハヾタテ）トイフ物ヲ、佩楯トカク、然ルベカラズ、此物ノ名、古ノ物ニシルセル事イマダ見ル所ナシ、（玄惠ノ庭訓往來兵具ノ名ドモシルセシ所ニモ、此物ノ名ハ見エズ、サラバ鎌倉ノ世ノ季マデハ、其名聞エザリシニヤ、）太平記ニ膝鎧ト云フ物見エタリ、古キ平治物語ノ繪ニ、今ノ寶幢脛楯ト云フ物ノ如クナルヲ着シモノ只一人アリ、是其膝鎧ト云ヒシ物ナルベシ、明德ノ比ニハ因幡脛楯ト云フ物見エタリ、（明德記ニ）今寶幢脛楯ト云フ物ハ、小札毛引ク事、鎧ノ如ク三枚下リニシテ、下ノ板ヲバ左右各三ニワカチテ、菱縫スル事、草摺ニ同ジ、其板ノ上ニハヨノツネノ如ク力革鞭サシナドイフ物アル也、鏁袴（クサリハカマ）トイヒシハ、今モ世ニ蹈籠ナドイフ物、其遺レル制ニテ、是外今ハ異樣ノ物多ク見エタリ、古ニ大立擧臑當トイヒシ物、今モナヲ其制ノコリタリ、銀ノ磨付ナドイヒシモ、此物ヲ白銀ニテ飾レルナルベシ、騎馬ノ時、此制殊ニ勝レシモノニヤ、今此制ニ倣ヒテ其形小シキナルアリ、（毘沙門臑當トイフ、其立擧ノ所ヲ十王頭ナドイフ、）又篠立ナドイフ物モ、昔ヨリアリシニヤ、古畫ニカキタルヲ見タリキ、鉸具（カク）ズリトイフ所ヲ革ニテツクルハ、鐙ノ鉸具（カコ）ノアタル所ナルガ故也、雲圖抄ニ、布衣騎馬殊ニ刷フ時、毛沓ヲ用ユ、帶ア

リ、革帶ノゴトシト見エタレバ、古ハヨノツネ騎馬ノ時ニモ用ヒラレキ、物ノ具シタル時ノミ用ヒシニハアラズ、軍ノ場ニ用ユル物モ其人ノ品ニヨレル事ニヤ、木曾追討ノ時、九郎義經院ノ御所ニ參ラレシニ、義經ハ熊皮ノ頬貫ヲハキ、自餘ハ牛皮ヲハクトゾ源平盛衰記ニハシルセル、但シ頬貫ハ卽チ履也、後三年ノ繪ニ此物ヲ用ヒシモノ多ク見エ、又其制半靴ノ如クニシテ、譬ヘバ世ニ馬上沓ト云フ物ノ如クナルヲハキシモノコヽカシコニ見エタリ、其繪カキシ樣、黃色栗色ナドノ革ノ其毯モ同ジ色革ナルニ紋アル也、志貴山緣起ノ繪ニ、熊皮ニテ作リシガ、毯ノ所ヲバ織物ヲ用ヒシ如クニ繪ガケルアリキ、コレラ今モ世ニアル馬上沓ノ制ニハ少シク異ナリ、熊ノ皮ノモミタビトイフハ、古ノ制イカニヤ有ラン、今モ世ニアル物ノ如クナリシニヤ詳ナラズ、又鎌倉年中行事ニハ、鎌倉殿鏁ノ單皮（タビ）メサレシトイフ事アリ、此モノソレヨリ前ノ代ヨリヤアリケン見所ナシ、

萎（モミ）烏帽子トイフ物、又ハ引立烏帽子トモイヒキ、古ノ武士ヨノツネニ折烏帽子ヲ着タリ、物ノ具シテ冑キルニ及ビテハ、其折リタルヲ引キ立テ、其上ニ冑ヲ着、冑ヲ脱ギヌレバ、又其頭ヲ引キ立ツ、サレバ此等ノ名ハアリシ也、保元ニ安藝判官基盛ウハオリシタル烏帽子ノ上ニ、白星ノ冑着タリシト見エ、義朝錦ノ直垂ニ折烏帽子引キタテ、、脇楯バカリニ大刀佩キタリト見エ、共ニ保元物語屋島ニテ奈須余一ガ扇射タリシニ、冑ヲバ脱ギテ童ニモタセ、揉烏帽子引キタテ、薄紅梅ノ鉢巻セシト見エ、十郎藏人行家平家追討ノ院宣カウブリシ時ニ、引立烏帽子ニ鎧着ラレシト見エ、共ニ源平盛衰記ニ和田合戰ノ時、義盛スデニムカフト聞エテ、相摸守義時折烏帽子ヲ立烏帽子ニ改メ、水干着テ御所ニ參リシト見エシモ、東鑑皆々此事ヲ云フナリ東鑑ニ武士ノ折烏帽子、立烏帽子等ノ事見エタリ、コレハ諸屑、左屑、風折ナドイフ物ニハアラズ、今世ニ侍烏帽子ナド云フ物ハ其折烏帽子ノ遺制ナリ、烏帽子ノコハクナリテ額ナド出來シハ、鳥羽院ノ御時ニ始マレル由見エタレド、今鏡幷ニ神皇正統記等武士ノ烏帽子ハ猶ヤワラカナリシカバ、梨子打烏帽子ナドモ云ヒシナリ、衣服ニ梨子チ打ツト云フハ、フクサ張トテ、糊ノコハカラヌ也、又過ギニシ比上洛ノ時、東寺ニ詣デシ日、佛前ノ漆器ノ制チ問フ事侍リシニ、其法師ノ答ヘテ、梨子打ニモシサフラフト云ヒシチ、又其事チ問フニ、譬ヘバ今ノカキアハセ漆ナド申ス事ノ如クニ塗リ侍ルニヤト云ヒキ、彼是チ通ジ考フレバ、薄塗烏帽子ナド云フ物ノ如クニコハカラネバ、又梨子打ト

ハ云ヒシナルベシ、古キ萎烏帽子一頭、一條殿ノ家ニアルト云フ事ヲ聞キ及ビ侍リシカバ、上洛ノ時望ミ申シケレバ、是ハ緣塗ナル由仰下サレテ借シ給ハリキ、古キ平治物語ノ繪ニ、物ノ具シテ烏帽子着タル武士共繪ガキシ中ニハ、此物ノ形ノ如クナル相マジハレリ、其餘幷義家朝臣ノ像、後三年ノ繪等ニ見エシ所トハ、其形同ジカラヌ歟、義家朝臣ノ像等ニ見エシ所ハ、譬ヘバ平禮ノ如クニ頭高クシテ、其形ナヘタルナリ、平治ノ繪ニ見エシ物ドモハ高カラズシテナヘズ、今世ニ白丁烏帽子ナド云フ物ノ如シ、山科中將堯言朝臣ニ問ヒシニ、引立烏帽子モミ烏帽子一物也、其形白丁烏帽子ノ如クニシテ、ヤワラカニ塗リタル也、冑ノ下ニテハタヽマレ、其頭引キ上ゲヌレバ、立烏帽子ニ似タル也ト答ヘラル、彼ノ緣塗ト云フ物、此說ニハ合ヒタリ、サレド義家朝臣ノ像、後三年ノ繪等ニ見エシ物ノ形ニハ同ジカラズ、又野々宮宰相中將定基卿ニ問ヒシニ、引立烏帽子ハ、永仁正安等布衣始ノ記ニ、大納言以下殿上人ニ至ルマデ用ヒシ由ハ見所アレド、其樣ハ見エズ、或人ノ昔ノモミ烏帽子ノ樣也トテ、一條故殿下ニ作リテ進ラセシ物ハ、見タマヒシ物也トノタマヒ、高倉中納言永福卿モ引立烏帽子萎烏帽子等、當時斷、分明ナラヌト宣ヒタリキ、又在洛ノ時、昔樣ノ折烏帽子二頭相求メ得タリ、其中ニ京極樣ト云フハ、古キ繪ニ見エシ物ト相似タリ、サレド折リタルニハアラデ、折リタル樣ヲウツシ作レル也、彼緣塗ヲ以テ其樣ニ倣ヒテ折リテ見ルニ、其形大ヤ（ハシハカフリ）ウタガハズ、サレバ折リタル烏帽子引キ立ツベキ物也ト云フ事ハ知リタリ、日本書紀ニ見エシ圭冠トイフ物ハ、今ノ烏帽子タルヨシ、私記ニハ見エタレド、凡ハ我朝ノ烏帽子トイフ物、其制又多カリ、其中ニ殊ニ古代ノ物也ト見エタル一ツ二ツアリ、其徵トスベキ事モアリケレド、ツハモノヽ具ニアラザ

レバ、コヽニハシルサズ、家語トイフフミニ、君子死スル時ニ、冠ハナタズトイフ事モアリケリ、我國ノ軍禮モ昔ハカクゾアリケル、應仁ノ後打チツヾキタル戰ノ中ニ、夏ノ空ノ熱キニ堪ヘズシテ、月代ナドヲモコトニ大キクサレケルホドニ、マシテ烏帽子ナド着ン事、オモヒモヨラズ、ソノ世ノナラハシドモノコリテ、ヨノツネモ猶異體ノ事ノミ多カルゾカナシキ、又彼鉢卷トイフ物モ、白キ布ヲ用ユルトモ、白キ綾ヲ用ユルトモイヘド、其長モ又傳フル所ヒトシカラズ、コレラノ說皆古ノ制トハ見エズ、此物ノ始ハ、日神八尺瓊ノ五百箇御統ヲ、ミイナタキニマツヒ給ヒシヨリ起レリトコソ見エタレ、神代抄ニ令ニハ衞士ノ朝服、會集ノ日、朱ノ抹額（マツカウ）、挂甲（ウチカケヨロヒ）ヲ加フベシト見エタリ、抹額トイフモノ、スナハチ鉢卷トイフモノニテアルナリ、宗高ガ薄紅梅ノ鉢卷シタルハ、スコブル古ノ儀ヲ存シケル歟、此物ニハ朱ノ色ヲ用ユベキ事、古ノ制ニゾ侍ル、冑ノ額上ニアタル所ナリ、俗ニ末部加字トイヒテ、眞向ノ字ナド用ヒ來レリ、マコトハ抹額トイフコトノ、冑ニモウツリシ也、額ノ字ヲ加字トヨム事、イニシヘノナラハシ也、帽額トカキテ毛加字ナドモヨミタリ、日神丈夫ノ武備ヲ設ケ給ヒシ時、ミクシヲアゲテミヅラトナシ、御裳ヲ引キマツヒテ袴トナシ、八坂瓊ノ五百箇ノ御統ヲ其御髻鬘（イタヾキ）ト腕ニマツヒ給ヒシ、彼御袴トイフ物ハ、今甲冑ノ下ニ四幅袴着ル事ノイ

ハレ歟トイフ事、清三位ノ説ニ見エタリ、崇神天皇ノ御時、武埴安彥ガ軍ノヒトヾモ、甲ノ下ニ褌着タリシ事見エタレド、日本書紀コレハ四幅袴ナドイフモノニアラズ、ハダバカマノ事也、世ハルカニヘダヽリテ、武藏守義宗、左兵衞佐義興等ノ人々、足利殿ト武藏野ニ戰ハレシ時、將軍ノ先陣平一揆、小手ノ袋四幅袴笠符マデ、一色ニ皆赤カリシナドイフ事見エシカバ、太平記ニ其比ハ甲ノ下ニ四幅袴トイフ物着ケル也、サレバ日神御裳引キマツヒ袴トナサレシトイフ事ヲ、宣賢ノ卿今見ル所ニヨリテ、カクハ釋カレシモノナルベシ、シカハアレド、凡本朝ノ俗ハ異朝ノ制ニ同ジカラズ、表ノ袴ヲモテ裳ニカフル事ナレバ、日神ノ御裳引キマツヒ給ヒシコトハ、オヨソ袴ノ始ニテ、甲冑ヲ帶スル時ニ用ユル物ニカギルベカラズ、但シ丈夫ノ武備マウケ給ヒシ時ノ御裝ナレバ、八坂瓊ノ五百箇ノ御統ヲ腕ニマツヒ、御裳ヲ引キマツヒ給ヒシナドハ、後代ニ鎧、鎧直垂ナドヨソホフ事ノ始也トイハマシ、鎧直垂トイフ物、古代ニハ聞エズ、永福卿堯言朝臣又定基卿ニ問ヒシニ、各知リ給ハヌ由答ヘラル、人車記ニ保元ノ時ノ事ヲ記サレシニ、高松殿ニ武士ヲ召シ集メラル、平清盛朝臣、紺ノ水干小袴、紫革威ノ鎧、賴盛敎盛重盛同ジク武裝ヲ備ヘテ相從フ、源義朝赤地ノ錦ノ水干小袴、賴政以下各々思々、多クハ紺ノ水干小袴、或ハ生絹、皆鎧ニ折烏帽子、髓充、革ノ貫ヲ着ク、僮僕胡籙ヲ負ヒテ冑ヲ持ツト見エタリ、保元物語ニハ、清盛賴政等ノ事ハ見エネド、義朝此時ニ赤地ノ錦ノ直垂ニ、折烏帽子引キ立テ、脇立バカリニ、大刀ヲ佩クトシルシ、異本ニモマタ赤地ノ錦ノ鎧直垂ノ由見エタリ、サラバ其比ハ水干小袴ヲ物ノ具ノ下ニ着タルモノヲバ、鎧直垂ナドモ云ヒシニヤ、又其代ニ鎧直垂ト云ヒシ物ハ、水干ノ制ノ如クナリシカバ、人車記ニカクハシルサレシニヤ、後三年ノ繪ニ見エシ所ハ、皆々水干ノ制ニ異ナラズ、凡鎧ノ下ニ着ンズル物、狩衣水干等ハヨノツネノ直垂ヨリハ、其便宜シカルベキ物也、鎧着ル時ニ、左ノ小ダモトヨリ手ヲ出ダシテ、袖ヲバ射向ノ小手ヲオシ入ル、小手ノ袋ノアルハ此料也、義家朝臣ノ像幷ニ後三年ノ繪ニ、小具足バカリシタル體ヲ繪ガキシ所、皆々此様ナリ、又水干ト云フ物、紗、平絹、生絹ノミニモ限ルベカラズ、白キ唐綾ニ龍ヲ繡シタル水干ハ玉葉ニモ見エ侍リシカ、サレバ錦ヲモ用ヒタリシナルベシ、鎧直垂ト云フ物モ、當時着用ノ直垂ニ異ナラズ、タヾ錦金襴ヲモテ作レルヲ、袖ト

袴ノスソトヲ結ビ、其上ニ鎧ヲキル也トイフ説アリ、色帶東目南朝正平七年二月、穴太ノ宸居ヨリ住吉ニ遷幸アリシ供奉ノ人々戎衣也、色々ノ織物ノ鎧直垂タリト、中園入道相國ノ御説ニ見エシカバ、錦金襴ニカギレルニモアラズ、マタ色々ノ織物ヲ用ヒシ也、又アル説ニ鎧直垂トイフモ、ヨノツネノ物ニカハラズ、タヾ左右ノ襟上ニ九ツト八ツトノ菊トヂアルベシ、コレ九萬八千ノ軍神ヲ勸請スルノ義也トゾ、光源院公方ノ御物也シトイフ物ノ制ヲ見シニ、マコトニヨノツネノ如クナルガ、錦ニ裏ヲ打チタル也、袖ニモ袴ノスソニモ括(クヽリ)アリ、其外ニ錦ニテ作レル脛巾(ハヾキ)アリ、露アラム所々ニハ、紫ト白キトノ菊トヂ二ツヅツアリテ、左ノ襟ニ紫ノ菊トヂ八ツ、右ノ襟ニ紫ノ菊トヂ二ツト、白キ一ツトアリ、左右ノ襟ノ菊トヂ、ヨノツネノ物ニ異ナレド、アル人ノ説ノ如ク九ツ八ツアルニモアラズ、九萬八千ノ軍神ト云フ事、鎌倉ニアル所ノ平家ノ赤旗ト云フ物ニモシルシタレバ、古ヨリイヒモ傳ヘシナルベシ、サレド吉田ノ二位兼敬卿ニ軍神ト云フ事ヲ尋ネ問ヒシニ、大己貴命ノ子事代主神ハ八萬四千軍將ノ神也ト云フ事アリト答ヘラレキ、或説ノ如クニ鎧直垂ノ襟ノ上ニ、軍神勸賞ノ菊トヂズル物ナランニハ、左ニ八ツ右ニ四ツアルベキニヤ、サラバ光源院殿ノ御物也ト云フ物、右ノ襟上ノ白キ菊トヂ一ツヲ失ヒタリシモ知ルベカラズ、又鎧直垂必ズシモ菊トヂアル物トモ思ハレズ、源平盛衰記ニ見エシ静憲法印ガ平相國入道ノ許ニユキシ時、グシタリシ童、滋目結ノ直垂ニ菊トヂシテ、下腹卷ニ矢負ヒキ、木曾殿ノ最後ニ巴ガ都ヲ出デシニハ、紺村紅ニ千鳥ノ鎧直垂ヲキタリシガ、闘寺ノ戰ニハ紫格子織付ケタル直垂ニ菊トヂシゲクシタルニ着カヘタリ、鎧直垂トイフ物ニハ、必ズ菊トヂアランニハ、カクシルスニモ及ブマジヤ、渡邊源三競狩衣ニ、菊トヂ大キラカニシタルヲ着タリシ事モ見エタレバ、菊トヂセム事直垂ニノミ限ルベカラズ、又錦金襴等ヲ用ユルヨシモ一定ノ事ニモアラジ、古ノ時錦ニテ作レル直垂ハ、大將軍ニ非ザルハタヤスウキズ、齋藤別當實盛ガ屋島内府ニ望ミシモ、其イハレトゾイフナル、サレド佐那田余一義忠ガ青地ノ錦、畠山重忠ガ紺地、又青地ノ錦ナド着タリシ事、イカナル故カアリケン、又十郎藏人行家、平家追討ノ事ヲ承リシ日、縫物ノ紺ノ直垂ニ鎧着テ、院參セラレシ事モ見エタレバ、大將軍タラン人、カナラズ此物着ラレシニモアラズ、平維盛東國ニムカハレシ時、赤地ノ錦ノ直垂ニ、大頸端袖ハ紺地ノ錦ニテ裁レシト見エタルハ、其色コソカワレ、皆錦ニ

テアリケル也、燧ガ城ノ戰ニ、加賀ノ林六郎光明ガ嫡子今木寺太郎光平、褐ノ直垂ニ袖ヲバ紺地ノ錦ヲツケ、水島ノ戰ニ飛騨三郎兵衛景家ガ褐ノ直垂ニ大領耳袖ニ赤地ノ錦タチ入レシナドシルセシハ、直垂ニハアラズ、襖トコソ見エタレ、源平盛衰記ニ見エシ所ナリ、台記ニ仁平三年春日祭使還立ノ日、其諸大夫大舍人助雅亮、纐文紗ノ襖耳袖大頸ニ錦ヲ用ユルノ由見エ、又玉葉ニモ治承二年春日祭使ノ共ノ諸大夫源國輔還立ノ日、布白襖、ミガキニテ、端袖、ノホリ頸、摺染唐綾ニテ替ヘシ由見エタリ、繪師草子ト云フ古キ繪ニ、此物着タリシモノ見エタリキ、スベテ是等ノ事ニヨリテ按ズルニ、保元ノ比ヨリ水干ニモアレ襖ニモアレ、鎧ノ下ニ着ヌルヲバ、皆々鎧直垂ナド云ヒシ武士ノ俗也ト見エタリ、金襴ノ直垂トイフ物、古ニハ見エズ、足利殿ノ比ニ、鎌倉殿ニハ金襴ノ肩衣ニ小袴ヲメサレシナド、其時ノ物ニワヅカニ見ユ、鎌倉年中行事錦織物ノ外ニ又縫物ノ直垂アリ、源三位頼政ノ鵺射シ時、マヅ其家ニテ男山ヲ拜ムトテ、生衣ノ捻重黄ナル大口ニ、初紅葉トイフ直垂ヲキラレキ、其直垂ノ左ノ肩ニ八幡大菩薩ト縫ヒ、右ノ肩ニ山鳩ヲ縫ヒケリト見エシモ、八郎御曹司爲朝カチンニ、色々ノ絲ニテ獅子ノ丸縫ヒタル、十郎藏人行家ノ縫物ノ直垂、巴ガ紺村紅ニ千鳥縫フタル、大夫敦盛ノ着タリシ練貫ニ鶴縫フタル、上總五郎兵衛忠清ガ縫摺ノ直垂ナド、皆其物ニテアリケル也、河越太郎重頼ガ蝶ノ丸、梶原源太景季ガ大文ヲ三ツヅ、書キタル、佐々木四郎高綱ガ三目結、熊谷二郎直實ガ鳩ニ寓生縫フタルナドハ、皆其家ノ紋ヲツケシ也、惡源太義平ノ練貫魚龍ノ直垂、長瀨判官代重綱ガウスアヲノスヾシノ魚龍ノ直垂、足利又太郎忠綱ガ朽葉ノ綾ノ直垂、佐々木三郎盛綱ガ黄スヾシノ直垂ナドイフ物ノ見エシハ、或ハ練貫或ハスヾシノ直垂モアリケリ、平治ノ時ニ右兵衛佐頼朝浪ゲシヤウノ直垂着給ヒシナド見エタルハ、イカナルモノニヤサダカナラズ、此ヨシ平治物語ノ一本ニ見ユ、世ニ行ハル、印本ニハ紺ノ直垂ト見エ、又一本ニハ長絹ノヨシ見エタリ、按ズルニ、今モキヌヲコマカニ疊ミテ、ソノ襞積メノカサナレル浪ノゴトク見ユルヲ、衣ノハタ袖ナドニツケシヲ、俗ニハケシトイフ也、ケシトイフハ、假粧トイフコトノ譌レルナルベシ、知レラム人ニ尋ヌベシ、保元ノ亂ニ、敎長成雅已下ノ上北面、水干袴ニ腹卷ヲ着シトイフ事見エ、保元物語ノ異本ニ安藝判官基盛ノ白襖ノ狩衣、競瀧口ガ狂文ノ狩衣、又平相國入道ノ生衣ノ帷ワキカキタルニ、赤地錦ノ鎧直垂ニ腹卷シ、木曾義仲ノ赤地ノ錦ノ直垂ニ紅ノ衣ヲカサネテ、紫威ノ鎧着ラレシ、又橋ノ合戰ニ慶秀阿闍梨ガ白帷ノ脇カキタルニ、黄大口ニ萌黄ノ腹卷シ、高時禪門ガ亡ビシ日、長崎次郎高重ガ筋ノ帷

ノ月日オシタルニ、精好ノ大口ノ上ニ赤絲ノ腹卷シタルナド見エタルハ、或ハ水干袴、或ハ狩衣、或ハ帷、又ハ衣ヲモ直垂ニカサネ、或ハ帷ニ大口ヲモ着ツベケレバ、甲冑ノ時カナラズ直垂ヲノミ用ユベキニモカギラジ、足利殿ノ代ニ、鎌倉殿ノ出陣ノ儀ヲシルセシモノニ、鎌倉年中行事小具足バカリニテ、緣塗、金襴肩衣、小袴、籠手、脛楯、臑當、鏁單皮等ナリ、虎ノ皮ノ引敷シ給ヒ、供奉ノ輩モ布直垂ニ引敷セシヨシ、ルシタレバ、其比ハ小具足バカリセム時ニハ、引敷ヲコソ用ヒタルラメ、コノ外ノ物ニ其事ヲシルセルモノヲバ見ズ、近代ニ至リテハ、肩衣ヲバ着ル人モナク、假粧袴ナド云フ小袴ヲモ着、又腰簑ナド云フ物ヲ纏フ事ニヤ、以ノ外異體ノ事ニナリテ、古ノ鎧直垂帷大口ナド云フ事モ聞エズ、

建仁三年十月、鎌倉ノ右大臣殿元服ノ事アリテ、政所始ノ日、始テ甲冑ヲ着給フ時、小山左衞門尉朝政、足立左衞門尉遠元等ガ、甲冑母廬ヲ着スル次第ノ故實ヲ、遠江守義時朝臣悉ク授ケ奉ラルト東鑑ニ見エタリ、サレバ其代ニ鎧ヲ着スル次第、武士ノ家ニ各々相傳フル所アリシナリ、體源抄ニ豐原家相傳フル所、鎧着ル時、音取ノ事ニツキテ、八幡殿着鎧ノ次第ヲシルセシニハ、第一ニ手綱、第二ニ小袖、練貫黄色第三ニ大口、精好第四ニ髮ヲ亂シ、第五ニ鉢卷白布第六ニ弓懸、第七ニ鎧直垂、第八ニ脛巾、第九ニ括、第十ニ髓當、第十一ニ頰貫、第十二ニ脇立、第十三ニ手蓋、第十四ニ鎧、第十五ニ刀、第十六ニ大刀、第十七ニ征矢、第十八ニ弓ノ由シルセリ、手綱トハ下帶ナリ、小袖トハ袖ボソノ事ヲ云フニヤ、括ハ直垂ノ袖括ヲスル事ナリ、此次第ニ烏帽子ト冑トノ事ハ見エズ心得ガタシ、又足利殿ノ比シルセシ物ニ、三議一統大將ニ物具着セマイラスル事ヲシルシテ、第一、ハイダテバシヤウバカマ、鏁(クサリハカマ)袴ナド云フ物ノ事ニヤ、一本ニケシヤウバカマトシルス、脛楯ト假粧袴トノ二ツヲ云ヒシニヤ、第二、コテビタ、レ、小手ト直垂トノ二ツヲ合セ言フナルベシ、第三、脇立、第四、鎧、第五、エビラ上帶、腹ト上帶トノ二ツヲ合セイフナルベシ、第六、臑當、第七、ナシウチ、梨子打烏帽子ノ事ナルベシ、又何方ニテモ敵ノ方ヘ向ケマイラセ、先梨子打ヲ着セ、其後具足ヲ着セマイラス、少モ足ヲ後ヘフマセマイラセヌ樣ニ、間遠ク向ヒテ、カイシヤクスベシ、小手ヨリ始メテ左ヨリ進ラス、上帶ノ後ニトメヲバ合スル也、御冑ノ役御冑ヲ取リテ、左ノ手ニスヱテ持也ト見エタリ、トメヲ合スルトハ、高紐ヲ懸ルヲ云フナルベシ、此二條ハ少シク前後ノ異ナル所アルカ、

保呂トイフ物、其因來ル事サダカナラズ、又サダマレ

ル文字モアラズ、古ニハ保侶、三代實錄保呂、扶桑略記母廬東鑑ナドカキシヲ、其後ハ縨又ハ母衣ナドシルセリ、下學集ニハ縨ヲ母衣トカク事、モトコレ胎衣ニ象レルヨシヲノセ、壒嚢抄ニハ母ノ小袖ナド縨ニ懸ケシ事ノアルヲ、イマダ其因（ヨシ）ノシレザル事モアルニヤトシルシヌ、縨ノ字ハ韻書等ニモ見エズ、幌ノ字ハアリ、コレハ帷幔也ト注ス、其餘世ニイヒナラハセル文字モ多ケレド、皆信ガタシ、武羅、神衣、綿衣等是ナリ、神功皇后新羅ウタセ給ヒシ時、住吉ノ神作出シテ進ラセシトイフ説アレド、正シキ史ニハ見エズ、淸和天皇ノ御世、貞觀十二年三月、對馬守小野朝臣春風奏セシ所ニ、軍旅之儲、啻在ニ介冑一、々々雖レ薄助以ニ保侶一、調布ヲモテ保侶衣千領ヲ縫ヒ造テ、不虞ニ備ヘント望ミ請ヒシ事見エ、三代實錄又宇多天皇ノ御時、寛平六年九月、新羅ノ賊船四十五艘來リテ、對馬島ヲ犯ス事アリ、守文屋善友迎ヘ戰ヒテ、彼大將軍三人、副將軍十一人ヲ始テ、三百二人ヲ射殺シテ、トル所ノ大將軍ノ甲冑大刀弓胡簶保呂等、各一具脚力ニ附ケテ進ラセシ由見ユ、扶桑略記我師ニテアリシ人、母衣ト云フ文字ハ、羽衣トイフ字ヲアヤマリウツシタル也、コレ毦トイフ物也トゾイヒケル、毦ノ字ハ羽毛ノ飾、一ニイハク羽ヲ績（ツムキ）テ衣トス、一ニイハク兜鍪上（カフトノウヘ）ノ飾也ト注セリ、三國志ニ、蜀ノ先主髦牛ノ尾ヲ以テ毦ヲ結ビ給ヒシ事、諸葛孔明呉ノ孫權ニ毦ヲクリシ事、又呉ノ甘寧トイヒシ大將ノ、手ノ兵ニ弓弩サシハサミモタセテ、毦ヲ負ヒ鈴ヲ帶ビサセシナドイフ事アリ、但シ蜀ノ先主ノ結ビ給ヒシハ、髦牛ノ尾ト見ユ、甘寧ガ兵ノ負ヒシ其制ハ聞エズ、梁ノ庾信ガ詩ニ金羈翠毦ト言ヒシハ、翠羽ヲ以テ作リタレバ、羽ヲ績キテ衣トストイフ注ニアヒヌルニヤ、或ハ鳥ノ羽、或ハ牛尾ナドヲモテ作リタレバ、羽毛ノ飾トモ云ヒタルラメ、又兜鍪上ノ飾ト見エシハ、今モ異朝ノ軍裝ニ、髦纓トテ冑ノ上ニ、或ハ紅ナル或ハ白毛ヲカケ、鳥ノ羽ヲ挿ム事アルヲイヒシ也、オモフニ毦トイフ物ハ、三國ノ比、專ラ軍容ノ飾トナセシ物ニゾアリケル、後漢書ノウチニ、ソレトオボシキ物スデニ見ユ、三韓ノ地ニモ其制ニ倣ヒ來リ、寛平ノ御時ノ賊師モコレヲ負ヒタルニコソ、我國ノ軍裝ニ保呂挂ケ、總角付クルハ、神代ヨリノ事ト見ユ、六月晦大祓祝詞ニ、比禮挂伴男、手繦挂伴男ト云フ卽此也、古時比禮ト云ヒシヲ、後保呂ト云フ、其語轉ゼシ也、春風ガ奏セシ

所ニ據ルニ、其代ニハ此物介冑ヲ助テ、身ヲ保ツベキ物ト見ユ、軍裝トノミモ云フベカラズ、只其制ノ如キ今ハタ知ラルベキニモ非ズ、古キ繪共ニ保呂挂ケシ物ヲ畫キシヲ見ルニ、近世ノ制ト大ニ異也、古ハ是ヲ着クベキ樣モ、兵ノ家傳フル所ノ故實アル事ナリキ、建仁三年十月、鎌倉殿御元服ノ後、始メテ甲冑ヲ着給フ日、小山足立等ガ、甲冑母廬ヲ着スル次第ノ故實ヲサヅケ奉ルナド見エシコレナリ、近代迄モ、世ニムカシ保呂ナドイフ物ノ名ハ聞エキ、過ギニシ比在洛ノ日、大塔宮ノ御保呂絹ノ樣也ト云フ物ヲ求メ得タリキ、正シキ證ハナケレド、古代ノ物トハ見エタリ、今樣ハ帛ノタケモ長ク、其幅ノ數モ多クナリシホドニ、保呂籠トイフ物ニ引キオホヒテ、前ニハダシトイフ物立テ、串ヲモテ鎧ノ後ニサス事ニナリケリ、カヽル制元弘建武ノ比ヨリヤ始マリヌラン、（長尾彈正ガ金紗ノホロ、長山遠江守ガ薄紅ノホロ、イヅレモ十幅一丈アリシヨシ、異本太平記ニハ見エタリ、幅多クタケ長カランニハ、古ノ制ニハ異ナルモノナルベシ、）近キ比マデ東國ノ方ニテハ、多クハ古ノ制ヲ用ヒテ、今樣ノ物ヲバ挑燈保呂ナドイヒシヨシ、フルキ人ハカタリキ、昔ヨリキヌハ素ヲモ色アルヲモ用ヒ、或ハヲノガ名ヲモカク、或ハ家ノ紋ヲモツク、又神佛ノ名、經、陀羅尼ナドカキシモ、又袈裟カケテ保呂トセシ事モアル也、古ノ兵ハ最後ト思フ軍ニハ、必ズ母衣ヲモカケ、又母衣カケシ人ノ首ヲバ、其保呂キヌ添ヘテ大將軍ヘ進ラスル事ニゾアリケル、サレバ名字ヲシルスベキ事定マレル式ニヤ、今モ保呂ギヌニ名字カヽム事、其人ノ高キ卑キガ品ニヨリテ心得アル事也トモ云フ也、又近代ヨリ羽織トイフ物ヲモテ、軍裝トスル事アリケリ、古ニハカヽル物アリトモ聞エズ、サレド古ニ羽ヲ績キテ衣トストイヒシハ、此モノヽ類也、サテコソカクハ名付タラメトイフ人アリ、近代マデアリツル昔保呂トイヒケル物、此物ニ似タル所モアレバ、カノ羽ヲ績グトイヒシモ、羽ヲ織ルトイハンモ、其義ノ相遠カラネバ、其名ヲカク名付ケタリケンモ知ラレズ、

母衣袋トイフ物ハ、昔ヨリアリテ、ヨノツネニハ、キヌヲ此物ニ納メテケリ、此物昔ハ錦繡ヲモテ作レリトイフ、太平記ノ中ニ、那須五郎ガ母衣、彼ノ擬祖余一資高ガ（余一ガ名或ハ宗高トモ資高トモシルセル所同ジカラズ、ソノシルセシ物ノマヽニシルシヌ、但シ其繪圖ニハ資高トコソ見エタレ、）屋島ノ戰ニ扇射テ名ヲ揚ゲタリシ時ニ、カケタル薄紅ノ母衣ヲ錦ノ袋ニ入レテ賜ハリシト見エ

シハ、此物ニテアル也、今ノ制ハ文アル織物ヲモテ作リテ裏ヲウツ、長サ廣サ家々ニ傳フル所ノ故實アルメリ、サレド今ノ保呂、古ノ物ニクラブレバ、ソノ制以ノホカニ大キクナリヌレバ、ソノ袋モマタシカゾアルベキ、

本朝軍器考卷九終

本朝軍器考卷十

筑後守從五位下　源　君美彙輯

鹵楯類

日神天窟ニ入リ給ヒシ時、八百萬神、天八湍河ノ河原ニ神會ニツドヒテ、其祈謝スベキ方ヲ議リ、種々ノ物儲ケ備ヘラレシニ、彦狹知神ヲシテ作盾トスト見エタレバ、舊事紀ニ此物神代ヨリアリケリ、サレバ天神地神祭ラル、時ニ、此物ヲ用ヒラル、事モアル也、三十四代ノ朝廷ノ御時ニ及ビテ、推古十一年廐戸皇子朝廷ニ請ハセ給ヒテ作ラレシ大楯ハ、鹵薄ノ類トゾ見エタル、其後四十一代ノ朝廷、持統四年ノ春正月、物部麻呂朝臣大盾ヲタテ、神祇伯中臣大島朝臣天神ノ壽詞ヲ讀ミ畢リテ、忌部宿禰色夫知、神璽劔鏡ヲ皇后ニ奉上テ、天皇ノ位ニ卽カセ給フナドイフ事モ見エタリ、鐵ノ盾ハ十七代ノ朝廷ノ御時、仁德百濟王ノ獻リシヲ、盾人宿禰シテ射サシメラレキ、コレラハ專ラ戎ノ備トゾ覺ユル、大伴毘羅夫連ガ、手ニ弓箭皮楯ヲ執リテ、馬子ノ大臣ヲ守リシトイフハ、倭名鈔ニ見エシ步楯ノ

類ナルベシ、彼鈔ニ兼名苑ヲ引キテ、楯一名ハ樐、太天トヨム、又釋名ニ狹クシテ長キヲ歩楯トイフ、歩兵ノ持ツトコロ也、天太天トヨム也ト注セリ、サラバ後世ニ持楯(モチタテ)トイフ物、歩楯ノ制ニシテ、掻楯トイフハ、カキナラブベキ物、近代ニ疊楯ナドイフ物ノ類ニヤ、ヒシギ楯トイフ物ハ、(太平記ニ見ユ、)竹ニテ作レルヲヤイフ、近キ比鳥銃ノ始マレルヨリ、竹ヲ束縛(ツカネユヒ)テ楯ノ類トナス物ヲ竹束(タケタバ)トイフハ、甲斐ノ武田ノ家ニテ作リ始メシトゾイフナル、(甲陽軍鑑ニ詳ナリ、)

本朝軍器考巻十 終

本朝軍器考巻十一

筑後守従五位下 源 君美彙輯

帷幕類

倭名鈔ニ屏障具ノ下ニ、帷ハ加太比良、幕ハ萬玖、帟ハ比良波利、幄ハ阿計波利、幔ハ本朝式ノ斑幔(マダラマク)ヲ引テ、萬多良萬久、幌ハ止波利、帳ハ此間音長ト注シタリ、此等ノモノ多ケレドモ、陣營ニ用ユル所ハ、帷幕ノ二ツニ過ギズ、日本書紀ヲ見ルニ、廿七代ノ朝廷ノ御時、(繼體)物部連伴跛ノ人ノタメニ襲ハレテ、帷幕燒カレシトイフ事アレバ、コレヲモテ陣營ノ具トスルコト、コレヨリモ猶前世ノ事ニゾアルベキ、帷ハ帷裳ナドイフ事アリテ、其幅ヲ竪ザマニ縫フナレバ、今ノ内幕トイフ物ニテ、幕トイフハ今外幕トイフ物是也、令ニハ兵士毎火、紺布ノ幕一口ヲ備フベシト見エタリ、(義解ニ、一火トハ兵士十人ヲイフヨシ見エタリ、)齊明天皇ノ御時、三韓各御調進ラセシヲ、飛鳥ノ岡本ノ宮地ニ紺ノ幕張リテ、ミアヘ賜ヒシ事見エタレバ、兵士ノ自ラ備フルノミニモアラズ、昔朝廷ニ用ヒ給ヒシモ、ソノ物ニテアリケリ、

倭名鈔ニ唐式ニ衞尉等、六幅幕、八幅幕トイフ事アルヲ引キタレバ、本朝ニモ又六幅八幅等ノ制ヲ用ヒラレシニヤ、古制ハサダカナラズ、飛驒守惟久ガ後三年ノ戰ノ繪、八幡殿ノ幕ノ紋ニハ、鳩二ツヅ、ムカヒシ形ヲカキタリ、ウケツタヘシ事モアリケルニヤ、又洛陽京極ノ北華開院トイフ寺ニ、伊勢三郎義盛ガ物也トテ蝶ノ紋ツケタル幕アリトイフナリ、其制イカニヤアルラン、タヾシ其紋蝶也トイヘバ、義盛ガ物ニハアラデ、伊勢平氏ノ物ナルヲアヤマリ傳ヘタランモ知ルベカラズ、武藏國熊谷ノ庄ニ次郎直實ガ幕也トイフ、今モアリ、寓生(ホヤ)ニ鳩二ツヲ繪ガケル也、コレモ今ハ其全制知ルベカラズ、幕ノ制、體源抄ニ見エシ所ハ、幕布ノ長サ二丈五尺、乳ノ間一尺三寸、縄マゼマゼナラバ乳モマゼ〲、一色ナラバ乳モ一色ナリ、幕串ノ長サ一丈五寸、サキハ、キリコ、ヒヂハ一尺サゲテ打ツ、地ニ入ル事一尺許、一帖ニ六本ト見エ、又南都興福寺多門院ニアル、右京亮大江眞忠(相野ト稱ス)相傳ノ幕ノ圖ニハ、幕ノ長サ本ハ三丈六尺也、手ノ長サ七間半也、手三色打チマゼ、但シ高家ニハ白手也、乳モ同ジ、乳ノ數二十八、幕ノ紋ハ五ツ、又ハ三ツ七ツモ、裾紺、妻黑、地染、當流ニハコレナシ、幕串一帖ニ九本ナドシルセリ、コレラ其シルセシ所同ジカラヌハ、家々ニ相傳フル所異ナル故ナルベシ、近世ノ制ハ五幅ノ布ヲ用ヒテ、長サハ二丈八尺ナリ、是一匹ノ布ヲ用ユルガ故也、一對ノ幕通ジテ十二幅ノ布ヲ用ユベシ、其二幅ハ乳幷ニ手縄ノ料トス、二幅ノ布ヲ一幅ゴトニ四ツニサキテ、其一ツヲ乳トシ、其三ツヲ白キ黑キ青キ色トナシ、手縄トス、乳ノ數廿八ナルハ、天ノ宿ニ象リテ陽トシ、三十六ナルヲバ、地ノ禽ニ象リテ陰トス、又梵字カキ、符字繡ニスルノ類ハ、其物ヲ神ニセンタメニコソ有ルベケレド、皆近世ノ俗ニヤ、古ニハ聞エズ、幕串ハ大將十本、軍士八本、其長サ八尺、稜ヲ八ツニモ六ツニモシテ、上ノ方ヲバ蜻蜓頭、モシハ頭巾頭ト云フ物ニシテ、石ヅキヲ鐵ニテツヽム、頭ヨリ下四寸許ガホドニ折釘ヲウツ、幕ウツ事モ、晝ハ串ヲ内ニシテウツ、夜ハ外ニス、又ミカタニハウツトイヒ、敵ニハヒクトイフ、又オサムルトハイフベシ、ハヅストハイフベカラズ、シホルトハイフベシ、アグトハイフベカラズナドイフ類ハ、武士ノ家ノ故實ナレバ、心得ベキ事也、

內幕トイフ物ハ、十三幅ノ布ヲ用ユ、乳付ノ幅ハ横也、竪ニ十二幅ヲツク、竪ノ幅ノ長サ五尺餘リニモ、又横幅ヲ合セテ、五尺ニモ六尺ニモスルトイフ、乳ノ數ハ十六十八廿五、又ハ十七十五十二ナド一定ノ說ナシ、紋ヲツクル事、横幅ニ五ツナドイフ也、今ハ綵段ヲモ用ユ、又乳付ノ横幅ナキヲバ、暖簾幕ナドイフ也、此等ノ外、舟ニハシラカス幕アリ、

凡幕ニ紋ツクル事、其始未ダ詳ナラズ、古ノ制ニハ、紺布ヲ用ユト見エタレバ、紋ハアラズ、壒嚢抄ヲ見ルニ、武士ノ幕ノ紋ノ字トイフ事アリ、其比マデハカヽル詞マデモ、猶古ノスガタノ遺リタリケリ、後代ニ至リテコソ旗ノ紋ナド云フ事ハアレ、昔ハ兵士私ノ旗幟アル事ヲ得ズ、皆其大將軍ノ用ユル所ニ從フ、（平治物語ニ、平家ハ赤旗、赤幟、源氏ハ大旗、腰小旗、皆チシナベテ白カリケリナド見エシコレナリ、）皆タヾ其陣ヲワカタンガタメニ、帷幕ニハ各ソノ紋ヲツク、武士ノ家紋トイフモノ、此事ヨリ始リシカバ、彼抄ニモ武士幕紋トハイヒケリ、紋ツケシヤウモ、今ノ様ニハアラズ、鎌倉殿ノ幕ハ、混白ノヨシ見エタレバ、紋ヲバ繪ガヽレズ、足利殿ノ二引輛トイフハ、三幅白ノ事也トシルセル物アリ、五幅ノ幕、上中下ノ幅白カランニハ、ノコル所ヲノヅカラ、二引輛ニテアル也、三引輛、又中黑、裙紺ナドイフモ、皆此例ニゾアルベキ、ソノ外ノ紋モアリシ儘ニ、幕ノ中ホドニヲシナラベテツケシヲ、今ノ制ヲミルニ、二引輛三引輛ノ類モ、輪トイフ物ノウチニツク、ソノ餘多クハ輪ノウチニツクルニヤ、古ノ家々ノ紋ヲ見ルニ、輪ノウチニツケシハ多カラヌカ、オヨソノ紋輪ノウチニツクル事ハ、コトニ近キ俗ナリ、コレラ皆古ノ制ヲ知ラヌガイタス所ニゾアルベキ、

床几トイフ物ハ、古ノ胡床也、胡床ハ倭名鈔ニ、此間ニハ阿久良トイフヨシ注セリ、高御產巢日神天照大御神天若日子ヲ此國ニ下シ給ヒシニ、大國主神ノ女下照比賣ヲ娶リテ、八年マデカヘリマウサヾレバ、雉ノ名鳴女トイフヲ下シテ、其趣ヲ問ハシメラレシヲ、天若日子射殺シツ、其矢天ノ安河ノ河原ニマセシ天照大御神高木神ノミモトニ及ビシヲ、高木神其矢ヲトリテツキ返シ給フニ、天若日子胡床ニ寢タリシ高胸坂ニアタリテ死ストイフコト、古事記ニアレバ、此物神代ヨリアリケルニヤ、タヾシ風俗通ニ、靈帝胡服ヲ好ミ給ヒシホドニ、京ミナ胡床作レリトアレバ、異

朝ニハ後漢ノ末ニ出來シ物也、又器物叢談トイフ物ニ、胡床ハ胡人假座シテ睡レバ、此名ヲ得タリ、隋ノ時ニ讖ニ胡トイフ字アル故ニ、改メテ交床トイヒシヲ、唐代ヨリ繩床トナヅクトノシルセリ、風俗通ノ説ニヨレバ、胡國ヨリ出ヅ、叢談ノ説ニヨレバ、胡國ヨリハ出デネド、假坐シテ睡ルベキ物ナレバ、胡人ノ俗ニ似タリトテ、カク名ヅケシ也、イヅレニモアレ、後漢ノ比ニヤ出來ヌランヲ、我國ノ地神ノ代ニ此物アルベシト思ハレズ、サレバニヤ、舊事紀日本書紀ニハ、タヾ天稚彦ノフシタリトバカリアリテ、胡床ニ寢タリシトハ見エズ、コレハ古事記撰バレシ時ニ、此物ズデニアリシカバ、今見ル所ニヨリテ、神代ノ事ニ此文字ヲ誤リ用ヒタル也、古ノ時戰場ニ用ヒシモノ、今世ニアル制ニハアラズトイフ人アリ、心得ガタシヤ、用明天皇崩ジ給ヒシ時、帝ノ御弟穴穗部皇子ノ三輪君逆ヲ殺サントテ、物部守屋大連ト兵ヲ將テ其家ヲ圍マル、逆ノ君ノガレテ後宮ニカクレシカバ、皇子ハ大連シテソレヲ討タシメ、ミヅカラハ胡床ニシリウチカケテマチ給ヒシトイフ事アリ、コレムカシ戰ノ時此物用ヒラレシ證也、モシハ又其形今ノ物ニアラズトイハヾ、梁ノ庾肩吾胡床ノ詩ニ、傳レ名乃外域、入レ用信中原、足欹形已正、文斜體自平トイフ物ハ、今ノ制ニアラザランヤハ、彼梁ノ代ハ我國ニシテ用明天皇ノ御時ヨリハ、猶少シクサキノ代ニゾアタリ侍リ、

敷皮、鹿ノ夏毛ヲ用ユ、皮ノ長サ三尺二寸、廣サ二尺五寸、白毛ヲスコシ殘シテキル也、上ヲ櫛形、又ハ櫛上ナドイフ、下ヲ白毛トイフ也、何ニテモ裏ヲウツ、上ニ緒ヲツク、戰ノ場ニテ胡床ニカクルニモ、ヨノツネ弓射ル時ニシクニモ各其故實アルベシ、

本朝軍器考卷十一終

本朝軍器考卷十二

筑後守從五位下　源　君美彙輯

鞍　轡　類

神代ニ、此葦原ノ中ツ國ニ、保食神トイフアリ、此神月夜見尊ノタメニ擊チ殺サレシニ、其頭ヨリ牛馬ハ化出デシ由、舊事本紀日本書紀等ニ見エタリ、シカルヲ馬ハ百濟國ヨリ來レル所也、保食神ノ化レル所ナリトハ心得ガタシト云フ説アレド、百濟ヨリ來レル由ハ異説也トゾ、私記ニハ見エタル、（萬葉集抄ニモ、昔百濟國ヨリ馬ヲ此國ヘ獻リタリケルニ、イクバクモナカリケレバ、イミジクカタモノニシテ、馬トハ其時ニハ、イバウミ、ノモノトゾ云ヒケル、ソレヲ秦氏ノ先祖コレヲヨク乘レリケリ、サテ帝コレヲイミジキモノニセサセ給ヒテ、ウマトイハント云フ事定マリ、ハジメテイコマ山ト云フ山ニハナチテ飼ハシメ給ヒケリ、其オリ帝ノチボエ有リケル人、其馬ヲ給ハリテ乘リテアリキケル、サレバ此馬ニ乘リタル人ヲバ、イミジクヤンゴトナキ人ニシケル也ナド見エタリ、）又素戔嗚尊刺串伏馬（クシサシムマフシ）タマヒ、天ノ斑駒ヲ剝ニシ給ヒシナド云フ事モ見エタレド、牛ヲ服（ツカ）ヒ馬ニ乘ルトイフ事ノ始ハサダカナラズ、日子遲神出雲國ヨリノボリ、倭國ニマサントテヨソヒタテル時、片御手ハ御馬ノ鞍ニカケ、片御足ハ其御鐙ニフミイレテ歌作ラレシ事、古事記ニ見エタレバ、地神ノ時、鞍鐙ナドイフ物ハ既ニアリケリ、筑後筑前ハモト一國タリシニ、昔時此兩國ノ間ノ山ニ、サガシクセバキ坂アリテ、往來ノ人ノ駕ル所ノ鞍韉（クラシタクラ）摩盡サレシ故ニ、土人鞍韉盡ノ坂トイヒシヨリ、此國ヲ筑紫州トハ名ヅケシヨシ、其國ノ風土記ニハ見エタリ、（筑後風土記）筑紫州トイフハ、伊弉諾伊弉冊二柱神、此大八洲ウミ給ヒシ時ヨリノ名ナレバ、天神ノ時ニ既ニ馬ニ乘ル事ハアリシニヤ、タヾシ二柱ノ神大八洲ウミ給ヒシ始ハ、筑紫州ナドイフ名ハアラザリケルヲ、牛馬化リ出デ、コレヲ服ヒコレニ乘ル事始マレル後ニ、カク名ヅケラレタリケンモシラズ、人代トナリテ後、三十九代ノ朝廷天下シロシメス七年、（天智）近江國ニシテ武ヲ講ジ給ヒ、又多ク牧ヲカレテ馬放サレシト見エシハ、我朝ニテ牧置カレシ始ニヤ、其後ノ令ニ載セラレシ所、廐牧ノ條ニ詳ナリ、又格ニハ王臣ノ馬ノ數限アリテ、コレヲ過グル外ハ、馬畜フ事ヲ聽サレズ、四十代ノ朝廷、（天武）十三年ノ詔ニハ、文武官諸人務メテ兵ヲ用ヒ馬ニ乘ル事ヲ習ヘ、馬アラムモノヲ騎士トシ、ナカランモノヲバ歩卒トシテ、馬兵ニ便ナラザランモノ

ヲバ罰セラルベシナド見エタリ、又三十四代ノ朝廷
ノ御時、推古新羅任那ノ國々ヨリ貢使進ラセシニ、額田
部連比羅夫シテ新羅ノ使迎フル莊馬ノ長トナシ、膳
臣大伴シテ任那ノ使迎フル莊馬ノ長トナサレテ、阿
斗河邊ノ館ニ安置シ給ヒシトイフ事アリ、古ニ聞エ
シ飾馬ノ具、其比ノ制ニヤアルラム、凡ハ古ノ飾馬ノ
具、異朝ノ制ト見エシ物ドモアリテ、今ハサダカナラ
ヌ事ドモ多カリ、古ノ馬ノ飾、菖蒲形、銀面、雲珠、頸總、八子、尾嚢ナドイフ物ノ中、雲珠頸總八子尾嚢ハ、其圖
飾抄ニ見エケリ、又倭名鈔ニ見エシ所モアル也、蔡邕獨斷ニ、金鑁ハ馬冠也、高サ廣サ各五寸、上三華ノ形ノゴトキモノ也トイフ事ヲ引キ
テ、今按ズルニ、俗ニイフ銀面ノ菖蒲形コレ也トゾ注シタル、菖蒲形トイフ物ハ、金銅ニテ菖蒲葉ノ形ノ物三ツ銀面ニタツ也、天仁ノ記
ニ、殿下騎馬シ給フノ間、御額菖蒲形ニツキアタリ給フ、人々危シト稱シキヨシ見エタリ、樓額、倭名鈔ニ沼賀々既トイフ、銀面ノ類ニヤ、
又異物ニヤ、馬ノ額ニアルベキ物也、尾嚢ヲバ尾韜ニ作リ、又考聲切韻ヲ引テ、紛ハ、モテ尾ヲツヽム所也、此物唐尾ニ結ブ時、用ユル具
タルヨシ注セリ、コレヨリサキ三十代ノミカド欽明天皇紀ニ、
皇后ノ御鞍トイフ事見エタレバ、其代ニハ皇后ニモ
御馬ノアリシニゾ、コレヨリ後代ニ至リテハ、其人ノ
品位ニヨリテ、鞍、韉、鞦、轡ノ類、コト〴〵ク皆定マ
レル式アリトゾ見エタル、公卿以下五位以上、黑地鞍、靱負佐大夫尉沃懸地ヲ用ユ、又近衛
次將平文ノ移鞍ヲ用ユ、或ハ貝ヲ摺リ玉ヲ入レ、或ハ薄文ヲ押スナドイフ類卽チコレ也、
倭名鈔ニ鞍ノ下ニ、俗ニ唐鞍、移鞍、結鞍等ノ名アリ

ト見ユ、飾抄ニハ結鞍トイフ物ハ見エズ、倭鞍、水干
鞍ナドイフ物見エタリ、倭鞍ニモ水精地、銀地、鏡地、
黃地、龜甲地、蒔繪鉢鞍等ノモノ聞エタリ、スベテコ
レラノ物、今ハコト〴〵ク詳ナラヌ事ニヤ、其中唐鞍
ノ具ハ、飾抄ニ圖セラレシ所モ、盡クニ備ハレリトモ
見エズ、年中行事ノ繪ニ、飾馬ヲ繪ガキシヲ見テ、ヤ
ヤ其物ヲ想ヒ見ツベケレド、猶サダカナラヌ事ドモ
アリ、後ニ春日社ニ詣デシニ、神殿ノ繪馬ニ繪ガキシ
所ヲ見テ、年比ノ疑トケヌル事共アリ、今モ山料ノ神
寶ノ中ニ、其物アリナド云フ人アリシカド、正シキ物
ヲ見ルニ及バズ、南都正倉院ニアル物也トテ、其圖ヲ
バ見タリキ、龜山院御繪合ノ時ノ賀茂祭ノ繪ニ、唐尾
ニ結ビシ馬ニ楚鞦(ズハエシリガイ)ニ杏葉(ギヨヨウ)付キタルアリ、是ハ和鞍ニ
唐鞍鞦ヲ用ヒシナド云フ物ニヤ、又飾抄ノ唐鞍ノ下
ニ、昔德大寺ノ唐鞍ヲコフテ、コレヲウツストイフ事
アレバ、移鞍トイフモノハ、唐鞍ヲ摸シ作レルヲイヒ
シニヤ、唐鞍ハ其橋(ホネ)ハ黑地、螺鈿玉ヲ入ルナド見エ
テ、平文ノ移ニ、或ハ貝ヲ摺リ玉ヲ入レ、或ハ銀ヲ入
レ、或ハ薄文ヲ押スナド云フ事ハ見エタリ、又古ノ
時、武士ノ用ヒシ物ニモ、鏡鞍、黑鞍ナドイフ物ノ見エ

タルハ、鏡地、黒地ナドイヒシ倭鞍ニヤアリケン、其外黄伏輪、白伏輪、沃懸地、梨子地、貝鞍、白橋(シネホソ)、張鞍、又金貝鞍ナド云モ、フルキ物ドモニシルセシ多シ、世ニ作(サク)ノ鞍ナドイフ物出來シ事ハ、足利殿ノ代ノ始、大坪入道道禪トイフ者アリ、雙ナキ馬ノ上手ニテ、鞍鐙作ル事モ巧ナリケリ、伊勢伊勢守平貞繼馬ニ乘ル事モ、鞍鐙作ル事モ、彼入道ニ受ケ傳ヘタリ、此貞繼トイフハ、尊氏將軍ノ親父讃岐守殿ノ烏帽子子也シカバ、將軍ニシタシウ思ハレテ、ソレガ子孫代々足利殿ノ政所ニゾサフラヒケル、貞繼ガ子孫其工ヲ傳ヘテ作レル所ヲ、カクハ名ヅケシ由、世ニハイヒ傳ヘタリ、伊勢ノ系圖ニハ、貞繼ガ孫伊勢守貞行ガ二男因幡守貞長、鞍作ル工ヲ祖父伊勢守貞信ニウケ傳ヘシヨリ、貞長ガ家鞍作ル工ノ正派也ト載セタリ、又世ニ作ノ家ト稱スル所、三十一代ノ譜ヲ見タリシニ、大坪入道ヨリ畠山中書ニ傳ヘ、畠山又伊勢加賀守ニツタヘテ、因幡入道ニ至リシ由シルセリ、伊勢家ノ系圖ニモ、伊勢守貞繼鞍作ル工ヲ傳ヘシトイフ事ハ見エタレドモ、貞繼加賀守タリシ事ハ見エズ、オモフニ加賀守トイフハ、即チ貞繼ガ子ニテ貞長ガ祖父ナル貞信ガ事ニヤ、(新編系圖ニハ、貞信ハ貞長ガ父ナル由見エタリ、)父ノ貞繼世ニ在リシホドハ加賀守タリケンモシラズ、彼系圖ニヨリテ見ル時ハ、伊勢ノ家ニテ鞍作レル事、伊勢守貞繼ニ始マリ、其子伊勢守貞信是レヲ傳ヘテ、因幡守貞長ニ至リ、貞長ガ子孫代々ニコレヲ傳ヘシ也、其後貞信五代ノ嫡流伊勢守貞宗ガ時、(貞宗ハ、即チ金仙寺トイフ人ナリ、)又其工ヲウケ傳ヘテ、其子貞陸ガ子貞忠等代々ニ其事ヲ傳ヘシ也、此等ノ人作レル鞍、專ラ世ニ行ハレシヨリ、古ノ制ハコトゴトクニ廢レテ、今ハ又異形ノ物ドモ出テ來ヌレド、(ウミナシ、布袋、韃靼、高麗ナドイフ類也、)古ノゴトク高キ卑キガ品ニヨリテ用ユベク、用ヒマジキ定マリシ制アリトハ見エズ、倭名鈔ニ楊氏漢語抄ヲ引キテ、鞍橋、一ニ鞍瓦トイフヨシ注セリ、サレド日本書紀ニハ、鞍ノ前後橋トモ、(推古紀ニ)又ハ鞍瓦ノ後橋トモ(欽明紀ニ)見エタレバ、楊氏ガ説ハ誤レルニヤ、鞍橋トイフハ、今イフ前後ノ輪ニテ、鞍瓦トイフハ、居木(キヽ)トモ由木(ユキ)トモイフ物ト見エタリ、又今ハ前輪ヲ麻惠和トイヒ、後輪ヲ阿止和トイフ、昔ハ麻惠都和、之都和トゾイヒケル、但シ日本書紀ニ見エシ鞍橋君ヲバ、矩羅膩ト讀ヨシ注シテ、鞍瓦後橋ヲバ、久良保爾乃之都久良保爾ト讀タリ、又四方出トイ

フモノ、倭名鈔ニ鞍トイフ字ヲ之保天トヨミテ、考聲切韻ノ鞍ハ、鞍橋ヲ穿ツ皮也トイフ注ヲ引キタリ、鞍ノ穿ツ所ナランニハ、鞍橋トイフハ、前輪後輪トイフ物ニテ、鞍橋一ツニ鞍瓦トイフ説ハアヤマレル事疑フベカラズ、又同鈔ニ韉ノ字ヲ出シテ、唐韻ニイハク、韉ハ鞍鞘也、楊氏漢語抄ニ賀禮比都氣トイフ由ヲ注ス、此説ニヨランニハ、鞍ト韉トハ別ナル物ニテアルナリ、此説モ又誤レルニヤ、鞍トイフ字ハ韉ノ字ノ俗書ニテ、韉ハ鞍邊ノ帶也ト韻書ニハ見エタリ、サレバ鞍韉モト同字ニテ、タヾ正俗ノ二ツアルノミナリ、加禮比都氣トイフ事ハ、今モ四方出ノ後ノカタノ左ヲ捕付(トツツケ)トイヒ、右ヲ物付(モツツケ)ナドイフ名アル、其事ニテアルナリ、之保天トイフ事ハ、鞍ノ海トイフ所ノホトリヨリ出レバ、カク名ヅケシナド世ニイフナルモ、又アヤマレルヤ、（三議一統ニ）タヾ鞍橋ノ四方ニ出デシ帶ナレバ、カクイヒシ也、フルキ物ニハ四方出トコソシルシタレ、（源平盛衰記等）但シ昔ノ四方出ノ形ハ、今ノ如クニハアラズ、譬ヘバ圓カニ小シキナル鏡ノ如クナル金物ヲ、黄ニモ白クモ裝リテ、其裏ノ方ノ鼻ヨリ革ヲ貫キテ、鞍ヲモ穿チ、其革ノ餘リ二條ヲ垂ル、古キ繪ニ見エシ物ドモコト〳〵ク皆此制也、又鞍ニ手形トイフ物ツクル事ハ、平治ノ戰ニ鎌田兵衞政清與三左衞門尉景安トクムデ首ヲトル、比ハ十二月廿七日巳ノ時バカリ、一村雨フリテ風ハゲシク吹キタレバ、鎌田ガ鞍ノ前ツ輪ニツラヽキテ、乘リワヅラヒシヲ、惡源太義平見給ヒテ、手形ヲツケテノレヤトノ給ヒシカバ、打物ヌイテツブ〳〵ト手形切リテ乘リタリシヨリ始マレルヨシ、平治物語ニ見エタリ、今モ世ニ鎌田クリナドモイフメリ、

韉、倭名鈔ニ之太久良、又韀ハ韉ノ短キ也、俗ニイフ駒韉(コマシタクラ)歟ト注セリ、今イフ切付トイフ物是也、駒韉トイフハ、韉ノ小シキナルガ故ニ、駒ニ駕スベキ料也トイフ義ニヤ、又高麗國ノ制ナルニヤ、イマダ詳ナラズ、或ハ韀ハ上切付(ウハキツツケ)トイフ物ニテ、屧脊ハ下切付(シタキリツケ)トイフ物也、併セテコレヲ韉トイフ也ナドイフ人アリ、古ニハ此物ニモ定マレル制アリシ、四位以上豹、五位已下虎皮トモ、（飾抄）三位以上竹豹切付、四位豹、五位虎、六位韋(ナメシ)鹿トモ見エタリ、（拾芥抄）又三峯切付ト云フハ、例ノ大滑無二子細一歟之旨、中園相國ノ御消息ニ見ユ、大滑ノ圖、飾抄ニモ見エテ、金銅ノ金物鈴等アリ、鞍敷ノ下、

紅地錦トモ、又平文移鞍ノ下ニ、大滑畫二雲龍一ナドモ見エタリ、是唐鞍移鞍等ノ時用ユルモノニヤ、行幸ノ時コレヲ用ユルヨシ、後成恩寺殿ノ御說ニハ見エタリ、武家ノ代トナリテ、虎豹ノ皮ノ切付ヲ用ユル時ハ、小泥障(コアフリ)ハサ、ズトイフ事モ見エタリ、(鎌倉年中行事)又鹿子(カノコ)切付ト云フ物モアリ、ヨノツネハ葛(ツヾラ)切付ヲ用ヒシナドモ見エタリ、今ハ皆ヌリタル皮ヲ用ユ、韉脊ハ、倭名鈔ニ奈女トヨミテ、蘇紡ガ切韻ニ、鞍下ノ韉脊也トイヒシ說ヲ引キタリ、今ノ膚付トイフ物也、

鞍褥、倭名鈔ニ久良之岐、俗ニ宇波之岐トイフヨシ注シタリ、凡獨窠錦ヲ以テ鞍褥トスル事ハコレヲ禁ズ、又三位以下紫ノ鞍褥等コレヲ禁ズナド式ニハ見エタリ、(延喜式)飾抄ニ表敷ノ錦、又錦心上敷アリ、緣ハ錦ヲ用ヒ、金文堅食(カタバミ)ヲ付クナド注サル、後成恩寺殿御說ニ、赤地ノ錦ノ表敷トイフ物見エタリ、(桃花蘂葉)今ノ馬氈トイフモノコレ也トイフ人アレド、馬氈ナドイフ物ハ遠カラヌ物ニヤ、世ニ高麗馬氈ナドイフ物ハ、彼國ノ鞍褥タルモ知ルベカラズ、又麕羊ヲ爾久トイフ事ハ、其皮ヲ鞍褥ノ料トスル故也、爾久トハ褥トカクベシトイフ人アリ、モシ此說マコトナランニハ、古ノ俗ニ彼皮ヲ用ヒテ鞍褥トヤセル、未ダ正シキ證ヲバ見ズ、但シ鹿ヲ俗ニ志々トイフ事ハ、宍トイフ義ナレバ、麕羊ヲ爾久トイフモ亦宍ノ義ナリケンモシラズ、

鞍帊、倭名鈔ニ久良於保比トコメリ、今ハ鞍覆ナドカクニヤ、式ニ(延喜)大臣已上鞍ヲ覆フモノ淺紫ヲ用ヒヨ、參議以上ハ深緋、諸王五位以上ハ緑色、諸臣黃色、六位以下用ユル事ヲ得ザレト見エタリ、又薄物ノ繡アルヲモ用ヒラレシコトアリ、天永三年春日詣ニ、中納言中將萠木ノ浮線綾ノ鞍覆タルヨシ、後成恩寺殿ノ御說ニハ見エタリ、武家ノ代トナリテ、足利殿ノ時ニ、御引馬ノ鞍覆ハ豹、大名ハ毛氈、ヨノツネノ人ハ鹿ノ皮ノ夏毛秋毛、モシハ春毛ヲ用ユ、熊ノ皮ヲバ用ユベカラズ、是ハ乘輿ノ物也、虎ノ皮又公家ニ用ヒラル、ヨシシルセル物アリ、(大諸禮)熊ノ皮ハ乘輿ノ物也トイフ事イカナル據アルニヤ、未ダ所レ見アラズ、又赤キ毛氈ヲ用ヒラル、事ハ、公方ノ御物ノ外ハ、宗徒ノ大名ハカケラル、タトヘ色カハリヌルヲモ、昔人ハ憚リシニ、今ハ御ユルシ蒙リテ、誰々モカケラル、事、不覺ナルベシヤト金仙寺ハイヒケリ、(金仙寺ハ、伊勢伊勢守貞宗也、)又鎌倉殿ノ鞍覆ハ、緞子金襴ヲ用ヒラレ、管領ハ兜羅綿、

毛氈、奉公ノ人々ハ播磨皮、又張鞍ニ鞍覆カケ引ク事ナシナドイフ事モアリ、（鎌倉年中行事）

鞦、倭名鈔ニ之利加岐トヨメリ、今ハ之利加以トイフナリ、昔ハ六位以下ノ鞍ノ鞦、總ノ連着懸クル事ヲ得ズ、但鞦ノ黐(ツジ)及ビ後末ニ着クル事ヲバユルサル、（延喜式）又紫籠頭(ヲモヅラ)、鞍帊、緋鞦等皆コレヲ禁ズ、纏鞦ハ制ノ限ニ非ズ、參議已上撿非違使別當已下、府生以上ハ、緋鞦ヲ着クル事ヲユルスナドイフ事アリ、（拾芥抄）又古ノ鞦ハチイサク總モナシ、近代ノ鞦ハ甚ダ大キクシテ總長シト飾抄ニハ見ユ、櫨末濃(スソゴ)、同村濃(ムラゴ)、楚鞦(ズハエシリカイ)、（飾抄）又連着(レンジヤクコ)、小總(ブサ)、辻總(ツジフサ)、紫末濃、小畝(コウネ)連着ナド（桃花蘂葉）イフ物アリ、其中ニ楚鞦トイフ物ハ、延文ノ比既ニサダカナラザリシニヤ、アル人楚鞦トハ畝太、連着トハ平畝ニヤト問ヒ申セシニ、楚鞦ノ體、只尋常ノ鞦ノ外、アナガチニ所レ見アラズトコソ、中園相國ハ答ヘ給ヒケレ、（圖太曆）飾抄ニ、仁安二年齋宮野ノ宮ニ入リ給フ時、五位已上和鞍楚鞦杏葉付ケシトイフ事アリテ、又杏葉ツケシ鞦ノ圖ニ、赤滑或ハ朱漆、廣サ一寸四分、兩方長サ四尺三寸ナドシルサレタレバ、楚鞦トイフ物ハ、赤滑モシクハ朱漆ノ革ニテ作レルヲヤイフ、古ノ武士ノ乘レル馬ノ鞦ノ大總厚總ナドイヒシハ、連着トイフ物ノ類ニヤ、其外大形ノ鞍トイフ物アリ、コレハ畝太ナドイヒシ物ニヤ、又染鞦ノ文アルヲイヒシニヤ、宗尊親王ノ御時ニ、鎌倉ニテ内記兵庫允染鞦ノ故實ヲ注進ス、彼家代々上總國ニオキテ此事ヲ奉行スト東鑑ニ見エタレバ、世ニイフ上總鞦ハ染鞦ノ事ニゾアルベキ、足利殿ノ比迄ハ、紫鞦ハヨノツネノ人用ユル事アタハズ、（大諸禮）又法體ノ人ハ、紺ノ鞦ヲ用ユベシナドイフ事モ見エタリ、（鎌倉年中行事）今ハカヽレル制アリトモ見エズ、今世ニ用ユル所ハ、後末ニノミ總アレド、其色多クハ紫也、此制古ニハイカニイヒシ物ニヤ未ダ詳ナラズ、又世ニ異國ノ毛織ヤウノ物ヲモテツクレルニ、金襴ノ裏打チタルナド見エヌルハ、猶此比ニ出來シ物ナリ、

當胸、倭名鈔ニ楊氏漢語抄ヲ引キテ、班胸ハ無奈加岐ト見エタレバ、班胸トモカクベキ也、飾抄ニハ胸懸トシルサル、今ハ胸懸トカキテ、無奈加伊トイフ也、古ノ飾馬ニハ、鞦ニモ當胸ニモ杏葉トイヘル物ヲツク、杏葉(キヤウエフ)ハ倭名鈔ニ辨色立成ヲ引テ伊倶良トヨム、俗ニ行衣布トイフ由注セリ、此物杏樹ノ葉ノ形ニ似タ

レバ、カクハナヅケシニヤ、飾抄ニ伏輪ハ黄ニ、鏡ハ白シナド見エタリ、凡胸ニ五ツ有ルベシ、鞦ニハカタカタニ五ツヾツ、兩方ニ十ツクル也、其外鞦ニモ當胸ニモ方金物トイフ物ヲウツ也、

䪊頭、倭名鈔ニ唐韻ノ䪊ハ䪊頭也、羈ハ馬ノ絡頭也トイフヲ引テ、漢語抄ニ䪊頭ハ於毛都良トイフ、今按ズルニ、絡頭スナハチ䪊頭也ト注セリ、飾抄ニハ面懸トシルセリ、今ハ於毛加伊トイフ、又面懸、胸懸、尻懸ヲ佐牟加伊ナドモイフ也、式ニハ延喜式紫ノ籠頭ヲバ、六位已下ニハ禁ゼラル、由見ユ、飾抄ニ見エシトコロ、其制胸懸鞦ニ同ジクシテ、タヾ面懸ニハ杏葉ヲツケズ、今世ニ用ユル制、此物ニ大小ノ總四ツアル也、

說文ニ鑣ハ馬銜也、久都波美トヨム、俗ニ久々美トイフ、マタ兼名苑ニ鑣一名ハ勒、野王按ズルニ、勒ハ馬ノ口中ノ鐵也ト倭名鈔ニハ見エタリ、顧野王ノイヘル所ハ、說文ニ銜アルヲ勒トイフ說アルニヨレルナルベシ、サレド馬ノ口中ノ鐵ヲ勒トイフニハアラズ、銜アリテ馬頭ニマトフ物ヲ勒トハイフ也、又釋名ニヨル時ハ、說文ノ說モタヾ其大體ヲイヘルモノニテ、詳ナルニハアラズ、釋名ニ鑣ハ包也、旁ニアリテ其口ヲ包ミ斂ム、爾雅ニコレヲ钀トイフ、一ニ扇汗トナヅケ、一ニ排沫トナヅクト見エケリ、サラバ鑣トイフハ、久都和乃加々美、銜トイフハ久都和乃波美ニテ、スベテコレヲ勒トハイフ也、又倭名鈔ニ見エシ蒺藜銜、宇波良久都和トイフモノハ、飾抄ニ見エシ物ニテ、袍ノ紋ノ轡唐草ナドイフ物ハ、其形ニテアル也、又倭名鈔ニ辨色立成ヲ引テ、承鞚ハ美豆岐、俗ニ三都々伎トイヒ、一ツニ七寸トイフト注セリ、コレハ今世ニ引手蛇口ナドイフ所ナリ、古事談ニ、源義家朝臣ソノ親父ノタメニ、門ノ鑰ヲ取リ收メラレテ、轡ノミヅヽキニテ、ジヤウアケサセラレシト云フ卽チ此也、世ニ手綱ノ兩末ヲ三都々伎ト云フハイカヾアルベキ、或人ノ說ニ、承鞚トハ今ノ世ニ手助、又ハ立聞ナド云フ物也、其組ノ長サ七寸許アレバ、又七寸トモ云ヒシ也ト云フ、サレド古キ繪ニ繪ガキシ物ドモヲ見ルニ、皆々オモヅラヲ世ニ面懸付ト云フ輪ニ絡ヒテ、其末ヲ垂レタルナリ、手助立聞ナド用ヒシ事ハ見エズ、又世ニ面懸付トモ云ヒ、又ハ總ノ輪、立聞ノ輪ナド云フ所ヲ見ルニ、三都々伎ノ蛇口ナド云フ所ヨリハ甚ダ大キナル也、昔ハオモヅラヲ引絡ヒシ事

疑フベカラズ、足利殿ノ比、鞍轡ノ具ノ名ドモシルセシ物ニモ、手助立聞ナド云フ物ハ見エズ、三議一統、下學集、節用集等ニモ見エズ、此物イヅレノ比ヨリ出來シト云フ事詳ナラズ、轡ハ、倭名鈔ニ兼名苑ヲ引テ、轡一名ハ鑣、久豆和都良トヨム、俗ニハ久都和トイフ也、又楊氏漢語抄ニハ韁鞚ナリ、一ツニ馬鞚トイフ也ト注セリ、楊氏ガ韁トイヒシハアシカラズ、其餘ノ說ハ悉誤レル也、鑣ハ久都和乃加々美ニテ、鞚ハ於毛都良ニテコソアレ、轡ハ增韻ニハ馬鞚ナリトイヒ、禮記注疏ニハ馬ヲ御スル索也ト見エタリ、毛詩ニハ六轡在レ手トイフ事アリ、ソレハ古制ニ車ニハ四ツノ馬ヲ駕ス、車ノ轅ヲサシハサム二ツノ馬ヲバ兩服トイヒ、服馬ノ左右ノ外ニアル二ツヲバ驂馬トイフ、凡一ツノ馬ニ、左右ノ轡二條ヅヽアレバ、四馬ニハ八ツノ轡アリ、其左右ノ驂馬ノ内ノカタノ轡ヲバ、車ノ軾ニツナグガ故ニ、ノコル所ハ六轡ナリ、ソレヲ執リテ四馬ヲ御スルナレバ、カクイヒシ也、或ハ鑣或ハ鞚ナランニハ、イカデ手ニハ在ルベキ、又絲ヲ以テスルヲ轡トイヒ、革ヲ以テスルヲ韁トイフトモ見エタリ、サラバ轡トイフ物ハ、我朝ノ手綱トイフ物ニゾアル、韁ハ轡ノ別名也トモ注シタレバ、正字通楊氏ガ韁トイヒシハアシカラズ、又按ズルニ、倭名鈔ニ手綱トイフ物見エズシテ、鑣ノ字ノ外ニ、此轡ノ字ヲ分チ出シタルハ、オモフニ順ノ比ニ、久都和都良トイヒシハ、今イフ手綱ナルベシ、又順ノ比ニモ俗ニハ轡トイフ字ヲ鑣ノ事ニモ用ユレバ、俗ニハ久都和トイフヨシヲバ注シタルナリ、彼是通ジ考フルニ、倭名鈔ノ說、悉誤レルニモアラズ、タダ引用ユル書ニ見エシ、一名ハ鑣、一ツハ馬鞚也ナドイフ事ヲケヅリステヌガ誤レル也、古ノ手綱ハ蘇芳綟、紫綟、楝(ハジ)綟ナドイフアリ、桃花蘂葉又大和鞍ニ、公卿ハ蘇芳綟、四位已下楝綟、移鞍ニハ蘇芳ノ平緒、伏組アリナドモ見エタレバ、節抄移鞍ハ唐ノ制ニヨリテ、伏組アル平緒ヲ用ヒラレシニヤ、絲ヲ以テスルヲ轡トイフ說ニゾアヒタル、武士ノ用ヒシ所サダカナラズ、大ヤウハ布ヲヤ用ヒヌラン、筋手綱ナドイフ物ハ、今用ユル物ノ如ク染メタル布帛ノ類ニヤ、大將出陣ノ時ハ、カツ色ノ手綱ヲ用ユ、勝色トハ黑色ヲイフ也ナドシルセリ、又鏁手綱トイフ物ハ、專ラ戰ノ時ニ用ヒシ物ナリ、

差繩トイフ物、靮ノ字ヲヤ用ユベキ、禮記ニ見エシ羈

靷ノ注ニハ、覊ハ以テ馬ヲ絡フ、靷ハ以テ馬ヲ援クト見エタリ、種々絲、村濃、或打交アリ、櫨絲、蘇芳絲、紫村濃、藤青打交、菊ノ打交、蒴木匂ノ打交ナドイフアリ、白差縄ハ、御禊ノ時用ヒラル、事ニヤ、又公卿ハ差縄、四位已下片縄トイフ事アリ、飾抄イカナルヲヤ片縄トハイヒケン、武士ノ引馬ヒクニ、引手ハ上輩、追綱ハ下輩トイフ事ハ、ソノ引キヤウニ追綱トイフ事アル也、シカルニ今ハヨノツネニ馬ヒク綱ヲ追縄トイヒ、其外ニ小口縄トイフモノヲ又差縄トイフハ、近キ比ヨリノ名ナルベシ、小口縄ヲ小中間手縄ナドモイフナリ、

腹帯、倭名鈔ニ唐韻ノ纕ハ馬ノ腹帯也トイフヲ引テ、波良於比トヨメリ、其後ノ俗ニ波流比トハイフ、又由木搦ナドモ云フニヤ、古キ繪ニ見エシ所、古ノ腹帯ノ制ニハ少シク異也、

鐙、古事記ヲ見ルニ、鞍鐙トイフ物ハ、大國主神ノ代ヨリ見エシ也、倭名鈔ニ、蔣魴ガ切韻ノ鐙ハ、鞍ノ兩邊脚ヲ承クル具也、トイフ説ヲ引テ、阿布美トヨミタリ、古ノ鐙ニ壺鐙、舌長、半舌ナドイフアリ、飾抄ニハ、舌長ノ圖ヲ繪ガキテ、古ノ唐鞍等多クハ舌ナクシテ大輪バカリ也、シカルニ近代踏ミヨキガタメ作ル所歟トシルサレタリ、法隆寺ニ上宮太子ノ鐙アリ、鐵ニテ作レルニ金銅ノ鉸具アリ、年中行事ノ繪ニ、此物見エタリキ、是壺鐙ナド云ヒツベキ物ナリ、其形タトヘバ沓ノ半ヨリサキバカリナルヲ、ノ方ニ鉸具ヲ屬セシ物ナリ、上古ノ唐鞍ノ鐙ニ、舌ナクシテ大輪バカリアリシハ、是モマタ唐鐙ニコソ有ルベケレ、今モ高麗鐙ナド云ヒテ世ニアル物即チ此ノ制也、正倉院ニアル唐鞍ト云フ物ノ鐙ハ法隆寺ノ物ノ如クニシテ、舌アルコト半舌ナド云フ物ノ如シ、今世ニ用ユル所ノ物ハ、壺鐙ニモアラズ、又舌長半舌ノ制ニモアラズ、古ニハイカニ云ヒシニヤ、フルキ繪共ノ見ルニ、飾馬ノ外ハ、皆々此制ヲ用ヒザルハナシ、武藏鐙ト云ヒシ物ハ木鐙ニテ、今ノ世ニ五六ナド云フ物其遺制也トハ云フナリ、佐々木三郎盛綱ガ藤戸渡セシ時ノ物也トイフ物、其カタ〳〵今モ世ニアリ、ソレモ今ノ世ニ用ユル所ノ如クナル木鐙ノ黑ク塗リタル也、西南諸蕃ノ鐙ハ、木ヲ刻メル狀、小籠ノ如クニテ、足指ヲ其中ニカクス、榛棘ニ入リテモ足ヲ傷ラザランタメ也トイフ事、異朝ノ書ニモ見エタリ、范成大桂海虞衡志ニ足利殿ノ比ニ、伊勢ノ家ニテ鞍ト同ジク作レル木鐙世ニ猶多シ、世ニコレラノ制ヲ五六ナドイフハ、五寸六寸ニ作ルベキ定マレル法量アレバナルベシ、又倭

名鈔ニ、楊氏漢語抄ノ鉸具ハ腰帶、及鞍具、銅ヲ以テ革ニ屬スル也トイフ說ヲ引テ、此間賀古トイフヨシ注セリ、コレ今ノ鉸具頭又ハ鮹頭ナドイヘル物也、

鐙靼、逆靼、倭名鈔ニ楊氏漢語抄ヲ引テ、鐙靼一ツニ鐙靳トイフ、美豆孚トヨム、逆靼一ツニ逆靳トイフ、知賀良加波トヨムヨシ注シヌ、世ニハ力皮力革ナドカク也、足利殿ノ比、公方ハ播摩磨カ革ノ白キ力革、金具ヲバ黑皮ニテクケラレ、管領諸大名ハ、金具ヲ紫皮ニテクケラルナドイフ事見エタリ、鎌倉年中行事

障泥シャウデイ、倭名鈔ニ唐韻ノ韓ハ障泥鞍ノ飾也トイフヲ引テ、阿布利トヨム、又西京雜記ノ玫瑰鞍、綠地錦ヲ以テ蔽泥トス、後ニヤ、熊羆皮ヲ以テコレヲツクルトイフ事ヲ引テ、蔽泥ハ障泥也トモ注シタリ、式ニ延喜凡熊皮障泥ハ五位以上コレヲ着ル事ヲユルス也ト見ユ、又金伏輪ノ泥障、或ハ黃絲ノ組ヲ以テコレヲ押フ、御幸及春日詣等ノ時ニ、華族ノ人コレヲカケラル、行幸ノ日、地下ノ前驅ハ泥障ヲサヽズ、攝政乘用ノ馬ニモサヽレズナドモ侍ルメリ、玉葉又常ノ時ノゴトキ泥障ヲ用ヒズトモ、又遠所ノ儀ニ泥障サスベキコトハ、表袴奴袴ナドノ馬ノ汗ニケガレン事ヲイトフガ故也トモ見エタリ、武士ノ騎馬出立トイフニモ泥障サスベカラズ、但アブミズリハクルシカラズトイフ事アリ、泥障トハ毛皮ヲイヒ、アブミズリトハ播摩磨カ革ノマル作ヲイフ由注シタレバ、障泥トハ熊羆等ノ皮ニテ作レルニテ、鐙磨トイヒシハ、今ノ板泥障トイフモノ、類ニヤ、甲冑ヲ帶スル時モ、大ヤウハ泥障ヲバサヽザル也、義家朝臣ノ像、又フルキ繪共ニ畫キシ所モ、泥障サシタルハ見エズ、サレド又源平盛衰記ニハ、熊皮ノ障泥サシタリナド云フ事見エタリ、

今ノ三尺繩トイフ物、古ノ物ニ見エズ、韈ハ絡レ頭繩也ト注セルハ、此物也トイフ人アレド、信トモ思ハレズ、太覆タオホヒヤセガクシナドイフ物ノ馬ノ後鞦ノ上ニ覆フ物アリ、是モ古ニハ聞エズ、又文字モサダカナラズ、昔ノ物ニ太於保比トイフ物共ハアリケリ、指懸ユカケニイフ所ハ、手覆トイフ義也、鞍覆ノ左右ノ端ノ垂レタル所ヲイフハ、垂覆ノ義ナルベシ、サラハ此物ヲモ垂覆ノ義ヲ取ルベシヤ、一說、此物昔ハヤセガクシトイヒシ、多於保比山トイフニカクレテ、八瀨ノ里ノ見エネバ、其山ノ名ニトリテ、多於保比トモイフナリト、サモアル事ニヤ尋ヌベシ、馬ニ駕スル事アランニハ、鞭アル事モ、其來ル事久シカラマシ、國史ニ見エシ所ハ、新羅王神功皇后ノ御船ノ前ニ降リ來ッ、今

ヨリ後乾坤ト長クシタガヒ、飼部トナリテ、船ノ梔ヲホサズ、春秋ニ馬𢪸馬鞭（ムマクシムマブチ）ヲ獻リ、又海ノ遠キヲイタヅガハシトセデ、年ゴトニ男女ノ調貢ラムト申セシヤ始ナルベキ、和鞍ニ乘ル時ハ、蒔繪ノ鞭ヲ用ヒ、平文ノ鞍ノ時、ナヲ蒔繪ヲ用ユルモ難ナキ歟、舞人ハ藤卷ノ鞭ヲ用ユ、馬ヲ馳スルガ故歟ナドイフ事アリ、餝抄武士ノ用ユル所ハ、即チ藤卷ノ鞭ニテアル也、木ハ熊柳トイフ物ヲ用ヒテ、長サハ二尺七寸五分ナルヲ本トス、コレ曲尺ノ定ニモアラズ、竹尺ノ定ニモアラズ、我手ノ寸ヲ用ユルヨシイヒ傳ヘタリ、竹尺トイフ物、下學集ニ鷹杵ノ字ナ用ヒテ、其義ナ注シタリ、モツトモ僻事ニテアル也、コレハ裁縫尺トイフ物ニテコソアレ、倭名鈔ニモ裁縫具ノ尺ノ下ニ辨色立成ナ引テ、尺ハ竹量（タカハカリ）也、太加波可利トヨムヨシ注セリ、又工匠具ノ曲尺モ、辨色立成チ引テ麻可利加禰トヨミタリ、庭乘ニモチ、又ハウツボニサシ、犬射ル時、狩スル時ナド用ユル式、各其故實アル歟、タヾシイヅレモ取柄ハアルベシ、取柄セヌハ略儀也トゾ、古ハ鞭ノ緒、取柄ノ革ト同革ヲ用ヒタリキ、竹根鞭モ其タケ藤卷ノ鞭ニ同ジ、節ノ數ヲ半ニキルベシ、サキヲバ節ノ間ヨリキル、五分三分ノヨリノキハクルシカラズ、足利殿ノ比、紫竹ノ鞭ハ、タダ人ハ用ヒズ、此物ハ御所ノ御物ナルガ故也、又馬ノ具ヲバ無知（ムチ）トイヒ、鷹ノ具ヲバ不知（ブチ）トイフベシナド世ニハイヒヌレド、倭名鈔ヲ見ルニ、鷹犬ノ具ニカヽル物ハ見エズ、古ニハ鷹ナブリトイヒシモノ、日餌ヒ〻嘴ナリスラスル鷹ナブリ鞭ニサシテハ、鞭カトゾミル、ナドヨミタリ、今モナブリブチナドイフ物ヲ鷹ノ不知トハイフメリ、倭名鈔ニ、鞭、無知トヨム、俗ニハ無遲トイフヨシ見エタルハ、フタツノ無ノ字、一ツハウツシアヤマレルナルベシ、源三位賴政藤鞭（ブチ）、桐火桶（キリヒヲケ）、賴政（ヨリマサ）ナドイフ事ヲヨメル歌ニ、宇治川ノ瀨々ノフチブチオチタキリヒヲケサイカニヨリマサルラント見エタレバ、此物無遲トイフハ俗語ニヤ、サラバ倭名鈔ノ無知ノ無ノ字、不ノ字ニヤ作ラマシ、不知トイヒ無知トイフ、雅俗ノ二ツハアレド、其ニ馬鞭ノ事ニテハアル也、カレコレヲ通ジ考フルニ、古ノ鷹ノ具ニ不知トイフ物ハナカリシ也、

令ニ、私家ニハ具裝アルコトヲ得ザレトイフ事ノアルヲ、義解ニハ、具裝ハ馬甲也ト注シヌ、サレバ此物昔ヨリ有リケレド、兵士ノ私ニ蓄フル事ハカナハザリケリ、源平盛衰記ニ、生田森ノ戰ノ時、源氏ノ方ニ、馬冑着セタリシ事見エタリ、其後ノ物ニ、鎌ノ馬鎧太平記ニ金鎌ノ馬鎧明德記ニナドイフ物見エケリ、古ノ制モ

カクヤアリケム、鎌倉年中行事ニモ、タヾ馬鎧トノミアリテ、其制サダカナラズ、今ノ制大ヤウハ革ヲモテ作ル、又馬面トテ、馬ノ頭ヲ蔽フベキ物アリ、此物モ古ヨリアリシニヤ、其名ハ聞エズ、

昔馬寮ノ御厩ノ事ハシラズ、武家ノ厩ノ制古ハ定マレル法ゾアリケル、其中一ノ厩二ノ厩ナドイフアリ、サシ入ル口ノワキヲバ一ノ厩トイヒ、奥ノトマリヲ二ノ厩トイフ、厩ハハシトオクトヲ上等トス、凡厩ニ七ツノ懸物トイフアリ、馬抓、馬刷、竹刀、打刀、爪打槌、勒通縄、薬筒ヲイフ也、コレラノ物モ各定マレル法量アル也、此外剪刀、焼印、粥袋、槽、剉薙等ノ類猶多シ、粥袋亦ヒグツト云フ、萬葉ノ歌ニ、ソ、ツトヨメリ、抄ニク、ツトハ、細キ縄ヲ持物イル、物ニシテ、キナカノモノ、持ツ也トアリ、鼻皮トイフ物、倭名鈔ニハ見エズ、韀ノ字ヲ用ヰベシナドイフ人アリ、倭名鈔ニハ韀ノ字ヲ久佐利トヨミテ、唐韻ノ革轡也トイフ説ト、毛詩注ニ韀ハ金ヲ以テ小環トナシ、往々ニ纒搤スルモノ也トイフ説ヲ引キタリ、革轡トイヒ、金ヲ以テ小環トスナドイフ事、今イフ鼻皮ノ制ニ似タル所モアレバ、カクイヘルナルベシ、サレド轡トイフハ、馬ヲ御スル革ニテ、今ノ手綱ヤウノ物ナリ、韀ノ字、毛詩ニオヨソ三タビ出ヅ、毛氏鄭氏ノ注一定セズ、異朝ノ人モタヾ郭璞ガイハユル、轡ノ把ルトコロノ外、餘リアリテ垂レタル先ヲ革トイフ、條皮ニテツクレル物ナレバ、コレヲ韀革トイフヨシ侍ルヲコソ、ヨシトハスレ、マタ絲ヲ以テスルヲ轡トイヒ、革ヲ以テスルヲ韀トイフトモ見エタリ、サラバ韀トイフ物ハ、革ニテ作レル手綱ノ手ニトル所ノ餘リニテ、鼻皮ナドイフ物ニハアラズ、説文ノ勒ノ字ノ注ニ、馬頭ニ銜ヲ絡フ也、又銜アルヲ勒トイヒ、ナキヲ韁トイフト見エタレバ、銜ナクテ馬頭ヲ絡フベキ物ハ、今ノ鼻皮ノ類ニゾアル、サレドオヨソ我朝ノ物ドモ、アナガチニ異朝ノ文字借リ用ヒントスレバ、似テ似ヌ事ノ多クアレバ、シカジタヾ我朝ニテ世ニ用ヒ來レルマヽニシルシナンガ煩ナキニハ、又張綱トイフ物、紲ノ字ヲ用ユベシヤ、廣韻ニハ繫也、增韻ニハ又馬韁、又長縄也ト注シタル、左傳ニ韁紲トイヒシハ、鼻皮張綱ノ類ニゾアルベキ、紲ハ繫レ馬索也ナド注セシ物モアル也、古今類書纂要足懸トイフ物ハ、倭名鈔ニ絆トカキテ、保太之トヨメル物ニヤ、韁靽ハ馬絆レ足也ト見エタレバ、此字ヲモ用ユベシヤ、帛ノ字又縶ニモ作ル、馬衣ハ、倭名ニ、左傳注ニ馬褐ハ馬被也

トイフヲ引テ、無麻岐沼トヨム、褐トイフ時ハ、今麻ニテ織リシ物ソレ也、帛ヲ以テ作レル物ハ、近キ世ノ制ナルベシ、

本朝軍器考卷十二大尾

文武猶陰陽也、自陰陽二神立於天浮橋上、以天瓊矛畫滄溟、武器之用、既見於鴻荒之世、大日靈貴、光華明彩、照徹六合、文明之象著焉、背負千箭之靫、臂著稜威之高鞆、振起弓彇、急握劒柄、尙武之敎立焉、爾來天鹿兒弓、天羽々矢、十握劒、頭槌劒、弧矢之利、以威天下、而甲冑干櫓、戴仁抱義、其爲用也久矣、生於是邦、不知其製可乎、世固有善其說者、然據今者不能稽古、襲故者不知通變、各立門戶、抵牾標榜、製造之法雖工、而施之事爲、或爽於用、夫車戰古瀵也、房琯用之於陳濤斜則敗、銑鋧新制也、蕭摩訶擲之於呂梁則勝、古今異宜、趣舍隨時、此又不可不察也、蓋軍器之制、有古有而今無者、有古無而今有者、苟非參互考覈遡其源而窮其派、則鼘駁精麁、不可得而審矣、白石先生、慨然有志於斯、敎授之暇、考究制度、論列品彙、不遺餘力、必本之上世、而參之近古、以及今日之所通行、正流俗之訛謬、覈沿革之原始、凡古記實錄、家乘野史、靡不搜揚剪截、羅絡旁午、至若神祠佛宇、暨耆舊之家所藏古物、力能及之者、必親見其製以摸之、質諸載籍、而折衷討論、卒爲一書、書以國字、圖以樣式、務欲使人易曉、而便於製作也、壬寅秋、覺得借觀之、始焉駭其精而確、博而約、

該贍審察、融釋淹貫、中焉覩其聖德太子丙毛槐林之銘、干將莫邪龜文縵理之說、辨析精當、無復餘蘊、然而未敢詑以爲奇、何也、先生聲名溢海內、文章播異域、此特其緒餘者耳、不足怪也、終焉讀弓矢銃砲各有其能、鎧甲厚重反爲身累之論、歎曰、何其識高見偉與、彼佐佐木高綱戒其子重綱之言、若合符契耶、蓋先生武冠累葉、其言必有所稟於家庭、一臠一斑可知其全、而其爲書草壽氏序之備矣、夫復何言、但使先生當述作之盛擧、修曠世之大典、則文武之用、豈特止於如是而已哉、牛刀割雞、長殳刈薺、臨風悵然、援筆而題、

享保七年壬寅下元之日

水戶府下澹泊齋安積覺跋

本朝軍器考集古圖說序

虞夏商周之制、天子有宗器焉、諸侯有分器焉、所以懋昭明德而鎭撫社稷也、周之亦刀大訓、天球河圖、兌戈和弓、垂矢之屬、及魯有夏后氏之璜封父之繁弱、晉有蜜須之鼓闕鞏之甲、陳有肅愼之楛矢石砮、皆前代之物、歷世所以傳寶之也、迨于秦併天下滅諸侯、燔詩書、壞禮樂、擧先王之制與其器偕亡、漢氏以來或有獲先秦彝器、亦唯供奇古寶玩之具而已、安在其懋昭明悳鎭撫社稷者也哉、雖然後之君子因之以觀其象、以考其制、以足徵先王之禮者、蓋有之矣、維我　東方皇天眷佑神聖承統嗣無疆、大歷服郊社宗廟之禮、生民已降未墜厥典、廼至天府所掌、凡國之玉鎭寶器莫不皆有、其佗神廟佛宮世臣故族之家所藏之寶、亦各不失其世守焉、是則天地古今之間、四方萬國之所絕無、而唯　皇朝爲能有之矣、而我所閱者亦不爲不多、每得傳摹圖寫、所以昭其度數文物纖悉無漏浸盈卷軸、非敢以器爲玩也、若彼觀其象考其制以徵其禮、則庶幾好古博雅君子、亦將有取焉、正德乙未春三月筑後守從五位下源君美謹序

集古圖說序

文而武、武而文、是所以文之爲文而武之爲武也、不然則文不文、武不武、而不能并行也、故益贊堯之德曰、乃文乃武、孔子曰有文事者必有武備、有武事者、必有文備、推而言之則其道也德也不外是矣、苟其岐而二之者非所謂道也、我白石先生以文武自任、而彬々如也、其所講述亦有孫子註軍器考之作者以此也、其軍器考凡例中云、軍器之例不可以言傳者別爲其圖附焉、南部氏之序、安積氏之跋、亦皆言之、而先生之文中有考古圖序、新川土肥氏亦爲之跋、先生嘗欲爲其圖、未及成而歿矣、今及軍器考盛行于世、而好事者僞撰其圖附之、觀其所爲謬妄附會多失所置、殆或使先生將不瞑于地下矣、先生妻弟朝倉孫深愛之不措、與岡田又助者謀、而續先生之志、因其所嘗考究者、集錄爲一卷、題曰集古圖說、請序于余、余以不敏辭之、孫也强之不置、其以余之深辱知於先生也、故余遂不以得辭之、因叙其書之所由作與余之所以逡巡於先生以爲序贈之、初余聞先生之名久矣、及其移居于千駄谷也、往叩謁之、其初見之

也、余言及學問之事、則先生曰、予老矣、學問之事皆已忘矣、蓋疑余之志而不受也、再往見之、又如初、其及三四見之也、始喜曰、子之志誠篤矣、予可與共言也、爾來往來敎誨諄々不倦、至於其易簀凡三年矣、厥初誘我以唐虞三代之德、脩己治人之道次之、以守死善道之旨、懇々善誘莫不出於斯者也、於是乃知世之以善詩稱先生、巨文辭議先生者、則徒知先生之表者、不知其意之所在也、是余之所以仰事先生而不自衰也、孫姓日下部、名景衡、奕世英武不隕其聲、其爲人也果毅忠實、有古烈士之風焉、其諳煉武事之深則雖下河邊行平、恐不是過也、惜哉其老草莽而人莫之知也、孫之父諱長治、最善騎射、且通武器之事、遺風綿々、能績箕裘之業云、

享保乙卯秋七月上澣東閣三好文政汝諧謹序

集古圖說凡例

一白石先生所レ著本朝軍器考、其例云レ見ニ于圖一者、蓋先生有レ意ニ于作レ圖而未レ果、無レ幾先生捐レ館、景衡久侍ニ先生一、所ニ親聞見一頗爲レ不レ少、恐ニ其遺忘一采而輯レ之、題曰ニ集古圖說一、以附ニ諸軍器考後一、景衡淺陋寡識、未レ免ニ挂レ一漏レ萬之譏一、君子幸恕焉、

一凡諸器形制、大小長短槩無ニ定式一、竊ニ于書冊邊幅有レ限也、但南京興福寺所藏源廷尉古鎧一副、以ニ本質之半一爲レ度、以ニ五分一爲ニ一寸一、則全式可レ見、

一凡畫者岡田信之、其祖朝鮮王京人、壬辰亂爲ニ我兵一所レ掠、其人無ニ兒息一養爲レ子、居レ東數年、略通ニ國語一、屢問ニ家姓一竟不レ言、及レ長冒レ姓稱ニ岡田氏一、

享保十九年甲寅夏五月朝倉日下部景衡編集

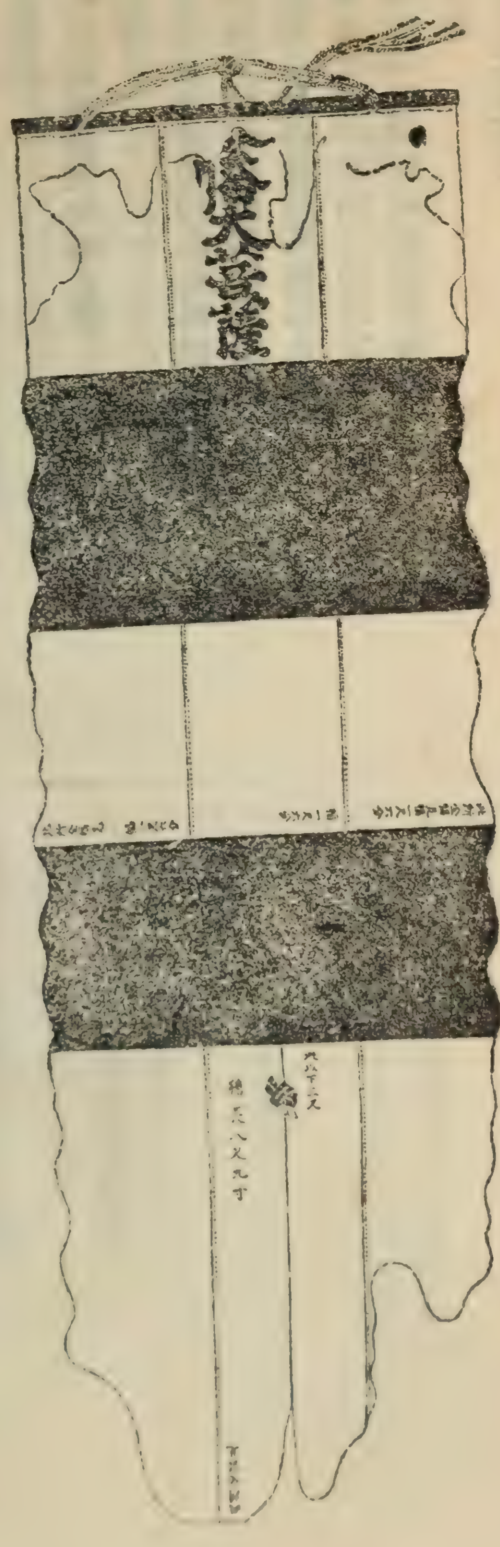
本朝軍器考集古圖說卷之上

目錄

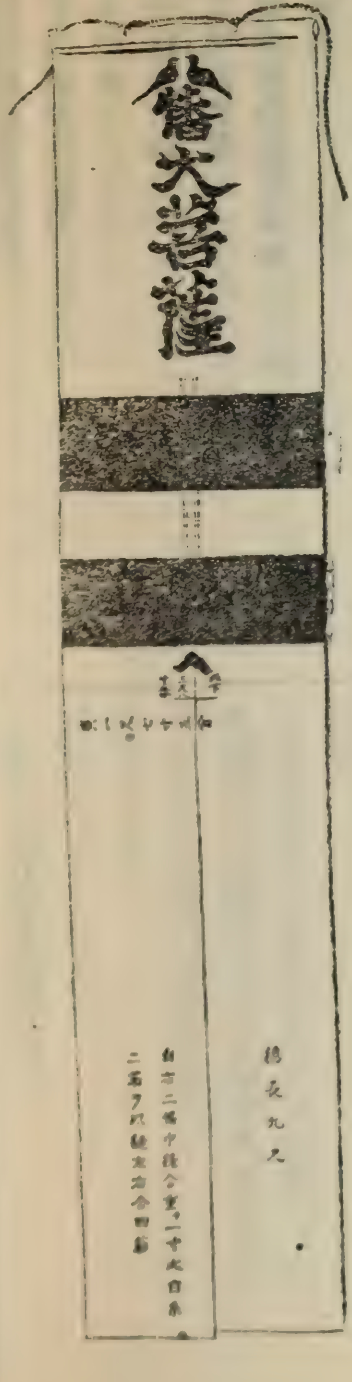
太神宮御寶物圖須我流横刀
太神宮御寶物圖新作横刀
源義家朝臣鞘卷
水戸家藏兵庫鎖太刀
武州熊谷寺藏直實鞍
南都正倉院御寶物圖蒺藜銜
飾抄圖輪無銜
和州法隆寺藏上宮太子壺鐙
同藏上宮太子鉸具
飾抄圖鐙
南都正倉院御寶物圖壺鐙
鏡四方手
南都春日社神殿繪馬飾馬銀面菖蒲形
南都春日社神殿繪馬飾馬頸總
南都春日社神殿繪馬飾馬八子
南都春日社神殿繪馬飾馬雲珠
南都春日社神殿繪馬飾馬杏葉
馬上沓
舞人辻氏藏燧袋
和州三輪社藏大塔宮母衣絹

五十五品

石清水八幡宮藏源義家朝臣旗



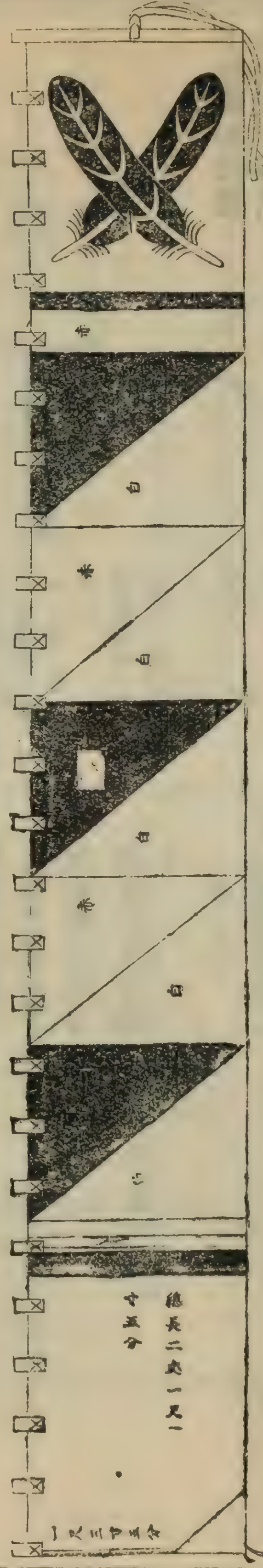
上野國新田後閑家藏源義家朝臣旗



上野國新田後閑家藏源義家朝臣旗袋



大和國吉野郡和田村民藏乃保利乳付旗



大和國吉野郡和田村民藏古旗



太秦廣隆寺藏上宮太子團扇

革二枚ヲ以作ル邊幷柄ヲ挾所革ヲ以縫如圖
一面ニハ朱漆ニテ日輪ヲヱガキ雲ヲ色ドリ
繪カク
一面ニハ朱漆ニテ輪鉾ヲヱガク



柄ノ長一尺一寸鐵ヲ以テ作ル廣一寸厚一分ニ弱シ猪目アリ
羽長九寸六分
總長二尺六分

上野國新田後閑家藏源義家朝臣摺扇

表雲母地薄紅日徑四寸金
裏雲母地銀月徑四寸
骨十二本

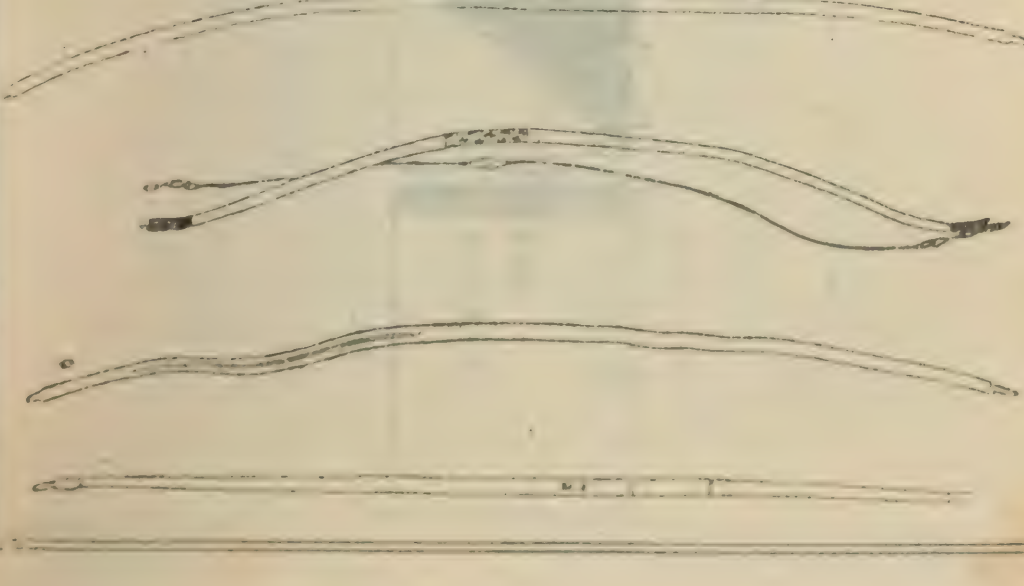


一大和國大安寺八幡宮藏神功皇后御弓
長七尺餘

二南都東大寺正倉院御寶物圖聖武天皇彈弓
弓長五尺四寸

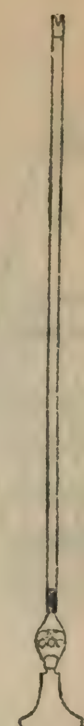
三大和國法隆寺藏上宮太子御弓
長六尺餘

四山城國靜原二宮山王藏天武天皇御弓
木造丹塗重サ九十錢
長六尺八寸五分餘

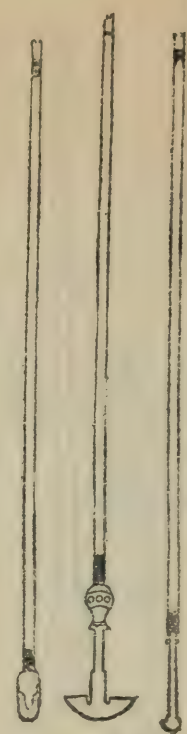


一
二
三
四

攝州天王寺藏上宮太子鳴鏑



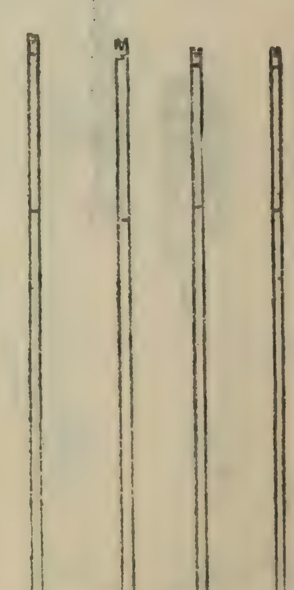
和州法隆寺藏聖德太子矢



和州大安寺八幡宮藏神功皇后御矢



南都正倉院御藏寶物圖矢

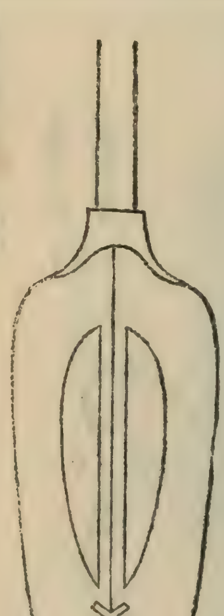


土佐國五臺山藏能登守教經鐵矢頭

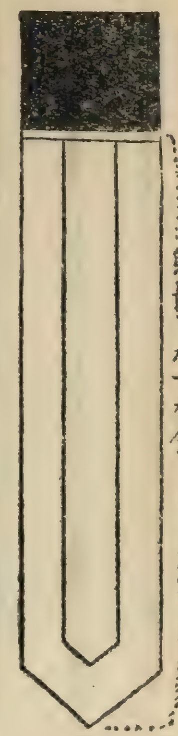


鎭西御曹司爲朝鏃

中心長一尺三寸二分



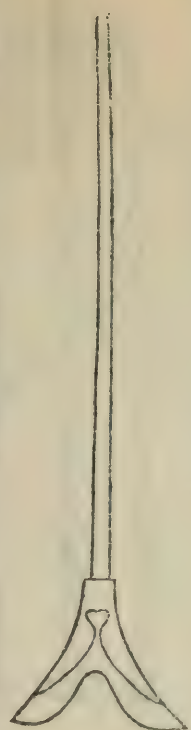
鎮西御曹司爲朝鏃



下野國那須湯泉權現藏與市資高矢



同



山城國靜原二宮山王天武天皇墓目

長一尺二寸　圍九寸六分　重サ四十錢



吉房秘訓圖決拾

緒組三尺二寸
青匂厚平

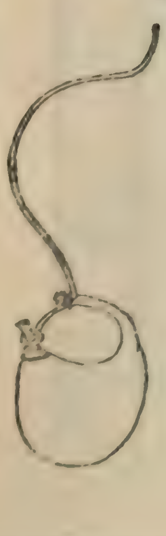


太神宮御寶物圖韘



吉房秘訓圖白韘

韘緒組四尺二寸
花田匂厚平也



年中行事賭弓靫著圖

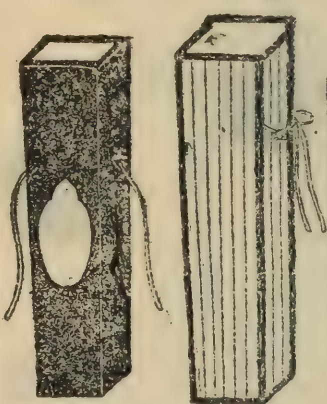


太神宮御神寶圖靫

錦靫

蒲靫

革靫

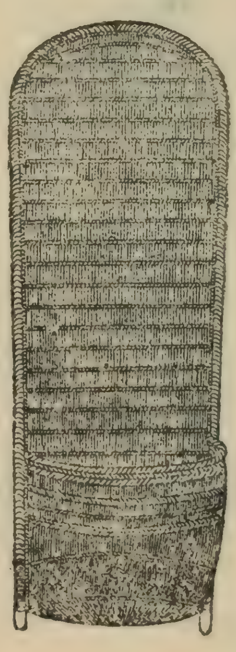


和州法隆寺藏上宮太子靫



大和國大安寺藏神功皇后御靫

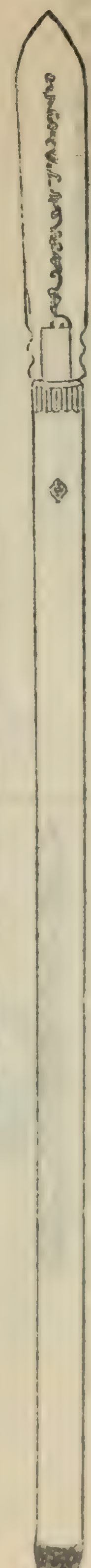
經蒲柳四十五條
緯廿四所編



一
二
三

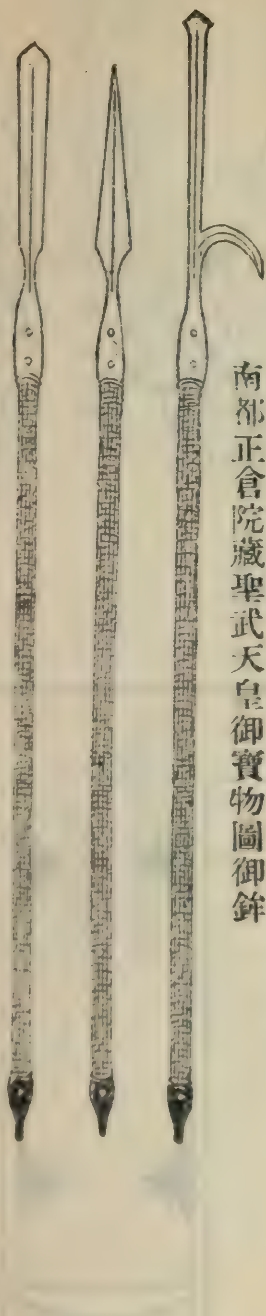


泉州人藏竹箙
一 前
二 後
三 狩箙



山城國静原二宮社藏天武天皇御鉾

刃長一尺二寸二分　柄長五尺三寸五分　圖四寸七分



南都正倉院藏聖武天皇御寶物圖御鉾



攝州天王寺藏七星劍

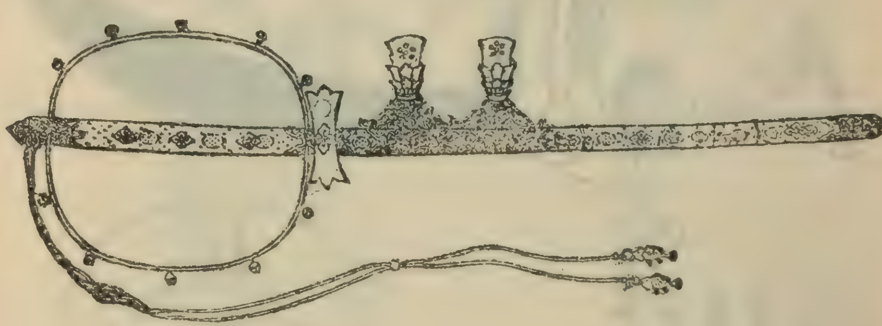


同藏丙毛槐林劍

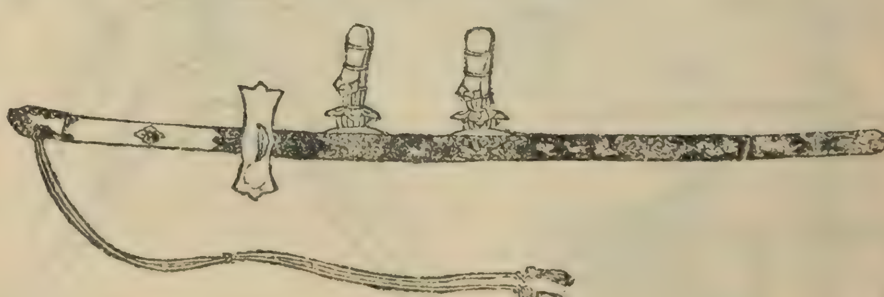
攝州天王寺藏聖德太子像太刀



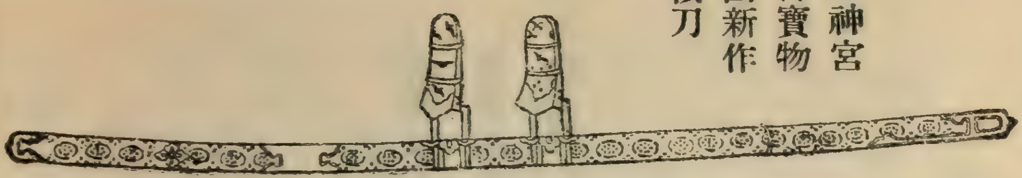
太神宮御寶物圖玉纒横刀



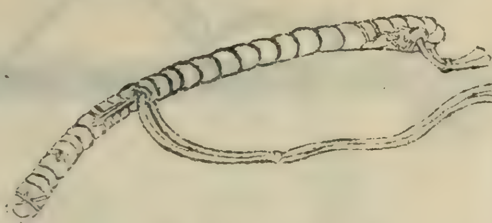
太神宮御寶物圖須我流横刀



太神宮御寶物圖新作横刀



源義家朝臣鞘卷

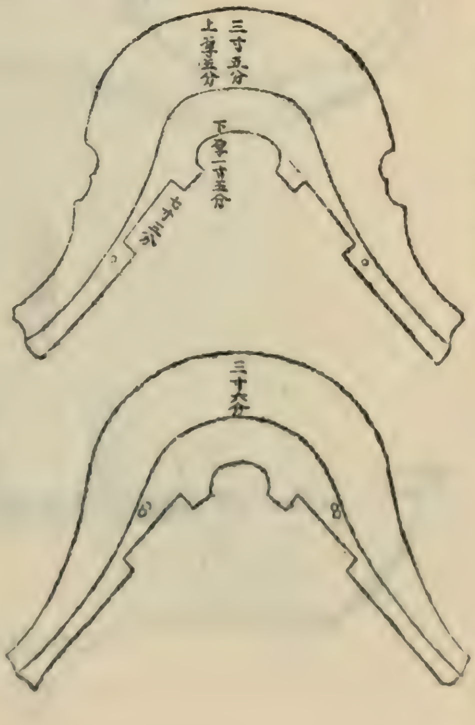


金具不殘銀目貫卷龍柄鞘トモニ朱塗下緒犬マ子キ藍革笄小刀アリ

水戸御家藏兵庫鎖太刀



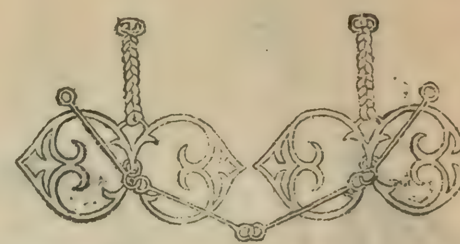
武州熊谷寺藏直實鞍



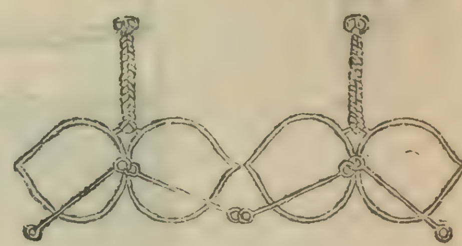
前津輪内
如是畜生
發菩提心
建久元二月七日
熊谷入道法刀



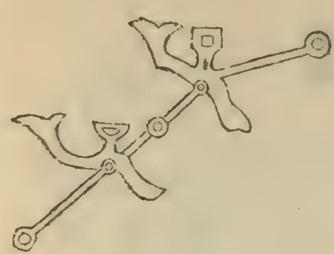
南都正倉院御寶物圖蒺蔾銜



同



飾抄圖輪無銜



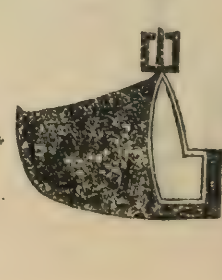
和州法隆寺藏上宮太子壺鐙



同藏上宮太子鉸具



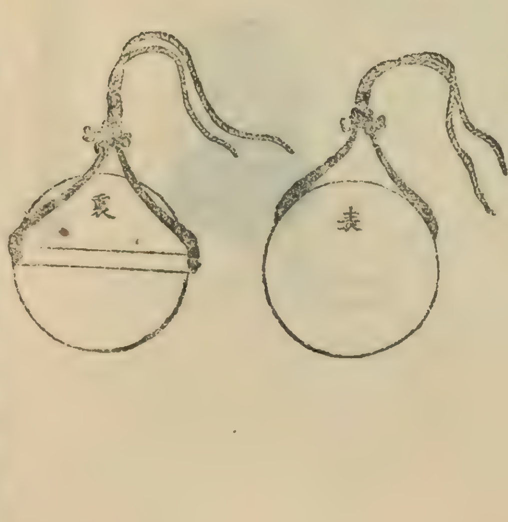
南都正倉院御寶物壺鐙



飾抄圖鐙



鏡四方手



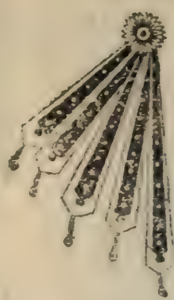
南都春日社神殿繪馬飾馬銀面菖蒲形



同　頸總



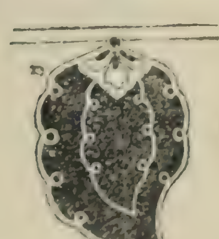
同　八子



南都春日社神殿繪馬飾馬雲珠



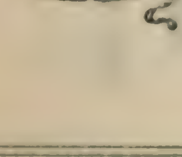
同　杏葉



馬上沓



舞人辻氏藏燧袋



和州三輪社藏大塔宮母衣絹



本朝軍器考集古圖說卷之下

目錄

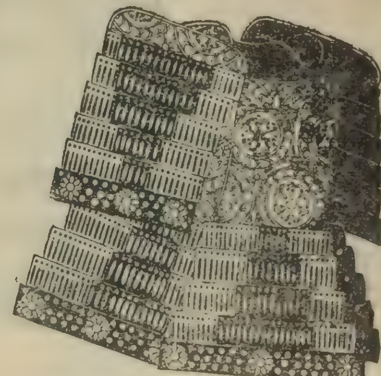
和州法隆寺藏聖德太子御甲冑



後



前



山城州藤杜社藏崇道天皇御甲冑

鉢作形前後指渡七寸六分左右六寸五分深四寸鉢黒塗○筋二十八メッキ○高勝鐶メッキ○四天鋲メッキ○鉢付鋲五所一寸二分宛菊金物二宛有○鍬形臺長六寸幅一寸二分菊唐艸メッキ鍬形長五寸左右同前劔長七寸○息出八幡座玉緣トモニ五重



檜垣メッキ

忍緒四所附何モ鐶也緒長五尺白紺二色打交巡八分

錏五枚下リマンヂウ黒札上二段白絲下三枚黒革威○菱縫紅○耳咔目紫紺白三色打交○吹返歪平革包枝菊紋有左右同前メッキ鐶垂前三後ニ二

請慈板　鐵緞子ニテ包
胸板鐵總廻メッキ表緞子包裏栗色ナメシ革伏組紺白萌黄打交○鳩尾板長七寸八分上幅二寸六分下ノ幅二寸鐵ニテ作ル總巡金物メッキ上ヨリ一寸五分下テ裏ニ緒付鐶アリ表ニ鐶留ノ金物アリ但前座表ハ緞子包裏ハ正平革包○栴檀板長八寸幅三寸五分板三枚下リ小札長二寸二分威絲紫小札三枚ニテ數四十二冠ノ板緣金物メッキ但眞中ニ菊座有次ノ板杉立菖蒲革ニテ包左右菊金物二有耳ノ絲紫白紺三色打交菱縫紅絲七所宛二通ニテ數十四○弦走板杉立菖蒲革ニテ包菊ノ金物二宛三所ニアリ

紫絲威小札長二寸五分



太刀掛板五枚下リ但長サ九寸幅上ノ板一尺五分下ハ草摺ノ板ニテ一尺六寸五分上ノ板ニテ小札數三十八但菊金物二宛三所ニアリ二ノ板小札數四十三三ノ板五十四ツメノ板五十六草摺ノ板六十二有但此草摺板ハ不割シテ一枚ナリ○前板五枚下リ但長九寸幅上ノ板ニテ一尺二寸下ハ草摺ノ板ニテ一尺九寸五分上ノ板小札數四十五有二ノ板五十一三ノ板五十八四ツメノ板六十四草摺板七十二有如此段々小札數多シ草摺ノ板眞中ニテ二枚ニ割也

袖冠ノ板トモニ八枚黒札紫絲威袖ノ大サ竪一尺六寸横一尺一寸五分小札數四十四宛七板冠ノ板表緞子包裏正平革ニテ包次ノ板長杉立菖蒲革包菊金物二宛三所メッキ○水飲金物長六寸三分メッキ菊唐草鐶指渡五分○請緒掛緒長サ房トモニ三尺九寸紅絲八打巡一寸

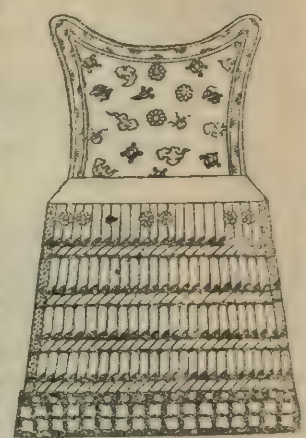
胴廻三尺一寸五分
後高一尺三寸



後板數七枚押付板二ノ板二枚下地木ニテ作リ上ナ緞子ニテ包板金物三所ニ有メッキ○三ノ板杉立菖蒲革包菊金物一所ニ二宛三所ニ有リ○四ツメノ板總角付鐶有座大サ竪二寸二分幅一寸八分○總角紫黄茶三色長一丈廻一寸八分○引數板五枚下リ但長九寸幅下ノ板ニテ一尺四寸下ハ草摺板ニテ二尺五分小札數上ノ板ニテ五十四○二ノ板五十六○三ノ板六十一○四ツメノ板六十六○草摺ノ板七十七如此段々ニ小札數多シ草摺ノ眞中ニテ二枚ニ割ナリ

脇楯

兩脇ニテ長九寸眞中ニテ六寸八分上ニテ廣七寸八分下ニテ五寸二分總廻金物メツキ表緞子ニテ包○伏組紺白萌黄ノ三色



坪板五枚下リ長九寸幅上ノ板ニテ一尺一寸菊金物一所ニ二宛三所ニ有下ハ草摺ノ板ニテ一尺八寸上ノ板小札數四十二ノ板損シ小札數不知三ノ板五十四四ツメノ板六十草摺ノ板六十六菱縫二通有數六十六

石清水社藏源義家朝臣甲冑

錏五枚下リ黒札練革長二寸三分幅九分威紺絲○高勝鐶指渡五分菊座指渡五分半八幡座息出穴指渡一寸五分臺座三寸四分四方金メツキ玉縁迄四重○鎬垂前ニ三金メツキ但鎬垂三ノ上ニ星有眞中四左右ニ三宛數十星ノ座玉縁アリ後ニ鎬垂二有金メツキ此上ニ星五宛十有右ノ方鎬垂ノ星一ツ損シ無之○前後鎬垂ノ外ニ左ニ鉢付ノ方ニテ幅九分八幡座ノ方ニテ幅六分如此三筋有其上ニ星數十五アリ○同左ノ方筋三其上ニ星十五有形左ニ同○鉢前後指渡内法七寸五分左右指渡七寸深サ五寸二分但シ浮張無之



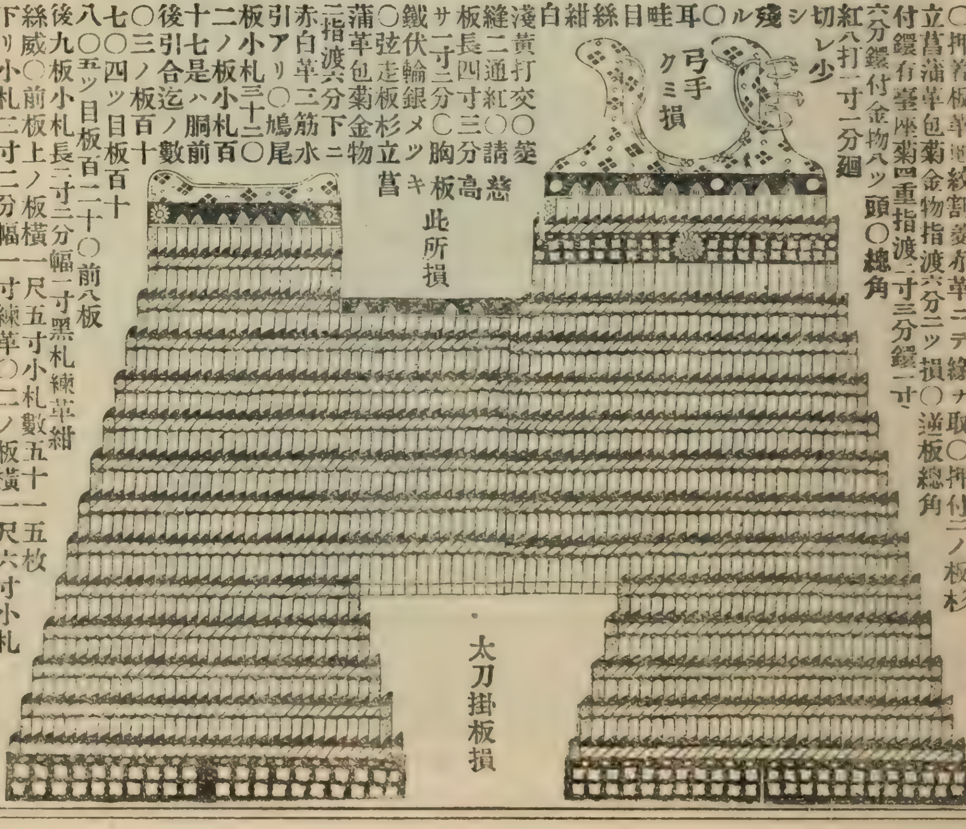
鉢附鋲四所指渡三分金メツキ

菱縫紅耳畦目紺白淺黄三色

吹返損寸法難窮忍緒附鐶損無之

三光鋲三所菊座指渡五分

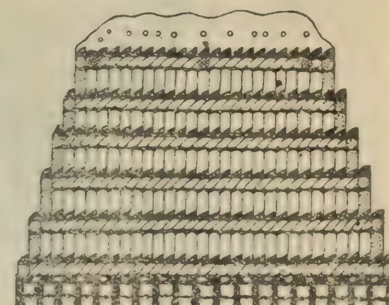
袖付クミ長五分指渡三分銀メツキ紅打緒キレ少付○高紐小ハセ長二寸四分幅三分厚一分五厘銀メツキ丸グケ革緒心ニ竹入長三寸五分○押着板革地紋割菱赤革ニテ縁ナ取○押付ニノ板杉立菖蒲革包菊金物指渡六分ニツ損○逆板總角付鐶有臺座菊四重指渡二寸三分鐶一寸六分鐶付金物八ツ頭○總角



紅八打一寸一分廻切レ少シ殘ル○耳畦目絲紺白淺黄打交○菱縫二通紅○請慈板長四寸三分高サ二寸二分○胸板鐵伏輪銀メツキ○弦走板杉立菖蒲革包菊金物二指渡六分下ニ赤白革三筋水引アリ○鳩尾板小札三十二○二ノ板小札百十七是ハ胴前後引合迄ノ數○三ノ板百十七○四ツ目板百十八○五ツ目板百二十○前八板後九板小札長二寸二分幅一寸黒札練革紺絲威○前板上ノ板横一尺五寸小札數五十一五枚下リ小札二寸二分幅一寸練革○二ノ板横一尺六寸小札數五十五○三ノ板横一尺七寸小札數五十九四目ノ板横一尺八寸小札數六十三○草摺ノ板眞中ニテ割三枚也割タル所ヘ竪ニ耳絲三筋アリ横一尺八寸五分小札數六十七耳絲紺白淺黄三色打交菱縫紅二通引敷板前板同數

太刀掛板 損

下散六枚下リ○一ノ板横一尺一寸五分小札數三十九菊金物一宛三所ニ有指渡六分銀メツキ○二ノ板一尺二寸五分小札數四十三○三ノ板横一尺三寸五分小札四十七○四ツ目ノ板横一尺四寸五分小札五十一○五ツ目ノ板横一尺五寸七分小札五十五草摺板一尺六寸小札數五十九耳畦目紺白淺黄打交菱縫二通紅絲○蝙蝠付革ナリ包タル様子所々革キレ殘アリ



脇楯 鐵ニテ作ル 損シ

長サ両脇ニテ一尺五分眞中ニテ九寸五分○幅七寸五分上下同シ表眞中ニ菊金物二所指渡六分

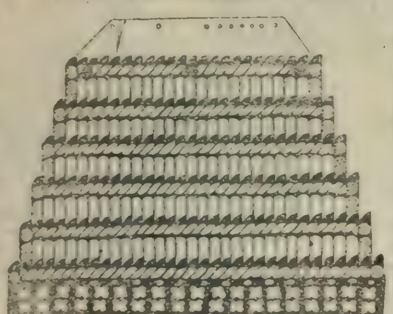


反深サ下ニテ一寸七分上ニテ一寸五分半○三方伏輪下ノ方ハ伏輪ナシ但伏輪ノ幅四分表ノ方ヘ二分見ユル銀メツキ

坪板

下地ナメシ革上チ染革ニテ包タル様子損殘リ有之堅二寸五分或二寸三分又二寸所ニヨリ違有

六枚下リ紺絲威黒札練革長二寸三分幅九分絲ノ上ヘ七分顯ル○蝙蝠付



草摺板横一尺六寸二分小札數五十九耳畦目紺白淺黄三色打交菱縫紅二通數五十八

一ノ板横一尺一寸二分小札數三十九菊金物一ツ宛三所有指渡六分銀メツキ二ノ板横一尺二寸五分小札數四十三○三ノ板横一尺三寸五分小札數四十七○四ツ目板横一尺四寸五分小札五十一○五ツ目板横一尺五寸七分小札數五十五

鳩尾板

長左ノ方八寸三分右ノ方八寸九分繰金物金メツキ○伏輪ヨリ伏組迄ノ内赤革割菱ノ地紋有革ニテ包伏組ヨリ内染革ニテ包タル様ニ見ル下ノ横二寸八分○下ヨリ五寸置テ菊金物アリ指渡一寸一分○裡裏鐵



栴檀板

板二枚下小札數十四宛黒札練革表二寸二分幅九分紺絲威冠板鐵伏輪金メツキ○伏輪ト伏組ノ間赤革地紋割菱革包○伏組黒白紫打交耳絲紺白淺黄打交○長三寸五分横四寸二分○水引赤白二筋○杉立菖蒲革包菊金物二有指渡七分

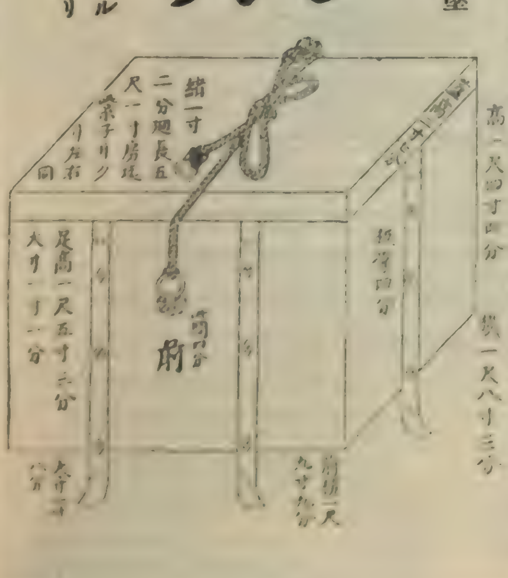


下ノ板一枚損

同藏鎧唐櫃 總黒塗

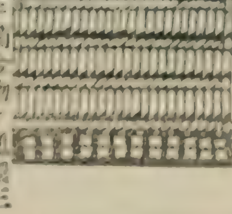


眞鍮ニテ入ル起上ル
高サ五六厘ホドナリ



袖

八枚黒札練革長二寸三分數四十一宛何モ同シ紺絲威○竪眞中ニテ一尺五寸二分横一尺一寸五分冠板黒伏輪金メツキ○水引赤白二筋革交粧板杉立菖蒲革包菊金物一宛三所アリ指渡六分○耳畦目紺白淺黄打交菱縫二通紅數四十二



交粧板ノ裏ニ菊金物ノ通銀三所有指渡六分冠板ヨリ五枚ノ板裏ニ端ヨリ一寸二分置テ鐶アリ指渡五分

鞍馬寺藏源義經朝臣甲冑紅絲威

冑重二貫五百目左方鐫垂三筋此上ニ星十宛三十鐵ナリ〇後鐫垂四眞中二筋此上ニ鐵鋲九宛十八有同左方鐫垂ノ上ニ星七有四ハ金メツキ鋲也同右ノ方鐫垂ノ上ニ星八有〇鉢ノ上ニ獅子一疋總眞鍒前足ヨリ背迄四寸三分鼻ヨリ尾筒迄六寸七分胴廻七寸五分前足二足鐵ノセンサス〇後二疋針金ニテトヂ付ル〇八幡座指渡二寸五分息出一寸三分臺座ヨリ玉縁迄五重臺座ノ廻星二十七

四天穴玉縁金メツキ紅唐打四所輪出



鍬形長一尺六寸三分餘幅上ニテ一寸一分下ニテ一寸上ノ方角指渡四寸三分猪目有金メツキ鍬形臺八寸八分幅一寸三分前立臺高一寸五分幅一寸〇肩廂左右九寸高二寸五分〇吹返眞鍮竪五寸五分上ニテ横六寸下ニテ六寸五分反一寸五分表牡丹唐草獅子一疋宛アリ

韎五枚下黒札練革長一寸九分幅三分〇鉢付板小札數百〇二ノ板小札百十四〇三ノ板小札百卅一〇四ツ目板小札百卅六〇五ツ目板小札百八十六耳畦目紺白淺黄打交菱縫二通紅〇鉢前後指渡七寸五分左右指渡六寸五分〇深三寸五分但浮張迄忍緒四所附鐶ナリ紅唐打

鎧紅絲威

前七板小札長二寸二分黒札練革

鳩尾板鐵長七寸九分上幅二寸六分下幅一寸九分縁金メツキ縁ヨリ伏組迄菖蒲革包伏組白萌黄紅打交伏組ヨリ内染革包上ヨリ八分置テ蝶ノ紋所有右ノ方端ヨリ四分置テ緒通穴二有銀[illegible]日紅唐打緒付總裏柑子革包紋ノ通ニ鐶有紅八打緒付長二尺七寸〇胸板戦伏輪金メツキ伏輪ト伏組間ヲ菖蒲革包伏組紅白萌黄打交胸板染革包小櫻鋲裏板柑子革ニテ包ム〇弦走板菖蒲革三所ニ金物有左右トモ長二寸六分中金物一寸八分菊金物二宛三所ニアリ下ニ水引赤白二筋上ハ縮緬下ハ紗綾〇太刀掛蝙蝠付柑子革端ヲ四分縁ヲ菖蒲革ニテ取鋲打〇太刀掛一ノ板幅一尺八分小札數四十六〇二ノ板幅一尺三寸三分小札五十七〇三ノ板幅一尺四寸六分小札六十一〇四ツ目板幅一尺六寸三分小札六十八草摺板幅一尺七寸四分小札七十五耳畦目紺白淺黄菱縫二通紅〇䋣檜板三枚下リ小札數十四宛三枚トモ同黒札練革長二通寸宛紅絲威耳畦目紺白淺黄打交菱縫紅二通總長七寸横三寸冠板鐵伏輪金メツキ染革包眞中ニ蝶紋所アリ〇次板菖蒲革包兩脇金物一寸二分水引赤白二筋下ヨリ三枚目板ニ緒通穴二有紅唐打緒付表ヘ出通冠板裏柑子革包蝶ノ紋ノ裏ニ鐶有紅唐打二尺七寸〇交紺板小札數三十一〇一ノ板小札百四十三〇二ノ板小札百三十一〇三ノ板小札百二十五〇四ツ目板小札數百二十四此四枚ノ板ハ胴ノ内前後引合迄ノ小札數ナリ〇前板下散五枚下リ上ノ板幅一尺二寸七分小札五十五〇二ノ板幅一尺四寸一分小札六十一〇三ノ板幅一尺五寸八分小札六十九〇四ツ目板幅一尺七寸二分小札七十五〇草摺板幅一尺八寸七分草摺眞中割テ二枚也割タル所ヘ耳絲畦目絲アリ



鎧後 八板

押着板伏輪金メツキ伏輪ト伏組ノ間菖蒲革ニテ包伏組紅白萌黄打交押着板染革包櫻鋲九ツ有裏板柑子革〇押付二ノ板菖蒲革包三所金物寸法前ニ同水引赤白二筋前ニ同シ〇逆板ニ總角附鐶有臺座長二寸幅一寸一分鐶指渡一寸五分鐶座六分赤銅逆板小札數四十四此板一枚打交絲威〇綿上染革包緣萌黄白紅打交絲上ノ裏柑子革包〇袖附ノクミ前後ニアリ左右同〇總角唐打紅露長一尺鐶ヨリ房迄一尺大サ八分〇高紐紅唐打左右同シ



左ノ脇立擧鐵伏輪胸板同前櫻鋲九有左右ニ責鞐左右責鞐金メツキ紅絲附

引敷板上ノ板幅一尺三寸九分小札五十九

二ノ板幅一尺五寸七分小札六十五〇三ノ板幅一尺七寸四分小札七十三〇四ツ目板幅一尺九寸二分小札七十九〇草摺ノ板幅二尺八寸小札數八十八草摺ノ割タル所ヘ耳絲アリ耳畦目紕白淺黄打交菱縫二通アリ

鞍馬寺藏胄古鉢

鉢ノ鐵ノ上ヲ金メツキニテ包八幡座ノ上ニ寶珠有金メツキ廻リ九寸六分高三寸三分三方ヘ火炎有玉臺有廻一尺三寸餘高一寸

鉢ノ廻外法二尺二寸九分

鉢深内法三寸五分

前後指渡七寸五分

左右指渡七寸餘

八幡座上ノ作物ニテ難見

鎬垂前ニ五金メツキ鋲損シアリ後ニ鎬垂二ツ有四天ノ鋲穴玉緣金メツキ高勝鐶ノ跡アリ眉庇長九寸眞中ニテ高三寸一分反二寸三分金メツキ左右トモニ筋十宛有筋ノ間ニ鋲九通有但一通ニ鋲九ツ



鞍馬寺藏龍金物八 金メツキ





小笠原佐渡入道法雲藏鐵面具



吉野山吉水院藏源義經腹卷



前七板胴高九寸六分胴廻ホツテノ所ニテ二尺四寸○黑札練革色々ノ絲ニテ威胴裏栗色革包○高組打交絲○下散七間五枚下リ上幅四寸四分下幅六寸九分長九寸裏ヘ反一寸三分

腹卷後



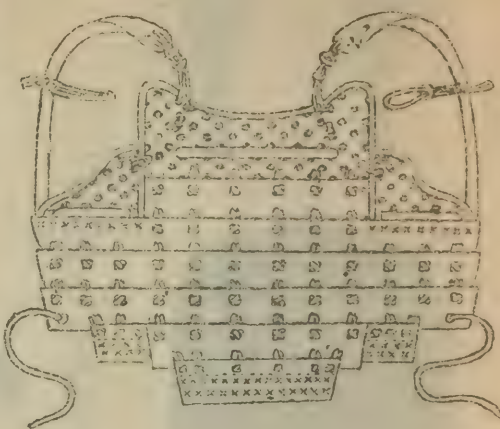
後七板押着板ヨリホツテ迄九寸綿遙栗色革包威毛前ニ同耳畦目紺白萌黃紫打交菱縫二通紅絲

春日社本談議屋藏楠正成胴丸

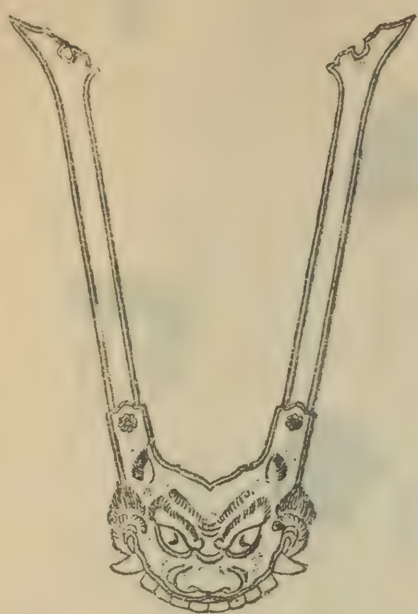
胴丸四カリ胴黒塗小札八幅黒革威毛引耳絲五色啄木〇立アゲ前二枚後三枚〇金具廻獅子牡丹染革包緣御免革五色絲ニテ伏組アリ〇伏輪金ヤキツケ〇金具廻五色啄木上シガラミ〇高紐絲紫白黑三色唐打(手先留メ)責鞐金ヤキ付菊ホリ物〇鵐目金ヤキ付二枚カサネ相引啄木平打一筋宛付長一尺一寸宛〇間ノ金物燒付菊ノ折枝葉ツホミエヨウ有前三所射向三所馬手三所同前綿上間ノ金物金ノ燒付ホリ物菊折枝葉ツホミ有〇櫻鐶金ヤキ付總卷付大座金ヤキツケスカシ菊鐶カシラ菊〇胴裏一段一段付切馬皮栗色〇杏葉大ブリ獅子牡丹染革包紋サシ渡一寸金ヤキ付金物菊折枝ノホミ花葉アリ〇袖付ノ管金ヤキツケ下散八間五下リ小札總リクロヌリ八幡染革毛引耳畦五色啄木總甲打菱縫紅絲〇エルキ絲長サ一寸胴長前八寸四分胸金具迄同後九寸五分綿上ノメテ迄



腹當之圖



南京興福寺本談議屋庫中獅頭



同藏

栴檀板



鳩尾板



喉輪之圖



島津氏藏廷尉忠久鐵杏葉



半首之圖



半首別式



分式之圖



大立擧臑當

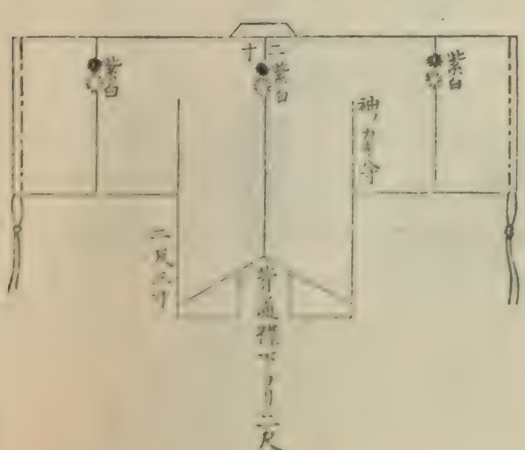


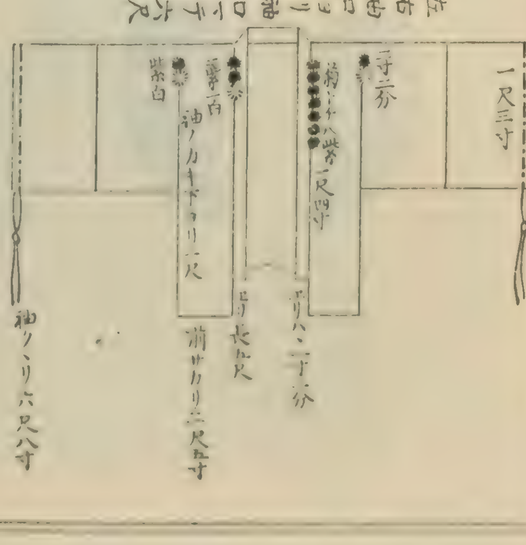
一條亞相御家藏萎烏帽子



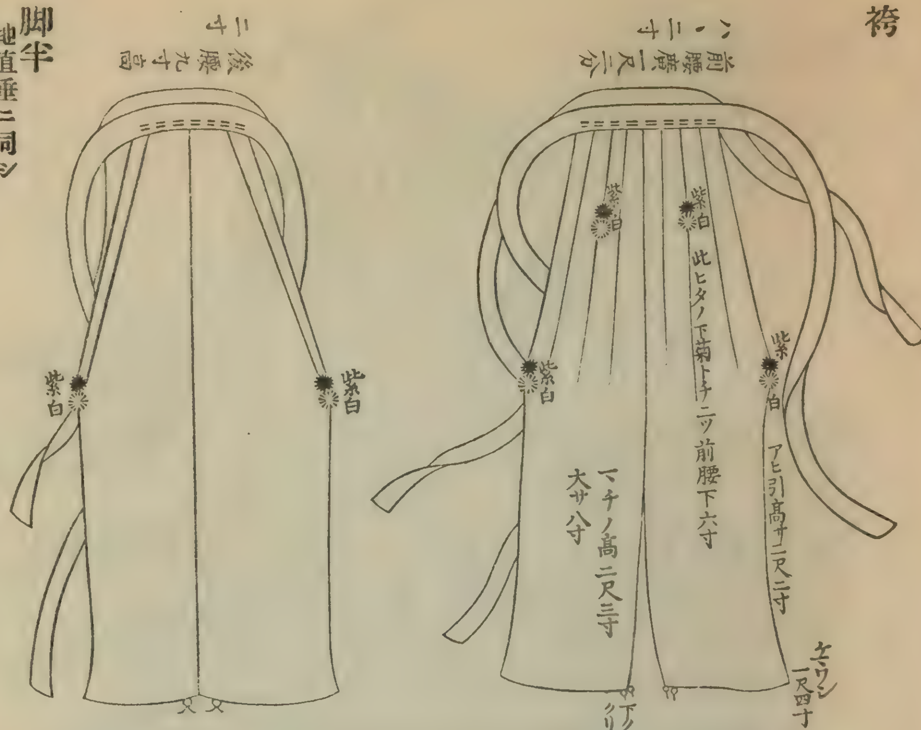
毛利氏家藏鎧直垂上下

上下トモニ裏打片
色アリ袴前組長左
右一丈四寸後組左
右合八尺二寸後ノ
内イタメ紙入組ノ
地練ナリ
組ノ緒長二尺八寸
餘



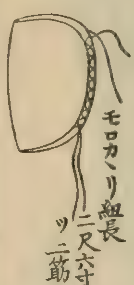


袴



脚半

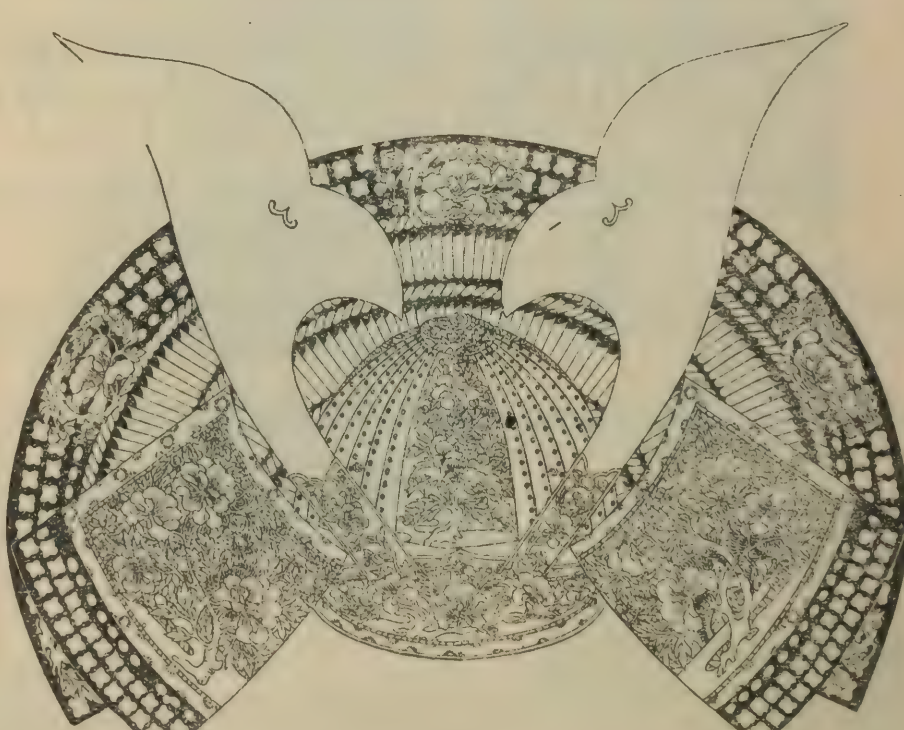
地直垂ニ同シ



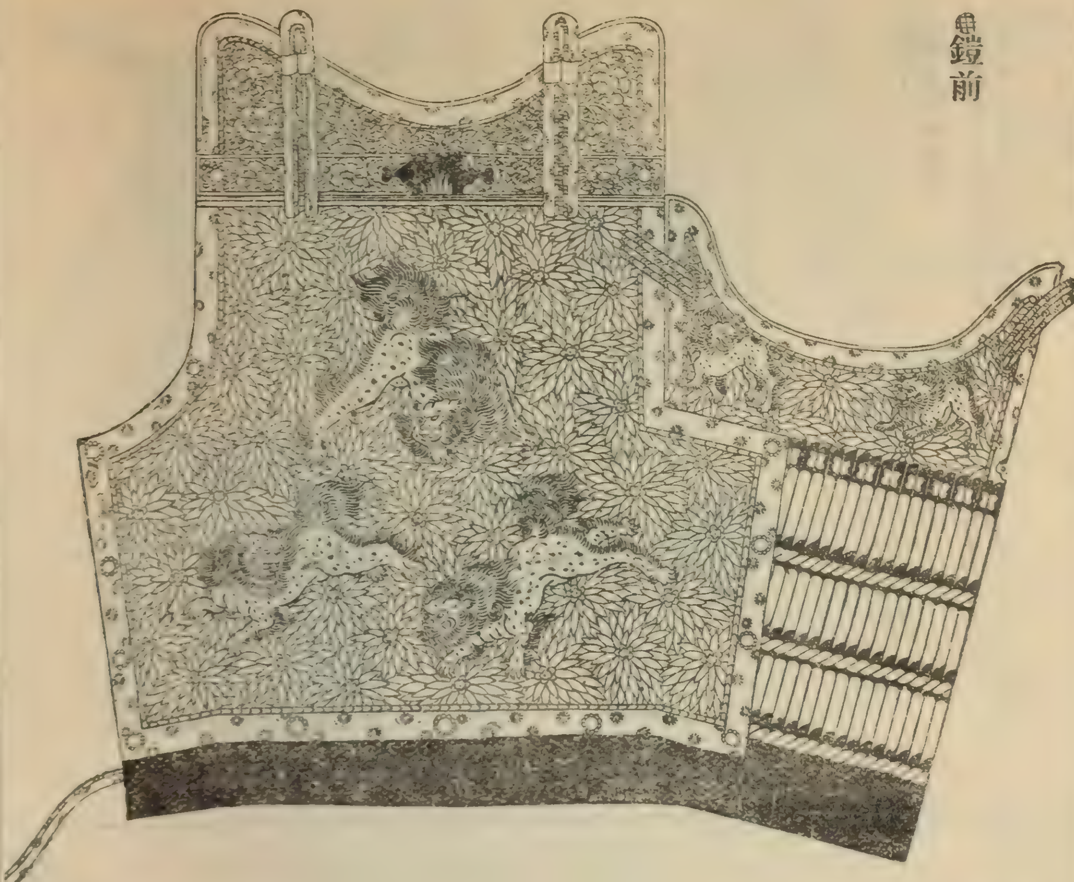
右鎧直垂上下脚半弘治元年將軍義輝公ヨリ毛利元就ニ下シ給フ錦直垂上下脚半其子孫傳ヘ今ニアリ

南京興福寺藏源義經朝臣甲冑半形

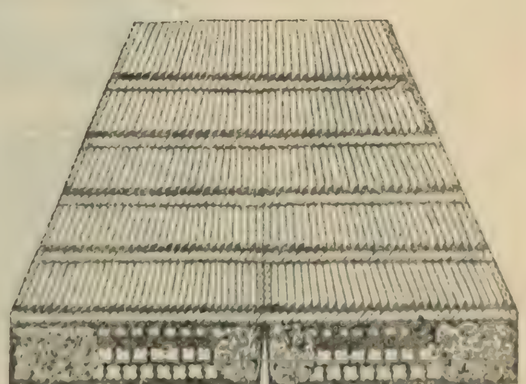
冑



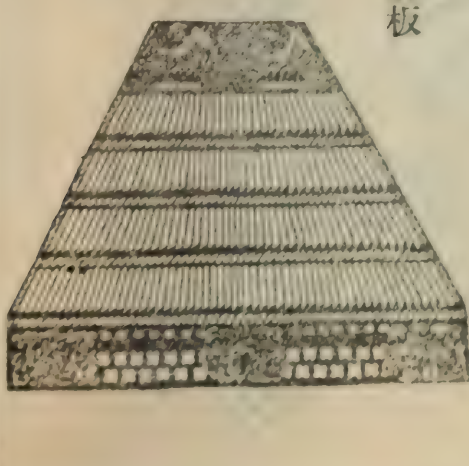
鎧前

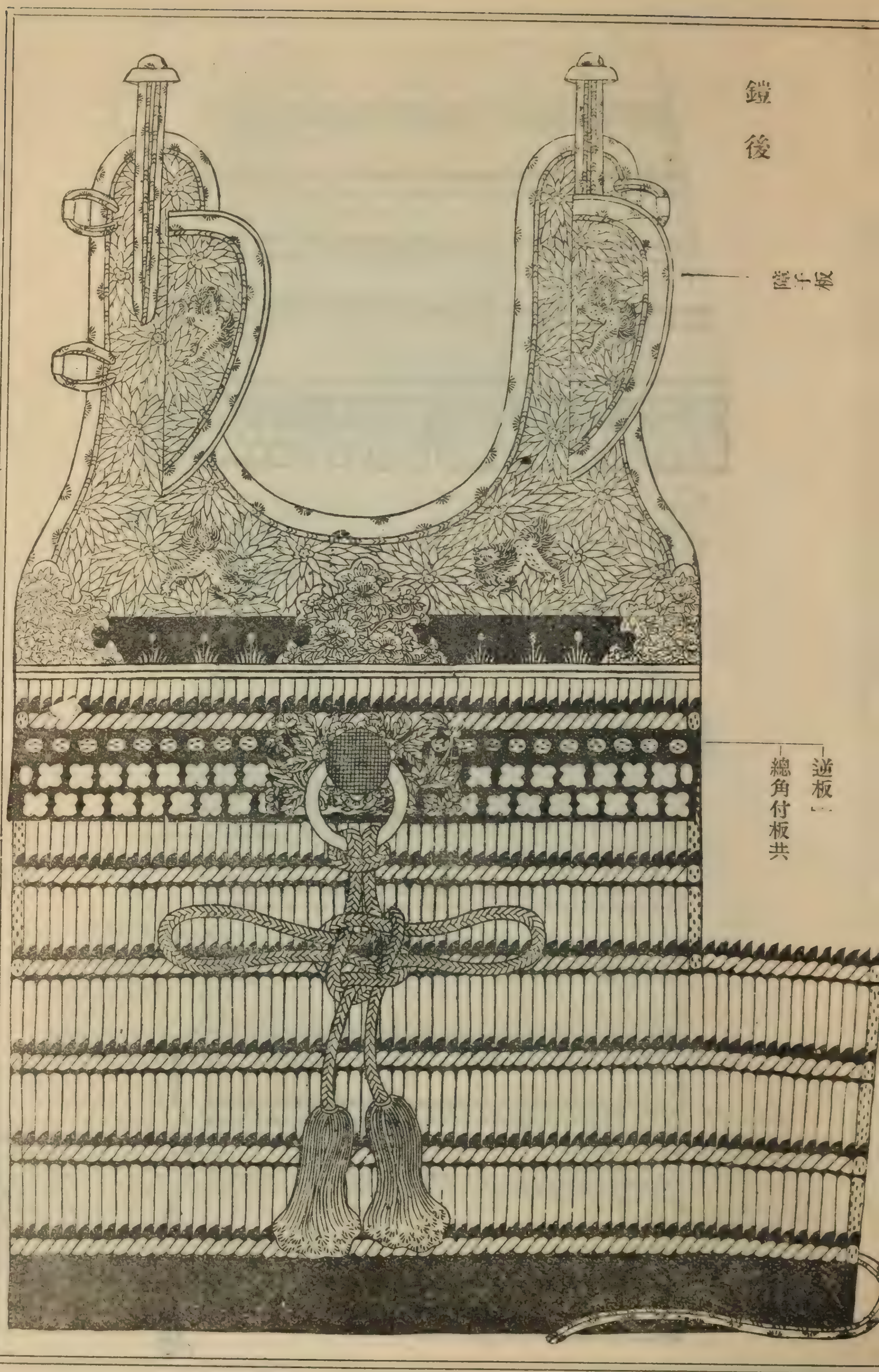


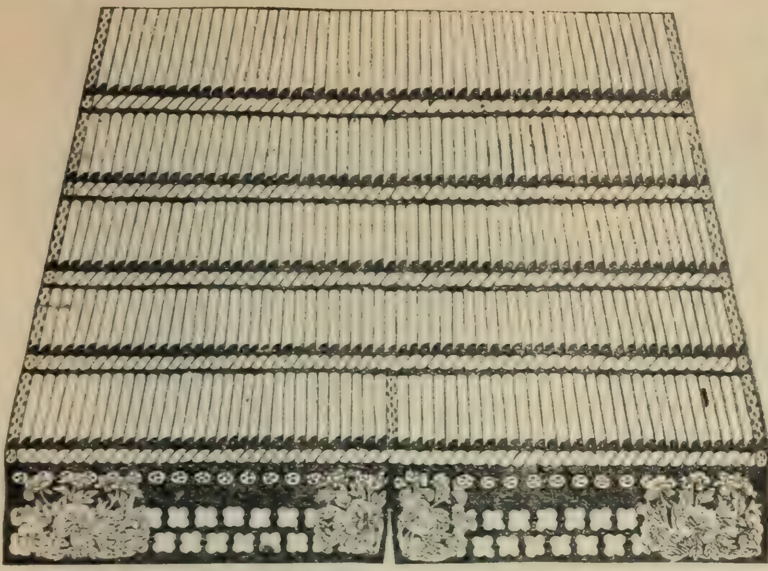
前板

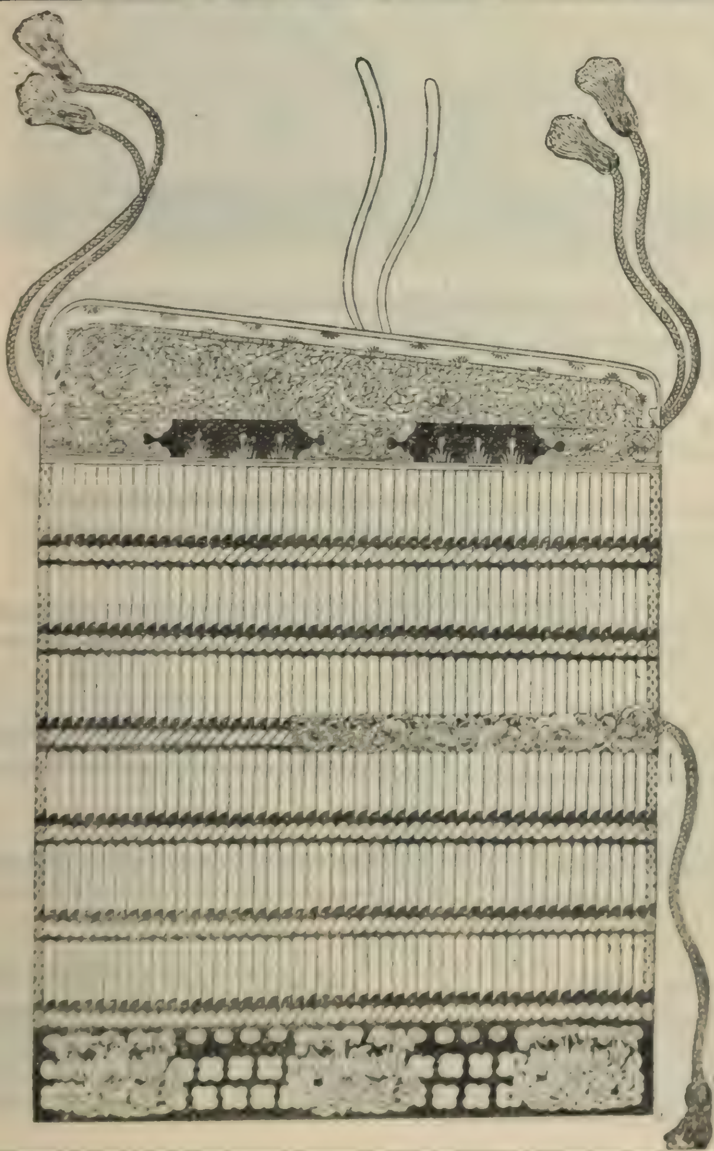


太刀懸板

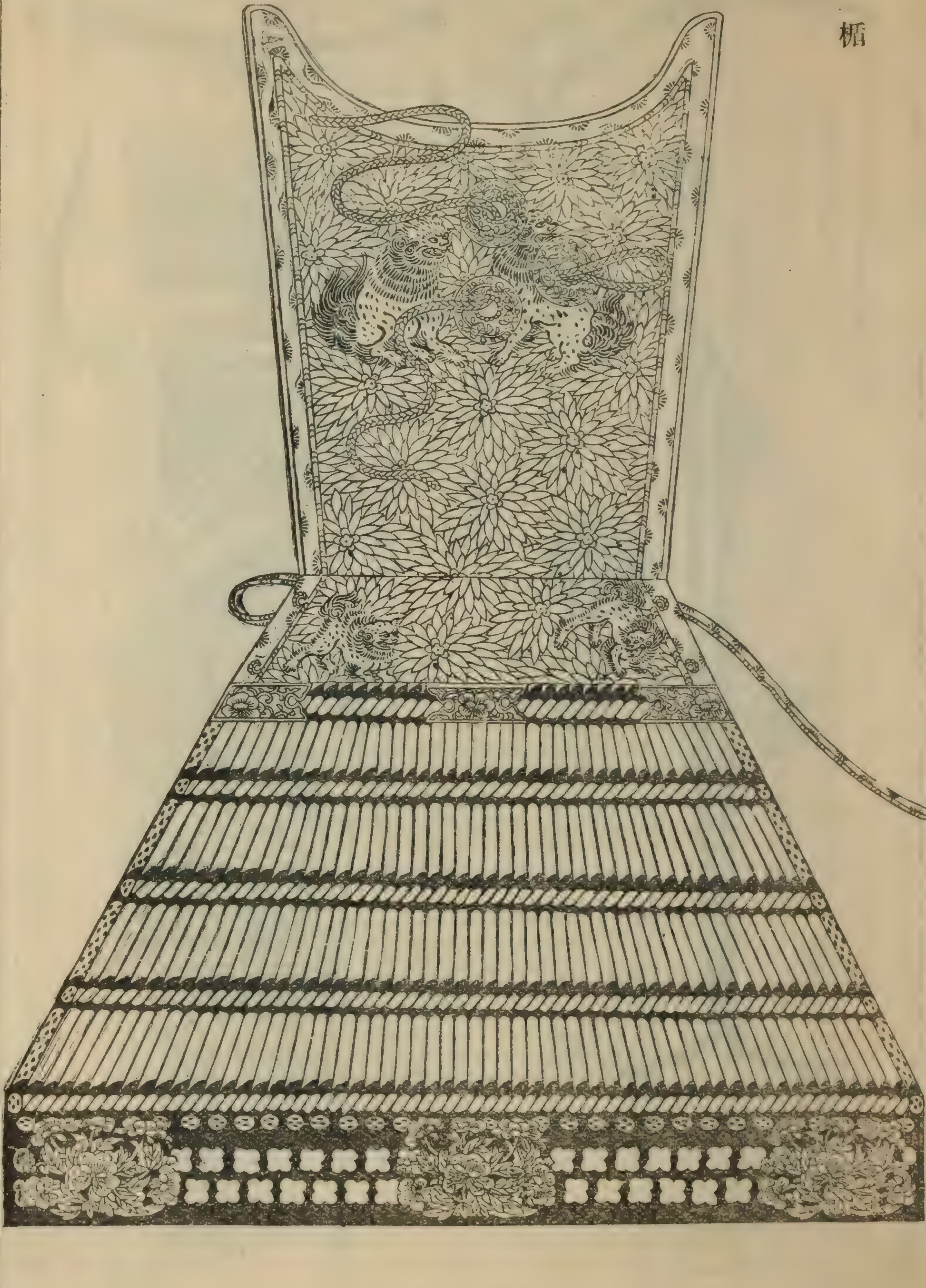



鎧後
逆板
總角付板共

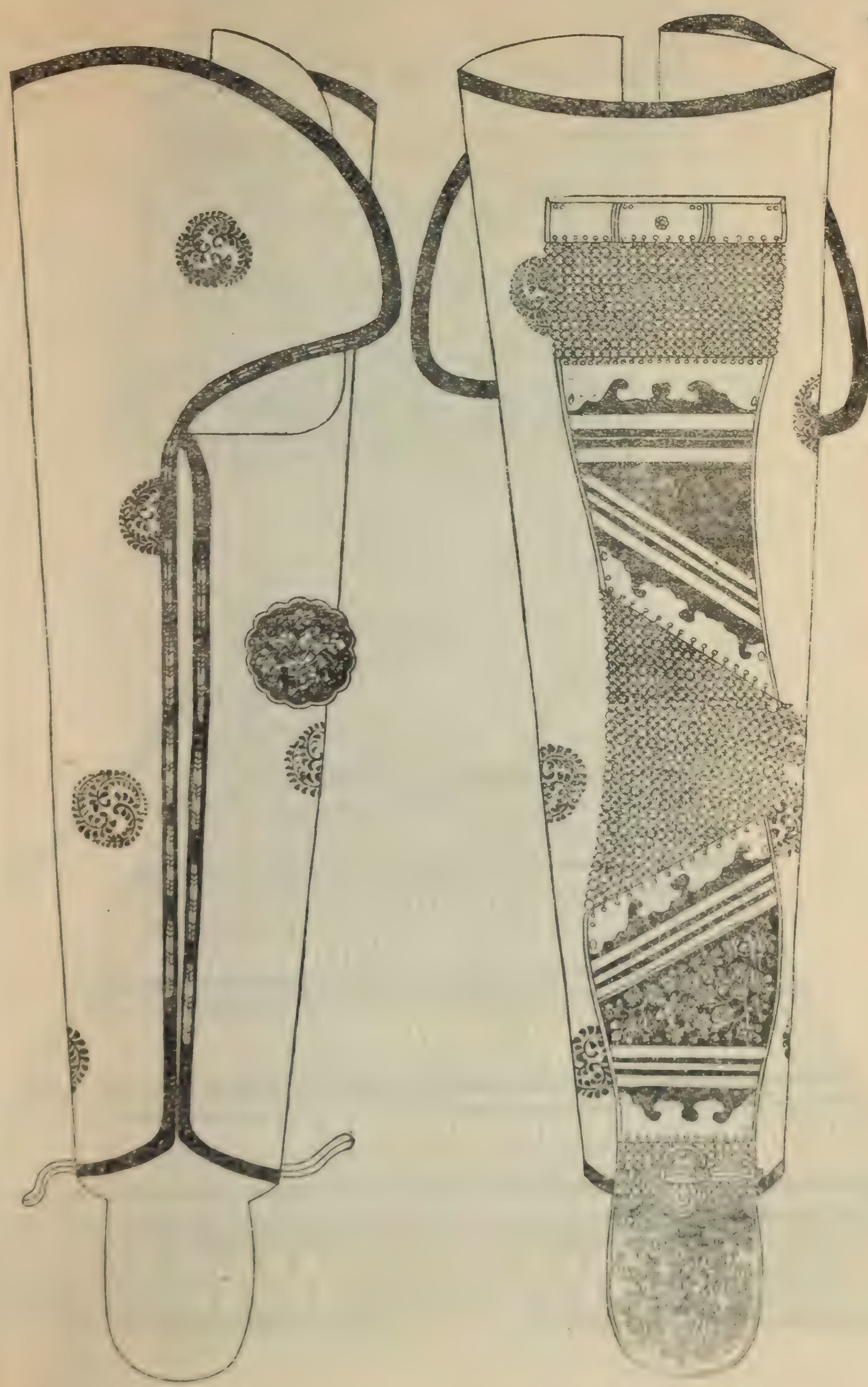

引敷板


袖

脇楯



籠手



春日社本談議屋源義經朝臣御鎧註文

一胄二拾八枚張椎形星黑塗四方白
一四方銀ニテ幅一寸計板金ノベ付其上ニ金燒付ヲ以テ牡丹立木花ツホミ葉繪樣彫物成程上ヘ彫上間スカシ彫地板銀見エ候樣在之但前後金物ハ兩方ヨリ少シ廣キ事
一前方ノ金物內上羽蝶ホリモノ有
一四天穴鵐目玉緣刻座アリ金燒付
一母衣付鐶金燒付母衣附緒茜染總角三尺五寸
一八幡座金燒付玉緣菊座四重臺座牡丹立木彫上花ツホミ葉アリ
一眉庇牡丹花葉染革ニテ包廻リ御免革御免革ト染革間白絲紫絲萌黃絲三色ニテ伏組有リ覆輪金燒付三光鋲刻座金燒付塗上雲形之事
一前立物燒付鍬形猪目スカシ大一方一尺バカリトリヲキ
一臺輪金ヤキツケ牡丹立木花ツホミ葉アリ
一鞆大饅頭五枚下カネト革ト一枚交小札黑塗毛引絲茜菱縫絲同シ耳畦目啄木
一菱縫板五所ニ指渡三寸四方ニ間金物燒付ニテ牡丹立木スカシボリニシテ打事
一鉢付板間金物五所在リ金ヤキ付地彫牡丹花居紋二ツ充在鉢付丸鋲切羽座アリ燒付同斷
一吹返小札鞆ニ同絲ニテ毛引菱縫同大幅六寸長六寸此上獅子牡丹染革ニテ包四方緣御免革ニテ取紫白萌黃絲ニテ伏組アリ四方御免革所金燒付小櫻鋲七ツニテトヂ申ス事
一吹返獅子牡丹染革上一ハイニ牡丹立木金燒付ノ金物アリ
一浮張アラヒ革
一眉庇ノ內牡丹花葉染シ革ニテ包申事
一忍緒三所付同緒紫綸子丸グケ長七尺但金尺
一胴小札縫マロメ但金革ト一枚マゼ黑塗毛引絲茜染耳絲啄木龜甲カタウチワケ胴總アガキウケ張ナシ
一段一段馬皮ニテ裏付栗色
一胸板牡丹花葉染革ニテ包其上牡丹透彫其下ニ交粧板在但杉立菖蒲革ニテ包間金物二所ニ在リ金燒付地彫牡丹唐草居紋二アリ其下白綾赤綾ニテリウモン二筋アリ
射向方金具一枚仕獅子牡丹染革ニテ包緣御免革紫

白萌黃三色ノ絲ニテ伏組在裏同覆輪金燒付小櫻鋲
七金ヤキ付座アリ
一胴前獅子牡丹模樣革ニテ弦走在前金具下ヨリホツ
テマデ兩脇金具下迄大ノ樣子繪圖見タリ四方ノ緣
御免革白紫萌木三色ノ絲ニテ伏組在同金ヤキツケ
ノ鋲ヲ以テ威シタル上打付鋲數繪圖ニ見タリ
一綿嚙表裏獅子牡丹模樣革ニテ包白紫萌木三色絲ニ
テ伏組有裏同表ト裏トノハンサイニ紫絲ニテカラ
ヌイ在リ
一大袖付管金燒付緒御免革丸グケ（但シクケメノ所白紫萌黃三色ノ絲伏組在リ）
一高紐御免革丸グケクケ目白紫萌木三色ノ絲ニテ伏
組アリ責鞐金燒付
一障子板表裏獅子牡丹ノ革ニテ包御免革ニテ緣取白
紫萌木三色絲ニテ伏組有伏輪金燒付
一綿嚙井綿嚙橫板獅子牡丹染革ニテ包御免革ニテ緣
取三色ノ絲ニテ伏組アリ
一綿嚙橫板下交粧板アリ杉立菖蒲革ニテ包間金物三
所ニアリ但雲形ニシテ地ホリ唐草牡丹居紋三充有
紋數合九猪目花形在其下白綾赤綾ニテリウモン二
筋在リ

一逆板小札菱縫二通絲茜染ウナメ啄木同啄木絲ニテ
裏ノ方毛引
一總角臺座金燒付金物大幅三寸下ヘ二寸五分牡丹立
木透彫鐶燒付總角長七尺八打（丸ミ一寸五分 外總七寸五分）
一腰緒啄木馬手ノホツテ前後ヨリ一筋宛出事
一前板五板下金革トタテマゼ小札黑塗毛引絲茜菱縫
絲同前耳畦目啄木ユルギノ絲長一寸五分但芝スリ
一枚眞中二ニワリテ威シ裙金物三所牡丹立木金ヤ
キツケニテ大ハヾ二寸上ヘ一寸八分
一引敷板下散前板同前ノ仕樣也
一太刀掛下散同前但胴ヘ付候所ユルギノ絲ナシニ獅
子牡丹染革ニテ蝙蝠付菱縫耳畦目裙金物同前但太
刀掛坪板ハ草摺ノ眞中割ラズ
一脇楯表裏獅子ニ牡丹革ニテ包廻御免革同緣白紫萌
木三色ノ絲ニテ伏組在總覆輪金ヤキツケ裏同ジ
一坪板下散五枚下金革ト一枚マゼ小札毛引茜染耳ウ
ナメ啄木但ワイダテヘ付所搖絲ナシニ獅子牡丹革
ニテ蝙蝠付兩方御免革白紫萌黃三色伏組在裏同前
金燒付鋲兩方ニ二宛打間金物金燒付三所在牡丹唐
草居紋牡丹同菱縫在裙金物三所牡丹立木金燒付大

幅二寸上一寸八分
一縧シメ緒三色啄木八打長七尺五寸三所ヘ出シトト
メ在但座一寸指渡牡丹唐草彫上
一袖射向方バカリ在金革ト一枚交黒塗七枚下小札毛
引絲茜染菱縫在耳畦目啄木冠板獅子牡丹革ニテ包
廻御免革ニテ縁取白紫萌黄三色伏組在同冠板表革
所一枚ニ金燒付金物在但牡丹立木スカシ彫花ツホ
ミ葉在交粧板杉立菖蒲革ニテ包間金物金燒付三所
在同居紋牡丹花二宛同リウモン白綾赤綾ニテ二筋
在
一水呑金物金燒付牡丹唐草同花居紋在同水呑緒茜染
長一尺三寸外ニ總三寸五分
一冠板裏獅子牡丹革ニテ包白紫萌木ニテ伏組在覆輪
金燒付之事
一菱縫板ニ間金物指渡三寸四方牡丹立木同前
一請緒掛緒長一尺七寸内五寸總但二筋宛
一志津加革アラヒ革長一尺五分二筋右何茂鐶金滅金
　勸修坊在之義經朝臣之籠手
一籠手肩手先フクベ下地イタメ革ニテ仕形恰好繪ニ
見エタリ黒ヌリ總伏輪燒付肩ノ方フクベノ上ニ金
燒付テ幅五分程ノ雲形在其際筋違ニ金燒付ノ金物
三筋ノベ付但中二筋兩ワキノ筋二分一手先ノ兩ノ
フクベ右同前ニシテ肩ノフクベヨリ少長ク中ニ菊
立木花ツホミ葉在但スカシ彫花數繪圖ニ在肩手先
間鐶臂金外ノ方在下地イタメ革總廻菊覆輪金燒付
上一ハイニ菊立木スカシ彫紋ヲホリ花ツホミ在其
上上羽蝶在皆金ヤキ付也
一冠板幅六分長三寸眞中穴在同シト、メ在四打絲一
筋出タル樣ニ見エタリ今ハ絲ハナシ上方金ヤキ付
ニテ覆輪取但冠板三オリノ所漆ニテ筋在上方ヒネ
リ返シ也
一冠板ト肩ノフクベノ間總クサリ
一手甲ナマス大指ナシ下地イタメ革總伏輪金燒付手
甲ノ上銀ニテ薄金ヲノベツケ其上ニ菊花立木ツホ
ミ葉ヲ入マゼスカシ彫水ヲアヒシラヒ菊水ノゴト
ク此彫物上ニ蝶一在リ蝶ノ羽ノホリ物三カシラノ
カシハノ彫物右ノ方手甲蝶ノ紋ノ内ニ飛燕子アリ
一指カケ御免革丸グケ大指ノ懸緒手甲ノ上方ニ在御
免革丸グケ外トンボウ結ヒ
一家布淺黄指渡シ一寸二分ノ三ツカシラノ藤ノ丸白

シテチラシ數十四五ホド縁小紋革ニテ取本カヾリ
一手甲ノ内馬皮栗色貝ノ口トヂメ上ヘ見ユ
一手首緒御免革平タ、ミニシテ鞐金ヤキツケクヒトメノ所花ムスビ
一肩ノ方内ヘ家布兩方六寸ヅヽ出ス事
右仕立候テ籠手ノ内ノ方ワキノ下ニ島絹ヲ以テ縫カケ候島模樣茶萌黃白柿四色ナリ
一冠板兩方ノハヅレニ五分ノ革筋違ニ縫ツケテ在リ是ハ綿噛ヘ付鞐在リシ樣ニ見エタリ今ハコハゼハナシ
以上

五十二條



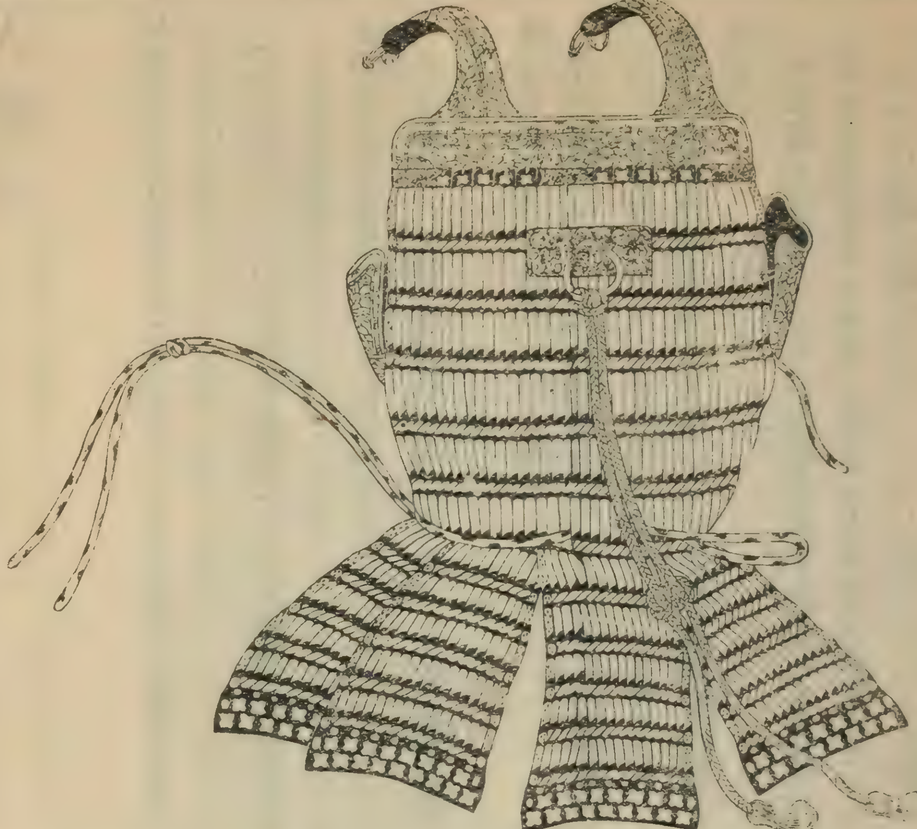
吉野郡九箇村民藏南帝御物胴丸

鉢頭形

鉢黑塗筋冑三十八間金メツキ檜垣金メツキ鉢廻二尺二寸三分内法深三寸八分前後指渡八寸左右指渡六寸三分〇八幡座五重金メツキ菊唐草〇鑄垂前三後二金メツキ〇鉢付鋲四金メツキ板金物五所金メツキ〇錣五枚下黑札花色絲ニテ威耳絲畦目白萌黃紫打交菱縫紅ニ通忍緒三所付打突



胴丸前七枚胴高サ九寸三分胴ノ廻ホツテノ所ニテ三尺七寸五分黑札花色絲威耳畦目白紫萌黃打交〇胸板染革包〇左ノ脇高サ六寸六分〇胴裏栗色革〇高紐紺白萌黃紫打交黃鋲金メツキ引合ノ緒長八寸五分〇裾上ノ緒長二尺五寸間一尺八寸紺白萌黃紫打交下散八間五枚下リ上幅六寸三分下幅九寸三分長九寸裏へ反一寸六分



胴丸後八板押着板ヨリホツテ迄高サ一尺五分
○綿上染革包伏組眞中ニ有リ○引合緒長九寸
繰ジメ緒色同前長七尺五寸

集古圖說跋

右古寶器圖、乃是　先生平昔所親見者、隨得隨收、慮其久而散軼、軸而藏之、復爲之說、一々記其所繇、援據證誤藻鑒最精、遂命成寫諸圖上、其所以遺來者可謂厚矣、歐陽公有言曰、凡物好之而有力則無不至也、然今天下至寶珍奇之物在窮轍僻壤深山大澤之間、而湮滅不見者何限、設有志之者又或失其傳、古先聖王制器尚象之意寥々無聞、可不惜哉、幸　先生信而好古、博物不窮、方其恭承使命周旋　兩京也、歷代彝器、凡秘庫舊物之所在、不搜索而品題者、蓋亦鮮焉、昔者孔子在陳、辨先王之分器、籍氏如周忘先世之司典、是故君子耻一物之不知也、繄　先生之有此作、非獨可覩好古博物之一端、抑斯器之遇明識可不以爲榮歟、而成也又獲用塗鴉之技、託姓名于寶繪之次、其又不以爲榮歟、因以書於後、

乙未夏五月甲子

新川平元成允仲謹識

人名考

本朝の人の名漢字を用ひられしより此かた或は文字の音を以て記し
欝色雄命（ウツシコヲノ）などいふ類也後代にも不比等武智麻呂（フヒトムチマロ）などの類又同じ
或は文字の訓を以てしるし
大彦命（オホヒコノ）など云類也後代にも入鹿（イルカ）鎌足（カマタリ）などの類又同じ
或は文字の音と訓とを以て併せしるし
吉備津彦（キビツヒコ）の類は上二字は音なり下二字は訓也後の代にも藤原の長良（ナガラ）などは上は訓なり下は音なり
其人々の意の欲するまゝにしるしければ文字の數も定らず
不比等を又史（フヒト）としるし馬養（ウマカヒ）を又宇合（ウマカヒ）としるし長谷雄（ハセヲ）を又發昭（ハセヲ）としるせし類は一人の名を或は音にてもしるし或は訓にてもしるせし也○古より本朝の人々の名をつけしにも異朝の如く五のいはれありと見えたり是等の事委く考て呈んと思ひ草按をば立置し者あり事長ければこゝにはしるさず
五十四代のみかど仁明天皇の御時より始て今の代の人の名の如く多くは文字の訓を取て二字を用ゆる事には成たり
此事は神皇正統記に見ゆ
されば昔の人の用ひし所は定る文字もあらず多くは聖經賢傳の文字を取用ひて皆々意義ある事共にてありし世の末ざまになるに隨ひ文字稍廢れしより世の人多くは古人の名に用ひし文字のみを取用ひ己が名とする程に其名とする所意義もなくおのづから文字も定れる樣には成りたりましてや近代には西域二合の法に倣て二字を合て一字となし其一字の義訓を以て吉凶を論ずる事にのみ成しかば（俗に名乘字なかへすといふ事也）人の名猶々昔にも似ずあさましき事にはなりたる也
右は名の字に定れる字といふ事はあらざる證の一ッ也
前にも申せし如くに古には人の名の字定まれる文字はなかりき末の世に至りてはおのづから儒家の人々の家に抄し置れし所の文字も有しにや文和の初め後光嚴帝の御名字を撰ませられし時に成の字を房と訓

する事名字抄に見えたるよし菅三位在成卿の申せし事を記せし物あり
洞院大相國の御記に見ゆ○後光嚴院帝は九十九代にあたらせ給ふ此頃は太平記の代にてありし也されど今は名字抄など云ものも世には傳はらず
節用集
是は舟橋宣賢卿の作られしよし世には申すなり
拾芥抄
是は天正五年に撰し所作者詳ならぬよし水戸西山公は仰置れし也
など云ものに人の名字を集め置しが世に廣く行はるゝ程に世の人皆これらの書を據となして取用ることになりたり油小路故大納言隆眞卿のたまひしは近代の人の名殊に淺ましきものに成たり拾芥等の書に抄出せし所はいかなることを據となして僻る字多く集め置けん心得られず周公の撰ませ給ひしと云爾雅の字を取用ひたらんには然るべき文字いくらもありなんとぞ
隆眞卿の說は某に神書を授し人まのあたり承りし由を申しき此卿は近代の有職の人にておはしきいはれある事とこそ覺ゆれ
右は近世の人の名の文字よからず又人の名に定まれる文字あるまじき證の二ッなり
又師にて候ひし者の某に竊に傳へ候ひしは天子の御名は凡人の名に唱ふる所と同じかるべからざるよしある有職の人仰られき
なに人の仰にやと重ねて問返しがたかりし故に其人の名をばつひに承らざりき口惜きこと也此言を思ふにたとへば後水尾院の御諱政仁をまさひとゝは申さでことひとゝ申し今の仙洞の御名を識仁としるしてのりひとゝまうさでさとひとゝ申の類なるべし
さらば將軍家の御名など撰申さんには心得有べき事也我國に傳はるのみにもあらず異朝の後の代までもしるし傳ふべければいかにも經書の文字を取用ふべしたゞに經書の字を取用んのみにもあらず唱へまゐらする所も心得あるべきよしを申き
謹て按ずるに神祖の御諱は元康後に改させ給ひし時に八幡殿の諱の下の字を上になしてよき字撰てまゐらせよと仰られしかば伊東法師と申者家康と

は名づけ參らせきこれは書經の洪範に家用平康と云詞の上下の字を取用ひしと見えし是則古人の名の字を撰し例にして今も異朝の人の名を命ずる事此のごとし誠に目出度御諱なりき其後猷廟巖廟の御諱皆々經傳の字を取られしと見えし但德廟は豐臣家の名の字を參らせて命ぜられし所なれば古き文字を撰參らするに及ばずと見えたり古より天子の御名の撰申事儒家の大事たるよし古きものどもに多く見えたり

今按ずるに室町殿の代々の御諱に讀得がたきことあるとぞ覺ゆる寶篋院殿の御諱を義詮と申き詮の字を敎と唱る人あり普廣院殿を義敎と申まゐらせしかばいかで其祖考の御諱に同じき唱の名をば付せ給ふべきまた詮の字を昭と唱る人あれど靈陽院殿を義昭と申まゐらせしかば是も先祖の御諱に同じき唱の名は付せ給ふべからず拾芥節用等を見るに詮の字を訓に敎と昭との外別の訓も見えねば寶篋院殿の御諱は必別なる訓の有しを世の人其傳を失し成べし（追て拾芥抄を考るに詮の字トシと申せしにや猶尋ぬべし）大塔の宮の御諱を護良としるしてモリヨシと世には言傳れど實はモリナガと申まゐらせきこれら又同時の事なれば義詮の唱へ必世に傳るが如にはあらじ

これらの事を思ふに先師の傳へし所誠に誣ずと申べし

右は名の字に定まれる字なきのみにもあらず唱ふる處も定まれるとなへなき證の三ッ也

謹て按ずるに凡人の名の字もとより定まれる字は有べきいはれもなく又古には定まれる文字とてもなく定れる唱へもなかりし證右に擧るが如し然らば其書なくしても可也又古人の名の字を抄出し置て讀書の人に便せんも又可也然るに前年人の名の字抄出して呈るべきよし仰を承り敢て辭する所なく拾芥抄節用集新編纂圖幷鍛冶銘字抄等の如き世に廣く行はるゝ所の書を取用ひ敢てみづからの意を加へて一字を增減せず一冊子を作て進呈しき其故は先師嘗に某を戒て證なく據なく疑しき事はかりそめにも口より出すべからず孔子の大聖すら猶述而不ㇾ作と宣ひし只古人の言を述ぶべし自の意見を以て言を造るべからず是先王の時に刑したまふ所也と申しきされば某かの

冊子を撰しことたゞ古人抄錄せし所を述しのみ也敢て私の意見を加へず然ども彼古人の抄錄せし所も猶疑がふべき所尤多きが故に私考を作て家に藏む今其草案を以て進呈す某が意を用る所すでに此の如し然るに今又仰を承て一ッの別本を下し賜りて此書を以て某が進呈せし冊子に收め入れざる所の文字を增補ふべきよしを承りぬ謹てかの別本を以て拾芥節用等の書にたくらぶるに彼書に收る所の文字殊に多く文字の訓も又拾芥節用等に見えざる所多し尤珍書と云つべし細にこれを考るに彼書古に聞えし名字抄にもあらず

洞院殿の御記に成の字を房と訓ずる事名字抄にありと見えたり今彼書の成の字の訓に房といふ訓見えざるを以て古の名字抄にあらざることを知也

又少し疑ふべき所は文字の音近き比ほひ異朝より來れる字彙の音を誤り用ひしと見えて古より本朝に用ひ來れる音にあらざる所六七字に及べり是古書にはあらざる證の一ッ也又古人の名にいまだ用ひざる所の奇字多く此書に收め入れたり是古書にあらざる證の二ッ也同字重り書るもの十字ばかり是又疑ふべきこと三ッ也文字の音心得がたき所殊に多しこれ疑ふべきこと四ッ也文字の訓にはいかにやと思ふ所すくなからず是疑ふべき事五ッ也

たとへば朝といふ字上にあればあさとよむ下にあればともとよむと云が如き也朝といふ字をあさとよみともとよむには口授ある由をも申事也上下によりて讀かゆるといふ事にはあらず義朝の子の朝長をあさながとは承り及ばず賴朝の烏帽子子結城七郎朝光をあさみつとは承り及ばざる也

然とは申せども世にすでに此書あり世の人此書に據て名字を撰む人多かるべし然らば其字を讀得んには此書なくんばあるべからず只此書を有しまゝに寫し置れて某が冊子と相ならべて藏め置れんには彼是二ッながら相通じて異聞を博めさせ給ふ所の益あるべきに似たり某が冊子に此書の文字を增收め此書の訓を增し補んことは某敢て命を奉けがたき所あるが某が不學昔よりかつて上には先聖述而不ㇾ作の敎を奉じ下には先師述而不ㇾ可ㇾ作の戒をうけてよの常の人に對しかりそめの詞にもいまだ無證の言を發せずましてや書に筆して公に進呈せんものにわづかも疑あ

らん事をもつてせん事は某が愚誠尤畏るゝ所にしてかつ素懐にあらず是敢て自らの異見をたてゝ上命を違拒するにはあらず

守重按東鑑十九承元三年八月十三日知親自二京師一歸參ト云々分注云元朝字也與二美作藏人朝敎名字一著到時混亂之間改レ之

准后考

職原抄中務省之下ニ

太皇太后宮　帝王祖母也

皇太后宮　帝王母也

皇后宮　帝王妻也

以上謂二之三宮一和漢同レ之

謹て按ずるに三宮の事職原抄に見えし所右の如し准三宮の事は見えず三代實錄幷公卿補任等を按ずるに五十六代の御門淸和天皇貞觀十三年四月十日帝の御外祖太政大臣從一位藤原良房に（卽忠仁公の事）詔して賜二封三十戶一或本に四月一日に隨身兵仗を賜り年官幷准三宮一由見えたり

年給とて太上皇より初めて年ごとに定れる御給ある事諸臣に至る忠仁公に賜ふ所の御給三宮に准せられしとの御事なるべし後代に及では御給など云事もなければ只其名のみありて其實なしと見えたり年給には年官年爵封戶などいひて年毎に給る所事ながければ爰に略す

是准三宮の號のよりて起る所也夫より後は攝家の人人には及ばず皇子（內親王法親王）宮人諸臣幷法中（此間闕文）煩はしければたゞ其始にやあるべきと思ふ所を別に注して進呈す

儀同三司准大臣の事

職原抄に見えし所は准大臣などいふ事は文武天皇大寶三年正月に三品刑部親王を知太政官事と成たる又聖武の朝に參議從三位大藏卿鈴鹿王を知太政官事となさる是濫觴也帥の內大臣藤原伊周（房前九代の孫關白道隆の男也）歸京の後寬弘二年（一條院の年號）朝參の時大臣の下大納言の上に列なる同十五年准二大臣一賜二戶一千戶一ければ自ら儀同三司と稱するよし見えたりされぱその事の起りは文武聖武の朝よりはじまりて正しく准大臣といひ又儀同三司と稱する事は伊周を以て其始とすべし此後は代々に少からず逍遙院殿の御說を按ずるに儀同三司と云はもと是從一位の唐名也されば中後以來一品に叙せらるゝの後准二大臣一可レ預二朝參一のよし宣下せられ其後は儀同三司と號するなり人數も定らず又官に非れば辭退など云事もなく前官當官の沙汰も

なしと見えたり

親王一品二品無品之事

職原抄に見えし所は皇子の親王●立（にカ）給ふ事尋常の例也雖裸童體にましますといふとも宣旨を蒙り給ふ也元服の時叙品は當代の后腹の親王は三品自餘は四品と云々としるされたり又逍遙院殿の御說にはまづ親王宣下あり其時初位の心にて無品に叙す其後或は三品或は二品に叙するに一品は殊に執せらるゝ事也又無品と申事は五品にや當り給ふべきと問ひ申せらるるに五品にやあたり侍らんか四品までの位なれば無品の次とこそ覺え給ひつれと答られき又親王の位は勿論也世俗に二位をも二品三品四品など云事は唐名の樣に申ならはしけるよしその給ひし也

攝家准三宮の始

太政大臣從一位藤原良房（委しく別に注しければこゝに略す）

內親王准三宮の始

一品資子內親王

是は六十二代の帝村上天皇女にて冷泉院御同腹の御妹にてまします也此後內親王此宣下ある事連綿して絕ず謹て按ずるに七十六代近衞院十七歲の御時隱れ給ひし後に御父白河法皇（白河當作鳥羽）近衞の御母美福門院と計給ひて其御腹に生れ給ひし皇女暲子內親王を帝位に卽參らせらるべきと有しかど稱德天皇の後は其例久敷絕ぬれば近衞異腹の御兄雅仁親王の廿九歲に成らせ給ふをして繼體の君に定めらる後白河院と申せしは是也則後白河第一の宮守仁親王を東宮に定られ法皇の姬宮暲子內親王を東宮の御養母となされ是は后にたゝせ給ひし事もなかりけれど八條院と申參らせ（又これを准后とも申しき）又暲子の御妹高松院を東宮の御息所となされ（是は東宮の御叔母なり）東宮位に卽せ給はん後は中宮にたてさせ給ふべしとの御定めなりされど東宮御卽位の後（則二條院なり）近衞院の后藤原多子を中宮になされしかば（所謂二代后也）高松院をば中宮准后など世には申傳へたり八條院も高松院も美福門院の御腹にて近衞院の御妹にてまします白河法皇あまりに美福門院を愛せさせ給ひしかば斯くははからせ給ひし是則保元平治の亂のよりて起れる所にして本朝の王家衰へさせ給ひし事の起りの其一つにて侍る也此二人の皇女同じく准后と稱し御息所にすゝませ給ひしかば尋常の內親王

の准后の宣旨を蒙り給ひしとは少く例かはれる樣にも侍るなり

御母代准后の始

暲子内親王

卽八條女院の御事前に注しぬ後代に至りて御母代の人に准后の宣旨ある事是を始とや申すべき

女御准后の始

高松院

卽初の高松御息所と申せし御事也前に注しぬ後代に及てはまさしき女御と申すはおはしまさず多くは女御代と申參らせたる御事也其御腹の御子東宮に立せ給ひて後三宮に准せられて母后と成らせ給ひし時に院號を蒙り給ふ也近き比はひ後水尾法皇の御母は後陽成院の女御代にておはしませしが准后の宣旨を蒙らせ給ひて後に中和門院と申奉りき

法親王准三宮の始

二品道源法親王

是は後高倉院の第二の御子八十五代後堀河院の御弟也又後高倉院と申は帝位には卽せ給はず後堀河御卽位の有しかば尊號を參らせられしなり

武臣准后の始

太政大臣從一位平清盛入道淨海

此人は八十一代安德天皇の御外祖なりければ安德御卽位ありし治承四年二月淨海夫婦ともに准三宮の始なるべしされば逍遙院殿の御說には鹿苑院殿每事の樣攝家昇進のごとくたるゆゑに依て此宣を蒙らしめ給ひしよし注されたり心得られず但し淨海の事其例の始よからぬ事なればかくはの給ひしにや若は又按ずるに大臣の妻准三宮の宣を蒙る始も淨海の室を始とやすべき夫より前の事また詳ならず此後は西園寺大相國實氏の室從一位貞子を北山准后と申き此人は八十八代後深草八十九代龜山院兩代の御母大室の女院の御母なれば此宣を蒙らせ給ひし也いづれも皆御門の御祖母なるが故なるべし

將軍家准三宮の始

鹿苑院太政大臣從一位源義滿

百一代後小松院永德三年六月准三宮の宣旨あり其時は左大臣從一位にておはしき其後百四代後土御門院寬正五年十一月慈照院大相國義政准三宮の宣

を蒙り給ふ東山殿と申御事也其時に太政大臣従一位にておはしき此二代は將軍の職にておはしまして此宣ありき義政の御弟大智院贈大相國義視はつひに將軍には成り給はさりしかど准三宮たりしよし諸家系圖には見えたり此人は初め御兄義政天下を讓り給ふべしとて父子のごとくにおはしけり義政に男子出來給ひし後不快の事起りて終に應仁の亂は出來たりし多くは年を經で義政の實子義尙將軍も失ひ（ザカ）給ひしかば義政義視と中なほりし給ひて義視の息男義植を子とし給ひて世を讓られきされば義視に准三宮の宣旨をなされしにや義視世にましませし內今出川權大納言入道殿と申しき其男義植將軍に成り給ひしかば沒後には贈官の事も任せずして將軍の御父なるが故に准三宮の宣旨ありし例とや云べき但し義視准三宮たりし事は公卿補任には見え侍らずされば此人の此宣ありし事は初め淨土門の門跡にておはせし時の事にやいまだ詳ならず

法中准三宮の始

青蓮院准后道玄

是は八十八代後深草八十九代龜山院兩代の關白二條の普光園院良實の息也良實は二條殿の始にてまします道玄の弟三井寺長吏大僧正道除も准后たりし由大系圖に見えたり是攝家門跡准后始なるべし又按ずるに將軍家の男准三后の定ありし始は鹿苑院の息梵光院准后法尊大覺寺准后義昭二人を始とや申べき

清華准三宮の始

未詳

道遙院殿の御說に清華其例希也たしかに所存を得ず北畠親房卿南朝に於て宣下也當朝には用ゆべからざる由注されたりされば其始めいまださだかならずといふべし

右數條某が不才なる見もし聞も及びし所を以て其事の始と思ふ所をまづ注して進呈す

謹て按ずるに日本書紀に神武天皇庚申の秋事代主神の女蹈鞴五十鈴媛命を納て正妃となさる（此時はいまだ帝位に即せ給はぬ時なり）其明年辛酉の春正月帝位に即せ給ひしかば正妃を尊て皇后となされし由見えたり是本朝皇后を立られし事の始也其後代々の帝卽位の初めに皇后を立

られし事皆是はじめ皇太子たりし時の正妃を尊て皇后となされし事猶神武の例のごとし其後五十代の御門桓武天皇御父光仁の讓を受て帝位に卽給ひし初めに始て中宮職を置り是本朝中宮を立られし事の始也其後延暦二年四月（中宮を立られし年より三年にあたる）又皇后を立らる北畠准后の職原抄に中宮は卽皇后也本朝二宮を幷べ置事其謂なく是より此方代々並べ置によりて四宮と號すと見えたり（皇太后宮太后宮后宮中宮合せて四品なり）

此事は六かしき事にて其説長ければ先大略を記なり

五十六代淸和天皇より以前は幼主卽位の例本朝にはなき事にて有しかば天子卽位の日皆東宮の時の正妃を尊て皇后となされし也（桓武より二宮を並べ置れし事は此例にあらず）卽位の後多くの年を經て立后の事ある事は是幼主位を繼せ給ひ御元服の後に行はれし例と見えたれば夫人女御など申す中に或は皇子を設けられ或は天寵を蒙られしなど立后の宣旨ありしと見えたり又謹て按ずるに後宮職員令に（是は文武の朝に藤原不比等勅を奉て撰定られし所也文武は四十二代にあたらせ給ふなり）見えし所は妃二員四品以上夫人三員嬪四員五位以上と見て其餘內侍司よりは皆ことごとく宮人にてあるなり

妃夫人嬪など云は正后の外の御妻也其代には女御更衣など云稱は聞えず女御と云名の見えし事は五十五代文德天皇崩じ給ひし天安二年淸和天皇の女御從三位藤原朝臣古子に從一位をあたへ給ひし由三代實錄に見えたりされば其比ほひには女御など云稱はすでにありし也源氏物語に女御更衣又は御息所などいふ事見えたり此物語は六十六代一條院の御代に出來たりしと見えたれば其比ほひこの妃夫人嬪など云職名ことごとく改りて女御更衣など云稱とはなりし也夫らの後代の女官の事共は八十五代順德院の御製の禁秘抄に見えし所を以て世には其據とせられかく女官の如き其稱の昔にかはれる事も朝家の權ことごとくに攝關の人々に奪はれ給ひ朝儀百廢の日に出來りし事なれば衰世の事ぞあるべきされど尙其初には女御更衣など云もこの妃夫人嬪などのごとくに宮中の女官にて正后のごとくに尊みし事は見えずしかはあれど女御には大臣の女をなさる納言の女は希有の例なり更衣は多く納言の女なるよし見えたれば女御には多くは當時權勢ある大臣の息女を參らせし事なる故にいつ

となくかく正后の如くにはなれるなるべし凡物の盛なるは必衰ふる事なれば攝關の權勢あまりに盛になりて後時の勢變じて院中にて政務を取らせ給ひて藤氏の權勢やゝ衰へ其後又一變して武家天下の事を知り給ひしより攝家の權つひにおとろへしより女御を參らせし事も古の例のごとくに行るゝ事も不叶是よりして女御代と云事は出來たりしにや有べきすべて何代と申す事は後代に出來たりし稱にて侍る（親王代判官代など云事の類）然るに又近き代には女御よりすぐに中宮に立給ふと云事も多くは准后の宣旨を行はるゝ例になりたりと思ふには是は其初より女御にはましまさず女御代にておはしますが故に又中宮に准ぜられて准后の宣旨ありて後には院號をまゐらせらるゝ事にて有べき凡かゝる事代々に隨て或は高く或はひきくなりゆく我朝も異朝も毎々此のごとしたゞ當時目に見え耳にふるゝ事を准據として古を議せんも不通の論と云べしされば古今に通ずるを以て博文とも申すなるべし

武家官位裝束考

武家次第ノ事

世ノ人武家ノ事ヲ論ズルニハ、鎌倉京當代ノ御事ヲナラベイフ、コレタヾ普通ノ論ト申スベシ、鎌倉ノ代トイヘドモ、其姓ヲ易ルコト三タビナレバ其時勢モ同ジカラザル事イフニ及バズ、京八代ノ如キモ、時勢大ヤウハ三度迄變ジタル歟、マヅ鎌倉ノ初三代將軍ノ時ハ、武家將軍ノ代タル事論ズルニ及バズ、但シ其頃迄ハ、サスガニ王政ノ御名殘オハシケレバ、頼朝世ノ事ヲ沙汰シ玉ヒシニモ、毎事院宣ニヨラレズトイフ事ナシ、承久ノ亂ノヽチ、攝家親王ノ將軍代々ノゴトキハ、武家ノ事ハイフニ及バズ、公家ノ御事モ、悉皆北條ガ家ノハカラヒニテ、陪臣國命ヲ執ル代ナリケレバ、天下ノ大勢コトニ移リカハレリ、ソノ上關東ノ事モ宗尊親王御下向ノ後ハ、其儀又前ノ代ニカハレル事共モ多シ、次ニ足利殿ノ代モ、ハジメ尊氏義詮兩代ノ間ハ、南北戰爭ノ最中ナレバ、論ズルニタラヌ所ナリ、三代ニアタリ玉ヒシ鹿苑院ノ公方義滿ノ代ノ盛ナルニ及ビテ、武家ノ儀式大キニ備レル事ドモアリ、其名殘ハナヲ東山ノ公方義政ノ代迄ニ及ビキ、義政ノ代ノ半ヨリノチハ、天下又大キニ亂レ、六十餘州ガウチ、安キ年月モナクシテ、終ニ滅ビ玉ヒヌレバ、其代ノ事ドモマタ論ズルニタラズ、當代ノ御事ニ至リテハ、天下一統ニ歸シマキラセ、昇平スデニ百年ニオヨビヌレバ、京鎌倉ノ代代ノ比量スベキ所ニアラズ、マヅコレラノ事共、ヨクヨクワキマフルニアラザレバ、古來武家ノ代々ヲモ論ジ難ク、マシテ當代ノ御事ヲ議スルニ及ブベカラズ、タヾソノ事ドモ最モ多クシテ其說又長ケレバ、コヽニハ詳ニセズ、

武家官位ノ事

鎌倉ノ代ノ始、頼朝東國ヲ居所ト定メラレテ、天下總追捕使ヲ申請ヒ、諸國ニ守護地頭職ヲ置テ、其身ハ正二位大納言ノ大將ニテ終リ玉ヒシ事、其慮遠クマシマセシ事、誠ニイミジキ將軍ニテハオハシマシケリ、實朝ノ御時大臣ノ大將迄ニ至リ給ヒシ事、世ノ人ハ其官位以テノ外ニ超過シ玉ヒシナド申セシモアレドモ、ミヅカラ心ニ思食ス所アリトモミエ、又

後代將軍大臣ニアゲラレ玉フ事ノ初例ナレバ、アナガチニ傾ケ申スベキ事ニハアラズ、賴經ヨリ後ノ代代ハ、皆々北條ガタメニ立ラレテ、其威福スデニ執權ノ手ニ隨ヌレバ論ズルニタラズ、足利殿ノ代ノ初、尊氏正二位ノ大納言ニテ終リ玉ヒシ事、賴朝ノ芳躅ヲ繼レシト見エタレド、此御事ハムカシ承久ノ亂ニ、義時ガ其代ヲシヅメシニモ比スベカラザル事ドモナレバ、マシテ賴朝ノ御事ニハ似ルベクモアラズ、義詮ノ御事又論ズルニ足ラズ、義滿ノ御事、世ニハ驕恣ナルコト共オハシケル由ヲ申ス、然レドモ勇武モ父祖ニスグレ、器量モ我國ニアマル程ニモオハセシニヤ、其武四海ノ亂ヲ定メ、其文萬民ノ肩ヲ息フホドニハ至リ玉ハザレドモ、北朝ノ御事ヲモヨク沙汰シテ、其身モ人臣ノ位ヲ極メテ、身死シ玉フニ及ビ太上天皇ノ號ヲモ進ラセラレ、異朝ノ天子モ我國ノ國王ニ封ジ玉ヒ、恭獻ノ諡ヲモ贈リ玉ヘリ、將軍ノ御事ヲ公方ト申マキラセテ、其儀洞中ノ式ヲ用ヒラル、コトモ、又武家ノ永式ヲ定メオカレシコトモ、皆々此時ニ備ハリヌレバ、コレモアナガチニ傾ケ申スベキ御事ニハアラズ、

按ニ太上天皇ノ號ノコト、或ハ現存ノ時トモ、或ハ薨後ニ贈ラレシ所也トモ申シ、又ハ此事ハタシカナラズトモ申歟、カク其事ノ詳カナラヌハ、誠ハ公家ノ人々此事ヲ諱ンデ、正シク傳ヘ玉ハヌガ故ナリ、思フニ此號現存ノ日ニ進セラレシ事、定歟、其代ニ正シク室町公方トモ申シ、又御ナリナドイヒシ事ドモアリ、モシ薨後ニ贈ラレシコトナランニハ、現存ノ日ニ、カク申スベキ謂レモナシ、又此事詳カナラズトイフ說一向ニウケラレズ、正シク太上天皇ノ像今モ金閣ニアリ、其事ナカラズンバ、イカデカカヽル像ハアルベキ、サレドマヅ世ノアマネク申傳ル所ニヨリテ、コヽニモ薨後ニ贈ラレ玉ヒシ由ニハシルスナリ、

其後大臣ノ大將ニ至リ玉フ事四代、ソノ中准后ノ宣ヲモ給ハリ玉ヒシモアレドモ

義持義敎義政義尚、此中義政准后ノ宣旨アリシカ、コレシカシナガラ鹿苑院殿ノカゲニ、カクレ玉ヒシガ故ナリトハミエタリ、

附

羽柴殿ノコトハ、一向ニ武家ノ例ニ准ズベカラズ、

平相國淸盛入道ナドノコトニ似タルコトモアル歟、但シ此人卑賤ヨリ身ヲ起シ玉ヒタレバ、天下ノ大名、我下風ニ立ン事、アリガタシトオモヒハカリテ、頓テ朝命ヲカリテ其志ヲ得ベキガ爲ニ、攝家ノ例ニヨリテ關白ニオシナリテ、世ノ事ヲトラレタリ、又平氏ノ盛ナル時、朝廷ノ顯官、多クハ其一門ノタメニフサゲタリキ、羽柴殿ノ時ニハ天下ノ大名、皆々卿相雲客ノ列ニイタレリ、事ガラカハレル如クナレドモ、當時ノ大名多クハ秀吉ノ猶子トシテ豐臣ノ姓ヲ冒シタレバ、コレ又平氏一門ノ事ニ似タル所ナキニハアラズ、

武家御家人官位

武家御家人官位ノ事、鎌倉ノ代ノ始メ一族ノ源氏、ソノ勳功ノ賞トシテ、受領セシ者數人、此外ニハ六位セシモノ僅ニ十餘人、但大江廣元三善康信等ノ如キ京家ノ人々、關東ニ祗候セシ類ハ此限ニ非ズ、逍遙院殿ノ御説ニ、鎌倉右大將家ノ時、專ラ四府或ハ檢非違使ヲ所望ノ由シルシ申サレシ由見エタリ、其代ノ事ヲ按ズルニ、誠ニ此御説ニ符合ス、賴家實朝兩代、大樣ハコレニカハラズ、賴朝關東下向ノ時、殿上人扈從シテ、武家祗候ノ人々出來タリ、北條ガ家四品セシ事、其時ニ始マレリ、其後宗尊親王御下向ノ時、武家祗候ノ公卿殿上人コレカレアリテ、四位五位六位ノ御家人等、次第ニ多クナリタリ、サレド皆々受領四府、其餘檢非違使ノ輩ナリ、コレ又前代ノ例ノ如シ、足利殿ノ代ノ初、五位六位ノ輩等、又鎌倉ノ始ノ例ノ如シ、義滿ノ御時ニ至テ、武家祗候ノ公卿殿上人アルコト、鎌倉親王ノ御時ノ如シ、

今ノ代迄モ、武家昵近衆ナド聞エシハ、皆其後ノ人々ニヤ、

但シ公方ノ御連枝、公卿ニ至リ玉フ事モ、此時ヲ初例トス、其餘鎌倉殿ヲ始メテ一族ノ人々、多クハ四品ニ至リ玉ヘリ、又御家人ノ中、マヅ管領ノ類モ、四品ヲ以テ先途トス、其中三位セシ人々二三人ニハスギズ、其餘三位セシ事ハ勳功ノ賞希有ノ例ニテアリキ、職事ノ家モ五位ヲ以テ先途トス、四品セシ輩又希有ノ例歟、此外多クハ受領六位ノ侍殊ニ多シ、但シ又其代ニハ四位五位六位等モ、正從上下ノ次第ヲ經テ昇ス、ム、今ノ如クニ四位必從下、五位必從

下ノ兩階ヲ過ルコトアタハザルガ如クニハアラズ、其官ノ如キモ其家ニヨリテ任例モ大樣ハ定マレリ、タトヘバ鎌倉殿ハ先左馬頭ニナサレ玉ヒ、左兵衛督ヲ先途トシ玉ヒ、管領ノ如キモ斯波ノ家左兵衛ノ督、畠山ノ家左衛門督、細川ノ家右京大夫、但シ細川ガ家ハ公方御元服加冠ノ嘉例ニヨリテ、其時武藏守ニ任ジ、禮畢リヌレバ本官ニ還任ス、職事ヨリ外各其家々ニヨリテ、其官モ亦先途トスル所同ジカラズ、多クハ皆四府、(左右ノ衛門兵衛ノ督佐尉)四職、(左右京ノ大夫修理大膳)受領ニハ過ギズ、(國守權守介等)皆是鎌倉ノ芳躅ヲ繼レシ所ナリト見エタリ、

　四府檢非違使ノコトハ、賴朝ノ專ラ望ミ申サレシ所ト見エタリ、京大夫修理大夫ハ北條ガ家ニ其例アリ、大膳大夫ハ大江廣元朝臣ノ例タル歟、

彈正ノ如キモ當時武家ノ任例ハ多カラズ、掃部頭ノ如キモ攝家ノ外ニハ其任例アラズ、サレバ武家文官ノ任例、其代マデハ多カラズ、又任官ノ後更ニ任ゼシ人アレバ、前官ノ人還任ノコト望ミ申シテ、後又當官ト稱ス、

　タトヘバ大内左京大夫政弘任官ノ後、一色ガ家左京大夫ニ任ジケレバ、大内ハ前左京大夫ト申シ、其後還任ノ宣旨ヲ申請テ、又左京大夫ト稱セシ類ナリ、

受領ノ如キモ、或ハ任官ノ後更ニ任ゼシ人アレバ、必ラズ前司ト稱シ、

　ミヅカラハ前何國守ト申シ、他人ハコレヲ何ノ國ノ前司トイヒシ歟、

或ハ前任ノ人アレバ、後任ノ人ヲバ權守ニモ任ゼラレシ歟、

　攝津ガ家ニテ親秀ト云シガ代ニ、丹波ノ權守ニ任ゼラレシ例ナドアリキ、此國ニ權守ハアラザレドモ、武家御執奏アリキ、

カク足利殿ノ代盛リ迄ハ、御家人ノ官位、各古ノ制ヲ存ゼラレキ、サレバ其比迄ハ太郎左衛門、三郎兵衛、四郎兵衛ナド聞エシ輩、皆々四府ノ尉ニシテ六位セシモノ共、其字ヲ

　昔武士ノ字トイヒシハ、今ノ代ノ名ト云フ事ノ如シ、

其官ニアハセテ呼シナリ、左右ノ衛門大夫、左右ノ兵衛大夫ナド聞エシハ、皆コレ叙留ノ輩ナリ、

五位ニ叙シヌレドモ、其官ハモトノ六位官ナレバ、左右ノ衛門兵衛大夫ナド申セシナリ、叙任ノ後ソノ官ハモトノ如クナルヲ、叙留トハ申スナリ、又其代ノ人、タトヘバ監物太郎、藏人次郎、左近太郎、右馬次郎ナドイヒ、相摸太郎、隱岐次郎、武藏五郎、陸奥六郎ナドイヒシモ、皆是其父ノ官途シ受領セシコトヲ其家ノ面目トシテ、其子ヲカクハイヒシ也、權太郎介八郎ナドイヒシモ、其父其國ノ權守、其國ノ介ナドニナサレシガ、子息等ニテ源内平内藤内橘内ナドイヒシハ、ミヅカラ内舍人(ウトネリ)トナサレシ輩ナリ、其外源太郎平二豐三橘四神五紀六長七春八藤九田中江太野二中三丹三宗四菅五宮六高六清七善八ナド聞エシハ、皆其姓ト其行第ヲ合セテ稱セシ也、源太ハ源姓、平二ハ平姓ナリ、其他豐原橘大神紀長谷部春原田口大江小野中原丹治惟宗菅原宮道高階清原三善等ノ諸姓、悉クニカゾフルニ遑アラズ、又大太郎小太郎孫二郎彦三郎又太郎餘次郎先次郎後三郎ナド聞エシハ、其比ニハ太郎ヨリ次第ニカゾヘテ、十郎ニ至リヌレバ、又トモ餘トモ加ヘヨビテ、太郎ガ子ヲ小太郎トイヒ、其子ヲ孫太郎トイヒ、又其子ヲ彦太郎トモイヒ、大トイヒ先トイヒ後トイフガ如クニ稱シタレバ、人ノ召名(ヨビナ)ト云モノモ、近代ノ如ク其義ナキコトニハナカリシナリ、官制モ人ノ召名モ、古制ヲ失ヒシコトハ、應仁ノ後二百四十餘年ガ間ノ、亂世ノ俗ニ出來シ事共ナリ、羽柴殿ノ時、天下ノ武士叙位任官ノ次第、皆々濳濫ノ事共ニテ論ズルニ及バズ、當代ニ及ビテ武家ノ官位ハ、公家當官ノ外タルベシト定メオカレシコト、古來將軍ノ代代ニ超絶シ玉ヒシ御事トゾ申スベキ、サレド其叙任ノ次第ハ、京鎌倉ノ代ノ頗古制ヲ存ゼラレシニハ及ザル事共アリ、之則當代ノ御爲ニ其遺憾ナキニアラザル歟

謹按鎌倉ノ始頼朝當國ヲ居所トナサレ、先六十餘州惣追捕使幷諸國ノ守護地頭ノ職ノコトヲ申請玉ヒ、征夷大將軍ノ後正二位大納言ノ大將ニ止リ玉ヒシ事ドモ、イハレアルコトト見エタリ、サレバ先其意ヲヨク按ジテ、武家ノ大義ヲバ論ゼラルベキコト歟、當時此人ノ望ミ請申サレンニ、イカナル官加階モ誰カハ傾ケ申スモノ、アルベキ、マシテヤ近クハ平氏一門ノ例遠カラザルヲヤ、

愚管抄ニ頼朝ノコトヲ論ジテ、大臣モ何モニテアリケレド、我心ニイミジクハカラヒ申ケリ、イカニモ〳〵末代ノ將軍ニアリガタシ、ヌケタル器量ノ人ナリトミユ、當時モカクハイヒシナリ、

シカルニ其官モ位モ、カクノミニテ、オハシマセシハ、朝家ノ官階ヲ重ンゼズ、武家ノ職掌ヲ重ンゼシメントノ御事ニテ、又御家人ノ如キモ諸國受領ノ外ハ、四府檢非違使ヲ專ラニ望ミ申サレシ事モ、家人等モトヨリ武人ナリ、文事ハ既ニ家業ニアラズ、サラバ文官ノ如キハ望ム所ニアラズ、武職ノ如キハ任ジ玉ハラバ、給ルベシトノ御事ナリ、サラバ武家ニテ專ラ貴ミ思フハ武職ナリ、朝家ノ官階ノ如キハ、アナガチニ貴シトシ玉フベキニハ非ズ、カヘス〴〵モ此心得武家ニハ必ズ思食忘ルマジキ御事歟、サテ實朝ノ御時大臣ノ大將ニ至リ玉ヒシ御事ハ、ソノイハレアリト見エタレバ論ジ申スニ及バズ、

其後鹿苑院ノ公方、官加階思ヒ儘ニノボリス、ミ玉ヒシ御事、頼朝ノ御事ニハ異ナル樣ニ見ユレド、御家人ノ官位管領トイヘドモ、四品ヲ其先途トセラレ、四府京職等ノ外々官ヲ望ミ申サル、ニ及バザリシニヨリテ見ル時ハ、自ラハ人臣ノ極ニ至リ玉ヒシコト、一定思食設ケラレシコトアリトハ見エタリ、

思フニ我國ニテハ、太上皇ノ號ヲウケ、異朝ヨリハ日本國王ト稱セラルベキ御爲ニ、先人臣ノ極ヲバツクサレシニヤ、マタ太上皇ノ號ノ事、弓削道鏡ガ事ヲオモヘバ、イハレナキコトニ似タレドモ、イカサマニモ其ヨシナシトモイフベカラズ、其故ハ准三后ト申スハ、太皇太后宮皇太后宮皇后宮ニ准ゼラル、ノ御事歟、サラバスデニ准三宮ノ官アラン上ハ、太上皇ニ准ゼラレンモ、唯天子ノ御父ト母トノ稱ノカハレルノミナリ、カ、ルコトヲ周易ニ履霜堅氷至ルトハ申スナリ、古ノ代ニ藤氏ハ准三宮ノ宣アリシハ、此時太上皇ノ號望ミ申サセ玉フ、トノ始メナリ、公家ノ人々、准后ノ宣ヲバ怪ミ思ハズ、太上皇ノ號ノコトノミ、イミカクシテ正シク傳玉ハヌハ、類ヲ推サズトモ申スベシ、

其後ノ公方、四代マデ、大臣ニノボリ玉ヒシ事ハ、鹿苑院殿ノ芳躅ヲ繼レシ上ハコレ亦論ズルニ不レ及、當家ノ始、大相國兩代マデ打ツヾキ玉ヒ、其後皆大臣ニ至ラセ玉ハズト云コトナシ、コレモ亦議シ申スニ及ブベカラズ、スデニ鎌倉京ノ將軍、代々此先蹤オハシマス上ニ、羽柴殿ノ代ニカハラセ玉フ上ハ、將軍ノ御職ヲ重ンジ玉フノミニアラズ、官位モ同ジクノボリス、マセ玉フベキ御事、コレ時勢ノシカルベキ御事ナリ、又三家モ公卿ニ至リ玉フ御事、コレ亦足利殿御連枝ノ先蹤オハシマセバ、トカフ申スニ不レ及、又諸家ノ人々モ羽柴殿ノ代ニ、納言參議ニ至リシ後ハ、今モ中少將ニ任ゼラル、類モ、又サモアルベキ御事ナリ、寛永行幸ノ時ニ、公卿ニナサレシ人々アリ、コレ非常ノ例ナルベシ、

タヾ議シ申スベキ所アルハ、御家人官位ノ事共ナリ、

當家老中ナド申スハ、天下機密ノ事ヲツカサドリテ、其職掌譬ヘバ朝家ノ大臣、武家ノ執權管領等ノ任ニ異ナラズ、シカルニ當家ノ初兩代ノ間ハ、其職名モ奉書連判衆ナドイヒテ、其官五位、其祿纔ニ萬石ニアマル迄ナリ、是我神祖往代ヲ鑑ミ玉フ所オハシマシテ、後代ノ制ヲ立オカセ玉ヒシ所歟、

足利殿ノ代、管領ノ强僭ニヨリテ、終ニホロビ玉ヒシニ懲リ玉ヒ、鎌倉ノ初例ヲ用ヒラレシ歟、此事ヨク大明ノ太祖ノ相官ヲオカレザリシニ似タリ、必ズ深キ神慮アルベキ御事歟、

三代ニアタリ玉フ始ニ、寛永九年ノ秋、二條ノ邸行幸ノ時、老臣ノ二人從四位下ニ叙シ侍從ニ任ゼラル、是當代ノ朝非ト申スベシ、コレ近世ノ老中必四位ノ侍從ニナサル、コトノ始メナリ、サレド其比ハ此職ニアル人悉クシカアリシニ非ズ、其後又寛永廿年大老ノ職少將ノ始メナリ、其後ハ其官モ文武ノ職ヲ撰バズ、其位モタヾ從五ノ下ニトヾマレリ、古ノ代ノ如ク六位ノ侍アルコトモナク、寛永九年十一月布衣御免ナドイフコト出來ヌ、此事古ヨリ此カタ文武ノ間ニ未曾有ノ初例ト申スベシ、又ハジメ神祖ノ御時、前代將軍ノ代ニシカルベキ人ノ後ヲ撰バレ侍從少將等ニナサレテ、堂上ノコトヲツカサドラセ玉ヒタリ、コレラハ鎌倉ノ代ノ末、京都ノ代ノ盛リニ、武家祇

候ノ公卿殿上人ニ准ゼラレシ所ナレバ、御家人ノ例ニ比ブベカラズ、

神祖堂上ノ人々、武家祇候ノ事ヲトヾメラレテ、前代ノ時シカルベキ武家ノ後ヲ撰ンデ、其事ニ准ゼラレシ御事、コレ又神慮ノホド兎角申スニ不レ及中少將ノ如キハ、モトヨリ近衞ノ司サナレバ、ソノ武職タルコト論ズルニ不レ及、サレド前代將軍ノ代ニ、御家人ノ任例ニ未レ聞處ナリ、マシテヤ侍從ノ職ノ如キハ、御家ノ近臣武家ノ人々、タトヒ其位ハ從四ノ下ナランニモ、從五位下ノ官ニ任ゼラルベキ所ニモアラズ、マタ天下ノ機務ツカサドラン人々、タトヒ其位ハ從四ノ下ナランニモ、從五位下ノ官ニ任ゼラレンコトモ、其官アマリニ淺キニ過ギタリ（侍從ハ從五位下相當ノ官ナリ）今ニ於テハタヾ鎌倉京ノ代ノ如ク、其位ハ正四位ノ上ヲ先途トシ、其官ハ四府ノ督或ハ四職ノ大夫タランコト、尤モ其宜ヲ得タリトモ申スベシ、ソレヨリ下モ悉皆鎌倉京ノ例ニマカセテ、其位ハ四位五位六位各正從上下ヲワカチ、如レ此ナレバ三位ヲ合セテ、武家ノ位階十三等ナリ、次第ノマヽニスヽメノボセラレンニハ可レ然事共多カリ、

其官ハ武職ノ外ハ、皆諸國ノ受領タラシメンコト然ルベキ御事ナリ、此等ノ次第詳ニセンコト其說最長ケレバ悉クニシルシガタシ、

又按武家ノ始、鎌倉殿アナガチニ朝官ノ高下ヲ論ジ玉ハズ、武職ヲノミ專ラニセラレシハ、オモフニコレ一時ノ權宜ナリ、京都ノ代ニ御家人ノ官位等、鎌倉ノ例ニヨラレシコトモ、ソノ據ナキニアラズ、其職スデニオモクシテ、其品貴カラザランコト其理ノ得タリトハ申スベカラズ、モシフタツナガラ其宜シキヲ得ベキニハ、古我朝家ニシテ勳階ヲオカレシ例ニ依リテ、武家ニハ公武各相分ル、所アリテ、武家ノ職掌品階モ、同ジク共ニ貴カラザルコトヲ得ベカラズ、マシテヤ當家ニ至リテハ、武家ノ官位ハ堂上ノ外ニ定メオカレシハ、只自ラ古勳階ノ事ニ相同ジ、サラバ老中ヨリ以下ノ御家人、勳一等二等ヨリ次第ニ勳十二等ニ至リテ、公家ニハ官位ヲ以テ其貴賤ヲ論ジ玉ヒ、武家ニハソノ勳階ト職掌トヲ以テ、其高下ヲ論ゼンニハ、彼是相妨ル所モナクテ、武家ノ職掌モ自カラ貴キ所ヲ得テ、異朝ノ人ノキカン所モ、

尤國體ヲ得ル所ニモアルベキナリ、サレド此議鎌倉京ノ代ニ、イマダ其例ヲキカザル所ナレバ、タヤスクハ申ガタキカ、サレド又我神祖ノ武家ノ官位ヲ、堂上ノ外ニ定メオカレシ神慮ニハタガフベカラズ、當家ノ老中ハ朝家大臣ノ職任ニ相同ジ、然ルニ其官ハ從下五位相當ノ侍從ナリ、其位ハワヅカニ從四ノ下ナレバ、堂上ノ人々モ、イカデカ其職ヲアハセテ輕ンジオモヒタマハズト云フコトアルベカラズ、マシテ異朝竝ニ朝鮮琉球ノ國々、我國執政ノ大臣、其位其官カクノ如クナリト、聞人アザケリ笑ハズト云フコトナカルベシ、古ノ勳位トイヒシハ秦ノ武功ノ爵ニヤ事起リケム、唐代ノ制ニテ武人勳功アル者ニ賜ヒシ所ナリ、我朝ニモ其例ニヨラレテ勳階ヲ定メオカル、中世ヨリ後ハ其事聞エズ、タヾ今モ諸社ノ神位ニハ勳階ノアル多シ、勳一等ト云フハ正三位ニ相當ナリ、コレヨリ次第ニクダリテ、勳十一等ハ正八位ニ相當リ、勳十二等ハ從八位ニ相當レリ、其位高シトイヘドモ、勳功小キナレバ勳位ハヒクシ、其位卑シケレドモ、勳功大キナレバ勳位ハタカヽリキ、其事令式竝ニ國史等ニ詳カナリ、譬ヘバ武家老中、其位ハ正四ノ上ヲ極トセンニ、天下機密ノ大臣ノ位ニハ猶卑シト云フベシ、カヽルニ勳一等ヲ賜ハランニハ、勳位ハ公家ノ正三位ニ相當レバ、サラバ老中ノ職、公家大納言ノ官ニ相當ルベシ、尤國體ヲ得タリト申スベキ歟、殊ニ勳位トイフコト、昔ヨリ武人ノ爲ニ設ケオカレシ所ナレバ、武家ヨリ申請レンコト尤御理運ノ御望ミナリ、其上又勳位望申サセ玉ヘバトテ、公家ノ人々ニサラニ相妨ルコトアラザレバ、スコシモカタブケ申ス人アルベカラズ、但又鎌倉京ノ代ニナキ例ナリ、イカヾト申スモノモアランカ、鎌倉ノ代ノ如キ武家トイフモノ出來シモ、鹿苑院殿ノ代ニ、武家ノ儀式トイフモノイデキシモ、皆々先例アルニモアラズ、サレド申請レテ其式ヲバ立ラレタリ、此勳位ノコトハ、本朝ノ昔朝家ノ例アリテ、シカモ武人ノ爲ノ事ニテ、神祖武家ノ官位ハ堂上ノ外ト定メオカレシ所ニ、ヒシトアヒタルコトナレバ、ナニゴトモシカルベキ御事共ナリ、タヾ今ノ世ノ人ノ心ノツカヌト申スモノニヤ、

附

令ニ見エシ勳位ノ事

勳一等　相當正三位　勳二等　相當從三位
勳三等　正四位　勳四等　從四位
勳五等　正五位　勳六等　從五位
勳七等　正六位　勳八等　從六位
勳九等　正七位　勳十等　從七位
勳十一等　正八位　勳十二等　從八位

此勳位ト云コト、異朝ニハ今ニアリ、朝鮮國ニモアルコトナリ、

附

位署ノ式　國史竝ニ公卿補任ニ見シ所少々

參議從三位勳四等大野東人
參議正三位勳二等兼授刀大將藤原眞備
右大臣正二位勳二等吉備眞吉備

ナド見タリ、コレラハ本位ト勳位トアル人々ナリ、本位計リニテ勳位ナキアリ、コレ武功ナキ故也、又勳位バカリニテ本位ナキアリ、コレ武功ハアレドモ本官ナキ人ナリ、老中ナドノ異朝ヘノ書ニ、タトヒ本位ハアサクトモ勳位タカヽランニハ、國體ニ於テシカルベキ御事ナリ、

裝束ハ本位ノカタニツクナリ、モシ本位ナキ人ハ黃ナル袍ヲ用ルヨシ、延喜式ニ見エタリ、

武家裝束ノ事

本朝ノ冠服、上古ヨリ此カタ、代々ニ其制アラタマレル事共聞エテ、四十二代ノミカド文武ノ御時ニゾ、唐代ノ制ヲウツシ給ヒテ、今ノ代ノ制ハ出來タリケル、ソレヨリノチマタ世ノクダレルニ隨ヒ、古ニ聞ヌ衣紋色目ナド多クナルマヽニ、白河堀河ノ比ホヒニ至リテ、古ノ製ハ大キニ變ジタリキ、

延喜式ヲ按ズルニ、ソノ代ニハ衣ノ色織文等、ナヲ古ニカハラズ、源氏物語等ノ中、古ニ聞エヌ色目衣紋ナド見エテ、堀河ノ御時ニ至リテ、古ノ製ハ變ゼシトミエタリ、マヅカヽルコトソリヲヨクヨクワキモフベキ事ナリ、今ノ代堂上ノ人々沙汰シ玉フ所ノ如キ、皆々後代ノ制ニヨリテ家々ニ秘シ傳ヘ玉フコトナドオハスカ、サラニ古ノ制ニハアラヌ事ドモナリ、ヤブレタル帚ヲ千金ニモカヘジ

トテ、家ノ珍トオモヒシ人モアレバ、セメテハソレラノ事共、家々ノ珍トモシ玉フベキモムベナリ、武家ノ代ノ始、頼朝ノ卿鎌倉ヲ居所トナサレテ、世ノ事沙汰シ玉ヒテ、武家ノ儀ドモイミジクユヽシク作リタテラレ、公家ノ式ニモヨリ用ヒ給ハズ、此事深ク謀リ遠ク慮リ玉ヒシ所アリ氣ニ見エタリ、愚管抄ニ頼朝大將拜賀ノ事シルシテ、大將ノヨロコビニモイミジクメヅラシキ式ツクリテ、前駈十人ハ皆院ノ北面ノ者賜リテ、公卿ニハイモフトノ夫能保中納言、ソノイモフトノムスメノムコ公恒中將、又イトコヲ子ニシタル基家中納言ガ子ノ保家中將、コレヲゾグシタリケル、我車ノシリニ、七騎ノ武士ヲ鎧キセテカブトハ被ズ、タヾ七人具シタリキ、見ル人コハユヽシキ見物カナト申ケリト見エタリ、マサシク參內ノ儀ダニ公家ノ式ヲバ用ヒラレズ、甲冑ノ武士ナド具セラレシト見タレバ、武家ノ儀ニオイテハカナラズシモ公家ノ式用ヒマジキ事、マヅコレ武家ノ故實タル歟、コレラノ事ドモ大キニ心得アルベキ事共ナリ、ヨク〳〵按ズベキ事ニヤ、

東鑑等ヲ按ズルニ、マヅ束帶劒笏等ノ儀モツトモ希有ノ例ナリ、将軍宣下ノ日、南ノ御堂供養ノ日、大將拜賀ノ日等ノ儀ナリ、猶タヅヌベキコトカ、直衣ノ儀モ、直衣始參內ノ時ノ外ハイマダ見ル所ナシ、猶タヅネベシ、此外威儀ヲ刷ルヽノ時ハ、立烏帽子水干ヲ用ヒラル、此事定マリシ式ナリ、社參ノ時ハ必ズ立エボシ淨衣、ヨノツネニハ布衣ニテ、直垂ノ儀モ多クハ見エズ、ソレヨリ後ノ代々モ、大ヤウハ此式ニヨラレテ、御騎馬ノ時ハ水干、御輿ノ時ニハ布衣タル事、又定マレル式歟、宗尊親王御下向ノ、チ、始テ御直垂ナメサレテ御乘馬始ノ儀アリト云云、此儀ニヨレバ鎌倉ノ代ヨリ、直垂ニ大口袴タル事ウタガフベカラズ、御家人裝束ノ式モ束帶ノ儀、三代將軍ノ代ニハイマダ見エズ、ソノ、チノ代、元日ノ儀、御劒役人束帶、御調度役布衣、ヨノツネノ式ナリ、但シ將軍家ハ布衣、衣冠ノ儀又希有ノ例也、御移徙供奉ノ例ノミニヤ、慶賀ノ時、白水干白直垂、但シ一段ノハレノ時多クハ水干、御弓始御的始ノ時ハ立烏帽子水干葛袴淺沓、定マレル式也、京ノ代ニモ、此儀ハ定マレル式ナリ、ヨノツネハ布衣下紲組シ騎馬、供奉ノ時六位ノ侍ハ布衣ニ弓矢ヲ帶セシ事多シ、コレモ征箭野箭ノ式アリ、宮仕供奉ノ時、皆々立烏帽子ニ淨衣、頼朝ノ御時或ハ御劒ノ役或ハ警備ノ時ハ、折烏帽子ニ直垂、或ハ調度懸或ハ布衣ノ下ニ腹卷ノ儀アリキ、但シコレハ最希有ノ儀ナリ、其後實朝ノ御事アリシヨリ、直垂着トテ、立烏帽子ニ直垂帶劒ノ人、

必ラズ御輿ノ左右ニシタガフ事、ヨノツネノ儀也、足利殿ノ代ニハコレヲ左右ノ帯刀トイヒキ、又コノ頃ニ折烏帽子トイフモノ今ノ代ニアル物ニハアラズ、供奉ノ散狀ヲ見ルニ、布衣下紐直垂着ナドイヒシ、定マレル儀共アリトミエタリ、足利殿ノ代ニ至テモ、大ヤウハ鎌倉ノ舊規ニヨラレキ、サレド其時ニ隨ヒテ斟酌ノ儀アリケルニヤ、マヅ公方御參內ノ時御束帯御直衣等ノ外、殿中ノ儀、元日ニハ御立烏帽子御白直垂、其餘ハ御折烏帽子紫朽葉等ノ御直垂、常ノ御直垂御大口トミエシハ裏打ノ儀ナルベシ、御元服ノ時御立烏帽子ニ白襖ノ御狩衣、任大將ノ、チ御出座ノ時香ノ御狩衣ノ儀モ見エタリキ、御評定始ノ時御烏帽子直衣下紐定マレル式歟、又御家人等ハ慶賀ノ時白直垂或ハ大帷ヲモカサネ、其餘ハ淺黄ノ直垂ニ大帷ヲモカサネ、ヨノツネハ裏打皆々大口ノ袴ヲ用ユ、夏ハスキスワウ、御弓始御的始ニハ立烏帽子水干葛袴淺沓鎌倉ノ式ノゴトシ、犬追物ノ時ハ射手スワウヲ用ユ、普廣院殿ノ御事アリシヨリノチ、近習ノ人々上下ト名ヅケテスワウノ袖トリテ肩衣トナヅク、小袴着テ扈從スル事出來タリ、此儀鎌倉ノ代ニ直垂着トイフモノ出來シニ同ジケレド、世ノクダレルサマ古ニ及バズ、誠ニ口惜シキ事ナリ、但シ其ノ肩衣トイフ物モ始ノホドハ今ノ樣ニヒダメナドトルトイノ事ハナカリキ、肩衣ニヒダトル事ハ、松永彈正久秀ガ出セシ事ナリ、又直垂ニ大口ノ袴ノ用ヒシ事、又布衣直垂等ノ袴ニ下紐用ヒシ式ナド、イツレノ頃ヨリスタリケルニヤ、イマダ考フル所アラズ、ソノ頃ヨリ長袴ナドイヒテ、袴ノスソ地ヲヒク事ナド出來、ソノ、チ又直垂着ル次第ヲモウシナヒテ、ヨノツネニモ鎧直垂着ル次第用ユル事ニナリタリ、ソノ中京ノ代ニキコエシスワウトイフモノ、事、鎌倉ノ代ニハ聞エズ、足利殿ノ代享德ノ比ホヒヨリソノ名ミエタリ、但シ此モノ直垂ノ制ニカハラザレバ、ソノ代ノ人ノ其名ヲヨビカヘシニヤ、コレ又イマダ考ル所アラズ、京ノ代ニ専ラヒタヽレトイヒシハ、裏打ノ事ニテ、ヒトヘノヒタヽレヲバスヾトイヒシニヤ、近代ハ直垂トスワウトハ衛トチト腰トカハリテ、スワウハ平侍ノミ用ユル所ナリ、京ノ代ニハ四位五位六位モ、皆々スワウキタリシ例タシカニ見ユ、又ムカシハ仕丁死スル時ニモ、冠スカズトイヒシ事ノ如クニ、甲冑ヲ帯スル時モ、烏帽子キヌトイフ事ハナカリキ、近代ノゴトクニヨノツネ烏帽子キザル事ニナリタルハ、應仁ノノチ打續キタルミダレニ、ヨノツネ甲冑ヲノミ帯シケルホドニ、夏ノ暑サニ堪カネテ、サカヤキナドモ大キクナリキ、其頃ヨリ烏帽子ヲモキヌ事ニナリ、又エボシ折ル式ヲモコトヾヽクウシナヒテ、今ノ樣ナル物ハ出來シ

トハ申スナリ、スベテコレラノ武家ノ舊儀ウシナヒシ事共、足利殿ノ代ノ末ザマミダレタル代ノ風俗ナリ、

謹按武家裝束ノ式、束帶直衣狩衣等ノ外ハ、公家ノ式ニカハレル事、コレスナハチ武家ノ故實ナリ、一段刷ハセ玉フ時御束帶ノ儀ナリトイフトモ、供奉ノ行粧必ラズシモ公家ノ式ハ用ヒラルベカラズ、（前ニ引シ愚管抄ノ大將拜賀ノ式、又東鑑ニ記セシ所ヲ按ズベキ事カ、）マシテヤ殿中ノ儀ニオヒテハ、武門一家ノ式有べキ事勿論ナリ、武家ノ舊儀ヲ考フルニ、鎌倉ノ代ホド備レルハナカリキ、足利殿ノ代ハ御居所モ京都ニ御座アリシカバ、（按ズルニ、時勢ノヤム事ヲ得ザルガ故ナレドモ、足利殿ノ失策此事ナリ、當家關東ニ御座ノ事誠ニ萬代ノ長策カ、）鹿苑院殿ノ代ノ盛ナルモ、御官職ニ就テハ、公家ノ人々ト同ジク其事ニ從ヒ玉ヒシカバ、（內辨等ノ事、）殿中ノ儀コソハアレ、其餘ハ皆々公家ノ式ヲ用ヒ給ハザル事ヲエズ、ソノヽチ慈照院殿ノ代ニ及ビテ天下大キニ亂レタレバ、此頃ヨリ武家ノ舊儀ヲウシナハレシ事其多シ、其後羽柴殿ノ關白セラレシ時モ、世ナヲ靜ナラズ、喪亂ノヽチ公家ニモ前代ノ遺老モウセハテ、關白モ、トヨリ有職ノ事心得給フベキ御事ナラネバ、何事モ〳〵見ルニタルベキ儀トテモナク、ソノヽチ我神祖天下ヲシロシメサレシニ及ビテ、古來將軍家ノ舊儀興シ給ハントノ御結構アリト見エシカド、武家ノ遺老モウセハテヽ細川兵部大輔藤孝入道ノミ、世ニ殘リトヾマレルニ、彼是ト聞シ召シ合サレシ御事ナドアリシ歟、（スナハチ細川幽齋入道ノ事ナリ、御使ニハ永井右近大夫直勝ヲナサル、）但シ此人文武ノ譽當時双ナキ人ナレドモ、天下ノ喪亂二百年ノヽチ、武家ノ舊式廢レシ後ニ生レシ人ノ、纔ニ其人ノ傳ヘシトコロ、前代ノ式コト〴〵ク諳ジ盡サルベキ事トモ覺エズ、カクテ大坂ノ事訖リシ後、元和二年ノ春始テ元日ノ儀ニ御家人等威儀刷（カヒツクロ）フ事ハ出來タリキ、（皆々スソウヲ用ユル始メカ、）今シバシガホド御在世ノ事アラムニハ、必ラズ當家一代ノ禮ヲ議シ定メラルベキ御事ナレド、其年ノ四月ニカクレサセ給ヒタリケリ、（元和元年五月大坂ノ事訖リテ、六月廿七日ニ二條ニテ舞樂奏セラレテ、戰功アリシ人々ニ饗宴給リキ、今ノ事情ヲモテハカルニ、猿樂ナドコソ御興行アルベキニ、カクオハシマシケル事、誠ニオモヒカケヌ御事ナリ、コレラノ事ニツケテモ、神祖禮樂ニ御心ザシアリシ事推ハカルベシ、）サレバ世ノ中ノ事イカニヤナド、アヤブミ思ノ輩モアリシカド、台德院殿ウケツガセ給ヒテ、ウゴキナク御代ヲシロシメサ

レショリ、萬代ノ御基モカタク、前代將軍ノ代々ニ超勝レ給ヒシ御事ニハナリタリ、神祖ノ御事ハ申スニモ及バズ、台德院殿ノ御事倭漢ノ間類ヒマレナル御事トハ申スベシ、此御代ニヤガテ武家ノ舊儀起サレントノ御沙汰アリキ、オモフニ此事神祖御遺誡モオハシマシケル御事ニヤ、サレド其輔佐ノ老臣ノ中申シトヾムル人アリシカバ、其ノ議果シテ行ハレズ、土井大炊頭利勝申シトヾムル旨アリト申傳ヘタリ、カク此時ニ此議ヲ申シトヾメラレシ事モ、ソノイハレナキニハアラズ、昔漢高祖世ヲシロシメサレシ初、秦代ノ法苛カリシニ懲タマヒ、毎事々ムツカシカラズ、ヤスラカニノミトリ行ハセ玉ヒタリキ、ソノ代在位ノ人々、皆々百職ノ間ニソノ功多カリシ猛者ドモナレバ、朝廷ノ禮アル事ナドシレルハナク、酒ニ醉ヒ功ヲアラソヒ、劔ヲヌキ柱ヲウツニ至レリ、高祖モ御心ニフカクイトヒ思シ召シ、叔孫通トイヒシ博士ノ申ス旨ニ任セラレ、魯國ノ諸生メシアツメテ、朝廷ノ儀ヲシルサルベシト仰下サル、ヤガテ諸生ヲメシアツメテ、上ノ左右ノ人々ト弟子百餘人等ヲヒキキテ、綿蕞トテ今コヽニ繩張ナドイフ者ノゴトク、殿庭ノカタチ圖シテ戰外ニシテ禮ヲ習フ、漢ノ七年ト申スハ長樂宮造リ出サレ、ソコニテ朝賀ウケ給ヒシニ至リテ、諸侯王ヨリ下吏六百石ニ至ルマデ、次第ノマヽニ奉賀シケルニ、振ヒ恐レ肅リ敬マズトイフモノナク、禮畢リテ酒賜リシニ、朝賀ヨリ酒罷ルマデ、敢テ禮ウシナフモノ一人モナカリキ、高祖大キニヨロコビ給ヒテ、吾スナハチ今日天子ノ貴キヲ知ルトハノタマハセ玉ヒタリケリ、コレ漢官ノ威儀ノ始ナルベシ、ハジメ叔孫通ガ諸生メシ集シ時ニ、魯ニ二人ノ儒生アリテ其召ニ應ゼズ、今天下初テ定マリ、死セシモノイマダ葬ラズ、傷ケルモノイマダ起ズ、又禮樂ヲ起サントス、禮樂ノヨリテ起ル所ハ德ヲ積ムコト百年ニシテ後ニ興リツベシ、君ノスルトコロ古ニ合ズ、吾ハユカジトゾイヒケル、サレバ台德院殿ノ御時武家舊儀ヲ起サレントノ御事ハ、スナハチ高祖漢代ノ禮ヲ議セラレシ御心ニ同ジクシテ、當時ノ老臣其議ヲ申トヾメシハ、魯ノ兩生ノ辭ニ相同ジ、シカルニ彼兩生ノ語ニモ德ヲ積ム事百年ニシテ後禮樂ハ興リツベシト見エタリ、サラバ當家ニオキテ武家ノ舊

儀ニヨリテ、萬代ノ禮式ヲ議定アルベキハ、マコトニ百年ノ今日ヲ以テ、其期也トハ申スベシ、タトヒヨノツネノ儀コト〴〵ク鎌倉京ノ代々ノ如クニアラズトモ、毎年正月元日ノ儀ハイフニ及バズ、御弓始御評定始ノ式ヨリ始メテ、ムカシハ朝家ニモ、正月ノ射禮賭射々遺、其餘三月五月ニモ、或ハ騎射ノ事アリ、マシテ武家ノ代トナリシニ及ビテハ、此事モトモ大儀ナリ、イカデカ此禮ヲ擧行ハズトイフ事ノアルベキ、又御評定始ノ事ハ天下政務ノ御事始メナレバ、イカデカ又其式ナカルベキ、コレスナハチ文武ノ御事ナリ、カヽル御儀モ行ハレズ、イタヅラニ天下ニ令シテ文武ノ道ナサメヨトアラン事イカヾアルベキ、四時俗節ノ參賀、上巳、端午、七夕、八朔、重陽、又嘉定、亥子等、又臨時ニハ若君御誕生御元服御讀書始勅使竝堂上ノ人々見參、諸家元服、御字被下時ノ事、代始、繼目家督ノ事、等ノ出仕、又ハ外國ノ人謁見ノ時ニハ、朝鮮琉球ヲランダ人等、必ラズ其威儀ヲ刷ハレテ、ヤヽ其漸ヲナシオカセ玉ハヾ、ヤガテ其禮盛リニ起リツベキ時ナドカハ至ラザルベキ、シカルニ世ノ人ノ申ス所ハ、當家モシ武家ノ舊儀ヲ擧行ハレムニハ、神祖世ヲシロシメサレシ初ニ議定アルベキ御事ナリ、シカルニ其儀モオハシマサズ、イカナル神慮アリケムモシルベカラズ、今ハタ其議アランコトシカルベカラズト申ス説モアル歟、此事大キニシカルベカラズ、台德院殿ノ御時ニダ

ニ、此儀ナヲ其時ニアラズト申セシ人モアリキ、マシテ大坂ノ事訖ラザルウチニ、此事議セラルベキ御時ニアラズ、サレド前代ノ遺老ニ武家ノ舊儀トフラヒオカセ玉ヒ、元和二年ノ春ヨリ元日ノ儀ヲ刷ハセ玉ヒシニテ、其神慮ヲバ推シハカルベシ、ムカシ周代ノ禮樂モ、文武ノ代ニサダメラレシニハアラズ、成王ノ御トキ周公ノ制リ玉ヒシ處ナリキ、ソレモ亦制リオカレザリシハイカナル故カアリケム、後代ノ制作シカルベカラズトイハヾ、周公ノ大聖モナヲアヤマタセ玉ヒシト申スベキヤ、我ガ朝家ノ御事ハシバラク論ゼズ、京ノ代ノ禮式モ、三代ニアタリ玉フ義滿ノ御時ニ議定アリキ、コレラヲモ尊氏義詮ノ代ニ議セラレザリシ御事ヲ、後代ニ及テ御定アリシ事然ルベカラズトモ申スベキ歟、又世ノ末ザマニナリテ風俗モ自ラ正シカラズ、人ミナ遊惰ニナリテ禮法ニ怠リ倦ム、モシ此時ニオヨビテ武家ノ舊儀ヲ起サレバ、當世ノ人堪ガタキ所ナルベシナド申ス人アリ、コレモ又シカルベカラズ、先王ノ禮ヲ制セラレシハ、世ノ風俗ヲ正サルベキガ御爲也、今ノ代スデニ澆季也ト

イフトモ、イカデカ秦代衰亂ノノチ、漢家草創ノ時ノ如クナルベキ、彼漢代ノ始ニダニ高祖御志アリシカバ、一代ノ禮儀ヲバ起シ玉ヒタリキ、義滿ノ御時武家儀式議定アリシモ、コレニ似タルナリ、風俗既ニ衰シヲ憂テ、其禮法ヲ修メザランハ、病ヲ患テ其藥ヲ廢スルナリ、イカデ其弊ヲバ救フベキ、又ヨキ人ノ其子ヲ愛スルハ、必ラズコレヲ敎ユル事義方アリ、ヨカラヌ人ノ子ヲ愛スルニハ、其力ノ堪ザラム事ヲウレヘテ、タダソノ心ニシタガヒテ、コレヲ敎ルニ及バズ、此フタリノ父イヅレヲカ慈トシ、イヅレヲカ不慈トスベキ、遊惰ノ俗スコシク堪ガタキ事アランガタメニ、其禮ヲ敎ヘザラムハ、イカデカ仁政トハ申スベキ、又泰平ノ日既ニ久シク、奢靡ノ俗モ又長ジヌ、サレバ世ノ人財トボシク力盡ヌ、此時ニ及テ禮制ヲ議セラレナバ、衣服ヨリ以下居室器用ニ至ルマデ、ソノホド〳〵ニツケテ各其物ヲ備ヘザル事ヲエズ、サラバ財力給セザル所アリテ、世ノ患スクナカルベカラズトイフ人アリ、コレモ又然ルベカラズ、財力ノ乏シク盡キヌルコト、世ノ人禮文ノ節ヲ知ラズシテ、奢靡ノ俗日々ニ長ジヌ

ルニヨレルナリ、サラバ猶其禮ヲ修テ其俗ヲ正サルベキ御コトナリ、孔子ノ語ニ禮トイフハ、人ノ情ニ因リテソレガ節文ヲナシテ、民ノフセギヲナス所ノモノナリト見エタリ、其存ズル所ハ、禮制ヲ定メ給ハンニ、行ハレズトイフコトナカルベシ、其故ハコレスナハチ人ノ情ニ因リ玉フガ故ナリ、前代ノ御時熨斗目小袖ヲ禁ゼラレシ輩、口惜シキ事ニオモハヌハナカリキ、當代ノ御始ニ其禁ヲユルメラレシニ、ヨロコビニ堪ヘズ、皆々財マトシキ類ナルガ、ヤガテソノ服ヲ備ヘタリ、一人モ財力ツガズトテウレヘシモノハナシ、又イカニモシテ、エボウシスワフ着テ、元日ノ拜賀セバヤトネガヒオモハヌモナク、スワフハ布衣ヲウラヤミ、布衣ハ直垂狩衣ヲウラヤミオモハヌモナク、財トボシキトテタヾ此マヽニテアラントハオモハズ、コレ美服ハ人ノ欲スル所ナリ、サテコソ聖人ソノ情ニヨリテ、貴賤尊卑ノ禮文ヲ制シテ、民ノ潛亂ヲフセガレシモノナリ、殊ニハマタ衣服等ノ制サダマレル所アレバ、奢靡ノ俗日ヲヤミテ財用ヲ富シ賑スルノ理有、ソノコト長ケレバ、コヽニ略ス、但シカルコトハ一人ノ意見ヲ以テ、アナガチニ衆論ヲモ排キガタキコト勿論ナリ、ムカシ唐太宗ノ代ノ始群臣ト政ヲ議シ玉ヒシニ、魏徵王道ヲ論シ申シケルニ、三代ヨリコノカタ人漸ク澆僞也、イ

カデカコレヲ化スルコトヲ得ベキヨシ、封德彝ガ傾申セシニ、當時ノ名臣房玄齡杜如晦ガゴトキモ、イカニトモ定メ申シガタカリシニ、帝ノミヨク魏徵ガ言ニシタガハセ玉ヒテ、三年ノ後貞觀ノ泰平ヲ致シ玉ヒシカバ、魏徵ガ言ノ效アリケルヲ悅バセ玉ヒタリキ、スベテハ先王ノ道ハ迂遠ニシテ、事ノ情ニ遠キガゴトクナレバ、衆議ノ歸スル所ニシタガヒテ、コレヲ決シ行ハレムニハ、當世ノ人誰カハ然ルベキ御事ナリトハ申スベキ、但シ遠ク異朝ノタメシヲ引クニ及バズ、我國ノヒラケハジマレルヨリ、百王ノ今ニ至ラセ玉フ迄、皇統ノカクウゴキナクオハシマス事、ナニ、ヨリテカ上下ノ分定リテ君臣ノ別アル御事ニヤト、其イハレヲヨクヨク思惟アラムニハ、先王天下國家ヲ治メラレシニ必ラズ禮樂ニヨリ玉ヒシハ、果シテコレ迂遠ノ御コトニアラザルベシ、（天下ハ大器ナリトイフコトアリ、小シキナル箱櫃ナドノ類ハ、工ノ道心得ヌモノナリトモ、ナヲ作リ出シツベシ、萬間ノ家百丈ノ樓ニ至リテハ、工道マナビシモノニアラズバ、作リ出スニ及ブベカラズ、マシテヤ天下ノ大器ナル、其道ヲ得ルニアラズシテハ、イカデカ其治化ヲ語ルベキ、イハユル禮樂ノゴトキハ、天下ヲ治ルノ規矩準繩ニゾアルベキ、某ガ愚ナル、其治化ヲ語ルニタラズトイヘドモ、申ス所ハミナ〳〵先王ノ遺言ニヨレリ、アヘテ私ノ議ヲマジヘズ、）

祭祀考

謹て禮の祭法を按ずるにいにしへの王者は天を祭り地を祭り時を祭り寒暑を祭り日月星辰を祭り水旱を祭り山林川谷丘陵のよく雲氣を出して風雨をなすを祭らる是天地百神を祭らるゝの義なるべし 本朝のむかし朝廷にして祭られし天地百神を祭るもみなかくの如し 又廟祧壇墠の四つを設て其祖考を祭られ 本朝にして宗廟山陵などいふ事其義は同じげれ共其禮は同じからぬ事あり 又殤の祭を設て其子孫を祭らる 殤とは生れて三月以上二十歳より以下ひとゝならずして死したるを申す也 又群姓のために社稷をたてゝ土地の神と五穀の神を祭らる 本朝のむかし一國に一社づゝ總社の神を立てらる一宮と申すこれなるべし又五穀の神を祭られき 又古の人法を以て民に施せしと死を以て事を勤しと勞を以て國を定しと大なる菑を禦ぎしと大なる患をよく捍ぎしとを祭らる 本朝のいにしへ人を祭りて神となされし事これらの功德ありし人々也これらの功德なきを神に祭らるゝ事は今もかなはぬ御事也當代の神祖はこれらの功德そなはらせ給ひしによりて大神とはあがめ祭らしめ給ひしなりと大猷公も百歳の後には神とあがめられたき事也と常にねがはせ給ひしかどもこれらの功德あらはれさせ給はざりしかばかなはせ給はざりし由申傳べき これら皆國家の大神となしてあがめ祭らる

る所なり又群姓のために七祠を立て祭らるいはゆる司命と中霤と國門と國行と泰厲と戶と竈との七つこれ也司命とはおよそ人の命二三の科あり年壽一ツ也善を行ふといへども凶にあふ二ッ也善を行ひては吉をうけ惡を行ひては凶をうくる三ッ也此三ッの命を司どる神を申すなり中霤とは堂室居處の神をいふ國門とは門神を祭る也國行とは道路の神を祭る也泰厲とは古の帝王の後なきを祭る也戶とは戶の神をいひ竈とは竈の神を云國家の小神中さば此七祠を云なるべし天下を治給ふ君は此大小の神こと〴〵く皆祭られずといふ事なし諸侯より下卿大夫士庶の類はそのほど〳〵につけて祭るべきと祭るべからざるとの神ある也祭るべくして祭らざるはこれ神を慢るなり神を慢る時は神これに禍を降し給ふことあり祭るべからずして祭るはこれ禮を偕ふ也神これに福し給ふ事なしこれを神は非禮をうけずとは申す也 此一段神を祭る一大事の義也 彼七祠のその中に泰厲といふものを諸侯にありてはこれを公厲といひ大夫にありては之を族厲といふ其位のたかきひきゝによりて祭る所異なれば其名は同じからざれどもその厲鬼を祭らるゝ事は相同じ

泰厲の事は前に見えたれば申におよばず公厲と申すは古の諸侯の後なきをいひ族厲といふは古の大夫の後なきをいへると也司命は人民の命つかさどる神なればこれを祭らるゝ事祈禳の義ありぬべし（本朝にて泰山府君の神の祭りなど云事司命の神を祭るの義に似たり祈とは福をもとむる也禳とは禍をはらふを云ふ）堂室門道戸竈などはおの〳〵人民を利する事ある所なれば其神を祭りて報賽の禮を行はるゝ事そのことはり有といふべし（報賽とは其恩にむくいて祭るをいふなり）かの泰厲公厲族厲のごときはいかなるいはれありてか祭られけむおよそ人の不幸にその後なきより大なるはあらずして人の不仁に人の後を絶より甚しきはなければたとひ其姓を同じくせずとも其位を同じくせる人はこれを祭るべき義にや（神は非禮をうけず民は非族を祭らずといふ事あり同姓同族の人の祭にあらざれば神これをうけ給はぬものなれば先王の法に異姓異族の神を祭る事をいましめられきされば本朝のいにしへもおよそは神を祭らるゝには必ずその神の後をして祭らしめらるゝかるがゆゑに其氏神といひその祭つかさどる人を氏人とも氏子とも申せし也又先王の法に子なき人の後つがするに異姓の人を用ひず必ず同姓を用ひしめこれらもその氏の神の祭絶せじとの御事也本朝のいにしへも又かくのごとし族誅とて一人の罪□族こと〴〵く誅せら□より始りしに秦は二世にてほろび給ひき天地と共にならびむまれし人の後なれば天地と共に絶ずして其祖宗の神も又天神地祇と共に其子孫の祭をうくべきものなるにたちまちにその後を絶盡して其祖宗の神をして祭うくべき所なからしめ給ひしかばみづからも又二世にしてほろびはて給ひし也されば同姓の中に家繼べき人あるを用ひずして異姓をたてゝ其祖宗の神をして祭うくべきところなからしめし□かの秦の族□と同じければ□おそれ給ひ□見えたるしかるにかの泰厲公厲などのごときは同姓同族のその祭つかさどるべきものはすでに絶はてぬさてやみ給ふべき事ならねば其神と其位を同じくせる人しておの〳〵其祭をつかさどらしめらるゝこれ先王の變に因りて制し給ひし禮にぞあるべき）なを詳なる事は魯の春秋の昭公七年の傳にみえたりはじめ鄭の大夫伯有といへるあり此人鄭の先君の後にして其家三世□政を執けりされば おのづから侈れる心ありてもろ〳〵の大夫と間よからず駟氏と豐氏とのためにうたれぬかくて伯有が死せしのちより國人相おどろきて伯有至れりとてにげはしる事有けり六年が後にある人の夢に伯有が鎧着てゆくに逢しにいづれの日われ駟帶をころし明年のいづれの日われ又豐段をころさんと云と見てけりかのいひつる日に駟帶死しければ國人ます〳〵おそれしにその明の年の其日に豐段も又死してかの夢に見しにたがふ事なかりしかば國人いよ〳〵おそれをなしけり（伯有死せし初はその魂魄のうらみいかる事猶さかりなるべしさらばやがて駟氏豐氏をうしなふべきものなるに六年が後までその事なかりし事いはれあるべき事也只邪は虚に乘ずるもの也かゝる事はもつとも心得あるべき事也其說ながければ爰には詳せず）其時の政執りし子産といひし人伯有が子良止といふをたてゝその後

をつがせたりしかばいつとなく國人の相驚ことはやみけり子大叔といひしが此事を問ひしに子産こたへて鬼歸する所ある時は厲をなさずわれこれが歸する所をなしたりといひけりかくいふこゝろはおよそ人死してのちその魂魄おもむきよるべき所なき時は天地の害氣に因りて災をなすこれを厲とはいふ也それをしておもむきよるべき所あらしむればその災おのづからやむべしかるがゆゑにその後をたてゝその祭祀をつかさどらしめければその災はたしてやみしとの義なるべし（たとへば猛獸□所をうしなへば村里に出て物害すそれを駈りて山林におもむかしむればかれそのよる所を得てその害おのづからやむ事あるがごとし）その〻ち子産晋の國にゆく事ありしに趙景子といふ人も又此事をとふことありけり子産これにこたへしは匹婦匹夫の强死せしだも其魂魄なをよく人に憑依て淫厲をなす（强死とは病なくして死する也白刃を犯して死するをいふ）べしいはんや伯有は我先君の後として政を執る事三世の權勢ありしものにて玄かも强死しければよく鬼をなす事むべならずやといひけりこれらの說によりて見る時は匹夫匹婦の賤が强死して其鬼より所なきもなを厲をなしつべしましてや古の□王古の諸侯古の大夫の死して後なくその魂魄のよる所なからんにおいてをや先王のこれを祭給ふこと又そのよる所をなし給ふ義なるべし近き頃はひ大明の代に至りて南北の□はじめて國郡はいふに及ばず一邑一鄕に至る迄ことごとく厲壇を制られて厲鬼を祭られし事王侯大夫はいふに及ばず匹夫匹婦の後なきもの迄もことごとく祭られしとぞみえたる今朝鮮の國中にても大明の祀典に倣て其祭おこたらざるよし彼國の書にみえたり又禮の月令を按ずるに孟秋に夏の令を行ふ時は國に火災多くして寒熱節ならず民に厲疾多しと云事あり厲疾といふこともかの厲鬼の災して民に疾疫多きをいへるなり天人はもと一氣にして相感じ相應ずることの月にむかひて水をとるよりも猶甚しされば人氣中に和ぐ時は天地の氣もおのづから上下に相和ぎ人氣和ざれば天地の氣も又おのづから相やはらがず民をつかふに時を以てすることは先王の政なるにもし其時にあらずして民を用ゆるときは其怨怒れる氣に感じて天地の氣も又平ならず寒かるべくしてあつく熱るべくして寒し此時に乗じて厲鬼その災・なし人民わづらふこと多を厲疾とは申す也（疫疾といふはすなはち厲疾をいへる也〻前にみえし邪は虛に乗ずると申せし事これら）

の所にも引合せ見るべし 又火の神の名を赤熛怒と申す事は怒れる氣のもと火に屬するによれる也國に火災の多きも人鬼相怨相怒れる氣の相感じて此災をなせる也 北野の雷と成給ひしといふも此ことはり也雷を天の怒と申す也これも火に屬する（恐脱字） 先賢伯有が厲を論じけるに德あるの神は天地の和氣に附て民の利を興し鬼の厲をなす事は天地の害氣に因りて災を施す也といひし事あり されば鄭玄の説なり德あるの神とは前にみえし功德ありてあがめ祭られし神をいふ鬼の厲とは泰厲公厲族厲又は伯有がごときをいふなるべし天地の害氣とは陽にもあれ陰にもあれその氣のたかぶり極りて物を害するをいふ大水大旱の類これ也 つら〳〵これを按ずるに德あるの神と申すとも天地の氣和らがざらんには民の和を興し給ふことかなふべからず厲をなす鬼と申すとも天地の氣相和らぎたらんには災を施すことといかでかな・（ふカ）べき これ附き因るべきものなければ也 さらば神の和を興し給はんも鬼の災を施さんも天地の氣の和ぐと和らがざるとにかゝれる也又天地の氣の和ぐと和がざらん事は人民の氣のやはらぐとやはらがざるとにかゝることなればいにしへの先王は禮樂を施して民を化し鬼神を祭りて其助をばもとめ給ひし也明にはすなはち禮樂あり幽にはすなはち鬼神ありて禮の樂記（ガクキ）にみえた・（るカ）は此義にて侍る也 まづ民を化してさてその冥助を鬼神にもとむると云事神を祭るの要方也〇此一段神を祭る第一義もつとも心得あるべき所なり

これら祭祀の典ひとり異朝の先王の法のみにあらず 我朝のいにしへ朝家に行れしところ悉くみなこれに同じ まへに注せし所引合みるべきなり 禮樂制度を以て朝廷を正して天下を正し給ひし事ども世々の國史までは律令格式等に詳なればこゝには論ぜず天地宗廟社稷日月星辰山川丘陵の神をはじめとして門行戸竈の神に至る迄およそ大祀中祀小祀式にみえし所三千一百三十二座その餘式外の神はあげてかぞふべからず 延喜式に詳也朝廷の例幣にあづかる神を式内の神と申その外を式外の神と申すこれを祭らるゝ次第によりて大祀中祀小祀といふの別あることなり さればみづから我國を稱して神國とも申せしとやその流俗の弊衰るにおよびては祭るべからざるの鬼神を祭れるも又すくなからずたゞしこれらは淫祀とて我朝にも異朝にも正祀とはせざりし事なるべし此事又心得ある事也その中かの厲を祭られし事我朝のいにしへにはきこえず中頃より世にいひ傳ふる所あれども 伊吹明神をやまたおろちの神といひ松浦の神を藤原忠文の靈といひ宇治の離宮の明神を藤原廣嗣の靈といふの類なり かゝる事の本緣を忘るせる神別記といふ書は世に傳らざればその詳こと考べからず八所御靈の神を祭られしことは桓武仁明の御時にはじまれるよし世に申し傳へきこれはまさしく異朝の公厲族厲の祭に

同じかるべし延喜式に宮城の四隅に疫神を祭り畿內の界十所に疫神を祭らるゝ事見たり又紫野今宮の御靈會は一條院の御時にはじめて疫厲の神を祭られし由申す也これ疫厲の神といふも皆厲鬼の災をなすを申すべし今宮の祭を御靈會と申すもすなはち八所御靈を祭れる例に同じきによれるなるべし但今宮の御靈はいかなる人の靈を祭れしといふ事いまだしらず其後崇德院後鳥羽院をあがめ祭り奉りし事はいにしへの時泰厲を祭れし義に同じかるべしそのゝちは大に戰ありし後其亡卒のために僧を度し經をよませあととぶらはれしなど云事は世に見えたれども厲鬼祭れしといふことは見えず（明德の亂のゝち萬部會行れしなど云事有鎌倉の代よりかゝる事はありき）たゞしかゝる事に塔婆立經よむなどいふことはいかゞあるべき八所御靈の起りは早良の親王井上の內親王の靈を慰られんために傳敎大師の請申されしによりて桓武天皇の祭り給ひしより始れりとも申す也佛事作善して其厲やむことを得んには大師朝廷にこひ申して神にあがめ祭るには及べからずみづからいかにもはからひ申さるべしかつは又國史を見るに崇道天皇の御ために佛事行れて御あととぶらはせ給ひしことたび／＼におよびしかど其厲やませ給はず八島の御陵に還し祭られてこそしづまらせ給ひたれかれこれをあはせみるに佛事作善して厲鬼歸する所を得ん事はかなふまじき事にやされば先王これを祭るの禮定めおかれしふかき義ありと見たりふるき人の申せしをきゝ又その比の事しるせし物どもも見しに當代の大祖の御時織田殿と兵をつらねて甲斐の國をうたせ給ひしに信長武田の一族ことごとくほろぼしその首をきりて獄門の木にかけその墳墓までこと／＼くにやきすてたりかくて百餘日を出ずして其臣のために弑せられ給ひき神君ふたゝび彼國に入り給ひ遺れる士民を撫安じその舊主のために一寺を修造して彼亡鬼をとぶらはる其後關が原の戰の時先陣の諸將岐阜の城を陷して首千七百十八をきつて獻らるやがて麻布の原に收め葬りて佛事作善してこれをとぶらはしめ給ひき當代百戰の間に身を役し命を隕せし敵御方の亡卒をとぶらはせ給ひしとみな／＼かくのごとくこそありぬべけれど世にいひも傳へざればこと／＼くにしる事をえずたゞこの二度の御事をもつてもかの織田殿のふるまひにあはせ

考ればまことにありがたき御心にてありけりされば此御心を推しはかるに天下一つに定りし後世にとゞまらせ給こと今ゟばしか□ど經て先王の禮を議せられんにはかの泰厲公厲族厲を祭るごときの禮も擧行はるゝ事ありなましいくほどなくて神さらせ給ひしことながき世の遺れる恨とや申すべきそのゝち天主の敎といふ事世に行れて其事によりて族誅せられしものども前後およそ二十餘萬人その時有識の人これを歎てかれら國の新禁を犯せし罪まぬかるべからずといへども頑に愚なる性を以て邪に僻る法を奉じおのれを正とし佗を邪とし死にいたれどもそのまどひ解ることとあたはざればその寃また散ずる事もあるべからず其鬼かならず厲をなしなん其災もしくは火にあらん歟といひしとにや禪僧愚堂といひしがかくは申せしとなりそれより後丁酉の年にあたりて火災はじめて行れて死するもの十餘萬人これよりして此災年をへだてゝかならず起ること今に至りて絶ず有識の申せし事誣べからずといひつべしこれらの事によりておもひめぐらす當代の大祖武を以て亂を撥ひ文を以て治を興し給ひし事その功湯武の下にましまさずと申すべしされはかの神孫は本支百世其麗億（カズヲク）のみにあるべからずいかなれば四五世をだにすぎ給はず御よつぎの君ましまさゞることとすでにふた世に至り給ぬ天下の憂これにありて微臣の惑又こゝにありそれ陰陽和せざれは萬物もつて生ずべからず天地位せざれば萬物もつて育すべからず天高く地卑きは禮のよりて起れる所也陽倡ひ陰和するは樂のよりて生ずる所也されば禮といひ樂といふはたゞに先王人を敎へ人を化し給ふ具にあらず以て天地の位を定め以て陰陽の氣を和し給ふところ也こゝを以て愚ひそかに疑ふところもしくは今禮樂いまだ修らずして天地の氣和ざる所あれば鬼神その他をたすくべきところなくして生育の理或は達せざるかさらば先王の法によりて明にしては禮樂の敎化を興し幽にしては鬼神の祭祀を修めかの多子の祥をまねぎ此群姓の望に副べしゟかりといへどもかの禮樂のごときは先賢なを君子をまつといへり子路のいひしこと論語にみゆこれ學士大夫のよろしく議すべき所にして愚臣がおよぶ所にあらず故にひとり先王の祭法を取て當世の闕典を論じ別に其目を錄し謹て以てこれを呈る

眞跡原本幕府の士森田某の所藏にかゝる實に進呈稟とおもはる長篇精寫一筆の誤りなし謹敬あふぐべし傍訓國字分注一に原本の體にならふもと奉書紙二ツ截り横卷なり披閲に便ずるがために册子となす

後學　清水巡拜識

右白石先生祭祀考一卷眞ニ希觀ノ書タリ先生ノ著書各種ノ書目ニ載セタルモノ往々玉石雜陳シテ却テ此ノ如キ拱璧ヲ逸ス今余コレヲ閲市ニ得タルハ洵ニ珍トスベシ清水巡ハ文政天保間ノ人ナリ

萩野由之記

聖像考

先聖を祭るに像を設る事其始を知らず畫きまゐらせし像を祭る事漢の比ほひ既に其事ありけり蜀の文翁の祭れる畫像はこれ聖像の最も古きものにて近き代迄も其石室の中にまします〔文翁は漢の人〕其後晉の顧愷之が繪きし處唐の呉道子王摩詰が〔二人共に唐の玄宗の代の人〕繪きし處世に聞えしものども侍り其中顧愷之呉道子の繪がきしもの今もなを闕里の孔廟に侍るなるべし〔闕里志に見ゆ〕塑像を設けられし事何れの比にや始りぬらん〔土を以て作れるのみを塑と云ふにはあらず木を彫せしをも云ふよし品字箋に出づ〕此事佛敎中國に入りしより始る由明の丘濬は云へり〔即瓊山丘氏也〕西方の俗に佛の像に事ふることあれば先聖を祭るに像を用る事其俗に傚へりとの義にぞあるべきされど凡は其人の形を畫きもし金にも鑄なせし事は佛敎いまだ中國に入らざりし代よりも聞え侍り周の成王の御時周公旦の御像を明堂に畫き給ひ億萬年を期して其師保の御德を忘れ給ふまじきことを示し給ひ〔王應麟が說に〕又孔子魯の大廟に入て金人を見給ひ是れ古の言を愼し人なりと宣ひ〔家語に〕越王勾踐范蠡が五湖に浮し後黃金を以て其像を鑄成して是に事へ給ひしなど〔呉越春秋に〕云事は皆是周の代の事にて侍る但これ等は其像を設て祭らるゝの事ありとは見えず漢の丁蘭が其母の像を木にて刻みて事へしことはまさしく祭りし處と見えたれど其代には佛法いまだ中國に來りしにはあらず又佛像と云ふもの中國に來りしことは後漢の代に始れる由云傳へれど猶それより先漢の武帝の御時休屠王の天を祭れる金人を獲給ひしと聞ゆれば是則佛像の中國に入りし始なり其代にはいまだ佛の敎など云事は中國にきこえざりしかば唯天を祭れる處の金人とは云へるなりと申せし人も侍り〔耶鄲代醉編等に詳なり〕しかはあれど佛像に事る事の中國に行はれしは實は後漢の代に始れるにもあらず晉宋の間に至てぞ盛にはなりたるなり佛國の人はもとより西方の戎狄なれば其形陋しくて中國の人其像を見て敬ふ心生ぜず晉の載顒と云し人其意の巧を盡して多くの佛像を造り出せり是を造る始我身は帳の中に隱れ居て其造れる像を來り見る人のよしあしと云詞を聞て其云ところに隨て改め作りしほどに拾

年がほどを經て其功を終へきかくてぞ今の世に傳ふる所の佛菩薩等の像は端嚴の相とは成りたるなり尙書故實に出づ今我國に來れる紅夷の人は彼佛國の地方に近き人なり其鬚擧りたけ長く鼻高く眼すさまじきを見て佛國の人の形を思ひやるべし又嵯峨の釋迦の像は梁の武王の代に西方より來れる栴檀の像を移せるなり鼻高く眼すさまじくして尋常の像に似ず是等の事を思ふに尙書故實の說疑ふべからず今も西蕃の地より來れる佛像は其形あやしき由圖繪寶鑑にも見ゆ彼此を併せ考ふるに先聖を祭るに塑像を用ゆることは必ずしも佛敎中國へ入りしより始れりとも思はれず唯彼の文翁の畫像を祭し事の如く漢の代よりや始りぬらん正しき史に見えし處は唐玄宗の開元八年本朝元正養老四年の事にやの制に土を摶て像とはされしと見えたりされど又唐の代よりも前の代に既に此事ありし由申せし人もあれば李元瑾が說に玄宗の御時を以て其始とも定め申し難し宋の程頤は則伊川の程氏像を用ゆる事然るべからず一毛一髮も肖ざる所ある時は既に其人にあらずと云ひ朱熹の說には則晦庵朱氏先聖の像を設ること古にあらずと見え元の姚璲が北史を見るに泥人銅人を造れる者は一門誅せられき泥人もとより聖人を祀るの法に非ずと云ひけり孔叢子を見るに我先人は鬚眉ましまさゞりしかど時の君これを以て其敬を損し玉はずと子思の宣ひし由見えしに闕里に藏められし所みな漢晋の代の衣冠の制にして其中吳道子が繪きし處は纖悉甚備にましますさらば程頤の云し如くに古の妙畫の繪きし處とても皆是聖人の御容にはあらずましてや後世の描き工の或は繪き或は刻める處いかでか聖人の德容をうつし得ることの叶ふべき譬一毛一髮の違ひなくうつし得刻みなせりとも既に古の禮に有らざる時はいかでか又非禮を以て先聖を祭りまゐらせらる事やあるべき然とは申せども宋元の代々を經て大明の代に及まで先聖を祭らるゝの儀みな彼の玄宗の開元の制を用ひられしかば先聖を初めて顏子等の七十二賢悉く皆像を設て祭らる大明の太祖世を知召し本邦イめされし洪武の初宋濂と云ひし人洪武は年號なり我朝後光嚴の末後圓融の初の程武家は義滿將軍の初なるべし宋濂は名高き學士にてありき孔子廟堂の儀を上りて曰く世に禮を云事は孔子に出づ禮を以て孔子を祭らざらんは是れ褻祀なりとて此論正しと云ふべし廟堂の制より始て祭祀の儀を議せられしに帝悅ばれずたまはずイ宋濂を外に出されて其儀を用ひ給はざりきされど此帝の時南京の大學にのみ像を設ることを止められて木主を用ひさせたまひイられき其餘の郡縣の學は猶元朝の舊に從て像を設て祭らる明の太祖并に建文帝までは南京を帝都とはなされき太宗の時より北京を帝都とはなされしなり其後英宗の天順年中に

（太祖より六代にあたり給ふなり我朝後花園長祿寛正の比武家は慈照院義政の御時）蘇州の學の廟像年久くして毀れしかば或人これを修飾あるべしと申す其太守林鶚と云し人の曰く我太祖の御時大學の塑像をば木主を以て易へ給ひき譬へ此像毀れずとも猶これを毀るべし幸にやぶれしかば易ふるに木主を以てせんこと何の不可かあるべきとありしかば聖像をそこなひまいらせん事恐れある由を重て申せしに是土のみ爭で聖賢なるべき孔子は佛敎いまだ中國に入らざりし前に生れ給ひき爭で像と云ふものを知し召るべきとて（丘濬の説はこれらの説によれるなるべし）聖像は申すに及ばず從祀の諸賢をも皆木主になし易へられたり憲宗の成化十七年（太祖より八代にあたり給ふ我朝後土御門の文明十三年武家は義尚將軍の代に當れり）國子監丞祀瀾と云ひし人木主を以て塑像に易べきよしを奏せしに其事によりて罪を蒙り雲南に流さる其帝の御子孝宗の位に卽せ給ひし初め（卽成化二十三年の冬の事なり我朝後土御門長享二年武家はなほ義尚將軍の代）學士丘濬が獻りし大學衍義補の中にも先聖を祭らるべき禮を議し申せしかど其世にも擧用ひ給はず（此後九年にして丘濬は卒す）世宗の嘉靖九年に（太祖より十二代なり我朝は後奈良享祿三年武家は義晴將軍の代なり）張璁と申せし學士の上疏して先聖を祭らるべき禮の事ども議し申せしかば禮部の官に命ぜられ翰林の諸臣を會してこれを議せしめ給ふに編修官徐楷と云ひし者唯ありしまゝこそ然るべしと申せしによりて罪せられて外に出さるかくて帝自ら孔子を祭らるべき禮を悉く改め正させ給ひ群臣に頒ち賜ひしに皆々然るべき由を奏し申しければ先聖を初て孔門の諸賢幷に後の世々に從祀せられし先儒までを祭らるゝ禮を改め正し給ひ悉く其像をすてゝ神主を用ひて祭らる（但し此時用ひられし神主も古の式には非ず）同十三年に帝自ら大學に御幸なりて先聖を祭り給ひきされば其御庿號を世宗と申奉るもこれらの事ども千古に卓越し給ひしによれる故なりと申傳へ侍る宋濂よりこのかた代々の學士大夫の奏議せし處先聖を祭らるゝの議ども其事殊に長くしてたやすく云ひ難き處なれば只其事の始終のみを發に志し訖（侍りイ）ぬ我朝に古より大學寮は申すに及ばず五畿七道の內みな〳〵國學を建て先聖を祭られ學徒を敎へ導かせ玉ひし處世の末ざまに成行に隨ひて其事すたれて古に復る事あたはざる事など愚臣年比講學の暇試に詳に考へ竊に識せし事ども少からずといへども今こゝに此等の事を玄るさんはもとより我職分にもあらず其位を踰んこと唯聖門に罪を獲るのみにあ

るべからざれば敢て其ことばを盡さず

國郡名考

謹て按ずるに舊事紀古事記日本紀等に見えし國郡の名の字其しるせし所定らずおもふに是其筆せし人の儘にしるせしなるべし第四十二代の御門元明天皇和銅六年五月に詔ありて畿内七道諸國郡郷名著ニ好字一との給へるこれよりして河内參河駿河とはしるの□の類是なり

河内とは淀河の内にある國なればかくは云なり參河とは此國男川豐川矢作川とて三の河あるが故にかく名づけし珠流河と云事は未だ詳ならず按ずるに本朝文粹に見えし都良香の富士山記を見るに此より珠の落下りし事ある也其珠のふもとの河にながれ出る國なればかく云しにや後に駿河と改めしるせし事は此國にはやき川あり則今の富士川と云是也されば駿河とはしるせるなり駿はとしとよむゆゑなり

其餘國郡の名かゝる類いくらと云數をしらず悉く擧る事長ければ其一二のみを記す

かく朝家より定められし文字あれど俗に參河を三河ともかき美濃を美乃と書信濃を信乃と書伯耆を白木と書の類ありこれらは俗間の事なれば論ずるに及ばず本朝國郡の名の字すでに一定の字ありといへどもあながちに拘り泥むべからざるに似たるか其故に我朝の國號をすべてはやまとの國と申なり然るに古より其しるし來れる所各同じからずたとへば

山迹　山戶　山止　倭　大倭　大養德　大和　日本

大日本

の類こと〴〵く是正史に見えし所也是我國の惣稱なればなど一定のなかるべきされど其しるせし所此の如しこれらの事に付てなを一重の秘訣あるべし

天子の御諱はいともかしこき御事なれば殊に一定の字あるべき事勿論なりされど神武天皇の御諱を古事記には神倭伊波禮毘古命としるし舊事紀等には神日本磐余彥尊と記せり又天武天皇の御諱を日本紀には飛鳥淨御原天皇としるし萬葉集には明日香清御原天皇としるせりこれら皆正しき國史に出て勅を奉りて撰み上りし所なるに猶一定の字なき事又此の如しこ

れらなを一重の秘訣あるべし

天地開けはじまりて人の代になりし比ほひは猶異朝の昔結繩の代のごとくに文字を用ゆるに及ばずやうやう人文のひらくるに至りて我國にも用ゆる所の字ありと見えたり

所謂肥人書薩人書のごときこれいにしへの遺風なるべし

但し神代の始より占卜の事ありしかば我國の文字ある事すでに神代に始まれりとも申す歟

これらの事神秘のことのよし申傳はればみだりには記しがたし

其後人皇十六代のみかど應神天皇の御代に百濟より博士を參らせしかば始て異朝の文字我國に傳はれり

所謂漢字は卽今の楷書の字

爰に於て彼の國の字を用ひて我國のことばをしるさる

たとへばあめと云は我國の詞也天と云は彼國の字なり其義相同じければ天の字を以てあめとよみつちと云は我國の詞也地と云は彼國の字なり其義相同じければ地の字を以てつちとよむの類なり其餘是を以て推知べしされば彼國の字のまゝによむを音といひ我國のことばの如くよむを訓とは申す也

或は彼國の字を假りて我國の詞を記せるあり

たとへばあめと云我國のことばを彼國の字を假りて阿毎としるしつちと云我國のことばを彼國の字をかりて豆知と記すの類是なり其餘此例を以て推知るべしこれは彼國の文字の音を以て我國の言葉を記せしにて阿毎の字にもと天の字義もなく豆知の字にもと地の字義もなき也是後世にいふ假の事也夫を楷眞にしるせるを俗には萬葉書とも申す歟

或は又我國の字の中につきて其音と其訓とをあはせ用ひて我國のことばを記せしもあり

たとへば伊弉諾尊伊弉冊尊など申すは伊弉の二字は彼國の音のまゝなり諾尊又冊尊等の字は此國の訓を以て記せるなるべし

又文字の音を假り用ひし中にも古より漢土の音を用ひ來れるも又三韓の音を用ひしもあり

たとへば鐘の字漢音はショウなるを萬葉集に時雨の事を鐘禮としるせるの類は集鐘の字をしくとよみし也これ則三韓の方音にていまも朝鮮の方音こ

れに近しこれらの事ども委しくしるさんには其事長くして聞人も亦心得ん事たやすからず先大略をしるす也

又文字の訓を用ゆる事も猶我國の辭のみにも限らず三韓の方讀を用ひ來れるある也

たとへば兄と云字のごとき漢音はけい也きやうといふは呉國の音也あにとよむは我國の訓也然るをせうと稱する事あり兄弟をせうといひ兄鷹をせうといふがごとき是なりせうと云は三韓の方諺に兄を云也弟をとゝよむは我國のことばにてをとゝ云をつめてとゝ計りいひし也これらの類もことごとく記さんことも事長ければ其一二をしるすなり

されば古の時彼國の文字を或は假し事たゞ我國のことばをしるさんための事にして其たつとむ所はひとへに其辭にありて異朝の如く其たつとむ所文字にあるにはあらずされば帝王の御諱國郡の名等をはじめて萬の文字定れるにもあらず彼是を取用ひて我國の辭をうつし傳ふるためなりきかく事の始をよく〳〵心得ずしてひたすらに文字の上にのみなづみぬれば多かる事の中にかならず通せざる所多かるべければ先荒增を記せるなり

右にしるせし所は皆々我國の中にして用ゆる所の文字の事を申すなり

・いはゆる俗字と申ものは是なり

若くは詩賦文章の類は其制こと〴〵に異朝の事なれば異朝に用ゆる所に異なるべからずされば元明天皇の御代に諸國郡鄉等の字好字を著せと詔ありしも天下後世に傳へて其誹謗なからんためを歸り思し召れてなるべし女帝の御心にてかゝる事に叡慮をめぐらされ百王の今も其御代の定の如く萬里の外國にても是日本の郡國の名なりとてしるし傳ふる事誠にありがたき御事なり其後大内裏を造られしに［　］伊福門といひ壬生氏の造れる門をば壬生門といひ佐伯氏の造れる門をば佐伯門といひ丹治氏の造れる門をば丹治門などいひしを嵯峨の御時異朝の文の中に然るべき字を撰はれて伊福門を殷富門としるし壬生門を美福門としるし佐伯門を藻壁門としるし丹治門を達智門としるされし事も猶是元明の詔に國郡の名に好字を撰み用ひられし例なるべしされば詩賦文章にあらんに國史等の中にしるして萬里の外國に傳へて

も誠に目出度名ともなるべし近世の地名又は職名殿門の名などの如きは爭でか詩賦文章にあらはすに堪べきいかでか又國史等の中に記して萬世の後にも萬里の外にも傳ふべき是文章の日々におとろへしがいたす所にて尤文字に志あるものゝうらむる所異朝の人のあざけりを殘すべき所にて口惜しき事どもなり

日東行程考

夫國ニ于天地一而處有ニ與立一焉、萬國羅敷各隨ニ山海風氣所ニ限而域分區別、人物氣類既殊、言語不レ通、嗜欲習俗從以不レ同、或耕作土著、或畜牧遷徙、或轉買貨易爲レ生、或刧奪盜竊爲レ事、良善兇惡頓殊、大抵國處ニ晝夜平線寒暑中和之地一者ハ其民多良善、地肥美宜ニ五穀桑麻一、民務ニ稼穡一力作爲レ生、邑居相保親、父子嚴、君臣因ニ信義禮讓一以自固、亦自然之勢也、如ニ韃靼蒙古一其地偏レ北、境域廣莫、五穀不レ生、不レ得レ不下射獵奔走逐ニ畜牧一而遷徙上、斯以爲レ生、則其忽聚忽散如ニ野獸蜚禽一然、宜矣信義禮讓無レ所レ用焉、如ニ南方諸蠻一、地氣常熱、五穀桑麻易レ生、至レ有ニ一歲稻三熟蠶八繭者一、加焉奇異鳥獸布レ地而生、寶貨珠玉往々而有焉、物力尤盛、然由レ是多貪暴淫亂嗜欲無レ藝、民常夭亡莫レ得ニ以壽終一、故俗媮惰不レ爲ニ長年計一、宜矣其亦不レ事ニ信義禮讓一也、由レ是觀レ之、受ニ生於中和豐穰人倫脩睦之國一者亦幸矣、天地元無ニ東西一、無ニ適而非一レ中、惟姑據ニ耳目所レ及舟車相通一言レ之、自ニ三皇五帝所レ與禹迹九州一、北狄西戎南蕃、大率境壤相接、地脈不レ絕、出ニ彼玉門陽關一而西三四萬里、數十國夷種之地、猶未レ見ニ與地所レ極、而中華東南濱海、是在ニ諸國中一爲レ處ニ東偏一、（東カ）吾邦復居ニ中國正東絕海數千里外一、故禹迹九州人謂レ吾爲ニ東夷一、吾人亦徒（從カ）見ニ禹迹諸國皆在ニ吾西一、而未四嘗聞ニ吾邦東海外更有ニ國者一、是以雖ニ吾人一亦自以爲下吾邦於ニ天地一在中東偏上、顧東南窮海外豈必無レ國乎、但人未レ有ニ至レ彼者一也已、則焉識、果吾邦不レ在ニ天地之中一乎、吾邦正値ニ中國東一居ニ大瀛中一、海岸四絕、與ニ異邦一殊レ俗、地不レ通、故國絕不レ被ニ敵國外夷之侵壤一口內所制五畿七道、號令之所レ逮如ニ身使レ臂臂使一レ指、上下相親莫レ有ニ外畔之患一、慶元以來百五十餘年雍熙昇平、海內不レ見ニ纖塵一、雖レ因ニ東照宮神祖盛德神算一乎、抑亦建國之勢易レ爲レ治也、重境土廣大、四面皆阻レ海、被レ山多ニ嶮阨一、戶口富庶、民力强盛、足ミ以自ニ立于天地之間一、元世祖强ニ制外夷一、舟車所レ通無レ不ニ賓服一、惟吾國媿レ通下聲戎狄無ニ禮義一之國上、絕レ關不レ通、世祖怒、大興ニ舟師一來寇者再、終不レ得ニ尺寸一〇今按ニ脱ニ土字一歟擧軍皆沒、得レ返者三人、再是其已然之驗也、量ニ國地所一

レ距、奥之弘前外濱松前東北接二蝦夷韎鞨境一、迤邐西南至二薩州種子夜久諸島一接二琉球境一、東西七千餘里、南北比二東西一迥不レ及、或長或短、隨二地勢一不レ同、其最長者自二登州海北岸一至二紀州隈野龍門南海一二千二百里而近、自二奥之松前弘前南一至二房州南岸一復適亦二千二百里而遠、自二長州海北岸一至二薩州南界一千五百里餘、皆迥不レ及、其間至短者乃五百里而止、嘗閲二國史一、有レ云、吾邦地形有レ似二蜻蛉狀一、故號二秋津洲一、差據二地圖一安〔按カ〕、東海房總狀蜻蛉首、奥羽東北爲二其左翼之前一、王州斗二出南海一者爲二其右翼之前一、登州爲二其左後翼一、紀州南郡爲二其右後翼一、直西至二長州一爲二其尾一、而海西九州南海四州不レ與焉、國西疆北隣二朝鮮一、自二西肥北境唐津一航レ海而北經二壹岐臺馬二州一至二釜山海一八百里、正西則平戶五島、上下兩川鷹巢諸島、乃吾邦西方極界、北値二彼山東登萊諸州一、稍南南京浙江、又南則寧波福廣漳泉、近千餘里、遠三千里內外、是皆番船客商所二通行一也、然海邊里程、皆以自二吾西肥長港一直至二浙江福廣內地 梟港一之數耳、如二五島鷹巢等諸島一、西去二長港一四五百里、顧彼人開帆發洋、至二五島等處一、應亦有二州島相望繫泊避レ颶云處一與レ吾相接、不レ然一葦渺然橫絕二大洋數千里之遠一則無二此理一矣、故彼與レ吾窮海相去當レ不レ出二四五百里一耳、薩州起二海南一隸二琉球一、計レ自二薩州府城一至二中山國一二千餘里、能服屬者薩之南界海中種子夜久諸島大皆數百里、民居聚邑、比二內州一州一、其餘小州島嶼聯亘相次千里而不レ絕、其最南者與二琉球北邊諸島一相望九近者邑里田野歷歷可レ辨、吾南界島民有下業造二麵餅豆乳一者上、粥二之傍諸島一以爲レ生、時往賣二琉球所屬島一、晨往暮返、以爲レ常、顧遠合レ不レ過二三四十里一耳、據レ此亦可レ見二薩侯封內疆域所レ距之大一云、又吾人之二朝鮮一、取二路壹岐對馬州府一沿至二釜山海口一四百八十里、可レ謂レ遠矣、長之爲レ州西北暨南皆濱海、唯東境一面接レ內、北レ此石州、南防州、所三以分二山陰陽一也、州西南赤馬關與二筑紫內裏一正相對、兩岸之間不レ過二三十里一是所三以分二內外洋一也、長南境諸郡濱二內洋一、西北諸郡濱二外洋一、府城在レ州近二北地一、去二府城一東北百八十里爲二州極界一、枕二海岸一北與二朝鮮邊地海南涯一相對、自二海岸一北望、天晴風和遙見二朝鮮諸山一、長北濱海地皆蜑戶、扁舟乘レ潮遠射二漁利一、多洽二朝鮮邊海一而漁、每與二彼漁船一相見、彼亦時來漁二于吾近地外洋一云、顧其間相距合レ不レ過二三百里內

外、是吾地與外國最相近者也、肥唐津在長之西南六百里、而唐津開洋北行百八十里得壹岐、又西北行四百里得對馬、是長與臺州雖隔窮洋、其西東應亦相對釜山海口、朝鮮西南邊海而與長相對者、蓋其東南極邊界也、吾邦戸口蕃息、莫盛今時、慶元間天下始脱戰爭、比諸北條足利盛時、想合戸口衰耗甚、觀甲陽軍鑑調發之法、州以八千爲率、蓋州有大小不同、約中數言之、以所法則擧寰內所制、止可得五十餘萬、斯時承應仁後、海內之地四方五裂、戰爭日夜不輟、爲極亂世也、宜戸口凋耗莫甚於斯時、大抵調發五六夫出一兵、爲重賦、七八夫出一兵、爲次九夫十夫出一兵、爲最輕、意此時一州男夫不過六七萬、併老稚婦女、唯可不過十五六萬、慶元後雍熙相承、戸口漸滋、至嚴廟時最稱大平、上去元和四十餘年、余幼聞老人語、昔年嚴廟時以京尹少其人、閣老內藤板倉君來尹京師、久之括京師戸口數、爲二千四百二十四戸、男女都計四十八萬、而河東民居不與、其後滋蕃何止於斯數云、今憶、二條以南至七條河東號新里、民居爲街巷、奚止四五百而已、加焉三條橋東大路至粟田山口六里餘、以城中街巷法得二十餘里、三條橋東繩隄南去經方廣泉涌泉福至稻荷南十五六里、以城中街巷法亦得六十餘里、以士民居、余幼既有焉、其後三十餘年新里滋開、京西內北兩野河東二條北號新鑿地者、及祇園新里七條新里是也、不唯撓日拓鑿食肥壤、近者城中居民撤大屋爲小屋、又多開千房借小業商賈、收僦直以爲利、豪富哀薄者多爲此計、宅距有互頭畝、則開房五六十、於中開小巷四交相通者、唯二條以北堀河以東近禁垣地士庶家間或餘宅後數十步地、稍成園池之趣耳、餘皆四隣密比、尺地無餘、至河東新里屋皆架樓、人多穿屋後地開小巷、男女往來切肩相過、由是觀之、平安民居稠密、戸口蕃息、奚翅倍昔時而已哉、計今日戸口之數應不下百餘萬、余嘗聞、享保五年洛中宗旨人別籍有七十餘萬口、平均洛中生死每歲凡長二千餘口云、至今既六十年、凡長十餘萬、洛外新里不與、洛外新里過洛中之半、戸口之數推而可知、寰內地三大都會、曰平安、曰浪華、曰東都最大、浪華大小埒京師、戸口之數亦宜相若、東都無窮覇基、四海輻湊、街衢民屋縱橫、亙四十餘里、比之平安浪華不止十倍、人徒之衆

合當ニ十餘萬以上ハ、餘加州金澤、尾州名護屋、爲レ大、皆不レ能レ及ニ平安浪華之半ハ、下レ此則諸藩國都城及臥觀、寧樂、泉之境、越之敦賀、藝之宮島、長之赤馬、薩之防津、不レ遑ニ枚擧ハ、余嘗有レ故聞レ之、備前侯領國兵食多少、國初受ニ封因伯二州ハ、後轉封、備前州及備中三郡屬ニ其疆域ハ、兵賦在レ公者六百騎、貢稅三十餘萬石、其實國內貢稅四十八萬石、備中三郡稅除分 封ニ三萬五千石餘、可ニ四五萬石ハ、山林河海征稅不レ與、侯初遷封時、令ミ郡官括ニ境內戶口之數ハ、得ニ二十餘萬口ハ、時去ニ慶元ニ不レ過ニ三十餘年ハ、視ニ諸甲陽軍賦法ニ滋息既多、其後滋蕃至ニ三十五六萬口ハ、爾後藩人語、括ニ國境民口ニ凡至ニ五十萬ハ、初貢稅所レ納與レ今無レ異、唯濱海墾田所レ開耳、而民口滋息凡三十萬計、國內所貢幷分封墾田纔及ニ六十萬石ハ、則農夫所レ贏多應レ不レ過ニ百二三十萬石ハ、寰內州道郡邑雖下因ニ山川形勢ニ延袤廣輪各不上レ同、大都近ニ畿甸ニ者其州小、四遠濱海其州大、如ニ奧羽兩州ニ南北千六七百里、東西亦幾十里、疆域貢賦可レ敵ニ內地十餘州ハ、他如ニ三越及仙之信 南海之豫土西海之薩ハ、大皆可レ敵ニ內地三四州ハ、而內地多疆域狹隘、而民物稠密、四遠皆土地廣莫、而民稀疎、備藩以ニ諸州疆域大小ニ爲レ之、不レ及ニ其中ハ、而以ニ民物稠希ニ言レ之適居ニ其中ハ、寰內六十六州、民口四十餘萬、通計二千八百五十萬、三都會民口千二三百萬、如ニ金澤名護屋寧樂臥觀ニ類無凡當レ得ニ二三百萬ハ、總計寰內民口可ニ四千三百餘萬ハ、是備藩於ニ天下ニ爲レ得ニ百分之一ハ、貢賦之率亦應ニ略相當ハ、擧ニ寰內ニ貢賦殆可レ及ニ六千萬石ハ、視ニ諸禹甸九州ハ、以ニ隋唐盛時戶口富庶甲ニ於古今ハ、尙未レ滿ニ五千萬口ハ、至ニ明嘉隆間ニ爲ニ最盛ハ、而至ニ五千八百萬口ハ、比ニ吾邦ハ、爲レ長千五百萬而已、溗元後中國疆域日益拓斥、至ニ明盛時ニ輿地幅員殆及ニ萬里ハ、雖ニ史家溢言ハ、想ニ其實合ニ亦得ニ縱 橫八千 里內外ハ、是吾邦 疆域 所制不レ及ニ中國三 分之一ハ、而戶口之 數足ニ略相當ハ、由レ是觀レ之、吾邦物力强盛、地壤肥饒、非ニ中國之比ニ者審矣、以ニ 今民口蕃溢之極州四十餘萬ハ、除ニ 老稚婦女ハ、餘可レ得ニ丁壯州十五六萬ハ、以下十夫出ニ一兵ニ法上、猶得ニ州一萬五千ハ、則一旦緩急、百萬之衆可ニ立辨ハ、而三都民口丁壯復四百萬、可レ出ニ四十餘 萬兵ハ、視ニ諸國初 徵發數ニ加ニ三倍ハ、嗚乎盛矣、吾邦土壤肥美甲ニ於萬國ハ、加地多ニ濱海ハ、抱海（衍カ）抱海、抱レ陽負レ陰、五穀桑麻種蓺之類無レ處不ニ宜、最宜ニ稻麥ハ、諸州地多負レ山鄉レ海、百川脈分居

便ニ灌注一、故民專治ニ水田一、早稻四月初下レ種、七月輙獲、晚稻五月藝、九月初穫、一種不レ早不レ晚者五月藝八月穫、既穫レ稻輙耕治下レ麥種宿、麥至ニ明年四月一既熟、適復値下耕ニ水田一時上、終歲之間稻麥兩收、一日不レ曠、田畝地無ニ遺利一、民亦務ニ稼穡一、遠郡遐地曠人稀去處誠多ニ荒莫不毛之地一、若ニ近畿諸州一墾闢日廣、山麓溪澗大步之地莫レ不ニ耕治一、如ニ京師四郊平地一況盡爲レ田、近者浸墾ニ山腹翠微一爲レ田、山谷便灌注去處皆種ニ水稻一、不レ可レ得ニ水耕一者種ニ禾黍菽雚雜穀之類一、大抵人所レ食終歲ニ一石弱、所レ餘唯石餘、衣料薪樵居室吉凶所レ須皆仰ニ於此一、寧可レ爲レ生乎、猶不レ至ニ立枯一者、民間常食レ麥、凡耕田之利收ニ米石一者麥亦得レ石、其所ニ支持一者是已、然藩中軍國祭祀廟聘往來之用、城池官廨橋道營作繕治之費、皆取ニ給於貢稅一、況數十年東都政多門貂擅レ弄權、貨賂公行、諸侯贈遺、權門車輿、陸續日夜不レ絕、歲中所レ須無慮巨萬、盡歸ニ乎當路囊橐之中一、加以下國家有ニ興作一徵中力役於諸侯上、所レ費各數十萬金、未レ知是等所レ用將何所ニ仰給一也乎、國計日就レ困、有レ以ニ夫民口蕃滋一、誠國家盛事哉、然民物重困職此之由、當路者不レ可丁以不丙深ニ思厚生利用之術一以納乙斯民甲矣、大抵天既降ニ斯生於民一、則莫ニ養不レ給之理一、當路者括不ニ以爲レ慮何也與、國民莫レ養國用不レ給、皆以ニ賞罰不レ明所レ致也、備前侯之先侯有ニ明主一、能任ニ良臣一、故國之疆域不レ大中國之中、而能使三二十餘萬民口至ニ五十萬之數一猶能足レ撫ニ育之一者、皆墾田力作之所レ致也、其餘西藩一二〔二三イ〕諸侯當路者、能以ニ墾田力作一爲レ先、以ニ節儉一爲レ主乎、未レ聞レ有下國用不レ給百姓窮困、而來ニ于三都一求レ食者上也、其他東西諸侯國用不レ給百姓窮困而求ニ食於三都一者多、設國家徵ニ力役ニ乎、或一旦緩急、將何以給レ之乎、邪智姦佞侍ニ當路者左右一、而蔽ニ當路者耳目一、使下撰ニ擧邪智姦佞ニ而執上事、或來ニ于三都一不三爲レ國謀ニ利用一、爲レ己謀ニ利用一、雖ニ當路者一與ニ三都一隔レ地、況又左右之邪智姦佞爲レ之蔽ニ其耳目一至ニ以レ白爲レ黑也、或於ニ國內一取ニ利用於豪富之民一、而任ニ國禁之利用於豪富之民一、故豪富之民日以豪富、國日以衰耗、雖ニ當路者一不レ知不レ識國用及家貧共仰ニ給其豪富之民一、而至レ使ニ窮民離散公田荒蕪一、當路者不レ可レ不レ察者也、古慶元之時風俗敦厚、君子安ニ于儉易一而小人動ニ于力役一、君子富而小人足、倉廩充實而民力有レ餘、於レ是乎先侯各造ニ爲良法一以傳ニ之其子

孫二、子孫能潤二色之一循レ時而損二益之一、省二戸口之增益一而教二之墾田一、謀二之力作一、使下民能養二其父母一而供中其調稅上、上無二貪殘之暴一下無二離畔之罪一、如レ是則可三以爲二無窮之良法一、而傳二之萬世一矣、今之諸侯多不レ然、其所三以不レ然者何也、慶元以來昇平日久、人心効二其安一而無三亦顧二其急一、君子日以二文飾一爲レ事、浮費十二倍於前日一、而唯恐二華靡之不一レ如レ人、不レ知三國俗之日夫二質實一、小民亦然、唯知レ羞二家財衣食之不一レ如レ人、而不レ知三驕奢過二其方〔分カ〕一、而忠信日棄、當二此時一也、暴吏以二聚斂一取二媚其長上一、不四復問三民之困窮與二離散一、嗟小民何向生活乎、雖下國家善教之流徹二于民心一者今且不レ衰、無中一民有レ意二於離畔一者上乎、不レ得レ已而續二命於他邦一其來二于三都一而糊二其口一者不レ可レ勝レ數、於レ是乎壤土荒蕪、國用不レ給、假二諸三都豪富之民一、而暫給レ之、然亦終無レ由レ償レ之、令下三都之民視如二寇讎一、復至上不レ能レ供二其常用一、當二此時一、國家設徵二力役一、辭レ之不レ得、供レ之亦不レ能、進退維谷、不レ得レ止而削二羣臣之俸祿一以補レ之、其弊也群臣亦不レ得レ保二其家一、孳孳仰二餘財於賄賂一者、至二其甚一也欲レ罪レ之不レ勝二其多一、殆至レ使三百司之干二其人一、嗟諸侯據二廣土一牽二衆民一、外無レ有二寇讎之難一、內無レ有二叛逆之罪一、而國用闕レ之、壤土荒蕪、民不レ安二其土一、棄二父母妻子一而離二散于他邦一、一旦有二不測之急一、則兵食之絕而有二孤立之危一、何不レ慮レ之也、當路者有レ意二於此一、以二墾田力作一爲レ先王〔主カ〕二節儉一而勤レ之、兵食並足而民安二其土一矣、諸侯之國各有二名家世當レ路安民之業賴レ焉、然則國之安危興廢雖レ在二國君之明暗一、其責專在二當路之人一、其人亦累世强族、而不レ知二民間之疾苦一宜矣、當路之人能察二賢智忠直邪佞姦曲一、明二賞罰一、訓二有司一、以二安民之道一、擇レ才而任レ焉、能無レ失二信於其民一、倉廩充實、民力有レ餘、則庶乎光二耀先君之遺法一而稱二當路之勳功一矣、

我邦一里當二異國十里一行程考者以二異國里數一言レ之

地名河川兩字通用考

諸國郡郷等の字朝家より撰み定られし後は一定の字あるに似たり　河内參河駿河等の國名のごとき是也（此事別に委しく［　　］）郡名既に朝家より撰み定られし［　　］後一定の字ありといへども後代に及ては河川等の字相混じて用ゆるありたとへば陸奥の國白河郡舊事紀延喜式倭名鈔に至ては白川に作る是より後俗間に於て是多くは白川の字を用ゆるか其餘山川等の名に至りては朝家よりえらみ定られし事もなければたゞ其地方の人の注し來れる儘に用ゆる程にさらに一定の字なきに似たりされば河川等の字相通じて用ゆる事世の常なりたとへば

萬葉集第一幸レ于二吉野宮一之時柿本人麿作歌

　雖見飽奴吉野之河之常滑之絶事無久復還見牟

同第三柿本人麿歌

　八雲刺出雲子等黑髮有吉野川奥名豆頫

これらをはじめて河川相通じて用ひしいくらといふ數を知らず又同集第三山邊赤人歌

　明日香河川余藤不去立霧之念應過孤悲爾有國

これらの一首の中に河川相通じて並び用ひし也これらの例彼集の中猶多しかゝる倭歌に用ひしは文字の證に引用んには此集に之くはなし

又陸奥の國衣川を陸奥話記（此記は前九年の時にしるされしもの也殊にふるき代の記なり）衣川に作り東鑑には衣河に作るこれらも又相混じて用ひたり此類ふるきものどもにも見えし所悉く擧るにいとまあらず先其一二をこゝに之るして其例を發する事之かり

帝王の御謚まことに一定不易の字と申べし白河堀河後白河後堀河いづれも河に作れり弘安禮節に見えし音訓を見るに白河をば志魯歌於と稱しまいらせ堀河をば保利歌於と稱しまいらすべきよしを之るされたり（此書弘安年中に朝家にて詮定せられし所也）謹て按ずるに此兩朝の御謚白河堀河等の名に同じからん事を憚りてかくは稱し參らせしと見えたりされば白河堀河等の地の名の字と兩朝の御謚の字と相同じく共に河の字を用ひし事は疑ふべからず然るに俗間に行はるゝ保元平治物語等の物に之るせし所を始て世用る所或は堀川院或は白川

院抔とも云るし地の名をも或は白川或は堀川などと云るせしありまさしき天子の御諡といへども俗間に云るす所猶斯のごとしましてや其餘の地名に於ては俗間に用ゆる所深く論ずるに足らず

近世の俗の稱する所河の字を以て横河といひ川の字を以て竪川といふ其用ゆる所によりて唱る所も又同じからずといふたとへば小河と云るしてはをかふと稱小川と云るしてはおかはと稱するのまゝを申なりされど萬葉集に吉野河とも吉野川とも云るせらる河川等の字によりて其唱る所異なるにはあらず俗間の說信ずるに足らずたゞむかしより用ひ來られる儘に用ゆると心得べき事か

謹て按ずるに當代の御始祖の御稱號を德河殿と申しき東鑑に見えし所德河又は得河に作る其世にはとくかふと稱し申せしなるべし然るに其後の舊記には德川とも得川とも云るし其云るす所も古今の異なるありとみえたり異朝の書を見るに北方にして水にあひては河といひ南方にしては河（江カ）といひ蜀中にては川と云其地の俗によりて稱する所異ありとはいへども同じくこれ水流をさして云所は異ならずされば山河共山川とも江山とも河山とも相通じて稱する事尋常なり本朝のむかし異朝の文字を用ひしより此かた河川等の字相通じ用ゆる事猶異朝通用の例に相同じ然るに近來兵家の說に（世に軍法者といふものなり）山より出る水を河といひ海に入る水を川と云よしを申すか抑いづれの水としてか其源を山より發して海に入らざるがあるべき其源にさかのぼり見る時は山より發し其流に隨て見る時は海に入るもと是一水にあらずと云事なし兵家の說尤無稽の言にして信用するに足らざる所也右數條の旨を明らかにせば本朝國郡の名帝王の御諡の外は河川等の字相通じて用ひし事さらに其害あらざる事推はかるべしされど爰に云るせし所はたゞ河川兩字の事を辨せしのみ也すべては異朝の字を本朝にして取用ゆる所なを一重の秘訣あるかその事長ければ大略を別に注して呈す

玉考

先王の時玉を以て鎮となし瑞となし神を禮するの幣とし德を比するの服とし給ひし事どもは瓊山の丘氏が說に備りぬれば今こゝに論ぜず古の時かの中夏の地玉を產せし所經史の中に見えし所也禹貢の書を按ずるに唐虞の際九州の地玉を產する所は楊梁雍の三州にて爾雅に見えし所を考るに成周の世に及ては幽州の醫無閭（山の名也）冀州の霍山より玉を出せり山海經幷に淮南子等の書に黃帝の代に密といふ國鐘山といふ山より出しなどいふ事もあれどこれらの書は詩書の載る所と同じからざれば徵となしがたし（只こゝに注して考索にそなふる也）漢の時に至りては幽州の地猶玉を出す其所を以て玉田と名づくその餘は關中の藍田といふ所より出づ其後六朝の頃ほひに至りては幽州の玉は聞えず藍田よりは猶玉を出す其餘は南陽日南等の地より出せり唐の代に至りては藍田南陽日南等の地に玉ありとも聞えず是より後は皆々外國より來れる所のみ聞えたりかく後の代に至て中國の地玉を出す所の聞えざる事も地の物を生ずる事古今の同じからざる事あるにや又その生ずる事は限りありて是を取事の盡ぬるにやと瓊山の丘氏はいひしかど又ある人の說には（大明の李時珍）古の時は中華の地に玉を出せし所も多かりしに今に至てこれを出さゞる事は其地方害をなす事を恐れてなりといへり（地方の害をなすといふ事は南海の地に茘芝龍眼を出すがごとき漢唐の代に其地方の民これを貢するがためにくるしみし類をいへるなるべし）さもありぬべき事にや凡天地のものを生ずる事古より今に至りていまだかつてやむ事あらずかしこに盡ぬれば爰に生ずされば彼玉を產する地のごとき禹貢にみえざる地成周の代に是を出し漢の時生ぜし地はいまだ成周の代には聞えずかの中夏の地の幅員萬里なる豈後世に至りても玉を產する地なかるべき今これを出す地の聞えざる事は後世の君これを寶とし給ふところ先王の代のごとくにあらずして其民又貪暴の害を避るが故にぞあるべき且は又禹貢爾雅等に見えし中國の地玉を產する所古もなを其地多からざるを以てしりぬ唐虞三代のときもこの物すでに世に稀なりしといふ事をされば孔

子も君子の玉を貴む事𥔽の多くして玉の寡がためにあらずとものたまひけんさらば又先王の時その用たる事は夥かりしかど丘氏の說のごとくに古に有ては此物多かりしとも思はれず孔子其世にまし〳〵てすでに玉は寡しとのたまひ丘氏は千載の下に生れて古に有ては多かりしといふ何れを徴としいづれを徴とせざらん見ん人これを撰むべき事にや外國の地に玉を産する事も夏書の胤征に火炎崑岡玉石倶焚と見えたりさらば夏の代にすでに崑崙の玉を寶とし給ひしと見えし爾雅にも崑崙の璆琳琅玕を以て西北の美なる物とゑるさる崑崙は山の名中華西北の外方にあり崑岡といふもすなはち其山をいふなり又夷玉とて周代の寶とし給ひし物は東夷の玉也しといふ事書の顧命の篇に見えたり廣志を按ずるに倭國赤玉を出すよしをゑるし南史に倭國青玉を産する由見えたりさらばかの夷玉は我國より出し所にぞあるべき經傳の中に東夷と見えしは皆我國をさせる也此事はたやすくいひがたき事なればこゝには注せずこれらの外また交州今いはゆる交趾也夫餘朝鮮の北方なり挹婁中國の東北の外方今の韃靼の地方なるべし太秦西域の中にあり是等の國より出せし玉の事漢魏の代に聞えたり于闐國に出せし所ははじめ後晉の代に聞えて唐宋元明の代に至る迄これを貢せし事絶ず于闐はすなはち佛國の地方なり大明の永樂年中打骨咥といひし國よりも玉を獻ぜしといふ其國則古の于闐なりそれが中元の天下を併せし初は西北外方の地はいふに及ばず海外の諸蕃も悉來り貢しければ于闐の地はいふに及ず匝力沙といふ地にも陶玉戸といふを定めてそこに産する玉をとり給ひき中世より此かた中華の地玉を産する事すでに聞えずといへども外國より來れる所代々に絶ず然るに近世に及ては其物殊に世に希になりてついに闖闍の小人玉を知らざるに至れる事は古よりありしものは或は神を祭るために燒れ淮南子に鍾山崑崙の玉は爐炭に炊ぐこと三日三夜なれども色變ぜずといふ事あり多くの玉の中にこれらの地より産せるのみ火にあひても燒ざるにや其餘は火にあひては消し盡ぬべし但書の胤征に火炎崑岡玉石倶焚と見えたれば崑崙の玉も火のために燒るなり淮南家の說は信じがたき事なり葬に殉ふがために土に埋まる今も中華の地にては地中より古玉器を取得る事あり是皆古は葬にしたがひし所也といふそれに血玉尸玉墨古渠古𥖁古などいふ品目ある也それらの外代々の兵火のために消し盡しもの幾千萬といふ數をゑるべからずましてや金元の變に及びては中國の寶こと〴〵く輦にしてかの夷狄の中に入りしかばかく近世にはます〳〵希なるものとなりしとぞ見えたれ兵火にやかれ夷狄に入し由大明の謝在杭が說に見ゆ石の玉に似たる物を寶とせし事もすでに先王の代に見えたり禹貢に所謂楊州の瑤琨雍州の琅玕爾雅にいはゆる醫無閭の玕華山の礝崑崙の琅玕詩にいはゆる琇瑩瓊華瓊英瓊瑰のごとき皆々石の玉に似たるものにて其餘山海經穆天子傳に見えし采石

の類又是なり後世に及びても木難瑟々靺鞨など聞えし物は皆これ石の玉に似たる物にてあるなり（此中靺鞨といふは地の名にていにしへは肅愼といひし國なり其地より出ぬれば其名を斯は名つけしなりかの肅愼といふ國は蝦夷の地方に近しと見ゆ我國よりは僅に北海をへだてし所也さればいにしへは彼國の人我國に來れる事もありき今我國の東北佐渡津輕等の地方の海より出せる采石卽ち靺鞨の類なるもしるべからず）元の天下を併せしはじめ至元々年馬八兒といふ國に使して其國の寶石を求めたる（此國は海外にありて殊に諸蕃の綱領〔總演カ〕たる由元史には見えたり泉州より海にうかむ十萬里が程にて其國に至るべし其求め給ひし猫睛綠といふもの又は猫睛とも猫眼睛ともいふ綠なる石の中に一縷の光あり猫睛に似たればば斯は名付しなり元史に或は馬八國ともしるす馬八兒といふは本名にて馬八としるせるはその文を省きし也今世に行はるゝ大學衍義補に馬八圖と見えたるは國圖似たる字なればあやまりきざめるなり元史に據りて改むべき事にや）是よりして代々の天子これを寶とし重じ給ひ帽頂の飾となし給ひて正旦又は誕節大朝賀の時ならでは是を服し給はず其名をば刺子と名づく（刺一つに蜊に作るとも云今も大淸の品官服せる帽の頂に玉石を飾となし其玉石の多少は官の高下に從ふといふなり是夷狄の俗なりと見えし）此ものひとり馬八兒にのみ産するにもあらず西蕃回回又は中華の地にても雲南遼東等の地これを出す（今世に阿蘭陀石といふものかの寶石の類にや阿蘭陀といふ國もいはゆる西蕃の地方にてある也）〔紅イ〕其種類一ッならず其價も又一ッならずその白石頭といふに四種あり（刺避者達昔 刺泥古本蘭）綠石頭と云に三種あり（助把通助木 刺撒卜泥）鴉鶻といふに六種あり（江亞姑青亞姑馬思郎底你 藍屋撲你藍黄亞姑白亞姑）猫睛といふに二種（猫睛走 水石）甸子といふに三種あり（你拾卜的乞里 馬泥荊州石）それが中に紅刺といふ物其重さ一兩三錢なる大德の天子求め給ひしに中統錢一十四萬錠にあたれるものありき（大德は世祖の御孫にて元の第二代にあたりし君の成宗の年號なり又一錠といふは一金と心得て大やうはたがはず）大明の代に至りても其重さ一兩以上の物は其價錢千緡に至れども猶これを多く得べからずと見えたり

臣謹で按ずるに唐虞三代の時九州のうち玉を産する地二三州に過ず然ども先王是を寶とし重んじ給ひて玉瑞玉箸等の用となし給ひしかば是を産する地年毎に貢する事絶ざりしほどに古にありては此物多かりし樣に見えたれどまことは其世にも希なりし所なるべしされば外國の出せる所と雖も先王また是を寶とし重じ給ひ且は美石の玉に次るものといへども是を寶とし用ひ給はざるには非ず然るに瓊山の丘氏が說に元の初に外國の寶石を求め給ひし事を論じて元人のいはゆる寶石は華夏に生ぜずして夷落に生じ史傳の載ざる所前代のあらざる所珠玉の類にあらずして〔とイ〕砂礫に異ならずといひしはひとへにかの世祖のはじめに異物を貴び遠物を寶とし（書の旅獒に異物を貴まずとも又遠物を寶とせずとも見えた

り其飾とし給ひし所は先王の法服にあらず其求め給ひし所は國家有用の財を盡して後王の厲階となり給ひし事をそしりて後世の人主の鑑戒をばすてゝ遠夷無用の石を寶とし甚しくしては帑藏を傾て是をかふるに至るとは言ひしなり先王すべて外國の玉を寶とし給はず美石をもて服飾とし給はざりしといふにはあらず凡は書を解せむこと尤其心得有べき事にやされば文を以て辭を害せず辭を以て志を害せず意を以て志を逆ふと孟子のいへしはひとり詩を説く法のみにあらずされば又悉く書を信ぜば書なきにはえかずと見えたり

本朝の上世玉をもて寶となし國を鎭め神を祭られし類ことごとくかの異朝先王の禮に異ならずはじめ天孫此國に降り給ひし時天照大神八尺瓊曲玉を授給ひ豐葦原の中つ國を鎭められしは皇家世々に傳させ給ふ三種神寶の其一つなるべし又天孫の降り給ひし時玉作の上祖の神を副降されしと見えぬれば其裔孫の代々に作り出せし玉はいくらかありけんされば我國に聞えし寶玉國史に見えし所も少からず又これを佩服の用となされし事もかの先王の代の事の如し首を飾れるには玉御佩統といふものあり手にありては手玉といひ足にありては足玉といひ或は刀を飾り或は戈を飾れる類ことごとくえるすべからず又我國に出し玉の事異朝の書に見えし所もすくなからず周書の夷玉廣志の赤玉南史の青玉宋史の青紅白の水晶（水晶は古にいはゆる水玉也其青き物はいにしへの佩玉に水蒼玉と云し物にて我國多く水晶をいだす第一のものなりと本草にも見えたり）幷に廣志に見えし夜光珠魏志の白珠青大勾珠如意寶珠南史の眞珠宋史の白琉璃琥珀等の類皆これ我國の方物にてあるなりされば中世より以來此物も寶とする事古に及ばざる事我國も又彼國のごとく古の時玉を出し珠產せし地だに今はさだかならずその佩服のごときも其製代々に革りて玉冠玉帶などいふものは猶聞えたれどそれも近き代には玉冠は天子卽位の日君臣これを用ひらるゝのみにて玉帶の如きはかふるに寶石犀牛の角を以てする事にや今はたゞ外國の物をもとめ得て旣に玩戲の具となせるのみなりかの丘氏が嘆我國にもおもひ合さる世の俗とはなりしなり

先王珠を以て寶とし給ひし事禹貢爾雅大戴禮をはじめて諸史百家の書に見えし所ことごとく擧るに堪えず增韻を見るに珠は珍貝也と注せり此ものは蚌と云

物の殻中より生ず禹貢に見えし蠙珠すなはち夫なり（蠙は蚌の大なるものをいふ蚌はこゝにて貽貝といふ物にや貽貝の珠産する由は西行法師が歌にも見えたり）蜃（オホハマグリ）蛤（ハマグリ）蜆（シヾミ）蠣（カキ）九孔螺（アハビ）の類も皆珠を生ずとは見えたれど蚌中に出る物をのみ眞珠とは名づけ侍る也隋侯の珠ゝは靈蚫の啣みし所にて漢の報恩珠は昆明池の大魚に出づ其餘龍珠鮫珠鼈珠蜘蛛珠蜈蚣珠蜻蜓珠など云もの見えたれば是等の物も又珠を生るなり照乘珠は車の前後十二乘を照しぬれば斯は名づく明月の珠夜光ゝの珠是等も皆夜に明らかなるを以て其名を得しとぞ聞えし招涼珠は暑にあたりて則涼をまねぎ記事珠は忘るゝにあたりて則事を記す（記すは事を覺ゆる也）火珠は日にむかひて火を出し水珠は是をとれば水上を行ぬべし是等古にありてその名聞えし寶珠也此物はおのづから圓瑩にして玉の石中に韜れて人力を假りて後寶となせる如くにはあらず又是を産せし地いにしへにありては淮夷より貢し其のち合浦日南等の地より出づ外國の地古より西南諸蕃の地方是を出す所最多しと見えたりされば後世に至りてもかの國の世に希なるが如くにはあらざるにや三國の時呉の孫權宋豫に贈るに大珠一斛を以てし晉の時石季倫梁氏の女を買ふに三斛の眞珠を以てす（これ綠珠といひし美人なり）隋の煬帝の時殿内房中膏火を燃す事なく大珠一百二十をかけて夜を照し江南の李後主の寵姫宮中にて毎夜大珠十枚を綴ててらすにその光白日に同じかりしなどいふ事あり

珊瑚

此物經傳の中には見えず漢の代よりその名聞えたるが山に有て琅玕といひ海にありて珊瑚といふよし見えたりさらば此物もと一物にてその生ずる所にて其名異なるにや禹貢爾雅等に琅玕の事みえたりその代に南海の物いまだ中國に至らざるなるべし琅玕と一物ならんには是も石の玉に次るもの也一説に又海中の樹なりこれを火樹ともいふよし見ゆ

琉璃

此物玻璃と一物にて西國の寶也玉石の類にて土中に生ずといふ裏牢（哀牢イ）の地より出るよし後漢書に見え大秦國より出るよし魏略に見ゆ今世にある物は藥玉とて藥にて製れるものと見えたり（蕃語にビイドロといふ物の事なり）

玻璃

頗黎國に出ればかくはなづけしといふ（その性は琉璃の條下に見ゆ）

瑪瑙

西南諸國に出づ美石の類なり

水晶

則古に所謂水玉なり一說に玻璃の類なりともいふ中國并諸蕃より出る所多しその中我國より出るを第一とすと見えたり

琥珀

石の類なり又松脂楓脂の地に入て化する所とも又桃膠兎絲の化する所とも又龍血の化する所ともいふ今は桃樟等の脂にてつくりなすもの多しと見えたり

瑇瑁

南海に出づ龜黿のごとくなるものなりその甲をとりて簪とせる也といふ

車渠

大きなる蛤也長さ二三尺濶さ尺ばかり厚さ二三寸殼の外に溝壟ある事蚶のごとく殼のうち白くして玉のごとし夫をとりて器を飾る也といふ

壹越調

燕樂

皇帝破陣樂　又名二武德太平樂一今皇帝といふ

唐之立部伎破陣樂太宗貞觀年中に協律郎張文等作也

團亂旋

豐原統秋云笛譜に大戸眞繩が所作と見ゆされど古人相傳て此曲唐舞のよし也唐の敎坊樂に團亂旋あり

春鶯囀

大神景範云唐曲　唐敎坊樂に春鶯囀あり甘州團亂旋春鶯囀波樂等を以て軟舞とす一說又名二天長寶壽樂一或は天壽樂といふとも又は承和年中に尾張濱主長壽樂を奏す勅して名を天長寶壽樂と賜ふ今の春鶯囀是なりともいふ皆誤なり

玉樹後庭花

陳の後主所作

臺弄樂　又名二承天樂一

統秋云古傳に大戸清上作レ樂大戸眞繩作レ舞按ずるに唐雅曲承天樂といふ二つあり一つは高宗の時に所レ作一つは玄宗の朝に所レ作太常卿韋蹈が作也といふ

賀殿賀嘉通用

狛朝葛云又名二甘泉樂一　景範云唐曲

統秋云嘉祥年中に林直倉舞を作る是時和樂部太田麻呂新に嘉祥樂を作る則嘉祥樂を破とし賀殿を急とす按ずるに隋朝に河傳曲あり煬帝卞河を開れし時に作れる曲也嘉祥二年閑院行幸の時狛光季奏請して賀殿を以て萬歲樂に代ふと云こと著聞集に見えたり然らば河傳賀殿字音同じきが故に文字をあらためて新殿を賀する樂をなせしなるべし

胡部

胡飮酒　未詳

統秋云胡人酒を飮て醉舞ふの象なり或說に承和中に清上眞繩作るといふ唐樂によりて改め作りしなるべし

按ずるに唐散樂部に蘇郎中戲といふあり後周の世蘇葩といひしもの酒に醉りし體を象りし舞也といふ後戲樂郎胡部の舞なれば胡飲酒といふもしくは蘇郎中戲の事にや（統秋一名ニ宴飲樂一といひしはあやまりなり（れりイ））

河水樂　未詳

景範云天竺樂

溢（和カ）金樂　溢又作レ壹

統秋云秋樂部太田鷹（犬イ）村上是盛作

按ずるに唐武德年中雅樂を作られし中に承和とい（もイ）ふありもしくは其雅樂を採りて改め作り其舊名の殘りしにや

詔應樂　又名ニ梁州詔應樂一　未詳

按ずるに唐樂府に涼州あり後轉じて梁州とす玄からば梨園の法曲なり

廻杯樂　未詳

按ずるに唐敎坊樂に回波樂あり杯波音の轉じ訛れるにや

北庭樂

本北狄の樂唐西涼節度使益嘉運所レ作（懸イ）　統秋云一名ニ北帝樂一誤れり

酒胡子

統秋云古樂唐時醉公子と名づく又酒公子酒醉（酘イ）子酒飲子等の名あり敎坊記に醉公子たり

承和樂

景範云承和元年大中成文作句

統秋云承和黃菊宴所レ奏（聖作共イ）大戸清上三島武藏作る又承和の時に作るともいふ

壹團樂　絲管要抄作ニ壹團嬌一

統秋云古人相傳ふ大戸清上三島武藏作る

酒淨子　又作ニ酒清司一　未詳

古樂府に酒泉子あり西涼の樂曲なり（歟イ）

雙皐麗　未詳

統秋云寛平上皇の時に作れるなるべし或說に北庭樂の一名とするはあやまれり

歌曲子　又作ニ河曲子一　未詳

統秋云又歌曲子慢と名づく

宴飲樂　一名ニ飲酒樂一　未詳

天壽樂　厥磨樂　蘇羅密　古詠詩

右四曲諸家目錄に不レ載

沙陀調

案摩　又作二安摩一　未詳

景範云天竺樂　統秋云相傳ていふ承和中大戸清上其辭を改むこれを陰陽世鎭曲と云々

陵王　或は蘭陵王　羅陵王に作は誤れり

唐教坊樂蘭陵王入陣曲也北齊の世蘭陵王長恭才武ありて容貌美なりしかば戰にのぞみて必假面を著し北周の師を金墉城下に破りて其功ありし時その容をまなびて此舞を作る

雑羅陵王　一名二團圓長樂一　團一作レ圓　未詳

十天樂

按ずるに統秋説に聖武の御世常世乙魚所レ作ともいふと見えたれど乙魚聖武の朝の人にあらず又順の説に見えし東大寺講堂會の事何の時にや承和五年供養也天長五年に齋會を設けられし事は見えたり統秋説に此時天女十八降て東大寺にして花を供すよりて十天樂と名づくといふ

菩薩

統秋云天竺樂舞

按ずるに天平八年南天竺の婆羅門菩提林邑の佛誓二僧我國に來れり佛誓頗音樂の事を解して其國樂を傳ふ林邑國樂の曲の一つなり

臨色亂樂　渭本不レ載

迦陵頻　又作二迦樓頻一　〔又名鳥鳥〕〇南據一本補

林邑八曲之一也

燕樂

最涼州　絲管抄作二西涼一

通典に後魏の太武帝河西を平げてこの樂を得西涼樂と云と見ゆ其後新涼州といふと見えたり

統秋云相傳ふ此樂息長貞秀勝道文所レ作一名西涼樂是によりて見れば本朝にて古樂によりて新曲を製せられしなるべし又統秋説に此曲功成慶善樂九功樂等の名ありといふはあやまれり

溢河鳥　枯元集作二沁河一　未詳

統秋説に古記に隋煬帝溢河にして作り給へりと云

安樂鹽

隋唐燕樂疎勒の遺聲也凡て鹽曲類同じ此曲を相傳て唐の時に作るといふもしくは安樂公主のために作れるか

壹德鹽

統秋云唐時奉レ勅作　或説に三嶋武藏作といふ按る

に隋唐燕樂に一臺鹽あり又敎坊理一斗鹽ありこれらの轉じ訛れるなるべし

曹婆　簗紫　諸縣

右三曲諸書に不ㇾ載

雙調

柳花苑　苑一作ㇾ園

統秋云舊名柳花怨天曆内宴の日今の名に改む或は柳花鹽にも作るといふ按ずるに敎坊記に柳含烟ありもしくはこれらの轉じたるにや

春庭樂　一名夏風樂

統秋云春花一名春庭花又春庭子と名づく延曆の時に久禮眞藏或作眞茂始傳此曲又云外從五位下和爾部太田麿作るともいふ但太田麿所ㇾ作は九拍子是を夏風樂といふ

催馬樂　狹鮨河

右二曲諸書不ㇾ載

和風樂

承和年中尾張連濱主作る事國史に出づ統秋云或說に延曆寺僧淨藏所ㇾ作といふはいぶかし

平調

樂府

相夫憐　又作相夫戀相は想の字の誤るなり

李肇國史補に南朝の時に宰相の府中に瑞蓮あり故に相府蓮と號す誤て想夫憐に作れる也と見えたり

燕樂

萬歲樂

統秋云又鳥歌萬歲樂といふ則天皇后作り給ひし所也○通典に武后の時宮中鳥を養ひ給ひしに人の言を能し又常に萬歲と唱ふよりて樂を作りこれに象ドルる卽唐の鳥歌其鳥は今嶺南にある所の吉日也と見ゆ一說に汎龍舟の一名煬帝の造り給ひし所也とも又本朝にして用明卽位の時造られしなど云いづれも誤れり煬帝の萬歲樂といふもの古本朝にも傳りしかど其後ほろびし也

甘州　又作泔州又甘州鹽泔州に作るはあやまれり

天寶年中の樂曲もと胡部の樂後に法曲と合せらる統秋云半拍子あり蘇莫者澁河鳥鷄鳴樂甘州の類これなり

褁頭樂　一名散手作物　未詳

統秋云唐李德裕作一說に玄宗の作り給ひし所又は

霓裳羽衣曲也といふ皆誤れり　按ずるに唐曲に六州歌頭あり褁頭は歌頭の轉せしにや昔は天皇元服の日此曲を奏すといふよりて文字を改められしか

勇勝樂　未詳

慶雲樂

景範云文武卽位の時藤三位正風作る敎坊所ﾚ奏

天寶年中の樂曲也高宗の時造られし上元樂又は慶雲曲ともいひしは舞曲なり

越天樂　天又作ﾚ殿　未詳

通考に夷部樂名の中に願天樂ありもしくは願天越天その聲の轉じ誤れる歟

皇麞　燕樂　皇は黃に作るべし通考に此曲を以て徙樂とす

酔卿日月に景龍年中宰相王孝傑西戎と黃麞谷に戰ひ討死す中宗其忠を念ふて造らしめられし所なり

三臺鹽　唐敎坊　一名天壽樂　宗燕樂　五三臺

統秋云少監物源賴能が說に此曲舞なし古相傳ふ犬上是成此曲を傳へて其舞を秘す因て舞絕といふ酔卿日月に則天皇后所ﾚ作

按ずるに武后の樂三つ鳥歌は前に見ゆ長壽樂天授皆年號を以て名づく此樂一名天壽樂壽の字授の字の訛れるなるべし

宮高荊仙樂　或作二荊山一未詳　此曲諸本不ﾚ載

通考に常林歡は宋梁間曲江左の時荊雍の地をさして樂上とす荊州に長林縣あり長を誤りて常となせし也と見えたり本朝の古吳樂といひしは則江左諸曲也しからば荊山樂も常林歡の類をいひし又唐敎坊に迎仙客曲ありこれら聲の轉じ誤れるにや

平蠻樂　未詳

景範云唐曲

臨胡渾脫　諸本皆作二輪鼓渾脫一　未詳

源順の說に雜藝の中に輪鼓を弄する者ありと見えたりしからば此曲唐の舞輪鼓の類にや　渾脫は曲名也

娥媚娘

唐敎坊記武媚始あり娥は武の字の訛れるなるべし

滋金樂　豐生樂　諸本不ﾚ載

敎坊記に壽聖樂ありもしくは其字の轉じ訛れるにや

永隆樂　未詳

統秋云左大臣源信作一說に唐永隆中所ㇾ作といふしからば其を改め作られしにや按ずるに永隆は高宗の年號其時に作られし樂七曲也其中に永隆の曲名なし

長慶子

景範云用明天皇の誕日に所ㇾ作統秋云三位源博雅作敎坊記に長慶樂ありしからば舊曲により改作りしなるべし

郎君子　未詳

景範が說に老君子に作りて嵯峨君子所ㇾ作といふ○此說いぶかし敎坊樂に郎君子好郎君の名あり

直火鳳　連珠火鳳　右二曲諸本不ㇾ載

火鳳は唐竺部曲名李白茱火鳳詞あり

移都師　駱勢娘　二曲諸本不ㇾ載

夜半樂　燕樂歟

唐書に其宗潞州より京師に還り給ひ兵を起して夜半に韋氏の亂を平げ給ひし時夜半樂還京樂を作るといふ

廻忽　忽又作ㇾ骨

胡部　以下倭名所ㇾ不ㇾ載

本は回紇後回鶻に改む匈奴別種の國名也宋朝に回鶻隊舞あり

倍臚　倍一作ㇾ陪臚一作ㇾ呂

按林邑八曲之一

春楊柳

唐敎坊記春楊柳曲あり

扶南

扶南は南蠻の國名也隋の煬帝林邑を平げて扶南の樂人樂器等を得給ひしかど其聲陋きが故に天竺樂を以て其聲をうつされて樂部の中には入れられたるよし隋志に見ゆ

小娘子　紅娘子に作るべし

敎坊記に紅娘子曲あり諸書古娘子と作り又小老子に作る皆誤れり

鷄德　又慶德に作る　未詳

狛近眞又鷄と云鷄に五德ありよりて此曲を作る

黃鐘調

喜春樂

景範云唐樂統秋云古樂女舞又名弄殿喜春樂とも壽心樂ともいふ又大安寺僧安操所ㇾ作とも云唐敎坊

樂に喜春鶯曲あり
弄殿樂　未詳
統秋天樂のよし見えたり統秋抄に此曲なくして王殿樂あり又名大樂のよし見えたり
海仙樂　未詳
古譜に大寶元年從五位上藤原恒風所ㇾ作又は清和の御時船樂に用ひらるとも云　統秋云海靑樂又名海山樂或は海山海旋に作る一名淸和樂承和中神泉苑に幸の時勅して新に奏せしめられし所也
應天樂　未詳
統秋云大戸淸上所ㇾ作一說に淸上初て此樂を應天門に奏せし時鬼來てこれを聞より樂の名となせしともいふ
央宮樂　未詳
景範云唐曲　統秋云林眞倉作ると云
散吟打毬樂　未詳
景範云天竺樂　統秋云新樂吟通じ用
安城宮　諸本宮作ㇾ樂　未詳
統秋云世に傳ふ此曲良峯安世所ㇾ作なりよりて樂を名づく又一說に唐に安城樂ありといまだ見る所あらず
河南浦
統秋云世に傳ふ承和のとき尾張濱主所ㇾ作又或書に興福寺忠算始て花法會を設けられし時此曲を用ひしともいふ俗に莫作舞といふ
按ずるに本朝雜戲也
感城樂
景範云唐曲○唐に感聖樂あり聖は城の字音の轉じたる也
聖淨樂
統秋云淸上樂大神惟季が所ㇾ傳譜に上聖樂に作一說に大戸淸上樂を作りし中に誠に此曲勝れたりしかば己が名を用ゆといふ按ずるに一名上聖樂といふによれば唐玄宗神仙の事を好み給ひし時に賀知章紫淸上聖曲を奏せし事見えたり
赤白桃李花　一本赤白二字なし　未詳
統秋云新樂妓女舞也一說に唐國曲水宴に是を奏すといふ唐朝に桃李花と云曲名所見あらず
皇帝三臺　未詳
按ずるに宋朝の南岳神に獻ずる曲に黃帝鹽有り黃

と皇とは相通ず黃靡を皇靡に作るがごとし三臺は
則三臺鹽の名によりて鹽曲の事をいひし歟爰から
ば皇帝三臺は黃帝鹽の事にや
提金樂又作二提琴樂一以下倭名鈔所レ不レ載
長生樂
承和中左大臣源信作る
西王樂
仁明帝自ら製し給ひし曲といふ
赤白蓮花樂或は赤白の字なし
尾張秋吉所レ作或は大安寺の僧安操作る共興福寺
僧義操作るともいふ
夏引樂
英雄樂
唐太宗內宴の日虞世南に命じて作らしめられし所
也傾盃樂と同時の作なり
承燕樂
統秋云大戸淸上犬上是成所レ作
天安樂　承涼樂　未詳
水調
拾翠樂
統秋云此曲破は大戸淸上作急は少監物賴吉作一說
に承和の時大戸淸上尾張濱主作るともいふ
重光樂　未詳
統秋云源重光作と云未詳○按ずるに此曲御卽位も
しくは立坊の時作られしなるべし唐に宣重光曲あ
り是は後周の明帝卽位の時造られし樂也
九城樂　未詳
汎龍舟
隋志に煬帝の時樂工白明達に命じて汎龍舟等の曲
を造らしめられし事見えたり
般涉調
蘇合香
唐敎坊樂曲甘州團亂旋等に同じ軟舞とす景絁天竺
樂といひし必得られず
萬秋樂
統秋云佛曲也百濟國より傳ふといふ
秋風樂
統秋云弘仁の時常世乙が所レ作と云又一說に樂は
大戸淸上作る所にてもと唐より傳來れる也ともい
ふ

按ずるに唐詩に秋風曲秋風引等あり樂府曲名と見ゆ

崇明樂　崇一作ㇾ宗　未詳

景範云唐曲

劒氣褌脫（氣一作ㇾ器 褌一作ㇾ渾）

唐敎坊樂に西河劒氣舞あり○統秋云林邑八曲の一

輪臺青海波

唐の世青海舞あり○統秋云此曲序四遍を輪臺といひ破七遍を青海波と云○按ずるに青海波は則青海破なるべし

鳥向樂　未詳

景範云唐曲○統秋云一說に弘仁の時作る按ずるに唐に風迎樂あり

蘇莫者　者當ㇾ作ㇾ遮

唐の時所謂西胡渾脫舞也蘇莫遮は高昌國の女子の帽子の名なり○統秋說に林邑八曲の一

採桑老

景範云百濟國樂○統秋云（說イ）唐に採桑子といふと見えたり○按ずるに唐宋曲中採桑と云名はあれども曲によりて起れる所別なり百濟樂といふ說宜しきに似たり

感秋樂　未詳

山鷓鴣曲

唐敎坊樂

竹林樂

統秋云相傳ふ此曲外國の葬樂故に慶事には用ひざりしを今は吉凶ともに用ひざる事になりしといふ

元歌德貫子　般涉參軍　永寳樂　登眞樂　以上四曲諸本不ㇾ載○般涉參軍は後漢より以後弄參軍戲といふ事あり唐に至り李仙鶴といふ者此伎を善すといふ事見えたり

承秋樂　未詳　以下倭名鈔所ㇾ不ㇾ載

鷄鳴樂　未詳　催馬樂

千秋樂

統秋云少監物源賴吉作る唐敎坊に千秋樂あり

角調

曹娘渾脫　諸本不ㇾ載

白柱　未詳

統秋說白柱一名德曹（買イ）子と見えたり

遊字女　字又作ㇾ八一作ㇾ兒　未詳

一說に煬帝所作といふ不審

道調

上元樂　諸書不レ載

唐玄宗の時所作立部の伎八曲の一也

五更轉　未詳

散手破陣樂　一名主皇破陣樂

景範云天竺樂○統秋云古より傳へいふ昔率川神新羅の兵を破り給ひしかたちを象りし也其面元興寺に在て珍らしき寶なりしが文治年中に燒失す山階寺に其形を寫せし物あり今又それをうつして世に殘りしといふ

太平樂

唐太平樂一名は五方獅子舞人百四十八人五方の獅子其方の色に從て毛を綴りて衣とし舞ふと見えたり本朝太平樂古來の說一名武昌太平樂唐の太平樂によりて舞人三十人或は四十人用ゆと見えたり按ずるに本朝太平樂といひしは武昌樂、胡少子、合歡鹽、三曲を采り用ひて合せ作れる也唐の五方獅子舞にあらず當時樂家に太平樂といふものは唐の獅子舞にも本朝の武昌樂にもあらず則小破陣樂也

合歡鹽　未詳

庶人三臺

本朝の雜戲也寛弘の末つかた此曲出來て程なく國喪ありしかば此舞絕といふ

打毬樂

唐敎坊樂宋朝女舞にあり

仙人河　一名仙遊霞　河又作レ歌

五聖樂　一作二五常樂一　一名禮義樂

統秋云唐太宗親ら製し給ひし所也と　未詳

聖明樂

隋志に開皇六年馬昌國より聖明樂曲を獻ずと見えたり統秋云唐開元中に太常樂人馬順作る或說にもと胡樂又興福寺僧義操作るともいふ

拔頭

通考に西域の胡人猛獸のために噬れしに其子獸を得て是を殺せしかたちを象りまひしなり　統秋云婆羅門僧所傳の曲

傾盃樂

唐太宗長孫無忌に命じて作らしめ給ひし所也　統秋云唐曲景範胡國樂といひしは誤れるなるべし

天人樂　未詳
統秋云和爾部太田麿作
飲酒樂　未詳
大天樂　未詳　諸本不レ載
唐には大羅天又は大朝天等の曲ありもしくはこれらの曲にや
大寶樂　諸本不レ載
唐敎坊樂
大輔樂　諸本不レ載
唐敎坊樂
大定樂
唐高宗造らしめ給ひし所本名一戎太定樂本破陣樂に出づ朝葛說に秦王破陣樂一名太定太平樂といひしは卽小破陣樂當時樂家にいふ所太平樂也
興明樂　五坊樂　後散　右諸本不レ載
按ずるに後散は隋志に所謂拂舞也
感恩多　賀王恩　和名鈔所レ不レ載
唐敎坊樂　統秋云賀王恩一名感皇恩と誤れり別曲也又一說に本朝所レ作ともいふ又〔也イ〕非なり唐曲なり
乞食調

秦王破陣樂　今秦王と云
唐の世秦王破陣樂といひしは一名神功〔破陣樂卽七德舞也本朝にいふ所の秦〕王は小破陣也當時樂家には是を太平樂といふ也是は古說に秦王破陣樂一名大定太平樂といふよりて誤れるなり昔は太定樂破陣樂等悉く本朝に傳はりしに後に其樂絕しかば小破陣樂を破陣樂と一つとし又太平樂を以て其一名となせしなり
還城樂
唐史還京樂これなるべし　景範云唐玄宗作り給ひし所也　統秋云本見蛇樂に作る西域の人好みて蛇を食ふによりて此舞を作るといふ說あり此說いぶかし
放鷹樂
唐敎坊樂此樂の事著聞集古事談等に見ゆ
蘇芳菲　未詳
景範云唐樂　統秋云弘仁の比より始れり
性調
西河　〔諸本不レ載〕〇據異本補
按弓士　一作二安公子一又作二安弓子一

〔隋唐遺曲也翻安公子曲と云事通考等に見ゆ〕○據異本補

千金女兒

長命女兒

唐教坊樂に長命女あり

王昭君　漢曲

反鼻胡德　未詳

高麗樂曲

高麗樂の曲名其儀多く詳ならず今其少く據あるをこゝに記す

狛桙

統秋云俗名執桙いにしへより傳へいふ昔高麗人舟に乘りて來りしに其中に棹を持て舞ひし者あり其形を象りて作りし也

志岐傳　一作二敷手一

統秋云一說此曲又名二廻庭樂一

垣破○圖書館本同今按垣當作埴垣破是訓ハンナリ

統秋云是を登玉舞といふ士にて作りし玉五つを持て舞ふ舞人額と左右の肱膝の上に鞆繪をかざるの玉をその所々にあて後には吹てこれを破るといふ

歸德候　一作二歸德一又作二黃德一

統秋說に漢の□□日逐王漢に降りしを歸德候に封ぜられし事を引くは誤れり

王仁庭

統秋云皇仁又皇仁庭と名づく庭の字衍字たるべし此曲東宮元服の時奏す按ずるに百濟人王仁應神の御時召れて太子御師となりし事國史に見ゆ太子元服の日此樂を奏すといふ時は此事を用ひて作りし樂なるべし

崑崙八仙

三五要略是を鶴舞と號す統秋說には都鬱志與呂伎又作二都志一又名二鶴舞一と見ゆ

啄木

延喜樂

統秋云延喜年中戶部道廣作る其舞は山城守忠房所作〔歟〕

胡德樂　統秋云一作二胡龍樂一

按ずるに百濟の官十六品あり其七品を將德と云九品を固德といふ十品を李德といふ是によりて見る時は今曲名宿德歸德胡德等皆々其樂を作りし人の官名によりしなるべし

狛犬

絲管抄に高麗龍犬に作る　統秋抄に狛龍狛犬二曲別にしるして狛龍の下に又作二高孔龍一又名小形馬競馬行事に左は蘇芳龍右は狛龍を奏すと見ゆ○按ずるに倭名鈔犬一名尨と見えたり俗字に龍の字を略して記す所也尨に作りたり絲管抄高麗龍の下に犬字ありしはかの龍の字龍にはあらず犬の字の古字なる事をしらしめん爲に付たるなるべし江家次第の競馬の下にも左蘇芳菲右駒形又長和三年の記を引て駒形を狛犬に作れりいづれも狛龍の名なるべし

胡蝶樂

統秋云一説に前栽合の日に忠房所作といふ

蘇志摩利

統秋云一説に此曲を名二廻庭樂一といふとも見えたり按ずるに此曲舞人簑笠にて舞ふと見ゆ神代に進雄尊衆神に逐れて青草を束て簑笠として新羅に至り曾尸茂利の所に居給ふ事國史に出づ此事を象りし舞なるべし

長保樂　以下倭名所レ不レ載

統秋云此曲保曾呂久世利を破とし加利夜須を急とす長保年中所作といふ未詳

桔槹　又作二若干吉間一

唐の世夷部乞寒戲

常雄樂　雄又作レ武

統秋云戸部常雄作

仁和樂　統秋云仁和中貞雄と云者作る

按ずるに貞雄は百濟貞雄を誤りしなるべし

俳優考

異朝ノ俳優ノ事其始レル所ハ未ダ詳ナラズ昔殷ノ太甲ノ御時伊尹其君ヲ訓參ラセシ詞ニ敢テ宮室ノ中ニ恒ニ舞ヒ酣ニ歌フ是ヲ巫風ト申スナリコレラノ事卿士ノ身ニアランニハ其家必ズ喪ヒ邦君ノ身ニ在ランニハ其國必ズ亡ビナン其君ノカクアランニ其臣コレヲ匡シ諫ル事ナカランニハ其罪又墨刑ニ服スベシト先王（即湯王ノ御事）ノ御時位アル人々ニ儆オカセ玉ヒシ所也ト見エシハ（書ノ伊訓）後ノ世ニ所謂散樂雜劇ナド云事ノ如クニゾ聞エ侍ル其後紂王ノ亡ビ玉ハントセシ比ホヒ新ニ北里ノ舞靡々ノ樂ヲ作ラセ玉ヒシト云コトアリ（史記ニ）コレハマサシク後ノ世ノ散樂雜劇ノコトニゾアルベキ其先王ノ儆玉ヒ其保衡ノ（即伊尹）訓トセシ所ナルニ其王コレヲ用ヒ玉ハデ終ニ其儆其訓ノ如ク其國ヲ亡シ給ヒシコトコソウタテケレ（今モ殷ノ舊跡ニ紂王ノ朝ヨリ歌ハセ玉ヒシ地也トテ朝歌ト云處侍ル也）其後周ノ代ニ至テ晉ノ獻公ノ優其名ハ施トイヒシ者

獻公ノ寵姫驪姫ニ通ジテ終ニ太子申生ヲ讒シ失ヒ參ラセシ事左氏傳國語等ノ書ニ見エシハ優人ノ名ノ見エシ始ナルベキ其後（五十餘年ノ後ナルベシ）楚ノ莊王ノ時優孟トイヒシ者アリコレハイミジキ賢人ニテ常ニヲカシキコトニヨソヘテ其君ヲ諫マイラセシ事ドモ史記ノ中ニ見エタリ其後（九十餘年後ナルベシ）又魯ノ君夾谷ト云處ニテ齊ノ君ト會シ玉ヒシ時仲尼魯ノ相ノ事ヲ攝シ玉ヒシニ齊人宮中ノ樂ヲ奏シテ俳優侏儒其前ニ戲レ舞シカバ匹夫諸侯ヲ熒惑シ參ラセスルハ其罪誅ニアタレリトテ仲尼司馬ニ請テ其侏儒ヲ斬シメ玉ヒシト云事孔子家語ニ見エタリ又禮ノ樂記ニ見エシハ魏ノ文侯ト申セシ君ノ古樂ヲ聽トキハ只臥ンコトヲ恐レ鄭衛ノ音ヲ聽トキハ倦コトヲ知ズ古樂ノ彼ガ如ク新樂ノ此ノ如クナルイカニヤト問玉ヒシニ古樂ヲキヽ新樂ヲキクノ然ルイハレヲ子夏對ヘシ詞ニ新樂ハ俳優侏儒子女ヲ優雜ストイヒシコトアリ優トハ獮猴也舞戲ノ時ニ其形獮猴ノ如ク男子婦人ヲ間雜スルヲ云ヨシ漢唐ノ注疏ニハ見エタリ

本朝ノ雜劇ヲ猿樂ト云事ハカヽルイハレニヤト云人モ侍ル也

サラバ鄭衞ノ音ト聞エシハ其代ニ所謂新樂ニテ卽チ俳優ノコトヲイフナルベシ

　孟子ニ見シ齊宣王ノ好ミ玉ヒシ世俗ノ樂ト云モ亦此ラノ事ニゾアルベキ

顏淵ノ邦ヲオサメシコトヲ聞マイラセシニ鄭聲ヲ放テト孔子ノ敎ヘ玉ヒシモ此ラノ事トコソ覺ユレ其後（百八十餘年ノ後ナルベシ）又秦ノ優旃トイヒシ者始皇二世ノ二代ニ仕テヨクヲカシキ事ヲ云テシカモ道ニ適ヘルガアリケリ秦亡テ前漢ノ高祖ニ仕ヘ參セキ又カノ二世皇帝ノ代ニ穀抵優俳ノ觀ヲナシ玉ヒシト云事同ク史記ニ見ユ

　穀抵トハ我國ニイハユル相撲ノコトヲ申ス也

優俳ト云モ卽俳優ノコトニテ侍リ二世位ニ卽セ玉ヒ二年ヲダニ出ズシテ趙高ニ弑セラレ玉ヒイクホドナク秦モ亡シカバ其後ハカヽル戲ノ伎モキコエズ漢ノ武帝ノ御代ノ末ニ至テ（元封三年ノ事也二世ヲ去コト百年）又初テ角抵魚龍曼延ノ屬ヲ作ラル

　角抵ハ卽穀抵也魚龍曼延トハ先庭上ニ戲レ舞テ忽ニ殿前ニ水ヲ起シテ魚ト變ジ龍ト化スルノ戲也曼延トハ變化也ト注シ侍リ

其後又後漢ノ安帝ノ位ニ卽セ玉ヒシ初（延平三年ノコト也武帝ヨリ二百餘年ノ後ナルベシ）ニ又詔アリテ魚龍曼延ノ戲ヲ罷ラレ永初三年ニ又詔シテ戲ヲ設ケ樂ヲ作ルコトナカラシメラル其後又（百二十四年ノ後ニヤ）晉ノ武帝ノ咸寧四年詔シテ奇技ヲ獻ズルコトヲ得ルコトナカラシメラル其後（二百八十四年後ノコトナルベシ）又北齊ノ後主（姓ハ高御名ハ緯）ノ代ニ又魚龍山車ナド云戲アリテ是ヲ散樂トハ名付タリイクホドナクシテ後主ハ後周ノ武帝ノ爲ニ亡ビ玉ヒ武帝ノ御子宣帝ノ代ヲ繼セ玉ヒシ初彼北齊ノ散樂ヲ徵サレケルニ是モ聽テ隋ノ文帝ノ爲ニ亡ビ玉ヒ文帝世ヲシロシメサレシ初（開皇元年四月ノコト）散樂ヲ放チ雜戲ヲ禁ジ玉ヒキカク其比ホヒ迄ハカノ孔子ノ敎ノマヽニ鄭衞ノ餘風ヲ放チ玉ヒシ君モ代々ニ少カラネド太平ノ日久クシテ時豐ニ民繁ク物盛リニナリケレバ自ラ君臣佚豫ノ暇カヽル戲遊ヲノミ事トシ玉ヒ代々ニモ絕ズソレガ中隋ノ煬帝ト申セシ御事ハ正シク御父文帝ノ御代ノ始メ放チ禁ジ玉ヒシコトヲ知シメサレシ御事ゾカシ然ルニ自ラ位ニ卽セ玉ヒシ始（大業三年）天下ニアラユル前代ノ樂家ノ子弟ヲ召サレシカバ四方ノ散樂大ニ東京ニ集ル京兆河南ノ兩郡ニ課テ其衣ヲ製セラレシ錦綵コレガ爲ニ盡ヌト聞

エシ白モ艶曲ヲ製ラセ玉ヒ白明達ト云樂正ヲシテ新聲ヲ造シメ是ヲ音樂ニ播シ玉ヒ常ニ宴遊ヲノミ事トナサレシカバイク程ナクテ天下大ニ亂レ帝モ終ニ賊臣ニ失ハレ玉ヒキコレラハ彼殷ノ先王儆オカセ玉ヒシコトヲ紂王ノ用ヒ玉ハデツヒニ亡ビ玉ヒシ御事ニヨク似サセ玉ヒシ御事也サレバ古ノ明王ノ代ヲ去ルコト遠クシテ世ノ俗日々ニ衰ヘ奇伎淫聲ノ習人心ニ入ルコトノ深キガ故ニヤヨリケンコレヨリ後ノ代々ニハカヽルコトヲ禁ジ止メラレシコトモ聞エズサレバニヤ戯曲ハ隋ニ至テ盛ニナリタルナドハ申ス也夫ヨリ後唐ノ代ニハ傳奇トイヒ宋ノ代ニ戯曲トイヒ金ニハ院本雜劇ト云アリケリ元南北（南トハ宋ヲ云北トハ遼金ヲ申スナリ）ヲ併テ天下ヲ一統シ玉ヒシ後此戯サカリニ成シ程ニ其世ノ大儒名士ナド聞エシ人モカノ金ノ院本雜劇ニヨリテ新ニ作出セル曲少ナカラズサレバ元人ノ古ニ超スグレシコトハ只此事ニシクハナシトテ元曲ト名付テ今モ世ニ傳ル所猶多シ

一說ニ隋ニハ康衢戯トイヒ唐ニハ梨園樂トイヒ宋ニハ華林戯トイヒ元ニハ昇平樂ト云シ也カク世々ニ其名ハ改リヌレド其實ハ皆俳優ノコトニテアル也只世遠ク人亡テ古ノ曲ハ傳ラズ元ノ代ノ末金ノ時ヲ去ルコト猶近ケレド金人ノ作レル西廂記ナド云雜劇ハ心得ヌコト多キヨシ其代ノ人ハ申セシ也傳奇ト申スハ古ニアリシ奇事ヲ詞曲ニ作リナシテ歌ヒ舞フコト也我國ノ猿樂ノウタヒ物モカノ元曲ニ倣シモノニテ侍ル也委キコトハ下ニ見エタリ今モ元曲選元人百首ナド云物我國ニモ傳リ侍ル

カク隋唐ヨリ此カタカヽル戯ノ日々ニ盛ニナリシコトモ所謂上ニ好ム者アレバ下必ズ甚キ者アルガ故ニゾアリケル（孟子）唐ノ玄宗後唐ノ莊宗南唐ノ後主宋ノ徽宗金ノ章宗ナド聞エ玉ヒシ君ハミヅカラ音律ヲ善シロシメサレテカヽルコトヲ好セ玉フコトモ深マシマシケレバコレラノ代々ニハ高名ノ伶官モ多ク聞エ侍リ元朝ト申スハ其君北ノ狄ヨリ起リ玉ヒテ中國ヲ併セ玉ヒシカバ其代ニハ殊ニ淺間敷事ドモ多カリシ程ニ世ノ大儒名士ナド呼ビシ人ダニ戯曲ヲ撰デ自ラ才ニモ伐リ良家ノ子弟ナドイハルヽ人俳優ノ中ニ立交リテ其戯ヲナス風俗ニハ成タリカク世ノ樣代々ニ汙リヌレド萬乘ノ君自ラカヽルコトヲナシ玉ヒシハ只後唐ノ莊宗ヲノミ申シ傳ヘ侍リ五代史ノ伶官傳ヲ見

ルニ莊宗幼ク坐セシヨリ俳優ヲ好ミ玉ヒ又音ヲ知リヨク曲ヲ製シ玉ヒシカバ今モ其風俗汾晋ノ間ニ殘テ其人ヨク其聲ヲ歌ヒ侍リ御製トイヘル曲ハ皆其製ラセ玉フ所也其優名ヲバ季天下トゾ名乘玉ヒケル初晋王ト申セシ御時ヨリ終ニ天下ノ君ト成セ玉ヒシニ至ルマデ常ニ自ラ俳優ト雜リ戯レ玉ヒ通鑑ニハ自ラ粉墨ヲ傅テ優人ト共ニ戯テ劉夫人ヲ悅バシメ玉ヒシトアリ太子ヲモ人ノ爲ニ舞シメテ纒頭ヲ求メシメ玉ヒキ魏王繼岌ヲシテ張承業ガ爲ニ舞シメテ内庫錢ヲ求メサセ玉ヒシコトアリカヽリシ程ニ伶人日々ニ事ヲ用ヒテ終ニ亡ルニ至リ玉ヒヌ初メ楊婆兒ト云シ者俳優ヲ以テ幸ヲ得テ衞州刺史トナル其名ヲ李存儒ト申サレシガ梁ノ爲ニ城襲ハレ生捕ラレケレバソコラノ國々皆梁ノ地トナリテ軍儲三ツガ一ツヲ失ヒ給ヒヌ又胡柳陂ト云處ノ戰ニ殊ニ嬖シ玉ヒシ周匝ト云シ伶人梁ノ爲ニ生捕ラレケリ其後梁亡シ日ニ御馬ノ前ニ參リケレバ悅バセ玉フコト限ナク多クノ金帛ヲ賜ハリシニ周匝ガ死ズシテ世ニ在シコトハ陳俊儲德源ナド申ス梁ノ伶官等ガ力ニヨレルナリ願クハ二州ヲ賜ヒテコレガ恩ニ報ヒバヤト申シケレバ郭崇韜ト申セシイミジキ宰相諫メ止メ參ラスルヲモ終ニ用ヒ玉ハデ彼等二人ノ者ヲ州ノ刺史トハ成サレケリ其後蜀滅シ時モカノ國ノ樂工嚴旭ガモトヨリ州ノ刺史タリシヲ召サレテ本ノマヽニ刺史ニ成レテケリ斯テ諸ノ伶人等宮掖ニ出入シテ縉紳學士大夫ナ云ヘルナルベシヲ侮リ弄ビ群臣憤リ惡ミシカド敢テ氣ヲ出スコトダニナク或ハ又ソレラニ付テ恩倖ヲ冀フ人モアリカレラニ善ト思ハル者ハ自ラ身ヲモ家ヲモ起シ惡シト思ハルヽ者ハ忽ニ罪ヲ蒙リシ程ニ四方ノ藩鎭貨賂交リ行レテ天下ノ事日々ニ亂レヌソレガ中ニ景進ト云シハ常ニ中ニ居テ事ヲ用ヒ其官銀青光祿大夫撿挍左散騎常侍兼御史大夫上柱國ニ至リ史彥瓊ハ武德使ト成リテ鄴都ヲ守リ魏博六州ノ政ヲ掌リ郭門高ハ從馬直指揮使トナリテ親軍ヲ掌ル斯テ莊宗天下ヲ知シ召レシコト纔ニ二年程ニテ亂レ其爲ニ失セ玉ヒ樂器ヲ斂テ焚マイラセ御葬ノコトヲナシ又帝ヲ殺シ參ラセシ從馬直指揮使郭從謙トキコエシハ卽郭門高ガ後ノ名ニテ侍ル也莊宗伶ヲ好ミ給ヒテ伶官ノ爲ニ弑セラレ給ヒ樂器ヲ斂メテ焚參ラセシニ至ル事君コレヲ以テ始メコレヲ以テ終ルト古ノ人ノ申セシコト思ヒ合セラレ侍リヌ誠ニ後王ノ御戒ト成サルベキ御事ナル由ヲ載セ侍ル已上五代史伶官傳漢ノ司馬遷ガ孔子ノ春秋ニ

繼テ史記ト云モノヲ作リシヨリ此カタ伶官ノ爲ニ傳ヲ立ラレシコトハ唯五代史ノ中後唐ノ紀ヲ以テ始トハ申シ傳ヘ侍ル也又優伶ヲ酷ダ好ミテ其人ヲ寵任シ玉ヒシコトモ莊宗御事ノミ世ニハ聞エ侍レド夫ヨリ先ノ世北齊ノ後主ノ御時歌舞ノ人濫ニ富ミ貴カリシ者萬人ニ及ベリ其中曹明達トイヒシヲ王ニ封ジ安馬駒トイヒシヲ開府ト成サレシコソ斯ル事ノ始ニヤアルベケレ其後唐ノ高祖天下ヲ知シ召サレシ始（武德七年ノ宴）安叱奴ト云舞胡ヲ散騎侍郎トナサレシニ禮部尚書李綱諫メ參セテ古ハ樂工士ト齒スル事無リキ今天下新ニ定リ功臣モ未ダ賞ヲ行ハセ玉フコト周ネカラズ賢士モ尙草萊ニ滯レリ然ルニ先舞胡ヲ擢テ五品ノ官トナサレシコト後世ニ規模トシ玉フ所ニ非ズト申シケルニ吾スデニ是ヲ授ク追ベカラズト答ヘサセ玉ヒシゾ創業ノ君ノ御過トハ申シ傳ヘ侍リヌ又カノ莊宗ト時ヲ同クシ玉ヒシ蜀ノ王衍モ其樂工嚴旭ヲ州ノ刺史トハナサレキ夫ヨリ後元ノ武宗ノ位ニ卽セ玉ヒシ初（大德十一年ノコトナリ）伶官沙的ト云者ヲ平章政事（宰相ノ職ニヤ）ト成サレシコトモ侍ル侍郎刺史ナドハ猶サルコトニテ王ニ封ジ開府トナシ平章政事ニ成サレシハ尤寵任ノ甚キ御事ナルニ爭カ莊宗ノ御事ノミ世ニハ聞エ侍ルラン又樂工伶官ヲ寵シ玉ヒシ代々ニ其代ニアタリテ其禍ナカリシハ唯唐ノ高祖元ノ武宗ノ二代ノミニヤ坐スベキ夫モ玄宗ノ聲色ニ溺レ玉ヒ國ヲ失ヒ玉ヒシハカノ高祖ノ謀ヲ貽シ玉フコトヨカラヌ御アヤマリニヨレリトモ申シ武宗位ニ坐セシコト纔ニ四年ガ中山クヅレ水涌キ旱シ蝗アリテ人殘シ自ラモ年ヲ享サセ玉フコト短カリキ其餘ハ皆々國亡ビ玉ハヌモナシ獨莊宗ノミ身亡ビ玉ヒシニモ非ザリキ夫ニ唯莊宗ノ御事ヲノミ申シ傳ルハ此君ハタヾニ酷ク好マセ玉フノミニ非ズ自ラ其事ヲナシ玉ヒシカバ其御事ニ隨ヒ參スル伶官ハオノヅカラ貴クナリテ終ニソレラガ禍ニ罹リテ失セ玉ヒヌレバ獨此御事ヲノミ世ニハ申シ傳ヘシナルベシサレバ子貢ノイヒケン人ハ下流ニ居ルコトヲ惡ム天下ノ惡皆歸ストハカヽルコトニゾアルベキ

本朝俳優ノコトハ千早振神ノ代ニハ天津彦火瓊々杵尊ノ御子火闌降命其御弟彦火々出見尊ノ御爲ニ俳優トナリ玉ヒシコトアレバ其事人ノ代ヨリ猶先ニ始リケル

火闌降命犢鼻褌ヲ著テ赭ヲ掌ニ塗リ面ニ塗テ俳優ト成玉ヒシトモ又狗人ト成玉ヒシカバ其苗裔諸ノ隼人等今ニ吠ル狗ニ代リテ宮墻ヲ守ル也トモ見エ侍リ

人皇三十六代ノ朝廷皇極天皇四年ノ六月天智天皇其比ハ中大兄ト申セシガ蘇我臣入鹿ヲ討セ玉ヒシ時中臣鎌連（卽藤原鎌足也）ノ謀ニテ蘇我臣ガハキケル劔ヲ俳優ニ教テ解キケルニ入鹿笑テ其劔ヲ解シト云コトアリ是等皆日本書紀ノ中ニ見エシ處也コレヨリ後俳優ノ名見ル處ナシト雖モ四十二代文武天皇ノ大寶元年ニ行レシ令ヲ見ルニ雅樂寮ノ下ニ雜樂アリ又四十五代ノ聖武天皇天平三年七月雅樂寮ノ雜樂生ノ員ヲ定メラレシト云コト續日本紀ニ見エタリ五十三代淳和天皇天長十年ニ行レシ令義解ヲ按ズルニ雅曲正舞ノ外ヲ雜樂ト云由ヲ註セラレシカバ雜樂ト云物ハ則日本書紀ニ見エシ俳優ノコトトゾ覺ユル中納言大江匡房卿ノ撰レシ江家次第ヲ見ルニ（此人ハ後冷泉後三條白河堀河鳥羽ノ五代ニ仕ヘシ人ナリ）相撲拔書ノ下ニ左右各大曲一ツヲ舞フ自餘ハ時ニヨリテ左ハ必ズ散手還城散更ヲ舞フ大曲ニ至テハ多クハ蘇合ヲ奏ス右ハ必ズ歸德狛犬吉于ヲ舞フ大曲ニ至テハ多クハ新鳥蘇ヲ舞フ其狛犬散更ノ中ニ一足高足輪鼓獨樂咒師侏儒等ノ舞アリト云コトヲ載ラル其裏書ヲ見ルニ散更ハ猿樂也ト注シ置タリ

此事ハ某ガ尤秘藏ノ說ニテアル也

此裏書ニヨリテ見ル時ハ源氏物語ニ見エシサルカウハ散樂ニテ

乙女ノ卷ニサルカウガマシクトアリ○源氏物語ハ二十六代一條院ノ御時ニ作レル者也

宇治大納言物語江談抄古事談著聞集源平盛衰記等ニ見エシ猿樂ト云者也サラバ江家次第ニミエシ散更令幷ニ續日本紀ニ見エシ雜樂日本書紀ニ見エシ俳優ノ如キ其名ハ代々ニ替レルニ似タレド其實ハ皆同クシテ後ノ世ニ猿樂ト云者ニコソ有ケレ藤原明衡朝臣ノ撰レシ新猿樂記ト云物一卷アリトキコエシ此人ハ一條（六十六代）三條（六十七代）後一條（六十八代）後朱雀（六十九代）後冷泉（七十代）五代ノ帝ニ事ヘシ人ニテ有ケリサレバ其世ニ玩ビシ猿樂ト云者古ヨリ有シコトニ變レル處モアレバニヤ新猿樂トハシルサレケン又江談ニ猿樂ノ舞裝束ヲミガキシ始ハ後三條院（七十一代）延久二年十二月圓宗寺供養ノ時始ル由ヲ載ラレタリ（江談モ匡房卿ノ物語ヲシルサルモノナリ）サラバ又古ヨ

リ有シ猿樂明衡朝臣ノ見シ世ニ其事一變シテ其後匡房卿ノ弱カリシ時ニ其裝束等ノ物殊ニ奢靡ニハナリタルナリ其後幾程モナクテ猿樂又一變シテ田樂ト云モノ出來タリカノ匡房卿ノ田樂記ヲ按ズルニ（朝野群載ノ中ニ見ユ）堀河院七十三代永長元年ノ夏都ニテ大田樂ノコトアリキ其起ル所ヲ知ラズ閭里ヲ初テ公卿ノ間ニ及ブ高足一足腰鼓振鼓銅鈸子編木殖女養女ノ類日夜ニ絶ルコトナク

江家次第ヲ見ルニ散更ノ中ニモ高足一足等ノ舞アリ田樂ニモ又高足一足等ノ舞ノ名アレバ猿樂變ジテ田樂ト成リシトハ覺ユル也又今モアル田樂ト云モノ猿樂ニ大ニ似テ少シク異ナルモノ也○殖女養女ナド云コトイカナルコトニヤ思フニ殖女トハ田ヲ殖ル女ノ事ニテ養女トハ蠶ヲ養フ女ノコトニヤコレラノコト皆田家ノ常ノ業ニシテコレラノ業ヲ學ビ舞フ處ナレバ田樂トハ名付ケン知レル人ニ尋ヌベキ事ナリ

郁芳門院殊ニ叡感ヲ催シ玉ヒ始射ノ中此觀最盛也

郁芳門院ハ白河ノ皇女ニテ賀茂ノ齋院ニテ座ス皇后ナラネド門院ノ號ヲ參ラセシコトノ始也又此時ニ仙洞ト申シ參ラセシハ白河上皇ノ御事也

其後イク程ナクテ常カクレサセ玉ヒシニ田樂御覽ノ處ヨリ御葬送ノ車ヲ參ラセシサレバカノ田樂ノ盛ニ行ハレシコト偏ニ事妖ト云ツベキ由ヲシルサレタリ其後九十五代後醍醐院元弘ノ比ホヒ此事又盛ニ行ハレテ洛中ノ貴賤皆コレヲモテ遊ブ鎌倉ノ高時入道此事ヲ聞ツタヘテ新座田樂ヲヨビ下シテ日夜ニコレヲ弄ビ自ラモ此戯ヲナセシニ幾ホドナクシテ北條家滅ビ天下亂テ終ニ南北ニ分レヌ北朝九十七代光明院ノ御時貞和五年ノ比（元弘ヲ去ルコト纔ニ十八年ノ後ナリ）此事又盛ニ洛中ニ行ハレ將軍尊氏殊ニ好マセ玉ヒキ舍弟直義朝臣コレヲ諫メラレシカド用ヒ玉ハズ此年六月十一日祇園ノ執行行直ト云者四條ノ橋渡サン料ニ勸進ノ爲トテ新座本座ノ田樂ヲ合セ老若ヲ別チテ能クラベヲ催ス公家ニハ攝籙大臣武家ニハ將軍ヲ始トシテ貴賤僧俗四條河原ニ棧敷ヲ打テコレヲ見ル繽亂拍子ガ玉等ノ曲終リテ後新座ノ樂屋ヨリ猿樂ヲ出シタリケルヲ見ル人興ヲ催セシニ二百四十九間ノ棧敷忽ニ傾キ立テ盡ク地ニ倒レ疵ヲ蒙リ命ヲ隕セシ者數ヲ知ラズ（此事太平記ニ詳也此說ニヨル時ハ田樂ノ中ニ又猿樂ト云者有シ也）幾程ナクシテ尊氏直義兄弟ノ

間快カラズ北朝モ又ミダレ其後多ノ年ヲ經テ鹿苑院ノ公方義滿ノ御時南北一統ノ後猿樂ヤヽ世ニ聞エテ嘉吉元年六月二十四日義滿ノ御子普廣院ノ公方（義教御事）猿樂御覽アルベキニテ赤松左京大夫滿祐ガ爲ニ弑セラレ玉ヒキ其御子慈照院殿（即義政ノ御事東山殿ト申シキ）此事ヲ好マセ玉ヒシニ觀世音阿彌其子同又三郎是等ハ其事ノ堪能也シカバ公方ノ御覽大カタナラズ

此ゴロスデニ四座ノ猿樂有又多武峯樣ノ能ト云有テ鎧腹卷馬鎧ナド用ヒシト云コト有如何ナルコトニヤ有ケン詳ナラズ

カヽリシ後ハ猿樂ハ日々ニ盛ニ成テ田樂ハ自ラ弄ブ人モ聞エズ寛政五年三月北山ノ僧善成法印ト云シ者鞍馬寺再興スベキ勸進ノ爲ニ觀世ガ父子シテ三日ノ猿樂ヲ催ス公方モ御覽アルベキニテ糺河原御棧敷ヲ搆ラル細川右京大夫勝元畠山左衛門督政長斯波右兵衛義廉等ノ管領家其事ヲ經營ス御歸路ノ度每ニカノ管領ノ家ニ入ラセ玉ヒ猿樂等ヲ召テ纒頭ノコトアリキ是世ニ所謂勸進猿樂等ノ始也（纒頭トハ即素袍ヌキノ事ヲ云ナルベシ）此後僅ニケ年ヲ隔テ公方ノ御養君今出川殿（義政ノ御弟大納言義視卿大智院殿ト申セシ御事也）ト御父子ノ間不快ノコト出來テ天下終ニ亂ル世ニ所謂應仁ノ亂是也カヽリシ後ハ六十四州ガ中亂レ國郡モナク戰ハヌ月日モ無リシカバ治レル世ノ如クニ猿樂田樂ナド云コトノ遊興ヲ催スベキ暇モナクテ百餘年ノ程ヲ經シニ豐臣太閤天下ノコト知シ召サレシ後文祿元年ノ春ノ比ヨリ朝鮮ヲ伐ツベシトテ自モ筑紫ニ御陣ヲ召サル明レバ二年ノ正月山城國八幡ノ住人暮松新九郎ト申セシ猿樂御陣ニ參リ向ヒシニイザサラバ猿樂シテ兵トモガツカレヲ慰ントテ暮松ニ其事ヲ學ビ玉ヒ太閤自ラ舞玉ヒ參陣ノ兵ヲシテコレヲ見セシメラレ聽テ今春八郎觀世左近等ヲ召下サレ同ク四月九日彼等二人ニ猿樂サセテ御覽ゼラレ此年五月明日本和議ノコトアルベシトテ彼國人筑紫ノ御陣ニ參セシニ觀世今春ヲシテ猿樂奏セシメラル和議スデニ事調リヌトテ其秋大坂ニ歸ラセ玉ヒ九月十八日今春ニ猿樂サセ自モ舞玉ヒテ公家ノ人々ニ見セシメラレ同キ三年ノ春由己法橋トイヒシ者（播磨ノ國ノ人）仰セテ作ラシメ吉野花見高野參詣明智柴田北條ナドキコエシ新曲ヲ今春ニ仰セテ音ニ播サセミヅカラモ其曲ヲ學ビ玉ヒ三月十五日其曲ヲ自ラ奏シ玉ヒ政所ヲ始メマヒラセ寵愛ノ女房タチニ見セ玉ヒキ我

朝ニ戯出來リショリ此カタ身既ニ將相ノ位ニ昇玉ヒシ人カヽル伎ミヅカラナシ給ヒシコト終ニ其例ヲキカズ哀レ此殿ハ老グルヒシ玉フモノナリト內ニハサミシ申ス人モ有シカドカク世ノコトシロシメス御事ノミヅカラモナシ玉フ天下ノ大名等ニ課テ猿樂等ガ配當米ナド云コト沙汰シ玉ヒシカバ又イカニモシテ殿下ノ御感ニアヅカラバヤト思セシ大名御家人等ノ中ニハ此事學ビテ舞タハムルヽ人モ有シ程ニ猿樂ハ古ヨリ盛ニナリユキテ田樂ハ纔ニ南都ノ邊ニ殘リテ年ゴトニ一度春日神事ニ從フコトヽハナリタル也

今コヽニテモ諸社ノ神輿ノ渡リ玉フ御先ニ綾藺笠ニ金襴ノ衣袴着テ編木手ニシ腰鼓腰ニシテ渡ルハ實ノ田樂法師ニハアラズ只其粧ヲソナヘル者也

謹按ズルニ我國ノ俳優ハ神代ヨリ其名聞エ侍リ雅言ニハ是ヲ俳優トモ雜樂トモイヒ俗諺ニハコレヲ散更トモ猿樂トモイヒシナルベシ世ノ末ニ及ビテ猿樂一變シテ田樂トナリ二度變ジテ其科二ツニワカル近キ代ヨリ能ト言狂言ト云是也合セテ之ヲ云時ハ彼二ツノ科皆猿樂ノコトニテ侍ル也源平盛衰記ノ中ニ猿樂ト申ハヲカシキコトヲイヒツヾケテ人ヲ笑ハシ侍ルゾカシト云コトアリ宇治大納言物語ニミエシ職事家綱行綱兄弟內侍所御神樂ノ夜ニ猿樂仕リシコトヲ見ルニ其事スナハチ源平盛衰記ニ見エシ如ク也其時ニ臨テオカシキコトヲ云ツヾケテ人ヲ笑ハシ侍リシコト也日本書紀ノ中ニ見エシ俳優モ亦是等ノ類ニテ犢鼻褌着テアカキ赭ヲ掌面ニヌリテ俳優ト成トモ見ヌ入鹿ノ臣笑テ劒ヲ解シト有ハ皆是ヲカシキ形ヲモシヲカシキコトモイヒテ人ヲ笑ハセシ也

異朝ノ昔俳優ト云者多クハカクテ有ケル今モ猿樂ノ時ニ狂言トテヲカシキコトヲ言テ人ヲ笑ハシ侍ルコトハ猶其コトノ餘風ニテアル也

室町殿ノ比ニ狂言ト云シ者ハ其樣ハ古ヨリ有シ狂言ヲナセシニハ非ズ其時ニ臨テ珍カニヲカシキコトヲ作リ出セシ也髮結フコトヲ嫌ヒシ狂言ハ其比ノ鎌倉殿ノ御事ニテ人ノ譽ルコトヲ悅テ物打クルル狂言ハ其比ノ公方ノ御事也詞ヲサカシマニシテ云コトハ其比ノ東國ノ俗ニテアリシヲ其習ハシノ都ニウツリテコキ人モモテ興ジ玉ヒシコト也其比ニハカク其君ヲ正シ參スベキコトヲ狂言ニ取ナシテ諫參ラセシ也末ノ世ニハ有ガタキコト也某ガ師

ニテ候ヒシ者申シキ

又江家次第ヲ見ルニ散更ノ中一足高足輪鼓獨樂咒師侏儒等ノ舞アリト見エシハ昔ヨリ受傳ヘシ所ノ舞曲アリシ也令并ニ續日本紀等ニ見エシ雜樂トイヘル者コレラノ事ニゾ有ベキ其事一度變ジテ田樂ト云者出來タリシヨリ猿樂田樂相並テ世ニ行ハレシニ鎌倉ノ代ノ末室町殿御代ノ始ニ當リテ傳奇雜劇ナド云コト元朝ニ盛ニ行ハレキ其代ニハ我國ノ人モ彼國ニ行キ彼國ノ人モ我國ニ來リ彼是ユキカヨヒシカバ彼國ニスルナル雜劇ヲ我國ノ人見モシ又ハ聞モ傳ヘシヲ田樂猿樂ヲ業トセシ輩ヤガテ彼國ノ傳奇ナド云コトニ傚テ古ニ有シコトノ悅ベク恐ベク哀ベク驚ベク喜ベキコトナドヲ歌ヒモノ、詞ニ作リナシテ歌ヒ舞ヒケルナリ是古ノ雜樂散更ノ餘風ニテ其事ハ又一變シテ元朝ノ傳奇雜劇ノ體ニ倣ヒシ者也室町殿ノ御代ノ盛リナル比ヒ其代ノ公方ノ好マセ玉ヒシニヨリテオノヅカラ猿樂ノ中ニ其藝ニ堪能ナル者共モ多ク集リ世ノ人モコレヲモテ興ジケル程ニ田樂ハ日々ニ衰ヘテカタバカリ世ニハ殘レル也

異朝ノ傳奇ト云コトハ古ハ有シ奇事ヲ興アル樣ニ詞ニ作リナシテ歌ヒ舞ヒシ者也其戲ヲナス者ニ末淨旦ナド云アルハコ、ゾ猿樂ニシテ脇狂言ナド云者ニテカシコニテハ場ニ上ル始ニ必ズ詩ヲ唱フココニテハ舞臺ニ出ル始ニ次第ナド云コトヲウタフ彼ノ賓白ト云者ハコ、ニテ詞ト云モノニ似テカシコニテ詞曲ト云者ハコ、ニテハサシクセナド云コトニ似タリスベテ一部ノ猿樂彼ノ雜劇ニ異ナラズソレガ中ニ彼國ノ俳優ハ皆頭髮髭鬚等ヲ剃除キシ者共也コレハ男トナリ女トナリ僧トナルニ便アランガ爲也我國ノ田樂法師ト云者モ又此ノ如クナレバ彼國ノ雜劇ニ倣ヒシハ先田樂ニ始レルナルベシ田樂ノ歌ヒ物共皆々猿樂ウタヒ物ノ如クニ古ニ有シコトヲ詞ニ述シ事彼國ノ傳奇ノ如シ

古キ人ノ申セシハ今ノ猿樂ト云モノハ義滿將軍ノ比ホヒニ始レル由ヲ申ス也其代ニ伊賀國ノ住人服部ノ某ト云者アリ公方家ニ仕ヘ參ラセンコトヲ深ク願ヒ思ヒシカバ年比初瀨ノ觀音ニ參リテ其事ヲ祈申シケリアル時公方ニ近ク召仕ハレシ若侍聊ノ宿願有テ初瀨ニ參籠セシニカノ伊賀國ノ人モ參リ合ケリ夜更ル儘イタク疲テウチモ寢ベク覺エシカ

バ己ガ國ニテ弄ブ猿樂ノ歌ヒ物ヲ歌ツ彼ノ公方ニ召仕ハル、若侍是ヲ聞ニ目覺ル心地シケレバ近ク居ヨリテ彼ノ歌ヒ物聞居テサルニテモイヅクノ人ノ如何ナル宿願ノ有テコ、ニハ籠玉フラント問シニ初ニハイハザリシカド後ニハ己ガ年比ノ本意ヲ語リツゲタリ斯テ夜モ明ケレバ彼ノ若侍ハ都ニ歸リ上リ伊賀ノ人ハ古里ニ歸ル彼ノ若侍公方ニ參リシニ如何ニヤ物詣ノ折カラ珍シキコトヤ有ケント仰ラレシカバ道スガラノコトヨリ始テ彼寺ノコトナド有シコトドモ申セシツイデニ彼ノ伊賀ノ人ノコトヲモ御物語セシニ公方彼ガ年比ノ志ノ程哀レニヤ聞シ召サレケン彼ノ者ヲバ召仕ルベキ也トク召セト有シカバ聽テ參リ上ル其代ニ始テ出來シ童坊ト云者ニナシテ其名ヲ觀阿彌ト召サレ夫ガ子ヲ世阿彌ト召サレテカノ猿樂ヲウタヒ舞セテモテ興ジサセ玉ヒシニソレガ子ノ舅ニ竹田禪竹ト云者アリ猿樂ノコトニ堪能ナルノミナラズ頗和漢ノ才學アリシ者也シカバ多クノ新曲ヲ作ル東山ノ公方ノ御時ニ當テ世阿彌ガ子ヲバ音阿彌ト申シ其子ヲバ又三郎ト云是等ガ父子其藝ニモ勝レ且ハ公方ノ御覺モ殊ニヨカリシ音阿彌ガ代ニ當テゾ其家ヲ觀世トハ號シテケル斯云コトハ初メカレガ父祖年比ノ本意ノ如ク公方ニ召仕ハレシコト偏ニカノ觀音ノ大悲力ニヨレル所也トノ義ナルベシカクテ觀世ガ庶流保生ト名ノリ竹田ガ家ハ今春ト名ノリテ夫ガ別レテ金剛トハ申ス也是四座ノ猿樂ノ始ナルベシ（東山殿ノ比ニハ既ニ四座ノ猿樂アリキ）初禪竹ガ作リシ新曲ノ外其代ニ聞エシ歌人ノ作レル所モ少ナカラズ高砂兼平ナド云曲ハ東福寺ノ書記正徹ガ作レル所ニテ山姥江口ナド云ヘルハ紫野ニオハセシ一休和尚ノ作ラレシ所也ナド申ス也其中ニ江口ト云歌ヒ物ヲ作ラレシコトハ音阿彌ガ子又三郎ガ年比相ナレシ傾城ノ其名ハ江口ト云シガ死シケルヲ深ク歎キテ和尚ヲ賴ミ參リ佛事追善シテ其跡ヲ訪シニイヤ〳〵イカナル讀經佛事センヨリモ彼ガ舞歌音樂ニヒカレバ佛果菩提ヲ得ルコトモコソ有ベケレトテ聽テ此曲ヲ作リ出セシ也和尚自ラ書玉ヒシ草案ハ今モ世ニ傳レバ斯云傳ル所客シカラズトヤ申スベシ又一説ニカノ伊賀ノ人年タケルマデ子ナキコトヲ歎キテ初瀬ノ觀音ニ祈リ申シテ設ケシ子ヲ童ノ時ニ初瀬

ノ寺ニ參ラセシガ後ニ公方ニ召仕ハレシトモ申ス也

翰林葫蘆集ト云物ニハ（此書ハ百四代後土御門院ノ明應ノ比宣竹ト云僧ノ作レルナリ）三十四代ノ帝推古天皇ノ御時豐聰太子（聖德ノ御事）ノ作リ玉ヒシ所也ナド記シ置シカド其事國史ノ中ニモ見エズ匡房卿ノ記セシ所其外宇治大納言物語源平盛衰記等ノ中ニ見エシ所ト異ニシテ其徵トスベキ所ナケレバ信ジガタシ其餘古キ抄物等ニ見エシ所アレド尤取ニ足ラズ

葫蘆集ニ見エシハ大優者ノ伎ト申スハ推古天皇ノ御時ニ攝政シ玉ヒシ豐聰太子六十六番ノ曲ヲ作リテ秦河勝ニ命ジ玉ヒ橘ノ內裏ノ紫宸殿ノ前ニテ其伎ヲナサシメ玉ヒシカバ四海波穩ニ萬民安ク樂シム太子神樂ノ神ノ字ヲ折テ是ヲ申樂ト名ケラル六十二代村上天皇ノ御時ニ太子ノ記シ玉ヒシ申樂延年記ヲ見玉ヒ群臣ニ告ゲテノタマヒケル上ハ諸神ヲ敬ヒ下ハ萬民ヲヤスンズルゴト申樂ニ過タルハナシトテ河勝ガ後秦ノ氏安ニ仰セテ重テ此伎ヲ興シ玉フ又氏安ガ妹ノ夫ニ紀ノ何某ト云者アリ彼等二人日々ニ大內ノ殿前ニテコレヲ舞ヒシニ六十六番ハ事シゲクシテ一日ニ終ガタシトテ三十三番ニハナサレタリ所謂稻積翁代積翁父ノ亟是ナリ氏安ガ二十九世ノ後ヲ今春ト云コレ大和國圓滿井ノ座ヲ云太子自ラ作リ玉ヒシ鬼面ハ此座ニアリ大和國ニ四座アリ所謂外山結崎坂戶圓滿井コレヲ春日ノ神事ニ從フ江州ニ三座アリ所謂山階下坂比叡コレラ日吉ノ神事ニ從フ河內ニ新座アリ丹波ニ本座アリ攝津國法成寺アリ此三座ハ加茂住吉ノ神事ニ從フ伊勢國ニ和屋勝田主同アリ此三座ハ太神宮ノ神事ニ從ヘリト記シヌ按ズルニ此說ハ猿樂ト云文字ヲ嫌ヒ且今春ガ座ヲ其餘ニスグレシ由ヲシルセル也又太夫ト云字ヲ大優トハ改メシルシタリ古キ物ニ申樂トシルセシ物モ見エズ又太夫ト云稱ハ近キ世ノ習ハシニ何事ニモアレ其長タル者ヲ稱スル言葉也伊勢ノ御師ヲモ太夫ト云舞ノ猿樂共ニ太夫ノ稱アル類也古キ庭訓抄ト云物ニ四座ノ猿樂ト云コトノ始ハイヅレノ御代ニカ有ケン宮女自ラ娠ムコト有テ四ノ猿ヲ生リソレヲ後ニ面白ク舞フ今ノ四座ノ者ノ祖其猿ドモノ子也サレバ猿樂トハ名付シ由見エシ

品革威考

源平盛衰記（十五）に源三位入道は薄墨ぞめの長絹の直垂に品革威の鎧著て今日を限りとや思ひけんわざと冑を著ざりけり品革おどしとは藍革に紋のしだをぞ付たりけると有り然ども其革の制いまだ見る事を得ずせうぶ革のごとくなる物歟又品革おどしとはいかなる故ありて名付し按ずるにしだといふは草の名也（俗には勝草などいふか）革に菖蒲おしたるを菖蒲革といへばしだつけたらんにはしだ革とやいはん然らば此ものにておどしたるをばしだ革おどしといふべきをあやまりて品革威といひ來りしにや

鎧直垂考

鎧直垂の事詳ならず東帶條目に南朝正平七年の文いろいろの織物をも用ひしやと軍器考にしるせり又或說に鎧（事イ）直垂といふも尋常の物にかはらずして勸請するの義なりとぞ又鎧直垂必しも菊閉ある物ならずもし菊閉あらんにはかくしるすにも及ぶまじやと軍器考にみえたり其上鎧の下に必ずひたゝれを著するならんには定れる制も有べし飛驒守惟久が畫きし後三年の軍の繪に鎧の下多くは水干を著せし體に見えたり又人車記には冑を持とみえたり平家物語（第四）にも狂文の狩衣のきくとぢ大きらかにしたるに重代のきせなが火威の鎧著てとしるせり其外所々に水干の上に鎧著て働きし事みえたれば鎧の下に著すべきもの直垂のみに限るべからず只その便よからんために何にても著せしなるべし按ずるに昔は鎧の下に水干狩衣などを著せしが肩明きて物にかゝりたよりあしきこと多き故に其所を縫合せ又水干の襟はもと袍のごとくなるものを打こみて著するは無益の事なれば單（大帷ひとへとは裝束の名也）その外常の吳服の襟のごとくになして是をひたゝれと名付しなるべし古へ衾の事をひたゝれといひしによりて見ればすべて身にひた〳〵とつくものをばひたゝれといひし歟此物鎧の下のみに限りて著せしかば直垂とだにいへばまがふべくもなかりし程に平家物語等にもたゞ錦の直垂など書し也この直垂には狩衣水干のごとく袖括ありて其模樣をば目だつ樣になせしとみえたりされば錦織物の類を用ひ又は練貫に鶴縫ふたる直垂など見えし也然るに末の世に至りて武士の常の服となりし也或は平絹或は精好にてこれを作りその制は有來りしものにかはらねどたゞその模樣を目立ざるやうにしたる成べし猶其頃は袖くゝりありしをその後に至りて袖括をも略し露といふものになせし歟（春日緣起繪卷物に直垂の袖括なきを多く繪かきし中に袖括ある所所にかきたり然れば初の袖括ありしを後に略して露を存せしものとみえたり）これより後はもとの直垂は模樣等目に立て鎧の下に限て著し常には用ゆべからざる物なる故に鎧といふ字を加へて鎧直垂と名付しものにや今も馬乘袴といふもの其制は平生著用のはかまにたがふ所あらず只

緞子繻珍の類花やかなるになせし物にて平日には著用すべからざる故に馬乘袴とわかち呼びしをもつて思ひ見るべしまた鎧の下の直垂より常の直垂は出來しものにて昔の物は鎧の下のみに著せしによりて鎧といふ字を加へて鎧直垂とよびし事たとへば古の鎧には袖とのみいひしを後に小袖といふもの出來しかば昔よりの袖をば大袖と名付たるがごとくならん歟

木瓜考

木瓜

倭名鈔源順ノ作曰木瓜爾雅注云木瓜一名楙和名本草木瓜毛介其實如㆓小瓜㆒也

多識編林道春撰シトイフ木瓜和名毛介又云保計異名楙

貝原篤信筑前ノ人曰木瓜カラボケ一名楙

稲若水加賀ノ人曰木瓜今云カラボケ

舜水魯璵大明ノ人本朝ニ來レリ水戸西山公ノ師ナリ曰木瓜マルメロ有㆓大小㆒不㆑同・有㆓長而頭尖者㆒

右本朝諸家之説ヲアハセ考ル所源順朝臣ノ説ハ卽異朝ノ木瓜ノ注ニ同ジケレバ本朝ノ昔ハ眞木瓜ヲ以テモケト云シナルベシサレド今ノ俗樝子トイフ物ヲヨビテボケトイフ若シ此ナラハシ昔ヨリノ事ナランニハ順朝臣ノ云シ所モ樝子ヲモテモケト云シモ知ラズ又今俗ニ木瓜ヲ以テカラボケト云事ハ世人樝子ヲモテボケトイヘバソレニワカツベキ爲ニカクハイヘルナルベシモケト云ハ卽木瓜ノ二字呉音ヲ以テヨビシ也其後俗ニボケト云シモ木ノ字ヲ漢音ニ呼ビカヘテ瓜ノ字ヲバアリシマヽニ呉音ヲ用ヒシモノ也ソレヲマタ醫家ニモツクワト云ハ二字又呉漢ノ音ヲ交ヘヨビシ也モツクワノ倭名ヲモケトモボケトモ云トノミコヽロ得ンハヨカラジ

サレド今カラボケト云物ハ異朝ニイハユル木瓜ノ大ナル物ニテアル也本草衍義ニ大木瓜ト云ハコレナルベシ近キ頃ホヒ大明ノ人朱魯璵ニ木瓜ノ事ヲ問シニ今俗ニマルメロト云モノヲ指テ木瓜也トハ云キマルメロト云ハ蕃語ニテアル也此物昔ヨリ我國ニアリシヲ蕃人ノ見テオノガクニニテヨブトコロヲモテカク呼シニヤ又蕃人ノ持來リシヨリ此國ニハアルモノニヤイマダ詳ナラズ此人格物ノ君子ニテ大明ノ代ノ末亂ヲ避ケテ蕃國ニ遁レ其後我朝ニ來リテトヾマレリサレバ獨異朝ノ事ニ委シキノミニアラズ蕃國ノ事ヲモヨク知レル人也其説アヤマルベカラズ且ハ今異朝ノ諸書ヲ考ルニマルメロト云モノハ彼國ノ書ニ見エシ木瓜ノ注ニ違フ所ナシサラバ我朝ノ諸儒マルメロノ外ニカラボケト云モノヲモテ眞木瓜トノミ思ヘルハ誤レルナルベシ今試ニ異朝ノ書ニ見エシ木瓜ノ注ヲコヽニ記シテ委シク辨ズ

圖經本草曰木瓜木狀如㆑柰マルメロノ木ノ狀世ニイフリンゴニ同ジリンゴトイフモノハ柰ノ一類ニテアルナリ春末開㆑花深紅色マルメロノ花ヒトヘニシテ梨子ノゴトクニテ少シ紅ナル事海棠ニマサレリ

其實大者如㆑瓜マルメロノ實ノ形少クホソ長ク頭ニ鼻アリテ瓜ノ如シ是イハユル大木瓜也

小者如レ拳（マルメロノ實ニ小キナルハニギリコブシホドアルナリ是イハユル小木瓜ナリ）

上黄似レ著レ粉（マルメロノ實ノ色黄ニシテ粉チフキシ如クニアルモノナリ）

實成則皺紙花粘レ於レ上（マルメロノ實始テ成リシ時ニ瓜ノ如クニ花ツキノ所ニ花ノ蕚トイフモノ五瓣并ニ花ノ藥其マヘニ粘テアル者ナリ）

夜露日烘漸變ニ於紅花色ー（マルメロノ實後ニハ此ゴトシ）

看ニ蔕間ー別有ニ重蔕如レ乳者ー（マルメロノ蔕ツキノ所此ゴトシ圖ニ見エタリ其蔕此ゴトクナラヌヲ樝子ト云ナリ）

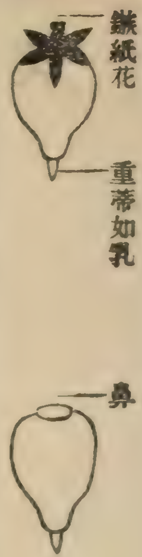
大觀本艸曰始實成則皺ニ紙花ー薄（オ・フ）ニ其上ー夜露日暴（皺縦字誤皺以ニ長縄ー繋ニ牛馬ー也薄廣被也異本皺作レ皺誤寫耳薄ニ其上ー三字一本作レ粘レ於レ上亦通○木瓜ノ實ノイマダ熟セザルトキ紙ニテ花形チ作リ實チオホヒカブセク、リ置ケバ實熟スルトキ其花形ノアト紅色ニ變ジ生ノゴトシト云）

雷公炮炙論曰眞木瓜皮薄色亦黄香而甘酸不レ澁（マルメロノ形色氣味カクノゴトシ）其向裏子頭尖一面方（マルメロノ核ノ形スナハチ此ゴトシ）

本草綱目曰木瓜葉光而厚（マルメロノ葉リンゴノゴトクニテ厚キモノ也）

其實如ニ小瓜ー而有レ鼻（鼻トハ瓜ノ花オチノ所ヲイフ也マルメロノ實大キニナリテコノゴトシサレバ瓜ト云名ハアルナリ）

マルメロノ圖



右諸説ノゴトクナレバ木瓜ハ舜水ノ云シ如クマルメロタル事疑ベカラズ此物ノ類コトニ多シサレバ異朝ニモマルメロヲバスベテ木瓜トモ眞木瓜トモ云ヒ其大ナルモノヲ大木瓜ト云是木瓜ノ極テ大ナルニテ其性尤藥トスルニ堪ヘタリト見エタリ（コノ大木瓜則今イフカラボケナリ）其外ニ榠樝子蔓子出子ナドイフモノミナ〳〵木瓜ノ類ニテアルナリ

樝子

倭名鈔ニ此モノヲ不レ載

多識編曰和名今按古保計異名木桃和圓子

貝原篤信曰樝子ボケ

稻若水曰木桃ボケ

右諸説ヲ併セ考ルニ樝子ハ今俗ニボケト云物ナリ篤信若水等ノ説モ今ノ俗ノ呼トコロニ從ヘルナリ多識編ニコボケト云シハ本草綱目ノ説ニ樝子ハ木瓜ヨリ小シキナルモノ也ト云ニヨリテ名付シナルベシ某按ズルニ今世ニボケト云モノ異朝ノ諸書ニ見エシ樝子ノ注ニヨク叶ヘリ篤信若水等ノ説據アリト云ベシ又一種草間ニ紅白花ヲ開テ其實木瓜ノ小キナル酸ク澁レルモノヲ俗ニシドメトモボケトモ又ハ草ボケトモ

云也此物ハ則樝子木ノ年毎ニ草トトモニ刈レテ其木長ズル事叶ハデ草間ニテ花ヲヒラキ實ヲ結ブモノナリトモイフ但ボケト云モノ其實多カラズシドメトイフモノハ實ヲ結ブ事尤多シサレバモト是一類ニシテ別種ナルニヤアル人シドメト云モノハ欄地錦トイフモノ也トイヘドモ心得ラレズ常熟縣志ノ中草木ノ條ニ欄地錦ハ花絳色(アカイロ)朶如二海棠一四時皆有レ花獨盛ニ於春ニト見エタリ其木ノ朶ノ海棠ノゴトクトアランニハ木高キモノ也今ノシドメノ如クニハアラズ且ハ又花ノ事ノミ見エテ實ヲ結ブトイフ事ハ見エズ思フニシドメト云物ハ雷公炮炙論ニ見エシ木瓜ノ類ニ蔓子土伏子ナド云モノト覺エ侍リ今試ニ樝子蔓子等ノ事異朝ノ書ニ見エシ所ヲコヽニ注ス

本草綱目曰樝子乃木瓜之酸澁者（今世ニボケト云モノ木ノ高サ六七尺其花紅白ニシテ其實木瓜ニ似テ小ク其味酸クシブルモノ也）炮炙論木瓜條曰有二蔓子一絕小味絕濇不レ堪レ用者有二土伏子一味絕苦濇不レ堪（按ズルニ蔓子トイヘバ其性ヨク蔓リテ子チ結ブ物ニヤ土伏子トイヘバ土ニ伏シテ子チ結ブ物ニヤ何レモ木瓜ノ類ニシテ其實甚小シキニシテソノ味酸ク濇(クイ)リテ用ニ堪ザル物也サラバ今イフシドメトイフ物ニヨク叶ヒ侍ル歟）

榠樝

倭名鈔ニ此物ヲ不レ載

多識編曰和名今按加羅保計異名木李

　木梨　蠻樝　瘙樝

貝原篤信曰榠樝クハリン

稻若水曰榠樝クハリン

右諸説ヲ併セ考ルニ多識編ニカラボケト呼事然ルベカラズ（篤信若水トモニモツクハチカラボケト云シハサモアルベシ）篤信若水トモニクハリント云シハ今ノ俗ニ呼トコロノマヽニ呼シモノ也サレド今世ニクハリントイフモノ二種アリ一種ハ諸ノ本草ニ見エシ榠樝ノゴトクニシテ其實梨子ノ如ク其味酸ク澁レリサレバ木梨ナド云異名モ有シナルベシ（某昔此種ヲ求得テ植テ置シニ其木葉共ニリンゴノゴトシ程ナク火ニ燒失ヒシカバ花實ヲマサシクハ見ズ）一種ハ又木ダチ葉ノ形共ニ梨ノ如クニシテ其木皮ニ白點アリテ劈テ見ルニ木理少ク赤ク其花海棠ニ似テ其艶ナル事ハ猶甚シ其實リンゴニ似テ大サ拳ノ如シ漿多ク味甘ク香シキ事ミナ〳〵梨子ヨリモマサレリコレラ二種ノ中篤信若水イヅレヲ以テ榠樝トハサシ名付ケン榠樝一ツニ木梨トイヒ又其氣味酸平也ト本草綱目ニ見エタレバ篤信若水ガ指シ名付シ所梨子ノ如クニシテソノ味酸キモノヲ云ヘルナルベシ今一種リンゴニ

似タル物ハ開寶本草綱目通雅等ニ見エシ菴羅果ニテゾアルベキ今試ニ異朝ノ書ニ見エシ榠樝菴羅果ノ注ヲ下ニ注ス

圖經本艸曰榠樝但此木瓜大而黄色辨レ之惟在ニ蔕間ニ別有ニ重蔕如レ乳者ニ爲ニ木瓜ニ（木瓜ノ下ニ詳ニ見ユ）無レ此則榠樝也（重蔕アルヲ木瓜トシ重蔕ナキヲ榠樝ト云是ヲ見テ二ツノ物ヲワキマフベシト也サレバ此物ハ木瓜ノ類ナル事ハ一定ナリ）

開寶本草曰菴羅果若ニ林檎ニ而極大（一種クハリント云モノハリンゴノゴトシ）

大明一統志曰菴羅果俗名香蓋（香トイヘバ香アル也一種クハリント云物ハ殊ニ香シ）乃果中極品（一種クハリント云物其味殊ニ美ナルモノナリ）種出ニ西域ニ又柰類也（一種クハリント云モノ始メ蕃人ノ我國ニ傳ヘシニヤ若サアランニハ西域ヨリ出シ種ナルベシ）

榲桲

倭名鈔ニ此物ヲ載セズ

多識編曰和名或云利牟幾牟一云今南蠻云末留米留是也

貝原篤信曰榲桲マルメル（ロイ）

稲若水曰榲桲マルメラ（ロイ）

右諸説悉ニアヤマレルニ似タリ多識編ニハリンキントモ又ハマルメルトモシルセリ一定ノ説ニアラズ是イマダ此物ヲ詳ニセザル證也篤信若水トモニマルメル（ロイ）ト云シモ心得ラレズ（リンキンハ沙果ト云モノ也下ニ詳ニ見ユマルメル（ロイ）ハ木瓜ノ蕃名ナリ）又今世ニリンキント云モノヲ指テ榲桲トナスコレ多識編ノ訛ヲ傳ヘタル也但此アヤマリハ異朝ニモ似タル事侍リ李珣ガ南海藥錄閩中謂ニ林檎ニ爲ニ榲桲ニトイヒシヲ本草綱目ニハ述征記ヲ引テ林檎佳美榲桲微大而狀醜有レ毛トアレバ林檎榲桲蓋相似而二物ナル由ヲ辨ジタリサレド榲桲ハ林檎ヨリ大ニシテ毛アルモノ也今世ニ云リンキントイフモノハリンゴヨリ猶少シキニシテシカモ毛モナシ榲桲ノリンキンニアラザル事尤明ラカニ侍ルニヤ異朝モ榲桲ト云モノハ北土ニハアレド江南ニハ甚稀ナリト見エシサレバ李時珍モマタ榲桲ヲバ見タリシヤウニ本草綱目ニハシルセリサレバ我國ニモ此物ハアラザルモ知ルベカラズ

右諸家ノ説ヲ併セ考テ自ノ淺陋ナルヲ省ミズミダリニコレラノ物ヲ辨ジ決センニハ

マルメロト云モノハ木瓜（モククハ）也

カラボケト云モノハ（ニイ）大木瓜（タイモククハ）也

朱舜水ノ説ニモ木瓜ハ大小アリテ同ジカラヌヨシ見エタリ本草衍義ニモ木瓜ノ條ニ西洛ノ大木瓜ト云モノヲ出シテ此モノハ藥ニ入ルニ甚功有リトシルセリ

今我國ニテモ此モノヲ以テ藥トシテ甚功アリト云ヘリカラボケト云モノ木瓜ノ大ナル物ニテ則蕃名ハマルメロト云モノ、大ナル也

ボケト云モノハ　樝子也

シドメ（クサボケ）ト云モノハ　蔓子土伏子ノ類也

クハリント云モノハ　榠樝也

又一種クハリント云テリンゴノ類ニテ菴羅果トイフモノニ似タリ

此外ニ山樝子ト云モノアリ是ハ三四十年前ニ生ジ候ヨリ始テ我國ニモ出來リ此物樝子ニ對シテ山樝子トイヘバ是モ又木瓜ノ類也只榲桲トイフモノハ我國ニアリヤナシヤイマダサダカナラズ

林檎（リンキン）

倭名鈔曰林檎本草云林檎與レ柰相似而小者也

多識編曰和名利牟古宇俗云利牟古異名來禽文林郞

果

貝原篤信曰林檎　リンゴ

稻若水曰林檎　リンゴ

舜水朱魯璵曰花紅　リンゴ

右本朝諸家ノ說ヲ考ルニ我朝ノ昔リウゴウト云シモノ今ハリンゴト云ナリ（リウゴウ卽林檎二字ノ音ヲ以テ和名トハセル也コノ例尤秘訣ニテアルナリ芭蕉ヲバセヲト云ヒ紫苑ヲシヲニト云ト同ジ例也リンゴト云モスナハチ林檎二字ノ音ヲモツテヨビシ也）古ニリウゴウトイヒ今ハリンゴト云モノ共ニ林檎二字ノ音ナレバリウゴウリンゴリンキン其名異ナルニ似タレドモ同ジ一物ニテ（木瓜ヲモケトモボケトモモツクヮトモイヘドモ元是一物ナルガ如シ）（クカウイ）舜水ノ所謂花紅モ亦林檎ノ一名ナレバミナ是異ナル物ニハアラズ然ルニ近世リンゴノ外ニ俗ニリンキント云モノ出來リシヨリ夫ヲワカチシルスベキ爲ニ多識編ニヨリテ榲桲ノ字ヲ以テリンキントナス尤アヤマレリトゾ云ベキ是リンキント云物ノ事ヲ詳ニセザルニヨリテナルベシリンキンノ事次ニ（下ニ注ス）詳ニシルシヌ

リンキン

倭名鈔ニ此モノヲ載セズ

多識編ニ此物ヲ出サズ榲桲ノ下ニ或ハ利牟幾牟トシルセリ

貝原篤信曰柰　リキン　㮈同ジ

稻若水曰リンキンハ海棠ノ實卽海棠梨也

舜水朱魯璵曰沙果リンキン

右諸說ヲ考テ倭名鈔ニリンキンノ事見エザルハ順朝臣ノ頃ホヒニハ此物只リウゴウノ類ニ混ジテ別チ名

付ルニ及バザリシナルベシ多識編ニ此物ヲ出サヾルハ本草綱目ニ此モノヲ載ザルガ故ナルベシ篤信ガ柰ヲ指シテリキント云シ事似タル事ハ似タリ（リンキンリキン相同ジ委シクハ下ニ見ユ）若水ガ海棠ノ實ヲリンキント云シハアヤマレルナルベシ（海棠ノ實トハリンキント同ジカラザル事ハ辨ズルニ及バズ）舜水朱氏ハ異朝ノ人ニテ我國ニ來リ我國ノ物ヲ見テリンゴリンキンノ二種ヲワカチイヒシ所ナレバ疑フベカラズ但舜水ノ所謂花紅沙果イヅレモ諸ノ本草ニハミエズ世ノ人事ニ李時珍ガ本草綱目ヲノミ據トシテカヽルモノヽ名狀ヲ辨フル事ナルニ花紅沙果ノ名其中ニ見エザレバ疑フ所モアリナンサレバ花紅沙果ノ名異朝ノ書ニ出シ其一ツ二ツヲ出シテ其疑ヲ定ムベシ余庭壁ガ事物異名ト云モノニ花紅ハ林檎トモ來禽トモ云由見エタリ（舜水ノ云シ如ク花紅即我朝ノリンゴタル事疑フベカラズ）又方以智ガ通雅トイフ物ニ日給ハ沙果也味甘シト見エタリサレバ沙果ハ日給ノ一名タリ日給ト云モノ王羲之ガ帖ニ見エタレド其形ハサダカナラズシカハアレド其帖ハ來禽日給トナラベ云ヒタレバ林檎ノ類也トハ見エシ李時珍ガ本草綱目ニ柰ノ條ノ下ワヅカニ日給ノ事ヲシルシテ王羲之ガ云シ所ハ柰ヲ指シテ日給トスルニ似タリトシルセリサラバ時珍モ林檎ノ類トハ思ヘルナリ（通雅ニリンゴハ柰ノ一種ナリトモイヘリ）サレド時珍モイマダ日給ヲヨク知ラザルニ似タリ（篤信ノ柰ナリンキント注セシハ時珍ガ此説ニヨレルニヤ據ナシトモ云ベカラズサレド時珍ガ説モ日給ハナホ柰也トハイハズ又食性本草ニ柰ニ三種アリ大ニシテ長キモノヲ柰トス圓ナル物ヲ林檎トスコレラハ夏熟スル也小キナル物ヲ梣トス秋熟ス一名ヲ楸子ト云由見エタレバ柰ハリンゴヨリ大クシテ長キモノ也今世ニリンキント云モノリンゴヨリハ猶小シキニシテマドカナレバ柰ヲ指テリンキント云モオボツカナシタヾ舜水ノ説ノゴトクニ沙果一ニ日給ト云モノチリンキント心得ンニハシカザルベシ）シカジ只舜水ノワカチ云シマヽニ花紅一名林檎ト云モノヲリンゴトシ沙果一名日給ト云モノヲリンキント心得ンニハ、（又按ズルニ今世ニリンキント云モノリンゴニ似テ小シク秋ニ至テ熟スル物ナレバ食性本草ニ見エシ梣一名楸子ト云モノニ似タリサレドモ舜水ノ説ニ沙果又梣ト云由モ見エザレバ覺束ナシヨク知レル人ニ尋ヌベキモノナリ）

右諸説ヲ併セ考テミダリニ是ヲ辨ジ決メムニハ

リンゴ　花紅　一ツニ林檎ト云モノ也　此物本朝異國トモニ果ノ佳美ナルモノトセリ

リンキン　沙果　一ニ日給ト云モノ也　此モノ異朝ニハ昔ヨリ果ノ佳美ナル物トセシカド我國ニハ昔ヨリ林檎ノ中ニ混ジテ別チイハザリシヲ近キ世ニ及テワカチ名付シ者也

此外ニ

柰　和名ヲバカラナシト云某未ダ其物ヲ見ズ此物ニモ素柰白柰丹柰朱柰緑柰紫柰冬柰抔云テ其類多シ

文林果　コレハ林檎ノ異名ノヨシ本草綱目潜確類書等ニ見エタレド山東通志ニ文林果ハ林檎ノ如シトシルシタレバ林檎ニハアラザル也

頻婆　本草綱目ニ柰ノ一名ヲ頻婆ト云ヨシ見エタレド通雅ニハ其説アヤマレリ柰ニハアラズ別ニカク云果アルヨシヲ詳ニ辨ジタリ

菴羅果　通雅ニ林檎ヨリモ大キナル由見エタレバ林檎ノゴトクニシテ大キナルモノ也（クハリンノ下ニ詳ニセリ）

甘棠　通雅ニ棠ハ即海紅榲桲ノ類トミエタリ海紅ハ即海棠也コレラ又同ジ類ノ物ナルベシ

右リンゴリンキンノ外ニ又同ジ類ノ物イクラモアリ今世ニアルリンゴノ中ニ赤キアリ紫ナルアリ白キアリ青キアリ大キナルアリ小シキナルアリソレラ皆リンゴナルニヤ又其中ニ柰文林果頻婆甘棠ノ類ノ物アレドモ我國ノ人悉ニワキマフルニ及バズ皆々リンゴトハ云ニヤ其事昔リンキンヲモリウゴウトノミ云シ如クナルモ知ル可カラズスベテ草木禽魚ノ類書ニシルセシ所ノミヲ見レバ彼是ミナ似タル様ニ覺ユレドマサシクソノモノヲ見レバ違フ所アル事世ノ常也マシテヤ天下ノ書ヲ悉ク見ル事アタハズシテ僅ニ一部二部ノ書ヲ見テ其物ヲワキマヘ定メン事尤カタキ事ナリサレバコヽニシルセシ所ミヅカラ其説ヲ得タリトスルニハ非ズ先異朝ノ人ノ口ヅカラ云ヒ名付シ所ヲヨリドコロトシテ諸家ノ説ノ違フ處アルヲ辨ズルノミナリ更ニ私ノ意見ヲ立ルニハアラズ

本佐錄考

本佐錄の事につきて御垂問一々奉レ答候毎件盡すの懼なきにあらず候得ども思召寄候て蒙レ仰候御事によりて其嫌を不レ顧候唯老者の耄言御採用に不レ足候事慚愧不レ少候

一　安房守阿波守の事御不審の條此等の類古此類多き事に候何れにも佐州御息と申事候はんは政重の御事たるは一定に候（慶長十七年の頃までは政重の御事を阿波守と申候をその後安房守と書改められし歟酒井雅樂頭忠世の男忠行阿波守に任ぜられし事武家補任にその年月みえず候得ども慶長十八九年の間事とみえ大坂陣の時には阿波守と申候き政重の御事も元和二年の日記にはたしかに安房守としるし候との所見候されど御家系に載せられず候事とみえ候へばいかにとも申がたく候但し佐州御筆記に阿波守殿へと候を以てまづ所ぞんこゝに注し候）

又此書をと上州へ傳へられ候を上州より一岳へ傳られ一岳また正之へ傳へられ候說の事上州と申も房州と申も彼御息に候へばわかち傳へられたる事とみえ候正之の傳へられし本に定て上野介殿へとこそゑるされ候はん某本は戸田の傳へられし處を寫候へば他說の事は承も傳へず候事

一　本多家葵の紋の事當時本多の諸家に被申候事どもも各同じからず候或は當家御紋は本多の家よりまいらせし處とも申し或は本多の紋は當家の初に賜はりし處とも申し又それらの說によりて新田家紋元より葵を用ひ候など申事も出來候歟すべて此等の事のごときはゑるさゞらんは記したらむよりまさるべき事にやと存候枝葉の事によりて其根本をあはせて世の疑をいたすべきがゆへに候事

一　佐州鷹工より起られし由の事前書に辨じ候き然るに御筆記の如きは其本處を奇にせんがためにこれらの說も候にやと成され候其所存のごときは當時の事情を盡され候御詞にやと存られ昔の事の如きも伊尹の割烹傳說の板築百里奚の五羊の皮の類戰國策士みづから賣るべきの說に出候事に候殊に佐州の御事は當時の人々其遇を妬の意に書たる事に候もしやむる事を得られざらむには伊傅百里奚の事に比せられ候はん可レ然歟の事

一　上州（上野介正純）の事の時特に羽州（出羽守正勝）に命せられ所領の地賜はられ候由の事記し下され候によりてはじ

めて承り候ぬ大久保相州の事候時其孫にて後に加賀守と申せしいまだ幼稚に候に萬石の地を賜ひし御事候へば佐州の家を絶れず候はん誠に可レ然候事にやいかさまにも父子同き配所と申事どもかたく例存じ合せず候へば聞召候處の如き其實を得られ候はんかわづか百年のこと文獻の徵なき毎事如レ此に候事

一　此書の作近世好事の贋本にも出しものゝ如く世うたがはん事を慮られ候樣の御事記され候都てこれらの事申入にくき事に候得ども管仲が智なる道をふみわけ候事は老馬に及び候はぬ事の如く學の道は學に老たるにあらず候てはわかちがたき處あるべく候先師に候者の王道の最中と申候もさだめて見る處もこそあるべく候某其人にあらず候得ども佐州におはしまさずしては其思の至るべからず候よの常學者抔申沙汰し候ものゝいふ事あたふまじき事條候と存じなし候きよりて天下第一の書にもやとも申候き世の口（常カ）の論の如きいかに候とも其見る人に任せられ候はば御過慮に及ぶまじく候歟の事

一　佐州唐人に逢はれ候て治道の要を得られし由の事に付てしるされ候所の事ども其所存の如きは此等の事强て辨せられず候にしくべからず候歟小人の學をこそ隱二其學一而疾二其師一抔申事も候得ども學記佐州いかでかそれらの事の候べき君子不二以レ言擧一レ人不二以レ人廢一レ言とは孔子の言にも見え候佐州其名を擧られずるは必其謂あるべき御事に候はじめ神祖駿河に御座の比ほひ或人の諫書を呈せし事みな取にたらぬ事どもに候ひしを特に悅び給ひ仰下されし御事ども佐州の上州に語られしを上州其人の名を問はれ候ひしに佐州氣色損じて其人の名を聞て何の用にかせらるべきと申されし此事を以て父子の事を論じ定めしよしの事當時の人しるし候ものを見及候きこれによりて見候時は佐州其名をあらはされず候はんを今に至て其人を指し定められ候はんは御家法にはあるべからず候歟鳩巢申され候由の事にて某が申せし事とてしるされ候事みえ候はさだめて鳩巢申され候所のまゝにこそは候べけれども少したがふ處も候やうに見え候へば事長く候得どもこゝにしるしてまいらせ候先師にて候もの申候ひしは此程池田勘兵衞の家に秘せしものなりといひて借されしもの佐州撰定の處なり其書に唐人に聞しといふ事のあるを池田は

惺窩の事にこそといひしかど其書說の如きはよしとも思はぬよしこゝかしこに見えたりさらば池田のいひしごとくにはあるべからずもし其世を論ぜんに朝鮮の季文長が如き道の蘊奥究めしなどいふ事は聞えざれども天の命などいひ沙汰せんほどの事有まじきにもあらずと申されしかば某龍の水をとる事一滴に過ぎざれどもよく天下に雨ふらするは其神なるなり思レ之思レ之不レ已神必通レ之非二神之通一思レ之精也とも承り候へば管子に佐州年頃の思ひ精きがゆゑに堯舜授受の一言を聞て自ら得る處ありて其功を天下に致されしは龍の水における如くもやあらむと申せしを誠に然るにこそと先師は申候き此事の問對は池田の申されし處によりし處にて佐州の學の淵源など申事を論じ定めし事には候はず毫釐によりて千里の差謬ある事に候ゆへにそのことをこゝにゑるしたるにて候又內藤飛州の事をもゑるされ候此人の事時世の人申沙汰し候事いまだ承も不レ及候に某存る方にて年來親て申むつび候によりて言の序に復菴丈にもをし候ひしを復菴の申す事も候て聞召候と存じゑるされ候處のごとき某が本意には異なる樣にみえ候得ば是また序に申述候昔は孔子の吾之於レ人誰毀誰譽如レ有レ譽者其有レ所レ試矣と御申に候き某飛州の事を論じ候は少く試る處もあるゆゑに候子貢の士たるの事を問申され候に孔子の使二於四方一不レ辱二君命一可レ謂レ士矣と答へられ亦使二四方一不レ能二專對一多亦奚以爲とも御申候き勝國の世朝鮮宗社の存亡人民の死生呼吸の間に係り候に及び日本大明の和を議すべき使を撰ばれ飛州草を提て專對の任にあたり候き元明以來東西の行李僧人を用ひられし事其例も年久しく玄蘇宗逸のごときは當時異邦にも其名稱せし人々に候へども此時の事のごときは古の遣唐使後の進貢の使の如く文事にのみ備ふべきにあらず其要尤武事にある事に候ゆゑに此人を以て其撰に充られ候ひしに大明の諸書に見えし處も堂々たる大朝の君臣此人の言によりて大議を決せられ又其意氣を論ぜし處の如きも我國命を辱めしとは見えずもし孔子の言によりて其人を論じ候はゞ天下のなどと申べく候やらむ本朝開國以來武人の身としてかゝる事の如き聞召及ばれてもや候はん某が如きは承も及ばず候大元の世に此國に使し候趙良弼林世忠王積翁が如きをも此間

においては其人としも申沙汰し候はねども元史にみえ候處の如きよの常ならず候ひし歟凡古今の人物を論じ候はんには我身をして其世にあたらしめて其事を處置し候はねば事の難易人の才否も思ひえられ候はぬ事のよし承候へば其談容易なるべからざる事に候かくて秀吉薨ぜられいく程もなく東西の兵起りしに及び此人肥後國宇土城に候ひしは朝鮮の役よりして行長に親かりしゆへと見え候關原の事終り行長既に亡び後には京畿の間に來り寓して候ひしが此時又西學の徒沙汰の事によりて遂に我國を去て遠く海外に赴き其終る處をしらず候又飛州の事によりて西學の事に及ばれ候此事のごとき當時は天下の大禁にて憚る處なきにあらず候へどもその大略を述ずしては事の始末詳ならず候ゆゑに事又長く候へどもあらあらこゝに申にて候某所存のごときは本邦古今の大弊天學に過たる事あるべからず候歟初永祿中此教我西鄙に來ていくばくもなく其法六十州にみち行れ其化のすみやかなる水の卑きに火の燥けるに就くよりもなを甚く候ひしは其ゆへ一朝一夕にあらずして由り來る處すでに久しく候故と見え候後漢より此かた佛氏の教盛に行はれし事本朝のごときは佛氏とともにみなどもに候き然るに彼教のごときなる未曾有の事西胡の俗による處にて且は亦凡事新敷を好む事は天下の情相同く候へば此を轉じて彼に易る其力を勞せずして其效尤すみやかなりし事とみえたり物甚盛なるは必衰へ物またふたつながら盛ならざることはりに候故にや關白筑紫の陣の比より彼蕃人を特ににくみおもはれし時に乘じて世の人多くかの教の邪なる事を申沙汰し候は佛氏の徒その奉ずる法を以てみづから正となして兩家相爭ふ事始れるとみえ候へどももし我道より是を論じ候はんには佛氏のいはゆる正のごときも吾いはゆる正には有べからず然るに阿蘭陀の人互市の事によりて申旨の事によりて彼法を禁遏せらるべき議定候へども當時に在て彼學に據べきの教又餘法なきがゆゑに邪を以て邪を禦がれて候はなを古に夷を以て夷を攻し策のごとくとも申べき歟これよりして後六十州のうち生歯より以上一民として佛氏の徒ならずといふものなかるべき世の大法とはなり來り候此時に當てたとひ吾儒に志ある者をも當時天下の大禁を犯して佛を奉ぜざる事かなふべか

らずたとひ亦陽には天下の大禁を守り陰には吾好む處に從ひ候とも純にして王雜にして覇とこそ申候へ内外表裏一つに出る事能はずしてはいかにしてかは純正の君子にして聖の至誠を庶幾し候べきもしくは亦夫々の中其行ふ處其得る處古の君子に耻るなき人人どもわづかに其身を善くする迄の事にこそ候べけれ其道を家に國に天下に推して行ふ事の叶ひ候べきにあらずたゞ其一事をあげて其餘を例し候はんにも凡死は人の終りにして古者聖人特につゝしみ給ひし處にて其禮制のごときも布て方策にみえ候歟當時の如きは天下の人を擧て選佛場の外には其棺を蓋ふべき地なきに至り候ひぬ慶長より寛永に及て彼法の事に座して死せしものども二十五萬餘人とは申傳へ候へどもこれはかれをさして邪とし候へどもかれは又これを見て邪となしそのいはゆる正にして斃れて候半にはこれら慘毒の痛ましかりし事は姑く置て論ずべからず候

一　天下の大憂大慮の如きは古者聖人の大經大法長く我邦に行はるゝ事を得べからざる是に始りける此人の大弊彼學の行はれしに過たるはあるべからずと存じなしたるにて候飛州海を踏て去り候事のごとき百年の今に據て論じ候半には當時の事情盡し得ざる事有べきに候ふるき人の申せし處を承覺候事も候彼禁の行はれし始に當りて天下の名士多く其禍に罹る事こと〴〵く皆其性の愚なるが至りて其法を信ずるに過たりといふのみにあらず士たらん者の死に臨むが爲に其常を變じ候はんを深くみづから愧たる類も少からずと聞え候もしそれらの事に寄りて飛州父母の邦を去し事も候はゞ其道とする處の異同其去る所の遠近こそは同じからずとも佐州の初三河國を去られ候御志に異なりとも申べからずや申も恐ある事に候へども某ひそかに憲廟の御事吾道に於て功ありし御事と存候は此御代よりして儒といふ道も世の中にその一筋のある事とはほとりの國のいやしきが類も心得候事にはなり來り候夫よりさきの代々にはしかるべき人々も儒の事申沙汰し候ものをば天學の徒となされ候某が物覺えて候初まではしかぞ候きこれらの說の行はれ候も佛氏の徒そのすでに勝の勢に乘じて吾儒をあはせて驅り除くべきの計に出候歟されど吾儒の如き彼敎に似るべきにもあらじと年來疑しき

事の第一に候ひしを前代の時某持命を奉り西蕃の人に過て其事を鞫問し候によりて疑を決し候き大抵その教の如きたとへば晋宋の際佛氏老莊の緒言を竊て其論を尊くし候事の如く天學もまた詩書の要語を借て其説をかざる事共に候もしゑからば飛州のごときも吾黨の人にも候ひしを時人さして天學の徒と名づけ候にや今はた詳にすべからず候況や當代によりて論じ候はんにその西に黨せし罪まぬかるべき所も候はず般之義士周之頑民など申事ども復庵にもらし申遣し聞召されてや候はんと存候へば其要をこゝに附し申す事に候事

一　秀吉より佐州所領の事被申候事の由聞召及ばれ候事むなしかるまじきにや某承及候事の如きは初東西和平の後當家の老石川國を去て關白に附きしを十萬石の地賜ひ筑紫の陣に水野ともに軍奉行命ぜられ候き其後また南明院殿御輿入候事によりて榊原して迎られ候に從五位下の式部少輔になされ候當家の人人官途の事關白執奏の初例に候亦其後北條亡び關東の地を以て當家の御領に替られし時に井伊本多榊原の所領の事關白申され候事は世にも申傳へし歟此等の前當家の人々所領の事彼沙汰に出候事は承も不レ及候官途のごときも鳥居彦右衞門本多作左衞門のごときは對問の事申され候にも辭して關白に見えられず候事によりて一階をも歴られず候は時の人も稱し其家にも申傳候所に候亦名古耶にて太閤を謀られ候事由これも承及ばぬ事に候得ども此事に於ては必なきの事と存候當時六十州の軍賦を定められし法地の遠近に寄て多寡ありし事によりて關東の兵抔にその數も多からず候き當家僅に萬にみつべき勢をもつて數百里の海を阻て十餘萬の兵にむかひもしそれらの謀も候はんは犬羊の肉を以て餓虎の蹊に投ずるにこそは候はんずらん其必無の勢智者をまたずして明かなるべく候またその時の事ども承覺候處は安藝の宮島にて上杉の前陣と當家の前陣とあらそふ事起りて事すでに難儀に及びしを藤田能登守がはからひにて事平ぎ候此事藤田が筆記にみえ候聞召及ばれても候はん歟また名古耶の陣にして加賀の雜人當家の雜人と井の水を諍事によりて事また難儀に及びしに仙臺の一勢のみ當家を援くべきに候がやうやくに事平ぎしよし政實が日記に見え候此事その御家の事に候

へば定てゑろしめさるべき事に候當家當時の勢のほど思召はからふべきに候歟もし其似たるを論じ候はば小牧の陣に我兵西軍を長湫に敗候時秀吉龍泉寺に來り陣せられし夜討し候はんとすゝめ申人々候を用ひられず後に彼人々に其時の如き必勝べき處を見てや候と問はれしに龍泉寺より樂田に奔られ候はん中路の程にはいかでか秀吉擊で候べきと答申せしをさればこそ危き謀に候ひしと仰有しと申事候もしこれらの時に佐州申さるゝ旨も候ひし歟亦我兵の勝に乘じ候時にだに彼人々の謀に ゑたがはれず候に名古耶の陣に秀吉を謀られ候由の事必無の事ます〳〵明かなるべく候凡は世の人佐州の事につきて或はほめ或は毀り候事ども古にいはゆる小人の腹を以て君子の心を量り候事のごとくわづかに一二の小節目をあげて論ずべきにあらず候匹夫匹婦の諒のごときはその人にもこそよりて論ずべく候歟の事

一　房州政重正純の弟の事內々の仰として老中の職に召されて十萬石の食祿を賜るべき奉書下り候を城州に示され候て棼棄られ候由聞召及ばれ候處むなしかるべからず候歟是等の事を承知し歎てもなを餘りある事どもに候そのことを推し論じ候はゞ坂崎の家人に下し候奉書の事のごとくにして夫を棼棄られ候は上州彼奉書に連署なかりし事のごとく美事一家に集り候事どもに候初此奉書を下せし人々其必來られまじき事をゑりて下されし本謀とは見えて候實に房州して佐州の後たらしめられんには安房守すみやかに參らせらるべきよし其事の子細を藩府に仰下されんに房州何の詞ありてか辭し申さるべく候處歟石川當家を去て關白に隨ひ其家を西渡し候は近き間の事に候その覆轍を履む如き昏愚にして貪冒ならむ奴隷にだも用るにたらず候いかにしてかは天下の補佐とはなさるべく候はん歟是某が必來らるまじきを知て下せし奉書とは申處に候ゑかるをこれらの事候は上には佐州保傅の恩を忘れられず候由を示し下には房州少しく其心を慰められ候はゞ北顧の憂長く絕べき事を謀られしとは見え候得ども愈巧にして愈拙しとは是等のことを申べく候歟三代の古の如きは申に及ばす候漢唐の盛なりし文帝太宗の君の如きも太申成康の治に及ばれず候は是を補佐し候大臣伊傅周召のごとくなる人を得ざりしゆゑと見え候天下喪亂の世に生て目

に觸れ耳に觸れ習ひて性となり候處權詐知數の外出る事なきがいたす處にもや候はん日又一日その叔世に至り候をや夫また何をか論じ候べき房州其書を焚棄られ世をしてそれらの事ゑるものもなからしめられ候事は實に其父の子にして天下の忠臣とは存じなされ候多かる息の中此流のみ長く久しく候は天の報亦むなしからずとも申べき歟ゑかるを其死を怖てその命に應ぜられず候など申論も候よしをゑるし下され候世に又それらの如き事を思ひもよられ詞にも出され候人もこそは候はんずらめ某が頑に愚かなる心には疑はしき事に存なされ候事

以上

享保癸卯仲秋　　筑後守源君美

新野問答序

王道陵夷、而典章不明、後進之士、茫乎不知所由也、雖然尚有殘編遺帙、有老成聞人、蓋文獻足以徵乎、白石先生々膺奎運之隆、身掌天祿之載、强記博識、最明邦典、所著之書殆至千卷、皆有益於制度考證者也、烏乎人生軀幹形狀不甚相遠、而能致如此博大家數、何其才之殊絶也、將精力之所致邪、抑亦天往之異也、世所傳新野問答者、先生所質疑於野宮定基卿也、阪原君出此書視予曰、是我先子所手寫而藏者子蓋序、予受讀卒業曰、有是哉君好古之志篤也、其手寫有益之書、亦不一而足也、今阪原君技兼文武、學通和漢、立朝辨事無所澁滯、豈非因先君好家法所致乎、予因推尋其意、以書諸端、

天保辛丑七月　　服　元　斐識

新野問答（一本黄白問答）

君美問云

郡鄕

倭名類聚鈔第五に五畿七道の國名之下に郡名を注して第六七八九に國郡之下多くの地名を注し候此地名は鄕名のよし申候如何候歟

庄園

庄園と申物古には聞ず候が中頃より相聞えて庄官庄司など申ものも出頭を置などゝ申事相聞え候東鑑の中こゝかしこ庄名も多く相見え候當時も諸國に庄と申物散在候得ども郡にも非ず鄕にもあらず其地界も今はたしかならず候歟庄と申もの出來り候事の起り如何候歟

御厨

當時も諸國に御厨（ミクリ）と申地名散在候これは神戸など申せしものゝ如く伊勢賀茂等の神領たりし樣に俗には

申習はし候事如何候歟

杜

俗に同森之字と義を同じくして用ひ候か萬葉集に杜神社等之字をもりと訓し見えし日本書紀等之中社之字誤り寫して杜の字となりたるも見え候か然れば杜の字をもりと訓し候事は社の字の謬りを承候樣に相見え候如何可レ有レ之か又社の字にもりと可レ訓義も候歟

勳位

令式等に見えし事は勿論に候其後は此事聞えず當時も神社などには猶其聞え候是は古の時に贈りし名殘りに候か此事の停りし時代承度候

介

上野上總常陸等之介をばかみと可レ稱など申候が其通に而可レ然候歟

別當　勾當

此二つは如何わかち可ニ心得一候歟

開闔　寄人

昔之記錄所又は文殿などにも此職名有レ之候如何樣之事を知る事に候歟

公文　院掌

昔は院司廳官之下に是等之人ありしと見え候いかやう之事に隨候か御厩別當預案主舍人居飼御隨身所別當內舍人番長近衞これらの次第ゐさいに被レ仰レ下度候

史部　使部　門部　伴部

帳內　資人　健兒　火長　雜色

放免　如木　人長　陪從

相撲最手　助手　掖手

此等之名目いかゞ候か又いかなる者に候か

右におなじ

念人

射禮等の時有レ之ものか名目如何又いかなる人に候か

押領使

青侍　青女房

いかなることをしるものに候歟

文官（モングワン）　武官（タクワン）

此等いかなる儀に而靑之字を加稱し候歟名目如何可レ有レ之候歟

麻呂　萬呂

古人の名に麻呂といふ詞を加へ稱したる多く見え候又麻呂の字を結びて一字ともなし又丸之字を用ひたるも見え申候令などに見え候所は某など申字の如くに用ひられて其名のさしいふべきなきときには萬呂宿禰宿禰萬呂などゝもしるされ候又人之名に稱するのみにもあらず物の名にも加稱する事見え候が此事は如何なる儀と心得申すべき

字（アザナ）

學に入て字つくなど申事候さらば學生のみに限り候事か讀などに見え候所は藤群源桂橘宮高文など見え候へば其氏とあはせ稱したる樣に候學生にのみ字つくべき事正き物に所見候か如何

姓氏

氏とは藤原氏清原氏のごとき姓とは朝臣眞人等のごときと見え候しからば姓之字はかばねなどゝ訓候て氏骨尸など見え候其儀相同じく候か古のとき姓を賜はり候には氏によりて其種姓の尊卑を分たるべきための樣に見え候如何候歟

定基卿答云

郡鄉

如ㇾ被ㇾ示候倭名鈔第五國名之下に注候は郡名に候第六已下郡名之所に注候は鄉名に候大和國添上郡之下に載二春日一候伊勢物語にかすがの里にしるよししてかりにいにけりと候かすがの里を假名にてあらはし候事にて鄉名之由分明に候歟

庄園

此は今之知行所と申候其起りに候庄は俗字にて候莊之字に候韻會に田舍也と候正字通に唐崔群知二貢舉一歸妻乘ㇾ間勸令ㇾ置ㇾ田群曰我有二莊三十所一と候園は說文に所二以樹ㇾ果也と候今按莊園と申候は其始は人之讓に候も有り私に買得候地も候以二不封地賜田一稱二莊園一候さるにより新立莊園などゝ申候末之世に及候事に候得共先王之法に非ず私事に候故地は廣く候へ共俗に下屋敷出屋敷などゝ申意にて候莊園と申候は此起りを申事永々しく候へども先あら／＼申候我邦上古の王制は李唐均田租庸調之法に候以ㇾ戶計ㇾ口以ㇾ口班ㇾ田に候戶とは一軒之家にて候一軒に主人

以下子弟奴婢十八候得者一戸十口と立申候一口に付田を給り候男は田二段女は減二三分之一一と候一段之田に稲五十束を得申候束を舂て米五升を得るの由令義解に見え申候されば尊は太政大臣卑は奴婢にてもおしなべて口分田を請申候其口分之租一段に二束二把を出申候男は九十五束餘を一人之養に給り候此によりて上下貧富齊く候其中に尊は用途ひろく候故位田職田封戸等之品を立候而不足なき樣に設おかれ候事大法に候其位田職田等も封戸とても皆一段二束二把之租を出し申候位田とは五位已上位階によりて田を給り候令に一位八十町と候此類に候職田は大納言以上職重く候故別に又田を賜り候令に職分田太政大臣四十町と候由に候封戸と申候は太政大臣封戸千五百戸と申類に候前に申候戸千五百軒を給り候封は封地封國之字の意に候如レ此候上は節儉にて用足り下は豊饒にしてしかも暴富驕奢なく國治り俗もうるはしく候此外に賜田と申物候是は令曰凡別勅賜レ人田者名二賜田一と候此田は后妃湯沐之料功臣報勞田に候令所レ謂大功世々不レ絶上功傳二三世一などゝ候皆々其限にて彼位職の田も其身薨卒候得者返還申候て公に收候口分も死歿候て公に收候又あと〳〵より出生出身に而班給り候仍而班田之法六年に一班と令に見え申候又輸地子田と申もの候然るに是は公私雜用之田の外は多く餘りたる田にて此を請候て耕作候て奉二其租一候此法は毎國品差不レ同候是延喜之定に候此田も六年に一度返進候箇樣に候得者六十餘州錐を立る程も無し主の田は無レ之候へども凡王制は殊の外上苦む政に候故自ら政ゆるまり班田之法も怠がちになり彼后妃湯沐之料を外家に讓り給はり功田は子孫寺に施入候惠美押勝大職冠田之功を以て山階寺維摩會之料に施入候事國史に見え候彼后妃沐浴之料も外家に授申候ては湯沐之料とは稱がたく功田も施入之後は寺にて功田とは申されず候ゆゑ私料と申事出來候されば官より給り候田にてなく候故彼邑屋敷と申樣の意にて是を莊園と名付申候此類後々に廣く成候て剩莊園を多く持候者富有に候へば近隣の莊園を買得候かれこれ兼幷せ候故富者はます〳〵富貧者はますます貧にして豪富恣に買得候而豪民國々に出來候末世之事に候得ども伊藤祐親うつみ河津之莊を持候もこれにて候一端之例に申候箇樣に候へば下民畜申候

故　後朱雀院寛徳年中に新立莊園停廢之　宣下候て被ㇾ奪㆓富民田㆒候　後三條院延久初政に被ㇾ置㆓記錄所㆒候も此停廢之事第一儀に候 其後代々之　聖主も政之第一は此事而已に候得ども跡々より止不ㇾ申候これを申候得者下官先祖之事をそしり申に似候得ども下官が先祖ばかりにも候はず毎人之事に候往昔執政大臣もとかく田地を貪り候故辭には被㆓停廢㆒之事を申候へ共忽に失損有事に候へば何にかにことづけて此莊園をはなち不ㇾ申のみならず新立を企申候延久より長承までは六十年許りに候に知足院關白山道莊等可㆓搆立㆒事法性寺關白被ㇾ談㆓宗忠公㆒事見㆓中右記㆒候是より甚きは後々之人主停廢之事被㆓　宣下㆒ながら御讓位之後者院之御領と被ㇾ稱候而定れる御封之外に田園を被ㇾ貯候 剩さへ崩御之後遺命を以て男女の親王に分ち給はり或は得寵女房 希ㇾ旨姦臣等に分ち下され候これを院之御處分と申候箇樣に候へば莊園常になりて爭論の出來る事も舊記に見え申候元久之頃京極黄門定家卿所領之江州吉田莊を三位局に被ㇾ掠度々及㆓訴訟㆒賜㆓院御敎書㆒候事見㆓明月記㆒候此の如き風俗になり候へば私領と申事彌盛んになり申候義家朝臣武衡家衡を撃三箇年の戰に被ㇾ得㆓勝利㆒候勢に乘りて東國の豪民を麾下にまねき被ㇾ定㆓御家人㆒候義朝平治の逆亂もこれよりひらきたると存候賴朝卿流人にて兵を被ㇾ動候も時政之類三浦一黨かの豪民御家人にてこれを助けなし候かされば寛德延久之政務莊園停廢之事誠に後代の弊をおもひはかる所遠く深く候ひけると恐ながら存候事に候此故に莊園は私領に而候へば郡にもあらず鄕にも非ず一向に買得候へば境堺之定めも無ㇾ之物に候或は又莊園の主人もなくなり子孫斷絶候へばつぶれ申候又は往昔は富て貯置候も貧になりおところへ申候へば人に賣與へ申候へば昔迹も定れる莊と申もの無ㇾ之候今諸國に莊と申候所は昔の名殘にて何となく在名になりたるものに候さて莊園は私領にて候へば其領内にては國法にもかゝはらず自由を働申候これを戒むるを名にかられて賴朝卿被ㇾ置㆓地頭㆒遂に六十餘州を手に入れられかの莊園の内の土毛土產皆其領主に受納候其奉行人を庄司庄官別當など申て私に召置候者に候此趣諸記雜書の旨を以て見候得ば僅に箇樣に見え申候事に候

御厨

庖厨之意に候御贄を奉る所に候　伊勢大神宮は我宗廟各別之御事に候故昔は六十餘州に一所づゝ　神宮御厨とて被ㇾ置候 賀茂も御厨を被ㇾ置しは所々に有ㇾ之候へ共神宮の如く六十餘國に置るゝ事は無ㇾ之候是宗廟社稷之差別たるべくと存候御厨も神領にては候へども神戸と申時は租稅之方に候御厨は御贄方に候不ㇾ限二神社一諸司厨など申事拾芥抄に所見候これも其司々之官人之酒食を設くる所に候

杜

杜字如ㇾ被ㇾ示候森の字之意に用申候萬葉集に杜字を森と用ひ候は左樣に讀來候但萬葉は上古之物に候故其訓斷絕候而延喜中知る人なく候か天曆に至て源順押て訓を加へ候爾來古點新點さまゞゝ候へども畢竟は先づ無理讀に候因ㇾ玆彼集は證據に成候事に候又うたがはしき事も候社字杜の訓に用ひ候は誤にて可ㇾ有ㇾ之候但古今集に

　ねきことをさのみきゝけんやしろこそ
　　はてはなけきのもりとなるらめ

社之字を杜と訓し候事もやと臆說ながら申試候是非如何候半大略社は木しげき所に候得者森とも申べきや韻會に周禮を引て二十五家爲ㇾ社各樹二其土所一ㇾ宜之木一など候へば社之字をもりと訓候はこれにてさも有べくやと存候杜字を森の字意に訓し候は字書之說無ㇾ所ㇾ據候萬一萬葉之社の字を誤て杜の字に古來用ひ候誤も知るべからず又別に子細も候歟

勳位

これは軍功を以て被ㇾ敘候位に候畢竟申せば武位にて候自二一位一至二初位一文位と申候上古以二軍功一得二此位一候右大臣吉備眞吉備　天平寶字八年誅二惠美押勝一賜二勳二等一此類に候神社に勳位候は祈ㇾ軍候賽之時勳位を奉らるゝにて候此勳位絕申候時代と申事は無ㇾ之候自二仁和一至二寛平　延喜延長一之間　太平日久候き承平に至て將門反逆の時藤原忠文賜二節鉞一候へども不ㇾ臨二其戰一自二中途一歸洛候て無二其賞一候天慶（依二御諱一用二古字一）純友陷二西府一候へども海賊之義に候得者小野好古も大功ながら勳位之沙汰迄には不ㇾ及と存候其後賴義義家朝臣等擊二貞任武衡一は其事被ㇾ出二勅命一たるにては候へども實は報二私讎一に候得者是も勳位までに及まじく候義戰ならでは勳位之事には及

まじく候故いつとなく絕申候と存候

上野　上總　常陸等之介

此國々之介を守と申事無レ之候此三箇國は親王之任國に候仍太守と太之字を加へ申候親王之義は遙授に候故介掌ニ吏務ー候さるに依てかの國之介は守とも申べき由其說候へども本儀には不レ叶候但源氏物語東屋之卷に常陸介を守と申事有レ之候是は宿木之卷に常陸前司と出候故にふと守と申候やと存候これを以て押て守と申べき事無ニ其謂ー事と存候

別當　勾當

別當勾當同じ樣なる事に候假令賀茂春日にては神主と申候を御靈今宮にては別當と申候此類に候乍レ序申候少しむづかしき別當有レ之候齋藤別當實盛に候此別當は人ごとに不審申事に候是は秘說有レ之候由下官常々申事に候彼實盛は魚名公之子孫にて彼子孫は齋藤伊藤後藤近藤と申四十八藤あるよし申候ゑかるに實盛は小松內府之家人になり申候てかの內府之莊園武藏長井莊之別當になりたるに候これを本義に申候得ば長井莊別當藤原實盛に候職に氏を添申候故齋藤別當と申候彼實盛の諸に實盛もと越前之者にて候し近年御領に付けられて武藏長井に居住仕候と有レ之候能分明に聞え候一笑千笑

開闔　寄人

如レ被レ示候記錄所和歌所文殿に有レ之候開闔は別當に候寄人は加勢の意にて候

公文　院掌

公文と申事は近比六箇鋪名目に候子細有事に候や深くは知不レ申候愚按は古き名目に候へ共いな事を申ならはしたる事と存候公文と申候は國解二寮一使讀文等を公文と申候國解とは諸國守注ニ國務之事ー候文にて候二寮一使讀文とは諸國守の奉る所の年貢文を主計主稅勘解由使勘定之分其功を記候文にて候二寮は主計主稅一使は勘解由使に候是皆國務の事にあかり申候へば公文と申候まことのおほやけ文なれば是にならひ候てやらん院の御封などの年貢文をも公文と申ならはし候かと存候役人を院の公文と申は其年貢文を掌る者を申にて候とかく年貢文を古人も不レ論ニ公私ニ公文と覺えたるものかと存候執柄家にも公文所と申所を設候も彼庄園等之年貢をさばく所に候箇樣の所を取誤れる事舊記に多く候先を追ふ聲

を警蹕と宇治左府記にも記され候有まじき事に候月輪記にも自らの女子を姫君と記し賀茂詣の前駈を御前上官など被レ記候事不二心得一事に候此節皆下より申事をいひくせになり候て箇様に候と存候院之公文も此類と存候院掌は院中之雑事を掌る意に候と存候公文院掌之類甚下司に候故何を司り候と申事下官所持の記公卿記等には委く見え不レ申候故無二覺悟一候

厩別當　預　舍人

院御厩別當五百年ばかり已來西園寺菊亭正親町三條等之家々補來候關白家にも有レ之候是は諸大夫等補申候厩之事を掌るかしら分に候かゑかと其例は不レ覺候預も此下にて同く厩之事を掌り申候舍人は厩舍人と申時は馬の事を掌り申候此名目は同じ事にて又役儀違申候も有レ之候厩役人にはかぎらざる名目かと存候

案主

厩案主拾芥抄に所見候外他記にては未二覺悟一候右辨官ノ史生補二政所ノ案主一事文治二年六月十九日の玉海に見え申候是は家司中之一の役人に候也

居飼

是は今申候馬取に候也

御隨身所別當

此名目も拾芥抄に見え申候是も他記にては未二覺悟一候隨身と申候は聊存候凡上古王制禁レ兵と申て私携二兵具一事被二禁制一候此故はそのかみ天下太平に候し時道不レ拾レ遺巷無二姧盜一候得ば兵器を携候用心には不レ及事に候この時兵器を携る者は似レ挾二刃傷殺害之意一候故王法の深く所レ誡に候應仁亂後人々凶惡をたくみ候故人々用心して帶レ之候是習はしとなり候て今日太平百年に及び我邦之古へに珍敷昇平に候へども如二下官一何之意趣遺恨も持候はぬ身も刀脇指をさし申候扨々腰おもく無用之義に存候へども習はしとなり行き候へばまるごしにて立出候得ば却て事をかしき樣に候故帶候上古は右申候ごとく禁制にて候故六府官人（六府は近衞兵衞衞門左右にて六府也）之外は内舍人ならでは帶劍成不レ申候兵部省兵庫寮等は同く帶し申候是皆宮城警衛のためにて私之事には用不レ申候但中納言以上其職重く候故儀衞のため帶劍を聽され候漢の蕭何劍履して殿に昇り申類に候是を勅授帶劍と申て別に蒙二宣下一事に候此外中務省は八省の長に候故帶劍を

被レ聽候大臣已上は其人を被レ重候故其警衞の爲に近衞府官人をさしわかちて下され候是を隨身兵仗之宣下と申候其下され候人數定りある事に候大臣左右番長各一人左右近衞各三人合て八人に候關白は右の員數之外に左右府生各一人加へられ候て十人を召具し候蒙ニ此宣下一之後其大臣出行之時如レ右員數近衞府官人召具し候近衞之兵士を身に隨ふ心にて隨身と申候されば此官人ども私第に居申候所を設置候を隨身所と申候て設置候事に候月輪閣禪九條邸にも中門の邊に被レ設ニ隨身所一候太上天皇も御讓位之後新帝より彼官人を參せられ候是を院之御隨身と申候也

内舍人

是は中務省之官人に候先にも申候如くに中務は八省之長官に而候故禁中宿衞之爲に九十人之兵士を被レ置候是を内舍人と申候内舍人隨身を給はると申事候是は關白に限り候事に候前に申ごとく關白の近衞官人を給はるは常之事に候其人によりて内舍人を給りて具し隨レ身候事に候御堂知足院法性寺賜レ之候此外も例有べく候へども暗に覺え不レ申候

番長

これは任大將に候へば近衞府官人は下司に候故隨身に具し申候其下司之中番長と申者に定め申候これは隨身之中を心やすき者になし候意にても有べく候か大將私第にて補申候此隨身は職に付て召具し候隨身兵仗之宣下とは格別之事に候

近衞

これは近衞府官人之名目に候凡左右近衞府官人と申候は大將を長官とす中少將を次官とす將監將曹を判官とす府生を主典とす是を四等官と申候近衞府にかぎらず諸司八省諸國にも此四等之官は有レ之候彼府生之下に一府に三百人兵士有レ之候是を近衞と申候左右之近衞兩府合て六百人有レ之事に候

史部

此名目は覺不レ申候

使部

是は諸國に必有レ之候また官外記之使部も有レ之候和訓につかはれべと申候彼是雜々之事に馳驅致候者に候

門部

衞門府の官人に候俗に門番など申類たるべく候

伴部

これは覺悟致不ㇾ申候

帳内　　資人

是は召使ふ者を上より下され候事に候親王に給り候を帳内と申諸臣に給り候を資人と申候一位より五位に至り給り候を位分資人と申候大臣大納言に給り候を職分資人と申候和訓につかひびとゝ申候此儀慥に未㆓勘得㆒候得共後成恩寺禪閤説を覺申候故書付申候

健兒

こんでいと訓じ候延喜兵部省式に充㆓諸國㆒被ㇾ召よし所見候下輩之兵卒に候歟平家物語に故少納言入道信西のもとに召つかはれける師光成景といふものあり師光は阿波のざいちう成景は京の者しゆつこんいやしきげろうなりこんでいわらは　もしはかくごしやなどにてもやありけんと候ざいちやうは諸國之吏務を行ふ政所に仕へ候下賤之者に候しゆつこんいやしきげろうとは出根賤き下郎に候これにて健兒者能被㆓心得㆒候かくごは侍の中にも恪勤と申名目候これは幹の士に候此平家物語に書候恪勤者諸國之僧房に召仕ふ下郎に候

火長

撿非違使廳之下輩之官人に候

雜色

凡侍と申は士にて候故六位已上有官の者也無位無官之者は侍とは難ㇾ申候都鄙刀を帶候者と覺え候へども官家之故事を以て申候時は六位に不ㇾ叙者を侍とは申間敷存候速水長門守河端安藝守唯今仙洞之下北面に候得ども廣橋家侍にて今に彼家より俸給をあたへ家僕に召つかひ申候然らば侍と申候は如ㇾ此に候雜色と申候は有位無官者族性の宜き者も凡下之者も打込候て私家に召仕候者を雜色と申候貴賤相交り候故まじはれる色之意にて雜色と稱し候下官小家に召仕刀を帶候輩は雜色に候也

放免

徒然草の三箇之大事とやらん世間に申ふらし候かの草子に放免のつけものと候をこと〴〵しき秘說ある由申なし候これは俳諧師の貞德と申もの申出したるよし聞及候天台之空假中を以て其說をなす由可ㇾ笑候貞德は官家之故事に習はず候故放免と申者を不ㇾ知して申出したると存候此事平家物語にも見え候

文覺ながされの卷に伊豆國へゐてまかるに放免兩三人をぞ付られけるこれらが申けるは廳の下部のならひ箇樣の事につきてこそおのづからえこも候へと有レ之候此文段よき放免の注に候撿非違使廳之下部を放免と申候也

如木

これは氣之毒なる事を被レ尋候に申さず候得者事明らかならず候申候へば人之過失をあらはすに候乍レ去申さず候とも知る人は知るべく候へば至愚之存分書付申候近年傍輩中晴の出立には如木と稱し候而召具候其躰は平禮白狩衣白狩袴を着したる者に候箇樣之役人これある事聊も舊記には不二見及一候下官覺悟候は裝束の張やうに如木と申糊をこはく張候を如木と申候文字之通り木の如くと申意に候承元二年十二月二十五日三中記（三條中納言長兼卿記）曰昔人衣服は打梨今人の裝束は如木如レ此に候打梨ふくさ張とて糊をやはらかに張たるに候又應永十九年九月廿七日廣橋一位（兼宣卿）記曰御車副四人（各褐衣如木）以二兩說一見申候へば分明に候應永記の意は車副は人之所役之名に候褐衣は其役人着用候服の名に候狩衣のごとき服に候これに如木の字を加へ候にて張樣と申事慥に見え申候こはく張たる木の如くなる褐衣に候これは褐衣にかぎらず承元記には右大將の袍の事に候近代の記に如木雜色と申名目候これもこはく張たる如レ木なる狩衣を着候雜色に候さるにより園太暦などにも雜色不レ及二如木一とも見え申候なへ／＼としたる服を用ひ候もくるしからざるの意に候如木雜色と候より召具候人の名目と取り違へ候て近來召具し始めたる人に候これにうつされ候て近頃は人ごとに召つれ申候一興千萬に存候得ども流俗のやうになり候て無二是非一候下官所役の日も不二召具一候也

人長

これは神樂之舞人を申候

陪從

賀茂春日祭東遊の管絃の者を申候對二舞人一して陪從と申候歟

相撲最手

これは今俗に申候せきとりと申者に候

助手　　掖手

これも只今申候せきわきに候

念人（ネンジン）

競馬射禮等之時左右勝負候騎者射手之一方にひいきの人の心にて念人とて當座に被レ定候

押領使

これは諸國司の外に被レ置ニ此職一候專掌ニ追捕一事に候或は臨時に盜賊起るときおかれ候事も候又は申請に依り國司兼帶之例も候畢竟押領二字は管押管領など申候意にても候べくか

青侍　青女房

六位の侍は綠の袍を着用候故青侍と申候それらが妻室女子を青女房と申にても有べく候

・文官　武官

太政大臣已下諸司八省諸國司皆文官に候兵部省六府官人征夷鎭守府將軍皆武官に候

麻呂　萬呂

これはいにしへ一字名に用ひ候は申に不レ及候京家の祖を麻呂と申は淡海公の四男に候又何麻呂と申候は周の代子路子貢子張などゝ申類にて往昔男子之通稱に候今も宮家の童子は丸字付申候鷹の字は日本にて作候字に候由聞傳へ候辻など申字も此類に候令に見え候丸と候は如レ被レ示某之字の心に候器物に丸の字付候は笙に菊丸笛に内裏丸箪篥に海賊丸之類此外あまた候樂器に限らず船などにも丸之字を付候は皆其物を愛して人のごとくに丸の字を付申候意にて有べく候唐にて扇子罐子など申候も同意にて候歟

字

本朝は一字に候被レ示候通氏を加て呼申候日本にては呼名を付候事はこれなく候學生の付申候は唐にならひたるものに候誰とても付候て子細は有まじく候得ども呼付不レ申候故用に立不レ申候

姓氏

日本にて姓氏の差別は分明に見え不レ申候如ニ被レ示候一國史に賜姓など候へば姓の字かばねと訓じ候多く候へども此假名付候もの未ニ見及一候得者押而かばねとも訓じがたく候又朝臣宿禰之類をかばねと申候事はいかなる儀とも未ニ揃得一候如ニ被レ示候一朝臣宿禰之類にて姓氏の高下を分ち申候事に候

已上管見之至僻案可レ有レ之候得共愚存之趣聊書付申候難レ被ニ信用一候歟返々赤面に候

于時寶永八年

正德第二壬辰歳林鐘下院遂校寫畢（雪明）

右
新井筑後守（于時勘解由）君美問
野宮中納言（于時左宰相中將）定基答

君美問云

一冠　厚額　薄額　透額
各其制如何大體を圖し被レ下度候　細燕尾　細纓など見え候物歟

一烏帽子　立烏帽子もろ眉 左眉　小諸眉　風折　平禮　細烏帽子
各大體を圖し被レ下度候又引立烏帽子　もみ烏帽子　澁塗烏帽子　佐比烏帽子など古き物語等に見え候如何なる物に候哉

一末額　帽額　兩名一物か二物か其制いかに候歟

一袍
令式等にはたゞ服色のみをしるされて織文の事詳ならざる歟異紋等の始何れの頃より聞え候歟
黃袍　無位の袍たるよし見え候歟其色またいかが候歟

一唐裝束　生裝束　染裝束
其制いかゞ候歟詳に被ニ仰下一度候次に晴一日晴など申事何れの頃より聞え候歟

一半臂　一打衣　一袙
已上名目幷其製いかゞ候歟其中袙の字古は衣に日を从へ候歟近來は白の字を从へ候樣に見え候何をしたがへ可ㇾ然哉

一大口　前張　紅張大口
名目幷其制いかゞ候歟

一直衣　引直衣　烏帽子直衣　小直衣　狩直衣　無襴直衣　長絹狩衣直衣
已上右一物兩名有ㇾ之候歟其制幷着用之次第被㆓仰下㆒度候

一出衣
其制幷着用之次第いかゞ候歟

一奴袴　一下袴
下結の時下袴を用ひられ候歟下結幷下袴着用の義詳に被㆓仰下㆒度候又上結下結など申事は奴袴にかぎりたる事に候か

一半尻
名目幷其制いかゞ候歟

一狩衣　白襖狩衣　白襖布狩衣
狩衣布一物同名歟しからば此物の始布をもて作るか織物を用ひらるゝ事いづれの頃始り候歟又其色或は年齢に隨ひ或は官位によりて其用捨あるべきか奴袴のごときも品位淺きの類は是又其次第あるべき歟詳に被㆓仰下㆒度候

一狩襖
其製幷着用の義如何候歟惣而位襖　白襖　緑襖　紺襖　纁襖　又比金襖など見え候襖と申物の制はいかゞ候歟

一小忌　青摺　摺袴
其制幷紋は何を摺られ候歟

一淨衣
其制如何候歟

一水干　水干袴　水干葛袴
此物を水干と名付事いかなる故候か又水干袴と見え候袴は如何候歟また裏打たると聞え候夏冬によりて替り候歟又蹴鞠の時着用の次第葛袴の腰は水干の上にかゝり候古來も如ㇾ此次第に候ひし歟

一長絹
此物を長絹と名付候事如何なる故候歟着用の儀

また如何候歟

一直垂

此物名上古には聞えず候歟鎌倉京の武家着用之製は堂上にめされし物と異なる樣に相見え候長緒直垂と申す物古き物語等に見え候は堂上にめされ候物にも候歟武家に用ひ候ものは多くは大口の袴を用ひ單の直垂には大帷をかさね候裏打の直垂大口は尋常の義に候かまた其大口と見え候物朝服の時など用ひられ候物とは其制同じからず或は精好或は練いろは白き黄なるなども見え候歟但京の代には堂上方にも見參の御時或は大帷或は大口などを用ひられ候事武家の義と同じき樣に見え候か又此物當時着用の次第袴のこし直垂の上にかゝり候京の代頃迄はしかはあらずと見え候着用の次第如何可ㇾ有ㇾ之候歟

鎧直垂

戎衣などゝ古き物に見え候は此物にて候歟いろいろの織物のよしも見え候其製いかゝ可ㇾ有ㇾ之候歟

一褂　大褂　小褂

古き物には褂の字に見え候いづれにしたがひ候はん歟其制幷着用の義被㆓仰下㆒度候

一素襖袴

此物素袍袴ともしるし候いづれに隨ひ候はん歟また此物名鎌倉の頃には聞候はず京の代享德の頃より其所見有ㇾ之候但古より有來候物歟

附

一窠霰　一窠形　一二藍　一龍膽

此等の名目如何候歟其中窠形と申物の形圖し被ㇾ下度候又古き物語に魚綾嶋摺など申すもの有ㇾ之候いかやうの物に候か又練緯貫など申物一物か二物歟

一玉帶　有紋巡方　有紋丸鞆

紋には何々を用ひられ候歟又玉はなにゝて候か世には又石帶など申事石を用ひられ候故か其名いづれの名を用ひられ候歟

一瑪瑙帶　瑠璃帶　金靑玉帶　斑犀帶

此等の制又如何樣の物に候歟

一太刀　餝太刀

名目幷其製如何候歟

一細劔　野劔
此兩物其制同じからざるか其中蒔繪の野劔を或は平鞘劔或は毛拔形劔あるひは革緒劔とも申す由見え候歟左かれば一物四名に候歟詳に圖し被レ下度候

一螺鈿　木地螺鈿　蒔繪螺鈿　樋螺鈿　螺鈿蒔繪
等繪樣如何候歟木地にはいづれの木を用ひられ候歟詳に被ニ仰下一度候あるひは又圖し可レ被レ下候歟

一蒔繪
繪の樣何を用ひられ候歟

一葦手
如何なる物にて候歟又當時も凡の物の蒔繪に葦手と申物はいかなる故に此名有レ之候歟

一沃懸地
いかなる制にて候歟

一金作
金作とは其餝のことごとく黄金にて作り候を申候か又は黄金にて物のかたを刻鏤候を申候歟

一平塵　薄塵
名目如何候歟又其制もいかゞ候歟

一黒漆
名目いかゞ候歟諒闇の時用ひらるるともまた六位用レ之有ニ毛拔形一なども見え候いづれを正說と可レ仕候か又六位等の用ゆる所其制被ニ仰下一度候
烏頸劔
鷹飼の用ゆる所か其制如何候歟

一尻鞘　虎皮　竹豹皮　鹿皮　斑猪　繪尻鞘（左鰐右魚）
細尻鞘　丸尻鞘
各其制詳に被ニ仰下一度候

一平緒　紫綾　青綾　櫨綾　棟綾　樗綾
右一物異名の物も候歟惣而綾と申事手繩等にも相見え候如何樣なるを綾と申候歟

一弓　蒔繪弓（或摺貝）　彇（銀彫物或塗物）　眞卷弓
蒔繪螺鈿等の繪樣如何樣候歟ほり物等又いかゞ候歟

一平胡籙　木地螺鈿　蒔繪螺鈿　蒔繪　表帶　師釣
片釣
木は何を用ひ候歟蒔繪螺鈿等の繪樣いかゞ候歟

一壺胡籙　一獵胡籙　一靫

すべて胡籙靫等の形圖し被レ下度候
一箭　水精筈　角筈　金銅上差
是等子細被ニ仰下一度候又おとし箭とは何れを申
候哉
一靴　半靴
靴半靴の形圖し被レ下度候靴氈帶革金物等の制
詳に被ニ仰下一度候
一鞋　草鞋　絲鞋　緒太
其制如何候歟
一踏懸
一履　烏皮履　淺履　深履　毛履　鼻切履　雁鼻
藁履　山藁履
此等の制如何候歟
一鞍　唐鞍　移鞍（黒移 平文移）　結鞍　倭鞍　水干鞍
右各其制同じからざるか詳に被ニ仰下一度候或は
圖し可レ被レ下候
水精地　銀地　鏡地　黒地　黄地　龜甲地　鉢
鞍　此等の制被ニ仰下一度候此中武士も鏡鞍用ひ
候事舊記に見候得共不ニ分明一候歟
一唐鞍具　鞍橋（四緒手）　表敷（表腹帶）　鐙　力革　轡　銀面
（菖蒲形）　角袋　尾袋　雲珠　頸總　八子　大滑　草鞦
杏葉　攝鞢　餉付　手綱　差縄　引差縄
此等は何れの所を餝候物か詳に被ニ仰下一度候
一移鞍具　鞍橋　左筆　大滑　鐙　轡　手綱　鏁　緌
鈴　此等何れの所を餝候物か詳に被ニ仰下一度候
一倭鞍具　鞍橋　表敷　切付　大滑　鐙　轡　手綱
尺泥障
此等の具詳に承度候
一鞦　連着　畝鞦　楚鞦　小總　連子總　辻總
此等の制詳に承度候
一切付　小豹　竹豹　虎　葦鹿　水豹
切付の形今の制には同じからず候歟三峯など申
かたいかゞ候歟
一鐙　壺　舌長　半舌　舌短
其制如何候歟
一轡　鏡
鏡轡如何樣なるを申候哉字波良轡など申ものま
たいかゞ候歟
一手綱　蘇芳緂　紫緂　棟緂　紺緂
其制いかゞ候歟

一差縄　菊打交　萌木匂打交　山吹　紫村濃
一鞍覆　打鞍覆　織物鞍覆　透鞍覆　虎皮鞍覆　鹿皮鞍覆
鞍覆の制如何候歟
一差縄　綾打交　布打交　白布
一車　銹車　青絲毛車　尻眉車　唐廂車　半蔀車
檳榔毛車　網代車　八葉車
右名目被ニ仰下ー度候大八葉小八葉など申はいかが候歟
一随身裝束
小随身と申は如何樣の者に候歟
一蠻繪袍獅子熊鴛鴦丸　蠻繪布袍
此等の形如何候歟圖し可レ被レ下候又蠻繪毬など申す物も相聞候蠻繪とはいかやうの物に候歟
一染分袴　白襖袴　蒙脛巾　褐衣　白狩袴　壺脛巾
附　錦裲襠　攝腰　錦袴
此等の物其制詳に被ニ仰下ー度候
一馬副裝束
馬副とは如何樣のものを申候か
褐衣袴　舌地

一手振裝束
手振とはいか樣の物を申候歟
藥袋巾
一小舍人童裝束
小舍人など申者は如何樣の者に候歟
狩衣上下　毛沓　水干袴　脛巾
一雜色裝束
雜色小雜色如木雜色など申者如何樣の者に候歟
平禮上ハチ　白張上下　亂緒
一車副裝束
車副とはいか樣の者を申候歟
烏帽子コウヘノ　襖袴
一牛飼裝束
水干葛袴
馬副より以下牛飼迄の裝束舊記等に相見候所候詳に被ニ仰下ー度候
一居飼牖一馬部
一飼厂
此等いかやうの者に候歟其中飼部の字省略と相見候本字如何候哉
一鷹飼裝束

錦帽子　紫纐狩衣　白布袴　壺脛巾　熊行縢
餌嚢　紅褂　鳥頸劔
一犬飼裝束
帽子　紺布狩衣　緋革袴

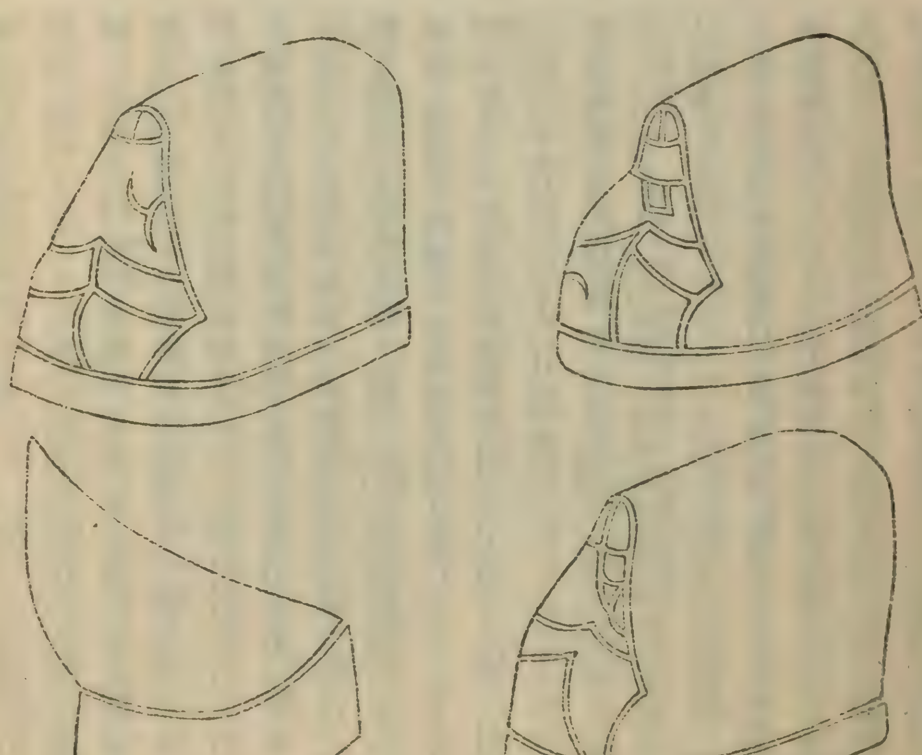
定基卿答

一冠　厚額　薄額　透額
餝抄曰年少之人用ニ薄額ー近代依レ有ニ事煩ニ不レ依ニ年齡ー用ニ厚額ー僻事也中年人或用ニ半額ー三光院内府故實淸譚曰厚額常之冠ノ事に候薄額透額同物に候自ニ元服ー至ニ十六歲ー用ニ透額之冠ー冠の額を半月形に掘透て裏面は羅を懸通したる物に候愚按此說聊不ニ甘心ー半月形者餝抄所載之半額也或稱ニ半透額ー貞和六年正月十六日野宮内府公淸公記曰冠透額半透額云々冠師說也額ノ方半ばかり透也是常事也故御厨子所預前備前守宗恒朝臣令ニ申聞ー候者ふるき業平ノ像ヲ見申候に冠ノ額一面に羅ばかり張たる體を書候きこれ眞實の透額に候と申候き此說尤に存候半月形ヲ半額と申候時額一面に羅ばかりはりたるはすき額勿論に候至ニ十六歲ー用ニ薄額ー說凡家之事候一條家裝束抄曰近來十五歲迄は薄額十六以後は厚額を用ふ舊記を考ればば若年淺官の人は十六以後も猶薄額を用ゆべき由見えたり京極太閤は卅歲左大臣の時是を用給ふ延久三年事也宇治後二條殿は卅二内大臣の時是を用給ふ寬治七年の事也左府は十八歲是も内大臣の時始て厚額を用ひ侍り台記久壽二正七右大將兼長不レ觸ニ余ニー用ニ厚額冠ー予問レ之陳シテ云殿下謂レ余十八歲用レ之仍所ニ用之ー仰云余爲ニ大臣ー所ニ用之ー汝雖ニ同歲ー官卑甚不當自今以後可レ用ニ薄額ー者已上冠之儀分明に候歟仍不レ載レ圖候

細燕尾　細纓
燕尾はゑひと申候假名書きに候和名鈔唐韻云纓於盈反俗云燕尾冠纓所見如レ此候細纓と申候は武官六位以下絲のごとくなる纓を用ひ候是を細燕尾と申候也

一烏帽子　立帽子もろ眉左眉　小諸眉　風折　平禮　細烏帽子引立烏帽子　もみ烏帽子　澁塗烏帽子　佐比烏帽子烏帽子はもと帽子に候へば立烏帽子勿論の事に候歟風折に對して立烏帽子と申たるにもやと存候諸眉小諸眉等の名目舊記には不レ及ニ管見ー候亡父故内府申候者右あがり左あがりもろあがりなど申候き故實

淸譚にも此通に候もろあがりを一條家の抄には諸額
と候故實淸譚同レ之候彼抄曰小諸額 攝家御着用諸額
十六歳迄用レ之右上り院御所親王御著用之但給ニ御
服ニ之人雖ニ臣下ニ着レ之左り上り諸家通用之今按給ニ
御服ニ人とは元服の始蒙ニ禁色宣下ニ候人々によりて
御冠御直衣を下し給り候御冠を給り候ても准じて太
上天皇の御烏帽子を申給はる心にて右上りを用ひ候
右上りと申は烏帽子の前の中央に尖りたるひだの下
に少し押出したるひだ候右方に押出し候を右上りと
申候左方なるは左上りに候左右ともにおし出したる
は諸額に候烏帽子はもと帽子にてやはらかなるべく
候昔は絹を用ひたるも候今は紙を漆にてかため申候
ふるきはやはらかに候へば自由になり申候野行幸時
四位以下鷹飼等着ニ烏帽子ニ候こと見ニ西宮記ニ候故内
府被ニ申聞ニ候は野行幸の鷹飼着ニ烏帽子ニ野中狩獵の
時烏帽子やはらかにて自然に風に吹れてそのかしら
折候を後世風流に斜に折候折烏帽子に候風折の名目
これより出來候よし申候き平禮は折烏帽子の類に候
是もかしらをとりひらめて折申候ゆへ平禮の名を得
候歟餝抄曰古人着ニ薄塗烏帽子ニ臨レ期平禮いよ〳〵や



はらかなる事分明に候烏帽子圖少々顯申候
引立烏帽子の事永仁正安等布衣始記大納言以下至二殿上人一用レ之事所見候件記中細烏帽子着用三人も相交て見え申候然共慥に形樣は不二見得一候但推量候所引立烏帽子と申候は歌仙の繪にうしろ樣にそばだちてをりたる烏帽子見え候是にてもや候はん尤推量に候て分明に所見を不レ得候細烏帽子は一向に無二覺悟一候もみ烏帽子は杉本美作と申烏帽子師先年圓成寺故殿下へ調進候者に候下官義彼殿下には十餘年親炙候得ども一言不レ及二此事一此頃一條亞相物語に候き其許より誂られ候に付被二取出一候これ先年故一位大納言取次てまいらせ候彼美作が家傳來の說候て調進候由唯今承り候猶いまだ其形は見ず候やはらかなるよしは亞相物語に候き澁塗烏帽子と申は不レ及二管見一候但重服人墨塗烏帽子を用候に澁にて墨をとめ申候此事にてもや候はん佐比烏帽子事凡烏帽子ごとにさびなきは無レ之候別に佐比烏帽子と申候は不審に存候二末額帽額二物に候殊に其制懸隔各別之物に候所爲二一物一歟と不審是は江家次第臨時競馬篇に左右乘尻各拾人騎馬相向其裝束冠老懸帽額と候仍爲二一物一歟之疑有レ之歟と存候是は江家次第書損に候彼緌帽額の字は可レ致二末額一候西宮記に臨時小節諸卿出馬衞府冠二末額一と有レ之候然ば江家次第書損分明に候歟末額は衣服令曰（武官朝服）會集の日加二朱末額挂甲一故圓成寺殿下（兼輝公）致命に末額俗云鉢卷也緋の絹を以て冠の纓際を引まとひて後にむすぶ由に候六府官人大射の禮の時用レ之由見レ式候帽額は俗云水引の事に候みじかき幕のやうなるものを申候鴫居など高き所などに引候を帽額と申候江家次第曰（元日宴會）殿東軒廊に安二殿上酒臺一西第一間第一柱南砌上鋪二毯代一枚一其上立レ案垂二帽額一舞臺など下に引候を水引と申候是は船に引候より出たる名目にては有間敷や仁平二年正月廿七日朱器大饗台記曰鵜船四艘（龍頭二艘組レ之鷁首二艘組レ之借二柱河鵜飼一紅欄金銅梓木上每レ柱居二寶形一）水引（左右及艫引廻之二紺曺綺所々畫二水文鶚蚕魚一上階畫二千鳥一）畢竟帽額水引は高下にてゆひかへしたる計に候今度御即位日南殿に被レ引候獸形帽額可レ有二賢覽一候錦を用候を錦額と申候簾にもかけそへ申候和漢同事候樂天詩にも錦額簾高捲と候諒闇中御殿御裝束懸二蘆簾一候用二鈍色布帽額一候是を布のもかふと申候徒然草三箇の大事と申一ヶ條に候得共別の子細なき右のとほりの物に候也

一袍

三條家裝束抄曰冬袍はまたら羅文錄家用レ之輪無は當家大炊の門中院黨日野勸修寺等用レ之轡唐草西園寺德大寺花山院四條以下多用レ之無二夏冬差別一大臣以後異文袍定事也當家壯年の時雖レ任二大臣一暫輪無用レ之宿老の後用二龜甲遠文等一居レ之大サ七寸計なり八條大相國被レ用二此文一仍當家用レ之他家異文袍西園寺長命唐草大炊御門龜甲洞院藤鞆繪自餘只今不レ覺悟一追可二尋記一又異文は熨地也と有レ之候餝抄曰治暦土御門着二遠菱文袍一土御門者土御門右大臣師房公也遠菱文は千金菱と稱して今も久我一黨用申候鷹司家裝束抄(攝政基公)曰花山院相國通雅公輪亙等著レ之又曰岡御命(岡屋關白兼經公)曰六條殿は殿上人之程着二普通文袍一八給歟信範記云御袍文如二凡人一之由載レ之(一門の人龍膽唐草)又曰龍膽唐草文袍事攝錄以前着レ之岡御命云一門人着レ之件文自二法性寺殿御時一出來先公殿上人の程は凡人袍文を着給公卿以後此唐草文袍云々此事示二東山禪閤(光明峰寺入道攝政道家公)一之處自二公卿一以後着事不レ知レ之之由被レ示き又曰知足院(富家關白忠實公)仰云立沸雲袍宇治殿(通公)召けるとて一人着レ之我讓二關白一之後初出雲に着レ之由云件之沸雲は宇治殿初て召候歟仰云其

はいかゞ有けん先例などを以て令二着御一歟又曰攝錄時歟着レ之或抄云執柄袍文沸雲攝二四海一如レ雲所二用之一又曰浮線蝶攝錄時夏袍文其直衣文冬下襲文用レ之愚按浮線蝶とは常稱浮線綾丸に候是も五六百年いひあやまりたる事候實は臥蝶丸に候蝶のふしたる形に候それを失ひて花形になりたるより浮線綾丸といひあやまりたると存候察レ之候に彼臥蝶丸のうき織物を浮線蝶と申候よりまた云あやまりて固織物(文をしづめたる物に候)をも浮線蝶といひなし花形に失より浮線綾丸と覺て此名出來歟と存候浮線綾とはうきたる絲すぢの綾に候是紋の名とするは無二其謂一候

文永十一年二月七日龜山院布衣始後西園寺相國(實兼公)記曰上皇出御御裝束浮線綾白御狩衣文松唐草正安三年二月八日後伏見院布衣始竹林院左府(公衡公)記曰上皇着御御狩衣白襖浮線綾御狩衣龜甲浮文已上所見如レ此候此浮線綾は浮織物之證據に候彼臥蝶丸を浮線綾と申候はゞ文永正安兩記(太閤之時皆之文)河別二地文一候哉爲二浮織一事顯然に候也又曰赤色袍事(鴛)着二此袍一之時可レ爲二染下襲一也寛治表袴同被レ染レ之具二代記一

代々令レ着給例

御堂寛弘二年三月八日中宮大原野行啓(御年四十一)寛治二

年十月廿二日御年五十三上東門院行幸東三條行幸大入道兼家公法興院殿又如レ此云々京極大殿承暦三年十一月廿七日大原野行啓御年三十八寛治二年正月十九日行幸御年四十七袍織物此外例數多被レ載候得共省略候已上鷹司家抄後照念院關白冬平公述作候近衞鷹司兩流被レ用二此說一候傍に注付之愚勘候一條家裝束抄曰元服の後大臣までは袍の文丁子のまる杏葉たすき也攝政關白になりては雲立涌の文太閤の時は雲鶴なり地はいづれもこゝらの綾前途のゝち宿老の人はこゝらなき熨目の綾をも着するなり夏は穀文は冬に同じ又曰攝籙の時の夏袍文浮線綾丸下襲の文也のよし嘉禎四年四月或記に見えたり近來は夏も雲立涌を著す浮線綾丸をもちひる事も難あるまじきなり已上後成恩寺禪閤抄に候九條一條二條等三家被レ用二此說一候已上裝束文所見如レ此候用始候時代は不二分明一候

黃袍

如レ被レ示候衣服令無位人着用之物に候地は布色は梔子染に候くちなしの事に候染樣見二延喜縫殿式一候

一唐裝束

餝抄曰仁安三八廿四殿記曰內府久我御拜賀于時中將禁色唐綾表袴顯文紗下襲赤色久安元正四行幸攝政令レ着二柳唐綾下襲一薄裏色唐綾表袴已上所見如レ此候畢竟唐綾の下重表袴を用ひ或は下重に唐綾など用申候を唐裝束と申候先例綾と稱し候は唐綾に候和綾は織物と申べく候さるにより綾は皆付色とて染たるいろに候織物と申時は絲を染て織たるに候

一生裝束

是は老人の夏裝束に候冬は白裝束とて用申候久安四年七月朔日台記宇治左府賴長公記曰今日御逆修結願土御門大納言宗輔公于時七十二歲著二生裝束一織練老人尤可レ然矣十七日殿下着二生裝束一織練生裝束と申候は畢竟白重候下に白袍惡綃を用候由餝抄に候冬白裝束と申候は鷹司家抄曰白裝束事普賢寺殿建久九年夏御方違行幸着二白張單衣帷一今按是白裝束歟第三度御攝籙間也御年三十九歟白裝束時衣袴裏白猪隈殿は不レ召二白裝束一岡屋寶治元年御還補之時令レ着給歟御年三十照念院殿文永六年太閤兵仗慶申時着給御年四十二雖レ着二白裝束一表袴裏許紅を着時已有り建長文永永仁太閤拜賀之時如レ然冬平注之圓光院殿之九年正月十一日始着給袙單衣表袴大口等也御年四十愚身正和四年冬年四十一已上鷹司家抄趣如レ此候故內府令二申開一候は及二老年一余遂二先途一候時は不レ着二宿德袍一既遂二先途一候時

は雖二壯年一着レ之但白初不レ着極宿之袍先用二白固文奴袴一次用二平絹指貫一而後用二平絹直衣指貫一束帶可レ准レ之如レ此令二申聞一候故内府七十にあまり候得共任槐以前不レ用二白指貫一候任槐以後宿德の袍を用之彼久安法性寺關白五十三歲普賢寺岡屋等四十に而被レ用レ之候は皆被レ遂二前途一已後事に候久安宗輔大納言にて被レ用レ之至二保元一任二右大臣一遂達二太政大臣一然ば不レ遂二前途一以前似レ用レ之候得共宗輔公被レ任二相國一候者遇然之事候か彼卿大納言宗俊卿二男に候得共强無二任槐之望一候ゑかれども長命に而奉公久敷候其器に候得ば自然の事に候されども彼卿は大納言を前途ともおもはれて被レ用たるにてもあるべく候か

一染裝束と申候は下襲表袴を各別の色に染候て着用候事に候か尋常所用下襲冬は躑躅下襲にて公卿は固文臥蝶丸の綾を白粉張にして裏はふしかねにて染申候（ふしかねは蘇芳の代に候蘇芳にてくろむほどそめ候べきをふしかねにて直にくろくそめ申候後成恩寺もいはれなき事なれども久しく沙汰しつけたりと申され候）遠菱の文に候是を一名に蘇芳の打下襲とも申候裏の蘇芳につきて申たる物に候か打下襲と申時はうらは板引とて黑漆の板に糊を引てはり付てよくほし候て引はなち候へば光出申候上古は砧にて擣て光をいだし候を後世板引にかへ申候砧にかけ候ゆへ打と申候今の板引をも上古の儀にまかせて打と申候表は瑩とて貝にて摺候てひかりを出し候殿上人の下襲も表裏ともに公卿と同じいろにては候得ども平絹を用申候但聽二禁色一候殿上人は如二公卿一下襲候夏は公卿は生綾にて遠菱文あるを黑む程蘇芳にて染申候蘇芳の下襲と申候殿上人は穀を二藍（あゐ花あか花なのりにて染め申候）にそめて用申候是も聽二禁色一殿上人如二公卿一に候又冬下襲表不レ瑩裏うつたるを張下重と申候是もつねに用申候夏蘇芳冬つゝじの外にさま〴〵のいろの下がさね候それを染下襲と申候染下重染袴を用候を染裝束と申候是をことなる晴の日用申候其色色は餝抄鷹司家抄胡曹抄等くはしく候得ども不レ被レ載二彼抄に一例ども及二管見一しを書付入二賢覽一候

火色　皆練

建長元年二月廿一日岡屋關白記曰余向二東山一數刻謁二禪閤（峰殿）一前攝政同面謁二禪閤一被レ談二古事一余問答其條條皆忘却火色皆練差別事禪閤被レ談曰裏面共打稱二火色一面打裏張稱二皆練一但又一物異名之由右來傳レ之難二一決一且紅下襲註レ之彌難レ決之者歟賭弓時菩提院入道

所レ着之下襲面裏共打月輪入道下重面打裏張法性寺殿之時被レ仰曰往年所レ着下重體隔二星霜一委不レ覺悟一示二合内大臣一（宗能公）可レ被レ着者仍故禪閤相二尋内大臣一被レ着レ之然者面打裏張説勝歟康治三年正月廿一日賭弓台記曰左大將雅定初取レ奏着二火色下襲一候承安二年正月二日攝政家臨時客玉葉曰申刻着二束帶一火色下重黑半臂沉地銀樋螺鈿劔紅梅地平絹建久七年四月廿二日賀茂祭明月記曰使入仙花門代（左中將親能朝臣）昇二長橋一着座（曳レ尻取レ笏飾劔紫緂平緒カイネリガサネ付二魚袋一）

梅（表白裏蘇芳）

寛治五年正月十八日後二條關白（師通公）記曰梅下重蒔繪劔平緒紺地治承三年正月二日朝覲行幸山槐記（中山内府忠親公記）曰左大臣以下着二御前座一被レ仰レ樂行事右中將通親朝臣（梅下重）

紅梅（表紅梅の色裏蘇芳）

仁平二年三月廿六日大饗台記曰皇后宮少進藤憲頼麴塵袍紅梅浮文下重萌木浮文表袴丸鞆帶治承元年十二月十七日（蓮花王院塔供養）玉葉曰樂行事左右中將通親朝臣着二紅梅織物下重萌木表袴一

櫻（表白裏赤花或紫）

久安二年二月朔日行幸台記曰今日予着二唐綾櫻下重表袴一安元二年二月四日（法皇五十之御賀）玉葉曰關白位袍櫻二陪織物文杏葉襲白浮文表袴

櫻萌木（表萌木裏赤花或紫）

寛治五年三月廿七日（八幡詣歸路）後二條關白記三位中將櫻萌木下重蒔繪劔安元二年二月四日（法皇五十之御賀）玉葉曰巳四點束帶櫻萌木浮文織物下襲文筥形白浮文織物表袴又曰重盛櫻萌木堅文織物下重文鴛丸白浮文表袴

樺櫻（表蘇芳裏赤花或表薄蘇芳裏濃蘇芳）

治承三年三月十五日平野行幸山槐記曰頭中將通親朝臣樺櫻織物下重萌黄表袴壽永二年二月廿一日（朝覲行幸）玉葉曰大將裝束浮文樺櫻下襲（櫻折枝丸）白浮文表袴

柳（表白裏香）

天養二年正月四日朝覲台記曰今日殿下（忠通）令レ着二柳唐綾下重（裏色薄）唐綾表袴一給安元二年三月六日（法皇五十之御賀後宴）玉葉曰關白堅文織物柳下重（裏打堅文表袴）又曰左大臣柳綾張下重（裏青薄不レ異二白重一）此日大納言（隆季）中納言（資賢）參議（教盛）着二唐綾柳下重裏山吹一（一條家説曰面黄裏紅一條家説表黄朽葉裏青）安元二年三月四日玉葉曰内大臣裏山吹浮文下重文筥形白浮文表袴又曰實家（參議）裏欵冬二陪織物下重文杏葉萌黄浮文袴治承元

年十二月十七日（蓮花王院塔供養）玉葉曰藏人頭左近中將定能
朝臣帶二胡籙一持レ弓垂レ裾着二織物裏欸冬下襲一

藤（表薄紫 裏青）

應永廿一年四月武家八講北畠中納言下襲藤（文藤色分 裏萌木生）
表袴薄青文窠霰

牡丹（表蘇芳 裏白）

同上中山中納言牡丹下襲（面蘇芳染堅文 牡丹枝裏白生）、黃魚綾表袴（面練 魚綾）
堅文藤丸 裏紅打

躑躅

同上資雅朝臣躑躅下重（面紅薄物以二色々絲一縫二躑躅枝一裏青捻重）蘇芳表袴（以二色々絲一縫二六葉一裏紅打如レ常）以上大略自レ冬至レ春用レ之但此中櫻萌木樺
櫻等二三月用レ之藤牡丹二四月用レ之承安二年十月廿
一日最勝金剛院供養玉葉曰辰四點着二束帶一紫檀地螺
鈿劒紫綏平緒菊織物下襲面蘇芳龜甲裏青打

紅葉

着用例載二餝抄一之外未レ及二管見一候

松重（表萌木 裏紫）

仁安二年正月廿日（東宮拜覲）玉葉曰巳刻着二束帶一松重下襲

裏濃蘇芳（表薄蘇芳 裏濃蘇芳）

治承元年十二月十七日（蓮花王院塔供養）玉葉曰宗盛着二裏濃蘇
芳下重浮文白表袴一

蒲萄染（色見二長秋記一注レ左）

寛治六年二月廿九日（朝覲）後二條關白記曰予蒲萄下襲
天永二年四月十七日長秋記（權中納言師時卿記）曰參二左大臣殿一
尋申云花田打下重何時可レ着哉仰云花田打下重謂二江
比染一也元三後不レ着也雖レ着故大殿二月行幸着給者
只可二着用一歟但賭弓日不レ着也是主上着御故也

萌木

寛治六年二月廿九日後二條關白記曰萌木織物下重應
永廿一年四月武家八講宣輔下襲萌木文竹立湧表袴蘇
芳縮線綾裏紅打

已上冬下重

薄蘇芳

承安四年七月廿七日（相撲召合）玉葉曰右大將同着二織物下重一
其面薄蘇芳其裏青文文烏丸半臂同色歟浮文織物表袴

赤色（櫨に茜をまぜたるいろなり）

久壽三年四月廿一日賀茂祭台記曰午刻許右大將參齋
院赤色下重治承二年六月十九日少將師家拜賀山槐記
曰未刻少將出給赤色下重縮線綾表袴

薄色（二藍色のうすき也）

應永廿一年四月武家八講日野中納言薄色下襲 文丁子丸

萌黄表袴

薄青

同上勘解由小路大納言 兼實 薄青下襲 生薄物文輪違裏同色文裏菱合縫 蘇芳表袴 練織物文藤丸固文裏紅 同日民部卿 爲尹 下重薄青 面薄色文 文石竹表裏無レ之 表袴 藤丸裏紅打

若鷄冠木 裏薄青裏薄紅一説に表裏共薄青四月着レ之

同上山科宰相 教興 若鷄冠木生浮織物付裏表袴山吹文窠霰浮織物裏紅同日經興下襲若鷄冠木文牡丹表袴欵冬

盧橘 面朽葉裏青四五月着レ之

同上敎豐朝臣盧橘下襲面朽葉薄物以ニ色々絲一縫ニ花橘枝一 裏萌木 萌黄表袴以ニ金銀薄一尾長鳥文置ニ上之一同資光朝臣花橘下重表黃裏青捻重菖蒲表袴面青裏紅

菖蒲 面青裏紅梅五月着レ之四月にも着レ之

同上花山院大納言 忠定 菖蒲下重四練織物文菖蒲裏生紅朽葉表袴 表練堅織物文窠霰裏紅打

黄

同上主人 勝定院贈太政大臣義持公 黄御下襲御文桐丸唐織物御表袴地白御文藤丸色々

青朽葉 表青丹黒ミアリ裏青一説木賊色白ニ五月最勝講ニ至ニ七月下旬極熱之比又甚雨之時ニ着レ之但四月賀茂祭還立必着レ之歟

治承四年四月廿二日齋院御禊前驅山槐記曰右衞門權佐親雅闕腋青朽葉下重建永二年四月十七日賀茂祭還立明月記曰近衞使 右少將實嗣朝臣 今日青朽葉下重例縮線綾表袴

引耗(ヒツヘギ) 或稱ニ引折一一條家説不レ然下へ折レ之也仍稱ニ引折一歟近衞鷹司兩流端な捻也濃打板引也ふしがれの板引也ひとへの下重也文四菱

仁平元年八月十日台記禪閤命日四月賀茂祭還立以前着ニ引折一九月例幣之前着レ之無ニ殊難一自ニ五月一至ニ八月ニ不レ得レ着レ之故人所傳如レ斯者守ニ彼敎一不レ着ニ折引一也

白重 夏生絹也更衣は老若惣着レ之宿老人又高官不レ分夏冬着レ之冬用之時用ニ練絹一表はみがきなる用る或夏用ニ白穀一無レ裏

久壽二年四月朔日台記曰右大將中納言中將 師長 參ニ平座一但白重此中將着ニ無文冠青表袴一永暦二年四月朔日山槐記曰巳刻着ニ白重半比下重一用ニ無文穀白單白帷一也自餘如レ例宿老高官人冬用ニ此下襲一例寛治五年正月二日後二條關白記曰殿下 京極太閤 白打御下襲同六年正月二日臨時客同記曰殿下白重下重老人苦熱比着レ之例永久元年七月十三日 皇后宮行啓 長秋記曰左大

臣殿令ニ參內一給着ニ用薄物白重一四月灌佛頃不レ依ニ老若一貴賤用レ之例寛治六年四月八日灌佛後二條關白記曰予白重下重打表袴於レ冠者有文又曰中納言中將白重等如レ常永曆二年四月六日平野祭山槐記曰使少納言重雅白重螺鈿劒取レ笏

雖レ不ニ宿老一苦熱比大臣着レ之例

久安三年七月三日台記曰依ニ八講一詣ニ法勝寺一兩院幸之依レ之不參予行事也今日余着ニ白重一但有文冠已上

管見聊注付候染下襲之時染表袴候或雖ニ染下重一不レ染ニ表袴一も候大略見レ右所注之例候表袴染色も同注レ右候此外考之候はゞ種々可レ有レ之候へ共餘りに事永く候ゆへ閣レ筆候凡生下襲者大方捻重に候捻重とは端をぬひあはせてひねりかさね候此說出ニ胡曹抄一申候依ニ此說一候はゞかへしぬひと申やうに表より絲目を見せぬやうに縫候てぬひあましたる所をひねりたるにて候しかるに近年ひねりかさねとてはしをぬはずしてひねりたるばかりにてうらおもてはなれたる下重見え申候甚異樣に存候

晴一日晴事

此事何の比よりはじめ候とは無ニ覺悟一候治承四年十一月朔日春宮春日祭使立山槐記曰儲宮御母屋簾中御乳母奉レ抱先レ是主殿官人炬火時光來殿上召レ予余自ニ庇西一間御簾西一謁參入候ニ又御座の西方一宮頗令ニ六借一給御乳母洞院局云令レ厭ニ晴ヲ一給□□□□□□これは人をめすると俗語に申候詞の意に候歟

淺深秘抄曰上下晴褻一同下簾懸上は簾を後插下簾甚非也愚按淺深秘抄は後鳥羽院制作かと存候處如レ右候は五百年來は申習し候一日晴字は胡曹抄に見え候是は後世の事に候

一半臂

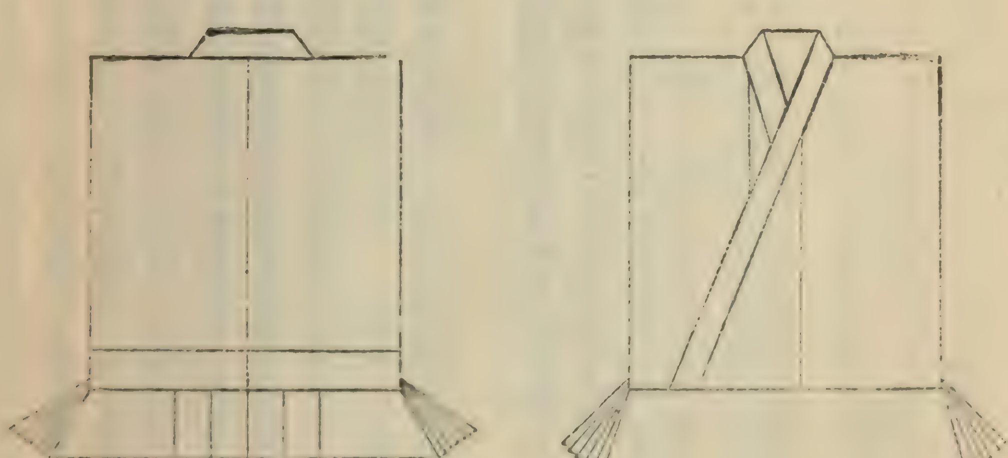
事物起原曰實錄曰隋大業中內官多服ニ半臂一除ニ却吳袖一也唐高祖減ニ其袖一謂ニ之半臂一今背子也

半臂と申物は筆にはのべがたく候へば下襲の袖なくて襴ある物に候その襴は横にながき物にて候夫を左右のわきに十二づゝひだをとり又うしろに六ひだとり申候畢竟短衣に候袍に對しては五分の三に候襴高サ三尺長一丈二尺に候一條家抄曰冬は（文小葵見胡曹抄）ふしがねに染（胡曹抄曰表生平絹水色）て板引にして着レ之滅紫色半臂と名づく裏あり夏は生の穀文三重たすきまた（襴忘緒共にふしがねにて）ふしがねにてそめて何れも襴忘緒はうす物なりたゝみて付候冬は一向略レ之舊

例も壯年人は半臂を着す老者必しも不ㇾ然由見えたり夏は大略用ㇾ之表衣がひとへにてすきて見ゆるゆへ殊更に着用す但襴をば猶略ㇾ之闕腋袍にあらざればは襴までは見えざるゆへなり或抄に云近代以二半臂小緒一結ㇾ之往古例は以二大緒二筋一結ㇾ之今世少二知人一云々此忘緒結様一筋二筋之差別分明に候へ共高倉家殊に被ㇾ秘候條不ㇾ致二口外一候半臂中絶候を去元祿中賀茂祭に左宰相中將公澄卿爲二近衞使一日考二舊記一且高倉家所ㇾ蓄之半臂を以て再興候き其時下官も預二相談一候故聊存知之候忘緒は左方に結申候なり一條家抄曰着二織物下襲一時用二同色半臂一（襴忘緒皆織物なり）不ㇾ用二黑半臂一是は染下重時用ㇾ之半臂を申たるに候染下重時半臂の色も下重の色にしたがひ申候但火色皆練の下重にて用二黑半臂一候此先例毎度の事に候

一打衣

是は奥に被ㇾ載候袿と申物同じ事に候うちきの語は打きぬの略たるべく存候打衣は袿の字の假名がきに候歟源語裝束抄に（後成恩寺禪閣抄）曰大袿の事衣と各別の物也衣よりはたけながく候其色不ㇾ定只衣と同體也と裁縫聊相替候小袿に對して大袿と稱す男の裝束にも女



のにも共以用レ之候衣と單との間に着候物に候此抄稱レ衣には袙の事かと存候凡裝束諸抄此打衣と申名目皆不レ載レ之候只餝抄にばかり被レ出候彼抄にも近代多く不レ着レ之由所見候又餝抄曰尋常之儀雖レ冬束帶着ニ打衣ー也夏赤帷上付ニ張袖ーと候此着用之義彼源語裝束抄と符合候仍打衣は衵のかな書にもやと存候

一衵（アコメ）

衵字从レ日と从レ白と兩樣之事从レ白者尤失也下官昏愚之至不レ足レ言候得共此字に限り白之儀決て無レ之由深存候和名鈔にも从レ日候說文曰日日所ニ常衣ー从レ衣从レ日日亦聲會意又女人近レ身衣と有レ之候和名鈔同用ニ此說ー候仍人々爲ニ婦人之服ー由有レ疑尤童女必用レ之候但必不レ限ニ婦人ー男女通用之服に候歟正字通左傳衷ニ其衵服ー以戲ニ子朝ー凡男女近レ身體衷衣皆曰レ衵非ニ女人內衣ー而謂ニ之衵ー也舊注泥左傳夏姬衵服謂ニ女人近レ身衣ー誤りに候委曲之儀注ニ袿之條ー下候衵字有ニ正字通ー同ニ衵にー候帕に候邪巾衵頭始喪之服也衵字を吉禮の美服に用候はいまく\しき事に候か一笑一笑

一大口　前張　紅張大口

大口と束帶之時表袴の下に着候袴なり幼年の人は生袴をふしがね染にて用候是濃裝束として單衣（ふり袖にはく）（ただむ）表袴の裏大口等をふしがねに染候十六歲以後紅を用申候紅張大口は別物にあらずこはくはりたる大口に候三條家裝束抄曰赤大口常着ニ用之ー候は生之平絹を紅に染て如ニ常大口ー縫レ之但四布也自ニ表袴ーも短きなり夏冬同物也裏同レ面大口袴は左方は腰をまわして前後をつゞけて右方は腰をひらきて足を入るゝ料に設候畢竟短き下袴に候也前張一名は前強（こへこハ）の大口とも申候童子半尻を着し候時着用之袴なり前方は絲すぢふとき精好を用ひて前をつきはらしめ候うしろは絲すぢほそき精好に候仍前張前強の名目有レ之候なり是に對して申候は今猿樂太夫着用之大口は後張の大口とも可レ申なり一笑千笑大口に平絹をもちひ精好をも用候建武元年制符地下輩精好大口一切停止之由見ニ玉英ー候

一直衣

此服は夜陰褻衣に候なり以ニ宿直之意ー稱ニ直衣ー候宿直とは令義解曰夜仕曰レ宿晝仕曰レ直と候得共殿上番をおしなべて宿直と申候殿上勤番人及夜陰所レ着之服に候尤衣冠とて平衣に袴衵を重て着ニ指貫ー加ニ位袍ー

候を宿衣と申候後二條關白寛治五年三月朔日日記曰予着ニ宿裝束一謂ニ之衣冠一候凡晝裝束と申候は束帶の事に候由永綱抄に見え申候衣冠も宿衣に候得共直衣は一段褻服に候さるにより白晝に着ニ直衣一て侍ニ禁中に一以外之無禮に候仍公卿以上依ニ勅許一晝着レ之直衣宣下と申候殿上人も可レ然人は蒙ニ雜袍の　宣旨一着レ之候（雜袍と申事殊之外六ケ敷候仍別に注レ左申候）束帶群參の日蒙ニ　勅許一公卿といへども着ニ直衣一事憚レ之候程之事に候然に近衞府者掌ニ宿衞ニ禁中一候其職掌異レ他之故に蒙ニ永宣旨一とて中少將者打任て不レ待ニ　勅許一着用候永宣旨とて永代勅許之　宣旨に候これを衞府之眉目に候されども此三四十年ばかりなにとなく着レ之人無レ之候て中絶のやうに候得ば好事の至に候へども存ニ本府之故實ニ下官去元祿中着レ之候き凡直衣は白綾の文臥蝶丸これは冬袍に候公卿已上及聽ニ禁色一殿上人着用候（辨官は雖レ聽ニ禁色一猶禁中憚レ之候）不レ聽ニ禁色一中少將は白無文綾を用候夏無文生綾を二藍にそめて用申候三條家抄曰春冬面しらゝ文浮線蝶同少年の人は丸の勢分にして聊繁く居レ之及ニ長大之時一次第に勢分を大に成て遠く居レ之也調樣面白して不ニ着色一フクサバリ裏サヤサヤと強張なり若年人は紫色年成長之時次第に薄く成候薄花田又猶年老て後は大略如レ白成なり甚く宿老の人は裏も一向白なり張樣は同事なり又至極老人は或着ニ平絹直衣一不レ着レ色張樣又同レ前童體之人面白浮織物文小葵重文之裏同前紫夏秋は無レ裏薄物文三重タスキ色は若年人二藍紫次第に濃花田薄花田後は大略如レ白成なり袖の端文は若年之人宿老共以無ニ差別一重文ミヘタスキ也又童體之人も薄物文小葵也色事二藍之帶事直衣切レ也（冬裏有夏無レ之）或文下重之切をも用也異說也

雜袍（ザツパウ）之事先年前右府（三條）息中納言（公充卿）元服之刻被レ申ニ請禁色一雜袍　宣下候此大臣息及孫定事に候其時中御門故大納言（資照卿于時議登公卿）雜袍何を以て稱し候哉と不審候き仍被レ尋ニ本家一候處依ニ先例一申請之由被レ陳候き資照卿以ニ識者一自負候處此儀以無レ所レ辨此不審出來候歟如レ斯事以ニ至愚未學之臆意一一決候は其憚不レ少候得共所詮就ニ舊記之所見一愚存之趣申候凡禮服朝服は所定之位袍に候此外に以レ着ニ交他服一稱ニ雜袍一候然ば束帶之外衣冠直衣等皆雜袍に候凡不正束帶而經ニ廻禁闕禮儀之地一候は無禮之至に候仍不レ蒙ニ雜袍

宣旨一して宿衣に候衣冠着し候事はあるまじき事に候然共末代之至零落之間人々平日不レ能レ正ニ束帶一僅以調ニ衣冠一致ニ專要一し候それも衣單等沙汰に不レ及候此儀常となり候人々似レ不レ知三衣冠之爲ニ雜袍一事に候只爲ニ職事輩一乍ニ略儀一聊如レ形正ニ束帶一候をそれも此職務の故實の樣に存なく候實無念之事に候さればあまりに手ぢかき事に候故人々似レ不レ知レ之候資熙卿も此程の事知まじきには候ねども被レ移ニ流俗一候而出ニ略樣一こゝ不審笑□千歲遺恨の事に候今聊管見之趣注レ左候

永元二年十一月十一日長秋記曰今夜丹波守家任朝臣侍從（公隆）昇殿各初參ニ中宮一六位進範隆補ニ藏人一中納言（家隆）問ニ下官一云侍從明日如何下官答云五節殿上人不レ待ニ雜袍　宣旨一直に着ニ直衣ニ云々不レ知ニ子細ニ可レ被レ尋ニ問時儀一者也仍以レ待尋ニ遣藤中納言（忠宗）許一返事立尋常儀三箇日間所レ着束帶也者着ニ束帶一令レ候ニ何事一有哉不レ待ニ雜袍　宣旨一着ニ直衣一事不ニ知給一者也中納言又問ニ下官ニ下官答曰只依ニ彼人命一着ニ束帶ニ可レ被レ候也是尋常儀也着ニ直衣一事不ニ覺悟一但丹波前司季房朝臣五節昇殿不レ待ニ　宣旨一着ニ雜袍ニ云々下官又如レ此其非ニ吉例ニ不レ可レ被ニ准據一重相尋可レ有ニ左右一事也者後日申ニ左大臣殿一仰云猶三箇日着ニ束帶一參事尋常儀於レ汝者三日昇殿初參三箇日已過畢而及ニ五節一候着ニ束帶一事無ニ便宜一着ニ衣冠一無ニ指故一仍觸ニ申故大殿（京極大殿師實公）之處一雜袍　宣旨不レ可レ被レ惜只今何事有也隨可レ被レ下ニ其　宣旨一也者仍隨ニ彼命一所レ令ニ着用一也

此記之意者中納言實隆卿之息侍從公隆聽ニ昇殿一候此日當ニ五節參入日一候（五節事本朝月令又見ニ江家次第傍書一候）凡五節者十一月中丑日舞姬參入至ニ寅卯辰日一設ニ曹局於禁中一候丑寅卯三箇日殿上侍臣遊宴候稱ニ之殿上淵醉一候此時は殿上人着ニ直衣一用ニ出衣一郢曲亂舞候因レ茲公隆始聽ニ昇殿一候故翌日着用之裝束之事を父實隆卿被レ尋ニ問師時卿一候其返答に五節頃聽ニ昇殿一候殿上人者不レ蒙ニ雜袍　宣旨一以前にも着ニ直衣一參入くるしからざるやうに覺たる心に候それは丹波守季房朝臣と其身聽ニ昇殿一時及ニ五節頃一候しに不レ待ニ此　宣下一して着ニ直衣一たるやうに覺たるとの事に候是は以前の事候にて堀川院の御時の事に候然共師時卿の覺たるもたしかならざるやうにより可レ被レ尋ニ問時儀一のよし候藤中納言と候は中御門右大臣宗忠公に候此時中納

言にて候き實隆卿以ニ待ヲ一被レ問ニ宗忠公一候處宗忠公返答に本儀聽ニ　昇殿一之後三箇日は必着ニ束帶一候て伺候候常の事に候へば被レ用ニ束帶一は子細あるまじきよし候宗忠公も不レ待ニ雜袍　宣旨一して着ニ直衣一といふ事無ニ覺悟一候由に候仍又實隆卿又此事被レ問ニ仰師時卿一候に其身の着ニ直衣一たるも慥不レ覺の意に候その上彼季房も師時卿も共に昇進はか〴〵しからず候へば吉例にてもなきとの事に候扨後日師時卿之父左大臣俊房公に其身不レ待ニ　宣下一して着ニ直衣一事被ニ相尋一候得ば俊房公の命には「師時卿直衣は不レ待ニ　宣下一して打任せて着したるにてはなし師時卿被レ聽ニ昇殿一候は十一月の三日に候へば及ニ五節之頃一候てはもはや着ニ束帶一伺候は過申候仍京極太閤其頃當職にて候はれ俊房公此事を被ニ申談一候に太閤の申分には雖ニ雜袍　宣旨一聽ニ昇殿一ほどの人には惜べきことにはあらず只今當座に　宣下もあるべき事なりされば先可レ被レ着ニ直衣一追付て可レ被レ下ニ其　宣旨一の心に候因レ茲師時卿は先被レ着ニ直衣一候ゆへ年久敷なり候て此有ニ　宣下一事を慥不レ覺と相見え申候以ニ此記之趣一見申候得ば着ニ直衣一事爲ニ雜袍一之一證に候」

禁秘御抄曰侍醫常近ニ天顏一者也略後冷泉院時俊通雅忠類聽ニ雜袍一着ニ紅梅直衣一紅梅直衣爲ニ雜袍一事分明候」

侍中群要曰行幸着ニ青色一節會行幸不レ着ニ雜袍一雜色下重等仍不レ着ニ紅色下重白下襲等一然而至ニ于青色一所レ着也稱レ不レ着ニ雜袍雜色一而至ニ于青色一所レ着と注レ之候時は六位藏人青色袍も爲ニ雜袍一事分明也

西宮記曰直衣王者以下及レ被レ聽ニ雜袍一者衣レ之此記之趣直衣被レ聽は衣レ之とはなくて被レ聽ニ雜袍一者と候得者雜袍は不レ限ニ直衣一事分明に候

侍中群要曰供ニ奉殿上一可レ尋ニ儀度一而晝時衣裝束亂髮褻服宜レ加ニ禁遏一寛平年制晝時着ニ夜服一は寛平所レ禁也衣冠は宿衣也白晝着レ之者不レ依ニ雜袍之　宣旨一者何用レ之宿衣冠亦爲ニ雜袍一勿論に候歟

一御引直衣

天子褻の御服に候禁秘御抄曰冬小葵櫻裏夏草の文如ニ臣下一御すそはなはだながくて引かれ候により御引直衣と稱し候御着用之儀は高倉家稱ニ秘說一候故不レ載レ之候御引直衣の時は紅のはり袴を召れ候

一烏帽子直衣

西宮記曰着ニ烏帽子一闇着ニ直衣一家中事なり不ニ私事一

ば不レ得二出行一（式部丞家中私行間着）後成恩寺抄曰大納言以上參院之時着レ之但可レ蒙二勅免一於レ私は依二便宜一用レ之無二子細一淺官人着二烏帽子直衣一事大井川逍遙之時藏人頭烏帽子直衣其外無レ例

一小直衣　狩衣直衣

狩衣に襴ある物に候腋はぬひひらき候二一物同事に候俗には傍つゞきと申候攝家は大臣已後着レ之清花は大將以上着レ之候浮文繁文堅文遠文依二年齡一用レ之其色は一向狩衣におなじ又用二唐紗一候太上天皇も是を御着用候是を甘ノ御衣と申候

一無襴直衣

是は無襴闕腋直衣候か斷絶久しく候ゆへゑかと不二勘得一候久安二年九月廿七日台記曰此日詣二石山寺一依二先年所立之願成就一也前驅公達十二人（殿上地下相交）諸大夫八人皆布衣餘着二無襴直衣一左近府生公春在二車後一

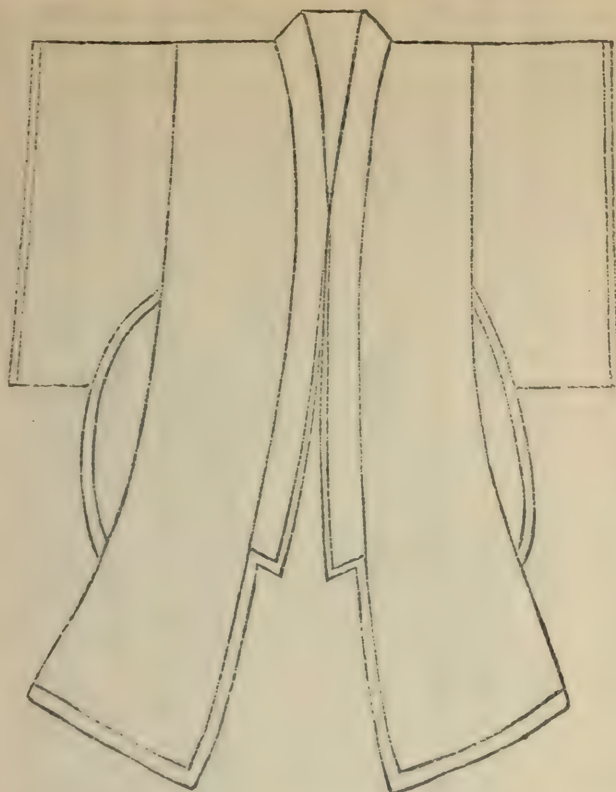
一長絹狩衣直衣

此名目何やらんにて見申候處亡失候間尋勘候得共不二見當一候所詮絹の小直衣に候長絹の事は下條に註申候

一出衣

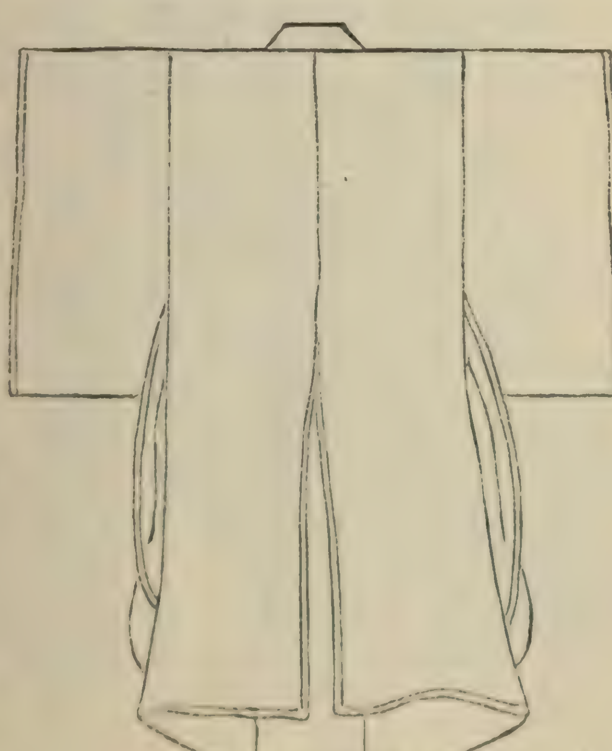
上に被レ出候打衣も下に被レ載候袿も同物に候出衣と申候は直衣衣冠等を着する時風流のためきぬのすそを聊袍のすそに見せ候やうに着なす事に候是を出衣とも申候又は出袿とも申候其着樣は高倉家殊に極秘と申事に候如二下官一最末の門弟には更に不レ及二口授一候然ども亡父故内府は故藤大納言入道（永慶卿）外孫にて故入道被二口授一候を故内府下官に令二申聞一候其上舊記にても少々見及候きかきあらはし候事は安き事に候へども高倉家の秘說と申事を恣にかきあらはし候も爲二彼家一心苦候故閣筆候出衣の裁縫をだにも可レ被二申聞一之由前藤中納言（永福卿）に所望候得共秘候よしにて出衣の體をさへ見せられず候き然處故大納言入道調候て故知德院禪閤（兼遐公）にまゐらせ候白菊の出衣今に一條家に是有候其きぬを故圓成寺殿下に申請候てうつしおき候高倉家の秘事には候得ども衣服の事に何かはさばかりの秘說候べきや上古はつねの事に候物を末代の事に廢絕候て知人すくなく候よりその家の人は何事も秘みつ秘みつと申て世にほこり候までの事にやと存候さりとて其門弟にて此儀破り候も其憚候へば先秘申すにて候されどもはるゞ〵と東

海百里をこえられたまゝ〳〵被ニ尋問一候をさせる事なき事をむなしく申し候も無下の事に候へば所持出衣圖にあらはし入ニ覽一候



一奴袴

和名鈔奴袴佐師奴枳乃波賀萬と和訓を付申候是はめづらしからぬ物に候得共着用の次第申候へば幼年の人は濃紫禁色をゆるされ候人はつゝき龜甲浮文綾を用候次は半色（經薄紫緯白絲に候）禁色の人は紋鳥襷、但具平親王の子孫は龍膽襷を用候次は薄色（むらさきの至て薄きなり）紋藤の丸の堅文織物四拾以後淺黄固織物を用候及ニ老年一では



付色とて綾の藤の丸の堅文を薄縹に染て着レ之殊に老閑の後白き藤の丸の堅文至極老候ては白平絹を用候先大略如レ此候へば官位の高下にて人々の所爲一樣ならず候若年といへ共高官なるは用ニ老年服一候乎

治左府爲二内大臣一時十八歳にて淺黄固文を用候されば官位高は雖二若年一用二老年一之儀賤官の人は年齡漸闌に候得共猶用二壯若一之儀候故實千萬不レ能二毛擧一候壯年の人は夏の指貫とて淺黄に候瑠璃色に染て着候裏は練裏候或二藍鳥襷生の指貫を用候是は高貴の人着レ之候綾の指貫は壯年夏冬通用候老年不レ用二夏之指貫一候薄物の指貫を用ゆる人は五月より着レ之九月九日以後は紫花色と申候表紫裏青指貫を用て十月十八日〔一日イ〕より冬の指ぬき用申候先は四月朔日十月朔日を更衣とさだめ候得ども家々所レ習說々様々不二一定一候あまりに紛紜に候ゆへ省略申候凡指貫とは袴のすそのくゝりをすそにさしつらぬき候故指貫と申候只今の奴袴のごとく括をぬひふくみ候はこめぐゝりと申候是は老年の所用に候へども末代無二差別一彼指貫の括は還て秘說の様になり申候幼年の人用二單指貫一事も候

嘉禎二年十一月十四日童女御覽玉蘂曰（光明峰寺攝政道家公記）少將師繼着二二藍單指貫一無レ裏不二禁色一人著レ之云々

下括

指貫の括を膝下にて結を下括とす上括は直にむすびとめ申候故無二其說一候下括は腹白みだれくゝりねずをさるをなど申括様に候これも高倉家秘說に候故子細出衣に同じく候

一下袴

下括にも上括にもよらず着二指貫一時は必其下に可レ着レ袴に候今も大臣などは小直衣に白袴を被レ着候則下袴に候若年の人は用二紅袴一候不レ然人は白袴を被レ用候彼大臣の小直衣に白袴を被レ用候は至極褻の服の體にて候指貫を略したるに候されば袴は可二必用一事に候得共末代の流風省略にしたがひ候より下括を用る時ならでは下袴は着ざる様に覺候是鄙俗のあやまりに候哉

一半尻

高倉家抄曰白かり衣のうしろの一尺ばかりみじかき物なり色目着用時節衣文帶等みなかり衣に同じ宮の御童體御俗體わかき御時着御なり攝家淸花の人もわかき時着するなり指貫に着をば衵など下具あるべき歟つねはたゞまへごはの白大口も着給なり

一狩衣

本名は布衣に候野行幸の時鷹飼の四位五位用レ之故

に狩衣の號あり布衣と稱することは凡我國衣服制公卿及聽二禁色一輩は有文の綾をもちふ五位以上無文の綾六位は絹七位以下初位以上布を用候但有位は有二品位之色一無位は可レ用之色無レ之候假そのまゝ用二白布一髻をあらはし不レ着二裝束一は夷狄の俗なり故に上古王制には貴賤となくつねに烏帽子をかうむり布服を着候所レ謂布衣是なり常服たるを以て布衣と稱す呉融が卜居詩に五陵年少如相問何對泉頭一布衣此詩よき注に候其色者有二品位一者年齡にしたがひて有二老若之色一具見二裝束一物具抄候仍不レ及二贅言一候淨衣は神古質素の風を用て無二貴賤一布を用候也

一白襖狩衣　白襖布狩衣　此襖儀詳注レ左候

延喜式大將大儀之服に薄紫襖中將は濃緋襖少將淺緋襖將監深綠襖府生近衞竝淺綠襖と候襖は武服に候上古所レ用着二裲襠一之日に必用レ之候今陵王を舞候舞裝束に着二裲襠一候常の闕腋の袍の袖を括よせ候これ上古の遺式と存候然ば上古の襖はつゝ袖に候樣後世袖をながくして直衣のごとくに縫なし候今の素襖と申物にて能見え候襖と申時は中古以來は領大頸端袖有レ之候左候はば只今の 素襖の裁縫樣同く 候歟仁平元年十一月十三日春日祭近衞使少將隆長還立之日其諸大夫大舍人助雅亮顯文紗襖耳袖大頸用レ錦之由見二台記一候耳袖は端袖に候歟雅亮所レ着て襖とばかり候同日記に隨身の裝束に狩襖と申名目出申候これはさだめて別に狩襖のぬひやう可レ有レ之存候古人ことの外此襖と申物をとりまぎらし候やらん後成恩寺禪閤の說に狩襖は繡をぬひくゝりぞめに致したる物を申よし見え候是も狩襖の一つの色にてもあるべく候得ども打まかせて繡を施しくゝり染にいたし候を狩襖と申べき其いはれなく候歟仁平台記にだにも赤色の狩襖藍摺狩襖纐纈狩襖所見に候殊には紺葛狩襖出申候紺はいろなり葛は布の名なり左候者後成恩寺說はたがひ候歟中世以來襖をとりうしなひ候て襖と申物を染色と心得たるかと存候胡曹抄衣の染色の中に蟲襖薄色と候或記に蟲色襖と注したる候蟲色と注したる比金襖白襖等を被レ裁候此襖は面青グロミ裏二藍又は彼胡曹抄面青グロミ蟲二藍なる蟲色と申にてもあるべく候はん比金襖もおもて青黃裏二藍と候是も襖の色と見え候へば似二無難一候得ども全體胡曹抄所レ載は衣の色目に候衣は祖杵の類にて定れる裁縫之樣

ありそれに襖と候こそ不審に候へさても白襖の衣と申候はいかなる物に候はん殊に不審に候ます〳〵不審に候はゞ白襖の狩衣白襖の布狩衣等を物具抄の狩衣の色目の部に載申候襖ならば襖にて狩衣ならば狩衣にてこそあるべく候へ難二心得一名目に候案レ之候にこれみな襖の裁縫中絶候より誤て染色と覺たると存候或人申候はすべてうらの付たる物を襖と申べく哉と候說は甚無二其謂一存候如レ此說候はゞ梅柳をはじめて狩衣にうらのなきは一も無レ之候皆襖と可レ申哉此言甚無レ謂候殊に況や襖は服の一名にて三才圖會旣に其形をあらはし候その上治承二年玉葉に右少將良通春日祭使の共の諸大夫源國輔還立の日着用之襖布白襖みがきにて（貝を以みがきたるにて候）端袖のぼり（大頸の事に候）頸（領の事に候）摺染唐綾にて替候由所見候所詮襖ははじめ申候とほり素襖と申は古の遺式と存候下は指貫を用候得共襖を着用の時は樣々風流の指ぬきを用候より襖袴の名出來と存候台記玉葉の所注紫指貫に柏をそめつけ或蒲萄ぞめ指貫に白絲にて蝶を置候また紫指貫に錦を以て樣々に股頸に裁入由も所見候白襖袴は着レ襖時の指貫無風流白にてもあるべくやと存候位襖は近衞式には大將薄紫襖中將深緋襖少將淺綠襖など候是位襖と存候白襖は仁平台記所載の白唐綾襖白霰地堅文織物襖此類に候歟綠襖紺襖縹襖此皆各々の色の襖に候比金襖はさきに申候表青黃裏二藍なるを比金色と申やと推量候件色の襖にてもあるべく候也

一小忌

小忌とは齋服に候諸司に小忌と申候者身二幅左右各一幅なり上四幅を紙捻にて閉候是を小忌袍の上に着，申候小忌袍とは白布闕腋に候

高倉家抄曰小忌形木又小草梅松水葵雉小鳥等也大甞會悠紀方文菊蝶主基方文松鶴六位藏人以二梅雉一一身四幅裾長（地布粉張文小草六位也梅木小形雉）下具如二束帶一着二打衣一付二赤紐一（長八尺二十二結赤二節黑二筋廣三分餘蝶鳥を繪に書或アイに押）地平絹 或綾臨時祭用レ之青摺身四幅裾長地 赤粉張瑩文桐 竹鳳凰其時不瑩二藍半臂下重陪從文櫻 欄人長文蘆 夏は青朽葉半臂下襲摺袴平指貫布在所意腰紫藤有置物なり綾ツカリノ組（青白二筋筋抄にあり）或錦織物等有用レ之件腰左右に結垂常には右計なりツカリノ組二筋或一筋或用二玉緒一有レ之下袴（濃色紅白）半臂下重同上打衣紅濃色四月臨時祭に着レ袒不レ着二打衣一或白單紅張單等用レ之赤紐青摺之時者左

肩に着長一丈五尺廣四五分計縫殿寮小忌身四幅布袍上に打懸着レ之前をば帶にヲシカフ後ヲモ帶ニ押入也日陰絲左右各四筋ニナヲ結色紅梅或白近衛司兵衛尉等用二紅梅一又青心葉梅枝楊枝金青絲結付赤紐を付右ノカタニ付レ之前に一筋後に二筋
式目抄曰赤紐左付之儀は表手の內に入レ之前に紐ノ鞆ニ一マトヒマトフ
　赤紐左右說非レ有二兩說一大嘗新嘗小忌者付レ右臨時祭等舞人青摺者付レ左依二袒裼一也
青摺摺樣之事
餝抄曰續飯を褁布ニテ形木ノ上ヲ叩テ布ヲ面ノ上ニ押付テ覆レ物蹈レ之其後形ノ上ニ山藍を葉計取集て摺レ之木ニテ以レ墨硯ヲ摺樣ニ摺レ之朽墨吉候云々無二山藍一時用二麥葉目波志木(めはじき)一云々頸帋(くびかみ)蝶小鳥小草斗身後長五摺レ之或三張蝶也
一淨衣
全體布衣なり祭服に用ふるを以て淨衣の名ある歟無二貴賤一皆用レ布是神古質素の風也太上天皇も內々御社參の時は着御あり裁縫の制は狩衣に同じ童子は生絹をもちふ淨衣の時袴は白布指貫或直用二織物等一奴袴事も常儀に候也
一水干
永綱抄曰上下水干は幽玄なるもの也上は布衣の前後のみじかき物也くびかみを內樣に折て烝りのごとくして着候をたりくびと云也たりくびに紐ありたりくびならば右の紐を肩より後に付て左の紐は頸帋の折伏せたるさきに付て左の袂より取出て前にすぢかへてゆふべし馬にのる時は右の紐をも後より前に同じ樣にゆふべしと候水干の袴は同抄曰長さきびすより五寸ばかりあまる廣さながさの半分なり但三分計まさりもするなり上下同色の水干ならば三四寸もひろしと候一條家抄曰紗にても平絹生にても又色は白にても何色にても大納言の時迄內々着二用之一陽明家には大臣又前途の後も如二長絹直垂一被レ着二用之一尤不審なり
葛袴は葛布袴に候建仁元久中後鳥羽院水無瀨御幸供奉度々用二水干葛袴一事見二明月記一候多は紺葛袴に候白葛袴も常の事に候白唐綾に龍繡たる水干見二百葉一候凡水干と申事は甚しき臆說に候へども愚案聊申試候此服は遊宴の服に候殊に內々之儀に候十之字水涯

の注有レ之候へば川逍遙などに用ひるより此名出來哉と存候此服用ニ蹴鞠一候事見ニ明月記一候近日鞠裝束とて飛鳥井難波兩家用レ之候は直垂に候袴葛袴指貫に候水干より出來候哉直垂より思より候哉異樣の物に候兩家私として搆出たる服に候哉色々品我國制とは倒置候新制法難ニ心得一義存候水干は不レ依ニ蹴鞠一袴の腰は水干の上にかゝり候古來如レ此候由存候得共管見に候へば他說有レ之否無ニ心許一候

一長絹

此名目事世俗不レ足レ言之語に候得どもいな事を申たる事存候長絹は絹の名と存候ゑかるを長絹の水干と申べきをたゞ長絹と計申て水干の別名の樣に人々申候はおほきなる訛に候惠命院僧正宣守抄曰凡絹有ニ三種一謂ニ長絹平絹細絹麁絹一是なりと候此抄三種と候得共數は四種に候應永の頃までは長絹と申一種有レ之候と見え候今も平絹は勿論絹の上品なるは細絹下品なるは麁絹とわかれ候長絹の名取失ひたると存候今の世も有レ之候得ども不レ辨ニ其名一をたゞに平絹と存候哉但そのかみ有ニ各別之法一而依ニきぬの長短一相分るゝ事候哉惣而不レ知レ之候長絹は不レ限ニ水干ニ右に出され候長絹狩衣直衣長絹狩衣等の名舊記毎度所見候なり

一直垂鎧直垂

中右記台記等載レ之者皆衾之事に候保元物語錦の直垂所見候外不レ及ニ管見一候治承二年正月廿三日山槐記長刻凌ニ大雪一自ニ中山堂一寺歟參ニ鞍馬寺一於ニ美曾呂坂一逢ニ右少將維盛朝臣一折烏帽子着ニ直垂一小袴行縢騎馬侍五人騎馬在ニ前後一人十餘人下ニ居波太枝堂一今曉爲ニ狩獵一向ニ櫟原野ニ元久元年七月十二日明月記曰太政大臣着ニ直垂一參ニ御狩一愚見如レ此候就レ之申候得ば直垂は便服にて其頃は專狩に用たる歟と存候凡直垂事年來意をとめず候ゆゑ甚恍忽に候直垂は武服と存候鎧直垂と申も別物にはあらず常の直垂の上に鎧を着たるにはあるまじく候や直垂に大口の袴を用之由被レ示候さもあるべく候得共無ニ覺悟一候單の直垂には大帷かさねられ候よし無ニ覺悟一候得ども申て見申ば單の直垂夏の服たるべく候然ば用ニ汗取帷一は勿論の事と存候大口の制用ニ朝服一義には其制不レ同之由さも候か無ニ覺悟一候尤足利家繁昌頃官家之輩ひたすら用候樣に薩戒記等に見え申候着用次第直垂は袴にきこみ候事ふ

るくは直垂は纔着の程にて袴の上に着てあて腰を用たるやうに聞及候是もゑかと記錄にて見たるにては候はず下官妄被レ引二好古之癖一不レ好レ用二直垂一仍如二棄置一候間一向覺悟なく候

一袿　大袿　小袿

袿の字事哉用二褂字一事褂字無二字書之所見一候袿之字正字に候和名鈔載二袿字一即宇智岐と訓を註申候袿と候は大袿に候對二小袿一候此只大小の分に候但小袿は婦人之服に候

大袿事

三條家裝束抄曰　衣事或は衵トモ稱レ之但當家存知之分東帶之下ナドニ重用ルハ纔着（タケトヒトシキコトナリ）以レ是爲レ衵直衣幷狩衣の下に用レ之は莫二太長一也以レ是爲二差別一爲レ衣直衣の下の衣は夏冬大略無二差異一（生ニモ用え）色は薄色萌木紅黃蘇芳紫紅梅女郎花（生モ用ニ是等一也）壯年之人用レ之白色長年之人用レ之皆綾なり面フクサ張裏（平指）色同面サヤ〳〵と張レ之如二女房薄衣一中年以後人は白衣に用二ゑヽ羅綾一常事なり文事小葵窠形浮線蝶丸若年之人は繁文老大之人は遠文也是は皆尋常之時用レ之分也異晴時顯職幷壯年之人或浮織物唐織物など隨レ時色色衣ヲ出衣ニ用レ之其色等委細不レ及二注一ニ分明見二古記一なり衣色ニ注レ右候下重の色に同じく候仍略し候

三條家抄衣とは名目は無二其謂一事に候へ共そのかみより申ならはし候畢竟袿衣の意に候出衣稱レ袿候事知足院關白春日詣裝束嘉承元年十二月十六日永昌記曰御衣冠立沸雲織物御奴袴紅出袿御野劔笏これ出衣の義に候三條抄衵と同物たるよしに候へども愚意には聊か有二差別一存候袿と申時は領さきを刀の刃のごとくすぢかへに可レ殺（そぐ）被レ存候唯今單衣も衵も皆かたなのはの樣に領さきを裁候へどもこれはおやまりと存候愚意は單衣衵等は領さきを直しなすべき由存候ゑりさきをそぎ候事は袿に限りたる事と存候釋名曰婦人上服曰レ袿其下垂者上廣下狹如二刀圭一然ばかの領さきを斜にそぎ候は刀圭の形たるべく候刀圭は本草云十分方寸匕之一準如二梧桐子大一也

刀圭はさじの事にて候へども領末をそぐ所刀圭のごとしと申物にもやと存候尤婦人の服には候へども男子着用之義異朝にも有レ之候歟江充は着候事載二福會一候

小袿は餝抄曰衣の上にひとへ單の上に打衣うち衣の

上にうはぎ表着の上に小袿其上に袴をきるなりながさ小袖にひとし中倍裏あり寸法次第上にきるはおめらかすなり久安六年正月十九日女御入内露顯台記曰三位整ニ衣裳一蘇芳織物は領青單萌黄織物五重着ニ濃打衣赤色織物五重唐衣白羅裳濃袴一是入内夜皇太后所レ賜之裝束之着ニ小袿一否頗有レ所レ疑寛治五年御暦云使能遠獻ニ御衣一色々御衣紅打也衣萌木衣着ニ蒲菊小袿一赤色唐衣地也摺裳云々如レ此文者似レ重ニ着小袿一先日高陽院侍四條太后語曰着ニ唐衣ニ不レ着ニ小袿一着レ袿不レ着ニ唐衣一是也今依ニ此言一案ニ御暦文一唯記レ所レ獻不レ記レ所レ着時不レ用ニ小袿一歟仍今日不レ着ニ小袿一釋名爲ニ婦人服一者小袿事に候歟小袿は婦人外不レ用レ之大袿男女通用候也

一素襖袴

委細注ニ襖條下一候素襖袴とも有レ之由被レ示候此字於ニ愚意一は不レ可レ用存候享德の頃より所見之由注素襖袴はさも候はん上古襖の遺式と存候唐綾襖に對して布を用候を素襖と稱し候は殊勝名目とこそ存候へ

一寘霰

縮線綾と申て浮文の石疊の中に寘の紋を織申候物に候寘と申は木瓜を截たる象をうつしたると申候寘中央に蝶の丸文を織て其傍に龍膽を織候を攝家は御用候具平親王子孫久我一黨同用レ之候凡家は藤を織たるを用申候　天子は只中蝶ばかりにて傍に文なきを着御候皆用ニ表袴一候縮線綾はうき織物に候へども堅文の寘霰にも所見候嘉祿二年八月廿一日宰相中將爲家朝臣霰地堅文表袴を用

一窠形

菱のごとくにてきはめて四角なるを窠形と申候今も舞人の下襲には有レ之候其形を用て花の類ひをも窠形に織なし候有レ之候久安四年八月廿五日台記藤原多子叙ニ三位一中使の綠二藍窠形織物唐衣濃張袴等所見候也

一二藍

赤花と青花と交て染レ之色に候夏直衣専用レ之候淺官若年の人はあか花をおほく加候て色濃く染申候年のつもり候にしたがひ赤花を減じ候漸年齡闌なる人は赤花をとゞめて青花ばかりにて染申候老年の人は青花をうす〳〵とつかひ候て白程うすく染申候

一龍膽
りうだんと讀申候常にはりんだうと申候歌には思草とよみ申候又衣の色に此名目は表蘇芳裏青衣を龍膽衣と申候

魚綾
山鳩色のよし胡曹抄に見え申候

嶋摺　未ニ勘得一候

練　練貫
綾絹等のねりたるを練と稱し不レ練は生(スヾシ)に候練貫は生の絲を經とし練たる絲を緯として織たる絹をねりぬきと稱して十六歳以上卅歳迄は此小袖を束帶の下に用申候練貫と申べきを兒女子の類練と計略して申候にうつされて人ごとにねりとばかり申候歟と存候

一玉帶　有文巡方　有文丸鞆
本草綱目釋名所レ謂玄眞之類に候說文云玉乃石之美者と候實に其實體は難レ辨候所々に美麗の玉帶有レ之候得ども眞實の玉とおぼしき物は未レ及レ見候下官弱年之時源修院故內府公(伊季)印籠の帶付にせられ候こそ眞實の玉と申べき物かと見請申候き常々にもてふらし候玉帶とは色あひ各別の物に候古人も樣々玉の目利を申置候得共とかく眞實の物見不レ申候彼內府の帶に付候は本草の集解に所載の出ニ于闐一疎勒潔白如ニ豬膏一候樣に色極めて白き中に少し黃ばみたるいろあひにて能すきとほり光澤候ながら物の形はうつらず候彫物も異朝の細工と見え候き何と申事失念致し候是や眞實の玉にも候はんかと存候妙法院宮に有レ之候は秀吉關白の帶にて豐國神寶之中にくづれたる石帶候是は璧玉の類に候歟光澤有りてしろきながらすこしあをみたる色あひに候うちあはせ候得ば響有レ之候有レ響は眞實の玉にあらざるよし其說候世俗淺深秘抄曰玉帶見ニ知實作玉一事秘說也古帶中非ニ實玉有レ之古人不レ知ニ秘說一歟實玉は打合せて聞レ聲無レ響如ニ石聲一作玉者聲有レ響如ニ瑠璃聲一作り玉は易レ破實玉は不レ燒レ火不レ破也此秘藏說也如レ此候但本草集解に叩レ之鳴者是眞也と候然ときは淺深秘抄の不レ鳴を實玉と候はいかゞ候はん只今人々の用候は白石の少々光澤のあるを用候其形勢方直なるを稱ニ巡方一無文巡方者天子所レ御人臣無用之儀至ニ巡方有文一人臣用レ之稱ニ隱文帶一節會行幸等參議以上帶ニ餝

劔螺鈿劔ニ時用レ之有文丸鞆者一條家抄有文巡方丸鞆通用之物也非ニ節會行幸時有レ便云々但物具裝束抄には子細同有文巡方と候丸鞆とは其形勢平圓而殺ニ其下際一少直に候無文丸鞆は尋常に用レ之帶ニ蒔繪之劔一時必用候玉帶の文之事鬼形獅子形唐花等有レ之由見ニ餝抄一候此內鬼形とて今も羅漢の樣なる物彫たる有レ之候眞實の鬼形は古物を不レ見候へばよしともあしとも難レ申候玉帶を石帶と申がたく候得ども瑪瑙は石にて候へばなぞらへて石帶と申習したるかと存候將又上古とても玉帶は大切に候故か紀伊國白石を用レ帶事延喜彈正式に見え候得ば多くは石帶と可レ申候歟

一瑪瑙帶

本草曰釋名文石（摩羅迦隸）佛書藏器曰赤爛紅色似ニ馬之瑙一故名時珍曰按增韻云玉屬也文理交錯有レ似ニ瑪瑙一因以名レ之根本瑪瑙の帶と申は皆丸鞆にて十具にかぎりたる由見ニ舊記一候上古異朝より所レ渡に候四位人尋常に用レ之臨時祭舞人は必用レ之候瑪瑙は丸鞆にて通用候由見ニ長治三年四月廿二日爲隆記一候但巡方瑪瑙の帶只一筋有レ之候されば攝家累代の珍物にて法成寺之寶藏に被ニ納置一候由見ニ玉葉一候文治三年三月廿五日彼記曰今日始開ニ法成寺寶藏一取ニ出帶箱三合一使家司左京權太夫光綱件帶箱黑塗圓桶三合三桶玉林瑪腦此中巡方瑪瑙有ニ一筋一世間所レ在瑪瑙皆丸鞆也此外無ニ巡方一玉葉所見如レ此候處西洞院正親町院等彼十具之中累代傳來之由被レ稱候件之帶うるはしき瑪瑙にて彼十具とも可レ申候へども巡方まじり申候へば眞實の十具にては有間敷存候後渡の瑪瑙おほく候ニ巡方も丸鞆もかず〲になり候但巡方は巡方丸鞆は丸鞆と分れたる無レ之候皆巡方丸鞆まじれる通用帶にて候へば根本の瑪瑙にてはなく候法成寺も滅却候て年久候へば彼一筋の巡方も紛失候歟いづくにありとも不ニ承及一候十具丸鞆もみなほろび候歟そろひて實にさもあるべきと見え候程の瑪瑙の丸鞆も見およびたる事無レ之候一條家抄に保元三年內宴之日法性寺關白赤色袍瑪瑙帶を用らるゝよし見え申候又物具裝束抄に瑪瑙帶巡方曲水宴野行幸關白用レ之候是今彼法成寺一筋の巡方瑪瑙にて候はん實に失はてたる事惜みてもあまりある事に候

一瑠璃帶　金靑玉

銹抄青瑠璃を金青玉と稱する由見え申候本草曰釋名火齊珠に候時珍發明等赤白以下出二十種一候其中青綠縹紺の四種見え申候銹抄云青瑠璃先年商人持二參之一故母義三品殿取レ之賜レ予但何事に可レ用と云事不二分明一而經賴卿記次將節會用レ之由注レ之と候此外之儀は不二勘得一候

一斑犀帶

本草釋名兕の角に候郭璞の注似二水牛一と候今所用之斑犀は大略水牛に候昔より水牛を用たるに候や銹抄にも牛角と被レ載候四位五位之人用レ之巡方丸鞆兩様候其用儀は公卿玉帶と同じく候本草集解曰文理膩の細斑白分明俗謂二之斑犀一と候いか様にも今も宜き帶は斑白明とも可レ申候是も名物品々候鴛鴦通天鶴通天狗錦等名見二諸記一候故東園大納言基量卿說に斑犀の色目鶴羽の色に似鴛鴦の羽色に似候に付て有二此名一之由被レ申候き下官此說うけられざるのよし申候き彼亞相所存候尋常の斑犀の看を以て推量の說に候證文なく候て難二承諾一候由申候愚存は通天犀と申時は本草所レ謂駭鷄犀花文犀 絕品者有二百物之形一など見え申候彼鴛鴦犀はをし鳥の象自然に犀角の文に現在し鶴象直現在するにて可レ有レ之候不レ然候時は攝家累代之重寶珍物とは難レ申候由申候きさりながら斷絕の物を推量に申候へばいひがちに成り候事とをかしく候鳥犀とてくろみ計用たる帶候是は六位の人用レ之事候

一銹劒

銹劒とて只今人々用候は尤足芝引逆輪等の金物彫すかしたるは各別見え候得共全體は蒔繪に候銹劒ならんにはなどか蒔繪螺鈿にては候べき銹劒代と申候さへ木地にて候物を眞楯卿の劒と申候も先日申候如く甚疑しく存候

嘉祿三年正月朔日宮槐記（野宮左府公繼公記） 曰如法銹劒とて裝束所レ彫透たる所足石衝責の所長足は如法銹劒也如法銹劒とて强非二異樣物一只常劒の內に裝束所如レ此銹レ之玉居などしたる也かやうに候へば只今の銹劒さのみ違ひたる物にはなく候へども梨地蒔繪はちと不審に候梨地蒔繪劒は唯今は常になり候樣にて打任せて用候へども舊記には見及ばざる物に候たゞ／＼淺深秘抄頭書等に梨地のたち見え申候故さては梨地蒔繪劒も有物と始て存候程の事に候銹劒代と申物

之レ有候承元四年正月朔日玉蘂曰餝劔代其勢如二螺鈿劔一以レ金懸二伏輪一紫檀地上唐草丸摺貝は其柄瑠璃露同レ之殊勝物也

一細劔

螺鈿劔蒔繪劔皆細太刀に候先日申入候儀刀木刀の類にて眞劔に不レ有なまがねにて作りたるにて候

一野劔

是は眞劔に候蒔繪野劔螺鈿野劔蒔繪螺鈿劔野劔三つの品これ有候蒔繪野劔は平生出行の時車に入歩儀には人に令レ持候一條家抄曰蒔繪野劔革帶なり大將直衣始幷御幸供奉之時用レ之可レ依二先例一也大納言直衣始にも猶用二野劔一之由見二承久三年正月玉蘂一又長者之後春日詣衣冠之時着二蒔繪野劔一爲二代々例一之由見二寛喜二年二月同御記一餝抄曰近衛次將外衛佐等常令レ持也（束帶出仕之時相二具劔一）卒爾隨レ役之時多用二此劔一也或宿老公卿高位之人常令レ持レ之（或付レ韈）公卿爲二遠所行幸一之時着二蒔繪螺鈿野劔一木地次將行幸之時多用レ之而近代次將或用二蒔繪螺鈿野劔一此劔を平鞘共申候眞劔に候ゆへ鞘をひらめにいたし候仍得二此名一候また革緒劍と稱し候革緒平緒便に隨而用由見二西宮記一候へども先用二革緒一候ゆへ此名候毛拔形劔とも申候眞劔に候ゆへ目貫をはしらせじのために目貫に毛拔形を打て手に握らしむる樣に拵候一物四名に候蒔繪獅子或獅子蠻繪海浦等所見候海浦とは海松貝に波紋を書候柄は銀の熨柄も候もとより鮫柄も候又衞府劔とも申候六衞府官人用レ之候故得二其名一候衞府官人用レ之候は眞劔の故に候一條家抄に野劔平鞘を各別の物の樣にゑるされ候はあやまり也

一螺鈿劔　木地螺鈿　蒔繪螺鈿　樋螺鈿

螺鈿と申候時は必木地螺鈿に候用二紫檀鞘一を檀地螺鈿と申候下官携二紫檀地鸚鵡螺鈿劔一先日入二賢覽一候螺は貝に候鈿は全革餝と字注候貝は靑貝に候鈿は金貝に候又沉地候鷹司家抄曰沉地鷹橋御劔事（京極大殿）實金（葉靑瑠璃）花銀凡螺鈿劔文は鸚鵡孔雀鴛鴦等に候蒔繪螺鈿は一條家抄曰遠所行幸公卿帶レ之又拜賀之時必用レ之如レ此候得共行幸に用レ之候立太子節會等にも用（でい）レ之候文は螺鈿同前に候これは沃懸地にて粉と金貝に（金泥なり）金をまじへてまきたる劔に候

樋螺鈿劔は樣々の樋有レ之候木地樋有レ之候餝抄曰先年隱岐院御逆修御法事の日予爲二三位中將一用二樋螺

鈿劔一（樋に景華摺樋普通よりは廣輩に見え候）入道相國帶二螺鈿一之由傍難云
云其時上皇仰曰樋螺鈿劔は通用の物なり云々人々閉
口之由聞レ之

黑樋劔

同抄曰嘉禎元年十二月十九日御佛名次或公卿語曰京
極大殿常被レ帶下有二黑樋一劔上件劔銀細樋上下渡之中
黑地蒔繪處唐草上下沃懸地云々樋寄二上方一歷之時古
人不レ執二蒔繪劔一執二螺鈿劔一云々此劔有二二腰一傳在二
花山院一云々

銀樋劔

安元二年三月六日（法皇御賀後宴）玉葉曰午刻着束帶打重堅文
表袴沉地銀樋螺鈿紫緂平緒

金樋劔

同上關白堅文織物柳下重（打裏）堅文表袴沉地金作樋螺鈿
劔紫緂平緒

金樋蒔繪螺鈿劔

治承元年十二月十七日（蓮花王院塔供養）玉葉曰着二束帶一色目
如レ常金樋蒔繪螺鈿劔紺地平緒

水精樋劔

文治三年正月三日臨時客玉葉曰紫檀地水精樋金作劔
件樋底以二緑青一透二波形一以二金魚形一作レ之

金銀樋劔

保元三年正月十日（朝覲行幸）人車記（兵部卿入道信範卿記）曰右大臣殿御
裝束如レ常水精柄沉紫檀地孔雀螺鈿金銀樋御劔按二此
記一候に鞘の裏表を一方づゝ沉と紫檀とにて一方づ
つ分けて作りたるに候其一方は金樋一方は銀樋を入
て風流に作りたる劔に候畢竟樋と申候は金にも銀に
も水精にても蒔繪地に本地をのこして中央に筋をと
りたるに候其用樣は時儀に隨ひ人により變轉無レ極
候也

一蒔繪劔

鞘をふんぬりに致し候を沃懸地と申候其上に樣々の
文を繪がくに候尋常出仕用レ之候仁平元年二月廿
二日侍從隆長拜賀台記曰慶賀笏鶴通天帶（丸鞆）鸚鵡螺鈿
劔（蒔繪）孔雀平緒（紫緂）已上禪閤備賜承安五年四月廿四日
侍從良通拜賀玉葉曰蒔繪劔（御堂御劔蒔二鸚鵡一）壽永元年十二月
廿日中將良經拜賀玉葉曰申刻着二束帶一色目如レ常
革手蒔繪劔大殿御笏瑪瑙帶具平親王海浦白蒔繪劔
見二餝抄一候

一革手

歌の意を蒔繪にして繪のあひだに歌の字を入たるに候花鳥餘情曰あしでの色葉は蘆の葉の中に文字かく也水石鳥など形にもかきなす也中峯和尚のさゝの葉かきと云文字の體を篠の葉に似たるがごとき也下官所レ持葦手白蒔繪先日入ニ賢覽一候

一沃懸地（イカケ）

蒔繪劍之條下に注申候通に候然共殊更撿非違使別當用レ之候無文沃懸地の樣に見え候得ども遠文の蒔繪を用由見ニ餝抄一候無文沃懸地は輕服の劍と存候

一金作劍

黄金作に候得共必黄金不レ可レ有レ之存候黄金作は餘りにおもく候而殊に餝劍などは帶取の韋不レ堪候臨事の時きれ申煩有レ之候金のやきつけを可レ用候東山左府（實熙公）說に金作劍は大臣以上用レ之銀作は納言以下用レ之由に候此說一定の法とは不レ存候勘ニ延喜式一候近衞中少將劍金裝所見候衞門兵衞佐も金裝之由候東山左府不レ依ニ式文一被レ定ニ此說一候事不審に存候殊に況彈正式にも純素金銀及白錫聽レ爲ニ五位以上服用之餝一如レ此候何依ニ金銀一大臣與ニ納言一可レ在ニ差別一候哉金銀にて別に彫刻あるにあらず劍金具皆用レ金也

一平塵劍（ヒラチリ）

長和二年正月十日小右記曰内大臣着ニ平塵劍無文帶一同四年十月廿一日同記予着ニ平絹柳色下重平塵劍一一條家抄曰蒔繪劍號ニ平塵劍一今按古人蒔繪劍は沃懸地のふんぬりにて候へばあらふんなど申て金を粉にして蒔候故平塵の名出來候歟

一薄塵劍（ウスチリ）

輕服劍に候貞治三年後愚昧記曰（後押小路内府公忠公記）心喪服冠袍大口帶襪沓扇笏以上如ニ恒劍一（沃懸地）下重（淺黄或青朽葉）平緒半臂同上表袴（面鈍色裏紅）單白帷（同上）是も無文沃懸地のうすくとふんを蒔たる劍に候

一黑漆劍

名目は黑漆劍に候延喜彈正式曰凡畫餝劍五位以上聽レ之と候仍五位以上者不ニ蒔繪一劍はかりそめにも不ニ用申一候黑漆劍は六位以下劍に候諒闇中公卿以上用レ之依ニ凶事一撤ニ其餝一候故止ニ蒔繪劍一用ニ黑漆劍一候是は常を變ずるを以て凶服とする故に候凡凶服は依ニ恩之淺深情之厚薄一候恩深は情厚恩淺は情薄候喪人制ニ五等服一從ニ其情一候されば至ニ重喪一は一切止ニ帶劍一候輕服之時或用ニ薄塵一或用ニ黑漆一用ニ薄塵一は

情薄者也安元二年建春門院崩月輪禪閤兼實公用二黑漆劔藍革劔一保元二年鳥羽院崩花山院相國忠雅公黑漆黑金物白革劔用レ之且柄金物塗黑此兩相國雖三同用二黑漆劔一又有二淺深一者歟凡凶喪之儀義のゆるさゞる所はさらに情にまかすべからず禮の節目あるはいさゝかもこゆべからず情之厚薄は依二恩之淺深一禮之節目者預二義之輕重一到二柳楊取捨に一は雖レ擧二百千之例一惣不レ可レ盡候六位以二黑漆劔一爲レ常此禮はきはまる所あればなるべし

一鳥頸劔

鷹飼所帶之劔に候銀作りにて螺鈿劔の柄頭に鴛鴦の頸を造りて付たるに候斑猪の尻鞘に入候由見二天永四年師時卿記一候今の世にも小兒の所レ翫俗に云裝束ひなと申候人形の劔皆柄頭鳥頸に候箇樣の類に候歟

一尻鞘

虎豹猪鹿の皮毛を表になして劔の鞘にかけ申候今俗に引はだと申候體に候引はだは鍔際に至て懸候尻鞘は帶取のうしろの足革の間にてとめ申候仍號二尻鞘一候歟臨時祭舞人用レ之白馬節會叙二列五位次將一必野劔入二尻鞘一候

一竹豹

臨時祭舞人專用二此尻鞘一候竹豹とは穗竹之豹也此對二水豹一稱二竹豹一候歟詳に注二馬具左筆筒條下一候也

一鹿皮

春日祭近衞使路頭之間蒔繪野劔加二鹿皮一弘尻鞘由見二定家卿抄一候

一斑猪

仁平元年十一月十五日春日祭陪從裝束台記曰猪皮尻鞘久季申云須レ用二斑猪一難レ得或用レ猪

斑猪とはまだらなる猪に候まだらなる猪有レ之物候哉委不レ知候もし猪子の毛は筋のごとくにまだらなる物のよしに候へば用二此皮一候歟

一繪尻鞘

左近府隨身用レ之候春日祭舞人或用レ之左近衞は豹にて畫二鍔文一候右近は虎文に候畢竟繪尻鞘は實は不レ用二豹虎皮一繪にて尻鞘を作り左は豹毛をゑがき其上に畫二鍔魚形一候虎も同前に候惣て皮毛の上には彩色は施がたく候歟治承二年十月晦日玉葉曰繪尻鞘劔（虎皮文衣也）

衣の字假名書にて訓を假たるものに候是每度舊記

之例に候絹に候
建暦元年十月廿二日或記曰繪尻鞘劔鰐文地は虎皮色取レ之其上鰐文也所見如レ此下官は繪尻鞘以レ畫レ鰐得ニ魚形之名ー由覺悟候僻案にもや候はん右魚形由被レ示候此記出所承度候猶勘候而備ニ後來覺悟ー度候
一細尻鞘
先に申候臨時祭使春日祭使路頭用ニ弘尻鞘ーこれは用ニ平鞘劔ー之故也對レ之申候はゞ細劔の尻鞘にて候はん但只今此名目不ニ覺申ー候出所之記錄可レ被ニ示聞ー候
一平緒
一紫緂平緒
緂正字斷字たるべく候音を假借して段緂緂の字通用候是も舊記の常に候一物にして異名ある歟由これは定而青斷與ニ樗斷ー事に候歟此儀委注ニ青斷條下ー候紫斷と申候は白與レ紫村濃にくみませ候仍如ニ斷字ー候紫地平緒も候か見ニ一條家抄ー候此平緒繡多用ニ黄鳳ー候以ニ黄絲ー繡ニ鳳凰ー候錺抄曰孔雀尾長鳥唐花四季花繡レ之由見え候何樣にも黄絲は紫にも白にもはえあひ候よし鮮淸に候節會行幸拜賀等用ニ此平緒ー候此時劔裝束紫革に候
一青緂
緂の字儀同上青斷は稱ニ棟斷ー同物に候凡平緒は下重の色にしたがひて用事に候へども此平緒は通用物と存候其故は青白紫等交候故に候實は青緂に候へ共五月着ニ青朽葉下重ー仍用ニ青緂ー此平緒青白薄紫相交候故棟花色に似候五月此花咲候就ニ時節ー稱ニ棟緂ー候正月用ニ躑躅下重ー（元來作蹴今改レ之）着ニ此平緒ー例有レ之候舊記既に稱ニ棟斷ー候へ共正月不レ可レ稱レ樗可レ稱ニ青緂ー候錺抄にも青緂或稱ニ棟端ーと候鷹司家裝束抄曰衣笠命云樗花開頃五月許着レ之云々而手綱は不レ嫌ニ時節ー樗緂は青緂紫緂交也仰云四五月比着レ之青緂有ニ薄紫匂類ー之由有ニ一說ー而多は青緂紫緂相交此事猶不審前右公衛公二具所持兩緂相交云々物具裝束抄曰青緂棟緂平緒同事也以上所見如レ此候然るに名目抄棟緂平緒訓をハジダシと付樗緂平緒にチヨダンと訓し候樗棟樗三字訓皆あふちと和歌に用申候定れる事に候殊に況和名鈔棟字和名阿布智と候なにとて名目抄あやまり候やらん實凞公の自筆はかやうにはあるまじく候名目抄棟字を樝の字に改べく候歟

櫨緂

黃緂平緒に候諸抄私用レ之由に候櫨ははじもみぢとて紅葉に便あるにより用レ之と存候仍繡二蘭龍膽一候黃朽葉黃菊等下重に用レ之宜候歟裝束は櫨革に候

一帽緂

此字不二覺申一候此平緒は無二所見一候書損と存候

一樗緒

子細注二青緂之條下一候手綱事平緒の通りに候唯今紺緂の手綱多く有レ之候紺と白の斷に候是を以て樗斷手綱可レ致二准知一候

一弓

蒔繪可レ隨レ箙歟各別又不レ可レ在レ難或摺貝此餝抄說に候摺貝は螺鈿に候弭字弓頭に候銀彫物と候は弓のうらはづもとはづをかねにてはり候其金物をけぼりにするなり塗物とは滅金燒付の類に候か或赤皮にてはり候も有レ之其紫皮をうらとするよし見二吉部秘訓抄一候眞卷（まき）或は眞樺とも申弰字は字書把レ中と注し候和訓不審とりうちに候平家物語第九白ゑげどうの弓のとりうちの本をかみをひろさ一寸ばかりに切てひだり卷にまきたるこれぞけふの大將軍のゑるしとは見えしこれ則眞樺の事に候白檀紙或紅梅色紙靑薄樣等用レ之候弓蒔繪委く舊記無二所見一候

一平胡籙　木地螺鈿　蒔繪螺鈿　蒔繪

木地は沉地紫檀地所見候蒔繪樣蠻繪治承二年正月圭葉に見え候外未レ能二管見一候九條家傳來箙紫檀地螺鈿鐵線唐草孔雀蠻繪に候此後京極攝政所レ携之由に候彼圖一條家有レ之候以二此圖一先年下官造二弓胡籙一候其時依二故殿下命一造二蒔繪螺鈿一候通用尤可レ有レ便之由被レ命候可レ用二孔雀一候所木地に蒔繪に替候は夫も聊可レ替之由被レ命候條用二鳳凰之蠻繪一候蒔繪箙は木地蒔繪に付非參議次將所用之由見二餝抄一候

一表（ウハ）帶

丸緒の組に候蘇芳靑組交斷に候此尋常之儀に候蘇芳靑緂に候是は胡籙を不レ動ために引申候前に引廻して獅釣片釣兩說に候獅釣はもろわなに候片釣はかたわなに候尋常儀は箙にまとひ又箙にまとひて引廻し候下官箙は失多波䩞（二鐵なうくろ所板に前後一枚づゝ飾なはり候板に候）金銅の輪を付候て引通すやうに設置仍籙も其所は二箇所櫛形の樣にほりすかし候此彼後京極箙此定に候下官所持弓箙等先日入二貴覽一候

一壺胡籙
是も平胡籙に對して納候故つぼみたるやなぐひの意にも候はんか蒔繪の樣不レ及二管見一候畢竟平胡籙の准據にて事可レ足候歟
一獵胡籙
此物不分明に候狩獵の時所用之籙候鷹司抄有二用レ葛說一今按葛俗に云こりに候歟追レ獸に以レ輕て馳驅に便ずるにても可レ有レ之候又一說用二猪皮一之儀有これ今のうつぼに皮を懸やうの意にてつよみのためにても候はんか是畢竟籙の類にてもあるべくや
一箭　水精筈　角筈　金銅上差
篦は黑漆ほそきは見よきの由餝抄に候樺は紅梅紙に候又白紙をも用候水精筈金銀鏃は一日晴の儀に候下官所持箭牛角の筈鐵鏃に候是又餝抄所二引用一中院大理問答抄之說に候上差も鐵に候尤鏑も牛角に候おとし箭と申事一條家抄に見候表差のことゝ相見候上古記には上差と候
一靴　半靴
此兩物下官所持之物先日入二賢覽一候仍不レ及二作圖一半靴說注左候長和四年九月十二日小右記曰資平來云今日左相國差二重信朝臣一借二行幐平胡靭半靴一其體靴履脛巾短也有二靴氈一以無二靴帶一象半靴歟
一鞋　草鞋
草鞋と申候物も可レ有レ之候得共めなれざるやうに存候若草鞋にては候はずや此中草鞋の名目無レ之候草鞋と申候は天子着御の物に候淺履の形にて錦を以て張申候西宮記曰挿鞋主上及僧家貴女之所用挿鞋に草の字を用候て例の音をかりたるに候
一絲鞋
絲をあみて履に用事に候唯今舞人專用申候
一緒太（ヲフト）
是俗名に候上古稱二裏無一候檳榔を用事觀應二年四月四日園太暦に所見候今は燈心草をあみて作候也
一踏懸（フガケ）
只今舞人のすねあてに候金襴を用ひ各うちあはせて紅の組にて上下を結ひ申候當の脛巾のごとくに候ふがけと訓じ候
一烏皮履（クリカハリ）
禮服に用候履に候永萬元年七月廿七日山槐記曰可レ着二烏皮舃一自二單亭一參仍相二具之一有二赤絹襪一上

結レ之如ニ指懸一三ニ鼻裏黒漆指懸之儀注ニ鼻高之條下一候

一淺履

平生所レ用は淺履に候今木をぬりて用候へども恐らくは木にてはあるまじく候革にて可レ有レ之存候凡履之類淺沓之外用レ木履は無レ之候木を用候は木履に候へば和名鈔にも紀具都候ゑからば履子の類にて候勸修寺故入道大納言經廣卿革にて淺履を作り用レ之候常に自稱して淺履の正體は革也古人蹴鞠に用ニ淺履一以レ木作候者不レ可レ用レ之今用レ革革は堪レ用レ之と被レ申候彼經廣卿させる才學はなく候ひしかども此一事は實甘心申候實に彼說のごとく靴半靴深履鼻高毛沓皆革に候何限ニ淺沓一木を可レ用哉とは乍レ存彼淺履慥不レ得ニ所見一候故晴而不レ能レ用レ之唯平生出仕時用ニ皮履一候人々又如レ此候

一深履

和名鈔深頭履言ニ其深一襲ニ覆足一也と候古來用ニ深泥一由舊記所見候先日入ニ賢覽一候此履東園故大納言再興候用ニ紫革之緣一候は見ニ淺深秘抄一候

一毛沓

此沓童着候履に候治承二年十月晦日玉葉曰毛沓有ニ錦花餝及花帶等一花は例の音を假候靴の字に候然此所見先年小弟久世三位通夏爲ニ中將一參ニ賀茂祭使一日以ニ熊皮一造レ之候不レ誤にてもや候けん傍難無レ之候き

一鼻切履

餝抄曰鼻切沓或抄稱ニ雁鼻一又曰永治元御禊女御代前駈廿人雁鼻沓六位鼻切沓同案ニ永治記一五位前駈雁鼻六位前駈鼻切沓と注者有ニ差別一歟尤可レ有ニ差別一候歟故備前守宗恒朝臣御厨子所預令ニ申問一候說は又非レ無ニ其由一存候鼻切履と申候は雁鼻より出たる名に候雁鼻は鼻高より出たる名目と存候西宮記指懸所見候これをさしかけと讀候てはいづれ事すみ不レ申候ゆひかけと可レ讀候鼻高は今僧用所之履に候其形履鼻そりて高く候ゆへ鼻と號し候件の履の鼻に花臺結のやうなる絲を結びたる形候是鼻縄を内より出して結びこめたる遺式に候此鼻縄を足の指にかゝるゆへに指懸の名出來候由申候き下官難レ之曰若レ襪てあり鼻縄懸レ指候哉宗恒答曰襪は裁縫甚寛に候此懸ニ鼻縄一之料なり此儀尤委曲之論に候永萬山槐記烏皮履

説如ニ指懸三鼻一申候宗恒朝臣所レ申可レ信存候又宗恒朝臣申曰雁鼻は鼻高履也鼻高形似ニ雁首一仍得ニ此名一且切ニ鼻高之鼻一此鼻切履也淺沓を革と見る時は切ニ彼鼻高之鼻一に候へば則淺沓に候然を鼻切は淺沓の異名之由申候き此等説不レ然儀と難レ申候歟

一藁履

今京師に佐宇利沓と稱して下部等着レ之候則藁履に候服者着レ之候仍去年來下官重レ喪五旬之間用ニ件履一候き此細工はふるくより致し付たる者共之由聞及候

山藁履

此名目見ニ物具裝束抄に一候未レ勘ニ得之一候

一鞍

已前條々雖ニ朦朧之至一聊觸レ眼候事も候し故あらあら注申候馬及鷹之儀は年來無ニ其覺悟一候條殊恍惚以ニ金根一爲ニ金銀一之誤可レ有レ之候

一唐鞍

異朝より所レ渡之鞍に候間其形而此邦所レ造をも猶稱ニ唐鞍一候治承二年四月賀茂祭近衞使右少將顯家朝臣所用之唐鞍松殿關白新調之由見ニ山槐記一候唐鞍形更無ニ覺悟一候得共唐鞍と覺しき物一口先年見申候夫は尋常の鞍よりは前輪甚高其裏面朝鮮鞍よりはちひさく黑漆青貝の蒔繪唐細工と見え候其鞍を欲ニ買得一し候て二三日の後遣レ人候所既爲ニ他人一被ニ買取一候不レ知ニ行方一候條于レ今殘念之至存候

一移鞍　一向何樣之形に候哉無ニ覺悟一候

一結鞍　是も無ニ覺悟一候

一和鞍　是も無ニ覺悟一候但今武家方被レ用候鞍にても可レ有レ之候歟

一水干鞍　猶々無ニ覺悟一候

一水精地　銀地　鏡地

一條家抄に鏡地之註に赤銅と候就レ之推量候得共前輪後輪等緣を赤銅にてつゝみてかゞみのごとくとぎたるにてはあるまじく候哉銀地水精地のごときも加樣にやと存候へども一向今按の事に候

一黑地　黄地　龜甲地

黑地青地漆鞍に候歟黄地は蒔繪地候歟龜甲地に龜甲蒔繪地にもやと存候但逐一無ニ勘之義一候

一鉢鞍　無ニ覺悟一候

一唐鞍具

一鞍橋　和名鈔久良保禰と訓し候壽永元年大嘗會御

禊行幸攝政（普賢寺入道基通公）唐鞍被ㇾ用二黑地橋一由見二信範記一
四緒手　和名鈔考聲切韻云鞍（辟䩉反和名之保天）穿二鞍橋一皮也
今按唐鞍とても常の鞍のごとく胷懸ㇾ鞍鞦を懸候儀
は相違あるまじく存候
一表鋪　和名鈔鞍褥宇波之岐と訓じ候今申候高麗馬
氈候歟壽永御禊行幸に攝政被ㇾ用縫物表敷候
一鐙　注二半舌舌長之條下一候
一力革　和名鈔逆鞡知賀良加波と訓じ候名目は今の
鞍に候と同事に候得ども鐙のつりやう可ㇾ違存候武
藏鐙を引懸候樣に鐙の輪にかねをこしらへ置候唐鞍
の鐙無二此金一候故直に鐙の輪に付候て橋に懸候て常
の力革同事候
一轡　其形甚異樣に候其圖見二餝抄一候其中不審に存
候は用二金銅一由に候金銅にて候はゞ沛艾之馬には危
事に存候古人所用何樣に候哉難二推計一候
一銀面　馬面に候銀にて造り候仍稱二銀面一候歟馬面
はもと爲二軍用一に設たるにても有ㇾ之べく候へ共風
流之爲懸ㇾ之候或不ㇾ懸ㇾ馬して手振に令ㇾ持候事も候
菖蒲形
和名鈔曰蔡邕獨斷云金銀（祖叢反字亦作ㇾ駿今按俗云銀面之菖蒲形是也）馬冠也高
廣各五寸如二三華形一者也能分明に候歟馬面のとまり
に三山形のやうなる物を加たるに候
一角袋　難二心得一名目に候馬に有ㇾ角事有べくも候
はず甚歟今按候へ共彼菖蒲形を納る袋にて有まじく
候哉其體は不二勘得一候
一尾袋　其形餝抄に見候乘二唐鞍一時馬の尾に此袋を
入候が不ㇾ用二此袋一時は結二唐尾一とて馬尾をあけま
きに結候
一雲珠（ウズ）　其形見二餝抄一候只今申候やせがへしに候
一頸總　其形見二餝抄一候今申候たちぎゝに候
一八子（ハネ）　形見二餝抄一候四緒手の際に付由餝抄の說に
候鈴を付たると見え申候餝の爲に設たると存候無
ㇾ鈴も有ㇾ之由見二同抄一候圖は竹の樣に見え候得共竹
にては有まじく候革を竹形にいたしたるにてはある
まじく候哉竹にては付がたかるべく存候革を竹の形
にいたしたるかと存候
一大滑（オホナメ）
おほなめと訓じ候はだつけの事に候餝抄の圖には三
枚はだ付と見え申候一重切付も候歟壽永の攝政所
ㇾ騎信範記一重と見え申候二重と申時一ははだつけ

一は切付に候餝抄之三重も一重は切付に候
一杏葉　只今大繩などを用候樣に胷懸鞦に付候革にて作候其圖具見ニ餝抄一候付樣同所見え候
一革鞦　其形見ニ餝抄一候
一攝蝶　一向不レ得レ勘候
一鞦付
和名鈔曰韉音吹鞍鞘也、楊氏漢語抄曰、賀禮比都氣韻會曰雙佳反、集韻鞍鞘、又蘇回反、鞍邊帶也、正字通曰鞍俗韉字和名鈔曰考聲切韻曰鞍辟曰反和名之保天右字註如レ此候韉字雙佳切に見候時は鞍鞘に成申候鞍鞘と申物は何共心得られず候其上物具裝束抄に鞦付ると候彌不審に候又蘇問反に見申候時は鞍邊帶に候得ば腹帶の事にやと存候得ども表腹帶由來搦出申候剩正字通以レ鞍爲レ韉俗字に候時和名鈔にて考候へば四緖手に成申候然る時は鞍邊帶も又違候何共不レ能ニ了簡一候
一手繩　差繩　引差繩
此三色は下之條下に註候以上唐鞍具先愚意之趣註候得共一切不ニ分明一候又壽永信範記猶愚意不ニ會得一候へ共就レ所レ見註レ左候壽永元年信範記云餝馬院の鹿毛唐鞍黑地橋縫物表鋪付瓔珞八筋下鞍紫檀地螺鈿鏡地孔雀縫物金銅伏輪ニ重懸之樣物搦物金物下鞍緣鏡銀面八子雲珠玲瓈總鏡杏葉在ニ青地唐錦敷物一駿袋付尾袋雲珠付レ鈴赤革鞦付ニ金金物一入ニ青瑠璃一服下大鈴蘇芳緂手綱白差繩二筋五丈白布鞦搦赤地錦表服帶蒔繪韉濃打鞍覆引差繩已上如レ此候此中傳寫之失も有レ之かと存候
一移鞍具
一鞍橋　移鞍之橋形不ニ勘得一候
一左筆切付に候左筆と候は豹虎皮候何故には虎豹之皮を左筆と申候事無ニ覺束一候へども舊記此名目所見候洞院家色葉字類抄に竹皮にサヒツと訓を付候竹皮とは虎豹の皮と存候は豹に竹豹候凡虎豹者不レ棲ニ林木ニ木林の地畏ニ鼯鼠一事見ニ百川學海談藪一候也圖畫之類も虎豹は必畫ニ林竹一候仍竹皮之名在レ之歟と存候定家卿裝束抄にも春日祭近衛使隨身加ニ左筆尻鞘一由所見候此尻鞘は左豹文鰐右虎文尻鞘に候貞應元年十一月廿一日或記曰繪尻鞘劒鰐文地は虎文色取レ之其上鰐文也右はサヒツ是は虎文計也是を稱ニ左筆一と候永仁六年十月廿五日仲定記云殿内舍人隨身乘ニ用平文移馬一略下鞍探色豹皮文と候勘ニ合彼此一候は左筆は豹虎等下鞍分明候歟

一大滑　はだつけに候用二青革一由見二壽永信範記一候
一轡　同不レ得レ勘候
一手綱　壽永記蘇芳打物伏組由所見候
一鏁䩭（クサリオモカイ）
鏁くさりに候䩭正字通馬絡頭に候鎊抄に平文堅食金物を付由見え申候推量に今三尺繩と申類と存候又荷付馬に鈴板と申て頭を絡て鈴を付申候此鈴板に鏁をかくるかと存候何とやらん移鞍の鎊は荷付馬にちかきやうに存候鼻皮も壽永記所見候壽永記には鏁䩭頭と候其註に鼻皮付金堅食古文由所見候
一鈴　上に申候ごとく移之鎊荷付馬にちかく候へば鏁䩭に付鈴にても候はん歟
一和鞍　只今武家方所用之鞍の體にもや候はん鎊抄に鏡鞍或蒔繪等所見候黒地も見二壽永二年玉葉一候
一表鋪　不二勘得一候
一切付　四位以上豹皮五位以下虎皮見二鎊抄一
一大滑　不二勘得一候
一鐙　鎊抄鐙舌短舌長等所見候唐鞍同事に候歟
一尺障泥（アフリ）　和名鈔に阿不利と訓じ候用二何革一と申事不二勘得一物具抄尺障泥と候尺字不二通申一候

一鞦　連着　楚鞦　連子總　辻總　無二覺悟一候
一畝鞦　只今の鞦のごとくうちちがへたる鞦に候歟
一小總　大總に對して小總と申候か大總事無二所見一候
一切付　和名鈔曰唐韻曰韉（則前反和名之太久良）鞍韉也物具抄曰切付事號二下鞍一
一小豹　本革集解所載も土豹に候か宗奭曰豹毛赤黃其文黒如レ錢而中空比々相次又有二土豹一毛更無二紋色一亦不レ赤其形亦小此各有レ種非二能變レ形也物具抄曰竹豹は小豹よりも勝物也
如レ斯候へば土豹歟と存候
一竹豹　以前注申候
一虎　五位人用レ之由見二物具抄一候
一葦鹿　諒闇鞍に用る由見二鎊抄一候實體不二勘得一候
一水豹　本草集解時珍曰海中有二水豹一此事に候歟六位用レ之由見二物具抄一候
一鐙壺　舌長　半舌　舌短
聖德太子壺鐙とて法隆寺寶物中有レ之候故宗恒朝臣見申たる物語に候それは沓を切てさきばかりを用申て足を半許踏入程之物の由談候き下官は物を見ず候宗恒申候は殊之外踏にくゝ可レ有レ之樣子に見うけ候

仍後舌短半舌舌長之制次第出來候樣にぞんじ候餝抄に所ㇾ圖者舌長以ㇾ之准じてゑるべく申候き餝抄曰古唐鞍等多者無ㇾ舌口輪許也と候唐細工の輪ばかりの鐙先年不慮に見出候て小家に貯置申候若又如ニ先年一唐鞍と覺しきを見出し候はゞなり申さぬ迄も皆具再興候事もやと先鐙ばかりをだにも貯候此偏に愚公移ㇾ山之微意好古之淫癖堪ニ自笑一候也

一轡鏡　無ニ覺悟一候

一手綱

一蘇芳緂者公卿棟緂殿上八四五位紺緂六位用ㇾ之由見ニ物具抄一先此通候但臨時隨身用ㇾ之儀不ニ一定一候先例區分不ㇾ能ニ毛擧一候緂事註ニ平緒條下一候

一差繩　菊打交　萌木白打交　山吹　紫村濃

綾にても布にても繩なふたるに候菊の打交は蘇芳と白の打ませたるに候萌木匂は萌木のこき薄き打交候山吹は黃と紅の打交紫村濃は紫緂に候引差繩と申候は今の追繩に候

一鞍覆　打鞍覆　織物鞍覆　透鞍覆　虎皮鞍覆　鹿皮　鞍覆

唯今武家方に被ㇾ用候鞍覆さのみ違ふまじく存候打鞍覆とは表をふしかね染の樣引裏は蘇芳の板引候織物鞍覆表顯文紗裏青打絹由以上見ニ物具抄一候治承三年四月廿一日山槐記賀茂祭使右少將顯家朝臣引馬居飼懸ニ青紗鞍覆一候是は透鞍覆候物具抄地薄物靑又云ニ重多須幾一單也緒を捻以ニ色々絲一唐鳥唐花縫ㇾ之と候

一差々繩

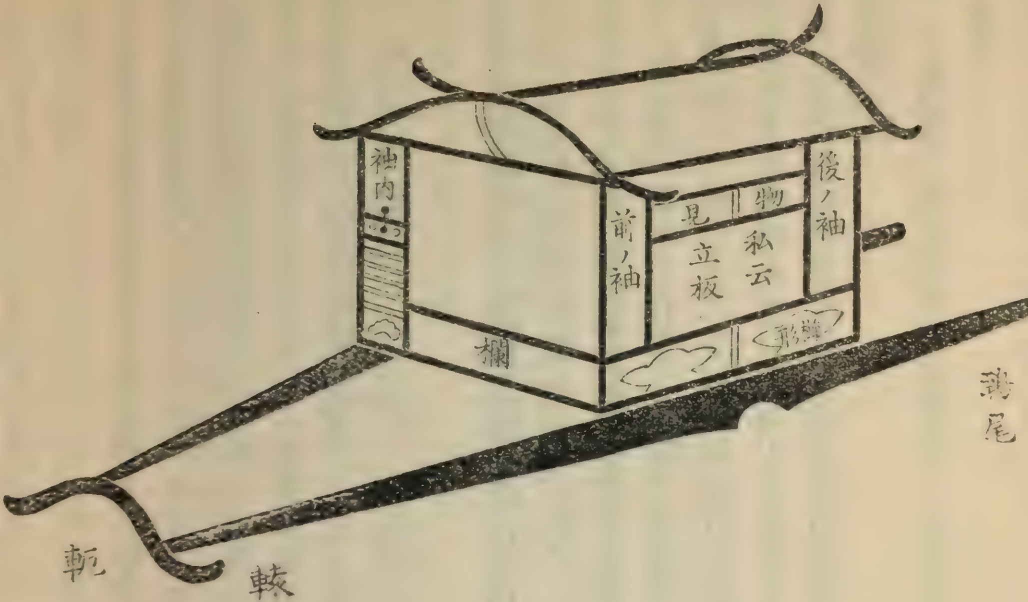
一綾打交布打交白布等見ニ物具抄一候伏見院北面侍齋藤越前守助成抄（布衣抄也）曰指々繩打ませ白淺木かちん三色左打右二筋取合指也差樣馬のふりのかみより三卷おきてかうぎはにくびの骨のどの下にてひつときの懸結にゑばりてむねの右のわきにたるむ程にゑほてのねにくゝり付るなり

一凡車者所々有ニ其名一仍圖ㇾ之註ㇾ之候

鵄尾イニ鳶之尾トモ私曰鴟尾ト可ㇾ爲ニ同事一和名類聚鈔曰轅音因和名奈加江俗在ㇾ前謂ニ之轅一在ㇾ後謂ニ之鴟尾一或云小轅車轅也（圖次頁に挿入）

一餝車

賀茂祭日近衞使中宮東宮等使餝ニ其車一施ニ種々風流一治承三年右少將顯家朝臣五節風流也爾來雖ㇾ盡ニ花麗一過美無ニ能及ㇾ之代々聖主惡ニ其驕奢一禁ニ其過



差一然不レ用一其制符二罪レ之以二解官一猶無レ懲人情不レ可レ移如レ此宜哉以二周公之德一且猶レ作二多士篇一顯家朝臣餝車治承山槐記詳載レ之全文餝抄亦載レ之仍今不レ註レ之治承四年四月十五日山槐記曰近衞使車袖（前右後左立臨時祭舞人袖前左後右透竹臺）物見（透綱代文牡丹唐草）簾（前蟲損也後府付銅薄葵舉卷）左大屋右レ總棟結有レ總鞦總入レ薬右記之意者車前後袖等立舞人透竹臺臨時祭者石清水賀茂兩社臨時祭也其舞人體共に相同其舞人着二青摺袍一其人形をほり物のごとくにつくりて車袖に立也竹臺は推レ土栽レ竹設二闌鞴一在二清涼殿東庭一一者栽二河竹一在二清涼殿東砌南方長橋邊一一者栽二吳竹一在二仁壽殿前一北方此栽レ竹之意者天子每晨臨二南殿一親聽レ政仍令三鳥宿二此竹一報レ曙之設也臨時祭東遊駿河舞畢退到二吳竹臺下一右祖更舞二求子一今の車對二舞人一透竹臺此故也物見者殿上人所二乘用一不レ切二物見一（勘物見者設二窓懸一小簾一）仍物見之所彫二透鑪篠一之上其間牡丹唐草至レ簾者有二蟲損及筆誤一不レ通銅薄此今俗に貝鑪之箔也以レ箔付二葵文一也葵者賀茂祭尤有レ緣舉卷者假名書繕二總角一垂總稱二棟結一者末ノ踏得一候之鞦總入薬者鞦總之末入二玉薬一玉薬者水晶玉とゝめの金おり同年中宮使（亮通盛朝臣）車袖物見之（透綱代蝶丸）上物見下張前木綾

畫網代文簾透に付蝶擧卷有レ總蘇芳有レ總蘇芳 棟結有レ總蘇芳 遣繩花田鞦總入打交藥
一青絲毛車
稱二網代車一者懸二籧篠一也絲毛者代二籧篠一以レ絲張レ之
貞信公所レ作代々藤氏皇后用レ之
一尼眉　唐庇　半蔀　檳榔毛蒲葵本字也　網代　八葉
右車等難レ盡二毛擧一仍先日九條西園寺兩家車圖贈レ之
一條家裝束抄桃花蘂葉と俗稱レ之候　世間流布之者なり與二九條車圖一相合彼此と可レ有二賢覽一候大八葉小八葉者立板八葉文有二大小一之分也
一隨身裝束　子細先度申入候
小隨身
關白息自二羽林一至二中納言一之間其父所レ給之隨身府生子稱二小隨身一具レ之後成恩寺抄曰自二羽林一至二中納言一中將衞府長壹人小隨身四人或二人 治承二年六月十九日山槐記曰關白殿少將師家被レ申二慶賀一小隨身二人殿下御隨身左府生秦兼清子蘇芳上下帷同御隨身右府生下毛野敦兼子二藍上下紅引陪木各末レ賜レ名所見如レ此候大概末レ聞清花人具二小隨身一候若限二攝家一候事歟と存候
一蠻繪袍獅子熊鴛鴦丸蠻繪布袍
蠻繪袍蠻繪布袍同物に候依二記錄一或略二布字一或加二布字一候實體蠻繪者文也袍者褐也地は布也褐者如二狩衣一後幅賤者之服に候色者紺蒲萄染蘇芳麴塵野摺由見二永治宇治左府記一候蠻繪は假借音候小右記用二盤繪之字一盤曲園文に候左近褐獅子丸右近熊丸或鴛鴦丸に候鴛鴦者兵衞府之文也天仁以來兵衞府又用二獅子熊一由見二園太暦一但嘉承二年四月十七日賀茂祭近衞使右少將信通朝臣隨身用二鴛鴦丸一見二永昌記一又右近衞府用二獅子文一例見二治承二年十一月晦日玉葉一候蠻繪文用二綵色一と又不レ用二綵色一染などするも候
毯代
和名鈔毛席以二五色絲一爲レ之如レ此說は俗云毛氈の類に候毛席代等用二紺布一畫二蠻繪一仍稱二紺布蠻繪毯代一敷二胡床及節會日臺盤兀子等下一候也
一染分袴
本陣左右列に付て染分之名出來候歟左近蘇芳右近朽葉行幸及放生會用レ之左近二藍右近萌木稱二役色一賀茂春日祭近衞使乃晴日用レ之或左右共用二末濃一
一白襖袴
註二襖之條下一候彼襖袴なと隨身裝束には隨レ事通二用

之レ候かと存候
䕺脛巾（イチヒハゞキ）
䕺は草に候市比と申候備前國多有レ之候紙の木の様なる物に候皮をむき候へば麻絲のほそきやうなるものに候夫を編て用ニ脛巾ー候深泥には殊に有レ便事に候
一褐衣（カチコ）　註ニ襴繪袍條下ー申候
一白狩袴
指貫之類に候和名鈔指貫の下に註し候實體分明に不ニ勘得ー候
一壺脛巾　不ニ勘得ー候
一錦裲襠
文獻通考曰裲襠之制一當レ胷一當レ背短袖覆レ膊唯今陵王の（舞の名）装束にのこり申候歟是は頸紙を入て着候て肩衣のやうなるもの左右の端及すそに絲を毛の様に置たる物に候今も裲襠と申候頸紙を用候と胷背相合候との相違にてさのみはたがひなきやうに存候尤打毬樂にも用候是は端の絲なく候也
一攝腰
和名鈔曰唐樂令云　承天樂舞人四人　紫綾袍接靿（音饒於教反此）

（問云ニ接腰ー）今も世比江と申候裲甲之時狩衣のあてこしのごとくして細候腰にあたる所ばかり紙を入候歟板を入候歟少しかたくて表は紫綾裏は蘇芳絹を張候其腰の末は左右ともに紐を付て前にむすび候鈔抄説裲甲の上結レ之又一説裲甲の下闕腋の上に結て裲甲は鋏の平絹にてかため申候
一馬副装束　褐衣袴　舌地
大甞會御禊行幸攝政馬副用ニ瀧口侍ー寛治時範天仁朝隆等記所見候又治承二年春日祭使良通所具は用ニ家司職事侍ー之由見ニ玉葉ー候其装束仁平台記所レ載紺褐衣同袴濃打衣同單衣白下袴冠（巻纓）老懸布帶如レ此所見候
舌地不レ得ニ所見ー候
一手振装束　藥袋布
仁平元年春日祭使所具台記曰手振近衞勤レ之府濃玉淸多治松久淸原國元淸原近安淸原吉國紀元來藤井有里物部國安秦氏吉調重任刑部依眞秦近武如レ此候装束は康治元年十月廿六日同記曰手振卷纓緌紫色褐衣（身尻七尺同四尺五寸）靑張絹單下襲（尻二柳色尻七尺前四尺五寸袖四尺五寸）褐衣身一幅下重身二幅也渡ニ大路ー時褐衣下重等裾引ニ庭上ー靑末

濃布單袴長三尺七寸黃色張袙寸法同ニ長制袙一同色張單衣寸法同レ袙合袴布
帶蒃脛巾以ニ青色革一爲ニ結緒一夏扇等蒃履樂袋在ニ唐鞍具一
藥袋不ニ勘得一候
一小舍人童
治承元年十月廿日玉葉曰小舍童四人藥又丸千法師丸
金法師丸萬歲丸以上皆侍品者子也薄物萌黃狩襖袴
結ニ紅葉一付レ之歟冬ハ打薄歟冬ハ袙黃單衣毛沓有ニ錦花[illegible]
及花帶等ニ相橫目扇付ニ紅薄樣物忌一
一狩衣上下　毛沓
毛沓見レ上狩衣上下嘉承二年四月十七日賀茂祭近衛
使童永昌記曰小舍人童浮線綾狩衣袴濃打治承三年十
一月七日侍從時定拜賀山槐記曰小舍人童二人朽葉上下萌木
衣蘇芳單
一水干袴　脛巾
水干小舍人童用之例未ニ勘得一之脛巾又無ニ覺悟一候此
事出ニ物具抄一尤可レ有ニ其例一候
一雜色
雜色事先度申入候安元三年十月卅日玉葉曰雜色八人
裝束半蘇芳狩衣無裏袴濃打出袙黃袙青單衣造菊白黃付レ之
平禮上ハチ白張上下亂緒

上ハチ亂緒不ニ勘得一候治承四年石淸水臨時祭山槐記
曰舞人侍從實保雜色八人不レ賜ニ當色白張平禮一
一車副　人品不ニ勘得一候
烏帽子マウヘイ　襖袴マウヘイ　無ニ覺悟一候
養和元年十一月二日女院新御所渡御玉葉曰亥終有ニ
渡御一大將半蔀車車副牛童各布衣永仁六年八月五日
御幸始竹林院左府公衡公記曰御車副二人褐衣冠緌脛
巾如レ例
一牛飼
永曆元年十二月十五日山槐記曰與侍車牛飼着ニ赤色
上下出歟冬ハ衣一
一居飼
人品先日申入候治承元年十二月十七日蓮花王院塔供養臨幸少將良通供
奉玉葉曰居飼壹人裝束退紅黑袴襖布下袴烏帽子蒃沓
一馬部メブト云
右馬寮の下司に候卅人由見ニ馬寮式一候延喜式曰緋袍
夏單衣襖子夏不レ須帛汗衫各一領調布袴一腰細布一條長一丈註
に隨穢損申官請受狩野行幸之日着ニ緋調布袍袴一
一飼丁
飼丁字非ニ省略一筆誤也丁の字に候馬寮下司也馬寮式

曰凡細馬十疋中馬五十疋下馬二十疋牛五頭毎年四月十一日始飼ニ青草一十月十一日以後飼ニ乾草一（馬日二束半牛二束別重十斤二兩）其飼丁馬別一人以ニ衞士一充但刈青草丁并飼牛丁惣七十四人并充ニ仕丁一丁者戸令所レ謂男廿一爲レ丁候其裝束式曰黄袍汗衫調布袴革帶布襪長絹巾子幞頭

一鷹飼裝束

錦帽子

天永四年正月十五日長秋記曰烏帽子ウワヲカケリ其上着ニ錦帽子一又ウワヲカケ結絹片鈎也

如レ斯候烏帽子のうへに錦帽子を着候て其上に緒をかけてかたわなに結とめ候也帽子の裁縫無ニ覺悟一候

紫纈狩衣

天永長秋記鷹飼裝束悉本錯亂候間不ニ分明一候纈說文結也と候纈纈は纈は絹のくゝり染に候

白布袴

長秋記曰甬面袴由所見候

行縢

和名無加波岐に候長秋記熊皮行縢同じく見え申候

餌袋　無ニ覺悟一候

一犬飼裝束

被レ示候鷹飼犬飼裝束於ニ何記一被ニ勘出一候哉必可レ被ニ示聞一候凡此等裝束甚希有レ之候僅に長秋記雖レ載ニ鷹飼裝束一不ニ分明一至ニ犬飼一未レ及ニ管見一候左次手爲ニ後日覺悟一可ニ吟味一候條必々勘出之記可レ被ニ示聞一候於レ無ニ他見一者可レ爲ニ指南一候也

右一冊因ニ問目一聊汚ニ其墨一愚弄ニ典籍ニ二十餘年今遂段不レ免ニ推量未知之四字一此編所レ學淺所レ習拙且以ニ歸府在レ近不レ及ニ清書一直草藁呈レ之尤可レ耻ニ賢覽一速投ニ火中一勿レ令ニ外見一

寶永辛卯正月十五日　野宮定基卿　松堂閑人

此一冊正德二年三月七日於ニ燈下一校合畢此本松田道格執筆之草藁爲レ報ニ筆功直ニ道格賜レ之又新井氏へは御直筆被レ遂ニ清書一被レ遣レ之彼松田氏へ以ニ所レ賜之本一遂ニ寫校一畢此本頭本なし天下三冊也一は新井氏一は松田氏一は元英所持殊可ニ秘藏一然共天下通例なれば後日可レ渡ニ諸人手一歟

于時正德二年三月七日　荒川元英

此書雖ニ彼秘一依ニ懇望一得ニ恩借一忽遂ニ拜寫一一校畢

于時正德第二玄默執徐晚秋上澣之　八里雪明

時寶暦第十一巳六月下之五日寫之

中川定就

石川氏 源義方

安永二癸巳十月

此書は源義方が藏本をこひ得てうつしぬこの外に新野問答といふ書一冊ありしかれどもそれはまことの物にあらずその書のはじめに位記の事あり位記問答といふ又有職指掌集又職原何とやらん題號出たる本ありその書はもと小宮山杢進といふ人京都にて求め得し書也しかるを成島道筑が新井氏と野宮殿の問答の書は是なるべしと推量の詞をかきくはへしよりそれを誠の新野問答なりとおもへる人もあれば此ことわりをしるしおくなり此まことの新野問答の題號も野宮殿のなづけられしにもあらず新井氏の名付しにもあらず後の人のかくなつけし也すぎにし年新井氏のもとにて此本書を見し事のありしがその後かの家あやまちて火のわざはひありし時本書もやけうせにけりいとをしき事なめり

車服制度手記

乘車之儀

凡車ニ乘儀ハ後ヨリ乘レ之テ前ヨリ下ル車寄ニ於テ乘レ之時車ヲ輦テ輗ヲ榻ニカケ車寄ノ板敷ヨリ板ヲ掛テ其板ヲ渡テ後ノ方ヨリ乘レ之同車ノ人同レ之車寄ニ於テ下ル時ハ轅ヲ車寄ニ牽入テ又板ヲ掛テ渡レ之下ル女房ニハ屏風几帳等ヲ立ル儀アリ凡門內ハ牛ヲ放ツ地上ニ於テ昇降ノ時ハ榻ヲ踏テ後ヨリ乘レ之榻ヲ踏テ前ヨリ下ル二人乘ル時ハ上首位次共ニ後ヨリ榻ヲ踏テ乘レ之上首前ニ在テ位次後ニアリ下ル時ノ義詳ニ應永薩戒記ニ見エタリ左ニ注ス

下車之儀

應永三十三年四月二十五日等持寺八講薩戒記云今日予同ニ乘勸修寺納言車一下レ車之時予先自ニ後方一下用レ榻次納言自ニ前方一下レ車於ニ轅內一則取レ裾不レ可レ然歟越レ輗之後可レ取歟昇ニ沓脫一之時先向レ予氣色於ニ地上一脫レ沓昇ニ沓脫一此儀尤可レ然也次人在ニ人上一之時上﨟昇殿之時乍レ着レ沓不レ然レ昇ニ沓脫一之由見ニ御記一也予乍レ着レ沓昇ニ沓脫一依ニ下﨟一也退出之時予先下レ地乘レ車之時納言於ニ地上一脫レ沓踏レ榻乘レ車此儀又可レ然准ニ前儀一也予又於ニ地上一脫レ沓昇依レ無ニ下﨟一不レ可レ脫也然而此所儀納言座程近仍脫レ沓了如レ此儀雖レ無レ殊ニ進退一爲レ後記レ之

女房乘車之儀

承元三年三月二十三日或秘記云先レ是女房童女乘レ車（此對東西面妻戸寄レ車余出居東面指ニ入車一寄ニ北間一縣房仲家出衣殿同出レ之云々）殿上人二人讃岐前司能季右少將資家等寄レ車童女車上レ簾（自レ本不レ掛ニ下簾一云々若掛レ之時下簾ナバ簾ニ卷加テ不レ下也後下簾下入ニ於車內一左右榑ニサシハサムナリ）各隨（畧）次第ニ御車一（畧）次於御車仍內府余進ニ車寄一先寄先引掛打板即引下敷高麗端帖一枚打板上即立ニ屏風几帳一次姬君乘車初御前（故殿御女也）乘ニ車後一

同下車之儀

同秘記曰輦ニ御車一余即步ニ御車後一入ニ中門一後昇ニ中門外簀子內一府相共ニ參ニ進御車寄一前簾件間南北供燈（灯臺打數）置ニ几帳屏風打板帖等一內府余相共掛レ板（其上敷ニ高麗端帖一枚一）屏風几帳先初御前下次姬君下（先レ是御乳母儲ニ候御車寄內一）次屏風几帳放打挽ニ出御車一次姬君居ニ其御座一（謂ニ兩座一）女房

於二西面北小門一下レ車

右松堂君御説之勘物等也御説ハ先年句々徒御口授致二筆記一置候御勘物モ其砌以レ如ミ藏本所二抄錄一候偶相叶候間見候故書付進候此一紙相認候ニ付而モ思二高恩一催二舊懷一候

右勘物ニ被レ引候薩戒記下車之儀同記ニ今一箇條所見御座候同説ニハ候得共抄出置候間若參考ニモト注レ左申候

應永三十三年五月四日等持寺八講薩戒記云今日予中御門宰相右衞門督等同車下車之時兩卿先自二後方一下ル踏レ榻次予自二前方一（丁一人自二左方一置レ榻自二右方一進沓）下兩卿依レ在レ傍於二榻上一不レ着レ沓是故實也於二地上一着レ沓乍レ垂レ裾越レ轅（予頗傍越レ之是又口傳也）之後顧レ左取レ裾氣二色於中相公一相伴余入昇二沓脱一時予氣二色於中相公一於二地上一脱レ沓昇レ之又故實也退出之時先兩卿下レ地仍予於二沓脱上一不レ着レ履乘レ車之時又准レ之此儀雖レ非二指禮儀一末代如レ此事故實大切也仍注レ之

右二件ノ薩戒記ニテ見申候或ハ三人同車ナレバ下車之時淺官ノ人先後方ヨリ高官ノ人次ニ前ヨリ下リ申候ト見エ申候三人ノ時モ其内高官ノ人或ハ同官ナレバ上首ノ人前ヨリ下リ次官二人先後ノ方ヨリ下リ候ト存ズ此時定親從三位宰相ニテ候右勸修寺納言ト同車之時先定親後方ヨリ下リ次ニ納言前ヨリ下リ被レ申候中御門宰相トハ宗繼ニテ御座候補任ヲ考申候ニ定親宗繼同從三位宰相ニハ候ヘドモ定親上首ニテ御座候右衞門督ハ非參木敎盛ニテ御座候故ニ定親敎盛ト三人同車之時ハ宗繼敎盛先後ヨリ下リ定親前ヨリ下ラレ候ト存候猶可レ被レ加二了簡一候又乘車ハ異邦ニモ後ヨリ乘リ申候毛詩齊風正義云人之升レ車也自レ後登レ之入二於車内一

打板之事

一打板ハ前之勘物ニテ分明ニ見エ申候ト存候但シ被レ示候源氏物語ニハ女車ニ打板ト云物有レ之由見エ申候右或秘記モ女車ノ事ニ候然ハ女車ニ限リテ打板有樣ニ候ヘドモ打板ト申モノハ女車ノミナラズ用候ト存候世俗淺深抄云上段上皇幸時云々同時寄レ車無二可レ然公卿一者花族殿上人奉仕之例也其作法直昇レ自二南階一若他所ニ寄時ハ惣車寄邊ヨリ昇降儀同レ之不レ知二子細一司院殿上人寄レ車時不レ亘二打

板ニ尾籠事也
如レ此候得バ女車ニ限リ打板有ヤウニ申候ハ僻
ゴト、存候是ノミナラズ去年太上天皇御幸之時
モ被レ用ニ打板一ノ由チラト彼時次第見及候

前板之事

一前板ト申候ハ車ノ前ニ横ニ立置候板ノコトニテ卽
欄ト申候モノト存候類聚和名抄ニ軾ト申物ニテ御
座候類聚和名抄云説文云軾音式和名車及度之岐美車前也天福元
年七月九日明月記云御幸還御忠綱見物車前板置ニ
細斯一無ニ隔忍氣色一云々
徒然草云今出川大臣殿嵯峨へヲハシケルニ有栖川
ノ渡リニ水ノ流レタル所ニテ西王丸御車ヲ追タリ
ケレバアガキノ水前板迄サヽトカヽリケル
已上所見御座候明月記前板置ニ細斯一ト候ヘバ前
板ト欄ヲ申タルト存候松堂君モ前板ノコトニ此
記ヲ被ニ引用一候徒然草前板迄水カヽリタル由記
シ候ヘバイヨノヽ前板ト申候ハ欄ノコトニ候欄
ハ卽チ軾ノコトニ候
毛詩小戎注收軫也正義曰軫者車上之前後兩端横木
所以收歛所載ノ朱子詩傳從レ之

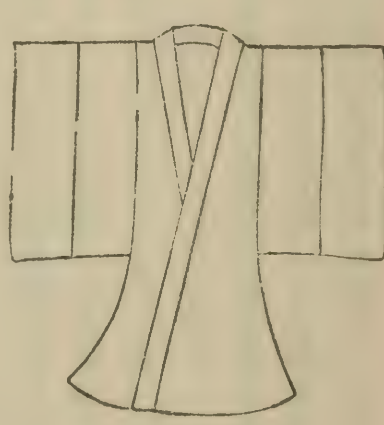
又曰軫車後横木也　軫軾詳見ニ于周禮考工記一
如レ此候ヘバ軫ト申候ハ車上ノ前後ノ横木ノ惣
名ニテ分チイヘバ前ノ横木ヲ軾ト云後ノ横木ヲ
軫ト申候然レバ欄ハ軾タル事無レ疑候和名軾ヲ
トジキミトヨマセ申候善ク叶候前板ト申候ハ俗
名ニテ畢竟申候ヘバ軾欄前板一物三名ト存候

新近問答

正德三年の四月、將軍宣下の事に就て、陽明前攝政大相國下向の時、さきだちて進藤刑部大輔長之朝臣來れり、某申す、殿下初見の御時殿上の間より御前に御參りあらむに、そのほど遠く、御裾を手にもち給はむ事煩し、又殿中にして御裾にさぶらふべき人もなし、その御心得あるべき事也、此よしを申さしめ給ふべしと申す、

其日殿下參り拜し給ふを、某御座の後に候して見たりき、（御座の後に候するもの五人、御劍御刀の役各一人、曲淵下野守村上能登守と某とあはせて五人、）裾を大刀に懸たまひたりき、進退周旋の儀殊にすぐれて見え給ひたり、

後日に殿下の御旅館に參りて其日の御裝束の事など承る、袍紋雲鶴黃の單曳倍支を用ひ給ひ、紅の檜扇をとり給ひし也、曳倍支の事東にては見え候ぬとて望み申せしかば、やがて取り出て見せ給ひて仰けるは、曳倍支は袒の裏をひきへぎて夏月に用ゆる故に、かくは名づけしなるべし、此物に限りて火色といふにや打たるものなり、黃なる單など用ひしに因りて、此たびは此物を用ひしなりと仰られし、その圖たとへばかくの如し、



遠き菊菱の紋なるを表のかたを打て鰭をば撚りたるなり

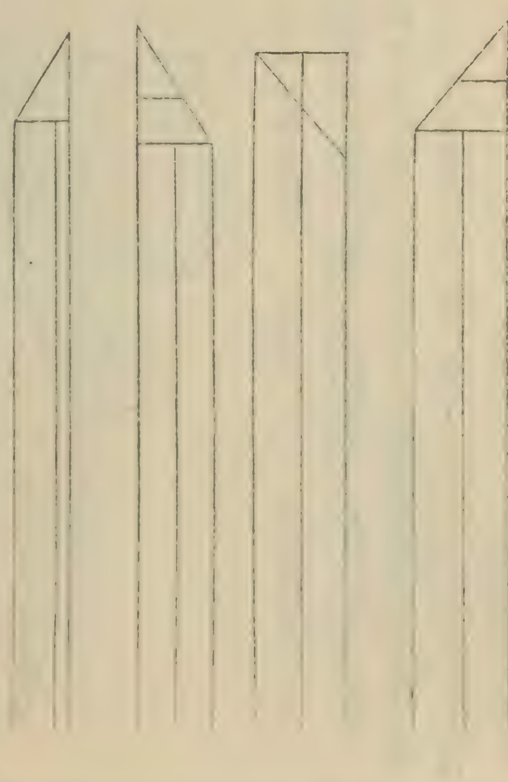
又太刀に裾を懸くべき事、むかし今の內裏作られて遷幸供奉の時に、裾を太刀に懸くべしとおもひて、古記どもをかんがへて、その樣をばかんがへ出したれど、冬の裾ことの外に重くてかくべからざりしほどに、その時は玉帶の上手にかくる事尋常の儀のごとくなりき、此たび手にとらむ事も便よろしからず、然りとて帶の上手にかけん事も、近世の俗、公卿以

上は裾を手にし、雲客以下は上手に懸る事のやうに心得ぬれば、俗の誤もまぬかるべからず、殊に夏の裾なれば大刀に懸るに便宜しければ、大刀に懸けし也、大刀に懸くべき式は、ある假字の古記に詳に見えしなり、歸洛の後にその記うつして下すべき也、古の大刀の第二脚は今の如くに作りつけしものにあらず、上へも下へも動くべきやうに作りし也、されば裾をたゝみてその餘りを大刀の脚の間にさしはさみて、第二の脚のかたへをし上げて、裾の落ぬやうにせめし事也、その事彼古記に詳なりと仰あり、某さらば裾をたゝむべきやうを承るべきよしを望み申せしかば、みづから紙をもて折て見せ給ひたりき、

そのやうは、

まづ裾の末を筋かへて折て、次に又折てたゝみて、又次に筋かへて折る、その裾の長短にしたがひて、大刀に懸るべきほどの所を如此に折て疊みて、さて堅に中より折りて、大刀に打かけて末の尖たる所を大刀の足の間に引入れて、二の足をゝし上げてせむる也、

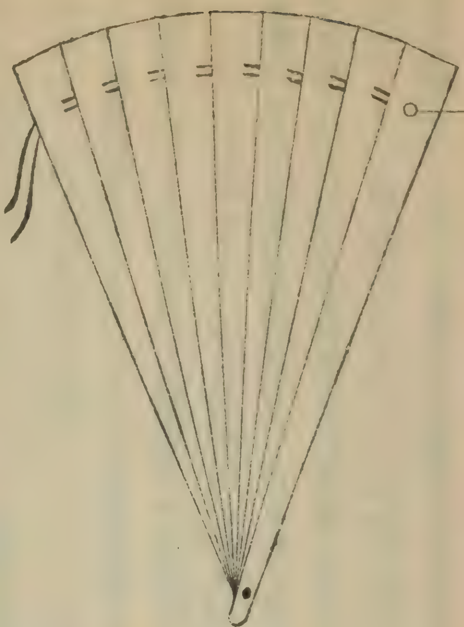
但し此たびは、御大刀の足よのつねのもの丶如くなる故に、すこしく新意を出されて、大刀の足の間に引入られしと聞えしなり、



さて手にもつ事も、裾を疊む事たとへば折木といふものゝたゝむやうにたゝみ上るなり、これは出べき時にそのまゝに裾の展ぶべきためなり、

又紅の檜扇は、法性寺殿普賢寺殿のもち給ひし例ある也、よのつねの人のとるべきものにあらざる歟、我すでに攝政太政大臣を辭して宿德の列にくはゝりたれば、此度よりしてもつべしとおもひて新調せしめしなり、檜木をべにゝて染て、白き絲を以て編む、

その絲の餘り二寸許と忞るされし、紋などを押す事もなしと仰あり、これも某申して見たりき、たとへば、



某問ひ申す、老懸の事順和名鈔の説による時は、古人は老者のみ用ひたり、順の代の比すでに武官の服する所也、又古畫を見るに、よのつね冠に緒ありと見えず、老懸の人には必らず緒をもゑがき候、緒なくして冠せし事古にはいかにや候はむと申す、　仰に冠の緒堅固近代の事と見えたり、冠に薄額厚額のある事老少によりてのかはりめ也、少壯の人は髮多きが故に、髻を巾子にをし入れて冠の落べきやうもなし、故に薄額を用ゆ、老者稀髮にて冠するに堪ゆべからざるは、冠をふかくをし入れて着る、故に厚額を用ゆ、況膏藥づけなどいふ事も出來て用ゆるほどに、冠落るにいたらず、古人老懸を用ゆる上は、猶々稀髮の憂もあるべからず、近世に及びていかなる故にか、老者も皆々薄額を用ゆる事になりて、厚額といふもの世に見えずなりたれば、懸緒などいふ事を用ゆる事になりたりと見えたり、但し順和名鈔の説を見るに、これはたゞ冠の緒の事をいひしやうに見ゆる歟といふ、老懸とて古の貎を挿む事のごとくなる事は、明文なく心得ぬ事也、猶よく尋ねらるべしと仰あり、

又仰に唐草といふものゝ事いかにや心得けるぞとあり、某申す、此事某も不審に存候、十二章の中に藻と申すものゝ事、元の鄒氏が説によりて見候へば、此ものにやと覺悟し候ひしと申す、仰にふるきものに枯草の文といふものあり、此枯草心得ず、おもふに枯草といふものすなはち唐草といふものにや、枯るゝといふ事をいみて唐といふ歟、これも猶よく尋

ねらるべしと仰也、
鶯群帖を草書の飛白の祖たるよし明人の說ありき、これもよく尋ねらるべしと仰ありき、
某母屋と庇との事を尋ね申せしに、母屋庇、孫庇、簀子の事、今の內裏作られし時に、簀子に雨かゝりて便わろく、簀子に雨かゝらざるやうにつくらるべしといふ事ありしに、京職申す、もしすて柱といふものをたてられ候はんには、いかにも簀子に雨のかゝり候はぬやうに作り出し候事かなふべし、柱なからんには庇孫庇までこそたるきにてはね出し候へ、猶それよりさきまで軒を出し候事はかなひ候はずと申す、さてこそ候へとて我に尋問はれたり、我答へしは京職の申す所甚だ其謂あり、古よりその名を簀子と申す事は、雨ふりてぬるゝが故也、雨ふる時は庇を往來するに何事かあるべきといひし事也と仰あり、某申す、しからば簀子は板間のあるやうにあるべき事にや、今の簀子といふを見候ひしに、俗に切目緣といふものゝごとくしたるものにて候、簀子と申さむには、俗にけた緣といふものゝごとくにあるべく候ものをと申す、又某申す、今の內裏の制を見候に、雨おちの溝なく候て、雨ふり候時にその水のゆくべきかたなくて、庭中に水たゝへ候てよろしからず候、その事をたづね候に、內裏には溝なき事のよしを申し候が、ふるき繪を見候に、皆々軒の下に溝をこそ繪がき候へと申す、仰にされば溝なからむ樣はなし、はし隱しの間にうつぼ柱をたつる事は、此沓脫を出入る時に雨の滴る事をいとひて、こゝの軒にはとゐといふものゝごとくなるものをかけて、その滴をばうつぼ柱の中より溝に流れ入るやうにこそしたるなれば、溝なからむに、此れいづ地へゆくべきぞと仰あり、

此日、某住吉が家藏の年中行事の卷物十五卷をかり得て見せまいらせ候を、くりひろげて見給ひしに、竹臺を繪がきし所あり、仰にこゝこそ清涼殿なれと仰ありしに、某が申せしごとくに、簀子の所をといふけた緣といふがごとくにかきて、けたとけたとの間を隙あるやうに、筋を二筋づゝかきたり、今のごとく切目緣などいふものゝごとくに、廣き板を切目の高欄の外に見ゆるやうにしたるものにあらず、又軒の下には皆々溝を繪かれし也、はたして今の物語

のやうにこそあれ、とてわらひ給ひしなり、又此巻物のうちに死にてふきし所、又白虎蒼龍の樓の制めづらか也と仰あり、又車の圖をさし出し給ひて、これこそ宮形の車なれと仰ありき、

壺鐙舌長の鐙のふるきをたづね出したり、眞鍮にてつくりしものなり、やがてうつして贈るべし、舌長の舌の所、俗にいふ舟底なりといふものゝごとくにてある也、靴などつけて參らむに、底平ならむにはよからじ、かくこそあるべきものなりと仰あり、

御引直衣の制を尋申せしに、むかしは御サゲ直衣と申せし由也、我　故院の御もとを故ありて給りて、今に家にある也、よのつねの直衣にかはる事なし、そのたけ七尺ばかりもある歟、たゞ小紐ばかりにて結び給ふ事也、地を引く事長ければ俗にかくはいふにや、

歌仙の繪に業平をかくに、直衣布袴に弓箭を帶せし圖也、禁色をゆりたりし人なれど、これらの裝束なに事の時に用ひられべしとも心得ず、小町にカザミを繪がきしなども同じ例なり、心得がたしと仰也、

纓を卷く事、柏挿或は右よりすともいひ、或は左よりすともいひ、一定の説あるにもあらず、各家の説ありと見えたり、又諒闇の大刀銀作り也、

今の鳳輦に御綱なし、彼年中行事卷物には繪がけり、殊勝の事なり、今も赤き絹をたゝみて置事ある歟、綱の遺制なるべし、

賀茂祭の卷物の陪從の袴の事いかなるものぞと尋仰られし故、某申す、これ行縢の圖歟と存ずと申す、我おもふはこれ二幅袴たるべし、六幅袴四幅袴二幅袴などいふもの古きものにみゆ、二幅の袴心得がたし、おもふにその袴今のみべすかけといふものゝごとくなるを以てその幅に綴れる歟、おもふに此繪の體しか見ゆるなりと仰あり、

横目扇の緒をば、引まとゐてむすびしまゝにてもつなり、女房のごとくにもつにはあらずと仰あり、

中倍　二重織物

君美識

文廟遺命

不肖の身東照宮の神統を承しよりこのかた天下の政事常々神德に嗣ん事を以て心とす然るに在世の日短して其志の遂ざる事今に及でいふべき所を知らず古より主幼く國危き代々を見るに今世の人權を爭ひ黨をたて其心相知らずして相疑ふによらざるはなし胡越の人も船を同して水渡るに其心を一ッにして其力をともにする時は風波の難をも渡るべし况や今の世の人當家創業の後治平百年の間に相生れ相長となる事誰かは東照宮の神慮によらざるものゝあるべき人人其神恩に報ひ奉り世のため人の爲を存せば古の主幼く國危き代々の事共を以て戒とすべしもし其志なからんに於は當家の危難といふのみにあらず尤是天下人民の不幸たるべし凡天下の貴賤大によろしく相心得べき事に思召者也

正德二年十月九日　　御璽印

白石先生學訓序

夫學者以學古爲先也孔子曰信而好古今之學者非不學則不能學古矣有橘屯子勝者宣授業之弟子也自幼聰敏及長深信古學日進博通當世之諸名家焉一日懷白石先生學訓而告予曰屯頃至秋水先生得見之先生謂屯曰永胤得之於仙城滄洲先生也讀之則得學問方矣屯受而熟覽之不知手之舞足之蹈嗚呼斯書英邁卓見使人超然屯豈獨玩之乎欲共同社諸子故奉先生也宣讀之不違屯所言故手自書寫之授二三子且叙其書云爾

寛政二年歲在庚戌仲春壬午

陸奥　藤宣彭德序

先人昔嘗在堂日鑽仰白石先生也蓋有年矣然先人年既老不能遠遊其門而親炙故呈書告其志先生非啻不遐棄於其厚誼踰骨肉以來爲先人所往復之書若干詩又數篇且至若答問雖一回書數百萬言叩兩端而竭焉者不遑枚舉且質幼時先生聞稍讀書過賞不置賜監本四書一帙其副書曰此書也余三十七歲時始所進講文廟之講筵而余家所藏之舊物也余有所思今讓爾欲爾及長而震家聲余也既老矣爾成立之後念焉質不敏雖不敢當與先人相共拜載其賜珍藏以爲光榮矣爾後先人爲質且憂且懼曰爾之性多病他日至廢業乎然則何顏對此賜謝其恩耶質深服膺其教戒既而質及三十七歲僥倖應本藩之擧以文學仕尋有侍講之命於是始以其賜書進講恰有似先生之事而聊復至成先生與先人之志不亦奇遇哉然先生已逝先人亦不存邈如山河遺憾可言乎頃者追念先生與先人出先生之書讀若詩篇若干卷歷覽之每書無一言非有輔世教者其中有學文訓導之事欲以示同志別寫之爲一册讀者能由先生之訓導則天有益其人乎故記其事由以書卷首言

明和庚寅夏五月

源　義質

白石先生學訓

別啓

石川殿にて大學論語御講の事に付て御申越の事承知先々よき事に候次に土州之學幷明石家訓とか申者の事等御申に他事は姑く置き石川殿御事又御年若く候に學文を御慕ひ老兄を御信向と聞え候てゐも大事と存候につきやむ事を得ず此に浮び候事をあと先となく申述候世の中の人一生の間を唯には過候はぬ者に候必ず其性の近き處に着て好むには同事に候それが中學文を好み候はん善事たるは論ずるに不ㇾ及候天地之間陽有れば陰ある尋常中に候故に善事の中かならず惡事の根を含まずといふ事無きはずより古より以來天下後世の大害を照し候は學に過候はぬ事と見え來りし古へ三代の盛なる世には上の人聖德にて代をも國をも治められ候へば其世の人のなし行ふ事盡く學にあらずといふ事無く候ひしぞや但し學といふ詞は始めて般の代より見え候き周室の衰候に及び給ふその政行はれ候〇按恐有脱誤これより始めて儒子抔申す事も聞え候但し儒といふ名の事周公の周禮に始て見え候やらん師といひ儒といふわかれ候事周禮に見え候き孔子の御時旣に老子墨子等の學行はれ候と見え候て孔墨と雙べ稱し候者幾等も候やらん猶夫れより先き旣に管子抔の書も見え今も猶世に殘り傳り候孔子沒後に至ては諸子の學數も多く候て百家の書抔申傳候か此等は猶異端の學共申すべく候へどもまさしく孔門弟子衆の中にて其學別れ候事荀子十二子莊子の天下篇等に其略相見え候此等皆々學にあらずと云不ㇾ可候へども但々古聖人の學の一端をのみ學び得し言にして或は其性の近き處により或は其時の宜き處に着て敎を施し抔申候事にて其人其世の爲にはよくこそは候ひつらめ是を天下に推し後世に及ぼし候に置て所謂る小道の見つべきも遠きを致して泥むの事たるべく候況や秦代焚書之後に漢唐宋元明の諸儒絕學を道經に被ㇾ得候より以來に至ては其名は皆々孔門の學にして其實は猶孔子諸弟子の學に各其別れ候ひし事の如く各其門を立て戶を開き果には學黨抔申す事云ひ出し君子小人玉石供に被ㇾ焚候事漢唐の黨錮宋代の元祐黨僞學黨近は明朝も東林學黨に依り

て皆々天下をば被レ失候ひき是れに過候大害何事歟又候べきや然を近世の人學といふ美名を好み其學の聖にちかきか然らざる歟の撰びなく己々の志を師として好むかた樣に被レ行候て各その學を學とし申輩譬ば佛氏の說いづれか釋迦文殊の敎に出ずといふ事なく候を禪といひ律といひ諸經といひ餘りの事に法華は淨土を非とし淨土は又法華を非とし終に如來の正法を以て道とし候はぬに相同じき者に成來り候學び候はざらんは夫迄に候學び候はん程に候はゞ孟軻氏の言の如くに孔子をこそ學ばまほしき事にも候歟大學の書に明德新民至善を三綱領とは先儒の沙汰被レ爲候誠に如レ此なるは學の大なる者たるべくの事に候老列莊より始て佛氏の學のごとき明法の事にあらずとは申べからずされば天下國家の事古聖人の大經大法のごときは外樣の事の如くに候事に至ては新民の事其沙汰に不レ及候歟さらば其獨を治め候事に善き事とも至れる善とは申す不レ可に學の大なる者とは不レ可レ申や〇今按恐有誤脫管子の如き區々の齊を輔けて天下の諸侯を九合し其功に於ては孔子すでに仁をもて被レ爲レ稱候き今も其書を見候に政事に於て可レ然き事なきにしもあらず名言も又多くに候歟晏子の書も亦是に次ぎ候へばその餘申韓刑名の學の如き則今の律學の可レ及にあらず候此等皆々國家を治に於て後世には猶々然るべからん事も候得ば善ならずとは申難くや候はんずれ其明德の事に於ては其沙汰に及び候はん事どもなれば善の至りにあらず學の大なる者にあらず候歟但々有レ本有レ末有レ始有レ終りて善の至り極れる者は孔子の學におはしまし候へば是をこそ學の大なる者とは申候はつらめ常に敎られ被レ導候御事は論語一書に其微言を被レ撰候と見え候き誠に其書を以て後の儒先の言に競べ見候に似たる事は是似候得共似ざる者に有レ之候と見え候此等の處其說長く候へば筆紙に難レ及候まして近世以來我東方に於てとり沙汰被レ爲候衆中の說のごとき大方法華淨土の宗論のごとくにして道を去る事遠く候を後世輕俊の人道聽塗說し人をして邯鄲の步を失はしめられ候事譬ひ宋末明季の學弊のごとくに天下を覆へしか程の事こそは有間敷事に候へども其害は甚しく候歟老莊孔子の學と申所に能々御心を被レ用候へかしとねがわしく候論語開卷の學と申す事如何成るをか學

と被レ仰候ひつらんかならず當時弟子の人々從事被レ爲候業可レ有事に候次に孔子常に弟子の人々に敎へ導れ候仁の一事と見候處か孔子の御言をば扱て置き君子の言をもて論語開卷第一儀となしそれに次ぐに巧言令色鮮仁矣章を撰被レ成候さらば孔門の諸弟子受け被レ學候事候て志す所の仁なる事推して可レ知事に候又次に曾子三省の章を以て被レ爲候事多少の工夫可レ有事にや但し人の善をなし候はんと思ふ心の候は己れが爲の學には不レ可レ有候わろき事せまじと思ふが善に進の道にして人の爲ならぬ學と見え候然ば今日の學びも先よからぬ事の身に有や無しやを能能心得可レ別事に候歟先にて孔門の人々常に從事被レ爲業と申は詩書禮樂の事に被レ從候にや候ひつらん興レ於レ詩立レ於レ禮成レ於レ樂と見え候ひき顏淵は好學を以て稱し給ひ候所に仁を問はれ候御答に禮を以て被レ示候き又邦を治め候事を被レ問候にも韶舞を以て被レ示候は禮と樂とにあらずして聖人の事業もなく候やらん周公の三百六十官の事被レ記候も周禮に巧に名づけられ候是に一門の心得がたき事候は晏子をば時の賢大夫と被レ申し孔子も被レ稱候人に候處に

孔子の御事を禮樂を事とし驕奢の者に候と其君に被レ申候由其書に見え候尋常の人にも候はゞそれ迄に候晏子のごとき猶如レ此に候此人は大禹の道を宗とし儉を貴び一狐裘三十年被レ著候と申候歟其性の近き所に被レ僻候事と見え候天高く地卑く候は禮の立申候所にて候天氣降り地氣昇候は樂の敎に候天子諸侯卿大夫士庶人但々儉をのみ宗とし禮の節文といふ者なく候はんには鴻業未判之世にこそは候はんすらん天地旣に被ニ別立一候はん後は無レ禮無レ樂していかに人道は立候はむにや今の學士大儒之論にも是に似たる說抔承り候難ニ心得一事にて孔子も周公の美候とも驕且吝抔は觀るに不レ足とこそ仰候ひつれ驕ならん吝ならん世の大病と見え候但し是事の如きは石川殿抔の如き世家の人に能々御敎訓候はん事に候富は期せずして驕ると申傳候此驕は奢侈とはちがひ候て人の氣の高く揚候て人を見下し候事に候馬の醫師の氣有る如く成を申候歟必らず世祿の人に有る病に候にもし纔かも其病候はん不レ可レ然候但々にも自レ下上へ物は難レ申候を其氣候はんに下よりは物申されぬ事に候君德の大を納め諫を申は此事にて自レ下の

諫をさへ被ㇾ納候へば一家一郡もいかにも治り安き者に候桀紂の如き世の暗主と心得候は不ㇾ可ㇾ然候智足拒ㇾ諫候秦始皇の如きも十三より位に卽き二十に足る足ぬ時に大國を合せられ候其智は聖人をも被ㇾ侮候程の事に候政をも一夜に一解の上書を被ㇾ見候と申傳候されど驕氣たくましく我が心を師とし古を不ㇾ師黔首を愚にし刑罰を嚴にし威武を以て世を鎭られんとのみの事にてしかも天下の財を府庫に聚斂め子孫の帝王萬世の業と被ㇾ爲候故に身死して肉寒からぬ程に一代の功を空しくして左程に併せられ候天下を被ㇾ失候是れ但々驕と吝とのなし候所にて候へば孔子の御言其驗の候と申すべからずや君の臣を使ふにも禮を以てすと申事抔能々御心得候ていかにもして文字も讀め候程に被ㇾ成聖人の六籍は申に不ㇾ及史記通鑑之類を被ㇾ爲二涉獵一古今の事の當否に末々には被ㇾ爲二辨明一候樣に御取立て候べき三十世に餘り候て家の立ち候は珍敷事に候へば猶是より後の事深く遠く御導に不ㇾ可ㇾ過候世の人の常の言葉に歴々は大學一書にてよろしく四書小學にて事濟候などゝ申事も候歟返々不ㇾ可ㇾ然眼をふさぎ候て物の可ㇾ被ㇾ取候理萬々に無ㇾ之事に候智の明かになり候はん料は讀書に過ぐべからず候みづから書候はんはみづから眼をふさぐの類たるべきか如何如ㇾ此に申つづけ候得ばはてしなく候間投筆候以上

停雲集

序

予昔從先師所與交游皆一時之儁、講詩書談禮樂旁及子史百家之言、遊息之餘命酒賦詩、迭唱迭和連篇累牘、翰飛墨落風生雨集、如予材劣執鞭周旋其間、而樂相得之歡、若張樂洞庭大戰涿鹿未足以喩其壯觀、然當斯之時忽焉不自知樂也、不圖數年之間山頹梁摧交游日彫散、雖有二三新知之可樂、於其風流雅致索然無復往時矣、是歲之春挈家海濱與魚工舟師雜處、慨然寓匪虎率野之歎、適會都下有災、親戚義故亦皆越在草莽、乃僦一廢館以居、從者數十口、僅庇風雨而已、居所當大江口、枕席之下天水相接、雲帆出沒煙笛四起、偶得故人詩二百餘篇於徽篋中、時々倚檻擊節商聲歌之、波瀾爲之洶湧、魚龍爲之悲嘯、因思昔游恍在心目、不復自知此身在困厄之際、旣而觀其姓名多爲鬼錄、猶有存者流離契濶落々如晨星、嗟予於諸子犬馬之齒旣居一日之長、而天不假年於彼人、憖遺一老以有感斯文何也、遂錄其詩都爲一集、庶其不朽、且欲使我之後人知先友亦有若斯之人也、丁酉仲夏白石序、

停雲集目錄

右作者二十有四人詩共計二百六十首

凡例

一是編以二停雲一名、義取下之陶靖節思二親友一詩題上也、

一凡是編所レ錄、只係二交友詩一、至レ如二先師子弟諸作一、則不二敢載一焉、

一凡交友諸作、曾經二梓行一者、既傳二于世一、故不三復載二于此一、如下和韓倡和集所レ載、及南國華登二東叡山一詩上即此、

一平昔所レ得交友詩、各家篇什其數不レ少、歷年以來災火鼠蠹之餘、今所レ存無レ幾、是編所レ錄、即從二其所レ存、或載二曾所レ記者一、故不レ免二闕漏一、

停雲集卷上

室師禮 室直清、字師禮、一字汝玉、東武人、號滄浪、又號鳩巣、其先出自山陽丹治氏、有食邑於備之英賀郡者、稱爲室氏、蓋因地爲氏、以分其族也、師禮幼而聰悟、北藩菅公以爲奇、命就學京師、學成竟爲恭靖木先生門高弟、最精經義、所著大學新疏既行于世、文廟初、以儒雅徵擢焉、

擬古二首

燕山有羈客、歲晏衣不完、旅食二十年、襤褸著南冠、北風海上至、飛雪凋人顏、比鄰何蕭條、苦辛義相關、誰家絃歌作、飄揚鬧雲端、酒酣樂未央、鳴琴不罷彈、楹間既來鳳、階下亦舞鸞、借問綺羅客、寧知此苦寒、

二月日始暖、空庭鳥相和、佳人感物化、抱琴亦長歌、歌罷復嘆息、離居經年多、艶艶桃李樹、相思掇其華、過時無所贈、飄零奈若何、

和陶詩三首

和郭主簿

長夏午景靜、嘉樹鬱成陰、凱風自南來、穆穆吹我襟、大哉虞帝歌、寄懷五絃琴、好古良自昔、心醉達至今、故人同此意、高義夙所欽、杯酒方獨持、無乃就我斟、間關林中鳥、求友爲好音、禽鳥猶如此、獨不念盍簪、倘子爲來、胡使吾望深、

歸國園居

自始從宦役、無日忘丘山、矧伊桑楡景、値我將老年、魚躍不襄陵、獸挺寧在淵、達性少所宜、歸耕南陽田、鄰並八九家、屏跡白雲間、晨出隨衆後、暮還居人前、團團遠村樹、荒荒近市烟、牛羊日夕下、返景在山巓、營生各自遂、靡爭與物閒、醉臥東軒下、愉悅在自然、

飲酒

富貴如浮雲、遑遑欲安之、苟合我所恥、直道非其時、假息南窓下、樽酒復在玆、人生會有盡、知命貴不疑、先民貽高矩、百年可自持、

古離別

客行不可留、征旆去悠悠、孤影翔黃鵠、四蹄蹀紫騮、通津傷目樹、遠渡斷腸流、別後同明月、相思兩地秋、

行路難

不向蠶叢路、安知劍閣雄、崖懸秦棧險、峽拆蜀江通、猛虎號寒霧、玄猿嘯夕風、問君歸幾日、恐使壯心窮、

初月

暮見瑤臺鏡、玉奩蓋未全、暫爲懸樹抄、忽已沒雲邊、河漢星輝動、山林夜色連、幽情如有失、把酒思悽然、

觀獵

東門千騎出、西阯百重圍、走狗連麇起、饑鷹接雉飛、風聲驕殺氣、日色肅寒威、壯士尙餘勇、彈弦月下歸、

塞下曲

八月秋霜下、鐵衣更覺寒、馬鳴沙草短、人渴井泉乾、烽火燒雲盡、笛聲吐月殘、欲知酬國日、須我斬樓蘭、

悲秋

雁飛邊塞日、葉下洞庭波、天上風烟改、人間感慨加、楚臺悲宋玉、易水泣荊軻、回首瞻牛斗、憑陵一浩歌、

中秋

復見瑤臺鏡、高懸霄漢開、瓊華堪可贈、桂樹杳難攀、爽氣通滄海、寒光動白山、秋風吹不去、長此照人間、

和都鑑湖韻二首

題鳳門扁字、知君過草堂、千金留一諾、三日尙餘香、已附青雲士、又憐白首郎、仙丹如可覓、衰老亦何傷、

今日龍門客、通家似子稀、憑生彈寶劍、范叔泣綈衣、東道主相得、北邊人不歸、春來故鄉夢、猶逐遠鴻飛、

長安春晚別故人二十韻

京國春將盡、送別出帝畿、風花飄綺陌、雪絮舞彤闈、蘭苑啼鶯寂、雕梁乳燕飛、五陵何鬱鬱、四牡去騑騑、遊子今安往、王孫尙未歸、星文分寶劍、草色上征衣、岐路楊朱泣、窮途阮籍非、水流青甸迴、山遠白雲圍、初筍經春出、新蒲近夏肥、芳洲薰杜若、古洞落薔薇、行色朱明逼、風光艷景微、留連親翰墨、佇立惜芳菲、別意驚年邁、故交苦日稀、離襟雙淚下、把酒寸心違、後會茫何許、佳期莫與依、有懷憑夢寐、無路問音徽、幾度將衰鬢、雙垂對夕霏、中庭看月色、千里想容輝、相信比膠漆、何曾投杼機、自憐知己少、寂寞掩荊扉、

國慶詩一百韻

今茲四月、邸報、始聞公室慶事、尋又聞嘉禮卜定是歲子月內、區區犬馬之誠、不勝欣躍、至秋遂幷賦本藩立國始末、呈白石君美、

天步昔艱厄、妖氛暗八埏、英雄紛竝起、攻伐日相煎、割據環寰宇、幷吞廣幅幀、元亨方板蕩、永祿尙腥膻、糜粥干戈沸、雷霆鼙鼓闐、狉貅驕戰卒、龍虎鬪兵權、飛檄東西至、交烽遠近傳、萬家投耒耜、百里荷矛鋋、黷武兵忘戢、肆凶惡未悛、殺人血漂鹵、鏖敵骨盈阡、嫋嫋頳魚尾、眈眈餓虎涎、攫拏眞可惡、陷溺竟誰憐、覿彼暴民主、有如毆雀鸇、人心歸德切、鳥性向叢專、眞主初膺籙、群黎始息肩、清明昌運應、渙汗積痾痊、贄玉塗山會、命龜洛水邊、營都開地勢、經野察星躔、昔見成虞芮、今聞卜澗瀍、雨暘各時若、聲教永無愆、閶闔天中起、衣冠雲外延、會同皆北拱、貢聘向東連、后辟分藩邸、工商塡市廛、康衢車雜沓、廣陌馬聯翩、公子飛華蓋、使臣裝錦韉、五侯多致客、七貴儼如僊、恩賜漢家第、宴頒鄧氏錢、人懷腰下綬、家積幄中蟬、況復重輪曲、新調太樂絃、函三崇至道、明兩仰高懸、鷄唱龍樓曉、笙聲鶴駕天、雍熙還上世、禮樂及興年、富庶古難得、昇平今已然、此邦稱重鎭、流祚等淵泉、高德元君在、（本藩祖、亞相君、諡高德公、）雄圖奕世虔、昔時逢草昧、當日屬迍邅、虎視三河外、龍驤萬國先、拉摧迎刃竹、神速下風船、席卷收河朔、飈飛擧薊燕、州居天下險、地擅海邦咽、士練堪持戟、兵強足控弦、謀臣森以稼、猛將萃成淵、禦侮廟堂上、折衝樽俎前、子孫餘慶守、鐘鼎偉功鐫、社稷金湯固、歲時血食牷、中原逢眷出、四國競來宣、際會風雲起、回翔日月旋、周酬微子德、漢寵竇融賢、茅土雖新胙、金甌依舊圓、平原周沃壤、嘉穀毿青田、華實饒山稅、鹽魚溢海壖、百年休狗吠、四境接人烟、城險雲生堞、水廻樹斷川、樓臺明烱烱、郛郭翠芊芊、舊俗均安業、故封久靜邊、我侯承祖烈、化下務陶甄、驃騎居家樂、河間宿好偏、愛民憂閔閔、奉上執拳拳、秉德優微草、和羹煮小鮮、撿身躬儉素、遠色退嬋娟、抑戒防傲樂、微蹈禁泝沿、歲凶荒政布、介下負租蠲、圖治能勤小、擧材寧誤銓、趨朝褌覓古、行部襜帷褰、光合雙珠蚌、助多百足蚿、棣棠花韡韡、瓜瓞蔓綿綿、述職專城寄、啓行五馬聯、瑞圭擎國信、衆戟候車牽、賓饗稠金殿、鴻儀肅玳筵、德音歌樂只、章服有宜焉、喜色康侯馬、寵

光明月旆、隆恩無二曠日一、殊禮有二加籩一、養望衆瞻レ斗、流芳人似レ荃、更聞蘭玉儷、下レ自二壺闈玄一、豈料儲君重、新添二駙馬駢一、陽來催二道泰一、冬至向二氷堅一、鸞駕辭二金闕一、蜺旌送二玉軿一、設筵陳秩秩、束帛賁戔戔、迎レ慶將レ呈レ履、戒レ寒及レ獻レ豜、肅雝儀九十、鼇降禮三千、穠李王姬艶、鳴琴帝子妍、東瀛來二紫氣一、北渚引二清漣一、連理鳳臺樹、重輝相府蓮、雕甍飛二反宇一、層構出二長椽一、筦簟乃安レ寢、熊羆此入レ眠、螽斯今揖揖、麟趾且躚躚、黎庶樂忘レ食、群臣喜欲レ顚、不二唯藩國福一、可レ頌二泰階全一、同學今如レ綫、故人先著レ鞭、宴陪汾水飮、詩和柏梁篇、對問承二前席一、講經侍二細氈一、落レ珠揮二彩筆一、摛レ藻染二華箋一、直道清時合、高情塵事捐、秋天茫緬邈、雲路想二騰騫一、夢寐昔遊久、睽離老病纏、索居淹二歲月一、卜宅傍二潺湲一、對レ酒心猶壯、讀レ書眼已穿、論レ文空有レ約、會面杳無レ緣、華袞君須レ補、滄洲吾所レ便、天涯聞二盛事一、傾寫欲レ成レ編、鳩巢五言排律、登二白山一一百韻、贈二韓使一二百二十韻、七言排律、大風作五十韻、皆是高華雄整之作、其二百二十韻、見二于和韓倡和集一、其餘則失レ之、故不レ載二于此一、

秋興　自注云、和二老杜韻一、○此原八首、唯今記二得其四一而已、頃聞鳩巢宅舍亦既燼矣、不レ審二舊稿存否一、

蕭瑟秋風動二碧林一、天邊樹色鬱森森、鯨鯢蹴レ浪海氛惡、猿狖嘯レ雲山氣陰、鬢際霜侵多病日、腰間龍泣未灰心、樓前一片如レ鉤月、別恨誰家送二夜砧一、

歲晚滄江日易レ斜、病來分外滅二容華一、人間空負思歸膾、天上難レ浮乘月槎、千載悲レ秋傳二楚調一、萬家牽レ恨入二胡笳一、樽中綠酒香新熟、欲下傍二東籬一摘中菊花上、

十年游學愧レ無レ功、爲レ客逢レ秋京洛中、清曉夢殘荷葉雨、黃昏笛斷柳條風、異鄕到處眼終白、同侶幾人顏共紅、書劍歸來最蕭瑟、滄浪一曲和二漁翁一、

遠林平楚渺逶迤、萬頃秋田匝二鄭陂一、野外荒墳碑仆レ草、村中古廟鳥棲レ枝、山阿長對白雲在、人代寧知滄海移、誰子枕藜懷レ古久、愁吟隴上日將レ垂、

奉レ寄二白石一兼呈二南南山一

東都冠蓋古今開、拖レ玉腰レ金多二上才一、已識田郞題二漢柱一、更聞樂毅客二燕臺一、十年離索悲レ分レ袂、雙鬢蹉跎愧レ對レ杯、歲晚相思逢二驛使一、隴頭幸寄一枝梅、

贈二南國華一

南園樹色繞二庭闈一、夢裏彩毫五色飛、臺嶽曾留孫綽賦、越山今見買臣歸、清時雅頌傳二金響一、故國烟霞照二錦衣一、自レ古童科多二選士一、風流縕藉似レ君稀、

和二僧法霖春興作一

杖藜何必四尋レ芳、坐與二青郊一隔二一墻一、白鶴飛隨松下

楊、黃鶯啼近竹間房、客來共說浮生短、老去自知野趣長、清夜人眠群籟寂、唯餘二明月一照二繩床一、

中秋和二新川肥允仲韻一

君昔材名擅二翰林一、今宵相遇薜蘿深、丹梯攀レ桂香猶動、寶劍衝レ星氣未レ沈、多客幾同穎玉影、雙珠難レ報斷金心、秖知仙子登瀛夢、十二樓頭寄二朗吟一、

同酬二鶴樓一

水精簾冷透二初霜一、席上金波流二夜光一、羞我胸中無二藻思一、愛君筆下吐二蘭香一、韓生賣レ藥舊曾隱、賀監能レ詩元自狂、他日鶴樓如見レ鶴、蹁躚還似レ舞二霓裳一、

雨伯陽宴會與二諸君一同賦二鳳凰來儀一

梧桐日出露初晞、戚鳳來賓下二德輝一、丹陛自隨干戚舞、紫庭長對袞龍衣、却疑五色瑞雲起、更傍二三重阿閣一飛、共說太平今有レ象、簫韶九奏莫二相違一、

題二富士山一

上帝高居白玉臺、千秋積雪擁二蓬萊一、金鷄咿喔人寰夜、海底紅輪倒レ影來、

賦三得蓮池夏月一

芙蓉池上夏先寒、玉色玲瓏承露盤、時有二微風間度一レ水、幽香和レ月到二闌干一、

代二乞人一

城中得レ食暫來歸、兒死無レ聲在二母衣一、取レ飯與レ妻妻泣說、縱餐能療二幾時饑一、

春遲

楊柳未レ垂花未レ紅、家家簾幕捲二東風一、春歸二江上一無二詩處一、只在二青青衆草中一、

留健甫 西山順泰、字健甫、對州人、本姓阿比留氏、後改二西山一、年二十餘、州辟爲二書記一、因肄二業於木先生之門一、自恨二學晚一、勤苦讀レ書晝夜不レ息、才思敏贍、作二爲文章一輒數百千言、及二其疾病一、乃命二其僕一取二平生之稿一而焚レ之曰、若二我文章一何用遺レ後爲、元祿戊辰秋九月、歿二于學舍一、年二十九、先生深惜二其才一、自撰二碑銘一葬二之東武郭北養玉院中一、

夏日作

不レ堪二三伏暑一、相避綠筠叢、密葉能遮レ日、繁枝自動レ風、脫レ衣懸二石上一、散レ髮臥二林中一、閒入二華胥國一、覺來月在レ空、

古寺

古刹半荒廢、綠苔壁上交、虛廊蛛結レ網、寒殿雀營レ巢、碑字經レ年沒、佛頭飽レ雨坳、僧愁宇間漏、欲レ葺日芟レ茅、

郊行

春日遲遲鞋底開、郊村佳趣隔人寰、遙峯半出晴雲際、小瀆斜分壟畝間、竹外無家群鳥下、松陰有寺一僧還、行吟忽覺渡頭暮、短艇撐來傍柳灣、

賀白石生女

巽索設筵湯餅清、君齡於我二年兄、桑弧猶待熊羆夢、錦帨先懸婺女明、韋母受經終父業、班娘續史振家聲、謝庭更發閨房秀、異日應聞詠雪名、

閨怨

遊子歸期何事違、深閨夜夜夢還稀、合歡花上黃昏雨、腸斷雙鴛傍檻飛、我嘗得見蘋州熱海行七言古風五十韻、俊逸高暢、今則忘之矣、

原希翊 榊原玄輔、字希翊、泉州人、其先伊賀州下山氏也、幼爲外父所養、因冒榊原氏、初遊學京師、受業錦里門人、居數年、隨外父而東、始見木先生於都下、爲先生所器稱、未幾應南藩辟、其學博綜、旁通星曆五行數術之說、以經濟自任、嘗蒙府命以撰大明律譯解、其他著作亦多、兼工篆隸、寶永丙戌春正月、年五十一而歿、有子二人、其長子德、字武卿、幼有文章、且善書、殆有乃父之風焉、

内殿宴游圖

金風瑟瑟天氣爽、内園催宴斥細仗、教坊名妓妝新成、携手三三又兩兩、森沈後院小閣開、蘭秀菊芳曲池傍、金蓮輕步遶池去、隱隱痕香一徑苔、松下清陰移錦茵、巖桂花發襲羅巾、鏡前含笑整雲鬢、嬌顏自矜河洛神、一曲清歌入青雲、絃管調高半天聞、伊州涼州傳新曲、按譜爭奏日欲曛、蒲萄美酒琥珀杯、墮珥妖姬醉且頹、潞潞飛泉如碎玉、橋畔帶醉共徘徊、笑把彤管試一揮、意象閑雅風吹衣、水墨淋漓滿練素、江山萬里雲烟飛、絳袍玉帶鬚髯美、太平天子參差是、彷彿當時天寶秋、孰問邊疆既多壘、歡娛未足宵又旦、霓裳曲歇鼙鼓亂、黃屋南奔劍門遙、鳥啼花落蜀道難、

中秋雨晴

連朝風雨急、明月不辜期、合浦珠還夜、荊山璞剖時、停杯憐影滿、倚檻惜陰移、坐久空庭寂、梧桐玉露垂、

訪香國上人不遇

重來能幾日、夏木總成陰、霽景催輕暑、微風長嫩林、淨几香烟絕、虛牕竹影深、倚杖柴門外、孤雲不可尋、

夏夜

高林過驟雨、餘爽滿書樓、竹影偏佳夕、風聲忽似秋、天邊雲漸白、葉末露先稠、偃臥星河下、虛櫺灝氣流、

哭周菴丈人

東來逢此老、千里不空遊、論古常終日、傷離忽恨秋、新墳黃土濕、半嶺白雲愁、因憶携行處、悲風草露稠、

惜春

寥寥兀座小堂中、一歲春光過眼空、墜粉多情終日雨、飛花無跡五更風、馬蹄芳草全披綠、燕嘴香泥半帶紅、幾處園林渾變色、閒愁此際與誰同、

冬夜雨（至後二日）

陰雲蔽日暮寒催、漸聽風聲送雨來、一室題詩分燭影、千年論事畫爐灰、蕭疎猶入已凋樹、淅瀝潛霑將發梅、至後初知生意動、明朝欲問井泉回、

畫梅

積雪滿空林、溪風吹不起、唔知梅花開、一路寒香是、

次韻客中感春作

晴川泯泯向東流、草色如烟使客愁、那耐他鄉春日暮、飛花滿地獨登樓、（寔洲病中感興三十韻、自述甚悉、今則失之矣、）

南思聰

南部景衡、字思聰、長崎人、本姓小野、少孤、爲業師南部子壽所子畜、因冒平姓、蓋南部氏越之長尾氏族也云、少學詩於閩人黃公溥、杭人謝叔旦、爲二子所稱焉、及子壽應菅侯之聘於越中、因命從學筑之省庵安先生、學既通而東、子壽既沒、菅侯命嗣其後、去寓于東武、脩弟子禮事恭靖木先生、以先生與安先生同學故也、居三年、菅侯屢召、乃還、正德壬辰春三月、客死於越中、年五十五、爲人溫恭篤謹、精通經史、文材富贍、身既多病、自撰詩六百九十四首文四十四篇、曰喚起漫草、有子三人、皆有材名、相次而死、其長則國華也、

春日偶作三首

白日出復沒、青春去不住、馮唐空嘆老、潘岳早著賦、常怕踏浮名、蹉跎至遲暮、已哉其已哉、古琴與俗忤、鍾期逝既久、孰知流水趣、

世路何屹崒、人心何嵯峨、衣蜂逢父怒、市虎貽世訛、屈子空懷忠、賈生亦跌蹉、周道直如矢、讒口何呿呿、丈夫有洪度、氣槩天可摩、豈必抱悲憤、局促損天和、所以晉名士、竹林醉傞傞、達人識大觀、浮世一任他、

我才不如人、我癖頗好古、座右書千卷、閒中香一炷、端坐遡唐虞、淵源汲鄒魯、孔門揭日月、昭昭名教祖、六經道編尊、萬世誰納侮、自餘俊傑士、魯連恢器宇、千金辭王侯、蹈海中規矩、豈不慕高華、我實無翮羽、

寄酬道香師

叢林久識謫仙人、文采風流驚士民、笠墳漢典幾千卷、眼飫五車道尤淳、晨揮玉塵參龍象、夜誦曇花走鬼神、葛藤消盡禪機熟、玄風大梅世荒屯、老婆心性

野鶴姿、緇素仙凡未レ易レ遵、憶昔許レ盟白蓮社、社中俊彥何彬彬、雄詞健筆源泉涌、酒態詩情雪月新、好事爭攜滿レ袖去、如下入二崑山一得中瑣珉上、黃公當時執二牛耳一、華言贊三師斟二清醇一、黃公西去我東去、師亦飛レ錫在二中津一、俯仰星霜二十載、悠悠往事一微塵、新知海外交難レ久、舊識天涯書不レ臻、百年身跡永陸沈、歸田何日耡二荊蓁一、薄宦悔我自貽レ阻、欲レ投二簪笏一更無レ因、幸向二空谷一寄二跫音一、捧讀免レ使二眉間皺一、自注云、黃公名公溥、閩三山人、

遊二悟眞寺一 寺在二崎陽一

禪場滄海上、勝地白雲邊、林缺危峯出、堵高落日懸、波通中夏域、岸繫外夷船、雲影雖二無意一、閒飛到二客前一、

題二徜徉庭一

樹密囂塵隔、草長細路迷、春山飛鳥外、夕日落花西、呼レ酒坐レ苔醉、得レ詩刪レ竹題、不レ知冠冕貴、惟是適二幽棲一、

夏日閒適二首

俗交日日輕、夏遥絕二逢迎一、睡起呼二茶盞一、饑來進二菜羹一、天憐多病客、世識不才名、注想千秋上、古賢許二結盟一、

囂囂咸嘆レ老、孰復伴二閒居一、屋後千竿竹、牕中一卷書、揷レ瓶憐二芍藥一、倚レ杖看二芙蕖一、漸適嵇康性、經旬髮未レ鋤、

白牡丹

枝頭月一輪、素質描難レ眞、不レ事二豪奢色一、何誇二富貴春一、朝暉仙袂動、午雨道妝新、若使二陳王見一、無レ心賦二洛神一、

長安春望

惠風駘蕩扇二微和一、佳氣氤氳五色多、鳷鵲觀前消二臘雪一、鳳凰池上起二春波一、東郊麗日催二花柳一、南陌香塵鬧二綺羅一、卽是長安行樂處、樓臺何處不二笙歌一、

雒之西北三里、其地曰二八瀨一、風俗朴固、如レ隔二人境一、余養二痾于茲一數日、嘉而賦レ之、

臥病來遊八瀨春、煙霞染レ眼正怡レ神、地鄰二帝里一還如レ遠、人沐二皇風一都是淳、父老百年忘二甲子一、山村十里似二朱陳一、迂廻何異桃源路、獨怪漁郞未レ問レ津、

杜鵑

富貴浮雲事已空、千年遺恨託二春風一、愁迷二芳草一蘼蕪綠、血染二閒花一躑躅紅、南國佳人揮二粉淚一、西川羈客愴二丹衷一、多情尤是殘燈外、啼向亂山月色中、

牽牛花

玉露連朝潤蔓枝、園林秋色滿疎籬、藥名久識牽牛稱、（一作種）花信常當織女期、弱質染紅霞稍薄、慵妝嚬碧日初移、曉風一陣方開遍、羯鼓何須爲（一作相）報知、

中秋

雲間皓月滿南樓、光彩射人逼客裘、河漢遙流千里影、關山不隔一輪秋、金風吹樹芙蓉老、玉露浸階蟋蟀愁、聞道仙槎今夜泛、願隨槎上到滄洲、

簡白石

鴻飛不度隴山雲、驛使傳書信始聞、四海萍蓬誰似我、百年膠漆獨存君、越禽巣樹常懷土、胡馬臨風永戀群、猶有主人憐九九、未從老圃學耕耘、

懷環翠園十首

無用之材逢時不收、多病之人觸物易感、余兼斯兩者、而宦況已索然矣、春日適有懷環翠園、因作詩以言志、

咫尺城中路不賒、竹籬茅舍是吾家、牕容西嶺多看雪、圃學東陵半種瓜、群卉得春私雨露、孤松經歲老煙霞、風光漸近清明節、繞徑應披曲曲花、

百種花園一草堂、中藏書帙與琴囊、生前不負十千酒、死後何須八百桑、細雨紅桃應委徑、輕煙綠竹定過墻、縱令歸去非吾土、自笑異鄉爲故鄉、

異鄉客跡任飄蓬、何故夢魂馳越中、欲去路連飛鳥外、思歸身在亂山東、平生才氣慚園卒、每事機關嘆塞翁、明鏡流年無力駐、歡情託酒醉顏紅、

醉後歡情漸已微、愁心一半憶長崎、百年天地家何在、萬里鄉關客未歸、世上風波猶是險、花前杯酒莫相違、浮萍常逐東流水、江雁胡爲向北飛、

江上春來雁幾群、連飛遙度萬山雲、誰憐叔夜不堪俗、自羨仲連能解紛、徒有寸心懷暗恨、却無尺璧獻明君、多情試倚高樓望、花事闌珊落日曛、

千片花飛春事休、游絲萬丈惹鄉愁、樊禽空抱雲霄志、涸鮒每懷江海流、客裏哀顏驚對鏡、病餘豪氣懶登樓、身逢盛世閒何少、野水湖頭愧白鷗、

一池春水白鷗波、曾此誅茅養宿痾、咫尺鄉都塵事少、東南林壑白雲多、啄花鳥近書牕語、煮茗泉環竹塢過、昔事回頭都是夢、他時今日又如何、

今日情懷鬱叵伸、且驚兩鬢漸如銀、雁歸塞北猶爲客、梅發江南暗憶人、萬里浮雲遮白日、五更斜雨送青春、桃花流水知何處、欲逐漁郎試問津、

洞口漁郎我未レ如、年來宦跡永躊躇、人生七十已過レ半、客路三千常有レ餘、中夜聽レ雞增二感慨一、一時畫レ虎媿二吹噓一、文章於レ世成二何補一、休レ謂丹心不レ負レ初、忽覺初心隨レ日消、一枝今已愧二鷦鷯一、淡妝久負梨花面、狂態遙憐柳絮嬌、欲レ見二春山一常洗レ竹、愛レ聽二夜雨一亦栽レ蕉、宦游儻得二園中趣一、到處應須レ樂二簞瓢一、

遊二友人閑居一

酒後脫二冠巾一、傲然忘二主賓一、笑談千萬語、未三肯落二風塵一、

題二古硯先生書齋一

山色小牕中、宦情可二以紓一、松風落二座閒一、夏日不レ知レ暑、

望二妙高峰一

快覩天邊第一峰、巍峩百丈削二芙蓉一、絕頂應レ有二神仙窟一、雲氣時成五色龍、

和二宮詞一

花柳園レ樓錦繡春、嬌鶯啼老滿宮人、君王不レ愛三千色、內使傳宣徵二太眞一、

春晴

曉日初升池館東、捲レ簾淡蕩滿襟風、還憐花徑香泥濕、燕子銜來數片紅、

南山客中除夜五十韻、沈痛慷慨、其餘佳句、五言則和二初春作一云、松竹含二淸氣一、江山釀二暖烟一、和レ僧云、四時花繞レ徑、中夜月臨レ堂、僧房即事云、小檻籠二遠景一、高樹灑二微涼一、夏日閑適云、暑至二池塘一少、涼生二竹樹一多、七言則春山晚烟云、輕素交レ雲迷二碧岫一、浮光帶レ霧擁二青巓一、落花云、玉笙奏罷唯餘レ月、珠幕鉤殘不レ見レ春、和レ送レ春韻一云、流水人家芳艸逕、斜陽漁笛綠楊津、哀柳云、藏レ鶯葉逐二秋風一落、帶レ蝶枝隨二夜雨一衰、和韻云、白日茶烟迷二佛榻一、黃昏燈火認二僧庵一、早春寄レ人云、兩地身成二花下客一、獨居跡託二酒中仙一、憶二先師一云、華髮一朝終物故、青山千古爲レ誰新、今皆忘二其全首一、故附二于此一、

雨伯陽 雨森東、字伯陽、京師人、其姓橘、號二芳洲一、初受二業錦里門人一、年十七八、東見二先生於都下一、風神秀朗、才辨該博、先生稱爲二後進領袖一、會對州請二門人一以爲二書記一、先生因薦二其材一、遂以二文章一爲三韓人所二推重一云、

寒夜江口泊レ舟

百里帆初落、篝燈影欲レ空、寒潮終夜雨、落木一船風、戍客鳴二邊柝一、舟人俟二曙鐘一、重江牢艱險、就若嘆二途窮一、

寄二祇南海一

吾黨祇夫子、激昂元不羈、窮年唯有レ酒、開レ口便成レ詩、聲譽龍門竝、襟懷鮑叔知、轗軻今尙爾、李廣未レ爲レ奇、

簡二友人一

君自二西京一幾日到、淸標曾向二夢中一看、關河馳レ馬孤雲度、風雨隨レ身一劍寒、混レ俗多年雙眼白、論レ交此處寸心丹、滿杯綠酒須二相勸一、知己相逢從レ古難、

用京洛故人韻

年華寂寂伴閒愁、遠客離憂萬里心、身託明時從性懶、心懷清隱苦塵侵、東來滄海寒潮濶、西向亂山夕日深、多少交游情更冷、音書秖見鯉魚沈、

孤客乾坤情叵禁、飛來尺素拂愁襟、幾年懸楊陳蕃志、一夜登樓王粲心、風動御隄春柳亂、月臨仙掌曉雲深、海天杳渺長爲客、帝國勝遊何歲尋、

隴頭水

君看隴頭水、分流似別離、年年流不息、不及妾相思、

冬曉

清晨霜滿屋、日影上簷初、把筆硯氷結、起來牕下書、

少年行

珠簾繡箔畫橋西、勸醉千鍾客似泥、日暮呼盧猶未散、垂楊陰裏五花嘶、

寺歸

天風吹袂下崔嵬、盡日談玄心已灰、煙樹霏微歸鳥外、一僧相送過溪來、

丁亥歲奉役朝鮮、經雞知村、梅花數株爛熳可愛、雖歷寒暑宛在心目、今夜與兒德允話及曩昔、慨焉久之、

春風識面野村梅、苦竹叢前手作堆、冷雨荒江身萬里、夢魂猶覺暗香來、

祇伯玉

祇園正卿、字伯玉、一字蛾、南紀人、幼學木先生之門、嘗見諸子共賦邊馬有歸思詩、卽席賦七言律體一篇、天才豪宕、衆皆愕然、始識其奇、居數年、適値作分日、自試其材、午時至子初、賦得五言律詩一百篇、大爲時所稱、或以爲疑焉是歲、秋分置酒宴會、午漏初下、進請諸客各命詩題、對座談笑信筆旣賦五言律體六十餘篇、大昏燭至、揖客而笑曰、今日諸君所命關、有與前作篇題同者、鄙心竊恐語意相似、故苦遇至此、詩腸且枯矣、呼酒沃之、夜未半竟成百篇、才思若沸、俊語疊出、通計前後所作凡二百篇、無一句雷同者、衆皆嗟賞至明、卽爲之以詩呈先生、先生驚異以爲神、於是南海之名遂聞天下、于時其年十七、實元祿壬申八月十日也、

金龍臺

忽傾三百杯、直上金龍臺、不窮千里目、何消萬古哀、下視天下士、賢愚渾塵埃、名利良微物、鐘鼎非我才、匹夫抱璧良其罪、禍福徇人因自媒、朝取封侯夕爲魚肉、躡珠之客爲誰來、牢耶石耶何棊棊、土山漸臺作死灰、況復我生非松喬、白日西飛難再回、百年開口一大笑、身後鴻名何在哉、當歌意氣乍奔逸、傍人莫怪玉山頹、唯願手弄雲開月、萬古千秋照金罍、

寄二題圓通瀑布一 彥山二十景之一

瀑布飛來何壯哉、瓊嵓瑤嶠相晴蔭、洪潭雷吼萬壑倒、六月雲門吐レ雪來、中有二碧霄之杳靄一、下有二玉樹之瑰材一、吾欲二往從一道路險絶隔二塵埃一、爭得二晉代孫常侍一不レ知何日賦二天台一、

龍泉途中作

出レ郭纔三里、物色便不レ同、甘雨溢二畎澮一、宿雲帶二遙峰一、早梅飄二晚素一、舊林閙二新紅一、籃輿恐二石磴一、步屧至二琳宮一、處世良紛糾、微官疲二鞠躬一、奇服俗所レ笑、不材毀所レ叢、探討銘二夙昔一、天姥夢屢通、欲レ攀神樂巖、赤松或可レ逢、頷有二濟勝具一、獨往途未レ窮、歎息謝康樂、跡同意不レ同、自注云、神樂巖、在二上谷南二里一、高十餘丈、奇峭極工、

中秋詞

明月三五灧二金波一、天風吹レ桂夜香多、玉樓瓊戶空想像、天上人間望如何、龍笙聲咽銀河橫、酒滴二眞珠一爲レ君傾、人生歡娛願如レ此、月落二西廊一難レ爲レ情、

和二中秋韻一

玉樹金風夜、桂花白露秋、興從二雲外一發、身似二月中遊一、夜靜孤蛩急、天空一雁幽、還應二歌管地一、不レ若レ醉二南樓一、

蓮湖賞レ月

荷花三百里、香已落二南湖一、月露皆搖蕩、水天或有無、洛妃遺二玉佩一、仙侶下二氷壺一、笑傲醉中意、唯憐永夜徂、

賦二得燈花一

愛爾山齋夜、熒熒結作レ團、酒醒焦雨滴、琴罷竹風寒、坐久丁香大、更深金粟攢、通宵報二何喜一、唯伴二漏聲一殘、

思二梓山石處士一

栖栖石處士、名以二能書一傳、一灑興何懶、三杯醉最顚、蕭疎秋竹雨、蒼勁古松烟、逝矣樽中物、羞レ之不レ及レ泉、

龍泉獨夜

獨夜宜二三酌一、深山只數椽、愁懸青嶂月、夢濕白雲泉、宿鳥枝非レ擇、高花香自憐、誰能解二簪組一、林臥忘二衰年一、

和二白石中秋泛レ舟過二牛渚寺一

牛渚乘レ秋過、龍宮向レ晚開、地分二平楚一盡、天入二大江一來、瑞塔隨レ潮涌、珠林逐レ岸廻、乾坤到二銀界一、雲霧接二花臺一、波動金風落、夜涼鏡月催、豈閒多二賦詠一、難レ比謝公才、

賀三君美應二甲藩之聘一三十韻

赤帝御レ寰日、黄軒問レ道同、三正應二曆象一、四序轉二鈞洪一、社稷神伊嘏、禎祥天所レ崇、乾文拱二象律一、地理紐二華戎一、朝野無二賢棄一、謳歌自二藏豐一、聲教千古改、禮樂方通、翼亮皆文武、登庸必績功、召周猶養レ老、岳牧既開レ聰、青士函關外、金門碧海東、命龍班二玉帛一、封爵錫二圭桐一、整肅衣冠盛、赫煇邸第雄、英才徵二鄴下一、秀士在二吳中一、出入章華殿、登臨碣石宮、蓋飛漳水月、賦就楚臺風、虎嘯寧深谷、雄飛卽碧空、雲天上謁豁、雨露下恩濃、愚昧知非レ是、俊髦良可レ充、關西楊伯起、天下漢胡公、炳煥詞章富、紛綸經義隆、高歌霏二白雪一、敷藻落二青虹一、思發鬼神泣、毫飛鸞鳳沖、瓊瑤傳二雅頌一、金石起二曹豐一、齊國逢二吳子一、鄭門推二馬融一、聲名已超絕、學術猶磨礱、本是文章士、豈知哲匠工、得レ朋常討論、求レ我似二童蒙一、夙抱二賈生志一、其如二阮籍窮一、龍鱗失二雲雨一、雀躍在二蒿蓬一、居レ世異二窮達一、締レ交在二始終一、請君聞二此曲一、幸莫レ罪二彫蟲一、

春色滿二皇州一

帝里韶風應二早年一、上林春色逐二時姸一、瑞光曉吐樓臺日、佳氣晴曛草木煙、北闕衣冠通二主第一、南山雨露近二恩筵一、陽和此地歡無レ極、萬歲千秋戴レ舜天、

賦二霓裳羽衣曲一

仙女月臺閶闔遙、王姬雲髻管絃調、千秋候節迎二鸞曲一、萬歲迎觴接二鳳簫一、玉佩紅裙疑二夢見一、姸歌嬌舞使レ魂消一、人間天上看相近、畫扇輕裳且莫レ飄、

和下白石中秋泛二舟牛渚一韻上

日沈二碧水一涵二澄輝一、秋拂二青穹一雲物微、星漢槎凌雙岸落、月宮桂吐滿輪飛、氷綃堪レ瞰鮫人室、玉佩欲レ飄仙女衣、娛樂渾疑天上賞、簫歌未レ可二醉中歸一、

武昌晚秋

武昌城闕此登臨、日落高樓海氣陰、雲擁二江天一鳥雁下、潮生二澤國一龍蛇深、扁舟萬里歸レ家夢、孤劍十年報レ主心、金馬由來陸沈者、不レ論丘壑莫レ由レ尋、

寄二題湯嶺雪一 彥山二十景之一

西來湯嶽雪崢嶸、積レ素凝レ光到二太淸一、玉女芙蓉秋不レ落、瑤池芝草夜猶明、人間絕勝九華闕、天上堪レ比三素城、東海士峯爲レ應レ讓、月氏蔥嶺莫二相爭一、

示レ僧

天風昨夜雨花香、寶錫乘レ春下二翠屏一、雲近二銖衣一龍護レ鉢、花廻二蓮座一鳥聽レ經、禪成豈與二世塵一避、詩熟唯

知風月靈、東謁愧非玄度輩、醍醐肯許使吾醒、

寄竹圃

歸鴻何處訴離群、尺素相勞惟有君、鄴下元傳飛蓋賦、湘流今定卜居文、落梅笛裏人如玉、芳草天涯夢似雲、莫訝隴頭書信少、相思無緒坐氤氳、

望士峯以寄望仙樓主人 自注云、同田竹圃賦

不死之山迥出群、影涵滄海雪紛紛、芙蓉倒照中天月、芝草長生萬古雲、瑤闕夜寒銀漢宿、香爐曉霽紫煙分、何當絕頂御風去、披讀玉書金簡文、

天東一柱鎮神州、悅望瑤臺白玉樓、雷雨乍過雲半腹、海風不散雪千秋、壯觀始傳宋濂唱、仙跡空留徐福舟、君釣巨鼇持寄我、載來三島與十洲、

龍泉屋壁漫題

峯巒重疊路槎牙、古木長藤蟠黑蛇、洞口雲煙如畫裏、山中日月似仙家、三冬幽谷先看雪、二月寒梅未着花、旬半淹留忘歸去、溪魚正美酒堪賒、

哭南思聽五首

曾疑魚雁滯江湖、不料人琴今已無、風景依然向子笛、山河迥爾黃公壚、異鄉墳墓寒雲暗、入夢形容梁月孤、但有淚痕何處哭、天涯望奠愧生芻、自注云、思聽往年贈予詩云、幾歲江湖絕雁魚、

藹然風影抑仙標、想見清揚日益遙、攜杖常時誰問竹、沽醪無日不盈瓢、秋雲留寫白團扇、明月敎吹碧玉簫、瓊樹由來塵外物、三山悵望海波迢、自注云、王融曾愛柳惲隴首秋雲飛句、自書之白團扇、

咫尺曾遊手日攜、君居城北我城西、醉眠半榻花陰暗、吟倚勾欄荷葉齊、沂水春俱詠歸興、天台雲爲賦成蹊、卽今往事向誰語、腸斷柳塘烏夜啼、

與君識面未知心、與君知心面難尋、往事浮雲已成夢、交情流水誰聽音、鵑啼夜雨東風怨、雁斷秋空北塞深、往歲故人傳伏枕、豈知宿草沒空林、

山川鍾秀出崎陽、天壽僅多五十强、人物非王郎是謝、詩篇超宋獨之唐、家藏遺草愧封禪、名附先賢老醉鄉、但慰鳳雛成羽翼、英風千載挹流芳、

龍泉獨夜

客思非千里、歸夢亦幾回、孤燈山館夜、雨暗啼猿哀、

春夜聽笛

東風玉笛起誰家、微月沈沈北斗斜、曲裏不知春暗盡、江南何處落梅花、

山房偶作

白屋青燈獨夜情、樽中有レ酒共レ誰傾、寒花十月無二人見一、黃葉滿山聽二鹿行一、

鶯井納涼五條十八景之一

水精椀裏冷將レ凝、鏡月影團涼可レ乘、天上遙須金掌露、人間偶見玉壺冰、南海春秋二分所レ賦百題凡二百篇、彦山二十景、和州五條十八景、贈レ我二十五韻、及南中諸作、並皆失レ之、惟以二今所レ存者一收二錄于此一、

松禎卿松浦儀、字禎卿、播州人、號二霞沼一、年甫十三、對州太守見以爲二奇才一、因請二木先生一授レ業焉、禎卿文學生知、不レ煩二師訓一、日弄二翰墨一、灑々數百千言、不二甚經一レ思、而有二作者之風一、與二祇南海一同年生、衆推爲二二妙一、學既通、爲二州書記一、屢爲二韓人所一レ稱云、

舟中作

孤旅依二舟楫一、汎流聽二寒汐一、回頭故鄉山、嘯咏明月夕、白露下二空波一、了然洗二塵襟一、客憂徒滿懷、斯夜難レ爲レ心、我家隔二滄海一、夢魂苦レ難レ尋、錦字寄猶未、竚立終到レ今、誰知心悠悠、空有二愁耿耿一、篷底挑二孤燈一、枕衾冷欲レ警、月落青山曙、雲濤天外永、

赤間關

群山攢二港口一、倚レ枕眺二中流一、集レ浦帆檣密、連村茅屋稠、鄉書猶待レ雁、旅思不レ因レ秋、嘆此宦游子、匆匆何日休、

中秋

滿空華月照二高樓一、冷色徹肌欲レ索レ裘、烏鵲影翻千樹暮、桂花香動一輪秋、王簫何處解レ添レ恨、濁酒幾杯難レ掃レ愁、同客今宵不レ須レ睡、沈吟直達五更頭、

少年行

十二朱樓臨二狹斜一、春風落日去二誰家一、解レ言紅粉花相似、不レ識美人全勝レ花、霞沼嘗以下與二韓人一酬和詩卷上所レ贈、今則失レ之矣、少作及舟中諸作等、嘗所レ記者、卽載二于此一、

石貫卿石原學魯、字貫卿、號二鼎庵一、又號二梓山一、長崎人、少從二杭僧、沈一、心越一游、精二醫上一者、及レ壯中遊、卽依二木先生一、先生特愛二其才一、志存二逝逸一、郵退不レ樂二人間一、年四十餘而死、于レ時元祿戊寅之夏也、

劔澤歌

雄劔雙飛曾我鄉、宵看紫氣斗含レ光、光搖二富士一宛旋結、怨動二箱山一意未レ揚、慷慨奇男弟與レ兄、父讐不二共戴一レ天生、傾レ盆驟雨來二吳沼一、拔レ樹狂風自二海瀛一、雷聲雷奔尺澤中、青萍結緣抽二晴空一、延陵公子心何俠、長鋏淋漓倚二白虹一、笛嶺崚嶒臨二大麓一、歌樓宛轉晃二羅縠一、寒潭湛レ碧聽二龍吟一、荒園窈窕杜鵑哭、武衛觀レ兵西獲レ麟、蹇騎蹀躞逐二車塵一、奠レ觴弔レ古爲惆悵、滿野蓬蒿半有レ莘、

出二金川驛一遙望二富士山一

突兀臨二東邑一、崔嵬秀二一峰一、凍雲晴二首夏一、朔雪晦二三

冬、惟嶽凌空峙、彼岨逼漢崇、景行遙亙望、初日照芙蓉、

塔峰

雁塔題名罷、香林積雨開、山從雲外出、鶴向洞門回、石磬泉聲寂、空花樹色來、鏡光含萬象、相對旣徘徊、

中秋

桂宮秋半蚌含輝、竟夕蘭堂徹九徽、樓際鵬程懸玉鏡、箏彈鶴唳怨金徽、雲中朗璞沈星漢、草上明珠燦夜扉、更向廣寒尋帝跡、銀箋響處曙方歸、

矢魚於八灘

網懸瑤海集沙灘、一望滄洲興轉寬、膾割錦鱗魚作縷、觴銜玉液酒如蘭、蟹橫戈戟收殘甲、蜃架樓臺落壯觀、更使馮夷堪擊鼓、酣歌猶正遠遊冠、

宮下山亭

猨嘯清溪迴、亭高臥看山、霧來青嶂合、雲去碧窗開、

長興山一吸亭

巖噴白水共心閒、雲窟尋僧對好山、碧海涵空浮日月、眼花迴落彩霞閒、

歸來吟

山賦歸來水濯纓、煙霞別我悄含情、遙吟一暢酬泉石、爲挹谿巒萬古清、

龍頭山

蓬萊側畔小鰲峰、移入祇園洞有龍、黃鶴仙人乘鶴去、白雲千載伴寒松、梓山拾翠集、我嘗得觀之、而抄錄其一二、卽收錄于此、

岳仲通 岡島達、字仲通、賀州人、號石梁、總角善書、長有經術、恭靖先生憫其宦游不遂老母在鄕、薦之菅公、因得北居歸數年、喪母哀毀過禮、未幾而歿、寶永己丑六月也、享年四十四、無子嗣絕、

偶作

塊然坐一室、終日讀群書、求友唯聞鳥、當飧不得魚、寒生疎雨裏、林暗落花初、次第催年鬢、勞徒嘆歸歟、

病中書懷

臥病最愁歲月違、柴門況復客過稀、藥爐火去灰還冷、藜榻瘦來腰減圍、澗水夜深聲細細、柳條春半綠依依、架書明日吹塵讀、空惜青年感昨非、

中秋

金風蕭瑟拂林東、明月飛光秋正中、北渚詠歌良友少、南樓賞興故人同、新詩吟得題桐葉、濁酒持來對菊叢、還憶鷲峰飄桂子、梵宮高接廣寒宮、

送二山基庸北歸一

秋風送レ別客心寒、離席杯觴明月殘、鴻雁只今歸二塞上一、故園到日報二平安一、我嘗得レ見二石梁牛房山記及八詠作一、清雅可レ愛、不レ知遺稿今猶存否、

田子彝圓田宗叔、字子彝、東武人、後改二氏隣田一、少有二俊才一、留二心文藝一、恭靖先生屢稱二其詩一、家父宗設翁、以レ醫聞二于時一、子彝克修二世業一、遂顯二其名一、

昭君怨

一朝辭二玉殿一、萬里向二金微一、沙拂二紅裙一起、雪飄二翠袖一飛、愁中胡地老、夢裏漢宮歸、空奏琵琶曲、相思淚濕レ衣、

中元夜集刻燭一寸賦二新秋月一

稍變朱明律、先令白露秋、金風吹レ月到、銀渚帶レ星流、閨冷錦砧動、殿涼紈扇愁、客槎傳二故事一、應レ泛木蘭舟、

歲暮會二鶴樓一賦

美酒高堂宴、爲忘遲暮愁、三冬將レ盡夜、十載此登レ樓、爐畔寒先去、甕頭春已浮、分陰堪レ可レ惜、流景去難レ留、

畫梅

冷艶一枝梅、春從二畫裏一回、瓊葩綴レ雪吐、粉蘂侵レ寒開、香借二爐煙一動、神將二燭影一來、綺筵春永在、不レ怨笛聲催、

上元作

火樹高臨魏闕前、夜開宸蹕遠相傳、龍燈九陌明如レ晝、鳳管千樓沸在レ天、畫閣月懸開二扇影一、珠簾風度散二爐煙一、重關不レ鎖歡娛洽、率舞歌謠樂二萬年一、

秋夜邀二白石先生於攀桂樓一

小樓聊築市朝隈、灑灑疎簾隔二紫埃一、大嶽半邊當レ檻落、長江一道抱レ城來、仰攀二丹桂一香應レ挹、緩採二青蘋一宴更開、從レ是幽叢歌可レ好、勸レ君重酌二濁醪杯一、

中秋泛レ舟

碧水微茫泛二桂舟一、菱歌暮起白蘋洲、青天月滿中秋夜、銀漢槎通大海流、潮涌仙翁吹レ笛去、波明神女弄レ珠遊、曉來零露寒如レ灑、醉倚二長風一披二翠裘一、

送二復軒南行一

高館張レ燈綠酒香、驪駒歌罷促二行裝一、笛聲秋恨關山月、馬首寒生橘柚霜、落木江頭雙劍別、浮雲天外一鳧翔、嶺南應レ有二梅花發一、千里懷レ人情正長、

和二竹枝詞一

東風花暗若耶溪、西子宅前日欲レ西、春草萋萋春雨後、子規啼斷鷓鴣啼、雲鵬五七古今體、嘗作頗多、唯今以二其所レ存者一錄レ之而已、

田信威岡田文、字信威、以レ字行、東武人、號二竹圃一、其祖朝鮮王京人、垂髫値二壬辰亂一、爲二我兵所一レ掠、風神秀整、蓋非二凡族一、

也、其人無兒息、收養爲子、居東數年、略通國語、屢問家姓、竟不言、及長冒姓稱岡田氏、信威則其孫、而有文謹愨人也、恭靖先生憝其才行、因原希翊薦之南藩、

和岳公十六夜

今夕清光好、都忘昨夜寒、雲晴暈初絕、星少影仍團、不作尋常累、自知方丈安、高樓詩就後、乘興撞鐘看、

十七夜對月

天以三宵暗、一歸此夜明、桂開看不見、露落聽無聲、兎照衰翁髩、娥催寡婦情、莫言輪已缺、光徧滿寰瀛、

甲申中秋無月贈喪配人

埋沒嫦娥影、寂寥玉鏡臺、淚應兼雨落、愁不與雲開、泉下人何隔、夢中魂數迴、春閨擧案日、追憶思難裁、

木芙蓉

水蓮花落半凋殘、更有芙蓉發木端、冷艷偏宜秋意淡、輕盈自拒曉霜寒、風飄織女機中錦、露滴仙人掌上盤、不與群芳競春色、獨持晚節倚欄干、

佳人鼓瑟

星成粉髻月成眉、玉指纖纖推柱移、欲使人腸與絃斷、艷歌一曲和來時、

山順之 掘山輔、字順之、以字行、東武人、質直有志操、年二十餘、始學於木門、刻苦讀書、行義甚修、嘗從仕京師、未幾東歸、家惟四壁、并日而食晏如也、今復從仕而在泉州、

九月十三夜小集

不見中秋月、更期今夕娟、清光調玉燭、素彩應金天、未極終宵望、還勝別夜圓、登樓景似雪、對酒人如仙、王粲應裁賦、袁宏本泛船、綺筵逢再會、又識在明年、環洲五言排律作頗多、今所存者此首而已、

邊城冬詞

朔風吹雪北花開、望斷長城萬里堆、青海黑山俱一色、只看遊騎射鵰來、

停雲集卷下

高子新 深見玄岱、字子新、號二天漪一、長崎人、其祖高壽覺、福建漳郡人、寓二于薩州一、父名大誦、生年十六、西游二于齊魯燕趙之間一、凡十有二年、忽有二東歸之念一、輙登二商船一直到二長崎一、遂得レ還レ家、父既歿母猶存、居數年、會市舶司善譯者老死、官召以補二其闕一、於レ是附二貫長崎一、自稱二深見氏一、蓋以下高氏出レ自二渤海一、我俗讀二渤海字一猶上レ言二深見一故也、子新爲二大誦季子一、幼而穎悟、大誦因命肄二業於僧獨立一、立杭州人、本姓戴、名曼公、避二亂長崎一、及二黃蘗元禪師到一レ此、祝髮爲二書記一、立素有二書學一、且善二醫術一、子新兼通二其藝一、以レ醫食二祿於薩州一、既而去還二長崎一、于レ時崎人林道榮、以レ書聞レ世、稱爲二二妙一、榮死子新獨二步天下一、文廟初、以二其有一レ文擢用、有二二子一、長曰二但賢字松年一、次曰二倫庸字龜齡一、竝有二材名一焉、

盤臺寺

擘出青蓮相、名作二古盤臺一、從二無盡底一涌、歷二三祇劫一來、猶レ月光明普、似レ水波濤廻、臨レ戶海天遼、千帆拜二此嵬一、

夏日和二南國華盆池假山韻一二首

未レ煩二渾沌鑿一、早得二愚公移一、怪石浮槎態、異叢靈草姿、晴嵐長入レ座、朗月舉浮レ巵、象外應レ成レ句、神工得レ助レ詩、

小樓聚小飲、亭午暑光移、座接天地色、山疑螺髻姿、不レ成二工一簣一、安得二酒三巵一、俊秀江都最、壓二吾多少詩一、

看二富士山一

幾番觸レ目每驚レ神、振古風流冷媚新、未レ雪二世間一還獨雪、占二隣天外一別無レ隣、玉鎔二鷺鷥一旋飄レ翮、銀塗二虬龍一忽震レ鱗、山氣縱高唯尺五、踏レ雲有レ路屬二何人一、

和二相國寺緣師留別韻一

三十年前相國遊、竹林深處地偏幽、頻參二玉版老禪味一、一掃二瓊階皓雪疇一、劫外披レ襟驚二昔夢一、箇中覿面喜二新儔一、紫衣辭レ殿回レ京去、韓客明朝共一舟、

蘆屋平沙

月海重關共接レ隣、白沙一帶負無レ垠、胡元不レ曉皇東事、天塹飛來空問レ津、

宿二吉原一

枕二藉富山一夢也寒、旅魂驚破五更端、凝雲一陣風吹斷、玉宇無レ人獨倚レ欄、

吉原曉望

灝空一抹曉猶昏、黯淡遙疑水墨痕、嶺雪半從二雲裏一見、扶桑挂出海東暾、天漪詩章最富、觀二正德和韓集一、可三以想二見其概一焉、卽今以二我儕所一レ得者收二錄于此一、

宅用晦（三宅緝明、字用晦、號觀瀾、京畿人、自少以文章聞、常山源義公、徵爲史館編修、累遷爲總裁、文廟初蒙擢用、）

壽鷺溪翁七十（翁紹卿、維恭父、）

乃翁把筆大如椽、龍蛇常逐隻手飛、濆汙行潦不能容、直溯天漢作墨池、一揮傾瀉夏雨勢、黝黖點黷意所之、檀軸繭卷繡屏障、硃扁綠榜雕門扉、下視人間書題徧、業就名立四方知、是時却步默無言、靜執藝事觀希夷、毛穎性命甕中禿、玄卿歲月泓底澌、唯我谷神長守舍、養以寡欲行以玆、滋潤敦厚天栽培、丹顏春入桃花枝、歷歷數至七十旦、律調中和東風吹、陽布德流時恩深、身與群物各自私、都堂能吏翰苑秀、階芝庭蘭影參差、況向天上控騏驥、頃從夢中卜熊羆、併子有祿且有孫、乃翁到此擧累巵、飛花晴度琅玕席、欲使鶯囀奏塤篪、滿堂方唱南山誦、富岩雪映華髮垂、

寄京師友人（是歲春京師火、）

欲問遊春好、長安事若麻、鵑鳴孤館雨、草色萬人家、夢斷關河遠、書來歲月賒、何時台嶠頂、搴袂挹流霞、

和京師人所寄鴨河韻

一帶長川滔不休、畫橋照影瀉襟幽、三更燈火波心市、十里歌絃岸上樓、杜父魚肥杯可擧、牛王廟古藥將秋、爲問東溟不歸客、夢中渭水聽淸流、（自注云、鴨河出杜父魚、爲名産、可以爲羹、牛王廟謂祇園、）

和霖師遊天臺山韻

赤城有路白雲梯、古木長藤往處迷、五百高僧猿竝坐、三千舊院鳥空啼、欲求蓍艸涉幽洞、不見桃花泛斷溪、遠樹如薺看忽失、禁城隔在暮霞西、

秋夜天爵堂上和霞洲韻

蟾光如水碧紗開、天爲騷人意暫回、臺榭誰家繁管動、琴樽斯夕雅歌催、彩毫久屬凌雲手、玉斧終歸修月才、佳句三唱與君酌、交情深淺付朱杯、

倭刀

倭刀長三尺、百越足橫行、幾歲腰間佩、有時手裏鳴、

李夫人

延上魚龍紛作圍、連娟一盼笑初微、美人至死風情在、忍使劉郎不見歸、（我看觀瀾詩最少、卽今以嘗所得者收錄于此、）

服紹卿（服部保庸、字紹卿、東武人、號寬齋、居家孝友、强記力學博涉群籍、不競才華、恭靖先生以爲謹厚人也、文廟在藩之日、徵爲侍讀、）

初夏再遊泉藏寺賞芍藥

甘露新晴好、名花各自奇、應同廣陵品、難擬鄭風詩、

前諸非レ無レ約、後遊復有レ期、西山斜日沒、秉レ燭立多時、

和二秋日登樓作一

楊柳寒生笛裏秋、城邊暮倚仲宣樓、半天西嶽當レ牕出、萬里長江繞レ郭流、雲物凄涼霜雁過、年華荏苒夕陽幽、洞庭波起催二搖落一、滿目同生宋玉愁、

有レ感

曾逢俠客五陵遊、一擲千金辭二畫樓一、今日不レ知身是夢、白雲秋色老二林丘一、

服維恭 服部愿、字維恭、號二橘洲一、有レ文善レ書、文廟初、擢爲二侍史一、紹卿之弟也、

九月十三夜

朔風吹二木葉一、鴻雁復南來、黃菊秋同老、淸樽月共開、天晴斜漢近、霜落早寒囘、負郭千家夜、砧聲幾處催、

獨酌

鸚鵡杯前歲此過、芳樽無レ恙對二孤哦一、吳江煙水蓴鱸老、楚澤秋風薜荔多、一片淸香供二臥病一、五更寒雨落二悲歌一、漢家詞賦逢二今日一、散髮狂生可二奈何一、

古寺花

煙霞杳杳出二春城一、飛閣長廊野鳥聲、遍數二開花一心未レ倦、却添二幽磬一思尤淸、林間紅紫皆容色、壁上歌詩半舊名、可レ恨東風多二飄落一、一場蝶夢感二浮生一、服氏兄弟、諸作頗多、前年罹レ災、舊稿蕩盡云、如二我所レ得者一、亦不レ多、

肥允仲 上肥元成、字允仲、其姓平、號二渮洲一、東武人、其先世、越中大姓、據二有新川之地一、天正中兵敗失レ地、子孫散在二東北州一、允仲生而聰悟、及二其能言一、授レ書卽成レ誦、六歲賦レ詩、常山源義公、觀以爲レ奇、文廟潛邸之日、召對講二論語中庸等書一、論辨甚明、且大二書其所レ賦詩一、筆勢遒勁、于レ時年十一、元祿癸未秋八月也、乃命爲二侍讀一、

賦二得還山吟一送二隱者一

芙蓉十二峰、盡從二天外一開、下有二雲霧窟一、上有二仙人臺一、崩崖絕壁幾千尺、飛湍分灑碎玉碧、我欲二往登一道路長、飛鳥不レ到魂索莫、常時可レ見赤城霞、萬古不レ凋玉洞花、君今歸去何所レ有、白雲深處卽爲レ家、還山吟淚滿レ襟行矣、不レ可レ尋相思在二鳴琴一、

古意寄二友人一

秋色從レ何至、微霜拂二衣襟一、蕙蘭日以摧、委棄在二中林一、木落湘水闊、雁度隴雲深、佳人空谷裏、日暮彈二瑤琴一、餘響振二林木一、月隱碧玉岑、莫下將二和者寡一、變中君白雪音上、

擬古

晨風集二北林一、我思正依依、千載交情在、管鮑獨心知、今時路傍客、舉レ目山河非、榮瘁新人昵、零落故人稀、窮途阮生哭、多岐楊子悲、達人良大觀、哲士復知レ幾、

譬如鷦鵬鳥、一向天宇飛、羅者猶藪澤、可憐燕雀
微、所以魯連子、蹈海長不歸、

壬辰十月十四日賦 此日黃霧四塞

上天方不造、玉几下徽音、大寶欽神統、群生痛聖
心、非緣夢聞樂、只有涕成霖、黃霧瑞光暗、白雲
仙路深、

柬服橘洲

右軍傳舊法、左史讀皇墳、吟作郢中雪、遊隨鄴下
雲、乘春回五字、入夜草千文、題柱今將見、曳裾
曾所聞、瑤林懷桂秀、玉署想蘭薰、天馬材雙出、終
空冀北群、

奉壽白石先生五十韻

千年佳麗地、四海泰平時、春入芳郊轉、歲從壽域
推、偉材降有用、大象荷無私、開世方文化、經邦是德
基、地靈鍾秀氣、天瑞應昌期、學摠人間事、文稱天
下師、感精屬奎昴、古夢協熊羆、聖語仁而壽、頌言昌
且耆、國將君子重、家自老人宜、牧豕却先達、猶龍
何復窺、當年求駿馬、今日得元龜、上春忝前席、小
心欽下帷、三纘乃餘慶、四牡爰周咨、漢柱聞清論、衞
詩歌載馳、馬頭趨帝里、鵬翼擊天地、縱見中朝禮、
長陳大雅詞、風流誰克續、文采自彰施、斂思惟叉手、
高談忽解頤、渾同璞裏玉、潁若囊中錐、曠野空群
馬、清廷足一夔、立言眞簡要、論道悉綱維、董子頻
蒙問、胡公卽決疑、三韓修國聘、一代起朝儀、文物
據周典、憲章存漢規、延陵已觀樂、子產又爲辭、共
畏秦生對、先傳白氏詩、國家憂善馭、名利耻塵羈、問
政重方策、成功勝鼎彝、聲名傾泰斗、意氣震華
夷、藹藹鳳麟德、亭亭松柏姿、從容因耳順、矍鑠可神
怡、東海行尋棗、南山笑採芝、絳人甲子度、楚木春
秋移、庭下芝蘭秀、門中桃李枝、雲妝衣上綵、雪染鬢邊
絲、好是康寧錫、終當福履綏、只緣詩遺興、不用
酒扶衰、忽値艷陽節、更添長養貲、樓臺相掩映、花卉
自榮滋、二月饒春色、五雲開曙曦、風融爐氣暖、日永
漏聲遲、座上桑孤在、鄉中鳩杖隨、年華當指使、景物
藉遊嬉、三樂豈猶古、四難還在茲、美人貽玉案、嘉
客奉金卮、祝壽齊稽首、賞心洵介眉、綺筵誰盡醉、
彩筆欲爭奇、馬帳叨陪宴、龍門幸獲知、國鈞膺景
運、家瑞畀殊禧、共坐春臺上、欣瞻萬物熙、

天爵堂小集謝鳩巢室君賜韻

相値文筵心志通、一樽明月挹高風、夜寒蟋蟀清池上、

秋老梧桐白露中、君白彈冠交正切、人從二投轄一興俱同、不レ論希逸仍能レ賦、老去詩篇氣更雄、

秋日追二悼南南山一

剡川一曲傍二荒墳一、悵望遙天恍見レ君、歲在二龍蛇一嗟二臥病一、人非二鹿豕一恨二離群一、酒酣白髮愁中月、書少青山夢裏雲、原是倦遊裘馬老、肯將二封禪一草二遺文一、

月夕和二鶴樓韻一

鳳城昨夜雨聲過、叢桂香飛白露多、天近袖中應レ取レ月、海廻槎上欲レ尋レ河、庾公淸興登樓飲、燕市豪遊擊筑歌、詞賦從來才不レ少、江南豈獨問二陰何一、

春初答二南國華一

壯遊知復似二生平一、一望天涯何處迎、上國金臺客不レ到、佳人玉案吟初成、幾年撫レ劍風塵別、千里對レ杯湖海情、莫レ道黃河冰十丈、雙魚東下眼中明、

思二君恩一

君恩如二滿月一、夜夜減二圓形一、妾心若二春草一、日日上レ階靑、

贈二京洛故人一

一別音塵絕、相思秦地秋、欲下將二雙淚一寄上、江水不二西流一、

送二田方業西歸一 用二其女弟贈レ兄韻一

遊子關山馬上看、西來雲色隔二層巒一、秋風萬里無二相識一、孤劍龍光落日寒、

客中行

青樓風暖柳花香、黃鳥啼殘白日光、自レ是錦城春色好、更教二遊子不一レ思レ鄉、

寄二南國華一二首

都門一別一銷魂、惆悵江南花下村、春色斷レ腸芳艸暮、無レ如二此處想一レ王孫一、

柳花二月武昌城、望入二遙天一斷二雁聲一、海上孤雲飛不レ散、茫茫結作二故人情一、

南國華 *南部景春、字國華、越中人、思聰長子也、幼悟善二詩及書畫一、年甫十三、隨レ父而來、賦下登二東天樂一詩五言古風二百句上、爲二世所一レ稱、十八歲喪レ父、哀毀過レ禮、奉レ母甚孝、友二愛兩弟一、慨然有二大志一、博通二經史百家之書一、居數年、喪二母氏一、次弟亦亡、不レ堪二憂艱一、以二享保丁酉夏四月一而殞、年二十三、季弟亦踰レ月亡、南氏之胤絕矣、*

除夜百韻

癸巳除夜在二旅館一、忽懷二十年來世事轉換一、而有レ感二於白石先生之事業一、自顧二短才弱質一、且失二所怙一以來、孤行子立、犬馬之齡將レ及二二十一、不レ知素志何日得レ達耶、慷慨因賦奉二呈先生一

人傑今誰在、世雄公庶乎、學文通禮樂、講武及孫吳、倜儻擅才美、精微味道腴、書田周涉獵、藝苑恣馳驅、腹裏邊公笥、胸中陸子廚、堂堂經國器、犖犖濟川桴、應比千鈞鼎、何祇徑寸珠、棟材同栝柏、芥蔕視江湖、山斗堪瞻望、風流可範模、題詩超一代、作賦勝三都、森羅貫月露、炳煥飾珊瑚、古韻追焦尾、利鋒競湛盧、唐賢將壓倒、韓客為嘆吁、爵祿因稽古、雲霄遂問途、千尋揚鶚氣、九萬大鵬圖、頭戴冠纓燦、腰紆印綬朱、班行金殿列、步武玉墀趨、佩響隨朝服、袖香惹御爐、金蓮燒宦燭、綠酒賜宮壺、塵外瀛洲穩、天邊雨露濡、扈遊多物色、公讌足歡娛、進講談治亂、持論本典謨、唐廷玄素力、漢代叔孫儒、何必嬰鱗志、但輸張膽孚、明君膺大寶、聖德受貞符、功績歌徽禹、明良賡有虞、舊章無過失、周道或咨諏、政謹三臺任、刑嚴兩觀誅、賢勞功足見、鞅掌補何無、芝草挺丹蕖、鳳凰巢碧梧、妖氛消塞徼、凶器偃干殳、縣令罷桴鼓、邑民歌袴襦、俄聞武王疾、豈料放勳殂、一慟同方內、八音絕海隅、封人曾妄祝、嵩岳亦空呼、猶詒昭明化、今敎父老蘇、言思浮世變、實似片雲渝、我續箕裘業、幼為庠序徒、憶曾髫髮歲、來此冕

衣區、馬帳初陪列、程門幸托軀、才寧韋氏蚌、質匪袁家駒、面北常請益、指南辱導愚、春風陪煦育、霽月映泥汙、朽木猶逢鏤、曲蓬賴所扶、管中知編狹、井底免囚拘、實學未加進、虛名謬見誣、因隨絕群驥、遂作假威狐、名士蒙莞爾、高賓結友于、勝遊兼雅會、弄筆又操觚、秋翫桂花月、春尋楊柳衢、樓前鴻列字、簾外燕呼雛、閣賦齊霞鶩、舟浮競渡鳧、江魚多鰋鯉、水菜美蓴菰、佳境都堪樂、賞心可自愉、一朝辭輦轂、萬里赴枌榆、從去越侯馬、匪思張掾鱸、東亭叙別出、北路啓行徂、風景望中轉、方言到處殊、入疆知國禁、臨險問關租、瘠地過磽确、膴原把堇荼、山梁逢雌雉、野石訝於菟、猿鳥催愁叫、僕僮涉險痡、田家投夜宿、村店寄朝餔、衣錦羞非魏、多金肯似蘇、還看荒徑菊、再佩故山萸、井里濱溟海、淵源阻泗洙、朴俗稀文士、窮陬半陋夫、友生違磋琢、我性異瑤瑜、未免面墻立、何期待賈沽、半途功寂寞、重任足踟蹰、空滯亡羊路、叨伺得兔株、更驚苗不秀、無奈龔難朽、憤悱神茫蕩、咨嗟意鬱紆、長思為子孝、忽作失親孤、苦蓼俄丁痛、大椿遂致枯、一丘閉玄宇、千載隔黃壚、恨與終天永、淚兼懸

水一俱、衰顏容盡レ禮、苴杖更扶レ羸、甘旨未レ遑レ奉、罪辜焉得レ逭、中心羞二摻鹿一、反哺感二慈烏一、杯圈存焉爾、容聲亡矣夫、顧レ身憐二影獨一、在レ世苦二才迂一、驢躍時窮レ技、狼前更跋レ胡、應同二齊客瑟一、兼似二魏王瓠一、日月眞過客、春秋不レ待レ吾、齡將レ盈二二十一、功不レ積二錙銖一、北斗柄方轉、東皇澤欲レ敷、江梅綻二花蘂一、灰管動二葭莩一、守歲對二椒葉一、送窮縛二草芻一、今宵堪二愛惜一、殘臘在二須臾一、僑舍聞二更柝一、家鄉思二舅姑一、心頭生二感激一、膽氣欲二狂粗一、虎穴元難レ入、龍淵寧易レ闚、余將レ計二進取一、不三復厭二勞劬一、高鳳曾漂レ麥、溫舒正寫レ蒲、深知司馬滌、尤感舞陽屠、仲昇猶投レ筆、終軍亦棄レ繻、必期レ磨二鐵硯一、要在レ志二桑孤一、兕册羞時習、螢囊力欲レ輸、願公無二棄擲一、成養實攸レ需、

妙見山八景（山在二但州一）

山東沃野

畎畝縱橫萬頃連、溝通二水利一引二甘泉一、壤肥禹甸畇畇隰、賦比雍州上上田、蠶繭早成桑柘地、烏鳶兼飽稻粱天、白頭村叟齡垂レ百、猶說未レ逢二荒政年一、

櫻溪遠花

幽溪花合幾重重、一色春光曲曲同、素艷不レ寒三月雪、淸香欲レ度半山風、暮雲鳥過畫屏裏、朝日魚懸明鏡中、遠向二仙源一應レ有レ路、漁舟欲レ問短簑翁、

簑泉淸流

寒水一潭淸若レ霜、石間脉脉下二雲岡一、何知末派能通レ楫、尤愛源流堪レ泛レ觴、小鼎分來僧茗熟、一瓶汲去佛花香、不レ須卓錫迸泉出、長漱二瓊瑤一傍二道場一、

杉間秋月

金氣凜凜古樹林、夜闌月色故來臨、明輝靜照巢禽夢、幽境時聞木客吟、風拂二枝頭一琴奏爽、露凝二葉底一玉華深、山僧偶向二淸陰一坐、悟了無名眞理心、

嵐峰紅葉

林壑氣高霜正飛、遙峰楓樹爛生レ輝、織成疑是天孫錦、染出應レ裁山鬼衣、夕日半啣二朱閣瓦一、朝嵐斜捲二絳紗圍一、秋鴻自似二春鴻度一、宛向二花雲紅處一歸、

四山晴雪

天邊積素徹二雲衢一、璨璨晴輝開二畫圖一、有レ嶺盡如レ披二白練一、何岑不三復散二明珠一、光眩二日色一花經レ眼、氣逼二風威一粟滿レ膚、謾道香爐峯頂雪、若二斯銀界玉山一無、

霧海朝暾（自注云、霧海非二地名一、故落句云レ爾、）

碧霧濛濛鎖二海門一、咸池殘夜湧二紅暾一、溟中半射銀濤

色、雲外纔啣璧月痕、光爛二豹毛一餘氣澤、影浮二鼇背一
曙輝暄、望中疑有二漁舟出一、不レ見輕帆逐レ浪翻、

北溟眺望

寺臨二無地一出二塵寰一、海色浮來妙見山、積水遠圍三島
外、怒濤高蹴九霄間、樓高蜃氣青天遠、雲斷鵬程白日
閒、誰得乘レ槎淩二碧落一、超然遙犯二斗牛一還、

環翠園

携レ壺閒散步、寂寂到人稀、臨レ水看二魚躍一、掃レ苔待二鶴
歸一、國華諸作甚富、如下登二東叡山一古風二百句上、則既行二于世一矣、其他所レ得者、節錄二于此一、

眞子明 眞部子明、本名璋、幼孤、依二于母氏一、故元老紀疾、以二其舊臣之子一故、收二畜子明一、有レ弟嘗爲二外祖所レ養、外祖死弟嗣二其後一、而有二癈疾一、外祖本爲二紀氏之老一、其嗣不レ可レ絕因使下子明爲中之後上、子明爲レ弟求レ醫、百方治レ疾、久レ之有レ愈、懇請立レ弟、乃去隱二于都市一、初其父客二死山陽一、遺瓊在二播州一、悵然有二拜掃之志一、元祿壬午春西去、路過二京師一赴二于播州一上壠禮畢、遂踰レ海到二長崎一、忽感二篤疾一、淹留幾三年、既去浪二游西南山海之名區一、及レ還二京師一舊疾再發、自計レ不レ起、手自裁レ書貽二諸親舊一、命二其僕後事一、以二甲申夏六、月死二于客舍一、年三十六、子明天材絕レ人、不二甚讀一レ書、頗有二文章一、書畫精妙、及凡百技巧雖下世二其業一者上皆莫二能及一也、其在レ崎也、杭僧悅峯渴浪、共愛二其材一、爲二方外之遊一、高天漪、林蘿山之徒、並以二其書一稱焉、子明本姓源、爲二渡邊氏一、其稱二眞部氏名子明一、蓋隱二姓名一也、

癸未季秋長崎留別宴上賦二十日菊一
兼寄二江東諸友一

萬里金風客夢回、重登十日望鄉臺、馬蹄欲下向二江東一
去上、鴻影時從二海北一來、厭聽月前楊柳曲、忍啣節後菊
花杯、可レ憐孤劍逢二秋色一、手裏芙蓉空自開、星洲客死、遺草散失、唯有二此首一而已、可二以慨一哉、

都孟明 都築孟明、號二蠡湖一、又號二隨菴一、其先爲二結城氏世臣一、故黃門源公封藩之日、徙爲二越人一、孟明幼而喪レ父、零丁孤苦勵レ志讀レ書、年十七八、東遊二都下一、起二業於醫一、乃迎二老母一奉レ之、有レ孝焉、

癸巳中秋陪二白石先生一賞二月於鶴樓一

天上孤輪月、照臨四海明、頻逢前月雨、偏愛此宵晴、綠
酒金尊影、朱樓玉笛聲、陪レ君賞二良夜一、應三是盡二歡情一、

送二師還一レ越

去歲相迎今欲レ送、柳邊別語更匆匆、還レ鄉人向二雲山
北一、爲レ客身留二江海東一、絳帳一辭千里外、紫眉再謁七
年中、越城迢遞知何處、瞻二望長天一恨不レ窮、

賦二秋日道士家一

西風度レ漢鶴毛零、石徑纔開松樹青、丹竈藥爐燒二落
葉一、朝來蒸レ木讀二黃庭一、

梁景鸞 梁田邦彥字景鸞東武人、號二蛻岩一、先世蓋總州名族也、景鸞少以レ材聞、歷二事列國一宦游不レ遂、身在二窮阨一文章甚富、

蕩子行送三友人之二京師一

有レ客嘗在二易水傍一、十三學レ劍輕二舞陽一、眼彩射レ人如二
秋鶻一、腰間六月隕二嚴霜一、平生羞レ作二團揉態一、過レ門不

入笙歌鄉、朝行草野暮陰蟄、老蛟屏息獰豹藏、弱冠已稱閭里俠、叱咤風生倍激昂、一旦恐爲句踐笑、西游上都見大方、上都紛華甲萬國、十二街中半紅妝、出門易逢煙黛色、隔壁猶聞雲鬢香、誤被年少相勾引、一醉春風玳瑁床、醉來近日醒不得、鎔却從前鐵石腸、踏花同歌紫騮馬、乘月自號烏帽郎、三尺寶劍寧可折、半面寶醬不可忘、幾回買笑百金盡、歸來只有一空囊、戀戀冶情未嘗絕、夜爲行樂典衣裳、衣裳典盡又何有、匣底龍泉沈紫光、持此賣與豪家子、復作風絮一日狂、君今負笈入京洛、洛水秋波木葉黃、勸君春來花發日、莫爲書編遊平康、

季夏奉寄東禪萬庵公五十韻

江村通水驛、紺宇對滄洲、灝氣應先至、炎歊知早收、雲鱗含返照、電彩帶危樓、海鶴夜中唳、風鷺岸際浮、菰蒲青不盡、竹箭翠如流、賈舶當門下、征艘倚樹留、回飈來殿角、仙梵響林陬、幡影牝蛟走、杖痕老魅愁、硨磲珠串冷、苔蘚石龕幽、馴鴿許窺鉢、飛蚊容入幬、禪餘耽典籍、架上積墳丘、法苑英華發、詞林龍象遊、浪儴張鸛陣、靈一割鴻溝、梗楛供材用、纖褷給獵蒐、吾徒奚齷齪、斯道有螟蛉、拾腐弄芻狗、爭奇呈棘猴、六詩垂範久、衆楚抗音咻、誰酌今兼古、能分薰與蕕、多年聞白足、一面定青眸、仰覩垂雲翼、俯慙巨樹蜉、異花飃麈柄、清籟繞茶甌、蘭桂已欣挹、桃瓜不惜投、嗟予雕篆技、達彼廟堂猷、五斗折腰數、一朝謝病休、冰霜驚壁蟀、風雨困巢鳩、彈鑷撫衰鬢、挫鍼綴敝裘、丈夫心未死、俠烈氣相求、燕市朝聽筑、剡溪夜泛舟、冶遊經紫陌、痛飲醉青州、人謂豹迷霧、自憐獅弄毬、玉人懷趙璧、劍客佩吳鉤、藏器匪無用、彈冠却可羞、葦籬諳錦帳、蠟屐當華輈、乞米裁新帖、采薪歌舊謳、滿城犇競士、百載利名囚、附驥致千里、甘鯖媚五侯、文章鳴瓦釜、經濟握牙籌、苞苴多欺婦、笨籛半類優、祝駝雖合世、尼父欲乘桴、東閣懶投策、北山宜操耰、空門淸似水、宦路膩如油、賴秣支公馬、不鞭甯戚牛、儒紳何關異、筆鉞殆殊讐、逐鹿爭高手、亡羊搔白頭、不如吾與我、無論蝶爲周、造化沒崖岸、是非結贅疣、三生嵒下夢、微命水中漚、還俗翻多事、休官此得謀、雲山期共老、騷雅約同修、爲報海東月、聊分天外秋、

次前韻答南國華賜和子（其自字畧去、南山先生之子、國華、年甫十四、近見）

余寄釋萬菴五十韻、即和、嗚呼天下必有是父而後有是子、自非家訓之謹嚴有範、則雖有奇材、亦詎能獨成乎、因依原韻答謝、且及先生德業過人之意焉、

山車呈瑞日、奎彩照瀛洲、絃誦巷如沸、賢良歳可收、儒生開虎觀、學士朝龍樓、白雪傳聲奏、青雲逐趾浮、諸藩咸嚮化、百度一同流、鄭館無衣敝、楚筵爲醴留、越中維樂土、海北匪窮陬、士抱棟材美、民忘菜色愁、南容邦有道、楊子宅何幽、竹樹鳴瑤瑟、梅花畫紙幬、陶泓含巨浸、石枕縮丹丘、曾勵紛綸業、豈耽汗漫遊、夜飋銀燭影、暮雨瓦簷溝、圖史幾删補、蠹魚或輯蒐、戒兒論類鷙、擇友貴除蝨、鞭策希天驥、衣冠慙沐猴、神童眞卓犖、俗物漫呀咻、碔砆誰比玉、芝蘭那化蕕、賢愚知異種、淑慝易分眸、世上多豚犬、人間半豕蜉、孩心欣戲具、乳臭滿腥甌、坐使章經蠹、強將班筆投、憐君懷大器、師聖問皐猷、象勺舞文武、治平講戚休、德音和夜鶴、孝奉杖春鳩、手撫清霜劍、身披紫綺裘、風流應自喜、歷覽入東州、嶺雪戴氈笠、海飈挂綵毬、含毫觀景物、憑几卷簾鉤、能得江山助、不貽林澗羞、奚囊携古錦、珍果滿行輈、秋日佩萸賦、春風攀柳謳、只任舒羽翼、詎肯坐官囚、悔我出寒族、因人干列侯、疎慵違世態、迂濶誤機籌、歳月恩徒渥、歸來學未優、飄飄過故里、蕩蕩泛虛桴、筆舌聊成產、田園無處耰、生涯依草莽、王澤仰雲油、昔願文驅鱷、今輸氣食牛、雁鳴雖可免、驢技卻爲讎、古璞山藏彩、怪松石壓頭、徒知悲屈賈、不復語伊周、孤憤一開口、多言又附疣、桂林分剩馥、萍水散輕漚、以此忘年友、慰吾守拙謀、清儀未得見、芳契已容修、傾蓋知何日、共譚禮樂秋、

秋日有懷田鶴樓再和裘字韻寄贈

每慙田文狐白裘、畫堂讌客酒如流、舍中豈抱車魚嘆、夢裏應同笙鶴遊、霜蕋誰花逢九日、天香何夜冠三秋、不堪澤國羈愁夕、獨對寒雲倚郡樓、

夢

懶將六夢卜生涯、石枕山屏別有家、一雨綠膨春詠草、五雲綵筆夜生花、蜃樓煙霧畫中氣、蟻垤王侯門外車、寄語至人休笑我、天遊不是競紛華、

落花

春來底事怨花遲、花及全開早別枝、芳嶼綴流樓影隱、青苔白雪屐痕移、寶鈴傳響鳥空去、錦障成圍蝶

未レ知、秦女煙鸞何處是、人間風雨哭二楊妃一、

奉レ答二白石先生一兼呈二鶴樓田子一

相逢相別楚江濱、七載煙花隔二杏塵一、當日共爲二吹レ笛客一、卽今還作二寄レ梅人一、誰歌二白雪一從二司馬一、獨抱二黃經一誦二大春一、賴有二仙樓消息在一、風傳二鶴唳一夢中新、

用二新字韻一戲簡二桂川一

憐君牢落十年身、敝篋無レ錢甑有レ塵、萬軸文章蟲蠹レ木、一巢風雨鳥依レ人、縱羞三張祿相二秦國一、合レ學三嚴陵耕二富春一、吾亦從來迂拙甚、太玄草罷鬢華新、

奉レ呈二滄浪先生一

天門當日赤龍飛、先達芳聲動二玉扉一、重席休レ嗟逢レ聖晚、彈冠相得似レ君稀、盛朝已擢虞廷石、故國猶傳鄭館衣、海內士論誰洶洶、百川無三地不二東歸一、

詠レ雪 其自序略云、徐文長先生、有二詠レ雪八十韻一、袁宏道謂、險澁幽若、東坡後復見二乃公一、癸巳冬十一月廿九日大雪、忽憶二先生詩一乃綴二五十八韻一、

海雲黃黲抹レ林椒、霰雹前驅風簸レ沙、萬井煙沈疑レ滅レ竈、千門雪禿恐レ埋レ車、銀彈禽駭箭輪レ銃、泥片蠅來壁受レ瑕、驪化二斑麗一爭二鹿馬一、杉圍二曲竹一娩二蓬麻一、巖肥仙蛻咸披レ氅、水澁寒江不レ學レ巴、榛遥絕レ穿驕二啞犬一、茅廬載レ重泣二飢蝸一、此間幾倆阮孚屐、一毀萬錢陶穀茶、粉面漢郎晨憚レ照、纖脛越女夜休レ誇、雷公收レ撥甘二逃竄一、盜賊服レ礁供二鑿斧一、冷跟昔加二皇帝腹一、凍肩耐レ出市人胯、夢魂度レ海攀二珠樹一、畫思帶レ秋寫二綠芭一、棧道龔刓品隆角、屋山塡補瓦溝窊、身分菩薩跨二群象一、鱗散英雄斬二大蛇一、匣裏坐收雲母粉、簷前倒植水晶芽、櫟陽雨盡銀潰落、崑麓風興玉礫斜、眼暈電光欠二激射一、手龜鳥爪苦二搔把一、搆成碑矶支二竊倒一、幻出猊猊想二攫拏一、莫レ怪燒レ琴煮二白鶴一、請觀新レ佛祖二丹霞一、玳筵才子倦レ呵レ筆、穹廬名媛懶レ抱レ琶、牆有三寶瓔賈二薜荔一、寺無三乾蓮認二枇杷一、笠深醜項易レ藏レ瘻、櫛重香鬟難レ結レ丫、獸蹶平原十里坑、因巖冥府八寒枷、假樓不レ涌鎭二妖蜃一、蝕月無レ虧厭二毒蟇一、篠尾傾垂風漏レ罅、峯尖頹震谷傳レ谺、漁簑詎借丹青腕、神汞欲レ呈黃白家、吐火技窮徒戰栗、伐冰典在匪二紛奢一、不レ倖周技血闘碧、可レ擬衞姜鬢髮珈、煖閣斯辰同二夏景一、溫泉何術進二春瓜一、抛レ斤睨視鼻頭堊、誤レ墨添成扇面鴉、密透二趙盾一應レ起レ粟、橫吹二潘鬢一更添レ花、非レ關三陰雨綱二鶏斤一、無レ處三中林椓二兎罝一、公子醉摩龜甲㿉、材官行拂豹文𢶍、四圍煖肉環二屏障一、一尺河豚吞二莫鋣一、廚見饕婢仰二黃鵝一、橋聞詩客岸二烏紗一、賈時擁碎鴻門斗、霽後吹傳龍塞笳、剡桐忽

蜚風送棹、袁門半掩樹傍笆、劉伶行處宜埋屍、孫楚擲來堪漱牙、函谷鷄鳴驚且早、藍關花讖正而葩、立門儒範已成塑、斷臂禪床豈具裟、玄尙可嘲休媚莽、天如有缺欲煩媧、黔溪不使明衣染、躶國誰將廣傘遮、賊盡皓眉迷列隊、騎皆白鼻失眞騧、併歌楊柳勞征士、俱蹂麥苗留子嗟、擔簦虞卿人似玉、嚙氈蘇武口如茶、楓僵桐死怜貞柏、貑伏豝藏待茁葭、儒測地天論六出、醫冠桂附佩三椏、竹頭木屑材無棄、煙痾泉盲患頓痊、蔡壘功名千古傑、謝家甲乙一毫差、鏡屛相映影無數、珠箔雖垂光減些、已附肌冰棲姑射、復分毫彩住耆闍、前村誰宅梅花蕾、後圃何畦蘿蔔叉、紅襪熖銷歌院靜、靑旗藍淡酒樓賖、市中哀筑凝無韻、案左寒檠耿不華、買傭鏟瓊開一線、舐兒擁火結雙跏、蘇公貂尾誰能續、徐子鳳章無復加、奇雪奇詩驚郢里、賣裘賣磬客天涯、嗟吾半世窮同轍、慕藺多年性嗜痂、中夜膝封如有助、牕傳鬼語撲蟲蝦、

夏日作

風簾捲返照、柯影舞如人、石鼎茶前水、衣桁浴後巾、

古意

休將萱草種兒家、不肯忘憂憂却多、自一別郎消息絕、腰間猶佩去年花、

九月作

琪樹連雲秋色飛、獨憐細菊夕陽扉、登高能賦今誰是、海內文章落布衣、

田伯鄰 益田助、字伯鄰、號鶴樓、其先相州人、北條氏據八州日、世掌財貨交易賣買估價督察姧非、催驅賦徭事、國初徙相州豪於都下、鄰高祖名友嘉、率其衆而來、後因爲東武人、初永祿丙寅春、忽有海舶來泊三浦、蓋吳估也、北條氏館客於田氏、交關事訖客將去、謝曰、無以報主人、鄙家所傳有一金匱術、以奉授焉、卽五靈膏方也、嘉因試果驗、施之民間、遂致財巨萬、有子男三人女一人、鄰其季子之後也、鄰少讀書、最好詩、與梁景鸞釋法霖爲詩友也、

古劍

楚鐵吹霜氣、精光歲月多、淸泉寒可洗、赤土滑相磨、既向軍門舞、且將客舍歌、夜來龍欲吼、神物更如何、

送人西歸

自謂西歸客、還如去故鄉、白雲臨別酒、綠樹映行裝、只羨遊伊水、無因問洛陽、昔時携手處、今日不曾忘、

牡丹

富艷移栽錦被堆、隔簾疑是美人來、巫山朝去雲猶在、

梁苑春歸雪未レ開、照膽鏡中應レ謝レ姸、反魂香裏莫二相猜一、燕脂露濕東風面、宿醉初消向二玉臺一、

丙戌中秋和二梁蛻岩一

群賢齊唱鶴南飛、滿座春風盡レ醉歸、久識青雲目前在、初窺白髮鏡中微、鱸蓴此地歸應レ好、雞黍今年約不レ違、共道公門桃李外、謝家蘭玉似レ君稀、

才子倦遊身未レ達、青燈濁酒豈同レ群、三秋獨對臨卭月、四壁猶看蜀道雲、獻レ賦應須レ驚二武帝一、彈レ琴猶未レ試二文君一、昇仙橋上從レ題レ柱、定識盛名天下聞、

一逕飛霜葉落初、慣レ看酒伴近來疎、埃塵不レ到題レ詩壁一、竹氣漸侵種樹書、月下清風徐孺榻、江邊熟路呂安車、相逢此處須レ乘レ興、莫レ問幽蘭賦二卜居一、

柳色蕭然月照レ軒、吟餘醉夢日昏昏、廬山別後安禪久、彭澤歸來勝事繁、社裏白蓮傳二漏刻一、籬邊黃菊對二琴樽一、新篇好得レ如二陶謝一、一夜燈前可二細論一、

送下友人路過二濃州一赴上京

宦遊西更赴二長安一、客路風光綠鬢寒、岐嶺鳳鳴雲尙在、關河雞唱月猶殘、東方藩衞行二周甸一、北闕威儀問二漢官一、相思樓中吹二玉笛一、梅花半似二古時看一、

贈二梁蛻岩一

江南一別感二居諸一、況復秋風萬里餘、有レ客應レ問洞庭鴈、憑レ君尙問武昌魚、樽前遣レ興聊持酌、海內論レ心幾寄レ書、昔記東山歌舞在、風流近日又何如、

與レ君幾歲且論レ交、興動猶疑月下敲、白眼誰知高士想、玄言已被二世人嘲一、涼多露氣歸二苔蘚一、雨散風聲滿二樹梢一、日暮碧雲君不レ見、半墻松竹掩二衡茅一、

薄暮天晴雨洗レ塵、風輕雲散白鱗鱗、江南夜色懸二新月一、洛下秋光憶二故人一、病起一樽聊對レ酒、書來千里尙爲レ隣、簾前又見秋霜色、鏡裏猶添素髮新、

知君三歲此棲遲、白皙紅顏養性姿、何問仲連浮レ海日、笑聞支遁買レ山時、十年有レ約雲堪レ贈、萬事忘レ機鳥不レ疑、莫レ道歡情非二少壯一、酒中猶有レ樂二新知一、

曾賦二歸來一出二漢關一、逍遙居止寄二人寰一、門前楊柳秋將レ半、池上蓮花夜正開、鄉曲君今折レ腰後、社中我亦攢レ眉還、無レ因遙問二東林路一、惠遠當年不レ出レ山、

煙草

南夷煙草昔誰栽、縷切盤中小作レ堆、不三是碧筩通二酒氣一、應須三玉管動二葭灰一、山中怡悅持レ雲贈、席上飛談捲レ霧來、莫レ問紫陽仙子術、餐レ霞吸レ景到二蓬萊一、

春日江行

溪橋春水滿、山色雨中移、竹淨聽鶯處、花飛駐馬時、

春盡送人

送君芳艸地、倂欲送春歸、一別千山路、楊花到處飛、

邊城秋詞

胡霜漢月照刀環、百戰沙場久不還、萬馬夜嘶青海戍、孤鴻秋度玉門關、

秋日同梁子過法霖

蓮開白社月明多、獨許淵明載酒過、廬岳重來三笑路、漢關休唱五噫歌、

同和湖韻

遠樹鐘流缺月孤、蓮枯無夢到西湖、溪橋景色秋如此、欲使吾曹入畫圖、

七夕閨詞

一別兒夫欲問邊、秋風依劍白雲天、黃河不似銀河遠、已約歸期動隔年、

釋法霖 法霖字元澤、東武人、本姓小野、初名虛卿、號蘭谷、家貲千金、不肯以生產爲心、性耽文字、好蓄奇書、有兒尙幼、出妻獨處、唯有一僕一婢之老者、委以家事、年既壯去家爲僧、放浪于雲水之間、正德辛卯夏、年三十八而寂、

和僧本山遊臺雲寺

隨喜臺雲寺、春風蘇古梅、碑龜藏綠草、瓦雀啄蒼苔、劍刃山形峻、鏡光池色開、寥寥千載後、誰會祖西來、

臨池柳

數株池上柳、搖落幾年年、飛絮靑空雪、垂條綠水煙、牽風遠鳳閣、帶雨拂龍船、似避離人折、不生橋路邊、

夏日歸山亭

朝向城中市、暮歸山上亭、雲懸千嶂白、日落數峰青、幽徑笠摩樹、淺流笻破萍、不嫌前路晚、草際有飛螢、

過深草拜元政上人墓 墓隣寶塔寺

遺蹤鄰寶塔、幽草繞空壇、小院經年古、殘僧保歲寒、座尊惟一位、墓竹只三竿、旅衲無他物、和南焚片檀、

中秋

浮雲暗盡處、便是廣寒宮、人意縱無異、月光何得同、山河珠鏡裏、天地玉壺中、砧歇千家靜、風收萬籟空、金波漂桂樹、玉露灑梧桐、黃鶴高樓上、相對擬庾公、

梅花

桃花漫映洞中人、氷雪虛傳姑射神、衣上香薰令公座、

鬢邊紫奪魏家春、夢魂搖曳巫山曲、珮玉依然洛浦濱、歌盡遊仙雲未散、餘聲猶繞畫梁塵、

行遊

行遊千里逐浮萍、圖盡南溟復北溟、歸錫辭師眞父子、行衣寄我自娉婷、藤花夫人賜征衣、舟中夢破湖天白、馬上望迷驛樹青、黃鳥數聲無處所、蒼鸖憶看故園庭、

簡鶴樓

十年與盡送春朝、同學何人訪寂寥、雨打飛花腸欲斷、風吹芳草恨難消、才衰頻夢江生筆、身病屢空顏子瓢、百歲光陰未過半、鏡中萬丈鬢絲飄、

春興

萬里桃紅滿武城、流年如我自由行、一朝永負青樓醉、多病長尋白社盟、風雨鳥啼花惱意、乾坤人遠月關情、誰知寂夜蒲團上、半片冰心天地明、

四山雪盡望青春、華髮誰驚鏡裏身、一水人遙梅耐折、半宵夢斷月相親、只今天下劍無氣、依舊世間錢有神、竹杖多時懸薜壁、遊山合與鳳鸞馴、

曾拋書劍禮金人、頗與松鸖隔世塵、何日名山埋白骨、暫時此處送青春、巫雲湘水十年夢、吳雪楚花千里身、跋涉扶予筇有妙、文章從爾筆無神、

獨愛幽庭長蘚痕、煙霞況是護荒園、梨花當鎖春風院、楊柳誰敲夜月門、本自淨名唯有默、後來夫子欲無言、嫩青堪踏催遊意、擬訪天台五百尊、

陶潛愛醉往來無、依舊閒雲鄰我廬、雨氣幾時青上壁、燒痕近日綠連湖、才衰難續仙山夢、春淺猶閑佛火爐、花落花開雖惱意、不同世俗有榮枯、

晴沙日暖弄春光、幾度曾遊夢帝鄉、欲去翻愁雲路遠、神飛不奈野情長、鸞鳳長想高人嘯、鷗鳥徒憐處士狂、記得昔時幽賞地、畫樓梅發月中香、

數畝閒田金市東、宜將茆屋作珠宮、鬢邊感舊勸添白、面上緣愁能減紅、花裏書牕二月雨、松間禪榻五更風、春光不識去何處、空色色空空色空、

鶴樓席上與諸子分題賦青

試賦東方應色歌、臨文自愧少三多、鍊師久待瑤池使、靜侶常觀優鉢羅、一片涼風吹竹塢、數聲好雨洗松坡、晚來閣筆排窓牖、貪看春山一點螺、

失釵怨

攀取臨池花、玉釵墮在水、水深不可尋、簪花立水涘、

病中

欝懷懶向癡人開、馬上誰知敲與推、八萬四千何所現、乾坤一箇臥如來、

和白玉蟾

十載不遊鐘鼎家、竹爐燒竹醉清茶、天公還我一雙眼、萬卷圖書萬種花、

往事

往事看來皆魯魚、美花明月費居諸、安禪只合九年壁、讀破何須萬卷書、

釋若霖 若霖字桃溪、相州人、常來往京畿之間、學綜內外典、蚤有詩名、

磨鍼亭

旗亭傍翠巒、煙霧日高乾、木落江天豁、鴻鳴越塞寒、朔雲追去旆、晚照下征鞍、歸路忘幽昧、渺愁猶倚欄、

從米原赴澤山舟中作

晨乘米浦船、蕩漾麥坡前、苔帶牽鷗夢、荻芽上鷺肩、釣竿孤嶼雨、耕笠半汀煙、久有滄洲約、浪遊期數愆、

客舍新秋

小樓倚暮天、雨過半簾前、冷艷芙蓉露、蕭疎楊柳煙、蜻蜓空欵欵、燕子故翩翩、舊隱長相望、稻花流水邊、

芳山作

紫極重遭氛霧侵、翠華再狩白雲岑、行都僅據方險、舊澤猶傾四海心、南渡衣冠空老死、北征將士日銷沈、可憐天命潛移後、岳路春風花草深、

澁谷道中

曉過豐家古廟陰、半梳月白在碧岑、僧廬磬響藏松塢、客店鷄鳴隔竹林、泉滴馬蹄黃葉滑、谷空人語白雲深、江東煙水長關思、幾度斯途獨自尋、

遊天台山

芒鞋尋友入天梯、久負風光路欲迷、綠樹陰濃人不見、紫藤花落鳥空啼、遊僧踏翠度深塢、開士濯泉臨小溪、一笑相逢携手步、暮霞斜照石梁西、

難波早行

步向南郊晨鼓撾、竹林寺畔亂啼鴉、燈殘樓上誰驚夢、磬歇庵邊應解跏、籬落煙涼瓠葉老、桔槔雨足木綿花、小橋流水叢祠裏、茅店有婆來煎茶、

天王寺晚歸

荒陵斜日下林丘、津口餘霞紅未收、韻客尋梅迷野逕、佳人拾翠俯清流、梵魚雲暗松間寺、歌吹燈聯柳外樓、更有南郊夜臺路、朦朧煙火使人愁、

即事

每喜山中暑氣微、新涼况是入碞扉、疎簾昨夜月如練、清簟殘更夢襲衣、梧葉井邊驚曉吹、槿花籬落帶朝暉、溪頭小立堪觀處、血色蜻蜓弄水飛、

欵冬花

群卉荒涼冬後天、嫩芽獨見吐芳鮮、淡黃蕋挺大頭菊、淺綠瓣開小朶蓮、雪壓浪仙僧舍側、日斜張籍馬蹄前、春深爲絮委泥水、不學楊花陌上顚、

蕎草

栽滿良田壓稻麻、收成品伍酒兼茶、鑾刀細切金絲亂、彫管輕薰碧縷斜、賓席助談抛玉麈、書帷驅睡落燈花、歡含悲咽人將老、最閔朝雲暮雨家、

題某池亭

神女廟傍秋可憐、一區林水小亭前、檻稜斜日紅沈臂、屛背遙山翠滴肩、釣罷孤舟蘋渚繋、魚稀隻鷺蓼汀眠、支腮無語獨惆悵、葉下寒蜩啼斷邊、我嘗得汝岱七言古風二十五韻、既見于丙申壽卷、故不收于此、

新刻停雲集跋

前歲　白石先生寓居江口、暇日取諸親友之詩若干篇、彙以成編、名曰停雲集、凡二卷、蓋亦欲使之傳于久遠而不朽也、鄰頃者得而覽之、乃知　先生友誼之篤、且樂與人爲善矣、況夫一時並興之彥、徽章淑製金聲玉振、其於風雅之致無愧古人、而鄰才性庸腐、亦以發龍日久、辱蒙不棄、枉見採錄、譬如雜蜩音於英護比魚目於夜炎、適足以著其醜美而已、嗚呼昔有大臣而史失其名、花滿谿之女子則存於杜詩、若鄰因之以得托姓名於無窮、不已榮乎、雖然是編尙藏巾笥、謄錄已艱、流傳不廣、唯恐他日未必無放失隱蝕之患、而或負　先生之休意焉、於是刻梓於家以公同好、遂志事由諸卷末云爾、

享保戊戌秋八月　田伯鄰謹書

室新詩評 附鳩巣與白石書

秋興八首和ニ老杜韻一

蕭瑟秋風動ニ碧林一、天邊霧樹欝森森、鯨鯢蹴レ浪海氛惡、猿狖嘯レ雲山氣陰、鬢際霜侵多病日、腰間龍泣未ニ灰心一、樓前一片如ニ鉤月一、別恨誰家鳴ニ夜砧一、

其二

城上樓臺開ニ曙陣一、重門鐘漏遠微微、空庭霜下井梧落、絶壁雲消塞雁飛、一國交遊知己少、夙齡遐尙與レ人違、世門年少慢ニ儒客一、肯信身貧心轉肥、

其三

歲晚滄江日易レ斜、不レ論鏡裏減ニ容華一、人間空負思歸臉、天上難レ浮乘レ月槎、千載悲レ秋傳ニ楚調一、萬家牽レ恨入ニ胡笳一、樽中綠蟻酒新熟、欲下傍ニ東籬一摘中菊花上、

其四

一世浮沈似レ覆レ棋、老來蕭索此傷悲、毛生捧レ檄違レ親後、揚子談レ經報レ主時、日落欄干閑坐久、月生河漢欲レ眠遲、殷勤絡緯四鄰夕、應是燈前機婦心

其五

嵯峨白雪貫蘭山、鳥道開天咫尺間、萬里夕陰雲出レ塞、五更曙色月臨レ關、康侯錫馬日中寵、報國群臣霜後顏、誰識夷門鳴レ柝者、昔年曾是點ニ淸班一、

其六

寥落舊遊多ニ白頭一、幾囘同役海東秋、天台嶺北暮雲合、日本橋西夜月愁、身託ニ他鄉一送ニ歸燕一、夢囘ニ孤島一狎ニ輕鷗一、相逢共說靑年事、此日凄然思ニ武州一、

其七

十年遊學愧レ無レ功、爲レ客逢レ秋京洛中、身上貂裘全化レ雨、城邊茅屋半荒風、異鄉到處眼終白、同侶幾人顏共紅、書劍歸來樗散極、滄浪一曲和ニ漁翁一、

其八

遠林平楚渺逶迤、萬頃秋田匝ニ鄭陂一、天際布帆舟隱レ岸、樓前鐵笛柳凋レ枝、山阿長對ニ白雲一在、人代寧知ニ滄海移一、誰子杖レ藜懷レ古久、愁吟隴上日將レ垂、

鳩巣

沈欝之思古色蒼然

白石漫批

新井君評

秋興八首御傳達吟翫數十囘乍例敬服之至存候存寄も候はゞ可呈鄙評之旨御念入候御紙上とも委細拜見雖然御存知之通久敷廢業之上に候得ば文焔に眩迷候而中々存寄有之事にも無御座候就中警策之句に不顧憚加朱候て及還璧候尤以手前にも謄寫し候而巾襲十重鎮家賜寶に備而候貴様御取次之上殊には愚意の底蘊をも餘し候はゞ本意無之由承候得ば私存寄之處管見之及候處をこゝに呈し申候貴意如何思召候哉切磋之意に候得ば思召をも承度候且は御次ても候はゞ彼兄へも御物語思召をも御聞合候へかし第一の天邊霧樹鬱森々と有之候霧の字など何共別の字可然候半歟氤氛雲氣之字皆同じ心に存候是等は纔の事に候へともも別の字に成換候てもくるしからぬ所に候得ば心懸りに被存候若し此霧の字を下の二句に引分け候ては形容之樣なる時と格別にも候半歟此御作はさも見え不申候鯨鯢猿狖の對とかく不淺感入申候次に腰間龍泣の句未灰心の字を御下し候而一入にも壯にも又新にも覺申鬢際の句も平穩に候へども下句の壯なるとはつり合不申候古人所謂偏枯などゝ申は如是之事にも候半歟如斯之所詩人の力を盡して斤方の輕重なき樣に詠申候手段かと愚意に存候若上の句下にかなひ申候程の警句候はゞ未灰心の句もなを光彩を增し可申候惜しき事に存候鳴夜砧の鳴の字灰仄聲の字にて句律相叶申候か前の海氛惡の海の字山氣陰の山の字共拗字候得ども如此に對し候事古人の作に多く相見え候得ば瑕疵にあらず候是又拗字格と可申候鳴夜砧の上の句は聲病見え不申候得共此句如此候半事にても候歟此事は唐詩には殊之外吟味候ひしと相見え候而多は律に相叶申候宋人に至り候て其律亂候而明人殊之外吟味つよしと相見え申候本朝にはかつて其沙汰見え不申候得共如斯聲律を吟味候處卽律詩と申候と愚意にて候夫とても可換字なき時は古人の彼拗字の格有之かにて候貴意如何々々是等は皆連珠の微瑕にて候へども思召をも爲可承如此に候第二三の韵字能御座候かと存候空庭露下の句の井の字又拗と申候若某など此句に倣申候而仕候はゞ井庭露下青梧落絕塞雲來白雁飛などゝ可仕か又井庭霜下にも候半歟貴意如何々々一國夙齡之對多々其句意之古態有之而已に非ず其人物も古人に追配候半と不堪敬服之至候

第三酒の字叉拗と申候歟樽中緑酒香新熟なども同事候半歟如何々々
第四卷中第一の絶作と被存候日落月生の句意思微婉詩人の風格不恥古人と敬服之事に候
第五上半截氣象有之候歟日中寵霜後顏も能き對と被存候
第六鷗の字むつかしき韵にて候如斯被成候而斧鑿之痕なく上句と共に渾然たる物にて御功者と感入申候
第七一二能參候て韵字之御取被成樣も安らかに相見え申候唯々貂裘は弊たると有候歟化雨の字心得がたき樣に被存候定而々々御うしろひる惡可有之候管見未至り不申候慙愧之下の句は杜子か屋秋風敗るゝの心かと相見申候素衣京洛塵に化すとは晋宋比よりいくらも見え來り申候衣上紅塵全化雨城邊白屋半荒風と候ても同じ心にも候半歟樗散極之極の字不穩相見候歟在之字にては如何可有之歟夫にても猶玄かと不仕候て御吟味候て妥帖の字御用改可然歟漁翁之字本韵たりといへどもこれは彼兄の御實事に候得ば直に御取用候て一入々々面白覺候如何々々
第八舟隱岸柳凋枝クダケ之樣に被存候其上帆舟之帆にて候笛は柳と別物歟但笛曲の名なれば是はさも可有之候舟と岸とは格別の物にて候柳とは卽柳之枝か如此事よのつねの作には不苦候はん歟和韵の時は有心得べき事の樣に被存候韵之取兼候樣に覺候得ば氣毒にて此句は斧鑿之痕見え申候歟渾然たる物とは不被覺候其下の四句眞に鬼神を泣しむべき警策にて候右之趣若貴意に相應じ候はゞ御次でに御物語にて彼思召をも乍御六ヶ敷承度候此方稽古の爲にて候任御賴之趣漫發狂言耻入申候

秋興八首改吟

蕭瑟秋風動ニ碧林ヲ天邊樹色鬱森森、鯨鯢蹴レ浪海氛惡、猿狖嘯レ雲山氣陰、鏡裡鸞哀空老影、腰間龍泣未ニ灰心ヲ樓頭一片如ニ鈎月ヲ別恨誰家送ニ夜砧ヲ

其二

城上樓臺開ニ曙暉ヲ重門鐘漏遠微微、空庭霜下靑梧落、絶塞雲來白雁飛、一國交遊知己少、夙齡遐尙與レ人違、世間年少慢ニ儒客ヲ肯信身貧心轉肥、

其三

歲晚滄江日易レ斜、病來分外減ニ容華ヲ人間空負思歸

膾、天上難レ浮乘レ月槎、千載悲レ秋傳二楚調一、萬家牽レ恨入二胡笳一、樽中綠酒香新熟、欲下傍二東籬一摘中菊花上、

其四

一世浮沈似レ覆レ棋、老來蕭索此傷悲、毛生奉レ檄違レ親後、揚子談レ經報レ主時、日落欄干閑坐久、月生河漢欲レ眠遲、殷勤絡緯四隣夕、應是燈前機婦思、

其五

嵯峨白雪覆蘭山、鳥道開天咫尺間、萬里夕陰雲出レ塞、五更曙色月臨レ關、康侯錫馬日中寵、報國羣臣霜後顏、誰識夷門擊柝者、昔年曾是點二清班一、

其六

寥落舊游多二白頭一、幾回同役海東秋、天台嶺北暮雲合、日本橋西夜月愁、身託二他鄉一送二歸燕一、夢回二孤島一狎二輕鷗一、相逢共說青年事、此日淒然思二武州一、

其七

十年游學愧レ無レ功、爲レ客逢レ秋京洛中、淸曉夢殘荷葉雨、黃昏笛斷柳條風、異鄉到處眼終白、同侶幾人顏共紅、書劍歸來最蕭瑟、滄浪一曲和二漁翁一、

其八

遠林平 楚渺 迢遞、萬頃秋田匝二鄭陂一、野外 荒墳 碑仆レ草、村中古廟烏棲レ枝、山阿長對二白雲一在、人代寧知滄海移、誰子杖レ藜懷レ古久、愁吟隴上日將レ垂、

新井君再評

鳩巢兄御下問傳達捧誦不堪慙懼候故好學之程尤以敬服敬服御改正の句々金玉更に黃吻を容可申樣も無御座候ゑかれども管見の所不及顧憚候て一二披心膽申候御次手に御物語可被下候

一鬢際腰間の傑句偏枯の描評に付御改被成熏誦數回元來龍泣未灰心の悲壯の御句に候鬢際の傑句とは斤兩不相口樣存候付而呈鄙評候へき今更鏡裏驚影の事承候此事もと賓所獻孤鸞の事候婦人兒女の事不干涉といへとも古人多く是閨情の事に用候歟縱男兒の事に用ひ候共其害なきとは申ながら此御詩の中鯨鯢猿狖龍泣等の字已に出申候上は此處の對をは宋（本ノマヽ）形門の字をはつして相しらひ度事かと存候只本の儘に霜侵の句の方可然歟王維絳幘雞人の律衣服之字多く出候事微瑕のよし古人も評し候歟と覺申候

一淸曉夢殘の御對偕々面白くさりとは御功者に候と不堪敬服候

一最蕭瑟如何にも可然候
一野外荒憤村中古廟哀情を催申候可令泣鬼神抔と申も是等の事にて可有之候
一別に律詩の事御下問にあつかり候天賦疎卒にて記性無之これに加るに近來衰病況初學より貧家藏書も無之唯々親戚朋友のもとに偶藏書抔をは借貸而電矚而已にて候得は今更抄出候て呈可申書據にても無之慙愧此事に候乍去初學の日窮郷師資もなく候て學詩の微書より詩人玉屑を再三熟覽候時眼用拗字格と事第二卷に有之を能々吟味候に五七言共に拗し候所心付候其後方氏律髓の中に拗字格の詩相見其下に丁卯句法又老杜呉體なとの事相見才小者未能爲候とやらむ有之に心付候而夫より後古人の詩を見申候に唐初卷中に此格少く中晩々は時々相見へ宋に入候て多く相見へ候へとも明の七子より以來は殊の外聲律にも心を用候と相見候唐詩訓解の中拗體此事を論し申候處に相見へ候へき就中王元美杜か昆明池は詩をも穠麗沉切惜多平調金石聲漸卒耳に申候に付而見申候に誠に此篇平聲多仄聲少く相見へ申候又元美說に律言律天下無嚴於是口知虛實平仄不得情而廣明矣とも相見へ候されとも七子々詩拗體側體稀に覺申候是等の外に詩病に聲律を論じ候事見申たる事有之と覺候へとも今更記得不申候年來抄し置候物の中にも未尋出不申候此口呈上不申候昔
恭靖公御存生の日一日令子令姪を召し候而辱く仰を蒙り候は子姪等に學詩法傳授可仕候口學なから御側體も被成旨に有之候小生事學詩の法何と可申上事も覺不申候唯々昔より極めて古人の詩話詩評を好み候て見申候て少しく進步の處も有之かと被存候此外存念無之由申上候へき
一貴國は天下の書府に候へは定而詩話詩評等の如きは計量車載と存候得は聖學の御餘暇に御口覽候て御進益の處も有之候はゝ御教諭の事所希候重而御下問に預り候て黔靜技窮候て悲許候此由能々預御傳達度候頓首

白石璵再拜

正德二年壬辰冬鳩巣先生與

白石大人陳書

昔延喜年中にあつて菅公儒家より出て時に用られ權を專にす時に三善清行書を奉りて菅公を諫るに身をつゝしみ災禍に遠かるの道を以す夫菅公の材德古今に傑出して丞相の貴に居れり本より天下の衆畏服する所にして誰か敢て間然するものあらんやしかるを清行一介の賤士もてひとり其威嚴を冐して人のいはさる所を言へりそのかみ恭靖先生いませし時に僕と此事を論して清行をもて天下の奇士とせり僕おもへらく清行豈奇士の名を求るものならんや爰に菅公を愛するの深きに出るのみ今吾兄德望の高き事菅公に比するに如何といふ事を知らすといへとも其學術文章におゐては恐らくは菅公の及ふ所にあらす加之聖主の知遇に逢て其材力を振ふ事も菅公の後いまた儒臣の如此なる事を聞す僕旹より同門の交を辱ふして近頃眷顧の厚きを蒙る事日久し竊に思ふに吾兄を愛するの深き誰か僕にしくものあらんや清行是を疎交の相公にいふ事を得て僕是を同學の故人にいはすんは旣に功德の情に背き又仁を輔るの道にたかへり今吾兄の寵隆を聞て忠告するもの必いはん今より以後迎接を愼み權利に遠さかれと是常人の知る所なり豈吾兄の爲に論ずるに足らんや僕かいふ所は爰にはあらす吾兄志氣の官にあり吾兄朝廷におひて將順匡救の功頗る赫々として人の耳目にあり然とも古人天下に大勳勞あるに比せは恐らくはいまた並稱するに足らす吾兄の豪傑なるを以て胸中に蔕芥はかりもせさるへし豈是等公歷の事をもて自ら備るの志あらんや只磐根錯節利刀にのかるゝ事なくして破竹の勢あるによつて其詞色の間自ら剛鋭果敢の氣盛にして謙退抑損の心少し吾兄にも其如此なる事をおほへさるへし書曰有其善喪其善矜其能喪其功僕願くは吾兄其善を有せす其功に矜さらん事を孟之反か其馬に策うつ聖人に稱られ馮異か樹下に避る古今の美談なり是吾兄のつとふべき所なり正考父か鼎の銘に曰一命而僂再命而傴三命而俯循墻而走亦莫余敢侮蓋其位愈のはれは其心愈下なりたとへば堂を作るに上壹尺高きを添れば下壹尺の基を增が如し然らざれば必傾覆の禍あり方今聖朝上に臨み譏毀の患なく彼延喜の時とひとしからずといへども盈るを惡み謙を好するは天人

不易の常理なり愼まずんば有べからず僕願くは吾兄謙々の心を垂て天人の道に叶ひ能其基を修て德言瑕しからざらん事を今吾兄寵賜の新なるを聞て說をもてせすして覘をもてす只吾兄哀んて是を察納せよ不備

十一月　日

天爵堂壽言

男　源　大亮明卿
　　　　百亮宜卿　同輯

啓　　　　木寅亮　木下平三郎

伏以節近二花朝一開二八荒之壽域一年週二華甲一設二六袠之仙筵一桃李向二榮門一前指祥霞簇二松栢一騰茂庭上覩二瑞雲連一歡聲滿レ堂佳氣遶レ室恭惟白石井年翁門下兩朝耆老一代偉人獨步二禮場一特對二講幄一黜二諸子兎冊之說一一意尊レ經讀二百王龜鑑之書一當レ路貧レ治高仰二杏壇千歲之道一傍抽二薔洞一枝之春一青出二于藍一白生二于室一書臨二法帖一寫得二秋蛇影一千壽筆代　レ王綸縱成レ春蠶繭五色金門對策擬二大漢之賢良一王堂賦レ詩入二三唐之閫奧一探二西陽之逸典一奉二使西京一掌二卯年之聘儀一施二名東國一賜二邑關內一而納レ粟千斯箱厠班二朝廷一而珥冠五品爵徐州刺史賴二王祥之殊功一汶水老人識二羊祜之好一相二舜韶堯鼓一鶯和二太平之歌一王鸞二蘇樓鶴一呈二千年之瑞一井公六著對二博于泰山隅大春五經綸二子京師上一桂樹枝挺世美二燕山芳聲一柳絮才高人傳謝

家令秀清晨煮粥宿甘肉於庖厨勝日尋芳曳吟杖於郷里西庚長現年々照江南家南極高懸夜々直狠北地祥瑞畢集福祿駢臻亮檮櫟散材蒲柳弱質忝居先人之廣廈一木難支特因諸君之帡幪白足不仆茲同春臺熙樂幸逢國家昇平伏惟風月無邊長侶人豪之襟懐陽春有脚佇俟天壽之平格不勝燕喜雀躍之至謹啓

序　高玄岱　深見新右衛門

大哉壽也壽能可期乎不可期乎期頤而上吾未嘗得其人也然吾聞之餐霞含瀣之士恒以千歲為身分事不足為多由此言之雖道人生百年為限而能以其養則可以至於千歲未必百年為限也而百年之上庶乎可期哉洪範五福以壽為先固有以焉今夫四時推移萬物各得其時各遂其性貫通一氣不停其機煦嫗覆育紛紜盻蠁莫知其極斯乃天地賦化流行之功而萬物要非天地之大壽統之焉能各得其亨哉而人之生也衆而其壽也未必無修短之期盍亦各讐其讐各壽其壽焉則壽原在乎吾而不在乎他吾人之養壽也必踏夫可久之道而已矣傳謂富貴顯榮成理萬物使各得其所性命壽長終其天年而不夭傷天下繼其統守其業傳之無窮名實純粹澤流千里世々稱之無絶與天地終始豈非道德之符而聖人所謂吉祥善事者與噫人之得志於時知遇於君者寧不如此雍容俛仰其間耶至有精神才量洞古灼今蓄實推餘施為敏捷攘臂當世風度雅識卓超人意之表而不屑其為者吾始於筑州源先生見之恭惟先生嶽降於疆圉作噩夾鐘蓂數十一葉之辰而今歲柔兆涒灘廼届華甲一周矣吾欲自謀作壽未得其可其若蟠桃大椿松鶴連龜往々曼詞巧鑿訣頌雕組則吾素不喜言又不能言是不敢以為壽吾直以壽之養而可期者願為壽雖然壽之為用假令廣成子之千二百歲黄眉翁之三洗髓多則多矣安有濟事乎未足為貴今如先生力贊燮理將必大有作為徼一世之民躋之仁壽之域蚩々而怡々而熙々而相忘於其中不知所自居然稱謂堯舜之民者此蓋先生之志矣乎如其先生之攸享又孰能區々為量哉

林百截　二木幸三郎

蘇老泉曰天之所以與我者豈偶然哉然天之所以與士者乃天之所寶惜歟世未嘗不以其人為罕焉

故士或生二于千載之前一其道行二于千載之後一或生二于千載之後一其道符二合于千載之前一於レ此見下天之所二以與一レ士者不中偶然上也蓋百載嚮慕其人之口矣恒其得レ之之不レ易側聞東都有二奇士一焉曰二白石老先生一其才華也煥爛其德行也高抗決二洙泗濂洛之淵源一窺二蘭臺二西之珍藏一堂々乎其威儀森々乎其榘矱是眞文苑之司命抑亦儒林之尊宿也懷二班馬之文思一湜二李杜之才搆一秉二南宮适仲子弓之懿德一執二公孫僑蘧伯玉之操行一然而擒藻最喜爲レ詩每二出吟一詠草絕二今古一音韻瀏湸節奏鏗鏘識者皆謂何必聽二八琅之璈雲和之瑟震靈之簧湘陰之磬元雲之曲一而後愉快乎哉蓋得二李唐初盛之風一深焉是以往年雞林來聘之日彼國學士亦嘗驚駭敬服稱絕欽羨觀二其詩帙一殆至下乎三月不上レ知二肉味一良有レ以也猗歟休哉煽二揚國朝之文風一一使三海外人士驚駭敬服稱絕欽羨以至二於斯一也故談レ之者不レ曰二一人之溢美一直曰二天下之榮幸一不レ曰二一時之盛事一直曰二百世之偉績一歲次實沉寨如之吉先生耳順上慶是日也春風和暢桃李始華錦霞掩二映乎綺席一佳氣氤二氳于庭面一珠履金舄燦然來萃綠髯珍饈陳二羅滿堂一德星聚レ天靑鳥翔レ樹介二眉詩歌一金石成レ響呼レ嵩賓レ朋玉樹森列其必不レ減二耆英耆年之奇會一亦必不レ讓二九老十老之盛事一有二劉雲溪者一早獲二識于左右國一屬二一言一以獻レ壽百載應レ之曰夫文如二班馬一其文之壽足下以二千禩一而計上詩如二李杜一其詩之壽足下以二千禩一而計上懿德如二南宮适仲子弓一操行如二公孫僑蘧伯玉一則其懿德操行能包二乎八洲之外一出二乎扶桑之上一寧必以二千禩百禩一計二其壽之脩長一耶意者士大夫君子秉レ筆以稱二壽觴一者未二必有下所レ遺也今百載以二檮櫟之枝一何當レ續二杞梓之木一乎曰非也先生稟二天地魁梧英華之氣一挺二生于世上一天之所二寶惜一而世嘗以爲レ罕者惟一人之所レ縱故能懷二抱碩德揮霍神才一是爲二千載一遇之人一耳子之以二文章一能獲レ介二其眉壽一是亦千載一遇之事耳謹勿レ愆レ期於レ是欣然而笑曰信哉子之言レ之也以二百載之檮櫟一幸爲二壽子先生一可レ謂二千載之奇遇一固所二深願一焉因忘二謭劣一遂書以爲二先生壽一

祐章　平野繁次郎

古者洪荒之世聖人者出俯二仰天地一觀レ象觀レ法以立二大道一緣レ是推彼器皿之作貨財之用衣冠之制宮室之居君臣父子師友賓主昆弟夫婦之位士農工商之目禮樂政令之典莫レ不レ備制定於二斯時一也於レ是人物共遂二生於

其間化育其中是爲人道之始治化之本後世賢人君子奮志於此承焉述焉皆必有爲於世也由此觀之賢人君子乃治世之大器也故天保佑之人君使之居高而臨卑白石先生誕降於日域早立身於武陽歲丙申二月吉日届於六袠榮壽之辰先生文學詞傑出一時道高山嶽德深河海含章履潔嚼如蔚如騰休光於遐遠播聲譽於萬里故四海之望仰之如泰山北斗矣易曰上交不諂下交不瀆其知幾乎斯先生之謂乎詩曰鳲鳩在桑其子七兮淑人君子其儀一兮其儀一兮心如結兮記曰不寶金玉而忠信以爲寶不祈土地立義以爲土地不祈多積多文以爲富難得而易祿易祿而難畜非時不見不亦難得乎非義不合不亦難畜乎先勞而後祿不亦易祿乎斯亦先生之謂乎故其事君有忠事親有孝以此推而放諸東而西而南而北而順々則歸向之使明者必奮發愚者亦知善其德風聲教之高大有益於民人可謂治世之大器是有爲於世也其開來承往之志既有侔於古聖賢之事可謂天下之重任豈不偉哉豈不偉哉謹壽

五言律

齋藤作菴

南極分光處、自然賦大人、文名傳海國、才德出天眞、時遇蟠桃發、幸當花甲辰、呈君圖百壽、嵩祝幾千春、

陳廷耀 穎川藤四郎

曾見揮毫處、翰林已立功、威權風偃草、仁澤雨滋叢、丹頂鳴池上、斑衣舞席中、方開登耳順、士諮慶雲濃、

謙保 中村平大夫

傑出武林賢、聲華遐遠傳、辯傾三峽水、胸藏二酉篇、喜値夾鍾節、嵩呼耳順年、愧吾何所祝、呈錄不文篇、

蘭齋 吉島又七郎

甲子過初度、俱歡捧祝詩、如非鍾嶽秀、安得產英奇、遐國慕風采、蒼生沐惠慈、從來仁者壽、鶴算樂無期、

吉仙 濱川猪右衛門

王室眞金石、佐才道德傳、春秋三洗髓、甲子幾周年、積善鳳雛集、寬仁忠義全、壽星遙拄處、紫氣滿山川、

時哉春二月、庭際百花鮮、遙祝杖レ鄉壽、仰瞻曠世賢、燻功高列レ嶽、名望廣彌レ天、從レ是公門裏、千秋瑞彩連、

吳宜陳 吳 藤次郎

五言排律

平元成 土肥源四郎

伏以佳氣鬱々膺二君子之華辰一壽星煌々照二老人之寶籙一甫申下誕嶽瀆降 神夷呂來歸 謳歌遺老恭惟紫陽太守白石先生臺下國華瑞彩 天德英姿道貫二天人一文開二宇宙一見二六十而化一知二三千可一レ期乃呂達尊之崇聿爲二尙齒之會一大人吉夢會符二斯千之祥一初度嘉名寳錫二正則之美使壽使一富學三二祝於華封一不レ騫不レ崩歌二九如於周雅一兒孫如レ玉賓友似レ雲元成樗櫟棄材濫承二摸範於大匠之手一鷦鷯末品謬習二羽儀於仙禽之翮一孜々摳趨未レ盡下事レ師之道上循々敎誨徒辱二猶子之恩一忽奉二盛懽一何堪二竊抃一不レ揣二謭陋一漫叙二荒蕪一深慙二大方之評一肯擬二羣彥之頌一聊申二賀慶一冀賜二涵容一

壽詩五十韻

千年佳麗地、四海泰平時、春入二芳郊一轉、歲從二壽域一推、偉材降有レ用、大象荷無レ私、間世方文化、經邦是德基、地靈鍾二秀氣一天瑞應二昌期一學總二人間事一文稱二天下師一感精屬二奎昴一占夢協二熊羆一聖語仁而壽、頌言昌且耆、國將二君子一重、家自二老人一宜、牧豕應先達、猶龍那復窺、當年求二駿馬一今日得二元龜一上春恭前レ席、小心欽下レ帷、三鱣乃餘慶、四牡爰周咨、題レ柱聞二清論一乘レ槎賦二載馳一馬頭向二帝闕一鵬翼擊二天池一縱見二中朝客一長陳二大雅詞一風流誰克續、文釆自堅持、敏思在レ叉レ手、高談欲レ解レ頤、立レ言眞簡要、論レ道悉綱維、弘景頻蒙レ問、胡公即決レ疑、國家憂二善馭一名利耻二塵覊一問レ政重二方策一戒レ功勝二鼎彝一三韓脩二國聘一一代起二朝儀一共畏秦生對、先傳白氏詩、叔孫初制レ禮、子產復爲レ辭、文物據二周典一憲章存二漢規一渾同璞裏玉、頴若囊中錐、曠野空二群馬一淸廷足二一夔一聲名傾二泰斗一意氣震二華夷一藹々鳳麟德、堂々松柏姿、從容因二耳順一矍鑠可二神怡一海二一行尋レ棗、山中笑採レ芝、絳人甲子度、楚木春秋移、桃李門迎レ客、芝蘭室列レ兒、雲粉衣上綵、雪染鬢邊絲、好是康寧錫、終當福履綏、只緣レ詩遣レ興、不レ用酒扶レ衰、忽値艶陽節、更添長養資、樓臺增二氣色一花卉發二榮滋一祝壽齊稽首、賞心洵分眉、美人貽二玉案一

嘉客奉瓊巵、座上桑弧在、卿中鳩杖隨、行年任指使、樂事藉遊嬉、黄髮白眉集、華堂綺席施、淸樽頻盡醉、彩筆各爭奇、二月繞春色、五雲傍曙曦、風融爐氣暖、日永漏聲遲、馬帳叨陪宴、龍門幸獲知、 國鈞膺景運、家瑞畀殊禧、共坐春臺上、喜瞻萬物熙、

靈鷲庵龍海

丹頂唳蒼穹、太平氣象濃、朝暾輝綺席、瑞靄繞琳宮、春滿蟠桃熟、烟暄火棗紅、荷仁歌至德、奉 國擢精忠、文武傑當世、風流冠海東、恢才誰得及、韜略悉流通、道繼濂溪統、自稱白石公、嚴恭人俯仰、治政衆和融、綱統百家領、禮依三代風、體裁同董氏、賦質類程翁、四海登龍者、茫然徒望穹、時拈玉柄麈、飜屑玄談雄、詩行三韓外、名傳華夏中、翰林咸讃美、聖主特登庸、周甲開仙席、淸揚貌若童、仙郎秦天保、神女唱華封、應接四來賀、莞然玉頬豐、緜々瓜瓞秀、郁々桂蘭穠、遙想 天恩厚、日聞德 業洪、莊椿 美未盡、萬歲壽無窮、

七言古風

高倫庸 深見久之丞

天爵堂中白石翁、天才俊逸仰高風、汪々襟度潤千頃、文陣橫行獨占雄、非帷讀破書萬卷、經國良籌滿腹中、咳唾錯落九天玉、談鋒坐貫萬丈虹、華甲今年鬢尚玄、卓犖精神老還童、二月家園花映柳、天地淸淺接蓬萊、閶門珠履皆仙侶、屛障錦綺五雲開、三眞適北飛昇去、老君今日跨牛來、爲君高唱南山詩、爲君且酌紫霞杯、杯底渾々酌不盡、紅潮臉暈酌紅梅、領賜頻繁奚有限、珍奇異物每成堆、芝蘭玉樹一森々、膝前起舞彩袖廻、勳勞不已介眉壽、漢廷何必畫雲臺、

田方業 田邊十右衛門

先生度量誰得測、巍然高標出羣倫、名動九區英雄才、功著 兩朝經濟臣、兒孫慶祥由德澤、風月胸襟婆吟呻、筆陣嘗降雞林豪、異域至今稱詩神、聞說東都開壽筵、雲霞呈瑞懸弧晨、千秋當座蓬萊雪、百紀添籌海屋人、未登香山九老畫、先逢花甲一週春、南極堂上星光耀、王母園中桃花新、何況衆芳爛燦時、米門迎送簇車塵、嬌鶯爲奏陽春調、琴歌相和樂嘉賓、綠髮酡顏寧知老、花照玉罍香入脣、遙識縉紳爭祝壽、壽詩篇々若雲屯、憶昔東遊負笈日、拜謁良期天賜因、鵬程渺茫千萬里、猶沐靑眼恩露醇、寄蹟偏鄙

崎水滸、騁心金闕武江濱、此生何幸逢此擧、獻壽謾比八千椿、

陳澤晉 潁川才右衛門

喜添鶴齡耳順年、雲近蓬瀛下羽仙、豪士滿座慶仁壽、羣儒塡門獻錦篇、玉堂新設蟠桃會、鼓瑟吹笙奏綺筵、本由令德平生積、交見芝蘭發階前、萬祥必從感應合、□福並來祐自天、洋々胸襟深河海、博古通今志超然、不矜文章無人敵、憐才時復薦遺賢、預期無疆將何祝、靈椿永昌壽八千、

藤正邦

兩朝文獻遺此老、羽翼豈惟商山皓、桑弧並映昏星中、花甲纔周春日好、君家子弟不可當、玉樹作雙鴻雁行、堂上稱壽堂前舞、綵雲對舞綵霞裳、滿堂盡是登龍客、桃李門中欲吐香、 聖恩更賜几杖日、齊唱南山進壽觴、

七言律

源保庸 服部藤九郎

千載漢廷文教成、使君車馬覩桓榮、百年禮樂和羹手、萬國澄清攬轡情、雲接蓬萊長日月、星垂奎璧暎簪纓、由來俊傑才難老、海内徧傳題杜名、

保命 服部源八郎

竹帛功名掩古今、多年桃李此成林、蒼生四海移風日、白髮兩朝報國心、明世具瞻傳巖楫、殊恩寧羡隗臺金、蒹葭倚玉元堪愧、門館無私春自深、

緝明 三宅九十郎

明月彎環懸作弧、挺生夙自合玄符、寵靈迴擢漢千石、潤色嘗稱鄭大夫、桃李門深春未半、蘭孫堦暖綠成區、東望蓬海方淸淺、聊爲傾將瀉玉壺、

直淸 室新助

君家白石是仙臺、況復太平壽域開、膝下芙蓉三尺劍、手中鸚鵡萬年杯、本朝文獻欽遺老、當代風騷待上材、此會長期春社燕、幾回飛逐盛筵來、

其二

兩鬢一心報主身、恩光舊佩玉麒麟、昔聞杞國憂天久、今見秦山捧日新、名下並翔珠履客、日中雙舞綵衣人、羲和欲襲生辰吉、更遣歲餘在仲春、

其三

當日懸弧設壽筵、太平物色自欣然、重逢尙齒洛陽會、正値共和周室年、窻外花開新雨露、樽前人對舊山

川、武城自古絃歌池、應有簫韶奏九天、

其四

古來英傑出儒流、君自登瀛第一洲、把上曾傳黄石略、社中還從赤松遊、武陵春接桃源水、章曲天隣柳外樓、應是招尋無盡日、今年海屋五添籌、

其五

大夫身上著宮袍、刺史夢中懸寶刀、雙下神鳧原賜舄、三倫仙菓始開桃、春歸東海恩波闊、日繞西山瑞雪高、珍重伏波今益壯、據鞍矍鑠是人豪、

其六

南極曙光照戶庭、宛然君似老人星、絳紗帳下草三禮、藍玉案頭盛五經、乙夜書呈藩國譜、中興廟勒景鐘銘、太平無象春長在、唯見滿江草色青、君嘗著藩翰譜進之、又昭廟鐘銘君所撰故詩及之

其七

昔年奉使到西京、紫氣東來關吏迎、文物往觀三代禮、風謠歸報四方情、誰知幽谷青牛客、舊是漢家白馬生、今日春輝堪共惜、更憑君實答昇平、

宋元豐中司馬溫公居洛陽、與諸大夫爲眞率會、時公年六十五、其詩有共力惜春輝句、今採其語以勉使君、又竊奉昭廟顧命之意

其八

二月黄堂佳氣濃、春風行酒樂時雍、鄕人倶接新携杖、海鶴欲巢舊種松、叙論當年餘半部、漢廷今日問中庸、自憐我醉爲君壽、不覺南山曲更重、

其九

春風淸暇在家時、夢見周公君未衰、楊柳還如長命縷、梅花長發舊年枝、千金詩貴雞林購、五色草成輪苑知、寄語前途須自愛、功名行與古人期、

朝鮮使者得君詩草甚驚異、爭購數十部携歸其國、故詩以白居易事比之

其十

孔光六十漢鴻儒、賓客滿堂酒滿堂、豪卿按下堂恐壺訛宜携靈壽杖、講筵常賜寶裝鑪、寧辭薏苡車中謗、欲照麒麟閣上圖、經術紛綸當日事、祗今誰復問唐虞、

賜靈壽杖、省中置杖、皆孔光故事、講筵賜鑪者每寒天侍講有特旨内出炭火爐以爲常、故詩借用唐内庫七寶□事

高松年　深見久大夫

新花的皪照高堂、仙宴懸弧樂未央、座近蓬萊迎羽客、觴分太液進瓊漿、鶯聲恰似頌天保、蘭蕋剩看呈國香、釀得宜春長命酒、介眉共酌萬年觴、

其二

方瞳如電氣如虹、稱道前□遺老翁、禮樂百年輝國

寶一、文章一代起二家風一、佩刀霞懊星辰護、壽洒春浮琥珀
濃、海上桃花千歲樹、自レ今應レ見二幾番紅一、

正卿　祇園與市

春入二錦筵一霞作レ醪、遙瞻壽色醉二仙桃一、典章二一代風雲
會、詞賦千年星斗高、花映二銀章一懸二玉帶一、日臨二金字一
照二宮袍一、南山休レ問紫芝長、麟閣猶須レ充二國勞一、

其二

玉樓曉敞向二金堤一、門外春風五馬嘶、許レ國丹心留二寶
劒一、杖レ鄉白髮煕二青藜一、鳳池日暖羽儀盛、鼇島雲開壽
域齋、堂上衣冠擧二才俊一、文星仰望聚二東奎一、

附古風一篇

白石先生天上仙、身騎二麒麟一下二青天一、三十六帝留不
レ得、天風吹レ衣何翩々、朝息二扶桑一倚二東辟一、夜鍊二白
石一餐二紫烟一、往々吐出天上語、人間聞者耳茫然、硯池
傾瀉銀河水、織女雲錦散爲レ紙、紙上須臾萬言成、華嶽
突兀風濤起、鬼愁神嘶造化拙、奪二將霞胎一鑿二雲髓一、淸
如三秋娥泣二湘瑟一、奇如三韓信破二巨壘一、予昔驂二彼雙白
螭一、攀登仰掣紫雲電、夜扣二帝閽一閽無レ人、公一相見手
扶持、文章於レ公誠二餘事一、願爲二蒼生一完二瘡痍一、金門朝
鳴珠勒馬、封事夜奏治安策、韓之使者執二玉帛一、血面論

レ禮頑如レ石、公歷二西階一樞レ衣升、軒々朝霞擧二屋額一、
腰帶紫陽太守印、眼光如レ電髯如レ戟、按レ劒叱咤殿柱
震、使客膽寒失二其魄一、擊劒歌成血吹レ霧、機鋒觸處皆
辟易、禮成樂奏賓主歡、王家寶典與レ日赫、日弄二蘭
生一似二兒孫一、魯連毛遂皆僕役、千古功業與二文章一、何人
如レ公兩相將、但愁心事爲レ國苦、秋來鏡裏幾莖霜、萬
戶之侯天空者、爲レ霖爲レ雨久瞻望、一別東南參二商
異一、楚山四見靑楓黃、關河有レ雁音信少、江海無レ路夢
魂長、何時綈袍一得レ報、桑下之餐不レ可レ忘、

雨森東

花朝節近艷陽天、畫閣春開戲二綵前一、經國文章人賛
レ妙、濟時才畧衆推レ賢、情親共許登龍日、耳順新添算
鶴年、竊喜東周留滯客、南山介壽酒如レ泉、

昌言　大地新八郎 字行甫

蓬萊宮闕五雲連、佳氣葱朧繞二壽筵一、砌下芝蘭重二瑞
葉一、門前桃李動二芳年一、紫烟丹竈靑春住、碧樹銀臺白日
懸、六十君今時望重、早聞衞國大夫賢、

其二

漢庭今日重二儒臣一、君自風流第一人、梟影雲浮金闕曉、
鷺行花繞玉墀春、樽傾北斗歡聲洽、座對南山壽色新、

更說武陵仙路近、滄波何處問二芳津一、

桃溪　阪 順元

瑤池閬苑路相通、露彩映レ江接二碧空一、八駿嘗從千里外、一夔猶足兩朝中、仙翁對レ局春長住、海客添レ籌歲豈窮、縱有二桃花今日好一、何如人面醉還紅、

其二

滿堂賓客盡二交歡一、二月黃鸝遶二玉欄一、地似二蓬萊一常却老、人如二松柏一正堪レ寒、風吹二几杖一冠將レ整、日落二樓臺一酒未レ闌、北斗城邊相望久、南天遙掛壽星看、

伊藤祐之

岧嶤富嶽海東天、秀氣特生卓出賢、身侍二兩朝一殊錫レ重、德尊二一代一美名傳、碧桃實熟三千歲、翠柏陰深六十年、遙想壽筵行レ酒日、五雲多處會二羣仙一、

其二

六年別後隔二東關一、月照二屋梁一疑見レ顏、想像衆賓歌席密、應須賢子舞衣斑、回レ頭千里江雲外、託二跡一方一渭樹間、幸有三士峯當二戶牖一、好將二壽色一擬二南山一、

其三

花下開レ筵初度時、天生二豪傑一應二昌期一、齡周二甲子一心猶壯、歲益二唐壽一鬢未レ衰、自レ是中原傳二姓字一、豈惟外國購二歌詩一、盛筵從レ古稱レ難レ値、安得二追陪一勸二壽巵一、

其四

養國杖レ鄉一老人、風流儒雅氣淸眞、五旬賀罷籌頻滿、六十化來德更新、柳色映レ衣朱檻露、花香撲レ酒畫堂春、古今仁者多二高壽一、須三是遐齡比二大椿一、

秀貞　伴玄通

鰲島春浮碧海環、芳辰淸宴得二相攀一、羣仙天上靑雲下、阿母池頭白鶴還、久仰聲名懸二北斗一、共期壽考對二南山一、君今六十猶強健、不レ用樽前酒借レ顏、

田伯隣

桑弧門上瑞星懸、華誕相逢二月天、玉騎並來芳樹下、斑衣對舞畫堂前、長松帶レ雪梅花白、好鳥鳴レ枝柳色鮮、滿座韶光春不レ老、壽詩共頌萬斯年、

其二

金門近接二五雲一披、壽域春回淑景移、盛世何論麟閣畫、早朝自和鳳池詩、磻溪釣者歸二周室一、魯國書生共二漢儀一、都下群賢良宴日、不才喜見得二同時一、

其三

衣冠朝退叙二從容一、雲近二宮墻一五色重、春社雨催搖二草樹一、海門波暖變二魚龍一、良謀未三必逢二黃石一、壽算應須レ

伴二赤松一、絃管堂前花底宴、香風拂レ席玉盃濃、

盧 草 拙

夫壽也者人之所二榮望一也無レ貴無レ賤無レ賢無レ愚靡レ不二崇尙一焉然人之生也自有二貴賤賢愚之分一而定惟壽亦然而貴且賢者之壽獨與二賤且愚者之壽一不レ可二同レ日語一何也予嘗試言レ之凡人之所レ欲莫レ大二於壽一至三其崇二尙之一則就二貴賤賢愚之品一有二甚異一焉如二彼貴且賢之人一衆之所二瞻仰一殆若二山斗一故冀二其人之壽長一也待二之龜鶴一以爲二歌頌一此無レ他欲レ被二其德澤於久遠一矣若夫賤而愚者縱雖レ値二錢鏗偓佺之壽一乃無レ所レ用無レ所レ施然則何崇尙之有是所三以其異一之甚如二天壤一也嘗聞東都白石公者貴且賢之人也今茲仲春之月乃耳順之初度也是日開二張壽筵一談二蟠桃之會一恭惟公早擢二高科一登二於顯仕一誠儒林之標表翰苑之銓衡也赫々業々獨擅二於時一琳琅琬琰炫二燿人目一其餘耀之盛遐及二華夏一而得二其壽一之全如レ斯者乃德充之符也況今聚奎之朝時運休徵學道增明當二是之時一天降二如レ此之賢一而得二其壽一如レ此之全者抑將レ使三斯文大振二當世一而其風教之盛覃二於千百載之久一既如レ是則向來不三欽而崇二尙之一哉崎人有二劉雲溪者一辱レ許レ壽予又與二雲溪一友善因竊述二壽章一篇一獻二之左右一謹奉レ賀云

雄文俊彩冠二羣賢一、華甲還周初度筵、金榜題レ名榮望久、玉堂著レ策妙論全、霞盃獻レ壽賦二春日一、雲篆飛レ香祝二鶴年一、長抱二天眞一身不レ老、眼方髮異見二曾玄一、

長 益 本保三郎兵衛

二月綠楊拂二陌頭一、春風相思武昌樓、已聞勳業朝中重、無レ佐聲名海外流、雨後草迎二珠履一動、酒邊花逐二玉杯一浮、天開二壽域一昇平日、河必仙遊問二十洲一、

劉 善聽 彭城素軒

白石先生登二六袠一、溪山壽篆側偷看、崐崘旁礴星宿湧、鸞鶴翱翔神龍蟠、五帝三王古器物、千祥萬瑞競二毫端一、百壽圖成王母降、蟠桃捧進與レ君餐、

柳茂伴 柳屋次左衛門

欣逢花甲夾鍾天、壽域弘開東武邊、夙弼二王庭一巧轉大、深探二洙水一德維鮮、蘭孫桂子爭レ先祝、鶴算龜齡呈二瑞金一、節彼南山何耐レ比、遐圖寫就富峰巓、

劉俊明 彭城源三郎

經邦才略凌レ雲筆、秀氣鍾レ生希世賢、甲子一周初度日、江山萬里百花天、誰知堯舜朝中傑、原處蓬瀛登上

仙、鸞鶴尋盟亦來賀、管絃聲裏舞庭前、

文擧 潁川宮兵衛

武陵二月桃初發、此日瓊筵開畫堂、不盡山容千口壽、無邊春色萬年章、朝鮮使客觀詩駭、唐士翰林作序芳、總爲雄才表天下、衣冠競稱紫霞觴、

劉雲溪 彭城八右衛門

忽聞今歲周花甲、二月中旬初度辰、客醉畫堂珠履滿、詩輝粉壁彩雲新、泰山北斗人間傑、彭祖赤松陸仙眞、千里龍門無術上、壽筵遙擬引盃頻、

樊鵬翼 高尾藤次郎

蓋世英賢登六旬、畫堂向暖慶生辰、名傳遐域稱詩伯、身爲聖朝呼老臣、靑鳥競來閬苑曉、芳花爭艶武陵春、儒門賴有先生在、喜見文風永遠振、

之壽 森理助

野篇獻壽自江皐、爛燦文星出俊豪、八斗雄才爲國寶、多春嘉樂醉仙桃、道泡洙泗興望重、詩入華邦紙價高、喜聽陽和初度節、歡聲千里到蓬蒿、

周光泉 周峯右衛門

文星永日映三台、南極華筵慶此時、六袠靑春揚德化、千秋不老茂芳姿、威行和漢多相望、名接宋儒每盛推、方朔何曾將玉果、蓬萊仙客壽無期、

知恒 田邊太十郎

天開壽域武城東、海角書生仰德風、雪嶺高抽松栢翠、霞關央簇杏桃紅、綺筵招客瞳方士、綠髮迎春耳順翁、昭代況逢文物盛、揮毫中慶競詞工、

直庸 中山伊右衛門

聞道海東不老仙、今逢甲子一週旋、西山雪色臨金闕、南極星光映碧天、梅柳繞階春馥郁、兒孫擁座壽連綿、長生何必求脩煉、寡欲養眞幾百年、

朝可 池田一作

東壁欣逢誕節符、蟠桃春色遶蓬壺、令名馳世風千里、強健讓身松一株、詩入雞林長慶集、壽期鶴算美門徒、朱顏不改十年後、海外再呈九老圖、

村岡重德 道四郎

德音高誼暨遐方、首出武陵美擧芳、堪喜東風報誕節、想看南極懸華堂、濟川猷略萬夫傑、倚馬文詞百世光、眉壽願如春有脚、更從耳順到無疆、

稲濟 寺廣吉

南極星君降誕也、生民猶問識遐無、德懷丘孟人間仰、學出顏曾宇内欽、海外戴恩魚所望、隣邦被澤

衆欽レ撿、當陽擬欲申嵩祝、羽客陳篇徧處呼、

向井元成

養氣功成自浩然、存心寡慾是眞仙、杖レ鄉猶愛登レ山屐、冠レ世時稱下レ水船、方占杏壇長二日月一、何尋蓬島別坤乾、料知君子無レ疆壽、五總靈龜欲レ伴年、

熊有濟 神代十四郎

碧桃花馥添籌日、佳氣氤氳壽席開、久竭二胸襟一益二時世一、致令蘭桂繞二庭堦一、黃鸝喜泰南山頌、綠髮欣含北海杯、願使三遐齡等二龜鶴一、大興文道比周來、

景春 南部權藏

暖日和風柳拂レ欄、新春開レ宴盡二淸歡一、狄公門下都桃李、謝氏堦前皆蕙蘭、萬壽稱觴促二絃管一、八珍供膳列二銀盤一、從レ今更待七十算、好見二玉鳩飛杖端一、

桃溪道人 釋若口

芳林麗字五雲傍、賓客滿レ堂奉二壽觴一、仙掌傾レ杯曾賜レ露、螭頭拂レ袖每攜レ香、階前珠履月初下、門外錦韉歡未レ央、獻祝彭椿何足レ道、經天耿々玉繩長、

附古風一篇

金方瑞色補二天餘一、鍊結育レ靈下二太虛一、今在二人間一一甲子、玄髮渥顏若二生初一、聞昔高歌夜叩レ角、叩罷忽得遵銅車、際會輔導知幾歲、乃見明主遂握レ符、寶訓金結皆假レ手、目革令典藏二石渠一、直廬宵送爛二銀燭一、侍講寒須溫二玉鑪一、驪使遠來賀二不承一、裁定儀刑公之儲、遴俊選レ人備二聘事一、若木英華大發舒、球士行人遊二燕臺一、竊誦二公詩一爲二陳臚一、就レ中金陵鄭輸林、三嘆題詞收二璠璵一、千古流芳人所レ羨、唯公視去總自如、何只文章邦國花、鈞化鼎爕共拮据、昔日蠻奴來二海島一、欲下惑二我民一濫中島漁上、眩二彼異敎一國有レ禁、恐民惑執化人祛、傳郵收來廷議決、大戮行見市上葅、公時講命召一見、蹙氣𩈪風襲二階除一、嗜欲鴂舌默通曉、王庭耻殺百象背、獨憐絕域了立者、赦罪辭闢化二蠢愚一、其仁及レ物多如レ此、仁者眉壽豈欺レ予、去年東遊客二都下一、客況最喜到二君居一、坐對談論聲如レ鏞、日電劍華射二斗墟一、一別西去忽隔レ歲、江渭道遠雁帛疎、近傳春半覽揆日、才俊壽言吐二琪琚一、玉醪瑤觴相獻酢、滿面仙霞照二冠裾一、遙想華筵喜爲レ壽、與公浩氣塞堪輿、

順之 堀山次郎左衛門

耳順今辰啓二武陽一、傳聞賀客滿二華堂一、昔時近侍千秋節、今日遙稱萬壽觴、霜鬢方知益豪氣、石膓猶憶出文章、胸中韜積昇平策、報國勳名百世長、

七言排律

林郁文 官梅三十郎

懸弧喜値艷陽天、萬種名花照ニ綺筵一、甲子一周逢ニ今節一、丹砂九轉煉ニ長年一、偓佺進レ果桃如レ斗、毛女稱レ觴酒似レ泉、添レ算白鶴歌宛囀、啣レ花青鳥舞翩躚、德隆鄉國人欽仰、仁□遐方祚永延、南極景星臨ニ錦座一、東來紫氣望ニ霓旃一、朱履滿堂皆英俊、蘭桂盈レ揩盡傑賢、齊頌靈椿過ニ八百一、佇看老柏享ニ三千一、華堂瑞靄春常聚、錦席祥光夜益妍、先世已曾蒙ニ覆幬一、餘生何以報ニ埃涓一、祇緣山斗瞻徒切、惟願休嘉福自臻、未レ得ニ登龍一躬獻レ壽、遙寄里言彩□邊、

七言絕

藤 正明

扶桑曉涌海天紅、華甲懸レ弧佳氣中、最喜高堂初度日、斑衣相對舞ニ春風一、

敬美 山脇元悅字敬美

門前楊柳簇ニ鳴珂一、六十知君鬢未レ皤、桂醑蘭尊開ニ壽宴一、滿堂齊唱九如歌、

天爵堂壽詩

男　新井大亮明卿　彙輯

壽白石翁五十　室直清

花下芳樽對二綺筵一、交朋連騎滿二門前一、英聲昔記聞レ啼日、壽色今逢服レ政年、疏廣授レ經時望重、桓榮稽レ古主恩偏、故人應レ有二重輪曲一、吹入二簫韶太史傳一、

今代重レ儒恩數優、從容官路不レ知レ愁、仙班晝接瀛洲侶、鳳吹春陪洛浦遊、人似二玉仙一依二四座一、書如二金鏡一照二千秋一、相思遙寄南山壽、從レ此聲名共レ海流、

佳氣樓臺十二欄、知君際會百年歡、關中豪傑推二王猛一、江左風流起二謝安一、天上竝懸新日月、人間相見舊衣冠、太平待奏河淸頌、未レ許騰仙跨二紫鸞一、

五十有レ聞君未レ衰、功名堪レ可レ保二期頤一、儒臣起草明二光日一、聖主徵詞上レ苑時、正是宋昌承レ寵後、非關楊震得レ官遲、謝家子弟多二蘭玉一、早報翩々向二鳳池一、

同　南景衡

堂前鍾鼓雜二宮商一、華誕堪レ稱九醞觴、壽域春回山嶽色、台階星聚壁奎光、天門射レ策顏如レ玉、海屋添レ籌鬢未レ霜、袨服裁冠陪二舜殿一、曳レ裾何羨漢鄒陽、

同　岳達

春半東風遍二桃李一、滿門和氣自滔々、謝家孫子鳳毛在、知命行看壽富高、

同　田子彝

懸レ弧瑞動艶陽天、嶽降今遭二知命年一、鶴算欲レ添籌幾許、鴻文已奪席三千、當時西閣承二恩澤一、此日南山佐二壽筵一、更喜階前多二玉樹一、彩衣對舞酒觴邊、

同　岡田信

初度歡逢二月天、中和韶色滿二華筵一、關西夫子仕官日、泗上宗師知命年、一出二商山一成二羽翼一、肯過二幽谷一作二神仙一、爲レ君不三啻期二高壽一、願使二家聲千歲傳一、

同　服保庸

千金駿馬到二燕臺一、高價曾聞厲二上才一、芝艸風香商嶺近、桃花浪暖禹門開、昔時絳帳傳レ經切、此日青衿負レ笈來、春酒爲レ君稱二萬壽一、南山佳氣入二霞杯一、

同　堀山順之

南極高懸天爵堂、光搖二縫帳一煥二文章一、凌雲豪氣衝二牛斗一、無敵詩名震二帝鄉一、新賦二九咏一娛未レ盡、猶稱二萬

壽一樂無レ疆、自レ茲遐算同二松栢一、好是巖廊作二棟梁一、

同　　服　愿

一代風流題二杜郎一、恩袍影暖映二宮牆一、春深桃李門前色、花秀芝蘭室裏香、魯水淵源尋レ道早、漢廷日月講レ經長、八千預識靈椿壽、高唱南山入二酒觴一、

同　　土肥孝平 年十四

絳帳迎レ春淑景融、瑞煙籠レ日曉光紅、掘レ衣已立三年雪、（自注曰弟子受二業於門一今既三年）貞レ笈新承二月風、晉代賜レ書皇甫謐、漢家議レ禮叔孫通、羣賢齊獻南山頌、正使三大名傳二不窮一、

同　　同　前

天爵堂前五十春、達尊好是長生民、東方振古推二君子一、南極當今壽二老人一、常侍二講筵一爲二上客一、時斟二旨酒一樂二嘉賓一、孔門此日始知レ命、不レ覓仙桃與二大椿一、初見芳辰出二五雲一、鬱葱佳氣日氤氳、漢年迎レ老商山古、周代降レ神嵩嶽分、學比二董生一明二我道一、名齊二韓子一起二斯文一、遙期致養恩長在、共秉二清忠一奉二聖君一、

同　　田　伯　隣

華堂二月壽筵開、綠酒香濃長命杯、鶴自二九皐一同舞下、鶯遷二喬木一入レ歌來、梅花可レ着二和羹實一、竹樹偏宜二扶老材一、百歲遐齡春欲レ半、南山高唱氣佳哉、

同　　都　欽

甲子明春三百滿、壽觴今日坐二瓊筵一、公培二治道一鹽梅本、家執二詞場一筆硯權、篤信聖經修二德業一、何逢方士問二神仙一、窓前自得仁人樂、正共二南山一保二萬年一、

同　　原　伯　成

東海三山上、桑暾佳氣新、雲間鶴初舞、樹下雉長馴、名著粧二冠玉一、功成懐二席珍一、星輝仰二南極一、人意感二天眞一、

敬寫二梅竹圖一併題以壽二白石翁一　　南　豐 年十三

梅開凌二白雪一、竹秀拂二青雲一、只願先生壽、千秋等二二君一、

同　　大地昌言 年十四

武昌柳色映二春臺一、座上迎レ賓淸興催、日暖金桃臨レ徑發、風微青鳥近レ筵來、樽前長對千秋嶺、花下頻傾萬壽杯、獨步詩名人不レ及、高歌一曲見二豪才一、

同　　阪　順　元

題桂仙郎賢且豪、名家誰繼鳳凰毛、春闈早擢一枝桂、古洞新開千歲桃、石鼎烟浮丹竈暗、金莖露下玉杯高、從レ今會短無限□、復唱二南山一幾度遭、

王堂二月艸青新、琪樹花開繞ニ鯉庭一、氣望ニ東方一君子國、光揚ニ南極一老人星、鴻邊雲盡春相問、夢裏山長路更經、遙想群仙陪レ宴處、蓬萊一水入ニ滄溟一、

同　　山敬美

濃花嫩蕋繞ニ瑤池一、錦席香飄初度時、一世遭逢趨ニ畫省一、五雲詞賦動ニ彤墀一、南山壽色烟霞古、北斗尊前日月遲、更識鳳毛堪レ繼レ美、春風欲レ長萬年枝、
金鞍白馬此追陪、桃李陰々映ニ壽杯一、珠履聲殘花影轉、玉簫吹斷月華開、綵衣偏向ニ尊前一舞、青鳥遙從ニ海上一回、大雅千年傳ニ盛事一、風流誰繼謫仙才、

同　　藤由言

花撲ニ壽觴一和氣均、飛來飛去送レ香頻、碧桃須レ醉三千歲、玉樹傳レ芳五十春、魯叟當時知レ命早、衛臣此日覺レ非新、高蹤已躡雲霄路、獨步青油幙下賓、
白雁傳レ書東海天、遙知才子賀ニ高年一、春生ニ脩竹一凌ニ芳酒一、風送ニ飛花一入ニ綺筵一、交比ニ金蘭一能耐レ久、性如ニ姜桂一老逾賢、君今早得崑山玉、從レ此幾聞報ニ九遷一、
二月東風入ニ遠林一、壽筵開處落花深、百年詩卷留ニ天地一、千載雄名接ニ古今一、金殿談レ經春誦響、玉樓侍レ宴夜絃音、吾猶垂レ翼北溟上、一望悠悠萬里心、
壽酒幾斟金屈巵、春光掩映萬年枝、董生事レ主下レ帷久、楊震比レ君當レ路遲、鵷鷺時逢前レ席問、羔羊須レ有ニ退朝詩一、武關東望一千里、何日親看元紫芝、

同　　大澤猶興

壯歲德音天下知、況今知命擅ニ英奇一、畫堂可レ伴千尋鳳、文席想望五總龜、劍佩書生賦ニ祝壽一、縉紳賀客延ニ龐眉一、犀川春水酌ニ甘谷一、遙注ニ東流一傳ニ慶巵一、自註云犀川在ニ州城之南一源頭有ニ菊潭一有下飲ニ下流一得レ壽者上

同　　藤知脊

曾聞獨步響ニ江東一、文度相知文飲中、眼盡圖書富ニ今古一、手持ニ墳典一侍ニ春風一、程淳和氣人惟肖、遼瑗知非齒亦同、玉樹芝蘭呈レ瑞處、滿堂賓客羨ニ神聰一、

自壽　　白石翁

東郊初度日、春社雨霏微、芳樹迎ニ鶯出一、衡茅待ニ燕歸一、當年寧學レ易、前事亦知レ非、賴レ此治聾酒、翩翩舞ニ綵衣一、

附録

白石先生年譜

緒言

余少年ノ時白石先生ノ遺文ヲ讀テ其人トナリヲ想見シソノ遺逢行事ヲ考フルニ一トシテ非常ナラザルハナシ其生ル、ヤ明暦大火都下騷擾ノ時ニ際シテ火兒トヨバレ三歳ニシテ能ク字ヲ書シ四歳ニシテ人ノ太平記ヲ談ズルヲ聽テ疑義ヲ質問シ六歳ニシテ古詩ヲ誦シテソノ意ヲ講シ七歳ノ時痘ヲ患ヘ殆ント死シテ蘇生シ九歳ニシテハ父ニ代リテ簡牘ヲ書シ十三ニシテハ文筆既ニ老成ノ如シ襁褓ノ中ヨリ君主ノ鍾愛ヲ受クト雖モ青年不幸ニシテ流落シ備サニ艱苦ヲ甞メ貧困ノ極纔ニ飢渇ヲ免カル、ニ至リ四十ニナンナントシテ再ビ仕途ニ就キ明主ノ寵遇ヲ蒙リ勢ヒ神龍ノ雲ヲ得ルガ如ク忽チ國家ニ大用セラルシカモ一官一職アルニ非ズシテ明主ヲ帷幄ノ中ニ輔ケ天下ヲ匡濟スルヲ以テ己レガ任トス老ニ至テ力ヲ著作ニ盡シ鋭意倦マズ簀ヲ易フルニ至テ止ム詩ハ以テ當時藝園ノ巨擘ト稱セラレ其名海外ニ聞エ文ハ以テ自ラ一家ヲ成シテ古今ニ獨歩ス著書數百部ノ多キニ至ルソノ識學古來ソノ比ヲミズ是豈非常トイハザルベケンヤ余嘗ニ驚嘆スルノミナラズ欽慕ノ餘折タク柴ノ記手簡等ノ書ヲ覩ル毎ニソノ履歴ヲ撮抄シ傍ラ諸書ニ散見セル事蹟ヲ輯錄シテ一冊子トナセリ然レドモ採摭未タ廣カラズ遺漏尚多カランコトヲ恐レテ稿ヲ脱スルニ及ハズ篋中ニ藏スルコト久シ爾來世運變遷シテ先生ノ後裔衰落シ祭祀ヲ修ムルコト能ハズ墳墓モ亦隨テ荒廢スルニ至ル豈悲シカラズヤ頃ロ有志ノ士コレヲ慨シ同心協力シテ先生ノ遺著ヲ蒐集シ逐次刊行シテ以テ功德ノ湮沒セザランコトヲ圖リ又ソノ墓所ニツキテ追祭ヲ營ムノ擧アラントス余感激ニタヘズココニ於テカ急ニ舊篋ヲ探リ往年草スル所ノ稿本ヲ出シ私ニ白石先生年譜ト名ツケ同志ニ謀リ活字印刷シテ以テ世ニ公ニス冀クハ諸君余ガ先生ヲ仰慕スルノ微志ヲ諒シソノ寡陋ヲアハレミ猶得ルニ從ヒコレヲ増補シテ遺憾ナキニ至ラシメバ幸甚卷中稱呼俗言一

ニ原書ノマヽヲ摘用シテ厭ハザルモノハ其意勉メテ當時ノ事實ヲ詳明ナラシメント欲スルニアリ請フ文辭ノ雅馴ナラザルヲ嫌フコト勿レ

明治十四年五月　三田葆光識

白石先生年譜

明暦三年丁酉

二月十日辰剋江戸柳原ナル内藤右近大夫（陸奥岩城二萬石）ノ邸内假屋（カリヤ）ニ生ルコレ本年正月十八十九兩日夜江戸大火ニテ主家土屋民部少輔（上總久留里二萬千石）ノ邸宅災ニ罹リケレバ侯ソノ外孫タル内藤侯ノ邸ニシバラク寄住セラレタルノ際ナリ時ニ父與次右衛門正濟年五十七母坂井氏四十二土屋侯戯レニ火ノ子ト呼バル長ジテ眉間ニアル皺紋オノヅカラ火ノ字ノ形ヲナセリ（高玄岱ガ先生ノ肖像ニ題セル詩ニ眉間火字耳上一毫ノ句アルハコノユヱナリ）○土屋侯ノ母堂殊ニ愛シテ襁褓ノ中ヨリ常ニ傍ラニ置カレ侯モマタ日々ニ召シテ傍ラニノミ置レシカバ一門ノ人人モシ庶子ニモヤト疑ヒシトゾ○幼名所見ナシ事蹟合考ニ云文昭公甲州ノ太守ニ御座遊バサレ候節荒井重藏トテ召抱ヘラレ段々御取立テニテ筑後守從五位下ニ任セラレ云々トアレトモ甲府ヘ出仕ノ比ハ既ニ勘解由ト稱セシナリ○太田南畝ノ半日閑

話ニ河村瑞賢ノ事蹟ヲ記セル條中ニ其比浪人新井傳藏トイヘル儒者云々トアリ案スルニ先生ノ長男明卿傳藏トイヒ孫邦賢傳次郎ト稱シ其後代々多ク通稱ニ傳ノ字ヲ用キタルヲ以テ考フレハ先生幼少ノ時ハ傳藏ト稱セラレシナラン○貞丈雜記ニ云新井筑後守名ノリ君美キンヨシト訓ム勘トアルハ俗稱勘解由トイヒシ故ナリマタ與トアルハ俗稱與次右衞門トモイヘル故ナリ（與ノ字ヲ用キル）紫陽トアルハ筑紫ノコトニテ筑後守タリシ故ナリ竹谷トアルモ筑後ノ音ニヨレルナリ云々字在中一字濟美白石ト號シ別ニ勿齋又錦屛山人ト號シソノ居ヲ天爵堂ト名ヅク○安積澹泊ニ與フル手簡ニ云某事ハ亡父ノ時ヨリ故土屋民部少輔家人ニ候民部少輔第二子相馬ノ家ヘ養子ニ罷成リ候時ニ某兄ニテ候者ヲモ附屬シ遣シ候ニ付相馬城下中村ニ居住候コレハ三十年以前ニ死去シテ子共兩人マデ候ヒシモ打續キ死去シ今ハ孫ノ代ニ罷成リ候サテ某事ハ民部少輔ノ子伊豫守代ニ浪人シ堀田筑前守家ヘ罷出テ下總守代マデカノ家ニ罷在リ候其時ニ福島ヘ一度山縣ヘ一度罷越シ候事候ヒキ云々兄ノ名ハ彌一右衞門正信ト申シ候ヒキ云々賤息等ノ事御尋ネニ候長ハ傳藏明卿少ハ平藏宜卿ト申シ候兩人共文學ハ不材ニテ候間心マカセニ仕置候云々

万治元年戊戌（二歲）

二年　巳亥（三歲）

春ノ比火踏ニハラバヒ居テ上野物語トイフ寛永寺ノ花見ノサマヲ記セル草子ヲ見ナガラ筆紙ヲモトメテ摸寫セシヲ人々傳聞シソノ摸本ヲ乞ヒ見テ驚嘆セリマタ此頃戲ニ屛風ニ吾ガ名ヲ書セルコトアリ此後ハ常ノ戲ニ筆ヲトリテ物書クコトノミシケレバオノヅカラ日々ニ文字ヲモ見知リタレド師トスル人モナクタダ往來物ノ類ナドヲ讀ミ習フノミナリ

三年　庚子（四歲）

此比ヨリ太平記評判ノ講席ニ父ニ侍シテコレヲ聽キ夜フケヌトイヘドモ坐ヲ去ラズ講畢リテソノ疑義ヲ質問ス諸人驚嘆セザルモノナシ

寛文元年辛丑（五歲）

二年　壬寅（六歲）

盛岡侯南部信濃守利直土屋侯ノ邸ニ來リシ時先生

ヲ見テ乞ヒテ養子トシ成長ノ後祿千石ヲ分チ與ヘントノゾマレシカドモ土屋侯惜ミテ肯ゼズコレヲ聞キシ人々アハレ不幸ノ兒カナ土屋侯イカニ思ハルトモ千石ノ祿與ヘンコトハ叶フマジキモノヲトイヒシトゾ○夏ノ比上松忠兵衞トテ少シク文學アリシ人七言絶句ノ詩一首ヲ敎ヘテ其意ヲ解シ聞カセシニヤガテ誦ヲナシケレバ二首マデ敎ヘラレシヲ人ニモ講シ聞カセタリ

三年　癸卯(七歲)

正月元日ヨリ疱瘡ヲ患ヘ甚シキ難痘ニテ殆ント死ス「ウニコール」ヲ服シテ後ワヅカニ蘇生スルヲ得ル○是年戯劇ヲ觀テ終始コレヲ記臆シ家ニ歸リテ後人々ニ語リ聞カセタリ

四年　甲辰(八歲)

是秋土屋侯上總在邑ノ留守ニ在リテ專ラ習字ヲ始ム

五年　乙巳(九歲)

是歲秋冬ノ間習字ノ課ヲ立テ日ノウチニ行草ノ字三千夜ニ入リテ一千字ヲ限リテ臨書ス冬ニ至リ日短クシテ課未ダ滿タザルニ暮ントスルコト度々ニテ西向ノ竹椽ニ机ヲモチ出デ書キ卒ルコトアリマタ夜ニ入リテ睡ヲ催シ堪ヘガタキ時ハ彼ノ竹椽ニテ衣ヲ脫シテ一桶ノ水ヲカヽリ衣ヲ着テ習フニ冷カナルニ目覺ルコヽチスレドシバシ程ヘテマタマタネブタクナレバマタ水ヲカヽル二度水ヲカヽル程ニハ課ヲモ滿テタリ○此比ヨリ父ノ人ニ贈答スル書ヲバカタノゴトクニハ書キタリ

六年　丙午(十歲)

七年　丁未(十一歲)

是秋マタ課ヲ立テ庭訓往來ヲ習ヒ十一月ニ至リ十日ノ中ニ淨寫シ冊ニシテ土屋侯ニ進呈ス侯大ニ賞譽ス○父ノ友關某ニシタガヒ擊劍ヲ習フ神戶某ノ次男十六歲ナリシ者ト試合ヒシ三度合ヒテ三度トモニ勝ヲ得タリ此後ハ常ニ武藝ヲノミ好ミテ習字ナドハ心ニ染マズアリシカドモノ讀ムコトヲバ好ミヌレバ常ニ我國ノ物語草子ノ類ヲバ見ズトイフモノナシ

八年　戊申(十二歲)

九年　己酉(十三歲)

此比ヨリ土屋侯贈答ノ文書ハ大カタ命ジテ書カシ

ム

十年　庚戌（十四歳）

十一年　辛亥（十五歳）

正月十七日姉おてい死ス年十九

十二年　壬子（十六歳）

延寶元年癸丑（十七歳）

同藩士長谷川某ノ家ニテ翁問答ヲ借覽シテ初メテ聖人ノ道アルコトヲ知リコレヨリシテ志切ナリト雖ドモ師トスル人モアラズ○京師ノ人ニテ醫ヲ業トスル江馬益庵トイヘルモノニ請ヒテ小學題辭程子四箴ノ講ヲ聽キツイデ四書五經ヲ誦ミ習フトイヘドモ句讀ノ師アルニモアラズミヅカラ韻會字彙等ニヨリテ誦シ習ヘルノミナリ○十二月冬景即事ヲ七言律詩ニ賦ス或人ソノ詩ヲ評スルヲ聞テソノ嘲ヲ解ク文一篇ヲ作ルコレ詩文ヲ作レル始ナリ

二年　甲寅（十八歳）

主君ニ隨從シテ上總久留里ニアリシニ事ニアタリテ勘氣ヲ蒙リシバラク籠居シテ在リケルヲリシモ同藩士ノ中二黨ニ分レテ鬪爭セントスルコトアリソノ一方ハ父ノ懇交ノ者ドモナリケレバ其黨ノ與力セントテ竊ニ肌ニ鎖ヲ着テウヘニ衣ヲ襲ヒ下僕ノ心キヽタル者ニ命ジテ鬪ヒ始ラバトク歸ヘリ告ケヨトイヒテ出シヤリソノ報ヲ待シニ時剋ニ至リ雙方和解スル者アリテ鬪フニ及バズシテ止ミヌ翌日其黨ノ人來リテ云足下ノ厚意謝スルニ餘リアリトイヘドモ主ノ勘氣ヲ蒙リ閉居セル者私ニ門ヲ出ントスル時守門者コレヲ拒マバ如何トカスル答云コレヲ殺シテ出ンノミ又云閉居ノ身ヲ以テ私ニ其門ヲ出ルダニアルヲ守門者ヲ殺スニ至リテハ其罪重疊ナラズヤト先生笑テ云シカラバ卿等ガ鬪爭セントスルハ罪ニアラズトスルカ又兄等ガ殺サントスル處ノ者ハ當家譜代ノ士ナリ吾ガ殺サント思ヒシハ小門ヲ守ル賤夫ナリ其罪ノ輕重如何ゾヤ吾レ年長ノモノタランニハ別ニ處置スルトコロアルベシ未ダ二十ニモ足ラザレバタヾ吾ガ耻ナカラント思ヒシノミト答フ後ニ父マタ侯モ此事ヲ聞テ竊ニソノ義氣ヲ喜ブ

三年　乙卯（十九歳）

閏四月廿四日土屋民部少輔利直卒ス時ニ父正濟年七十五ニシテ致仕ス侯ノ世嗣伊豫守賴直ヨリ養老

ノ俸ヲ給ス正濟妻ト共ニ剃髮シテ淺草報恩寺中ニ草庵ヲ結ビテ住ス○文會雜記ニ云白石ノ父ハ土屋民部少輔方ニ足輕ノ小頭ニテアリシガ大目付マデニ昇進スコノ人極メテ才氣アリ云々

四年　丙辰（二十歲）

五年　丁巳（廿一歲）

二月廿二日土屋家ヲ去ルコレ當代伊豫守賴直無道ナレバ老臣等竊ニ廢立ノコトヲ謀リシニ其事漏泄シテ罪セラレシ者多ク父正濟モマタ連坐セラレテマタソノ俸祿ヲ褫ハレ併セテ先生ヲモ仕途ヲ禁錮シテ放逐セルナリ○此時ヨリシテ閑散ナレバ同志ト相往來シテ專ラ學問ニ從事ス然レドモ思フ所アリテ師ヲモトメズ○此比ヨリ對馬國ノ儒生阿比留（後ニ西山順泰ト云フ）ヲ相識ル○五月八日妹おまて死ス年十八○折タク柴ノ記ニ云主從ツヅカニ二人身ヲ市中ニヨセツ云々晝間ハ父母ノ許ニ在リ朝夕コヽカシコニ行キテ講學ス手習フコトヲ敎ヘテ生計ノ一助ニセヨト勸ムル者アレドモ志ニアラズ云々

六年　戊午（二十二）

五月十日母坂井氏歿ス年六十三○折タク柴ノ記ニ云此後ハ老タマヒシ父ト吾ト只二人ノミニナリヌレバヨロヅモノ悲シカリシコトイフバカリナシ云々○仕倉了仁トイヒテ八十餘ノ老人ハ織田内府入道常眞ニ仕ヘ老テ遁世セシ人ナリシガ或時先生ノ父ニ語リテ云吾ガ親キ富商男子無クシテ女子一人アリ然ルベキ贅壻ヲモトメテ家ヲ讓ラント欲ス子息ヲ以テソノ望ニマカセナンヤト云フ父コレヲ先生ニ語ル先生肯セズ○又當時無雙ノ富商河村瑞賢ソノ亡兄ノ女ニ配シ三千金ノ宅地ヲ附屬シテ學問ノ資トセント請フ先生蟄龍ノ譬喩ヲ以テコレヲ謝絕スソノ語ハ折タク柴ノ記ニアリ事長ケレバコヽニ載セズ

七年　己未（二十三）

三月土屋伊豫守賴直家政治マラザルヲ以テ所領收公セラレ子息主稅ニカタバカリノ所領ヲ賜フ主稅ヨリ先生ヲ招キシカバ父勸氣ヲ蒙フリシ者憚リアリトイヒテ辭セシニソノ憚リアルベカラズトアリシカバ行キ向ヒ請ヒニ應ジテ名ノ字ヲ選ビ與フココニ於テ先生ノ仕途オノヅカラ開ケタリ

八年　庚申（二十四）

天和元年辛酉(二十五)
二年　壬戌(二十六)
三月古河侯堀田筑前守正俊ノ家ニ出テ仕フ侯時ニ幕府大老職○六月九日父正濟歿ス年八十二○是秋朝鮮聘使來ル詩百首ヲ錄シ阿比留ニヨリテ三學士ノ評ヲ乞フ九月朔日客館ニ至リテ韓使ニ面晤唱和スソノ夜製述官成琬カノ詩集ニ序ヲ作リテ贈ル○是年木下順菴幕府ニ召シ出サル阿比留其門ニ入ル
三年　癸亥(二十七)
貞享元年甲子(二十八)
八月廿八日主君堀田筑前守正俊殿中ニ於テ若年寄稻葉石見守ノ爲ニ殺害セラル嫡男下總守正仲家ヲ嗣ギ封ヲ減ゼラレケレバ家士等ノ俸ヲモ減ゼシニヨリテ去ル者多シトイヘドモ一ト度主從ノ義ヲ結ビカヽル時ニ際シテ去ルベキニアラズトテ僅ニ飢ヲ免カルヽノミニテ心ナラズ臣事ス○此頃身閑アリテ意ノマヽニ經史ヲ涉獵スルヲ得タリ
二年　乙丑(二十九)
三年　丙寅(三十)
出羽國山縣ニ行クコトアリテソノ紀行一卷アリ阿比留ソレヲ木下順菴ニ示シマタ詩集ニ朝鮮人ノ序作リシコト等ヲ以テ語リヤガテ阿比留紹介シテ木下順菴ニ初テ見ユ
四年　丁卯(三十一)
元祿元年戊辰(三十二)
尺牘筌成ル○九月三日阿比留西山順泰歿ス
二年　己巳(三十三)
三年　庚午(三十四)
四年　辛未(三十五)
今春堀田家致仕ヲ乞フ夏ニ至リテ下總守正仲其臣太田垣某ヲ使トシテコレヲトヽム先生猶言フ所アリ秋ニ至リテソノ請ヒヲ允サル此時家ノ餘財青銅三百白米三斗ノミ妻孥ヲ引具シ師檀ノ緣ニヨリテ高德寺ニ投ジヤガテ淺草ニ借宅ス猶一僕一婢ノ相隨從スルアリ○堀田下總守正仲ノ舍弟備後守俊晉家老坪井某ヲ使トシテ先生ヲ招ク肯ゼズ○七月長男明卿生ル○此秋城東ニ移居ス來學ノ者日々ニ多シ
五年　壬申(三十六)
谷某トイヘル人先生ニ告ケテ云當時世ニ用キラレ

ザル人ニツキテ學バンニハタトヒ學優ナリトイフモ立身難カルベシシカジソノ師事スルトコロヲ改メテ後榮ヲ期センニハト先生卽チ孔子陳蔡ノ厄門弟子コレニ隨從シテ艱難ヲ倶ニセシコトヲ以テ答フ○木下順菴加賀侯ニ先生ヲ薦擧セントス時ニ同門弟岡島仲通吾ガ本藩ナルヲ以テ己レヲ加賀ニ薦メラレンコトヲ希望スルノ意ヲ先生ニ語ル先生コレヲ許容シ强テ順菴ニ乞ヒテ岡島ヲ薦メシム順菴ソノ義ヲ嘆美ス

六年　癸酉(三十七)

木下順菴ノ薦擧ヲ以テ十二月十六日甲府公ニ出仕ス俸米四十八口同十八日初テ謁見同二十六日大學進講○甲府公ト申スハ當時將軍家ノ御甥正三位宰相綱豐卿ノ御事ナリ藩邸ノ櫻田ニ在ルヲ以テ世ニ櫻田御殿ト稱ス後御名家宣ト改メサセラレ第六代ノ大統ヲ繼カセラル御諡文昭院殿ト稱シ奉ル御父ハ大獻院殿ノ御次男左近衞中將兼左馬頭綱重卿甲斐國ニ封セラル淸揚院殿ト諡ス

七年　甲戌(三十八)

今春長女疱瘡ヲ患ヘ二月朔日死ス長男明卿マタコレヲ患フ○二月十三日藩邸ニ於テ詩經ノ講筵ヲ開カル今年十一月二十日ニ至リ凡百六十二日ニシテ畢ル草木鳥獸等ノ如キハ畫工ニ命ジテ圖セシム爾後年々四書孝經周禮儀禮等ノ書ヲ兼講セシコト御代シロシメシヽ後ニ御使ヲ奉リテ上洛シマタ朝鮮聘事ヲ奉リシ程ヲノゾクノ外十二年ノ間講筵ニ侍スルコト凡一千二百九十九日ナリ毎年正月ノ初メ講筵ヲ開カル年ノ始メナレバ大小雅ノ中メデタキ詩ヲ選ビテ進講ス講畢リヌレバ時服二領ヲ賜フ藩邸ニ坐シヽヨリ御代シラサセタマヒシ後ニ至ルマデ正月開講後十五日ヲ過テ日講始リ十二月ノ末ニ至ルマデ大故オハシマスノ外ハ朔望ハイフニ及バズ四時佳節トイヘドモ日講ヲトドメラレシコトアラズ老後疾病多キニ至リテハ大暑ノ時節ニハ日沒ノ後ニ登營進講夜ニ及ブ雨雪ノ日ハ殊ニ御使ヲ以テ出仕ヲトドメラル

八年　乙亥(三十九)

正月廿四日書經ノ講筵ヲ開カル同廿八日通鑑綱目ノ講筵ヲ開カル書經ノ講凡七十一日十二月廿一日ニ至リテ卒ル○是秋命ヲ蒙リテ常ニ御座右ニ置ルベキ和漢ノ書目ヲ上ルソノ書ドモ購ヒ求メテ進ラ

スベシトアレバ百數十部ヲ求メテ上ル○十二月廿一日子息ニ相傳フベシトテ年頃御愛藏ノ六經ヲ賜フ汲古閣善本ニテ裝潢書函鎖鑰等善盡シ美盡セルモノナリ

九年　丙子（四十）

正月初旬小筵ヲ開キテ木下順菴ヲ招待シ恩賜ノ書ヲ示ス順菴序ヲ作リテコレニ與フ○正月廿六日春秋ノ講筵ヲ開カル左氏公羊穀梁胡氏ノ四傳ヲ合セ講ス六年ヲ經テ辛巳ノ年十二月十九日ニ至リ凡百五十七日ニシテ畢ル

十年　丁丑（四十一）

十一年　戊寅（四十二）

九月二日災火ノタメニ居宅類燒ス同九日假屋ノ料トシテ金五拾兩下シ賜ハル此時罹災ノ人多カル中ニ特恩ニ出シ所ナレバ思フ所アリテ賜金ヲ以テ新ニ鎧一領ヲ成サシム紺糸威シ同ジ毛ノ冑ニ鍬形打タルモノナリ○十二月廿三日木下順菴歿ス遺言ニヨリテ榊原玄輔ト二人葬儀ヲ管ス○順菴嘗テ先生ト玄輔兩人ノ志ヲ問ヒシニ兩人口ヲソロヘテ天下有用ノ學問ヲナスベキ由ヲ云ヘリ

十二年　己卯（四十三）

次男平藏宜卿生ル

十三年　庚辰（四十四）

十四年　辛巳（四十五）

正月十一日國初以來封祿萬石以上ノ人々ノ傳記撰錄ノ命ヲ蒙リ同十四日先ヅソノ凡例ヲ記シテ上ル許可ヲ得テ七月十一日草ヲ起シ十月稿ヲ脫ス事ハ慶長五年ニ始リ延寶八年ニ至ルマデ八十年間始封襲封廢除等凡三百三十七家ソノ書タル正篇十卷附錄二卷凡例目錄共ニ一卷通計十三卷分チテ二十冊ト爲シ自ラ淨書功卒リテ明年壬午二月十九日進呈ス書名ヲバ公自ラ撰ビタマヒテ藩翰譜ト題セラル○ソノ外命ニヨリテ二三冊ノ書撰呈セシモノ多シ

十五年　壬午（四十六）

十六年　癸未（四十七）

十一月廿二日夜半ヨリ大地震ス裏打タル上下ノ上ヘニ道服着テ召供ノ者二三人來レソノ餘ハ家ニトドマレトイヒツヽ馳セ出デ神田橋ヲ過ギテ櫻田ノ藩邸ニ到ル翌日ニ至リテモ猶シバシバ地震シ所々ニ火起リ廿九日ノ夜半居宅類燒ス○案スルニ此時

居宅湯島ニテ高キ崖ニソヒタルヨシナレバ天神下ノ邊ナルベシ

寶永元年甲申（四十八）

十二月五日甲府公將軍家ノ儲副ニ立セタマフト聞テ藩邸ニ參賀シ間部越前守詮房ニ面會シ凡天下ノ御事ニ於テハ某此年比申シ所ナレバ今ハタ申スニ及バズ只ソノ申シコトドモ忘レサセタマフコトナカランニハ天下ノ幸甚ニコソ候ベケレトイヒテ立別レヌ○十二月廿七日西丸御側衆支配仰付ラレ中之口ヲ入リ御臺所ヲ經テ奥ニ參ルベキ旨間部越前守傳達ス

二年　乙酉（四十九）

正月元日大城拜賀寄合衆ノ次席ニ列座ス○四月廿二日西城ニ於テ進講訖リシ後御庭ノ景色興アリ市正正直ニ案内サセテ眺望スベシト仰下サレコ、カシコ拜見スコノ日妻子共ニアタヘヨトテ色々ノ帛五卷ヲ賜フ夏ニ至リテ單絹マタ御菓子ヲ賜フ爾後年々恒例トナリテ有章院殿御代ニ至リテモ同ジ○八月四日若年寄支配仰付ラル

新井勘解由　服部藤九郎
服部清助　土肥源四郎以上四人

三年　丙戌（五十）

三月十二日後唐莊宗紀講義進呈案ヲ上ル○同十六日今ノ散樂ハ異國ノ雜劇ニ類セルヨシヲ記シテ上ル○九月六日元曲選五十六卷ヲ上ル○自壽五十詩云、靑春初度日、社雨潤芳菲、綺樹迎鶯出、衡第待燕歸、當年寧學易、前事復知非、賴此治甕酒、翩々舞綵衣、

四年　丁亥（五十一）

五月十九日雉子橋外ニ於テ宅地三百五十五坪ヲ賜フマタ濱ノ別館濱御殿ナリニ在リシ蜂屋源八郎ガ家材ヲ賜ヒ經費トシテ金二百兩ヲ賜フ○七月廿六日新宅ニ移ル○八月朔日紅葉山下御門西丸裏御門等通行ヲ許サルコレ出仕ノ道程近カランコトヲ思召レテナリ○今月晦日大城ニ於テ散樂アリコレ家千代君御誕生ノ御賀ナリ若君ノ御外叔父太田外記ト兩人拜見仰付ラル○十一月廿三日召レテ西城ニ參ルコノ日富士山墳火シテ西南ニ黑雲天ニ遮リ白灰地ヲ埋ム火燭ヲ擧ゲテ講ニ侍ス

五年　戊子（五十二）

六年　己丑（五十三）

正月十日將軍綱吉公薨ス御諡常憲院殿明ル十一日西城ニ登營シ當時ノ急三條ノ封事ヲ袖ニシ中務少輔詮衡ニツキテコレヲ上ル○正月十七日大錢ヲ廢セラル當十寶永通寶ナリ○同十九日元和令ノ事ニヨリテ仰ノ旨アリケレバ其夜神祖法意解一冊ヲ撰ビ明ル廿日之ヲ上ル○正月二十日殺生禁斷ノ令ヲ廢セラル○同十九日常憲院殿御石槨ノ銘ヲ草シ別ニ和漢舊式ヲ注シテ上ル○正月廿二日御葬送○同廿七日皇子皇女御出家ノ先例ヲ廢セラレ親王宣下皇女御釐降アルベキコトノ封事ヲ上ル○二月二日大赦ノ議ヲ上ル○二月三日御下問ニ應ジ國財窮乏ストイフトモ金銀改造スベカラズ又前代ノ御座所急ニ毀チ新造スベカラズ等ノ答議ヲ上ルコレ天下ノ大議御下問ノ始ナリ○同七日ヨリ長女疱瘡ヲ患フ一男二女トモニ此病ニ罹リ各々險症ナリシカドモ幸ニ恙ナキヲ得タリ案スルニ元祿七年ニ今春長女疱瘡ヲ患ヘ二月朔日死トアレバ今又コヽニ長女トアルハ其後ノ出生ナルベシ○三月七日今後萬石以上ノ人々コトコトク叙爵セシメラルベキ由仰出サル○四月二日當將軍家宣公御代初拜賀ノ儀アリ○四月六日御旗本ノ人々ノ息男七百三十一人ヲ召シ出サル世ニ惣御番入リト云フ○同十八日子息明卿初テ拜謁ス此時謁見ノミナラズ召シ出サルベキ旨間部越前守ヲ以テ内命アリシカドモ寄合衆ノ子息召出サレシ先例無シ特旨ニ出ヅトイフトモ先例ニタガハンコトヲミヅカラ始メンコトハ望ム所ニアラズト固辭ス○五月朔日將軍宣下ノ儀行セラレシニ布衣ヲ借シタマハリテ特ニ御帳臺ノ内ニ候セシメラル同三日四日ノ御儀式ニモ同ジ○同廿三日大赦行ハルコレ二月二日上リシ議ヲ採用セラレシナリ○七月三日鍋松君生ル家繼公御事ナリ○同六日武藏國埼玉郡野平村比企郡奈良梨村越畑村五百石ノ地ヲ賜ハル○十月十日去ル六月廿三日ノ御下問ニ應ジテ朝鮮聘禮議ヲ上ル○十一月朔日本城ヘ御移徙ニヨリテ中之口ニ下タ部屋ヲ渡サレ蓮池門通行ヲ許サル○同九日邏馬人ノ來由ヲ問フベキ旨ヲ命ゼラレシバシバ應接シテ事由ヲ按驗スコレハ去ル寶永五年戊子ノ秋薩州管内多褹島ニ來リシヲ長崎ヨリ江戸ニ送リコセシナリ

七年　庚寅(五十四)

正月元三ノ儀式將軍宣下ノ時ノ如ク御帳内ニ候シテ觀セシメラル其中三日ノ夜ハ間部越前守御座ノ後ロニ候シ先生右ニ候ス二人ノ外近侍ノ者ナシコレハモシ其禮ノ議スベキトコロアラバ問伺ルベキタメナリ○十一日御具足御祝幷御連歌ノ式ヲ拜觀

セシメラル○廿二日朝鮮聘事後議ヲ上ル○二月朔日應接事議二卷ヲ上ル○同十八日新令武家諸法度ナリノ草ヲ上ル○同廿四日新令句解ヲ上ル○四月十五日新令ヲ頒チ下サル明ル十六日新令解シ難カラン者ニ示スベシトテ句解ヲ林大學頭信篤ニ下サル○此頃近衞攝政大相國東下アリシカバ對面スベキ旨命ゼラレ五月四日初見後シバシバ面謁ス○六月廿三日武器修繕ノ議ヲ上ル○七月十日南都兩門跡一乘院大乘院爭訟議ヲ上ル○七月廿九日大成殿御詣ノ次第ヲ撰進ス○八月朔日本朝神拜ノ儀ヲ授ケマヰラス同四日將軍家大成殿御參詣アリ○八月廿三日特旨ヲ以テ大手内櫻田百人組中ノ御門御玄關前御門蓮池坂下紅葉山下八ケ所ノ御門々々晝夜ニ限ラズ出入スベキ旨仰下サル此事傍例ナシトテ老中申ス事アリシカドモ他ノ例ニ準ズベカラズト仰出サル○同日京都ヘ御使トシテ遣ハサルベキ内命アリテ先ヅソノ旅費ノ料トシテ金百兩賜ハルコレハ十一月十一日御卽位ノ儀ヲ見セシメラルベキタメ内々ノ仰ヲ蒙リシナリ○閏八月廿八日白書院ニ出御アリテ京師御使ノ事ヲ仰下サレヤガテ老中大久保加賀守忠朝命ヲ傳ヘテ黃金五枚ヲ賜リ又常ノ御座所ニ召レテ時服二領御道服一領ヲ賜フ○十月五日妻子ニ絹帛ヲ賜フ○同十一日明日京師ヘ出發ノ爲登營ス御前ニ召サレテ仰下ル事ドモアリテ御手自ラ御印籠御巾着ヲ賜フ明ル十二日出立廿四日入京十一月十一日御卽位ノ儀ヲ拜見ス○同十五日間部越前守ヨリ飛札到來シ更ニ來年正月天皇御元服ノ儀拜見畢リテ歸府スベキ旨ヲ命ゼラレ滯留ノ日久シケレバトテ費用ノタメ別ニ金百兩ヲ賜フ十一月廿五日大阪ニ赴キ十二月二日南都ニ行キ同五日宇治ニ宿シ六日京ニ歸ル○自題肖像詩云、蒼顏如鐵鬢如銀、紫石稜々電射人、五尺小身渾是膽、明時何用畫麒麟、時奉使西上トアレバ蓋シ是時ノ作ナルベシ

正德元年辛卯（五十五）

正月元日天皇御元服ノ儀拜見龍顏ヲ拜ス○同八日琉球ノ聘使江戸ノ聘事畢リテ歸途伏見ニ宿スト聞テ彼所ニ在ル島津侯ノ第ニ至リ美里豐見城兩王子ニ面會スコレ又兼テ内命アリシニヨリテナリ○同廿一日京師出立二月三日江戸ニ歸ル○二月十五日白書院ニ於テ謁見慰勞ノ上意ヲ蒙ル○三月朔日田

安淸水竹橋等ノ御門々々晝ノ程出入ヲ許サル同廿三日官船御覽ノ供奉ニ候ス○六月十一日布衣ノ侍ニ召シ加ヘラル○同廿三日朝鮮聘使進見賜宴辭見等ノ儀ノ次第ヲ上ルコレ歸府ノ後命ヲ蒙ル所也○八月廿五日內旨ヲ以テ朝鮮聘使來ラン時中路マデ出迎ヘシメラルベシトテ路費金百兩ヲ賜フ○八月廿六日議訴父女罪ヲ上ル○九月廿三日朝鮮聘使川崎驛ニ來ラン時出迎フベキ旨老中土屋相模守政直命ヲ傳ヘ黃金二枚ヲ賜フ○十月十一日從五位下ニ敍セラレ筑後守ニ任ズ御前ニ於テ時服三領末次ノ御太刀(糸巻金作)五位ノ袍狩衣等ノ具コトゴトク下シ賜ハルコレ兼テコレラノ物ノ事命ジ置レシヲ昨日調進セシカバ今日敍爵仰付ラレシナリ○同十七日川崎ノ驛ニ至リ朝鮮信使ニ對面ス此時木蘭地ノ水干ニ緣塗ノ烏帽子ヲ着銀造ノ野太刀ヲ佩ク○同十九日敍爵拜賀○十一月朔日客使進見三日賜宴四日朝鮮馬上方御覽十一日客使辭見十九日發足○同廿二日今度外使ノ事ニ勞アリトテ相模國鎌倉郡植木村城廻村高座郡上大谷村等五百石ノ地ヲ加ヘ賜ハルサキニ賜ハリシ武藏國比企郡ノ地ヲ埼玉郡野寺村ニ換ヘ賜ハラン事ヲ望ミノ如ク許允有テ野寺一村所領トナリ武藏相模ノ地惣計一千石ヲ領ス○七月五日御下問ニ應ジテ越後國村上領八十五ケ村訴訟ノ議ヲ上ル○十二月廿二日不忍池ノ邊リヨリ出火延燒數萬家ニ及ブ明曆丁酉已後府下大火シバシバナレバ御下問ニ應ジ防火ノ策十五條ヲ議シテ上ル

二年　壬辰(五十六)

特命ニヨリテ二月廿三日ヨリ廿五日ニ至リ御代替リニツキ諸大名ヲ始メ寺社ニ頒チ下サルベキ御判物御朱印ノ草ヲ上ル但シ此事御施行アラズシテ御他界アリキ○二月廿五日ヨリ三月九日ニ至ルマデ今春江戶ニ來レル阿蘭陀人ノ旅館ニ行キ向ヒテ西南外國ノ事ヲ質問ス○此頃諸大名ノ課役獻物參勤交替及ビ召供ノ人數減省御門々々番兵等スベテ冗費ヲ減ズルノ議ヲ上ル又道中人馬ノ議ヲ上ル○三月廿日比ヨリ病ニ罹リテ籠居ス四月四日市正正直ヲ御使トシテ病ヲ問ハセラル衛後中務少輔詮衡等ヲ御使トシテ問ハセラルヽコト五度ニ及ブ同廿六日病ヲ扶ケテ出仕ス○五月十九日宅地狹シト聞召レテ一橋ノ外ニシテ八百坪ノ地改メ賜ハル廿二

日新宅ニ移ル六月十九日新居修造ノ料トシテ金百兩賜ハル○此頃マタ封事ヲ上リテ當今御勘定所ト申スハ古ヘノ民部大藏刑部ノ三省勘解由使等ノ數官ヲ兼ネタル重職ニシテ其人ヲ得ルト得ザルト人民ノ苦樂ニ關スルコト淺少ナラザレバ須ラク吟味ノ役ヲ置ルベキコトヲ建白ス七月朔日御勘定組頭杉岡彌太郎荻原源左衞門御勘定吟味役命ゼラル○九月十一日御勘定頭荻原近江守重秀其職ヲ奪ハレテメシ籠メラル世ノ人其故ヲ知ラズトイヘドモ實ハ今年三月ヨリ昨十日ニ至ルマデ封事ヲ上リシコト三度ニ及ビ上コレヲ決斷シタマヒシ所ナリ○今年夏ノ比ヨリ上御違例九月廿五日二十一史ヲ賜ヒシハツヒニ御遺物ニハカラセタマヒシナリ廿七日御後ノ事共御下問アリ十月十四日薨去○十一月幼主御忌服ノ事林大學頭信篤ノ議ヲ斥シテ意見ヲ上ル○正德年號辨ヲ上ル○十二月十一日將軍家繼公御代始ノ儀行ハル是ヨリサキ家繼公御名ノ字勘文ヲ上ル○十二月廿五日前例ノ如ク黃金三十兩ヲ賜ハル

三年　癸巳（五十七）

正月元日家繼公御着袴ノ儀アリ○同廿三日御諱字撰進ノ賞トシテ黃金三枚ヲ賜ハル○是日マタ前代御在世ニ下シ賜フベキ思召ヲ以長崎奉行ニ下命アリシ書三部頃日到來セルヲ以テ下シ賜ハル（三才圖會農政全書古印譜等ナリ）○二月十八日御元服次第ヲ撰進ス○三月廿二日家繼公御元服ノ儀行ハセラル此時御座ノ右ニ候ス○四月二日家繼公將軍宣下ノ儀アリ御座ノ御後ロニ候スルコト前代ノ例ノ如シ○閏五月六日前代ノ遺命ニヨリテ宅地增加シ賜フ○九月廿八日文昭院殿御鐘銘ヲ撰進ス高玄岱コレヲ書ス○十月十四日文昭院殿周闋御法會束帶シテ伺候ス○癸巳三月議ヲ上ル三月采覽異言成ル○六月改貨議三冊ヲ上ル

四年　甲午（五十八）

二月市舶議市舶新例八卷ヲ呈ス○（五月十五日前代ノ御遺言ニヨリテ金銀製復古仰出サル）○九月改貨後議ヲ呈ス○十月十四日文昭院殿第三年ノ御法會終リ翌日御法事濟ミノ御禮ソノ翌十六日間部越前守ニツキテ致仕ヲ乞フ詮房驚テソノ故ヲ問フ去々年前代薨去ノ時ヨリ既ニ思ヒ定メタルコトノヨシヲ以テ答フ詮房已ムヲ得ズシテ老中ト謀リソノ後老中ヨリ再三強ヒテコレヲトヾ

ム〇十一月南明院殿豐太閤秀吉公ノ妹東照大神宮ノ御臺所ヘ御供米御寄附ノ事アリコレ前代ノ御遺命ニテ曾テ先生ノ建言ヲ採用セラレシ所ナリ〇十一月琉球聘使來朝ス〇十二月十八日薩摩守ノ邸ニ至リ吉貴朝臣ニ對面シ彼ノ國使ニ面接ス此時緣塗ノ烏帽子水干ニテ太刀ヲバ用キズ腰刀ヲ佩ビ紅梅ノ扇ヲトル此扇ハ曾テ近衞大相國ノ賜シ所ノモノナリ

五年　乙未(五十九)

正月長崎互市ノ法改正アリコレ前代ノ御遺命ニテ則チ先生ノ議セラレシ所ナリ〇三月集古圖成

享保元年丙申(六十)

春ノ季ヨリ將軍家繼公御違例四月晦日申ノ剋薨去五月朔日披露同七日增上寺ヘ御葬送ノ御供ニ候ス勅諡有章院殿〇五月朔日紀伊中納言吉宗卿大統御相續仰出サル〇同十二日本城中之ロナル下タ部屋ヲシ返サル〇此比前代近習ノ人々コト〲ク其職ヲ罷メラル〇折タク柴ノ記成ル

〇六十生辰用五十自壽詩韻述意云

六十懸弧日、應知筋力微、聖恩無復弁、衰病未曾歸、夙昔甘盤舊、流年蘧瑗非、羞將雙鬢白、謾自照緋衣、

二年　丁酉(六十一)

正月小川町ナル屋敷召上ゲラレ深川一色町ニ借宅ス僑居ニアリテ舊友ノ詩ヲ撰錄シテ停雲集ト號クマタ東雅ヲ選ス〇安積澹泊ニ與フル書ニ云東雅ノ事云々此作ハ先年某屋敷御用ニテ前代勤メラレ候衆中ト一同ニ小川町ノ屋敷召上ゲラレ未ダ代地モ受取ラズ候ニ少シモ早ク引拂ヒ候ヘ一草一木一石モ帳ニ仕立テ候ヘナド申ス事ニテ殊ノ外トリコミ家財等片付ケ候ハンスベモナク候ユヱ深川ニ借シ藏ト申スヲ借リ出シ屋敷ノ下ヨリ舟ドモニトリ載セツカハシ候ユヱ卽時ニ事モ濟ミ申候其借シ藏ノ近所ニ借シ坐敷ノ町家四五軒借リ添ヘ候テ家累悉ク差遣ハシサテ明日役人衆請取ラレ候ハント申ス日ニ至テ(正月廿二日)大火ニテ某屋敷ハサテ置キ御城內マデモ炎燒ノ事ニ候屋敷ハ空シク赤土灰燼ヲ掃除シ候テ差上ゲ候先キダツテ書籍ヲ始メ資財什器等皆々彼ノ深川ノ藏ヘ差越シ候間何モ燒キ候ニハ及バズ候ヘドモイソガハシクトリ運ビ候テ委積候事ユヱ深川ニ半年程寓居ノ內ハ見度キモノモトリ出シ申スコトモナリ候ハズサビシク暮シ候故ニ幼息

共ヘ書付ケトラセ候ハント存ジ一條二條書キシルシ候事共ヲ其後小石川ニ移居候日ニ大方ハ源順和名抄ノ次第ヲ追ヒ候テ艸稿ヲタテ云々草本ノマヽニテ差置キ候モノニ候右申候如ク窮厄ノ際ノ日ヲ送リ候料ニ仕候モノユヱニ引用ノ書ナドモハカバカシク校合仕候ニモ及バズ候ヘバ定メテ牴牾重複勿論ニ存ジ候云々○室鳩巣ニ與フル手簡ニ云二月廿五日ニ内藤宿ノ屋敷地御引渡シニテ罷リ越シ候某拜領候屋敷ノ東西南北コトゴトクミナ人々ニ下サレ候屋敷ト見エ定抗ハ一々コレ有リ候ヘドモ人トテハ住マヌ所ニ候皆々麥畑ニ仕リ置キ候引渡シノ御役人ヲ相待チ候ウチニフト存ジヨリ候ヒキ青麥阡々秀、紅桃樹々春、烟中聽犬吠、似有避秦人、コレニテ其境致ハ御察シナサルベク候中々仙骨無キ者ノ住スベキコト及ビナク覺エ候イツモ二月ニハ皆々樣ヲ請ジ奉リ梅花ヲ賞シ候ニソレモ燒ケ失セ候ムスメドモイヅ方ヨリカ梅枝ヲモトメ來リ候テ鏡臺ノ傍ニ挿置キ候ヲ見候テ感慨生ジ仕リ候モノ別ニウツシ進ジ候云々三月二十一日トアリ○今年秋深川ノ僑居ヨリ移リテシバラク居ヲ小石川ニトセラル傳通院裏門ノ邊深林ノ下ニテ幽閑ノ地ナリト鳩巣ニ贈ル書ニ見エタリ其後ツヒニ内藤宿ノ屋敷ニハ移住セラレシナリ

○文會雜記ニ云白石引籠マレテ後大御所（吉宗公御諡有德院殿御事）御代朝鮮來聘ノ事ニツキテ御尋問ノ事アリシカド兎角言ハズ大久保山城守殿ハ門人ユヱ頼ミシカドモトリ合ハズシテ老テワカキ時ノ事ハ少シモ覺エ申サズマタ著述ノ書火災ニ罹レリトテ一言モ申サレザリシトナリ云々○兼山麗澤秘策ニ（吉宗公御代ノ初メ）長崎互市改革ノ事ニツキテ廟堂評議ノアリシ時老中阿部豐後守ノ言ニ此儀ハ成ルホド文昭院樣御代ヨリ御僉議ノ趣間部越前守申聞候テ承リ申候ヘドモ只今ハ鬼居リ申サズユヱ何トモ分リ難ク候（鬼トハ新井筑州ノ事ナリ）云々トアレバ當時閣老ナド先生ヲ目シテ鬼トイヒシトミエタリ

三年　戊戌（六十二）

四年　己亥（六十三）

○方策合編○東音譜○南島志等ノ書成ル

五年　庚子（六十四）

○蝦夷志成ル

六年　辛丑(六十五)

七年　壬寅(六十六)

○孫武兵法擇成ル

八年　癸卯(六十七)

五月十四日次男平藏宜卿死年二十五○嫡孫源太郎邦孝生ル

九年　甲辰(六十八)

遺稿中國史ノ論文多ク本年ノ作ニ係ル

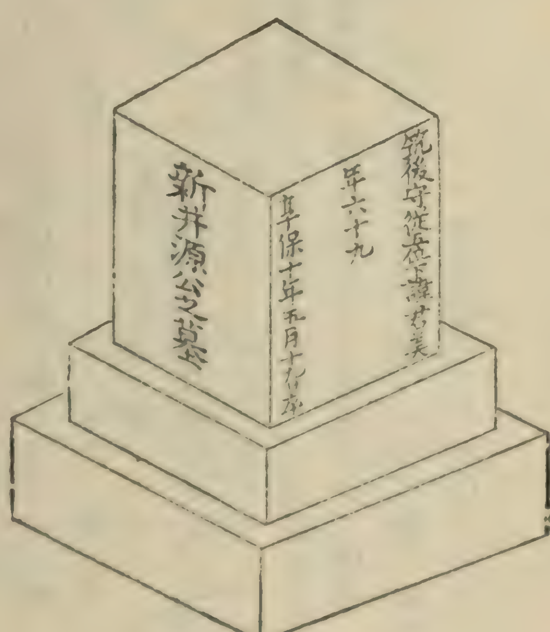
十年　乙巳(六十九)

五月十九日卒ス江戸淺草田原町高龍山報恩寺眞宗ニ葬ル後年同寺ヲ今ノ地ニ移サレ其地東本願寺ノ境內トナリテ今本願寺中眞福寺ノ側ナル一區ノ墓地ニ先生ノ墓夫人ノ墓ト相並ビテ石柵ノ內ニ建テリ二墓トモ大サ左ノ如シ下ニ圖ヲ出ス

碑高サ一尺三寸餘　方一尺餘

臺石二段上厚五寸餘方一尺六寸餘　下厚四寸餘方二尺三寸餘

○夫人ノ墓碣正面ニ源公夫人日氏之墓右ニ元文四年己未七月十八日卒ト二行ニ刻シタリ○夫人ハ朝倉氏ニテ朝倉本姓日下部氏ナレバ約シテ日氏ニ誌セルナリ



白石先生著述書目

白石先生の博學强記は今更にいふべくもあらず實に一代の偉人なりけり然るを當時より近き年比まで世にその類ひなくすぐれませしことをしらざりけるにこそ其著はされし書なども世にひろくは行はれざりけり今先生の歿(卒イ)をさることほとんど八十年人漸々その貴重すべき事を知る隱見また時あるか今其著述書目を集錄して一冊子(巻イ)とす其人となりの趣は折たく柴の記及諸手簡等を見てしるべし抑先生の先生たる事をしらざる人の言は毀譽ともに先生を輕重する(あつかるイ)に足らずといへども今諸書の中ことに先生に及べるもの數條を抄出し且室(セイ)氏の撰める碑銘及墓圖畧系等を記して附錄とし同志に示さむとす

享和三年四月朔日　　　　堤朝風

白石先生著述書目

折たく柴の記三巻（記文廟遺事及出身始末雜事取古歌詞而名托意尤婉）

藩翰譜二十巻（寛政己酉十月六日依台命獻納）

西洋紀聞三巻（寛政癸丑春進呈留內）

東雅二十巻

樂考一巻

軍器考十二巻（田氏目錄云先生孫邦孝邦賢有軍器考翼數本）

孫武兵法擇三巻

鬼神論四巻

采覽異言五巻

讀史餘論三巻

南島志二巻（又名琉球志）

北島志（又名蝦夷志）

白雉圖一巻（貞裕云當是白雉帖之誤）

白石詩草一巻

白石餘稿三巻（田氏目錄云詩草餘稿之外有詩卷數本）

百家編十巻（係羣書抄本非著書云）

五色筆二巻

五事略七卷所謂殊號事略外國通信事略一卷本朝寶貨通用事略琉球事略高野山事略一卷是也

朝鮮聘禮事二卷田氏目錄云林七九郎林百助錄故事而所上者先生輯而成書○朝鮮聘考附

國書復號紀事

詩經圖一部

觀樂江關筆談一卷寬政元年合刻坐間筆語江關筆談子平安坐間筆語即觀樂筆談而江關筆談即朝鮮趙泰億所輯錄

古史通五卷

冠服考一卷

黃白問答三卷

新井家系一卷

右二十六部新井勘解由所藏

方策合編十卷田氏目錄爲三卷

文字考三卷田氏目錄爲一卷

停雲集二卷

大極圖述二卷新刻人物志以爲鳩巢著述未知孰是○貞裕云爲鳩巢所著無疑當削去

北海隨筆一卷非先生著書當删去○貞裕云撰人姓氏未詳

除邑錄二卷同上○貞裕云林信篤所著

行賞錄二卷同上○貞裕云林信篤所著

國朝舊章錄十卷同上○貞裕云柏崎元珍所輯

骨董錄五事略之抄畧本也

辨疑錄○貞裕云伊藤長胤所著有辨疑錄四卷未知孰是

右十部見古今諸家人物志

同文通考新井白蛾增補校正

烈祖成績非先生著書當删去○貞裕云安積覺所著

右二部見于新刻諸家人物志

已下記所聞見

經邦典例二十一卷逸今其所存序例數篇耳○貞裕云經邦典例一部二十一卷加賀侯書庫收之太田貴之云

史疑二十二卷

古史通或問三卷

烈朝實錄

朝鮮之諸四枚

藩翰譜系圖六卷

續方策合編

神祖法意解一卷

新令句解二卷

將軍宣下三十一度儀不同次第一卷

以酊菴事議草一卷又頤遺五山長老於以酊菴事付客使館作事

後唐莊宗紀講義進呈案一卷

樂對一卷

俳優考一卷

神代記考二卷

家禮儀節考并附錄十卷

本佐錄考一卷
聖像考一卷
玉考一卷
木瓜考一卷
姓名考一卷
人名考一卷
准后考一卷
决獄考一卷或題議訴父母罪
義家朝臣古圖考一卷
左中將源公沒年考
新田世良田德川三家合考二卷
岩松家系附錄序說一卷
地名河川兩通考一卷一作通用考
那須國造碑考一卷
五十四郡考一卷
奧羽海運記一卷
日本行程考一卷或曰是書卽倭地形類
南北倭志三卷
江戶遺聞戶一作關○貞裕云此蓋有其擧而未起草者
高士觀游記一卷

殊方通信錄
西洋人物集
西洋圖說一卷
西學推問
西學考略
和蘭紀事二卷
阿蘭陀考文會雜記曰阿蘭陀風土記蓋卽此書也
長崎御用書物八卷
市舶議
市舶新例一卷
改貨議三卷
改貨後議一卷
癸巳三月議三卷上中二卷存下卷佚
奉命敎諭論イ一卷
國書文通考一卷
朝鮮信書式一卷
聘事文案三卷
應接事議二卷
聘事後議一卷
朝鮮聘使後議

信使進見儀注一卷
蝦夷事略一卷
九州事略一卷
火器事略一卷
金幣事略一卷
鎌倉事略一卷
集古圖說二卷
古器圖一卷
五服圖一卷
東音譜一卷
日本紀論一卷
書契文談
新井家譜一卷
畫工便覽一卷
語助集解
尺牘筌
舜水解疑
鴻臚筆談一卷
經說
史論六卷

蔎園錄
眞珠船十五卷
珊瑚網四卷係草書抄本非著書云
說苑辨粹イ一卷
鷄肋稿一卷抄イ
天爵堂漫錄一卷
不亡抄四卷新刻人物志以爲鳩巢著述是也但亡誤作忘
一帆集
鹽竈社考
鞍馬寺所藏古甲記
車服制度手記三卷此書以黃白問答後篇二卷爲本書以前編爲附錄
山科殿白石問答
高倉殿白石問答
雜錄十九卷原有廿餘卷佚三四本其中編日爲紳書□卷退私錄二卷紺珠二卷雜錄 卷
雜文二通
白石草集
白石遺文三卷
序記辨論及詩一卷漢宦云常藩史臣立原萬伯時纂集土德甫家所有先生眞蹟而爲卷者○經邦典例抄○日本紀論○俳優考○樂考○議訴父母罪○問田步○起證文考證篇一爲一卷○經邦典例序○田制

考○貨幣考○車輿考○冠服考○樂舞考○職官考
漢宦云右諸考經邦典例內篇名本篇既佚惟序存 ○方策合編序 漢宦云方策合編三卷佚惟序存 ○新
井家系○集古圖說序○奴爲古主紀事一卷已上俱爲

遺文三卷

白石遺稿

聖像考○後唐莊宗紀講義進呈案○玉考○樂考○木
瓜考○人名考 漢宦云人名考佚今所存者其序例耳 岩松家系附錄各一篇
俱編爲一卷 漢宦云兒玉氏得德甫家所有先人元成錄本集纈成書者

異本白石遺文三卷

垂仁皇后之禍○景行拜彥狹島主爲東山十五國都督
○仲哀崩○古事記不係神后之事○應神非十四月生
○應神位定矣○讀仁德帝記○武內大臣釋寃○大連
之亂○馬子弒帝○新羅質子○東史多紀○日本府建
置沿革○大化元年八月懸鐘設匱○孝德改詔○天智
崩 右上卷 天武十三年十月始定八姓并省官員○關白阿衡
報在唐僧中瓘牒 以上史論 宋徽宗遺曰本書跋○題靖臺實
錄○南島志總序○采覽異言序○題采覽異言後○蝦
夷志序○與土肥元成書 以下三篇文不全 論瓦市權場○律呂說
○起請文考證○鞍馬寺所藏古甲記○左中將源公歿
年考○鹽竈記○問日持上人事蹟書 代作 告瀨戶神文 同上

○孫武兵法擇序○東音譜序○同凡例 右中卷 詩六十餘
首 右下卷
白石手簡 與土肥氏父子者
同 二卷 與小瀨復庵者
同 九卷 與室鳩巢者
同 一卷 與雨森芳洲者
同 四卷 與佐久間洞岩者
同 一卷 與建部內匠頭者
新安手簡三卷 先生與常藩史臣安積覺往復者○漢宦云立原伯時從安積氏家得白石書牘眞蹟集錄成書者
新安手簡續纂二卷并附錄
孫武兵法擇副言二卷
南都兩門跡爭訟議二卷
長樂寺古文書考
本朝河功略記
畿內治河卷
文房四賢傳
孝子某傳
元人來冠考
春秋考
干支考

文廟遺記（重出）
花押藪四卷 先生親筆所摸寫
陶情集
國喪正議 鳩巣室氏文
文祿記
空華集
品革威考
屛風賛○貞裕云此重出當是白雉帖
關原正僞
白雉圖 既出
小牧戰話
三方原戰誌 空華集以下七部非先生著書イ此文ナシ
〔停雲續集〕
〔續善隣國寶記〕

白石先生著述書目附錄

白石の父は土屋民部少輔方に足輕の小頭にてありしが大目付までに昇進す此人きはめて才氣あり癰を煩はれし時醫師來てみるに疼まずといふ醫師疼ますは療治ならずといふ疼まずと愈答らるゝ白石の母出て醫師に向て吾夫なる人は一生いたむといふ事を士はいはぬものと覺たるべし强くいたむと見えて其節は壁に向て眉をひそめ疼をしのぶ體也われにも疼むとはいはずと云醫師然らば療治なるとて治せりとなり又白石七歳の時芝居を見に行て初より終まで一々に記憶して歸られたりと也此兒あしく成かよくなるか並にならずといはれたりと元麟語れり文會雜記

古人は多く自分の材を是程の事はなるべきといふ事を定め置てとりかゝりて專それを修めたり孔門の諸賢者その通り也と覺ゆそれより以後漢の賈誼なども不幸にして業をなさずといへども上疏の内に書たるほどの事はなすべき也韓信が高祖に說て天下を定め武侯も天下三分の事を先生にいひて其言のごとくな

したり武侯も平生草廬の中にうちふして居られたるうち今亂世なればもし出たらば天下を三分にすべきといふ事を工夫してゐたるならめ夫より以後は大かた理屈ばかりいひて自分の材の其口上の通しなすべき程をつもらぬと見えたり近く今にありていはゞ春臺などもとかく經術を治むべきといふ見識を胸中にたくはへて何をするも皆經術の爲にせる也とみゆ南郭なども徂徠に學びかゝりたる時より古文と詩にて著述不朽の名をなさんとつもりたりと覺ゆそれゆゑ先見識を定めてこれほどの事をばなしおほすべきといふつもりをせざれば學問風を捉むが如しこゝの處早く見識を定むべし云々又木下順庵門下の人にも榊原玄輔白石兩人の志を順庵問れしに二人口をそろへて天下有用の學問をなすべきよしをいひたり玄輔は律學白石は日本の典故明らかなる學問をせられたりこれらもこれほどの事をばなすべきといふあらかじめつもりを定めてとりかゝられたりと覺ゆと君脩の話なり

白石の江關筆談は勝れたる筆談なりと温夫いへり

白石詩を見出してかの體を作られたりすべて錦里先生は詩文は拙けれども學識は文運を開く鏑矢也唐詩を唱へ出せるは錦里先生なり錦里はとかく十三經をめでゝ注疏まで見ざれば經學はならぬといはれたるよしこれ古學のかぶら矢なりと南郭語られき

白石は詩ばかりのように人々いへども文章もよし蝦夷志書にくき事を殊の外によく書とりたるもの也と南郭いはれけり但し白石は文雅に事をすべしと思へりなるほど尤なれども文雅に過ればあしきか其譯は物の文事なるは實に就て論ずるが至極よきなり實に就てといへば文雅なる事は實のうすくなる物ゆゑ趙の武靈の胡服の方か強き事にて實なり六朝にても南朝は文雅過たるがゆゑに浮華になりてよはし何とやらん北朝は人品もよく見ゆると南郭の說也

文雅の政事を行ふ事至極よき事なれども其國の風俗を改過れば惡き事になる白石の如くなさば畢竟今の江戶の公方も室町家の如くなるべき歟但し白石ほどの人みだりになき才也と南郭の說なり

經濟をいふ人熊澤白石徂徠春臺四家也白石はとかく江戶を禁裡の如くするつもりのように見ゆ武士といふ事きらい也武備ゆるみたらば亂起るべし然らば唯

正名といふばかりにて經濟は次なるべし熊澤の經濟は革命の時ならでは用ひがたかるべし春臺の經濟も唯今の通りにて少し官名などをつけ官服を拵るまでの事と見えてはきとしたることも見えず徂徠の政談もとかく今の上にて少しづゝ端はづれを直す事ゆゑ本出の經濟はあらじ云々

白石は我の強き人か文廟いまだ甲府殿と申せし時掛物の繪に贊あり御吟味にて白石の考に明畫也となり養朴がきはめに宋畫也と也白石甚それを不快に思はれたり廿餘年の後朝鮮來聘の時養朴屏風を畫たるに一條院の御前にて清少納言簾を捲く處をかきたるに雪ふりうづみたるに軒の所雪すくなしと白石評判也養朴云いかにも左様なれども軒の所にて禁裡といふ事を知らせまふす事畫の古傳也といふ白石それは傳授なるべけれども異國へわたるに傳授の事はいはれまじ人の笑をうくべしとて書直させて廿餘年の不快をはらしたりといはれし由さすれば白石は人品はいかゞと覺えたりと君脩かたれり（此說傳聞の誤なり其よし詳に本書評注に辨じ置るがごとし）

子亮曰白石は英斷の人也朝鮮來聘の時に殿中にて老中土屋相摸守殿の禮拜の失をまのあたり咎められたるに土屋殿赤面せられたりと也朝鮮馬場にて韓人曲馬文廟御羽織袴にて上覽あり且括り頭巾を召れしと也舊例は左なかりしと也これも白石の意也此時韓使へ多葉粉盆銀管そへ出ける其座へ白石出られけるに韓使も度々白石に仕まけ何かなと存せし處ゆゑ多葉粉盆を推のけて那用㆓此煙管㆒熏㆓我錦繡之腸㆒と書て白石に見せければ白石直に筆をとりて試用㆓此煙管㆒融㆓我銅鐵之腸㆒と書て韓使へ見せ多葉粉盆を引よせ一ふく吸はれしと也東野語けると子亮の話也

白石引籠られて後大御所御代朝鮮來聘の事を御尋問ありしかどかくいはず大久保山城守殿は門人ゆゑたのしみしかどもかく取あはずして老てわかき時の事少も覺不㆑申又著述の書火災にかゝれりとて一言も申されざりしと也

白石采覽異言を作られたるは西洋天守教を傳へに來たる人に對談ありし故也其人を白石譽めて聖人の溫良もかくやといはれしとぞ白石骨折て作られたる阿蘭陀風土記といふものありと子亮語りぬ

采覽異言は殊の外よく書れたりと春臺大かたならず

褒られたるもの也
白石弱冠の時家貧にして書に乏し其比河村瑞軒といふもの書をおほく貯へたるゆゑ日々に其家に往て書籍をよむ瑞軒も凡庸の人にあらざれば白石のすゑ頼母しき才智をしり女を以て妻とせむといふ白石の云く吾は唯書を讀んが爲にこゝに來るのみ彼等ごとき鄙夫の女を娶るべきに非ずとて堅く辭せられたると也白石餘稿の附言を見るにあらはに瑞軒とはいはざれどもその事を載たり大志ある人は尤さもあるべき事也閑散餘錄

白石布衣の時順庵の門に入り學成て順庵の推擧に因て甲府に仕ふ程なく甲府公入て統を繼給ふ文廟これ也因て大に文廟に信用せらる文廟もまた經世に志あり車服官名其餘諸の制度に至るまで預め其法定り既に諸侯の朝禮も車に乘衣冠にて往還あるべきよしにて城中にまづ車寄を造らせ給ひ近年の內敎命下るべかりけるを俄に文廟薨じ給ひぬとなん然れども文廟の世に諸の法度前朝とかはれる事は皆白石の意より出たり數ならぬ事なれども朝鮮の三使の來るを來朝と唱へ來りしを來聘とし或は代々の武家諸法度に儒醫僧家は制外とあるを儒を去て醫師僧家と書せ玉ひたる類のごとし誠にいかめしき干戈の氣象を去て郁郁たる文國ともなるべきを文廟の薨去によつて一朝に其功を廢せしは大なる遺憾にあらずや朝鮮の信使へのあしらひも此御代ばかりは諸事大に別にて饗禮にも雅樂を用ひ給へり其時の白石の燕樂筆話今に寫本にて行はる同上

因に曰蘭陵王入陣の曲は假面を被り鐵鞭を持て入陣の勢をなせる舞也正德辛卯十一月三日彼朝鮮使の饗禮に此曲を奏せさせ給ひしに朝鮮人これを見て問へるは彼手に持たるは何物ぞや白石の答に籥也といへり此曲のよつて起る處をしらずして詩經に所謂左手取ㇾ籥の籥也とおもへるならん智者の一失也同上

白石の詩は高華雄偉にして片言隻語も寒乞相に渉る事なし大凡古今の詩人を歷選するに窮愁孤獨の堺を離れて富貴の相を得たるは此人にしくはなし徂徠と同時にして少し先達なり故に詩は此人より開けたりといはむも誣るにあらずもとより仕途に就て經世を務としたる人ゆゑ一生敎授に預らず故に其名をしらざるものおほし且詩は此人の餘業にてその才第一經

濟に長じたり同上

白石著述の書多くあれども皆寫本にて行はるその中軍器考は近來梓に鏤ばめたりこれ又有用の書なり東雅などよき書なれども寫本にて且卷數多きゆゑ人ことに見る事をえず同上

或人予に語て曰白石よのつね人を訪ひ又人にとはれて物語せらるゝに煙管をとればさて此煙管といふ物は何れの代に誰が初て制したり扇をとれば此扇といふものは唐にては何れの世に誰が初て制しわが國にては何れの代に誰が初めたりといふやうに其物々に從て出處來歷故事までを面白く說せられたりとなん博物强記の君子なる事おもひやられたり同上

朝鮮にて白石詩草を吾國にて五十年前錦繡段三體詩を敎たるがごとく鄕里の兒童にをしふとなんたとひ韓人に問とも實を答まじければ實否定がたしむかし朝鮮にて庭訓往來童子敎を兒輩に敎たる事は東涯の盍簪錄に見えたり然れば此說虛談にはあらじ金溪雜話

正德中に新井筑後守君美建議して銅字の活版を鑄せしめ十三經二十一史をはじめ有用の經籍を印搨し上にしては祖宗の盛事を繼て國家の用に供し下にしては來學に下惠せん事を請ひしに許可をかうぶりしがいまだ幾程もなくして照廟薨逝し給ひ其事實果して擧行するにおよばず活版經籍考

新井君美年少の時河村瑞軒に始て面會せしが此瑞軒も志あるものなれば君美やゝ物語して學業のならざるをなげきければ瑞軒いふ足下春秋富り今より志をたてゝ學業の爲に死すべし然らざればいかで學業成就する事あらんやといへり君美此一言に憤發し日夜勤學怠ずして後海內無雙の學士となり寶永正德の比君に寵遇せられて國家に益ありといふ瑞軒不學無術のものといへども此異見豪傑と云べし君美も終身此言を人に物語せしと云四方の硯

白石先生は世にも知れる博學高識の人なりしが平日意を用ゆる事も尋常ならざりしと聞ゆ或時夜話に居りし人々ありしに何れも暇告て歸らんとせし時先生云各はよき覺とみえたり美しき事也と申給ひしに人人口をそろへ何故左はの給ふぞ我々は記憶あしゝと申せしかば先生いや左にあらじ孰れもは皆宵よりの咄記憶せらるゝと見えたり我は記憶あしきゆゑ宵よりの咄一つ〳〵かく頭付し置也各歸られし後は淸書

し侍る也と申給ひけると也反古などとぢ合せ其裏に書とめられし由紳書と題せしもの今も數本あるは是彼頭付の書共なるべし（形影夜話）

江城全く大御造營せらるゝものは凡慶長十七年より始り同十九年に至る云々塀重門を玄關の腋門に造らるゝものは出陣の時旗を伏せずして堅様に通すための故實なり然るに文昭公の治世のはじめ韓使の砌禁中諸親王攝家の例のごとく四脚門屋根あるものを用らるゝこれ有章公に至て存在せる所に大御所御相續の日に至て不日に此四脚門を毀敗せられ古來のごとく塀重門にせらるゝ事武家の故實を失ひ給はざる旨日本武國の御鎮護の御器量此一事にても尊信すべし傳聞する處此時の上意に文昭院様には御律儀に御座なされ何事も筑後守申上次第也と被レ仰候と也これは其素生長崎邊の儒者にて文昭公甲州の大守にて御座被レ遊候節荒井重藏とて被二召抱一段々御取立にて筑後守從五位下に任せられ君美といひて一千石を拜領し寄合衆の列に入御寵遇甚しかりし博士也（事蹟合考）

御先代文昭公には甚御奢強くして萬事を上方風に被レ遊禁裡雲上を學び給ひき常憲公の御奢侈尤強かりしに引續昭廟も近衛殿御壻君にて近衛殿江戸御下向有レ之三年御逗留愛宕下にて（今御醫師望月三英屋敷）御屋敷被レ下公儀より御普請結搆に善美を盡して爰に住居し給へりされば近衛殿の御勤め且又新井筑後守といへる儒者すゝめまゐらせ堂上の故實を關東へ殘らず移さんとて新井上京して禁中公事の秘法を學び來り君をすゝめ參らせて奥女中なども皆々禁裡の女官のごとくにして節會の舞姫等まで出來大典侍新典侍三位の局を立給ひ其上禁裡の不老門を學びて四足御門を御玄關脇へ立せ給ひき有章公にも其儘に被二差置一吉宗公御讓請繼せ給ひていまだ將軍宣下の勅使下向無レ之御中陰の最中なれどもこれを破却可レ致旨被二仰出一人々今暫御見合被レ遊候ても苦しかるまじと申上るといへども御聞入不レ被レ遊父祖の不義をば忽に改めて一日も他人のそしりを除くをもつて孝とすべし一刻置は一刻の耻也一日延引せば一日の天下の耻也との上意にて其儘打壞たせ給ふ云々（明君享保錄）

文昭公御代朝鮮國より來朝の使節之儀宗對馬守へ被二仰付一朝鮮國へ被二仰遣一けるは唯今までの書簡宛所に大日本國大君と書贈れり向後日本國王と宛名認

差越候樣其方より申遣すべき旨御下知有レ之對州より朝鮮へ其旨申送ける云々これらの儀は皆々新井筑後といへるゑせものありて申勸めまゐらせし處也（同上）

明朝長鋏向レ誰彈これを明朝心事向レ誰談などいへば常のはなし也與レ君交情相得樂などいへば詩にはあらず與レ君流水高山意といへば即詩の句なり年々飄泊有レ誰憐といへば句に似たれども面白からず年暮青雲一鴉寒といへば句體面白く詩になる也これらを合せ見て外の詩にも心を可レ附皆此樣にて何事もひらたくならぬやうに作る也和人は此合點夢にもしらぬゆゑ詩といふ事は一篇も無きなり近代白石南山霞沼芳洲の數子出で初て是を作り得て其高き事明人にまさる是等の處悟入すれば也（明詩俚評）

私同門新井筑後守殿は少年の時より詩を嗜み候人にて正德信使の時白石詩草一冊開板致され三使に見せ被レ申候時殊の外奬美いたし候其節は當時の挨拶に候哉と存候處正德より三十九年の內白石詩草を朝鮮人方より私方へ所望申來候義三度有レ之候定て外へも申來候處可レ有レ之哉と存候信使初り候より已來只今まで一百何十年と申に成其間日本の詩文を以韓客と贈答いたし候人千人にはるか餘り可レ申候得ども終にその詩集を求め候事私一代の內筑後殿外に一人も無レ之候私より已前にも終に不レ承事に御座候殊に享保信使の時は白石詩草の內十五首書拔持渡り候と申學士私に咄申候左候得ば朝鮮にても憶筑後守殿詩はめづらしく存候相見え申候室新助殿これ亦私同心に候處何の藝材にても工夫精到いたし候事（疑有脫文）筑後より詩の工夫のごとくなるは終に見不レ申候と稱嘆被レ致候手柄なる事に御座候云々（雨森芳洲答慧雲庵書）

順庵先生東來の後門下甚盛也し時白石源君美博學高文の譽を馳せ榊原玄輔稽古淵雅の美を振ひ其外英俊林の如くなり（斯文源流）

文昭廟の一日新井白石に汝がごとくには如何してなるぞと問給ひしに白石總身に耻肬を出來しさへ致せは箇樣に成申すと言上ありしと（薫風雜話）

正德二年壬辰鳩巢與白石先生諫書

昔延喜年中にあつて菅相公儒家より出で時に用られ權を專にす時に三善淸行書を奉りて菅公を諫るに身を愼み禍に遠ざかるの道を以てすそれ菅公の材德古

今に傑出して丞相の貴に居れりもとより天下の衆畏服する所にして誰か敢て間然するものあらんや然るを清行一介の賤士をもつてひとりその威嚴を冐して人のいはざる所をいへりそのかみ恭靖先生いませし時に僕等此事を論じて清行をもて天下の奇士とせり僕おもへらく清行豈奇士の名を求るならんや實に菅公を愛するの深きに出るのみ今吾兄德望の高き事菅公に比するに如何といふ事をしらずといへどもその學術文章に於ては恐らくは菅公の及ぶ所にあらず加之聖主の知遇に逢て其材力を振ふ事も菅公の後また儒臣の如レ此なる事をきかず僕昔より同門の交を辱うして近頃眷顧の厚きを蒙る事日久し竊に思ふに吾兄を愛するの深き誰か僕にしくものあらんや清行是を疎交の相公にいふ事を得て僕これを同學の故人にいはずんば既に功德の情にそむき又仁を輔くるの道に違へり今吾兄の寵隆を聞て迎接を謹み權利に遠ざかれと是常人の知る所なり豈吾兄のために論ずるにたらんや僕がいふ所はこゝにはあらず吾兄志氣の間にあり吾兄朝廷に於て將順匡救の功頗る赫々として人の耳目にあり然ども古人天下に大勳勞あるに比せば恐くはいまだ並稱するにたらず吾兄の豪傑なるをもて胸中に蔕芥はかりもせざるべし豈これら么麼の事をもてみづから滿々の志あらんやたゞ盤根錯節利刄にのがるゝ事なうして破竹の勢あるによつて其詞色の間おのづから剛銳果敢の氣盛にして謙退抑損の心少し吾兄もそれかくのごとくなる事をおぼえざるべし書に曰有二其善一喪二厥善一矜二其能一喪二其功一僕願くは吾兄その善を有せずその功を矜らざらん事を孟之反か其馬に策うつて聖人に稱せられ馮異か樹下に避る古今の美談とせりこれ吾兄の法るべき所也正考父が鼎の銘に曰一命而僂、再命而傴、三命而俯レ墻而走、亦莫二余敢侮一、其位愈のぼれば其心愈下れり譬ば堂を作るに上壹尺の崇きを添れば下壹尺の基をますがごとし然らざれば必傾覆の禍あり方今聖明上に臨み讒毀の患なく彼延喜の時とひとしからずといへども盈るを害して謙に福し盈るを惡んで謙るを好みするは天人不易の常理也愼まずんばあるべからず僕願はくは吾兄謙々の心を垂て天人の道にかなひよく其基を終て德言瑕しからざらん事を今吾兄寵賜の新なるを聞て說をもてせずして規を以てす唯吾兄其思を

哀んでこれを察納せよ不備十一月日

王在藩時、新井君美、以二文學一掌二書記一、及レ承二大統一、遂命以二文學給事中一、拜二朝散大夫一、徵滬侯文學三宅緝、明稽侯文學室直淸、君美薦レ之也、文王外紀

王雖レ不レ好レ學而頗崇二儒術一、以レ故寵二新井君美一、暇則使二君美說一レ經、王必著二禮服一、下レ座而敬二聽之一、同上

王白皙美二姿貌一好レ禮、惡下本朝久廢二冠服一上下無中容儀上、嘗欲下與二冠服一復中古俗上、因與二君美一謀レ之、及三藤大臣客二於東都一、數延二見之一、而問二古禮一焉、將三以斟酌用レ之作二朝儀一、君美因稍々草レ之云、同上

新井白石、名君美、字在中、東都人、亦木門高第也、文廟潛邸時、眷注已渥、纘統之後、遂以遷喬、賜二爵五品一、號二筑後守一、白石才兼二經濟一、數參二大議一、其著撰往々國家典刑云、若夫詩章、則有二白石詩草餘稿一、余按、白石天受敏妙、獨二步藝苑一、所謂錦心繡腸、咳唾成レ珠、蠻語諸韻者、索二諸異邦一古詩人中、未レ可二多得一者、而今人貴レ耳賤レ目、不三甚信二余言一、雨芳洲所レ著橘窓茶話曰、韓人索二白石詩草一者、陸續不レ已、可レ見二異邦人猶且玉一レ之、白石嘗和下淸人魏惟慶八居七律八首以二溪西雞齊啼一爲レ韻者上、請滄浪嗣響、遂傳二播京師一、京師文士傚而和者數十人、坊間梓而行焉、白石覽レ之、前作有下與二諸人和詩一相類者上、因再作二八首一、語益强押韻益穩、又冬日過二某家一、主人請レ詩、白石求レ題、主人書二容奇二字一示レ之、白石解二其意一、輒作二七律一首一、蓋容奇者雪之訓讀、主人書レ之以試二白石一、白石已解二其意一、故何々徵二我邦雪一、一座服二其敏警一、詩云、曾下二瓊鉾一初試レ雪、紛紛五節舞容閑、一痕明月茅渟里、幾片落花滋賀山、提レ劔膳臣尋二虎跡一、捲レ簾淸氏對二龍顏一、盆梅剪盡能留レ客、濟得隆冬無限難、此一時遊戲、雖レ不レ足レ論二全豹一、亦可レ窺二其天受之一斑一、或問レ余曰、子極稱二白石詩一、至三白石蔑二以加一乎、曰非也、如二天受一誠蔑二以加一矣、若二夫揣摩鍛鍊一尙有二可レ論者一、要レ之天受之富、吐言成レ章、往々不レ遑二思繹一、是以疵瑕亦復不レ鮮、白石送三人之二長安一絕句云、紅亭錄酒畫橋西、柳色青々送二馬蹄一、君到二長安一花自老、春山一路杜鵑啼、四句中二句全用二唐詩一、夫剽二竊詩律一所レ戒、而鍊丹成レ金猶可レ言也、以レ鉛代二鏌耶一、將之何謂、草色青々送二馬蹄一、本臨岐妙語、草色送二馬蹄一、言三春草承二馬蹄一、以レ柳代レ草、蹄字無二着落一、殊爲レ減レ價、此其一耳、餘可二準知一、日本詩史

羅山展二力于草昧之初一、自綱紀號令、人皆能知二其所一

為、而見于文章者至少矣、徂徠出于隆盛之後、論時勢、議法令、筆于書者多、而人不之稱也、文宗之朝白石眷遇尤渥、而所建白不過飾太平、其人無經濟之略、（讀書會意）

享保四年己亥秋、朝鮮王使者來聘、賀即位也、文王之時待賓之禮有加焉、變士大夫之服盡美麗、王命復舊制、蓋文王用新井君美言、欲多改制度、王以為文過、故君美所作王皆不悅、是以王即位無幾、君美告老、（德王外記）

錦里夫子者出、而搏桑之詩皆唐矣、方今君美龍擧於東都、師禮虎視於北陸、林叟歸然於海西、伊烏聯美於中州、雖其言人人殊、粹折不同、要之皆聞其風興起者、（徂來集）

亡友土肥君澤、（德甫）嘗誦其先人新川翁（元成）口語、語余云、源白石先生、平生著述三百部、余疑其夥甚、德甫云、先大夫為白石親炙門人、每一書成、任校訂、或代書見在目睹不容疑、（漢宦云、元成君學承先生、雖書法亦克肖逼眞、羊欣之於王令、又或過矣、）蓋白石家、後年不戒火、其手澤遺書經邦典例類、多焚亡、世既無副本、此書從是絕矣、錦城田元貞、（公幹）敎授其曾孫世（子敦）家、猶覩其家所遺先生親稿秘本數種、世未及經見、及世之所謂傳者、併為目錄一卷、今抄其目于茲、與好書之士共之云々、右據田目、通計八十餘種、較君澤之言、猶不足於三之一、知佚亡者居多、可惜也、（近聞寓筆）

文廟正德元年、朝鮮使來聘時、古河侯忠良侍中、年廿二面白、朝鮮人見之退而謂文學新井君美曰、嘗聞日本人好色信然、君美曰、是何言也、客曰、我入朝見王之大臣侍中、有少年傅粉者、彼胡為者、而年少在大臣之位乎、我是以知王之好色也、君美曰、彼以列侯將五萬騎者、寡君之爪牙也、是以在側、非以色也、彼自面白耳、非傅粉也、他曰、王享使者樂有左右兩部、右部者高麗樂也、舞者一少年面白、享罷、朝鮮人又謂白石云、日本人果好色矣、君美曰、何也、曰、昇者觀舞、見右部舞者、傅粉以媚觀者、豈非國人悅色乎、君美笑曰、僕不佞未學樂、故不知舞者傅粉否也、意者鄉之舞者、亦其面白耳、客何怪之、且右部者高麗樂也、高麗人知之、朝鮮人辭屈而止、後新井子以告古河侯、聞者以為敏、古河侯云、（紫芝園漫筆）

瑜嘗竊謂、南山之詩、字熟意熟、情亦熟、風流溫藉、濃態橫正、如謝安攜妓遊東山、白石格調太高、淸秋風

露、燕趙豪士悲歌慷慨之氣、（鐘秀集）

方今江都之事、稱諸異邦也、曰大君、曰國王、竝稱無妨焉、而白石則曰、大君邦人或斥天子、朝鮮卽稱王孫、是重乎我、則嫌於冒天子、輕乎彼則疑於准王孫、故不如稱王之愈也、曰天皇、曰國王、尊卑顯然、亦猶有周王而有周公、何不可之有、（殊號事略）此時就朝鮮書式論、則亦以有理焉、抑於本邦紀事、定用何稱、闇儒牽冒尊稱而擬皇家、洛儒則貶之比乎霸府、共不得正矣、夫有海內臣諸侯者、謂之霸可乎、然非皇朝所許也、亦不應私稱王、則吾感焉、竊又意、文唯示邦人乎國字而足、苟學漢土文者、本欲達諸異域也、則稱王號耶、大君耶、必有一乎此、顧者大君則婉而王號則直也、或關係天朝、對言不可苟焉、則吾從其婉者矣、（正名緒言）

文昭大君時、源白石眷遇、建議獎事不一、若夫請王號而正名分、以一州當赤縣公卿百官食邑乎、其內諸侯則屬之正朝、除拜爵帖並出於　手、新製官號章服、以建一代之法、則白石腹稿主意在茲云、固非區々守株論、雖然其於時勢、似乎未深察焉、蓋草創之初、大亂纔平、人心未足、乃乘斯時新民耳目、則庶乎有成矣、抑室町之初立、鹿苑驕恣、挾門生天子、以令於功臣守護也、何求而不獲焉、而弗果爲之也、神君謙讓豈遑乎哉、若乃豐平日久、輕與新規、以動搖人心、則天下自是多事矣、白石以經濟自負、而不計時勢、若此則使之當路乎、又出一安石耳、其竟弗用、豈非天下幸也歟、（同上）

凡事時雖可矣、無人則弗行、雖有人乎、時否則弗成、夫室町之有賴之、猶鎌倉之有廣元、賴之篤實君子也、而無通變才、廣元柔佞小人也、而有經世畧、譬使廣元管領室町耶、或將議正名易服、賴之輔佐鎌倉耶、安辨請總追捕使、是其才之所以不可已、而畧之所以不可無也、今代旣踰十世、而攻正名之時則微矣、無已其三世乎、大君英武遠過鎌倉室町、而諸侯臣服、兆姓拭目、譬使白石當其時、委以廣元之任耶、正名易服或可庶幾焉耳（同上）

源璵、號白石、在江戶寒微、源家宣潛邸遊學問之日、擢爲參政、官至筑後守、挾才變制、辛卯囘書犯諱爭執、時主事、凡所主張多異議、宗室大臣怨之、今關白黜之、親近信篤、璵黨廢錮、不敢與儒官酬唱之席、有白石詩草一卷、崔崑崙曰、力弱差有

㆑響、雨森東以㆓其同學㆒、尙在㆓絶嶋紀室㆒、不㆓敢言㆒而色不㆑平、日觀要考

木貞幹號㆓順庵㆒、博學修行、源璵雨森東皆其門弟子、謚曰㆓恭靖㆒、能㆑文、一時好學之徒、稍々進用㆓於世㆒、文辭至㆑今頗盛、新井白石大有㆓詩名㆒、朝鮮人索㆓其詩草㆒、陸續不㆑已、橘窗茶話

朝散大夫筑後守新井源公碑銘

朝散大夫筑後守、新井源公、諱君美、字在中、初名璵、白石其號也、其先上野人爲新田族、新田大炊助義重曾孫、新田二郞某、削髮爲僧、因其所居稱荒居、禪師覺義其子孫遂以荒居號其家、後又易新井、蓋我邦方言與荒居同訓也、覺義之後、世仕南朝、南朝既亡、荒居族流寓上下兩野之間、元龜之初有圖書允某、據有上野勢多郡女淵城、公其後也、祖勘解由某、方遭世屯亡土地、卒往常陸、從多賀谷修理大夫平宣家、多賀谷家敗、去隱河內郡、其宅門外有古橋、里人號爲古橋殿、父與次右衞門正濟、母藤原氏坂井某女、正濟幼喪怙恃、年十三來江府、爲武州人、及壯爲土屋家臣、甚爲民部君所任用、民部君卒後有故而去、公生而岐嶷穎悟夙成、三歲時能書大字、民部君愛其幼慧、召置膝下、比及十歲、常在民部君側代書、殆若老成云、延寶三年從㆓家君㆒辭去、天和二年、公仕於堀田筑前侯、會朝鮮來聘、迺詣客館、與其學士等唱和、韓人序其陶情集、是歲丁家君憂、居無何辭仕去、隱居府下、元祿六年冬十二月、起就甲府之辟、始至以儒職、召侍講莚、優侍日渥、後數年、特旨進公資格、列爲寄合衆、寶永六年夏四月、文廟始繼大統、秋七月賜采地、歲租五百石、七年冬十一月、以事使京師、八年春二月、還報稱旨、冬十月朝鮮來聘、先期命公掌其事、多有所建白、皆施行、是月敍從五位下、拜筑後守、十一月倍賜采地、與前所食幷爲千石、公職在顧問、每出入風議必論事剴切、動中肯綮、將順匡救、所裨益不少、正德中、國家不幸仍遇大喪、而公漸老、無意當世、迺杜門謝客、日夜以典籍爲樂、卒以此終、公以明曆三年丁酉二月十五日生、享保十年乙巳五月十九日疾卒、享年六十九、娶日下氏朝倉長治女、生二男、長明卿、今克家、次宜卿、先卒、二女、長適市岡正軌、次適石谷清夤、公少時自負膽氣不羈、既而折節讀書、通經史百家之編、中歲始遊於順庵木先生之門、以該博見稱、

最善唐詩、其詩豐腴馴雅、直與開元諸名家相頡頏、由是四方爭傳以逮海外之國、而公之詩名擅天下、其所著書藏於家、後世必有傳之者、銘曰

公昔鴻漸　羽儀巖廊　晩節豹隱　蔚乎其章
國有一老　天不憖遺　朝野共慨　若亡蓍龜
佳城新卜　山阿隈周　既安且固　何啻千秋

英賀室直清撰

先生の墓　淺草田原町高龍山報恩寺（一向宗）本堂の後にあり（今の東本願寺中也）竪七尺二寸餘横四尺二寸餘高二尺五寸餘の石柵ありて其中左先生右夫人二墓相並へり碑高各一尺三寸餘方一尺餘臺石各二段上厚五寸半方一尺六寸餘下厚四寸半餘方二尺三寸餘鳩巢の銘文は碑に刻せす（先生知行所に碑を立て銘を書せしと宿空之云）夫人の碑は面に源公夫人日氏の墓の八字右面に元文四年己未七月十八日卒の十三字を二行に書せるを刻したり

（圖略之）

君美　筑後守　享保十年乙巳五月十九日卒　年六十九

二代 明卿　傳藏　寛保元年辛酉七月廿四日卒年五十一

宜卿　平藏　享保八年癸卯五月十四日死年二十五

三代 邦孝　源太郎　安永四年乙未八月十日卒年五十三

四代 邦賢　傳次郎　天明七年丁未二月廿七日卒年五十八

五代 成美　傳次郎　寛政六年甲寅九月十九日卒年二十三

六代 勘解由　實小笠原石見守政久三男

新井白石全集大尾

明治四十年四月二十日印刷
明治四十年四月廿五日發行

非賣品

著者相續人　愛知縣名古屋市七間町二丁目八十三番地　新井太吉

編輯兼校訂者　市島謙吉

發行者　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川半七

印刷者　東京市本所區番場町四番地　本間季男

印刷所　東京市本所區番場町四番地　內外印刷株式會社

